

マイスのファーム～アーランドの農夫～【公開再開】

小実

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※工事中※

『I F』、『シアレンスの冒険者』は完了（明日3／7 12:00公開再開）。

『本編』『ロロナのアトリエ編』は最低限の部分完了。逆に言うと、ソコくらいしか出来てないです。申し訳ございません（移動時間、執筆の合間等今後も勧めていく予定）。

☆主な変化（『ロロナのアトリエ編』時点）

用語、キャラ解説（計二話）の移転。

誤字脱字修正、細かい描写の追加、特殊タグ追加、句読点、行間……等。

あとは、本当に細かい部分です。

話の大筋は変わっておりませんので、現段階ではイチから読み直さなくとも大丈夫です。

最新更新情報

3／29 00:00 『本編』最新話更新

記憶を失った少年・マイスは、『シアレンスの町』での生活・冒険の中で記憶と自分に与えられた使命を徐々に思い出していく……。

だがある日マイスが目覚めると『シアレンスの町』では無い、機械の恩恵を受け大きく発展した都市『アーランド』という彼の知らない街だった。

錬金術という奇妙な学問を学びアトリエを経営する少女・ロロナを中心とした『アーランド』の人々と関わりながら、マイスが自分できること・すべきことを探す物語。

といったあらすじですが、実際のところは作者が「アトリエ」×「ルーンファクトリー」を書いてみたくなったので「ルーンファクトリー3」の主人公・マイスを「ロロナのアトリエ」に無理矢理突っ込んでみただけの自己満足以外の何でもないような作品。

こんなの○○（キャラ名）じゃない・誰得・駄文等々あるかと思いますが、温かい目で見てくださいると幸いです。

目次

ロロナのアトリエ編

プロローグ「少女たちの日常の中の非日常」	1
プロローグ「目覚ましには驚きがちょうどいい」	4
ミス「何もわからない僕は流れのままに」	7
エステイ「少年は異なる環境に驚くばかり」	12
ミス「大釜をかき混ぜる人を見た、これで三人目だ」	16
ロロナ「探索後の昼下がり」	22
ミス「これからどうしよう」	27
ミス「探したもの」	31
ミス「物事が予想以上に上手く動く不安になる」	35
ミス「新しい日常」	42
クーデリア「変わったやつ」	47
グレン、ヒューイ、バーニィ「うらやましい」	52
ミス「モコモコ一人旅」	57
リオネラ「街はずれのお家の」	62
ミス「お祭りが一年に一回しかないなんて」	71
ミス「モコモコ一人旅……えっ」	76
ミス「やってみよう！」	83
ロロナ「男子、何日会わなかったらなんとやら」	90
ミス「年に一度のお祭りく何かがおかしい」	95
ロロナ「2年目でもあいかわらず」	100
ミス「錬金術士とアクティブシード」	106
ミス「青い布とモンスター」	112
リオネラ「再会はお昼どき」	118

ファイリー「はじめてのおつかい」	124
マイル「まきぞえと、料理対決」	134
マイル「街での時間」	143
マイル「モコッ！」	148
ホーム「……………」	154
メリオダス「悩みの種と」	159
タントリス「あんまり気は進まないな……………」	165
マイル「専門の人にはかなわないけど」	171
マイル「混ぜて混ぜて、かき混ぜて」	177
マイル「誰かとの時間」	183
マイル「おつかいのその後に」	190
訪れた そのとき	197
マイル「切り離された存在は、何を思う」	205
ファイリー「お茶とお菓子を持って」	216
マイル「夏の日の街」	222
マイル「なんとかかとなんとかは紙一重」	228
マイル「モコモコ・1」	235
ファイリー「モコモコ・2」	240
マイル「人とモンスターと……………」	246
リオネラ「私の秘密」	251
マイル「今日も街は騒がしく」	258
マイル「僕の秘密」	266
マイル「僕らの秘密」	275
マイル「変わったようで変わっていない日常…なのかな？」	280

ホム「改名しましょう」	290
二年目 王国祭『武闘大会・1』	294
二年目 王国祭『武闘大会・2』	302
マイス「武闘大会の その後に」	309
マイス「3年目になって変わったこと」	314
マイス「迷って悩んで…どうしよう？」	321
クーデリア「お人好しなあいつ」	327
マイス「街の人たちと僕と」	336
マイス「何事もほどほどに」	342
マイス「お見舞いといえば…？」	349
マイス「行く末は 未知の未来」	355
ホム「モフモフしたあの子」	361
マイス「小さな変化」	368
マイス「ロロナとステルクさんと」	375
マイス「何事も 計画は早めに越したことはない」	381
マイス「ロロナの集大成」	388
エピソード「僕らの新たな日常」	394
ロロナのアトリエ・番外編	
ロロナ編《前》	399
ロロナ編《後》	410
クーデリア編《前》	415
クーデリア編《後》	428
エステイ編《前》	433
エステイ編《後》	443
ホム編《前》	448

ホーム編《後》	461
フリー編《前》	467
フリー編《後》	476
リオネラ編《前》	483
リオネラ編《後》	494
トトリのアトリエ編	
プロローグ	500
1年目：トトリ「ランクアップと紹介」	502
1年目：トトリ「青の農村での出会い」	508
1年目：マイス「冒険の そのまえに」	521
1年目：トトリ「マイスさんとの冒険」	530
1年目：マイス「事実へと至る時」	537
1年目：トトリ「マイスさんとメルお姉ちゃん」	546
1年目：マイス「酒場でノンビリ」	553
1年目：マイス「帰宅、そして挨拶まわり」	560
1年目：マイス「勉強しよう、そうしよう」	567
1年目：イクセル「ある日の『サンライズ食堂』」	574
1年目：クーデリア「無礼で面倒なヤツ」	581
1年目：マイス「今日もノンビリ、お仕事 こなしつつ」	588
1年目：ステルク「アランヤ村での出来事」	595
1年目：トトリ「メルお姉ちゃんと『青の農村』」	602
1年目：クーデリア「あいつに聞いてみよう」	608
1年目：マイス「フリーさんは いつもどおり」	617
2年目：トトリ「賑やかな村」	624
2年目：マイス『錬金術』のお勉強	630

2年目：トトリ「いのーのてんさいかがくしや」	639
2年目：イクセル「また ある日の『サンライズ食堂』」	645
2年目：マイス「雨の日の来客」	651
2年目：トトリ「村に帰る、その前に」	657
2年目：マイス「『野菜コンテスト』と僕」	666
2年目：マイス「変わった依頼書」	673
2年目：イクセル「パツと見、祖父と孫」	679
2年目：マイス「帰還」	686
2年目：マイス「護衛って何だっけ？」	693
2年目：マイス「二人で混ぜて」	699
2年目：マイス「トトリちゃんからの相談」	707
2年目：マイス「あの人との思い出・上」	713
2年目：マイス・回想「あの人との思い出・中」	721
2年目：クーデリア「あの人との思い出・下」	730
2年目：ちむ！	735
2年目：マイス「不毛の大地：？」	744
2年目：マイス「トトリとちむとマイス」	750
2年目：イクセル「マイスと錬金術士ふたり」	758
2年目：メルヴィア「ある日の『バー・ゲラルド』」	763
2年目：トトリ「アトリエでノンビリ」	768
2年目：マイス「いろいろ挑戦！」	773
3年目：マイス「久しぶりの来訪」	779
3年目：トトリ「道中」	784
3年目：トトリ「初使用！…えっ」	790
3年目：イクセル「マイスと冒険者ギルド」	796

3年目：トトリ	『ネコと機械と青の農村』	801
3年目：トトリ	「……きやあ！」	807
3年目：マイス	「冒険の前に一悶着…!？」	813
3年目：クーデリア	「冒険。そして…!？」	818
3年目：マイス	「話は最後まで聞きましょう」	826
3年目：トトリ	『サンライズ食堂』での騒ぎ・上	833
3年目：トトリ	『サンライズ食堂』での騒ぎ・下	839
3年目：トトリ	『男の武器屋』とコイバナ	844
3年目：マイス	『大漁！釣り大会』	849
3年目：マイス	「モコ！モコモコ！」	856
3年目：マイス	「モッコモッコ！」	862
3年目：イクセル	「肉料理と酒」	869
4年目：トトリ	「お母さんとクーデリアさん」	874
4年目：トトリ	「お財布事情」	879
4年目：マイス	「春の陽気に誘われて…」	887
4年目：マイス	「属性の結晶」	892
4年目：マイス	「お酒、そして赤と青」	898
4年目：マイス	「探ってみよう、そうしよう」	905
4年目：どうしたのか……		918
4年目：クーデリア	「困りもの」	923
4年目：マイス	「転換期は突然に・上」	929
4年目：マイス	「転換期は突然に・下」	935
4年目：トトリ	「時には、忘れることも大切……かも？」	943
4年目：マイス	「他人事でも心配事」	953
4年目：マイス	「潜入！モコモコ作戦！」	960

- 4年目：マイス「続・潜入！モコモコ作戦！」
- 4年目：トトリ「わたしの3年間と、これから……」
- 4年目：トトリ「村に帰る……その前に」
- 4年目：クーデリア「追いついてきた過去」
- 4年目：マイス「悩みながらもノンビリと」
- 4年目：マイス「これまでと、これから」
- 4年目：マイス「予想外の出来事」
- 4年目：クーデリア「面倒で不器用なあいつら」
- 4年目：リオネラ「すれ違っている二人」
- 4年目：ミミ「後悔と迷い、戸惑いの連鎖」
- 4年目：自分の気持ちと他人への想い
- 4年目：マイス「嬉しい気持ちは次へと繋ぐ」
- 4年目：イクセル「賑やかな団体さん」
- 4年目：トトリ「潮風が通る港」
- 4年目：マイス「ゆつくりのんびり、そして準備」
- 4年目：トトリ「完成！」
- 4年目：マイス「出発！……その前に」
- 4年目：トトリ「船上の日常」
- 4年目：マイス「遭遇！そして戦闘開始！」
- 4年目：トトリ「海上の決戦」
- 4年目：マイス「決戦を終えて……」
- 4年目：マイス「辿り着いたその先に」
- 4年目：マイス「帰りの旅路……？」
- 4年目：マイス「ヘルモルト姉妹とピアニヤちゃん」
- 4年目：マイス「帰還」

- 4年目：イクセル「団体様ご案内」
- 5年目：マイス「いつもの日常と、あとちよつと」
- 5年目：マイス「コロナの心配事」
- 5年目：マイス「ノンビリ過ごす日々」
- 5年目：マイス『青の農村』は今日も賑やか
- 5年目：マイス「懐かしい風景……？」
- 5年目：トトリ「突然の……」
- 5年目：マイス「ジーノくん強化計画！」
- 5年目：ミミ「あの事」
- 5年目：マイス「ジーノくん強化計画!!」
- 5年目：クーデリア「怪しい誘い」
- 5年目：マイス「ジーノくん（の武器）強化計画！」
- 5年目：マイス「強化計……あれ？」
- 5年目：マイス「いつもと違う『アランヤ村』」
- 5年目：トトリ「緊急事態発生!？」
- 5年目：マイス「お説教と……あの噂」
- 5年目：マイス「トトリちゃんのおしやべり」
- 5年目：トトリ「いつも通りの『青の農村』」
- 豊漁祭《上》
- 豊漁祭《下》【*1*】
- 5年目：イクセル「女じゃなくても三人寄れば」
- 5年目：トトリ「予想外の……!？」
- 5年目：マイス「塔での決戦!……その前に」【*2*】
- 5年目：トトリ「塔での決戦」
- 5年目：マイス「雪に覆われた村で」

5年目：マイス「ある日の日常」【*3*】
 5年目：トトリ「発表祭？」
 5年目：マイス「悩んでも、世界は回り時間は進む」
 5年目：結婚疑惑騒動【*4*】
 5年目：マイス「来訪者」
 ロロナ【*5—1*】
 ロロナ【*5—2*】
 ロロナ【*5—3*】
 5年目：ジオ「クイズ大会」
 ロロナ【*6*】
 5年目：マイス「……………」。
 ロロナ【*7—1*】
 ロロナ【*7—2*】
 ロロナ【*7—3*】
 5年目：マイス「モコモコとモコモコと行商人」
 ロロナ【*8—1*】
 ロロナ【*8—2*】
 ロロナ【*8—3*】
 ロロナ【*8—4*】
 『カレ』と『彼』
 ロロナ【*9—1*】
 ロロナ【*9—2*】
 ロロナ【*9—3*】
 彼の知らぬ間に……
 ロロナ【*10—1*】

ロロナ	【*10-2*】	1749
ロロナ	【*10-3*】	1764
ロロナ	【*10-4*】	1772
ロロナ	【*10-4.5*】	1785
ロロナ	【*10-5*】	1795
『光』		1809
GO GO	TOTORI	1819
ロロナ	【*11-1*】	1839
ロロナ	【*11-2*】	1846
TARGET		1862
『終わりのもの』①		1874
『終わりのもの』②		1892
『終わりのもの』③		1901
『終わりのもの』④		1911
『終わりのもの』⑤		1923
ロロナ	【*12*】	1936
トトリ「積み上げてきたもの」		1953
ゲートを越えて		1971
帰還		1985

ロロナのアトリエ編

プロローグ「少女たちの日常の中の非日常」

アーランドの街からほど近い『近くの森』と呼ばれる場所、そこからアーランドへと帰還中の一行がいた。

ピンクの服が目立つ、杖を持った少女。ブロンドの髪を背中まで伸ばした小柄な少女。剣をたずさえた目つきの鋭い青年。

一行は少しばかり急ぎ足でアーランドを目指していた。

急ぎ足の理由、それは雨だ。今でこそ小降りとなっている雨だが、つい先刻までは雷鳴が轟くほどの大雨であった。

一行は大雨のうちは雨宿りをしていたのだが、小降りになったとき「このまま止めばいいけど、また大雨になられても困る」との結論を出し、小降りの中歩き出していた。

街道

「あれ？」

「どうしたのよ、ロロナ」

小柄な少女がピンクの少女に問いかけた。

ロロナと呼ばれたピンクの少女は、道の少し先のわきの草むらにわずかに見える何かを見ながら言葉を返す……。

「あそこに何か……」

が、その言葉はソレが何なのか遠目からギリギリ判断できたことにより中断されることとなった。

「わあ?! 人!」

ソレが倒れている人だということがわかってすぐにロロナは駆け出した。

ロロナにつられて、小柄な少女は事態を把握できていなかったが突

然の行動を起こしたコロナを案じて彼女を追いかけて、青年はコロナの言葉からおおよその事態を把握し周囲に注意を向けながら彼もまたコロナを追いかけた。

コロナがたどり着いたソコには少年が倒れていた。

「あわわわ!!」ど、どうしよう!!」

一帯が血だまりになっていたりしなかったが、もしかしたら雨に洗い流されたのでは?と考えたり、そもそもこういう時どうすればいいのかわからないコロナはワタワタしだす。

そこに追いついた青年が声をかける。

「私が安否を確認しよう。一応モニスターの気配はしなかったが、君は注意をしておいてくれ」

青年の言葉にコロナは頷き、遅れて追いついた小柄な少女と共に周囲に目を向け安全を確認することとなる。

その間に青年は少年をひととおり確認する。そして、確認を終え恐る恐る近づいてきたコロナたちに告げる。

「大丈夫だ。目立った外傷は無く、息はある」

「よ、よかったー……」

少年の無事に安堵するコロナと小柄な少女。そこに「しかし」と青年は言葉を続ける。

「少しばかり雨に体温を奪われているようだ。幸い街まではあと少しだ、早く連れて帰り休ませるべきだろう。すまない、背負うので少し手を貸してくれないか」

意識の無い人を背負うのは何気に難しい、その人を気遣うならなおさらだ。

青年がしっかりと少年を背負った一行は小降りの雨の中を再び歩きだした。

青年はわずかに少年に気になるところがあった。

これまでに見たことのない——おそらく異国のものであろう——
服や装飾。

そして、異国からの旅人であるならば少なからず持っているであろう荷物がひとつの武器しかないこと。

「荷物が無いだけであれば追剥にあつたと考えれば納得できなくもないが、なら武器だけ残っているのは不自然だ」と青年は考えたが、「だとしても、助けられない理由などにはなりはしない」と自分の中で結論づけた。

プロローグ 「目覚ましには驚きがちょうどいい」

ベッドに横たわっていた少年がゆっくりと瞼まぶたを開ける。

徐々に意識が覚醒してきた少年は身体を起き上がらせ、そして驚愕する。

少年の記憶にある自分の家とはかけ離れていたからだ。床も壁も天井も着ている服も、今寝ていたベッドも何もかも違っていたのだ。

少年はとつきにある言葉を発した。

『リターン！』

しかし、何も起こらなかった。「魂の休まる場所に帰る魔法」である『リターン』の魔法は、なぜか発動することは無かったのだ。

何度目をまたたかせても変わらない目の前の空間に半ば放心してしまっている少年。

そんな少年を現実に取り戻したのはガチャリと扉が開かれる音だった。

「あら、起きたのね」

少年のいるベッドに歩み寄るのは髪を肩のあたりで切りそろえ前髪を髪留めで留めた女性。彼女は、少年の顔を数秒観察してから——それだけでどれだけのことが解ったのかは不明だが——頷く。

「うん、顔色も良いし特に問題はなさそうね。あ、キミが着てた服はあそこのカゴの中にあるそうよ」

そう言いながら部屋の隅にあるカゴを示した女性、その姿に目をやりながら少年の中にある疑問が自然と口からこぼれ落ちてくる。

「……………」

「病院よ。キミ、街道のわきに倒れてたそうよ、おぼえてない？」

女性の言葉は少年の求めているものとは違った。

むしろ、前半はともかく後半の内容は少年を追い詰めるものだった。少年には街道を歩いた記憶などなかったから……。

「怪我は無かったらしいけど……大丈夫？どこか痛いのか？」

不安が顔に出てしまっていたのであろう、女性が心配そうに少年を覗きこむ。

少年は自分を心配する女性に「大丈夫です」と言おうとしたが、それもできず、うつむき首を振ることしかできなかった。

少年の心は押しつぶされそうになっていた。

記憶を失い町に迷い込んできた少年を温かく受け入れてくれた町の住人たち、その人たちと過ごす日々、楽しかったお祭りの数々、そして冒険の中で徐々に取り戻した記憶と思い出せない誰かとの約束・使命。

それら全てが、まるで夢の中のものだったかのように崩れ去ってゆくように感じられたのだ。

そんな少年の事情は知らない女性だが、先ほどからの少年の様子から何かあるのだろうと察したのだが、立ち去るわけにもいかず頭を悩ませていた。

ふと女性の目にとまるものがあつた。部屋の隅のカゴのそば、そこにあるのは……おそらくそれで一對なのであろう二本の剣。

そばまで近づき注意深く見てみるが、特に変わったところのない全く装飾もないただの剣。

だが女性にはあることがわかつた。

「この剣、ずいぶん使い込んでるわね。けど、特に欠けなんかもないみたいだし……」

どれだけ整備をしっかりとしたとしても、どれだけ使われてきたかは見る人が見ればわかるもの。

柄などの状態から少なくとも見積もっても十分使い込んであると思われるのだが、剣のどこにも欠けや壊れ……その兆候すら無かつた。

「素材……？ それか製作者の腕が良いか、使用者の扱いがうまいか……」

「……シアレンスの、ガジさんっていう職人さんからもらったんです」

「へえ」

女性は驚いた。自分のつぶやきが聞かれていたことにもだが、先ほどの不安げにうつむいた顔はどこにいったのであろうか、少年の顔はなにやら柔らかな笑みをうかべているのだ。

まるで、「よかった」と安心したかのよう。

よくわからないが少年の暗さがなくなったことにひとまず安心した女性は新たに話をきりだすことにした。

「そういえば……キミの名前、聞いてなかったわね？」

「マイス、僕はマイスっていいいます」

「私はエステイ、よろしくねマイス君」

「こちらこそ」

これからどんな間柄になろうと必須である名前を名乗り合い、ちゃんとした挨拶をすませた二人。

互いに聞きたいことは色々ある——が、エステイはそのこととは別のことをマイスに言う。

「ところでさマイス君……お腹とかすいてたりしないかしら？」

「マイス 「何もわからない僕は流れのままに」

病院に運び込まれた後に誰かが着せ替えてくれたんだろう簡易的な服から、着慣れた自分の服へ着替え身支度を終え僕。診察してくれたらしいお医者さんにお礼を言つて病院を出た後、今僕は、誘われたままに知らない街を歩いている。

見たことのない高さの建物がたくさんあり、靴ごしに感じる地面の感触はあまりなじみのない石畳の硬さ、すれちがった道行く人の服知っているものと似ているようで似ていないものばかり。

歩きながら見知らぬ景色を泳いでいた視線を前に戻したら……すぐ前を歩いていたはずのエステイさんがいなくなっていた。

出会つて数十分の関係だけど、今の僕にとっては唯一の知り合いだからその存在は大きなものだ。

今まさに右も左もわからない、どうしようもない状況になろうとしている。

ポンポンと肩をたたかれ反射的にそちらを向くと……今度は自分
の<rb>頬</rb><rb></rb><rp></rp></><rp></rp></><rt

ほお</rt><rp></rp></><rp></rp></><ruby>に指がささつた。その指の主は——さつきぼくが見失つてしまつたエステイさん。

「なーにしているのかなあ?」

「ご、ごめんなさい……」

頬を指でぐりぐりされながらジトリとした目で言われたら、非のあ
る僕が言えることは限られた……うん、謝らないとね。

僕から指を離し、エステイさんは短くため息をついてた。

「色々心配ねえ、マイス君は」

「ははは……」

「ほらこつちよ。道、通り過ぎちやつてるから」

そう言つてエステイさんは僕の手を捕まえ歩き出した。

僕も引かれる手に合わせて歩いてく……。

サンライズ食堂

カラントツ カラントツ

『サンライズ食堂』と書かれた看板のさがついていた建物。

その扉をエステイさんが開けたとき、後ろにいた僕は知っている空気に近い空気に包まれた。

ほのかに香るスパイスや油の焼けた匂い。それらに交じってわずかながらお茶の匂いもしている。

飲食店の空気っていうのは、こういうものなんだろう。なんといいか、少し落ち着く。

「いらっしやい！」

カウンターの奥から元気の良い声が聞こえた。

声の主は赤毛の少年だった。しかも、彼以外に従業員は見当たらないことから、彼一人でこの店を取り仕切っているらしい。

あの若さで一人で店を……すごいなあ。

「つて、あれ？ エステイさん？ 今日午後から休みなんですか？」

「んー、別段休みつてわけじゃないんだけどね。うんうん、遅めのランチだからすいてるわね」

彼とは知り合いなのだろうエステイさんは、彼からほど近い位置のカウンター席に座る。

そして僕に手招きをしながら隣の席を指し、座るよう勧めてくれた。

「エステイさんの連れだったんですか？」

エステイさんの隣に座る僕を見た赤毛の少年が少し驚きつつ疑問

を口にした。

「うん。マイルス君っていつてね、一応うちで保護って形なの」

「保護？」

赤毛の少年と声が重なってしまった。

そちらに目を向けると、こちらを見る彼の顔は「自分のことなのに知らなかったのか」と言ってるように思える。

「街の外に、ほぼその身一つで倒れてたところをウチの後輩くんたちが連れて帰ってきたのよ。で、目が覚めたからってこんな子供をほっぽり出すわけにもいかないだろうから、事情を聞いてから措置が決まるまで保護することに昨日のうちに決められたの」

エステイさんの話から僕が知らなかったことを知れたんだけど、「僕はどのくらい寝ていたのか」という疑問がわいてきた。

だが、その疑問を口にする前に赤毛の少年が「そういえば」と何かを思い出したようにポツリと呟いた。

「コロナのやつが、一昨日人を拾ったとかなんとか言ってたけど、もしかしてそれがそいつ……？」

「そうそう、マイルス君を連れてきた人たちの内の一人がコロナちゃんだったの」

「エステイさんが言ってた「後輩」ってのはステルクさんだったのか」
赤毛の少年はひとり納得すると、こちらのほうに向きなあった。

「んじゃ、あらためて。俺はイクセル。見ての通りここでコックをやってるんだ、よろしくな」

「僕はマイルスっていいいます。こちらこそよろしくお願いします、イクセルさん」

「そんなに固くならなくていいぜ、マイルス」

ニカリツと笑みを浮かべるイクセルさん。その軽快さにつられるようにいつの間にか僕も自然と笑った。

視界の端では、そんな僕たちの様子を見ていたんだろうエステイさんが一人満足げに頷いてた。

「ん！ よくできました。マイルス君がちゃんと挨拶できたところで料

理を注文しちやおうか！　マイス君は久しぶりのごはんだらうから
適当な軽めなやつを、私はいつものでよろしく」

「あいよー」

元気の良い返事をしたイクセルさんは調理場につき、慣れた様子で
手際よく調理を始めた。

料理をするその横顔を見ると、喋っていた先ほどまでとは違う真剣
な職人の顔をしていた。

「そういや、マイスはこれからどうするんだ？」

イクセルさんが用意してくれた料理を食べ、これまたイクセルさん
が用意してくれた『黒の香茶』というものを飲んで一服していると、そ
んなことを聞かれた。

「街道使ってたってことは、街に何か用があったりするんだろ？」

「えっと、実は……」

隣に座っているエステイさんも、こころなしかこちらを興味ありげ
に見ている気がする。

一応保護という立場をとっているわけだから、知る必要もあるから
だろう。これまで聞いてこなかったのは、気を遣ってくれていたのか
もしれない。

さて、「用は無い」のだが、どう説明したら良いものか……。

「その、自分の家で寝てから病院で起きるまでのことが記憶になくて
……。この町のこと僕が倒れていたってという街道のこと全然わ
からなくて、どうしたらいいのか……」

「なんだそりゃ？　寝ているうちに攫さらわれて、街道に捨てられたりで
もしたのか？」

「いやあ……どうなんでしょう？」

さすがにそれは無いとは思うけど、何もわからない以上否定できな
いんだけど……やっぱりないと思う。

そんなことを考えていると、残りの香茶を飲みほしたエステイさん

が「まあ」と一言、会話に入ってきた。

「とりあえず、マイルス君は当分はウチで仕事することになると思うわ」「ええつと……?」

「帰るにしても、帰るための十分な路銀が必要になってくるでしょう?」

「それは、たしかに」

なぜかはわからないが『リターン』の魔法が使えない今、帰り道を探したうえで何とかして帰らなければならぬわけだ。それにはお金は必要となってくるだろう。

「仕事って、受付で扱ってる依頼の?」

「そうそう。それなら私もマイルス君の行動を把握できるから、都合がよいのよ」

「危なくないか? 大丈夫なのか、マイルス?」

心配そうな目でこちらを見てくるイクセルさん。

正直なところ、大丈夫かどうかは話についていけないのでわからないのだが。

「大丈夫よ。そこそこ腕が立つみたいだし」

そう言いながらエステイさんは席を立つ。

「ご馳走様。それじゃ、支払い済ませるからマイルス君は先に出て店前で待ってて」

僕は立ち上がり、イクセルさんにお辞儀をする。

「ご馳走様でした、とてもおいしかったです!」

「おう! また来いよ! それに、なんか困ったことがあったら相談に来ていいぜ」

「はい! ありがとうございます」

そう言い僕は店を出た。

エステイ「少年は異なる環境に驚くばかり」

サンライズ食堂

マイス君を先に店の外に待たせ、私は会計を済ませる。
先に出させたのにはふたつほど理由がある。

ひとつ目は、お金のことを変に意識させないためだ。マイス君は突然見ず知らずの場所に放り込まれたのだ。おそらく不安で大きな圧迫感があるだろう。故に大きな金額でなくとも具体的な金額を聞かせたりして変に貸し借りを意識させないようにしたかった。

とはいっても本命の理由はふたつ目、それは――

「そういえばさ……『シアレンス』って聞いたことある？」

『シアレンス』？ いや、聞いたことないですけど……なんすかそれ？」

半分予想していたイクセル君の答えだったけど、「やっぱりか」と少しばかり落胆してしまう。

「詳しくは聞けてないんだけどね、そこがマイス君がいたところぽいのよ」

マイス君に関するのと知ってか先程より少しばかり真面目な顔つきになったイクセル君。その様子を見れば、彼の人の良さがよくわかる。

「俺に聞いたってことは」

「そ、私も知らないのよ。話が流れてこないほど遠くなのか、はたまたアーランドからそう離れてないけど小さな村だったり辺境だったりするのか……」

それとも、どちらでもなく……存在しないから知りえないのか。

それはマイス君が嘘を言っているようには思えなかったので、あまり考えられないのだが。

「とりあえず、店に来た行商人や旅人とかにその『シアレンス』のこと聞いてみたりしますよ」

「ありがと、こっちでもアールランドの外に詳しそうな人に聞いてみるから」

そう言っつて私は店を出た。

職人通り

「おまたせ……っつて、なにしてるの?」

店の外で待つていたミス君は、この職人通りにそつて流れている川を見ていた。それも、背中をチョンつと押すだけで落ちてしまいうなくらい近づいて。

そんな、覗きこむようにしてまで見るものは無いと思うけど……?

「すごいなあと思つて……」

「こんな川がそんな珍しいの?」

「えつと、この大ききの川が街の中を流れてることと、それと川に沿つた地面がこんなに石できつちり水の中まで固められてることに驚いて……」

「へえ、私はそんな気にしたことはなかつたけど」

「当たり前のことなので気にすることもなかつた舗装技術。彼はそこに驚いていたようだ。」

「舗装について知らないわけではないだろうから、おそらく規模に驚いているのだろう。」

「……まさか本当に辺境出身で、何も知らないなんてことはないとは思ふ。」

「それじゃあ、ちよつと寄りたところがあるんだけど、いいかしら?」

「はい、もちろんです!」

「良い返事だ、素直でよろしい。どこの頭の固い後輩騎士とは大違いいね。」

私たちが歩き出そうとしたその時。

ポツカーン!!

そう遠くない場所から爆発音が響いた。

数か月前から時折鳴り響くようになったその音を聞いて私は「またか」と思う。

通りにいた2、3人の街の住人も一瞬「何事か」と音のしたほうへ目を向けたが、煙の出ている建物を確認すると興味が失せたかのよう
にまた歩きはじめた。

爆発音に意識を向け続けていたのはマイルス君だけ。

というか、彼は爆発音がしたとたんそちらへ走りだそうとしていたのだ。が、チラリとこちらを見るとピタリと動きを止め、困惑の表情をこちらへ向けて固まってしまっていた。

いきなり固まってどうしたのかしら？

「あの一」

「んー？」

「今の爆発は……？」

「いいんですか？」と言いたげな顔をしているマイルス君。

ああもしかして先ほど固まったのは、今の彼ののように、私の顔に「またか」といった呆れ^{あき}半分の感情が表情に思い切り出ていて、彼から緊張感が抜けてしまったからだったりするのかしら？

何にせよあの爆発は特に何の問題も無いのだからそんなに警戒しなくていいのに。

「あんまり気にしなくていいわよ。最近結構あることだから」

「そうなんですか？」

「うん、まあ見てみれば問題無いってわかるわ」

「え？ 行くんですか？」

私はよっぽどの呆れ顔をしていたのだろうか、様子を見に行くことを驚かれました。

それに、元から行くつもりだったのよね。

なにせ私が言っていた「寄りたいたいところ」というのは、この爆発の発生もとであるアトリエだったのだから。

アトリエの手前まで来ると、このアトリエの現店主が、扉や窓を大きく開けて煙を逃がすと共に黒いすすを払っていた。

「今日も派手にやったわねー」

「ケホツ、今日も、つて毎日爆発させてるみたいと言わないでください!! あ、あれ? エステイさん!？」

「こんにちは、ロロナちゃん」

普段そうアトリエに訪れない私の訪問にワタワタ慌てるロロナちゃん。

「えっ、もしかして爆発の苦情がたくさん来てて、即刻営業許可取り下げになっちゃったりとか?! それとも……!!」

「そういう話じゃないから安心して。ほらほら、深呼吸 深呼吸」

「すう……はあ……はい! それで、今日は……?」

やっと落ち着きを取り戻したロロナちゃんは私に向きなおり、そこで「あれ?」つとといった様子で私の斜め後ろにいるマイルス君によく気づいたみたい。

でも……

「色々話したいことはあるんだけど……とりあえず、アトリエの掃除を手伝おうかしら?」

「……お願いします」

マイス「大釜をかき混ぜる人を見た、これで三人目だ」

ロロナのアトリエ

爆発音を聞いた後、エステイさんについて行つてたどり着いたのは、なんと爆発音の発信源だった。……んだけど、なりゆきで爆発の後片付けを手伝うこととなった。

そして今は後片付けを終え、僕とエステイさんはイスに腰かけていた。エステイさんが「ロロナちゃん」と呼んでいるピンクの少女は香茶の用意をしている。

「ごめんなさい。アトリエの掃除手伝わせちゃって……はい、香茶です」

「いいのいいの。たまたま用があつて、いつ終わるかわからない掃除をただ待つより手伝ったほうがいいかなって思っただけだから。まあ来るたび手伝わさせられるのはさすがに嫌だけどねえ」

「あははは……。それで、今日はどうしたんですか？」

「うん。この子を、自分を助けてくれた人に合わせようと思つて」

そう言つてエステイさんは僕の肩を叩いた。

持っていたティーカップが揺れ香茶がこぼれそうになったので少し焦つたけど、なんとか落ち着きエステイさんの言葉に続くかたちで自己紹介をすることに。

「マイスっていいいます。倒れていた僕を助けてくれて、ありがとうございます！」

「えへへっ、どういたしまして！……とは言つても、街まで運べたのはステルクさんのおかげなんだけどね」

「ステルクさん」という人は確かエステイさんの後輩だったのだろうか。

まだ会っていないが、その人にも早いうちにお礼を言いに行きたいものだ。

「あつ、私はロロライナ・フリクセル。みんなからはロロナつて呼ばれてるの、よろしくね！」

「(うちら)そー!」

ふたりして自然と笑みがこぼれてきて和やかな雰囲気になったのだけど、そこに僕の頭の上に手が置かれた。正確に言うならなでられてる。

今の状況でなでてきた人は当然……。

「あの、エステイさん? 何を……」

「んー? マイス君がすっかり挨拶できたなあって思ってる」

「ええ……?」

食堂でも同じようなことを言われたような、でもどうしてそこで頭をなでるんだろう……?

というか、なぜだかエステイさんに凄く子ども扱いされている気がする。

「そういうえば、アストリッドさんは?」

「師匠は朝からどこかに行っちゃって……」

「まあ、いつも通りといえればいつも通りかしら……」

知らない人の話になったので、さすがに少し入りづらく、とりあえずおとなしく待っておく。

と、先程片づけをした室内に意識がいく。

フラスコや何かの液体が入ったビン、本棚には大量の本がひしめいている。

そんなものの中で一番目がひかれたのは大きな釜^{かま}だ。

実際はもつと大きな釜だったが、それは僕の記憶の中にある『シアレンス』での日常の一部にあるものだ。

——*—*—*

『材料はそろったわ! これで万能薬がつかれる!』

『……で、次にこれを入れてっ』

『あ! これを入れたりしたらどうかしら! きつといい効果があるわ!』

『あとはこうやって混ぜれば……』

——*—*—*

昔、「魔女」なんて呼ばれていたらしいおばあさんを持つ、町の病院の見習い医者少女の少女。

トラブルメーカーである彼女には、主に僕と彼女の親友がよく振り回されていた。主に薬の実験体にされたり……。

そういえば彼女は薬を爆発させたりはしていなかったな……まあ、親友に渡した薬が爆発したりしたことはあったんだけど。

あれ？ それのほうがちが悪い気が……。

「マイス君、どうしたの？ ぼーっとしちゃって」

『シアレンス』の思い出に浸ってしまった僕を引き戻したのは、エステイさんの言葉だった。

「何か気になるものでもあった？」

部屋のほうに視線がいつていたことに気づいていたのであろうエステイさんの問いにどう答えたものかと考えるはずが、不意をつかれたからか思っていたことをそのまま言ってしまった。

「ロロナさんは魔女なんですか？」

「ぶふうッ！」

僕の言葉に二人が吹き出した。とはいっても意味あいとは違うようで、ロロナさんは「えっなんで!？」といった驚き顔。一方、エステイさんは笑いをこらえている。

「いや、あんな大きい釜があるから魔法使いとかそういうたのなのかなーって思っ……」

何かおかしいことを言ってしまったのかはわからないけど、この空気を何とかしようと思ったが、言い訳ともフォローとも言えない中途半端な事しか言えなかった。

「なんでまじよ……？ それはまあ、魔法があつて、それが使えるんなら使つてみたいけど……」

魔女というものに良いイメージが無かったのだろうか。

あれ？ というか「魔法があつて」って、まるで魔法が無いような言い方……。

どういうことだろう？ キカイが発達した『ゼークス帝国』は魔法はあまり発達していないと聞いたことがあるけど、「魔法が無い」なんて話は聞いたことがない。

僕がひとり考えを巡らせていると、いつのまにかコロナさんが釜のそばまで行つており、釜のふちをポンポン叩きながらこう言った。

「マイス君、これはね『錬金術』を使うための『錬金釜』なんだよ」

「錬金術？」

「そう！ この中に素材を入れて、ぐるぐるると混ぜて、いろんなものが作れるんだよ」

入れて、混ぜて、それで別のものができると、それは魔法よりもとんでもないような気がするんだけど……？

「いろんなものって、例えばどんなものが？」

「薬とか日用品とか……あとは、爆弾とかも！」

「ああ！ 爆弾を作つてたから間違えて爆発しちゃつたんですね」

「え!?! ……ソ、ソウダヨ」

……今、変に間があつた気がするけど、気のせいだよな？

コロナさんの目が泳いでいて、エステイさんがまた笑いをこらえている様にみえるのも気のせい……？

「そうだ！ 実際に見たらきつと錬金術のことがわかるよ！」

そう言つてコロナさんは、コンテナに駆け寄り勢い良く開けた。

「……あれ？」

が、中を覗きこんだコロナさんの動きが止まった。

「あつ！ さっきの調合で素材全部使い切つちやつたんだ……つてそしたら、お城の依頼品が足りてないのが作れない!? アトリエが潰れちゃう!? は、早く採りに行かなきゃ!?!」

事情がよくわからないが、コロナさんがドタバタ何やら準備を始めたようだ。

どうしたものとエステイさんの方を向いてみると、エステイさんはちようど「そうだ……！」と何か閃いたように呟いた。

「コロナちゃん？　ちよつといいかしらっ？」

「あつとえつと！　ごごごめんさい！　納品するアイテムが足りなくて、今から素材を採りにいかないと期限がチョット厳しくなちやいそいで！　だから、その……！」

「事情はわかってるから。それで……その探索にミス君を連れて行ってみない？」

「え？」

僕も少し驚いたが、町の外に採取に行くのであれば、おそらくモンスターがいるのだろう。なるほど、助けてくれた恩返しには護衛というのはちようどいい。

不安要素が無いわけではないが、僕としても同行したいと思う。

だが、不安そうに僕とエステイさんを交互に見ている。

「いきなりの出発だから一緒に来てくれる人がいるのはありがたいけど……！」

「大丈夫よ。ミス君は腕が立つから！　……ね？」

「はい、コロナさんのちからになれると思います！」

「モンスターがいっぱいいるんだよ？　ギヤーツつて跳とびかかってきて、すつごく危ないんだよ？」

身振り手振り、外のモンスターの恐ろしさを伝えようとしてくれているんだろう。まあ、コロナの演技には怖さを微塵みじんも感じられそうにないんだけどね。

「うー、ミス君みたいな子には危ないよ……！」

「それを言ったらコロナちゃんもそう変わらないと思うけど……！」

「うーんうーん」とうなって悩んでいたコロナさんは「よし！」と一言ついた後、こちらにピシッと向いた。

「それじゃあ思い切って頼んじやおうと思います！ でも、無理し
ちやだめだよ？」

「ありがとうございます！」

それから、エステイさんに聞きながら探索に必要なものを揃え、出
発の準備をした。

ロロナ「探索後の昼下がり」

温かい日差しに青い空。形がどんどん変わる雲はまばらで、今日はとつてもひなたぼっこ日和。

「あ！ マイス君、街が見えてきたよ！」

採取した素材の入ったカゴはちよこつと重いけど、マイス君にも半分持つてもらっちゃってるんだし、あと少しだから私もがんばれるよ。

私は四日くらい前からマイス君と一緒に『近くの森』へ探索に行っていて、今はちよこどその帰り道。

マイス君が頑張ってくれたから探索もすぐスムーズにできて、依頼品の調合もゆっくり落ち着いてできるくらい時間に余裕ができたかった！

そうだなー、帰ったらお礼もかねてマイス君にパイを ご馳走しちゃうおつと！

それと、探索中にも少し聞いた、マイス君自身のお話もゆっくり聞いてみたいなー。

??????
アーランドの街
??????

「ついたー！」

街へと入る大きな門をこえて、ちよつとおおげさにはんざいをする。

「おつかれさま」

マイス君はニコニコしながら言ってる……けど、そうじゃない。

せつかくの初めての探索だったんだから、もつとはしゃいでも良いと思うんだ。

「マイス君も！」

「えっ!？」

「ほらほら」

手に持っていた荷物を地面に置かせて、さつきみたいにもう一度ばんざいをする。

「ついたー!」

「つ、ついたー……?」

「もつとしっかり腕をのばして! もう一回!!」

「何をしているんだ、君たちは……」

「あつ! ステルクさん」

知らないうちにステルクさんが私たちのそばに来てた。

ばんざいのポーズをさせるために掴んでいたマイス君の腕を離すと、マイス君は周りをキョロキョロした後うつむいちやった。

顔がなんだか赤い気がしたけど、どうかしたのかな?

「私たちは今ちようど探索から帰ってきたところなんですけど、ステルクさんはお仕事ですか?」

騎士のお仕事ってよく知らないからわからないけど……。この門の前まで来るってことは、外になのかなあ?

「仕事では無いのだが……さつきのやりとりを見た後では少々気も失せたがな」

なんだろう? だんだん小声になってあんまり聞き取れなかったけど……。

目を瞑つてため息をつくステルクさんは、いつも以上に眉間にシワが寄っている。

「とりあえず一言言わせてもらうが、気を失って倒れていた人間を目覚めたその日に探索に行かせるのは褒められたことではないぞ」

「うう……そ、それはー……」

「あの、それは僕から頼んだことで」

「わかっている。話はエステイ先輩から聞いているから経緯はわかっているが、一応注意はしておこうと思ったただけだ。とりあえず、なんともなさそうで安心した」

そう言ったステルクさんはマイルス君に向き、いつも通りのピンとした姿勢で軽く礼をした。

「こうして話すのは初めてだな、私はステルケンブルク・クラナツハ。このアーランド王国に騎士として仕えている」

「僕はマイルスっていいいます。あの、ロロナさんと一緒に僕を助けてくれたと聞きました。ほんとうにありがとうございます！」

「騎士として当然のことだ」

ステルクさんはいつも通りの仏頂面で、感情がよく出るニコニコ笑顔のマイルス君がそばにいとその仏頂面加減がすごく際立って見える気がする。

ステルクさんもマイルス君みたいにニコニコ笑顔でいれば……うー、なんでかな、ぜんぜん想像できない……

「どうかしたか？ 私の顔をずっと見ているようだが……」

「え、あ、いやっ別になんにも……！ そっそういえば、マイルス君がエステイさんに報告しないといけない依頼があったなーって！」

「む、そういうえば先輩が「探索に行かせる際に依頼をいくつか頼んだ」と言っていたな。では一度王宮受付に行くのか」

「私も採取物の納品がありますから案内もかねて、一緒に行こうと思つて。それじゃいこっか」

「その前に、依頼に必要なもの以外アトリエに置いてきませんか？」

「それもそうだね」

「私も王宮へ帰ろうと思うが……せつかくだ、荷物運びを手伝うとしよう」

そう言ったステルクさんがカゴをひとつ持ってくれた。

あれ？ それで……結局ステルクさんは何の用事でココにきたのかな？

私たちに注意を言うため？ でも、予定よりも早く帰ってこれたから、ちやうど会ったりはしないと思うけど……。

??????
王宮受付
??????

「はい、これで依頼は達成ね。おつかれさまマイルス君」

「ありがとうございますー！」

「うんうん、元気で何より。つと、コロナちゃんもこつちで受けてた依頼はこれで全部達成かな」

「そうですねー、あとは王国依頼だけですわね」

その王国依頼も今回の探索で素材をたっぷり採取してきたので、全部失敗したり時間を余計に使ったりしない限り、達成できる状態だからそんなに焦ったりはしなくていいかな。

それじゃあ、帰って依頼品の調査……の前に。

「ねえねえマイルス君、探索おつかれさまって意味合いで、このあとパイを……ごちそうしたいんだけど……大丈夫かな？」

「僕、予定とかは何もないから、およばれてもいいかな？」

「もちろんだよ！ ふふん！ パイの腕には自信があるから楽しみにしてね！」

いろいろ失敗しがちな私だけど、パイ作りはそう失敗せず自信がある。

あの師匠にも「うまい」と言わせるパイ、マイルス君も喜んでくれるといいな。

「コロナちゃんにパイごちそうしてもらえるなんて、うらやましいわねー」

「先輩、仕事中ですし昼休みは十分取ったでしょう」

「……どこかに少しの時間、受付の仕事かわってくれる優しい後輩はいないものかしら」

「いませんね。それにこちらはこちらでこれから別の用がありますので」

「ちえー」

「えっと、後でおすそわけ持っていくますよ？」

「あら本当？　ありがとねコロナちゃん！」

そう言つてエステイさんはカウンターを挟んだ先にいた私に抱きついてきた。

と、なぜか小声で私に問いかけてきた。

「そういえば、マイス君はどうだった？」

「マイス君ですか？」

目を向けてみると、なにやら周りを興味深そうに見ていた。

探索中も時折ある行動で、なんでも「知らないものや知っているもののように違うものが沢山あつて気になる」なんて言つてた。

「ちよつと気の抜けてそうなどころはありますけど、でも元気で素直で優しくて…いい子だと思いますよ？」

「戦闘とかはどうだった？」

「んーと、なんだかビクビクしてて怖いのかなーなんて思ったけど、それはホント最初だけで、あとはみんな一人で倒しちやつてモンスター素材もいつの間にか採つてくれたりしてて、とってもえらかったですよ！」

「へえ……、私の見込みも間違つていなかつたつてことね。最初のほうのことはちよつとわからないけど」

「あとは、敬語つかわなくていいよつて話をしたり……あつ！　それとマイス君のあだ名が決まらなかつたんです!!」

「ステルク君みたいに長い名前じゃないから別に決めなくても問題ないんじゃない？」

でもせつかくだし……マークくん、マイくん、マスくん、イスくん……なんだろう、しつくりこない。

そんな話をエステイさんと少しした後、エステイさんとステルクさんに別れを告げ、パイをぐちそうするべくマイス君を連れてアトリエへと帰った。

マイス「これからどうしよう」

ロロナさんとの探索から帰ってきたのがほんの一週間前。

エステイさんから貰った依頼で一人で街のすぐ外に採取に行ったとき以外は、紹介してもらった宿泊施設でゆつくりとしていた。

というよりも、やれることがなかったので時間を持て余してしまってるんだよね……。

とはいえ色々と考えてることが出来た。

ロロナさんとの探索でわかったことなんだけど、ここでは本当に魔法が無いようだ。……一応、魔法のようなものなら、あるにはあったけどね。

ロロナさんが杖でモンスターと戦っていた時に杖からピンクの光のようなものが飛んでいたんだけど、なんでもそれは武器についている機能のようなものらしい。

また、その杖にはどんな武器にもかかっているはずの『タミタヤ』の魔法がかかっていなかった。

『タミタヤ』は、モンスターをあやめたりせずモンスターが本来いる場所とされる「はじまりの森」へと送還させる魔法なのだが、それがかかっていないのはありえないことだった。なので、ロロナさんがモンスターを杖で殴り倒したときは正直驚いた。

では、次になんで魔法が無いのだろうか？

そして、以前は使えていた魔法を僕が使えないのは何故だろうか？

……そういった疑問だ。

正直、魔法が無い理由はわからない。

けど、僕が使えない理由はある程度予想をたてることができた。

「そもそも僕が使っていた魔法は存在していなかったのではないか」という考えは、今手元にある双剣『ショートダガー』によって否定できる。

『シアレンス』での日々が現実であると僕に確信をもたせてくれた

この使い古した双剣は、『タミタヤ』の魔法がすっかりとかかっている問題無く発動していた。

ならばなぜ僕自身は使えないのか。

ここであることに気づいた。

『ルーン』。そう、魔法を使う際にも必要となるチカラ『ルーン』だ。『シアレンス』の町では当然のように感じられた『ルーン』がほとんど感じられなかった。

そういえば、自然を司る精霊『ルーニー』たちもアーランドに来てから見かけてない。

しかし、僕自身の中には『ルーン』が満ちている。

当然これまでのように戦闘をした後などには、疲労以外の脱力感が感じられるが寝たら回復している。

ここまでの考えをまとめると、一応ではあるが僕が魔法が使えなくなった理由を推測できた。

これまで僕が使っていた魔法は『ルーン』のある空間で使用者の中の『ルーン』を消費して使用できる「ものだったのではないだろうか？

これまで『ルーン』が無い空間にいたことなどなかったので確信は持てないけど、今のところはこの答えしか導けなかった。

あともう一つ、「ここら一带に『ルーン』は無い」ということで、不可解なこともある。

『ルーン』はいまだわからないことが多いらしいが、大自然のエネルギーのようなもの……つまり、その『ルーン』が空間に無い状態というのは「大地・緑が死に、生物が生きることのできない」状態なのだ。しかし、『アーランド』の街やその周囲にはそういった兆候は無い。『ルーン』無しに自然が保たれている、それは信じがたいことで、僕の知ってる世界の理から外れている。

「だとすると、ここは『シアレンス』とは国とかそんなレベルじゃない

別の場所？」

別の場所……別空間だとすれば、どこなのだろうか。

真っ先に思いつくのは『はじまりの森』だけど、それでも『ルーン』が無いのはまずありえないし、見知ったモンスターも見かけていない。

謎は残ったままである。

だけど、やることは決まった。

「空間に『ルーン』を満たす」それが当面の目標だ。

それで予想どおり魔法が使えるようになるかはわからないが、とにかく今出来そうなことはそれくらいだ。

『ルーン』を生み出す方法はわかっている、あとは実行するのみだ。

「なら、街から出ないといけないかな……」

『ルーン』を生み出す方法は『アーランド』の街中では難しい。

なぜならその方法は「畑を耕し、作物を育てる」ことだからだ。

人から聞いた話や自分の経験則なので、正直なところ原理・理屈はわからないが間違いない方法なのだ。

ただ、わずかづつしか『ルーン』は発生しないので、空間に満たすほどとなるととても長い時間になるかもしれない。

気休めかもしれないが、僕には『アースマイト』というものの才能が有るらしく、作物の育成が普通より良かったりするらしい。

『アースマイト』というものがどういものなのかは、これまた僕はよく知らないのだけど……。

……そういえば一つ、正常に使えるか確かめていないものがあった。

自分の腰、そこに巻いてあるベルト。このベルトはただのベルトではないのだ。

『変身ベルト』

『シアレンス』の町にいたところからの僕の秘密

そう。人間とモンスターの『ハーフ』である僕が、モンスターの姿になるための道具だ。

マイス「探しもの」

??????
街道
??????

「たしか、このあたりだったはず……」

僕は今、『アーランド』の街と『近くの森』とのあいだの街道を歩いている。

街からそう遠く離れてはいないけど、平原だった街道の周囲はまばらではあるが木々が並ぶようになり、森から切り離された小規模な林が離れて点在しているような状況だ。

そんなところで何をしているのかというと、前に探索に来た際に木々の隙間からちらりと見えたモノがあったのだから、それに用があるため探しているのだ。

とは言っても、見つけたときにはそう気にしていなかったのも、特に調べようとは思わなかったから、そばまでいかなかったので場所が特定できず探すのに手間取ってしまったている。

「あつ」

街道を歩きながらキョロキョロさがしていると、ちらつと街道脇の林の木々の幹と幹の隙間から探していたモノが見えた。

今いる街道とそのモノの位置関係を憶え、それが見える林へと向かう。

そこに道は無く、木と木の間を縫うように雑草の茂る地面を歩いて行くと……。

「あつた……！」

林を抜けた先にあつたのは探していたモノ——古びた一軒の家だった。

その家は元々塗装されていたであろう屋根の色はくすんで落ちていて、壁にもところどころツタがはっていた。

家の前には木の生えていない——おそらく庭だったのである

うー区域が家の倍近くあるが、膝ほどの高さのある雑草に覆い尽くされている。

よくよく見ると、家のそばに雑草から顔を出すように井戸らしきものも見える。

僕はあたりを見渡してみると、木々は家と庭を囲むように生い茂っており、僕が来た街道側が最も薄く、その反対側は奥が深いように見えた。

「雑草も踏まれたりした様子も無いし、誰もいないみたい……」

けもの道もなさそうで、人はもちろんモンスターの気配も全く感じられないここは、まるで世界から取り残されたようであった。

「さて、場所は特定できたしココのことをエステイさんに聞きにいかないか」

ココはどういうところなのか、何故放置されているような状態なのか……。

それで、もしよかったらココを僕の活動の拠点にしたいのだ。

雑草こそ生えてはいるが広さは十分にあり、『ルーン』を生み出すための畑作りには良さそうな場所なのだ。

「いちおう、本当に誰もいないか中も確認しよう」

雑草の中を家の玄関戸まで歩き、一言「すみませーん、お邪魔します」と言い中へ入ってから家の中を見わたす。

入ってすぐの部屋は板張りの床の、居間と台所を合わせたような大きめの部屋だった。

むかって左手には台所、右手にはテーブルとイスそして扉があった。その左右の空間を半ば仕切るように二階へと上がる階段があり、階段下のスペースに空っぽの棚があった。

荒れていたりはしていないが、階段もどこもホコリが積もっていて掃除と換気が必要だ。

続いては、この部屋から外以外への行先はふたつ、二階と右手の扉

だ。

まず気になった二階を見に行ってみたが、二階はひと部屋のみ、そしてその中には一つのベッドがあるのみであった。

階段を降り、残りの玄関から見て右手の扉のほうへと向かう。

その先にあったのは、居間と同じくらいの大きさの石の床の部屋であった。

「ここは……何かの作業場かな？」

そう判断したのは、この部屋にある何やら器具の取り付けられている机。その上に置いてある道具や器具のいくつかは僕の知っているものであり、これが薬品を作るための台だとわかったから。

そしてその反対側にあるのは、これも似たものを見たことのある炉と鍛冶道具。どちらもホコリをかぶっていたり、サビがついていたりするので手入れは必要そうだけど使えそうなものだった。

そして、裏口であろうこの部屋から外に出ることのできる戸のすぐそばには、壊れた道具が入った箱と……古びたクワとジヨウ口があった。

「だいたいこんなところかな？」

裏口から出てみると、そこは家に入る前に見た井戸のすぐそばだった。ちょうど死角になっていたようで、先程は裏口があることには気づけなかったのだ。

「それにしても、まだこんなにしっかりとっているのに誰も使っていないんだろう？」

雑草の伸び方や室内のホコリの積もり方からして、それなりの長期間手が付いていないことがわかるけど、荒れていたたり壊れていたたりしていないから不思議である。

「エステイさんに報告するとしても……使っていない理由はさすがにわからないかな」

とりあえず、帰る前に軽くホコリを外に出し、玄関から街道がある方面へぐらいは歩きやすいように雑草を取っておこう。

そう思い、もう一度家の中に入る。

『シアレンス』で農作業中心の生活をしていたマイスは、久々の「草むしり」という作業に没頭して気づけば日が暮れてしまい、街にその日のうちに帰れなかった。

マイス 「物事が予想以上に上手く動く不安になる」

??????
王宮受付
??????

「さて、何も言わずに昨日一日どこに行ってたのかしら？ 元気なのは良いことだけど、いちおう保護してるこっちにも立場っていうのが……」

掃除・草刈りに没頭してしまい夜になって、街に帰り着いたのが丸一日遅くなった僕は、エステイさんからお叱りを受けてる真っ最中。場所はいつもの王宮受付だけど、状況は普段とはちよつと違う。エステイさんの他にも眉間にシワを寄せたステルクさんとぶんすか怒ってるロロナさん、それと初めて見る眼鏡をかけた女性がロロナさんのすぐそばにいるんだ。

ロロナさんには「どこいったの！ 心配したんだよ!!」と真っ先に怒られている。そもそもここに来たのは、帰ってすぐ街でロロナさんに会い、そのまま腕を引っ張られ連れてこられたからである。

王宮につくと、エステイさん、ステルクさん、そして眼鏡の女性の三人が何やら話していたようだが、僕に気づいたエステイさんがその話を切り上げ……そして今にいたる。

お叱りを受けて、思った以上に心配や迷惑を多々かけてしまったことはわかった。……そろそろ、慣れない正座をしている足がきついですけど。

「聞いてるっ..」

「……はい」

「ならいいんだけど……とにかく「外に出るときは必ず依頼を受けろ」とは言わないけど、日数がかかる外出の時は少なくとも私に言いなさい」

「わかりま「ヌウウウウツツ?!」

突如、聞いたことの無い奇声が王宮受付に響いた。

声のしたほうを見ると、片手で首の後ろを抑えるステルクさんがい

た。

「ちよつとステルク君！ うるさいわよ!!」

「いや?! これは、コイツが…!」

そう言いながらステルクさんが目を向けているのは、眼鏡の女性だった。

当の眼鏡の女性は「はて、なんのことやら?」といった様子、だが微妙にだが笑っているようにも見える。

なお、ロロナさんは「え?! 今の声、ステルクさんが出した!?!」と物凄く驚いている。

「まあこれ以上説教に時間が費やさせるのはどうかと思つてな。少しばかり横槍を入れさせてもらった」

「師匠…:それなら普通に言えばいいんじゃない?」

「それじゃ面白く無いだろう?」

「やっぱり…:そんな気はしてたけど」

ロロナさんに「師匠」と呼ばれた眼鏡の女性。となると、この眼鏡の女性がロロナさんの「錬金術の師匠」であり「アトリエの先代店主」のアストリッド・ゼクセスなのだろう。

ロロナさん以外にも話を聞いたことはあるが、「半ば強引にアトリエを継がせた」「アトリエ営業許可取り下げの話があがったのはこの人が真面目に仕事をしなかったから」等々、それ以外も大抵人（主にロロナ）を困らせることばかりだった。

とは言つても、人から聞いた話で全て判断するつもりは無い…:が、今さっきのことも考えると、おおよそではあるがどういう人なのかわかった気もする。

「本人も反省しているようだし説教はここまでにして、別の話をしようじゃないか」

「別の話?」

「まあ、全く関係が無いわけではないがな」

怪訝そうに聞くエステイさんに対し、アストリッドさんはあくまで

飄々とした雰囲気だ。

「いやなに、この行き倒れ君が 何処で何をしていたのかが気になつてな。」

「師匠、行き倒れ君じゃなくてマイルス君です!? ……でも確かに気になるかも」

「そういえば私が色々言っただけで聞いてなかったわね」

女性三人の視線が僕に集まる……。ステルクさんは何か言いたげにアストリッドさんを睨み続けていたが、最後には諦めたようにため息をついていた。

まあ、そもそもあの家のことはエステイさんに聞こうと思つていたので、話すことには別に何の問題も無いのだけど。

「街から『近くの森』へつづく街道の途中、わきにそれた先の林に家があつて、それを少し調べたりしてたんです。特に荒れてたり壊れていたりしてないのに誰も使つてないのが不思議で……」

『近くの森』への道の途中に家? そんなところあつたかしら?」

「うーん」とエステイさんはうなり考え込む。

見ればロロナさんやステルクさんもおぼえがないようで、二人そろつて首をかしげている。

「ほう? おそらく そこは『反骨爺の隠れ家』だろうな。まだちゃんとして残つていたとは」

ただひとり、僕の話聞いた時点で既に何か心当たりがあつたような振る舞いをしていたアストリッドさんがそういった。

「はんこつじい……ってなんですか師匠?」

「その名のとおり、機械を利用し豊かな生活をすることに疑問を抱き街を出て一人暮らしをしていた爺さんだ。何年も生活していたらしいが、遠くへ行かずほど近いところで生活していたから、繋がりを断ち切れない中途半端なイメージだったな」

アストリッドさんの言う話を聞いているうちに、エステイさんも思い出したようで、話に入つていった。

「そういえばいたわね。けっこう昔にココの病院で亡くなられたんだったかしら。」

「確か、私が10になるかならないかぐらいだったはず。彼の親族も仕事か何かの関係でよその国へと行ったから、それなりの時間放置されていたはずだが……家としての原型をとどめていたのか？」

「窓ガラスが割れていたりしませんでしたし、戸なんかもしっかりしてて……椅子や机といった家具も全然使えそうでしたよ。ホコリはものすごく積もってましたけど」

「ほう、それはまた運が良いものだな」

たしかに、何年も放置されているのにあの状態ならば凄いことだとは思う。

モンスターには運良く近づかれなかったのかもしれないが、少なくとも雨風といったものにはさらされ続けていたのだから、もつと痛んでいても不思議ではない。

あごに指を当て「フム」と呟いたアストリッドさんは、僕をジッと見ながら驚きの言葉を口にする。

「それで……キミはそこに住みたいと？」

「「!?!」」

僕を含むアストリッドさん以外の4人は驚いた。もちろん僕だけは驚きの意味合いが違う。

「どうして……!?!」

「やはりか。ロロナほどではないが、キミは少しばかり考えが顔に出やすいようだな。」

そうなのかな？ 本当にそうなのであれば、ふとした時に『ハーフ』であることがすぐにバレてしまうんじゃないだろうか？

そのことを深く考えてしまいそうになるが、その前に周りの人たちが騒がしくなった。

「ダメだ！ 詳しい場所までは知らんが『近くの森』が目と鼻の先なら、いつモンスターに襲われるかわからん!!危険だ！」

「そうだよ!? マイス君みたいなちっちゃくてかわいい子をぱくって食べちゃうようなモンスターもいるかもしれないよ! ううん! きつというから絶対あぶないよ!!」

「ていうか、そもそもどうして? ……まさか紹介した宿、何か悪いところあった!? よし! 今から店主を問い詰め!」

「ええ!? ちよ、まっつ!」

「とりあえず全員落ち着け」

アストリッドさんは手近にいたロロナさんの耳にフウツつと息を吹きかけ、おとなしくさせた……いや、あれは驚いて飛びのくりアクションを楽しみたかっただけかもしれない。

「ロロナはともかく、他の二人も思いのほか過保護気味だな。この少年は十分腕が立つと聞いたが、それは知っているのだろうか?」

「話に聞きはした。だが、危険が付きまとうことには変わりはない。良いとは思えん」

「そりゃあ心配よ。戦闘が出来るからって、そんないつモンスターが出るかわからないところに居続けたらどうなるか……。マイス君、わざわざ街の外に住みたいだなんて」

ステルクさんとエステイさんの言葉を聞いたアストリッドさんはため息をつき、だんだんと面倒くさそうになりながら言った。

「まず安全性については、過去に住んでいた人間がいたことと数年放置されていても全くと言っていいほど荒れていなかったことから問題無いとわかるだろう。そして、街の外に住みたい理由なんて、この少年の事情をロロナから聞いた話でしか知らない私でも見当がつくぞ?」

「ええ!?」

みんなアストリッドさんの考え付いた理由が気になるのか、当事者である僕よりもアストリッドさんに注目している。

そのアストリッドさんはといえば、僕をチラリと見てきた。……読心術でも使えたりするのかな? 正直、この人に見られる嫌な汗をかいてしまい落ち着けなくなってしまうのだが。

「ただ単純に、この街の空気というか雰囲気合わないだけだろう」

「空気……？ それはどういうことだ？」

「わからないのか？」と言わんばかりに肩をすくめるアストリッドさんに ステルクさんの目つきがいつそうけわしくなるが、それを軽く受け流して言葉を続ける。

「聞けば、ずいぶんゆとりのある田舎に住んでいたらいいではないか。それも街全体が石で舗装されていることや、そこらへんの建築物に驚くくらい。そんな奴がこんな建物のひしめく街で心から落ち着けるはずがなからう？ 街はずれの木に囲まれた家に住みたいと思うのはごく自然だ」

「ム……」

「それは……」

「たしかに……」

いや、確かにあんまり落ち着かないのは事実だけど、あの家に住みたい理由は違うんだけど……。

でも本当に理由を知られたら知られたで、『ルーン』のことや『魔法』のことなんかも言わなきゃいけないくなって大変なことになりそうだから、アストリッドさんの言う理由でいくのが妥当なのかもしれない。

そんなこんなで、所有者がいなくなり長年放置されていたあの家を使うことへの許可をおろしてもらうことができた。当然いくつかの条件があったが。

それにしても、初対面だったアストリッドさんがあんなにも僕のほうに肩を持つようなことを言ってくれたことには驚いた。あれが無ければもっと時間がかかるか、もしくはあの家には住めなかっただろう。

「どうして、と言いたげだな」

一人暮らしするのに何が必要か話し合っているエステイさんとロナさん、そしてそれに「実際に行ってみて安全確認をしたい」と言っただステルクさんが加わり、計画を立てているのだが、そこからはずれてきたアストリッドさんがいつの間にか隣に立っていた。

「えっと、また顔に出ていましたか？」

アストリッドさんは「そんなところだ」と答えながら腕を組んで柱にもたれかかった。

「なんとなくだが、キミに貸しを作っておいたほうがいいと思ってな。ふむ、三倍ほどで返してほしいものだな」

「ええ……。僕に借りを返せるようなことがあるんでしょうか？」

「さあな。まあ期待しておくとするか」

気のせいだろうか、とんでもない人に借りを作ってしまったような気がする……。たぶん気のせいじゃない。

「ふわあ……。そろそろ昼寝に帰るとするか。ではな」

そう言つて王宮の出口へと歩いていくアストリッドさん。

が、途中でこちらを振り向きながら気だるそうに片手を軽くあげてきた。

「キミがあそこに住みたい本当の理由は……。まあ気が向いたときに聞くとしよう」

アストリッドさんには今日会ったばかりだが、僕に十分すぎるほどの苦手意識を植えつけていったのだった。

マイス「新しい日常」

??????
マイスの家
??????

「んっ……」

窓から入り込む淡い朝日で僕は、目を覚ました。

ベッドに敷かれたマットや布団はそんな高いものではないけど新品で、初めての場所で眠れないかもという不安なんて忘れてしまうほど、ぐっすり寝ることが出来た。

そう僕は昨日から、かつて『反骨爺の隠れ家』と呼ばれていた家に住み始めたんだ。

昨日はコロナさんとステルクさんが、安全と場所の確認もかねてこの家に来た。

二人とも興味深そうに家とその周りを囲むように茂る林を調べていた。モンスターののいた形跡などは無く、「ひとまず安全確認はできた」と言っていた。

「さて、始めるとするかな」

朝食と支度を済ませた僕は、庭の中の昨日のうちに完全に雑草を取り除き耕した区画に水を汲んだジョウロを持って行った。

すでに種はまいてて、これから毎日水を与えることが日課になる。そうすれば……そう遠くないうちに、僕の思い描いた風景が出来上がる事だろう。

とは言っても問題もある。

まずは今僕が持っている知識・経験がどこまで通じるかだ。

この気候や降水量、季節の変化による環境の変化の度合いなど、わからないことが多い上に、作物のほうの特性や丈夫さもわからなかったりする。

知っているものと似ていても実際は違いがある可能性も十分にあり、気が抜けない。なにせ、『キャベツ』は普通に年中そこらへんに転がっているようなものらしい……実際に道端に自生していたのを僕もこの目で見た。

他の問題としては、今畑にまかれていた種の種類。種類が少ないというか、偏っているのが少し気にかかるんだよね。

理由は簡単で、ティファナさんという女性が営む雑貨屋に置いていた種を買ったんだけど、街の中の雑貨屋さんなわけで当然と言えば当然だが、街中でもプランターや植木鉢で育てられるような花の種を中心とした品揃えなのだ。

故に畑の種の大半は花の種で、他には葉草の種が少しと小型のトマトーフルーツトマトというらしいーあと、そこらへんに転がっていたキャベツくらいで、食べられる作物が少ないのだ。

街には雑貨屋の他に種を取り扱っていいような店はなかった。他の作物を育てたいなら、誰かに心当たりがないか聞くか、自分で探して探すしかないのだろう。

そんなことを考えながら水やりの作業を終え、あとは何かできることはあるだろうかとあたりを見渡した。

家と畑を含む庭全体を低めの柵で軽く囲み、街道側に看板を立ててみようかな？ 別に侵入防止ではなく股越せることのできる、あくまで雰囲気づくりのための柵だからそのくらいでいいと思う。

看板には今は表札として名前を書いておくだけにし、畑がもっと大きくなってから畑の名前も書くようにしようか。

農作業で『ルーン』を生み出し「空間にルーンを満たす」という目的のため生活だが、思いの他この生活自体が楽しくなってきた。目をつけていた。

まあ、悲壮感を漂わせ続けながら生活するよりはよっぽど良いだろう、という結論を出す。

さて、これからどうしようか。

王宮受付

「こんにちは」

「あら、マイルス君こんにちは。昨日はちゃんと眠れた？」

「はい！ ぐっすりと」

「それはよかった」とエステイさん。

あの家から街までは歩きでも3時間ほどもかからないから、こうして簡単に街に立ち寄ることができる。

「私も時間があったら家を確認しに行きたかったんだけど……。そもそも休み自体中々無いのよねえ」

「大変なんですね……。何か手伝いましょうか？」

「気持ちだけで十分よ。でもまあ、本気で大変になったら手伝ってね」

「はい！ その時は言ってください！」

その後、受けられそうな依頼が無いか見せてもらい、王宮受付をあとにした。

サンライズ食堂

「こんにちはー」

「いらっしやい！ ……おっ？ マイルスカ！」

イクセルさんとあいさつを交わした後、カウンターの席に腰を下ろす。

今は昼どきより早め、まだ人はまばらで席の空きは十分にある。

エステイさんに連れてこられて以降何度かココに食べに来てるんだけど、一度、一番人の多いときに来てしまったときは大変だったなあ……。

注文するメニューを選びイクセルさんにそれを伝えると、何故か不思議そうな顔をされた。

「どうかしましたか?」

「んー……いやさ、店の人間としては客の注文にどうこう言うつもりはないんだけどな……」

そう言いながらイクセルさんは何かを考え込むように目をつむり、僕に疑問を投げかけてきた。

「これまでミスが頼んだ料理が全部あつさりとしたタイプだったから、そういうのが好みなのかなって。でも、時にはこうガツンツとくるようなのも食べたくならねえのか聞いてみたくなってさ」

「えっと、それは半分たまたまみたいなので……」

「……? どういうことだ?」

正確言うなら、「あつさりしたものを狙って頼んでいた」のではなく、「あるものが入っていないさそうなものを頼んでいた結果、たまたまあつさりとしたものばかりになっていった」のだ。

「イクセルさんが言うガツンつとくる料理って、例えば『スペシャルミート』とかですよね?」

「そうそう、そういうのだ」

「でも、仮に僕が『スペシャルミート』を注文したとしても、その……食べられる自身が無いんです……」

「はあ? なんだそりゃ??」

「実は僕が前いたところだと『お肉』を食べるってことがほぼ無くて……。僕なんか、話でしか聞いたことがないくらいで、苦手意識というか食べる気が起きないんです。」

そう。以前サンライズ食堂に来たとき他のお客さんが頼んだ料理を見たら見たことのないモノがあった。

それが動物の肉であると気づき、メニュー表の中から『肉』を使っているようなものをー他のお客さんの注文などで確認もしながらー自分は頼まないようにしていたのだ。

「それで、肉が入ってそうなものは注文しないようにしてたら、たまた

ま、あつさりしたもののばつかになったのか」

「はい、そんな感じですよ」

まだ少し不思議そうにしているが、イクセルさんは納得したように頷く。

この国の人たちが『肉』を食べることに、実はあまり驚かなかった。

『タミタヤの魔法』がかかっている武器でモンスターを倒しているところを見たあとだったので、「ああ、そういうものなのか」と理解できたのだ。

ただ、自分が食べるとなると、少し抵抗があるのだ。……食わず嫌いかもしれないが。

「となると、マイルスがいたところじゃあメイン料理って何になるんだ？」

「魚料理……かな？ あとはごはんとか小麦粉を使ったものとか」

「そこらへんは普通にあるんだな。ならオススメの魚料理があるんだが、さっきの注文から変わっちゃうけど食ってみないか？」

「それじゃあお願いします」

イクセルさんが作ってくれた白身魚の香草焼きはとてもおいしかった。

それと、その後にメニュー表の中で肉を使っているものを教えてくれた。

あと「肉を食べてみたくなったら言ってくれよ。食べやすそうなもの考えとくからさ。」と、優しい言葉もいただいでしまった……そんな日が、いつかくるのかな？

クーデリア「変わったやつ」

幼馴染のロロナが錬金術のアトリエの店主になって——というか押し付けられて——王宮からの課題を達成するための素材採取を手伝ってあげたりするようになってから、それなりに時間がたった。その手伝いをしているうちに、新しく知り合うことになった人がいるのだけど……最近また知り合った奴がいる。

最初に会ったのはロロナたちとの探索帰りの街道だ。

……とは言っても相手は意識が無かったので、初対面といえれば初対面だが特に何かあったわけじゃなく、ただの人助けってだけのこと。面識ができたっていうわけじゃない。

次に会ったのが、知らないうちに探索に行っていたロロナがそろそろ帰ってないかと思い、立ち寄ったアトリエ。そこでロロナと一緒にいるところだった。

なんでもロロナが「パイをごちそうするよ!」とのことを言ってお呼ばれされたらしい。

そこで、初めてちゃんとした対面をすることになったんだけど……変わった奴だった。

ロロナのアトリエ

「それじゃあ、私、パイ作るからちよつと待っててね!」

そう言つてこのアトリエの主である幼馴染のロロナがコンテナから材料を用意しに行く。

となれば、当然残されるのはロロナたちと拾った例の少年とあたし。

チラリとその子の方へ目を向けると、偶然か目があった。すると、あたしに向かってにっこりと笑いかけたかと思えば、ご丁寧にもお辞

儀をしてきた。

「はじめまして！ 僕はミスっていいます」

「……そうね、あんたとしては「はじめまして」かしら」

「……？ あっ！もしかして、コロナさんたちと一緒に僕を助けてくれたって言う？」

「別に、たまたまよ。それに私は何にもしてないから」

「それでもです、お世話になりました！」

第一印象は「元気で素直なやつ」、ちよつとコロナと似たタイプなのかも。まあドジをしたり変にネガティブだったりすれば本当に似ていることになるのだけど……。

「あたしはクーデリア・フォン・フォイエルバッハ。コロナとは……ま、まあ、幼馴染つてところかしら」

「よろしくお願いします、クーデリアさん」

パイを作っているコロナはまだ杖で釜を混ぜているので時間があ

る。それなら、個人的にコイツには聞いておきたいことがあったのだ。

「あんた、いくつなの？」

「えっ……？」

「だから、歳はいくつなのって聞いてるのよ」

街道で見たときから思っていたんだけど、コイツの身長はあたしとあまり変わらない。今同じソファアに座っているのもつとよくわかるが、ほんのわずかにマイスむこのほうが高いのだ。

それで、何が問題になるのかというと「もし、ミスが年下だったら」という可能性だ。

年上や同じ年ならまだ納得できるが、年下だとしたら低い慎重に少なからずコンプレックスがあるあたしにとっては悔しいというか面白く無いのよね……。

「その……ごめんなさい」

「……？ なによ、教えたくないってこと？」

「コロナにもさん付けで呼んでるんだから年下でしようね」と高をくくっていたら、予想外の拒否ともとれる謝罪だったのであたしは苛立った。

「いや!? そうじゃなくて……。教えたくないんじゃないんで、教えられなくて」

「どういう意味よ?」

「その……」

言葉に詰まったかのように、口が止まった。

何故かチラリとコロナの後ろ姿を見た後、再びマイスの口が動き出す。

「僕は、街道で助けられる前の記憶は『シアレンス』っていう場所の家で寝たところまでで、どうして街道にいたのかっていう記憶が無いんです……」

それが年齢のことに何の関係があるのか。

そう思ったが、そこから続いてきた言葉は信じられないものだった。

「コロナさんたちにもそれだけしか言ってないけど……。でも、「無い記憶」はそれだけじゃなくて、本当は『シアレンス』は記憶喪失の僕が迷い込んだ町で、それよりも前のことはほとんど……」

「そう……」

「あつーでも、『シアレンス』で思い出せたこともあって、自分の名前のこととか、お父さんやお母さんと話したこととか」

「っ……!」

少し辛そうな……。悲しそうな顔をしたかと思えば、本当に心から楽しそうに話します。

記憶を失ってから時間がたっていて、いくらか余裕があるのかしら。

けど、その余裕が「希望」によるものなのか「諦め」によるものなのか、考えていると凄く悲しく感じてしまう。

「あんだ……」

「なんですか？」

「この先、歳を聞かれたら「13」って答えときなさい。わざわざ長つたるい話につき合わせる必要はないわよ、別に不自然じゃない歳だとおもおうし」

別にこれは同い年にしておけば身長による私への精神的ダメージが無くなるからであって、それ以外の意味は無い……そうだとも。

「……はい！　ありがとうございます」

「なによっ、別に礼を言われることなんて——「できたー！」

元気の良い声が聞こえて反射的にそつちを見ると、パイを作り終えたコロナが嬉しそうに釜から出てきたパイをかかっていた。

ふんふんと楽しそうに鼻歌を歌いながら、パイを用意していたお皿に盛り付けていってる。

「コロナさんから聞いてはいましたけど、本当に何でも作れちゃうんですね、錬金術って」

「ついこの前までは、普通に調理して作ってたはずなんだけどね」

それもこれも、この元店主のアイツのせいなんだけど……コロナ本人は楽しそうだし、パイも問題無くおいしいので、もう特には気にしないことにしている。

「おまたせー！　パイ、できたよー。あつ、あと香茶入れるからね」

「あ、手伝いますよコロナさん」

「大丈夫だよ、ほんとに出すだけだからー」

ちやちやつと香茶を取り出して人数分用意するコロナ。

でも、なんでかその顔は不機嫌そうだった……といつても「むー」とふくれているくらいでカワイイだけなのだけど。

「ミス君……？」

「はい？」

「私、「さん」って付けなくていいって言ったよね？　あと、そんな堅いしゃべりはやめてって……」

「あつ、そうだし……そうだったね！　ごめん」

途中、ミスがこつちをちよつと見てきたんだけど……？

ああ、なるほど。こいつもこいつなりの遠慮があつたのかもしれない。

堅く話していた奴が、長くても数日の付き合いだけのロロナに砕けたように喋ると、ロロナのことを別段軽く見ているんじゃないかと思われるかもとか考えてたりしたんじゃないかしら？ ……私の勝手な予想だけど。

もしそうなら、異様に気を遣っちゃってるだけなんだけど。

「そうね、あんたがそんな喋り方してたら なんか違和感があるわよ。変に気をつかわないで歳相応の話し方をしなさいよ」

「うんうん！ くーちゃんの言うとおり！ マイス君はもつとだらーんとしていいんだよ！」

「そうなのかな……？ すぐには無理かもしれないけど、気をつけるよ」

……同意してもらったところ悪いんだけど、ロロナの言う「だらーんとして」はよくわからないわ。

「それじゃ、あらためて！パイを食べちゃおー！今日は自信作だから、すつごく美味しくできてるんだよ！」

それからしまったお茶会はのんびり色々話したりながら、有意義な時間を過ごすことができた。

あと、わかつたことなんだけど、ロロナはマイスの頭をなでたり汚れた口元を拭いてあげようとしたりと、かなり年下を扱うように接していた。

マイスはかなり困惑していたけど、ロロナは楽しそうだからまあいいか……別に羨ましくなんてない。

グレン、ヒューイ、バーニイ「うらやましい」

ロウとティファアの雑貨店

アーランドの職人通りにある店のひとつ、日用品等を扱う『ロウとティファアの雑貨店』。

今日もここは『ある意味』賑やかだ。

「今日はまだティファアナちゃんが出てきてくれてない……」

「いや、逆に考えるんだ！ 今日、ティファアナちゃんからお釣りを渡してもらおう初めての男になれるんだ！」

「おおー、だけど、俺に奥にいるティファアナちゃんを呼ぶのは荷が重い……」

「俺も」

「オレは……いや、やはり無理だっ！」

「うーむ……」

商品はそつちのけで店主であるティファアナを見に来る男三人。

グレン、ヒューイ、バーニイ、いい歳した大の大人。

この雑貨屋に 美人の未亡人 ティファアナ目的で来る客が数多くいる中、毎日のように入り浸る猛者たちである。

そんな猛者であっても、ティファアナを呼ぶのは まさに勇者のごとき所業であり中々できることではなく、こうしてティファアナが自ら出てくるか誰かが呼ぶのをただ待つのが彼らの日常である。

まあ、出てきたら特別何をするわけでもなく、ティファアナを見て癒されて、たまに買い物をして釣り銭を受け取って満足する程度だ。

ティファアナが出てきてくれるのはまだかまだかと三人が待ち続けていると、「カラントツカラント」と店の出入り口に取り付けられた鈴が鳴る。新たな客が来たのだ。

その来店客はカゴを持った小柄な少年だった。彼が両手で大事そうに持ち手を持つているカゴからは、綺麗に咲き誇る花が顔をのぞかせていた。

「彼は初めて見る顔じゃないか？」

「んー？ いや、あの童顔……一回見たことがある、はずだ」

「そうか？ あの変わった服は一度見たら忘れないだろう？ 俺は新顔だと思う」

本当は彼ら三人が珍しくない時に来店していた客なのだが……。

でも、実際のところ三人は少年が初顔でも何でもよくて、ティファナが出てくるかどうかが重要であるため、少年に対する話は早々に切り上げ 三人とも視線をある一点に移す。

その視線の先は、カウンターの超えた向こう側の扉、いつもティファナが出てくる扉だ。

出入り口の鈴の音で出てきてくれないかと期待していたのだが、扉が開く気配はしない。

「また待つしかないか」と半ば諦めた三人だったが――

「ティファナさん、おはようございまーす！」

元気の良い挨拶が発せられた。

叫んでいるわけでもないのによく通る声。その声の主はもちろん、カウンターそばまで移動していた新顔の少年だった。

三人は最初こそ驚いていたが、すぐに――

「「よくやったぞ、少年！」「」

――と、口をそろえて呟いていた。

それから、そう時間の経たないうちに扉が開き、彼ら待望のこの雑貨屋の店主：ティファナ・ヒルデブランドが姿を見せた。

「おおお！ 今日も一段と美しい……」

「ティファナちゃん、日に日に美しくなってるように感じるよ」

「やはり、ティファナちゃんを見ないと一日が始まらないなあ」

「これこそ至福の時と言わんばかりの表情でのおのティファナを

眺めはじめ。

そんな三人をよそに、ティファナと少年——マイルスはお喋りしだした。

「いらつしやい、マイルスくん」

「おはようございます、ティファナさん！」

「ふふっ、元気そうだなによりねえ」

挨拶を交わした二人は互いに微笑む。

こうして話すのはほんの三度目だったが、特に何事も無く互いを受け入れることができ、ある程度は自然と会話が弾むようになる仲間となっていた。

「新しいお家には慣れて、すっかり眠れてるのね」

「はい！ おかげで朝からすつきりしてます。……けど、最近陽気が良くて 予定に無い昼寝をしまつて、時々夜眠れなくなることがあつて」

「あらあら、天気良くて気持ちがいいのはわかるけど、夜眠れなくなるのはダメよ」

「いけないわねえ」といった感じではあるが、あまり叱っている様子ではない。むしろ、先程よりもいっそう微笑んでいる。

「なんて言つても、さつきマイルス君が呼んでくれるまでうたた寝しちゃつた私が言えることじゃないわよね……ふふっ」

「あつ！ もしかして僕、お邪魔しちゃつてましたか……？」

「気にしなくていいのよ？ 営業時間なんだから。それに、今日は普段よりも調子も良いの」

楽しそうに話をする二人。

ふと、ティファナの視線がマイルスの手元のカゴに移る。

「あら。お花、とっても綺麗に咲いてるわね」

ティファナの言葉から彼女の視線に気がついたマイルスは、カゴをカウンターの上に置いた。

「はい、ココで買った種で咲きました。まだ、成長の早いこの二種類だ

けですけど、他のもしっかり育てますよ」

「順調そうだなによりだわ。それじゃあ 全部買い取りでいいのかしら?」

「はい、お願いします」

カゴの中の花を確認しだすティファアナ。

それを見た入り浸り男三人は相変わらずの様子であった。

「ああ、なんて可憐なんだ……」

「花を持つティファアナちゃん……美しい」

「もはや芸術の域だ」

お金の受け渡しを終えたティファアナとマイルス。ティファアナは買い取った花のいくつかを手に取り、手近にあった花瓶に生けカウウンターの一角に置いた。

「それにしても、本当に綺麗に咲いてるわ。私がプランターで育てたときよりも綺麗。元気も良くて長持ちしそうね」

「ティファアナさんにそう言ってもらえると嬉しいです!」

「ふふふつ、ありがとう。そんなマイルス君にプレゼントがあるの」

そう言ってティファアナはカウウンター下をあさりだし、そこから引っぱり出してきた物をマイルスの前に出した。

「これは……野菜の種ですか!?!」

「この前欲しがってたでしょう? 仕入れ先の人に種が余っていたりしてないか聞いてみたら、余りの種があつて 譲ってもらったの。そんなに数も種類もないけど、よかつたら使ってくれないかしら」

「本当ですか!?! これくらいあれば、育てていけば種はドンドン増やせます! ……えつと、お代は何コールですか?」

「お代はいらないわ。さつき言ったとおりこれはプレゼントよ、一人暮らしを始めたマイルス君へのお祝いなんだから」

ティファアナはマイルスの手を取りその手に野菜の種の入った袋を乗せ握らせた。

「そんな……本当にありがとうございます！ 大切に育てますね！」
「がんばってね。それと、何か困ったことがあったら遠慮しないで相談しに来ていいのよ？」

「はい！ でも、ティファアナさんも何かあったら言ってくださいね。僕、なんでもしますから！」

「そうねえ、それじゃあその時はお願いしようかしら？ よろしくね、マイルス君」

そう言いながらマイルスの頭を優しく撫でるティファアナ。

撫でられたマイルスはといえば 最初は嬉しそうに受け入れていたが、ふと気恥ずかしそうに顔を赤くし、一歩さがった。

「ごめんなさいね。嫌だったかしら？」

「いえ!? 大丈夫です！ そ、それじゃあ、また来ますね」

自分のカゴと貰った種を持ち一度礼をした後、駆け足で店を出るマイルス。それを見ながらティファアナは「あらあら」と微笑んで見送る。

なお、入り浸り男三人は――

「身長か!? 身長なのかつ!？」

「いや! 年齢だろう! 違うない!」

「ティファアナちゃんの優しさの……全てが溢れ出ている……」

「……う、うらやましい……!」

――今日も彼らはひそやかに賑やかだった。

マイス 「モコモコ一人旅」

ところどころ灯りは灯っているものの基本的に薄暗い洞窟、ここは『アーランド国有鉱山』。

『アーランド国有鉱山』は、街から徒歩3日でたどり着くその名の通りの鉱山で、今でこそ随分と寂れてしまっているけど、昔は街で使われる金属の全てがここで採れる鉱石で作られていたそう。

「徒歩3日」というと、その間、家の畑はどうなっているかと思うかもしれないが問題は無い。

ずっと作物を作り続けていると土も疲れるものなので、家を出る前に全て収穫し、今は何も育てずに休ませているのだ。

まあ本当はまだそんなに長く休ませる必要は無かったんだけど、世話が出来ずに枯らしてしまうわけにもいかなかったので仕方ない。せめて水を撒いてくれるひとがいるか、雨が降る日がわかっていればよかったのだけど……。

それと、今の僕は「徒歩3日」もかからずにここまで移動している。街を出て生活する計画をたてた際に気にした『変身ベルト』だけど、記憶通りに効果を発揮することができ、今僕はもう一つの姿——シアレンスでは『モコモコ』と呼ばれるモンスターの姿——になっている。

身長1メートルにも全然とどかない小さな体のモコモコの姿なんだけど、その身長ゆえに人の姿の時より歩幅は短い割に実は移動速度は速かったりする。

それはモコモコの姿になると、よくわからないが人の姿の時より筋力とスタミナがあるようで、瞬発力もあるのだが全速力とまではいかないけどかなりのスピードで長時間走ることもできるのだ。

そのうえ、小さな体も「人では通れない道でも通れる」、「小回りが利くからモンスターも難なくかわせる」という利点があり、それらを活かすことで移動時間を短縮できる。

……もちろん、スタミナがあるとは言っても十分疲れはするんだけどね？

「おっ、これなんかも良さそうかな？」

只今モコモコの姿で鉱石の採取中。人では取れない場所まで探せるので便利だ。

シアレンスに居た頃には見たことの無い鉱石ばかりで、どれがどういったものなのか把握はできていないけど、結構良い集まり具合だと思っ。

鉱石以外にも見たことの無い使えそうなものもあり、手持ちがイッパイになるまで採取する。

そろそろ帰ろうとモンスターを避けながら外を目指していると、話し声が聞こえてきた。

「いないみたい……」

「んじゃあ、もつと奥に行ったんじゃね？」

洞窟内で声が反響して 正確に声のする方向まではわからないが、この声はロロナさ……ロロナとイクセルさんだ。

「奥に行った」あたりから察するに、おそらくは鉱山の入り口付近にいるのだろう。

「ええ!? 奥に!? マイス君、モンスターにやられちゃうよ!」

「つい先日、彼は強くてそこらのモンスターは一発で倒してしまうと自慢げに話していたのは、君じゃなかったか……?」

あ、ステルクさんもいるみたい。

というか、僕を探しに来ているのかな? どうしたんだろう?

それと、ロロナは僕のことを「強い」と認識しているのか「弱い」と認識しているのか、どっちなんだ。

「先輩も先輩だ。『アーランド国有鉱山』に行くならついでにマイス君の様子も見えてきて、大丈夫だろうけど……たぶん」などと言って心配になるくらいなら最初から一人で行かせなければいいだろうに」

「ロロナ、いい加減落ち着いたらどうだ？ アイツもそんな無茶して突き進むような奴じゃないから大丈夫だつて」

「でもでも、ミス君って抜けてるところがあるから、もしかしたらモンスターから逃げようとして逆にモンスターの巣に突っ込んで行っちゃったり、採取しようとして足滑らせて谷底に落ちちゃったり……!？」

「どんだけマイナス思考なんだよ。ていうか、お前に「抜けてる」なんて言われるのは相当だぞ」

なるほど、「探索に行くときはココに言いに来て！」とエステイさんに言われていたから行っただけで、その後ロロナたちが来て、エステイさんをお願いされたのだろう。

さて事情もわかったので、ここで人の姿になり出ていけばいいような気もする……んだけど、実は問題がある。

それはモコモコの体が小さいことが原因で、普段使っているカゴといったものはモコモコの体には大きくて持ち運び辛く、カゴの代わりに小型のポーチで鉱石等を採取しているのだ。

そして、普段使っている双剣『ショートダガー』も使えないので持つてこれていない。

なので、もし今の状況で人の姿になってロロナたちの前に出た場合

「ミス君、なんで武器持ってないの!？」

「お前 何考えてるんだ!？」

「武器を持たずに探索に出るとは、君は正気か!!」

——そんなことになったら確実に街の外に出してもらえなくなるよね……。

そんなわけで、みんなに見つからないようにしないといけないんだけど、ここを出ようにも鉱山の出入り口付近にロロナたちがいて出れないので選択肢は限られてくる。

コツツ コツツコツツ コツツ コツツ コツツ

何人かの足音が大きくなってきた、近づいてきているのがわかる。見つからないようにするため、岩陰に隠れ 体を丸め様子を見ることにする。というか、それ以外思いつかなかった。

「それにしても、本当にいいいな」

「この先にも人気は無さそうだな……。もしかしたら既に帰ったのかもしれないな。」

コツツ カツン コツツコツツ コツツ コツツ

「えっ？それってどういう…？」

「彼は我々よりも一日近く前に出たらしいからな。入り口付近でのみ採取をし帰ったとすれば、どこかですれ違ってしまった可能性が十分にある。」

「なるほど、確かに俺たちは口口ナノ道草に付き合ったりもしてたからな」

コツツコツツ コツツ コツツ コツツコツツ

「このあたりも見たところ 人が通った形跡もないようだ。ほぼ間違いないと思う」

「でも、この先にある採取場所にも用がありますから！そこにもいいか探しましょう！」

「まあ用があるなら当然行くけどよ。俺としてはここらへんは食材が何かのタマゴ」しかないから あんまりやる気でないんだよなあ」

コツツ コツツ コツツコツツ コツツ コツツ

通り過ぎだんだんと離れていく話し声と足音。

岩陰で息を潜め外に出るタイミングをはかり、そろーりと一歩、岩陰から外のほうへと足を出した。

「何者だ!!」

「モコツ!!」

もう20m以上離れていたステルクさんが いきなり振り返って 抜刀し叫んだ。

それに驚き、ついモコモコの姿の素の声が出てしまった。これで隠れけることはできなくなってしまった。つまり――

「モ、モツコー!?」
「逃げるしかない」

「待ていつ!!」

待つわけがないよっ!?

モンスターはサーチ&デストロイであることがここでの常識であることは知っている。

『タミタヤ』の魔法のかかっている武器で襲われるならまだしも、いくらなんでも無理だっ!

全力疾走で逃げる、それしかない。

「モコモココォー!!」

何やら少し気の抜ける鳴き声をあげて一目散に逃げていく小型モンスター。

その声と小さな足音はたちまち遠退き、聞こえなくなった。

「……なんだったんだ?今のちっちゃいの」

「さあ…? 私もわかんない……」

「見たことの無い種類のモンスターだった……もしかすると新種かもしれないな。王宮にも報告しなければならん」

よくわからなかったが、何をされたわけでもないのだから「なんかわからないけど、別にいいか」ということになった。

「そういうえば、新種を見つけたらその名前をつけたりできるんですか?」

「何を考えているかと思えば、そんなことを……」

リオネラ 「街はずれのお家の」

昼下がりの街。大通りからは外れた路地に少女はいた。

中央通り・脇道

「うう……、どう、しよう……」

私の泣き言に、そばにいる黒猫と虎猫のふたりの人形が言葉を返してくる。

「どうしようも何も、探すしかないだろ」

「そうだけど、広場から歩いて行ったところ全部見て回ったけど 何処にもなかったじゃない。それに昨日の朝から何も食べれてないからリオネラが少しフラフラしてきちゃってるわよ、何とかしないと」
「とは言ってもよ、宿で休んだりメシ食ったりもできねえじゃんか。」

……堂々巡りだな、こりゃ」

そう私は今、空腹で、その上 宿から追い出されている。

理由は昨日サイフを落としてしまったから。

私は大道芸人をしているのだけど、昨日広場で人形劇を披露していた時、大勢の観客とその歓声に驚いてしまい おひねりも貰い忘れて逃げ出してしまった。

それに、どのタイミングでかはわからないけどサイフを落としてしまったって無一文になって……。

「ごめんね……ホロホロ、アラーニヤ、私のせいで」

「リオネラの失敗に振り回されんのは初めてじゃねえからな、そんなに気にすんなよ」

「その言い方はどうかと思うけど……とにかく今は現状の打開を――」

人形劇で一からお金を集める……というのはとても無理。万全の状態じゃない今では間違いなく劇中に失敗をしてしまう。

とにかく、ここぞじっとしていても何も始まらない。そう思って歩きたしたのだけど――

「きゃっ！」

「あっ!?!」

――曲がり角で誰かとぶつかってしまつて尻餅をついてしまった。

「ごっごめんなさい あっ……!?!」

突然のことに驚きながら、反射的に謝りながら立ち上がろうとしたけど空腹からか思うように力が入らず、後ろ向きに倒れかかった。

すると、倒れそうになっている私の手を誰かが掴み、引き止めてくれた。

「大丈夫ですか?」

その人は私よりも少し背の低い金髪の少年だった。

見たことの無い様式の服装が印象的なその子は、私の手を掴んでいた手とは逆の手……その手にはカゴを持っていたけどそれを地面に置いて、私のもう一方の手を持った。

最初はなんなのかと思つてけど、その子の「立てますか?」という問いかけで、この子は私が立ち上がるのを手伝おうとしているのだとわかった。

「あつ……ありがとうございます」

「いえ。……ぶつかつてごめんなさい。ちよつとポケットとしちやつて」

「そ、それはっ私もだから」

頭を下げて謝ってくる少年に私は困つてしまう。

どうしよう……!?! ぶつかったのは私も悪いのだからお互いさまなのだけど、そう伝えようにも上手く言葉が出ないよ……っ。

人と面と向かつて話すのは極珍しく、その緊張などといったプレッ

シャーがより口の動きを鈍らせる。

こんなときはホロホロかアラニーヤに助け船を出してほしいのだから……

ぐゆうううく……

助け船でも何でもない腹の虫の鳴き声が響いた……もちろん恥ずかしいことに私のお腹から。

「もしかして……？」

「え……あつ、ううー……」

恥ずかしさで先程以上に言葉が詰まってしまう。

そして、見なくてもわかる。顔はとんでもなく赤くなっていて 湯気も出ているかもしれない。

「そうだ！よかったら来てください!!」

「ええっ!？」

そう言っつてその子は私の手を取り走り出した。

「よかったら」と言っつたはずなのに握る手は緩みそうもなくって、いけないように頑張っつてついていくしかなかった。

そして、その子その二人と私を追う影がふたり

人前では喋らないようにしているふたり、浮いて喋るネコの人形ホロホロとアラニーヤ。

「急がねえとマズイだろ！ オレたちはともかくとしても、リオネラがさすがにまだ駄目だろ」

「当然でしょ！ ……それにしても、あの男の子、いきなりどうしたのかしら

「

ふたりが、手を引っ張られている私の1mほど後ろをフワフワとついてきてるのが見えた。

マイスの家

「……………」

「で、どうしてこうなったんだ？」

「さあ？」

ソファアに座る私、そしてその両脇には黒猫・虎猫の人形ホロホロとアラニーヤ。

男の子に手を引かれるままについていったところ たり着いたのは街の外の街道から少し外れたところにあつた一軒の家だった。

その家の中に招き入れられ「座って待っててね」と真新しいソファアを勧められ、現在に至る。

そして、この原因である男の子はといえば、大きな部屋を仕切るようにある階段の向こう側に行ってしまったって何をしているのかはわからない。

「それと……ちよつと小せえけどアレって『ウオルフ』だよな？」

この家で驚いたことはいくつかあるけど、一番驚いたのはホロホロも言ってる小さい『ウオルフ』。階段脇に置かれた毛布の塊の上で、まゝるくなって寝ている。

『ウオルフ』は色々なところで見かけられる狼モンスターだけど、なぜか家の中でスヤスヤ寝てる。

「大丈夫よ、リオネラ。あれはヌイグルミだから……たぶん」

クウ……クウ……

「寝息が……」

「聞こえるよなあ」

それに、この部屋に入る時私たちを一度見てきたのをしっかりと覚えてる。

あれは本物。……でもなんで？

「お待ちせしましたー！」

そうこう考えているうちに、あの男の子が戻ってきた。

その手には何かに乗った大きめのお皿が2つ、それらをソファアの前に置かれたテーブルに置いた。

片方には『サンドウィッチ』が、もう片方には見たことの無い丸パンのような形の白いものが積まれていた。

男の子は新しいお皿とおしぼりを持ってきて、テーブルの私の目の前の部分に置いていった。

「どうぞ召し上がれ！飲み物もすぐに出しますから」

と言つて、また階段の向こう側へと行った。

「……ええつと、つまりあの子はリオネラにゴハンを食べさせてあげようと思つてココまで連れてきたつてことかしら？」

「そうなんじゃねえか？ よくわかんねえけどよ」

「えつと……どどどうしたら……!?!」

「とりあえず、おしぼりで手を拭いてから……無難にいくなら『サンドウィッチ』、冒険するなら白くて丸いのを食べばいいだろうな」

「んー、私もせっかくだし食べることをお勧めするわ。あの子が何か悪い事考えてるようにも見えなかつたし」

そう言われてもまだ迷つたけど、お腹が正直に声をあげてしまい我慢できなくて、食べることにした。

もちろん、『サンドウィッチ』の方を。

「へえ、この白いのは『ちゅうかまん』つていうのか」
「どう？ リオネラ」

「柔らかくて……中があったかい」

「ここには無い料理だったんだ……。とりあえず、気に入ってもらえたみたいで嬉しいです!」

大道芸人として旅をしているけれど、初めて聞く食べ物に驚きつつもその未知の味を堪能した。

「それにしても、アナタには驚かされてばかりね。そのウォルフは保護してるだなんて」

「だよなあ、こんなところに住んでるっただけで驚きなのにな」

そう、部屋にいる小さな『ウォルフ』は保護しているのだという。

なんでも、大怪我をしているところを見つけてしまい 子供のようだけど親が見当たらず、あやめるのも見捨てるのも気が引けたため怪我が治るまで保護しているそうだ。

確かによく見てみれば前脚などに包帯が巻かれている。

「あの……」

「はい! どうしましたか?」

「襲われたり、しないの……?」

「人と同じでモンスターにもいろんな子がいるんです。この子みたいに人とわざわざ争いたくない子とかも……とは言っても、そういう子は人が通る道とかには出てこないから、まず出会わないみたいだけだね」

そう言う男の子は、少し悲しそうに微笑んだ。

私はなんでそんな顔をするのかわからなかったけど、その理由を聞くことはできなかった。

「……アナタって、優しいわね」

アラニーヤは何か察したかのように言い、ホロホロも「すぎるぐらいだろ」と呟いていた。

なんだろう、ふたりの言葉に同意できるんだけど……でも、「どうして」という疑問が湧き上がってくるばかりで少しモヤモヤした……。

「それじゃ、オレたちは街に戻るぜ」

食べ終わりひと息ついた私たちは、玄関先で男の子に見送られる

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして！ よかったらこれも持って行ってください」

そう言っ手渡してきたのは小型のカゴ、その中にはいくつかのパ
ンが入っていた。そのパンからはわずかながら甘い匂いが漂ってき
ていた。

「いいのかしら？ もらっちゃって」

アラニーヤの問いかけに対し頷く男の子。

「はい、こんなところまで連れて来ちゃった迷惑料みたいなもので
から」

「リオネラにメシ食わせてくれただけで十分な気もするけどなあ
……」

そんな中、私は最初のほうから気になっていたことを尋ねた。

「あの……どうしてこんなに親切にしてくれるの？」

「えっ？」

なぜか男の子は予想外そうに驚き、そしてなんだか申し訳なさそう
に視線をそらした。

「実は、この庭先の畑で育ててる作物がうまくできて嬉しくて……、ぜ
ひ誰かに食べてもらいたいなって思ってたから」

「そこで偶然にも腹を空かせたりオネラに会っちゃまったってことか。
なんつうか、思いつきで動いてるんだな、オマエは」

「あはははは……」

街道を歩いている最中……。

あともう少しで街に帰り着くそんな時、ふとアラニーヤが呟いてきた。

「変わった子だったわね。変にまつすぐで、私たちにも驚かないで、モンスターにも優しくして……」

「……良い子、だと思おうよ？」

数時間のつきあいだけど、あの子からは裏表が感じられなかった。気が付かないうちに警戒や緊張が解けてしまうほどに……。

「そーいや貰ったパンだけだよ。ぜってえオレたちも入れた人数分だけ、これ」

確かに、改めて見るとパンの量は私の一食分以上にある。おそらくそれなりに日持ちはするのだろうが、アラニーヤとホロホロはごはんを食べられないし どうしよう……。

「あら？ カゴの端っこに何か入ってるわよ？」

「ほんとだ……」

言われて 折りたたまれた紙が入っていることに気づき、取り出してみると――

チャリン

折りたたまれた紙の中から わずかにだか金属同士がぶつかり合った音がした。

「これって、もしかして……お金？」

「もしかしてじゃないな。わざわざ紙を折りたたんでお金を入れたのを間違えて入れたりするバカはいねえから、わざとだろうな」

「か、返さないっ！」

私は振り返って、走り出そうとするけれどホロホロに呼び止められる。

「オイオイ。今からもう一回あそこに言ったら日が暮れちまうぜ
逆にアイツに迷惑かけちまうぜ」

「そうね、とりあえず今は素直に受け取っておいて、また後で返しにい
けばいいわ。お金が無くて困ってたのは事実だからね」

少し考えたけど、やっぱりホロホロとアラニーヤの言うとおりは
受け取っておいて、後日人形劇で稼いだお金で返すべきなのだろうと
思い直し 再び街に向けて歩き出した。

あの家ではなくても 街にもよく来ているようだったので返せる
機会はいくらでもあるだろう。

そう思ったけど、ここであることを思い出した。

「名前……」

「そういえば聞いてなかったわね」

「まあ、また会うんだし、そんな時に聞けばいいだろう」

外と街を区切る大きな門をくぐり街へと入り、宿に戻り、男の子か
らのお金をありがたく使わせてもらった。

次の日、街の中でピンク色の服を着た女の子に声をかけられた

その女の子は私のサイフを拾いそれを届けに来てくれた。

錬金術士の口ロナちゃん、その子を通じてまた男の子と会うことと
なるのだけど、それは少し後のお話……

ミス 「お祭りが一年に一回しかないなんて」

王宮受付

『おうこくさい』ですか?」

「一年の終わりにあるお祭りだね、数日間にわたってお店が出たりイベントがあつたりするの」

王宮受付でエステイさんに依頼を見せてもらっていると「そういえば」と『王国祭』というものが毎年あることを教えてくれた。

「それでね、今の時期からその準備とかで街も結構活気づくの。でもって、私たち王宮勤めの人みんなこれから働き詰め、毎年大変なのよー」

「街の一大イベントとなると、やっぱり何か月も前から準備が必要なんですわ…。僕に手伝えることはないですか?」

そう問いかけると、「待ってました!」と言わんばかりに嬉しそうに微笑むエステイさん。

「ミス君ならそう言ってくれると思ったわ! それでね、お花が沢山ほしいの」

「花をですか?」

「街の飾り付けとか花冠なんかに使ったりするんだけどね、そのためのお花が毎年不足気味なのよ。で、今年はミス君にも用意してもらおうと思つて」

エステイさんは普段依頼書を出すところとは別の棚から一枚の紙を出し僕の前のカウンターに置いてこちらへ向けて見せてきた。

そこに書かれているのは、いつも通り期限等で特に変わりはない。

「ティファナから聞いたわよ、ミス君はお花とかを育てるのが上手だつて」

「なるほど、それで僕に……。ところで、ティファナさんとはお友達な

んですか?」

「んー、まあ飲み仲間つてところかしら? それじゃあよろしくね、王国祭の開催よりも結構期限が早いから気をつけてね」

「はいー。任せてくださいー!」

正式に依頼を受ける手続きを終えて王宮受付を後にした。

依頼達成のために必要な花の数は多いので種を買い足しておいたほうが良さそうなので、ティファナさんの雑貨屋さんへと向かう。

それにしてもお祭りか……

シアレンスでは毎月何かしらのお祭りやイベントがいくつか開催されていたので、年に一度と言われると正直寂しく感じる。

まあ、おそろうけど 規模が比べ物にならないくらい大きいのだとは思うけど。

久々のお祭りに僕はいつの間にか足取りが軽やかになっていた。

二ヶ月近く先のことなのに、今から楽しみでしようがない。

ロウとティファの雑貨店

花の種を買うために訪れた雑貨屋さん。

今日も店内はいつも通りの賑やかさ……じゃない? 何事だろう

「やっぱり! お父さんまでなにやってるの!?!」

「げえ! ロロナ! ちち、違う。これは違うんだ!!」

あれはロロナと……誰だろう、初めて見る人だ。

けど、ロロナが「お父さん」って言ってたからロロナの父親なんだろう。言われてみれば髪の毛の色なんかは似ているかも。

それにしても、こんなに言い合って……いや、正確にはロロナの方が勢いよく一方的に言っているだけみたいだけど、いったいどうしたんだろう？

「信じられない……お母さんに言いつけるからね！」

そう言つてロロナは店の外へと出ようとする。つまり、入ってきたばかりの僕の方へと来たのだ。

ロロナは一瞬驚いたかと思えば僕の手を掴んで外に出た。当然、手を掴まれている僕も店の外に出してしまうわけで……つて、なんで!?

「ま、待ってくれ！ 誤解なんだ！ ロロナー！ ……あと、その子は誰だー！」

「ああ、救世主が！」

「我らを見捨てるのか！ 待ってくれー！」

店内からのロロナの父親の悲痛な叫び声と常連さんらしき人の声を聞きながら、ロロナに手を引かれるままに小走りで行ってしまふ。

「ええつと、お店に買い物しに行かなくちゃいけないんだけど……」

「ダメだよ！ あんなどころに行ったら！」

「あんなどころって……ティファナさん優しくていい人ですよ？」

「そつそれはそうなんだけど……とにかく、今は行っちゃダメ!! マイス君にうわきしよーがうつつちやうよー！」

よくわからないけど拒否された。何がロロナをここまでにするんだろう？

どうすることもできずそのままロロナについていくと、街中の一軒の建物にたどりついた。

ロロナはそこにノックをすることもせず勢いよく扉を開け、僕を引き連れたまま中へと入っていく。

「お母さん!!」

「あらロロナ、突然帰ってくるなんて珍しいわね」

進んだ先、建物の中の一室にいたのはロロナに「お母さん」と呼ばれる女性、なるほど、ここはロロナの実家なのだろう。

確か、元々アストリッドさんのもとで働くようになってから実家を出てアトリエに住み込みで働くようになった、って聞いた覚えがある。

「あら、ここに友達を連れてくるなんて久しぶりじゃない？ もしかしてボーイフレンド？」

僕を見つけたロロナの母親は楽しそうに笑い、ロロナに問いかける。

「ち、違うよっ！ マイス君はそういうのじゃなくて……というか今日はそういうことを言いに来たんじゃ……」

「こんにちはー、うちのロロナが迷惑かけたりしてないかしら？」

「いえ、そんなことは……むしろ僕が街の外で助けてもらってます」

「そうなの？ あのロロナがねえ……ふっ世の中わからないものね」

僕も普通に受け答えしちゃったけど、この人口ロロナの話を聞いてなくて普通にのほほんと話しだしたよ……。

「そうじゃなくて！ マイス君は証人で呼んだんだよ！」

「証人……？ いったい何のかしら？」

一生懸命に言うロロナと、それに対してのんびりと返すロロナの母親。

「お父さんが……お父さんがティファナさんのお店に入り浸ってたの！！」

「なんですって……!?!」

先程までの空気はどこへいったのやら。

「それは……本当なのかしら？」

ロロナの母親は確認するように僕にも聞いてきた。

有無を言わせない謎の圧力、そんな状況では嘘など言えず真実を言うしかない。もとから嘘を言う理由なんて無いのだけでも。

「僕は途中からしかいなかったから、よくわかりません……。もしか

したら、ただ単に買い物に来ていただけかも……」

「……そうね、一度本人にじっくり聞かないと」

その時、扉が勢いよく開き、話の中心人物が飛び込んできた。

「ロロナあ!! あれは誤解で! それと、さっきの子……は……」

「ねえ?」

ロロナの母親とロロナから物凄い視線を向けられ固まるロロナの父親。

僕はこれ以上この空気の中にはいられないと思い、ロロナとその母親に頭を下げて礼をしてからその場をあとにした。

その後、改めて雑貨屋さんに種を買いに行くと

「新たな救世主が来た!」

「これでいける!!」

「この時をどれほど待ったか……」

などといった言葉が聞こえた気がしたけど、たぶん気のせいだと思う。

ティファアナさんと呼んで花の種を買い、エステイさんとの関係などのお話をして家に帰った。

マイス「モコモコ一人旅……えっ」

旅人の街道

晴れ渡る青い空。街道脇をモコモコの姿でタツタカ走る。

街道とは言っても家のすぐそばの街道ではない、アーランドの北にのびる『旅人の街道』と呼ばれる場所だ。

その名の通り、旅人などが使う街道なんだけど、大きな道から少しそれると入り組んだ小道が続いていて様々な地域へと繋がっていることがわかる。

ただ、小道にはモンスターや盗賊なんかがいたりするので少々危険ではある。

あと、盗賊がモンスターに分類されている凶鑑をみかけて、この世界の容赦の無さを感じた。さすがに捕らえるだけだとは思うけど……うん、深くは考えないようにしよう。

「これは『ミルクの樹液』、こっちは……『雲綿花』だったっけ？」

それにしても、不思議なものだ。

家の近くの街道と気候はほぼ同じなんだけど、生息している動植物や採れる鉱物がここまで大きく異なっているとは。おかげで見たとの無いモノが沢山だ。

凶鑑を手に入れてある程度素材について勉強していた僕は、家の畑で使えそうなもの、その他道具作り等に使えそうなものなどを見て確かめたのち、厳選して自分のポーチの中に入れる。

モコモコの姿なので、今回もカゴではなく小型のポーチを使っている。だから入る数が限られるので、厳選して数を減らさなければならぬのだ。

「ん？ あの実は……」

木を見上げると、頭上に金色の実が生っていた。

持ち前の身体能力で木をよじ登り、持つて降りれそうには無かったので、実を3個落としてから自分も木から降りた。

「この実、形なんかは『リンゴ』に似てるけど。凶鑑に書いていたような気もするんだけど思い出せない……」

木から落とした内の2個を全部ポーチに詰め込み、木の根元に座り残りの1個を手にとってじっくりと見てみる。

見た目は色は違えどやっぱり『リンゴ』の形で、ほのかに香る匂いもほぼリンゴだ。

見ても、嗅いでも どういうものかわからないなら、他に確かめる方法はひとつ。

「……食べてみるか」

毒は無いとは思うけど、薬などの解毒できるものは今持っていないので、念を入れて かじるのはほんの少しだけにしておく。

シャリつと これまた『リンゴ』と同じような食感だけ……

「ー!? ケホツ、ケホツ! モ、モコー……」

なんだろコレ……? 『リンゴ』とは似ても似つかない強い酸味だ。とてもじゃないけど、食べられたものじゃない。

もし、ほんの少しではなく 口いっぱいにかじりついていたら、地面を転がってもだえ苦しんでいたかもしれない。

(ああ、まだ口の中がすっぱい……)

このときミスは気づいていなかった。

強烈な酸味に驚いていたからなのか、ただ単に気が緩んでいたのか……。

理由はわからないが気づけなかったのだ。

人がすぐそばまで近づいてきていることに

「つつかまっえたー!!」

「モッコー!?!」

それは完全な不意打ちだった。

1メートルにも満たない小さなモコモコの身体を 両手で、というより両腕を使ってまるで抱きかかえるかのように捕らえてきたのだ。凄くガツチリと。

「モ、モッコ?!」

「こーら、暴れないでっつてば!」

そんなこと言われても、サーチ&デストロイのデストロイ部分を受けたくないからコツチは必死なんだっ!

「ちよ!? ひとりで何勝手につつこんでるのよ!」

「ロロナちゃん…だ、大丈夫?」

「あっ! くーちゃん、りおちゃん! この子だよ!この前、見つけた新種のモンスター!」

ああああ!他の人も来ちゃった!! ……つて、あれ?

少し冷静さを取り戻し よくよく確認してみると、全員僕の知った顔だった。

僕を捕まえて抱きかかえているのがロロナで、その後ろの木の陰の方からクーデリアと この前会ったリオネラさん。リオネラさんつてロロナの知り合いのだったのかな。

まあ、知った顔だからって危機的状況なことには変わりないかな
…

「何が「この前、見つけた新種のモンスター!」よ! 不用意に近づいたら危ないじゃない!!」

コッソ!!

「いたい! 痛いよ、くーちゃん…そんな叩かなくても」

「ええつと…」

「何おろおろしてるんだよりオネラ」

「まあ、確かにどうしたらいいか わからないけど」

クーデリアがロロナを叱り、リオネラさんは二人の間で固まって、ホロホロとアラニーヤがそれを見てため息をつく。

そして僕はロロナにガツチリ抱き締められていて逃げられない。

僕こそ、本当にどうしたらいいんだ……。

「ふう……で？ ソイツから何か錬金術に使える珍しいモノでもとれるの？」

ひとしきり叱って気が済んだようで、クーデリアがロロナ聞いたのだけど……内容が物騒に聞こえてくるのは僕だけだろうか？

「違うよー。そうじゃなくてね……あつてもこの金色の毛を使えば

『モフコット』よりも良い布が作れそうかも」

「お願いですから止めて下さいモココモココ……」

さすがにオレンジの皮を剥ぐようにベリベリと剥いだりしないとは思うけど、この『金のモココ毛』を『毛がりバサミ』でかられるのもできれば遠慮したい。

……剥いだりしないよね？ しませんよね？ ねえ……？

「ろ、ロロナちゃん。その子、凄く怖がつてる……」

「確かにそうかも。ソイツ震えてるわね」

「えへへ。ごめんねー、大丈夫だよー」

そう言いながらロロナはその場に腰を下ろし、僕を膝に座らせるようにして頭をなでてきた。

「モコ……」

ああ、そういえばシアレンスに居た頃もこうやって なでられたりしてたな……

その感触に懐かしさを感じていたが、ふと気が付いた。

あれ？ 今なら逃げられそうじゃないかな……？

僕を捕まえているロロナは僕をなでているから片手だけで捕まえているので、そう無理も無く抜け出せそうだ。

そして、クーデリアとリオネラさんたちもロロナのそばに腰を下ろしていて、とっさの行動は難しいだろう。

なら、様子を見て――

「……で、あんたののんびりした空気に流されたけど、結局何のためにソイツを捕まえたの？」

――あつ、確かにそれは気になる。逃げるのは理由を聞いてからにしようかな。

「それはね、新種のモンスターの名付け親になるためなんだ！」

「モコツ？」

「新種の名前ねえ……ロロナらしいというか何とというか」

見つけた人が付けられるのだから。

仮に名前を付けたとしても同種はいなくて僕しかいないわけだから、あんまり必要性が無くて意味がないような気もするけど……

「だから、特徴か何かで決めたいんだけど……」

「んー、大きさはオレたちと同じか少し大きいくらいだな」

「あとはこの目につく金色の毛ね」

ホロホロとアラニーヤもけっこう乗り気みたいだ。

確かに、ふたりと大きさや頭身とかは近いかも。まあ人と比べたら当然のことなんだけども。

「……プルプル震えてるから、えっと、そんな感じの名前でどうかな……？」

ごめんなさい、リオネラさん。もう今震えてないからわかると思うけど、いつも震えてるわけじゃないんだよ？

それに「プルプル」みたいな名前になると、どっちかというと『ぷに系』っぽくなってしまいうんじやないかな。

「モコモコ鳴くから、そういうのでいいんじゃない？見た目の毛の感じもそうだし」

クーデリア本人はてきとうに言ってるつもりかもしれないけど、正解を言ってます。

なお、鳴き声については、モコモコの鳴き声はみんなこうだし、この姿だと 僕も意識して喋ろうと思わない限りモコモコ喋りになる。

「うーん……みんなの意見をまとめて考えると……？」

あごに指をあてて真剣に悩みだすロロナ。

そこで、拘束が完全に緩んでいることを確認し……

「モコー！」

全力疾走でその場から逃げ出した。

後ろからロロナたちの声が聞こえてきたけど、気にせず走る。

……どんな名前を付けるのかは、ちよつと気になるけどね。

不意打ちなタイミングなうえ、あまりにも走るスピードが速かったため、追いかけるのははじめから諦めていたロロナたち。

ロロナは涙目になりながら残念そうに顔を歪めている。

「うわーん、逃げられちゃったよー！」

「げ、元気出して」

「つーか、よく大人しくしてたよな、アイツ」

「たしかにそうね……」

ロロナを慰めようとするリオネラと 金毛のモンスターの感想を言い合うホロホロとアラニーヤ。

「ぐすん……あの子『アーランド国有鉱山』で見たとき、ずっと隠れてたみたいで、ステルクさんに見つかつたらすぐに逃げ出してたから、きつと大人しくて臆病な子なんだと思う」

こぼれた涙を手で拭いながら言うロロナに、今度はクーデリアが言葉をかける。

「そんなに泣かなくてもいいじゃない。それと、そのときもポーチをしよつてたの？」

「えつ、どうだろ……？　　鉱山が薄暗かつたからしつかり見れてなくて わかんない。……そういえば抱っこした時に気づいたけど、結構ポーチ膨らんでたなあ。何が入ってたんだろ？」

「そつ。ポーチをどうやって手に入れたかはわからないけど、人と同じものを扱えるくらいには頭が良いモンスターってことかしらね」

そんな話をしながら、ロロナたちは本来の目的である　錬金術の素材集めに戻つた。

「マイス「やってみよう！」

マイスの家前・畑

「ふう、こんなところかな」

日課の水やりを終え、目の前に広がる畑を見渡しながら呟く。

畑の大部分に王国祭用に頼まれた数種類の花が植わっており、あと2、3日もすれば綺麗に花を咲かせるだろう。

残りのスペースに普段食したりするための『ジャガイモ』、『ニンジン』、『ホウレン草』、『カブ』、『森キャベツ』といった作物を育てている。こちらも少しばらつきはあるが4〜6日ほどで収穫できそうだ。

そして、先日手に入れたすっぱいリンゴ——『サワーアップル』は火をとせば食べられるそうなので、種を畑から少し離れた場所に植えてみた。果物の樹を育てるのは初めてなので色々不安だけど、同時に楽しみでもある。

日課としてやるべきことを一通りやり終えた僕は、家の玄関から入って右の作業場へと行く。

作業場には、薬の製作用の『薬学台』と、鍛冶仕事用の『炉』と『鍛冶台』がある。

それらは この家に初めて来たときからあったものだが、そのときとは違い、今はホコリを被っていたり汚れていて使えない状態ではなく、しっかりと掃除されている。

そして、『薬学台』や『鍛冶台』があっても十分すぎるほどスペースのあったこの部屋に、前までこの部屋に無かったものが新たに置かれていた。

そう大きな釜、『錬金術』のための釜だ。

最初はささいな欲求からだった。

「もつといろんな種類の作物を育ててみたい」

本来の目的である『空間にルーンを満たす』は、農作業によって発生する『ルーン』を利用するだけなので、育てやすい作物をとにかく育てるだけでいい。

しかし、やはり沢山の種類を育てたい・知らない作物を育てたいと思ってしまうのは「人の性」いや「農業者の性」なのだ。

そして、いざ新しい作物を……と思つて行動を起こそうとしてもそうはいかなかった。

種が無かった。

ティファナさんのおかげでいくらかは種類が増えたけれど、それでも物足りなさがあり満足できなかつた。

そんな時、僕の頭の中によぎつた言葉――

「ないものは創るしかない」

新たな作物を作る。例えば「品種改良」。

すでにある作物から新たな品種を生み出す方法で、『シアレンス』に居た頃育てていた『サクラカブ』は「冬が旬のカブがいつでも育てられるように」と品種改良された春が旬の作物だった。

だけど、残念なことに「品種改良」の専門知識なんて無いし、当然したこともない。

「なら無理か」と諦めかけたんだけど、ふと、あることを思いついた。

『錬金術』

存在そのものをつい最近知ったばかりであり、もちろん原理も知らないし知識も無い。

でも、釜に素材を入れていきながらグルグルかき混ぜることです。

んなものを作り出す錬金術は、良くも悪くも「自分にもできそうに見えるてしまう」のだ。

まあ、仮に錬金術が使えたとしても、新しい種類の作物を創ることができるとはかぎらないのだが。

とにかくやってみようと思った僕は、街で手ごろな値段の釜を買い、家に持ち帰って設置した。

当然、設置の仕方も必要そうな物もわからないので、ロロナのアトリエで見たものを思い出せる限り再現することで、錬金術用の設備を自分なりに形にしたのだった。

マイスの家・作業場

そして 今日、ついに錬金術をしてみようと試みている。

「とはいっても、どうしようか……っ」

錬金術は、ロロナから少し聞いた話とロロナがしているところを眺めたことがあるくらいだ。

最初はロロナに色々聞いてみたり教えてもらおうかと思ったけど、王宮からの依頼で大変そうで頼むのは迷惑になりそうなのでやめた。アトリエの存亡がかかっているそうだから、手伝いはしても邪魔はしたくない。

他に錬金術に詳しくそうな人といえば、ロロナの師匠のアストリッドさんだけど、あまり会わないうえ、見かけたら見かけたでアトリエで寝ているか、ロロナをからかっているかで、ロロナとは別の意味で頼みたくなかった。

それで今にいたるのだけど、もう完全に見様見真似、そして直感で混ぜてみることにした。当然、失敗して爆発するかもしれない……：それどころか、何も起こらずに変化の無い釜をかき混ぜるだけの虚し

い結果になる可能性も十分にある。

「いや、そもそも何をつくれればいいのかな？」

モンスター図鑑や植物・鉱物図鑑、料理のレシピ本なんかは読んだりしているけど、錬金術の本は読んだことがないし見かけたことも無いので、初歩なんてわからない。

つまり、ロロナが作っていたものを思い出して真似てみるか……ぶっつけ本番で何か考えてみるか。

だけど、いきなり何かここには無いものをつくろうと思っても、いきなり想像がつかない。まずはイメージできるものを試してみるべきか。

「カブはあるから、そこからサクラカブを……いや、ピンク色にするっただけでもよくわからないや……」

いつそのこと難しいことは考えずに最初は《冬に育たない作物》を《寒さに強く》して《冬にも栽培できる》ようにするくらいの考えでいいのかもしれない。

「《冬に育たない作物》は、ティファアナさんから貰ったけど植えきれなくて余ってた《カボチャの種》でいいとして……《寒さに強く》するにはどうすればいいんだろう？」

寒さに強い作物、つまり冬にでも育つ作物を入れればいいのかもれないが、持ち合せが無いうえに違う植物同士を混ぜたら失敗する未来しか見えない。

……そういえば、ロロナと探索に行ったときに「もう持てないから」ってくれた『ぶに』ってモンスターの『ぶにぶに玉』って素材、たしか「生きている」っていう特性っていうものがあるって言ってた気がする。

特性というのはロロナから聞いた話だと、素材やアイテムに付いているもので、錬金術などでの調合の時や 実際を使う時に効果が発揮

される重要なものだそうだ。

それは、同じ素材なら必ず付いている特性もあれば 個々に付いていたり付いていなかったりする特性もあるらしい。

詳しくはわからないけど、「生きている」っていうのはつまり「生命力が強い」とも言えなくもない気がする。

そして、生命力が強ければ寒さも耐えられるかもしれない。寒さに強くする素材として『ぶにぶに玉』が使えるかもしれない。

……いや、冷静に考えればすぐわかるけど、無理があるよね。

錬金術がわからないからって半分やけになってしまっているのが自分でもわかる。

「まあ ダメでもともと。できなかつたり失敗したら諦めて、素直にロロナかアストリッドさんに相談しよう」

『鍛冶台』で事前に作っておいた初級に毛が生えた程度の杖『スタッフ』を手取る。一度深呼吸をした後、錬金釜の中に素材として『カボチャの種』と『ぶにぶに玉』を入れた。

さあ、あとは混ぜるだけのはずだ……！

杖で混ぜ始めてそう時間のたたないうちに、杖を持つ手に伝わってくる感覚が変化した。空の釜を混ぜる感触ではなく、まるで釜の中に水か何かが満たされていて 釜に入っている杖の部分にわずかな抵抗が感じられる気がするのだ。

つまり、成功か失敗かはともかく錬金術自体はできているんじゃないかな。そう思い釜の中を見てみると

「何、これ……？」

気づかないうちに、窯の中が 水とも淡い光の塊ともとれるような不思議なものに満たされていた。

一瞬手が止まったが、「調合中に混ぜるのをやめたり 集中が切れたりすると爆発するんだ」とロロナが言っていたのを思い出し、必死に杖で混ぜた。

「あれ？ 爆発しそうなときはどうすれば……………」
「けっこう大事なことを確認してなかった。」

どれだけの時間、混ぜただろう。…………実はいうほどたっていないかっ
たりする。

窯の中から淡い光が少し漏れたかと思うと、すぐに静まり 杖はま
た何も無い空間を混ぜる感覚に戻った。

「できた…………のかな？」

杖を釜から完全に出し、釜の中を覗き込んでみると――

「ん？」

——そこには素材とは似ても似つかないモノがあった。人の握り
コブシよりも少し小さいくらいの大きさの黄色い塊かたまりだ。

成功した時のイメージは当然 大きいわりに薄いあの普通のカボ
チャの種で、色が少し変わるくらいかなっと思っていた。 だけどコ
レはまるで、皮がオレンジのカボチャを そのまま手のひらに収まる
大きさにしたような…………

「…………あれ？ これってどこかで？」

前に見たことがある…………けど、何だったかな？

……………。

「そうだ！ コレは『アクティブシード』!!」

思い出した。シアレンスで何種類か持っていた不思議な種。

『アクティブシード』、地面に落とすことで急成長し、まるで生き物
のように活動しだす植物。

一見すると植物系モンスターに見えてしまうような種類もあるが、

植えた者の言うことを忠実にきき、戦闘に参加したり 農作業の助けをしてくれたりする凄いい奴等なのだ。

「カボチャみたいな種は『ジャックの種』だったかな…？ それにしても、なんでアクティブシードが…？？」

まだ ちゃんと機能するのはわからないけど、アールランドでは一度も見たことも聞いたことも無いアクティブシードが作れるなんて。やはり、錬金術は常識から逸脱した技術なのだろうか。

「それとも、僕だからか…？？」

その答えはいくら考えても、考え付かなかった。

とりあえず、今日はもう錬金術を試さずにいよう。新たな作物についてはまた後でだ。

ロロナ「男子、何日会わなかったらなんとやら」

街道

「それにしても、『近くの森』に採取に行くなんて久しぶりじゃない」
『近くの森』への街道を歩いている途中、クーちゃんがそんなことを言った。

「えっ、そうかな？」

必要な素材を採りに行くって事しか考えてなかったから、特に気にしたことはなかったけど……そういえば久しぶりかも。

「今日はね、王国依頼で使おうと思ってる『森キャベツ』とか『甘露の枝』を採取しにきたの」

「……ちよつと待って。それって普通に店とかに売ってなかった？」
「売ってるけど、自分で採ってきたほうが品質が良いものが手に入るから。それに、せつかく料理を納品するなら美味しいほうがいいかなって」

今回の『王国依頼』は「王国祭用の料理の準備」で、できるだけ多くの料理を納品する依頼なんだけど、王国祭に出される料理になるんだからマズイものを出すわけにはいかないよね。

「それでね、『近くの森』に行く前にマイルス君のところに探索に誘おうと思うの」

「……二人つきりじゃないのね」

「クーちゃん、どうかした？」

「べ別に！ ただ、二人でも十分余裕だけど、あいつの住んでるところを見たことなかったからついでに寄るのもいいかもって思っただけよー！」

「あっそっかー！ クーちゃん、マイルス君の家 初めてだっけ。って、私もまだ二回目なんだけどね」

マイルス君が住むためにステルクさんと安全確認に行った後は、マイ

ス君が街によく来てたからわざわざ行かなくてもよかつたりもして中々行く機会が無かつたもんね。

そういえば、道はずれた林の先にあつたけど「行き方がわかりやすくなつた」って言つてたような気がする。

「たしか、このあたり……って、新しく道ができてる」

「道」って言つても今歩いてきた街道みたいにしつかりとしてなくて、ただ草を刈つただけの小道なんだけど……それでもこれまでなかつたし、確かにわかりやすくなつてはいる。

その小道が林へのびていつている。

「この先だよ、くーちゃん」

「話には聞いてたけど、本当にこんなところで暮らしてるのね」

小道を通り、林の中に入っていく。その途中に「マイルスの家」と書かれた立札があつたりして、道以外にも前回とは変わったところがあつた。

そして、林の中の小道を——すでに見えてきているマイルス君のお家を目指して——少しだけ歩いていくと、そうかからずに林を抜けて林に囲まれるような場所にある家と庭が見渡せた。

前来たときには無かつた お花や何かの植物が植わつている畑もあつて、なんだかこれまでには無かつた「人の生活感」っていうのかな？ それが出てくる気がする。

「あ、いたいた！ おーい、マイルスくん」

家のそばにある井戸の近くにしゃがんで何かしているマイルス君を見つけたから、声をかけながら手を振る。

気づいてくれたマイルス君は立ち上がつてこちらを向き手を振り返してくれた……んだけど、マイルス君の足元にいるアレって……？

「小さな『ウォルフ』……？」

「……あたしの見間違いじゃないのね」

くーちゃんにも、そう見えるみたい。

でも、のんびり座ってて、マイルス君はもちろん私たちにも威嚇してこない。襲ってきそうにも感じられないから、様子を見ながらわたしたちは恐る恐るマイルス君の方へと近づく。

「こんにちは！ ふたりとも、どうかした？」

いつも通りのマイルス君の元気でさわやかな挨拶と笑顔。

「ええつとね……」

「どうかした？」 じゃなくて！ なによ、そのモンスターは」

「この子は、この前大怪我して倒れてるところを ここのすぐそばで見つけて、見て見ぬふりは出来なかったから怪我が治るまで面倒を見てるんだ」

そう言つて、井戸水が入った桶とブラシをこつちに見せてきた。

「それで、今はちよつと体を洗ってあげてたんだ」

そんなマイルス君の言葉に相槌を打つかのように、『ウォルフ』がここで初めて短く「わふっ」と吠鳴えた。

「それにしてもこの『ウォルフ』、すごくおとなしいね」

私がこれまで見てきたウォルフは、こちらに気づくと有無を言わさずに襲い掛かろうとしてくるんだけど……。

「モンスターも人と同じで、いろんな性格の子がいるからね。人と争いたくない平和主義な子もいるよ。まあ、この子が子供だから警戒心が薄いつつというのも大きいけど」

「へえ、ずいぶんと詳しいみたいね」

「詳しいっていうより、こうやって一緒にいてると段々とわかってくるというか……」

そう言いながらマイルス君は『ウォルフ』の頭をなでた。すると、ウォルフはマイルス君の足にスリスリと身体を寄せていた。

「こうやって見ると、ただの可愛い動物にも見えなくは無い——かな？」

「そういえば、結局何の用だっけ？」

今日はただお話に来たわけじゃないってことを、マイルス君に言われて思い出した。

「今から『近くの森』に探索にいくんだけど、一緒に行けないかなーって思ってる」

「へえ、何か必要なものがあるのかな？」

「店でも売ってる『森キャベツ』と『甘露の枝』なんだけど、採りに行ったほうが良い品質のやつがありそうだからってコロナが言い出したのよ」

マイルス君の質問にクーちゃんがかわりに答えてくれたんだけど、それを聞いたマイルス君は少し何かを考えるような仕草をした。

「うーん。もしかしたら、いらぬお世話かもしれないけど……ちよつと待ってて！」

そう言っただけで一人が入って行っちゃった。

「こんな感じの『森キャベツ』なんだけど、使えそうかな？」

少し待っていると、マイルス君が数個の『森キャベツ』を持って出てきた。そして、その中のひとつを私に渡してきた。

「わあ！ お店で売ってるのより良い品質!! 他のも同じくらい良いんだけど……どこかから採ってきたの？」

「採ってきたというか……ほら、その畑で育ててるんだ」

そう言っただけで指で示した先は、ここに来た時にも見た花や色々な植物が植わっている畑があった。たぶん、あの中に成長途中のキャベツも混ざっているみたい。

「何回も育ててるから同じくらい品質のが まだ何個もあるよ。『甘露の枝』も同じくらいあるからよかつたら使って」

「いいの？」

「うん。一人じゃ使い切れなくて保存してた分だから、むしろ使ってくれとありがたいんだ」

「そっか！ それじゃあお言葉に甘えて」

お家にお邪魔して見せてもらったコンテナには、本当にたくさん良品質の『森キャベツ』と『甘露の枝』が——ついでに他のお野菜もいくらか——入っていて驚かされちゃった。

そして、必要になりそうな分貰ったんだけど、その時にクーちゃん
が——

「あら？　つてことは『近くの森』に行く必要がなくなったってこと？」

「あ、ほんとだ。どうしよつか？」

このまま街に帰るのもありだけど、ここまで来て何もしないのもどうかと思う。

だけど、特に用も無く『近くの森』に行くのも……。

「もしよかったら、お昼食べていかない？　今から作ろうと思ってるんだけど」

マイス君の突然の申し出に私もクーちゃんも驚いたけど、面白そうだし、ここまで来た理由に十分になりそう。

「あんだ　料理できるの……つて、できるわよね。ここで一人暮らししてるんだし」

「マイス君の作る料理かー。どんなのか気になる……」

「それじゃあ、作ってくるから適当にくつろいでて」

その後、クーちゃんと話しながらソファでくつろいで待っている
と、そのうちマイス君が作った料理と飲み物を運んできてくれた。

マイス君が作ってくれた料理は初めて見るもので、味も初めて食べる味ですごく美味しかった！

クーちゃんも最初は何かごによごによ言いながら恐る恐る食べてたけど、最後には笑顔で完食してた。でも、鼻先についてしまったソースに気がつかないでマイス君に拭き取られて、顔を真っ赤にした。

『お好み焼き』って　なんかかわった名前前の料理だったけど、それにしては美味しかった。またいつか作ってもらおっかなー。

マイス 「年に一度のお祭り〜何かがおかしい〜」

アーランドの街・広場

「うわー、すごい賑やかだなあ!」

そう、長い準備期間を終えてついに『王国祭』が開催されたのだ。

まさに街はお祭りムード一色で、普段何も無い街の通りには様々な種類の露店が数多く立ち並び、お祭りの盛り上がりに一役買っている。

そして、露店が出ていても『サンライズ食堂』といった普段からあるお店などにも多くの人が来店していて、店員がいそがしそうにしていた。

さて僕はといえば、正直なところ時間を持って余している。

ここのお祭り自体初めてなうえ、シアレンスであったお祭りとは規模も形式も まるで違っていてどうしていいかわからない状態だ。

「おーい、マイス君!楽しんでるかしら?」

どうしたものかと思いつながら露店で買った飲み物をベンチに座って飲んでいたら、聞きなれた声が聞こえ、そちらを見ると思っていた通りの人がこつちに駆け寄ってくるのが見えた。

「お疲れ様です! エステイさん」

「あははーはあ……これからもっと疲れちゃいそうなのよねー」

話には聞いていたけど、お祭りの準備以外にも 当然 お祭りの『進行』『警備』『後片付け』などなど沢山の仕事があるらしく、楽しんでいるだけじゃられないみたい。

「それで、どうかしら『王国祭』は」

「こんな人が多くて賑やかなお祭りは初めてで……どこからどうすればいいか見当もつかなくて」

「あらら……。ん? あつ、それじゃあさ、これからある催し物の参加者募集してるんだけど参加してみない? 優勝とかしたら賞品なん

「かもあるし」

「催し物ですか?」

「そういえば、『王国祭』についてきいたときに言ってた気がするな。優勝とかあるってことは、シアレンスのお祭りみたいになんか競い合うのだろう。」

「それって何か必要な道具があったりとかは……」

「なんにも無いわよ。しいて言えば、体力と筋力があると有利かなってくらい」

別段 体力や筋力に自信があるわけではないけど、特に道具を使わない競技なら出ない理由が無い。

エステイさんに参加の受付の仕方を教えてもらい、正式に参加者となることができた。

そして、催し物が始まるまでゆっくりと待つことにした。

僕は、ちゃんと内容を確認しておけばよかったと後悔することとなる。

「王国祭メインイベント、『キャベツ祭』! スタートっ!!」

その宣言により、参加者たちが各々目的の場所へと走り出す。

それに遅れないように、僕も良さそうな場所のある方へと走り出した。

だけど、一人になったとき、目の前の光景に叫ばずにはいられなかった。

「やっぱり、森の中で自生してるキャベツを採るのは何か違うって!!」

『キャベツ祭』、制限時間内に決められた範囲内で多く『森キャベツ』をとってきた人が優勝という いたってシンプルな競技だ。

だが、「キャベツは畑で育てるもの」だという意識は、アールランドで生活するようになってから それなりにたつけど中々変えることができずにいた。

他の人が何も疑問に思わず採りまくっていることと合わせて ショックを少なからず受け、思うように競技に集中できなかったのは 言うまでもない。

「ははは、全然ダメだったな……」

ショックを受けて集中できなかったのはもちろん、カゴの中の整理をしてきていなかったのもキャベツを入れるスペースがあまり無く、あまり持ち運べなかったこともあって、自分が勝つ予想が全くできなかった。

おかげで、カゴだけでなく直接手でキャベツを持ち運ぶ事態になっ てしまっている。

それにしても、気のせいかもしれないけど、周りの目が僕に集まっ てる気がする。……アールランドに来てからそれなりにたつけど、なじみの無い異国の服装の初出場者だから目立っちゃってるのかな？

「栄えある第一回、キャベツ祭優勝者は……美少女錬金術士のロロナ ちゃんです！ はい、みんな拍手！」

「は、え？ わたし？ って、美少女って何!？」

優勝者の発表とともに、聞き慣れた焦り声が聞こえてきた。

わたたと落ち着かない様子で特設ステージへとあがっていき、優 勝賞品を手渡されたロロナは、ぎこちない笑顔ではあったけど、何と

か周りの歓声に応えてた。

「さらに副賞として……なんと！ 名誉ある『キャベツ娘』の称号が授与されます！ おめでとう！」

「あ、ありがとう——ええ!? きゃ、きゃべつむすめ!？」

称号っていうくらいだから本当に名誉なものなのかと一瞬思ったけど、ロロナの反応を見る限りどうやらそうではないらしい。

「はい皆さん！ 『キャベツ娘』ロロナちゃんに今一度盛大な拍手を！」

「いいぞー！ キャベツ娘！」

「キャベツ娘かわいいー！」

「よっ！ キャベツ娘！ 世界一！」

「キャベツ娘ー！ 結婚してくれー！」

「ちよ、そんな……やめてー！ こんな称号いらないー！」

「大変そうだなー」なんて思いながらも「お祭りなんだからこういう賑やかさもいいよね」と思ってしまったている自分がいる。

……そういえば、もし男性やおばあさんなんかが優勝者だったら称号はどうなっていたのだろう？ 少し気になるかも。

「これから、どうしよう……?？」

何をしようか迷ってるのではなく、本当にどうしたものか困っていた。

原因は両手をふさいでいる『キャベツ』だ。

カゴの中のものを捨てるわけにも 街中にとったばかりのキャベツを捨てる気にもなれず、少々時間がかかるけど家まで戻らないといけないかと考えていた。

「あー！ マイス君だ！」

後ろから声をかけられたので振り返ってみると、『キャベツ娘』こと
ロロナがこちらに手を振りながら駆け寄ってきていた。そのすぐ後
ろにはクーデリアが付いてきているようだ。

「あつ、ロロナ。優勝おめでとう！」

「ありがとう！……でも、あれはちよつとねえー」

「まあ、あれもお祭りの一環として割り切るしかないんじゃないかな
?」

「ミス君に譲ってあげたいくらいだよ……」

トホホツ、と少し元気なさそうにしているロロナをどうしたものか
と考えていると、そこにクーデリアが「それにしても」と話しに入っ
てきた。

「あんただったのね、ソレ」

「それ？」

「そのキャベツの柱よ。てつきり、どこかの旅芸人のパフォーマンス
か何かだと思ってたわ」

「えっ？ ものを重ねて持ち運ぶのって普通じゃないかな？」

「仕方ない事かもしれないけど、あんたつてところどころ常識がずれ
ちやってるわよ……」

そう言われて、本当にそうなのか確認をとろうとロロナの方を向く
と

「まっすぐ9個も積んで走って運べるのはすごいよね！」

と、フォロー(?)されて、どう反応すればいいのかわからなくなっ
てしまった。

その後、ロロナの提案でアトリエにキャベツを置かせてもらい、一
緒に王国祭を見てまわった。

ロロナ「2年目でもあいかわらず」

王国祭が終わり、新たな一年を迎えたアーランド。

まあ、わたしは去年と同じで 王国からの依頼を次々とこなしてくだけなだけど……二年目ということもあつて心に少し余裕ができて、そう焦らずにやっていけそうかな？

「と、思ってたわたしはもういません……」

これまでの生活がガラリと変わってしまったかもしれない事態となっている。

その原因はもちろん師匠なだけど――

「どうかしましたか、マスター？」

「ううん、なんでもないよー！」

今私の目の前にいるのは『ホムンクルス』のほむちゃん。

青みがかった髪のお団子付きツイントール、そして全体的にフリルが沢山の白黒ゴシックのメイド服のような服装を見にまとった、クーちゃん以上わたし以下の身長でちよつと無表情な女の子。

『ホムンクルス』っていうのは、簡単に言うと「錬金術で生み出された人間」みたいなものらしい。

なにはともあれ、ほむちゃんはカワイイし、調合を手伝ってくれるし、おつかいにも行ってくれるみたいだからすつごく助かるんだけど……。

「ん、なんだ？ ロロナが「弟か妹なら妹がほしい」と言ったから用意したのだが、何か気に入らないところでもあったか？」

「そういうわけじゃないですけど……」

あえていうなら、手伝ってくれるのはすごく助かるけど そこに重点を置きすぎて妹って感じが薄れちゃてる気がする……カワイイからいいか！

そんなことを考えていると、師匠がほむちゃんに何かを小声で言つたかと思えば、わたしの腕を掴んで強引に引っ張って奥の部屋に連行

してきた。

「わわっ！ いきなりなんなんですか師匠！」

「し！ 静かにしていろっ！ さて、どうなる……」

師匠がドアの隙間から何やら覗いていたから、ちよつと気になってわたしも覗いてみると……鍊金釜のおいてある場所の少し前にほむちゃんがチョココンと座っているだけ。

カワイイけど、それがどうかしたのかな……？

コンコンコンッ

アトリエの入り口からノックの音が聞こえてきた。

でも扉は開かれなくて、シーンとした時間が少し続く……

コンコンコンッ

「こんにちはー」

次のノックの後には挨拶が付けられたけど、それは誰かいるかないかの確認みたいで、扉を開けて入ってこようとはしていないみたい。

お客さんが困らせてしまうと思い、奥の部屋から出て玄関まで行くとしたけど、師匠に捕まえられ止められた。

そして、師匠がほむちゃんに小声で――

「ホム、返事をして入らせろ」

――と言つて、わたしを捕まえたまま奥の部屋に戻り、また覗いて様子を見る体勢になった。

コンコンコンッ

「……すみません、誰もいませんか？」

「いいえ、います。お入りください」

ほむちゃんの見た目に合わない畏まった返答の後、ガチャリと扉が開かれた。

入ってきたのはマイス君。

「こんにちはー……えつと……？」

「いらっしやいませ」

「はじめまして、だよね？僕はマイスつていいいます」

「ホムはホムです」

「それじゃあ、ホムちゃん……でいいのかな？」

そう言うマイス君。はじめは見知らぬほむちゃんに戸惑っていた気がしたけど、すぐにいつものように話せるようになっていた。

「……おもしろくないな」

「師匠、マイス君に何を求めてるんですか……」

小声で師匠に言い返してみたけど、師匠はマイス君がほむちゃんにどんな反応をするのか気になってたってことかな？

マイス君は手に持っていたカゴをおろすと、床に座っているほむちゃんと向かい合わせになるように自身も床に座った。

「ホムちゃん、コロナはどこかに出かけているのかな？」

「マスターは用があるそうで、今いません」

「そっか……どうしようかな」

「むー」と悩んでいるマイス君と、相変わらず無表情で何をするわけでもないほむちゃん。

マイス君はわたしに用があるみたいだし、そろそろ出てあげないといけないと思って師匠にもう出ていいか確認しようと思ったら、悩んでたマイス君が――

「それにしても……」

アストリッドさんに　こんな大きな子供がいたなんて……！」

「ぶふっツツ?!?!」

ごめん、マイス君！　予想外の言葉に吹き出しちゃった!!

一緒に覗いていた師匠は師匠で口をポカンと開けて固まってる。こんな師匠はじめて見るかも……！

「はい、ホムを生み出したのはグランドマスターです」

「ああっ、やっぱりそうなんだ!」

ほむちゃんは間違ったことは言っていないんだけど「錬金術で」って言葉が抜けてるせいで勘違いがそのままになっちゃった。

「それなら、ロロナのことを『マスター』なんて変わった呼ばせ方させてるのも納得だよ」

その発言、マイルス君のなかで師匠がどういう存在なのが凄く気になっちゃうんだけど……

「その凛として、綺麗で、おしとやかな感じは、ロロナを弄って遊んでいない時のアストリッドさんにそっくりな気がしたんだ」

「……わかりませんが、グランドマスターとホムを褒めていると判断できます。どうすれば良いのでしょうか?」

どうして師匠の子供だと思ったのかはわかったけど、それだけの要素でよくそう思ったね……?」

ほむちゃんは相変わらずの表情のはずなんだけど、ちよつと戸惑ってるようにも見えなくもないような気がする。

そして、師匠はといえば――

「……最近、真面目になったことは一度も無いはずだが、何故そう思ったんだ……?」

師匠、たまには真面目になってくださいよ……。

「それに……若くても僕と同じくらいの子供のいるヘーゼルさんやしのめさんの例もあるから、アストリッドさんにホムちゃんくらいの子供がいてもおかしくないね!」

「……? よくわかりませんが、グランドマスターがホムを生み出したことは間違いありません」

これ、ほむちゃんが認めたこともあってマイルス君の中で「ホムちゃんIIアストリッドさんの子供」っていうのが完全に決まっちゃってないかなあ?

「いいんですか師匠?」

「いや、出るタイミングが中々つかめなくてな……というか、考えようによつては、奴はエステイ嬢に喧嘩売っているのだが、言うべきだろうか」

「それで、マイルスはマスターに何の用があつたのですか？ 内容によつてはホームからマスターにお伝えしますが」

「ああ、用事ってほどじゃないんだけどね。うちで作ったモノのおすそわけに来たんだ。だから渡してくれるだけでいいよ」

そう言つて、マイルスはカゴから何かを取り出す。

「この『アップルパイ』なんだけど——「パイっ!？」」

「「……………」」

「ロロナ？」

「どうしました？ マスター」

「あつ……………」

驚いた顔でわたしを見るマイルス君、無表情で同じくわたしを見るほむちゃん

「え、ええつと……………」

「パイで飛び出すのはさすがに驚きだぞ、ロロナ……………」

少し呆れたように師匠が言つてきた。

「まあ、キミにもいろんな意味で驚いたがな、マイルス君」

「もしかして、ずっと聞いてました……………」

「キミがどういうリアクションをするのか少々気になつてな。…良くも悪くも予想の斜め上をいったものだ」

そう言いながら師匠はソファアに座った。

「せっかくだ、その『アップルパイ』を食べながら話そうか。ホーム、お茶を入れてくれ」

「はい、グラントマスター」

立ち上がり香茶の準備をするほむちゃん。

ミス君は……「どういうこと？」つていいたそうな困り顔でわたしを見てきてる。座ったままの状態だから上目遣いになって、いつも以上にカワイイなあ……

その後、アップルパイを食べながらほむちゃん『ホームクルス』のことを話して、誤解を解いた。

マイス 「錬金術士とアクティブシード」

ロロナのアトリエ

「そういえば、2人に聞きたい——というか、見てもらいたいのがあるんですけど……」

僕はアップルパイを食べ終えたロロナとアストリッドさんに、以前見様見真似の錬金術で創った『アクティブシード』の『ジャックの種』をカゴから取り出し、見せた。

なお、ホムちゃんはティーカップの片づけをしてくれている最中のため、そばにはいなかった。

「えつと……師匠、何でしょうコレ？」

「初めて見るな。何かの実か？」

最初は興味なさそうだったアストリッドさんも 『ジャックの種』を目にすると、ロロナと同じように不思議そうにそれを見ていた。

ということは、錬金術で普通につくったりすることはないものなのだろう。あまり、深くは聞けなさそうだ。

「一つ聞きたいのだが、キミはこれを何処で手に入れた？」

「手に入れたというか、『錬金術』でできてしまっ……」

「『錬金術』!？」

2人そろって盛大に驚いた。特にアストリッドさんがこんなに驚くを見るのは初めてだった。

僕は『ジャックの種』ができるまでの経緯を全部説明すると、ロロナはポカンと口を開け驚き、アストリッドさんは長い溜息をついて首を振っていた。

「参考書も見ずに ロロナの真似と自分の発想で錬金術を行い、予想していた物とは別のものではあるが成功してしまうとは……。そもそも、『錬金術』で新たな作物を創ろうという考え自体……」

「ま、マイス君が……自分でレシピを考えて『錬金術』を……」

「えつと……？」

どうしよう、よくわからないけど2人ともショックを受けているみたいで話が進みそうにない。

すると、片づけを終えたホムちゃんが戻ってきて 種を見ながら問いかけてきた。

「それで、コレはどういったものなのですか？」

「対モンスター用なんだけど……一応ここでも使えるものだよ」

「えっ？ 植物の種なんだよね？ アトリエでも使えるってどういう？」

「よくわからんまま終わらせるのも癪しやくだ。ホム、植木鉢か何か用意――」

「あ、何も無くて大丈夫ですよ」

不思議そうにしてるロロナはとりあえずおいといて、ホムちゃんに用意させようとしているのを止める。

「なに？」

「家の床とかでも問題無いのは僕の家で実験済みですから」

そう言って『ジャックの種』を部屋の中心付近に落す、「芽生えて」と念じながら。

床に落ちた種から瞬時にツルが上へと伸び、それにもない何枚かの葉も茂る。

ツルの先端から垂れ下がるように 人の頭より大きなツボミが膨らむ。

そして、ツボミが眩い光を放ったかと思うと……

先程まであった植物は消え、そこには ギザギザの口と穴のような目を持った巨大力ボチャがたたずんでいた。

「これが『アクティブシード』の『ジャック』です」

「ほうっ。これはまた……」

そう紹介すると、アストリッドさんは興味深そうに観察しだした。対してロロナはおっかなびっくりといった様子で、あわあわ狼狽えていた。

「お、襲ってきたりしない……?」

「大丈夫だよ。種を植えた人の意思に忠実だからね」

「そうなんだ……なら安心かな?」

ロロナはそう言うと『ジャック』のほうへと近づき、ペタペタ触つてみたり 口の中を覗いてみたりしだす。

それが気になるのか、『ジャック』は口を少しモゴモゴしたりしている。

「体はほぼ植物と同じだが、まるで生きているかのように動いている……ふむ、内部はどうなっているのか気になるな」

こつちに向きなおると、アストリッドさんは片手で眼鏡の位置をなおしながら僕に聞いてきた。

「コイツは半永久的に動き続けるのか?」

「どれくらい維持できるか試したことがないので詳しくはわかりませんが、一定以上のダメージを受けるか、「戻る」ように命令したら種に戻ります。ただ、その後一日寝かせないともう一度使用することはできませんけど……」

「となると、外的要因が無ければ動き続ける可能性もあるということか」

「なるほど」と頷くアストリッドさん。

そういえばロロナが前に「師匠もたまには真面目に仕事してほしい」と言ってたけど、こういったところを見る限り、本当に「できない」のではなく「しない」人なんだろうなと感じた。

普段見るアストリッドさんは、大抵ロロナを弄ってるか寝ているかだからなあ……

『シアレンス』にもいたなあ。アストリッドさんとはちよつと違う感じだけど仕事をあんまり真面目にしない子が……

——*—*—*

《んー……》

《枕は……あその商品棚に》

《んしょ》

《………くう》

——*—*—*

初めて会った時も雑貨屋さんのレジカウンターで店番なのに寝て、起きたかと思えば「本日の営業は終了しました」の一言。その後母親に叱られるまでの一連の流れは、インパクトが強くてよく覚えている。

いや、そもそも『シアレンス』のみんなとの初対面はどれもインパクトが強かった気も……

そういえばあの子は都会に憧れてたけど、この『アーランドの街』を見たらどういふ反応をするだろう？

まあ最初は喜んで結局働かないといけないからって、変わらずだるそうにしてそうだけど。

「聞いているか……？」

「あ、ごめんなさい。ちょっとボーっとしちゃって」

思考を目の前の現実に戻すと、アストリットさんが何やら僕に言っていたみたいで、聞き逃してしまっていた。

「それで、だ。アレを種の状態で少々借りたいのだが」

「はい、いいですよ。でも取り扱いには注意してくださいね？」

「それはこっちのセリフだ。『錬金術』の扱いには注意しろ。とは言っても、私から特に教えたりするつもりは無い。まあそれに、キミは思いつくままにやってみればなんとかなる気もするがな」

「てきとうだなあ」と思ったが、『錬金術』をてきとうに行った僕が言えたことじゃないのに気付く、返す言葉に困った。

「た、たしゆけてえー!？」

そんな声が聞こえ そちらを見ると、口を閉じモグモグしているジャックと その周りをうろちよろしているホムちゃん。

ということは、声の主の口ロナは……………

「もしかして、自分で口の中に入っちゃった!？」

「中はどうなってるのかなーって思っ……………じゃなくて!? 早く!

モグモグされてる!! 美味しくいただけかれちゃうー!!」

ごめん、必死なんだろうけど 何だか楽しそうに聞こえてきてる

……………

「…………一応聞くが、アレは大丈夫なのか?」

「ええっと、一応あんまり痛くはないと思います。ジャックは特別攻撃力が高いわけじゃなくて、モンスターを丸のみにして拘束し状態異常を与えるのが特徴ですから。それに、すぐに吐き出すかと……………」

まさにその時、「ぺっ」という擬音語がふさわしい吐き出し方で口ロナは吐き出され、床に転がった。怪我もなさそうで安心した。

「びびビックリしたー……………あ、れ? な、何だかカラダがが痺れて……………動くのガ……………」

「毒になってたらどうしようかと思っただけど、状態異常は運良く麻痺だけみたい。でも、麻痺を治す『マヒロン』は今持ってないし……………」

『マヒロン』を作るための材料、家にあったかな……………?」

「そこは問題無い、この私がいるのだから麻痺の解消など容易なことだ」

「ふふんっ」と微笑みながらアストリッドさんが一歩前に出る。

「どうかこの人、何か手をワキワキしてるし、顔が段々を悪い笑い方に……………」

「だがまあ、今後のことも考えて一応どういう症状なのか、他に異常は無いか、詳しく調べておかねばな。隅々まで……………な」

「し、師匠!?なんでそんなにニヤニヤして……………逃げれないっ! い

やーーーーー!!」

「グランドマスターとマスターは仲が良いですね。ホムも見習わなければ……」

「……そうっ」

とりあえず『ジャック』を種の状態に戻し、ホムちゃんに預け、後でアストリッドさんに渡すようお願いし、僕はアトリエをあとにした。

マイス 「青い布とモンスタ―」

マイスの家・作業場

「うん、だいたい こんなものかな？」

家の作業場。釜のそばに置いてある 素材などを置いておくための簡易的な机。

その上には、いくつかの 握りコブシほどの大きさの種が置いてある。それら全ては僕が錬金術でつくり出した『アクティブシード』だ。

「とりあえず、『ぷにぷに玉』と植物系だと『アクティブシード』ができるみたいだね」

今のところ『マメ』や『サボテン』といった僕の知っているアクティブシードで存在する植物でやってみたが、もしかすると他の植物を素材にすれば、見たことの無い『アクティブシード』が創れるかもしれない。

「って、ホントは 普通に育てる新しい作物の種 をつくりたいんだけどなあ…」

とはいつても、特にピンとくるレシピが思い浮かばない。

もういつそのこと『大根』と『カブ』みたいな似た感じのものを混ぜてみるのも手か……でも、それはあんまり利点は無いしなあ。

コンコンッ

「あつ、はーい！」

ノックされたのは家の玄関の扉、作業場から玄関のある部屋へと移動し扉を開ける。

そこにいたのは、口髭とアゴ鬚を綺麗に整えた初老ほどであろう男性だった。ピッシリ決まっている服装と携えた杖の印象もあって、シアレンスにはいなかったタイプの人だと感じる。

「お待たせしました、どういったご用件ですか？」
「ふむ……急ですまないが少々喉が渴いてしまつてな、よければ飲み物を一杯ほどいただけないだろうか？」
「かまいませんよ！ 『香茶』を用意しますから、こちらのソファアームに座つて少し待つててください」
そう言つて男性を家に招き入れテーブルそばのソファアームを勧め、僕は香茶を用意しにキッチンへ行く。

マイスの家

「いやあ、すまなかつたな。急にお邪魔してしまつて」
「いえ、ちようど作業に行き詰つて、僕にも良い気分転換になりましたから！」

「そう言つてもらえると助かる。おっと、自己紹介がまだだつたな。私はジオ、見ての通り楽隠居の老人のようなものだ」

「僕はマイスつていいいます。よろしくお願いしますね、ジオさん！」

「フム」と一言ついたジオさんは手に持っていたティーカップをテーブルに置くと、自分のアゴ髭に手をやりながら僕を見据えてきた。

「実はだな、今日ここに来たのは偶々ではなく君に会いに来たのだよ」
「僕に、ですか？」

僕に用といつても、僕にできることなんて限られているし、ジオさんのような人に何か頼まれるにしても全く見当がつかない。

「知り合いから君の話の話を聞いて興味湧いてな。それと……」
そう言つとジオさんは懐から青いスカーフを取り出し、僕に渡してきた。

「なんなんだろう？」と僕はよくわからず、考えていると――

「そこで寝ている『ウォルフ』に着けてあげるといい。そういう目印があれば、ここに来る君の友達や他の人も警戒せずにすむし、家の中だけでなく適度に庭で休養させることもできるだろう?」

「あつ……なるほど」

その言葉を聞いて、いつものように定位置で寝転がっている『ウォルフ』に目を向ける。

確かに その案はいいものだと思う、なので早速ウォルフの首に軽く巻き結んであげた。『ウォルフ』もスカーフを問題無く受け入れてくれた。

「ふむ、ちゃんと似合ってもいるみたいだな」

「はい! この子も気に入ってくれてるみたいで……ありがとうございます!」

それにしても、気になることがいくつもある。

この『ウォルフ』のことを知っているのは、少なくともコロナ、クアデリア、リオネラさん、ホロホロとアラニーヤぐらいで、ジオさんの言う「知り合い」というのもこの中の誰かだろう。

それも気になるけど――

「あの……なんで青のスカーフなんですか?」

「ん? ああ、それはだな、ここ最近アーランド周辺で変わったモンスターの目撃情報が何回かあってな……」

ジオさんは目をつむると、軽く「うーむ」とうなった。まるで、何か記憶を掘り起こしているかのようにも思える。

「そのモンスターは他とは違い決して人を襲わず逃げ出すのだ。それだけならまだ唯の「臆病なモンスター」なのだが……」

……。

「とある行商人の話では、モンスターの群れに襲われていたところに見たことの無い小さいモンスターが割って入ってきて群れを追い払ってくれたそうだ。その上、ソイツはどこから手に入れたのか傷薬

を置いて去っていったらしい」

……………ん？

「変わっているだろう？人を敵視するどころか助け、人の扱う薬のことも理解しているようなモンスター…。実は私も遠目で見たことがあるのだが、ソイツは人の子供より小さく、体は金色の毛でおおわれ、小さい帽子のようなものをかぶっていて、そして…何やら首に青い布を巻いているのだよ」

……………それって――

「それで、君の保護したウオルフにも青い布を巻いてみることを思いついたのだ。あのモンスターののように無害なモンスターであることを示すためにな。……………ん？どうかしたかな？」

——それって『モコモコ』の姿の僕、だよね…？

「……………なるほど、君もそのモンスターに覚えがあるようだな」

「ひ、ひゃい!？」

もしかして気づかれたのではないかと思つて、声がひっくり返つてしまい変な返事になつてしまった。

「街の外で暮らしていれば、単純に考えても私たちよりも出会う機会は多いのだから当然と言えば当然か」

「そうかもしれないね。一応、僕は姿を見たことは何度かありますよー」

良かった。そう判断してくれたか……………。

あと、僕は嘘は言っていない。鏡や水面に映った姿を見たことがあるからね。

「長くお邪魔しすぎたようだな、これで失礼しよう」

「いえ。……………いつでもいるとは言えませんが、また良かったら遊びに来て下さいー」

「ふむ、それではお言葉に甘えてまた来るとしよう」

その言葉通り、ジオさんはたびたび家に来てくれるようになるのだ
が…。

にしてもジオさん、普段は街で何してるんだらう？

王宮受付

また別の日のこと、僕が王宮受付に依頼を見に行っていたときのこと。

「エステイさんの妹さん、ですか？」

「そう、あの子ったら引きこもりでね」

「何か病気なんですか？」

「いやあー…そういうのじゃなくて、ただ単に人見知りなのよ」

困ったように、そして呆れたようにため息をつくエステイさん。

が、一転して楽しそうに笑顔を見せた。

「でね、この前コロナちゃんに相談したんだけど、無理矢理外に出ざるを得ないようにしてみることにしたの！」

「……それって、ちよつと危なくないですか？」

人見知りの人に強要するのは精神的に危なく、取り返しのつかないことになりかねないと思うけど……。

「大丈夫よ。コロナちゃんもアストリッドさんのおつかいであんな社交的になっただらしいから」

「大丈夫かなあ……」

そんな僕の不安をよそに、エステイさんはまた僕が不安になることを
を言いだした。

「というわけで、マイルス君のお家に おつかいに行かせるから よろ

しくね！」

「へ？ ……いや、そこは普通に街の雑貨屋さんとかじゃないんですか!？」

「それだと、ティファアナぐらいとしか会話せずに終わっちゃうじゃない。だから街の外のマイルス君の家にして、誰かコロナちゃんあたりに護衛頼んだりするようにすればいいかなって」

確かにそれなら最低でも必要となる会話数は増えるだろうけど……にしたって、突拍子のないことだと思っただけだなあ。

「それじゃあ、そのうちおつかいに行かせるから、その時はよろしくね」

うーん、エステイさんはその気みたいだし、こうなったら僕の方で何か考えておくべきかもしれない。

「人見知り」か……。シアレンスでもそんな人がいたけど……

——*—*—*

《がうく!》

《なによっ! かむわよっ!》

《ガブツ!!》

——*—*—*

いや、あんなアグレッシブな人見知りは そうそわないだろう……。

なんか腕が痛む気がする。気のせい、だよな……？

参考になるかはわからないけど、一応何か 人見知り対策を考えておこう。

リオネラ 「再会はお昼どき」

中央通り

人形劇の大道芸を終え、今からどうしようかと『中央通り』を歩いていると、脇道から見た顔が歩いてきたのがわかった。

向こうもこつちに気がついたみたいで、歩み寄ってきた。

「リオネラさん、こんにちは！」

「こ、こんにちは……マイスくん」

「いつぞやぶりだな」

「あの時は本当お世話になっちゃったわ」

私に続いてホロホロとアラーニヤもマイスくんに話しかける。

マイス君は一瞬「あれ？」と疑問をもったような顔をしたけど、すぐに何か思いあたったみたいで何やら納得したように一人頷いている。

それが気にはなったけど、まずその前に以前から用意していたものを取り出しマイスくんに渡すことにした。

「あの……これ、このあいだ貸してくれた分のお金……ちゃんと返しておきたくて」

「そんなわざわざ……うん、ありがたくもらっておきます」

「それと、その、あのパンおいしかったよ」

すると、マイスくんは本当に嬉しそうに笑った。

「本当ですか！ 口に合うか不安だったけど、おいしいって言うてもらえて凄く嬉しいです！」

「リオネラったら、ほんとにおいしそうに頬張って口周りにジヤムつけちゃってたのよ」

「ありや、ちよつとマヌケ面だったなあ」

「も、もう！ アラーニヤもホロホロもわざわざ言わなくても……!!」

「あははは……、そんなに気に入ってもらえたならまた何かおすすそわ
けするよ」

「うっ、ありがとう……」

「そういや今日は何しに街まで来てるんだ?」

そうホロホロがマイスくんに聞く。

たしかに　マイスくんは街の外に住んでるから、何か用があつてこ
こにきてるんだと思う。もし、急ぎの用の足止めをしてしまったなら
申し訳ないから、できれば用が済んだ後だといいな　と思いつながらマ
イスくんの返答を待つ。

「アトリエにおすすわけに行くところなんだ。ほら、そろそろお昼に
ちようどいい時間になるからね」

「アトリエって、ロロナちゃんの?」

「そうだよ。……そうだ!　よかつたら一緒に来ない?」

「えっ!?　そんないきなり行つても邪魔に……」

「大丈夫だよ、僕も特に約束とかしてるわけじゃないから!」

「……前にも思つたけど、オマエって結構行き当たりばったりだよな」
ホロホロの言葉にマイスくんは「そうかな?」と苦笑いをする。そ
れを見たホロホロとアラニーヤは少し呆れながらも「まあ、そんな悪
いことなわけじゃないからいいか」といった様子でヤレヤレといった
ジェスチャーをした。

「まあ、色々思うところもあるけど、せつかくのお誘いだし行つてみた
らどう?」

「うん、それじゃ……一緒に行つてもいい?」

「もちろん!」

ドンと来いというかのように胸を張るマイスくん。

それから、ロロナちゃんにサイフを拾ってもらつたことや、ロロナ
ちゃんがマイスくと面識があることを知り、あの時間聞いていなかった
名前等　色々話しをしたことを話しながらアトリエへと向かつた。

「にしてもリオネラのやつ、マイルスとは問題無く話せるみてえだな」
「そうね。凄く優しいからか、自分よりちっちゃくて元気で子供み
いだからか、表裏が無さそうだからか……よくはわからないけど、良
い兆しじゃないかしら？」

「だな。まあ もうちよい様子見かな」
「そうね」

そんなホロホロとアラニーヤの、ふたりの会話は誰に聞かれるでも
なく、ふたりのなかで交わされるのであった。

コロナのアトリエ

コンコンコンツ

「はあい、どうぞ〜」

マイルスがアトリエのドアをノックすると、聞いたことのない声
で返事が返ってきた。

私も不思議に思ったけど、マイルスくんも同じみたいだったけど「あ
れ？ また誰か増えたのかな？」と言ってドアを開けた。「また」って
ことは前に誰か増えたのかな？

「こんにちはー」

「お、おじやまします……」

マイルスの後ろをついて行ってアトリエに入ると、見たことの無
い女の人が浮いていた。……………浮いて……………？ えっ？

「はじめまして、僕はマイルスつていいいます！ すみませんがコロナは
いますか？」

「あら、ロロナはちよつと前に雑貨屋さんに行っちゃったのよ。でも、そろそろ帰ってくる頃だと思うわ。あたしはパメラっていうの幽霊やってます」

えっ、あれ…？ マイスくんは何で普通に話してるの？ といううか、幽霊!? どどうしたら…！ えっと ああつと!?

「リオネラさん？ どうかしました？」

「あつ……ゆゆうれ……!? 浮いて……!」

「…？ ホロホロやアラニーヤも浮いてるけど？」

そ、そうだけど、そういうことじゃないよマイスくん!?

……あれ？ マイスくんは何も動じてないから、私がおかしいの……かな？

マイスくんは何事もないみたいに幽霊さんと話しだした……

「ただいまー！ あ、りおちゃんにマイス君 いらつしやい！」

アトリエのドアが開いて、ロロナちゃんが帰ってきた。

このよくわからない状況から助けてほしくて振り返る……前にホロホロが口を開いた。

「おいおい、オレたちもいることを忘れてもらっちゃ困るぜ」

「あうつ……ごめんね。ほろくんもらにやちゃんもいらつしやい！」

「こつちこそごめんなさいね、いきなりお邪魔しちゃって」

「いいよー、むしろ歓迎しちゃうよ！ ……って、りおちゃん、どうしたの!? どこか痛いのか？」

ロロナちゃんが、私が涙を溜めてしまっていることに気がついてくれたみたいで、心配そうに顔を覗きこんできた。私はうまく動かせない口を精一杯動かしてロロナちゃんに助けを求める。

「ゆ……ゆゆうれいが……!!」

「ふえ？ ……あー！」

そんな少しの言葉でもわかってくれたみたいで、ロロナちゃんは幽霊さんの方を向いて非難の声をあげた。

「もー！ パメラったら、りおちゃんをおどかさなんてダメだよ！」
「え〜？ あたし、別に驚かせたりしてないわよ〜？」

叱っているロロナちゃんに対して幽霊さんはのんびりと心外そうに返す。

「そんなこと言っても、幽霊が浮いてるだけでも、初めて見た人は心臓が飛び出ちゃうくらいなんだっからね!!」

「そんなことないわ、ねえ〜マイス君？」

そう言いながらマイス君のそばまで降りてきて、マイス君の首に後ろから腕をまわす幽霊さん。マイス君はといえば、ちよつと首をかしげたりはしてたけど、特に抵抗したりはしてなくてそれを受け入れている。

「……ああ、そういえば あたしって幽霊だから触れないんだっただわ〜。これじゃマイス君を抱っこできないーい」

マイス君のことを随分気に入ったようで、残念そうに言う幽霊さん。その言葉にマイス君は「へえ、そうなんですかー」と微妙なところで驚いていて、ロロナちゃんはいえはとも慌てていた。

「まつ、マイス君！ すぐ離れて！ 憑りつかれちゃうよ!？」

「えっ、そんなことができるんですか？」

「できなくはないけど……人形とかならともかく、人はちよつと難しいわ〜」
「なるほど」

あわてるロロナちゃんと のんびり幽霊さん、そして いつもどおりのマイス君。そんな状況を見ると なんだか怖くなくなり、いつの間にか不思議と落ち着いていた。

「マイスのヤツ、変に神経が太いつていうかマイペースつていうか……」

「まあ、モンスターと仲良しになっちゃうような子だから、幽霊なんかも許容範囲内なんじゃないかしら？」

「それもそうか」

そんなホロホロとアラニーヤの会話を聞きながら、私は三人の賑や

かなやりとりを 見ていた。結局それはコロナちゃんのお腹が鳴り、マイスくんのおすそわけの『サンドウィッチ』をみんなで食べはじめるまで続いた。

マイスくんは幽霊さんがごはんを食べられないことや、ホムちやんって子が用事で出ていたことを最後まで残念そうにしていた。

ファイリー「はじめてのおつかい」

街道

「あわわっ……どど、どうしよう!？」

ここは街道の途中、私、ファイリー・エアハルトは今、大変な状況に置かれています……!

ことの発端は今朝、いつもどおり私は家にこもって本を読みあさっていた。そしたら突然お姉ちゃんが私の部屋に入ってきて、なんなのか聞く暇も無く無理矢理服を着替えさせられ、首根っこを捕まえられた状態で家の外まで連れ出されて――

「おつかいに行つてきなさい。おつかいの内容とか困った時のことはこのメモに書いてあるから」

そう言つて一枚のメモ用紙を強制的に握らされて……私が「無理」つて言おうとしたら――

「あと、おつかいがちゃんとできるまでは家に入らせないからね♪」
というトドメ一言を言い放つてきて……。

泣く泣くおつかいをこなすために歩きだしたんだけど、指定される場所は街の外。メモには「誰かに護衛を頼んでね」なんて書いてたけど、頼める知り合いなんていないし、メモの続きに書いてた お姉ちゃん曰く「護衛を引き受けてくれそうな人」に書かれていた名前も知らない人ばかりで探しようもないし……。

そこで私は「護衛を付けずに外に出ようとすれば街の門番さんが止めてくるんじゃないだろうか」と思いつき、止められてそれを言い訳に家に一旦帰ろう、そして「顔も知らない人を探してその人に頼めるわけがない」つてお姉ちゃんに言おうと決めた。

結果が今の状況……。

門番さんは止めてくれず、むしろ「気をつけて行つてきてね」とで

も言いたいのか良い笑顔で送り出してくれて、それを見た後じやあすぐに引き返して街に戻るなんてことがし辛くて、街道をメモ書きどおりに一人で歩き続けてしまった。

幸い、モンスターに遭遇することも無くここまで来ることができたんだけど……

「この先……だよな？」

メモに書かれていた行先である目の前の道は、街道からずれた草原のなかにある林の中へと伸びる小道。どう見ても今まで歩いてきた道よりもモンスターが出てきそうな雰囲気がある。というか、この道の先に何があるんだろう？

小道に一步踏み出そうか、帰ってしまおうか、一人心の中で問答していたら――

「あの一……う？」

突然後ろから声をかけられた。

飛び出しそうなくらい跳ね上がる心臓、足を中心に震え上がる身体、嫌な汗が滝のように流れ出してくる。

薄れる意識の中、勇気を振り絞り 振り向こうとしたけど、振り向き切る前に私の意識が途切れてしまった。最後に見えたのは、驚いた顔をした男の子だった。

??????

「うっ……ん……。あれ？ ここ……は？」

目を覚ますと、目の前に見えたのは私の知らない部屋だった。どうやら私はこのソファに寝ていたようだ。それにしても……

「もしかして人さらいに捕まったりした……!? どどど、どうしよう!?」

ただでさえ他人と話すのが苦手で、普通に面と向かって話すだけで

も逃げ出しちやうのに、人さらいのような悪人だったら きつと顔を
見ただけで失神してしまいかねない。

そもそも、そんな状況だと自分の身の危険だ。今は誰もいないみた
いけど、早くここから出て街に逃げないと！

ガチャツ

そんなことを考えていると、ドアが開けられる音が聞こえた。

身を守るなら、窓を開けて飛び出し逃げるとか どこかに隠れると
かするべきだったのかもしれないけど、私は恐くて身体が震えて動け
なくてソファーに座ったまま音のしたほう——ほんの少しだけ開い
ているドアのほう——を見つめることしかできなかつた。

キィ……

ドアが段々と開いていく。私はどんな強面の悪人が入ってくるの
かとビクビクしながら見ていた。

十分に開かれたドアから見えたのは……何のことは無い、日に照ら
させた木々がわずかに揺れる外だった。

どういうことだろう？ 風で自然に開いたにしては不自然だけど、
誰もいないし……。

首をかしげて考えていると、今度はひとりでにドアが閉まりだし
た。幽霊かなにか見えないものが動かしているんじゃないかと思い、
怖くなりソファーの上で膝を抱えて震えてしまう。

が——

「えっ……っ？」

気がついた。先程まで私が見ていた高さよりも低い位置、そこに金
色の何かがあるドアをゆっくりを閉めようとしていたのだ。

「モコツ？」

気が抜けて私がつい出してしまった声に気づいたようで、それはこ
ちらを振りむいてきた。

その子は大きなたれ耳と顔、それと手と足は茶色で、それ以外は金
色のモフモフした毛におおわれていた。頭には変わった形の帽子、首
には青い布が巻かれていて 同じ色のクリクリした目も印象的だっ

た。

「モコー！」

片手をシュツと挙げながら掛け声(?)をあげたかと思えばドアに向きなおり、最後までしつかりと閉めた。

私はここでふと気がつく。あの子、背伸びしないとドアノブに全然とどきそうにない……。つまり、先程ドアを開けたときには、見えてはいないけど一生懸命背伸びしてドアノブを回して開けてたんだと思う。

「ふふっ……」

その光景を想像してしまい、一人で和なごんでしまった。

すると、あの子が私のいるソファーとは逆の方向、階段仕切られた方へと歩いていった。完全に向こう側に行くのではなく、その手前にある水瓶から水を汲み、その隣の流しで手を洗っているようだ。なお、床に置かれている台に立っているが、結構ギリギリの高さだ。

私は驚いた。モンスターであろうあの子が、人間と同じように手を洗っているなんて……。

「モコー！」

手を洗い終えたその子はトコトコとソファーのそばまで駆け寄ってきた。そして、私に何かを差し出してきた。

少し驚いたけど、「なんだろう?」とよく見てみると水でほどよく濡らした布、つまりは「おしぼり」だ。

「えつと、ありがとう……?」

「モコー！」

おしぼりを受け取ってみると、元気にお返事を返してきてくれた。そしてソファーにピョンと飛び乗り、少し間を空けて私の隣に浅く座ってきた。

足を交互にぷらぷら揺らしながら、まるでリズムをとるように体も左右に軽く揺れている。小さな手は、背もたれとどかない体が後ろに倒れないように腰を下ろしている場所の少し後ろで支えるようにソファーにおいてあった。

その様子が変に人間臭くて、かつ可愛らしく見えて、私の中に残っていた警戒心や恐怖心が全部無くなり、気づけば自然と笑顔になっていた。

「モコ?。」

首をかしげながら隣の私の顔を見つめてきた。お互い座っているけど身長差からむこうが見上げているかたちで。

そのしぐさから考えると「どうしたの?」と言ってるのかな?。

「えつとね、ここはキミのお家なの? って、通じないよね……」

私がこの子の言葉がわからないように、この子も私の言葉がわからないよね……。そう思ったが、突然ソファから降り、壁際にある棚の中から一冊の本を持ってきて渡してくれた。

『日記』? ……あつ、名前も書いてある……。『マイル』かあ。あれ? たしか、お姉ちゃんから頼まれたおつかいの相手もマイルって名前だったような……。もしかして、この家の持ち主がマイルさんで、私の目的地でもあつたつてことかな?。」

今はいないみたいだけど、ここで待っていればおつかいを達成できそうで一安心した。このまま待つてみることにしよう。

んん? そういえば――

「もしかして、私の言ってること わかるの……?。」

「モコッ!。」

相変わらず私の方からはわからないけど、この子はわかるようで返事と一緒にしつかりとうなずいて応えてくれた。

「それじゃあ、ちよつと聞きたいんだけど……このマイルさんって人、怖くない?。」

「モコモコ」

今度は首を横に振り否定してくれた。どういう基準で怖いかな否かを判断しているかわからないから安心はできないけど、とりあえずいいってことにしよう。

それからの会話ははずんだ。

とは言っても、私が言ったことをに対して「はい」か「いいえ」で答えてもらうか、お姉ちゃんへの愚痴を聞いてもらうかくらいだったけど、それでももう去年一年分と同じくらい私は話していた。

「それでねー、モコちゃん」

「モココー?」

「ふえ? どうかした?」

どうかしたのかと思つて目を向けてみると、自分を指差しながら首をひねっていた。あつ、もしかして……

「モコちゃん」って言ったこと?」

「モコツ」

「ほら、ずうつと「キミ」っていうのも変かなつて思つて……嫌だった?」

「モコー」

モコモコ鳴くからつて理由で安直に着けちやつた名前だけど、気にいってくれたみたいでよかったー。

嬉しさを身振り手振りで伝えようとしてくれたり、私の話を楽しそうに聞いてくれるモコちゃんが可愛くなり、ついつい膝に乗せて後ろから抱きかかえるように持つて頭をなでてしまう。

「ふふつ、モコちゃんつて すつごく柔らかくて温かいよね……」

「モコ」

「あつ! そうそう、それでね……」

「ん……あ、れ……?」

少し重たいまぶたを頑張つて開き、あたりを見渡す。

記憶にあるとおりの部屋の中、私もソファーに座っている。ただ違

うのは、日が少し傾きだしていたことと――

「あれ、モコちゃん……？」

――私の膝の上にいたはずのモコちゃんがいなくなっていて、代わりの私の体にはタオルケットがかけられていた。

どこに行ってしまったんだろう？ 必死に探してみるけど見当たらない。

すると、誰かが階段を降りてくる音が聞こえてきた。だけど、それはモコちゃんのような小さな足ではたたない音で、別の存在だとわかる。

降りてきたのは、なんだか少し見覚えのある私よりも少し小さいくらいの子だった。

「よかった、起きたんだね！ ……ごめんなさい、あなたがいきなり倒れたからとりあえずウチに運んだんだけど、ちよつと用があつて一度外に出ちやつてて……」

「あつ……街道でっ」

思い出した。街道で気絶した時に見た男の子だ。

でも、それ以上に気になることがあつたから、そつちを優先する。

「あ、あの！ モコちゃん 知らない!？」

「モコちゃん……？」

「えつと……その……」

「もしかして、金色の毛の小さな子のこと？」

「……！ うん、その子！」

「時々来る子でね……その子なら、ちよつと前にここから出たよ」

「そ、そうなんだ……」

モコちゃんももうどこかへ行ってしまったのは残念だった。本人さえ良ければお家に連れて帰りたいくらいだったのだから。

……でも、モコちゃんは 私みたいに部屋の中でゆっくりしているよりも、外を走り回ったりするほうが好きなかもしれない。一応はモンスターなんだし……。

「えつと、それでなんだけど……あつ、僕はマイルスっていうんだけど、君がエステイさんの妹の……？」

「う、うん。フィリーっていうの。あつ、『マイルス』君ってことは……」
お姉ちゃんから私ができることを聞いていたのかな？…そうだ、今日ここまで来たのは お姉ちゃんからのおつかいのためだ。ここで、ちゃんと用件を言わないと……。

あれ……？

口が問題無く動く。全然 平常心なんかじゃないけど逃げたくなるほどではない……。いや、昨日までの私だったら 今までのやりとりさえ出来ずにいたと思う。

目の前にいる人が自分よりも小さな子だから？それとも、最初にモコちゃんのことと必死になってたからそのままの流れで喋れてるのか？ ……もしかしたら、モコちゃんとの会話がいい練習になった、とか？

理由はわからないけど、ここで立ち止まったらダメな気がしてならない。勢いに任せてメモを突き出し……

「あの……ここ、このメモに書いてある野菜を！わけてくださしいつ!!」

最後の最後で嘔んでしまった……。

恥ずかしくて、怖くなって、逃げてしまいたくなって、でも足が震えてしまつて動けなくて、でも……！

「まかせて！ 一番良いのを用意するよ！」

その元気な声に 私はうつむいてしまっていた顔をあげた。

笑われるんじゃないかと思っていた。実際、マイルス君は笑っていた。でも私が想像していた「笑い」とは違った。ひとを馬鹿にしたようなものじゃなくて、ただ嬉しそうな「笑顔」。

ただそれだけだったけど、私はなんでか安心することができた。

マイルス君は 泣き出しちゃった私に少し慌ててたけどね……。

街道

結局、「護衛無しで帰るのは危ないから」とマイス君がついてきてくれることになった。

それだけじゃなくて、思ったよりも重かったおつかいの野菜まで持ってもらってしまっている。

この帰り道も色々とおあった。

マイス君の家の外に青い布を巻いたウオルフがいて驚いたことから始まり、途中で襲いかかってきた『ぶに』をマイス君が攻撃を当てずに追い払ったりもした。

だけど、私は「喋った」といえるほど話せずにはいた。でも、マイス君が 家にいたウオルフのことや道端に咲いていた花のことを教えてくれたりして、楽しい時間だった。

そして、街に入る門の少し手前でマイス君が立ち止まった。

どうしたのかと思って私も隣に立ってみてマイス君が見ている方向を見てみたけど、そこには大きな門とその上の方に見える遠くにあるお城の上部だけだった。

「僕は変わったのかな……」

「……どうしたの？」

「ううん！ こんな時期だけど、ちよつと一年を振り返ったみたんだ。さ、行こう！」

そうやってマイス君はこっちを振り返りながら街へと向かって歩き出した。

それから私の住んでる家までの道を、「このお店知ってる？」なんて話をしながら帰った。

そして、家の手前で持ってもらった野菜を受け取った。

「それじゃあ、お疲れ様！つかれただろうし、ゆっくり休んでね」

「うん、わかったよ……………あ、あとね…………」

今度こそ、最後の頑張りだ。自分を落ち着かせて、口をしつかりと動かす。

「また、お邪魔しても、いい…………？」

「いいよ！でも街道も時々危ないから、もし都合が合えば僕が迎えにくるよ！」

「……………うん、それじゃあ……………またね！」

この後、お姉ちゃんからは護衛を付けずに行ってしまったことをもの凄く怒られたりしたんだけど……………これで私の長い一日が終わった。

マイス 「まぎぞえと、料理対決」

サンライズ食堂

「手伝ってほしいと言われて来たのだが……いったいコレはどういうことだ？」

「ええつと……」

いつもより眉間にシワを寄せて不機嫌そうにしているステルクさん。そして、そんなステルクさんに睨まれてたじろいんでいるロロナ。

僕たちが今いるのは『サンライズ食堂』といつてもお客さんは一人もおらず、今店内にいるのは 先に言った2人とクーデリアとイクセルさん、そして僕だ。

僕とイクセルさんがカウンターの内側…厨房に並んで立っていて、そのちょうど外側のあたりでステルクさんとロロナが話していて、クーデリアは少し離れたカウンターの角の席に座っている。

不機嫌そうのまま、カウンター席に座るステルクさんに、僕はカウンター越しに話しかける。

「ステルクさん、ごめんなさい。巻き込んでしまって……」

「キミが謝ることではない。それに、どちらかといえばキミも巻き込まれた側だろう。ハア……」

「いやあまあ……そうとも言えなくもないですけど」

そもそもの始まりはロロナに呼び出されたこと、そしてそこにはイクセルさんもいて、いきなり「料理対決」を申し込んできたのだ。

なんでも、前に錬金術で料理を作ったロロナに対してイクセルさんが勝負を仕掛けたことがあったらしく、その時は発案者がアストリツドさんでホムちゃんが審判をしてロロナの勝利で幕を引いたらしい。

そして、その敗北からイクセルさんがもう一度腕を磨きリベンジ

マッチを企んでいたそうで、もう一度コロナに挑もうとしたらしい。だけど、コロナとしてはそう何度も受ける気にはなれなくて……で――

「料理といえば、この前マイス君の家で食べさせてもらった『おこのみやき』おいしかったなあ……お昼のおすそわけに持ってきてくれる『パイ』とか『ちゅうかまん』も……」

その言葉で、イクセルさんの標的がコロナから僕へと移ったわけだ。

コロナ本人は「思い出して つい言っちゃったただけなの!」って言うってたけど、これってほぼ間違いなく「身代わり」だよな……? 悪気があるわけじゃなさそうだから強非難し辛く、結局勝負を受けることになった。

で、僕が食材等の準備をしてくる間にコロナが「公平に審判をする人」としてステルクさんを連れてきた。

なお、クーデリアはステルクさんに会いに行く途中で会ったらしく「審判はしないけど、勝負自体はちよつと気になるから」と言ってる。コロナについてきたそうだ。

「こほん、えー……それでは『イクセくん v s マイス君』の料理対決を始めます!」

似合わない司会進行をコロナが始めた。

「へへっ、手加減はしねえよ! マイスも全力できな!!」

「あははは……」

イクセルさんはやる気十分、背後にメラメラと炎が見えてきそうなほどだ。

「それじゃあ、調理! 開始!!」

コロナの合図でイクセルさんが素早く調理を始める。僕も、持ってきた食材と調理器具を確認、不備が無く 作る予定のものがちゃんと

作れそうなので 調理を始めた。

「……料理ができるまでの間、ちよつとヒマだね」

クーデリアの座っているカウンター席の隣の席に座るロロナ。

「ロロナは司会なんだから、二人が作つてるところを見て何か言ったりすれば？」

「うーん？ でも、最近『錬金術』でしか料理しなくなったから、普通の調理のことが良くわからなくなつてきて……」

「あんたねえ……」

クーデリアは呆れたようにため息をついた。

「ん……？」

「どうかしましたか、ステルクさん？」

ロロナは、少し離れたカウンター席に座っているステルクが疑問符をあげたことに気がつき声をかける。

「いや、先程彼が取り出したモノなんだが……。アレはいったい何に使うのかと思つてな」

ステルクが目を向けるのは、マイルスが取り出した物。円い枠、その底にカゴのように何かを編んだ底がついている。

「アレは『蒸し器』ですよ」

「ああ、そういえばこないだマイルスの家のキッチン見せてもらった時にあつたわね」

以前見たロロナとクーデリアがそれについて答えるが、ステルクの疑問が増えた。

「肉を蒸し焼きにしたりするとは聞いたことがありますが、いったい何を……。それに、あまり料理については知らないのだが、蒸すという調理にはあんなに段数が必要なのか？」

そう。『蒸し器』は円い枠のものが4段あり、その下に底の浅い鍋

のようなものと最上部にフタがついていて、かなりの大きさになり存在感があるのだ。

「えっと……使ってるところは見たことなくって、よくわからないです」

「でも確か『ちゅうかまん』とかいうのはアレで作ったって言ってたわよね?」

「そうそう!・ ってことは今日も『ちゅうかまん』なのかな?」

今日作るものが何なのか予想しだすロロナとクーデリア。途中からステルクさんは置いてけぼりである。

「ほう……?」

ステルクはマイスの調理を見ていたが、予想を裏切られてばかりで驚いていた。

小麦粉をこねていたのでパンを作っているのかと思えば、その生地を小さく千切り 棒で薄く伸ばしはじめた。

半ば不本意に請け負った審判だが、これはこれで良いものなのかもしれない、とステルクは少し今の立場を楽しみだしていた。

「あと少しかな……?」

僕の調理は最終段階までできていて、あとは蒸しあがるのを待つだけになっていた。

「できたぜ!!」

おっと、イクセルさんに先を越されてしまったみたいだ。とはいえ、焦つてもいいものはできないので蒸しあがりを待つ。

「それでは、先にこちらの料理を食べたら良いのか?」

「そうですね。僕のができるまではまだ少し時間がかかりますから、冷めないうちにどうぞー!」

僕がそう言うときイクセルさんが「まってました！」といわんばかりにステルクさんの前に料理を出した。

「おまちどうさん！『イクセルプレート・改』だ」

良い色に焼かれた肉に 添え物の野菜、ソースはお好みでかけられるようにメインの皿とは別の容器に入れてあった。

その出てきた料理を見て ロロナが呟く。

「あれ？ 私のとときと同じ…？」

「肉の焼き方やソースに改良を加えたんだ！ あの時とは違うぜ」

自信満々に言うイクセルさんに「へえ〜」とよくわかってなさそうなのロナ。クーデリアは頬杖をついて眺めている。

ステルクさんが一度咳払いをし、ナイフとフォークを手に取りかまえる。

「では、いただきます」

みんな——特にイクセルさん——の視線を集めながら、ステルクさんは食べ進めていき……そうかからずに完食した。

「ふむ……肉が硬くならないように注意した上で中まで火はしっかりと通してある。そして、ソースにくどきは無く食べ飽きることもなかった」

「す、ステルクさんが それらしいこと言ってる……!?!」

「引き受けた頼みだ、しっかりこなすに決まっているだろう」

驚ロナ。イクセルさんは感想に良い感触を感じたのだろう、ガッツポーズをしている。

「それで、マイスのほうももうできたんだから遠慮しないで、冷めないうちに出しちゃいなさいよ」

そうクーデリアが言うとき、みんなの視線が僕に向いた。ステルクさんが食べている間に良い頃合いになり『蒸し器』から一人静かに取り出していたのだ。

「むっ……。すまない、待たせてしまったようだな」

「いえ、丁度いいくらいの熱さになったくらいです。それでこれが僕

の作った——」

ステルクさんの前に料理を出す。

『しゅうまい』です」

「『しゅうまい?』」

まあ、そういう反応になるとは思ったけど……

皿に盛られているのは円柱形の白い六つの塊、その一つ一つの上に緑色のマメが乗っている。

みんなが「なんだこりゃ」といった様子で『しゅうまい』を見る中、最初にステルクさんが声を出す。

「すまない、これはフォークで食べればいいのか?」

「そうですね、スプーンですくえなくもないですけど難しいですし……」

「そうか。では……いただきます」

ステルクさんはそう言つて『しゅうまい』のひとつを上手く取り、口へと運んだ。

モグモグと動かす口をみんなが見つめる中、ステルクさんは十分に噛んだ後それを飲み込んだ。そしてその瞬間に合わせたように「待ちきれない」といった感じで口ロナが聞く。

「どう、ですか……!?!」

「……ソース等がついていないから味が少し心配だったのだが、素材の味と香草の味が上手く合わさつて良い味わいになっている……。様々な食材を混ぜたものを、薄く伸ばした生地で包んでいたが、混ぜた食材だけでここまでの味が出せるものなのだな」

調理の様子をずっと見ていたつていうこともあるのだろうけど、結構しっかりとしたコメントが言えてて実際すごいと思う……。つと、いちおう自分で説明をしたほうがいいのかな?

「はい!・ 香草と細かく刻んだ『キャベツ』と『タマネギ』を川で釣つて下ごしらえをした『エビ』の身と混ぜ合わせて、それを皮で包んで蒸しました!」

「知らない味は『エビ』か……下ごしらえをしつかりすれば　こんな味がするののか」

そう言うと、もう一つ『しゅうまい』を口に入れた。

どうやら、あまりエビは食べることが無いようだ。もしかしたら海のほうでは違うのかもしれないけど、今は確かめる手段は無いのでとりあえずおいておこう。

「そ、それで！　俺のとどっちがうまいんだ!?!」

イクセルさんの問いかけを聞き、コロナが「あつ、そういえばこれって料理対決だった」って顔をし、それを見ていたクーデリアがため息をついた。まあコロナがうっかりするのはいつものことなんだろうから、慣れたものだろう。

「……こちらだろう」

ステルクさんはそう言いながら僕の方へと手をむけた。

「えつ、すつごいミス君!!　イクセくんには勝っちゃった!」

「まあ、でしょうね」

驚くコロナとは対照的に、クーデリアはさも当然のような反応をした。

そしてイクセルさんはというと……

「なんでだ!?!　俺の渾身の料理がつ!」

頭を悩ませもだえていた。

それを見ていたステルクさんが僕を見てきた。

「……確か、私に数より数よりも随分作っていたはずだな？　彼にも食べさせてやってくれ、そうすれば差もわかるだろう」

これに真つ先に反応したのは　まさかのコロナ。

「あ、はい！　私も食べてみたい!」

「はははっ、大丈夫だよ。最初からみんなの分作つてあるから」

新たな『しゅうまい』を取り出し、コロナ、クーデリア、イクセル

さんの前に置く。……イクセルさんは『しゅうまい』をもの凄く睨みつけていた。

「「いただきます」」

「ふわぁ……！ なにこれ!？」

「すっごくおいしいね！ くーちゃん!!」

2人にも気に入ってもらえたようで、コロナのほうなんかは凄い早さで食べ進められている。イクセルさんは……ステルクさんと何か話しているみたいだ。

「知らねえ料理だから新鮮に思えるとかじゃなくて、ただ単にうまいじゃねえか……何から何までランクが違うぜ」

「まあ、当然だろう。キミと彼ではスタート地点が違ったと言っても過言では無いからな」

「……？ それって、どういう?。」

「キミは知らないようだが、彼は自分で畑を作り、そこで野菜などを育てながら生活をしている」

「……………」

「この街に来てからまだ1年ほどだが、その前からずっとそういった生活をしているそうだ。……良い野菜に育てるために試行錯誤や色々和努力もしてきたのだろう。その努力の結晶である野菜を料理に使ったわけだ」

「それじゃあ……」

「料理の技術はキミの方が幾分上だろう。それは人並み以上の料理の腕を持つ彼であっても、キミの方が勝っていた……。しかし、彼は自分の領域である『食材』の部分でキミの料理の上を行った。結果、料

理の美味しさの勝負で彼は勝ったのだ」

「料理人としての腕は良いって言われても……やっぱ悔しいな」

「……まあ、騎士と同じだ。いくら『強い剣』があっても『未熟な者』が使い手であれば、まだ上が存在する。逆も然りだ」

「料理も『良い料理の腕』と『良い食材』があって究極の一品に近づくつてわけか……」

「実際はもっと複雑なのだろうがな」

「……よし！」

この日の後、イクセルさんが僕の畑の見学に来たり、野菜の取引を頼まれたりするようになった。

マイス 「街での時間」

王宮受付

「はい、依頼品はちゃんと受け取ったわ。お疲れさま！」

依頼の用紙に最後の記入をし終えたエステイさんが、労いの言葉をかけてくれた。

「ありがとうございます！ こちらこそ、いつも難しい手続きとかを任せきりにしてしまつて……」

「まあ、それが私の仕事でもあるからね、気にしないで。……ああ、そうだ」

何かを思い出したようで、エステイさんは受付のカウンターにのりだすようにズズイつと僕の方へと顔を寄せてきた。

「ねえねえ、うちの妹に何したの？」

「ええっ？ エステイさんの妹っていうと、フィリーさんにですか？」
「いやね、あの子相変わらず人見知りはあるんだけど、でも少しずつ話せるようにはなつてきててね。それで、どういう方法を使ったのかなーって」

あまり自信のある方法ではなかったんだけど、少しは効果はあったようで、僕は内心安心した。だって、「方法」とは言っても実際はほぼフィリーさん次第であつて大したものではなかったからね。

「えつとですね、簡単に言うと『人と話すのが苦手なら、人以外で練習しちやおう作戦』です」

「……っ？ つて、どういふこと？」

「他人との付き合いつて話すことで繋がるものだと思います。つまり「話す」ということに対する苦手意識があつたらダメなんです。だからまずは自分から喋れるようになっていけばいいんです。でも、そもそも人見知りで人と話せない……そこで僕の友達に手伝ってもらい

ました」

「友達……ああ、青い布を巻いたモンスターのことね」

あれ？ 話したかな？

青い布のことを知っていることに驚いていると、エステイさんはそれに気づいたようで――

「とあるひとから聞いてたのよ」

「……というと、ジオさんとお知り合いなんですか？」

「まあ、ちよつとね。あははは……」

乾いた笑いを浮かべるエステイさんを見て「これ以上は聞かないほうがいいんだろうな」と予感し、とりあえず話を前に戻すことにした。

「それで、ファイリーさんの警戒を解いた後 自発的に喋ってもらって、それに対してモンスターが鳴き声やアクションで返事をしたり相槌を打ってもらうことで疑似的な会話を行うことができて、会話の練習になっていくんです」

「ふーん……なんとなくわからなくもないけど、それって人との会話と同じくらい難しいんじゃない？」

「たしかに難しいことですけど、「襲ってこないモンスター」って一度警戒を解ければ モンスターの鳴き声は良くも悪くも好きに解釈できてしまうから、小さな子供がお人形に話しかけると近い感覚になれると思うんです」

「ほどよく「他人との会話」と「一人遊び」の中間ってどこかしら？」

なるほど、それで少し話せるようになったと……まだまだ先は長そうだけど」

まあそれは仕方ない事だよね。いきなり変われといわれても出来るものじゃないし、少しずつでいいと思う。

そもそもこの方法は、シアレンスにいた人見知りさんなどにモコモコ状態の時に会ったら予想外にもフレンドリーだったことを思い出して考えたものだ。……故に、かなり行き当たりばったりではあったけど。

いろんな事情があるので、エステイさんには「僕の友達」のモンス

ターと説明したが、実際は僕自身だったりすることも秘密だ。

「そうそう、遊びに行きたそうにしてたから今度家に行つてあげてくれない？ 街を散策するとか、マイルス君の家でお話するとか好きにしているからね。とりあえず、家にこもつて不健康なあの子を外に出してくれればいいから！」

「はい、わかりました！」

「うん、よろしくね」

そう言いながらエステイさんは僕の頭をなでてきた。

それにしても、アーランドの人はよく僕の頭をなでるけど どうしてだろう？ 身長が低くてなでやすいからかな？

職人通り

依頼も済ませたので、家へと帰るために職人通りを歩いていた。すると、アトリエから男の子が出てきた。

「まいどありっ！ また、今度もよろしくな」

「うん！ またね——あつ、マイルス君！」

「ん？」

お見送りをするために玄関先まで出てきたコロナが僕に気づき声をかけてくる。それに釣られるように男の子もこちらを向いてきた。

「こんにちは、コロナ。それと、はじめまして！ 僕はマイルスつていいますー！」

「オレは行商やつてるコオルつてんだ。……このねえちゃんから話は聞いてて知ってるんだけど、本当元氣なにいちやんだな」

行商人らしいコオル君は僕より年下のようだけど、それでもちゃんとした商人の仕事をしているとなると凄い事だと思う。アーランドでは普通のことなんだろうか……？

そういえば、シアレンスにも行商人さんが来ていたけど、アレつて

どこで仕入れてきたのかわからないような物が結構あつて驚かされてばかりだったなあ。

そんなことを考えていると、「でもなあ」とコオル君が面倒そうに言つて、それを見たロロナが口を開いた。

「どうかしたのコオルくん？」

「一回あんたから聞いた後、このにいちやんの家を見たことがあつてさ。その時留守だったけど自給自足で十分やっていける感じで、オレとしては客にならないな、て思つてさ」

確かに、商人としては客になりそうも無い人の相手はあまり有意義ではないのだろう。コオル君の言うとおり、僕は特に生活に困つていゝるわけでもなく、欲しい物も街で問題無く買えるので客には………：そくだ！

「コオル君、ちよつと相談があるんだけど……」

「コオル」でいいぜ。で、なんだよ？」

「野菜とか……作物の種が欲しいんだ、できればこの街ではお目にかかれないようなものが。取り扱つたりはしていないかな？」

「そういえばマイス君「育てたことの無いものを育ててみたい」とか言つてたもんね。……それで錬金術を始めたつて聞いた時にはすごく驚いたけど」

前に話したことを憶えてくれていたロロナが思ひだしたように言つてくれたおかげで、コオルもすぐに理解してくれたようだ。

「なるほどな、にいちやんの要望はわかつた。正直おれはそういうものは専門外だけど、行商仲間にちよつと聞いてまわつたりしてみる。次の機会には何とかなると思うけど、ちよつと値が張ると思うぜ」

「うん、わかつた。お金はしつかり用意しておくよ」

「んじや、またな！」

そう言いながら手を振つてよそへと歩き出していった。

「コオルくん、すっかりしたいいい子でしょ？」

後ろ姿を眺めていたら、ロロナが嬉しそうに話しかけてきた。

「そうだね。どんな商売相手でも物怖じせずによく交渉できそうな子だよ」

「ホントだよ……「生意気で可愛げの無いガキだ」って師匠は嫌って、コオルくんも何も買わないからって師匠とは……」
「なるほど」

その光景を想像するのはそう難しくは無かった。

ロロナはおそらく、その2人が言い合った際に実際にその場に行ったことがあるのだろう。その時が大変だったのだろうか、思い出し泣きというなんとも器用なことをやっていた。

マイス「モコツ！」

マイスの家

「それでね、また お姉ちゃんがね……」

「モコッ！」

ただいま僕の家でフリーーさんとお喋り中……と言つても僕はモコモコ状態なんだけどね。

人の状態で街までフリーーさんを迎えに行つた後、僕の家まで護衛。それで半分予想していたことだけど——

「きよ、今日はモコちゃんいないんだね……」

と、なんとも残念そうに言つたので

「あの子は時々遊びに来る子だから」

そう言つただけど凄く寂しそうな顔をしてしまったので、本当はもう少し様子を見てからにするつもりだったけど、予定を繰り上げて入れ替わることにした。

まずは『ウオルフ』のブラッシングを軽く教え、それをしてもらつているうちに適当な理由を言つて外出することをフリーーさんに伝えた。そして外に出て林の中に隠れて『変身ベルト』でモコモコ状態になり、遊びに来たように家に入った。

「あつ……！ モコちゃん、こ、こ、こんにちはー！」

「モコッ！」

そうして、前回のようなお喋りを再びすることとなる。

なお『ウオルフ』はというと「やれやれ、おれの出番は終わったな」といった様子で歩き、階段脇の寝床に寝にいった。

そして現在にいたるわけだ。

僕はソファーに座ったファイリーさんの隣に座っていたはずなのに、いつの間にかファイリーさんに抱き上げられ膝ひざに座らさせられていた。

うーん、これじゃあ喋る練習にはなっても、相手の目を見て話す練習はできないな……

「それとね、前に読んだ本を久しぶりに読み返してみたんだけど……」

まあ、ファイリーさんが楽しそうだし、わざわざ中断させるのもどうかと思うから、とりあえずこのまま続けよっか。

コンコンコンツ

「ひゃい!?!」

ふいに響いたノックの音にファイリーさんが飛び上がる。そして、僕をギュッと抱きしめ震えだしてしまった。

「えっ、マイス君ならノックしないよね……もももしかしてっ?!? ドロボー!?!?」

小声でそんなことを言っているファイリーさん。いや、泥棒はノックをしないと思うけどなあ……。

でも、いきなりのこととはいえ、ここまで怯えてしまうのは予想外だ。まだまだ道は長いということかな?

一応言っておくと、ファイリーさんは怯えてしまっているが、突然の来訪者に対して特別警戒する必要は無い。何故なら……僕の耳にはドアの外の会話が聞こえてきていたからだ。

「留守かな……?」

「たぶん違うとは思うわよ? さつき中から声が聞こえたし……でも、マイスがいるならすぐに返事とか出てくるとかしそうよね」

「もっ、もしかして泥棒……!?!」

「だったらなおさら中に入って、追い払うか捕まえるかしねえとマイスのヤツがかわいそうだぜ?」

来訪者は3人——いや、1人と2匹と言ったほうが正しいのかな？
とにかく、リオネラさんとホロホロとアラニーヤだ。

さて、まずは僕を抱きかかえたまま涙を溜めてがたがた震えるフィ
リーさん。

ちよつと苦しいけど体を半回転させて向き合う体制にし、フィリー
さんの頭に手を伸ばす。が、ちよつと足りずにオデコまでしか届かな
かったので、仕方なくオデコに手を乗せて優しくなでてあげること
に。

「モコちゃん……」

「モッコモッコッ！」

「大丈夫だよ、安心して」と伝えようと笑顔を向けると、相変わらず
震えてはいるけどフィリーさんの顔からは幾分か不安感が消えてき
たような気がする。

「ありがとうね……モコちゃん」

フィリーさんを少し落ち着かせることができた。ちようどその時、
玄関のドアがゆっくりと開いてきた。そして、ヒョコリとリオネラさ
んが顔をのぞかせてきた。

「あつ……」

家の中に 知らない子がいたことに驚き戸惑ったような声を出す
リオネラさん……が、ここで予想外のことがおきた。

「ど、ドロボーさんは、帰ってくださいいいっ!!」

僕のすぐそばから大声が上がった。

その発信源はもちろん——だけど、信じがたいことに——フィリー
さん。聞いたことの無いくらい大きな声で、そばにいた僕だけでな
く、寝ていたウォルフも飛び上がるほどだった。

「わ、わたしだっ！ お留守番、ちゃんと……！ お、お家を守らな
くちや……っ!!」

震え泣きながら、自分に言い聞かせるように言うフィリーさん。
すごく頑張ってくれているのはわかる。けど、これ以上させるのは
心苦しい。

「あっ!? モコちゃん、行っちゃダメ!!」

悲痛な訴えに対して申し訳ないけど、フィリーさんの腕からすり抜
けて半開きのドアまで行き、全開にしてリオネラさんたちを招き入れ
る。リオネラさんは、いきなり開いたドアに驚いて……続いて僕に気
がついて、もう一度驚いていた。

そして、泣きじゃくりだしてしまったフィリーさんのもとまで戻
り、ソファアーに飛び乗ると――

「もごぢやー……ん!!」

「モツ……!?!」

ものすごい速さ&力で抱き締められた。く……苦しいけど、とにかく
く落ち着かせないと……!

チョンチョンと頬ほおをつつくと、涙があふれながらも僕を見てくれ
た。それを確認して、手でジェスチャーをしたりしながらフィリーさ
んに何とか伝えようとした。

「モコツコモコー、モコーコツモコモコー」

「……………」

うん、まあ、伝わるわけないよね……。

玄関口のほうでは「なんだこの状況…?」、「さあ……」というホロ
ホロとアラニーヤの呟きが聞こえてきて、僕に的確に精神的ダメージ
を与えてきた。

「……も……もしかして、モコちゃんの知ってる人?」

……以外に伝わったようだ。

僕とリオネラさんたちを交互に見るフィリーさんに「モコツ」と返
事をしながら笑顔で頷くと、フィリーさんは安堵の表情を浮かべた。

「ごめんなさい……」

僕を抱えた状態で、消えかかりそうな小さな声でリオネラさんに謝

るフィリーさん。それに対して、机を挟んでソファーとは反対側に
ある椅子に座っているリオネラさんはワタワタしながらも返事を返す。
「大丈夫、ちょっとビックリしたがだから……！」

リオネラさんのほうもなんだか緊張しているようで、笑顔をつくろ
うとしているみたいだけど変に堅い笑顔になってしまっている。そ
んな2人にホロホロとアラニーヤは、いつものようにふわふわ浮か
びながら会話に加わっていった。

「それにしても、アナタを見てたら昔のリオネラを思い出しちゃった
わ」

「ああ確かに。リオネラもちよつと前までは、知らない奴が近寄つ
たりしたら泣いたり、ひっかいたり、逃げ出したり、いそがしい人見
知りだったしな」

へえ、リオネラさんも人見知りだったということは初耳だ。今なん
て、人前で人形劇をしていたりするのにな。

……そういえば後から聞いた話だけど、僕が初めて会った時サイフ
をなくしていたのは、人形劇のあとにお客さんから逃げ出しちゃった
からとか言ってたっけ？　じゃあまだ完全に人見知りがなおったわ
けじゃないのかな？

先程のやりとりから、気が合いそうに感じたりでもしたのだろうか。
か。フィリーさんとリオネラさんは互いに　おずおずとだけど話し
はじめた。

もしかしたら、モンスターとの会話で練習するっていう方法じゃな
く、リオネラさんと会わせてみることで　フィリーさんの人見知りを
なおせそうかな。

「そういえば、マイス君　遅いな……？」

「そんなに時間がたったの？　何かあったのかな……」

フィリーさんの言葉に、不安そうに尋ねるリオネラさん。

気づかない内に結構な時間がたってしまっていたみたいだ。それ
じゃあそろそろ、家から出て変身して人の姿に戻ってこよう。

ピョンと跳んでフィリーさんの腕から飛び出し、玄関へと向かう。
「モコちゃん、行っちゃうの……?」

その声に振り返ると、泣きそうな顔でこっちを見つめるフィリーさん。
ん。

「また、会えるよね……!」

「モコツ!!」

返事をしながら片手をグツと挙げる。僕としては「もちろん!」と返したつもりだけど、ちゃんと伝わったのだろうか。

「またねー」

そう言いながら玄関からお見送りをしてくれているフィリーさん。そして、そのそばで小さく手を振ってくれているリオネラさんとホロホロとアラーニヤ。僕は林の中を駆け抜け、十分に距離をとった後周囲に誰もいないことを確認して『変身ベルト』で人の姿になる。

「さてつと、それじゃあ街道のほうに出て家に戻ろう」

おそらくその時間は、フィリーさんはリオネラさんと話す時間になるはずだ。人見知りをなおすきっかけになるだろう。

そんなことを考えながら僕はゆっくりと家への道へと歩き出した。

ホム「……………」

職人通り

「なー うなー」

「…………どうしたらいいのでしょうか」

わたしの腕の中で鳴くこなーを見ながら、ひとり呟いていました。

ホムはマスターに頼まれたおつかいの途中、ホムの足元にスリ寄ってくる1匹の子ネコに出会いました。その子ネコに『こなー』という名前をつけてアトリエに連れて帰りました。

アトリエで育てることはできないか聞きましたがグランドマスターに反対され元の場所に捨ててくるよう命令を受けました。

ですが……………」

こなーが元いた場所の周りを見てまわりましたが、やはり親ネコらしき姿は見当たりません。こんな小さな子ネコを1匹で放置するのは危ないと判断します。

「…………なぜでしょうか？ ホムは命令よりも、こなーを捨てない理由を探すことを優先しています」

ホムンクルスのホムにとって、創造主であるグランドマスターの命令は絶対的なものです…………でも、ホムはこなーを捨てることができずにいます。

「なー?」

「どうしたらよいのでしょうか…………」

「こんにちは、ホムちゃん」

ホムに呼びかける声に気づき、おとしてしまっていた視線を上げると、黄色っぽい金髪の少年がいました

ホムはこの少年とは面識があります。たしか、名前は――

「マイス…………でしたか?」

「憶えててくれてたんだね！ よかったー…」

名前を言うと、何故かわかりませんがマイスは喜んでるようでした。

そういえば、グランドマスターが言っていましたでしたがマイスはマスターとはまた違った天然だそうです。説明はホムには理解できませんでした。とにかく変わり者だそうです。

「ホムに何か御用ですか？」

「えつと…用っていうほどじゃないんだけどね。なんだかホムちゃんに悲しそうな顔していたから、どうしたのかなーって思って」

「ホムがですか…？」

ホムには覚えがありません。困っていたりはしていたかもしれないが、悲しんでいたりはしていません…おそろく。

「なー」

そんなことを考えていると、ホムが抱き抱えていたこなーが鳴き声をあげました。マイスはそれでやつとこなーの存在に気がついたようです。

「うわー！ 可愛いネコちゃんだね」

「ネコではなく、この子はこなーです」

「そうなんだー。こんにちは、こなー」

ホムの指摘を素直に受け入れ、訂正をしたマイスはホムが抱いているこなーに手を伸ばしてきました。こなーはその手に驚くことも無く、近づいてきたマイスの指をペロペロと舐めはじめました

「人懐っこくて元気な子だね」

「いえ、触ろうとしたマスターに威嚇をしていました」

「えっそうなの…？」

「この様子を見ると、マスターがネコに嫌われやすいのではないかと」
ホムにもマイスにも問題無く接していることから、そう推測することができました。そうでないなら、ホムとマイスがネコに好かれやすいということでしょうか？

「それで、もしかしてこなーのことで何かあったの？」

こなーをなでていたマイルスがこちらを向いて問いかけてきました。特に隠すこともない……もとい、話しても問題無いと判断できたので、経緯を話してしまいました……

「なるほど……アストリッドさんの命令をこなしたい、だけどこなーを捨ててしまいたくない、ってことだよね」

「おおよそ、そのとおりです」

説明を終えると、マイルスは腕を組んで首をひねり何か考え始めました。そして、そうたたないうちに「そうだ！」と一言いいながら手をうちました。

「こなーを拾ったのってどこ？」

「この『職人通り』の途中です」

「それじゃあ、そこまで案内してくれないかな」

「それは、かまいませんが……？」

どういふことかわかりませんが、ホムは頼まれたとおり案内をはじめます。当然こなーを抱っこして、です。

「ここです。ここでホムの足にすり寄ってきました」

「よし、それじゃあここでこなーを離してみようか！」

「……なにを言っているのですか」

「言いたいことはわかるけど、一回地面に降ろしてくれるだけでいいから。お願い！」

ますますわからなくなってきましたが、すぐくお願いされましたし、とりあえず言うことを聞いてみることにしましょう。

「うなー？」

こなーを地面に降ろすと、すぐにマイルスがヒョイとこなーを抱き上げてホムの方へ近寄ってきた。

「ホムちゃん、こなーをなでてみて」

「言われなくてもなでますが……結局どういうことですか？」

こなーをなでながらホムが疑問を口にする、マイスはニコニコしながら答えてきました。

「これなら アストリッドさんの命令をこなせて、ホムちゃんはこなーと遊べるかなーって思ってたね」

「……………？」

「ホムちゃんのお家であるアトリエではこなーを育てたらいけないって言われたけど、僕の家ではそんなことはない。そして僕はほぼ毎日街に来るから、こなーを連れて遊びに来れる」

「確かにマイスは街の外に住んでいます、そう遠くなく、行くのも難しくないのでしよう。……ああ、なるほど」

ホムは自分でそこまで言って気がつきました。アトリエで育てるよりは会い辛いでしょうが、それでも言うほどではありません。

それに、言われたとおり「元の場所」でホムはこなーを地面に降ろし「捨てた」。あくまで今こなーを拾っているのはマイスなので、グラウンドマスターの命令をちゃんとかなしたと言えなくもないのでしよう。

「ありがとうございます。ですが、マイスの家にはモンスターも暮らしていると聞いてますが大丈夫ですか？」

「うん！ あの子はとっても優しい子だから、こなーとも仲良くなれるよー」

とても良い笑顔でマイスは言いますが、正直なところ確証の持てる証拠がありませんので、あまり信用できません。

「本当に大丈夫か確認するために今からマイスの家に行きます。今度はマイスが案内してください」

「あははは……わかったよ」

結論から言うと、マイスの家にいたウォルフとこなーは問題無く、丸まって寝ころがってる『ウォルフ』の上でこなーが寝たりするくらいになりました。

ホムも、こなーが街に来たときやホムが時間が空いた時に会いに行き、遊ぶようになりました。

メリオダス 「悩みの種と」

全く……頭を悩まされてかなわない。大臣であるこのわしがなぜ……

原因はふたつほどある。

ひとつ目はあの忌々しいアトリエだ。

早急に取り潰すように言っておいたはずが、担当の騎士は「国からの依頼を問題無くこなせている」と言っておいて取り潰さずにいるのだ。

秘密裏に 嫌がらせや妨害を行ったり、あのバカも使ったが成果は出ない。ついこの間は、王国依頼の品に必要な素材 『マジックグラス』は雑貨屋から買占め、『森キャベツ』は『キャベツ税』を導入して入手を困難にした。が、それでもアトリエの奴らは王国依頼を最高評価で達成したと報告がきた。

ふたつ目は……正直、もうどれくらいこの問題に悩まされているかはわからない。このアーランドの国王のことだ。自らの王としての責務を果たさずに仕事を投げ出し 王宮から抜け出してウロウロする。

もはや今に始まったことではないのだが、王宮の騎士達を含め多くの人間に迷惑をかけていることは間違いない。無論、わしもその内のひとりだ。

「……執務室に戻るとするか」

運営に問題はないか視察もかねて、担当に問いに工場へ行ってきた帰りなのだが、足が重い。どうも疲れが溜まってしまっているように感じる。これも、仕事を増やす国王のせいだ、そうに違いない。

王宮へと戻ってくると、出入り口から世辞にも王宮は似合わない少年が、重そうに両手でカゴを持って出てくるのが見えた

はて、見覚えの無い顔だな……あのくらいの歳の騎士などいないはずだから、騎士の誰かの子供か兄弟だろうか……?

まあ大したことではないと思い、すれ違える位置を歩き気にせず王

宮に入ろうとしたが、ふいに少年が立ち止まったのだ。何事かと目を向けると……少年と目があつた。そして、少年はにっこりと笑い――
「こんにちは！」

そう言いながらしつかりとお辞儀をしてきて、その後上げた顔には先程と同じく無邪気な笑顔があつた。

別段、何か言うことも無いただの挨拶だ。

だが何故か その無邪気な笑顔がアイツと重なってしまった。あのバカも昔は楽しそうに、嬉しそうに、わしに笑顔を向けてくれた。

……おかしな話だ。この少年くらいの歳の頃にはもう家を出ていたというのに。

わしも少し歳をとりすぎたか、いや この疲れのせいか……？

おっと いかんいかん。返事もせずに黙っていたから 少年も不思議そうに小首をかしげてしまっているではないか。

「オホンツ！ うむ、良い挨拶だ。最近の子にしては礼儀がよくて少しばかり驚かされたわ」

「……？ えっと、ありがとうございます？」

また不思議そうな顔をしている……。つまり、あのくらいは普通のことだとおもっているのだろうか、この少年は。

……にしても、わしの顔をじつと見過ぎではないか？

「わしの顔に何かついてるのか？」

「あつ、いえ、そうじゃなくて……とても疲れているような顔をしていないから……」

「ムツ……子供に心配されるとは、わしも焼きが回ったか」

わしを見て心配そうな顔をする少年は、何かを思いつたのか自分の持つカゴを漁りだして ひとつのビンを取り出してきた。そして、カゴを地面に置いたままビンをわしに渡してきた。

「これ、疲れてる時にいいドリンクです。よかつたら使ってください

！」

そう言つて少年はお辞儀をして街へと歩き出そうとした。

「待て」

わしはそう言つて少年を引き留める。

このご時世、ビンも大量に生産できるようにはなってきたが、一般的には洗って再利用することが基本だ。今のうちに返しておくほうがよからう。

立ち止まつて振り返る少年を確認し、わしはビンの蓋を開け中の液体を飲みほした。思っていたような薬品臭さは無く、飲みやすいものだったことに驚きつつも 再び蓋を閉め、少年に差し出す。

「……効果はどれほどかはわからんが、悪くないな。礼を言つておこう」

上手い言葉が考えつかず、投げっ放しになってしまったことを少し後悔しながらも礼は言えた。……少し偉そうにしすぎだろうか……？

わしの不安をよそにビンを受け取った少年は嬉しそうに笑い、もう一度お辞儀をしてきた。

「ありがとうございます！ お仕事、頑張ってください！」

街のほうへと遠ざかる小さな背中が人混みに紛れてしまうのを見届けてから、わしは王宮の中へと足を向けた。ドリンクのおかげか、それとも少年のおかげか、不思議と足は軽くなっていた。

……執務室に戻る前に、少し調べてみるか。

王宮受付

「受付嬢」

「あつ大臣、どうかしました？」

出入り口すぐの広間に設けられた王宮受付。ここにいる受付嬢ならば出入りする人を必然的に見るわけで、他の者よりもそれらについて知っているはずだろう。

「さつき礼儀の良い子供を見かけたのだが、あれはどこの子だ？」

「礼儀の良い……もしかして、このくらいの身長の子ですか？」

「そうだ、そいつだ」

「前に『身包みはがされた異国の少年を保護した』っていう報告書を一応提出したことがあるんですが……」

そういえばそんな書類が一度きたことがあつたような気も……特に金を必要としてるわけじゃなかったから、流し読みして判を押したのだったか。言われてみれば、服装はあまり見かけない様式のものだったな。

「その時の少年がそうだと？」

「ミス君っていつて、今は街の外の空き家を整備して畑を作つて生活してて、ほぼ自給自足で暮らしてるといった感じですね」

それにしても街の外で一人暮らし、そのうえ 自給自足ときたか……なんとたくましい少年なのだろうか。

すると受付嬢が何やら嬉しそうに笑い、話しだした。

「この依頼も色々なしてくれていまして、ここ最近で達成した依頼の数は錬金術のアトリエに次いで二番目なんですよ」

「アトリエだと……？」

「とは言つても、彼を助けてアーランドまで連れてきたのはアトリエ関係者で、その縁からか交流があるそうで、だから仕事上はライバル関係に近いですけど結構仲が良いそうですよ」

なるほど、さつきは依頼の報告か何かのために王宮に来ていたというわけか。

しかし 聞いた話からすると、今しがた思いついたあの少年を1位に押し上げてアトリエの人気を下げさせる計画は使えそうにはないか……。

「彼、最近それなりに有名になってきて「食材や花の依頼は彼に任せれば まず問題無い」って言われるくらいなんですよ。それに関しては、大臣もご存知かと」

「なに？ ……覚えがないが」

「ついこのあいだ王宮内で新しい茶葉が使われるようになりましたよね？」

「ああ、あの茶は仕事の休憩に飲むと、うまくて程良リラックスできる」

「あれ、彼が作ったものですよ」

「何!?!」

「言葉の通り彼が葉を育て、お茶を入れられる状態まで加工して、定期的に王宮に卸してくれてるんです」

「なんということだ！ あの歳で そこまでの知識と技術があるとは!! それに、王宮にはそれなりの人数がいるわけで茶葉の量もかなりのものになるはず、それをひとりでするとなれば 根気も半端ではない。」

もしかすると、あのドリンクも少年が作ったものなのだろうか？

ドリンクに関して何か知らないか聞こうと ふと顔を受付嬢に向けると、受付嬢の顔が暗くなっていることに気がついた

「でも彼、かなり苦労してるんですよ。この前なんて「美味しいものをみんなに食べてもらいたい」って言って、そこらへんに転がっているような『森キャベツ』を畑で育てて改良して凄く美味しい『キャベツ』に育て上げたのに『キャベツ税』の影響で中々買ってもらえなくて……」

「なっ……!?!」

「なんとういことだ!?! まさか 忌々しいアトリエの連中を陥れるための『キャベツ税』が、アトリエには影響が無く、あの健気な少年を苦しめてしまっただけだということのか……!?!」

くそっ！ なんだこの罪悪感は……!?!

「すまん、わしは執務室に戻る……」

そう受付嬢に告げ、わしは執務室の方へと歩き出す。

「あれ？　なんというか、ものすごく変な反応だったんだけど……」

受付嬢ことエステイ・エアハルトは驚きを隠せなかった。何故なら、彼女の知るメリオダス大臣からは到底予想のできない反応だったからだ。

「大臣に何かあったのかしら……？」

気にはなったが、考えてもしかたないと思い、いつものように受付で暇つぶしを探す作業に戻った。

タントリス 「あんまり気は進まないな……」

職人通り

「さて、つと……どうしたものかな」

大臣である親父に言われてアトリエの店主に近づいてから それ
なりの時間が経った。

とは言っても、コロナに出会ったのは親父に言われる前なので、な
にも 本気でアトリエを潰すために近づいたわけではない。

まあ、色々と悩みながらも気の向くままに行動していたのだけど、
つい先日、親父に呼び出された。

アトリエを潰すための工作行為の催促かと思ってたんだけど、その
予想は良くか悪くか裏切られることになった。

「アトリエと交友関係にある奴らの中に『マイルス』という少年がいるは
ずだ。そいつについて調べてこい」

その言葉を聞いたとき、正直 僕は驚いた。 正確には「表情を見
て」って言うべきかもしれないけどね。

アトリエのことを話す時のようにイライラして眉間にシワを寄せ
ているわけでもなければ、何か悪だくみを思いついた嫌な笑みでもな
い。 苦虫を噛み潰した……いや、ただ単純にバツが悪そうにしてい
た。 似合わないことこの上なかったね。

まあ『マイルス』って人については少しは知っていた。

僕だって いちおうはコロナの手伝いをしたりしているのだから、
話には聞いたりはしている。 未だに会ったことはないんだけどね。

「小さな少年」、「街の外に住んでいる」、「畑で色々育ててる」、「アト
リエにおすそわけを度々持つてくる」、「けっこう戦える」……僕が現
段階で聞いたことのある情報はこのくらい。

さて、もつと詳しく知ろうとするとなれば、本人に会ってみるっていう手もあるにはあるけど、ここは無難にコロナあたりから話を聞いてみるほうが気乗りがする。

というわけで、今現在 僕はアトリエの前にいる。

……できれば、先代店主である彼女がいないとやりやすいんだけどね。

コロナのアトリエ

「あつ、タントさん いらっしやい！」

そう言っ出て迎えてくれたのは店主のコロナ。そのそばには フリルが沢山ついた服を着ている少女……確かホームクルスのホームちゃん、だったかな？ それと――

「そういえば、マイルスは初めましてだったよね？ 前に話したことあると思うけど、この人はタントリスさんっていつてね、色々助けてくれるの！ それと楽器の演奏が凄く上手なんだよ」

「はじめまして！ 僕はマイルスっていいです。よろしくお願いします！」

……なんで、ご本人がいるんだろうね？ たまたまタイミングが重なっちゃったのかな。

「キミがマイルス君か。噂はときどき耳にしてたけど、思った以上の人みたいだね」

特に口に出したりはしないけど、本当に思った以上だったことは確かだ。

正直なところ 確かに分類するなら『少年』にあてはまるだろうけど、子供っぽさが抜けてない……というか ほぼ子供と言って差し支

えない。畑を耕すよりも街の広場で遊んでいたほうがしつくりきそうだ。

「えへへっ。ですよー、マイルス君ってホントにすごいんですよー！」

「なぜマスターが偉そうにしているのですか？」

「なー……」

僕の言葉に反応したのは どうしてかコロナだった。

どういう風に思ったのかはわからないけど、ニコニコ笑って誇らしげに胸を張っていた。聞いてのとおりホムンクルスのホムちゃんとその足元にいる子ネコにまでツッコまれているけど……。

「タントさん、今からみんなでお昼を食べるところなんですけど……

一緒にどうですか？」

「……ん、それじゃあ お呼ばれされちゃおうかな。本当はコロナと2人つきりで楽しみたいところだけど、ね？」

「あはは。もう、タントさんったら いつもそんな冗談ばかり言うてー」

半分、いや それ以上に本気なんだけどなあ……。

「マイルス、こなーのゴハンも準備してください」

「あつ、でもせっかくだからホムちゃんも一緒にやって覚えてみない？」

「……アリですね。それではやりましょう」

むこうはむこうでコッチの会話は気にせず、か……。

「ごちそうさまー！ ああ……おいしかったー」

『サンドウィッチ』を食べ終え 幸せそうな顔をしているコロナ。ホムちゃんは膝の上に満腹状態の子ネコを乗せて気の趣くままに

なでたり じやらしたりしていた。そしてマイルス君は『サンドウィッチ』が盛られていたお皿をまとめ上げはじめていた。

「確かに、とてもおいしかったね。でも、今度はぜひコロナの手料理を食べてみたいな……」

『サンドウィッチ』はマイルス君が用意してきたものらしく、「マイルスを調べる」一環にはなったけど、個人的にはコロナの料理を食べてみたかったというのは本音だ。

「うえ……やめてくださいよー、マイルス君の料理と比べられると……」
うーん、思ったような返答は中々貰えないな……。そこは「また今度！」って誘ってほしいところなんだけど。

「そんなことないと思うよ。だってコロナの作った『パイ』とかすつごく美味しいから、僕 大好きだよ?」

マイルス君がコロナにそう言った。そしたらホームちゃんのほうもそれに続くように言った

「はい。マスターは『パイ』に関してだけは特筆すべきところがあると思います」

「ほむちゃん、それ、フオローになつてないよお……うわーん！ どーせ私は『パイ』だけなんだー!!」

……本当に仲が良いな、この子たちは。

「それじゃあ、ちょっとお皿片付けてくるから 奥の流し借りるよ」

そう言いながらマイルス君が重ねたお皿を持ち上げた。

「それなら私が――」

「ホームもできます」

「ううん。せつかくタントリスさんが遊びに来てくれてるんだから、コロナはゆつくりお話ししていいよ。ホームちゃんも、今立ったら気持ちよさそうに寝ているこなーが起きちゃってかわいそうだからさ」

「それも……そうかな?」

「……わかりました」

2人の返事を確認したマイス君は、奥の部屋へと姿を消した。
うん、このタイミングがちょうどいいかもしれないね。

マイス君がやってる事や人柄なんかは昼食中に聞けたから、僕が個人的に気になったことを聞いてみるとしよう。

「ねえロロナ、ちよつと聞きたいことがあるんだけどさ……」

「はい？ なんですか？」

「ロロナとマイス君はどういう関係なんだい？」

「友達ですよ？」

「……………」

「……………」

即答か。

いや、僕としては嬉しいんだけど、ここまで即答されると 逆に気になっちゃうな……。

「あつ、でも」

何か思いたったかのようにロロナがハツとし顔をあげたかと思えば、わずかにだけ頬を赤くして。 ってことは、もしかして……。

「マイス君には秘密なんですけど……」

「なんだけど？」

「ほんとうの弟みたいに思ってるんです!!」

「えっ!？」

なら、なんで頬を赤くしたんだい!？」

「ということはホムからすると「兄」ということですか」

「どういことだい!？」

いや、本当に意味がわからないんだけど!？」

「実はね、師匠に「弟と妹、いるならどっちがいい」って聞かれた時、

ミス君っていう「弟」がいたから「妹」って答えたんだ。あつ、師匠には内緒にしてね」

「わかりました。グランドマスターには秘密にしておきます」

「もう完全に僕は置いてけぼりなんだけど……」

「なうー？」

僕が呟くと、いつの間にか目を覚ましていた子ネコがこちらを向いて首をかしげていた。なんだろうね、この虚しさは……。

ほどなくお茶を持ってミス君が戻ってきたんだけど、その時は会話に入れておらず、ロロナとホムちゃんがふたりで話していた。

「食後のお茶を入れてきました！ 何のお話ししてたんですか？」

「えつとね、ミス君はしっかりしてるけどどこか抜けてて可愛いよねーって」

「はい、おにいちゃんはマスターほどではないですけど」「ドジっこ」だという話をしていました」

「えっ……」

「あーっ！ ミス君、ほむちゃんに「おにいちゃん」って呼ばれてズルーい！ 私なんて「おねえちゃん」って呼んでもらうの師匠に禁止されてるのに〜」

ササツと2人にお茶を渡し、僕にお茶を渡してくれた後困った顔をしながら……、

「あのタントリスさん、何があつたんですか……？」

「僕にもわからないよ、あれは……」

ハア、親父にも どう報告すべきかな……？

「マイス 「専門の人にはかなわないけど」

王宮受付

「お疲れ様！ いつもありがとうございます、マイス君」

「エステイさんは達成した依頼の用紙と納品物をしまうと、新しく入った依頼書の束を僕に渡してくれた。」

「それじゃあ、受けたい依頼がないか見てちょうだい。 で、見ながらでいいから ちよーつと私の相談を聞いてくれないかしら？」

「どうかしたんですか？」

依頼書の束をめくろうとした手を止めて、エステイさんを見る。

相談といえば、以前のようにフリーさんに関することだろうか？

「私自身のことじゃないんだけどね……今日はもう雑貨屋さんに寄った？」

「いえ、まだですけど」

「なら知らないか……。 あのね、ティファアナが体調崩しちゃって 今日は雑貨屋さんはお休みなのよ」

「そうなんですか!？」

ティファアナさんが身体が弱くて時折体調を崩すことは知っていたが、だからといって心配にならないわけではない。

「ティファアナって今ひとり暮らしなのよね。 だから、いつも体調を崩した時は私が様子を見に行ったりするんだけど、今日は運悪く仕事を抜けられそうになくなってね……。 それで、マイス君にちよつとティファアナのこと頼みたいのよ」

「僕がですか？」

「コロナちゃんあたりに頼もうかとも思ったけど、ここのところ依頼の期限に追われてるみたいで……お見舞いと軽い看病くらいでいいからお願いできないかしら？」

先日、ホムちゃんから「少し働き詰めになりそうですから2、3日

「こなーは連れて来なくていいです」とお達しを受けていたけど、依頼の期限のせいだったのか……。

おかげで、というわけではないけど今日は特に予定が無いので、エステイさんからのお願いを聞けそうだ。

「はい！ 任せてください！」

「ありがとう！ はい、コレがティファナのこの合鍵。落としたりしないようにね」

エステイさんが合鍵を持っていることに驚きかけたが、時折体調を崩すティファナさんのところに行くつて言っていたから ティファナさんから受け取っていてもそれほどおかしくないことに気がつく。

「それじゃあ、ひととおり終えたら合鍵を返しにきますね」

「うん、よろしくね。その時も鍵の閉め忘れに気をつけてちょうだいね」

「はい！」

返事をし、王宮受付を後にし外へと出る。自分のカゴの中に何が入っているかを確認した後、雑貨屋さんへと歩を進める。

その様子を見送るエステイはひとり呟く。

「まあ大丈夫よね、ミス君ならティファナに変なことしたりしないだろうし」

職人通り

「今持つてる花の中で一番良いのをお見舞いの品として花瓶にいれて、あとそれと、食欲がありそうだったら軽いゴハンを作ってあげて……他に何かあるかな？」

そんなことを考えながら、雑貨屋さんまでの道のりを歩いていく。すると、少し先に 人ばかり——とは言っても3人ほどの塊なの

だが——があり、雑貨屋さんの入り口は その先だった。
……まあ 通れないほどでもないから 特に問題はないんだけど。

「すみません、ちよつと通りますね」

エステイさんから預かった合鍵を取り出しながら、3人のそばを通り過ぎる。

「ああ、これは失敬」

三人はそう言いながら 少し避けてくれた。

僕は 合鍵で雑貨屋の扉の鍵を開け、店内に入り、そして内側から鍵をかけなおした。

「さて、ティファアナさんはいつもレジカウンター奥の扉から出てきたから……あの先にティファアナさんがいるのかな？」

いちおうはエステイさんの許可があるとはいえ、あまり勝手にウロウロするのは さすがに失礼だと思うので、なるべく早く見つけ出したいところ

まずはティファアナさんのいる部屋。それとキッチンもわかるとい
いんだけど……

奥の扉に入った後は、思っていたよりも簡単にティファアナさんがいる部屋を見つけ出せた。けど、ちょうどティファアナさんはベッドで寝ていた。

なので、今は部屋のすぐそばにあったキッチンを勝手ながら借りて料理を作っている。

作っているのは『おかゆ』、体調が悪い時の定番……だと思っ
てる。

もし、ティファアナさんが食べられそうになかったら 持って帰って自分で食べるなり何なりすれば良いだろう。

「よし、できた！」

あれから少し時間が経ったことだし、ティファアナさんの様子を見に行くでしょう。

できた『おかゆ』はティファアナさんが起きていて 食欲がありそうだったときに持っていくとして、今は花だけでも持っていこうか……。

ガチャ

「ん……エステイ？」

寝室のドアを開けると、ティファアナさんがちょうど起きた——というよりも、起こしちやったまみたいかな？

「お邪魔してます、マイルスです」

「あら？ え、マイルスくん……？」

「えっと、エステイさんが仕事が忙しいみたいで、けど「心配だから」と僕に頼んで……」

大まかな話の流れを説明すると、ティファアナさんはわかってくれたようで「そうだったのー」と言ってくれた。

「ごめんなさいね、気を使わせちゃって……」

「誰だって体調が悪くなる時はあります……それに、僕もティファアナさんが元気が無くなったら心配になります。僕がこうしたかっただけですよ」

「……ありがとうね、マイルスくん」

「いえいえ……それで、お腹とかすいてませんか？」

「あら、もしかして何か用意してくれるのかしら？」

「はい！ 体調が悪い時でも食べやすいものを——」

……………

.....

それからティファナさんは用意していた『おかゆ』をゆつくりと食べた。食欲はちゃんとあるようで、一人前を全部食べていた。このぶんなら回復も早いと思う。

そして、ティファナさんが再び眠るまでの間、本人からの要望で「僕が最近何をしているのか」「どんなことがあったか」をお話した。

……気づけば小さな寝息が聞こえてきたので、そこで僕は静かに片づけをし、ひとつ簡単な薬を置き、その場を後にした……。

〈おまけ〉

(マイルスが雑貨屋に入った後の雑貨屋前)

「どどつど、どういうことだ!？」

「私も普通に避けて場所を譲ってしまったが、何故っ! あの子年がっ! ティファアナちゃんの店の鍵をおおおお!？」

「つまり、そういうことか! どういうことだ!?! ぬわあー……」

3人……言わずともわかるかもしれないが、普段毎日のように雑貨屋に入り浸っている グレン、ヒューイ、バーニイ のいい歳した大人三人組である。

体調を崩して休んだティファナを心配しながらも、「病弱なところも……」という発言から不謹慎うんぬん お見舞いに行ってみたいなどと談話をしていたが、マイルスの登場&カギをあけて入っていったことにより、色んな意味で大変なことになっていた。

そのうち落ち着いた3人は、紳士的な思考で「ここで騒いでいたら、ティファアナちゃんの身体に障ってしまおう」と理解し、3人で昼間つか

ら飲みに行った。

マイス 「混ぜて混ぜて、かき混ぜて」

「では、次にそちらの『マジックグラス』を入れてください」
「うな」

「『マジックグラス』を……こう、かな？」

「はい、量もそのくらいが適量です。では、そのままの調子で混ぜ続けてください」

「な」

えっと、どういう状況かというと、僕の家作業場で ホムちゃんから錬金術の指導を受けてます

僕は錬金釜の中を杖を使ってかき混ぜていて、少し離れたところでイスに座ったホムちゃんが何をすればいいか教えてくれている。なお、座ってるホムちゃんのスカートごしの膝の上には こなーがゴロンっと寝転んでいて、そのこなーをホムちゃんがなでていたりする

「つと、出来たかな？」

反応を終え、釜の中の液体が無くなったようなので 釜の中を覗きこんで見ると……あった、無事調査ができたみたいだ

「『ヒーリングサルヴ』……だったかな？」

「はい、『ヒーリングサルヴ』です。初めての調合でこれほどの品質のものをつくれるとは……ホムは驚きを隠せません」

立ち上がり イスにこなーを置いたホムちゃんが、僕のそばまで来て完成品の『ヒーリングサルヴ』を眺めながらそう言った

「錬金術自体は初めてじゃあないんだけどね」

『アクティブシード』を以前に創った経験があるから、今回が正確な「初めて」ではないのは確かだろう

そう思ってたんだけど、なんだかホムちゃんがこちらをジーツと見てきてるんだけど……

「おにいちゃんが言う『錬金術』とは、1時間ほど前にホムがこなーのもとに遊びに来た際にやろうとしていた 釜に素材を入れてかき混

ぜるだけの行為のことですか……？」

いつからか僕のことを「おにいちゃん」と呼んでくるようになったホムちゃん。理由を聞いても教えてくれないけど、別に困るわけじゃないからそのまま呼ばれてるけど……なんというか、ムズかゆいな……うん、そうだよ」

「あれは錬金術でも何でも無い、ただの無意味な行為だと　ホムはお教えします……」

そう言うホムちゃんの眉毛は見事にハの字になっていて、残念な人を見るような目をしながらも　諭すように僕に語りかけてきた

……実際のところ、今回ホムちゃんに教えてもらってわかったんだけど、やり方はかなり違っていたことは確かだ。釜の中に液体を入れて煮つめたりは僕はしなかったからね……

「でも、なんでか調査はできたんだけどね」

「以前にアトリエで見せていただいた『アクティブシード』のことですか。たしかにあのようなものは　自然には存在していそうにないものでしたが」

何かを考えるようなしぐさをしたかと思えば、おもむろに『マンドラゴラの根』『コバルトベリー』『マジックグラス』を作業場内のコンテナから取り出してきて僕に押し付けてきた

「これって、さっきの調査に使ったものと同じ……」

「はい。これらを使っておにいちゃんが以前した方法を行ってください。本当に調査ができるのであれば先程と同じように『ヒーリングサルヴ』ができるはずですよ」

なるほど、それはそのとおりだ

「それじゃあ、始めるよ」

錬金釜に『マンドラゴラの根』『コバルトベリー』『マジックグラス』を入れ、杖でかき混ぜる

そう時間のたたないうちに、杖を持つ手に伝わってくる感覚が空の空間ではなく、まるで釜の中に水か何かを満たされているかのように釜に入っている杖の部分にわずかな抵抗が感じられるようになって

てきた

この感覚には覚えがある

錬金釜の中が 水とも淡い光の塊ともとれるような不思議なものに満たされていた。うん、『アクティブシード』ができた時と同じだ。つまりはうまくいつているんだと思う

とは言っても まだ途中段階、休まず杖でかき混ぜ続けなければ

「……………」

集中してかき混ぜていると、なんとなく気配がしたので そちらに少し意識を向けると……………

「じー……………」

釜のすぐそばまでホムちゃんが寄ってきていて、釜の中の淡い光を眺めている。いや、もしかしたら注意深く観察しているのかもしれない

というか、ここまでそばに寄って来てたのに気がついてなかった僕は、よっぽど集中していたのだろうか

時間は10分もかからなかったかもしれない。釜の中の淡い光が外へと漏れ出したかと思えば それはすぐに消えた

「ふう、調査完了」

断言してしまったけど、本当にできたのだろうか。正直自信は無い僕が確認しようとする前に、真っ先にホムちゃんが釜の中に顔を突っ込んでしまいそうな勢いで覗きこんだ

「……………」

…………あれ？覗きこんだかと思えば、そのままジッと動かない

どうしたのだろうか？もしかして、素材がそのまま残っていたとか…………

心配になって、僕もホムちゃんと並ぶように釜の中を覗きこんでみた

「何も…………無い…………」

「……そのようです」

僕の呟きにホムちゃんがこたえてくれた

確かに これは固まってしまいうくらい予想外の結果だ。素材どおり『ヒーリングサルヴ』ができるのも無く、別のものができるわけでもなく、まさかの消滅……どう反応すればいいんだろうか

「あれ？」

釜の中をじっくりと見渡していた時に気がついた

よく見ると釜の色によく似た黒っぽい何かが一粒、釜の底に転がっていたのだ

「なんだろう これ……？」

手に取ってみる。大きさは指先に乗ってしまうくらい小さくて、色は黒に近い灰色で、形はほぼ球で……

「種、かな？」

にしたって、なんでこんな釜の中に……調合を始める前には確かに何も入っていなかったはず——あつ

ある考えにたどり着き パツと隣にいるホムちゃんの方を見ると、ホムちゃんも同じ考えにたどり着いていたみたいでコクリと頷いてくれた……ただし、残念そうな表情で

「何でも種にしてしまうのは、さすがにどうかと思います」

「いや、別にしようと思ってできたわけじゃないんだけどね」

「新しい種が欲しい」とか思っていたりはするけど、少なくともさっきの調合中はそんなことは全然考えてなかった

「では、おにいちゃんがしていた『テキトー錬金術』は何でも種にしてしまうということでしょうか」

「断言はできないけど、『アクティブシード』の例もあるから……というか、『テキトー錬金術』って」

「見たままの表現です」

そう断言されてしまったのは、なんとも反論し辛い

「……そういえば、その種も前のもののように 落とせば勝手に生え

てくるのでしょうか？」

それはどうだろうか？見た感じとしては『アクティブシード』とは全くの別物のようだし、むしろ普通の種っぽい

「たぶんだけど、普通に育てる種だと思うよ。畑とは別の庭先で育ててみようかな……何の種かはわからないけど」

「素直に考えるなら、『コバルトベリー』の実ができ『マンドラゴラの根』と同じような根をもつ『マジックグラス』でしょうか」

「……素直に考えなかったら？」

「……………『ヒーリングサルヴ』が生えてきます」

「なるほど、生えてきたものからできる実に　そういう効果があるってこと？」

「すみません、ジョークだったのですが……」

申し訳なさそうにホムちゃんがそう言うてきたんだけど、恥ずかしさ以上にホムちゃんがジョークを言うことに驚いた

「グランドマスターから教えられたのですが、ホムはタイミングを間違えたのでしょうか？」

「ホムちゃんが間違えたというか、僕が勘付けなかったというか……まあ　とりあえず、庭にこの種を植えに行ってみようか」

「わかりました。では、こなーも連れていきましょう。ひとりだけおいていくわけにはいきません」

庭に種を植え終えて　再び家の中に入ると、作業場にある手錬金術に使ったものを手早く片づけをし、ソファアやテーブルなどがある広い部屋へと戻ってきた時には、陽は傾きはじめ　空はオレンジ色になりつつあった

ホムちゃんはソファアに座って　こなーと子ウオルフくんと遊んでいて、僕はそのそばのテーブルでイスに座って　日記に今日の錬金術のことを詳しく記録していた

「そういえば、今日は晩御飯食べてから帰る?」

そう僕が聞くと、ホムちゃんはこなー達と遊びながらも　しっかりと頷いてくれた

「はい。今日は晩ごはんを食べて、こなーと一緒に寝て、朝ごはんを食べべてからアトリエに帰る予定です」

「うん、わかったよ!.....えっ!?!」

「明日の昼までは主立った用事は無いそうなので、問題ありません。マスターからしっかりと外出許可は取りました」

「そ、そうなんだ.....」

どうやら、僕の聞き間違いでは無いみたいだ.....

ホムちゃんのはじめてのお泊り

マイス 「誰かとの時間」

??????
マイスの家
??????

「ん、あき……」

早朝に畑仕事をするこもあつて 僕の朝は早い。いつものように起きて……

「あれ？ なんでソファアで寝てたんだ？」

いつもは二階にあるベッドで寝ているんだけど、今日目が覚めたら一階のソファアで 僕は寝ていた。

「なんでだろう？」と考えたが、すぐに思いだす。

「そうだ。昨日ホムちゃんがウチに泊まるつて話になつて、それでホムちゃんがベッドを使つているから僕はソファアで寝たんだつた」

「泊まり」とは言つても、ホムちゃんがこなーと自由気ままに遊んでいただけで特に何があつたというわけでもない。

なお、こなーと『ウォルフ』2もホムちゃんと一緒に寝ているので、一階にいるのは僕一人だ。

「それじゃあ、みんなが起きる前に畑仕事を終わらせて……朝ゴハンの準備をしないとね」

??????
職人通り
??????

農作業を終え、朝ゴハンを作っているとホムちゃんが起きてきて、それからみんな朝ゴハンを食べた。そして今、僕とホムちゃんは身なりを整えて街の『職人通り』まで来ていた。

「ホムはアトリエに戻ります。このたびはありがとうございます」

ペコリと頭を下げてお礼を言うホムちゃん。

「ううん、むしろ 何も用意できなくてごめんね。また今度は事前に言ってくれるとうれしいな」

「……？　こなーと遊べて、おいしいゴハンもあって……これ以上な
いくらいだったと思いますが？　ですが、「また」というのは楽しみで
すね。またこなーと遊びたいです」

「それでは」と言つてホムちゃんはアトリエの方へと向かつて行つ
た。表情ではわかり辛いホムちゃんだが、その足取りは心なしかス
キップしているように見える。

「それにしても、自分で言ったことだけど「用意」って何があるかな
……？」

僕もそんなことを考えながら歩き出した。

ホムちゃんとかなーと一緒に遊べそうなオモチャとか場所とか
……？

いつそのこと、今の家のそばに『離れ』でも造つてみるのも手かも
しれない。これからも度々来るなら、そこにベッドルームも作つてお
客さん用に整備しとけば何かと便利かも？

「そろそろ『モンスター小屋』も欲しいんだよね……『ウォルフ』も段々
と大きくなってきたし」

最初は「ケガが治るまで」と保護していた子『ウォルフ』だったけ
ど、僕も『ウォルフ』もお互いに気に入ってしまったって、話し合いの結
果、このままの生活を続けようということになったのだ。

ただ、子供だった『ウォルフ』も成長してきて、大型モンスターで
はないとはいえ流石に人基準の家では不都合が出始めていた。そろ
そろ専用の一軒家を用意しないといけない時期なんだろう。

「でも、『離れ』はともかく『モンスター小屋』は建てられそうな人が
いないよね……」

ここでは「モンスターと暮らす」という考え方が無いみたいだから
『モンスター小屋』なんてものは存在しないだろう。

……建築の本でも買って、自分で挑戦してみようかな？

ツドーン!!

遠くから爆発音がした。音がした方へ目を向けると……まあ案の

定というかアトリエの方から少し煙があがっていた。
帰っていきなり爆発なんて、ホムちゃんもかわいそうに……。

アーランドに来てすぐは爆発音に驚いたりしてたけど、僕も慣れちやっただな。

さて、今日 僕が街まで来た理由は、いつもの王宮受付での依頼の確認では無く……

「ご、ゴメンねミス君。お姉ちゃんがまたムチャなお願いして……」
「気にしないで！ このくらい荷物、なんてことないから！」
今現在、フリーーさんのおつかいのお手伝い中です。

家に籠り気味のフリーーさんを無理矢理外に出すために、エステイさんが王宮で必要になる物の仕入れを おつかいで頼んだことが始まりだ。

「王宮で使う物は定期的に仕入れられているけど、ちよつと手違いで少なくなっちゃってー」

と、エステイさんは言っていたそうだけど、まあ フリーーさんをおつかいに行かせるための口実作りだと思う

「今回は今日中じゃなくていいわよ。期限は5日後まで。もしちゃんと出来なかつたら……わかつてるわよね？」

そんなこんなで、フリーーさんはすぐにおつかいの計画をたてはじめたそうだが、問題が生じた。思っていた以上に買う物の量が多そうで、とても1人では持てそうに無かつたのである

ここで僕の登場だ……と言っても大したことではない。ただ「今晚のデザートにでも」と思って『プリン』のおすそわけに、フリーーさんたちの家にちようど訪ねたため、そのまま巻き込まれるような形で

協力することに。

そこで、おつかいのお手伝い——もとい荷物持ちを——頼まれたのだ。

まあその時はもう夕暮れ時で、次の日はフィリーさんが何だかわからないけど「ちよつと…」と言ったから、頼まれた日から見ても「明後日に行こう」ということになった……。

そして今日がその「明後日」というわけです。

おつかいは大きな問題も無く、フィリーさんもしつかりと……までは行かないけど、女性店員相手なら時折言葉に詰まりながらもちゃんと話せている。男性相手だと上手く話せないようで、僕がフォローに回ってなんとかこなしている。

「あとはもう一軒だけだけど……マイス君、大丈夫?」

「うん、まだまだ大丈夫だよ!」

「それならいいんだけど……疲れたら何時でも言つてね?」

僕のことを心配してくれているフィリーさん

ちゃんと気遣いもできる人だし、人見知りさえなれば、それなり以上に街の人たちと上手くやっていけそうなんだよね。

「それじゃあ、最後は『職人通り』の……『男の武具屋』……で、す」

まだついてすらないのに涙目でプルプル震えだしてしまったフィリーさん。……まあ、名前からして苦手意識のある男性がいそうで怖いんだろう。

「大丈夫ですよ、フィリーさん。僕がしつかりフォローしますから」

「で、でもっ! 鍛冶屋さんだよ!? きつと岩みたいな身体で、怖い顔してるよ……」

「そうかな? そんなイメージはあんまり無いけど?」

「鍛冶仕事してたらゴツゴツになるに決まってるよう……」

「鍛冶仕事なら僕もしてるんだけど……」

「えっ」

ああ、そういうえばファイリーさんは僕の家作業場の炉を見たことが無いから知らないのか。

そこまで頻繁にしているわけではないけど、畑仕事に使う『クワ』や『ジョウロ』などを中心に自作していたりはするから、十分に「鍛冶仕事をしてる」っていう範疇には入ってるだろう。

まだ少し「怖い」とごねるファイリーさんの手を引きながら『男の武器屋』へと向かう。

行ったことは無いが場所は知っている。『アトリエ』と『サンライズ食堂』のちょうど間の建物だったはずだ

「つと、ここだ」

「ううっ……そ、それじゃあ、開けるよ」

なんだかんだ言っただけで自分から入ろうとするあたり、ファイリーさんの頑張りがうかがえる。自信もついてきたのかもしれない

一度深呼吸をしたかと思うと、ファイリーさんは扉を開いて 一歩を踏み出し——固まってしまった。

どうしたのかと思い、僕も中に入ってみると……

「あっ」

炉から漏れ出す赤い光に照らされて浮かび上がる屈強な筋肉、頭にかぶっているハンチング帽が顔に——悪い意味で——適度な影を落とした強面のおじさんがそこにいた。

「おっ？ 見ねえ顔だが……何の用だ？」

こちらに気づいた 店主であろう筋肉の人は 僕たちを見てきた……。

あれ？ 先程のような険しい目つきではなくなって、話し方もけつこうフランクな感じだ。そんなに見た目ほど怖い人じゃないのかもしれない

とりあえず扉を開けっぱなししておくのも悪いので閉めておき、用件を伝えることとする。

「えっと、武器を買いに来ました……ほら、ファイリーさん」

「……………(がくぶるがくぶる)」

ああ……完全に怖がってしまってる。でも、何を買えばいいのかはフリーーさんしか知らない(正確にはフリーーさんの持っているメモには書いてある) 何とかしないと……！

と、考えていると店主さんが なんだか勝手に解釈しだしてしまつた。

「んーウチには色々置いちゃいるが、嬢ちゃんたちが使えそうなものになると、インゴットを自分で用意してもらおうオーダーメイドになつちまうが……いいか？」

「ああっ、そうじゃなくて……」

固まったままのフリーーさんの近くに寄り、小さな声で言葉をかける。

「ここは僕で買うから、ちよつとメモを貸してくれないかな？」

「おおおねがいろいろ……」

そう言つてメモを渡してくれたフリーーさんは、結局僕の後ろに隠れてしまった。

でも、僕の方が少し背が低いから当然隠れきれない。フリーーさん自身もそれに気づいたようで、後ずさり扉そばの部屋角まで退いていった……まあお店の外に逃げ出さなかつただけ 良かったのかも しろれないね。

メモの内容を確認し、それを店主さんに伝える。

「それなら在庫にあるから問題無いけどよ、一体何に使う気なんだ？」

「実は、僕らが使うものじゃなくて 王宮の人からのおつかいなんです。少し補充が必要になつたらしくて……」

それを聞いた店主さんは「なるほどな」と納得したように呟いたかと思えば、何故か僕のほうに顔を寄せてきた。

「ついでというか何というか……おれあ、あの嬢ちゃんに なんか悪い事しちまつたかあ？」

小声の問いかけの内容に少し驚き、店主さんの顔を見てみると、な

んともバツの悪そうな顔をしていることに気がつく。

「そんなことは無いんですけど……ただ 少し人見知りで男の人が特に苦手でした。それで店主さんの鍛えられて強そうな格好を見て、怯えちゃったみたいなんです」

「それはアレか？ 遠まわしにおれが怖えつてことか」

「あははは……」

「そうか……」

ハイとは言えずになんとか誤魔化そうと思ったけれど ダメなようだった。

しかし、予想していた反応とは違って、店主さんはすごくシヨンボリとしている。

この人、絶対いい人だよね……

マイス 「おつかいのその後に」

??????
王宮受付
??????

「で、ホントにマイス君に全部任せっきりにしたりしなかったの?」
「し、してないよ、私だって ちゃんとできたもん! ……手伝って貰ったりはしたけど」

エステイさんの言葉に憤ったようにフィリーさんが言うが、その後にボソリともれた呟きで力強さは皆無になってしまっている。

察しはつくかもしれないが、今僕とフィリーさんはおつかいの買い物全て終え『王宮受付』のエステイさんのもとに届けに来たところだ。

「まあ、一応はできてるわけだし、良しとするべきかしら」

ふう と一つ息をついたエステイさんは顔をこちらへと向けてきた。

「なにはともあれ、ウチの妹のおつかいに付き合ってくれてありがとうね、マイス君」

「いえ、また何かあったら 遠慮なく言ってほしいです!」

特別時間が無いとき以外は自分の意志で好きなように時間をつくれるから、言ってくれば 手伝いをすることはそう難しくは無い。僕の言葉に、エステイさんは微笑みながら返事を返してきた。

「あらあら、頼もしいじゃない♪ どこかの誰かさんも このくらい素直でいい子なら良いんだけどねー?」

そんなことを言いながらフィリーさんの方をチラリと見るエステイさん。

フィリーさんも自分のことを言っているのだと理解しているようで、姉の嫌味な言い草に少しムスツとしてしまっている。

「……どうせ私はダメダメだもん!」

フィリーさんは　そう言い捨てる外へと駆け出してしまった。
うーん、さすがにこのままフィリーさんを放っておくこともできな
いしなあ。

「あつ、僕、フィリーさんを追いかけます！」

エステイさんの返事を確認せずに、外へ出たフィリーさんを探すた
めに僕も駆け足をはじめた。

王宮受付から出てそうすぐにフィリーさんを見つけることができ
た。

……というか、フィリーさんは尻餅をついてしまっていて、その前
に一人の男性が立っている。状況からして、飛び出したフィリーさん
の不注意でぶつかってしまったんだと思う。

早く助けてあげたほうがいいよね、これは。

男性にぶつかってしまったからだろうけど、フィリーさんがガクガ
クブルブルといった様子で震えてるし、ぶつかられたであろう男性の
方も何とも言えない困り顔をしている……って

「ステルクさん!？」

男性が少なからず見知った人物だったことに驚き、声をあげてし
まった。

「むっ、キミは……」

「まいズグーン!!」

僕に気がついたステルクさんがこちらに目を向けたと同時に、フィ
リーさんが僕に泣きながら飛びついてきた。

驚きながらも、なんとかフィリーさんを受け止める。すると、瞬時に
フィリーさんは僕の背後へとまわっていった。顔を確認できない
が、小さく鼻をすする音と嗚咽が聞こえるので、まだ泣いているよう
だ。

さて、フィリーさんをどうにかしたいところだけど……それより先

にー

「すみません、ステルクさん。フィリーさんがご迷惑をかけてしまったみたいで……」

「いや、キミが謝ることでは無いのだが……しかし、もしよければ何故彼女がこんなに怯えてしまうのか教えてくれないか？」

「先程から会話にならないうえに、立ち上がらせようと手を差し伸べても逃げて、どうしようも無かったのだ」と言いながら困ったように僅かに眉をひそめるステルクさん。

「フィリーさんは少し人見知りが激しくて……なおそうと色々努力してるんですけど、まだ男性を中心に苦手で……」

「はあ、なるほど」

ステルクさんは僕に向けていた視線を僕の後ろのフィリーさんへと向けた。僕の肩を掴んでいるフィリーさんの手越しにビクツツと飛び上がり震えるフィリーさんを感じ取ることができた。

「何があつたかは知らないが、少し落ち着きを持つといい。ぶつかつた相手が私のような人間だったから良かったものの、小さな子供やご老人だったとすれば怪我を負わせかねなかつたのだぞ」

「ヒイ!? す、しゅみませんん!?!」

僕の背後でうずくまってしまったフィリーさん。

人見知りであるということを知つたはずのステルクさんだけど、特に変わったところも無く、なんとなく威圧的な雰囲気をもっとしている。もしかして、『周りの好意に甘えてばかりではいけない』って教えるために、あえてそうしているのかな……?」

あついや、怯えるフィリーさんを見て「むう…何故だ」って言うてる。もしかしたら、あれでも優しく接しているつもりだったのかもしれない。

「それにしても……」

先ほどまでの困った顔とは少し違う、何かを考えているように見えるステルクさん。どうしたんだろう? と気になったが、すぐに僕は

思い当たることがあった。

「えつとですね、フィリーさんはエステイさんの妹なんです」

「ああ、どうりで見覚えのある顔だと思うわけか。内面はまるで違うようだがな」

納得したように頷くステルクさん。

確かに ステルクさんの言うように、性格などに違いはあるけど、顔立ちや髪なんかはよく似たエアハルト姉妹だ。まあ、普段の表情に違いがあるため 似た顔立ちでも間違えることは無いが。

と、そんなことを考えているとステルクさんが大きなため息をついた。

「どうしたんですか？」

「ああ、いや すまない。なんとなくだが、その彼女が飛び出してきた理由がわかってしまつてな……」

なんとなくではあるがステルクさんは察してくれたみたいだ。

でも、それはそれでステルクさんにとってエステイさんがどういった認識なのか気になるところではある。先輩と後輩つて間柄なのは知つてるけど……。

「いちおう、キミからも注意をしておいてくれないか？」

「はい、わかりました」

僕の返事を聞き頷いたステルクさんは「それでは失礼する」と言つてお城の中へと歩いていった。

「落ち着いた？」

「うー……大丈夫」

まだ少しプルプル震えている。正直なところ、あまり大丈夫そうには見えないのかけど……。

「色々心配だから、家までおくるよ」

「う、うん……ごめんね」

フィリーさんの手を取り、その歩調に合わせて歩き出す。

フリーリーさんを家まで送る途中 街の広場を通るのだが、その一角に人だかりができていた。

フリーリーさんは やはりというか大勢の人はまだ怖いようでも離れたところを歩こうとする。だけど、僕はあえて手を人だかりの方へと引いた。

そんな僕を非難するように涙目で見つめ首を振るフリーリーさんだけ……

「大丈夫だよ。みんなアツチに夢中みたいだから」

そう僕が言って初めてフリーリーさんは人だかりの中の人たちが何を見ているのか意識して探し出したみたい。

「あつ」

気づいたようだ。人と人との間から なんとか見えたのだろう、見知った大道芸人と2体の人形の姿が――

「向こうからなら もう少しよく見えそうだから行って見ない？」

「……うん、そうしよっか」

そうして、人混みから少し離れたところから人形使いの大道芸人――リオネラさんの人形劇を2人で観た。

フリーリーさんは人形劇を食い入るように見ていたようだった。

「ようだった」というのは、しっかり確認できていないからだ。なぜって……実は僕もリオネラさんの人形劇をちゃんと見るのは初めてで、そっちに集中してしまっていたから。

盛り上がった人形劇も終わりをむかえ、人も段々とまばらになってきて いつもの広場の様子に戻ってくる。

それを見計らって、リオネラさんたちのもとに フリーリーさんと一緒に駆け寄った。

「お疲れ様、リオネラさん。それにホロホロとアラーニヤも」

そう声をかけると、こちらに気がついたようで 3者とも顔を向け

てくれた。

「あつ、マイスくん。それにフィリーちゃんも……」

「おうおう、オレの活躍 ちゃんと見てくれてたか？」

「楽しんでもらえたなら嬉しいわ」

「途中からしか観れてないんだけど、凄く面白かったよー」

フィリーさんはよほど気に入ったのか 興奮気味だった

「それはよかった」と言うホロホロとアラーニヤ。リオネラさんも少し恥ずかしそうにしながらも 嬉しそうに微笑んでいる。

「今度は、ちゃんと最初から見たいなあ……」

「そ、それなら、次する時に 声をかけるね」

「本当!? わあ……楽しみだなあ」

楽しそうに話す2人を見てみると、やっぱりリオネラさんがフィリーさんの人見知りをおすきっかけになりそうに感じる。

「ねえ、マイス君」

つと、そんなことを考えていると、不意にフィリーさんから声をかけられてた。

「えっと、どうかした？」

「あのね、家におくってもらう前にみんなでどこかでお茶しないかなって思って……」

うーん……そこに僕はいなくても良さそうな気もするけど、特に断る理由も無いわけで……

「それじゃあ一緒に行こうかな？」

僕がそう言うと、フィリーさんとリオネラさんがニツコリと微笑み顔を見合わせた。

「なら、どこかお店を探さないとー」

「あつ……それなら、私たちがよく行くお店があるんだけどー」

「ああ、あそこならちようど良さそうだな」

「そうね、悪くないと思うわ」

「そこに行こうー」とフィリーさんは僕の手を取った。前とは違い、フィリーさんの方から……と思ったら、反対の手はリオネラさんに握

られていた。

「お店はこっちだよ！」

そう言つて案内してくれるリオネラさんについて歩く。僕とフリーさんーそして、浮いてついてくるホロホロとアラニーヤ。

まあ偶にはこういうのもいいかも、なんて考えながら歩いていく。

あつ、なんだかハチミツの甘い香りがしてきた……

訪れた そのとき

それは突然のことだった。

モンスター小屋と離れを建てるためにマイルスが街で購入した『ふにでもわかる建築書（入門編）』を読み終え、家にある『木材』と『石材』の数を確認し終えたところだった。

「少し木材の数が心もとないかな」と思ったマイルスが、木をいくらか切って木材にしようと『オノ』持ち出して家を出たところ、視界の端で何かのスウツと動いたような気がしたのだ。

何気なくそちらを見ると、一匹の『ルーニーグラス』だった。「なんだ、ルーニーか」と気にせずには木材にするのにちょうど良さそうな木を探し……………

「つて、『ルーニー』!?」

『ルーニー』といえば『ルーン』の具現化したものといわれる精霊だ。それが今ここに存在するということは、ここには『ルーン』が十二分に存在しているということだろう。

つまり、マイルスが目標としていた「空間をルーンで満たす」が達成できたということ。だから、マイルスの考えが正しければ——『魔法』が使えるようになっていくはずだ、と。

それはもはや 後先を考えもしなかった、反射的な行動だった。

マイルス自身、自分がどこにいて何をしようとしていたかもすっかり忘れての行動。

『リターン』!!」

その呪文を唱えると同時に マイルスの視界は光にあふれ、体に軽い浮遊感が感じられた。

そして光が消えて 着地したマイスの目の前に広がっていた光景
は

「あ……」

見覚えのある光景。

1分も経たない前に見た光景だった。アールランドの街からそうか
からないほどの距離にある家の玄関前、マイスが自分で耕した畑の見
える位置だ。

マイスはあれやこれや考える。

『ファイアボール』！

『ウォーターレーザー』！

試しに他の魔法を使ってみるが、問題無く記憶にある通りに発動し
た。

ならば、『リターン』だけが不具合をおこしているということだろう
か。いや、違う。

「魂の休まる場所に帰る魔法」である『リターン』の魔法。

『リターン』も正常に発動している。そう——この——この
家を「魂の休まる場所」だと認識してしまっていたのだ。

『シアレンス』に帰る手立てを失ったマイスは 大きな喪失感をお
ぼえた

確かに アールランドでの生活に慣れてきて、充実もしてきていた。

しかし、シアレンスの町に未練が無いわけではない。あの町で様々なことを学び、様々なことを覚え、様々なものを得た。

もう一度あの大樹の家で過ごしたい。あの町の人たちと話がしたい。あの笑顔が見たい……一度だけでもいいから、しっかりとお礼を言いたかった。

これまで何度も懐かしむことはあったが、ここまで悲しく、涙があふれてくることはマイルスにとって初めてだった。

『シアレンス』の存在を知りえるものは「ガジさんから貰った『ショートダガー』と「マイルス自身」のみ。

その日、アーランドの街と『近くの森』との街道の途中にあるとある家から、一日中何者かの泣き声が聞こえ続けた――

王宮受付

ある日の『王宮受付』。そこにはとある少年を見送るエステイの姿があった。正確に言うならば呼び止めようとしたが行ってしまった少年を見送る姿なのだが――

「聞いてはいたけど、本当にどうしちゃったのかしら？」

妹のフィリーから「マイルスくんが　なんだか元気が無いみたい……」と聞いていたエステイだったが、思った以上だったというのが素直な感想だ。

一見　元気そうに話したりはしているが、それは取り繕ったものだということがすぐにわかった。その奥底にあったのは、エステイが初めて出会った目覚めてすぐのマイルス……何か深く計り知れない悲しみに飲まれているような表情。

「むう……いったい何があったというのだ」

誰かの小さな呟きが聞こえたエステイがそちらを見ると、柱の影から顔を覗かせているメリオダス大臣がいた。

「何か街の整備に不備でもあって嫌な思いをしたのかもしれない！ このわし自ら調べてみるとしよう」

そんなことを言いながら出入り口の方へと歩いて行くメリオダス大臣。

それと入れ替わるように入ってきたのは、エステイの飲み友達でもあるティファナ。

この時間帯に受付に来るのは珍しい。何故なら、彼女は雑貨屋を営んでいるため営業時間であるはずの今に出歩いていることは滅多にないことだ。

「あら、どうしたの？」

「少しエステイに聞きたいことがあって……」

依頼をしに来たわけではないのがわかったことで、エステイはティファナの用件がわかってしまった。

「マイス君のことなら、残念なことに私もわからないわよ」

「そうなのね。マイス君、私が聞いても何も教えてくれなくて……よく会うエステイなら何か知ってるんじゃないかって思ったんだけど」
シヨンボリするティファナ。エステイはひとつため息をついて少し前にマイスが出ていった王宮受付の出入り口に目を向けた。

「本当に、何があったのかしら……」

サンライズ食堂

「ん……？」

「……？ どうかしたか？」

不意に窓の外を見て 何か悲しそうな顔をした料理人のイクセル。そして、イクセルと話してしたステルケンブルクが何事かと問いか

けた。彼はいつぞやの料理対決の審判をきっかけに度々この『サンライズ食堂』に訪れるようになり、常連客となってきた。

「今、表の通りをマイスのやつが歩いているのが見えたんですけど、前見た時と同じで 全然元気が無くて……あいつ、話し聞くとって言うても何も話してくれねえし」

「むう……確かに、今の彼は 彼らしくないな」

困ったものだ、と男2人 深くため息をついた。

コロナのアトリエ

「……これはこれは」

アトリエに入ったタントリスは、自身が入ってきた事に気がつくこととの無い、そのあわただしい状況に驚きを隠せずにいた。

「ちよつと!? コロナ、釜からなんか煙が出てるわよ!」

「えつ、クーちゃん? どうし……つて、うええー!? た、大変!!」

「マスター、少し落ち着いてください。これで今日だけで6回目の失敗です」

「あんたもよ!! 持つてるフラスコが変な色に光って……!」

「わあ、ホントだ。何だか ほむちゃんの持つてるの、少し泡立ってる気も……」

「「あっ」」

ピカッ………ポフィン!!

フラスコの中身が小爆発を起こし、アトリエ内は煙に包まれた。

とりあえずタントリスは手近なアトリエの玄関の扉を全開にして煙を外へと逃がすことにした。窓が開かれたところを見ると、中にいたコロナやクーデリア、ホムが動いたのだろう。

改めてアトリエ内に入ったタントリスは、店主であるコロナに問いかける。

「それで、さつきから何やら騒がしいけど……何かあったのかい？」

「あつ、タントさん。 ええつと、それが……」

やけにシヨンボリしているコロナに変わり、クーデリアが言った。

「マイルスが最近元気が無いのが気になって気になって、仕事に集中できてないのよ。 ついでにこっちも」

そう言つてクーデリアはアゴでホムを示す。

「ううっ！ マイルス君が私に相談してくれないのは、私がこんなダメダメだからなんだー!! うわーん！」

「……………」

コロナは泣き、ホムは無表情だが心なしかうつむいて悲しそうにしているように見える。 そんな2人を見て「たく、こんなに心配させて……何をやってるんだか、あいつは」とクーデリアがため息をつく。

「にしても、元気がない、か……」

実はタントリスもそのことには気づいてはいた。

アトリエに来る前にマイルスとすれ違い、すれ違いざまに簡単な挨拶を交わしたのだが、その時に違和感を感じていたのだ。 ただ、付き合いが短いので「ただの気のせいかな」と、特に気に留めていなかったのだ。

「親父に報告したら何て言うのか、正直予想もできないな……」

広場

「やっぱり、リオちゃんも?」

「うん……フィリーちゃんと一緒の考えだよ」

フィリーとリオネラが、広場の一角に設置されているベンチに並んで座つて話していた。

お互いに、マイルスと会った時のことを話し、話し合いの結果「やはりマイルスに何かあった」という至極単純な結論に。

「にしたって、何があったんだか」

「それがわかったら苦労しないわよ」

ホロホロとアラニーヤも2人のそばでフワフワ浮きながら話している。

「そ、それじゃあさ、今度マイルス君のお家にお茶とお菓子を持って行って見ない？」

「そうだね。何か話してくれなくても、少しでも元気になってくれたら……」

フリーとリオネラはふたりで計画をたてはじめた。

少しでも早く、マイルスに元気になってほしい。そのためにも明日にでも実行できるように、と。

街と外との境界線に存在する大きな門。

その門をくぐり外へと行くマイルス。そして、その後ろ姿を確認し後をつけるように歩きだした影がひとつ。

だが、その影が境界線を越える前に別の存在がそれを止めた。

「彼を追って何をするつもりだ？」

「何を、と言われても……。いやなに、何度もお茶を頂いて話をする仲である彼のことか心配になっただけのことだ」

そう言うマイルスの後をつけていた影——ジオを、止めた存在——アストリッドは機嫌が悪いことを隠そうともせず鋭く睨みつけた。

「貴様が言ったところでアイツの問題は解決しないし、貴様が言葉をかけようとも、むしろアイツを不快にさせるだろうな。いや、そもそも貴様は、思い詰めている理由すら聴き出せないだろうな」

「……その言い方だと、キミは知っているのか。彼に何かあったのか

を」

相対する2人の顔は、いつになく真剣なものとなっていた

もつとも まともに話す気があるのはジオだけで……アストリッドの方はといえば、のらりくらりとはぐらかすつもりで、核心を話す気はさらさらないのだが――

「知ってるとも。どういう状況かも、解決策も」

「ならば――」

「知っているからこそ何もできんのだ」

そう言いながらアストリッドは、どこからか拳大ほど大きさの種を取り出して、それを手の中で弄ぶ。

「私の知っている解決策も完璧なものではなく、あくまで理論だけの絵空事、実現が難しい上に成功確率も0に等しい。もはや、狂気の沙汰にも等しい行為だ。故に残された道は……アイツ自身の中で折り合いをつけること、それだけだ」

マイスが行った先を見つめながらアストリッドは呟いた。

「同じ目線に立てる者がいない今、アイツに言葉をかけられるのは、貴様のような固まった頭の持ち主や私のような理論で突き詰めるようなやつではない。……少なくとも、な」

その言葉を聞いたジオは、納得できない顔をしながらも マイスを追う足を完全に止めた。

それを確認したアストリッドはアトリエの方へと歩き出した。

「まったく……ちゃんと貸しは返してほしいのだから、今を乗り越えて シャンとしてほしいものだ」

マイス 「切り離された存在は、何を思う」

マイスの家

……あれから何日経ったのかな？

とても長くも感じるし、短くも感じる。

『シアレンス』へと帰る手立てが無くなった。それだけで。周りの環境は変わっていないはずなのに、何か全く別のもののように感じられてしまうようになっていた。

気付けば外はもう日が沈みきってしまった。

お腹は……そういえば、さつきこなーと『ウォルフ』のゴハンを用意した後に、僕もパンを食べたんだっけ。

戸締りなどを確認しながら、今日の日記に何を書くか内容を考える。……これも、習慣になったなあ。

日記を書いた後は……前は『鍛冶台』や『薬学台』で なにかしら作ったりしてたけど、今はどうにもやる気がおきない。

「もう何もすることはないし、寝ようか……」

こなーたちもいつも自分たちで寝床で寝てくれるから特に心配することも無い。二階に上がって寝よう……。

コンツ コンツ コンツ！

こんな時間に誰か来るなんて珍しい……けど、特に何も気にせずいつもの癖で返事をした。

「はい、ちよつと待ってください」

玄関までいき扉を開けてみると、機能性を重視したであろう服装の所々が土か何かで汚れてしまった女性が立っていた。

「ちよつといいかい……つて、ボウヤしかないのかい？ 親はどうしたんだい？」

「いえ、僕はひとりで暮らしてるんで」

「そうなのかい。まあ、いいか！」

そう言うとき女性はニカリと笑った

「腹が減っててさ、何か食べ物ない？」

「美味い！」

水やタオルを貸して、身体を拭いたり服の汚れを落としてもらっていた間に僕が作った料理。それをを豪快にガツガツ食べる女性が嬉しそうに声をあげた。

追加分を持ってきたんだけど、まだ必要そうだ……食材の備蓄には余裕はあるのだが、正直驚いている。

「っはー!! まともな食事が久々つてことを差し引いても、凄いわコレは！」

なんだか随分と大変そうなことを言ってる気もするが、特に気にしないことにして……もう少し追加を作ろう。

「ふう！ 食べた食べたー」

女性が満足気に言うのを見て僕は一安心した。本当によく食べる人だった。まあ、本当においしそうに食べてくれるのだから、それはそれで嬉しかったんだけど。

「それにしても、困ったところだったんだ。コツチのほうに冒険に来るのは久しぶりで、色々忘れるわ 道を見失うわで大変だったんだよー！ ここに家が無かったらもつと大変だったろうね」

「まあモンスターをネコと一緒に飼ってるのは驚きだけだね」と付け加えた女性は、愉快そうに笑ってる。

旅路を思い返したんだろうか？ ときどき苦虫を噛み潰したような顔をしていたりはしたが、すぐにニカリと白い歯を見せる笑顔になり楽しそうに話していた。

「大丈夫だったと思いますよ？ ここから少し行ったところに『アーランドの街』がありますから。その人たちはみんな親切な人たちですからね」

「ああ、ここは『アーランド』のすぐそばだったのかい。予想より随分とずれてたみたいだね……勘が鈍ったかな？」

「たはははっ」と少し困ったように笑う女性。その顔は本当に困ったというよりも、面白くて笑っているように見えた。

「でも、それなら なんでボウヤはこんなところに住んでるんだい？」女性の表情は特に何も変わっていないはずだった。だが、なぜか僕には全く別のもののように感じられた。

たぶん、本当に女性の表情は変わっていない。変わったのは話題。今の僕があまり話したくない話題になったからだ。

「別に話したくないことなら言ってくれなくてかまわないけどね。なんとなくだけど、ボウヤがさつきから時々死んだ魚の目みたいな目を

してるのに何か関係があるんじゃないかなーって思っちゃって」

……僕はそんな目をしていたんだろうか？

それはわからないが、なんとなく無気力感があることは確かに無関係じゃあないだろう。

「アタシはしがない旅人さ。もう二度と会わないかもしれないような間柄だからこそ、身近な奴には話せないようなことも相談し易いかもんじゃないよ」

そういう女性は相変わらずの笑顔だった。

何処で僕の中の枷へかせが外れてしまったのかはわからない。

いつの間にか、見ず知らずの人に、誰にも言ったことの無いことを話してしまっていた。

記憶のこと。

シアレンスの町のこと。

シアレンスで記憶を取り戻す生活をしていたこと。

知らないうちにアーランドのそばに倒れていたこと。

シアレンスに帰るための足掛かりとして、ここで生活しはじめたこと。

そして……シアレンスに帰る手立てを失ったこと。

いろんなことをいっぺんに話したから、ちゃんと伝わったかなんてことはわからない。ただただ、溜まっていた言葉が溢れ出してきた。

僕が全部話し終えるまで女性は静かに聞いていてくれた。そして僕が話し終わると、少しの間を置いてから女性が口を開いた。

「ゴメン、アタシにはよくわかんないわ!」

「へっ?」

笑いながらそんなことを言う女性に、僕は変な声を出してしまっていた。

女性は少し慌てながら、僕に言ってくる。

「いや、別に話しを聞いてなかったとかじゃなくてさ、えっと……『るーん』とか『魔法』とか知らないこととか信じらんないことばっかり出てきて、理解が追い付かないっていうか」

そう言うと、自分のコメカミに指を当てながら「えっと、つまり……」と女性は考えだしたが、すぐに「あっー!もう!!」と言いなからテーブルをバンツ!!と叩き立ち上がって僕を指差してきた。

「とにかくさっ! アタシは『しあれんす』なんて町は見たことも聞いたことも無いけどあるってわかる! そんなもって、こうやってアンタに会って 話せたことがすっごく嬉しいってことだよ!!
………ん?なんだい、口に出してみたたら案外簡単じゃないか」

うんうん、とひとりで頷いている女性だけど、僕は全く理解できなかった。

「それって、どういう……?」

「アタシはいろんなところを旅して回ったんだけど、野宿以外にもちゃんと村とか町とかで寝泊まりしたこともあるんだよ」

「信じらんないかもしれないけどね」と女性が言うが、寝泊まりするのが普通のことだと思っただけだなあ……?」

「んで、いろんなところの料理なんかも知ってるんだけど、さつきボウヤが出してくれた料理はアタシが見たことも食べたことも無い料理

でも、今、僕が立ち止まっているいい理由にはならない。
記憶をなくした時もそうだったじゃないか。
何もわからない中で、自分ができることを精一杯頑張って……
そうだ、それでいいんだ。
今、僕にできることは何だろうか？
僕がしたいことは何だろうか？
考える時間だって、ちゃんとある――

「まあ もっと本音を言うと、ボウヤがいた所みたいなたしの知らないものが沢山あるところを思いっきり冒険してみたいね！」

また笑顔になって喋っている女性を見て、僕は言う。

「すみません……」

「ん？」

どうしたんだ？と女性は首をかしげた。

「少し、泣いてもいいですか？」

そう僕が言うと少しだけ間を開けて女性は答えてくれた。

「……かまいやしないさ、来なよ」

優しい声だった……気がする。

女性の表情は確認できなかった。もう、僕の視界はふやけてしまっていたから……。

なんだろう？ 髪越しに 何かを通り過ぎていく感じがする。それも 何度も。

風だろうか？ ……いや、頬とかには特に何も感じないし、なんだか温かいような……？

重いまぶたをあげるが、まだ ぼやけて周りがよくわからない。

「ん？ 悪いね、起こしちまったかい？」

どこかで聞いたことのある声だ。

いや、「どこかで」とかじゃなくて、家に来た女性の……

「あつ!？」

ここで僕の意識は覚醒した。

飛び起きてあたりの状況を確認する。

場所は、僕がいつも寝ている二階のベッドルームのベッド。窓から差し込んでくる光はまだ淡く、おそらく早朝だろう。

僕が今いるのはベッドの上。布団には先程まで僕が寝ていたであろう場所が少し沈んでいて、そのすぐそばで肘について腕を頭の支えにするようにして横になっている例の女性が……。

えっと、つまり……？

状況を整理できないのがわかったのだろうか。女性が悩む僕に助け舟を出してくれた。

「憶えてないかい？ 昨日の夜、ボウヤがアタシの胸で泣いたじゃないか。んで、その後 静かになったと思ったら寝ちゃってて、それでベッドを探し当てて寝かしてやろうと思ったらアタシに引付いたまま離れなくなってるさ。だから、アタシもそのまま一緒に寝たんだよ」

そして、朝になったと………すごく恥ずかしいっ！

顔から火が出そうなほど恥ずかしがってしたら、女性が「アツハツハ！」と声を出して笑った。

「そんなに恥ずかしがなくていいよ！ むしろ まだボウヤくらい

の歳の子なら　もう少し人に甘えるのを覚えたほうがいいさ」
ううう……とりあえず、畑仕事をしないと……

日課の水やり等の畑仕事をしていると、いつの間にか家の玄関そばから女性が僕の作業を眺めていたり、朝ゴハンを作っていると女性がキッチンに入ってきてヒョイツとつまみ食いしていったりと、まあ色々であった。

そして　朝ゴハンを終え、食後の香茶を出してから少しゆっくりとしていると、いつもの調子で女性が口を開いた。

「さて、色々お世話になっちゃったけど、そろそろ出るとしよつかね」
「というと、アーランドの街に行くんですか？」

「あー、いや……ボウヤの寝顔とかを見てたらウチの娘たちの顔が見たくなってきちゃってさ。一回帰ることにしたよ」

「娘さんがいたんですね」

それは初耳だったので、少し驚いた。というか、母親がいなくても大丈夫なのだろうか？もう大きくなって手がかからないとかかな？

女性はとても楽しそうに口を開く。

「ボウヤより少し小さいのと、もつと小さいのがいるんだけどね。それが可愛いすぎてさ!!　アタシが帰ったら引っついて離れないのなの、それもまた可愛くて!!」

「それならずつとそばにいたいのに」と思わなくもなかったけど、この人はこの人なりに考えはあるだろうと思ひ、口には出さなかった。

「それなら、少しだけ待ってください！　水と日持ちする食料を色々を用意しますから」

「ありがたいけど、そんなことまでしてもらっちゃっていいのかい？」
「遠慮しないでください。食べ物に関してはかなり余裕がありますから！　あつ、でも　変わると言っはなんですけど……」

「ん？ なんだい？」

「僕の剣技を見て欲しいんです」

「はははっ！ 準備運動くらいって思ってたけど……思った以上だったっ!!」

少しだけ肩で息をする女性を、家の庭の地面にぶっ倒れた状態から見上げながら僕は思った——「どうしてこうなった」と。

いや、僕が『シアレンス』で学んだことのひとつである剣技を見てもらいたくて僕が言ったことからはじまったんだけど、何で一对一の勝負になったのか……

まあこの女性がけっこうな戦い好きだったことが原因だろう。

一人旅をしているのだから、モンスターを退けられるくらいに強いと思っただけ……とんでもなかった。

「わるいわるい、アタシも熱くなりすぎた」

そう言いながら女性は僕の手をとって 立ち上がらせてくれた。

口ではこんなふうに謝っているが、顔はニカニカ笑っていて「楽しかった」と言っているようなものだった。

「いやあ、強いね！ おかげですごく楽しめた!!」

言っただよこの人。……不思議と悪い気はしないから、特には気にしないけど。

「土産話もできたことだし、アタシは帰るとするよ」

そう言いながら女性は、僕が用意したものを含めた荷物を持って街道の方へと続く小道へと身体を向けた。

「あっ、そうだ」

女性は見送る僕を振り返った。

「名前聞いてなかったね」

「あつ」

そういえばそうだった。さすがにこのままお互いに知らないままなのもおかしなことだろう。

「僕はマイスっていいいます！」

「マイス、か……うん、いい名前じゃないか。アタシはギゼラってんだ。『アーランド』のずっと南の『アランヤ村』ってとこに家があるから、もし何かあつたり……特に何もなくても暇な時に来てみるといいさ！ アタシがいる保証はないけどね!!」

そう言うとギゼラさんは大きく手を振った後、今度こそ街道への小道を歩き出した。

僕はその背中が見えなくなるまで見送り続けた……

畑のこと、鍛冶のこと、薬のこと……それ以外にも 僕がやれることはたくさんある。

このあいだやろうとしていた『モンスター小屋』や『離れ』を全力で建ててみるのもいいかもしれない。

「さて、何をしようかな」

ファイリー「お茶とお菓子を持って」

街道

「にしたって、いきなり一人でこんなところまで来たなんて信じらんねえな」

「だ、だって……！ 知らない人に護衛を頼むなんて出来なかったんだもん」

私はホロホロ君になんとか言い訳を返した。

話の内容は初めてマイルス君と会った日のこと、おつかいで護衛も付せずに街の外のマイルス君のお家付近まで来た時のことだ。

「けど、さすがに戦ったりできない子が一人では感心しないわね」

「だよなー。リオネラだってオレたちがついてるしな」

「わ、私だって少しは戦えるよ……」

アラニーヤちゃんの言葉にホロホロ君が、ホロホロ君の言葉にリオネラちゃんが 反応して賑やかな会話になった。

そもそも、なんでこんな話をしているのか。

それは、今ちようど私たちが アーランドの街からのびる街道を歩いているから。

ここ最近、マイルス君が何だか元気が無いように感じられて私は心配してた。そして、リオネラちゃんも同じだったみたいで、昨日ふたりで話し合って「お茶とお菓子を持って行ってお茶会をして、マイルス君とお話する&元気づけよう！」ということになった

だから、私とリオネラちゃんは、それぞれ香茶とお菓子の入ったカゴを分担して持つてる。

そうこうしているうちに、街道からわきにそれるように存在するマイルス君のお家へと続く小道へとたどりついた。

私とリオネラちゃんは緊張や不安からかおしゃべりが止まってしまい、空気が少し重くなってしまった。

「もう、気持ちはわからなくもないけど、フィリーちゃんもリオネラも暗くなっちゃってるわよ。元気づけようとしてる人が元気無くつてどうするの」

「そうだぜ。こういうときは、空気を読まないくらいバカみてえに笑ってればいいんだぜ?」

ホロホロ君は無茶苦茶なようなことを言ってるけど、アラニーヤちゃんの言うことは確かにそのとおりだ。

なんでミス君が元気がないのか。私なんかでミス君が抱えてる問題を解決できるのか……不安なことはたくさんある。

だけど、私はミス君の力になりたかった。ダメダメな私なんかにも優しくしてくれて、何度も助けてくれたミス君を……今度は私が助けたいって思った。

「フィリーちゃん」

それに、今の私はひとりじゃない。ミス君をきっかけにお友達になつたりオネラちゃんも、ミス君が心配でなんとかしてあげたいって思っていたみたい。

私だけだといっぱい不安だけど、リオネラちゃんもいるんだから……きつと、ふたりでなら出来ることも増えると思う。

「リオネラちゃん……うん、行こう!」

顔を見合わせて頷いて、私たちはミス君のお家のある林の中へと小道を歩き出した

マイスの家・前

シヤキーン

コンツ コンツ コンツ

カラン カラン

ドスン

ドスン

マイス君のお家に近づくにつれて、聞き覚えの無い音がたくさん聞こえてきだした。

「何の音……？」

不安そうに顔を強張らせているリオネラちゃんがそう言ったから、音は私の聞き間違えなんかじゃないってことがわかる。

「もしかして、マイス君が元気が無いことと関係あるのかな……」

「そうかも……」

私の言葉にリオネラちゃんが頷いてくれたけど、私の中では不安が大きくなっていった。何なのかわからない音、これを私たちで何とかできるのだろうか……

林に入った小道は やがて林を抜けて、マイス君のお家の全体が見えてきた。そこには――

「……………」

もしも、お人形が動いて喋っていたり、マイス君のお家に人と仲が 良いモンスターがいたり、変わったことに慣れていなかったら叫んだり気絶したりしていたかもしれない。

マイス君のお家の前の庭には想像を絶する光景が広がってた。

丸太を切つて板にしたり、木の柱に溝を彫つたりしている人ほどの大きさの剣のかたちのツタの塊。

木の板を運んだり、その板を組んだり、柱を立てたりしている腕と目と口がある巨大サボテン。

石を食べてはドツスンドツスン動いて、口の中に入れた石を吐き出して運んでいる目と大きな口がある巨大カボチャ。

それらそれぞれ2〜4体ほどが、その大きさに似合わない細やかな動きで活動していた。

「何してるんだろ……？」

「木で建物を、建ててる……のかな？」

たぶんだけど、リオネラちゃんの言う通りだとは思う。

マイス君のお家のすぐそばの土地に積まれた石と立てられた柱からして、今あるお家ほどは無いとは思うけど、結構な大きさの建物ができてしまいうさだ。

そんなことを考えてると、リオネラちゃんのすぐそばでフワフワ浮いてるホロホロ君たちが目の前の光景を眺めながら言ってきた。

「この変なモンスターたちだけども、ぜってえマイスのやつが一枚噛んでるぜ」

「まあ、ここが彼の家なんだから何かしら関係はしているとは思うけど……」

作業をしている謎の存在たちは、私たちのことなんて気にせず黙々と作業を続けている。襲ってきそうな敵意も全然無いからひとまずは安全かな。

「とりあえず、邪魔にならないようにお家のほうに——」

「行こう」って言う前に気がついた。ちょうどお家の影になっていた方から大きな『ハンマー』を持ったマイス君が出てくることに。

「あつ、フィリーさん、リオネラさん、それにホロホロとアラニーヤも！　こんにちは!!」

マイス君がこっちに気がついて、駆け寄ってくる。

その様子は、この前に会った時のような元気の無い感じじゃなくて、まさにマイス君っていうイメージ通りの元気いっぱいな感じだった。

私はリオネラちゃんの方に顔を向ける。リオネラちゃんもちようどこっちを見てきていて、その顔はパアツつと明るくなった。

「よかったー!!」

私とリオネラちゃんは一緒になって喜んだ。お互いの手を握ってピョンピョン飛び跳ねちゃったりしちやった。

ふたりとも手に持っていたカゴを落としてたこととか、マイルス君が状況が飲み込めなくて首をかしげてたりもしていたけどね……。

「とりあえず、家に入らない？」というマイルス君の言葉で、いったんお家に入ってからお話しすることになった。

持ってきていた香茶とお菓子をテーブルに出して、それぞれソファーやイスに座ってお喋りをはじめ……いろいろと騒がしくもある外の様子についてとか、話していった。

「えっと、あの作業しているのはモンスターじゃなくて『アクティブシード』って種から成長したので、あれ以外にもいろんな種類があつて……ううん、頭がパンクしちやいそうだよ……」

マイルス君からあの作業している子たちのことを聞いたけど、なんだか魔法みたいに信じられないくらいのもので、すつごくビックリしちゃつてて理解が追いつかなくなっちゃった。

「そ、そういえば、ロロナちゃんから聞いたことあつたかも……たしか、マイルスくんが『錬金術』でつくつたって」「うん、一応はそうなんだ。……というか、その話は結構広まつてたりするのかなあ？」

リオネラちゃんは何か知つてたみたい。ロロナって名前はこれまでも、おねえちゃんやマイルス君の話の中で聞いたことはある……あんまり知らないけど。

他にも色々なことをお話した。

香茶やお菓子のこと、『ウオルフ』とこなーちゃんのこと、『モンスター小屋』や『離れ』を建てる計画のこと……

でも、結局マイルス君が元気が無かつたことについては一度も触れずにいた。

無理をして元気なフリをしているならちゃんと聞いて解決したほ

うが良いと思うけど、そういうわけでもなさそうだったからリオネラ
ちゃんと小声で話し合っつて触れないことにした。……きつとこれ
で良かっただろうと思ってる。

マイス 「夏の日の街」

職人通り

日に日に暑くなっているここ最近。今僕が歩いているこの石の敷き詰められた道は少なからず熱を帯びている。

まさに「夏、真っ盛り」だ。

「すっかり忘れてたけど、『王宮受付』最近行ってなかったんだよね……」

正直なところ、いつ以来なのかは覚えていない。

『離れ』と『モンスター小屋』を建てはじめてからは、それらに熱中しすぎていて……朝起きて、畑仕事して、建築して……といったサイクルの生活になってしまっていた。

それ以外には、時折こなーをホムちゃんのところに連れていったり、雑貨屋さんを種買いに行ったり、家にお客さんが来たらおもてなししていたことが少々あった程度だ。『職人通り』よりも街の奥には行っていなかった。

その建築もおおよそのかたちは完成していて、あとは内装や細かい場所のみってところまで出来ている。

一区切りがついたというところで、今日はちよつと気分転換に街に繰り出したんだけど……そこで『王宮受付』のことを思い出したのだ。「フリーさんは家に来てくれたりしてるから会ってるけど、エステイさんと会うのは久しぶりだな……」

王宮受付

「こんにちは！エステイさん！……って、どうしたんですか？なん

だか元気が無いですけど……？」

「あー、マイルス君 おひさしー……」

「ぶり」のたった二音を言わずにグデンと受付カウンターに突っ伏しているエステイさん。ほぼ完全に脱力している。

「……何かあったんですか？」

「あったっていうか、あつてるというか……」

エステイさんは、顔をあげたかと思えば、カウンターに指で「の」の字を書きながら唇を尖らせた

「二昨日からアストリッドさんの発案で、ロロナちゃんを中心とした女の子メンバーで『ネーベル湖畔』に水遊びに行っちゃってるのよ」
『『ネーベル湖畔』ですか……？』

確か『アーランドの街』から、おおよそ北東方向にある大きな湖だったかな？ 実際には行ったことは無いけど、以前入手した地図や図鑑等でその名前を目にした覚えがある。

「私にもお誘いがきたんだけど……見ての通り、仕事があつて行けなかったの。はあー……」

「仕事時間の半分くらいはこうしてボーっとしてるだけで暇なのに……」と本当に残念そうにぼやくエステイさんの周囲は、こころなしか他よりも薄暗く見える……

「そうそう。王宮に入れてもらってた茶葉なんだけど、あともう少ししたらきれそうだからまた用意してもらえるかしら？ 結構好評なのよ、あのお茶」

「気に入ってもらえてるなら嬉しいです！ それじゃあ、明日にでも持ってきますね」

「大丈夫？ 早いのはこつちとしては嬉しいんだけど、マイルス君 何だか色々建てたりしてるんでしょ？ ……お願いした私が言うのもなんだけど、無理しちゃうダメよ？」

そう心配そうに言ってくれるが、実際のところ建築は僕も作業をしたりはするけど 僕無しでもアクティブシードたちに大体の作業は

してもらえる。それに、そもそも建築自体に何か期限があるわけでもないのです、建築作業を後回しにしても、そんなに問題は無い。

「大丈夫ですよ。時間も十分にありますし、材料もちゃんと保管しますから」

「そう……うん、ならよろしくお願いね！」

「はい！」

久しぶりの会話や依頼等をすませて『王宮受付』を後にするマイルス。その後ろ姿を見送るエステイは、少し前にもこうしてマイルスを見送ったことを思い出していた。あの時とはマイルスの後ろ姿から見て取れる活気も、エステイ自身の感情も、まるで違っていたが——

「フリーやティファナから聞いてはいたけど、マイルス君、元気になってて本当に良かった」

安心したように、軽く息をついたエステイは、肩を回して……

「それはそれでよかったけど……はあ、私もコロナちゃんたちと水遊び行きたかったな」

今度は退屈そうにため息をついた。彼女にとって、とても退屈な受付仕事が再び始まった

『王宮受付』を後にし家へと帰るために街中を行っていると、見知った人が歩いてくるのが見えた。

「ステルクさん、こんにちは！」

「むっ、君か。元気そうで何よりだ」

ステルクさんは立ち止まって僕の挨拶に応えてくれる。

そして、そのとき気がついたんだけど、ステルクさんの後ろにはステルクさんと同じ騎士の制服を身にまとった人が3人ついてきていた。

騎士を連れて歩いているの見るのは初めてで少し驚いたが、僕は後ろの人たちにもお辞儀をして挨拶をする。3人はお辞儀を返して

くれたんだけど、皆なんとなくヨロヨロとしていて元気が無さそうだった。

「どうかしたのかな？」と思ったけど、それを問いかける前にステルクさんが後ろの3人に、振り返りながら口を開いた。

「少しばかり話すことがあるから、君たちは先に王宮に戻り普段通りの仕事に戻っておいてくれ」

ステルクさんの言葉に3人は返事をし、王宮のほうへと去っていった……

「あの3人、疲れているみたいでしたけど……何かあったんですか？」
今はちようにど何かの仕事を終えた帰りだったのかな？

もしかしたら、ステルクさんを入れた騎士4人で街の外に現れた凶悪なモンスターを討伐したりでもしたとか……？

あまり知らない騎士の仕事に 想像を膨らませたが、ステルクさんの口から漏れたのはため息だった。

「アレはただの夏バテだ」

「えっ」

「……最近の暑さでダラけてしまっている騎士が多くてな……物によりかかりながら事務にあたりたり、背筋を伸ばして立たない気の緩んだ騎士がいるのだ」

なるほど、それであんなに疲れていそうだったんだ。

そう僕は納得しかけたが……

「だから、そういった者たちをつい先ほど演習場まで連れて行き鍛錬をしていたのだ。気の緩みを叩き直すにはそれが一番良いからな」

……暑さからきた部分もあっただろうけど、ステルクさん指導の下の鍛錬が追い討ちをかけてきて、あの疲れのようなのだとわかった。気の緩みが直りしっかりする前に、鍛錬による疲れから立ったまま眠ってしまったりしてないか心配だ。

「って、あれ？」

騎士の人たちにステルクさんが「普段通りの仕事」と言っていたから、特別な仕事があつたのだらうと思つただけで、そうではなかつたようだ……となると、王宮からは4人の騎士が仕事から抜けていたことになる。……それで王宮の運営に何も問題は無いのだろうか？

でも、問題があつたなら、僕が行つてた『王宮受付』で何かさわぎでもあるだらう——けど、別段いつもと変わったところは無かつたし……んん？

「もしかして、騎士つて意外と暇なのかな……？」

「グツ……!？」

あつ、ついうっかり口に出してしまつていたみたいだ。

ただ、ステルクさんの表情を見ると、何とも難しそうな顔をしているので、もしかしたらステルクさん自身も感じていたのかもしれない。

「……確かにこれといった目立つ仕事は無いが、王宮の警備などの仕事……」

「でもこの街、街中でも何か事件があつたりすることも無いくらい平和なんですけど……？」

「非常時には何かがあるかはわからないが……王も「キミ達に仕事が少ないのは平和なことでもいいじゃないか」とおっしゃられて……」
「か、王宮から抜け出した王を探し回るのが一番大きな仕事な気が」

段々とステルクさんのまとう空気が重くなって来てしまった。この空気を変えるために何か別の話題を出さないと……！

「そうだ！ 仕事の忙しい時期といえど『王国祭』ですけど、今年ももう催し物とかの案は出ていたりするんですか？」

「むっ……いや、案はいくらか出ていたりはするそうだが……」

ステルクさんが新しい話題に上手くのつてくれた！

「去年行われた『キャベツ祭』などもそうなのだが、エステイ先輩たちが中心になって案をまとめ上げた後、決定するまで私は内容はわからなくてな……」

「大抵は準備するギリギリまで教えてもらえないのだ。何故だろうか」と、不思議そうにステルクさんは言った。

僕の印象ではあるが、結構騎士の中でも上の方だと思われるステルクさんにギリギリまで内容が伝わらないのは果たして大丈夫なんだろうか？ ……一応これまで問題無く毎年開催できているみたいだけども。

「そういえばこの前、先輩に「今年はステルク君に盛り上げてもらおうよ！」と言われたのだが、もしかしたら『王国祭』の催し物のことだったのかもしれないな」

「へえ！ それは気になりますし、楽しみですな」

マイス 「なんとかとかなんとかは紙一重」

マイスの家

「よしっ、あとはコレだけかな？」

目の前にある建築時に余った木材をまとめ上げてロープで縛り上げる。そしてそれを 僕のそばにいた『アクティブシード』の『はにわサボテン』に渡した。

「それじゃあ、これが最後。木材置き場に持って行ってね」

そう僕が言うと、「了解した」という意味だろうか軽く頷くような動作をした後、『はにわサボテン』は家の作業場の裏の方へと歩いて（跳ねて？）いった。

「遂に完成だね……」

目をやるのは、もどからあった家に隣接するように建てられた2軒の建物。

そう、『離れ』と『モンスター小屋』が完成したのだ。

内装の確認は、自分でした後になーとウォルフにも確認してもらった。『ウォルフ』は『モンスター小屋』の家のベッドルームに勝るとも劣らない広々空間や寝床を気に入ってくれたようだし、こなーも『離れ』の内装を一通り見てまわった後、のんびりくつろぎ落ち着いていたようだったのでホムちゃんがまた泊まりに来た時も問題無く過ごせるだろう。

そして、もとあった家からもすぐに行けるように簡単な通路もつくったので、抜かりはないはず。

「ほう、他にも種類があるとは思っていたが人型に近いモノもあったのだな」

その突然そばから聞こえてきた声に少し驚きながらもそちらに顔を向けると、アストリッドさんがいた。僕の家に来てのは初めて

ではないだろうか？

「話には聞いていたが、本当に家を建てていたとは。まあ、彼らの力を借りてこそ出来たことなのかもしれないがな」

そう言いながらアストリッドさんは僕に何かを投げ渡してきた。受け取ったそれを確認してみると、『アクティブシード』の『ジャックの種』だった。

「なんでアストリッドさんが？」と一瞬思ったが、半年ほど前の今年の初めに 貸し出していたことを思い出し納得した。

「さて、他に何か面白そうなものはないか？」

「えっ？」

「なんだ？ その種を貸し出した程度で借りを返せたと思っているのか？ 三倍返しなのだから、まだまだ何かしらの要求はするぞ」

そういうえば、そういう話だったっけ？

まあ、貸し借りのことは憶えて無くて、アストリッドさんが「面白い」と思うものがわからなくて声を出して驚いただけなんだけど……

「先程の動くサボテンでもいいのだが、あまり変わり映えしないしな……」

辺りに目をやり何かないかと考えるような仕草をするアストリッドさんを見て、僕はあることを思い出す。

「アストリッドさんが帰ってきたっていうことは、ロロナたちも帰ってきたんですね」

「むっ？」

「エステイさんから聞いてたんですけど、『ネーベル湖畔』ってところに水遊びに行っていたって」

「ああなるほど、エステイ嬢から聞いたのか」

納得したように頷いたかと思えば、腕を組んでニヤニヤ笑いだした。

「いやー、至福の時間だったぞ アレは。ん？ どうした？ 羨ましいのか？」

「羨ましいですよー。前は町の中にある湖で、みんなで遊んだりしてましたから」

そう少し懐かしんでいたが、ふと、アストリッドさんの顔からいつの間にか笑みが消えていたのに気がつき、そちらに意識を向けた。

「どうしたんですか?」

「予想していた返答とは違ったものでな……これはコロナには気は無いと思っただけか、ただ単にそこまで深く考えていないだけか?」

「?」

「まあいい。それと――

錬金術をいかように用いても、キミを元の世界に帰すことは不可能だからな。変に希望は持たない方がいいぞ」

「へえ、やっぱりそうなんですね。錬金術は凄いと思ってはいたけど、さすがに無理があるだろうなーって……」

……………あれ?

「あの……別世界じゃないかなってこと、アストリッドさんに話しましたっけ?」

「聞いてはいない。だが、むしろこの天才錬金術士の私が、その『アクティブシード』を手にした時点でそれくらい推測できないとでも思ったのか?」

「いやいやいや!? なんでわかったんですか!?!」

アストリッドさんは「やれやれ……そこから説明しなければならんか」と面倒くさそうにため息を吐いた。

『『アクティブシード』に関しては、何故意思があるように動いたりするか等わからない部分もあるが、動力についてはおおよそわわわっている。私でも知りえない「未知のエネルギー」だ」

未知のエネルギー? 思い浮かぶものといえば 『ルーン』だろう

か？

「活動後の『アクティブシード』が薄黒い色の種になって一定以上の休息を必要とするのは、このエネルギーが枯渇し、補充する必要があるからだ。エネルギーを調べたところ、錬金術でいう『エレメント』や『エーテル』に近いものでありながら、これまでに一度も発見されていないものだとわかった。しかし、『アクティブシード』が自らそれを生成している様子は無く、それこそ植物の如く空気中から摂取しているようだった……」

色々とわからない言葉が出てくるうえに、僕が知らない『アクティブシード』のことまで……

「その「未知のエネルギー」だが、そう難しくない方法で空気中から摘み取ってきてだな……すると、何故これまで発見されなかったのか——まあ簡単な話だ。これまでは存在しなかったというだけのことだ」

「え？それっておかしくないですか？」

「おかしくなどないぞ？ 生み出す存在、もしくは 生み出される環境が つい最近できたとすれば 何の問題もないだろう？」

「そうですか……？」

「まあそれで『アクティブシード』の持ち主であるキミが真っ先に思い浮かび、聞いたことも無いような場所から来たと言うのだから、「別世界から、何らかの事情でその世界の理ごとこの世界に来た」という予測が立ったのだ」

確かに筋が通らないわけでは無さそうな話だけど、よくそんな発想にたどり着くことができたものだと思う。

そう僕が思っていると、アストリッドさんは 何故か少し呆れたようにため息をついた。

「相変わらず顔によく出るな、キミは……。なに、確信に変わったのはつい最近で、キミが元気が無いとコロナから聞いた時に『街から離れたところに住みたがっていたのは、元の世界に帰る手段を探る実験か何かをするためで、それが成功しなかったから元気が無くなったのでは？』と考えてな」

「……本当になんでそこまでわかるんですか？」

「単なる勘だ」

真顔でそんなにキツパリと言われると何も言えなくなってしまう。

「さて、キミを元の世界に帰すことが不可能な理由だが……実際のところ、帰すこと自体は可能だ」

「可能なのに不可能なんですか？」

「難しい内容は省略するが……端的に言うと、キミがいた世界の物があるならば、そちらの世界への『道』を開くことは出来る。が、どんなに上手く開いたとしても時間軸の固定ができず、ブレ幅は少なくとも5年、最悪 数百年も異なる時間に飛ばされる」

「……………」

「そちらの世界に行つてから時間軸を移動するという手も無くは無いが、こちらの世界で生み出されたものがそちらの世界でも正常に作動する保証もない。故に不可能というわけだ」

確かに、それは不可能なのとほぼ同じだろう。諦めていたとはいえ、少し残念に思つてしまっている自分もいる。

「私から伝えられることは以上だ」

そう言つたアストリッドさんに僕は頭を下げた。

「なんていうか、その……ありがとうございます」

「礼を言われるようなことはしていない。色々と考えたのも暇潰しの一環だ」

「それでもです」

「……………まあいい。何か面白いものがないか、物色させてもらうぞ」

『面白いもの』を探しに家の中に入って行こうとしていたアストリッドさんの後をついていっていたのだが、不意にアストリッドさんの動きが止まった。

何事かとアストリッドさんの視線をたどってみると、家の前にある畑の方だった。

畑に何か興味が引かれるものでもあったのだろうか？ 目立つも

のといえば、先日コオル君から買い付けた『小麦』だが……こういう穀物を育てるのは初めてだったので手探りだったのだが、何かおかしいところがあったりしたのかもしれない。

アストリッドさんが歩き出し、『小麦』よりも向こう側で育てていたものの方へと向かって行った。

「おい、コレはなんだ？」

「それは 前に錬金術でつくった種が育った植物から種を取って増やして育ててるものです」

そう、前にホムちゃんがお泊りに来た時に僕の『テキトー錬金術』（ホムちゃん命名）で偶然つくられたものだ。まさか、『シアレンス』にいた頃によく見ていた植物が生えてくるとは思いもしなかったが。

「参考までに聞きたいのだが、材料はなんだ？」

「えっと『マンドラゴラの根』と『コバルトベリー』それに『マジックグラス』です」

「なんだそれは!?! 『ヒーリングサルヴ』の材料じゃないか!?!」

「そうですね、本当は『ヒーリングサルヴ』を調合しようとしてましたし……」

「どういうことだ……!?! コレは限りなく『アレ』に近い性質を持っているのに……そんな簡単な材料でできてしまうというのか? いや、しかし——」

あれ? 何やら一人で呟き、考え込みはじめている。

「……」一応聞くが、コレには名前があったりするのかな?」

「ありますよ? 『エリ草』っていうんです」

「……………」

「……………」

「『えりくや』?」

「はい、『エリ草』です」

「………… 『えりくや』?」

「だから『エリ草』ですって」

「……………」

「ふざけているのかー!!」

「ええ!?! ふ、ふざけてなんていませんよ!?! それに、『シアレンス』だと雑貨屋で普通に売ってる植物ですよ『エリ草』って」

「はあー!?!」

いきなりどうしたんだろう? こんな風に叫ぶアストリッドさんなんて、見たことが無い……………というか、想像も出来なかったんだけど……………

その数分後、落ち着きを取り戻したアストリッドさんが『『エリ草』を数本持ち帰りたい』と言ってきたので、分けてあげた。ひとつでもあれば種はつくれるので全然問題は無い。

それと、僕が「今、『エリ草』で 新しい薬が作れないか試してるんです」と言うと、アストリッドさんは「ああ、それはできるだろうな。とんでもなく凄い薬が……………」と笑いながら言ってくれた

けど、何故かアストリッドさんの目は笑ってなかった……………どうしてだろう?

マイス 「モコモコ・1」

??????
マイスの家
??????

目の前にあるのは扉、背伸びをしないと手が届かない位置にドアノブがある。

察しが良ければわかるのかも知れないけど、今 僕はモコモコの姿になっっている。そして、この扉は僕の家の玄関の扉だ。

今の状況はさして珍しいことじゃない。

今日はフリーさんとリオネラさんたちが遊びに来ている。フリーさんはモコモコ相手以外にもお喋りができるようにはなっけていて、モコモコがいない状態でも僕の家遊びに来たりするようになった。それはリオネラさんの存在も大きかったんじゃないかな？

だけど やっぱり時折寂しそうにするので、以前と同じように 人の状態の僕が外に出かけるフリをして『モコモコ』に変身し入れ替わるよに家に入る、今ちようどその時なのだ。

ガチャ キイ…………

「あつ！ モコちゃん、ひさしぶり！」

「モコッ！」

真っ先に僕に気がついたのはフリーさん。僕は片手をビシツと拳げながら返事をする。

「いらっしやい……モコちゃん」

「まあ「いらっしやい」つつつても……」

「わたしたちの家じゃないんだけどね」

「モコッ」

リオネラさんの挨拶にホロホロとアラーニヤがちよつとした口出しをするのを聞きながらも、僕はリオネラさんに挨拶を返した。

そして扉を閉めた後、いつものように流しの方へと行き 手を洗う。

元々は、初めてモコモコの姿でフリーさんに会う際に、「彼女の警

戒心を少しでも解ければ」と思いはじめたこの手洗いだけど、すっかり身に染みついてしまっていた。別に悪い事ではないからいいんだけどね。

ソファアーに並んで座るフィリーさんとリオネラさん。ホロホロとアラニーヤはリオネラさんの隣に一緒に座っていて、僕はといえば………

「ふふっ、ひさしぶりのモコちゃんのモフモフ……!」

「も、モコオウ……」

フィリーさんの膝の上に座らされて、もの凄くモフモフされてます。

ときどきほおずりされたり、ほっぺをフニフニ触ってきて　こそばゆくてしかたがない………というか、顔は確認できないけど声はとろけてしまってるよ？

そんな様子を見ているリオネラさんが「加減してあげてね？　フィリーちゃん」て言ってくれたんだけど、フィリーさんは「あとちよつとー……」としか言わない………どうしてこうなった。

フィリーさんを止めるのを諦めたりオネラさんだったけど、「あつ、そうだ!」と何やらゴソゴソしでした。

「どうしたんだろう?」と、モフモフされながらも　そっちをみると、ちやうど僕の目の前に何かが差し出された。

「あの……これ、おみあげ」

リオネラさんから差し出されたものは『虹珊瑚』。その名の通り、虹色に輝くサンゴで『ネーベル湖畔』で採れる希少なものだ。

「あのね、私　このあいだ『ネーベル湖畔』に行ってきたの。知ってる? 『ネーベル湖畔』?」

「モコッ」

リオネラさんの問いかけに、僕は頷きながら返事をする。

「えっ……避けられー!?!」

頷いた時に、ちょうどフィリーさんが 頭をなでようとしていたみたいで、偶然にもその手を避けてしまったらしい。フィリーさんがシヨックを受けていた……けど、それはスルー。相手をしてたらキリが無い予感がしたからだ。

「その『ネーベル湖畔』で採れた『虹珊瑚』っていうものなんだけど……モコちゃん、ハイどうぞ」

「モコッコ、モーコー！」

「あのアストリッドって ロロナの師匠が言うには、結構貴重なものらしいけど……まあオレたちには関係ねえけどな」

「これだけキレイなだけでも、十分に価値があるでしょ」

受け取った『虹珊瑚』を見つめる。

このままでも綺麗だけど、装飾品なんかに使ってみるのもいいってリオネラさんが言ってたね……実のところ人間時のときにもお土産として同じく『虹珊瑚』を受け取って、簡単な説明も聞いていたからおおよそわかっている。

「それで、『ネーベル湖畔』に行つたときのことなんだけど、パメラさんって言う——」

そこからはリオネラさんによる土産話が始まった。

僕をモフモフするのを満足し終えたフィリーさんも途中から会話に混ざったり、賑やかなのを聞きつけたウォルフが背中にななを乗つけた状態で来たりと、かなり賑やかになった。

「そろそろ戻ろうかな？」そう思い、外の林の中で人の姿に変身するためにフィリーさんとリオネラさんに「またね」の挨拶のをして外に出ようとしたときだ。

「モコちゃん、ちよつといいかな？」

「モコ？」

フィリーさんの声に立ち止まり振り返る。どうしたんだらうか？

「あのね、ここにねモンスターさん用のお家ができたけど……モコちゃん住んでみたくなかないかな　って」

「……それ、いいと思う！やっぱり、外で暮らすのは色々危ないよ。モコちゃんやウオルフくんみたいに優しい子に　襲いかかってくるようなモンスターもいると思うし……」

フィリーさんの提案にリオネラさんが頷く。

「私たちも一緒にマイルス君にお願いするよ……！どう、かな？」

ふたりは顔を見合わせた後　再び僕に顔を向け、問いかけてきた。
……もちろん、僕の返事は決まっている。

「モコ、モコモ」

僕は首を横に振った。そして、いつものように笑顔で手を振りながら　林の中へと入っていく。ふたりが何か言う声が聞こえるけど、それには耳をかたむけずに歩いていく。

「どうして」と理由を聞かれたら何も言えない。言うということは、僕が　人とモンスターのハーフであることをばらしてしまうことになるからだ。……これは『シアレンス』にいたころからだけど、やっぱり他人と違うのは受け入れてもらえるか不安で怖くて仕方がない……。

あつても、新しいモンスターをウチに招待してみるのには悪くないかもしれない。こなーや今いる『ウオルフ』と仲良くなれそうな子がいたらいいんだけど……。

—————

「どこにいくんだらう？」

『近くの森』のどこかにお家があるのかな……？」

「……………どうすんだ　これ？」

「やあ？」

《 続 く … 》

ファイリー「モコモコ・2」

モコちゃんに　　マイス君のお家の『モンスター小屋』に住んでみてはどうか聞いて、それを断られた私とリオネラちゃんは、モコちゃんが出ていった外を見ている。その視界の中には　　まだモコちゃんの後ろ姿が見える

「どうしてマイスくんのお家に住むのは　　イヤなのかな……」

「もしかして、ケンカしてるとかかしら……?」

「マイスと　　あの毛玉がか? いやあソレは考え辛くねえか?」

リオネラちゃん、それにアラニーちゃんやホロホロ君も「なんだろう」と悩んで理由を考えてる。私は……思いつかない………けど!

「……よし! 決めた!」

私はモコちゃんを追いかけられるために　　外へと歩き出す。そしたら、いきなりの行動に驚いたリオネラちゃんが驚きながら聞いてきた
「どどど、どうしたの!」

「モコちゃんの後をこっそり追いかけてみるの……モコちゃんがここに住めない理由が、モコちゃんの行く先に　　あるような気がするからっ!」

もしかしたら、モコちゃんの家族か友達が　　お腹を空かせて帰りを待ってる、とか　　そういう理由かもしれない。そういうことだったら私だって力になってあげることができるかもしれない

「……! それなら　　私も行くよ!!」

「うん、一緒に行くう!」

リオネラちゃんと一緒に、急ぎ足で、そしてなるべく静かに　　追いかけはじめる。モコちゃんを見失ってしまわないように……

|| || || || || || || || || ||

「おいおい、飛び出しちゃっても大丈夫なのか?」

「うーん……あんまり良くはないけど、リオネラも行っちゃってるから

ついてくしかないじゃない」

「そりやそうだけどよお」

「マイルスが帰ってきた時に誰もいなくて、心配させちゃったら……まあ 素直に理由を話すしかないんじゃないかしら？」

そうブツクサ言いながらも、ホロホロとアラニーヤはリオネラの後を追うように飛んでいくのだった……

＝＝＝＝＝＝

「……ここって もう『近くの森』に入ってるのかな？」

「うん。たぶん「ぶにぶに林」って呼ばれてるところの近くだよ……」

しげみに隠れながらモコちゃんを追いかけてきたけど、周りはうっそうとした森になってきた

リオネラちゃんは旅の大道芸人で いろんなところを旅してきたらしいし、アーランドに来てからは 錬金術士のロロナって人の採取のお手伝いで いろんな採取地にも行ってるって言った

でも、私は アーランドの街の外で行ったことのある場所はマイルス君のお家だけ……。勢いのまま ここまで来ちゃったけど、いまさらになって怖くなってきちゃった……

「……あつ、また移動しはじめたよ」

リオネラちゃんの声を聞いて、モコちゃんの様子を陰からうかがう。そして、次 身を隠す場所を探す

「よし、あの岩陰なら大丈夫そう」

駆け足で岩陰まで行き 身を隠す。岩陰から顔を覗かせるとモコちゃんが移動しているのが見れることを確認もした。そして、リオネラちゃんも来れるようにスペースを開けようと 私は奥の方へとさがった

ムニヨ

「きゃっ？」

さがろうとした時、何かを踏んでしまい こけて尻餅をついてしまった

「いたたっ……あれ？」

「ぶにい……」

尻餅をついてしまった私が、何を踏んでしまったのだろうか と足元を見てみると、何やら 水色の小さくて真ん丸な子が私を睨んでいた。その子の頭には靴で踏まれたような跡が……

「ファイリーちゃん!!その『ぶに』からすぐに離れ——」

視界の端で、リオネラちゃんが いつもよりも大きな声を出しながら私のほうへ駆け寄ってくるのが 少し遠くに見え……

「ぶうー……うーに……うーに!!」

私への呼びかけは、甲高い鳴き声にかき消された。その音の大きさに 反射的に耳を手でふさいでいた。そして、その鳴き声が途切れた後に聞こえてきたのは

「ぶに?」「ぶぶぶつ」「ぶーにい……」「ぶににー!」「ぶー」「ぶにーに!」

沢山の『ぶに』。なかには色が違うのもいて、それらが 色々な陰や隙間からどんどん出てきた。それに加えて……

「プウーニイー」

「ひいっ……!?!」

私がいるところよりも一段高い地面の上から、王冠のようなものをかぶった 人ほどの大きさがありそうな大きな『ぶに』がでてきた

「ファイリーちゃん!逃げて!!」

リオネラちゃんはすぐ近くまでぶにに囲まれていて 悪戦苦闘していた

対して 私の周りにはぶには近づいてきていなかった。でもそれはきつと、私を狙っている この大きなぶにの攻撃に巻き込まれたくないから

「プウウ………ニイ!!」

大きなぶには 私めがけて大きく跳んだ

「なによ！このぷに量!？」

「知らねえよ!?!とにかく、今は四の五の言ってられねえぞ、リオネラ!!」

「わかってるよ!でも……!!」

アラーニヤちゃん、ホロホロ君、そしてリオネラちゃんの声がないんだか遠く感じ……私の足はなんでか動かなかった

「ハアアツツ!!」

風を切る音、私の髪を激しく揺らす突風

とつさにまぶたを閉じてしまった私が まぶたを開いたときに見えたのは……握り拳をつくった片腕を空に向けて伸ばし、反対の腕は脇をしめた マイス君の姿だった

「マイス君!?!」

私の声は 偶然リオネラちゃんと重なった

どうしてここに!?!と疑問が口に出る前に マイス君のあたりに影がおちた。ハツつと上を見たら、さつきよりも高い位置から 大きいぷにが落ちてきていた

「危ないー!」

「ふっ」

私はとつさに叫んだんだけど、マイス君はぷにを 両手を使い頭の上で受け止めて そのまま持ち上げてしまった。いくら柔らかかそうに見える目のぷにでも人ほどの大きさがあるんだから かなり重いはずなのに、何ともなさそうだった

「よつと……ごめんね」

そう言いながらミス君は、ぷにを地面に降ろした。よくよく見てみると、ぷには目をグルグルと回していた

そのぷにをミス君が何回かなでると、ぷにの目がパチリとしつかり開いて……………

「ぷ、プニーーー!!?」

一目散に逃げ出した。それに続くように、普通の大きさのぷにたちも一斉に散らばって逃げ出した

「フィリーさん、リオネラさん…大丈夫ですか?」

「うん、私は大丈夫だけど……フィリーちゃんは……?」

「こ、怖がつだよぉー!!」

いまさら 自分がどういふ状況に置かれていたかが理解できて、声が震えて 涙があふれ出てきた

「ごめんなさい、フィリーさん……」

「ぐしゅん……?」

「ミスくんが謝ることじゃないよ。私が…ちゃんとそばにいたら守ってあげれた、から……」

私が涙を止めようとしているうちに、ミス君とリオネラちゃんが暗い顔になっていた

「とにかく、早くここから出ねえか?」

「そうね、今 またモンスターにでくわしたくないし」

ホロホロ君とアラニーヤちゃんの提案に 私たちは頷いた

「フィリーちゃん、立てる?」

「あつ、そ それが……」

足に上手く力が入らなくて 私は尻餅をついたままの体勢だった
「こここつ、腰が抜けちゃったみたい……はははつ」

ヒョイツ

「へっ?」

「これなら帰れるかな？」

気づいたらミス君に抱き上げられてた……つて!?こ、これって『お姫さま抱っこ』?!?!顔から火が出ちやいそうだし、心臓もバクバクいってて……!!

「そそそっ?!?そうだね?!?ミスくんのお家はどつちだったかなあ?!?」

リオネラちゃんの声も上ずってて、裏返っちゃったりしてるよ!うわあ、リオネラちゃんたちに見られてるんだ!!すっごく恥ずかしいけど、どどどどうしよう!?

「こつちですよ」

ミス君はミス君でいつも通り……ううん、さつきみたいにまだ何だか辛そうな顔をしている。気にはなったけど、こんな状態じゃあ上手く喋れそうになくて 私は口を堅く閉じることしかできなかつた

ミス君が歩きはじめて 抱っこされてる私は少しゆすられる

ふと視界の端に 何か淡く光るものが見えた気がした。そこはさつきまで私が尻餅をついてたところのすぐそば

その光ったものは地面に落ちている『虹珊瑚』だった

尻餅をついたときは何もなかった気がするんだけど……もしかして、ミス君のかな? でも、リオネラちゃんから貰ってた時に「初めて見た」って言ってて、その後ミス君のお家のコンテナに すぐにしまったたような……

あれ?じゃああの『虹珊瑚』は………??

マイス 「人とモンスターと……」

「ふう、もうこんな時間になっちゃったか……」

陽は沈んで 辺りは随分と暗くなつてきていた。生い茂る木々の隙間からこぼれ落ちてくる月明かりが 夜の森の街道をまばらに照らし、僕はそこをモコモコの姿でテツテク駆け足で 家へと向かつて帰っている

僕が今いるのは『近くの森』と呼ばれる場所。ここに来たのには理由があった

先日、モコモコの姿で家から出て すぐそばの林の中で人の姿に変身しようとしていたときのこと

フィリーさんたちが後を着けてきている事に気がつき、彼女たちを振り払ってから変身しようと逃げ回っていた。そして 振り払えたと思い変身したちようどその時に『ぷに』の甲高い鳴き声が聞こえて、急いで声が聞こえた方へと駆けつけたら……

と、まあ色々であったのだけど、その時にアッパーを当ててしまった ぷに がいた

フィリーさんを助けるためとはいっても、このままなのも気が引けたので、お詫びもかねて傷に効く薬と食べ物も ぷにたちのもとへと持って行ったのだ

結果だけでいえば、ぷにたちは喜んでくれて 一応は許してもらえた。けど、やっぱり僕の認識は甘いのだと思った

『シアレンス』でも『人の町』と『モンスターの集落』とで敵対意識があつたりしていたが、それでもモンスターと仲良くする人も多くいたし、僕が町でモンスターを連れ歩いても何の問題も無く、なでたりする人もいたぐらいだ

でも、『アーランド』では 人からモンスターへの意識も、モンスターから人への意識も、ずいぶん違うものだ実感した

「でも、どっちにもやりたいことがあつて、譲れないからぶつかっちゃ

うんだよな……」

モンスターたちの縄張りに入る人は、街への移動中であつたり物を作るのに必要な素材を手に入れるため といった理由があつて、それらは生活に必要なことであつて やめるわけにもいかない

……僕が 両方の立場に立つてしまつてしまつてから、割り切れない部分もある。完全にどちらか一方に付いてしまえば楽なのかもしれない

ガサツ

「あつ」

それは ごく小さな音と声だつたけど、僕の耳にはしっかりと聞こえた。反射的に そちらへと目を向ける

そこにいたのはホムちゃんだつた

僕はすぐさま逃げ出す用意をする

理由は簡単。この世界ではモンスターをサーチ&テストロイするということと、ホムちゃんが強いということからだ

実際にホムちゃんが戦っているところを見たことはないけど、曰く ロロナよりも頭脳面・身体能力面が勝っているというのを ホムちゃんに初めて会つた時にアストリッドさんから聞いていた

それに、ロロナに頼まれて 一人で採取地へ行き、錬金術の材料を採ってきたりもするらしい。なら それなり以上に戦えるに違いない

「待つてくださいい」

走りだした僕を止めたのは ホムちゃんの声だつた。走るのをやめて立ち止まったが距離を保ち、ホムちゃんの方へと振り返る

「おにいちゃんの前にいるウォルフと同じく青い布を巻いたモンスター……人との争いを好まないモンスターだと ホムは判別します。違いますか?」

「モ」

ホムちゃんが その話を知っていることに少し驚きながらも、僕は

返事をしながら頷いた。……ついでのいうと、僕のことを他の人の前でも「おにいちゃん」と呼んでいるということにも驚いた

「よかったです。……あの、申し訳ないのですが」

「モコモコー?」

「『アーランド』はどちらの方向にありますか?」

……え?

「ホムは今、『アーランド』がどの方角にあるのかわからなくなり、アトリエに帰ることが出来なくなっています」

「モ、モコモコー……」

それは つまり『迷子』ってことかな?意外というか、想像したこともなかったんだけど、ホムちゃんも迷子になったりするんだね……さすがにこれは おいていく理由なんて全くないわけで、帰り道を案内することにした

「モコー!」

僕は歩きながら片手をクルンクルンと回し、大きく手招きをした。多少オーバーアクションな気もしたけど、モコモコの小さな身体だったら ちょうど見やすいくらいじゃないだろうか

「ココツチに来い」と言っているのでしょうか?とりあえず ついていくしかないですね」

ホムちゃんは ちゃんと僕の後をついてきてくれているみたいで、僕はときどき振り返り 確認をしながら先導して歩いた

「モコッ!」

「あつ、あれは……」

森を抜けて なららかな丘を越えたあたりで、アーランドを街を囲むようにそびえる城壁が遠くに見えた

「モコーコ モッコ?」

ム 노력も虚しく、どうにも抜け出せそうにない。そのうちホムは諦めた

「そういえば、以前にマスターが言っていたモンスターに会いました」「ふえ？なんのこと？」

「青い布を首に巻いた、金色の毛の「モコモコ」と鳴くモンスターです。迷っていたホムに道を親切に教えてくれました」

「へえー！ジオさんから聞いてたけど、ほんとうに旅の人なんかを助けてたりするんだあ、あの子……また会いたいなあ」

リオネラ「私の秘密」

旅人の街道

「おつ、ソッチのもいいんじゃねえか？」

「そうね。それじゃありオネラ、採りましようか」

「う、うん」

今日はロロナちゃんの錬金術に使う材料を探りに『旅人の街道』まで来てます。クーデリアさんも一緒です

モンスターをある程度 追いついた後、手分けをして素材を収集しはじめてから少ししたときのことでした

「ロロナ、なんか見たこと無いのがあるんだけど……ちよつと、聞いてんの？」

クーデリアさんが 採取で見つけた素材のことをロロナちゃんに聞こうとしている声が 後ろのほうで聞こえてきた。ロロナちゃんの返事が無くて 少しイライラしてきてる…？

「もうっ!!返事くらいし…な…:…:…:」

「…ど、どうしたの?…つて、あ…:…:あれ?」

怒鳴り声が途中から変になったのが気になって振り返ってみただけど…:

「ろろろ!?ロロナちゃんがない!?!」

「あいつ、どこ行ったのよ!!」

私とクーデリアさんがあたりを見回してみたけど、ついさつきまで近くにいたはずのロロナちゃんが見当たらなかった

「はあ…:おおかた素材の採取に夢中になって よそに行っちゃってるんだと思うんだけど…:…:」

「私、探してくる…:!!」

「はあ!?ちよつと…:…:…:つて、もう行ってる。私たちまでバラバラになつたら意味ないつてのに…:…:」

「ロロナちゃん…ロロナちゃん…」

名前を呼びながら　ロロナちゃんのことを探し回りはじめて、それなりの時間がたった

「ホントにコツチの方にいるのかあ？」

「わからないわよ。何の手がかりもないんだから……」

ホロホロとアラ―ニヤがそんなことを話してるけど、わからないからといって探さないわけにはいかない。きつとロロナちゃんはひとりで寂しく不安がってると思うし、早く見つけてあげたい

「…え…りおちゃん！…ここだよー！」

ふいに遠くから聞こえてきた声。だけど、その声は間違いない……

「ロロナちゃんの声だ…！」

声のした方へと走り出す。あたりは薄く霧がかかっている。少し視界が悪いけど、そうかからないうちにロロナちゃんの姿が見えてきた

「ロロナちゃん！よかった…急にいなくなるから、どこに行っちゃったかと思ってる…」

「うう…ごめんね。ぼーっとしてたらいつの間にか……」

「オイオイ…大丈夫か、それ。もつとちゃんとしろよな」

ホロホロの言葉に　涙目になりながら「ご、ごめんなさい…」って言うロロナちゃん。その姿は　少し頼りないけど微笑ましくて、なんだかロロナちゃんらしかった

「とつ、とりあえず、日が暮れる前に元の場所まで戻ろう……あつ」

「そうだねー…りおちゃん、どうしたの？」

私が振り返った先には　道がある……それは私がロロナちゃんを探しに来たときに通ったから当然なんだけど……

その道が途中で三方向に別れていた

「……………私、どうやって来たんだっけ？」

「え……………ええええええええええ!!」

そもそも この『旅人の街道』は、街へと伸びる大きな一本の街道があり、そこから多方向への小道が枝分かれしたり交わったりして存在している場所。大きな街道こそ一本道で何の問題は無いのだけど、小道に入ればひとたび迷路のようなモノで 慣れない人は迷ってしまったりする。それは大きな街道から離れるほどに、だ

「ごめんね……………。わたしが迷子になったりしたから……………」

「ううん、私が、ちゃんと道を覚えておけば……………ごめんなさいっ！」

「りおちゃんは悪くないよ。わたしがすっかりしとけば……………ごめんなさい！」

「そんなことない。私が……………私が全部悪いの!ごめんなさい!ごめんなさい!」

「いつまで謝りあってるんだよ、こいつら」

「そうよねえ……………この状況が変わるわけでもないし……………」

私とロロナちゃんの謝りあいには ホロホロとアラニーヤが入ってくるまで続いた

そして、これからどうしようって行動に移そうとしたとき

「っ…ちよつと待ってリオネラー!何か来るわよ!!」

アラニーヤの警告にあたりを見渡し……………目よりも先に 耳がそれに気がついた

バサツ バサツ

はばたく音。そして、その音は私たちの前に姿を現した

『グリフォン』その強さは、同じ場所に住む他のモンスターから頭一つとびぬけていて、おそらくは『旅人の街道』で遭遇するモンスターの中でもトップクラスだ

「わ、わわ?…モンスター!?!」

ロロナちゃんの声に振り向くと、そっちには鳥型のモンスターが複

数体、取り囲むようにいる。一体だけなら何とでもなるけど、それが複数……その上『グリフォン』までいる

「こりやまたゾロゾロと出てきたなあ」

「戦うにしても、逃げるにしても、今の状況でこの数は……」

「ど、どど、どうしよう……？ね、りおちゃん？」

「大丈夫……」

「えっ」

「ちゃんと逃げられるから、安心して。ね？」

「う、うん……でも……」

私の言葉に 不安そうな顔をしながらも頷くコロナちゃんを見て、私はある種の覚悟を決める

「いいの？リオネラ」

「他に方法ないし……それに、コロナちゃんならきつと平気……だと、思うんだけど……」

アラニーヤの問いかけに 私は答える。やっぱり不安は拭いきれない……

「自身なさげだな。どうなっても知らねーぞ」

……けど、思い出されるのは一か月ほど前の『近くの森』での出来事がギリギリまで……いや、それ以上に迷ってしまったせいで、お友達達のフリーちゃんを危険な目に合わせてしまったこと。あの時、たまたま近くにマイスくんが通りかかって助けてくれたから何ともなかったけど、もしも マイスくんがいなかったら……そう考えると、自分が許せなかった

コロナちゃんを近くまで引き寄せて、手をしっかりと握る
「しっかりと掴まってね……行くよ……」

私は、私自身とコロナちゃんに『力』を巡らせた

何故か私だけが生まれながら持つ『力』。それは 物に触れたりせずに動かしたり浮かせたりできる『力』。私のしている「糸の無い人

形劇」のタネであり、私が旅をするようになった原因でもある

「え、え……ええええええええ!?」

今、その『力』で私自身とコロナちゃんを空へと飛ばしたのだ
こうなれば問題は解決できたも当然だった

囲んでいたモンスターたちは、いきなり飛んでいった私たちを見失
い追いかけてこれない。そして、地上からでは把握できない道のり
も、ところどころを木々に隠されていても 上空から見渡せば理解す
るのは難しくは無

「えつと……うん、あそこだ。……!?」

私たちがクーデリアさんと採取していた場所が確認でき、その近く
の街道まで飛んでいく

途中、気になるものをみてしまったけど、今はコロナちゃんと無事
に帰ることが優先だった

「ふう……ここまでくれば、もう……」

街道に降りたち、周囲を確認する。幸い 人もモンスターもおらず
問題はなさそうだ

「コロナちゃん、大丈夫?」

「う、うん……あの……えと……わたし、今、空飛んでた?」

「……………」

コロナちゃんの問いかけに 私は答えることができなかつた。
ずっと隠してきた秘密……一度は話すことを覚悟してたけど、いざと
なると口が重くなってしまう

「まあな。こいつの得意技だからよ」

何も言えない私に しびれをきらしたかのように、ホロホロがコロ
ナちゃんに行った

「ど、どうして? どうやって? りおちゃんがやった……んだよね?」

「それは……」

目の前であそこまでのことをやったんだから話さないわけにはい
かなくなってしまうている。けど……

「やっと見つけたわよっ！あんたたち、何勝手にどっか行ってるの
よー!!」

「あら、おむかえが来たみたいね」

少し遠くからクーデリアさんの怒鳴り声が聞こえてきた。アラ
ニヤの声に釣られて私とロロナちゃんがそちらを向くと、遠くから駆
けてくるクーデリアさんが見えた……ここからでも怒ってるのがわ
かる……

「あの……今度、ちゃんと説明するから……だから……」

「うん……」

話している途中でクーデリアさんが合流してきて、話しを聞かれた
ら少しまずいから……。そう自分に理由を言い聞かせながら、とりあ
えず今を切り抜ける

どちらにしても、そう遠くないうちに話さないといけないのだか
ら、ただほんの少しの先延ばしでしかないけど……

そして もう一つ、問題があった

飛んでいる間に見かけた 気になるもの……それは、マイスくんだ
たまたま『旅人の街道』に用があつて来ていたのか、私たちが採取
していた場所とは違う小道にいるのが見えた

それだけならまだいいんだけど……そのマイスくんが目が合つて
しまった気がした。つまり、私とロロナちゃんが飛んでいるのが見ら
れたかもしれないということだ

「かもしれない」というのには、一応理由がある

ホロホロとアラニヤくらいの小さいものであればそういうこと
は無いのだけど、人ほどの大きさのものを動かした際には、必要な力
が大きいのか それらが淡い光に包まれるのだ

だから、飛んでいる私たちが 外の人からハッキリと見えたかはわ

からない
でも、不安は消えることは無く、私の心の中に渦巻いていた……

マイス 「今日も街は騒がしく」

職人通り

『王宮受付』で依頼の整理をして、『サンライズ食堂』に食材を届け
た後のことだった

「あら、マイスじゃない」

「こんにちは、クーデリア。今日もコロナに用事？」

「も」 って、何よ その含みのある言い方は！」

「えっ?」

「…む、無自覚…いや、私の気にし過ぎなのかしら?」

クーデリアが何かボソボソと言ってるけど、さすがに聞き取れない。モコモコの姿ならば もしかしたら聞き取れたかもしれないけど…まあ、気にするほどのことでも無いと思うし、別にいいや

「そういう あんたはコロナに用事でもあるの?」

「ないけど、せつかく近くに用があつたから 様子でも見ていこうか
なつて」

確かホムちゃんは 採取を頼まれて出かけてるからいないはずだ。
昨日、本人が僕の家に来て「数日間 採取に出かけますので。…出
かける前に、少しだけ こなーと遊びます」ということがあつたのだ
「そうなの。でも、残念だけどコロナは今留守みたいよ。アトリエに
は誰もいなかったわ」

「そうなんだ。…鍵が開いてたつてことは街のどこかに出かけてる
のかな?」

『王宮受付』と『サンライズ食堂』では見かけなかったから 街の中
央の『広場』の方にでも行っているのか、それか途中ですれ違つてい
たのかもしれない

「で、あんた今からどうするの?」

「そうだなあ、家に帰る…その前に雑貨屋さんで花の種を買つていこ
うかな」

「そういえば 花も育ててたわね。……あれって儲かるの?」

「成長するまでの時間とお世話が必要だけど、上手くいけば種を買った金額の5倍くらいにはなるかな」

「育てるのが どう難しいかわからないから何とも言えない部分があるけど、聞いてる分には それなりに儲けそうね」

「あとは……種類によっては薬をつくれるものもあったりして、薬に加工してから売った方が ちよつとだけ高くなったりすることもあるかな。……まあ それは花と薬、それぞれの供給量によるんだけどね」

「薬って…アレもそうだったのかしら……?ふーん、ちよつと今ヒマだから雑貨屋までついていい?…ちよつと興味あるし」

「うん、いいよ!」

そうして雑貨屋さんのほうへと足を向ける……それにしても、なんだかしくりこない、というか少し気になったことがあった

クーデリアとはそんな長い付き合いじゃないけど、あんまりお金のことには特に興味をしめしたりすることは無かった気がするが、今回、なんで「儲かるか」なんて聞いてきたのだろうか?

まあ、僕の考え過ぎだろう。おおかた「欲しいものがあるけど値段が高いから 今の所持金から増やせないだろうか?」とかいった理由だろう

雑貨屋さんは『職人通り』にあるので、そうかからずに たどり着くことができた

「……あれ?」

ふと、耳に聞きなれた声が聞こえてきたような気がして立ち止まる。この声は……

「…?どうしたのよ。いきなり立ち止まったりして」

「えっと、なんだか雑貨屋さんの中からコロナの声が聞こえたような気がして……」

「そう? 私には何も聞こえなかったけど……まあ、たまたまコロナも

来てるってことは ありえなくはないわね」

それもそうだ。もしかしたら錬金術の材料が足りなくなつて、雑貨屋さんで買えるから、つて買いに来ているのかもしれない
そんなことを考えながら、僕は雑貨屋さんの扉を開けた

ロウとティファの雑貨店

お店に入つてすぐに見えたのはロロナの後ろ姿。そして、奥の方にいるのは、ここでよく見かける男性客三人と……あれは確かロロナのお父さんだったかな？カウンターにはティファナさんは見当たらない

あれ？こんなこと、前にもあつたような……

「お父さん、またいる……」

「わ！ロロナ！」

ロロナの静かだけど怒りがこもった声に、ロロナお父さんが驚きながらロロナに気がついたようだ

「もう！この間お母さんにすごく怒られたのに、まだ懲りてないの？」

「違う、違うんだ！これには理由が……」

焦った様子でワタワタしながらも ロロナに何か言おうとする口
ロナのお父さん

「理由って？」

「いいか。ティファナさんは若くてきれいで、そして何より未亡人だ」
「……それで？」

ロロナのお父さんは、先程までの焦りは顔から消えて フツと真面目な顔になる。まるで別人のようにキリツつときまつた顔だ

「それ以外に何の理由がいるんだ?！」

「知らないよ! 訳分かんないこと言わないでよ!」

ロロナのお父さんの言葉に、さすがのロロナも 怒りに怒っている。あんなロロナを見るのは初めてだ

なお、クーデリアは…

「最低ね…あれでロロナのお父さんだから驚きよ、ホント…:あ
あいうのになっちゃダメよ」

「…うん」

「…:まつ、あんたなら大丈夫かしらね」

何故だか僕に注意を促した

そんな中、ロロナのお父さんへの援護が入ってきた。この雑貨屋さ
んで よく見かける三人の男性客だ

「そうだそうだ! ライアンさんの言う通りだ!」

「正義は我々にある!」

「いやあ、ライアンさん! あんたとはいい酒が飲めそうだ!」

彼らはロロナに対し、意気揚々と口をそろえてロロナのお父さんを
擁護する

僕の隣では、ため息とともに「ダメだ、この人たち…」と吐き捨
てるクーデリアがいた

「はあ…もう意味が分かんない…:」

ガクリと肩を下げて 疲れたように呟いたロロナ。そんな後ろ姿
を見ながらクーデリアが声をかける

「なんて言うか、大変そうね ロロナ。…:いろんな意味で」

「あつ、クーちゃん、それにマイルスくんも。珍しいね ふたりで雑貨屋
さんに来るなんて」

「さつき通りでたまたま合ったのよ。ヒマがあったから なんとなく
マイルスの買い物について行ってみようかなって思ったのよ」

「うん。僕が種を買うようがあつて、クーデリアが花の種に興味があるから それじゃあ行つてみようかなつて」

僕が付けたしでそう言うのと、クーデリアから わき腹を肘でつつかれた。どうしてのかと思ひ そちらを見ると、僕のことをジロリと睨んでいた

「別にわざわざ そこまで言わなくてもいいいわよ（ボソリ）」

「……？つまり、言つてもいいんじゃないのかな？」

「いや、まあ……そうだけど……」

「なんか納得できないわ」と呟いてそっぽを向くクーデリア

何かしてしまつたのか、どうしたらいいかわからず困つていると、ふと視界の端でニコニコ笑顔なロロナが見えた。クーデリアもそれに気づいたようで、ロロナの方を向いた

「どうしたのよ ロロナ？」

「えつとね、くーちゃんとミスくんが仲良くお話ししてるのが なんだか嬉しくて！」

自分のことであるかのように嬉しそうに言うロロナに、僕とクーデリアは互いに顔を見合わせる。……で、特に何も思うところが無くお互い「どういうこと？」「さあ？」といった感じで首をかしげて、再びロロナの方を向く

「特に仲が良いとかはないけど……あつ、でも 初めて話した時のミスはカチカチに固まつてて、その頃に比べれば まあ仲良くなったのかしら」

「だよねー。けつこう最近までミスくん、わたしたちにも丁寧でちよつと違和感あつたんだ。 あれはあれで 精一杯背伸びしてる感じでかわいかつたけど」

「…最後ののは、よくわからないよ……」

こういう時、こういう反応をすればいいんだろうか……

「つと。種を買いにきたんだった」

レジカウンターにティファアナさんはいないけど、店が開いていたのだから いつものように呼んだら奥のドアから出てきてくれるだろう。そう思いカウンターへと歩き近づいたんだけど、他の方向から誰かが僕に近づいてきているのに気がついた

僕が立ち止まって そちらへ向くその前に、先に動いていたのだから人が間に入ってきた

「……お父さん、マイスくんは何の用？」

「ろ、ロロナっ。あれだ、ロロナの男友達は…ほら、やっぱり心配じゃないか…！」

ふくれっ面のロロナに 中々強気に出れないロロナのお父さん

「ふんだっ！マイスくんは お父さんとは関係ないもん。それに――

――」

と、続けてロロナが何か言おうとしたところに、乱入者が現れた。

……あの男性客三人組だ

「だ、ダメだ、ライアンさん！」

「その子は格が違いすぎる!!」

「ダメージが半端ないんだ!!」

「ならなおさらロロナの近くには……!!」

「ち、違うんだ！その子は…」

三人組がロロナのお父さんに呼びかけるが、それが逆にロロナのお父さんの原動力になってしまっているようだ

……というか、あの三人組は なんであんなに焦っているのだろうか？

「その子はっ！閉まっているティファアナちゃんの店に 鍵を使っておじやまするような子なんだ!!」

「な、なななっ！なんだって!?!」

……何をそんなに驚いているんだろう？ 鍵を使わずにおじやます

るのは泥棒だろうけど、使っておじやまするのは別におかしくないと思うんだけど…

「マイルスくん…今の話、本当…?」

「えっ」

気づけば 何故かコロナにジトーツと睨まれて…うん、たぶんコロナは睨んでいる気がする。いつもと同じようなパツチリした目だけど…

「マイルスくん…」

「コロナ、一回冷静に考えてみたら?」

「くーちゃん、私はれいせいだよ」

「じゃあ問題だけど、お人好しでお節介焼きな天然の男の子がちよつと病弱な女性の家に何かを持って行きました。それはなんだと思う?」

「えっ? うーんと…お薬、かな?…つて、あっ!」

「そういうことよ。…でしょ?」

そう言つてクーデリアが僕の方を向く

…そうなんだけど、なんで知ってるんだろう…?そんなことを考えていると、クーデリアが何かを探すようにキョロキョロしだした
「えつと、たしか…」

「マイルスくんがウチにおろしてくれてるお薬は その棚の二段目よ」

「んっ、あつたわ…つて」

「ティファアナさん!?!いつの間…」

薬を商品棚から見つけ出したクーデリアとコロナが驚いたようにティファアナさんを見る

「ティファアナさん、こんにちは!」

「いらつしゃい マイルスくん、それにコロナちゃんとクーデリアちゃんも。お店が賑やかだなぁって思ったたら、みんなが来てたのね」

「いや、それはなんというか…」

「私たちよりもアツチなんだけど……」

そんなことを言いながらコロナとクーデリアが男性客たちの方へ目を向けるけど……彼ら（コロナのお父さんを含む）は店の端っこのエリアの定位置まで いつの間にか移動していた

「マイスくんに見病してもらった時に貰ったお薬がとてもよくてね。後で頼んで、ウチに置いてもらえるようにしたのよ」

「で、私がお薬にこの前 気づいて、見たことない薬だったから「これ何？」って聞いたたら その時のことを聞かせてくれて……だからマイスが合鍵使って入ったってことを知ってたの」

ティファアナさんとクーデリアの説明を聞いて、コロナはティファアナさんの話に、僕はクーデリアの話に 「そうだったんだー」と声をもらした

そんなこんなで、今回のちよつとした騒ぎは大したことは無く終わった……コロナのお父さんが家に帰ってからどうなったかは知れないけど……そして

「……あれ？もしかして、マイスくんって私よりも薬の調合上手いの……？」

数時間後の夜のアトリエで、そんなことを思いついてしまったコロナが一人悩んだとか……

マイス 「僕のコツ」

「……と。この調合方法なら『エリ草』が上手く液体に馴染んで効力を発揮するみたいかな？ あとは、どれくらい効率良く精製できるようになるかだね……」

試した調合方法とその結果を白紙だった本に書き込み、まとめる
これまで『薬学台』での調合は 既存のレシピでしかやったことがなかったもので、いちから考えるのは思った以上に困難だった。ただ、最近になってやっと成果が表れ始めた

「この調合って錬金術でも出来るのかな……？ 釜よりも薬学台のほうが慣れてるから、わざわざしなくてもいいんだけど……少し気になるな」

今度、今つくってるレシピじゃなくてもいいから、簡単な『回復のポット』あたりで試してみようかな……

コンコンツ

「はーい、ちょっと待ってくださーい！」

家の玄関の扉がノックされる音が聞こえた

僕は返事をした後、『薬学台』の上の作業を中断させて、作業場から
玄関のある玄関のある部屋へと移動し 扉を開ける

「お待たせしました！ あつ、リオネラさん、それにホロホロとアラニーヤも いらつしやい！」

「こ、こんにちは マイスくん」

「おうおう、おじやますっぜ」

「ごめんなさいね、忙しかったかしら？」

リオネラさんたち、よく家に遊びに来るようになったなあ。最初は僕が半ば無理矢理連れてきちゃったんだけど、いつの間にか たびたび来るようになって、最近はフィリーさんと一緒に来ることも多くなった

「香茶を用意するから ちょっと待ってて……」

そう言いながらキッチンへ行くこうとしたら、リオネラさんから呼び止められた

「あのっ！あのね、今日は大事な話があつて…それで来たの」

「大事な話…？」

「……うん」

いったい何なんだろう？全然見当がつかなくて首をかしげてしま
う

「この前のことだけど……私がロロナちゃんと飛んでたの…見た、よね……？」

「……ああっ！」

何のことだろう？と考えてしまったが、ほんの数日前に『旅人の街道』に用があつて行つていた際に、うつすらとだけ 何か人のようなものが飛んでいったのを思い出した

「あれって、リオネラさんたちだったんだ…」

そう僕が言うと、ホロホロとアラーニヤが「やれやれ」といった様子で首を振った

「ほらな。言つたじゃねえか、きつとわかつてないから 言いに行かなくてもいいって」

「でも ここまで言つちやつたんだから、もう引き返せないわよ…良かったの？」

「うん、いいの…。ロロナちゃんと同じくらい大切な友達のマイスくんには、ちゃんと言っておきたいの。それに……」

そう言いながらリオネラさんは自分の手をギュッと握りしめた。
……でも、話の流れがわからない僕は置いてけぼりだ。いったい何でこんな重い空気になつてるんだろう……？

「で、なんで マイスは何のリアクションもねえんだ？」

「えっ？なんでって言われても……」

ホロホロに言われて 僕は首をかしげながら疑問を口にした

「…大事な話って、結局 何なんだろうな、って」

「えっ」

何やらリオネラさんが口を手で隠すようなポーズになった。目を真ん丸にしているし、とても驚いているように見える……………けど、そんなにおかしなことを言ったのだろうか？

「おいおい……………こいつ、ロロナのやつより天然じゃねえか」

『天然』で済ませていいのかわかんないけど……………ねえ、ロロナとリオネラが飛んでたのよ。不思議には思わないの？」

「……………いつも浮かんでるホロホロとアラーニヤが ふたりを掴んで飛んだ、とか？」

「開いた口がふさがんねえよ……………」

「もうこれ単刀直入に言った方がよさそうね……………」

……………？違ったのだろうか？

そもそも、ホロホロとアラーニヤがいつも浮かんでるし、最近 お店を創めたパメラさんなんて 空も飛ぶし 物をすり抜けるし、人が空を飛んだくらいで……………あれ？僕の感覚がおかしくなってるのかな？

「あのね、マイスくん……………。ホロホロとアラーニヤが浮いているのも、ロロナちゃんと私が飛んでたのも……………全部、私の『力』なの」

「リオネラさんの……………？」

「どうしてかは分からないんだけど、私、生まれた時から 物を触らずに動かしたりとか 宙に浮かしたりとかできたの……………」

「へえ、そんな『力』が……………あれ？でも、なんで今そんな話に……………？」

「ふえっ？」

なんでだろう。リオネラさんが随分と気の抜けた声を出した

そして、少しうるんだ目で僕の方をじっと見てきた

「怖く……………ないの？……………私、こんなへんな『力』持つてるんだよ……………？」

「へんな力って……………あっ！」

何をそんなに と思っていたけど、あることを思い出し、つい声をあげてしまった

そんな僕を見てリオネラさんは目から大粒の涙をあふれさせはじ

めた

「や……やっぱり、怖いよね……私が他人と違うって……」

「あつ、いや、さっきのは そういう意味じゃなくて———そういえば そうだったな、ってことで」

「そういえば……そう、だった？」

どう説明したものだろうか……。いや、今はそのことよりも……

「とにかく、僕はリオネラさんのことは 全然怖くないよ」

「でも、「魔法だ」「魔女だ」って 周りの人に怖がられて……お父さんやお母さんも……」

「ちゃんとリオネラさんのことを見てればわかるよ」

……もしかしたら、僕の言葉は全然足りないかもしれない。だけど、僕には 思っていること以上の言葉なんて見つけれないし……きつと「大丈夫だよ」って気持ちを伝えるはずだと信じている

「リオネラさんが とっても優しい人だって、どんな『力』を持ってても 怖がる必要なんてないって……きつと、ロロナやクーデリア、フィリーさんも リオネラさんのことを「怖い」だなんて思わないよ」

僕が言葉を全部言い終わった後、少しの静寂が続いた。そして、それを破ったのは……

「……ふふっ」

リオネラさんの微笑みだった

「実は……今日 ここに来る前に 私、ロロナちゃんにも自分のこと話したの……それで言われたの「師匠もくーちゃんも、この街の人はみんな怖がらないよ。絶対に」って」

「あははは……似たようなこと言ってたみたいだね……」

「うん……ロロナちゃんの言葉も、マイスクんの言葉も……どつちも温かかった……」

「……そっか」

「そういえばよ」

ふと何かを思い出したかのようにホロホロが眩いた

「マイルスが途中で「そういやそうだったー」みてーなこと言ってたけどよ。アレ、結局何だったんだ？」

「たしかに気になるわね」

アラニーヤもそれに肯定した

「うーん、どう言えればいいのかなあ？……実際見せた方が早いかな」
色々と不安要素もあるけど、一から説明するよりもいいとは思う

「それじゃあ、ちよつとついてきて」

「え、うん……？」

僕が作業場へと歩き、その後ろをリオネラさんたちがついて来てくれた

そして、そのまま裏口の方へと行き　そこから外に出た

「ここに何かあるの？」

アラニーヤの言葉に僕は首を振る。裏口から見えるのは、井戸とこの家を取り囲む林だけだ

「ここに来たのは、ここが一番手っ取り早いかなって思ったからなんだ。みんな、手を繋いで」

「……………うっ？」

訳も分からず　といった様子だけど、リオネラさんの両隣にホロホロとアラニーヤが、そして　ホロホロの隣に僕が立ち、手を握る

「……………『リターン』！」

僕の目の前に広がった　淡い光が消えたとき、目の前には畑が見えた。無事、家の玄関前に移動出来たようで、隣には先程と同じようにリオネラさんたちがいる。ただし、先程とは違ってリオネラさんは口をパクパクさせて目は点になっていた

「へう、あ、えっ……？」

……うん、思ってた以上に驚かせてしまったようだ

「えーっと、リオネラさん？」

「ふえ!？」

「おいおいおい!どうなってるんだよ、ココって家の正面だよな?」

「これって、もしかして……」

リオネラさんの復活と共に ホロホロとアラニーヤも動き出した。

……アラニーヤは真っ先にどういう状況なのか理解したみたいだ

「まず最初に言っておかなきゃいけないのは、僕が元々いた町のことなんだけど……」

「……実は 前にクーデリアさんから一回だけ「こういう名前の町なんだけど、知らない?」って聞かれたことがあって……『シアレンス』って町で、それと……その前にいた場所もあるんだけど、その……記憶が無いって」

「そうだったんだ、それなら説明が楽になるよ。……で、その『シアレンス』は『アーランド』とは別の世界で、色々な部分が異なってる。本来は交わるはずが無いって」

「それってどういう……?」

「うーん……あえて例えるとすれば、『シアレンス』から見て『アーランド』は絵本の中の世界で、『アーランド』から見て『シアレンス』は絵本の中の世界ってこと……かな?」

自分の中での解釈だから かなり違うかもしれない。……アストリッドさんなら上手く説明とかできそうなんだけど……今はいないのだから仕方ない

「それで……端的に言うけど、『シアレンス』には『魔法』があるんだ。火とか水とかの攻撃魔法、他にも 傷を癒す魔法や さっきの『リターン』の魔法とかね。……だから、正直なところ リオネラさんが『力』のことを明かしてくれた時、そんなに思い悩むことだって気がつかなかったんだ……」

「それじゃあ……「そういえば そうだった」ってというのは」

「そういえば魔法が無い世界だったんだ、ってこと。…ゴメンね、すごく勇気のいる話だったのに、最初 あんな受け答えしちやって…」
「う、ううん、いいのっ！むしろ、あれで肩の力が いい感じに抜けて…それに、マイルスくんは 怖くないってちゃんと saying してくれたから…」

あれから 再び家の中に入り、それぞれソファとイスに腰をかけた

リオネラさんは なんだか朝よりもスッキリしたような顔になっていて、自分の力のことをどれだけ気にしていたかが よくわかった
「けつきよく、リオネラが一人でくよくよ悩んじまってた っただけの話だったな」

「…まあ結果的にはそうだったけど」

ホロホロとアラニーヤがそう言うが、僕にとってはとても大事な出来事だった

「そんなことないよ。リオネラさんは 僕に勇気を分けてくれたよ」

「ん？何のことだ？」

ホロホロがそう言い、リオネラさんも首をかしげた

「記憶を無くしてた僕を受け入れてくれた『シアレンス』の町なんだけど、町長さんはモンスターのことを嫌ってた」

モンスターは絶対悪ではないけれど、人に被害が出ることもあるのも事実であった。それで嫌っている人もいたけど、あの人には別の意味もあったんだと思う

「それと…実は、僕のことを受け入れてくれた場所がもう一つあったんだ」

「もう一つ…？」

「町の近くの砂漠地帯に『モンスターの集落』があったんだ。その長は『有角人』っていう種族で、角が生えている以外の見た目は人間と

変わりがないんだけど……そのひとは人間のことを嫌っていて、集落の近くに来る人間は追い払ってたんだ」

「あれ？それって……」

「なんか おかしくねえか？」

アラニーヤとホロホロが疑問を持つけど、それは当然のことだろう。でも僕は止まらずに自分の言葉を口に出した

『シアレンス』で暮らしている内に 少しだけだけど記憶を取り戻していった……でも、誰にも話せなかつたんだ。……本当の自分のことを知られて、嫌われるのが……すごく怖くて……でも……」

「マイスくん……？」

自然とリオネラさんへと目がいつていた。不安で胸が苦しかったけど、やめる気は無かつた

自分自身のことと一生懸命向き合っているリオネラさんを見て、無性に僕自身が情けなく思えた。ずっと騙し続けてしまうのは何か違うと、強く感じた

だから、『シアレンス』でも誰に明かさなかつた 僕の秘密を……

僕は立ち上がり、少し横に移動する。僕が変身する姿が テーブルで隠れてしまわないように、と

キュピーン！

ジャンプしながら回転し、『変身ベルト』を発動させる。僕は光に包まれ、光が消えたときの僕の姿は――

「えっ……もっ、ちゃん……？」

浮かんでいたホロホロとアラニーヤは パタリと落ちて倒れてしまっていた。浮かす力が正常に働かないくらいリオネラさんが驚いてしまっているのだろう

「……僕は 人間とモンスターの両親を持つ『ハーフ』なんだ。それで、人間とモンスター、両方の姿になれるんだ……どっちが本当の、姿なのか……は、わから――」

ふと気づくと、すぐ目の前にリオネラさんが見えた。モコモコの身長に合わせるように床に膝をついて……そして、苦しいくらいに抱き締められた

「大丈夫だよ」

その言葉は とても力強くて：優しかった

「私も、怖くなんて無いよ……」

いつの間にか、浮かんでいたホロホロとアラーニヤが ソファーから飛んできた

「驚いたけどよ。なんつうか こう、しっくりきたっていうか、納得してスツキリしたな」

「モンスターと仲良しな人」と「人を助けるモンスター」だもの。むしろ深い繋がりが無い方が不思議だったもの」

そう言って リオネラさんとは反対側から 僕に抱きつくようにくっついてくれた

そして、それに合わせるようにリオネラさんの片手が 僕の頭をなではじめた

「だからね……泣かなくていいんだよ」

「おいおい、自分が泣きながら言うもんじゃねえだろ……」

「しっ、こういう時くらい空気読みなさいよ……!」

マイス 「僕らの秘密」

本日は晴天。太陽は頂点に達しているが 暑さはさほどでもなくなっていて、空も高くなってきているような気がする。

先日の、僕とリオネラさんの「自身のこと告白合戦」は無事に終わり、互いにこれまで通りに接するようになった。変わった事といえば……少しだけ『シアレンス』のことを話題に話すようになったくらいだろうか

と、まあ それだけだったので特に気にして無かったんだけど

「……………ぐ、ぐめんないー！めんないー！」

……よくわからないんだけど、今、何故かりオネラさんに平謝りされている

とりあえずは落ち着いたりオネラさんに ソファアに座ってもらい、香茶をついでいる

「それで、いきなりどうしたの？」

「あの……そのね……」

オドオドと言うりオネラ。それに対し、その両隣にいるホロホロとアラニーヤが代弁するかのように前に出る

「単刀直入に言っちゃまうけどよ、実はだな……」

「リオネラがポロツと喋っちゃったのよ……ファイリーに、あなたのこと」「ん……て、えっ?」

一瞬遅れて驚いた。それって……そういうことだよな?えっ、どうしてそんなことになったんだろう?」

「そ、そのね……今日の朝にファイリーちゃんのお家に行って 話したの、私の『力』のこと。……マイスくんも言ってたとおり、「全然怖くない

よ」って言うてくれたの」

「リオネラさんの事を知ってれば、きつとそう言うと思うよ！…あれ？でも」

そこからどう繋がって……

「それでだな、ロロナとマイルスにも受け入れてもらえたーって話から」
「その時の話の流れを軽く説明してたときにポロツと「マイルスさんとそれぞれの秘密を分かち合って」って言っちゃって」

ホロホロとアラニーヤにそこまで説明してもらえば、あとはもう想像がついてしまった

「それで、フィリーさんに押し負けて話しちゃったんだね…」

「うう……その…マイルスくんにも、フィリーちゃんにも受け入れてもらえて 嬉しくて、私、舞い上がっちゃって！それで……！」

「ううん、いいんだ……驚いたけど、どのみちフィリーさんには話さなきゃって思ってたから。それがちよつと早くなっただけだよ」

リオネラさんに話した時には決めていたことだ。一番騙してしまっているわけで、ちゃんと言わないといけないと常々思っていたのは事実だ

でも、今、ここにいないってことは……

「……僕、嫌われちゃったのかな」

「そっ！そんなことないよ!!」

僕の呟きに、食ってかかるように リオネラさんが否定してきた

「あつ……でも……その……」

しかし、リオネラさんの声はすぐに小さくなり、さっきの勢いが嘘だったかのように勢いが無く、ボソボソとしたものになってしまった

そして、そんな時にまた出てくるのがホロホロとアラニーヤ。こういうところを何度も見ていると、やっぱり良いトリオなんだなーって感じる

「嫌いになった、ってわけじゃないんだけど……ね?」

「もういつそのこと、会わせちゃまったほうがいいんじゃないかな」

「え、でも……」

ホロホロの提案に、少し不安そうな顔で渋るリオネラさん。そして、僕としての考えは……

「うん、会いに行くよ。やっぱり キッチンと自分で伝えたいからね」

エアハルト家にたどり着き、フィリーさんの部屋の前まで来た
コンコンツ

「フィリーちゃん、私だけど……」

リオネラさんがドアをノックし、声をかける。すると、ドアの向こう側から 何かが動いたような音が わずかに聞こえた

「…リオネラちゃん」

そしてドア越しに聞こえてきた声は 当然ながらフィリーさんの声だった

「あのね、実は——」

「私、もう マイス君に会えないよう……!」

リオネラさんが何かを言おうとしたところを、意図的には無さそうだけどフィリーさんがさえぎった。その声は少なからず震えていた

やっぱり、嫌われてしまったのだろう。でも、それも当然のことだろう、ずっと騙ってきていたんだから……

「だって! マイス君の 全身をくまなくモフモフしたりっ、ギューっ
て抱き締めてたなんて……私っ! 恥ずかしくて! 絶対顔も見れない
よう!!」

「えっ」

「だ、大丈夫だよっ、フィリーちゃん! 私なんて、マイスくんだってわ

かる前にも後にも抱き締めちゃったんだから!!」

「え、いや、ちよ…」

「それじゃ なおさらだよっ!きつとマイルス君に「リオネラさんと比べてファイリーさんは堅いなー」なんて思われてたんだあー!!」

「どうして、こんなことに…」

2人とも何だか普段と様子が違うよ……。嫌われていたわけでは無さそうだったから安心……。しようと思っただけど、これは…どうしたら……

「ファイリーもリオネラも、一回 落ち着きなさい」

「そうだけ、これ以上は 放置されてるマイルスがかわいそうだけ…:色んな意味で」

「あっ」

「えっ!?!」

アラニーヤとホロホロの言葉に、リオネラさんとファイリーさんがそれぞれ反応する

リオネラさんは僕を振り返りながら「そういえば、いたんだった!」と言った表情で驚き、耳まで真っ赤にしたその顔を両手で隠した

ファイリーさんは…一旦静かになったかと思えば ドア越しにドタバタと大変そうな音と、ボタンつという音と同時に「ふぎゅ!?!」という声が聞こえてきて…大丈夫だろうか?

「リオネラもマイルスも顔が真っ赤ね。 ……たぶんファイリーもでしょうね」

「青春ってヤツかねえ…:お熱い事で」

アラニーヤもホロホロも、そんなことを言わないでほしい。ひとから言われてしまうと、ますます顔が熱くなってしまうのが、嫌でも自分で すぐにわかってしまう

結局、それから小一時間ほど誰も動けなくて 状況が止まったままだった。

そしてリオネラさんが「と、とりあえず、今日はみんなお家に帰っ

て、ひとりひとりで考えようっ！」という提案をして幕を閉じた。「何を？」とも思ったけれど……まあ、仕方ない……のかな？

「マイス「変わったように変わっていない日常…なのかな？」」

モフモフ

「あのー…ファイリーさん？」

モフモフ

「んー？」

モフモフ

モフモフ

「どうしてこうなった……」

先日のファイリーさんはどこへやら。僕の家にはリオネラさんと一緒に来たかと思えばいきなり「モコちゃんに変身して！」と要求。流されるままに僕がモコモコの姿になると、僕をだきかかえてソファアへ

……

そして、今、僕はファイリーさんの膝の上でモフモフされています

……

「ええつと……」

「……リオネラさん、とりあえず座ったらどうかかな？」

リオネラさんも、先日の引きこもってしまったファイリーさんを知っているのです、今のファイリーさんの行動に困惑してオロオロとしてた。僕に促されてやっと座ったけど、変わらず落ち着いていなかった

「あの…ファイリーちゃん。何があったの？どうしたの……？」

「うん、部屋から出てきてくれたのは嬉しいんだけど……いったい？」

「ふふっ…リオネラちゃん、マイス君、あのね……」

僕をモフモフするファイリーさんの手が止まったので 振り返りながら見上げてファイリーさんの顔をうかがってみた。その顔は薄く微笑んでいて、目は軽く閉じられていた

次の瞬間！フィリーさんの目がカツと見開かれた

「人間、時には何かを得るために 別の何かを投げ捨てなきゃいけない時があるの!!」

……えっと、それってつまり…？

「吹っ切れた、ってことかよ」

リオネラさんの隣に浮かぶ黒猫の人形・ホロホロが呆れたように言った。そして それを聞いてか聞かずかフィリーさんは言葉を続ける

「今、私は羞恥心を捨てて、このモフモフを堪能しないとイケないのっ！」

そう言って再び僕をモフモフしだした

「おれは知らねえけどよ、マイスのモフモフってそんなに中毒性があるのか？」

「気持ちいい柔らかかさだったけど…私をあそこまでは……」

ホロホロの疑問にリオネラさんが答える。…というか中毒性って、まるで『金のふわ毛』が危ないモノみたいじゃないか

そして、フィリーさんにモフモフされるがままで どうしようもない僕に、リオネラさんの隣に浮いていた人形の内 虎猫のほう…アラニーヤが僕に近づいて来て言った

「……今のフィリーの顔、見ちゃダメだからね」

「えっ?」

「あの子、表情が緩みに緩んで レディーがしていいような顔じゃないわ…」

……あれ?僕って…『金のふわ毛』って、危ないモノだったっけ…?

「ご、ごめんね マイス君。気がついたら すっごくモフモフしてた

みたいで……」

あらかた僕をモフモフし終えたフィリーさんが、ハツとした後 僕を床に下ろして そう謝ってきた

「いいよ。フィリーさんが元気になったみたいだし」

確かにモフモフされ過ぎて 肉体的にも精神的にも疲れたけど、以前のようなフィリーさんに戻ったので一先ず良しとすることにした
「ああ……でも本当にマイス君のモフモフは良い！一日中でもモフモフしてたいよう……」

もう、その『モフモフ大好き』はずっと続くんだね……。いつからこうなってしまったんだろう……。いや、ほぼ間違いなく僕のせいか……
というか……

「そんなに好きなら、持って帰る？」

「えっ!？」

僕の提案にフィリーさんとリオネラさんが声をあげる

「え、えええ えつと、マイス君!?それはつどういう!？」

「モコモコってモンスターの毛は、刈っても 少し経つと一定の長さまで伸びるんだ。『シアレンス』では その刈った毛で毛糸を作ったりとかしたりするんだけど……って、2人とも、どうしたの?」

自分の『金のモコモ』を触りながら説明していると、ふと視界に入ってきたフィリーさんとリオネラさんが ふたり揃って自分の顔を両手で隠しているのに気がついた

「…気にしないで、マイス君……」

「そ、その……なんでもないから……!」

「……?…そう?」

「そういえば……」

顔から手を離して僕を見るリオネラさん。その顔はこころなしに赤かった気がするけど……気のせいだと思う

「モコモコってモンスターはそうだと……マイスくんは大丈夫な

の?」

「うん。毛色が違うこと以外は 基本的に普通のモコモコと一緒にだから」

答える僕に、今度はフリーさんが聞いてきた

「モコモちゃんの姿から人間の姿に戻っても…?」

「ああ…、それも問題無いよ。髪の毛とかが減ってたりもしないし…ちよつとスースーする気がするだけで…」

「おい、それって…」

「もしかして…」

ホロホロとアラニーヤの何かを察してくれた その声には僕は頷いた

「刈られた経験があるんだ。…半分くらい不本意だったけどね」

いやまあ…あれはある意味 仕方のないことだったけど…：うん、あんまりいい記憶じゃないんだよね…

コンコンツ

玄関の扉がノックされた

「はーいー…あ、そうだった」

返事をして あることに気がつく。今の僕はモコモコの姿だ、このままではマズイだろう

僕はピョンと跳んで回転し、人間の姿に変身する。そして、扉へと行く…と、その前の扉が開いた

「じやまするわよ…って、どうしたの、マイス?」

「どうしたのって、いつもお出迎えしてるよね…?」

入ってきたのはクーデリアだった。ロロナはいないみたいだけど、ここまで一人で来るのは珍しい…というか初めてかな

「そういえば…。ごめん、アトリエと同じ感覚で入っちゃった」

「まあ、アトリエは返事待ってたら 調合に集中してたりして気付かれないことがあるからね」

「……やったことあるのね？」

「あはははっ……」

あれは恥ずかしい思い出だ。小一時間ほど中からの反応を待っていたところを、ホームちゃんがおつかいから帰って来るまで、ずっとドアの前で待っていて……。なお、アトリエにいたロロナはパイを作っていた

「そういえば クーデリア、今日はどうしたの？」

「ロロナがどつか行つてて、ちよつとヒマしてたから 来てみたんだけど……あら？誰かいるのね」

クーデリアが僕の肩越しにソファの方を見る

「あら、リオネラと……誰？なんだか見たことある気もするんだけど……」

そう言つて首をかしげるクーデリアに対し、リオネラさんとフィリーさんは……

「こ、こんにちは クーデリアさん」

「おうおうっ！おれたちのことを忘れてもらっちゃ困るぜ」

「こんにちは、クーデリア」

おそらく、ロロナの手伝いで知り合ったであろうリオネラさん。そういう問題はなさそうだった

「はは はじ、は……!!」

フィリーさんは……どうしてだろう？以前、エステイさんからのおつかいの際に、女性店員に挨拶した時よりも、ずいぶんと緊張しているようだった

「……ねえ、マイス」

「ん？……ああ」

クーデリアに呼ばれて、そちらへ目をやると……まあ、色々とおわかった。フィリーさんが緊張している理由とか……

簡単に言えば、クーデリアが睨んでいたからだ。その鋭い眼は、フリーーさんを見た後に僕の方をむいた。：『目は口程に物を言う』とはよく言ったもので、その眼は「なに コイツ」と不機嫌そうな雰囲気を醸し出していた

「こつちのこはフリーーさん。えつと：クーデリアは会ったことあるかな？『王宮受付』にいるエステイさん。あのひとの妹さんなんだけど…」

そう言うときクーデリアは「ああつ」と声をもらし、軽く頷いた

「どうりで…このイライラの理由もわかったわ…ああもうっ」

なんだろう？エステイさんと何かあったのだろうか？

「そもそも、オドオドした感じが慣れないのよ…！」

「ああ、クーデリアの周りには ロロナやイクセルさん、アストリツドさんとも違うタイプだからかな」

「リオネラである程度は慣れたつもりだったけど…！」

うーん、根本的に性格が合わないのかもしれない。でも、そんなにぶつかり合うわけではないから険悪にはなりそうでは…けど、良くも転びそうにないのかもしれない

コンコンコンツ

「はーいー！」

クーデリアがイスに座り、女の子三人が話しているうちに 僕がみんな分の香茶と茶菓子を用意した時、再びドアがノックされた

今日は来客が多い日だ

僕が玄関の扉を開くと、そこにいたのは 時折うちにお茶に来るジオさんだった

「失礼する…おやつ、今日は先客がいるよう——」

「ジオ様!？」

…
そう大きな声を出したのはクーデリアだった。というか、「様」って

僕がそんなことを思っている間に、バツつと立ち上がったクーデリアがジオさんのすぐそばまで駆け寄り、ジオさんの手を取った

「ささっ！ジオ様、どうぞ　こちらへ！」

クーデリアはそう言っつてジオさんの手を引き、空いていたイスへと誘導する。そして　ジオさんをそこに座らせて、僕がテーブルまで持ってきていた香茶と茶菓子もジオさんの前に置いて……

「遠慮なさらず、ごゆっくりしてくださいね　ジオ様！」

ニツコリとした笑顔をジオさんにむけた。……どこからツツコめばいいんだろうか。クーデリアの変貌に僕だけで無く、リオネラさんとフィリーさんも驚きを隠せていなかった……とりあえず、僕は玄関の扉を閉めた

「あ、ああ、ありがとう……いいのか？（ボソツ）」

クーデリアの勢いに流されるがまだだったジオさんは、クーデリアに軽く礼を言々と、戻ってきた僕のほうを見て小声できいてきた

「はい、大丈夫ですよ。香茶も茶菓子も　まだまだ用意できますし……」

「いや、これまでの経験から　そこはあまり気にして無いのだが……」

一応、この家主はキミなのだろうか？」

「あはははっ……」

まあ、まるでクーデリアが自分の家に招待したかのような感じだったけど……そこはそんなに気にしなくてもいいだろう

……とりあえず、一人分足りなくなった香茶と茶菓子を用意しに

僕はキッチンへとむかった

「そう、実はだな……今日はキミに伝えることがあつて立ち寄つただよ、マイルス君」

「僕に、ですか？」

ティーカップを置いたジオさんが 僕を見ながら口を開いた

「今年の『王国祭』の催し物の内容が決まった。去年の『キャベツ祭』にも参加したキミは、今年も参加を考えているのではないかと考え、その内 耳にするとと思うが、早めに知っておいた方が準備ができて良いのではないかと思つてな」

ジオさんの言葉に、クーデリアが「そういえば、ミスも参加してたっけ」と思い出したように呟いていた

確かに 気にはなっていたし、内容によつては参加しようと思つてたけど……なんでジオさんが そんなに早くに内容を知れたんだろうか？それに……

「今年の催し物つて、準備が必要なものなんですか？」

「無しでもなんとかなると思うが、あるにこしたことはないだろう。今年の催し物は『武闘大会』、参加者同士が闘い 優勝を決める大会だ」

なるほど、たしかにそれは準備をするべきだろう。武器のことはもちろん、自身の体調や……必要ならイメージトレーニングなんかもすべきで、準備期間をしっかりと設けておくべきだと思う

「あ、あの……それって、危なくないですか？」

おずおずと質問をするリオネラさん。質問を受けたジオさんは、自分の整ったアゴ髭を指で触りながら答える

「ふむ、もつともな心配だが……あくまでこれは『王国祭』の一環、国を挙げてのお祭りの一部だ、人道的なルールはあるさ。危険な場合はちゃんと止めが入るようになっていよ。……まあ、少々の打撲や擦り傷などは負ってしまうかもしれないがな」

それはそうだろう。対戦者同士も相手に対して大きなケガを負わせようとは思わないはずだ。そして 対戦者が熱くなり過ぎれば、ジオさんが言ったように周りが止めれば問題無いだろう

と、そんなことを考えていると、ジオさんが「とはいっても問題があつてだな……」と、少し困つたような顔をした

「どうされたのですか、ジオ様？」

未だに聞きなれない言葉使いと態度のクーデリアさんが 心配そうにジオさんの顔を見つめる

『武闘大会』で国民が盛り上がる、という予想は 間違っていないだろう……だが、参加者のほうが ちゃんとした者が集まるか、という不安があつてだな……」

「……？ 志願者とか いそうにないんですか？」

「アーランドは治安が良く、とても平和だ。…故に 腕自慢というのも少なくてな。事実、王国勤めの騎士でさえ、そこまで戦える人物は数えるほどしかない」

なら、戦える騎士同士で……とは言っても『王国祭』中の騎士は普段とは比べられないほど忙しいらしいし、仮にそうなたとしても 確かに盛り上がり欠けそうではあるか……

「そ……そそれで、マイルス君に……？」

初めて会ったジオさんに、まだまだ緊張しつつも フィリーさんが訪ねた。対して ジオさんは普段と変わらない 紳士的で落ち着いた様子で頷いた

「そうだ。マイルス君、キミに白羽の矢が立ったわけだ。私は直接見たことは無いが、ロロナくんやそちらのお嬢さん…他にも何人からか話は聞いている。モンスターをもっともしないほどの実力者だね」

「ええ……!? それはさすがに大袈裟かと……」

「うむ、正直 私も半信半疑だ。モンスターたちと仲良く暮らしているキミを知っていると どうもな……。だが、彼らが嘘を言っているようにも思えん」

うーん……実際、僕が強いのかどうかはよくわからないし……。それに、対人戦なんて経験は無いから 色々と心配だ

「マイルス君なら……」

「勝っちゃうんじゃないかな？」

そう言つて フィリーさんとリオネラさんが顔を見合わせて頷いていた

「このあいだ、私と同じくらいの大っきのモンスターを…あっぱー、つていうのかな？…こう、思いつきり打ち上げてたし…」

グーをつくった手の腕を ビシツと真上に挙げながら言うフィリーさん

「その後、そのモンスターをキャッチして ゆっくり地面に降ろしてあげてたけど…あれ、ポイって放り投げて 他のモンスターにぶつけられそうだったよね…？」

「いやいや、あの大きさのものが あんな高さから落ちてきたのを」

「何事も無く受け止めてた時点で とんでもないんだけどね、いくら『ぷに』相手とは言っても…」

その時のことを思い出しながら言うリオネラさんと、ホロホロとアラニーヤ

そんなふたり（と二匹？）の話聞いたクーデリアとジオさんは…

「何してんのよ、あんたは…」

「何をしているんだ、キミは…」

…まあ、そうなるよね

ホム「改名しましょう」

「えっと、つまり……？」

そう聞き返してきたのは、「おにいちゃん」ことマイスです。おにいちゃんは 今、作業場にある『炉』のそばにいます。『炉』には珍しく煌々とした炎が入っています

「ですから、「こなー」は「なー」に改名されます。しっかりと成長し、大人になりましたので」

作業場にある木のイスに座っているホムの膝の上に寝転んでいる「こなー」改め「なー」をなでながら おにいちゃんに言いました
「こなー」の「こ」って、「小さい」とか「子ども」の「こ」だったんだね……まあ、本人はちゃんと理解しているみたいだし、いいんじゃないかな。ねっ、なー」
「ナ」

おにいちゃんの呼びかけに、なー が返事をします。そんな なー のノドをなでると、ゴロゴロとノドを鳴らして 気持ち良さそうに目をつむります、かわいらしいです

「それで、今日は何をしているんですか？」

以前に ホムが来た時に『錬金術』を教えたことがあってから、ホムが来た際には『錬金術』について教えを乞われることが これまで多かったのですが、今日はそういうわけではないようです

「ちよつと 久々に武器を作ろうと思つてね」

そう言つて 手に持つ鍛冶仕事に使うのであろう金槌を見せてきた

「農具を作つたりするとは聞いたことがありましたが、武器も作れるのですか」

「基本は一緒だからね」

なるほど、たしかに金属加工という点で考えれば そう違いは無いのかも知れません

そう考えながら ホムは『炉』の近くまで持つてこられている素材

に目を向けます。それはホムも知っている鉱石。アーランド周辺の採取地で手に入るものです。ただ、気になるのは……

「疑問なのですが…インゴットを精製せずに、鉱石から武器を作るつもりですか？」

「えっ？インゴット…？」

おにいちゃんは首をかしげて聞き返してきました。……どうやらインゴットのことすら知らないようです

『インゴット』とは、鉱石に含まれる金属物質を加工しやすい状態にしたものことです。……もしかして、おにいちゃんは その工程無しで武器を作るのですか？」

「うん。このあたりで採れる鉱石は、名前は違うけど 僕の知ってる鉱石と似た性質のものがあるから、それを使って 作れば問題無いと思うよ。いちおう 農具はちゃんと出来たわけだし…」

「信じがたいですが、おにいちゃんなら本当にやってしまいそうです。……『テキトー錬金術』の前例がありますし」

「あはははっ…アレは本当によくわからずにやってただけだね」
恥ずかしそうに微笑みを浮かべる おにいちゃんを見ながら、ホムはもう一度鉱石へと目を向ける

……やはり信じられません。あのような鉱石をそのまま加工しようとしても困難で、結合が弱くなり完成品はとももろくなってしまいうはずです

しかし、ここまでくると 逆に気になってきました。このままな…と戯れながら見学するとしましよう

と、おにいちゃんが立ち上がり コンテナのほうへと歩いて行き、中から何かを取り出して 運んできました。……何でしょう？追加の材料でしょうか？

気になり、それらを見てみると――

木の枝、植物のツル、それと…何か甲虫の皮？武器の装飾にでも使うのでしょうか？

続いて、『何かのタマゴ』、ニンジン、ダイコン、ネギ、『サワーアツプル』、バター……

「…今から作るのは、料理でしたか？」

「作るのは武器だけど…？」

「…………おにいちゃんは疲れてるんです。ホムと　なーが添い寝してあげますから、今日はゆっくり休んでください」

「えっ!？」

「子守歌も　うたつてあげます」

「ホムちゃん!?! いったいどうしたの!?!」

結局　おにいちゃんは休んでくれず、武器作りを始めてしまいました。正直、ついていけそうもなかったので、ホムは　なーを連れて『離れ』へとむかいました

途中、『モンスター小屋』のほうからウォルフが出てきて　ホムに近づいてきました

「あなたも、はじめて会った時よりも大きくなりましたね」

そう言いながら頭をなでると、なんとなくなりますが気持ち良さそうで目をつむります。そして、なでるのをやめると「もっとしろ」と言わんばかりに自分からホムの手にすり寄ってきました

「…ホムとなーと　一緒に遊びますか？」

「ワフッン！」

尻尾をブンブンと振っているので、ホムはこの子が喜んでいるのだと判断します

こう接していると、ホムが採取地におつかいに行く際に出くわす『ウォルフ』たちと同族だとは思えません。この子も　なーと大差ない存在のように感じます

ふと、ウォルフが首あたりに巻いている　青い布が目に入ります

それは「人間に友好的なモンスター」の証であり、アーランドの王宮から街全体へと その話は広まったものでした。しかし、「人間に友好的なモンスター」の話はそれ以前から噂として広まっていたかもしれません。そもそも青い布は、旅人や商人を助けたモンスターがつけていたもので、そのモンスターが 以前から広まっていた「人間に友好的なモンスター」だったそうです。

ホームも噂でも聞きましたし……数ヶ月前に実際に出会いました。アーランドの街への帰り道がわからなくなったホームの前に現れて、帰り道を教えてくれた あの「モコモコ」と鳴く、金色の毛のモンスターです。

「あの子は、おにいちゃんやあなたのお友達なのですか？」

そう問いかけてみましたが、ウォルフは首をかしげるような仕草をしました……

まあいいでしょう。今は忙しそうですから、機会を見て おにいちゃんに聞いてみることにしましょう。

二年目 王国祭 『武闘大会・1』

『模擬戦用 演習場』、おおよそ半径10mほどの円形のフィールドを取り囲むような形で すり鉢状の観客席が設けられているこの施設は、国勤めの騎士が極稀に使用する程度の施設である

しかし、この日は違った

観客席には多くの人々が詰めかけていて、あたりは普段の静けさが嘘であるかのように 賑やかであった

そう、今日ここは 今年の『王国祭』の目玉イベント『武闘大会』の会場となっているのだ

そんな会場の観客席の一角、とある最前列の席……

「ううっ……人が多くて ちよつと怖いよう……」

「ファイリーちゃん、大丈夫？」

少し怯えたように 不安そうな顔をするファイリー。そのファイリーの隣に座り 顔を心配そうに覗き込むリオネラは、ファイリーの手をとり 優しく握った

「……ありがとね、リオネラちゃん。その……もう少し握ってもらっていい？」

「うんっ。いいよ」

「にしてもよ、人混みが怖いなら、無理して来なくてもよかったんじゃないか？」

リオネラのそばにたたずんでいる黒猫の人形・ホロホロが、ファイリーに向かって言った

しかし、それに対してファイリーは首を振った

「だって、ミス君が出場するんだもん。私だって応援したいし……不安で……し、心配だし……」

「つい このあいだは「ミス君が勝つー」なんてこと話してたのに、やっぱり心配なのね」

「あらあら」といった感じに虎猫の人形・アラニーヤが言う

そこへ、ひとりの少女が通りかかった

「あら、あんたたちも来てたの。……ということは、マイルスは結局出場するのね」

「あつ！クーデリアさん、こんにちは。……？あの……ロロナちゃんは一緒にじゃないんですか……？」

リオネラの問いに少女——クーデリアは「隣、じゃまするわよ」と言いリオネラの隣に座ると、ひとつため息をつけて答えた

「一緒だったわよ、ついさつきまでね。でも、どっかの誰かさんの姉に連れてかれたのよ」

クーデリアがファイリーにジロリと目を向けながら放った。その言葉に「ビクウ!？」と反応したファイリー。……実のところ、「自分の姉が何かやらかした」ということに反応したわけではなく、ただ単にクーデリアに対して苦手意識があったので、反応してしまっただけなのだ。……

「そういや、去年もそんなことなかったか？」

「あの受付さんに引つ張られていくロロナを見かけたわね」

ホロホロとアラニーヤが思い出したように言うと、クーデリアは軽く頷いた

「そうよ。去年も連れていかれて、参加して……で、優勝して『キャベツ娘』に……」

『『キャベツ娘』……？』

去年はずっと家にこもっていてお祭りを見ていなかったファイリーが疑問符を浮かべる。が、知っているリオネラは「はははっ……」と少し困ったような笑みをこぼした

「もしかしたら、ロロナちゃん、いい線行くかもしれないよ」

「最近は採取地での戦闘も結構様になってきてたし、ありえなくはないんじゃないかしらっ？」

「まあ、へっぴり腰なのは、あんま変わってねえけどよ」

リオネラとアラニーヤ・ホロホロの言葉に、ロロナに会ったことが無く、話でしか知らないフィリーは「へえー、そうなんだー」と反応をしめし、対してクーデリアは…

「勝ち負けじゃなくて、私としては、ロロナがケガさえしなきゃなんだった方がいいわ」

そう言った直後、どこからかラツパのような音が鳴り響いた

観客席の最前列よりも少しせり出すように設けられた『司会席』で、ひとりの女性が『マイク』と呼ばれる機械を手に、声をあげた

『皆さま、大変長らくお待ちせしました！』

その女性——受付嬢・エステイの声は『マイク』の作用により何倍にも響き渡り、会場全体に行き届いた

『ただいまより、今年の『王国祭』メインイベント『武闘大会』を開催します!!』

開催の言葉に会場が湧き立ち、歓声があげられた

『今大会は、8名によるトーナメントによって行われます！参加者全員粒ぞろいです！』なお、ルールは良識の範囲で何でもあり！止めが入ったらおとなしく従うこと！以上!!』

とてもアバウトなルール説明を終えたところで、ふたりの参加者がそれぞれ東と西方向にある、控室につながるゲートから、中央の円形のフィールドへと入場し、エステイに紹介されると武器を持った腕を挙げるなどして応えた

『さあっ！第一回戦・第一試合、開始です!!』

ツカーン！

開始の合図のゴングが鳴り響いた

第一試合では、貴族のボディガードを勤めるスーツの男が勝利

した

第二試合は 行商人の護衛等を請け負う力自慢の男と、錬金術士・ロロナ こと ロロライナ・フリクセルだった

その勝敗はあっさりついた

開始の合図直後、力自慢の男がロロナに近づく前に――

「うーっ……もうこうなったら……えーいっ!!」

不本意な出場からか涙目になっていたロロナが 気の抜ける掛け声で投げたのは『フラム』、初歩的な爆弾だった

結果、火傷や大きな傷は負っていないものの、力自慢の男は すすで黒く汚れ、髪の毛がクルクルに爆発しアフロとなって 目を回し、ロロナが勝者となった

そして第三試合は……

カンカンカーン!

『勝ったのは 王国最強の騎士・ステルケンブルク・クラナツハ! 対戦相手の攻撃を全ていなした上での強烈な一撃っ! その余裕な表情も相まって 実力の差を見せつけた対戦となりました!!』

試合終了のゴングの後の 勝者を告げるエステイの声と共に、拍手と歓声が盛大に巻き起こる

『さあ、続いては第四試合! この戦いの勝者が準決勝へと進む最後の人物となります! …では、紹介しましょう! 東のゲートから出てくるのは……オレの剣捌きに見惚れるな! グリフォンだっ! 倒してやるぜ――』

名前を呼ばれて出てきた 鼻の高い男は、細身の剣を抜いて素早く数回振った後、剣先を天へと向けた。太陽の光を反射する銀色の鉄の刀身は鋭い輝きを放っていた

『続きまして！』

鼻の高い男への歓声が一通り収まったところで、エステイが 次の参加者の紹介へと移る

『花や野菜の栽培、薬の調合もお任せ！知る人ぞ知る職人！ 農業少年・マイスっ!!』

西のゲートから出てきたのは、アーランドの街の人たちとは様式が異なった服を身に纏った少年——マイスだった

盛り上がっている観客たちは、参加者が知っている人でも知らない人でも歓声を上げるもののだが……マイスの登場の際に上がった歓声は、次第にざわめきへと変わっていった

『……どうかしたのかし……はあ!?ちよ、ちよっとストップ！ストップ!!』

最初はざわめきを不思議そうにしていたエステイだったが、ざわめきの原因に気がついて 司会席から身を乗り出すようにしながら一旦進行を止めた

ざわめきの原因はマイスが両手に持つ武器だった

それはエステイの記憶にある マイスが持っていた一対の短剣ではなかった。ソレは、太陽に照らされ 銀色に輝きながらも鋭さなどまるで感じられず、柄から伸びている部分は剣にしては細く薄く、その先端は尖ってなどおらず 半球に近い形に加工された薄い鉄板が取り付けられていた

そう、マイスが両手に一本ずつ持っていた物は——料理で使われる『おたま』だった

そんなものを持って出てきたら、それは誰だって驚き困惑するだろう。現に、マイスの対戦相手はもちろん、大勢の観客たちも「これはどういうことだろう」と疑問符を浮かべている

そして、彼女たちも……

「おいおい、マイスのやつ大丈夫かよ」

「これはフィリーの不安が的中しちゃったかしら……」

「えうっ!?わ、わわ 私のせい!？」

「そんなことないよっ……うーん、マイルスくん、どうしちやったのかな……?」

なお、ひとりだけ反応が違ったのがクーデリア

『『フライパン』で戦うやつもいるんだから『おたま』も……いや、アリ・ナシの前に、細くて頼りないかしら……』

『『フライパン』でモンスターを叩きのめす とあるコックと何度も探索を共にした彼女の感覚は、すでに周りとは少しズレてしまっていた

ここで困ったのは司会進行をしているエステイ。てつきりいつも持っていた短剣を持って来ているんだとばかり思っていて、参加の受付をした際も あまりマイルスの心配をしていなかったのだが……一気に心配になってしまった

『ちよつと ちよつと!?色々大丈夫なの!?!』

そう言うエステイに対し、マイルスの反応はというと――

『おたま』を持ったまま両手を上に上げ ひじを曲げる……つまり腕を使って「○」^{まる}を示したのだ

『マイルス君……本当にそれでやる気なのね……』

エステイの言葉は もう司会者としての言葉ではなく、普段の調子の言葉でのものだった

なお マイルスといえば、小首をかしげていたが のちに大きく頷いて肯定した

『あーもうっ、どーにでもなっっちゃええ!それじゃあこれで試合開始するわよ!両者、かまえて!!』

やけになり気味のエステイがそう言うと、会場が再び湧き立つ。歓声の中には『『おたま』ーっ!がんばれー!!』や『『おたま』に負けんなよー!』などといったものも混ざっていた

マイルスは両手の『おたま』を構え、対戦相手の鼻の高い男は 呆れたような笑みをしながらも剣を構えた。身長が頭一つほど違う両者

の視線が重なった：

ゴングを鳴らす用意は整った……

『それじゃあ、第一回戦・第四試合……』

『開始っ!!』

ツカーン!

パパーンツ!!

ゴングが鳴った直後、金属が二回ぶつかる音が ほぼ一回のように聞こえた

「えっ」

その声が誰のものだったのかは、誰にもわからなかったが……おそらく、その光景を見た人の誰があげた声でもおかしくなかっただろう。なぜなら、観客たちの視線が集まっている円形のフィールドでは……

開始の合図の時と同じ体勢の 鼻の高い男と、そのすぐ前まで詰め寄り、男の首に片方の『おたま』を突きつけているミス。そして

ガシャーン!

開始の合図の時には男が両手で持つて構えていたはずの剣が、上空から落下してきて 男の数歩後ろのあたりのフィールドの石畳に叩きつけられた

背後から聞こえる 自分の剣が落ちてきた音に、男は振り返らなかつた。いや、振り返ることもできなかつたのだ

自分の首に突きつけられているのは『おたま』だとはわかつていた。だが、刃がついているわけでも、尖ってるわけでもないにも関わらず動くことが出来なかつた。剣を握っていたはずの手は どこも怪我をした様子はないが、鈍い痛みが続いている

男は思った。「オレは剣を打たれたのか、手を打たれたのか」……ギ

リギリでマイスの動きを目で追えた程度の彼には、それすら理解できなかった

カンカンカーン!

試合終了のゴングが会場の時間を再び動かした

『うそっ……あっ?!…そ、そこまでー!勝者は農業少年・マイス!!なんという早業でしょうか!』

勝者が告げられ、マイスは突きつけていた『おたま』を下ろし一歩下がった。それとほぼ同時に、対戦相手の男が 足から力が抜けたように崩れ落ち 尻餅をついた

『ゴングが鳴ると同時に距離を詰め、片方の『おたま』で剣の刀身を思い切り叩いて怯ませ、ほぼ同時に もう片方の『おたま』で下から剣の柄ごと かち上げて剣を空高くへと吹き飛ばす!怯んだその瞬間に武器を弾き飛ばされてしまったのは さすがに打つ手は無かったか!?!』

エステイによる解説を耳にしながらも、『おたま』を腰のベルトにかけて固定したマイスは 尻餅をついたままの対戦相手の男に近づいた

「大丈夫ですか?」

差し伸べられた手に 男は一瞬目を見開き驚いたが、フツツと笑みを浮かべるとマイスの手を取った

二年目 王国祭 『武闘大会・2』

ドツカーン!!

『おおつとー! またしてもド派手な爆発!! さすがは 街に時折響き渡る爆発音の発信源であるアトリエの店主と言ったところか!? 準決勝・第一試合、勝者は美少女錬金術士・ロロナちゃんだー!!』

あまり褒めているようには聞こえない解説の後に勝者が告げられ、観客たちは歓声をあげて盛り上がる

錬金術で作った爆弾の爆発は、シンプルでありながら派手で 視覚と聴覚をストレートに揺さぶってくるため、平穩に慣れていた観客たちにとってとても刺激的で ガツシリと観客たちの心を掴んだのだ

『さあ! 続きまして、準決勝・第二試合です!!』

第一試合の勝者と敗者がフィールドから退いたことを確認したエステイが進行をはじめめる。観客たちの歓声は、先程の試合の興奮とこれからの試合への期待が入り交じり、なお大きく 盛り上がっていく

『まずはこの人! 第一回戦で余裕の勝利を飾った男、その鋭い眼差しが見据えるのは勝利なのか!? 王国最強の騎士・ステルケンブルク・クラナツハ!!』

大剣を携えた騎士——ステルケンブルク:ステルクが東ゲートから出てきた。ステルクは観客からの声援に応えることはせず、普段と変わらない仏頂面で背筋を伸ばしていた

『対するは、色んな意味で 会場を驚かせた少年、花や野菜、薬以外にも戦闘だつて任せなさいっ! 『おたま』を振るう少年・ミス!!』

西のゲートから出てきたミスは、腰のベルトにさげた2本の『おたま』を ぬき、頭上へとかがけて2本をぶつけ「カンツ!」と小気味いい音を鳴らした

『それでは、両者 かまえてください』

かまえの合図で 腰を少し下げて重心を低くし構えたマイルス。だが、その構えは解かれた

理由は、対戦相手のステルクが武器を構えない まま数歩近づいてきたからだ

マイルスや司会進行のエステイが どうしたのかと疑問に思っていると、ステルクの口が開いた

「……少し いいか？」

「えっ、…はい」

「キミの剣のうでは並大抵でないことは さきの試合で分かったが……ソレではキミの実力を出せないのではないか？」

ステルクの言うソレとは、もちろんマイルスが両手に持つてる『おたま』である

ステルクの疑問は もっともなことなのだが……マイルスは笑顔で答える

「大丈夫ですよ！これは正確には『おたま』じゃなくて、『アクトリマツセ』っていう 僕が前いた地域では 歴とした武器なんです。おたまとほとんど同じ加工で作られますけど……」

「それはもう『おたま』なのではないか……いや、問題無いのであればいいが」

そう言うとステルクは きびすを返し、元の距離まで離れて 再度マイルスに向かい合った。今度は腰にさげていた大剣を構えて

マイルスも再び『おたま』——もとい『アクトリマツセ』をかまえた

『つでは！二人が準備を終えたようなので、始めますよー！準決勝・第二試合…』

『開始っ!!』

ツカーン！
パーンツ！！

開始のゴングと同時に動き、直後に二撃いちげきを放ったのはマイスだったが、一回戦・第四試合と同じなのはマイスだけであった

マイスの攻撃が放たれる　その前に、ステルクがマイスの動きに反応し、行動に移っていたのだ

天へと向いていた大剣の切っ先を、大剣を持つ両手の手首と肩をひねって　切っ先を地面へと向ける。素早い動きでマイスが近づくと一瞬で　構えを変えたのだ

その構えからステルクが振るうのは「切り上げ」、攻撃のために突っ込んできたマイスへのカウンターとなる一手だ

しかし、相手の変化についていけないマイスではない

ステルクが「切り上げ」てくると察したマイスを変えたのは　両手の『アクトリマッセ』の動き

下から上がってくる大剣を左で思い切り叩く。地へと叩きつけることこそ　かなわないが、大剣の勢いが一瞬弱まった

そして　その大剣の横っ腹を右で思い切り叩く。その反動でマイス自身は横に飛ぶが……この行為をしたのは　ステルクへと突進している最中、彼はステルクから見て左横を跳んで通りすぎるということになった

ザザザッ！

ステルクの横を通り過ぎてすぐのマイスが　突進の勢いを足を踏ん張りこらし、次の一步を踏み出した時に目にしたのは、「切り上げ」
終えたばかりのステルクの後ろ姿だった

結果として、ステルクは　マイスの初撃へのカウンターは二本の『アクトリマッセ』にぶつかっただけで空を切り、マイスは　初撃こそ逃したが　カウンターを避けた上にステルクの後ろをとったの

だった

背後を取ったマイスは 再びステルクへと急接近し一気に間を詰める

しかし、ステルクは 背後をとられてしまったことは百も承知だ。切り上げの勢いをそのままに全身をひねりながら片足を退き、その足を軸にして回転する。もちろん、手にした大剣で薙ぎ払うようにして、だ

ガ キン ツ !!

薙ぎ払う大剣と、マイスが打ち込んだ『アクトリマッセ』がぶつかり、大きな音が響いた

ぶつかった両者は弾かれあい、その間は大きく距離が開いた。ただ、武器や本人たちの質量の差からか、ステルクは そのままの体勢でずりさがるように1mほどの後退。

対してマイスは 弾き飛ばされるように数m宙を舞い 着地のあとに数回 転がって勢いをころしたのちに立ち上がり、結局10m近くも ぶつかった地点から離れていて、もう少しで観客席との間にいる壁にぶつかるころだった

……そしてこれらは 試合開始から10秒も無い短時間でおこなわれたやりとりだ

ステルクとマイスの間が大きく開いたことにより、速く・力強い攻防に息を飲んでいた観客たちに ようやく余裕がもたらされた

湧きあがる歓声。それは本日最大であり、会場全体が大きく揺れているように感じられるほどだった

しかし、フィールドに立つふたりには 盛大な歓声も どこか遠くのもののように聞こえていた

先に動いたのは またしてもマイス

それは当然のことではあった。ふたりには武器のリーチの差があ

り、リーチの短いマイスは ステルクの懐に入る必要があったが故に、自ら近づかなければならなかったのだ

キイン カンツ キキツン ……………

突っ込んできたマイスの連撃を 何度も己の大剣に適した距離で迎撃するステルクだったが、こちらもこちらで攻めあぐねていた。「次の接近で決める」と思っていたのだが、そうはいかなくなってしまうのだ

それは剣同士（片方はおたまだが…）がぶつかった際に気がついた——さきほどより、少し軽い…？

そう感じ 不思議に思ったステルクだったが、すぐに気づかされることとなった

マイスの戦闘スタイルが決定的に変わったのだ

さきほどまでは スピードとパワーで押しきるような戦い方で、勢いはあるが 動きは直線的で咄嗟の行動もほとんど力押し、剣術に粗さとスキが見えていた

しかし、今はどうだろうか

一撃一撃は軽くなったが その分マイスにも余裕ができたようで、一撃加えたその動きが次の一撃へと流れるように繋がってスキが少ない。その上 右のスキを 左が補い、逆も然り…

「なるほどな…」と防戦一方のステルクは ひとり心の中で唸った 最初は力押しで短期決戦を仕掛けてみるが、それがリスクが高いとわかれば すぐに長期戦へと持ち込む

そしてその長期戦も厄介なものだ。パワーを抑えることで自分は一定の余裕を保ちながらも、素早く休み無い連撃で左右に振りながら相手のスキを誘う…：…相手にすると 実にいやらしいものだ

だが、マイスの連撃をなんとか防ぎ 耐え忍んでいるうちにステルクは光明を見た

二本の『おたま』——『アクトリマッセ』の連撃にも極わずかで

はあるが 補い合えていないスキが存在したのだ

「——っ！そこだっ!!」

わずかなスキをつくためにステルクが放った最速の一撃の「突き」。これまでの「切り上げ」や「薙ぎ払い」よりも出が速く、最短で狙った所を攻撃できる一撃は マイスをとらえ

とらえたと思った瞬間に『アクトリマッセ』を振るっていたはずの
マイスが消えた

「なっ!？」

「どこへ!？」と言うヒマも無く、答えが存在した

突いた己の大剣にかかっている「影」。それが素早く…しかしステルクにはゆつくりと自分へと近づいてくるのが見えた

「影」を見た瞬間にステルクは理解し とっさに動こうとするが、つい一瞬前に伸ばしきった腕を上へと振り上げるのは難しく、半ば無理矢理 体ごと倒しながらひねることで 頭上へと振ろうとする

だが

『裂空』!!」

ステルクの「突き」が放たれる瞬間に宙へと跳んでいたマイスが空中を滑るように頭上からステルクへと接近し、眼前で交差させていた腕を開くようにして『アクトリマッセ』をステルクへと打ちつけた
「ヌグツはあ!？」

大剣を無理矢理振り上げようと 体をひねっていたことで、マイスの『裂空』の直撃を避けることは出来たが『アクトリマッセ』の片方はステルクの側頭部に当たり、ステルクはそのまま横へと倒れ、背中を地面に打ちつけてしまった

頭を打たれたからか 軽いめまいを感じたステルクは己の敗北を悟った

……だが、数秒のめまいが治まるまでに 武器が突きつけられることも、勝者が告げられることも無かった

「ぐっ……！」

めまいは治まったが、マイスの攻撃によるものか 無理な動きをしたからか、身体の所々が痛む。そんな中、なんとか立ち上がり 右手が固く握っていた大剣を持ち上げる……その時 気がついた

「……きゆう……」

持ち上げようとした大剣の下でマイスがのびていた

このときステルクは理解できていなかったのだが、事のでんまつはこうだった

マイスの攻撃を受けて倒れ込むステルクは、無理矢理振り上げようとしていた大剣を手放すことはなかった

そして、振り上げかけの大剣は 倒れていくステルクに引かれてそのままステルクの肩を中心にして半円を描くように地面へとむかっていき……その軌道上に、ステルクへ跳びかかったあとのマイスがいたのだ

空中で なおかつ背後からの不意の強襲に、マイスは 避けることが出来ずに そのまま地面へと叩きつけられたのだった

マイスにとって幸いだったのは、背中に当たってきたのが大剣の刃ではなく腹であったことと、大剣が柄のほうから先に地面に落ちたことで最後の最後は思い切り叩きつけられなかった事だろう

『なんと!?!激闘と衝突の末、立ち上がったのはステルケンブルクのみ！準決勝・第二試合の勝者は王国最強の騎士・ステルケンブルク・クラナツハ!!』

「……はあ!?!」

ステルクは状況を理解できていないまま勝利が告げられ……

『……というわけで、救護班っ！マイス君の回収早くー!!急いで、急いで!』

マイスはタンカで運ばれていったのであった

マイス 「武闘大会の その後に」

「……んっ…あれ…?」

重いまぶたをあげて見えたのは、知らない天井。僕は今 寝転んで
いるみたいだけど、少なくとも家のベッドではない

「あっ…マイス君!!」

そう僕の名前を呼ぶ声が聞こえたので そちらへ目を向けると、お
そらく僕が今寝ているベッドと同じタイプのものであろう 白い簡
易的なベッドに腰をかけていた フィリーさんとリオネラさん、それ
にホロホロとアラニーヤが、立ち上がり こちらへ駆け寄ってきた
「えつと…っ!?!」

起き上がろうとしたところ、身体に鈍い痛みが走り 顔をしかめて
しまう

「む、無理しちゃダメだよ…!骨折はしてないそうだけど、いろんな
ところを打撲してたりしてるみたいだから、ゆっくり体を休ませない
と…!」

リオネラさんに言われて 自分が感じる痛みの理由がわかったん
だけど、どうも寝転んだままでのいる気になれなくて、痛みを我慢しな
がら上半身を起こす

「大丈夫?マイスくん?」

「うん、なんとか、ね…:そうだ、僕はステルクさんと闘ってて…:そ
れで…!」

それで…:どうなったんだっけ…?

そう疑問に思っていると、リオネラさんのそばに浮いていたホロホ
ロとアラニーヤが フワフワと近づいてきた

「んー、まあ アレは相打ちってところか?」

「あなたが気絶してたのと、騎士さんのほうが先に立ち上がったから
彼が決勝戦に進出したわよ」

うーん…未だによく思い出せないが…:まあいいか

「でもって、その決勝戦も たぶんもう終わっちまってるだろうな」

ホロホロの言葉に 僕は少し疑問に思うことがあった

「たぶん」って、決勝戦は観てないの？」

「観に行けねかったんだよ。で、終わったと思ったのは 聞こえてきてた爆発音がやんだからだ」

ああ なるほど

決勝戦に出てたのはロロナとステルクさん。そのうちロロナは錬金術で作った爆発物を中心としたアイテムで戦っていたから、その爆発音がなくなったのであれば 決着がついたんだろう

そう考えていると、ホロホロがその短い腕を組んで「ウンウン」と頷くように動いた

「それにしても すごかったんだぜ。マイルスがやられちゃった時 こいつらふたりそろって声になってない悲鳴上げるわ、気失いそうになるわでなあ…」

ホロホロの言うことを肯定するように アラーニヤも頷いた

「そうよー。この『医務室』に駆けつけた時も、お医者さんの邪魔になっちゃうのに わんわん泣き出しちゃって…。ついさつきまで泣いてたのよ」

「そ、それは…だって…」

「ビターンって、ビターンってなって…」

……本当に、僕はどんな負け方をしたんだろうか…。おそろくだが、リオネラさんとフィリーさんの様子からすると、結構 散々なやられ方をしてしまったのだろう

「ごめんね、ふたりとも。心配かけちゃったみたいで…」

「ううん、いいの！」

「マイルス君に大きなケガがなくてよかったよっ！」

そう言ってくれたふたりだったけど、泣いていたことを知られてしまったからか、リオネラさんもフィリーさんも顔を赤くしていた

『医務室』の外へと繋がる扉。おそらく あの外は『控え室』があったりした 『観客席』の下の空間だろう

その扉から見知った人が顔を覗かせてきた

「つと、あら、もう起きてたのね」

そう言って入ってきたのはクーデリアだった

「うん、ついさつき目が覚めたんだけど……クーデリアがここに来たってことは、ロロナは無事に勝ったんだね」

僕がそう言うのとクーデリアは「まあね」と返し、そのまま続けた

「ロロナが あんたみたいになるんじゃないかって ちよつと心配してたんだけど……もし第二回武闘大会があるとしたら 爆発物は禁止になってるわよ」

そう断言したクーデリアを見て理解した

きつとロロナは決勝戦でも一方的な勝負で勝ったのだろう。恐るべきは錬金術といったところだろうか……いや、参加者の中で唯一遠距離攻撃が出来るという時点で勝ちが堅かったのかもしれない

「あとは、決勝戦の後に色々あったりもしたけど……それはまあいいかしら。 で、調子はどうなの？」

「うん、まあ大丈夫かな……？えつと、背中とかが時々痛むくらいで……」

言い終わる前に、遠くから走ってくる音が耳に入ってきた。そしてその足音は『医務室』の前で止まり……

「ミス君、大丈夫!？」

勢いよく入ってきたのはロロナだった

「ちよつとロロナ。怪我人がいるのがわかってるなら、少しは静かにきなさいよ」

「うっ……ごめんね、くーちゃん。全部終わって やつとのミス君のお見舞いだったから……」

クーデリアに叱られてしよぼんとしたロロナだったが、僕のほう

を見てニツコリと笑った

「うんうん、マイルス君が無事みたいで よかったあ。あつ、もし まだ痛むところがあるなら お薬使う？ 私だって ちゃんと調合できるんだよ！」

コロナは最初のほうこそ僕のことを心配してくれているようだったが、何故か最後は対抗心を燃やしているようだった

「よいしょ…つと」

身体を横にすべらせてベッド脇まで移動し、足を床に下ろす

すると、リオネラさんとフィリーさんが僕の両隣に駆け寄ってきた

「無理はしなくていいよ、マイルスくん」

「必要なら わ、わ私が手を貸してあげるよ」

「えっ、あ、うん…」

心配してくれるのはありがたいことなんだけど……もうそんなに痛むわけじゃないし、そんなにくつつつかれると むしろ動きづらいついいうか…

「もう大丈夫だから、ね？」

そう言っつてひとりで立ち上がって 大きく伸びをしてみせると、まだ少し心配そうな顔をしていたけど ふたりはしぶしぶ離れてくれた

と、そんなことがあったものの 『医務室』の外へと繋がる扉のほうへと行こうとしたのだが、その途中に立っていたコロナとクーデリアが

「私もお姉ちゃんとして、頼ってもらわうべきじゃないのかな？」

「いや いつからマイルスの姉になったのよ」

「えつと……けっこう前から？」

ホームちゃんに「おにいちゃん」と呼ばれ慣れてしまっているから、

コロナに弟扱いされても 僕は特に驚きもしないんだけど……

だからといって、クーデリアから「何いってるの、この子…」といっ

た意思を 視線で投げかけられても、苦笑いすることしかできないのだが…

「そうだ。コロナの優勝祝いに 今からみんなで どこかに食べにいかない?」

「えっ!?そ、それはうれしいけど…でも、いいの?」

僕の提案に、嬉しそうに けど少し申し訳なさそうに言うコロナ。しかし、その隣のクーデリアはあっさりと頷いていた

「遠慮すぎよ コロナは。せっかくマイルスがこう言ってくれてるんだし、こんな時ぐらいはお言葉に甘えちやいなさいよ」

「そもそも、マイルくんは そんなに出歩いてもいいのかな…?」

「いいんじゃないかねえのか?入院しろってわけでも無いし、本人も大丈夫って言ってたしな」

「お医者さんが言ってたわよ「体が丈夫過ぎて 逆に驚かされた」って」

リオネラさんが心配そうに言うけど、それをホロホロとアラニーヤが「心配ない」と言いくるめた

「ええつと…私もついていっていいの…?」

「うん!せっかくの機会だからね。フィリーさんはコロナと初めてだから緊張するかもしれないけど、とってもいい人だから きつと仲良くなれるよ」

そんなことを話しながら僕たちは『医務室』を出て、街へとくり出した

今年の『王国祭』も、街はとてにぎやかだ

マイス「3年目になって変わったこと」

カンツ！ カンツ！ カンツ！

金槌を振るい、金属の塊を 自分の望む形へと変えていく
僕が 家の作業場の『炉』のそばで時々している鍛冶だ

しかし、今日はいつもとは違うところがあった

「……………（ジー）」

僕から少し離れたところで、イスにドカリと座りながらも 僕の作業を食い入るように見ている男性が一人。『男の武器屋』の店主のおやじさんだ

名前を聞いたんだけど、「えつと、まああれだ。とりあえず「おやじさん」とかそんな感じに呼んでくれっ」って、何故か教えてくれなかった

以前にフィリーさんのおつかいの手伝いをしたときに初めて会ったのだが、そのおやじさんがなんでここにいいのかというところ……

話を戻すと去年の終わりの『王国祭』。そのメインイベントだった『武闘大会』に僕が出場したことがきっかけだ。僕は優勝をしたわけではないのだけど 僕にもかなりの注目が集まったらしく、使っていた『アクトリマッセ』がやけに目立ったらしかった

薄くよわよわしく見えるのに 大剣と打ち合う『おたま』…

そうになると、やはり鍛冶をしている おやじさんは気になったわけだ。「あんなもんをどうやって作ったんだ」と

でも、おやじさんは僕のことには顔くらいしか知らなかったし、僕は武器屋には立ち寄らないから中々出会えなかった

そして『王国祭』が終わり 年を越したところに、コロナが僕と知り合いだということを知ったおやじさんが コロナから僕の家を場所を聞いて、今日訪ねてきたのだ

…それにしても、色々心配だ

以前に鍛冶をしていた際にホムちゃんが質問してきたことで知っただけで、僕のする『鍛冶』と、ここの『鍛冶』はずいぶん違うらしい。本職の人が見たら、どう思うのかが全く予想できない

と、頭の中ではそんなことを考えながらも、普段通りに鍛冶をこなしていく。そのうちに、金属の塊の形が整っていき、剣の形になっていった

「よしっ、できた!」

最後の工程を終えて出来上がったのは『サラマンダー』。刀身が燃えるように赤く、見た目通り、火の属性がついている双剣だ

「ボウズ、ちょっとソレ、見せてくんねえか?」

そう言ったのは、いつの間にかイスから立ち上がって、僕のすぐそばまできていた、おやじさんだった

「あつ、はい、どうぞ」

「おう、あんがとよ」

『サラマンダー』を手渡すと、おやじさんはそれを手に取り、まじまじと眺め始める

こうやって見られていると緊張しそうなのだが……双剣である『サラマンダー』を、大きく筋肉質なおやじさんが持っている、何ともアンバランスで、良くか悪くか緊張することは無かった

「うん……ほうほう………はあく……なるほどなあ」

『サラマンダー』を見ながら、何やら呟いているおやじさんだったが、けど、ひとつ大きく頷くと、『サラマンダー』を僕へと返してきた

「どう…でしたか?」

「ん?どうって、何がだ?」

不思議そうに首をかしげるおやじさん

「いえ、その…こうやって鍛冶屋さんに、鍛冶仕事や出来た物を見て

もらったことが無かったから、本職の人から見たらどういふふうに見えるのかなあて思つて…」

「ああつ そういうやつか!……つつてもな…」

おやじさんは 明るく頷いたかと思えば、すぐに困つたような顔をして 首をすぼめて耳の後ろのあたりをかいた

「鍛冶のほうに関しては、たいしてなんも言えねえんだ」

「えっ? どうしてですか」

「嬢ちゃんから聞いてんだけど…ほら、ボウズは遠くの国から来たんだらう?」

「いちおうは そうですけど…」

「そんでだな、俺の知らねえ方法でしつかりと物を作れてるんだから俺の知らねえ遠くでは こんな風に作つてるのか」つて驚いたりはしても、アドバイスとかはできねえんだ。何もわかつてねえ俺が 下手なこと言つてボウズの鍛冶をダメにしちまつたらいけねえからよ」なるほど、と僕は感心した。そんなことを考えて言つてくれていたとは。前に会つた時にも思ったが、おやじさんは 大きな見た目からは想像しづらいけど、細やかな人みたいだ

「まあ心配しなくても、出来上がったその剣を見りやあ ボウズの鍛冶の腕が立派なもんだつてわかるつてもんよ!」

「…ありがとうございます!」

「いいっていいって。むしろ礼を言うのはこっちのほうだ。ボウズの仕事を見てたら 俺もまだまだ負けてらんねえつてヤル気が湧いてきたぜ! さつそく 帰つてデザインから武器を作りたくなつてきたつ!!」

そう言つておやじさんは 軽快なニカリとした笑顔を見せた。そして肩を回すその姿はとても力強く見えた

職人通り

「わるいなボウズ、わざわざ送つてくれてよ」

「いえ、僕も街に用がありましたから ちょうど良かったです！」
「そうかつ。そんじやあな！まあ気が向いた時にでも 俺の仕事も見に来たらいい！」

「はいーその時はよろしくお願いします！」

僕がお辞儀をすると、おやじさんは軽く手を振って『男の武器屋』のほうへと歩いていった

「さて、っと。それじゃあ僕らも行こうか」

そう言つて振り返つた僕の後ろには…

「なく」

家から こなー…じゃなくて、なー が歩いてついて来ていた

前は 僕が抱っこして連れてきていたのだけど、もう子ネコとは呼べなくなるほど立派に成長した なー は、僕の家とアーランドの街との間を自分の足で移動できるほどになったのだ

僕らの目的地も この『職人通り』にある。……というか、『男の武器屋』のすぐ隣の『ロロナのアトリエ』だ

コンコンツ

ロロナのアトリエ

「あーっ！ミス君、いらつしやーい」

「いらつしやいませ、おにいちゃん。それに なーも。ちゃんと歩いてくれましたか？」

ノックの後に 僕らを出迎えたのはアトリエの店主であるロロナとホムちゃん。ちょうど錬金術の途中ではなかったみたいだ

なー はピョンとホムちゃんのほうへと跳び、ホムちゃんは跳んできた なーを両腕と体でしっかりと受け止め、抱き締めた

そんな様子を見ながらも、僕は僕の用を済ませる

「はいっ、この前 お願いされてた『コバルトベリー』と『雲綿花』。ウチで大事に育てたものだから品質は保障するよ」

「わあ、ありがとう！せっかくだから、ゆっくりして行ってよ。お茶とお菓子 用意してくるから」

ロロナにそう促されたので、僕はアトリエへと入っていった

「あつ、そうだ」

みなで香茶を飲んでゆっくりとしている時に、急に何かを思い出したのか ロロナがそんなことを言った

「どうしましたか マスター？何か忘れものですか？」

「うなー？」

膝の上に乗せた なーを撫でていたホムちゃんがロロナに問いかけた

するとロロナは、「ううん、今日はそういうのじゃなくてね……」と首を振った。：「今日は」ってことは、前にそういうことがあったのかな？

「ミス君。ミス君って 錬金術は好き？」

「えっ うん、好きだけど？」

「すごい…即答だ」

いきなり何を聞いてくるかと思えば そんなことを……。そして僕のこたえに口を開けて驚いているロロナ

「どうしたの ロロナ？ いきなりそんなこと聞いて」

「えつとね…この前ね、師匠から聞かれたの「お前は錬金術は好きか」って」

ロロナは アストリッドさんの口調をマネて言うが あまり似ていなかった…いや、まあそれは置いといて、つまり アストリッドさんからされた質問を 一応は錬金術をしている僕にもしてみたってことか

「それで ロロナはアストリッドさんに何て答えたの？」

「それがね、私、錬金術が好きか嫌いかなんて考えたこと無くって、そ

れをそのまま師匠に言っっちゃったんだ。……それで良かったのかなーって思っ……」

「良かったも何も、ウソを言うわけにもいかないんだから　口ロナが思った通りのことを言っ……てよかったんじゃないかな？」

「というか、好きか嫌いかっていうのは　個人の考えなんだから、別にどうしないといけな……って話じゃないから、そう難しく考えなくてもいい気がする」

僕の言葉を聞いて少し悩むような素振を見せた口ロナだったが、ふいに顔を僕のほうへ向けなおして首をかしげた

「でも、何で　マイス君は錬金術が好きなの？　マイス君、お花とかを育てることとかのほうが好きそうなのに」

「別に　農業が好きだから他のものが好きだといけない　とか、錬金術が好きだから農業は嫌い　って話じゃなかったよね……？」

アストリツドさんが言ったというのも、他の何よりも好きだとか嫌いだとかという話ではなかったはずだろう

と、そんなことを思いながらも、錬金術が好きだという理由を口にすることにした

「錬金術って、本当にいろんなことができるよね。……薬の調合なんかは　前から僕も出来たけど、僕が知らないような物もたくさんあるんだ」

爆発物なんかは話には聞いたことはあっても見たことはなかったし、氷の爆弾『レヘルン』や　雷を落とす『ドナーストーン』なんて物は　見たことも聞いたこともなかった

「知らないことを知ったり　出来なかったことが出来るようになるのは　嬉しいし、それが生活の中で役にたったり　他の人に喜んでもらえたら　もっと嬉しいな。……そういう点だけ見ると、農業が好きな理由と結構同じなのかもしれないなあ」

自分で話しながら、気がついたことを付け足して言う。すると、話を聞いていたホムちゃんが頷いた

「なるほど。おにいちゃんは「錬金術そのものが好き」というよりは、錬金術によってもたらされる結果が重要であり、その結果を得るための手段の一つとして存在する錬金術は好きだということなのでしょうね」

「えっと…うん、たぶん そういうことだね」

ホムちゃんが 僕の言った内容を噛み砕いてくれたんだけど、なんとなく 堅苦しくなったような気がして、恥ずかしながら 一瞬理解できなかった

そして、ロロナはといえば…

「な、なるほどー、そういう考え方もあるんだねー」

「……ロロナ、本当にわかってる？」

「なんとなく、雰囲気であわかって…ないかな？」

……色々と心配だけど、むしろ そのくらいのほうがいいかもしれない

こういうことは 他の人の意見を参考にするよりも、自分でいろいろして悩んだりして考えたほうが やっぱり良いと思う。きつと、ロロナも自分で……

「えっと、つまり……ミス君はやっぱりお花とかお野菜とかを育てるほうが好きってこと？」

……きつと、自分で見つけられる…かなあ？

「マイス 「迷って悩んで…どうしよう?」

「はあ…」

「オイオイ、にいちゃん。商売話してるときにそんな陰気なため息吐くなよな」

「あつゴメン!?…ため息でてた?」

「ああ、しつかりとな」

僕が今いるのは自分の家の中、相対しているのは行商人のコオル
いつからか度々家に来るようになり、そのたびに僕は何かしら買い物をしている。以前に頼んだことがある作物の種の他にも 「あ、コレちょうどほしかつたんだ」というものが思った以上にあつたりしてよく利用させてもらってる

「別に にいちゃんの悩みに首つっこむつもりは無いけどよ、前みたいな状態にならないでくれよ?あれじゃ 商売しようが無いからさ」
「前って…ああ、あの時かな」

思い出すのは、『シアレンス』へと帰る手段が失われて すつごく落ち込んでいた時のこと。ある人には「死んだ魚の目をしてた」なんて言われたりもした

確かにあの時は、コオルの行商をほとんど利用しなかったなあ

「…今回も あの時と同じで、「できないことはできない」んだって割り切らなきゃいけないんだろうな…」

「うっし、こんなもんかな」

僕が買い物を終えた後、見せてもらっていた商品をコオルが片付け終えてひとつ息をついていた

「お疲れ様、今日も色々買わせてくれて ありがとう」

「いいって、こつちも商売だからな」

そう言ったコオルが「ところで…」と話をきりだした

「にいちゃんは、街の店に品物卸したりしてるんだろ？どんな物出してるんだ？」

「えっと、『キャベツ』とか『ニンジン』みたいな野菜を食堂に、草花や調合した日用の薬を雑貨屋さんに 定期的に買ってもらうてるよ。他にも、最近は依頼で注文がくることもあるかな」

依頼で注文が来始めたのは 去年の『王国祭』が終わった後からだ 『王宮受付』に行った際にエステイさんに「マイス君名指しの依頼が結構きてるわよー」って依頼書の厚い束を見せられた時は驚いたものだ……全部受けて、翌日に全部納品したら、今度はエステイさんが驚いたけど

そんなことを コオルにも軽く説明すると、何だかニヤニヤ笑いながら頷いていた

「にいちゃん、良くも悪くも『武闘大会』で目立ってたからな。そりやあ依頼も来るだろうし街の噂にもなるか」

「えっ、噂って」

「聞きたいか？」

「いや、遠慮しとくよ…」

あの『武闘大会』の後、街を歩いていたら『おたまの人』とか呼ばれたりしたし、半分もう知ってるようなものだ、きつと 尾ヒレもいっぱい付いてしまってるだろう……

『武闘大会』については 以前からの知り合いの人たちにも色々言われたりもした。イクセルさんには「フライパンもいいぞ」なんて言われたし、アストリッドさんには煽あおられたり からかわれたり……

そういえば、ステルクさんからは「あのような危ない勝ち方をしてしまい、申し訳なかった」と謝られて、その後「今度、キミが時間がある時でいいから 鍛練につき合ってはくれないか？」と頼みこまれたりもした

何度か手合せもしたけど、計3勝6敗1引き分け。ただ、いつもどっちが勝っても お互いに肩で息をするほどギリギリの勝負だった

たりする

おっと、今はコオルとの話しの途中だった

「えっと、それじゃあ 何をお店に卸してるか聞いたのは、何かの噂を聞いたから？」

ちよつと気になったことを聞いてみると、コオルは首を振った

「いや、そういうわけじゃなくてさ……いろんな物があるし オレもこうして結構立ち寄るようになったから、何か ここで仕入れて街で売るもんでもあつてもいいかなって思つたんだが……」

何を考えているのか、コオルは何かを指折り数えながら首をかしげたりしながら 言葉が続ける

「もうそんだけの物を売ってるなら必要なさそうか。もう、安定して卸されてるんなら 俺が今から割り込んでもリスクが高いだけだしな」

さすが商売人といったところだろうか。現状と後々の事とを色々と考えながら話してたんだなーと僕は感心したんだけど……

「でも、ここで諦めるのも 何だかもつたいたい気もするな……」

「そう思えるかもしれないけど、商売つてそんなもんだぜ。リスクを極力避けて利益を得るに越したことはないさ」

確かに その通りなんだろうけど、せつかくなら何かやってみたいと思つてしまつている僕がいるのも事実だ

そこで、ふと思いついたことをコオルに言つてみた

「ねえ、最近の街の人たち……というかコオルのお客さんたちが求めている物つて、何があるのか わかつたりする？」

「だいたいの傾向とかあつたりはするけど……そりゃ 人それぞれ色々あるぜ？それがどうかしたのか？」

「ある人が欲しがった物つて、その人だけが欲しがってことは少ないんじゃないかな？もしかしたら、気づいてないだけで他の人にとつても有益な物だつたりするだろうし……なら、誰かが欲しがった物を

商品として生み出すのも有りなのかなって」

「……つまり、商品を「から開発するってことか？リスクとかの前に、そもそもそんな市場があるか？」

「たとえば、旅をする人たち向けの物とかは まだまだ開発の余地はあると思うんだけど……自分で仕入れしてるコオルも 何か思い当たったりしない？」

そう僕が聞くと、コオル腕を組んで「うーん」とうなった

「あるにはあるけどさ……一から何か作るってのは時間も労力も、金だってかかるぜ？大丈夫なのか？」

「そのあたりは、ある程度はどうにでもなるから心配ないよ」

時間も労力も、『離れ』と『モンスター小屋』を建て終えてから 持て余してしまっている部分が多い。それに、お金だっけいつの間にか結構な額が貯まっていたので大丈夫だと思う

「わかった。オレがやれることは限られるけど 協力するぜ」

「ありがとう！ それじゃあ早速、最近の傾向についてなんだけども……」

王宮受付

また別のある日のこと。『王宮受付』に依頼品の納品と 新しい依頼を受けに来ただけども……

「はあぁー……」

「こんにちは、エステイさん。……どうしたんですか？元気が無いですけど……」

「ああ、マイス君。その……ちよっとね」

力無く手をヒラヒラさせて挨拶に応えたエステイさんだったが、やっぱり元気が無かった。本当にどうしたんだろう……？

「その様子だと、マイルス君はまだロロナちゃんに会ってないのね」「えっ、そうですけど……?!?ロロナに何かあったんですか!!」

カウンターの向こう側にいるエステイさんに詰め寄ると、エステイさんはギョツとした顔をして驚いていた

「ちよっ!?お、落ち着いて！落ち着きなさいってば!!」

「あつ、う……ごめんなさい……」

つい焦ってしまい、エステイさんに叱られてしまった

だけど、ロロナにいったい何が…

「実はね……」

エステイさんが教えてくれた話はこうだ

ロロナを助けてあげたいと思っていたクーデリアが、内容に対して不釣り合いな高額報酬の依頼を、自分の名前を隠し、ロロナ名指してエステイさんをお願いしていたそうだ

当然、ロロナは「こんなに受け取れない」って言っていたけど、エステイさんが「ちゃんと達成した依頼の報酬なんだから」と受け取らせていたらしい

正式に出された依頼だから、困ってる人がいるから出てるんだ…と考えるロロナは、その高額依頼をこなしていくわけだが、不当な高額報酬を受け取っているロロナは、周りからあまり良い視線を向けられなかった。そして、ロロナ自身もそれを感じ取っていたそうだ

ある日、ロロナがエステイさんに問い詰めたらしい「あの依頼を出した人をしてるんですか」って

そして……

「その後は、ロロナとクーデリアがケンカをしたってことを聞いて、実際、次に会った時にはロロナがすっごく落ち込んでいた、と」

「そうなの。そのあたりは詳しくは知らないんだけど……はあ、私
よかれと思つて話したことが、こんなことになつちやうなんて……」

「でも、ずっと隠し続けるのは難しいことだと思いますし、遅かれ早か
れ、きっとコロナも知ることになったと思います。……それよりも今
は、コロナとクレーディアが仲直りできるかどうかですね」

そのケンカのこと知らないし、まだ、ふたりに合つてもいないか
ら何とも言えないけど、やっぱり仲直りしてほしいと思う

でも、僕にできることはあるだろうか？

「……とりあえず、後でアトリエの様子を見に行つてきますね」

「うん、よろしくね。私もふたりに会つた時に、なんとかできないか
探ってみるから」

クーデリア 「お人好しなあいつ」

どうしてこんなことになってしまったんだろう

私はロロナとケンカをしてしまった

きっかけは、私がよかれと思って出していた依頼。アトリエ運営のためには必要不可欠なお金が、ロロナの手に渡って 助けになつてくれれば……だけどロロナは「気持ちは嬉しいけど、こんなやり方は良くない」って…

話の引き合いに 私がポケットから出したのは 宝石のように輝く青緑色の石、以前 「調合でたまたま出来たんだあ」と言ってロロナがプレゼントをしてくれたものだ

なんで厚意に対して厚意を返してはいけないのか。プレゼントや日ごろの想いを 返してあげてはいけないのか……

そして偶然にも その時、私の手の上にあった青緑色の石が真っ二つに割れてしまった

それからのことは あんまり憶えてない。気がつくと 家の自分の部屋にいた

でも、私の手の中にある 割れてしまった青緑色の石がロロナとのケンカが現実だとものがたっていた……

あれから数日たった 今、私はロロナのアトリエの外で 隠れるようにして様子を見ていた

「それじゃ、行ってきます。はあ…」

そう言いながらアトリエから出てきたのはロロナ。こころなしか背中が曲がっていて、足取りも重そうな気がする

声をかけたい気持ちもある。けど、かけたくない気持ちも同じくらいある。……こういう時 どうすればいいのか、どう謝るのがいいの

か…全くわからない

「おい、もう入ってきて大丈夫だぞ」

いきなり耳に飛び込んできた声に 私はビクリと驚いてしまう。
…正直、逃げ出したくも思ってたけど、私は声の主に用があったので
おとなしくアトリエに入ることにした

ロロナのアトリエ

アトリエで私を出迎えたのは、いちおうロロナの師匠のアストリツ
ド・ゼクセスだった

「…いつから気づいてたのよ?」

「昨日の夜から。 ロロナの寝顔を覗きこもうと窓にへばりついてい
ただろう?」

「そんなことするわけないでしょ! あんたじゃあるまいし! 二、三時
間前よ、あたしが来たのは!」

「ほう、そんな前からいたのか」

「うっ…!」

つい 勢いで口から出ってしまった言葉に アストリツドがニヤニ
ヤ笑いながらこつちを見てきた

「いやはや、あんなにわがままだったくーちゃんがそんなに辛抱強く
なったものだ。 いったいどんな心境の変化があったのやら」

「余計なお世話よ! あと、くーちゃんって言うな!」

ああっもう! こいつはいつもこうなんだ。 人を小馬鹿にしたよう
な態度で… いけないいけない、こいつのペースに飲まれたらだめ
じゃない! ちゃんと目的を思い出すのよ!!

「…今日はあんたに、仕事を頼みにきたの」

「ロロナではなく私をご指名か。 いったい何を ご所望かな?」

「これを、直してほしいの。 あんたなら直せるでしょ? ね?」

「……前にロロナが作った石か」

あたしが差し出した手の上の物を見て　アストリッドがそう言った

そう、あの時割れてしまった石。ロロナからのプレゼントを元通りにしておかないと、あたしは前にはすすめそうにはなかった

「見事に真つ二つだな。まるで　誰かさん達の友情を表しているようじゃないか」

「あんたねえ！言っつていいことと悪いことが…!!」

あたしが声を荒げるが、アストリッドは両手を前に出し「まあまあ」とあたしを制止する

「少し冗談が過ぎたな。だが、怒鳴る元気がある分、うちの馬鹿弟子よりはマシなようだ」

「…そんなに元気ないんだ　ロロナ…」

さつき、アトリエから出ていったロロナを見た時にも少なからず感じ取れたけど、こいつもこう言っているのだから　よっぽど元気なないんだろう…

「でだ、結論から先に言わせてもらおうが、これは直せんな」

唐突にアストリッドから告げられたことに、あたしの頭は一瞬真っ白になった

「……は？な、なんでよ！お金ならちゃんと払うわよ？」

「銭金の問題ではない。この物質を完全に結合する方法は存在しないんだ。無理矢理くっつけても、傷やヒビは残ってしまうだろうな」

アストリッド曰く、あの石はロロナの調合で偶然出来たもので、この世に二つと無い物質らしい。前例も無く、誰も知らない物質…だから何もわかっておらず、元通りに直す手段なんてもってのほかだそう
だ

「な…何よ何よ！いつも私は天才だーなんて威張り散らしてるくせに！　肝心な時に役に立たないで…それじゃ、どうしたら…」

「ごらごら、泣くんじゃない。そんな顔をされては、くーちゃんが可愛く思えてしまうじゃないか」

「泣いてない！あと、クーちゃんて言うな！ぐずつ…」

そう言っつて突っぱねるけど、自分の目から熱いものがこぼれ出てきていた。口で強がり在必死に吐いても、こぼれ出てくるものは止まりそうになかった

「…もういい、あんたなんか頼ったあたしが馬鹿だったわ」

アトリエを出ようとドアへと足を向けようとした背中に 声をかけられた

「待て待て。直すのは無理だが 全く考えがないわけでもない」

「…何よ。早く言いなさいよ。一応聞くだけ聞いてあげるから」

そう言っつて振り返ると、これまで見せていたニヤニヤした笑みとは別の笑みをうかべたアストリッドがいた……………なんだか似合わないくらい優しい顔だった

「いつものクーデリア嬢らしさが戻ってきたな。まあ、なんだ。いささか少女趣味なアイデアで、気恥ずかしくもあるのだが…」

「……………つまり、この二つに割れた石を使ったペンダントを 二つ作るのね」

「ああ。割れた面を隠すように作れば 見た目に問題は無いだろう。それに、わかれた二つをペアにして二人でそれぞれ身に着けるといふのは 良いだろう？」

ペアのペンダント、たしかに、すごく素敵だと思う…。でも、手作りでなんて…………

「ペンダント作りの教えを乞うのであれば、ここの隣の『男の武器屋』のハゲル氏あたりでも良いのだが…………」

コンコンコンツ

アストリッドが何やら考えている時に、アトリエの玄関がノックされた

最初はロロナが帰ってきたのかのと驚き慌てただけど、よくよく考えると　ロロナがノックをするはずはない。となると、思い当たるのは……

あたしが思い当たる前に、アストリッドが声を出した
「入れっ！」

ガチャリと扉を開いて入ってきたのは……

「こんにちは、アストリッドさん。ロロナは出かけてるんですか？
…って、あれ？クーデリア？」

「あら？　ミスじゃない。どうしてここに？」

「これ。ロロナにおすそわけのアップルパイを……」

　ミスがカゴから『アップルパイ』を取り出したんだけど……それをアストリッドが素早く取り上げた

「アストリッドさん!?　ちゃんとアストリッドさんとホムちゃんの分もありますから、そんなふうにとらなくても大丈夫ですよ!!」

「ならそれも私が預かってやろう。大丈夫だ、しつかりと二人にわたすぞ」

　そう言ってミスのカゴから勝手に漁って『パイ』を取り出したアストリッド。ミスもされるがままだった

「というわけで、クーデリア嬢のことはまかせたぞ！」

「えっ」

　あたしとミスの声が重なった。そして、お互いの顔を見た後に二人そろってアストリッドのほうを見た

「ちよ、どういうことよー！」

「ミスにペンダントの作り方を教えてもらおうといい。ハゲル氏のところでは買い物に来たロロナとぼったり会ってしまうかもしれんだらう？」

「それはミスのところでも同じでしょう？」

　ロロナが　ミスが育ててるものの中から錬金術に使うものを貰

いに行ったりしていることを あたしは知っているのだ

「だけど、アストリッドは首を振って否定してきた」

「あの家にいるウォルフ、あいつに外に出てもらって置いて ロロナが来たら鳴くなり何なりしてもらえばいいだろう？ 部屋も複数あるし『離れ』もある、隠れる場所が十分あるじゃないか」

「な、なるほど…」

「じゃあ よろしく頼むぞ、マイルス」

「えつと、それで結局何もわかってないんだけど……まあ いつか！」

マイルスは一人取り残されていたんだけど、困った顔をしたのは一瞬だけで すぐにいつもの笑顔になった

マイルスの家・作業場

「で、なんでこうなったのよ…」

「えっ？ どうかした？」

『炉』のそばの台にむかっているあたしの眩きに 首をかしげて心配そうに聞いてくるマイルス。けど、今回はそれがやけにあたしをイライラさせた

「どうかしたも何も！ なんてあたしは こんな腕輪ばかり作らされてるのよ!! あたしが作りたいのはペンダントなの！」

「それは装飾品作りの基本は その腕輪作りだからだよ。ほら、ドンドン作っていかないとー！」

「あーもう！ やればいいんでしょ！ やれば!!」

「あつ、そこはもつと繊細に加工しないと見栄えが悪くなるよ！ もつと 装飾を入れる時は……」

時折 マイルスに指導を受けながらもどんどん『腕輪』を作っていく。そして……

「ふうー終わったー！ やつと素材分 全部作ったわー!!」

「それじゃあ次は こっちの素材で『指輪』作りを…」

そう言っつてマイスが『鉱石』と『宝石』がゴロゴロ入った木箱をあたしのそばに置いた

「はあ!? ……もう…休ませて……」

「えつと…なら手を洗って いつもの部屋のソファで休んで。僕は晩ご飯を作ってくるから」

言われて気がついたけど、窓の外は もう暗くなっていて星が輝きだしていた

「……もしかして、これ、泊まり込みなの……?」

これから、あたしの長く険しい装飾品作りの修行が続くと思うと、気が滅入ってしまった

—翌日—

「……おかしい」

「えっ? どうかした?」

『炉』のそばの台にむかっているあたしの眩きに 首をかしげて心配そうに聞いてくるマイス。 ……て、こんな状況が昨日もあつた気がする

『指輪』を20個くらい半日かけて作り終えて、やつと『ペンダント』作りを教えてもらったなら、何の失敗も無く ものの数分で二つ作れてしまったた……絶対おかしいでしょ……」

「言ったよね? 『腕輪』は装飾品作りの基本って」

「それだけで こうもあつさりできるものなのかしら……?」

上手くいって嬉しいはずなのに、なんだかしつくりこない……

「あとは、クーデリアが 今 作った『シルバーペンダント』、それをベースに使って石をはめ込んでいく加工をしていけばいいんだよ」

「わかったわ。…それじゃ 最後の最後、しつかり締めていくわよ！」

結局、失敗すること無く完成した 青緑色の石をはめ込んだペンダントは、金属の装飾の部分にちよつときこちなさが見えるものの中々の出来栄えだった

ただ、二つとも完成した時には また日が沈みはじめていて、今日もあたしはマイスの家の『離れ』に寝泊まりすることとなった

そして、今は晩ご飯。今朝採れたであろう野菜が入った『シチュー』と『デニツシュ』が主なメニューだった

「ねえ、マイス」

ソファアに座るあたしの、テーブルを挟んで反対側のイスに座って『シチュー』を食べてるマイスに話しかけてみた。マイスはスプーンを持つ手を止めて「どうかした？」とこたえてきた

「ごめんなさい、結局 たいした説明も無しに あたしの『ペンダント』作りを手伝わせちゃって……」

「ううん、いいよ。僕も時間に追われてるわけじゃないから余裕はあるし。それに……」

マイスはニツコリと笑いながら言葉を続けてきた

「今みたいな感じで ロロナともお話ししてくれるようになれば、僕としては嬉しいからね。……ロロナは「くーちゃんに謝りたい」って言うってたよ」

「……別に、あのこが謝る必要なんてないわよ……」

そうだ、あたしが出した あの依頼を受けたロロナが、周りからどういう目で見られるかなんてことを一度も考えずにいた あたしが悪かった、それが今ではよくわかっているつもりだ

「きつとコロナも、クーデリアと同じなんだと思う」

「えっ……？」

「相手が自分のことを考えてくれてる気持ちはわかる、でも、自分にも考えが…想う気持ちがあるってことを伝えたかった。…結果、相手の想いを否定してしまったままケンカ別れしてしまった。だからちゃんと謝って、またお話ししたいって思ってるんだと思うよ」

「そう言うとマイスは またスプーンを動かしだし『シチュー』を口に運びだした。つられて私も一口 口にしました」

作ったペンダントを、ちゃんとコロナにプレゼントできるだろうか。前のように 一緒に話したり、お出かけしたり、ご飯を食べたり…そんな関係に戻るだろうか

不安もたくさんあるけど、なんだか早くコロナに会いたくなってきていた

マイス 「街の人たちと僕と」

王宮受付

「今日持ってきた依頼品です」

僕が複数の木箱に入れて分けていた納品用の品々をエステイさんに渡す。するとエステイさんは、依頼書の内容を照らし合わせながら

確認を始めた

「えっと、コツチがコレだから これでよし……で、次に コレはアツチだから……」

「それで こっちは王宮受付への分です」

「あら！それももう持ってきてくれたの？ありがとうね」

一つ一つが結構な重さがある上に 量が量だったので、依頼品の整理は僕も手伝って終えた

「はいっ これで全部ね、お疲れ様。 それと、新しくマイス君名指しの依頼が二つ入ってるわよ」

エステイさんが渡してきた二枚の依頼書を受け取って 内容を確認する。……うん、そう問題無くこなせそうな納品依頼だ、両方受けても余裕があるくらいだろう

「えっと、それじゃあ この二つは受けます。 ……それと 他の依頼も見せてください」

「依頼をこなしてくれるのは こっちとしてはありがたいけど……大丈夫？ 『王国祭』以降マイス君名指しの依頼が随分増えて 大変じゃない？」

心配そうな顔をしたエステイさんが 僕にたずねてきた

「大丈夫ですよ……というか、畑を広げて 新しい作物を育ててみようかって検討しているくらいには時間に余裕があります」

「そうなの？ かなりの数の依頼をいっぺんに受けるから色々心配だったんだけど……私がよく知らないだけで、農業ってそういうものだったりする？」

「相応の体力と筋力があつて、それと知識と慣れ次第で農作業の時間は ある程度は短縮されますから。あとは、このあたりの気候が比較的安定しているから 世話の手間が増えないっていうのもありますね」

あと少しで ここにきてから二年になるが、嵐のような目立った荒れ模様は無く 安定した栽培を行うことができています

おかげで コンテナにある程度の作物のストックがあつたりもする。というか、その豊作過ぎストックがドンドン増えてきて、そろそろ専用の保管庫をつくることを考え始めてる

受け取った依頼書の束から 数枚を選んでエステイさんに提出する

「さっきの二つと この四つを受けるのね、わかったわ。…はいっ、がんばってね！」

「それじゃあ、失礼しました」

依頼を受ける 正式な手続きを終えて、僕は『王宮受付』をあとにした

広場

僕は『王宮受付』から家へと帰る際に、お店やアトリエに用があれば『職人通り』を、特に用が無ければ『広場』を通る道を選んで帰る

そして、今日はお店に用はなかったので『広場』を通る道を選んだ
『職人通り』でお店を利用して帰る時は、当然 お店にいる知り合いとよく話すことになる

だが、最近では『広場』を通る道を利用して帰る時に 街の人によく声をかけられるようになった。さつき エステイさんが言ってい

たように『王国祭』で目立ったのが要因だろう

そんなこともあって、新しく知り合いになった人たちと挨拶を交わしたり、世間話をしたりしながら帰るのが、最近の『広場』を通る帰りの日常だ

「それじゃあ、またな　マイスー！」

「またねー」

「じゃあね…マイス」

「気をつけて遊ぶんだよー」

思い切り手を振る子、少し恥ずかしそうに控えめに手を振る子…この街にもいろんな性格の子がいる

僕がたまたま知り合った　あの三人も、一人一人全然違う性格なのだが　いつも一緒に楽しそうに遊んでいる。それが　少し羨ましく思えたりする

「…意外ね。マイスがあの子たちとあんな仲が良かったなんて」

よそへと遊びに行く子供三人組を見送っていた僕に、後ろからそんな声がかけられた。振り返ってみると、見知った顔がそこにはあった「こんにちは！クーデリア。ロロナとは仲直りできたって？」

「ええ、おかげさまで」

その回答は　声こそそっけない感じだったけど、クーデリアの口元が緩んでいることから　本人の喜びようが見て取れた

「クーデリアもあの子たちのこと　知ってるの？」

「まあ　知っているといえは知ってるけど…別にあんたみたいに親しいわけじゃなくて、一方的に知ってるだけよ」

となると、どういった関係だろうか？　一方的に知ってるってことは別に友達ってわけでもないんだろう。歳もそんなに離れてはいないが　近くも無い。　あとは何かあるだろうか…

「親の繋がりがりかな？ 確か あの子たちも『貴族』らしいし」

「正解よ。…とは言っても別にアーランドの『貴族』同士って繋がりが強いわけじゃないから、本当にたまたま あの三人の中の一人の親とわたしの親に交友があったってだけなんだけどね」

『貴族』、アーランド王国にある階級らしいけど、実際はたいしたものではないらしく お金で買えるそうさ。…とは言っても、そもそも僕が あまり階級とか貴族とかいうものを知らないのです、それが良いことなのかどうかすら わかっていないんだけどね…

「そういうあんたは 何処でどうやって知り合ったの？」

「えっと、話すと長くなっちゃうから端的に言うけど…この間の『王国祭』がきっかけかな」

「ああ…」

納得した、と言わんばかりに頷くクーデリア。でも、その顔は…なんとというか呆れ半分というか…

「確かに 良くも悪くも目立っていたね。話しかけてくる人も増えるだろう、特に 好奇心の強い子供なんかはね」

僕とクーデリアの会話に、別の声が入り込んできた

「あつ タントさん、お久しぶりです！」

「そういうえば 久しぶりかな？」

そこにいたのは、黒のつば広帽に黒のコートを身に着けた いつも通りの格好のタントさんだった

「今日は ちょっとキミに用があつてきたんだけど…その前に、なんで そちらのお嬢さんはそんなに僕を睨むのかな…？」

困ったように言うタントさんにつられて、タントさんの言うお嬢さん…クーデリアのほうへと目を向けた。そこには不機嫌さを隠そうともしないで タントさんを睨みつけているクーデリアがいた

「困ったな…僕はキミに嫌われるようなことをしたおぼえは無いんだけど…もしかして」

「おぼえが無いも何も、ロロナにたかる悪い虫を 私が嫌わないはず

がないじゃない」

ビシツと指差しながら言うクーデリア。対して タントさんは首をすくめながら「やれやれ」といったように首を振った

「悪い虫って…随分な言われようだね。それに、僕はてつきり マイス君と二人つきりの時間を邪魔されて怒ってるのかと思っただけど」

「はあ？なんでそんなことで怒らなきゃなんないのよ」

「…真顔で即答か」

よくわからないけど、クーデリアとタントさんは あんまり仲が良くはないみたいだ…。というか、クーデリアが一方的に嫌っているのかな？

そして、タントさんは 僕の方へと向きなおった

「残念だったね、どうやら脈なしみたいだよ」

「…？えっと、どういうことですか…？」

「こっちもこっちで そういう意識はしてなかったか…それも凄いくことだと思うけど」

うーん、本当に何のことだろう？

「おっと、話がそれたね。それでミス君、キミに用があっただけど…」

「なんででしょう？」

「近々、僕と親父で キミの農場の視察に行きたいんだけど、大丈夫かな？」

「はい、かまいませんよ…っって」

特に問題無いので すぐに答えたけど、ふと疑問が湧いてきて 口からでてきた

「視察？」

「親父？」

僕の疑問と ほぼ同時にクーデリアからも疑問の声が上がった。そして それらを聞いたタントさんはといえば、軽く頷いただけだっ

た

「そういえばキミたちには まだ言つてなかつたっけ？ 僕の親父がこの国の大臣やつてること」

「はあ!? 何それ！ 初耳よ!!」

クーデリアが驚いているから きつとすごいことなのだろう。……でも、やっぱり『貴族』の話と同じで 僕にはいまいちピンとこなかつた

「それじゃあ、大臣さんとタントさんがくるんですね？ しつかりと用意しておきます」

「いや、そこまで畏かしこまらなくてもいいから。…それに、よっぽどの大事をしない限り 別に怒られもしないよ。親父あのひと なんでかキミのことを随分気に入っているみたいだし」

「大臣さんが…?」

「へえ…マイス、何か心当たりはある?」

クーデリアに聞かれたけど、特には思いつかない。…あえてあげるなら つかエステイさんが言っていた「マイス君が王宮に卸してくれてる茶葉、結構好評よ」っていう話くらいだろうか…?」

まあ、よくわからないけど とにかく誰かが来ることは別に問題は無い

それに実際に大臣さんに会えばわかることだろう

マイス 「何事もほどほどに」

職人通り

「ふう、もうこんなに遅くなっちゃった」

『職人通り』を歩く僕は、頭上へと目を向けた。街を照らしていた陽は、ついさつき沈みきり、空には星々が輝いている

なぜ 今日こんな時間に街にいるのか、それには ちよつとした理由があった

それは先日タントさんから聞いていた、僕の農場への視察が 午前中からあったからだ

タントさんのお父さん……このアーランドの大臣という役職の人なんだけど、その人が 以前に『王宮受付』のそばで出会ったことがあった人だったり、用意していた昼食を 大臣さん、タントさん ともにとつても気に入ってもらえたり、色々と質問攻めにあつたり……ちよつと忙しかった

で、視察が全て終わってから 街での用を片付けていたら こんな時間になってしまったのだ

「あとは……『サンライズ食堂』で、この間 新しく卸おろさせてもらった野菜の評判と、次の仕入れの予定を聞いてこないと。今日はそれで全部終わりかな？」

もう一度、思い返して 自分の頭の中で確認してみる。……うん、もう他にはなかったに違いない

それじゃあ『サンライズ食堂』に寄って、その後は そのまま家に一直線に帰ろう。暗くなっているし、それがいいだろう

『サンライズ食堂』が見える位置あたりまで来た ちようどその時、『サンライズ食堂』から出てくる人影があった

最初は ただのお客さんかと思つたが、どうも様子がおかしかつたよくわからないけど、慌てているようで、全力疾走……つてほどでは

ないけど小走りでこちらのほうへときていた

食い逃げか何かか?と思つて、一度立ち止まり 警戒態勢をとつた

……けど

「あれ? エステイさん、どうしたんですか?」

人影の正体が 僕もよく知るエステイさんだったので、ひとまず警戒を解いた

けど、エステイさんは止まる気配は無く、走りながら

「ゴメン、ちよつと急いでるの! ……あつ、『食堂』には今は入っちゃダメだからねー!」

といい、僕の横を通り過ぎていった

「お酒のおいがしたけど、あんなに走つても大丈夫なのかな…?」

エステイさんのことは少し心配だけど、いまさらどうしようもないそれにしても「入っちゃいけない」って……『サンライズ食堂』で何かあつたのだろうか?

とは言つても 用もあるし、もし何か大変なのだとしたら イクセルさんのことが心配だ。それに僕に何か手伝えることもあるかもしれない

そう考え、止めていた足を 再び『サンライズ食堂』へと動かした

サンライズ食堂

あくまで僕個人の感覚でだけど、夜より昼のほうが客が多い『サンライズ食堂』は いつもと違う騒がしさが…

「うっふっふっふっふっふっふ……ロロナちゃあああん!!」

「きやあああ!?! てい、ティファアナさん?」

騒ぎの中心になつてゐるのは、ティファアナさんとロロナのようだった。ふたりは僕がお店に入ってきたのに気がついていないようだった。…それにしても、なんだかティファアナさんの様子がいつもと違うような……?」

そんなことを考えている間にも、ティファアナさんがロロナに近づき、密着していつて…

「やだちよつと、抱きつかないでくださいー!」

「だーめ。エステイには逃げられちゃったから、ロロナちゃんは絶対離さなーい」

ここで ふとあることに思い当たった。そう エステイさんだ

エステイさんからはお酒のにおいがしていた。そして、よくよく見ると ティファアナさんの顔はほんのり赤く染まっている。つまり、ティファアナさんは酔払って人に絡むようになり、エステイさんは逃げ出し ロロナが被害を受けてる…そういうことだと思おう

「そ、そんな…わひやあ!?へ、へんなところ触らないでー!」

困惑しながらも なんとか抵抗をしようとしていたロロナだったが、ティファアナさんの手がロロナの服の隙間から入り込み…

ここで僕は「見ちやいけない!」と思って顔をそらした。僕の顔は火が出そうなくらい熱くなってしまった

そして、僕が目をそらしたところで、当然 状況は変わらないわけ
で……

「ロロナちゃん やわらかーい。やっぱり若いっていいわー!」

「やめてー!お願いですからー!」

ロロナの服の下に潜りこんだ ティファアナさんの手が、ドコでナニをしているのかはわからないけど、ロロナの声が店に響いていた

「…おーい。店の中で変な声出さないでくれるか」

ここで声をかけたのが、『サンライズ食堂』のコックのイクセルさん
だった

自分のことで一杯一杯だったのであろうロロナが、このお店にイクセルさんがいることを やつと思いついたようだった。そしてロロナは、半分泣きながら幼馴染のイクセルさんに救いの手を求めた

「イクセくん!助けて!ティファアナさんが、ティファアナさんがー!!」

「今お前を助けると被害が店全体に広がるんだ。なんとかお前一人で

食い止めてくれ！」

「そ、そんな!?イクセくん!イクセくんってばー!」

非情にも思えるけど、イクセルさんの対応は お店を背負っている人としては間違っではないない……いや、でも やっぱり……

「うふふふふー…邪魔者は消えたわあ。これで遠慮なく……うりうりうりー」

目で見てないので どうなっているかはわからないけど ティファナさんはヒートアップしてきたみたいで、比例するようにロロナの声もあがっていく

「うひゃー!だ、ダメ、そんな……も、もういやー!誰か助けてー!!」

……うん、さすがにこれは なんとかしてあげないといけないだろう

ロロナを助ける時に何か色々と見えてしまうかもしれないけど……こう、パツとやってパツと終わらせれば大丈夫だと思う……たぶん「…そうだ!アレならティファナさんを止められるはず……!」

カゴから『秘密バッグ』を取り出す

二足歩行のネコキャラのような見た目の『秘密バッグ』の本体のフアスナーを開き、バッグの中に手を入れる。すると、その中の空間は家のコンテナへと繋がっているの 目当てのものを探す

「あつた!」

目当てのものを手探りで探し当て、僕の身長とさほど変わらない大きさのものを引き抜き かまえる

僕と、僕の取り出したものに気がついた周りのお客さんが にわかにざわめくのがわかった

「ちよっ!?おま……!」

イクセルさんも驚いたように声をあげたけど、僕は止まらずに 手にしたものの…『ピコピコハンマー』をティファナさんに向かって叩きつけた

「手加減は……しますから！」

ピコッ!!

「きゃん!？」

気の抜ける音と共に ティファアナさんがふらりと倒れた

「ふええ…た、助かった…?？」

僕は、その場にへたり込んでしまうロロナに目をやりながらも、倒れてしまったティファアナさんのほうへと 駆け寄った

「大丈夫なのか…?？」

そう僕に聞いてきたのは、さっきまで「我関せず」とカウンター越しにある調理場にいたイクセルさん

「ちよつと気絶して眠つてもらつてるだけです。これ、痛くないけど叩くと気絶させやすいハンマーなんですよ」

そう言つて僕は手に持つ『ピコピコハンマー』を軽々と持ち上げてみせた

すると、イクセルさんは「ちよつと貸してみろ」と言つてきたので、特に断る理由も無いので 素直に渡した

「うわっ、なんだこれ!?こんなにデカいのにはフライパンより軽いぞ」

『ピコピコハンマー』をダンベルのようにヒョイヒョイ動かすイクセルさんだった

「そんなことより、ひどいよイクセルくん!私のこと 助けてくれなかつたっ!」

「つつたてよ、こつちにも色々事情があつたわけだしよ…結果的に助かつたんだから良かったじゃねえか」

「助かつたのは マイス君のおかげなんだけど…」

いつの間にか復活したロロナがイクセルさんに非難を浴びせながら頬を膨らませ、それに対してイクセルさんは「わるいわるい」と軽く謝つていた

「ふたりとも。今はティファアナさんのことをどうにかしないと」

僕がそう言うと、ロロナとイクセルさんは一緒に頷いた

「確かに そうだよね」

「店の床で寝させるわけにはいかないし、酔払いだからといってさすがに外にほっぽりだすわけにも……」

「僕が抱えて ティファアナさんの家まで送っていてもいいんだけど、家に鍵がかかっているだろうから……」

「どうしたものかと 僕を含めた三人が頭を悩ませていた……と、その時 お店のドアが開く音が聞こえた

「……そろり」

「あつー!! エステイさんー!」

「ぎくつ!? ろ、ロロナちゃん! こっここ こんばんはー! って、あれ?」

お店に こつそりと入ろうとしていたエステイさんが、ロロナの声に驚いたかと思えば、急に間の抜けた声を出した

「よかったー。ティファアナ 寝ちゃったのね」

「よかったー、じゃないですよ! マイス君が来てくれてなかったら、すつごく大変なことになってたかもしれないのにー!」

「ご、ごめんね。ティファアナがこんなになっちゃうの久しぶりだったから つい……」

以前にも こんなふうになったことがあるなら、お酒を控えさせるなり何なりするべきだと思うけど……まあ、過ぎたことを今言うよりも……

「あの エステイさん。ティファアナさんをティファアナさんの家まで送っていきたいんですけど……鍵、持っていたりしませんか?」

「ええ、ちやうど合鍵を持ってるわよ。それじゃあ 私もついていくわ」

そう言ったエステイさんは、支払いを済ませにいった

ロウとティファの雑貨店

時々エステイさんの手を借りながら 僕がティファナさんを抱え、
雑貨屋さんの二階の寝室まで運んだ

「それじゃあ、マイス君は もう『サンライズ食堂』に戻っていいわよ。
何か用があったから 私が忠告したのに行っただんでしょ？」

「はい。…エステイさんはどうするんですか？」

「私は一通り戸締りを確認してから 家に帰るわ」

「わかりました。あとは よろしくお願いします」

そう言っ僕は頭を下げて 雑貨屋さんをあとにした

翌日、僕の家遊びに来たフリーさんに エステイさんがちゃん
と帰り着いたか聞いたら……

「えっと よくわからないけど、なんだかすごく疲れた顔して 今日
の朝に帰ってきたよ……？」

……何かあったのかな？

「マイス 「お見舞いといえは……？」

「うーん……どうしてだろう？」

僕が見つめる先には、ちよつと前に 新しく拓いた畑。以前からある畑とは違い、主に 新しい作物を試験的に育てるために使っている。植えられているものの中には『錬金術』で偶然できたものもあって、色んな種類が入り乱れている

そして、今、僕が見ているのは 枯れかけの弱々しいツル。本来ならばもつとしつかりとしていて ドンドン実が大きくなっていくはずなのだが……

「アーランドの気候が合っていないのか……そもそもその種自体がまだ弱いのか……」

畑の一角に9本のツルが生えたのに 実ができたのは2本だけ、残りの7本は 花が咲いていた場所に小さな球はできたものの成長することは無かった。しかも、できた2本も 実はそれぞれ最低限のサイズで1つだけ

手にしたピンク地に網目のはった実を見る

本来なら 僕の顔よりも大きくなるくらいなはずだが、今回できたのは手のひらと同じくらい直径しかない……

「根本から見直さないといけないかな、この『オトメロン』」

さて……それじゃあ この今回できた『オトメロン』はどうしようか……？

とある病室

「……それで、何故 私のところに来たんだ？」

「ステルクさん、寝たきりで退屈なんじゃないかなーって思ってた」
「確かに退屈はしているが……」

僕は ステルクさんの病室のベッドのそばのイスに座って話しか

けている。ステルクさんは首と目をわずかにこちらに向けている

「はい、切り終えました。これが最近新しく育てはじめた『オトメロン』です」

「いや、ちよつと待て」

一口サイズに切り終え、皿に盛りつけた『オトメロン』の内的一切れを、フォークを使ってステルクさんの口元に近づけたのだが、ステルクさんが制止をかけてきた

どうかしたのだろうか？と首をかしげていると、ステルクさんはモゾモゾと体を動かし、金属の擦れる音をたてながら言ってきた

『コレ』を解いてくれ。そうすれば自分の手で食べれる」

「ああ…でも、ごめんなさい、『鎖』は解いちやいけないうってエステイさんに言われてるんです」

「そ、そうか……」

そう、今、ベッドに寝ているステルクさんの身体は、怪我を覆う包帯の他に、動けないようにするために鎖で縛られているのだ

何故ステルクさんが怪我をしているのか。何故鎖で縛られているのか………まあ、これには色々理由があるのだけど……

「とりあえず一口どうぞ」

そう言って、もう一度一口サイズの『オトメロン』を、ステルクさんの口元へと運ぶ

「はあ…どうしてキミは、そこまで自分の作った作物を食べさせたがるんだ」

驚いた、ステルクさんから、僕はそういう認識をされていたのか。

……いや、まあ、ステルクさんの鍛練につき合う際に、いつも色々差し入れを持って行ったりもしたけど……

「ステルクさんが、ヒマがあれば剣の鍛練をしようとするのと同じだと思ってください」

「………そういう、ものなのか？」

「そうですよ、極めたものや新しいもの 他の人からの意見や感想が欲しいものなんです」

「それは、まあ……わからんでもないか……」と言ったステルクさんは、難しい顔をしたままだったけど やつと『オトメロン』を口にしてくれた。そして、口にしてすぐにステルクさんの表情が変わった。「……美味しいな。味自体は強いが口当たりは良く、むしろスツキリとした印象だ」

「良かったです！前の街で育てた時よりも小さくしか出来なかったから、ちよつと心配だったんですけど、ひと安心しました」

もしかしたら 小さく、数も少ない代わりに、その分 凝縮されたものになったのかもしれない。もっとしつかり 調べてみる必要があるそうさ

「本当なら、ロロナもここで一緒に食べてみて欲しかったんだけど……」

「……何かあったのか？」

「ロロナに「一緒にお見舞い行かない？」って聞いたたら、「エスティさんに、会ったらダメって言われた」って言ってました。……確かに、ドラゴンから守ってくれた人が 鎖でグルグル巻きだと、ロロナも反応に困りそうですね……」

「ぐう……」

そう、ステルクさんが怪我をした理由。僕は直接その場にいた訳ではないので詳しくは知らないが、少し前に とある採取地に現れた『ドラゴン』をロロナと討伐しに行った際、ドラゴンの不意打ちからロロナをかばって怪我を負ったそうさ

その時のロロナは「ステルクさんが怪我したのは私のせいだー」と言っ泣き止まなかったりと大変だったらしい。僕が会った時も、落ち着いたかと思えば 思い出し泣きだして、また落ち着いたかと思えば……と言った具合だった

「……で、ちよつと動けるようになったからって病室を抜け出して剣

の鍛練して、お医者さんから鎖でベッドに縛りつけられて……。物語の騎士そのものーとか言ってた人とは思えませんね」

「なっ!? ななな、何故その話を知っている!?!」

これまでに見たこと無いほど顔を真っ赤にして狼狽えるステルクさん。でも、「その話」ってどれのことかわからないし、それにこれは……

「えっ? エステイさんが「マイルス君からも言っておいてー」ってメモ用紙を渡してきて……。この『物語の騎士』って何のことなんですか?」「忘れろ! 今の話や エステイ先輩が言ったことは忘れてしまえ!! いいな!」

「は、はいっ!? ステルクさんがそんなに嫌がることなら、それはまあ忘れますけど……」

いきなり傷に響かないか心配なほどの大声を張り上げるステルクさん。その目つきはいつもの数倍怖かった

ステルクさんに要求され、エステイさんから渡されたメモ用紙をステルクさんが見える位置でビリビリに破いてみせた。そしてそれを丸めながら 僕は口を開く

「誰にも話しませんし、忘れる努力もしますけど……。怪我が治ってお医者さんがOKを出すまで、ちゃんと安静にしてくださいよ? そうじゃないと、コロナがまた「私のせいでステルクさんに我慢させてるんだー!」って自分を責めちゃいますから」

「ムウ……。わかった」

少し間を置いてだったけど、ステルクさんは頷いてくれた

でも実際のところ、ステルクさんが剣の鍛練を我慢するのは本当に大変だろう。……。僕だって「農作業をしてはいけない」なんて言われても 素直に頷けない

「……やっぱり、ずっとベッドの上っていうのも退屈そうだし……。何か本とか欲しい物はないですか? 読書のためって言えば 手だけくらいなら鎖を取ってもらえそうですし」

「確かに あるとありがたいが…。それよりも、キミはこういった怪我を治せる薬は作れたりはしないのか？」

「病気とかは専門外で無理ですけど、そういった傷を治す薬は色々ありますよ」

そう僕が言うと ステルクさんが少し嬉しそうに「ならば…」を口を開いたんだけど、その続きを言わせないように 僕が先に言う

「だけど、使いませんか？僕よりも凄い薬を作るアストリッドさんが治してないんですから、きつと薬よりも自然回復のほうが良いんだと思います」

ステルクさんの治療を最初にしたのはアストリッドさんだということは エステイさんから聞いていた。なら、僕の出る幕なんてありはしないだろう

しかし、ステルクさんは苦い顔をしていた

「あいつは昔から 人をからかうために何かをしでかす奴だから、いまいち信用が足りんというか 釈然としないというか…」

「さすがに人の命に関わることで そんな気は起こさないとはい思っけど……」

コロナが幼い頃、コロナの両親が流行り病で大変だった時にコロナが助けを求め 両親を治したのはアストリッドさんだったって聞いてるし、そういう真面目な時はちゃんとするのだと思う

……まあ、その時の料金(?)としてコロナをアトリエ住み込みの弟子にしたそうだが、そのまま何年も『錬金術』の「れ」の字も教わること無く、いいようにいじられ続けたらしいから何とも言えない…

「でも たしかに時々困ったこともするかも…」

「キミも何かされたのか？」

「ちよつと前から『ちよつと借りるぞ』って書置きと入れ替わるように 家に置いてたものが無くなったたりしてて、結局返ってこないで 次のものがなくなったり……この前は依頼のために用意してたもの…」

「それは完全に泥棒行為じゃないか！」

マイス 「行く末は 未知の未来」

カンッ！ カンッ！ カンッ！

僕が金槌を振り下ろすたび音が響きわたる作業場。『炉』の中には煌々とした炎が見えていて、熱気が漏れ出している

「ごめんね。あと、少しで終わるから」

僕がそう言うと 『炉』から少し離れた位置でイスに座っている二人が言葉をかえしてきた

「私たちは大丈夫だから、焦らなくていいよ、マイスくん」

「うん。それに、マイス君が鍛冶仕事してるの見るの初めてだから、これはこれで……」

イスに座っているのは、さつき遊びに来てくれたリオネラさんとフィリーさん。もちろん リオネラさんのそばには 黒猫と虎猫の喋る人形・ホロホロとアラニーヤがフワフワと浮いている

うーん、やっぱり見られているのは慣れないし、少し気にはなるけど……今は目の前のことを しっかりとしてみよう

「よしっ、できたー！」

そう言っ僕は完成した杖『シルバーロッド』を手に持った。…うん、とりあえずは問題はなさそうだ

「すつぐくキレイ……だけど、ここまで銀一色だと『杖』っていうよりも芸術品ぽいかも……」

「うん、フィリーちゃんの気持ち わかるよ。なんていうか、釜をかき混ぜるのに使うのは勿体ない気がする……」

「でも、まっ金々の杖きんきんよりかはいいだろ」

「そもそも そんな杖はないでしょ」

離れて様子を見ていたみんなの声が聞こえたので、『シルバーロッド』を持ってそっちへと向かう。そして、ちよつと訂正をした

「これは 『錬金術』のときに釜をかき混ぜるための杖として作ったわ

「けじゃないんだ」

「えっ、それじゃあ 戦う時に使うの?」

リオネラさんがそう聞いてきて、その隣のフィリーさんも首をかきあげて こつちを見てきた

「戦闘に使えるには使えるけど……いうならば、実験のため、かな?」

「実験?」

「うん。僕の知ってる『魔法』をアールランドの人も使えるのか、っていう実験。その第一段階なんだ」

「魔法って、あの?」

リオネラさんが言っている「あの」っていうのは、以前、お互いに自分の秘密を話した時に 目の前で使って見せた『リターンの魔法』のことだろう。フィリーさんのほうは、話はしたけど 実際に『魔法』を使って見せたことが無いから、簡単なイメージくらいしか思い浮かんでいないかもしれない

「前に話したように、帰還用の『リターン』以外にも 色んな属性の攻撃用魔法とか回復の魔法なんかがあるんだけど、それらの『魔法』って『シアレンス』とかでは大抵の人が使えるものなんだ」

そう、『魔法』は才能の有無はあるものの、簡単なものならほとんどの人が使えるのだ。全く使えない人もいるらしいけど、とりあえず『シアレンス』には一人もいなかった

そして、使うのが苦手な人でも『杖』があれば ある程度は安定して使えるようになる。ただし この場合、作った『杖』の種類や、強化する際の素材によって使用できる魔法は限定されてしまうが…

「それで、誰でも使えるのか確かめるために 杖を作ってみただ」

「それじゃあ、私もその杖持ったら 絵本に出てくる魔法使いみたいに色々できちゃうの!」

「その「色々」っていうのがよくわからないけど……とりあえず、この『シルバースティック』なら闇属性の魔法が使える様にはなるよ」

『シルバースティック』は何も強化していない基本的な状態であれば、相手の体力を吸収する闇の球体を放つ…魔法で言う『ダークボール』

のような魔法を使える

体力を吸収する効果がある分、球体自体の動きが遅いという欠点があったりもするので 現時点では使い道はとも限られたものだけども、アーランドの人でも使えるかどうかを確認するだけだから 気にする必要はないだろう

「ね、ねえマイス君」

フィリーさんがおぼろげと呼んできたが、その目からは期待の色が見て取れるほどキラキラしていた

「その杖、私が使ってみたらダメ、かな…?」

「いいよ。っていうか、僕のほうからお願ひしたいくらいだよ!」

「うへへ、やったー!」

喜ぶフィリーさんを見ながらも、僕はチラリとリオネラさんのほうへも目を向けた

リオネラさんは跳ねて喜ぶフィリーさんを微笑ましそうに見ていたけど……どこかその表情は硬さがあるように思えた

僕の家は 林に囲まれた場所にある。僕が住みはじめてから 街道への道のりをわかりやすくしたり、木を切って土地を広げて 畑を作ったり『離れ』や『モンスター小屋』をつくったりしてきた

そんな家の外の、畑からも少し離れていて 空いているスペースに僕らは出てきた

『シルバーロッド』をフィリーさんに手渡しながら 僕は言う

「大丈夫だとは思っただけど、いちおう 人に向けては打たないでね? 誰もいない方向に振ってくれればいいよ」

「もー、マイス君。そんなことは さすがにわかってるよ」

上機嫌に言うフィリーさんは 受け取った『シルバーロッド』を「ここくらい……いや、この位置のほうがいいかなあ?」と呟きながら持つ

位置をいろいろと確かめだした

そして僕はフィリーさんから少し離れて、家の近くにいるリオネラさんたちのそばに行った

「んで、どうなんだ。マイスの予想では、フィリーは『魔法』を使えそうなのか？」

そばに来た僕に、ホロホロが問いかけてきた

「たぶん、このままだと無理かな」

「あら意外ね。できそうだから渡したんだと思っただけけど…」

アラニーヤがそう言うが、僕からしてみれば当然のことだった

「ほら、ロロナが戦闘で光の玉を打ち出したりするよね。アレは『魔法』じゃなくて武器の機能の一部らしいけど、『杖』は『魔法』だけアレに近い感覚なんだ」

だからロロナのような武器での戦闘経験のある人なら、たぶん問題無く一発で『杖』での魔法使用ができると思う。……まあ、そもそも

アーランドの人が『魔法』を使えない可能性はまだあるから絶対とは言えないけど

「だから、コツ…っていうか使う感覚を教えたりするまでは、たぶん使えないんじゃないかな」

「え、えっと、マイスくん。『魔法』を使うために、踊おどったりする必要は……」

「えっ？」

リオネラさんが不思議なことを言ったから、何事かと思っただけど……

「て〜い！はあああ…ほーう!!」

ちよつと目を離していた内に、フィリーさんは『シルバーロッド』を持ってクルクルと、変な動きをしまだしていた

「ちよつと、早くフィリーに、ちゃんと教えてあげなさいよ…」

「見てるコツチがなんか恥ずかしくなってるぜ」

これはアラニーヤとホロホロの意見に、僕も大賛成だった。リオ

ネラさんも同じようで、すぐく領いていた

|||||

フィリーのほうへと駆け寄るマイスの背中を見ながら、リオネラはひとり思いふけていた

そんなリオネラに声をかけるのは そばにいるホロホロとアラニーヤだった

「んー、お前の考えてることも大体わかるけどよ……実現できるかどうかは置いといて、オレはいいと思うぜ？誰でも『魔法』が使える世界ってのも」

「うん……でも……」

リオネラには少し理解し辛かった

「魔法だ」「魔女だ」と白い目で見られ虐げられてきた過去を持つリオネラは、もしマイスの使う『魔法』が世間に知れ渡っても 受け入れられるものなのかどうか不安だった。そして、「誰でも使える」なんて言っても不思議なチカラには変わりないから、マイスも虐げられてしまうのでは……と

「まあ、オレたちがどうこう言ったところで、マイスのヤツが止まるとも思えねえしな」

「そうね。それに……」

ホロホロに続いて喋り出したアラニーヤは ひと息置いて自身の考えを口にした

「……やっぱり、マイスは懐かしいんじゃないかしら？『シアレンス』のことが。帰れないってわかってても、わかってるからこそ 忘れたくないって思ってるんだと思うわ」

ギユオオ……

「わっ！できた!!」

その声と聞きなれない音に気付き リオネラがそちらをしてみる
と、そこには 人の顔よりも少し大きいくらいの少しモヤモヤした球

体がゆっくり移動していた。そして、そうたたずに球体は霧散してしまっ

た。「リオネラちゃんっ、見てたー!？」

興奮気味のファイリーが、リオネラにむかって大きく手を振って猛アピールしていた。そして、その近くには、ファイリーにも負けず劣らずの喜びようのマイスがいた

「ふふっ…見てたよ、ファイリーちゃん」

そんな様子を見たりオネラは、色々と考えている自分が、何だかおかしく思えてきて、いつの間にか笑っていた

ホム「モフモフしたあの子」

街から伸びる街道を　ホムはひとり歩いています

今日はマスターから休暇を貰いましたので、なー　に会いに　おに
いちやんの家へとむかっています。手に持つカゴには　マスターか
ら「マイルス君によろしくね!」と預かっている『ベリーパイ』が入っ
ています

街道からそれていく　林へと続く舗装されていない小道へと入り、
その道をどんどん進んでいきます

木々に囲まれた小道を少し行くと、切り開かれた土地が見えてき
て、おにいちやんの家と　その陰に半分隠れるように『離れ』と『モ
ンスター小屋』が見えてきました

小道が木々の間を抜けると　目に留まるのは、おにいちやんが毎日
のように世話をして育てている作物が育っている畑。まだ　芽だけ
のものや　花が咲いているもの、小さな実が生り^な始めているものもあ
ります。当然、種類も様々です

「さて、おにいちやんなーは元気にしているでしょうか」

マイルスの家

「あっ……!?!」

ホムが玄関の戸を開けて　家の中に入ると、あまり聞きなれない声
が重なって聞こえました

声のした方へと目を向けてみると、そこには　ソファーに座った女
性がふたり

ひとりは見覚えがあり、マスターに会いにアトリエに来ることがあ
るリオネラという旅芸人、そのそばには二匹のネコの人形がフワフワ
浮いています。もうひとりは誰だか知りませんが……そのふたりが
こちらを見て驚いていました

それにしても、なんで驚いているのでしょうか…？

ホームは少し考え、あることを思い出しました。以前おにいちやんが「ウチは別にいいけど、他の家にお邪魔するときは ちゃんとノックしてから入るんだよ」と言っていました

……でも、ここはおにいちやんの家、なんの問題も無いはずですよ

「おじやまします」

「ど、どうぞー…」

何故か ソファアに座るふたりが返事をしてきましたが、気にする必要はないでしょう

改めて ちゃんと家に入り、玄関の戸を閉めます。……お客様はいるのに、おにいちやんは見当たりません

「…キッチンのほうでしょうか？」

そう思い 少し覗いてみますが、キッチンにもいませんでした

まあ、おにいちやんが出かけていることは偶たまにあることなので、今日もそんな日なのでしょう。気を取り直して なーと遊びましょう
……

「……あつ」

ここでホームはあることに気付きました

何故かコソコソ話していたり、目が泳いでいたりする ソファアに座るふたりの膝の上

その片方には なーが丸くなっていました。そして もう片方に座っていたのは、以前ホームが道に迷った際に アーランドの街までの道案内してくれた 金色の毛のあのモンスターさんでした

おにいちやんの家にいるウォルフと似た 青の布を巻いているので、何か関係があるとは思っていましたが、こうして会えるとは…

「あの時のモンスターさんですか？」

ソファアのへと近づいてホームが訪ねると、モンスターさんは膝上から床へと飛び降り……

「モコ」

と、言いながら頷いてきました。間違いないようです

「あの時はありがとうございました。おかげでホムは無事帰宅することができました」

「モコ、モコッ」

恐らく「いやあ、無事に帰れたなら良かったよ」みたいなことを言っている。ホムは判断します。前にも思いましたが、この子はちゃんとホムの言っていることがわかるみたいですね……

ホムはあることを思いつき、自分のカゴをテーブルの上に置いて中をあさります

預かりものの『ベリーパイ』をテーブルに置いて……そして、ホムが以前におにいちちゃんから貰った『ブラシ』をカゴから取り出します

そして、もう一度金色の毛のモンスターさんの近くまで行き、床に腰を下ろします

…それにしても、モンスターさんは小さいです。床に座ったホムとあまり目線が変わりません……それがちょうどいいとも思えなくもないですが

「あの時のお礼と言ってはなんですが、ホムがブラッシングとマッサージをしてあげます」

「ええっ!?!」

「モコッ!?!」

「なぜ、そんなに驚くのですか?」

それでも、モンスターさん以外のふたりまで……そんなにおかしなことを言ってしまったのでしょうか?

「ホムが上手くできるか心配なのですか?大丈夫です。なーとおにいちちゃんのお墨付きですよ」

「な〜う」

ホムの言葉を肯定するように、なーが鳴いてくれました。そう、ホ

ムのブラッシングは おにいちゃんに教えてもらった後、なーを満足させるに至りました。なんの問題もありません

「どうぞ こちらへ」

床に座ったホムの、スカート越しの膝の上をポンポンと軽く叩きながら モンスターさんに手招きをします

「も、モコー…」

モンスターさんは ようやくホムの膝の上に座ってくれました

…思った以上に軽いです。このフワフワな毛で大きく見えていて、実際はもう少し小さいのかもしれませんが

さて、なんとなく「嫌々」といった様子で座ったモンスターさんですが、このブラッシングが終わった時には ホムに任せて良かったと思えるほど満足してくれるに違いありません。ホムにはその自信があります

「では、始めます」

「モコツ」

モンスターさんが軽く返事をして……

「……………っ (どきどき)」

ソファーに座るふたりは 何故かこちらジツツと見てきています……ホムにはよくわかりませんし、気にせずいきましよう

「……………よーしよし」

モンスターさんの金色の毛は、触ると 見た目通りの凄いモフモフです。しかし、よくよく見れば 毛には流れがあり、それに合わせて ブラシをかければ 毛がからまることはありませんでした

「モコー…」

モンスターさんも いい感じにチカラが抜け、その小さな体をホムに預けてリラックスしています。この もたれかかってくる重さが、ホムには不思議な安心感を感じられます

というか、この安心感には覚えが…

これは……

「…におい？」

「モコ？」

気づけば、無意識のうちに止めてしまった『ブラシ』を不思議に思ったのか、モンスターさんが振り返って ホムの顔を見上げてきていました

……それにしても、気になります

ホムは『ブラシ』を床に置き、膝の上のモンスターさんの脇に手を入れて ホムの顔の高さまで抱え上げます…

「……モコ…？」

抱え上げたモンスターさんが どうしたのかと振り返って見えますが…

「少し、失礼します」モフツ

そう言って モンスターさんを抱き締め、背中に顔をうずめます。もちろん背中もモフモフです

「モコモコツ!？」

「ひゃっ!？」

「なにしてんだ ありゃ」

「さあ…？」

「っちちち、ちよつとー!？」

周りの人たちが騒がしいですが、それよりも……やっぱり このにおいは…

ホムはモンスターさんの背中から顔を離し、モンスターさんをクルリツと反転させて 向かい合わせにし 顔を見つめます

「おにいちゃん？」

モンスターさんも、騒がしかった周りもピタリと止まり 一気に静

かになりました

モンスターさんを抱き上げている手から伝わってくる 熱が少し高くなった気がしたかと思えば、わずかながら 顔に少し冷や汗らしきものが確認できるようになっていました

「も、モコ?」

「その 困った時の目のそらし方もそっくりそのままです」
「うっ…」

……少しプルプルと震えだしてきました。これは動揺しているサインだと ホムは判断します

「うっ」って、「うっ」って言っちゃったぞ、あいつ」

「言っちゃったわねー…」

「ふ、ふたりとも静かに…聞こえちゃう」

「あわわわわ…」

そんな会話が Continuing 中、ホムがモンスターさんの顔をジッと見つめ続けていると、やっと目があつたモンスターさんが 少し困ったように笑いながら口を開きました

「えっと…その、どうして気づいたの?」

「おにいちゃんと同じにおいがありました」

「におっ…そんなに僕って臭いんだ…」

「いえ、別にそういうわけでは。あえていうなら…」

思い出すのは、初めておにいちゃんの家にお泊まりした時のこと

時間を気にせず なーと遊べて あの時 ホムは嬉しかったのだと思います。気づけば ホムは限界まできていて、眠気で意識はうっすらとしていて 思うように力が入りませんでした

ふと、浮遊感が感じられ必死に意識を手繰り寄せようとすると、ホムが抱き抱えられていることが、うっすらとわかり、抱えてくれている人のおいがしました

なんだか温かくて、少しの青い草のおいと 土のおいがして

…

朝 目が覚めると、なーとウォルフと一緒に おにいちやんのベッドに寝ていて…

そして、わずかに聞こえてくる音を感じ、窓から外を見てみると…そこからは『ジョウロ』で水を撒くおにいちやんが見えました

「畑のにおいです。なんというか、畑に埋められたら こんなにおいがするだろうなーという感じの」

「その表現の仕方はどうかと思うけど…」

そうでしょうか？我ながら 上手く表現できたと思いましたが、あまり 好評ではないようです

「あの、ホムもおにいちやんに色々と言いたいのですが…」

その後、たくさんお話を聞きました

人とモンスターの『ハーフ』であること。元いた町は別世界、とてもなく遠い場所だということ。さきに行った ふたりはすでに知っていたということ……

ですが、ホムにとっては大した問題ではありません。むしろ、おにいちやんが ナーのように可愛かったというだけのことです

なので、おにいちやんとも これまで通りで大丈夫だと話しました

ただ、おにいちやんとホムとの共通意見で、グランドマスターには極力『ハーフ』であることは隠すべきだ ということになりました

「もう すでに知られていても驚きはしないけどね……ハハハハ」

と、おにいちやんがもらしていました……グランドマスターならありえそうです……

マイルス「小さな変化」

王宮受付

僕が普段から活用している『王宮受付』。街の人たちの要望等を一纏ひとまとめにし、依頼として出している場所だ

もちろん、僕以外の人たちも この依頼をこなしている。アトリエのロロナもその中の一人だ

その『王宮受付』だが、今日は少しだけ 様子が違った…

「それじゃあ、コレとコレ…あとコッチの依頼を受けるよ」

「分かったわ。ちよつと待っててね」

そう言っつて 必要な処理を依頼書におこなっているのは、いつものエステイさんでは無く…

「はい、どうぞ。いちおう期限に余裕はあるけど…つて、馬鹿真面目なあんたに言う必要はなかったわね」

「あははは。じゃあ その期待に応えられるようにパパッとこなしてみせるよ、クーデリア」

「早くするからつて、質を落としたりダメよ」

「もちろん！胸を張れる仕事をするよ！」

受付のカウンター越しの会話だけど、クーデリアはいつもと変わらずビシバシ言ってくる。…まあ、こうじゃないとクーデリアらしくないんだけど

「うんうん。やっぱり 私が見込んだとおり。クーデリアちゃん、この仕事があつてるんだわ」

そう言うのは、隣でクーデリアの仕事っぷりを見ていたエステイさん。何やら 嬉しそうに笑つて、「ウンウン」と頷いていた

「キチンとしてて、ビシッバシッ言えて、仕事もすぐおぼえて…：ホント 助かるわー」

「…この前 手伝った時から、ずっとこうなのよ。どうにかしてくれない、マイルス」

「どうにかって…：うーん？王宮勤めの人って たくさんいるはずなんだけど…」

そういえば、エステイさん以外で 受付で仕事している人を見た覚えが無い。…もしかして、受付の仕事って エステイさん一人でまわしてるのだろうか

僕の言葉が聞こえたようで、エステイさんがこっちを向いて首を振ってきた

「なかなかいないのよ？ここの仕事をちゃんと出来る人って」

「それじゃあ、エステイさんは休みは無いですか!？」

「いちおう一日ぐらいなら任せられる子がいるんだけど…それでも、全部こなせなくて仕事が残ったり、二日連続ではできなかったり…：おかげで、ろくに休みは取れてなくて」

思った以上に受付の仕事は大変なみたいだ

ということは、それをこなせるクーデリアは 王宮からしてみれば結構重要な人材なのだろう…：その前に、他の王宮勤めの人たちを基礎から鍛える必要があるのでは…

と、そんなことを考えていると、いつの間にかクーデリアがエステイさんをジトーっと睨んでいた

「言つとくけど、前 話してたような理由であたしに仕事を押し付けようっていうならお断りよ」

「えー、そんなあ…：ダメ？」

「当り前よ！」

…：…？一体、なんのことだろう？

「あの、前 話した理由って…？」

「受付の仕事が忙しすぎて、私、このままじゃロクに出会いが無いまま行き遅れちゃいそうだなーって」

「つまり、あたしに その行き遅れる仕事を押し付けようとしてるわ

け」

困ったように言うエステイさんに対し、クーデリアは呆れたようにため息を吐く

行き遅れ……つまり、結婚ができずにいるって意味だろう。エステイさんは　そういうことを気にしないといけない歳なんだなあ……
「でも　受付って、依頼する人に受ける人、それに王宮勤めの人もここを必ず通るから、アーランドの街の中でも人との出会い自体は多いはずじゃあ」

「確かに、それもそうよね……」

訝しげにエステイさんを見るクーデリア。僕も「どうしてですか」と疑問の目をむけてみる

「だ、だから　そもそも忙しすぎるのよ!」

本当にそれだけなのだろうか? だって、『王国祭』前とかの忙しい時期以外は結構ヒマそうにしている、僕が　暇潰しの話し相手を何度かしたこともあるくらいだ

時期によつて左右される、忙しさが極端な職場……だとしても、ヒマな時期にいくらでも……

まあ、いいか。僕がここで色々考えても　結局はエステイさん次第なんだから

広場

『王宮受付』から出た僕は、家へと帰るために街を歩いていたんだけど……

『広場』にあの人だから……もしかして」

少し早足になりながらも、僕はその人だからへと近づいていった。そして、予想が当たった

人だかりの中心には　一人とふたり。それらが踊るように動きながら役を演じ、観る人を惹きつける

そう、リオネラさん、そしてホロホロとアラニーヤによる人形劇だ
「まだ始まってあんまり経ってないみたいだし、今からでも遅くない
よね」

人だかりの間隙から見える位置を探し当て、そこからリオネラさん
たちの劇を観ることにした

「彼女の劇を観に来てたのかい？」

そう小声で声をかけられたのは、劇が終わった ちょうどその時
だった

僕は声のした方へと振り返った

「あつ、タントさん。タントさんも観てたんですか？」

「うん、ちょっと前からね。本当はその時にキミに声をかけようかと
も思ったんだけど、ずいぶんと劇に熱中してたみたいだったから。邪
魔しちや悪いと思ってるね」

「すみません、気をつかってもらって…」

「まあいいさ」と返すタントさんは、いつも通りの格好で……って、
あれ？

「その真新しい楽器って、ロロナからのプレゼントだったりしますか
？」

僕がそう言うと タントさんは驚いたようで、少し目を見開き 口
もポカンと開いた

「おや？どうしてそのことを…作ってるのでも見た？それともロロナ
から聞いてたのかな？」

「いえ、なんとなく『錬金術』で作ったものって感じがして…アスト
リッドさんが作るとは思えないし。だったらロロナかなーって」

「へえ…『錬金術』で作ったものは 見る人が見ればわかるものなん
だ」

驚き半分 感心半分といった様子で頷くタントさん

……だけど、なんとなくそんな感じがした……つまり第六感的なものだから 絶対わかるわけでもないし、他にもわかる人がいるかどうかもわからないのだが……

「この楽器は……話せば長くなるんだけど、ついこの間 僕がコロナに頼んで作ってもらったんだ。ちよつとしたケジメにね」
「ケジメ……ですか」

タントさんの表情は、普段はあまり見かけない真面目さと寂しさそして少しの嬉しさが混ざったような複雑なものだったが……その雰囲気から タントさんが何かを決心したのだろうと感じ取れた

「つとまあ この事は結構前の話なんだけどね。うちの親父とキミの農場を視察に行く そのちよつと前くらいかな？」

「それって 本当にかなり前の話ですね……」
時間にして3、4カ月くらいだろうか？でも、それくらい前に貰ったものなのに 余りにもキレイ過ぎる。よっぽど大事にしているか、数えるほどこしか使っていないか……その両方か

そんな話をしていた僕たちに、誰かが駆け寄ってくるのが視界端に見えた

「あつ マイスくん、観に来てくれてたの……」

「うん、途中からだけどね」

「そうだっ……えう!？」

駆け寄ってきたリオネラさんが、僕と話していたタントさんの顔を見て 驚いたような、困ったような……そんな顔をした

「タントさん……いったい何をしたんですか？」

「いや、別に怖がられることは何もしてないから………というか、キミって そういう怖い顔も出来るんだね (ボソツ)」

タントさんは 何やら最後に小声で言っているけど、ウソを言っているようには見えなかった。でも、リオネラさんがあんな反応するのには何か理由があるはずなんだけど……

「まあ、なんにせよ 二人の邪魔をしたらいけないから、僕はここで退散するよ」

いつもの調子に戻ったタントさんがそう言った ちょうどその時、僕はタントさんの後ろから近づいてくる人影に気がついた

「ああ……確かにちようどいいと思います」

「……………! (ウンウン)」

リオネラさんもソレに気がついたようで、僕の言葉に同意するように頷いていた

「……………仲が良いみたいでなによりだけど……?」

そんな僕らの反応を不思議に思ったのか、少し首をかしげるタントさん……の肩を 後ろから叩く手が……

「ん? なん……っ?!」

「毎度毎度、チヨロチヨロと逃げ出しおって……!」

タントさんの後ろにいるのは、彼の父親であり この『アーランド王国』の大臣であるメリオダス大臣さんだった

青筋を浮かべたその顔は まさに「憤怒」といったところで、声も腹の奥から絞り出したような怒声……怒られてる本人じゃないのに 僕も怖く感じた

「今日という今日は許さんぞ!!」

「ちよ……っ! こんな街中でそんな大声あげたら……!」

「大声をあげさせてるのは、誰だと思っている!!」

ワーワー ギャーギャー

騒がしく去っていく二人を見ながら、僕は隣にいるリオネラさんたちと言った

「ケンカするほど仲が良い……のかな?」

「いや、それは違うんじゃないかしら?」

「どう見ても ただのケンカだろ」

さつきまで黙っていたアラニーヤとホロホロが返答してくれた。が、リオネラさんの反応は無かった

リオネラさんのほうへ目を向けてみると、タントさんとメリオダス大臣さんの後ろ姿をジッと見つめていた

「…リオネラさん？」

「あっ!? ううん、なんでもないの」

僕の声に反応して 僕の方に顔を向けてそう言ったが、またタントさんたちを見て口を開いた

「…もう、大丈夫。マイルスくんやロロナちゃん、フィリーちゃんが「怖くない」って言うってくれたから」

…なんとなく リオネラさんの持つ『力』のことだとわかったけど…でも、それが何でタントさんと関係があるのだろうか？

僕は気になって リオネラさんに問いかけようとした。…けど、リオネラさんが 再び僕の方に向けてきた顔が とってもいい笑顔だったから「…聞く必要も無いか」と思い、なんとなく僕も笑顔を返した

マイス 「コロナとステルクさんと」

コロナことコロライナ・フリクセル。アーランドの街でアトリエを
経営する錬金術士で、錬金術で作成したアイテムの納品等の依頼をこ
なしたりしている

その錬金術の素材を得るために 街の外の採取地へと行くことが
あるのだけど、その際に護衛として 誰かに一緒についてきてもらう
のが大抵だ

もちろん、僕もコロナの採取につき合ったことも何度もある。ただ
僕の場合、畑の都合で 遠くの採取地までは付いて行くことはあまり
できなかつたりする

旅人の街道

そして、今日、僕はコロナの採取に同行しているんだけど…

「ステルクさん、今日はあんまり無理しないでくださいね。怪我治つ
たばかりですし」

そうコロナが言う相手は、ごく最近 退院したばかりのステルクさ
ん

僕は 何度も彼の病室に足を運んでいたから、ステルクさんの身体
が快復し、腕の鈍りなまはあるもの すこぶる調子がいいのは知ってい
る。だけどコロナは やっぱり心配なようだ

僕はといえば、並んで歩く二人の後ろをついていつている。うーん
…… コロナたち、僕の事をすっかり忘れてる気がする…

「いや、大丈夫だ。手伝う以上は 全力で仕事にあたらせてもらう」
「ダメですって。今日はずっと私の後ろにいてください。いいです
ね」

「それでは本末転倒だ。私はキミを護るために同行しているんだぞ」

うん、二人が言っていることはわかる

けど、街を出発してから、そして採取地近くに着いても ずっとこの調子で、時々立ち止まって言い合うものだから なかなか前に進まず 予定よりも遅くなってしまってるのはよろしくない

「そんなこと言って、また 怪我しちやったら大変じゃないですか！ とにかく今日はダメです！」

「なら、最初から声をかけなければいいだろう。そっちから誘って置いて 後ろに控えているなど理不尽極まりない」

ステルクさんが怪我を負った出来事である ドラゴン討伐の時の事を思い出しているのだろうロロナが 少し声を強くして言うけど、ステルクさんも「それじゃあ」と引き下がるわけもなく、こちらも少しずつ声色が強くなってきた

「そ、それは……いいじゃないですか！ 誘いたかったんですから！ でも 戦うのはダメです!!」

言い争いは言い争い、ケンカみたいなものだ……でも、二人とも言い争いをしてるはずなんだけど、何故か ギスギスしている感じはしない。どうしてだろう？

声は張り上げ合いだしてるのに、なんというか……その……よそから見ていると 気迫というか怖さがほとんど感じられない気がする

「言っていることが滅茶苦茶だな。アストリッドに似てきたんじゃないか」

「なっ……それはあんまりです！ 師匠と似てるなんて！」

アストリッドさんに対する ロロナの評価が非常に気になるところだけど、それ以上に僕は 畑のことが気になり出した

大体のものは収穫してしまい、残りも 一応 ウォルフをお願いしておいたけど、モンスターのウォルフが出来ることは限られている。これ以上 変に時間をとってしまうのは あまりよろしくない

もう、こうなったら……

周囲にモンスターの気配が全く無いことを確認した僕は、二人に気づかれないように そつとその場から離れた

「ふう、このくらいでいいかな？」

辺りを見渡しながら僕は呟いた

コロナとステルクさんが言い合ってる場所から離れたのは、採取地に先回りして モンスターを追い払っておこうと思ったからだ。で、あらかた追い払い終わったから確認をしてただけ……

「それにしても 遅いな？」

先回りしたからといって、あれはもう採取地にほど近い地点だった。そんなに時間がかかるとは思えない

「様子を見てこよう」

街道脇の木の陰に隠れ、街道の様子を見ながら逆走していたんだけど……

「絶対、ゼーったい！ステルクさんは私の後ろにいてください!!」

「それはできない相談だ。私はキミの前に出させてもらう！」

なんと、道中にモンスターと出くわしたとか 何かあったとかではなくて、ただ単に 言い合いながら歩いていて遅くなっていただけだったみたいだ。……よく飽きないものだ

「そろそろ採取地に入るぞ。私が前に入る、いいな」

「もう！ステルクさんの分からず屋!!本当に……って……あれ？」

頬を膨らませたコロナが、プイっとステルクさんから そつぽをむいたんだけど、ちょうどその時 後ろが少し見えたのだろう。一瞬

固まったかと思えば、そのまま振り向いてキョロキョロあたりを見渡して…

「すすす、ステルクさん!」

「ハア…、今度は何だ」

ロロナの声に、振り返らずに 少し呆れ気味に返答するステルクさん

「もう一度言っておくが、私は後ろに控えたりは…」

「そうじゃなくて!!いないんですよっ! マイス君が!!」

「なっ、なにい!?!」

……ゴメン、一言言ってもいいかな? 「いまさら!」 って…

「どこかではぐれてしまったのか!」

「わかんないです! ずっと、私たちの後ろをついてきてたはずなんですけど」

慌てだす二人を遠目で見ていたけど、引き返して探そうとしだしそうになったから、僕は木の陰から出ることにした

「二人とも、僕はここにいますよ」

そう言って 僕が顔を出すと、二人そろってバツつとコツチを向いてきた

「マイス君! なんでそんなところにいるの!?!」

「いったい何処へ行っていたんだ!」

「二人が「どっちが前にでるか」で言い争ってたんで、争う理由を無くしに行っていました」

二人のいる街道のほうへ歩み寄りながらの 僕の言葉に ステルクさんもロロナも「どういうことだ」と首をかしげてしまったので、僕は説明を付け足すことにした

「この採取地のモンスターはすでに僕が全部倒してしまったから 戦闘は起きませんよ、ってことです」

「いつの間に……じゃなくて！　マイス君、ひとりで勝手にどこか行ったら危ないよ！」

「そうだぞー！　キミとはいえ、こういったところでは「一人で出来る」といった少しの気の緩みが危険につながるんだ!!」

「ロロナとステルクさんが　僕に詰め寄りながら叱しかってきたけど、僕としても色々と思うところはあるわけで……」

「ふたりなんて、ついさっきまで　僕がいないことに気づかないくらいのお喋りに熱中していたじゃないですか」

「うう……えつと……」

「グツ……それは、だな……」

「入院中会えなくて　久しぶりに話せるのが嬉しいのかもしれませんが、ちゃんとしてないと　また入院なんてことになっちゃうかもしれないですよ」

「はい……」

「バツが悪そうにする二人だったけど、ふいにロロナが「そっか！」と声をあげた。僕とステルクさんはいきなりすることに少し驚いていたが、ロロナはそんなの気にせず口を開いた

「ゴメンね！　マイス君もステルクさんとお喋りしたかったんだよね！」

「えっ」

「だって　ほら、ステルクさんと病室で色々お喋りしてたってエステイさんが言ってたし……あつ、そういえば　その時何のお話してたの？」

「いや、ちよつと待って!?　何がどうして、そうなるの!?　なんだか、話が全く別の方向へ飛んでいってしまったような……」

「もう、どうでもいいか……」

「……どうかしたか?」

「小声でステルクさんが聞いてきたけど、答える気力もあんまりない　なんとというか　ずつと言ひ合いをしてたステルクさんたちを見てた

からか、二人に対しては早めにこっちから折れた方が事がスムーズに進むんじゃないかって思ってた」

「……う？よくわからないが……」

「マイス君とステルクさん、何のお話ししてたんですか？」

今回は　なんだか異常に疲れる気がするよ…

マイス 「何事も 計画は早めに越したことはない」

「はあ…」

ソファアに力無くもたれかかって、僕は ひとつため息をついた

別に何か大事おおいとがあつたわけじゃない。…いや、ある意味ではあつた…というかなくなつたというか

「まさか、今年は『王国祭』が無いだなんて…!」

『王国祭』、アールランドで毎年年末におこなわれる大きな行事だ。だけど、詳しい事情は知らないが 何故か今年はそれが無いそうだが、ただでさえ年に一度しかないイベントなのに、それが無いとなると 個人的にやる気がなくなるというか テンションがだだ下がりなわけで…

『シアレンス』にいたころは、少なくとも二週に一回は何かしらの行事があつてたから 全然感じなかったけど、なんにもイベントが無いのって 何だか退屈だなあ」

もちろん、畑仕事等 やれることは色々とあるんだけど、やっぱり何か別に楽しめることがないと なんだか面白くない

せめて、何か新しく 熱中出来るような目標でも見つけられたらいいのかもしれないけど…

「新しいものを作る…:新しいものを探す…:うーん、何かないかなあ」

ただ考えてるだけでは何も思いつきそうになかったので、僕は立ち上がって棚に入っている日記帳の一冊を取り出してみた

この『アールランド』に来てから欠かさずに書いてある日記帳。新しい年になるたびに新しいものに変えていつているので、今は三冊目なのだけど、これらに何か今の状況を打開できるヒントでもないかと探してみることにしたのだ

「そういえば、このころから『雲綿花』の栽培に挑戦してみたんだっけ」

日記を見返していると、色々とこれまでのことが思い出された。農業をはじめ、鍛冶や薬の調合、料理、建築…そして『錬金術』。いろんなことをしてきたなあ…

そんなことを考えながらページをめくっていると、とある日付の内容に目がとまった

「あつ…あれからもう一年以上たったのか」

その内容は、ある人が家に来た話

陽が沈みきった夜中の来客。たくさん食べる人で、荒々しくて大雑把な感じだけど、僕の悩みを聞いて答えへと導いてくれた人との出会い

「ギゼラさん、元気にしてるかな？…いや、あの人が元気が無い姿なんて想像できないけど」

ふと、思いついたことがあった

「確か、ギゼラさんの家があるのって『アーランド』のずっと南のほうの『アランヤ村』ってところで…いつか見た地図だと、海岸線にある村だったよね」

『アーランド』も内陸部にあるし『シアレンス』も海から離れていたから、海に馴染みがなくて、ちよつと見てみたい気がする……それに「やっぱり、海岸線沿いだ」と自生してる植物とか、育てられてる作物なんかも違うのかな？」

そのあたりは凄く気になるし、もし違うのであれば『アーランド』周辺には無い、作物の種があるかもしれない

うん！いいかもしれない！！

「よし！旅行に行こう！」

そうと決まれば、計画をたてて準備をしないと！

まずは旅行期間だけど、ここから『アランヤ村』までの道のりは詳

しくは知らないけど、距離的には二週間ちよつとでつくかな？

帰りは『リターン』の魔法で一瞬だから滞在期間を考えて……一か月くらいの旅行になりそうかな

だとすると、そのくらい家を空けるわけだから 問題になるのは、畑と なーとウォルフのことだ

畑のほうは、今ある分を全部収穫した後 畑を休ませておけばいいだろう

なーとウォルフは、お利口だから ちゃんと日にち分のゴハンを用意してれば大丈夫だ。それに いざとなればホムちゃんに頼み込んでみるのも有りだ

そんなことを考えながら、カレンダーを見て 予定を立てていたんだけど……

「あれ……？」

畑の作物の成長のことを思い返ししながら、もう一度 カレンダーを見て考える

「もしかして、来年にならないと行けそうにない？」

うん、やっぱりそうだ。いや 別に急ぐ必要はないからいいんだけど……でも、なんだかなあ……

「あつ、長期間 家を空けるんだったら『王宮受付』のエステイさんに言っておいたほうがいいかな？」

最近は 僕を名指しした依頼もあつたりするわけだし、そのあたりのことをどうするか 相談するべきだと思う

まだ先のことになりそうだけど、早めであるにこしたことはないよね

王宮受付

「…それで、来年の年始めくらいに ちよつと家を空けようと思ってるんですけど」

少し旅行に行こうと思つていることをエステイさんに話してみたんだけど、エステイさんは何やら唸つていた

「うくん……」

「あの…ダメなんでしょうか?」

「あつ、いや、いいのよ!?! マイス君名指しの依頼がきても 依頼主にこつちから伝えれば問題ないし、全然いいんだけど…」

慌てて否定したエステイさんだったけど、その後すぐに 力が抜けたように頬杖をつきながら「はあ…」とため息をもらしていた

「いやね、羨ましいいつて思つちやつてね…いーなー旅行なんてー」

「やつぱり 最近もずっと忙しいんですか?」

「そうねえ、忙しい時なんかは クーデリアちゃんが手伝つてくれたりするようになったから そうでもないんだけど、丸々二日間休みとかには中々できなくて。特に仕事が無くても ここから離れたらいけなかつたり…」

それからエステイさんの口からは どんどん愚痴が出てきて…ちよつと聞いているのが大変だった

「つて、ゴメンね。マイス君にこんな愚痴言つてもしょうがないのに私ったら…」

「あははは、僕は気の利いたことは言えませんから、聞いてあげることぐらいしか出来ませんが、それでもよかつたら 愚痴を吐いてくれてかまいませんよ」

「あらあら、嬉しいこと言つてくれるじゃない」

そう言つて微笑むエステイさんに 僕も笑顔を返す

と、ふと、何かを思いついたかのように「そういえば…」と口にするエステイさん

「その行先にいるつていう、マイス君の知り合い?…その人つてどん

な人なの?」

「えつとですね、たまたま僕の家にも途中で迷い込んできた旅人の女性で、少し荒っぽくて大雑把な感じですけど、明るくて一緒にいると面白い人ですよ」

「女の人だったの!?……意外……なんていうか、マイルス君の友好関係つてよくわからないところがあるわね」

「そうですか?」

エステイさんが言っていることは、あまりよくわからないけど……まあいいかな?

「それで、その人、なんて名前なの?」

「ギゼラさんって言うんですけど……」

「ふーん、ギゼラさんかあ…… って!ギゼラ!」

さっきまで頬杖ついていた手をカウンターに叩きつけるようにしながら飛び上がるエステイさんに、驚きつつも、僕は疑問を投げかけた

「エステイさんは、ギゼラさんのことを知ってるんですか?」

「知ってるも何も、私の仕事を増やす張本人!このあいだなんかはモンスターを討伐したはいいけど近くに架かっていた橋まで落とし、人や物流に影響が出て、橋の修復やその他の被害への苦情が、王宮に来たのよ!!」

「ああ……なんていうか、ギゼラさんなら、やりそうだ……」

エステイさんの言い方的には、今回が初めてじゃないみたいだ。まああの人は、強くて豪快で……そのくらいのことならやってしまいうさだから、そこまで驚けないけど……

「あれ?となると修復の費用とか色々必要なんじゃないですか?」

「そうなのよ。いちおうは王宮のお金で何とかしてるんだけど。遺跡とか家とか、これまでも色んな物を壊して、何度も被害が出て……王宮もそんなに余裕があるわけじゃないから、いい加減、本人から請求しないといけないんだけど……」

「今の今まで 何処の出身なのかも知らなかったからねえ…」と、疲れたように言うエステイさん

うーん、やつぱり 大きなものの修復なんかの費用となると、やっぱりかなりの高額なのだろうか。それが複数回にもなれば 王宮としても悩みの種なのかもしれない

「あの、それって今のところ どれくらいの額になってるんですか?」
そう聞いてみたんだけど、エステイさんは機嫌が悪そうに「聞きたいの…?」といった様子でジロリと見てきた。そして 大きなため息をついた

「この前の 橋の一件だけで50万コールぐらいよ。で、それ以前にも沢山あって…」

「あつ、それじゃあ 立て替えてことで、僕が今 お金を出しますよ。それで、『アランヤ村』に旅行で行った時に ギゼラさんから回収して、いちおう僕の方から注意しときます」

「へっ?」

僕は手元のカゴから『秘密バッグ』のうちのひとつ…お金を収納しているコンテナに繋がっている『秘密バッグ』を取り出して 中を漁る。そして、お金の詰まった袋を取り出す。

「えっと、1袋が10万コールになるようにしているから…ヨイシヨ。これで橋の一件の分で…エステイさん、他の件の金額はいくらですか?」

「えっ、ちよ、すストップ!ストップ!」

カウンターにお金が入った袋を置いていつていると、エステイさんに大声で制止をかけられた。そんなに血相を変えて…いったいどうしたのだろうか?

「マイス君…この袋が何だつて?」

「1袋10万コール入っている袋です」

「…それで?そんなにポンポン出して マイス君の生活は大丈夫なの

？」

「それは何というか……」

「そ、そうよねー！だから そんなに無理して出そうとしなくても――」

「貯まっっていく一方で、新しいコンテナを用意しないと仕舞う場所が無いくらいには有り余ってて」

「いい……ん……だ……」

「確か、今 家にある金額は……って、あれ？」

「なんだかわからないけど、エステイさんが笑顔のまま固まっってしまった。……うーん……何だか今日のエステイさんは変だなあ？」

マイス 「ロロナの集大成」

ロロナのアトリエ

街の昼下がり。僕が用意している香茶と『アップルパイ』の匂いがアトリエにうつすらと漂っている中、ロロナが口を開いた

「はあ…大丈夫かな、明日の結果発表…」

「マスター、いまさうら不安になっても意味がありません。なぜなら、新しく提出する品を 今から調合しようとしても間に合いませんから」

ロロナの弱音に ホムちゃんがビシツと指摘する…：…なお もはや当然のことだけど、ホムちゃんの膝の上では ナーが丸くなっている、そのなーをホムちゃんは優しくなでている

「でも…：…」と未だに不安そうにするロロナの前のテーブルに、淹れた香茶と切り分けて小皿に取り分けた『アップルパイ』を置きながら、僕はロロナに問いかけた

「まあ、今回の王国依頼の結果次第で アトリエの存続が決まるんだから、緊張したりするのはわかるんだけど…：…そんなに難しい依頼だったの？」

一瞬 首を横に振ろうとしたロロナだったけど、その動きをピタリツと止めて 難しい顔をして首をひねってうなりだした

「難しいというか…：…最後の王国依頼、『これまでの錬金術の集大成を納品する』っていうのだったんだけど、これまでと違って漠然としてたから 納品しても「本当にこれでいいのかなあ？」て一回思ったから 中々頭から離れなくなって…：…」

「ああ…なるほど」

それは もう結果発表まで悶々とするしかないだろう。そもそも判定の基準がわからないわけだから、それこそ王国側の人しかかわらない事だ

「そういえば、ロロナは結局 何を提出したの？」

仮にも僕は『錬金術』を少し齧^{かじ}っているのだ。その僕が 提出した物のことを 客観的にどう思うか考えれば、気休めではあるが 何か言ってあげられるかもしれない

って、思っただけ……

「そ、それは……」

「……………」

「えっ、何その反応!? いったい何を……」

「なく……?」

ロロナは何故か言い辛そうにしてるし、ホムちゃんは そんなロロナのことをジツトリと……というか呆れたような残念なものを見るかのような目を向けている。これには僕もなーも 驚きと戸惑いが隠せない

「その……私は最高のものだと思ってたんだけど、後で後悔したし ほむちゃんからの反応が ちよつといまいちで……」

「……そうなの?」

僕はホムちゃんに聞いてみたが、ホムちゃんはいええ 何とも困った顔をして 肩をすくめた

「ホムが あまり良い反応をしていないというのは事実ですが、それは品質の良し悪しや調合の難易度を考えてではなくて、その……ホムたちには理解が追いつかないというか……」

「えええ……それって、ちゃんとした『モノ』なんだよね? 『勇氣』とか『愛』とかみたくない目に見えないものじゃなくて」

「はい。いちおうは……」

本当に何なんだ、そのロロナが提出した物っていうのは……

「……それじゃあ 改めて聞くけど、何を提出したの?」

「え、えつとね……『金^{きん}パイ』」

「……………ん? 金^{きん}パイ?」

僕は耳を疑った。いや、疑うしかなかった

「……もう一回聞くけど——」

「おにいちゃん、聞き直さなくても 今 想像したもので合っていま

す。パイ生地の中に 溢れんばかりの金が入っているものです」
「うそだあ…」

ホムちゃんに言われたけど、信じられない…いや、『金』は食べる
ことができないはない とは聞いたことはあったけど、丸々つつこん
だパイだなんて…

「見た目は少し成金なりきんっぽいですが、味自体はかなりのものです。で
すが、なんというか…」

「うん、もう アレだよ。」「なんでパイにした」って感じだよ」

僕の言葉に ホムちゃんも「ウンウン」と頷いていた

ロナはといえば、少し涙目になっていた

「私も 作ってるときは「凄い物作ってる!!」って思ってたんだけど、
その、出来上がってから 凄く後悔して…」

「なら、何でそれを提出したの?」

「えうう…それは、こう…見た目から凄そうなものの方が良い評価
がもらえそうな気がして…」

正直なところ、パイにせずに『金』のまま提出したほうが良いよ
うな気がするんだけど…

今頃、審査する人は困惑してるんじゃないだろうか

「食べ物で武器を作ろうとする おにいちゃんも、たいがいだと思
いますが」

「そうかな?」

疑問に思い 首をかしげてみせたけど、「間違いありません」とホム
ちゃんに断言されてしまった…

職人通り

それは 陽が傾いてきたので『ロナのアトリエ』から家に帰ると
きのこと。アトリエを出て 少しのところにある階段を降りきつた

あたりだった

「ほう、奇遇だな」

そう声をかけられたので、ソツチに顔を向けてみた

階段を降りて最初にあるのは、ティファナさんの雑貨屋『ロウとティファの雑貨店』なのだけど、それよりも手前に 井戸と少し開けたスペースがある

そして、そのスペースに置かれている木箱のひとつに アストリツドさんが腰かけているのが見えた

「こんにちは……って、奇遇も何も こんなところでどうしたんですか？」

アトリエは目と鼻の先だ。わぎわぎ ここでのんびりする必要はないだろう

「んー、それは まあ なんとなくだ」

「……なんだか らしくない感じですね。いつもなら もつとこう……」

「私はいたっていつも通りだが？ ほれ、この袋に入っているのは つい先ほどキミの家から頂戴ちやうだいしてきたものだ」

腰かけている木箱の脇に置いてあった麻袋を示しながら いつものようにニタニタと笑うアストリツドさんを、僕は呆れもしたけど 少し安心もした

「アストリツドさんの中でも そういうことをするのが「いつもの自分」なんですね……」

「まあな……盗とったことを怒りはしないのか」

「何をいまさら。第一 本当に持っていかれたくないものには 細工をしますし……それに何だかんだ言ってアストリツドさんなら 持っていったものを最大限 何かに活かしてくれると思ってますから」

「………根拠も無しに、よく言えたものだ」

アストリツドさんは 困ったように「やれやれ」といった様子で首をすくめたが、なんというか やっぱり何か違和感を感じる気がした

「だけど、本人は「いつも通りだ」と言っているから、とりあえずソレは置いといて……次に気になったのは 麻袋の大きさだった

あの中には 僕の家にあつた薬等が入っているはずなんだけど、普段 家から無くなるものの倍近くの量のもが入っているように見えた

僕がそんなことを思いながら見ているのがわかったのか、アストリッドさんが立ち上がり、自分が座っていた木箱の上に麻袋を持ち上げ乗せながら 驚くべきことを口にしてきた

「明日にはこの街を出て 旅をするつもりだからな。旅先で暇ひまをしない程度には持ち出させてもらったぞ。——この事は ロロナには秘密だからな」

「ロロナには秘密って…えっ!?!」

僕の家からものを持ち出したこと…じゃなくて、街を出ることをロロナに言っちゃダメってことで…そもそも なんで旅に…

いや、きつとアストリッドさんのことだ、いきなりなようで 色々考えて準備してきた結果なのかもしれない

「僕には よくわからないですけど、ロロナには ちゃんと言ったほうが…」

「言うとも。出る直前、ロロナが三年間の王国依頼をやり終えたことを確認した後にな。でないと 変に湿でにくっぽくなってしままうからな」

どこか寂しそうな… でも 何だか優しい笑みを浮かべながら言うアストリッドさんを見て、僕は アストリッドさんが旅に出る理由なんかは 何だかどうでもいいような気がしていた

「そういえば、エステイ嬢から聞いたぞ。キミも旅…というか旅行に出かける、と。それも 女性と」

いつの間にか いつもの調子に戻ったアストリッドさんが、ニヤニヤしながらこちらを見てきた

「はい……まあ 最初は僕一人で行くつもりだったんですけど…」

「ああ、聞いてるとも！二人の少女に涙を流させた 修羅場だったら
しいじゃないか」

やけにイキイキとしているアストリッドさんの勢いに ちよつと
引きながらも僕は説明をつけくわえた

「修羅場って……何処で知ったのかはわからないですけど、リオネラ
さんとフィリーさんが、ただの旅行を「アーランドから出ていく」つ
て勘違いして 大泣きだったってだけで、説明をしたら ちゃんとか
わかってくれましたよ？」

一から全部話すと長くなるけど、突如 僕の家に入ってきた二人
が いきなり大泣きしだして、何が何だかわからない状態で泣き付か
れて……で、何があったのか聞こうとしたら、逆に「どうしてなの
!？」って聞かれて……

いやまあ、大変ではあったなあ……

「それから リオネラさんが「久しぶりに他の場所で大道芸をした
い」ってことで ついてくることになって、フィリーさんも「引きこ
もり・人見知り脱却のため」って言って……あれ？どうかしたんです
か、アストリッドさん？」

気がつけば、アストリッドさんがコメカミを抑えていたので少し心
配になり 問いかけてみたのだが、顔をあげたアストリッドさんは苦
笑いを浮かべていて……口元がヒクついていた

「あーいやー、エステイ嬢から聞いていた話と食い違いが有ったもの
だからな。少し驚いてしまったぞー ……まあ、口ロナや私に
実害はきそうにないから別にいいか（ボソツ）」

……？なんとというか アストリッドさんの言葉が 抑揚が少ない
気が……それに、最後に何か言っていたような……？

まあ、気にするほどのことじゃないだろう……たぶん

エピローグ 「僕らの新たな日常」

|||||

機械の恩恵を受け大きく発展した街『アーランド』

その街の一角に、仕事をほとんどしなかったために 閉鎖寸前まで
追い込まれた『錬金術』のアトリエがありました

店主を『ロロナ』こと『ロロライナ・フリクセル』と、店名を『ロ
ロナのアトリエ』と変え、三年間 『王国依頼』をこなし、ロロナは一
流の錬金術士となり 王宮からの信頼と 国民の人気を得ました

最後の『王国依頼』を終えた後、ロロナの師匠アストリッドが長い
旅に、仕事の手伝いをしてきたミスとリオネラ ついでにファイリー
の三人が旅行に出たことにより、最初のうちは とても大変だったよ
うです

ミスたちが旅行から帰ってくれば アトリエにくる仕事が減り、
手伝ってくれる人が増えるから それまでの辛抱だ、と なんとか頑
張っていたのですが……

|||||

ロロナのアトリエ

「よし、終わった！ホムちゃん、そっちはどう？」

「はい、こちらは つい先ほど完了しました。次の仕事に取り掛かり
ましょう」

「えつと……今日は あといくつお仕事残ってたっけ？」

「四件です」

「ええっ!?まだ そんなに!?わーん！絶対終わらないよー！」

「おーい、差入れ 持ってきたぞ ロロナ……って、毎度ながら大変そう
だな」

「わあい、ゴハンだ！朝から何も食べてないから すつごくお腹空いてたんだあ！」

「言っとくけど、あなたには 休憩はないわよ。調合を続けなさい」
「えっ、そ、そんなあ……！」

「あなたが仕事を片っ端から引き受けるからでしょ！泣きごとと言つてないで早く次の仕事やらないと終わらないわよ」

「ううっ……だつてえ……」

「が、がんばろうロロナちゃん。私も一生懸命 お手伝いするからね？」

「りおちゃん……でも、どう考えても調合時間が足りないの、これ」

「はあ!?あなた、何で 依頼を受ける時に確認してないのよ！」

「あつ、そうだ！ 調合が間に合わないなら、ミス君に作ってもらえ
ば！」

「おいおい……」

「ロロナちゃん……」

「あんたねえ……あいつが 今 大変だつて分かってる？」

「えっ……?あつ……」

「マスター。ホムも頑張りますから 一緒に仕事を終わらせましよう」

「うん……」

王宮受付

「くっ!またか……!」

「あら?どうしたの ステルク君」

「どうしたも何も……!エステイ先輩、王を見かけませんでしたか!？」

「えっ、今日は見てないけど……」

「そうですか…いったい何処に…」

「あつステルク君?…行っちゃった、大丈夫かしら? …あつちの『大臣』と『大臣見習い』も賑やかね」

「おい、トリスタン。この前 お前が提出してきた予算案だが…」

「なんだい?何か問題でもあった?」

「アトリエへの追加予算だが…悪くはないが、優遇しすぎではないか? それに比べて 農業への支援が無いのは…」

「国民の利益のことを考えたら、国から『錬金術』への支援をしたほうが 後々もよさそうだからね。 農業は そもそもこの街には縁遠かった産業だから 勝手がわからない…っというか、一人で工場3つ分くらいの利益をあげる人に何を支援するのさ…」

「しかしだな…彼の今の状況を考えると…」

「農業ねえ…最近会ってないけど、マイルス君 元気なのかしら…っつと、私もちやんと仕事しないと」

|||||

アトリエはてんやわんやしていて、王宮も新たな体制への兆^{きざ}しを垣間見せながら 人々が忙^{いそが}しそうに行き交っています

そして、アーランドの街から離れた場所にある 畑と『離れ』と『モンスター小屋』がそばにある 林に囲まれた一軒の家

ここに住むマイルスにも、大変大きな変化が起こっていました

|||||

マイルスの家・畑

「そんなに浅いと 作物が育ち難くなるよ。耕す時は たがや もつとクワを深くいれて！」

「ハイッ！」

「そっちの人は 種と種の間隔がちよつと狭いかな？大体 このくらいは離しておかないと、互いに成長の邪魔をしちゃうから」

「ワカリマシター」

「アノー・・・コノ ハナノ タネハ、ドレクライノ カンカクデ ウエタラ イイデスカ？」

「つと、その『ムーンドロップ』は この前に植えた『キャベツ』の半分の間隔で植えてね。花は ごく一部を除けば 全部一緒だから憶えておくといいよ」

|||||

旅行から帰ってきたマイスを待っていたのは、数人の人

マイスと同じ歳くらいの子から青年や中年、男女混ざっていました
が ある共通した用事で マイスに会いに来ていたのです

彼らは マイスに言いました

「私に 農業を教えてください」

彼らは、街に出回る作物の量や質が落ちていることに気づき、その原因を王宮に問いかけ マイスの不在に行きついた人たちで、それをきっかけに マイスの農業に興味を持ったそうです

もちろん、全員が全員 農業に対して本気だったわけではなく 遊び半分で来ていた人もいたようですが、そんな人たちは マイスが出した料理や 農具と共に置いてあった武器などに興味を持ったようで、いつの間にか マイスに『料理』や『鍛冶』を教わるようになっていました

いきなり大勢の人に 色々と教えることになったマイスは、それはもう大変。畑や部屋、道具等、足りないモノをどうにかしながら教えないといけないのですから

そのはずなのですが……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「フム……イキイキとした良い笑顔をしているな、彼は」

「あ、あのー……なんでココにいらっしやるんですか……？」

「少し抜け出……視察に来たのだよ」

「本当ですか……？」

「そう見つめられると どうしてもキミの姉の顔が思い浮かんでしま
うのだが……それはさておき、まさか アーランドのすぐそばにこれ
ほどの農場が出来るとは……数年前の私は予想もしなかった」

「ううっ……私の安息の地が……モコちゃんとの時間があ……」

「そこは 彼が充実していることを喜ばしく思うべきではないか……？
まあ わからなくも無い。最近 私も彼の淹れる香茶が恋しくてな
……」

「あと少ししたら お昼の休憩に入りますから、もう少し頑張ってい
きましよう!!今日の昼ごはんは『お好み焼き』です！」

— f i n —

ロロナのアトリエ・番外編 ロロナ編《前》

王宮受付

「お疲れさま。これが今回の報酬よ」

「あつ、ありがとうございます。それと、新しい依頼を受けたんですけど」

報酬を受け取りながら、エステイさんに　そうお願いした

最後の『王国依頼』も　たぶんなんとかかなりそうだったから、今日は　いつもより多めに依頼を受けてみようと思ってた

「あら、ありがとうございます。ちよつと待ってね……つと、はいどうぞ！」

エステイさんから受け取った依頼書の束に目を通してしていると、あることに気がついた

「……なんだか、ここ最近　採取物の納品依頼って「鉱石系」のばかりな気がするんですけど、何かあって　不足してたりするんですか？」

私の質問に　エステイさんは一瞬「そうだったかしら？」って感じに首をかしげたけど、すぐに何か思い当たったみたいで、手を叩いて首を振った

「別に何かあったとか　そういうことじゃなくて、ただ単に　他のもう達成されてるから「鉱石系」とかしか残ってないのよ」

「えっ？それって　どういう…?」

「ほら、去年の『王国祭』以降　ミス君名指しの依頼が日を追うごとに増えてね、その依頼の納品の時に「それじゃあ　ついでにコツチも…」って「植物系」の納品依頼をこなしちゃうから、残りの依頼が偏かたよっちゃってるってこと」

それを聞いて　私は納得した

ミス君のお家の畑では　本当にいろんなものを育ててる。……たぶん、依頼に出ているような植物は、コンテナで保存している分も

含めれば 大抵そろそろだろうか

「私もマイルス君が育てたのを 調合に使わせてもらってるしなあ…」
「なんだか感慨深いものよね。ちょっと前まで 右も左もわかかってない感じだったのに、すっかり馴染んで 頼れる子になっちゃって」
「そうですよね。あの頃のマイルス君って……」

それから 少しの間、エステイさんと マイルス君がアーランドに来たころの話をした……

ちよつとだけ前のことのはずなんだけど、なんだか とつても懐かしく感じちゃった

サンライズ食堂

用を済ませた私は『王宮受付』を後にし、ちよつと『錬金術』の材料を買いに『サンライズ食堂』に立ち寄ることにしたんだけど……

「あれ？あれは……」

『サンライズ食堂』に入った私の目に入ったのは、奥の席に座っている二人組。ひとりは見たことの無い男の人だけど、もうひとりはマイルス君だった

ちよつと気になるけど、ずいぶん話し込んでいるみたいで なんだか話しかけ辛い……

「よう、ロロナ。なんか面白い物か？」

悩んでた私に話しかけてきたのは、ここ『サンライズ食堂』でコックをしている幼馴染のイクセくん

「あつ、イクセくん。えつとね、マイルス君とお話してる あの人是谁？」

「あれは ただアーランドに立ち寄ったって旅人だよ。でもって、ウチの客だったんだけど……」

そう言いながら難しい顔をするイクセくん。なんだか 呆れているような感心しているような……

「どうしたの?」

「いやさ、あの客なんだけだよ、出した料理を食ったとたん「このキャベツはドコのものなんだ!!」って言ってきてきたんだ。で、マイルスの畑のものだつて教えたら「そいつに会わせてくれ!」って…」

「なるほど。それで ああなつたんだね」

「ああ。今日はたまたまマイルスが来る日だったから、来るから待つているよう伝えてさ。で、マイルスが来て事情を説明して 紹介したら、ああやつて何か話したんだ」

「混んでるわけじゃねえから、別にいいんだけど」と付け足して言うイクセくん

『王国祭』以降、街の人たちから一層注目されるようになったマイルス君だけど、『アーランド』の外から来た人にも興味を持たれて…:…すごいなあ…

私も、エステイさんから「ロロナちゃんの仕事、評判結構いいわよー」なんていわれたことはあるけど、自分で実感したことなくて…:…

「あれ?…じゃあ、なんでイクセくんはそんな顔してるの?」

「それは…「シエフを呼べ」じゃなくて「生産者を呼べ」ってのが、なんていうかな」

そう言ったイクセくんは大きなため息を吐いて、とつても悔しそうに歯を食いしばっていた。…:…そんなに悔しいんだ…

そんなことを話しているうちに、マイルス君と話しをしていた人が席を立ち、イクセくんにお礼を言ってから、お店を出て行った

それに続くようにマイルス君も立ち上がったんだけど、その時 私に気がついたみたいで、私のほうへと近づいてきた

「こんにちは、ロロナ。今日は買い物?」

「うん、そうなんだけど…:…マイルス君、さっきの人と何の話してたの? なんだか ずいぶん話し込んでみたいだけ…:…」

「農業のことだよ。なんでもあの人 農家の跡取り息子らしくて、今

回の旅は 農家を継いでしまう前に街とか色んなものを見てまわり
たかったから 始めたらしいんだ」

「なるほど。農家だったから 料理そのものじゃなくて素材のほうに
興味持ったんだな」

マイス君の話を聞いて納得したように頷くイクセくん。その顔は
なんだか少し安心してるように見えた

「……あの人、本当は農業以外の仕事に憧れて 旅の中で何かを見つ
けようと思ってたらしいけど、旅を止めて 一度実家に帰るんだつ
て。「他のことを見つけたのは、もつとちゃんと親父たちの農業を
知ってからでも いい気がしてきた」だってさ」

「都会に憧れて、親の仕事が格好悪く思ってたなりしてたのかもな。
……となると、跡取りを送り返してくれたマイスは、その農家にとつ
てはちよつとした恩人かもな」

「あはは、それはどうだろう？これから先、どうしていくかは 結局
あの人次第だからね」

笑いながら話すマイス君とイクセくん。その会話の中で、さつき
エステイさんと話したことを思い出した

……マイス君、いつの間にか 立派になったよね……。 最初の頃は
なんだか頼りなさとか他人行儀なところが少しあったけど、今は
初めて会う人ともすごくよく話すし お仕事もものすごくできて
……

ほむちゃんやくーちゃんに「マイス君は私の弟」みたいなこと言っ
てたけど、今じゃ 私の方がマイス君に頼りつきりだなあ……

「……ちよつと 寂しい、かな？」

「……えっ？ ロロナ、どうかした？」

気づかないうちに声に出ちゃってたみたいで、マイス君が どうか
したのかと聞いてきていた。イクセくんも不思議そうにコツチを見
ていた

「う、ううん！ 何でも！ そろそろ 買い物済ませちゃおうかなーつ
て思っただけだから」

「お、そういや ロロナは買い物に来てたんだっけか？何が必要なんだ？」

「えっとね、お塩と それと…」

『サンライズ食堂』で買い物を終えた後、ミス君はまだイクセクんに用があったみたいで、私だけが先に食堂を出るかたちになった

アトリエまでの帰り道、私はミス君のことを色々考えてた

「二時期 元気が無かったこともあって…そう考えてみると、ミス君だって頑張ってるんだから 良い事だよな？ よおーし！寂しがってないで、私も ミス君に負けられないようにお仕事頑張らなきゃ！」

握りこぶしを作ってギュっと力をこめる

アトリエに帰ったら、さつそく ほむちゃんに手伝って貰って、納品のアイテムを調合しなきゃ！

そう考えながら歩き、アトリエまで帰り着いた

ロロナのアトリエ

「ただいまー…って、あれ!？」

帰り着いたアトリエには、ほむちゃん以外に 何故か私のお父さんとお母さんがいた。それに、ただ いるだけじゃなかった

「信じられないわ！この浮気者!!」

「それはコッチのセリフだ！」

アトリエにわざわざ来るっていうのも珍しいけど、どうしてケンカ

してるの……まさかの出来事に ほむちゃんも困った顔をしてるよ
…

「ああつ、もう！ストロップ!!お父さんもお母さんも、なんで ケンカ
してるの!?!」

私が二人の間に入るように 止めに入り、どうしてこんなことにな
ったのか説明を聞こうとした……なのに

「ロロナ!!」

ガシッ!

ガシッ!

「ふえ!?!」

間に入った私の腕を お父さんとお母さんがそれぞれガツシリと
掴んできた

「ロロナ!その人と一緒にいちゃダメよ!!私と来なさい!」

「いいや!ロロナ、私と来るんだ!!いいな!」

「ちよ!?!痛い!痛いつてばー!引っ張らないでー!!」

掴まれた左右の腕を引っ張られて、まるで綱引きの綱のようになっ
てしまった!二人とも 引っ張るのを止めてくれなくて、なんだか
私の腕からミシミシと聞こえたような気が……気のせいであってほ
しい…

ガチャ…

「ロロナ?なんだか騒がしいけど、何かあった?……えっ!?!」

アトリエの玄関を、珍しくノック無しで開けたのは マイス君だっ
た

『サンライズ食堂』での用事が終わって帰っている途中、アトリエの
前を通って 騒ぎを聞きつけたのかもしれない

「マイスクーん!たあ助けて〜!!」

「助けてって…。これ、どういう状況なの?」

そう言っつてマイス君が目を向けたのは ちょうど扉のわきに立っ
ていた ほむちゃんだった

「それが、ホムにもよくわからないのです。…すみません、おにいちゃん」

「おにいちゃん？」

ほむちゃんの言葉に反応したのは、今の今まで 私の言ったことも聞こえていなかったような お父さんとお母さんだった

二人は やっと私の腕を引っ張るのを止めて、ほむちゃんとマイス君の方に目を向けていた

「あら？あの子は確か……」

「キミは…？そうだ、前にも会ったことが……」

ふたりして マイス君をジッと見つめて何か考えだしたかと思えば、二人同じタイミングで私の腕をはなして ポンと手を叩いた

「二なるほど！そういうことだったのね（か）！」

「イタタつ…もう、いきなり…って、ええっ!？」

何か勝手に納得した二人が私に詰め寄ってきた！

「もう ロロナったらー。そういうことなら もっと早く言ってくればよかったのに！ だから あの女の子が「私は妹のようなもので」って言ったのね。…ごめんなさいね、アナタを疑っちゃって」

「いいって。私もてつきり 浮気されてて、ソイツとの子かと…って、そうじゃない！ ロロナ！私は認めないぞ!!」

「あら？私は前から ロロナと結構お似合いだと思ってたんだけど…？ほら、なんていうか こう、ピツシリカツチリしたカツコイイ人って感じじゃなくて、愛嬌の有る人のほうが ロロナと相性ピツタリな気がするじゃない？」

「いやいや、もつとこう ロロナをしつかり護れるような…じゃなくって！そ、そもそも ロロナにはまだ早い!!」

「お父さん？お母さん？ 何 言ってるの??？」

あーもう、わけがわからない……

えっと、「あの女の子」っていうのは たぶん ほむちゃんのこと
で、ほむちゃんの言ったことを真に受けて 本当に私の妹だって思っ
て、そこからケンカになってた…ってことだったのかな？

それで、その後 マイス君が来て、ほむちゃんがマイス君のことを
「おにいちゃん」って言って…：たぶんそこで マイス君とホムちや
んが 本当の兄妹って思ってた…

「ってことは…あれ？」

…：もしかして、お父さんとお母さんは マイス君とほむちゃんが
兄妹って思ったことで、ほむちゃんの言った「妹のような」っていう
のを「妹」じゃなくて…：「義妹^{いもうと}」って…

いやまさか、そんな突拍子もないこと…：でも、さっきの二人の話
の内容的に、今の二人の頭の中では…

『兄：マイス 妹：ホム』であり

『義姉：ロロナ 義妹：ホム』でもある

つまり…『マイス—♡—ロロナ』ってことに…

「う、うええう!?ちよっ…！ちよ!!お母さん！お父さん！そ、そう
うのじゃ…!!」

「あらあら。そんなに慌てなくていいわよー。色々聞いてみたいけ
ど、せつかくの彼と ふたりの時間を邪魔しちゃ悪いわよね」

「ふふふつ、わかっているわよ」と微笑んだお母さんは、お父さんとほ
むちゃんの手をとって…

「(ゆっくり)」

ギー…：…パタン

チヨ…：ヒツパラナイデクレ！ワタシ ハ マダ！

ナゼ ホムマデ…

イモウトチャン、フタリ ノ コト イロイロ キキタインダケド

…

お母さんたちがアトリエから出て行った後、外から色々聞こえてきたけど……

「えう……………」チラツ

「……………」チラツ

それよりも、この空気で　マイス君と二人つきりなことをなんとかしないと……でも、何を言えればいいの!?

「…ねえ、ロロナ」

「ひやつ、ひゃいつツ!」

「結局、ロロナのお父さんたちは　何でケンカしてたんだろう?」

「ふえ?…………えーと、何でって…」

もしかして、マイス君　今さっきの流れ、何もわかってない…?

「よくよく考えたら、それはそうだよねえ……。タントさんとかだったらまだしも、マイス君だもんね。あははは…」

私ひとりが勝手に変に慌あわてていたことが　ちよつと恥ずかしくて、お母さんたちが誤解していると気付いた時とは別の意味で　顔がとても熱くなっちゃった…

そんな私を　マイス君が不思議そうに見ているのに気がついて、ジツと見られてる事に慌てつつも、何とか取り繕おうとする

「お父さんとお母さんがケンカするのは、偶にだけど　よくあることだから、気にしないでいいよ」

「たまに…よくある……?…えっ、それって　どっちなのかな?」

「と、とにかく!ちゃんと仲直りしてたみたいだから　大丈夫だよ!」
マイス君は首をかしげながら「そう?」って言って　少し心配そうにしながらも、とりあえずは納得してくれたみたいだった

「そういえば、ロロナは大丈夫なの?」

「えっ？うん。ちよつと痛かったけど 大したことは」

「いや、そつちは動いてるの見てたら大丈夫そうだったから そんなに心配はしてないけど…」

「……？じゃあ何のことだろう？他に何かあったかな？」

「ホムちゃん 連れていかれちゃったけど、お仕事の予定が詰まったりとかしない？」

「あっ……！」

今日『王宮受付』で受けてきた依頼、調合の日数を考えると けっこうカツカツだったりするんだけど、ほむちゃんもいるから大丈夫って思ってたから……

「ううう…かなりギリギリかも…」

「やつぱり？なんとなく そんな気がしてたんだ」

「どうしよう…：…というか、お母さん 何でほむちゃん連れて行っちゃうかな…」

「本当になんでだろう？…まあ、そんな長い間 帰ってこないわけじゃないだろうし、とりあえず ホムちゃんが帰ってくるまでは僕が手伝うよ」

「ホムちゃんほど錬金術が上手いわけじゃないから、そう手伝えないかもしれないけどね」って 少し申し訳なさそうに付け足すマイルス君

「えっと…それじゃあ お願いしてもいいかな？」

「うん！任された！」

マイルス君って どれくらい錬金術できるんだろう？実際にやるところは見たこと無いから わからないなあ

ティファアナさんのお店に置いてある マイルス君の作ったっていう薬は、質も良かったし、錬金術も それ相応に上手いのかな？

なんだか、マイルス君との調合のお仕事 すごく楽しみになってきちゃった！

|||||

アトリエ・奥の部屋

「フム、最初から見ていたというのに、完全に 出るタイミ^{しやく}ングを失つてしまった。このまま二人で作業させるのは少々癪^{しやく}だが………まあ、マイスなら そんなに気にする必要もないか。 とりあえず、裏口から出て ホムの様子でも見てくるとするか……」

ロロナ編《後》

|||||

ロロナが3年間『王国依頼』を達成し終え、マイルスが旅行を終えて他の人たちに農業を教え始めてから、少し経ったある日のこと

自由な時間が取れたマイルスは、久々に街へと遊びに言っていたのだが……そんな時、爆発音が聞こえてマイルスは「またか……」と思いつつ、無視もできないので『ロロナのアトリエ』へと向かったのだった
そして……

|||||

職人通り

アトリエの外から窓越しに 中の様子をうかがっている人物が1人……と、その人のほうへと 文字通りフワフワと浮遊して近づいていく人影があった

「あら……騎士さん、こんなところでどうしたのお？」

そう声をかけたのは浮遊している人影。幽霊のパメラだった

声をかけられた アトリエの中の様子を見ていた人物：騎士・ステルケンブルク・クラナツハは 驚いたように窓際から飛び退いた

「き、君は確か……一時期アトリエにいた幽霊の……」

「パメラよー。ついでに、今はお店の店主してるの。騎士さんは何してたのお？」

「いや、旅に出たアストリッドに「ロロナを頼む」と頼まれていて 様子を見に来たのだが、どうやら もうひとつの頼みのほうも……」

ステルクがチラリと窓のほうを見ながら言っていると、パメラは「ああー」と納得したようにポンと手を叩いた

「ロロナを頼む」とは言われなかったけど、私 「他の人がロロナとマイルスを焚きつけないように見張っておけ」って アストリッドさんに頼まれてるの。もしかして、騎士さんもなの？」

「あ、ああ。君も言われていたのか」

「そうよー。アストリッドさんったら「少し焚きつけられたくらいで

は、あの2人は3歩歩けば忘れられるだろうがな」って言ったのよ。私は そんなことないと思うんだけど…」

ステルクとパメラは ふたり揃ってソォーと窓から中を覗く

アトリエの中では、先程の爆発の片づけを すでに終えていたので であろうロロナとマイルス、それとホムが 『錬金術』の調査をしていた 「なんだか 普通ね〜」

「…まあ、普段と変わりないな」

面白くなさそうなパメラに対し、ステルクは あくまで淡々とした 事務的な態度で言葉を返す

と、ふいにパメラが「そうだわ!」と声をあげた

「ねえねえ! 私たちで 2人をくつつかせてみな〜い?」

「なっ!?!」

「だって、私たちが焚きつけちゃいけないとは言われてないでしょ。なら…」

「そういうのは 本人たちの意思で前に進むものであって、周りがどうこう言う問題ではないだろう。ダメに決まってる!」

「えー、そんなに言わなくてもー。いいじゃない、別に誰も困らないんだし…:あつ」

残念そうに言っていたパメラの顔が、唐突に とてもイイ笑顔になる

それを見たステルクは 不思議そうに首をかしげるが、得体の知れない嫌な予感を なんとなく感じていた

「どうしたんだ。いきなり笑いだして」

「ごめんなさーい! 私、騎士さんが困るなんて思ってたえ…:お邪魔虫はお店に帰っておくわ〜!」

「はあ? 君はいったい何を言って…:」

飛び去っていくパメラを見ながら、何が何だかわからない様子で つつ立っていたステルクだったが、一瞬 真顔で固まった後…:

「…:っ!?!?ご、誤解だ! 君は勘違いをしている! こらっ! 待て〜い!!」

必死の形相でパメラを追いかけた

そんな2人がアトリエの前から去っていった。ちやうどその直後、アトリエの玄関の扉が開き、そこからマイルスが顔を覗かせた。そして、周りをキョロキョロ見渡した後、再びアトリエの中へと入っていった。

コロナのアトリエ

「あれ？マイルス君、どうかしたの？」

釜をかき混ぜていたコロナが、振り向いてマイルスに問いかけた。

マイルスは、ホームと合同で行っていた試験官とフラスコでの調査に合流しながら、コロナへの返事を返した。

「いや、ちよつと外が騒がしい気がしたんだけど……特に変わったところは無かったから、気のせいだったみたい」

「そっかー……つと」

ポフンツ

混ぜていた釜が音をたて、コロナはその中を確認する。無事。調査に成功したようだ。

「できたー！」と声をあげながら、調査品を取り出し、それを依頼品をまとめた場所へと運んでいった。

「えつと、次ので最後だったよね？」

「はい。ホームとおにいちゃんやんでやっている今の調査で、2種の依頼品の調査が終わりますので、あとは、その机の上の依頼書の分で終わりです。マスター、よろしくお願いします」

「はい。ええつと、依頼品は『ベリーパイ』。なら必要なのは……」

依頼書の内容を確認したコロナはコンテナを漁り、必要な素材を取

り出し始めた……が、

「あれ？あれれー？」

ロロナの間の抜けた声に、調合をしていたホムとマイルスが ついそちらを見てしまう

「ほむちやーん。『コバルトベリー』がないんだけど……」

「おかしいですね……？初めにホムが確認した時は 確かに必要個数 あったはずですが」

「ええー!? どうしてなくなっちゃったんだろ……あつ!? そういえば、さつきお薬作る時に使っちゃったかも!?」

「どーしよー!?」とワタワタ慌あわてるロロナ、呆れたように軽くため息をつくホム

そして、マイルスは 自分の家のコンテナと繋がっている『秘密のポーチ』を手に取り、中を漁りだした

「はい、『コバルトベリー』。4つで足りるかな？」

「ふえ？」

マイルスから『コバルトベリー』を手渡されたロロナが呆ほけた声をもらし、ロロナの代わりにホムが 少し間を置いてからマイルスに問いかけた

「使ってしまったも いいのですか？」

「いいよ。ウチで育てたことのあるものは 大体が備蓄が それなりにあるから。それに、今 無いと困るでしょ？気にせず使つてよー」

「もはや、おにいちゃんの家だけで 大抵の作物がそろつてしまうのでは……」

いつも通りのにこやかな笑みをうかべたマイルスが 頷いた

だが、少し申し訳なきように ロロナが言った

「あのね、できたら もう少し貰えないかなーなんて思つたり……」

「依頼内容は 確か『ベリーパイ』を2つだったはずですよ。『コバルトベリー』は4つで足りるのでは」

ホムちゃんの指摘に 慌てつつも、ロロナは「でもね、でもね！」と 言葉が続けた

「ほら、最近 私もミス君も ずーっと忙しくて、お話しできる機会
がなかったよね？ せっかくだから この仕事が終わった後、お茶し
ながらお喋りしたいから『ベリーパイ』多めに作りたいなーって思っ
て…」

少し恥ずかしそうに、そう言うロロナの手に 追加で数個の『コバ
ルトベリー』が置かれた

「それじゃあ、僕らも頑張って 仕事を早く終わらせないとね！」

「はい。…マスター、過去最高の品質の『ベリーパイ』を待っています」

「うん！……って、あれ？ほむちゃん、それはさすがに 無理があるよ
うな…。ねえ、ねえってばー！」

クーデリア編《前》

「……んっ、ふわぁ〜……」

朝、カーテン越しに部屋に入り込む光を　なんとなく感じてか、私は目覚めた

まだ少し重く感じる^{まぶた}瞼を閉ざさないように気力をふり絞りながら、ベッドのそばに置いてある台の上の時計で時間を確認する

…と、時計のそばに置いてあるペンダントが目に入り、つい頬^{ほお}が緩んでしまった

「ふへへへ……」

仲直りの印に自分で作ったペアのペンダント。片方をロロナにプレゼントして、もう片方が　こうしてあたしのもとにある

あたしは　このペンダントを基本的にいつも身につけている

ロロナも　つけてくれていた。採取について行った時も、調合中にアトリエにお邪魔した時も、いつもつけていた

そして　極めつけは、この前　ロロナの久々の休みの時に　一緒に買い物をしてた時のこと

^{しょうひんだな}商品棚の上の小物をふたりで見えた時、ふと　ロロナの目線が小物のほうではなく　別のほうをむいていたのに気がついた。

その目線を追ってみると　その先にあったのは、あたしが首から下げていたペンダントだった。そして、あたしが視線を追ったことに気がついたロロナが嬉しそうに微笑みながら　自分が首にさげてるほうのペンダントを触って「えへへっ……」って……

「~~~~~!!っアレは反則でしょ!ホントにもう!!」

このペンダントには、作るきっかけがきっかけだけに　いい思い出だけがこもっているわけじゃないけど、今では　幸せな思い出のほうが数十倍こもっている

……と、ここであたしは　あることに気づく

「…そういえば、あたし マイスにお礼れい言ったかしら？」
ペンダントを作る技術も知識も無かったあたしに、なりゆきとはいえ 文句のひとつも言わずに手を貸してくれたマイス
普段の仕事や 他の予定もあったかもしれないのに、約2日間 あたしのことにつき合ってくれたあいつは、とんだお人好しだ。…だからといって、礼のひとつも言わないでいるのは あたし個人が なんとなく良く思わない

「…ペンダントが完成したその日に「ごめん」って謝ったり、ロロナと仲直りした後に「おかげさまで」って言ったりはしたけど、ちゃんとしたお礼は言っていないわね」

…でも、どうしたものかしら
あいつのことだから、あたしが「あの時はありがと」なんて言ったところで「そっかー」なんて軽く流してしまえそうさ。それは マイスが別に気にしていないってことだけど、そんなじゃあ あたしが納得できない

ベッドから完全に起き上がり 身支度を整えながら、じゃあどうする？と、自分自身に聞いてみるけど 上手い考えなんて…

身支度の最後の最後、例のペンダントを身に着ける時に ペンダントを目にして、ふと思いついた

「プレゼント、か…」

職人通り

「……とはいったものの」

マイスに何かプレゼントするとして、何をあげればいいか 全然見当がつかなかった

ひととおり街を歩き回って、色々見てまわったけど 良い案は浮かばなかった

かわいい小物なんてものもあったけど、それはあくまで あたしから見て「かわいい」ってだけで、あいつもそう思うかわからないし……そもそも、小物を貰って喜ぶとは思えない

「ちよつと 難しく考え過ぎかしら？」

あくまでも マイスのヤツにお礼の気持ちを ちゃんと受け取ってほしいってだけだ。よっぽど変な物でもない限り 問題無いだろう……極端に言えば ただの自己満足なわけだし

まあ、どつちにしろ プレゼントなんて思いつかないわけだけど……

「あつ……」

そんな時、あるお店の看板が目に入った

思い出されるのは、とある日の出来事……

あたしはそのお店で ある買い物をすることに決めた

ロウとティファの雑貨店

今日は珍しく いつもいる常連の男性客たちがいない。……まあ、いてもいなくても どうでもいいのだが

商品棚を見てまわり、必要なものをあらかじめピックアップする。……うん、所持金的にも問題無さそうだし

買いたい商品をカウンターまで持っていく……

「ちよつとー！今 いいかしら？」

カウンター奥にある扉に向かって やや大きめの声をあげる。すると、少し遅れて 足音が聞こえてきた

そして、扉から この店の店主、ティファナさんが出てきた

「クーデリアちゃん、いらっしやい。今日は 前みたいにか物を売

りにきたのかしら?」

「い、いいでしょ。あの時のことは! 今日はいい物に来たのよ。コレとコレとコレ……あと、小さめの鉢はちってあるかしら?」

「あるわよー」

そう答えたティファアナさんは、カウンタ―下にあるのであろう棚から鉢を取り出して、あたしに見せてくれた

「これなんかどうかしら? 他にも何種類かあるけど、見てみる?」

「ううん、これで十分だと思うわ。それじゃあ、料金はこれくらいで足りるかしら」

「ええ。おつりがあるから、ちょっと待っててね……はい、どうぞ」

おつりを受け取って、それをサイフにしまった後、そのサイフを服のポケットの中につっこむ。あたしがそうしてる間に、ティファアナさんは、あたしが買った商品をまとめて麻袋あさぶくろに入れてくれていた

麻袋を受け取り、さあお店を出ようか、と出入口きびすへと踵かえを返そうとした時、ティファアナさんが「ちょっと聞いてもいいかしら?」と、あたしへ声をかけてきた

「お花の種も買ってるし……もしかして、マイルスくんに育て方を教えてもらうの?」

「えっ、別にそういうわけじゃないけど……」

ここで、あたしはあることに気づいた

今日買った物は、あたしが買う物にしては珍しいものだ。だから、ティファアナさんも気になったと思う

このまま立ち去ったとすれば、あたしが買っていった物のことを気にして、他の人に聞いたり話したりしてしまうかもしれない。そうなる、そのうちマイルスの耳にも入ってしまうかも……

今日買った物が何なのか、それがマイルスに知られても特別問題はな
いんだけど、なんだか、妙みょうに気恥かたじけなくずかしく感じてしまう

これは、口止めをしておいたほうがいいんじゃないかしら!?

「今日 あたしがここで買い物したことは誰にも言っちゃダメだから！特にミスには!! ……はっ!?べ、別に何か企たくらんでるとか そういうわけじゃないから、気にしないで!いいわね!!」

そう言い捨てながら あたしはお店から出ていく

お店を出たら 誰か顔見知りとお鉢はちあ合わせした……なんてこともなく、そのまま 家への帰り道を あたしは小走りで進んでいった

|||||

慌てた様子で店を出ていったクーデリアの背を見送ったティファナは、ひとり今しがたのことを考えていた

「気にしないで、って言われたけど……クーデリアちゃん、どうしたのかしら?」

首をかしげながら さつきクーデリアが買っていったものを思い返す

「鉢、お花の種、ガーデニング用の土、リボン…… ……あらあら!なるほど、そういうことねー」

察さっしの良いティファナのおかげ(?)で、いちおう クーデリアの買い物が他の人たちに広まることは無かった……

|||||

クーデリアの自室

「……つと。こんな感じでいいのかしら?」

雑貨屋さんで買ってきた鉢に 色々詰め込んだ後、花の種を数個埋め込んだ

正直、これでいいのだろうかという不安もあるものもの 悩んでも仕方がないので、とりあえず なんとなくやっていく

後はこの鉢を……窓際まじぎわでいいかしら?ここに置けば ちょうどい

い感じに陽の光が当たるから、きつと 花は元気に育つと思う

「書いていることが本当なら、だいたい1週間くらいで育つみたいね」
花の種が入っていた小型の紙袋の裏面に書かれている簡易的な説明文に目を通し、この花のことを少しだけ学ぶ………とはいっても、見た限り 本当に花のことしか書かれていないから、あたしが知りたい「育てる時の注意点」なんかは書かれていなかった

「本当に大丈夫かしら……」と一抹の不安を感じながらも、あたしの花の育成生活は始まった

街道

あれから十数日ほど経った……あたしは今、ひとりでマイスの家へと向かっている。そして手に持つカゴの中には 綺麗に花が咲いた小型の鉢が入っている

種が飛んできたのか 雑草が生えてきたり、その雑草を引き抜いたら 間違えて花のほうまで抜いてしまったり。他にも、ちゃんと水やりもしてたのに途中で枯れてしまい 種を買い直したこともあった……あれの原因は未だにわからないままだ

そんなこともあって、予定の倍以上の日にちを費やしてしまったわけだが、なんとか 花を咲かせるに至ったのだ

買っておいたりボンを鉢に結び付けて なんとなくプレゼントっぽく仕上がったので、これといった問題はないだろう

「つと、通り過ぎちやうところだったわ」

街道からそれるように伸びる小道へと入る。この先にある 木々に囲まれたところにマイスの家がある。もう あと少しで到着だ

マイスの家

「……そして、まさかの留守よ…」

マイスの家のソファアにドカリと座りながら あたしは独り言をもらす

留守とは言っても、あたしがこうして中に入れてることからもわかるように 家の鍵は閉まっておらず、おそらくは そう遠くには行つてなくて すぐに帰ってくると思う。……ただ単に不用心なだけかもしれないが…

でも、この待ち時間は ある意味よかったかもしれない。なぜなら…

「この花、なんて言つてあいつに渡そうかしら…?」

そう、マイスの家にたどり着くその時まで 全然思いもしなかったのだが、「あの時は ありがとう」とか言つて渡せばいいのか、少し疑問に思ってしまった

いや、別に深い意味なんて無いわけで 自己満足に近いものなわけだから、特別 何を言わなきゃならないわけでもないけど……

ゴトツ…

ひとり考えてる最中に 何かの物音が耳に入った

ガラ… ガララ…

…どうやら聞き間違いなどではないみたい。音は 炉ろや『錬金術』で使う釜が置いてある『作業場』のほうから聞こえてきたようだ。さつき 確認した時には 誰もいなかったはずだけど…

確かあそこには 直接 外に出れる戸があったはずだ。そこから誰かが入ってきたのかしら？

もちろんマイスかもしれないが、それ以外の可能性も考慮して あ

たしは外出時に持ち歩くようにしている護身用のデリンジャー銃を手に持ち、『作業場』へと続く扉へと静かに近づく

そして、そーつと扉を開けて『作業場』の様子を覗きこんでみる……

「モコ〜♪〜♪」ガサゴソ

すると、そこには コンテナに頭から突っ込み 中を漁っている金色の毛玉がひとつ……いや、あれは 前に『旅人の街道』でロロナがとっ捕まえたことがある「新種のモンスター」ってやつじゃなかったかしら……?

…そういえば、このモンスターって マイスが世話してるウォルフがつけてる「青い布」によく似たものをつけてるわよね?もしかしくても、関係があるに違いない。けど……

なんかノンキに鼻歌らしきものを歌ってるけど、これって どう見ても「窃盗」の現行犯よね?

カチャリ

あたしが銃を構えると ほぼ同時に毛玉に声をかける

「はーい、手癖の悪い子にはミツシリお説教しないとね。あつ、変な動きしたら撃つわよ?」

コンテナから顔を出した毛玉は、ガクガクブルブルの状態だ 思った以上に大人しく、あたしが言っても無いのに 両手をあげた

……初めて見た時も思ったけど、あたしが言ってること理解してるっぽいし、この毛玉って けっこう賢いわよね…

毛玉の首根っこを捕まえて もとの部屋まで連れていき、ソファーに座らせる。もちろん、銃は毛玉にむけたままだ

「マイスが帰ってくるまで 逃げたりするんじゃないわよ?わかったかしら?」

「も、モコー……」

なんか もの凄く困った顔をしているような気がする……表情豊かなね この毛玉は……

まあ、今更 困った顔をしたところで何も変わらない。素直に反省して マイスのお叱りしかをうけるべきだ

「でも、あいつって ものすごく甘かったり、お人好ひとよしで お節介焼きだったりするから……」

この毛玉に 盗みをしようとした理由を聞いて「なら持っていていいよ！ついでにコレとコレ……あとコレもあげるよ！」なんて言っていて、なにひとつ怒らずに許してしまいそうだ

「……そういう底抜けに優しいところに あたしは助けられたわけだし、それはあいつの良いところなわけで……そのあたりも含めて、マイスのことは好き、っていうか 嫌いじゃないんだけど……はい、ストップ」

あたしが独り言を言っている間に ソファアから飛び降りようとした毛玉に言い放つ

「次は無いわよ……?」

「……………」ブンブン!

必死な顔をして頷く毛玉。……そこまで銃が怖いなら、なんでいちいち逃げようとするのかしら……

ガチャリ

そんな中 ドアノブを回す音が聞こえた

やっとマイスが帰ってきたのかと 毛玉に銃をむけたまま玄関のほうを見たけど、そこにいたのは別の存在だった

「あんたは確か、ロロナのところの……ホムだったかしら?」

「はい、ホムはホムです……それで、この状況は いったい……?」

「ちよつと この毛玉がコンテナから物を盗ろうとしてね、マイスのヤツに突き出そうと思って あいつが帰ってくるのを待ってるんだ

けど……」

そういえばコロナから聞いた話だと、このホムって子とマイルはかなり仲が良いいらしかったわよね？　マイルが何処に行ったか知ってたりしないかしら？

「ねえ、マイルが何処に行ったかとか、いつ頃　帰ってくるかわかったりしない？」

あたしがそう聞くと　ホムは困った顔をして数秒唸うなったかと思えば、深い溜息をついた

「そこにいます」

「はあ？　そこってどこよ」

ホムが指を指したのは　あたしのすぐそば。　つまりは…

「そのモコモコがおにいちゃんです」

「は!？」

なにを馬鹿なことを　と、笑い飛ばそうとしたところ、毛玉から「ちよ!？」と　マイルの声が聞こえた

「この状況を打開するためには　仕方ないとホムは考えました…」

「でも、色々　マズイような気がするんだけど」

「ですが、あのままだと、ずっと帰るはずのない人を待ち続けるか　おにいちゃんが銃で撃たれるかの、どちらかだったと思います」

「うっ……そ、それはそうだけど…」

毛玉が、モンスターがマイルの声で　ホムと喋ってる……。　どういうこと？　マイルがモンスターだった???

いや、それよりも……

『優しいところに　あたしは助けられた』

『…そのあたりも含めて、マイルのことは好きっていうか　嫌いじゃないんだけど…』

「あれ…？僕は…：…そうだ！クーデリア!!」

「叫ばなくても聞こえるわよ」

「えっ…あれ？」

あたしの言葉を聞いたマイルス（毛玉）は、こちらを向き 驚いたように目を見開いていた

「…：…何よ、そんなに驚いて。いないほうが良かったかしら？」

「いや、そんなことはないんだけど…：…」

何やら釈然としていない様子マイルス

…：…ここまで不安だったのかしら？ 同じ立場には決して立てないあたしには、その不安を計り知ることは出来そうもない

「いきなり殴っちゃってゴメンね」

「え、あ うん…」

「あんたのことは ホムから大体聞いたわ。…：…驚きはしたけど、まあ そんなもんね」

「そんなもんって…？」

「あんたはあんた、ってことよ。もうちよつと自分に自信を持ちなさい」

そう言われても いまいちピンと来ないのだろう。マイルスは首をかしげている、あたしは少し苛立ちも感じたけど、そのいつも通りのノンビリとした感じに安心した

「とにかくーあたしは これまで通りあんたに接するから 気にしないでいいわよ。…：…あつ！あと、今日のこと忘れなさい！いいわね！」

|| || || || || || || || || ||

クーデリアが大声を出した後すぐに 外に出て行ってしまったので、残されたマイルスとホムは、ふたりして首をかしげていた

「今日のごことは忘れなさいって、いったい何のことをなのかな？」

「勢いで おにいちゃんを叩いたことでしょうか？」

「でも、それはもう謝ってくれてるし……」

「じゃあ、何を？」と、ふたりそろって悩みだすマイルスとホーム

「……そういえば、元々クーデリアは 何の用で来てたんだろう……？」

「さあ？ホームにもわかりません……ん？これは……？」

ホームがソファアのわきに置いてあったものに気がつき、持ち上げて
テーブルの上に置いた

それは、鉢に入った土から生えた 綺麗な花だった

「うーん……見覚えがないなあ？」

「かわいらしいリボンで鉢が装飾されています。リボンで物を結ぶのはプレゼントの定石だと ホームは記憶しています。……これは おにいちゃんへのプレゼントなのでは？」

「えっ、僕に？なんで？」

「だって……ほら」

クーデリアが ある方向を指差しながら そちらを見る。それにつられるようにミスも そちらへと目を向けた

そこにいたのは、ミスの家のウォルフを しやがんで撫でながら 農業者見習いの人たちと楽しそうに話しているロロナだった

そのロロナは ミスとクーデリアが自分のことを見ているのに 気づいたようで、周りの人に 一言二言何かを言った後 立ち上がり、ミスたちのほうへと 良い笑顔で駆けだしてきていた

その様子を見ながら クーデリアはミスに先程の答えを返した

「あんな笑顔で「行こうよー！」なんて言われたら ダメだなんて言えるわけないじゃない」

「わからなくもないけど……クーデリアって、ロロナに甘くない？」

「あなたは誰に対しても激甘じゃない。なんだかんだ言って 頼み事は聞いてくれてるし……まさか ロロナ指名の依頼2つ以外、依頼が全部無くなつてるとはおもわなかったけど」

ふたりがそんなことを話しているうちに、ロロナがふたりのそばにたどり着いた。そして、自分のことをずつと見つめ続けるふたりを不思議に思い 首をかしげつつ、話しかけた

「……？ふたりとも 何を話してるの？」

その問いかけに ふたりは顔を見合わせた後答える

「何って……まあ、たいしたことじゃないわよ」

「うん。ロロナは相変わらずだねーって話をしてただけだから」

「相変わらず？私の何がー？」

答えを聞いても何もわからなかったから ロロナはさらに悩みだす。そんなロロナの様子を見て微笑むクーデリアだったが、ある程度 ロロナの様子を楽しんだ後に声をかける

「で、これからどうするの？」

「えつとね、今さつき ここのみんなにミス君とお出掛け^でしている

か聞いてきてね、「いいよ」って言われたから 3人でちよつとお出掛けしようよー」

「おでかけ？採取に行くの？」

「ううん。ここの周りをお散歩するだけだよー？…ちよつと探し物はあるんだけどね」

「ここの周りに 何かコロナが欲しがりそうなモノってあったっけ？」とマイスが少し首をひねって考えた……が、コロナの口から予想外の言葉が出てきて 驚かされることとなる

「前に アトリエに依頼にきた人から聞いたんだけどね！マイス君の家の近くの街道での目撃情報が多いらしいの！ あの新種のモンスターちゃん！ちよつと探してみよーよ!!」

「えっ?!」

驚愕の声をあげたマイス。そしてクーデリアも マイスに負けず劣らずの声をあげた

ふたりは口をポカンと開けてしまっていた。数秒後 先に正気に戻ったクーデリアが マイスに跳びつき、その頭を両手でつかみ マイスを無理矢理屈かがませて、小さな声かつ強い口調で 耳打ちするように言った

「ちよつと！あんたがああの毛玉だったことは コロナにはまだ教えてないの!？」

「え、えつと…タイミングが無かったって言うか……そもそも、クーデリア以外で知ってるのは、リオネラさんとフィリーさん、それにホムちゃんくらいで……」

「なんで ああのホムに教えてコロナには教えてないのよ!？」

「それは ホムちゃんが自分で気づいちゃったから、そのまま成り行きで…」

「理由なんて聞いてないわよ!! さっさと教えて……はっ!? そういえば
ロロナって あの毛玉を溺愛気味だったような……! それってつまり
もし毛玉のことを知ったらマイスを……! (ボソボソ)」

「……うえつと、結局 今からロロナに教えたほうがいいの……?」
「教えなくていい! とりあえず ちよつと何処か行ってから毛玉に変
身してきなさい! じゃないと 見つかるはずの無いヤツを延々と探
し続けないといけないわよ!」

「えつ! 今から!?! いくら何でも それは不自然過ぎない?」

ワーワーキヤーキヤーとふたり固まって内緒話(?)をし続けるマ
イスとクーデリア

そんなふたりの様子をジイーっと見つめるロロナは、少し口を尖ら
せながら 独り言を呟いた

「ふたりが仲がいいのは嬉しいんだけど……なんで またふたりだけ
でお話しちゃうのかな……?」

口に出している間に、ちよつとイライラ感が心の中に溜まってし
まったのだろうか。ロロナは頬を膨ほおらませ、「ぷんぷん」といった効
果音が似合いそうな怒り顔になっていた

「う〜! くーちゃんもマイス君も! ふたりだけでおしゃべりしない
でー!!」

そう言いながら ロロナは屈んで話しているマイスとクーデリア
に跳びついた。そう、本当に ふたりに跳びついていったのだ。つ
まり……

「えつ!? ロロナ!」

「ちよ、危な……!」

「ふえ……? あつ」

ゴチーン!

ドンガラガッシャーーン!!

エステイ編《前》

「はあ〜…どうしようかしら…」

ある日の昼下がり、私はため息をつきながら 当ても無く街中を歩いていて

午前中に最低限の書類仕事を終わらせて、後は他の人たちに任せることができたから 久々の休みを半日得ることが出来ただけど…

「いざ仕事が進みになると、することに困るわね…。半日つても出来ることが狭まっちゃう原因だし…」

寝る…つてのは なんだか勿体ない。お酒を飲みに行く…つても 時間が早すぎるし、ひとりなのもなー…

はあ…。普段仕事詰めなせいで こういう時に困ってしまうって いうのも悲しいものねえ…

そんなことを考えながら、なんとなく散歩を続ける…

ぶらぶらと歩き続けていたうちに、気づけば私は ある場所のすぐそばまで来てしまっていた

『模擬戦用 演習場』、去年の『王国祭』のイベント『武闘大会』の会場となった場所だ。普段は 国勤めの騎士が鍛練のために使用する…ことが偶にある程度の 至って静かな施設である

まあ、今日も相変わらず 人気が無いんだろうなあ…なんて思っている、入り口の前を通りすぎてしまったその時…

「」

通り過ぎようとした途中で立ち止まり、演習場の中を覗きこんでみる。…が、ここから見えるのは通路だけで、模擬戦を行う場所場までは見えなかった

「さっき聞こえた声、たーしかにステルク君だったと思うんだけど…」
強制参加の演習があったりする場合を除けば、この演習場を使っているのは 大抵はステルク君だ。…本当にいるとすればだけど

「でも まあちようどいいかも？ちよつと暇潰しに冷やかしにいつてみようかしらねー」

「つて、あら？」

演習場で見たのは、私が想像していた「ステルク君が気合の声をあげながら剣をひとり振るう」という風景とは違っていた

「なるほど。確かに もうひとつと比べて酸味は強めだが、食感がしっかりとしている…私としては 今食べたこちらのほうが好みだな」

「そうですか！ 僕もそう思ってた。…それじゃあ 今度作る時は、こっちの育て方をベースにして また色々挑戦してみますね！」

そこにいたのは、予想通りのステルク君と…そしてマイス君だった。ふたりは 演習場の片隅かたすみに腰を下ろして 何かを食べていた

「ねえ、ふたりともー。何してるの？」

私がそう言いながら歩み寄っていくと、ふたりは私に気がつき 食べるのを止めコツチを向いた

「むっ？エステイ先輩？」

「あつ、エステイさん こんにちは！」

私の登場に少し驚くステルク君と、いつも通りの調子で 元気に挨拶

撈をしてくるマイルス君。私はそれらに対し ヒラヒラと軽く手を振って返事をする

「で、何食べてるの？」

「ウチで育てた『パイナップル』ですよ。はいっ、エステイさんもどうぞ！」

そうやってマイルス君は ひと口大くちだいに切った果肉を小型のフォークで刺し、私にフォークごと差し出してきた

マイルス君たちのそばに腰をおろした 私はそれを受け取り 果肉を口に運ぶ。噛むと溢れ出る果汁が 口の中に行き渡り、鼻にぬける匂いも素晴らしいものだった

「もうひと口…」と『パイナップル』の入った容器に フォークを持つ手を伸ばし……そこであることに気づく

『パイナップル』の入った容器はふたつ。…どっちがさつき食べたやつだろうか？……まあ、マイルス君に聞けばいいか

「ふう……ちそうさま」

私が2種類とも数切れ食べたころには ふたつの容器は両方空っぽになっていった。もちろん私だけで食べきってしまったわけではなくて マイルス君やステルク君も食べた結果だ

そして、マイルス君が『パイナップル』が入っていた容器とフォークを片付けている間に、私は ステルク君にむかってジトーっと視線をむける。当然 ステルク君は私の視線にすぐに気づいて、困ったように眉をひそめてきた

「なんですか 先輩……」

「いやあ、私が受付でせっせと仕事してる時に「鍛練に行ってきたす」なんて言いながら こんな美味しいもの食べさせて貰ってたんだー、って思っつて。ステルク君、ずーるーい！」

「なっ!?」これは 鍛練に付き合ってもらおう時 彼が毎回勝手に軽食を用意しているだけで…」

「へえー、「毎回」って、やっぱり今日だけじゃなかったんだー。うらやましーいなー」

「うっーそ、それは まあ…」と ステルク君はどもりながら答え、明後日の方向を見て目をそらしてきた……。まあ、ステルク君の反応を見て楽しんでるだけで、別に本当に責めるつもりはないんだけど……半分くらいはね？」

「で、まだこれから鍛練するの?」

「ええ。今の時間は あいだ 間の小休憩なので、あと少ししたら 再開するつもりです」

ステルク君の言葉を聞いて、私はあることを はたと思いついた

「あっ、ちよつと席はずすね!すぐ また来るから!」

私はそう言い残して、ある準備をしに 『演習場』をあとにした

「先輩が走って出ていった時に だいたい予想はしていたが……まさか本当にくるとは…」

そう言いながら 息を吐きながら首を振るのはステルク君。…
いったい何がそんなに不服なのかしらねえ?

そして、ステルク君と鍛練をしていたマイルス君はといえば…

「えつと…エステイさん、その格好は?」

私の服装を見て、不思議そうに首をかしげている

そう、私は 今 普段とは違った服装に着替えてきたのだ。それも戦闘用。剣をさげるベルトはもちろん、上着の裏なんかには 投てき

用のナイフを仕込んであつたるする

「ふっふっふ！ふたりの鍛練にまけてもらって、久々に身体動かそうかなーって思ってたね！」

「えっ!？」と驚くマイルス君に対し、ステルク君が口を開いた

「書類仕事ばかりのイメージがあつて 想像がつかないかもしれないが、エステイ先輩はアールランド王国の王宮の中でもトップクラスの実力者なんだ」

「えっ、そうだったんですか!？」

「まあ、最近『王宮受付』にいてばかりだったから ちよつと鈍^{なま}つてるけど、これでもステルク君の先輩だからねー、ね?」

私がそう言うと、マイルス君はさらに驚き、ステルク君は苦虫を噛み潰したように 口をへの字に歪めた

「ステルクさんよりも……全然知らなかったけど、すごいなあ……」

「何を他人事のように言っているんだ」

「え?」

「エステイ先輩はキミと打ち合うために こうして用意してきたんだぞ」

「あら。ステルク君、よくわかつてるじゃない!」

「ええっ!？」

さらにさらに驚くマイルス君が声をあげるけど、それを聞き流しながら 私は腰から抜いた双剣を構^{かま}える。すると、ステルク君は空気を読んでくれて、後ろへ下がり 私とマイルス君から距離をとってくれた

「それじゃあーいくわよ!!」

有無を言わせることもなく 私はマイルス君のほうへと突っ込んでいく

「そんな!?!え、ええい!やるしかない!!」

そう言つてマイルス君も双剣を抜き……

私とマイス君の剣がぶつかり合う音が『演習場』に響いた

「エステイさん、大丈夫ですか？」

…少し肩で息をしているマイス君が私のことを心配そうに見つめてきていた

「は、恥ずかしい……い！」

ええ 負けました、負けましたとも…!!

あんな「私 強いのよー」って感じにいつておきながら マイス君に負けちゃったわよ!!別に怪我したわけじゃないけど、精神的なダメージが大きいわ…

「まあ、ある意味 当然の結果でしょう。先輩の速さに 時折危ときわりなげながらも ついてこれ、なおかつ単純なパワーでは彼が勝まさつていました……。ブランクが無ければかなりの接戦が続いていたでしょう」

ステルク君がそう評価をしてきたけど……

「むう…それって、ブランク無しでも マイス君と私は同格くらいってことー？」

「あくまで 私の勝手な予測ですから…！実際はどうだかわかりません。そう睨まないでくださいよ、先輩…」

睨みたくもなるわよ…。実際、ステルク君の言ってたことはあつてるし……

はあ…もう！こうなったら これからは鍛練の時間をちゃんと作ろうかしら？最近 鈍っていたのは事実だし、なんだか負けっぱなしなのは性に合わないわ

「切磋琢磨！ キミ達、励んでいるようだな？」

そんな言葉が聞こえて、とっさに 声が聞こえた方へと目を向けた。そしたら そこには 顔の上半分を隠す形の仮面をつけたアーランド王国国王…もといマスク・ド・Gが立っていた……って！

「ちよつ!? こんなところで何やってるんですか!？」

「い、いやっ、そう大きな声を出すことでもないだろう!?…なに、鍛錬に励む姿を見て 少し血が熱くなったというかな……」

私の言葉に マスク・ド・Gは両手を顔の前あたりにだし、制止をかけてきた。が、今度はステルク君が近づきながら言い放った

「血が熱くなったとか、そんなことを言っているヒマがあったらすぐに戻って仕事をしてください! だいたいあなたは…」

「そんなに まくしたてないでくれ! それに ほら、彼がひとり困っているぞ!？」

そう言われて思い出した。そうだ、マイルス君もいるんだった

マイルス君は 私とステルク君、それにマスク・ド・Gを順にみて、不思議そうに首をかしげながらも 少し驚いている様子だった

「ええつと……知り合いだったんですか？」

そう聞いてくるマイルス君に対し、私はどう答えるべきか悩んだ

確か マイルス君と国王は仲良くしているっていう話だったけど……いちおう変装してマスク・ド・Gってことになってるんだし、いろいろと誤魔化してたほうが良いのかしら…?

「…まあ、知り合いつていうか、ね。ほら『武闘大会』に出てじゃない?」

「えっ!? ジオさんって『武闘大会』に出てたんですか!？」

「「えっ?」」

素の驚きの声をあげたのは 私とステルク君、それにマスク・ド・

G…面倒だからもう国王^{ジョ}でいいかしら…その3人だった

「…なるほど、ロロナくんとは違って 私の変装を見破れたのか」

そうひとりで納得する国王に対して、ステルク君が鋭いツツコミをいれる

「いえ、普通 誰でも見破れますよ。 彼女が少し特殊だっただけです」

「……ステルク君。それって 何気に ロロナちゃんは変わり者って いったるわよね…?」

いやまあ 私も否定はしないけど……

それにしても、なんでミス君はマスク・ド・Gのことを知らないのかしら…?

「あつ、そっか！ミス君は『医務室』に運ばれてたから 決勝戦の後のエクストラマッチのこと知らないんだ！」

「ああ、あれか。 どのぞの騎士の大剣の下敷きにされた……」

国王の眩きに チラリツと目を向けられたステルク君が「ぐっ!?!」と苦々しい顔をする。…たぶん、何か反論したいんだけど、実際 アレは危なかったということがわかっていて 何も言えないんだろう

そして、ミス君はといえば、「そういえば、クーデリアが『医務室』に来た時「決勝戦の後に色々あった」って言ってたっけ？」と、なにやら思い出していたようだった

「まあ、何はともあれ…」

正体が隠せなかったため、必要がなくなった仮面を取りながら 国王がミス君に向かって口を開く

「さきの鬪^{せむ}いを見て、是非^{せひ}とも キミと剣を交わしたくなつたのだよ。…受けてくれるかな?」

「はい、かまいませんけど…」

「エステイさんといい……今日はこういう日だって割り切ったほうがいいのかな?」というミス君の眩きを 私は聞き逃さなかった

……そんなに嫌だつたりしたのかな……？

キンツ　　キキンツ

カキン

　　マイス君が振るう『双剣』を、国王が　一見　杖に見える『仕込み剣』でさばき、お返しにと言わんばかりに『仕込み剣』が風を斬る……そんな打ち合いを　少し離れたところで私とステルク君は見学していた

「先輩の速さに　ほとんどついていけてたので　予想はしてましたが、彼は王に　食らいつけてますね」

「んー、でも　あれが限界じゃないかしら？　だってあの人の速さって私よりも上だし……」

　　私たちがそんな会話をしだしたころ、戦っているふたりは一度ぶつかり、弾け飛ぶように　一旦ふたりの間が開いた。そして、また　間を詰め接近して打ち合いをはじめ……と思ったのだけど、マイス君が　いきなり不思議な行動をした

　　両手に持つ『双剣』を頭上にあげクロスさせ……

「たたみかけるっ!!」

　　そう声をあげたかと思えば、むかつて来ていた国王に急接近。そして、これまでとは比べ物にならないくらい速さで『双剣』を振るいだしたのだ!

　　これには　さすがの国王も驚いたようで　身を引こうとしたようだったが、マイス君はそれを追うようにしながら連撃をたたき込んでいく

「……ムウ……!?　これは　手加減などとは言ってられんなー!」

　　国王も　先程までの「マイス君の実力を見定めるための様子見」をやめ、本腰で戦い出した

……と、ものすごい戦いをするふたり……なんだけど、私としては私の隣にいるステルク君が……

「ねえ、なんでそんな怖い顔してるの……？」

「あそこまでの速さ……俺との鍛練では一度も見せてなかった！くそっ！俺ではまだ彼の本気を引き出せてなかったのか!？」

うわっ……ステルク君ったら、珍しくこんなに熱くなっちゃって……一人称を「私」じゃなくて「俺」って言っちゃってるあたりからしても、かなりのものね

まあ、それだけ真剣になれるくらい　マイス君のことを認めてるってことかしら？

「ステルク君たちにも認められて、街の人たちからも人気があつて……」

……あの、病室で初めて会ったころの　暗いマイス君がウソのよう。今ではあんなにイキイキしてる

「すごいわね、マイス君」

私の眩きは　マイス君たちの鬨いの喧騒に埋もれて、他の人の耳までは届かなかった……

「どうした!?!遅くなってきたのではないか!?!」

「まだまだあー!!」

エステイ編《後》

王宮受付

『アーランド王国』では毎年 年末に『王国祭』という街をあげての大きなお祭りが開催される。その大きさ故に^{ゆえ} 少なくとも3ヶ月から準備がおこなわれる

そして、その準備の中心になるのが王宮なのだが……今年は例年とは少し様子が違った…

「今年の『王国祭』は ありませーん……でも、仕事が少なくなるわけじゃありません！」

「先輩…何をおかしなことを言ってるんですか」

カウンタ―に積まれた書類の間にデロンと体を倒し カウンタ―に突^ぶつ伏すエステイに、カウンタ―外にいるステルクが 軽い溜息をつきながら首を振る

「そんなにやる気無さそうにされると、他の騎士たちにも影響が……」
「んなこと言われたって、早朝から来て作業してたのに まだこれだけ残ってるのか、やる気出せってほうが無理な話よー！」

あと2時間ほどすれば 太陽が最も上にくるころだろう。早朝から、という話を聞いて さすがのステルクも驚き 同情しだしたようだった

「…それにしても、この書類の量……。一体、どういったものなんですか？」

「あー…、勝手に見ちゃダメよ？ 一応 結構重要な機密に関わる案件の書類なんかも混ざってるから」

それを聞いてステルクは、カウンタ―上の書類に伸ばしかけていた手を止め 「…失礼しました」と言っ^{けげん}て手をひっこめた。…が、それとほぼ同時に 怪訝な顔をして首をかしげた

「しかし、そんな重要な書類をこんなところであるというのはいささか…」

「……いやね、ステルク君。ツツコミどころはそこじゃないでしょうに」

「…?というど?」

「何で そんな重要な案件が私のところに来るのか、ってこと。普通こういうのは大臣とか もっと上の人……王様なんか扱うべきものなのよ!」

エステイがビシツと言い放つ……が、対するステルクは「なるほど……」と言いながらも いたって落ち着いた様子だった……ただし、少しコメカミがヒクついていた

「つまりは……また王は抜け出しているということですか」

「そうなのよ!。全くもう あの人は……」

「はあ……」

……余談ではあるが、ちようど同じ時に 大臣の執務室で大臣がため息をついて、とある『アトリエ』にいた王がくしゃみをしたそうなの……

「仕事は増える一方で、長い休みが取れなくて 出会いも無く……このままじゃあ 私、数年後には「私は仕事に人生捧げてるの!」なんて言っちゃう人になりそうだわあ……」

「…先輩、何故そんなことを私に言うんですか……?」

「ステルク君が イイ人知ってたりしないかなーって思ってる」

「知るわけないですよ、そんなもの」

「えー、ひどーい」とブーブー言うエステイを横目に見ながら、ステ

ルクは この場を離れようと思い 『演習場』に鍛練でもしに行くか
：』と考え始めた その時、ふと視線を向けた 街へと続く扉のほう
から、見知った顔がこちらにむかつて来ているのを見た

「エステイさん、おはようございます！ あつ、今日はステルクさんも
ここにいますね。おはようございます！」

「おはよう、マイルス君。元気そうで何よりねー」

「その元気を私にも分けて欲しいわー」と心底羨ましそうに言うエ
ステイを 少し呆れ気味に見ながらも、ステルクも挨拶を返した

「ああ、おはよう。…私は特に用があるわけじゃなく、先輩の愚痴に付
き合わせさせていてな……」

「あら、ステルク君？用が無いなら 書類仕事手伝ってくれる？」

「見せられないような重要な案件もあって言っていたのは 何処の誰
でしょう？」

「むっ……」

「あははは…… ふたりとも大変そうですね」

マイルスがそう言っつて話を流したことで、ふたりのにらみ合いも
一応は落ち着いたようで、マイルスは軽く安堵の息をはいた

「そういえば マイルス君は何のようだったの？依頼？」

エステイがそう尋ねると、マイルスはハツつと何かを思い出したよう
な顔をし、手に持つカゴから何かを取り出し……それをエステイに手
渡した

「……？なにこれ？」

手渡された 布に包まれたものを見て、エステイは首をかしげなが
らマイルスの問いかけた

「お弁当です！」

「へえー…お弁当…：…ううえ!？」

突然声をあげて驚くエステイ。その声にマイルスは驚かされ…：…そばで話を聞いていたステルクは二重の意味で驚かされていた

「ちよつ、なんでお弁当!？」

そうエステイが聞くと、マイルスはいたっていつも通りの様子で「それはですね」と答えた

「ほら、前に エステイさんが鍛練に参加した時があつたじゃないですか。その時エステイさんが「鍛練の時にこんなもの食べてるステルク君羨ましい」みたいなことを言ってたのを思い出して…」

「それで…」とニツコリ笑顔で言うマイルスだったが、急にシヨンボリしてしまった

「もしかして、もう お昼の準備 出来てたりしましたか…?」

「ううん、そんなことないわよ!むしろ嬉しくて また貰いたいくらいよ」

「そうですね!よかつた…。あつ、もうひとつありますから、良かつたらステルクさんもどうぞ!」

「あ、ああ、ただこつ」

「それじゃあ 夕方にまた来ますから、そのときに包みと容器は回収しますね!」と言って『王宮受付』を去るマイルス。その背中を見送っていたエステイとステルクだったが、その時…

キュピーン!

と、何かがひらめくような効果音を ステルクは幻聴し、それが聞こえた気がした方向…エステイのほうへと顔を向けた

「仕事に真面目だし、安定して結構稼いでるっぽいし、優しいし、頼りにできるくらい腕もたつし、無駄遣いしたりしている様子も無い(ブツブツ)」

「エステイ先輩…：…?」

「顔は童顔っぽいけど整ってる部類だし、身長は……まだ成長期よね？ 私からも手を入れて ちゃんと育てれば……、ということは マイス君って 実はかなりの優良物件!？」

「先輩、さすがに歳差を考え……又ウオウ!？」

何かがきらめき、ステルクは反射的に身をそらせた。それとほぼ同時に、コスツツという小気味いい音が聞こえ、ステルクの後ろにあった柱に 小型のナイフが突き刺さった

「ごめんあそばせ、手が滑ったわ。……ってどうか、ステルクくんだったって人のこと言えないんじゃないの？」

「なっ!? 私が彼女を護衛しているのは、騎士として 街の外に出る人を護衛しているだけで、別にそういう気など……!」

「あら? 私は「誰」とは言わなかったんだけど……ステルク君は随分と具体的な相手の想像ができたみたいねー。いやあ誰なんだろうーなー? (ニヤニヤ)」

「つーー!?!し、失礼する!!」

ステルクは小走りで何処ぞへと去っていき、残されたエステイはひとり笑みをうかべた

「ふっふっふ! マイス君……その時が来るまで 清く健やかに育ちなさいー!」

『王宮受付』に高笑い響き……たまたま通りかかった大臣によってエステイは怒られた

ホム編《前》

おつかいからの帰り道。ホムは一人、街道を『アーランドの街』へと歩き続けています

数日間、街から離れていましたが、遠目に見えてきた街の様子は特に変わったところは無さそうでした

……まあ、ほんの数日で目に見えて変わるようなことがあれば、大事なのですが……

そのまま歩き続けていると、ふと、街道からそれた脇道が見えま
た

それは、ホムも利用する道……おにいちゃんマイスが暮らしている家がある林への小道

今はお使いの途中でなおかつ荷物も多いため、なーに会いに行くのも難しいと判断し、おにいちゃんの家に寄るといふ考えは止めになりました

でも名残惜しさに似た感覚が少なからずあったため、歩きながらそちらに目を向けていたのですが……ふと、小道を通って林の暗がりから人が出てきたことに気がつきました

ただその人物は、ホムが最初に思い浮かべた人物……おにいちゃんではありませんでした。ですが、知らない人物だったというわけでもありません

あの服装、それに黒い長髪と遠目でもわずかに確認できる眼鏡……その他諸々の要因もありますので、間違えるはずはありませんでした

「ん？ホムか」

ホムに気がついたその人物……グランドマスターの言葉に、ホムは明確に返事を返します

「はい、グランドマスター」

「こんなところで会うとは奇遇だな。なんだ？何処かに採取にでも

行っていたのか？」

「マスターからのおつかいで、『ネーベル湖畔』こはんのほうまで採取に行っていたよ

「あそこか……。ロロナは『泡立つ水』か『虹珊瑚』にじさんごあたりでも欲しかったのかもね

グランドマスターは、そう言いながらホムの持つカゴのふたを右手で少し上げ、中の素材を値踏みするように観察していました

もしかしたらグランドマスターは、何か自分が使いそうなものが無いか、確認しているのかもしれませんが……。が、どうやら何もなかったようで、そのままカゴのふたから手を離して閉じました

「ところで……。グランドマスターはおにいちゃんの家に行っていたのですか？」

「ん、まあな。とは言っても、奴は留守だったのだが……」

そう言いながら、グランドマスターはその左手に持っている小さめの麻袋を軽くあげて見せてきました。わずかながらカチンツと高い音が聞こえたため、少なくともその人の頭程度大きさの袋の中には、ビン類が複数個入っていることが推測できました

「それは？」

「収獲物だ」

グランドマスターはそう言って口角を少し上げ、ニヤリといった感じに笑いました

……。 「収獲物」と言われると、おにいちゃんマイスの家であることも相まって野菜や果物もしくは薬草などが連想されますが、先程の音からしても、そういうモノではないように思えます

おそらくはグランドマスターが時々しているという、おにいちゃんの家にあるものを無断持ち出しでしょう。なので、収獲物というよりは戦利品……。いえ、盗品とでもいうべきものでしょう

……。ですが、以前、おにいちゃんからこの話を聞いた際には、おにいちゃんは「困ったものだよー、あははは」と笑い話のようにしていましたし、黙認に近い様子でしたので、そこまで問題となるようなこ

とでは無いのでしょうか

「奴の作るものには興味が引かれるものが少なからずある。中でも薬品系のものは特にな」

「そうなのですか？ ホムは、むしろその方面はグランドマスターの知識の範疇なのだと思います」

ホムの言葉に、グランドマスターは「そうでもないさ」と首を振ってみせました

「もちろん、私が全く理解出来ないほど飛び抜けたものがあるわけじゃない。だが、中々のものだぞ？ 特に農業用の薬品に関しては、私の想像以上に種類があったな」

農業用……確かに、おにいちゃんには最も関係が深そうなものです。実際に使っている場面を見たことはありませんが、きっと知らないところで活用していることでしょう

……ホムはそう考えていたのですが、どうやらグランドマスターが目を付けたのは別の点だったようです

「一番興味深いのは、薬品の種類が傷薬や解毒薬などの「戦闘用」とさつき言った「農業用」の二種類がほとんどを占めていたことだ。他のものも数個ありはしたが、あまりにも少なかった。これは奴だったからそうなのか、それとも奴が前にいたという世界がそういう傾向にあったのか……」

グランドマスターが気になっているのは、どうやら薬品そのものというよりも、そこから読み取れるおにいちゃんが元いた世界の技術や文化のほうだったようです

それがグランドマスターの研究の何かしらに役に立つのか……それとも、ただの単なる興味本位なのか……それはホムには計り知れない事です

……それにしても、グランドマスターはいつの間におにいちゃんが別の世界から来た……らしいことを知ったのでしょうか？ やはりこの様子だと、おにいちゃんがあのモコモコした子であることも、知っていても不思議ではありません

そして、それとは別に気になったことがあったため、ホムはグラ
ドマスターに問いかけてみることにしました

「グランドマスター。あちらのことが気になるのであれば、おにい
ちゃんに直接聞いてみればいいのでは？」

「それでは暇潰しにならないだろう？なにより、面白くない」
「なるほど。納得しました」

「まあそもそも奴は一度記憶喪失をして、まだ完全に回復していると
は言えない状態だからな。聞いたところで、肝心な部分が抜けてい
りして逆にモヤモヤしてしまうことだろう」

付け加えられた内容で、さらにホムは納得しました

「時に、ホムよ」

「何でしょう？グランドマスター」

「前々から気になっていたんだが……何故、お前は奴を「おにいちゃ
ん」と呼ぶんだ？」

グランドマスターが眼鏡の位置を直す仕草をしながら言った言葉
に、ホムは少し首をかしげてしまいました

別段難しい質問だった、というわけではありません

思い返せばその理由もすぐにわかりそうなくらいなのですが……

何故かホムは、その質問を不思議に思ってしまったのです

わずかに出来てしまった沈黙の時間

そこでグランドマスターが何を思ったのかはわかりませんが……
ホムが口を開く前に、グランドマスターが一足早く口を開きました

「ホム、命令だ。お前は今しているおつかいが終わったら、その理由を
考えろ。わかったな？」

「わかりました、グランドマスター」

ホームが返事をする、グランドマスターは「では、門のあたりまで共に帰るとしようか」と歩きはじめました。ホームはその数歩後ろをついて行きます……

|||||

「ネコの一件で、本来ありえないはずの『感情』の芽生えがあったから、あるいは……。しかし、面倒な方向に転がらなければいいんだが……」

「……?どうかしましたか、グランドマスター?」

「いや。なんでもないぞ、ホーム」

|||||

ロロナのアトリエ

「ただいま帰りました」

「あー。おかえり、ほむちゃん」

何故かアトリエには帰らずに他所へと行ってしまったグランドマスターと別れ、一人でアトリエに帰りついたホームを出迎えたのはマスターでした

調査の最中のようで、釜をかき混ぜ続けながら顔だけこちらを振り向いてきました。集中が乱れてしまわないか少しだけ心配でしたが、どうやら問題無いようで、釜の中の反応は正常に行われているました「ちよつと待ってねー。もうすぐ終わるから」

そう言ったマスターは再び釜のほうへと視線を戻します

ホームはその間に軽く身なりを整えて、その後に採取してきたカゴの中身を種類・品質ごとに整理し始めます

ホームが整理の作業を終えたのとほぼ時を同じくして、「できたー!」というマスターの元気な声が聞こえてきました。どうやらマスター

の調査も終わったようです

「おまたせ、ほむちゃん。採取、どうだった？ 何か危ないこととかあった？」

「いえ、問題はありませんでした。採取したものはこちらです」

ホムが採ってきたものを確信しだすマスター。同じ確認でも、街道でグランドマスターがしていた時とは随分と雰囲気違います。やはりマスターが鼻歌交じりでしているからでしょうか？

「……うんっ！ いっぱい採って来てくれたんだね！ ありがとう！」

「いえ、ホムはホムの役目を果たしただけです」

「そんなことないよー。えらいえらい」

そう言ってマスターはホムの頭を撫でました

「ふんふーん……あれ？」

「……？ どうかしましたか？」

「なんだかほむちゃん、少しだけ眉間にシワが寄ってて……もしかして、嫌だった!？」

マスターはホムの頭の上に乗せていた手を引っ込めて、困ったような、申し訳なさそうな表情になりました

「そういうことはなかったのですが……」

撫でられるのは、特別好きでも嫌いでもないくらいで……でも、マスターはホムの眉間にシワが寄っていると言いました

「じゃあ、お腹が痛いとか？」

「ホムの身体に異常はありませんが？」

「ほか……ほか……何か悩み事？」

「ホムに悩みは………あつ」

「無い」と言おうとしましたが、寸前のところで思い当たる事がありました。ですが、悩み事とまで言えるかどうかは微妙なのですが……「何かあるんだね！ わたしに言ってみてよ！ ほむちゃんの悩みかあ……うーん、何だろう？」

「実は、グランドマスターから少し変わった質問をされて……」

「師匠から？」

予想外だったのか、マスターは少し驚きながらも興味深そうにしています

「おにいちゃんのことを何故「おにいちゃん」と呼ぶのかを聞かれました」

「ふんふん……えっ、それだけ?」

「はい。それだけです」

「え、ええー?」と、先程までの勢いが空回りしてしまったようでマスターは気が抜けてしまい、全体的に力が抜けてしまったようです。なんだか、だるーんっとしています

「それって、確かアレだよな? ほむちゃんがわたしの妹のような存在で、わたしがミス君の事を弟みたいに思ってるから「ほむちゃんからするとミス君はおにいちゃんになるのかなー」って話……だよな?」

（『ロロナのアトリエ編』タントリス「あんまり気は進まないな……」参照）

「はい。マスターの感じたものから、そう導き出しました」

「それじゃあ、別に何にも……あつ、そっか! あの時、わたしが「師匠には内緒にしてね」って言ったから、言えなかったんだ」

手をポンと叩いて納得するマスターでしたが、それは違うのでホムは首を振り否定します

「いえ、ホムに対する最終的な権限は生みだしたグランドマスターにあるので、伝えることは可能でした」

「えっ? それじゃあ、あの時の口止めってあんまり意味がなかった?」

「秘密にする対象がグランドマスター以外であれば、効力はありませんが……」

ホムがそう言うと、マスターは「そんな〜」と肩を落としてしまい

ました……が、すぐに顔を上げてキョトンとします

「あれ？それじゃあなんで困ったの？ さっきの話をすればいいだけなんじゃあ……？」

「そうなんです……でも、ホムはその質問を不思議に思ってしまったのです」

理由はわからないわけではありませんでした。でもあの時、ホムの中では一瞬真っ白になったような……変な空白のようなものができてしまっていました

「おそらく、グランドマスターによる予想外の質問に、ホムの一瞬思考が停止してしまったのではないかと思っっているのですが……。でも、今、改めてあの問いについて考えても変な感じがします、どうしてでしょう？」

「うーん……」

マスターはうなりながら首をひねり、ホム以上に悩みこんでしまいました

……そして、少ししてから、ゆっくりと口を開きはじめました

「師匠の質問が予想外だった、っていうのは、たぶん……たぶんなんだけど理由はわかる気がする」

「本当ですか？」

「きつと、ミス君の事を「おにいちゃん」って呼ぶのが、ほむちゃんにとつて当たり前のことになってたんじゃないかな？ だから「どうして？」って聞かれても「えっ？」って逆に疑問に思っちゃったんだと思うよ？」

マスターにそう言われて、ホムは納得しました

確かに、慣れというものがあつたかもしれない。そして、それについて問われると疑問に思ってしまう……というのも、わからなくはありません。理解できる事象です

「……そうなる、あの問いに未だに感じる変な感覚はなんなのでしょう？ 何か関連が……？」

「無くは無さそう……かな？ でも、よくわかんない」

そう言うと、マスターはまた悩み込んでしまいました……

それにしても、困りました

知っていることに対しすぐさま答えられないとなれば、それは大変な欠陥となります。そしてその欠陥は、ランドマスター、そしてマスターのために働くというホムの役目が十分に果たせなくなるということに繋がりがありません

仕方がないので、マスターに今現在の仕事の進行状況に問題が無いを確認し……、余裕があるそうなので、このことについて考えるために時間を貰うことにしました

何故「おにいちゃん」と呼ぶのか、その理由を考える……

ランドマスターから出された命令のために、ホムは再び考え始めました

何か、この感覚の手掛かりがあれば……

マイスの家・作業場

「というわけで、来たのですが……何かわからないでしょうか？」

「うん………どういこと？」

「なー？」

そうやって呆けた顔をしているのは、『薬学台』と呼ばれるらしい机

の前のイスに座っているおにいちゃん。……おそらく、グラントマス
ターとは入れ違いで帰って来て、いつの間にか無くなっている薬品を
補充するために調査をしていたのだと思います

そして、ホムの腕の中にはなーがいます。さつき、『作業場』に来る
前にリビングダイニングのほうで見つけたので、抱き抱えてここまで
来ました

とりあえず、ちゃんと話をするためにここまでの事の流れを説明し
たところ……

「いやー…、そもそもの呼ぶようになった原因、今初めて聞いたんだけ
ど？」

「そうだったでしょうか？」

「うん。呼ばれ始めた頃に「何で？」ってホムちゃん聞いたことはあつ
たけど、教えてくれなかったし」

言われてみれば、そんなこともあつたような気がします。うつかり
していました

……まあ、それは大した問題ではないと思うので、話を進めていっ
てほしいです

「でも、なんで僕に聞くの？」

「この件の当事者は、ホムとおにいちゃんなので」

「いや、ホムちゃんの気持ちの問題なんだし、ホムちゃんだけなんじゃ
……」

困ったような顔をしてそう言うてくるおにいちゃんですが、そんな
顔をしたのはホムのほうだと主張します

自分自身のがよくわからなくなるなど、困ったことです。その
うえ、これからの活動に支障をきたしてしまうとなればなおさらです

「何かわかりませんか？」

「えっと、質問を質問で返しちゃうんだけど……なんで、ロロナは「お
ねえちゃん」じゃないの？ さつきの理屈だと呼びそうなんだけど」

「それは、グランドマスターから禁止されているからです。ついでに丁寧口調以外も禁止されています」

「禁止？　なんで？」

「グランドマスターが言うには「私の事を「お姉さま」と呼んでくれないのに、自分のことをホムに「おねえちゃん」と呼ばせるのは……ズルいぞ！」とのことですよ」

「えええ……」

また困った顔をするおにいちゃん

……ちゃんと、ホムのこの感覚の原因を考えてくれているのでしょうか？　少し不安になります

そう思ったホムでしたが、その不安をよそに、おにいちゃんはアゴに手を当てて何かを考え始めました

そして……

「……名前で呼びたくなかったから？」

「期待したホムが間違いだったのでしょうか？　過去最大の落胆を感じました」

ホムがそう言うのと、おにいちゃんは「あははは……」と苦笑いをしました

「そこまで言われると、さすがに落ち込むかも……。でも、僕はそうかかって思ってたね？」

妙に自信があるおにいちゃんを変に思いながらも、ホムは首をかしげてみせておにいちゃんに言葉の続きをうながしました

「ホムちゃんに「おにいちゃん」って呼ばれ始めた頃、実は僕、むずがゆいっていうか……かなり違和感があったんだよね。正直なところ、あんまり好きじゃなかったかも」

それは初めて知りました。……なんだか笑って誤魔化している気はしていましたが、そんなふうに感じていたとは

「でも、いつの間にか慣れちゃって。おかげで今じゃあ逆に「マイ

ス」なんて呼ばれたほうが違和感があり過ぎるくらいになっちゃってるかな。……もしかしたら、ホムちゃんにも似たような感覚があるんじゃないかなって」

「ホムにも、ですか？」

そう疑問を口にする、おにいちちゃんからは「かも、ってただだよ」とこれまでよりも自信のなさそうな返答がきた。……ということは、やはり「慣れ」からくるものなのでしょうか？

でも、最初に思っていたよりもホムには「確かにそうかもしれない」と思えるものでした

おそらく、今でも出会った頃、例えば……今ホムが抱き抱えているなーをホムが拾い、グランドマスターに元いた所に捨ててくるように言われた時。まだ子供だったなーを中々捨てられなかったホムがおにいちちゃんと会ったのですが、あの時は「マイス」と呼んでいました。ホムは、今でもあの時のようにおにいちちゃんのことを「マイス」と呼ぶわけではないでしょう

……ですが、何故か、こう……胸のあたりに穴があいたような、変な感じが……違和感があります。……こういうことを「喪失感そうしつかん」というのでしょうか？

本当に、何故だかわかりませんが……想像しただけでも感じるその感覚が、ホムにはとても嫌なものに感じられました

「……………ちゃん……ホムちゃん？大丈夫？」

「……………はい問題ありません」

どれくらいの間、考え込んでいたのでしようか

気づけばおにいちちゃんの顔が先程よりも近くにありました。ホムの腕の中のなーも、心なしか心配そうに見上げてきているような気がします

そして、思考に浸ってしまっていたホムを心配したのか、いつの間にかおにいちゃんがホムの両肩に優しく手を乗せていまして

「急に黙って、苦しそうな顔してたけど……本当に大丈夫？」

心配するおにいちゃんに再び「大丈夫」と伝えようと思いました……それは、途中で止まってしまいました。他でもない、おにいちゃんの手によって

ホムの肩に乗っていたおにいちゃんの手

その片方、右手が離れてゆき……そのままホムの頭へとゆきます
ヘッドドレスを避けながら動くおにいちゃんの手は、ホムのことをよく撫でるマスターとはまた違った何かを感じられました……

「……おにいちゃん」

「ん？どうかした？」

「もう少しだけ、こうしていてももらえないでしょうか？」

「……いいよ。ホムちゃんは、いつもお仕事がんばってるからね」

「かわりに、後からモコモコしたおにいちゃんのブラッシングをしてあげます」

「えっ……？ それ、必要かな？」

「必要です」

ホム編《後》

|| || || || || || || || || ||

コロナが3年間『王国依頼』を達成し終え、マイルスが旅行を終えて他の人たちに農業を教え始めてから、少し経たったころ

街の人たちから信頼を得たこともあって、依頼が舞い込んでくるようになった『コロナのアトリエ』。時には依頼が多く集まり過ぎてコロナたちは時間に追われることもあり、誰かに手伝って貰うこともそんな日々の中であつても、ときどき依頼の数・期限に余裕があり、休暇を取る事が出来る日もあつた
これはそんな日のできごと……

|| || || || || || || || || ||

マイルスの家

普段は部屋の中央のあたりに置かれているテーブル。それが今日は玄関のあるほうの壁の窓の方へと寄っていた。ソファアは定位置から移動していないものの、2つのイスはテーブルと共に窓際に寄っている

そのテーブルの上にあるのは、ティーポット、ティーカップ2つ、そして食べ途中の『パイ』が2つだった

「むく……」

「…もう、さつきからどうしたのよ」

イスに腰かけて窓から見える外：マイルスから農業を学びに来た人たちのために新たに拓ひらかれた畑のほうをじーっと見つめ続けているコロナに、対面する位置のイスに座っていたクーデリアが声をかける「せっかく『パイ』を作って遊びに来たのに、マイルス君……」

「約束も無しに来たら、こうもなる可能性も十分に考えられたことでしょ。あいつだって忙しくなってるんだから。諦めて、こっちはこっ

ちでゆつくり食べましょう」

そう。コロナはホムと一緒に『パイ』を作り、マイスの家へと出かけたのだ。その際にたまたまアトリエを訪れたクーデリアも一緒に行くこととなったのだが……

着いてみれば、マイスは農業を教えている人たちに対し、本格的な指導に入りだしたところだった。さらに間の悪い事に、指導を終えた後の軽食のために人数分の『クツキー』をすでに用意しているのと、コロナとしては残念な状況となってしまうのだ

「あつ、そろそろ作業が終わりそう？」

「でも、あいつはこっちに来ないと思うわよ？　性格からして、教え子たちに外で『クツキー』を食べさせておいて、自分だけ『パイ』を食べに家に戻るってことはしそうにないでしょ？」

「うー……」

……なら、帰らないのか？

何故、わざわざマイスの家でふたりで『パイ』を食べているのか？

それには色々理由があるのだが……

その中の一つが、ちようど作業を終えて『クワ』や『ジョウロ』といった農具を一か所に片付け終えた見習いの人たちが行く、手などを洗うための水場のある井戸近くに待機している、真新しいタオルを人数分用意して待っているホムだった

コロナたちと一緒に来たホムだったが、忙しそうに指導をしているマイスを見てすぐに「ホムもお手伝いします」と自ら買って出たのだ

農作業での汚れを粗方流し終えた見習いの人たちにタオルを渡し終えたホムは、畑と農具の最終確認のために少し遅れて来たマイスに最後のタオルを渡す

「あつー！」

「っ!?　ど、どうしたのよ、いきなり」

「マイス君、またほむちゃんに「おにいちゃん」って言われてた。うう……やっぱり、ちよつとズルい……」

「ずるいって、かなり前からずっとそう呼んでたじゃない。何を今さらいつてるのよ」

そう言いながらティーカップを傾けお茶に口をつけるクーデリア。そして、のどを潤うるした後、再び口を開いた

「それに、あんたも「おねえちゃん」って呼ばせればいいじゃない」「師匠がほむちゃんに禁止って言ってる、師匠が旅に出てからお願ひしても呼んでくれないの……」

実に……実に残念そうにするロロナ

そんなロロナを見て苦笑いをしてしまうクーデリアだったが、何を思ったのかふと首をひねり、ロロナに問いかけた

「でも、それってマイスのことは「おにいちゃん」って呼んでもいいってことなの？ アストリッドあがこの事を知らないとは思えないんだけど……？」

「ああっ、それはー……ちよつと前に色々あったみたいで。師匠がほむちゃんに「何で「おにいちゃん」と呼ぶのか、考えてこい」って言った事があったみたいで……そこで、許可が出たみたいだよ」

「その場にわたしはいなかったんだけど、後からほむちゃんから聞いたの」と付け加えるロロナ

その時には話が回ってこなかったため知らなかったため、そのことを知らなかったクーデリアはというと、「へえー」と興味があるのか無いのかわかり辛い返事を返していた

「ええつとね。ほむちゃんはわたしとかと話した後、すつごく考えた上で答えたらしいんだけど……その、「呼びたいと思ったから呼んでいる」って師匠に言ったららしいの」

「……それ、答えになってるの？」

「わ、わからない……けど、師匠からはOKがもらえたってホムちゃんに言ってたよ。……あっ、あと、師匠に「もし、呼んではいけないのであれば、おにいちゃんにグランドマスターのことを「お姉さま」と呼ぶように頼みますので、どうか呼ばせてください」って言ったら「私

にそんな趣味は無い！」って返された…とも言ってたよ」

「……どこからツツコめばいいのかしらね、それは…？」

眉間にシワを寄せ、おでこのあたりに手を当ててため息をつくクーデリア

「ま…まあ、師匠の感性とか基準がよくわからないのは、今に始まったことじゃないし……」

そう言いながら、ロロナは窓の外を改めて見て……ピタリツとその動きを止めた

それを見てクーデリアは「今度はどうしたのか…」と、クーデリア自身も外を見た

そこには、手などを洗い終え、畑のそばの草原に腰をおろした見習いの人たち。その人たちに一人分づつに分けた『クッキー』を配っているマイルスと……その後ろについて行き『お茶』を配っているホムの姿

特に驚く光景でも無かったがなんとなくではあるものの、クーデリアはロロナが何を考えているのかを察した

「……ああして後ろを付いてまわってるのを見ると、仲が良い兄妹にも見えなくはないわよね、あの二人」

「わ、わたしとほむちゃんでも、きつとそう見えるよ!？」

「あんたにとってなると……一緒に調合作業してる印象があつて、「仕事仲間」とか「部下と上司」っていう感じが強い気がするわ……」

「……うん。ごめんね、わたしも最初のことからそんな気はしてた……」

マイルスの家・前

ロロナとクーデリアがそんな会話をしている中、『クッキー』と『お茶』をそれぞれ配り終え2人分だけ手元に残ったマイルスとホムは、お

互いに『クッキー』と『お茶』を1人分受け渡した

そして、マイルスが草原に腰をおろし、そのそばにホムも座った

「それじゃあ、僕らも食べよっか」

「はい」

そう言ったふたりのそばに……正確には座っているホムの膝の上に、何処からか現れたネコ・なーが飛び乗った

「……なーも『クツキ^こキ^れ』が欲しいのですか？」

「なく」

「そうですか。では」

ホムは手元の『クツキ^こキ^れ』の一枚をなーが半分に割り、その片割れを手に平に置いて膝の上のなーの顔の前へと差し出した

跳びついたりすることもなく、なーは行儀よくゆつくりと食べ始める

「ほむちゃん」

「……おにいちゃん？　どうか…ハムツ」

名前を呼ばれて、なーから目を離し、顔だけマイルスのほうを向いたホムだったが、その口に何かが入れられた

「モフ……モフ……んっ。……どういことでしょう？」

「あははっ、なーに食べさせてあげている間はホムちゃんは食べ難そうだなんて思っ。あと、なーにあげた分、ホムちゃんの『クツキ^こキ^れ』が減っちゃったから僕のを分けてあげたくってね」

「そう、ですか。……ありがとうございます」

「どういたしまして」

そう言っ、マイルスは次の一枚を自分の口に運んだ……のだが、ホムの視線が未だにマイルス^{自分}へ向いていることに気付き、首をかしげた
「……？　もしかして、顔に『クツキ^こキ^れ』のかけらか何かがついちゃってる？」

「いえ、そうではなく……ただ、おにいちゃんもホムの事を何か別の呼

び方をすればいいのでは？…と思っただけです」

「別の呼び方…？」

「妹」、「お前」、もしくはあだ名……いえ、やっぱりホムのごことは「ホムちゃん」のままでもいいです」

少し考え込んだホムだったが、自分で言ってみてしつくりこなかったのか、すぐに前言撤回した……が、

「わかったよ。……いい、妹ちゃん？」

「……ですから、「ホムちゃん」のままでもいいと……」

「わたしも、師匠みたいに禁止令出してみるべきかな…？」

「やめてあげなさいよ。いちおう、あんたが二人のお姉さんなんですょ。」

「うう……でもー」

ファイリー編《前》

「ねえ、ファイリー？」

「は、はいい……」

わたしの前にいるのはお姉ちゃん。ものすつごく怒ってる……けど、それと同じくらい呆れているみたい

「今回はいきなりではあったけど、そう難しい事じゃなかったはずよ」
お姉ちゃんが言っているのは、私に時々言うてくる「おつかい」の事

何を考えているのかはわからないけど、お姉ちゃんは時折、「くしてこい」「くうをくまで買って来い」とか、そういった命令をしてくることがある。それらはだいたい知らない人たちと話したりしないといけない無理難題で、私には難しい事ばかりだった

そんな「おつかい」のおかげでミス君と知り合えたわけだから、大っ嫌いってほどでもなかったりはするけど……

それに、ミス君が手伝ってくれることもあったし……

「聞いてる？」

「はいい!？」

お姉ちゃんの凄みのある声に、飛び上がったしまう

「今回は『王宮受付』に物を届けるっただけで凄く簡単だったのに、何で騒ぎを起こすくらい大事にしちゃうのかしら」

そう、今回の「おつかい」は至って単純。お姉ちゃんがわざと家に忘れたお弁当を、お姉ちゃんが仕事をしている『王宮受付』に届けるだけだった

わざと……というのは……朝、お姉ちゃんが仕事に行くのを見送った後のこと

ミス君の家に行ってみようか、リオネラちゃんが人形劇をしそう

な『広場』のほうへと行ってみようか考えながら、身支度を整えようと自分の部屋に戻ろうとしたところ、テーブルの上に見覚えのある包みがあった

それは、お姉ちゃんが職場に持っていくために用意していたお弁当。私はついさつき家を出たお姉ちゃんをすぐに追いかけるべきかと悩んだ……

……けど、そんな私の目に、包みのそばに置かれていた紙が写った。その紙には……

『お昼頃に持って来て！ エステイ』

……それを見た瞬間、「おつかい」なんだと気がついた。お姉ちゃんの名前のそばに小さく書かれている『がんばれ！』という文字が、むしろ私のやる気を削いでいた

でもそれ以上に、これを無視して何もしなかったら大変なことになることぐらい、私もわかった。……どうなるかは、これまでに何回も体験してるから

そんなわけで、身なりを整えて昼前に家を出て『王宮受付』へと向かったんだけど……たどり着くその寸前で私の「おつかい」は失敗に終わってしまった

「だ、だって……あの人が、私が前にぶつかったのをまだ怒ってて、凄いい目つきで睨んできてたから……」

そう、前にマイルス君に手伝って貰った「おつかい」の時に『王宮受付』の近くでぶつかってしまった騎士の人……その人とまた、今日『王宮受付』の手前で会ってしまった。それも怖い顔で私をジーツと見た

「だからって、その場で倒れることはないでしょ……。おかげで大騒ぎになるわ、お弁当の中身は中でグチャグチャになるわ、ステルク君は落ち込むわで大変だったんだからね」

そう言ったお姉ちゃんは、今日の内で一番大きなため息を吐いた
「大体あんたはねえ……」

マイスの家

「……つていうことがあったの」

「へえ、そんなことが……」

お姉ちゃんの説教をなんとか耐えた私は、逃げ込むようにマイス君の家へと行つてた

そして、定位置に置いたマイス君とお愚痴交じりの喋りを今まで続けていた

「いくら家からそう遠くないとは言つても、知らない人もたくさんいる『王宮受付』に一人で行くのも悩んだりはしたけど、ちゃんとして行こうとしたんだよ？　なのにお姉ちゃん、ずーっと私の事を怒り続けて……」

「エステイさんは、怒り続けちゃうくらいファイリーさんに期待してたんだよ。それだけ、ファイリーさんの変化を感じてたんじやないかな？

だから、その分、強く言つちやつたんだと思うよ」

「だからつて……うう、全部、あの怖い騎士さんのせいなんだ……」

「……ステルクさんも大変だっただろうなあ」

マイス君は小声で、私じゃなくてその騎士さんのことを気にかけた呟きをこぼした

それにちよつとだけムツつとしてしまった私は、無意識のうちにマイスくんを抱きしめている腕にちよつとだけ力を込めてしまつていた。……けど、腕がフワフワの毛に埋まつただけで、マイス君自身にはそこまで影響は無かつたみたい

……というのも、今、マイスくんはモコちゃんの姿になって、ソファーに座っている私の膝の上に座っている。そして、そんなマイス君を抱きしめるようにして私が手を回しているのだ

これはモコちゃんがマイス君だと知らない頃からやっていた体勢なんだけど、特にモフモフするのに向いている。……でも、最近はお話する時もこうしていることが多い

私が、抱きしめた腕でモフモフを感じていたところ、マイルス君が少しだけ顔を後ろにいる私のほうへと向けて問いかけてきた

「ねえ、まだ人と話すのは苦手なの？」

「……うん。まだちよつと……。リオネラちゃんや、あと、このあいだの王国祭の時に会ったロロナさんくらいならまだ話せるんだけど……知らない人、特に男の人はやっぱり怖くて……」

「そっか……。でも、間違いなく僕と初めて会った時よりもお話しできるようになってるから、この調子でゆつくりと人見知りを克服していけばいいと思うよ」

マイルス君はそう優しく私に言ってくれた

私だって、自分が人見知りだということにはわかってる。人と話すのはだいのりがてなんだから……。でも、少しだけでもなんとかしようって気持ちもあるにはある

けど、やっぱり、一番の問題はお姉ちゃんなんだよね……。人見知りの私に無茶を言うってくるのもお姉ちゃんだし、私にあれこれ言うってくるのもお姉ちゃんだけだし……。ううっ、でも、無視とかわしてしまふのはやっぱり怖い……

「そういえば……。マイルス君って、前にもこんなことをしたことがあったりするの？」

「えっ、こんなことって？」

「私みたいな子の相談にのるっていう感じのこと。……なんだか、思い返してみると慣れてるといふか、初めてモコちゃんと会った頃からここまでマイルス君が全部計算してるんじゃないかなーって思えちゃって……」

これまでの付き合いで、マイルス君が表裏がほとんど無い人だっということはなんとなくわかってる。裏……。というか隠し事も、ハーフであることとこの世界とは別の世界の存在についてくらい

そんなマイルス君だから、計算高く生きてるなんてことは無いとは思うけど……。マイルス君に出会ってから友達もできたし、私の周りの環境

は一部を除いてどんどん良くなっていると思う。だから「もしかして……」って思ってしまった

そんな考えの中で私はミス君に問いかけたんだけど、私の膝の上のミス君は首をかしげていた。完全には振り返っていないため、どんな顔をしているかはわかりづらいけど、声からすると少し笑っているみたいだった

「計算だなんて、僕には出来ないよ。基本的に全部思い付き。……まあ、似たような経験があるとえばあるんだけどね」

「えっ、やっぱり?」

「うん。むこうでね。でも、状況も手段も違うけど」

ミス君の言った「むこう」っていうのは、ミス君が元々いた世界：『魔法』普通にあつたり、色々そことは違う世界、その『シアレンス』という町のことだろう。ミス君が『ハーフ』であることや『魔法』のことを詳しく教えて貰った時に少しだけ聞いたことがある

「えっと、その子って人見知りがおつたの?」

「うーん、たぶん。少なくとも、噛みついてこなくなったかな……」

「ふえ!? か、かか噛みつく!?!」

つい聞き返してしまった私に、膝の上のミス君は「うん」と至って普通に答えた。……そんなに落ち着いて答えられることなの?

「その子は、何を話せばいいかわからなくなって、つい口が出ちゃう子だったみたいでさ」

「……口が出ちゃうって、普通、思ったままの言葉が出てくるとか、そういう意味じゃなかった?」

「あははははは……。とにかく、その子のことはその子のお姉さんと協力して人見知りをなおそうとしたんだ」

ここに来て、意外な情報が出てきた。その人見知りの子は私と同じでお姉ちゃんがいるらしい

……でも、きっと私のお姉ちゃんとは違って、きっと優しいお姉さん何だろうなあ……

「そ、それで、そのお姉さんとどんなことをその子にしたの？」
「ええつとね、確か……」

膝の上のマイス君が、少しのあいだ小さく「うーん」と声をもらした。たぶん、その時のことを思い出しているんだろう

「100本のバラの花束を用意して、待ち合わせ場所に行つて……そこから、その子の王子様になって、氷の花や滝を見に行ったり、お花畑にお散歩にしに行ったり、夜に星を見に行ったり……」

「……………」

「……？ フィリーさん、どうしたの？」

「なにそれ!!? すごく楽しそうなんだけど!!」

「え、ええつ!!」

だって、話を聞くだけでもロマンチックな感じだし、場所も色々あつて充実しているみたいだし……

というか、それって人見知りをおすとかそういう話じゃなくて、ただのデートなんじゃ!!? しかも、バラの花束とか王子様とかどう考えても気合入り過ぎ!

……………あれ?

そうになると、その子とマイス君つてもしかして……

「もしかして……その子って恋人なの!?!」

「違うから落ち着いて! というか、どうしてそうなるの!?!」

「だって、バラの花束とか王子様とか、どう考えてもそうとしか思えないよ!」

「いやいや、それはいくらなんでも考え過ぎじゃないかな」

そう言つてマイス君は、困つたように笑いながら首を振る。そして「だいいち……」つて続けて言つた

「あの作戦自体、その子のお姉さんが考えたものだからね。バラも王子様もその子が好きだった絵本に出てくる「バラの王子様」をイメージした演出だったわけで……それに僕、その絵本の内容ほとんど知ら

なかったから、半分以上勢いでやったからなあ」

「本をもとにした……って、むしろもつと楽しそうなんですけど!!」

「……なんだか、今日のフィリーさんは変に元気だね」

「変に」だなんて失礼なっ!

それにしても、本当に楽しそう! どこからどこまで本をもとにしているかとか、具体的な内容はわからないけど、それでも聞いているだけでも羨ましい

……そうだ!

私のひぎの上に座り、私の顔を振り向き見上げているマイルス君。その両脇に手を通し、途中持ち替えながら向かい合わせにし、私の目線の高さと同じ位置まで持ち上げる

「ね、ねえ、マイルス君」

「は……はい………なんだか嫌な予感が（ボソリ）」

「私にも、同じようなことやってくれない……かな?」

「………さつきも言ったけど、あれは僕が考えたことじゃなくて……」

「大丈夫! そのあたりは私が読んだことのある本から考えてくるから。だてに家に引きこもっていたいた時期があるわけじゃないんだからっ!」

「それ、誇らしげにするところかな?」

よおおし! そうと決まれば行動あるのみ!

さっそく家に帰って、よさそうな本を探して色々考えないと!

|||||

「それじゃー!」といつも以上に元気に一言言い残してマイルスの家を飛び出していったフィリー

フィリーの勢いに押されて少しポカンとしていたマイルスだったが、

「なんていうか、その……すごかったよね」

「見たコツチのほうが恥ずかしかったぜ」

「ワタシとしては、巨大ぶにをアツパーで打ち上げた後に受け止めたことの方に驚いたけどねえ」

「っていう感想をもらしてた。もし逆の立場だったら、私も同じようなことを言ってたと思う」

「うんっ！ ああいった「ピンチから一転！」っていう王道展開も悪くない気がする」

「……あれ？ 最初に考えてたことと、少しずれてきちゃったような……？」

「まあ、いつかー」

「ふーん……？」

ファイリー編《後》

|||||

ロロナが3年間『王国依頼』を達成し、マイルスが旅行を終えて他の人たちに農業を教え始めてから、数ヶ月が経ったころ

マイルスのもとに農業を教わりに来ていた人たちが各々自分の方向性を決め、ある人は農業以外のことも教わろうと考えたり、また別の人は教わったことを別の地でやってみようと思いだしたり……

一番多かったのは、マイルスの家の近くで自分たちも畑を拓いて、日々学びながら頑張っていきたいと考える人たちだった

それぞれが行く末を考えて決心を固め始めていた、そんなある日のこと……

|||||

マイルスの家そばの街道

太陽が一番高い位置から少しズレだしたころ

『アーランドの街』から『近くの森』へと続く街道。その途中にある脇道……マイルスが草を刈^かって土を均^{なら}しただけの簡素な小道。その道の先には林があり、その林を超えるとマイルスの家があるのだが……

そんな道を、一冊の本を胸の前のあたりで両手で抱えて歩く人がひとり

モンスターが出てくるかもしれないという街の外を、武装らしきものも無しに慣れた様子で歩いていたのは、ファイリー・エアハルトだった

「あれ……？　ここの道、少しだけ広くなったような気が……最近、沢山の人が来るようになったからかな？」

自分が歩いている小道を見ながらそう呟いたファイリー

下を向いていた視線を上げた彼女は、ふと別の変化にも気がついた。「そういえば、こころなしか木も少し減っている気がしなくも無いよな？」

『近くの森』のようなうっそうとした森林地帯ではなく単なる小さな林だったため、ファイリーでも気づけた微妙な変化だったが……「まあ気のせい、だよな？ どっちにしても大したことじゃないし……」

少しばかり別のことに気がとられている今のファイリーには、どうでもいいことだったようだ

……なお、実際に木は減っており、その理由は農業を教えていつの間にか木材や新たな土地がもつと必要になったため、マイルスが少しばかり伐採したためである

「……ふふふふつ、ついにこの日が来たんだよ……！ 何週間もかけて家にある本を全部読み返し、その中から選び抜いた本！」

そう言いながら無意識のうちに、本を抱えている手に力がこもっていたファイリー

「選ぶのには苦労したなあ……でも、私ながら最良の一冊を選べたよ！」

ファイリーの選考基準は「甘く」、「時に苦く」、「ロマンチック」……そして「私が耐えられる恥ずかしさ」である

前半は「少女趣味」の一言といったところで候補にあがる物語も多かったのだが、最後の基準が完全に足を引っ張っていた。なにせ、前半の基準が良くなればなるほどファイリーの感じる恥ずかしさも増加していくのだから、良いものほど無理になるのだ

そんな、大変なのか何なのかわからない選考を経て選ばれた一冊の本

それに書かれている物語を元に、マイルスにデートをエスコートしてもらおう……それがファイリーの目的だった

ただ、これは半分以上ファイリーの勘違いで勝手に言い出したことで

あり、実はこの時点でマイスのほうはそんな話はすっかり忘れていたのだが……

「えっと、この前会った時、今日は教えるのは午前中だけで午後はお休みって言ってたから、まずはこの本をマイス君に渡して読んでもらわないとね。それから、次のマイスの休みの日までに計画を考えてもらって、それで……えへへ」

その先の事をどう妄想したのかはわからないが、フィリーはひとりで少し口元を緩めてニヤついていた

「……あつ、でも、このお話に出てくるのって、スラツと背の高い美青年だったっけ？……で、でも！　マイス君は私なんかにも優しくして、男の人だけど怖くないし……むしろカワイイし！　他に良いところがあるよね」

……物語の登場人物の描写とマイスとの違いを自分で指摘し、誰も聞いていないのにフォローを入れるフィリー。結果的には一人で勝手に盛り上がっているだけである

そんなことをしているうちに、フィリーはマイスの家へとたどり着いたのだった

マイスの家

マイスの家の玄関でノックすると、いつもの調子のマイスの「はい、ちよつと待つてくださーい」という声がフィリーの耳に入ってきた。そして、数秒間が空いてから玄関の扉が開いた

「お待ちせしましたー！　あつ、フィリーさんいらつしやい！　どうぞどうぞ、中に入ってー」

「こ、こんにちは、マイス君。おじやまします」

笑顔で迎え入れてくれたマイスに、少しぎこちなさを残しながらも笑顔で挨拶をするフィリー

「あら、あのフィリーが笑顔で挨拶しているのを見るのは、不思議な感覚だわ」

「お……おお、お……！ お姉ちゃん!？」

聞きなれた声に反応してフィリーが目を向けたのは、いつもフィリーを含め来客者が座ることが多いソファアのほう。そして、そこにいたのはフィリーの姉、エステイ・エアハルトだった

フィリーが驚きで口をパクパクとさせている中、家の主であるマイスはといえば、エステイの言葉に反応して「あははっ」と笑いながら言葉を返していた

「不思議なんかじゃないですよ？ フィリーさんも最近はずちに来る人たちともお話しできるんですから」

「そうなの？ 農業を学びに来てる人たちって男の人でしょ？ 本当なの？」

「数人ですけど、女性もいますよ。……まあ、エステイさんが考えてる通りで、男性には挨拶だけで精いっぱいみたいですけど……それでも、最初は目も合わせられませんでしたし」

マイスの言葉に「そうよねー」と呆れ気味に笑いながら返すエステイ

「それじゃあ、フィリーさんの分のお茶を用意してきますね」

そう言っ隣キッチンへと姿を消したマイス

それとほぼ同時に、ようやく驚きから復活したフィリーが、まだ完全には落ち着けていない様子でソファアに座っている姉にむかって問いかけた

「お姉ちゃん、お仕事は!？」

「今日は偶然クーデリアちゃんがやってくれてるのよ。あの子、仕事を覚えるの早いし、才能があるわよー。おかげで久々にこうしてしっかりとお休み取れたのよ……言っってなかつたかしらー?」

「聞いてないよ!? それに何でマイスの家に!?!」

「いやね、これまでに話は色々聞いてたりはしてたけど忙しくて実際に来たことは無かったから、せっかくのお休みだしお邪魔しようかなって思ったの。最近は農業を教えってるみたいだし、仕事柄そのあたりも把握しておきたかったのよ」

そこまで言われてフィリーは「うう」と言葉を詰まらせた。姉の言うことに問題点が無くて、非難することができそうな部分が無かったからである………まあ、そもそもフィリーには、口論で姉に勝てる気は無かったのだが

どうしようもなくてプルプルと震えるフィリーだったのだが……
「ねえ、フィリー? そういえば、私も聞きたいことがあったのよ」
エステイはニツコリとした笑顔をフィリーに向けているのだが、対するフィリーは長年の経験からか嫌な予感がし、気づかぬうちに目じりに涙が溜まり始めていた

「あんたが最近呟いてる「マイス君」、「お姫様だっこ」って何のことかしらー?」

「え!?!」

「別の日には「王子様」だとか「バラの花束」が何だとか、一人で部屋で言ってたわよねー?」

「聞いてたの……!?!」

「あと、その大事そうに持つてる本は何なのかしらー?」

「ヒイ……」

フィリーが短い悲鳴をあげそうになったところで、笑顔だったエステイの顔から表情が消えた

「私が聞きたいのは、悲鳴じゃなくて質問の答えなんだけど?」

「………!!」

エステイから感じられるプレッシャーに口を閉じたフィリー。

……そして、そのまま後ずさりをして逃げ出そうと動き出すのだった
が……

「フィリー？　せつかくマイルス君がお茶を用意してくれてるんだから、ゆっくりしていきなさい……………ね？」

時に、妹にとつて姉の言葉は何よりも重い重石となる……………そうでなくとも、今のエステイのプレッシャーをもともしない人物は王国内にも数えるほどもいないだろう

「あの……………エステイさん？　何でフィリーさんは泣いてるんですか？」

新しく用意したティーカップとポットを持って来たマイルスだったが、泣いてイスに座ってるフィリーを見て何事かと問いかけた

「さあねえ？　ちよつとした質問をしただけなんだけど……………そうねえ、マイルス君にも聞いてみようかしらあ？」

「……………！」

泣きながらも必死に首を振るフィリー……………だが、マイルスとはいえはその理由がわからず首をかしげた後に、質問をうながすようにエステイのほうを見た

「いやね、最近この子が「お姫様抱っこ」とか「王子様」とか「バラの花束」とか言ってるのよー。何か心当たりはないかしら？」

「あつ、それは多分、僕が前に話した「バラの王子様」っていうお話のことだと思いますよ」

少しだけ考えた後、思い当たったことをあつさりと云ったマイルス

フィリーはそれに驚いているようだったが、エステイはマイルスが素直に言うことをわかっていただけの特に気にした様子は無く、ただ単純にその内容に興味を向けたようだった

「へえ、良かったら私にも教えてくれないかしら？」

「いいですよ。……………って言っても、僕もあまり知らないんですけどね」

「あら？　そうなの？」

「元々は絵本らしいんですけど、以前いた町でちよつとあつて……………」

そのまま、前にフィリーに話した内容をエステイに話しだすミス
ミス本人には悪気はないのだが、色々と考えていたフィリーから
すれば、姉に自分が考えていることが丸わかりになり邪魔をされるだ
ろうという予感がし、気が気で無かったのだが……

「何かしら？」

「ううう……」

エステイの笑顔による威圧で、どうすることもできないのだった
……………

リオネラ編《前》

広場

「……以上です。あ、ありがとうございます！」

そう言つてアラ―ニヤとホロホロと一緒にお辞儀をすると、周りからは歓声と拍手が沸き上がった。その多さに、「こんなに沢山の人が私の劇を観てたんだ」という気持ちが改めて感じられてしまい、嬉しい反面、今更になって恥ずかしさもこみあげてきた

けど、私は逃げたくなる気持ちを抑えて、背筋を伸ばしてちゃんと前を向いた

……ここで逃げ出しちゃったら、『おひねり』を貰い損ねてしまい人形劇を最後まで頑張ったのも台無しになってしまう。それは、『おひねり』で生計を立てている私にとっては死活問題だ

……前に経験しただけあって、その事はよく骨身に染みている。あの時は、ホロホロにももの凄く怒られたなあ……

そんな事を考えながら、私は『おひねり』をくれる人たちに精一杯の笑顔でお礼を言いながら彼らの声援こたえにこたえていった……

「ふう……」

あれから少し経ち、私の人形劇を観てくれていた人も引いて行き、ようやく一息つくことができるようになった

私は人形劇をしていた『広場』の一角……そこから少し離れたところにあつたベンチに一人で腰掛けて、さつきまでの高揚感や緊張感を逃がすために大きく息を吐いた

「おう、お疲れ様。まあ、その分、収穫はがっばがばだな」

「ちよつと間が空いちやつてたかしら？　いつもよりも少し多めだったわね」

そう言ったのは、私のそばで浮いている二体ふたの人形り、ついさっきまで人形劇の役者として頑張ってくれていた、黒猫の人形・ホロホロと虎猫の人形・アラニーヤ

「ふたりもお疲れ様。……みんな、楽しんでくれてたみたいで良かった」

「だな。……ん？」

「……あら。お客さんみたいね」

ふたりが気付くのと同時に、私も見知った顔がこつちに近づいてきているのが見えた

「こんにちは！　りおちゃん、ラニヤちゃん、ホロくん。今日は絶好調だったみたいだね」

「ロロナちゃん」

そう。私たちのところに来たのは、ロロナちゃんだった。いつものように、私にはマネできないニコニコとした笑顔で私に笑いかけてきてくれたいた

「すごかったねえ！　お客さんもいっぱい、広場じゅう中の人みんなりおちゃんの劇を観てたよ！」

「そ、そんなこと……!?!　す……すごく恥ずかしいから、言わないでえ……!」

「ええっ!?　そんなに恥ずかしくないけども……凄あいことなんだから、もっと自信持っていいんだよ？」

そ、そんな事言われても……

そうやって、ロロナちゃんが褒めてくれるのは嬉しいんだけど……ううう、やっぱりどうしても恥ずかしさが……!

「オイオイ、劇を観に来といて客の感想だけかよ？　もっと言う事あるだろう？」

「そういうつもりじゃなかったんだけど……。ホロくんもラニヤちゃ

んも、いつも通り……ううん、いつも以上にイキイキしてて本当に良かったよ。お話のほうもなんだか引き込まれる感じがして、すつごく楽しかった!」

「あらあら、ありがとう。そう言ってもらえるなら頑張ったかいがあったわね。ねっ、リオネラ?」

「ふええっ!? う、うん」

いきなり話を振られて少し驚いてしまったけど、ロロナちゃんに楽しんでもらえたのは私にとって嬉しいことなのは確かだから、私は領いてみせた

すると、ロロナちゃんは「そっか」とニコニコと笑って、嬉しそうにしていた

「でも、良かった。りおちゃんもラニヤちゃんもホロくんも元気そうで……」

そう言ったロロナちゃんの顔はさつきまでとは少し変わって、安堵あんどのようなものが混ざっているように見える

その様子を見て、私のそばにいるホロホロとアラーニヤがロロナちゃんに言う

「なんだあ? あの事、まだ気にしてやがるのか?」

「そういうところもひつくるめてロロナの良いところなんだけどねえ……。でもまあ、ワタシたちからは「心配無い」ってことと……。それと、「ありがとう」って言わせてもらおうわ」

「ううん、わたしはそんなお礼を言われるようなことは何も……つていうか、結局何もできなかつたし……」

少し肩を落として言うロロナちゃん。その姿を見て、私は必死に首を振ってそれを否定する

「そ……そそそ、そんな事無いよ!? 私は、ロロナちゃんのおかげで……ロロナちゃんがいてくれたから……! だ、だからっ!」

「ありがとね、りおちゃん。……それに、さつきの人形劇を観てたら良かったよ。やつぱり、りおちゃんたちは、りおちゃんたちなんだって」

あの後、コロナちゃんは「また何かあったら、遠慮しないで相談してね！ 何も無くても、遠慮しないで遊びに来て！」って言って、足早に帰っていった。……ちよつと忙しそうにしてたから、もしかしたら仕事の合間をぬって観に来てくれたのかもしれない

そう考えると、申し訳なく思いつつもちよつとだけ嬉しい気もする。……今度はその分、コロナちゃんのお仕事のお手伝いを私も頑張らないと……！

そんな事を考えながらも、ベンチに座ったままさっきまでの会話を思い出して、いつの間にかコロナちゃんが気にしてくれていた事……あの事について、つい思い返してしまっていた

あの事……それは、数日前の朝にアラニーヤとホロホロに起きたあの現象、その一連の出来事

それは、私には苦しくて、悲しくて、とても辛い……けど大切な出来事だった

ある日、突然動かなく、喋らなくなってしまったアラニーヤとホロホロ

異質な『力』を持っていた私への周りからの視線や心無い言葉から逃れるように飛び出した生まれ育った家。その頃からずっと一緒にいたふたりの身に起きた異常に、私はこれまでにないほど慌てふためいた

必死に声をかけたり、揺さぶったり、ふたりの前で思い切り泣いたり……これまでなら反応があったはずなのに、いくらやっても、アラニーヤもホロホロもうんともすんとも言わなかった

もうどうしようも無くなった私は、誰か……誰か助けてくれる人を探した

……でも、そもそも相談できる人なんて限られていて……それに、
アラニーヤとホロホロがいないと街の外に出ることなんて絶対無理
で……

そんな中、私の頭に思い浮かんだのは、街のアトリエにいるコロナ
ちゃんだった。私の『力』のことを怖がらないでくれた人の一人で、私
の大事な大事なお友達……それに『錬金術』なら私でも全然わからな
いこの異常事態を何とかできるんじゃないか、っていう希望もあった
アトリエに飛び込んだ私は、凄く慌てたままの私を落ち着かせてく
れたコロナちゃんに、涙をこらえながら事情を説明した。コロナちゃ
んは私の言葉を聞いて何とかしてくれようとしたけ、原因がわからな
いみたいで……でも、私と一緒に頑張って真剣に考えてくれた

……そこに現れたのがコロナちゃんの先生のアストリッドさん
だった。「こいつらは私が預かろう」と言って、アラニーヤとホロホロ
を自分に預ける様に行ってきた。……ただでさえ不安なのに、ふたり
と離ればなれになるのは嫌だった。けど、ふたりを直してもらうには
預けるしか無くて、私はアストリッドさんに頼んだ……

そこから、コロナちゃんに呼ばれるまでの二、三日は、私は不安で
不安でしようがなく……

けど、コロナちゃんに呼ばれてアトリエに行つてからの……アスト
リッドさんに何か薬品のようなものを嗅がされて、身体だけが動かな
くつてその場に倒れてしまつてからの出来事……

アストリッドさんと、アストリッドさんの強硬手段(?)によつて
再び喋り出したアラニーヤとホロホロとが話しだした内容は、それま
でとは別の意味で私の心を揺さぶってくるものだった

アラニーヤとホロホロは、どこかが壊れたりしてなかったこと
元々、ふたりは喋つてなんていなくて、全部、私の口から出ていた
ということ

ふたりは友達がいなかった私が人形に投影したことから形成され
ていった、私の中の別人格のような存在で、ふたりはその事を知つて

いたということ

ふたりは「自分たちみたいに変な存在がリオネラのそばにいたら、リオネラのためにはならないから」と、私を受け入れてくれる人がいる『アーランド』にいるうちに自分たちはいなくなってしまうおうとしていたこと

……それが、ふたりが突然喋らなくなった理由であり、私が知らなかった私自身のこと

私は倒れたまま、そばでロロナちゃんが驚いている声をまるで遠くのもののように聞きながら、わけがわからなくなっていた

ふたりとはずっと一緒だった

私の事を怒ったり、慰めてくれたり……だから、これまで頑張れてこれた。一人じゃなくて、ふたりがいたからこそして旅芸人としてやってこれた……お仕事だけじゃなくて、いつも、ずっと支えてくれたから……

なのに

ふたりは私自身でもあって、そこにはいない・いちゃいけない存在だつて言つて、私の前からいなくなろうとして……

わけがわからなかった。ふたりは私の友達でずっと一緒にいる家族でもあって、いちゃいけない存在なんかじゃ……でも、ふたりが私の中の人格なら、私も頭の中のどこかで同じようなことを考えて……そんなこと……でも……だから……

頭の中がごちゃごちゃしてきて、余計にわけがわからなくなつて、何が正しくて何が間違つてるのかもわからなくなつてきて……でも、最後まで頭の中に残っていたのは……

いなくならないで

どこにもいかないで！ 一緒にいて！ これからも、ずっと、ずっと……!!

動くようになった身体で人形の身体を抱きしめて、その気持ちを泣きながら吐き出し続けた

アラニーヤもホロホロも、困ったように私を諭そうとしてきたけど……それでも私はふたりと一緒にいいって泣き続けた

たとえば、「いなくならないで」と言う私の口からそれを否定するようなアラニーヤとホロホロの言葉が出てきても、「一緒にいたい」と今思っている気持ちが嘘なんかじゃないということをも自分自身にも言い聞かせるように……

あの時はアトリエで泣きわめいちゃって、ロロナちゃんに迷惑かけちゃったけど……その後、街で借りている部屋に戻ってからは今後のことについて、ふたりと私と、さんにんでちゃんと話し合うことができた

そんなところがあつて少しだけお休みしていたから、今日は久々の公演だった……というわけだ

今はもう、そのことについては、いちおう一つの区切りがついた。アラニーヤとホロホロも納得してくれて……はず

……けど、今、私はあの事とは少し別のところで、頭を悩ませてしまっている

「何、似合わねえ顔してんだよ。余計不細工になっちゃまうぜ？」

「ちよつと!?! まあ、それは言い過ぎにしても……リオネラ、眉間にシワが寄ってるわよ? どうかしたの?」

私が悩んでいることを心配するようにふたりが声をかけてきた

「やつぱり、ワタシたちのことは……」

「ううん! そうじゃない、そういうことじゃなくて……!」

「じゃあ何だったんだよ。もったいぶってないで、ちゃっっちゃと言えよ」

ホロホロに催促^{さいそく}されて、私はおずおずと悩み事を口にしてみる……
ふたりはどういう反応をするんだろう……

「ふたりのこと……私たちのこと、マイスくんは何て言えばいいのか
な、って……」

「……それって、あの子にこの前の事を教えるってこと？」

アラニーヤの問いに私は「……うん」と頷いてみせる。すると……
「ヤメとけて。何の得にもなんねえと思うぞ？」

「そうね。これはワタシたちの問題、あの子まで巻き込まなくてもいい
じゃない」

ふたりはそう口をそろえて「言わない方がいい」と言ってきた

「で、でもっ！ 私、マイスくんに、隠し事はしたくないの！ だって
……マイスくんは私たちに教えてくれたよ。記憶のことも、少しだけ
戻ってる記憶のことも、『魔法』のことも、『ハーフ』だってことも、む
こうの世界のいろんなことも。言い辛い……話したくないことも
あったと思うよ？ それでも、マイスくんは隠さずに話してくれて
……」

だからこそ、自分も隠し事はしたくない……そういう気持ちを口に
する

私の気持ちを知らうとしてくれる、わかり合おうとしてくれる……
そんな人だからこそ私は自分もちやんと向き合いたい、隠し事はした
くない……そう思った

私が言い終えた後、少しの間を開けてふたりが喋りだした

「たつく……変に生真面目になって。一体、誰の影響なのやら」

「それは一人じゃないかもね。……リオネラがそうしたいって言うな
らしいんじゃないかしら？」

「アラニーヤ……！」

「でも、おすすめはしないっていうのは本心よ。あの子、リオネラほど
じゃないだろうけど、ワタシたちに思い入れがある……っていうか親
身だから。きつと口ロナ以上に混乱すると思うわよ？」

「だろうなあ。会ったしよっぱなからオレたちが「いらない」って言う

まで、オレたちふたり分の食べ物まで用意したり、色々気い遣^{つか}ったり……なんつーか、人形扱いじゃなくて完全にそれ以上の扱いだったからなあ」

ふたりに言われて思い出したけど、確かに最初の頃は毎回律儀^{きんげん}に三人分用意していた。……ふたりは食べられないことを伝えた時はとても悲しそうな顔をしていたのも、憶えている

マイルくんは基本的に、人でもモンスターでも……何に対しても分け隔^{へだ}て無く接する、凄く優しい心の持ち主だ……と思う。そうやって接してくれるマイルスくんだからこそ、アラニーヤとホロホロの事を知ったら大きなショックを受けてしまおうんじゃないだろうか？

そうやって考えていくうちに、それまでは小さかった心の中の不安が段々と大きくなっていくような感じがしてきた。けど……

「……大丈夫、だよ。マイルくんもきつとわかってると思う。「アラニーヤとホロホロはちゃんとここにいる」って」

「おーおー、信用なのか何なのか知んねえけど、随分とおアツいことで」

「こら、茶化^{ちやか}ささないの！……まあ、そこまで彼を信じてるなら、ワタシたちが言うべきことは何も無いわね」

いつもの調子でふたりは言い、ベンチに座っている私の膝の上にフワリツと降りてきてそのまま座った

そんなふたりを抱きしめるように腕をまわして、私は静かに目を瞑^{つむ}る……

「あつー！ いたー！」

「ひゃわあつー!？」

いきなりの不意打ちの声につい驚いて飛び上がってしまい、バタバタしながらも、なんとか声のしたほうへと顔を向ける。そして見えたのは……

「リオネラさん！ ホロホロ！ アラーニヤ！ 大丈夫!? 元気ですか!？」

「な、なななな……っ!？」

……私のほうへと駆け寄ってくるマイスくんだった

そのマイスくんはといえば、そのまま私のそばまで来たかと思うと、私の両手をとって、その中で抱えていたふたりも含めてバツ!

バツ! バツ! と見てまわった後、私の顔を直視してきた

「心配してたんだよ!? 何日か前に「ホロホロとアラーニヤがなんだか大変なことになったー」ってアトリエにいたロロナから聞いて、一日中街を探し回ったけど何処にもいなくて……」

「あらら、ワタシたちはロロナのお師匠さんのところにいたからねえ……」

「リオネラはオレらがいない間は引きこもり気味だったからなあ……」

かなり焦った様子だったマイスくんに押されつつも、アラーニヤとホロホロが、マイスくんが言っているであろう当時の事を思い出しながらそう言た

「そ、その……ごめんね、マイスくん」

私がそう謝ると、やっと落ち着いてきたマイスくんは首を振った後、ニツコリと微笑みながら私を見てきた

「ううん。大変だったんだろうし、気にしないでいいよ。それに、ふたりとも元気になったみたいだし……でも今度、何かあつたら僕にも言ってくれていいんだよ? 汚れでも、ほつれでも、切りキズでも、なんでもなおしてあげられるから! 綿わたとか布とかも、すぐに良いのを用意してあげられるよ!」

「おお……至いたれりいた尽くせり、ってやつか?」

「え、ええ、そうねえ……今度、機会があつたら頼もうかしら?」

……たぶん、アストリッドさんに会ってなくて、ロロナちゃんから断片的にしか聞いていないんだろう。色々と勘違いをしている様子のマイスくんが、優しく良い笑顔で……

「なあ。さっきの慌てっぷりといい……ホントに言って大丈夫なのか、こいつ？」

「えっと、うううん……どう、かな？」

「これは、もうちょっと時期を見た方が良くもね……」

リオネラ編《後》

|||||

ロロナが3年間『王国依頼』を達成し終え、マイルスが旅行を終えて他の人たちに農業を教え始めてから、少し経たったころ

マイルスのもとに集まってきた人たちは性別も年齢も様々であったが、みんな多少の差はあれど、マイルスが教えてくれる農業に対しての熱意は確かなもので皆頑張っていた……のだが、肉体労働であり、その上『アーランドの街』で暮らしていた彼らにとっては初めてのこと・慣れないことばかりで、肉体的にも精神的にも疲労は蓄積されていくのは当然のことだった

もちろん、マイルスもそれをわかっていないわけじゃない。様子を見て作業量を減らしたりして適度に休憩を作ったりしていた。その他にも、腕によりをかけた料理を振るまったりと彼らのことを気遣う面も多くあった

実際のところは「上手くできた作物だから、皆に食べてほしい」というのがマイルスの本音だったりしたのだが……食べた人たちは「こんな美味しい料理を作る作物を、これから自分たちは作るんだ！」とさらに農業への熱意が増したので、結果的には良かったと言えるかもしれない

そして、他にも彼らの休息中の癒しとも言えるものがあつた……

|||||

マイルスの家の前

野菜の青々とした葉が茂った畑。マイルスの家の前にある畑で、人々が農業を学びに来るようになってからは新たに周囲の木々を切り拓き、その人たちが実戦経験を積むための土地として広げられたのだが……

普段のこの場所で聞こえる、『クワ』でザクザクと土を耕す音は今は聞こえず、代わりに何やら賑やかな雰囲気たがやが漂っていた

畑のそば……とは言っても少し離れた何も無い開けた場なのだが……そこでは、何も知らない人であれば驚いてしまうような不思議な光景が広がっていた

宙に浮き、まるで生きているかのように動き・飛び・踊る二体の猫の人形

その人形をまるで見えない糸で操るかのようには、指を、手首を、腕を、時に踊りのように体ごと動かす少女

二体の猫の人形の『役者』と、踊り子のような少女の『操演者』兼『語り部』による、不思議な人形劇

マイスの家の前で時折行われるその人形劇は、農業を学びに来ている人たちにとって、息抜きであり、楽しみのひとつであった

その証拠に、人形劇が行われている場所を半円状に取り囲むような形で、人々が人形劇を観ている。その人たちの手元には、マイスが用意したのであろう軽食と飲み物があり、各々人形劇を観ながら自由きままに過ごしていた

「……こうして、女の子とその友達は、妖精に導かれるように闇深い夜の森へと足を踏み入れていくのです」

少女……リオネラがそう語ると、先程まで役を演じていた二体の猫の人形……アラニーヤとホロホロは浮遊したままスウーッと彼女の左右に移動した

「女の子たちの旅はまだ続いて行きますが……これにて、本日の演目はお終いです。最後までありがとうございます……ございました」

そう言っつてリオネラはお辞儀をし、それに続いてアラニーヤとホロホロもつられるように頭を下げた

そんなリオネラたちを包み込んだのは、沢山の拍手……観てくれていた人たちの満足の証だ

拍手に応えるように何度も頭をさげたり軽く手を振ったりするり

オネラ

拍手がある程度収まってきたところで、もう一度だけお辞儀をした後、控え室代わりに使わせてもらっているマイスの家の『作業場』へと続く、家の裏口へ向かって歩き出そうとしたのだが……

「ねえねえ！ 人形のお姉ちゃん！」

人形劇を一番前で観ていた子供……農業を学びに来ている人の中でも最年少で、マイスよりも2、3歳年下の女の子がリオネラに声をかけた

「主人公の女の子はその後どうなったの!? 妖精さんの住んでるお家を見つけれられたの!？」

先程までのめり込んで観ていた人形劇での興奮がおさまっていないのだろう。興奮気味に少し声を荒げながら物語の続きを催促した

その勢いに少し押されてしまい最初はビクリと驚いたりオネラだったが、微笑みを浮かべその子に言った

「えっと、今回は続き物だから……そのお話はまた今度なの」

「えー？ 私、もつとみてたいのにー」

「ごめんね。そのかわり……って言っていいかはわからないけど、次はふたりももつと頑張るから」

リオネラがそう言うのとホロホロが女の子のほうへ飛んでいき、女の子の頭を軽く撫で、女の子の周りを一回まわってから再びリオネラの元へと戻っていった

予想外だったのか数秒間ポカンとしていた女の子だったが、また満面の笑みになって「またねー！」と、『作業場』のほうへと行くリオネラに大きく手を振った

マイスの家・作業場

「ふう……」

『作業場』に入り裏口の扉を閉めたところでようやく劇での緊張が解けたのか、リオネラは大きく息を吐いた

「お疲れ様です、リオネラさん、ホロホロ、アラーニヤ。喉、渴いたんじやないかな？」

「あつ、マイスくん……うん、ありがとう」

おそらく、劇の終盤あたりで『作業場』に先回りしていたのだろう。マイス。そのマイスから差し出された飲み水とタオルをリオネラは受け取り、お礼を言った

外の様子を『作業場』にある小窓から見ながら、マイスが口を開く「あはははっ。熱がおさまらないみたいで、みんな楽しそうにさつき
の劇のお話をしてるみたいだよ」

「ほ、本当？」

「嘘なんかじゃないよ。やっぱり、リオネラさんの人形劇は凄いな！」
そう言つて小窓から目を離し、リオネラに笑いかけるマイス。そんな爽やかな笑顔にリオネラはつい顔を赤らめてしまっていた

「そんなこと……！ でも、良かった……少し心配だったから……」

「そうね。でも、さつきの女の子の様子も含めて考えれば、そこそこは好評つて思つていいんじゃないかしら？」

「まっ、続き物は二回目からが本番だけだな。一回目を観てなくても楽しめる様にしてねえと客はどんどん離れちまうからよ、ちゃんとストーリーを練らないとな」

「へえ、そんなことも色々考えないといけないんだね」

感心するようにそう呟いていたマイスだったが、ふと「あれ？」と声をあげ首をかしげたかと思うと、そのままリオネラたちに問いかけていった

「そう言えば、劇のお話つて三人で考えてるの？」

「う、うん。ふたりの動きとか、色々考えながら……人形劇つて、物語に合わせて動かして表現するから」

「全部が全部オリジナルじゃないけどね。大抵は絵本とか有名なお話

を元に、ワタシたちふたりで演じられるように内容をちよつと変えちやったりしてるんだけど」

「まあ、たまに緊張で必死に練った話が頭から飛んでいって、アドリブだけでやってグダグダになっちまうこともあったりするんだけどな。そんな時は目も当てらんねえくらいヒデエもんだぜ？ リオネラも顔真つ赤でアワアワしだすしよ」

呆れ気味に、かつ面白おかしく言うホロホロに、リオネラが「そ、その話はしないで……！」と非難の声をあげていた

その様子をどうしたものかと見ていたミスだったが、そんなミスにアラニーヤが

「とはいっても、今回のはいちおう最初っから最後までリオネラが考えた話なのよ。元となるものが全く無いってわけでもないんだけど」
「へえ、そうだったんだ！ さつき、外でリオネラさんに聞いてた子じゃないけど……そう聞いちゃうと、なんだか僕もお話の先が凄く気になってきちやつたなあ」

そう言つて、ひとり腕を組み「うーん」と考え込みだしたミス
「主人公の女の子とそのお友達。どんな道具でも作ってくれる不思議なお店の店主さんに、人里離れた場所に住む少し変わってるけど優しい男の子。それと、気まぐれだけど困った人を助けてくれる謎の妖精……色々あつてたけど、今回の最後は女の子とお友達が妖精のあとを追いかけて夜の森に入つていったんだよね」

「う……うん」
目を瞑り腕を組んだままそう言いだしたミスに、何故か少し緊張した様子でリオネラが頷いた

「……女の子二人で夜の森に入っていくのは危なくないかな？ その森にモンスターが出るかはわからないけど、もしマネする子がいたら大変……って、そんな悪い子はアーランドにはいないか。……あれ？ でも、やっぱり主人公とお友達は危ない？ それって大丈夫なの!?」

ひとりで自己解決したかと思うと、目を開けて少し焦った様子で

オネラに問いだしたマイルス

「そ、それも含めて、次回のお楽しみだから……ね？」

「そうよ。せかさないの」

「明かしちまったら、面白く無いだろう？」

「ううっ……そっか、そうだよね。……でも、やっぱり心配だなあ」

物語の登場人物のことを心配して「うーん、うーん」唸り続けるマイルス

……その様子を見ていたリオネラが「クスリ」と小さく笑い、比較的耳の良いマイルスでも聞き取れないほどの小声で呟いた

「……心配しなくても、大丈夫。危なくなつた二人は男の子に助けられるの。ちよつと変わつてるけど誰にでも優しい……みんなに慕われる男の子に……」

「……？ リオネラさん？」

「ふえっ……う、ううん!? 楽しみにしてくれてるみんなやマイルスくんのためにも、次の劇の練習頑張らないとって思つて」

トトリのアトリエ編 プロローグ

|||||

閉鎖寸前のアトリエを立てなおし、『錬金術』で『アーランド王国』の発展に貢献した一人の『錬金術士』

彼女が一人前の錬金術士として活動しだして少し経ったところ、『アーランド王国』に大きな変化が訪れました

周囲の街や村と一つにまとまり共和国となる。そう、『アーランド王国』が『アーランド共和国』となる日がきたのでした

新体制への切り替わりに追われる王宮の人々。忙しい最中にも様々な事態が舞い込んできます

『別々の地図同士が上手くつながらない』『併合へいごうのための会議の場に集まる際にモンスターに襲われた』等々……問題が次々に発生してしまいました

そんな中、色々とあつて生まれたのが『冒険者』という職業でした。その名の通り、冒険をし地図を作ったり、凶悪なモンスターを退治したりする職業で、アーランドの街に新たに設置された国営の『冒険者ギルド』で『冒険者免許』を貰い、依頼などもこなしていきます……まあ、冒険者の制度自体 新しく出来たばかりのものなので、問題が出てきては 制度の調整をする、その繰り返しをしていたりします

話は変わって『冒険者』という職業ができてから4年ほど経ったとある日、『アーランド共和国』の端っこにある『アランヤ村』という小さな村に 新たな『錬金術士』が誕生しました

その新米錬金術士の名前は『トトウーリア・ヘルモルト』

周りからはトトリと呼ばれる少女は、ある錬金術士と出会い、錬金術士としての第一歩を踏み出すことになりました

『錬金術』との出会いにより、トトリは諦めていた ある目標を再び目指すことを決めます

『冒険者』になって、行方不明のお母さんを探し出す」

その目標を胸に 冒険者になろうとするトトリは、幼馴染の『ジーノ・クナープ』と二人 冒険者を目指して活動を始めますが、その道は決して平坦ではありませんでした

姉の反対や アーランドの街への馬車賃で一悶着^{ひともんぢやく}。さらに『冒険者ギルド』で また一悶着。無事『冒険者免許』を貰い 冒険者になった後、『アランヤ村』に戻ってから 『冒険者ギルド』で出会った貴族の少女が追いかけてきて さらに一悶着……

と、色々とあるのですが、これから始まるのは さらにその後のお話

トトリと 8年ほど前に『アーランド』に迷い込んだ青年との出会い…正確には再会から始まる物語
成長したマイスの、新たな物語

『マイスのファームとアーランドの農夫と【トトリのアトリエ編】』

|||||

1年目：トトリ「ランクアップと紹介」

冒険者ギルド

わたし、トトウーリア・ヘルモルトが 冒険者になって初めての冒険者免許のランクアップ

三年間のうちに このランクが一定以上になっていないと『冒険者免許』を取り上げられて二度と『冒険者』になれなくなるらしいから、このランクアップは すごく緊張して…

ちゃんとランクポイントを溜めることができている、と頭ではわかっていても 胸がドキドキするのを止めることは出来なかった。けど、提出した免許は 無事ランクアップした状態で わたしの手元に戻ってきました

「さて、これで手続きはお終いつつ。これからどうするの?」

そうわたしに聞いてきたのは、『冒険者ギルド』の受付嬢のクーデリアさん

わたしが『冒険者免許』を貰いに来た時からお世話になっている人で、わたしよりも背は小さいんだけど……

つて、そんなことを考えてるとクーデリアさんにジロリツと見られた気が…

「え、えつと、あんまり考えてないですけど……買い物とか、近くの探索とかしてから帰ろうかと」

「そう…考えてみたら大変よね。免許の更新のために、わざわざこんな遠くまで来て。 いっそ、アーランドに住んじやったほうが楽なんじゃない?」

わたしの家のある『アランヤ村』から『アーランドの街』に来るた

めには 馬車でも二週間くらいかかってしまうから大変なんだよね
……わたし、馬車の旅自体 ちよつと苦手だし…
でも……

「住むって言っても、そんなにお金ないですし。それに わたし、アトリエがないと冒険者らしいこと何もできないから…」

「まあ、そうよね。ロロナだって錬金術が使えなければ、ひ弱で役立たずで ちよつとおバカな女の子ってだけだし」

「それは…さすがに言い過ぎかも…」

クーデリアさんは わたしの『錬金術』の先生…ロロナ先生の幼馴染らしくて、初めて会った時も わたしの持っている杖がロロナ先生から貰った物だとすぐに気づいて…あの時は ちよつとビックリしたなあ…

「ああ、そうだ！ロロナのアトリエがあるじゃない。あそこを使えばいいのよ！」

「えっ、先生のアトリエを？」

「ええ。あそこならお金はかからないし、錬金術もできるでしょ。まさに一石二鳥だわ」

たしかに、アトリエがあれば錬金術ができるから 冒険も依頼の仕事も 手持ちの道具の数を気にせずに出来るようになるから、すごく助かる

「で、でも、勝手に使ったら怒られるんじゃない？」

「あたしがいいって言ってんだからいいの。大体、あの子が怒るわけないでしょ」

クーデリアさんは そう断言したけど…あつ、でも たしかにロロナ先生が本気で怒ってる姿って想像できないや…

「はあ…あの、すごく嬉しいんですけど、なんでクーデリアさん、わたしのためにそこまで…」

「別にあんたのためじゃないわよ。あんたがこの街で働いてれば、

ロロナもたまには戻ってくるようになるんじゃないかなとか、別に期待していないし…」

「え？あの、最後の方、よく聞き取れなかったんですけど…」

うまく聞き取れなくて聞き返してみたんだけど、クーデリアさんは「あーっもう！」って声をあげたかと思ったら、どこからかゴソゴソと『鍵』を取り出して わたしに押し付けてきた

えっと、たしかこの鍵は 前にも貸してもらったことがあるけど、ロロナ先生のアトリエの鍵だったっけ？

「何もいってないわよ！ほら、そうと決まれば さっさとアトリエに行く！色々準備もあるでしょ！」

「は、はい…って、本当に良いのかな…？」

ロロナ先生のアトリエに行つて…あつ、その前にジーノくんとミちちゃんに アトリエのことを話しておかないと

そんなことを考えながら 『冒険者ギルド』のある王宮から外へと歩きだそうと、後ろから クーデリアさんの声が響いてきた

「っと、そうだ。ちよつと待って、一つ言い忘れてたことがあったわ」「えっ、なんですか？」

わたしが振り向いて 再び受付のカウンターへと歩いて行くと、クーデリアさんは 冒険者に支給される簡易の地図を取り出してカウンターの上に広げてみせてきた

「この街から出て少し行ったところに『青の農村』って村があるの」そう言いながら クーデリアさんは地図の一点…『アーランドの街』を指で指し示した後、ツーツツと指を滑らせて 今度は別の場所を指し示しトントンと指先で叩いた

「そこにミスってヤツがいるから、もし何か助けが必要なら 会いに行くといいわ。あいつ お人好しだし、あんたがロロナの弟子だつてわかれば何でも手伝ってくれると思うわよ」

「ミスさん…ですか」

その名前を頭の中で数回繰り返して 憶えることにしたんだけど

……あれ？マイス……？なんだかわかんないけど、聞いたことがあるよ
うな……うーん、気のせいかな？

「村の人に聞けば きつとすぐわかるわ。……まあ、注意することがあ
るとすれば、村の中で武器をかまえたりしないことぐらいかしら……？
あとは……そう！マイスも『錬金術』を扱^{あつか}えるはずだから、何か分か
らないことがあったら聞いてみるのもいいかもしれないわね」

「へえ……『錬金術』を……って、あれ？」

「ん？どうかした？」

「あの……『冒険者免許』を貰った時に、クーデリアさん「この国に三人
しかない貴重な『錬金術士』」だって言ってた気がするんですけど
……そのマイスさんって人は『錬金術士』じゃないんですか？」

わたしと、ロロナ先生と、ロロナ先生の先生の三人だつて言つてた
はず。ロロナ先生の先生の名前は、たしか ア……アス……なんだつ
たっけ？ と、とにかく、マイスって名前じゃなかった気がする！
でも、そうなる と なんで……？

「ああ、そういえば そんな話もしたわね。……ねえ、あんたは料理つ
て出来る？」

「え？ええつと、おねえちゃんのお手伝いをするくらいで、その……あ
まり……」

「そう。なら、お姉さんは料理が出来るのよね。お姉さんって何処か
でコックとして働いてたりする？」

「いえ、別にそういうわけじゃないですけど……？」

えつと……それが 今さっきの話と何の関係があるんだろう……？

そう考えているのが クーデリアさんに通じてか通じずかはわか
らないけど、クーデリアさんは一度大きく頷いてきた

「マイスもそういうことよ」

「……？どういうことですか？」

『錬金術』はできるけど『錬金術士』として活動しているわけじゃな
いってこと。……とはいっても『錬金術士』以外で『錬金術』ができる

のなんて あいつ位じゃないかしら?」

その後、クーデリアさんは「さてよ…この場合、ホムンクルスは含むべきかしら?」って、小声で言ってるけど…ほむんくるすってなんだろう? 職業か何かかな?

「とにかく、何かあったら そいつに会ってみるといいわ。もちろん、あたしでもいいわよ」

「はい、ありがとうございます!」

「って ことで、わたしはこれから 先生のアトリエで ちよつと調合してから、『青の農村』ってところに マイスさんって人に会いに行こうと思ってるんだけど…」

冒険者ギルドの受付から離れた場所で、ここまで一緒に来ていた二人に これからのことを話した

最初に反応を返してきたのは、わたしの幼馴染のジーノくんだった。「よくわかんねえけど、とりあえず俺は 街をブラブラしたりするから。外に行くときには声をかけろよな!」

うん、ジーノくんは いつも通りジーノくんだ。…まあ、ジーノくんは アトリエの場所も知ってるから問題無いかな?

そして、もう一人…冒険者免許を貰いに行つた時に知り合つた ミミちゃんんだけど…

「そう、まあ ちょうどいいかしら? 私はこの街を拠点にして『冒険者』の活動をしていくから。手を貸してほしい時は 頼みに来なさい」

「えっ!?!」

「なんで驚くのよ。私はアーランド出身なんだから別におかしくないでしょ?それに、冒険者活動においては 何かと街のほうが勝手がいい」

いし」

そういえば ミミちゃんはアールランドの貴族の家出身で、いちおうは お嬢様なんだった

……ただ、わたしは貴族のこととか あんまり知らないから、どう凄いのかは よくわからない。『アランヤ村』って田舎だから、そういう話にも疎いんだよね…

「あつ、それと」

「え?なに、ミミちゃん」

王宮の外で 解散になろうとした時に、ミミちゃんが思い出したように声をあげた

「私は絶対に『青の農村』には行かないし、マイスにも会わないんだからね!いい?絶対、ぜえーつたいよ!!」

「え、ええ!?!」

理由を聞く前に ミミちゃんは街のほうへと歩いて行ってしまっていて、何も聞けなかった

「どうしたんだろう?怒ってるのとは ちょっと違った気が……うーん?もしかして、何か知ってたのかな?」

よくわからないけど、とりあえず『青の農村』に行くときは ミミちゃんには声をかけないようにしよう

1年目：トトリ 「青の農村での出会い」

数回の調査を終えて いくつかの依頼を達成したわたしは、昼過ぎにアーランドの街を出て ジーノくんを連れて『青の農村』へと伸びる街道を歩いていました

その道中、モンスターがいないかキョロキョロしながら歩いてた ジーノくんが不意に わたしに聞いてきた

「なあ トトリ。今回は 冒険の前に人に会いに行くんだよな？」

「うん、そうだけど。それがどうかしたの？」

「うーん……いや……」

腕を組んで 何かを悩んでいるかのようにうつむきがちになつて いるジーノくん

そんな 珍しく歯切れの悪いジーノくんが不思議で どうしたのか気になつて顔を覗きこんでみた。その時、ちょうどジーノくんは顔をあげて、眉間にシワを寄せながら頭をかきながら ポツリと言った 「その『マイス』って名前、なーんかどっかで聞いた覚えがあるような気がしててさ。何の時だったけなあ？」

「ジーノくんも!? 実はわたしも なんだか聞いたことがあるような気がしてて……」

「トトリもなのかな? なら『アランヤ村』の酒場かどっかで聞いたのかな」

「どうだろう……よく思い出せない」

でも、きつと『アランヤ村』のどこかで聞いたんだとは思うんだけど……。なんでだろう、本当に思い出せないよ……

「まあ、実際に会ってみたら何かわかるだろう」

「それもそうだね。…あつ、建物が見えてきたよ! あそこが『青の農村』じゃないかな?」

街道の先に見えてきた建物たち、『アランヤ村』と同じくらいかちよつと大きいくらいの規模みたい。そのそばには畑らしきものも

見えるから きつと間違いないと思う

わたしとジーノくんは 自然とこれまでよりも足早になりながら、村へと向かって進んでいった

青の農村

わたしとジーノくんは『青の農村』にたどり着いたんだけど……

「えっ、あれ…?」

「どうなってるんだ!?なんで村の中にモンスターが!?!」

そう、村のところでどこかにモンスターがいるのが見えた

畑の中をピョンピョン跳ねている『ぶに』。建物の入り口横で丸まって寝ている『ウオルフ』。広場をウロウロしている『たるリス』

どれも一匹二匹つて数ではない……もしかして、村がモンスターに襲われたとか!?

「とにかく、あいつらを追い払わねえと!」

そう言つてジーノくんが 腰に下げた剣を抜いて駆け出そうとし、わたしも後に続こうとした……その時

「おい!止まれ、そのちいせえの!」

わたしたちの後方から大きな声で放たれた言葉に、わたしたちは立ち止まって 声のした方へと振り向いた

そこにいたのは、わたしよりも頭一つは大きな背をした 赤みがかつた髪の男の人で、その背中には大きな荷物をしよつていた

「なんだよ、なんで 止めるんだよ!村の中にモンスターがいるんだぞ!」

ジーノくんが声を荒げて言うけど、赤髪の人は なんだか呆れたように「あー、やっぱりか」って呟いて首を振った

「あいつらを よく見てみな。身体のどっかに『青い布』を巻いてある
だろ？」

『青い布』…？』

「あつ、ホントだ。ほらジーノくん、『ウォルフ』の首に巻いてあるよ」
指で指し示しながら言うと、ジーノくんもわかったみたいで、今度
はジーノくんが、遠くにいる『たるリス』を指差しして言った

「アイツは左腕の根元に巻いてる……で、それが何なんだ？」

『ぷに』は…青い帽子かぶってる」

布を巻けそうな場所がないから、代わりに帽子ぼうしなのかな？

「本当にお前ら 何も知らねえんだな」

赤髪の人のため息をつきながら「まあ とりあえず武器を仕舞えつ
て」とジーノくんに言った。ジーノくんは なんだか納得してなさそ
うだったけど、剣を仕舞った

それを確認した赤髪の人が口を開いた

『青い布』は この村の一員の証。この村の村長が巻いてやってて、
人間を襲わないモンスターの印しるしでもあるんだ」

「モンスターが人を襲わない…それ、本当かよ」

「まあ 信じられないことかもしれないが、とりあえず この村にい
る奴らは基本的に襲わねえよ」

そう断言する赤髪の人だったけど、わたしはひとつ気になることが
あった

「その「基本的に」って、それは…」

「村の一員に 危害を加えたやつには容赦ないんだよ。危害を加えた
やつが 人であろうとモンスターであろうとな。命とかには関わら
ない程度に 寄ってたかってフルボッコにされてたな」

「も、もしかして、あのままだったら わたしたちが…？」

「そうだった。ときどきいるんだよ、お前らみたいな何も知らない
奴らがさ。アーランドの人たちは みんな知ってるから、大抵 もつ

と遠くから来たやつなんだが……」

そう言えば、クーデリアさんが「注意することは 村の中で武器を構えないこと」とか言ってたような……このことだったんだ……

赤髪の人が はたと何かを思い出したように 私たちに問いかけ
てきた

「そういや、お前らは何の用でこの村に来たんだ？ 農作物の取引
て感じじゃなさそうだし……新米冒険者がたまたま立ち寄っただけ
か？」

「あつ いえ、ちよつと 人に会いに来たんですけど……マイスって
名前なんですけど、知りませんか？」

「新米冒険者がマイスに？なんでまた」

「えつと、実は……」

わたしは赤髪の人に クーデリアさんから「マイス」って人に会っ
てみると良いと言われた話を 軽く説明をした

「あの小さいねえちゃんも ちゃんと村のこと教えておけよな……は
あ、まあここで言ってもしかたねえか」

「それで マイスってやつはこの村にいるんだろ？どこなんだ？早く
教えてくれよ」

「ちよ、ジーノくん!?もうちよつと言い方が……! あつ、その、ごめん
なさい！」

「いいき。このくらのいのガキンチョは ちよつと生意気なぐらいが
ちよつといいからな」

軽快に笑いながら そう言ってくれた赤髪の方は、村の北のほうへ
と目をやり 指をさした。それにつられるように わたしたちも
ソツチへと目をむける

「あそこに朱色しゆの屋根の家が見えるだろ？」

「えつと……あの一番大きい、鐘かねがてっぺんにある建物ですか？」

「いや、それよりもちよつと手前。あの一番古い感じの家、あれがマイ

スの家だ。今日はまだ会ってないからわかんねえけど、きっといるはずだ。いなかったら……まあ、さつきお前が言った一番大きい建物に行つて聞きな」

「わかりました！ありがとうございます！」

「ありがとな！にいちゃん！」

わたしとジーノくんがお礼を言うのと、赤髪の方は軽く手を振つて首をすくめてみせた

「別に礼を言われるほどのことじゃねえよ。まあ、今度 オレの店で買い物して行つてくれたらいいさ。そろそろオレは行くぜ？ じゃあな」

そう言つて赤髪の方は マイスさんの家の方向とは別方向へと歩いていった

「んじゃ、場所もわかったし行こうぜ トトリ」

「うん、そうだね」

先に歩き出したジーノくんについて行くように わたしも歩き出す

歩きながら村の様子をよくよく見れば、村の人たちは 村の中にいるモンスターを別段気にしているわけでもなく、むしろ親しくしているような気さえした

中には 寝転んでいる『ウオルフ』をモフモフしている子供がいたりもしてた……わたしもモフモフしてみたいかも……

……そういえば、さつきの人「オレの店」つて言つてたけど、何かのお店の人だっかのかな？うーん、気になるけど……、どこにあるのかもわからないから 買い物しようがないなあ……

赤髪の人が教えてくれた マイスさんの家

その手前にある畑のそばに、胴に足と腕と頭がついた 人に似た形をした土の塊があつて、頭のとっぺんから生えてる大きな葉っぱがピコピコ動いているのが凄く気になったけど……とりあえず 家にたどりついた

「出かけてないといいんだけど…」

「そんなこと今ここで心配しても しょうがねえだろ。早くしよっぜ？」

「う、うん」

一歩踏み出して 玄関の扉へと手を伸ばす

コンコンツ

「はーいー！」

ノックをすると、家の中から返事が返ってきた。よかった、留守じゃないみたい

少し待っていると 扉が開いたんだけど…

「ごめんなさい、お待たせしましたー！」

出てきたのは、わたしよりも少し大きくて ジーノくんよりも少し小さい…そんな男の子だった

「あっ えっと、あの…わたし、ミスさんって人をさがしてるんですけど…」

「それなら 僕だけど……」
「えっ!？」

この子は マイスって人の子供か弟かと思っていたのに、本人だったことに驚かされた

そして、さらに わたしを驚かせる言葉が耳に入ってきた

「あれ? ツエツイさん…じゃない…:…ひよつとしてトトリちゃん? それに 後ろの子はジーノくんだね!」

えっ、ええっ!?ど、どどど どういうこと!?

マイスの家

「はい、『香茶』がはいったよ。それと、こっちは新作の『クッキー』。よかつたら食べてみて!」

「あつ、はい…!」

わたしとジーンくんは、マイスさんに勧められるがままに家に招き入れられた。そして、ソファアームに座ると 目の前にあるテーブルに『クッキー』と『香茶』が それぞれ用意されてきた

それにしても、まだ 何かあるのかな? マイスさんは また階段と壁の向こう側…たぶんキッチンがあるんだろう場所へと行ってしまった

「んおっ!?コレ、すっげーウメエぞ!!トトリ!お前も食ってみろよ!」

ジーンくんはジーンくんらしく いつも通りだけど…私はずき家の前で聞いたマイスさんの言葉のことで頭がいっぱいだっ

た
いったい どういうことなんだろう。わたしとジーンくん、それにツエツイ…ツエツイーリア・ヘルモルト…つまり わたしのおねえちゃんのことまで知ってるみたい

私たちのことを知っていて、わたしとジーンくんも マイスさんの名前を知ってる…それって、もしかしたら…

「なあ トトリ、お前が食わないなら 俺が食っても…」

わたしが考え事をしているうちに、いつの間にか 自分の前のお皿

にあった『クッキー』を食べ終えてしまったジーノくんが、わたしの方のお皿にゆつくりと手を伸ばそうとしていた

「って、ちよつと　ジーノくん！わたし、食べないって一言も言っていないよ!？」

「いいじゃん、あと一、二枚だけさあ」

「ダメ！あげない！」

「ちえ〜」

口をとがらせるジーノくんを横目に見ながら、わたしは『クッキー』を食べてみた

「あつ、美味しい…」

ただ甘いだけじゃなくて、なんだか口当たりがいい感じで……新作って言ってたのは、このあたりのことだったのかな？

もう一枚食べてから　今度は『香茶』を口にする。…うん！この『クッキー』は『香茶』との相性もいいみたい

「いいなあ、俺にも一枚くれよおー」

「もう、ジーノくんは　自分の分を食べちゃったんでしょ。あげないってば!？」

「あらら、やっぱり　育ち盛りには少し物足りなかったかな？」

そう言ったのは　キッチンから戻ってきたミスさん。その両手にはお皿…何だろう？なんだか黄色くて四角いものが乗ってる……

「なんだソレ？ウマイやつか!？」

少し興奮気味に言うジーノくんに、ミスさんはニツコリと笑いながらお皿をテーブルに置いた

「アーランド周辺にはないお菓子で、『むしカステラ』っていうんだけど……口に合えばいいな」

そう言った後、「あつ、でも…」とミスさんは付け足した

「この『むしカステラ』で最後だからね」

「ええー！なんでだよ」

「なんでって、夜ゴハンをしつかり食べるためだよ。…って、間食を勧^{すす}め

めた僕が言っても、あんまり説得力がないか」

少し困ったように笑いながら、テーブルを挟んで ソファアとは反対側にあるイスに座るマイルスさん

ちようど、その頃には『クッキー』を食べ終えていた わたしは、さつきからずっと持っていた疑問を聞いてみることにした

「あのー…少し聞いてもいいですか?」

「うん、いいよ!何かな?」

「マイルスさんは どうしてわたしたちのことを知ってるんですか?」

わたしがそう聞くと、マイルスさんは一瞬驚いた顔をした後「ああ…なるほど。まあ それもそうだよね」と 言いながら腕を組んでうなりだした

「どこから話そうか迷うけど…:二人のことを知ってるのは、前に僕が『アランヤ村』に行ったことがあって 二人に会ったこともあるからなんだ。:トトリちゃんのお姉さんが、今のトトリちゃんの歳くらいの時だったから もしかしたら憶えていないかもね」

前に『アランヤ村』に来たことがある…:そっか、だから わたしとジーンくんがマイルスさんの名前を聞いたことがある気がするんだ

…:でも、何故か その時のことは なんとなく思い出せない。その頃 わたしって、そんなに小さかったのかな?

「ああーっ!!」

『むしカステラ』を頬張^{ほおば}っていたジーンくんが、大声をあげた。ソファアから跳^はねる様に立ち上がって、そしてその手はマイルスさんを指差していた

「あの時の!ネコの人形劇の人と一緒にいた にーちゃん!!…:つて、ああ!だから あの受付のねえちゃんに何か見覚えがあったんだ!!」

「受付って、クーデリアさん? ジーンくん、そんなこと言ってたっけ?」

「ちげーよ!あの 変にビクビクしてたほう!」

そうジーノくんに言われて思い浮かんだのは、『冒険者免許』や『冒険者ランク』といった冒険者に関わることを取り扱っている受付の隣……街の人たちの要望等をひとまとめにして 依頼として冒険者や有志の人に出している方の受付だった

「えっと、それじゃあ フィリーさん？……でも、フィリーさん、わたしたちに会った時「はじめまして」って言ってたような……」

わたしの呟きに対して、何故かミスさんが困った顔をしていた
「うーん、たぶん それは二人が思った以上に成長してて気がつかなかった……っていうよりも、ただ単に 覚えてなかったんだと思う。あの頃は 今以上に人見知りか激しかったから、人の顔を見て覚えてきてできなかったし……でもなあ、そこまでは思ってたなかったんだけど」

そう言っているミスさんは、フィリーさんが わたしたちのことを覚えてないことに かなり驚いてるみたいだった

「……あれ？でも そうなると、二人は何で僕に会いに来たの？」

「あつ、はい！実はわたしたち 少し前に冒険者になったんですけど、『冒険者ギルド』でお世話になってるクーデリアさんに、アーランドで活動するなら助けになってくれるだろうって マイスさんことを教えてもらったんです。『錬金術』のことも知ってるって……」

わたしが簡単に説明しているうちに、ミスさんは二回くらい 目に見えて大きく驚いていた

一回目は「冒険者になった」と言った時、二回目は『錬金術』と
言った時だった

そして マイスさんは、思い出したように ポンツと手を叩いた
「名前までは聞いてなかったけど、ロロナが言ってた弟子っていうのは トトリちゃんだったんだね！なるほどー」

何かを納得したように ひとりウンウンと頷くミスさん

クーデリアさんが 「ロロナの弟子って知ったら〜」みたいなことを言っていた時に なんとなく予想してたけど、ロロナ先生とミスさんは何かしらの関係があるみたい

二人の共通点っていったら『錬金術』ぐらいだと思っから、もしかして、同じ人から教わったとかかな？

そんなことを わたしが考えていると、マイルさんが「それにしても…」と、どこか遠くを見るような目をしながらニツコリと微笑みをうかべて……

「まさか あのトトリちゃんが ギゼラさんと同じ冒険者になるなんてなあ……」

「えっ!?!お母さんのこと、知ってるんですか!?!」

驚いて とっさに出た言葉だった。…よくよく考えてみれば、前に『アランヤ村』に来たことがあるなら 別に知っててもおかしくなかった

わたしの大声に マイルさんは少し困惑していたみたいで、目をパチクリしていた

そして、いきなり大声を出してしまったことを わたしが謝るよりも、マイルさんが口を開くよりも早く……

「にーちゃんが『アランヤ村』に来たのって、たしか トトリのかーちゃんに会うためだったよな?」

その声はジーノくんだった。腕を組んで少しうなりながら首をひねり、必死に思い出そうとしながら 言っていた

ジーノくんの言葉に マイルさんは軽く頷いた

「そうだよ。人形劇とかの理由もあるにはあったけど、僕の中ではそれが本命だったね」

「んじやあさ、その後にかーちゃんに会ったことってある?」

「それは まあ何度も。…とは言っても ここ何年かは会えてないけど……ちよつと待ってね」

そう言っつて マイルさんはイスから立ち上がり、壁際の棚たなへと向かって行った。そして 棚の中の本の背表紙を確認しながら 一冊

を取り出し、ページをパラパラとめくりだした

そして、めくる手を止めたかと思えば、その本を見ながらイスまで戻ってきた

「最後に会ったのは、今からだいたい4、5年前で、その時に「今回はいつもより遠くに行くから、ちよつとの間、会えなくなると思う」って言ってたよ」

4、5年前……たぶん、ちよつどお母さんが帰ってこなくなったあたりだ

「お母さん、どこに行くか、言ってますでしたか…?」

わたしがそう聞くと、ミスさんは本から目を離して、わたしの方を見てきた。…その顔は、これまで微笑みをうかべていた顔とは違って、キリツとしていて、真剣そのものだった

「行先までは言ってたなかったね。…他に言ってたことといえば、「これまでに無いくらいの大物と闘えそうだな」ってことくらいかな」

「参考にはなりそうにないね」と、申し訳なさそうに言うミスさん
ジーノくんも「そっか…」と少し肩を落としてた

行方不明のお母さんの手がかりが見つかったと思っただけど、どこにいるか特定できそうな情報は、残念だけどなかった…

そう落ち込んでみると、ミスさんが「そのー…」と小さな声を出しているのに気がついた

そして、お母さんのこと・わたしが冒険者になった理由を、何一つ説明してなかったことに気がついた

「ご、ごめんなさい！いきなり色々聞いちゃって…！あの、その…!!実は…私が冒険者になったのは…」

「いや、僕が聞こうとしたのは、そっちじゃなくて……」

わたしの言葉をさえぎるように手で制しながら、ミスさんは言っ

た

「今日の夜はどうするか 決めてる？」

その顔は 会ってすぐの時と同じ、少し子供っぽい 柔らかい笑み
だった

1年目：マイス「冒険の そのまえに」

マイスの家・作業場

日はとつくに沈み、家々の灯りも ほとんどが消えてしまっている時間だ

けれど僕は すべきことがあったため、この作業場で一人 釜をかき混ぜていた

今日は色々と驚かされた

トトリちゃんとジーノくんが家に来たことから始まり、二人が冒険者になったこと、そして ギゼラさんのこと……

二人と話をした後、今日はうちに泊まっていくことになったので、今 二人は家にいる。村には宿屋はあるけど、「せつかくだから」と泊まらないか 僕が提案したのだ

急な提案だったけど、二人とも 夜ごはんを美味しくそうに食べてくれていたし、きつと 満足してくれていると思う……

そんな二人は夢の中。それぞれ二階と『離れ』で寝てもらってる

「トトリちゃんとジーノくんが冒険者に……それに、ギゼラさんか……」

思い出されるのは、最後に会った時の会話

当時の日記を読み返して日付まで確認した その日のことを……

—ある日のこと—

「ふう……これで当分 マイスの料理は食べられないねえ」

そう言ったのは、ついさつき 僕が用意した食事を食べ終え ソファーにドカリと腰を下ろしているギゼラさんだった

「どうしたんですか？いきなり」

「大した事じゃないんだけど、今度の冒険は ちよつと遠くまで行く予定なのさ。しかも、あたしがこれまで闘ってきた奴等よりも強いのと闘えるのさ！」

まるで新しいオモチヤを与えられた子供ののように笑顔ではしゃぐギゼラさんだったけど、僕はあることを思い出して 少し苦笑いが漏れてしまった

「そういえば、2,3回前の冒険前にもそんなこと言ってませんでしたか？で、その次に来た時に「拍子抜けだったー！」って愚痴ぐちってましてよね？」

「うっ……あ、あれは ちよつと噂うわさに踊らされただけだったのー！」

少しきまりが悪そうにしたギゼラさん。しかし、その顔もすぐに自信満々といった雰囲気になり 「けどー！」と言葉を続けた

「今度のは信憑性は抜群さ。なんせ あたしが昔から知ってる相手だからね」

「情報元は自分自身ってことですか」

「まあ、会ったことは無いんだけどね。だけど 絶対間違いないさ！！」
ギゼラさんがそこまで言うなら きつとそうなのだろう。これは次の時には良い土産話が期待できそうだ

「……ある意味ちよつと良かったんじゃないかい？あたしが前回の冒険終わりに立ち寄った頃から、マイス忙しそうじゃない。最近はずつとこんな感じなのかい？」

窓の外をチラリと見ながら ギゼラさんがそう聞いてきた

「それはまあ 忙しいですね。なにせ、慣れないことばかりですから…」

「あつはつはつは！人にもものを教える立場になってたら、いつの間にか その集団が村になって、そして 何故か村の代表になったって！あたしも聞いた時には アゴが外れるかと思ったよ！」

「僕としては あんまり笑えないというか……王宮の知人から「併合で大変って時に、なに新しい村作っちゃってるのよ！」って散々怒ら

れて…」

「まあ 良いことじゃないか。あんたの持つてる技術や知識が こんだけの人数に認められたってことはさ」

ギゼラさんがニカリと軽快に笑いかけてきた

僕も それに微笑み返し、頷いてみせた

「…はい！僕は今、すつごく充実してます！」

あの後、家から『アランヤ村』へ出発する際に ギゼラさんが僕の頭を撫でながら「んじや、行ってくるわ」って言って、僕が「お気をつけてー！」と返したのが、最後に交わした言葉だろう

「…それにしても、あのギゼラさんが 何年も連絡無しに行方不明だなんて」

にわかに信じがたいけど、トトリちゃんが嘘を言っているようには思えなかったから きつと事実なんだろう

正直なところ、冒険者が行方不明になるのは 偶にだけである。…：ただ、その大半は未熟な冒険者で 数日後とかに先輩冒険者に救助される

そんな中、熟練冒険者が行方不明になることは珍しい。少なくとも僕には覚えが無い

…：僕の頭の中には 少しでも疑問が浮かんでいた。それは、何処へ向かったかわからない点だ

子供だったトトリちゃんはまだしも、ギゼラさんの旦那さん…グイードさんが ギゼラさんから行先を全く聞いていないはずが無い。

…つまり、その行先自体 大変危ないところで、安否の確認のしようがないということなのだろうか？それとも、別に何か理由が…？

「でも、それだと トトリちゃんが何も知らないっぽいのは、ちよつと

おかしいような…?」

うーん……情報が少なすぎて、わからないことだらけだ

ポフンツ

そう音をたてたのは 無意識の中でもかき混ぜ続けていた釜だった

調査中だったことを すっかり忘れていた。…爆発しなくてよかった……

「久々のちゃんとした『錬金術』だけど……うん！上手く出来てるね」
釜の中の調査品の品質を確認して、ひとり頷く

「…さて、遠出も久々なわけだし、もうちよつと 多めに用意しとくかな」

また 釜の中に材料を入れて、再び『錬金術』による調査を行う

準備が全て終わったのは、日が顔を出しはじめた頃だった

準備を終えた後、朝一番の畑仕事にとりかかり、それを終えたら朝ごはんを完成一步手前までつくっておいてから、村の集会所に立ち寄って 少し遠出をすることを村の人に伝えた

そして、家に戻って 少ししたあたりで 二階からトトリちゃんが、その少し後に『離れ』からジーノくんが起きてきた

寝ぼけ眼の二人に顔を洗わせたのちに ソファアに座らせ、朝ごはんを出して食べさせる

ジーノくんの方は反応が良く、ごはんの匂いで目をパッチリと覚ましてした。対して トトリちゃんは半分寝たような状態で食べていたため 口周りなどが随分と汚れてしまったりと ちよつと大変

だった

…つと、そんな感じで色々であったんだけど、その後 僕の方から話をきり出した

「昨日言ってた トトリちゃんが一人前の冒険者になるための活動を手伝うって話、手助けをさせてほしいんだ。もちろん、年中ずつとかは厳しいんだけど、出来る限りは…ね？」

こつちから申し出る形にしておきながら、ちよつと勝手かもしれないけど 僕はそう言った。畑のことは 任せる相手が一応いるからいいけど、長い間 村を空けておくのは 他の住人に迷惑をかけてしまうので、そのあたりには目をつむってほしいのだ

トトリちゃんはいええ、嬉しそうに笑顔で

「わあ！ありがとうございますー！」
と、喜んでくれていた

「それで、たしか今日から探索に出かけるんだよね？」

「はい。アーランドの街とアランヤ村の間の地図を埋めようと思つて。だから、これから 一度『冒険者ギルド』に寄ってから『アランヤ村』まで 馬車じゃなくて徒歩で行こうと思つてるんですけど…その…ついてきてもらえますか？」

申し訳なさそうに言うトトリちゃんに、僕は笑顔で頷く

「もちろん、そのつもりだよー村の人たちには 家を空けることを伝えてあるし、冒険の用意もできてるよ」

それを聞いて嬉しそうにするトトリちゃんだったんだけど、その隣にいるジーノくんは ちよつと首をかしげていた

トトリちゃんもそれに気づいたようで、ジーノくんの顔を覗きこみながら問いかけていた

「ジーノくん、どうしたの？」

「いやさ、にーちゃん オレよりちっさいけど、ちゃんと戦えるのかつて思つて」

「あつ、確かに…」

ジーノくんの言葉に トトリちゃんが間髪入れずに同意した

…実際のところ、僕もちよつとだけ不安があったりはする。なんたつて、冒険なんて久々だ。特にここ最近、村や畑のことで大変だったのだから

「まあ、ふたりの心配も もつともだよ。実際のところ、ブランクがあるからね。…それでも二人の足を引っ張らないように 頑張らせてもらうよ！」

「そつか！なら、にーちゃんに何かあつたらオレが助けてやるよ！」

「ええつ……ジーノくんが助けるつて、それはそれで ちよつと心配かも…」

心配そうにしているトトリちゃんをよそに、ジーノくんは意気揚々としている。…うん！元気なことは良いことだと思う

「それじゃあ、街の『冒険者ギルド』に行こうか」

冒険者ギルド

ほんの2、3時間歩いてアーランドの街に付いた僕たちは、そのまま『冒険者ギルド』へと一直線だった

トトリちゃんたちが依頼の受付カウンターで モンスター討伐系依頼を吟味ぎんみしている間にクーデリアと、依頼を受け終わってクーデリアに挨拶しに行ったトトリちゃんたちと入れ変わるように フィーさんと、話しをした

とはいっても、ふたりとは 毎日とまではいかないけど 少なくとも2、3日に一回は会っているので、別段 長話になったりするわけでもないのだけど……僕がフィーさんと話している時のこと

「…本当に憶えてなかったんだね、トトリちゃんたちのこと」

「そ、そんなに残念そうな目で見ないでよう!? だって、あの時が初めての遠出だったし、周りが知らない人ばかりで怖かったんだからー！」

ちよつと言葉に詰まりつつも 慌て気味に言葉を返すフィリーさん。こういった ちよつとした意地悪を言っても、涙目になっているわけでもなく 微笑みまじりに言っているあたり、あの頃と比べて結構進歩したんじゃないだろうか？

……まあ、普段の 冒険者への対応を見ていないから、一概にはいえないんだけどね

と、そんなふうにはフィリーさんと話していたら、クーデリアと話し終えたのであろうトトリちゃんたちが いつの間にかそばまで来ていて、不思議そうにこちらを見ているのに気がついた

「あつ、ごめんね トトリちゃん。もう出発するかな?」

僕がそう言うと、トトリちゃんは「いえ、そんな急ぐわけじゃないから、いいんですけど…」と言いながら、やっぱり不思議そうに小首をかしげていた

「あの…フィリーさん。ジーノくんなんかに対しても怯えてたのに、なんでマイルスさんは大丈夫なんですか?」

「えっ、なんでって…それは……」

ああ、やっぱり まだ受付の仕事でも怯えたりしてるんだなーなんて考えながら、僕は二人の会話に耳をかたむける

トトリちゃんの斜め後ろにいるジーノくんと僕を チラチラと何度か見比べるようにしていたフィリーさんだったけど、それを止めてトトリちゃんへと向きなおし 口を開いた

「えっと、なんていうか……こう? 男の人ーっていう感じじゃなくて、マイルス君はマイルス君ーって感じだから……?」

「……? どういうことですか?」

「あー、ううん……自分でもよくわかんないかなあ? あははは……」

困ったように苦笑いするフィリーさん

もちろんトトリちゃんも 未だにわからないことに少し頭を悩ませているようだったけど、すぐに切り替えたようで、僕に出発することを伝えてきた

「それじゃあ、行ってきます!」

そう僕は フィリーさんとクーデリアに対して告げ、軽く手を振ってから、トトリちゃんたちと共に『冒険者ギルド』をあとにした

|||||

ミスたちが去った後の『冒険者ギルド』にて…

「あう…絶対 ミス君に嫌われた…」

「えっ?そういうふうには見えなかったけど、何かあったの?」

涙目で泣き言を言うフィリーを「いつものことだ」と流そうと思っていたクーデリアだったが、フィリーの言葉の内容を聞いて、つい聞き返してしまった

「私、「ミス君は男の人な感じがしないー」みたいなこと言っちゃったんです!!」

「はあ…?」

「きつとミス君「僕、男としての魅力が無いんだ…」って思って、そして私のこと……」

「いや、待て。どうしてそうなるのよ」

ため息をついて 呆れたように首を振るクーデリア

「あいつに男としての魅力があるかどうかは一旦置いて、そもそも 異性からの目を気にするような奴じゃないでしょ。気にするよな奴なら とつくに誰かと くつついてるわよ」

「ええっ!?ま、マイス君、もう誰かと…!?」

「「なら」って言ったでしょ!たどえ話よ!!馬鹿なこと言ってないで、さっさと仕事に戻りなさい!」

「は、はい…!」

依頼の受付カウンターのほうへ戻って、依頼書の束の整理をしはじめるフィリー

その様子を確認した後「心配して損した…」と小声でもらし、クーデリア自身も 自分の仕事を再開した

1年目：トトリ「マイスさんとの冒険」

アーランドの街からアランヤ村を目指し、街を出て 南方向へ進みはじめて4日ほど経ったある日の朝

「ねえ、ジーノくん」

「ん？どうした？」

朝起きてから マイスさんが用意してくれた朝ごはんを食べ終え、出発する準備をしている途中に、あることが気になってジーノ君に問いかけてみる

「わたしたちが昨日寝たのって、こんなところだっけ？」

「何言ってるんだ？街道のわきの樹のそばで寝てただろ？」

「でも、道を挟んだ向こうに あんな岩あったっけ？」

指で 人の腰くらいの高さがある岩を指し示しながら聞いてみると、ジーノ君は少し首をかしげたけど、その間を開けずに言葉を返してきた

「きつと気のせいだって。ほら、昨日は暗くなってから野宿の準備しただろ。焚火たきびくらいしか灯りが無かったから、岩に気づかなかったんじゃないか？」

「そうかなあ…？ジーノ君はともかく、普通は気づくと思うんだけど……」

うーん……やっぱり、昨日寝た時には無かったような気がする

それに、気になることといったら 実はもう一つある

それは、アーランドの街を出て 南へ進んでいって 最初にたどり着く採取地『旧街道』についた時に少し気になったこと

支給品の地図とこれまでの経験を照らし合わせて 街からは約3日で『旧街道』に到着する予測だったんだけど、わたしたちが実際に着いたのは1日と半日くらいしかかからなかった

予測の方法が間違ってたのかって思ってたけど、よくよく考えてみ

たら いくらなんでも1日以上の誤差は大き過ぎると思う

「うーん……?」

「トトリちゃん、どうかしたの?」

ひとりで唸っていると、そんなわたしを心配してか 野宿の片づけを終えたマイスさんが聞いてきた

「あつ その、実は 少し気になることがあって……」

マイスさんにもジーノ君に言ったことと同じことを聞いてみた。
そしたら……

「それは まあ、寝たのは『旧街道』を出て 1日歩いて行ったところで、今いるのは あと少しで『埋もれた遺跡』に着く場所だからね」
「えっ」

マイスさんは、ここが寝た場所じゃないってことを いきなり言ってきたんだけど……って、えっ!?

これには 話を聞いてたジーノ君も驚いたみたいで、驚いた顔をして マイスさんに詰め寄っていた

「どういうことだよ!?俺が寝てる間に何があつたんだ?」

「何がって、寝てる2人を 運んだよ。ほら、錬金術士って調合に時間かかっちゃうから こういう移動で時間短縮したほうがいいかなって思ってる」

「運んだって……全然気づかなかった」

「わたしも……っていうか、マイスさんって小さいのに、同じくらいの大きさの わたしとジーノ君を運べるのかな?」

そう言いながら マイスさんを頭から足までジイーっつと見てみる

身長は 本当にわたしたちと変わらないくらいで、別に腕も特別ガツシリしてはいない。……仮に人をふたり担^{かつ}げるほどの力持ちだったとしても、寝ていた わたしにも ジーノ君にも気づかれないように運ぶなんて……

そう考えてたら、マイスさんが なんだかすごく心配そうな顔になった

「もしかして、途中で寄りたいところとかあった!？」

「いえ、ありませんよ?むしろ 次の採取地に早く着くんだから ありがたいくらいです!……でも、本当に どうやって運んだんですか?」

わたしの問いかけにジーノ君も頷いて マイスさんのほうを見る。そのマイスさんかというと、「あははは…」と笑いながら 手を軽くパタパタと振った

『「アクティブシード」って、言ってるね。今は休ませてあるからね。また後の機会に紹介するよ」

「休ませてる?」

「それじゃあ 行くうか」

色々 すごく気になるけど……まあ、後で教えてもらえるならいいかな?

ジーノ君も 一応は納得したみたいで、一緒に歩き出した

埋もれた遺跡

「うわあー、すげーデケーな」

「本当……こんなのどうやって造ったんだろう?」

ジーノ君と一緒に見上げるのは 大きな鋼の塊。この採取地の名称の由来にもなっている『遺跡』だ。大きな邸宅ほどありそうな大きさだけど、地面に埋もれてる部分よりも下があるんだとすれば、もっと大きいのもしれない

「ほら アーランドの街にあった『機械』ってあったよね?アレは こういう『遺跡』から発掘されたものなんだよ」

そうマイスさんが 軽く教えてくれた。

『機械』はアーランドの街の発展に大きく関わっているものだとは

聞いたことがある。実際に動いているのは見たことは無いし、街のいたるところにあったわけじゃないけど、街の広場とかで 見かけた覚えがあったから「なるほど」と納得することが出来た

「それじゃあ、ここににあるものを持って帰ったら 何かに使えたりするのかな？」

ジーノ君の問いに マイスさんが首を振った

「難しいと思うよ。もしここに使える『機械』があったとしたら もう持ち出されてるだろうし、パツと見てわかる 壊れたやつの子品のほうも、そういう専門の人じゃないと価値は無いかな」

「なら、ここで 採取しても あんまり意味無いのかな……？」

「そんなことはないよ！ここにあった『機械』で使ったのか、それとも たまたまなのか 『フロジストン』や『弾む石』なんか採れるからね」
『フロジストン』は火薬になる鉱石の一種で、これまでも爆弾の調合に使ったことがある

『弾む石』は……一回も見たことが無いから 何もわかんないや……名前そのままだとすれば、弾むんだろうな……石が。自分で言っていてよくわからない。そんなものが『錬金術』に使えるのかな？

それじゃあモンスターに気をつけながら 採取していこうか……って、そうなるうとしたときに、『遺跡』の陰から 人影がフラリと出てきた

「ほう、こんなところに キミみたいなお嬢さんがいるなんて珍しいね」

リュックサックを背負ったモジャモジャ頭の眼鏡の人は、そう言っ
て わたしを見た後、そのままの流れで わたしの隣にいたジーノ君を見て……その後ろのマイスさんに目をやったかと思えば、その眼鏡の人は ため息をついた

「なんだ、キミのお連れさんか……」

「お連れさんっていうか、僕が連れられて来たんですけどね」

残念そうに言う 眼鏡の人に対し、マイスさんは ちよつと困ったように笑って返した

「いや そこはあんまり重要じゃないんだけど……まあいいか、ある意味タイミングがいいわけだし」

：よくわからないけど、ふたりは顔見知りなのかな？ 話すふたりを見て、なんとなく そう思った

ジーノ君はといえば、どうしてればいいのかわからず 立ち止まりながらも、早く冒険を再開したいのかウズウズしだしていた

「あの、マイスさん。この人は マイスさんのお友達ですか？」

気になったから聞いてみたんだけど、それに答えたのは マイスさんじゃなくて、眼鏡の人のほうだった

「いやあ、別にそんなに深い仲じゃないし、僕個人としては——」

話す眼鏡の人の後ろ……さっき眼鏡の人が出てきた『遺跡』の陰のほうから 見たことの無いモンスターが3体出てきた

羽根をはたかせ、頭に2本の角を生やした その小さな悪魔のようなモンスターは、わたしがこれまで戦ったことのある『ぷに』や『ウォルフ』たちよりも 威圧感があって、未知の強さを持っていることが感じられた

「後ろにモンスターが!!」って、わたしが注意をとばす、それよりも先に……

赤と青の線が 3体のモンスターにクロスするように走り、淡い光を放った

わたしとジーノ君、それに 振り返った眼鏡の人が目にしたのは、綺麗サツパリいなくなったモンスターと、モンスターのいた位置まで いつの間にか移動していたマイスさん。：その両手には 赤の

刀身と青の刀身の剣が握ってあった

『旧街道』でモンスターと戦ったときに　マイスさんが持っていたのは、ごく普通の剣だったはず……

そんなことを考えてるなか、最初に口を開いたのは　眼鏡の人だった

「さすがだねえ。こういう仕事の早さは　素直に称賛するよ」

「なに呑気なこと言ってるんですか！あんなモンスター、こんな所にまで連れこんだらダメじゃないですか！」

「誤解だつ、僕も　あんなモンスターがこんな所にいるとは思ってなくてね。だけど、キミのおかげで『遺跡』の調査が再開できるよ。それじゃー！」

珍しく怒り気味なマイスさんから逃げるように、眼鏡の人は『遺跡』のほうへと走って行ってしまった

「えつと……今の人は？」

走っていった人を追いかけることもせず、困った顔をしていたマイスさんに　聞いてみた

「そしたらマイスさんは「ああつ、まだ紹介してなかったね」と思いつ出したように言い、剣をバッグに入れながら教えてくれた

「アーランドでも指折り……というかトップクラスの機械技師のマーク・マクブラインさん。別名『異能の天才　プロフェッサー・マクブライン』……だったっけ？」

「いのーの？」

「あははは……、気にしないで。そのあたりは僕もわかってないから……。まあ、とりあえずは『機械』に詳しい人」って憶えておけばいいよ」

「なんだか凄そうな感じがするけど……さっきの飄々とした様子を見た後だと、どうしても凄い人には思えないなあ……」

その後、改めて採取を始めたんだけど……

「なあなあ！さっきの赤と青の剣、なんだったんだよ!?ズバズバーって!!もう一回見せてくれってばー!」

「ええっ、あれは『フォースデイバイド』っていう 火と水の力を持った双剣で……今はブランクを取り戻したいから、なるべく 追加効果の無い剣を使いたいんだけど……」

「いいじゃんかー！ケチー!!」

ジーノ君にずっと詰め寄られてて、マイスさんがちよつと大変そうでした……

1年目：マイス 「事実へと至る時」

アランヤ村

「ついたー！」

「はあー、そんなに経ってないはずなのに、やけに久々に感じるな！」

『アランヤ村』が見えるやいなや、元気に駆け出したトトリちゃん
とジーノ君を慌あわてて追いかけて、追い付いた時には ふたりして村の入り口で身体を伸ばしながら爽やかに声をあげていた

『アランヤ村』……変わってないなあ……」

さすが海辺の村。潮風が鼻をくすぐる。あたりを見渡してみると、数年前に訪おとすれた時と大きく変わったところの無い風景が広がっていた

白を基調とした壁に やや黄色よりのオレンジ色の屋根の家々。アーランドの街の建物たちとは違って、1階建て……もしくは2階建ての建物ばかりだ

そして、村の入り口のほど近くにある イカリのモニュメントがある小池。あのそばで リオネラが人形劇をしたんだっただよなあ……

「マイスさん？」

そんなことを思い出していると、いつの間にかコツチを向いていたトトリちゃんが、不思議そうに僕の顔を見つめているのに気がついた
「……ああっ、ごめんごめん！ちよつとボーツとして……なにかな？」
「えつと、わたしとジーノ君は ゲラルドさんのところに依頼の報告をしに行こうと思うんですけど……マイスさんはどうしますか？もし、何も考えてなかったら一緒にきませんか？」

ゲラルドさん……酒場でマスターをしている人だったよね？あの人のところでギルドの依頼を受けられるようになってるんだ

あの人は、なんでマスターをしているのか不思議なくらい逆三角形体格で、それこそ冒険者か鍛冶屋さんのほうが似合っってそうな印象だっ

たな…

「うーん、できれば グイードさんに会って挨拶したりしたいんだけど…」

「お父さんですか？それなら、埠頭ふとうで釣りしてるか、それか 家にいると思います…たぶん」

船が泊まっている港の先で 釣りか…：…そういえば、前に来た時も釣りをしてる時があっただけ

でも、気になるのは トトリちゃんの様子。なんだか とても心配そうな顔をして、何かを言い淀ひたひたんでる感じがする

「あ、あのーちゃんと目を凝こらせば きつと見つけられるはずですかー！」

「えっ?」

「その、お父さんって影が薄うすいっていうか、存在感がないっていうか…」

トトリちゃんの後ろで話を聞いていたジーノ君も「あー、確かに」と頷うなずいている

それはまあ、グイードさんは特別 特徴的な髪型や服装をしていた記憶はないけど…：…それでも、人混ひとごみの中とかならともかく こんなところで見つけられないはずがないと思う

いや、そうになると、トトリちゃんのこの反応はどういうことだろう…?」

少し気になるところがあるが、とりあえず トトリちゃんたちとは別れて、トトリちゃんのお父さん…グイードさんを探すことにした

ヘルモルト家・前

埠頭でグイードさんを見つけ出せなかった僕は、村の中心部から少

し離れた 海のそばの高台の上にある『ヘルモルト家』へと足を運んだ

以前に来たことがあるので 場所はわかっていただけ、記憶していたのは外観がかなり変わっていて驚いたが、あることに気がつき 納得する

家のほうをむいて立った時の、向かって右側。見覚えの無い煙突等、外観が最も変わっていた部分なのだが、そちら側の扉の上あたりに 釜かまをモチーフにした小さめの看板がかけられている

釜は 錬金釜をあらわしているのだろう。つまりは あの右側の部分が トトリちゃんの『アトリエ』というわけだ。おそらく、トトリちゃんが『錬金術士』になった際に 家を大きく改築したのだろう

そんなふうには 目に見える変化を感じながら、僕は アトリエへの入り口らしき扉…ではなく、大元の家の玄関のほうの扉の前に立つ
コンコンコンツ

「はい」

ノックをすると、そう間を開けずに 女の人の声が聞こえた。おそらく、ヘルモルト家 長女でありトトリちゃんのお姉さんのツエツイさんだろう

そして、玄関の扉が開かれて、家の中から女の人が出てきた

「お待ちせしましたー……って、マイス……さん？」

「お久しぶりです、ツエツイさん」

トトリちゃんの時とは違い、ツエツイさんは 僕のことを憶えていたみたいだ

……そして、微妙にツエツイさんのほうが僕よりも身長が高くなっていた。予想はしていたけど、全くショックを受けないわけじゃない

「あの、グイードさんいますか？」

「お父さんですか？え、ええつと……まだ家にいるかしら？」

「ああ、いるよ」

「えっ…きやあ?」

玄関に立っていたツエツイさんが振り向いて家の中を確認しようとした。ちようどその時、ユラリとツエツイさんの後ろにグイードさんが突然現れたように見えた

そして、突然現れたグイードさんに、ツエツイーさんは盛大に驚いて 短い悲鳴をあげていた

「久しぶりだね、マイス君。今日はどうしたんだい…いや、大体 見当はついてるんだけどね。…村まではトトリと一緒にだったのかい?」

僕が頷いて答えると、グイードさんは「そうかい」と柔和な笑みを浮かべながら 頷き返してきた

僕は、グイードさんに、少し違和感を感じていた。前に会った時、ここまで気の抜けたような感じのするような人ではなかった記憶がある

変わってしまった理由…いや、考えなくても わかる

「ツエツイ。仕事に行く前に、ちよつと 頼みたいことがあるんだ」

「えっ」

「彼と、少し話がしたいんだ。少しの間、家の外で トトリが帰ってくるのを見張っててくれないか?」

「お父さん…」

心配そうにグイードさんのことを見つめるツエツイさん。そんな彼女に対し、グイードさんは軽く首を振りながら「気にすることは無いさ」と言った

「ツエツイの言いたいことはわかる。でも、僕個人として 彼に話しておきたいのさ…あいつの友達のマイス君にね」

「……わかった。トトリちゃんが来たなら…軽くノックして私から入るから、別の話に切り替えてね。 ささっ、マイスさん入ってください」

ツエツイさんに促されて家へと入ると、グイードさんが「このイスにでも座るといい」と、本来 食卓なのであろうテーブルそばのイスを勧められた。そして、僕がイスに座ると、テーブルを挟んで対面す

る位置のイスにグイードさんが座った

「さて……君が来たのはあいつの……ギゼラのことだろうか?」

「はい。ギゼラさんのところは トトリちゃんから聞きました。……でも、わからないことがあるんです」

そう 僕が話したすと、グイードさんは少し険しい表情になって僕のことを見据えてきた。だけど、臆することはせずに 言葉が続ける

「冒険者には、偶にですけど行方不明者が出て その人のランク以上の人を捜索に出すことがあります。僕も 何度か参加したことがあるんですが……その、僕は ギゼラさんの行方不明については 一度も聞いたことがありませんでした。だけど それは……」

「おかしい……って思うよね。捜索願いを出せないのなら 行先がわからないからはず……だけど、あいつが行先を言わずに行っただとは 君は思えなかった。そうだろうか?」

「……はい。そうしたら、ギゼラさんの情報を止めてるのは 間違いなく『アランヤ村』の人たち。……でも、理由も無く そんなことをするのは思えません。 たぶん、何か決定的なものがあつたから……」

『冒険者ギルド』に話がいくことがなかつたんですよ?……そう僕が口にする前に、グイードさんが「ふう……」と小さく息をつくのが聞こえ、それが肯定なのだと なんとなく感じた僕は口を止めた

『『フラウシュトラウト』……港を出て 外海へと向かうと出会う化物だ。昔っから 欲を出して遠くまで漁に出た船なんか 襲われ て沈められたりしてきたもんさ』

海岸線にある『アランヤ村』では 漁師が多く、他の職も漁や海に関係する職が大半を占めている。その『フラウシュトラウト』というモンスターは 昔から縁の深いモンスターだったのだろうか

なるほど、だからギゼラさんも よく知っているようなことを言っていたんだ

「あいつは、その『フラウシュトラウト』のもとへと向かったんだが……数日経ったある日 流れ着いたんだよ、私が造った……あいつが乗った船の残骸が」

「……そのことを トトリちゃんは？」

「……残骸が流れついた時、何も理解できてないトトリに 不用意に言ってしまったんだ「お母さんが死んだ」とね。……それから1週間くらい泣き続けて……泣き止んだ時には、トトリはあいつのことを ほとんど忘れた状態になったしまっていた……」

そんなことがあったからトトリちゃんには二度と知られないように 村のみんなにも秘密にしてもらっているんだ、と グイードさんは付け加えた

……グイードさんは「不用意に」と自ら言ったけど、それを責めることが出来る人がいるだろうか

自身の 船大工として最高の仕事を尽くしたのであろう船に乗った奥さん……ギゼラさんが、帰って来ずに 船の残骸が流れ着いた。きつと、自責の念や自身の無力感を 想像を絶するほど感じ、自身の心の整理もつかぬうち……だったのだろうか

僕には計り知れないほどの大きさ………けど、何故か僕の心の中は スツキリとしていた

「話を聞かせてくれて、ありがとうございます。……おかげで、自分のすべきことが しっかり見えてきました」

僕が頭を下げ 礼を言うと、グイードさんは 驚いたような顔をした後、何を思ったのか なだめるような口調で僕へ言葉を投げかけてきた

「君のように利口な子ならわかってると思うけど、『フラウシュトラウト』を倒しに行くなんてこと 言わないだろうね？ ヤツは——」
「言いませんよ」

グイードさんの言葉を さえぎるように言う。グイードさんは また驚いた顔をし、僕を見据えてくる

「でも、利口だからなんて理由じゃないです。『フラウシュトラウト』の恐ろしさを知らない、流れ着いた船の残骸を見てない……どんなモンスターにも負けないギゼラさんの強さしか知らない。僕の無責任な考えです」

僕は言葉足らずどころか、失礼なことしか言えないかもしれない。だけど、僕は 僕自身が思っていること以上の言葉なんて言えないことは百も承知だし、それでも 伝えたいことがあるなら口を動かさないといけないことも知っている

「ギゼラさんは『フラウシュトラウト』なんかに負けません！グイードさんの造った船の残骸は『フラウシュトラウト』よりも強いヤツに……そう！ギゼラさんが勢い余って壊しちやっつた部分に間違いありません！」

思ったことを、思いついたことを、そのまま口にする。……正直言って、半分 自分で言っていることがわからなくなってきた

「ええつと、だから その…ギゼラさんのことは トトリちゃんとの約束の次で大丈夫だって思ったんです」

「約束…？」

「一人前の冒険者になるための活動を手伝う」って約束をしたんです。約束を放り投げて ひとりでギゼラさんを探しに行くわけにも行きませんし……って、あれ？トトリちゃんが冒険者になったのはギゼラさんを探すためだから、ギゼラさんを優先したほうがいいのか？でも…」

少し口の動きを止めたとたん、自分の考えていることが 無茶苦茶になりだしたことに気がつきはじめた

「ははっ、まあ 『フラウシュトラウト』に沈められないように造った船を壊せるような奴は あいつくらいだろうな。モンスター退治で 橋を落としてしまったこともあるから、否定しきれないのが痛いな……それに、あいつの言っていたことがよくわかった」

「ギゼラさんの言っていたこと…？」

「マイスのやつは 見た目のわりには大人びてるけど あたしと同じ直感で動くやつで、そんでもって 必死になればなるほど歳相応になるカワイイ奴だ」って、笑いながら話してたよ。確かに あいつと同じで言ってることが無茶苦茶だ」

懐かしむように言うグイードさんだけど、聞いている僕としては「そんなふうにおもわれてたのか!」と「もしかして、そんな話を他の人も聞いてるの!?!」というふたつの思いが混ざって、すごく恥ずかしくて顔が熱くなってきていた

「あのー……ギゼラさん、そんなこと話してたんですか?」

「ああ。冒険の後 君のところに寄って帰ってきた日には特にね」

「ちよつと 聞くのが怖いですけど……例えば どんな話を……?」

「料理のことが半分、冒険譚ぼうけんたんを目をキラキラさせて聞いてくる……とか、面白い武器を沢山持つてる……とか。他には……」

……とりあえず、ギゼラさんが 僕の秘密のことを話していないことに一安心し、肩をなでおろすが、別の意味で困ることを グイードさんは口にした

「あとひとりくらい子供が……息子がいても良かったかなー なんて言ってたよ」

「あの……それを聞いた僕は、どういう反応をすれば……」

「あははは……困るよな。あの時は私も困ったよ、いろんな意味で」

その頃のことを懐かしむようにしていたグイードさんだったけど、ふいに 僕の目を見て問いかけてきた

「なあ、マイス君」

「なんででしょう?」

「一緒に冒険してみた君から見て、トトリは冒険者として ちゃんとやっていけそうかな?」

「……心配いりませんよ。トトリちゃんは一步一步しっかり踏みしめて行く 真面目な子でしたから」

「そうか、君が言うなら間違いないだろうね」

安心したように微笑むグイードさん

Bannon!

と その時、玄関の扉が勢いよく開け開かれた

そこにいたのは、随分と肌の露出の多い女性。その後ろには慌てた
様子のツエイさんが…

そして…

「……ウソ、育ってなくない…?」

女性の一言が 僕の精神を容赦なく抉った

1年目：トトリ「マイスさんとメルお姉ちゃん」

今 わたしがいるのは村のそばにある開けた空き地。わたし以外にも ジーノ君やお姉ちゃん、ゲラルドさんまでいる

そして わたしたちが見つめる先には、ポーチを漁っているマイスさんと 軽く準備運動をするメルお姉ちゃん……そう、何故か このふたりが勝負することになったのだ

「ううつ……なんで こんなことに……」

マイスさんと別れてから、ゲラルドさんの酒場で依頼の報告をし、そのままそこでお喋りをしていた

ちょうどそこに 冒険から帰ってきたメルお姉ちゃんが来て、お喋りに参加。マイスさんと一緒に冒険をして『アランヤ村』まで帰ってきた っていう話をしたあたりで、メルおねえちゃんが「そのマイスは今どこにいるの!？」って聞いてきて、酒場を飛び出して行って、追いかけてみたら………なんでか知らないけど、マイスさんとメルお姉ちゃんが勝負することになっていた

「それにしても、どうして勝負なんかを……?」

「それはメルヴィアからだろう。腕試しに感じてだと思うが……」

わたしの呟きに答えたのはゲラルドさんだった

「メルお姉ちゃんが?なんでマイスさんに?」

「何故って、それは……」

何かを言おうとしていたゲラルドさんが不意にその口を止めて、困ったような顔をして明後日方向を向いてしまった

ゲラルドさんの様子を不思議に思ったわたしが そのことを問いかけるよりも先に、また別の声が入ってきた

「それは彼が 一流冒険者の中でもトップクラスの實力者だからだろうね」

「きやあ!?!お、お父さん?いつからいたの!?!……って、え? トップクラス……!?!」

いつの間にかそばにいたお父さんに驚いたけど、そのお父さんが口

にした言葉に さらに驚かされた

ジーノ君も わたしと同じように「はあ!?! 本当かよ!?!」とすつごく驚いていた

そんなわたしたちに、軽く笑いながらお父さんが。続いて、少し呆れたようにゲラルドさんが言ってきた

「本当さ。何年も前だが、その時 聞いたときには、もう 最高ランクの一步手前の冒険者だったんだ」

「お前たち、アーランドからこの村まで 一緒に冒険してきたんじゃないのか?」

い、言われてみて 改めてマイスさんとの冒険を思い返してみたら、マイスさんは いつも一撃でモンスターを倒してた。それに あの眼鏡の人と会ったときなんて、わたしが目で追えないくらいのスピードで モンスターをバシユン! って…

でも……

「確かに、マイスさんは強かったんだけど…だけど…」

「ああ。なんか、強いって印象は無いんだよな…」

ジーノ君も・わたしと同じことを考えてみたいで、「うーん…」と悩みながら わたしの言ったことに頷いて 言葉を続けてくれた

「それじゃあ、ふたりから見て 彼はどんな人に見えたんだい?」

「いつもニコニコしてて、素材の…特に植物のことに詳しくて、『黄金平原』と『自然庭園』にいた人たちと凄く仲が良い…えつと 農家さん?」

「見たことねえ赤と青の剣持ってて、動く植物 使う変わった人。あつ、あと 作ってくれる料理がすっげえウマイんだ! 冒険中の野宿のじゆくであんなウマイの食えるなんて思ってたぜ!」

わたしたちの話聞いたゲラルドさん、お父さん、おねえちゃん、首をかしげて「どういうこと?」と いまいち理解できてないようだった

「っお！始まるみたいだ」

ジーノ君の言葉に、みんなが　メルお姉ちゃんとミスさんがいる方へと向く

準備運動を終えたメルおねえちゃんが　身の丈ほどある愛用の斧おのを手にして、軽く振り回した後　肩にかつぐような形の構えに入った
対して　ポーチを漁っていたミスさんは、ポーチから何かを2本取り出して　両手に1本ずつ持った

「えっ」

白く伸びるそれは　先端のあたりで二股になっていて、そのあたりは鮮やかな緑色だ……

そう、ミスさんが両手に持っているのは、間違いなく『ネギ』だった

「それじゃあ、はじめようか！」

「え、いや、ちよつと待って」

意気揚々と言うミスさんだったが、メルお姉ちゃんがそれを止める

「えーつと…ソレでやるの？」

「うん。普通の剣使って　怪我でもさせちゃったら悪いからね」

どうやら　ミスさんなりの配慮だったみたい……だけど、『ネギ』って　どう考えても剣の代わりにはならないと思うんだけど…

わたし以外のみんなも　当然　同じように考えているみたいで、「大丈夫なのか？」と不安そうに見ている

「あー　うん。ソレでやれるならいいんだけど……」

ため息を吐きながらも　もう一度　戦闘態勢に入るメルお姉ちゃん。それを見たミスさんもかまえる……

先に動いたのは、メルお姉ちゃんだった。マイスさんへと突っ込んでいき、斧を豪快に振り下ろす。それは直線的な攻撃だったけど、斧の重さを活かした一撃必殺の一撃だ。これはあくまでも勝負なので、メルお姉ちゃんも直撃を避けるようにしたり手加減をしているとは思う。でも、このままだと、大ダメージは必至。マイスさんは身を振ってかわそうとする……そう思ってた。

ポコッ！

ポコオ！

メルお姉ちゃん顔が驚愕に変わる。たぶん、わたしたちも似たような顔をしていると思う。

マイスさんは、避けようともせず、一対の『ネギ』で、せまりくる斧を迎撃……はじき返して見せたのだ……斧とネギがぶつかった音が、何だかマヌケな音だったのは気にしないことにする……

攻撃を弾かれたメルお姉ちゃんは、体勢を立て直し、今度は斧を横に振る。自身を軸にしてそのままマイスさんのほうへと突っ込む。しかし、それも、振り回す斧の横っ腹を見事に『ネギ』で力チ上げられ、メルお姉ちゃんは斧に引っ張られるように後ろに体勢を崩してしまう。

「なあ、トトリ」

そんな様子を見ていたジーノ君が目を丸くさせて言う。

『『ネギ』って、強いんだな……！』

「うん……って、いや、アレが特別凄いだけだと思うよ……？」

でも、アレが本当にわたしの知ってる『ネギ』なのか疑問ではある。斧が振り下ろされたときには、へニョって折れてしまうと思ったのに、折られることも切られることも無く、普通にピンつとしたままだし……

わたしとジーノ君がそんな話をしている間も 勝負は続いている
ネギが斧を弾き、そらし、受け流し……攻めているのはメルお姉
ちゃんなんだけど、いつこうに メルお姉ちゃんの一撃がマイルスさん
に入りそうはなかった

そして、マイルスさんのほうはといえば、自分から攻めたりはしてな
いんだけど、よくよく見れば 斧での攻撃をさばいた後に、メルお姉
ちゃんを『ネギ』で軽く叩いているのがわかる
つまり、これって……

「マイルスがその気なら、とつくに勝負はついてるな」

わたしの考えを代弁するようにゲラルドさんが言った。そして、そ
の言葉を聞いて驚いた顔をしたのが 戦闘に関して知識や経験が全
く無い おねえちゃん

「マイルスさんって、メルヴィより そんなに強いんですか!？」

「相性の良し悪しも当然あるが、あれは完全に遊ばれてる。…メル
ヴィアのやつ、そろそろ しびれを切らすぞ」

ゲラルドさんの予想は 間違っていないかった

斧の一撃をそらし、『ネギ』でメルお姉ちゃんのわき腹をポカリツと
叩いたマイルスさんが、メルお姉ちゃんから距離をとった……その時
「ああーもうっ!!」

距離をとったマイルスさんにむかって メルお姉ちゃんが斧を投げ
放った

メルおねえちゃんと冒険に行った時に何度か見たことのある『アク
ストライク』っていう 敵に斧を投げ、それが手元に戻ってくる技
だ

メルお姉ちゃんが切りかかるのとは 比べ物にならないスピード
で飛ぶ斧。当然、当たったら 大怪我すること間違いなしだ

「ウソっ!？」

そう驚いたのはメルお姉ちゃんだった

何が起きたのかといえ、マيسさんが一瞬で迫ってきたのだ。飛来する斧の下を凄く低い姿勢で、わたしがギリギリ目で追えるくらいのスPEEDで突進してきたのだ

もしかしたら、メルお姉ちゃんの位置からだったら、一瞬マيسさんが消えたように見えたかもしれない

でも、メルお姉ちゃんも凄かった

驚愕の声をあげるのとほぼ同時に、低姿勢で突進してくるマيسさんにむかって蹴りをくりだしたのだ………だけど、ここからわたしには理解のできないことがおきた

蹴りをしたメルお姉ちゃんが、次の瞬間、浮き上がり、そこからまた一瞬おいて、背中から地面に叩きつけられた

そして、いつの間に、そこに立っていたのか、倒れるメルお姉ちゃんのそばに立つマيسさんが、回転しながら戻ってくる斧をキヤツチした

「勝負あり……かな」

自分の背丈に、負けずとも劣らない大きさの斧を肩でかついだマيسさんが爽やかに笑いながら言った

「あはは……とっさの蹴りで、片足浮かしちやっただのはマズかったか……それ以前の問題な気もするけど」

上半身を起こしたメルお姉ちゃんの顔は、思いの外、明るかった。立ち上がろうとするメルお姉ちゃんに、斧を地面に突き刺したマيسさんが手を差し伸べた。「ん、ありがと」と言いながらメルお姉ちゃんはその手を取った

「しかし、最後のほうは、まるでわからなかったな……」

ゲラルドさんの言葉に、わたしたちは頷いた

「俺もよくわかんねえ……ビューっていったらドンってなった!」

「私も何が何だか……トトリちゃんはわかった？」

「飛んでく斧の下を通ってたのが、ギリギリわかったくらい。でも、いつの間に『ネギ』を腰のベルトに収めたのが……それに、メルお姉ちゃんが何で負けたのかもわからなかったよ……」

「何でって、それはあたしがブン投げられたからよ」

わたしの疑問に答えたのは、戻ってきたメルお姉ちゃんだった

そのすぐそばには、ポーチに『ネギ』を片付けているマイスさんもいる

「投げられた？」

「そつ！あたしが蹴ろうと動かしした脚を掴みあげてね。掴まれたって思った。次の瞬間には身体が浮かんで……でもって、体勢立て直すヒマも無く叩きつけられたってワケ。突進してきた速度も合わさって、一瞬で 対応のしようがなかったわ あれは」

困ったように言うメルお姉ちゃん

とりあえず、怪我也なさそうで 元気だったから一安心した

「にしても、メル姉ねえでも負けたりすんだな……」

「あら？ジーノ坊はあたしを最強だと思ってくれたのかしら？ごめんねー期待にそえなくてー。って、こんなことで立ち話もなんだし、とりあえず酒場に行かない？」

メルお姉ちゃんの提案にみんなが頷いた

1年目：マイルス「酒場でノンビリ」

メルヴィアさんと試合をした。その翌日。僕は午前中から酒場：『バー・ゲラルド』のテーブルひとつを占領かみたほしていた。テーブルの上には、ふたまとまりの紙束とペン。それと飲み物がある。

別に、はやくからお酒を飲んでいたりするわけではない。ただ、トトリちゃんが村の外に出る前には、ここに立ち寄るだろうなーと思っただけだ。

もちろん、ただいるだけじゃあお店に悪いので、たびたびお酒以外の飲み物を注文したりはしている。

カランカランッ

「いらっしや……なんだメルヴィアか」

「ちえーゲラルドさんは冷たいなー。ツエツイ、何か飲み物ちよーだーい！」

「はいはい、ちよつと待ってて」

そんな会話を遠くに聞きながら、僕は紙にペンを走らせる。

えーつと……ここがこーだから、こつちがこーなつて……

「あれ？マイルス、こんなところで何してるのー？」

声をかけられたのに気がつき、顔をあげてみると、恐らく先程酒場に入ってきたのであろう、『アランヤ村』出身、冒険者・メルヴィアだった。

メルヴィアとは昨日の試合の後、お互い気軽に話すようになった。

……というのも、最初、僕が「メルヴィアさん」って呼んだら「なんか違和感が……」って言われて、次にメルヴィアが「マイルスさん」って呼んできたんだけど「なんか違うよね……？」って思っちゃって……

で、そういう話しているうちに、なんとなく呼び捨てで落ち着き、お互いの話し方も、幾分フランクな感じになったのだ。

「なにつて、少し 時間つぶしに『錬金術』のレシピを自作してるところだよ」

『錬金術』の…？ああ そういえば昨日、トトリが言ってたっけ「マイスさんは『錬金術』のことも知ってるんだよ」って」

僕の向かいの席に座りながらメルヴィアは 興味深そうにコツチを見てきた。だけど、その顔は すぐに苦虫を噛み潰したような顔に変わった

「うわあ…遠目からチラツツて見ただけでわかる。あたしには読むだけでも無理なヤツだわ、それは…」

「あははは…。まあ、今書いてるのはまだ仮のレシピだから 余計にグチャグチャしてるしね」

「やつぱり、イヤだわ そういうのは…そうだ。せつかくヒマしてるなら、あたしと何か話さない？」

そんなことをしていると、カウンターのほうからツエツイさんが飲み物を持ってやってきた

「はい、メルヴィ。 マイスさんは おかわりいかが？」

「それじゃあ よろしくお願いします、ツエツイさん」

僕の返事に「わかったわ」と言っつて ツエツイさんは再びカウンターのほうへとむかう

その様子を見ていたメルヴィアが、ジロジロこつちを見てきた

「ツエツイとは お互い「さん」付けのままなのね。いや、確かに マイスがツエツイに言うのは違和感ないけど……」

「それって、僕のほうが年下に見えるってことだよね？」

「否定できる？」

「…そのあたりのことは、5歳年下の子に身長を抜かれた頃に色々諦めたよ…」

「あ…うん、なんかゴメン」

本当に申し訳なさそうに言うメルヴィアを見て、なんとなく 逆にこつちが申し訳なくなってきたので、早急に 別の話題をあげること

にした

「そ、そういえば、昨日は聞けなかったけど、なんでいきなり 僕に勝負を仕掛けてきたの？」

「なんでって……」

メルヴィアはチラリと酒場の出入り口を見た後、やや声を小さくして答えた

「ギゼラさんが、よく言ってたのよ「マイスはアタシの次ぐらいに強い！」って。そんなこと 聞いてたら、やっぱり気になるじゃない！」
「えっ!？」

ギゼラさんが色々と言ってたであろうということは、グイードさんと話した時にわかっていた。いや、だけど……

「さすがにそれは過大評価すぎるよ……僕より強い人って普通にいるし……」

ステルクさんとか、ジオさんとか……それに、僕に勝ったステルクさんに勝ったロロナも、きっと僕よりも強いのだろう

「でも、ギゼラさんはそう言ってたんだもの。それに、事実 あたしはロクに手も足も出なかったわけだし」

「そうね。メルヴィアが あんなあっさり負けちゃうなんて、思っても見なかったわ」

おかわりを持ってきてくれたツエツイさんが メルヴィアにそう言いながら僕に飲み物を差し出してくれた

言われたメルヴィアは「どーせ あたしは弱っちいですよーだ」と少し口をとがらせていたけど、ツエツイさんの微笑みに対して 微笑み返していたので、ふたりなりのコミュニケーションなのだ 僕は判断した

カランカラン

「ごんにちはー…あつ、マイスさん ここにいたんですね……って、あれ?おねえちやんとメルおねえちやんも一緒にいる…何してるの?」

依頼を受けに来たのだろうか、酒場に入ってきたのはトトリちゃんだった

トトリちゃんの言葉に 僕は軽く手をあげて応え、ツイイさんは「いらつしやい」と笑顔で出迎え、メルヴィアは ニコニコ笑いながら手招きをした

「いやね、マイルスが ひとり寂しさみそうにしてたから、あたしがお喋りにつき合っただけだよ」

「メルヴィイったら、ウソは言わないの。本当はね お仕事してたマイルさんのところに きまぐれなメルヴィイが邪魔しに入ってたの」

「あははは…、仕事ではないんだけど…まあ 大体合ってるかな」

僕たちがいるテーブルのそばまで来たトトリちゃんは、僕たちの話を聞いて疑問符を浮かべ 小首をかしげた

「えっと…それで 結局マイルスさんは何をしていたんですか?」

『錬金術』のレシピを自作していたんだ。ほら、こんな感じに」

そう言いながら 僕は片一方の紙束をトトリちゃんの方へと差し出す。すると、トトリちゃんは その紙面に目を通しはじめる

「………これって『錬金術』のレシピ!?マイルスさんって、『錬金術』のレシピを作れるんですか!」

「とは言っても、まだ それは未完成で、実際に何回か調べてみて書き直さないといけないんだけどね。…それに、そのレシピはいち一から作ったわけじゃないんだ」

「…?どういふことですか?」

問いかけてくるトトリちゃんに、僕は 僕の手元に残ってあるほうの紙束を指で軽くつついて示す

「こっちの紙に 僕が昔からやってる『薬学台』での調査…『錬金術』を使わない 薬の調査方法を書き留めてあるんだ」

『錬金術』を使わない?」

「そう。街の病院のお医者さんなんか薬を調合するのと 似たものだって思ってくれたらいいかな。…まあ、アーランドの一般的な方式とは違うものなんだけど…そのあたりは ちよつとややこしくな

るからね」

僕のすぐそばまで来て 興味深そうに紙束を見つめるトトリちゃんのために、今さっき 僕がしていたことを説明する

「トトリちゃん、そつちの紙束の上から5枚目を出してくれるかな？」

「あつ、はい！わかりました」

トトリちゃんが『錬金術のレシピ(仮)』の中から 指定した紙を抜き出しているうちに、僕も それと連動する部分が書かれている紙を コツチの紙束から抜き出しておく

「これですね」

「うん、ありがとう！…で、ソツチの紙とコツチの紙に書かれているのは、どつちも同じ薬の調合方法なんだ。違いは『錬金術』と『薬学台』、どつちで調合するかってだけだね」

「そのふたつって、そんなに違うものなんですか？」

「うーん。もともになる素材は一緒だけど、作業の工程こうていなんかは色々違うね。そうだな…例えば、ここの工程こうていなんだけど」

2枚の紙をテーブルに並べて、『薬学台』での調合が書かれてあるほうの紙の一部を指で指し示しめした後に、『錬金術』での調合が書かれてあるほうの紙の ひとつの図解を指し示してみせる

「この 2種類の草を煎せんじて混ぜあわせる部分ぶんだけど、『錬金術』のほうだと ここの工程の中に組み込まれてるんだ」

「ああ、ソコの図はそういう意味だったんですね！…だとすると、ココの工程は…なるほど、そういうことなんだ」

これまでの錬金術士としての活動の中で培つちかわれてきたものなのだろう。『錬金術』のレシピのほうは 僕の汚い殴り書きでも トトリちゃんは読み解くことが出来るようだ

「えっと、それじゃあココの図のわきに書いてある 3種類の植物の名前と「要検証」ようけんしやうっていうのは 何なんですか？」

「そこに書いてある植物には どれにもこの薬の効果の主成分ぶくが含まれてるんだけど、その量がそれぞれ違ってね。どれを素材として使うかによって 効果が左右されるかもしれないから「要検証」なんだ」

実際のところは、元の薬のレシピに書いてある素材が『アーランド』周辺には存在しないものだから、代用できそうな素材をいくつか検討しないといけないかったりもする…という部分もあったりするんだけど、説明が大変になるから スルーすることにした

「なるほど…『錬金術』のレシピを作るのって 色々考えないといけないんですね！」

「元になる調合があるだけ まだマシンだけだね。一から作るのもつと難しいんだけど…でも、コロナはそのあたりもパパッ！って感覚でやっちゃうから。さすが本職の人だなーって感じだよ」

「コロナ先生って やっぱすごい人なんだー」と 嬉しそうにするトトリちゃんは、どことなく誇らしげだった

と、そんなトトリちゃんのことを見つめている人が 僕以外にふたり。僕が気づいた その少し後にトトリちゃんもその視線を感じとったようで、レシピから目を離し そちらを向いた

「えっ？おねえちゃんとメルおねえちゃん、どうかしたの？」

そう、トトリちゃんのことを見ていたのは、他ならぬ テーブルそばにいたツエツイさんとメルヴィア。ふたりは口をポカンと開けて 驚いた表情をしていた

「うそ…!!」

「トトリが難しそうな話をしてる…!？」

「ちよっ!?そんなに驚かなくても！わたしだって 立派な錬金術士になるんだから、これくらいできるようにならないといけないんだよ！」

ふたりの驚きのように 非難の声をあげるトトリちゃん。そんなトトリちゃんをツエツイさんとメルヴィアは 軽くなだめながら微笑んだ

「冗談よ。でも、あのトトリちゃんがねえ…」

「そうよね。全然 驚いてないって言ったらウソになっちゃうわー」

「うう……あんまり褒められてる気がしない。むしろ からかわれる気が…」

だからといって、僕のほうへ助けを求めるような視線を投げかけないでほしい。正直、対応に困る…

「そういえば、トトリちゃんは何の用で酒場に来たのかしら？お買い物？それとも依頼のほう？」

ツエツイさんの問いを聞いたトトリちゃんは ハツつとしたような顔をした後、首を振った

「うん。どれくらいここにいられるのか、予定をミスさんに聞こうと思って……」

トトリちゃんはそう言っ僕をチラリと見てきた

「そうだなあ…あと数日はここに留まるつもりだよ。もし、何かあるんだったら もう少しは滞在期間を延ばせるけど…」

「いえーそのくらいあれば十分です…それで、ちよつと手伝ってほしいことがあって……」

「うん、何かな？」

そんなふうに 新しく始まる冒険

たぶん これからはこんな感じにトトリちゃんのお手伝いをしながら過ごしていくのだと思う

新しい日常のカタチを感じながら、僕は明日からの予定を考え始めた……

1年目：マイス「帰宅、そして挨拶まわり」

あれから 一度『アランヤ村』周辺の冒険を手伝った後、トトリちゃんに『青の農村』に帰る事と 何かあったら遠慮なく来てほしいことを伝え、僕は『青の農村』へと帰った

『青の農村』から『アランヤ村』へと行くのに2週間近くかかったのに対し、帰るのは一瞬ですむ。いわずもがな『魔法』でだ

そして、もし 僕の家にかいたとしても問題は無い。驚くべきことに『錬金術』のなかには 指定した場所に瞬間移動できるアイテムがあるそうなのだ。……そのうち 調べてみたいものだ

……と、色々であった 僕の久々の遠出は、難なく終わりを告げたのであった

マイスの家

帰ってきたことを伝えるのも兼ねて 村の人たちに挨拶してまわった後、ひと段落した僕は 家で香茶を飲んで一服しながら、これからどうしていくか考えていた

「畑のことは明日からでいいとして……そうだ、冒険の最中さいちゆうとかに『秘密バッグ』で色々取り出したコンテナの中を、一度整理したほうがいいよね」

「そうと決まれば、さっそく！」と、香茶を飲み干し作業へ移ろうとしたちようどその時

コンコンッ

「はーいー」

玄関の扉に駆け寄って開けてみると、そこには大きな荷物をしよつ

た赤髪の男の人……僕の見知った顔がいた

「よう、にいちゃん！」

「コオル！元氣そうで良かったよ。ちよつと前に村の中を探した時には見かけなかったけど……どこか行つてたの？」

「まあ、野暮用で 少しだけ出てたんだ」

そう言つて軽く笑うのは 行商人のコオル

昔から 僕のところへ売買に来ていたけど、『青の農村』ができた頃に「んじやあ、これからはオレもここを拠点に活動すつか」とか言つて、農村の一員となつたのだ

とは言つても、相変わらず いろんなところを巡^{めぐ}つて商品を集めたりもしているから、いつも村にいるとは限らないのが現状だ

「僕がない間、村は何か問題がおきたりした？」

「そのあたりは他のヤツのほう知ってるし、もう聞いてるだろ？」

例のアレも問題無かつたぜ……ちよつと盛り上がりには欠けたけどな」

苦笑いしながら 言うコオル

「例のアレ」についても、盛り上がりには欠けたつてところは気になるけど……まあ、その場にいたコオルが「問題なかった」つて言ってるなら 本当に大丈夫なのだろう

「そうそう。にいちゃんがいない間に客が2人来てたぜ」

「客？」

「にいちゃんが出かけてから5日経つたところに元国王さんが来て、その1週間後くらいに 人形使いのねえちゃんが来たんだ。どっちも マイスがいないことを伝えたら凄^ひい寂^{さび}しそうにしてたぜ」

ジオさんにリオネラさんか。間が悪かつたなあ……今度来た時は 最大限のおもてなしをしよう……

それに、僕もふたりには会いたかつたからなあ……特にジオさんが来てくれるのは 久々なのだ。僕の外出の理由が理由なので、仕方ないと思うのだけど やっぱり少し残念に思つてしまう

コオルと一通り話した後、彼は自分の商売のほうに戻り、僕も整理の作業を始めた

……だけど、思っていたよりは 散らかっていないなかった上に、そもそも いっぱい溜^ためていたので 今回の消費分を補^{おぎな}う作業も必要なさそうだった

そうになると 次に僕がすべきことは……アーランドの街へ行くことだろうか

街の人たちへの挨拶は明日でいいだろうと思っていたけど、時間に余裕があるなら 今から行っておいた方がいいだろう

職人通り

街の景色は 6年前とは大きくは変わっていない。橋が架かったり、パメラさんのお店だったところが 空き家になったりはしているが、その程度だ

パメラさんといえば、なぜか『アランヤ村』にいたのには驚かされた

前にフラくつとどこかへ行ってしまったのは知ってたし、ロロナから「元気にしてるよー」と聞いたことがあったので そこまで心配はしていなかった……けど、幽霊だったはずなのに生身になっていたのは、どうしてなのだろうか？

……と、そんなことを考えているうちに 最初の目的地にたどり着いた

僕はその店へと入った

ロウとティファの雑貨屋

雑貨屋という名に恥じない 様々な品が取り揃えられた店内。その店内には どこかで見たことのある顔の男性客が3人、商品を見るふりをしながら 別のものを見ている

その3人の目線の先：レジカウンターの向こう側にその人はいた

「いらっしやい。…って、あら マイス君。なら「お帰りなさい」って 言ったほうがいいかしら？」

「こんにちは、ティファナさん！…あれ？僕が出掛けてたこと 知ってるんですか？」

「それはフィリーちゃんに教えてもらったというか…」

このお店の店主をしているティファナさん。いつもの柔和な笑みを浮かべている テファナさんが「そういえば…」と小首をかしげて問いかけてきた

「帰ってきてからフィリーちゃんには会いに行った？」

「えっと、今朝帰って来たばかりだから まだ会ってませんけど…何かあったんですか!？」

「そういうわけじゃないんだけど…うーん、やっぱり こういうのは話さないほうがいいわよね？」

「いや、ひとりで納得されても 困るんですけど…」

よくわからないけど…とりあえず スルーすればいいのだろうか？いや、でも フィリーさんのことだし、かなり気になるんだけど…

「えーっと、そうね…マイス君が会いに行ってくれれば何の問題も無いってことだけ言っておくわ」

「はあ…まあ 『職人通り』のお店の人たちに挨拶してまわった後に、『冒険者ギルド』には行く予定でしたから 会いには行きますけど…」

なんだか気になるなあ…？

職人通り

心に多少のモヤモヤを残しながらも雑貨屋さんを後にした僕は、次に立ち寄る店へと歩き出した

…とは言っても、場所は雑貨屋さんのおすぐそば。間に階段があるとはいえ、すぐ隣なのだ

「あつ、でも アトリエには誰もいないかも……」

店主であるロロナは諸事情もあって放浪の旅に出ていて、ここ最近
は なかなかアトリエに帰って来ないのだ

「ロロナが旅に出てるだけなら、他の人が残ってるんじゃないか
と思いたいところではあるけど、そうはいかない

ロロナが3年間の『王国依頼』を完遂したころ旅に出た先代店主ア
ストリッドさんだが、1年ほどで帰ってきたかと思えば、その数年後
にまた旅に出ていってしまったのだ。ついでと言ってはなんだけど、
ホームちゃんはアストリッドさんが連れて行ってしまってる

そんなアストリッドさんの搜索も、ロロナが旅をしている理由
だったりするのだが……

話を戻すが、今のアトリエは完全に無人状態……

いや、この前トトリちゃんから聞いた話だと、今『ロロナのアト
リエ』は、トトリちゃんの臨時のアーランドの拠点として使い出したと
か言ってたっけ？

まあ、トトリちゃんは『アランヤ村』にいるわけだし、どちらにし
ても、今は誰もいないはず……

「…なんだろう あれ？」

階段を上って見えた通り…そのアトリエの扉前には、あからさま

に怪しいローブをまとった人。その身長からしてロロナでもアストリッドさんでもない、別の人だろう

「今日もない、か……さて、どうしたものか……」

最初は アトリエに依頼に来た人かと思っただけ、その人物の^{つばや}眩きを耳して 声の主が誰なのか僕は理解し声をかけた

「何してるんですか トリスタンさん」

「げえ!? き、キミか……いやあ、アトリエにロロナが帰ってきてないか気になってね。そのあたりの確認も 僕の重要な仕事だから……ね？」

「そんなこと言っつて、また大臣の職務から逃げてきたんですよね? メリオダスさんから いつも愚痴^{ぐち}を聞いてるからわかりますよ」

そう言々と 昔はタントリスという偽名を使ってロロナの手伝いをしていたトリスタンさんが、苦虫を噛み潰したような顔をしたけど いつもの軽い笑みに戻り 首を横に振った

「どうせなら愚痴だけじゃなくて説教も代わりに聞いてもらいたいくらいだね……ついでに大臣の仕事もどうかかな?」

「トリスタンさんが畑仕事を代わりにやれるって言うなら考えますよ?」

「いやあ……それは無理だね。どう考えても僕の性^{しょう}に合わないだろうさ」

ヤレヤレ……と首をすくめながら トリスタンさんは僕のほうを向いていた顔をアトリエのほうへと向けた

「それにしても、今日もロロナがいないことからして、先日 煙突からケムリが出てるように見えたのは 僕の見間違いだっただのかな……?」

「先日って……1ヶ月くらい前じゃないですか?」

「そうだよ。本当なら 見えたその日にアトリエに行きたかったんだけど、親父が離してくれなくてね……今日 こうして抜け出したのも、色々ギリギリだったんだよ?」

「僕の苦勞、わかるかな?」って感じに聞かれても、正直 困る…… というか、元国王にも 後任を任せた息子にもフラフラ逃げられる

メリオダス前大臣の心労が心配でならないのだけど……今度、お薬
持つて行ってあげたほうがいいかな……？

そんな考えを巡^{めぐ}らせながら、トリスタンさんが見たっていうケムリ
について 彼に教えてあげることにした

「そのケムリは ロロナの弟子のトトリちゃんが『錬金術』をしていた
時のものだと思いますよ？」

「ロロナの弟子？」

「はい。村に来たロロナに『錬金術』を教わったそうです。…で、『冒
険者』になってアーランドで活動する際に 『合鍵』を持っていたクーデ
リアが 「アトリエくらい 別に使っちゃっていいんじゃない？あの
子は怒ったりしないだろうし」 って許可を出したらいいですよ」

「へえ、『錬金術士』…そして『冒険者』にね。それはちよつと会って
みたいなあ…」

興味あり気に話を聞くトリスタンさん

と、その後方から 見知った顔がこちらへ向かって歩いてくるのが
見えた……なんとと言うか、もうお約束であるがメリオダス前大臣だ

その後 どうなったか。 それはもうご察しのとおりだった

1年目：マイス 「勉強しよう、そうしよう」

マイスの家

「うーん…予想はしてたけど、かなり少ないなあ…」

そう言いながら僕が目やるのは、テーブルの上に置かれた数冊の本。それらは『アーランドの街』の中を探し回って見つけた「海」や「船」に関する記述がある本だ。まさか街中を探し回って 片手の指で足りるほどこしか種類が無いとは…

「グイードさんにはああ言ったけど、やっぱりギゼラさんのことは気になるわけだし、知っておくに越したことはないだろうからね」

重ねておいてある本の中から一冊を手にとって 読み進めていく

……

「……まずは一冊。読み終わったけど、この本には あんまり実用的な内容は書いてなかったなあ…」

なんとというか、船は船でも 歴史的な内容なんだけど、ほとんどが何年前なのかもわからないくらい大昔の記録ばかりで、もはや 機械レベルのロストテクノロジーのようだ

……というか、遺跡で発見された大昔の古代語の記録の翻訳ほんやくできた一部だけが記載されており、残りのほとんどは 翻訳できなかつたおそらく同じく「船」や「航海」に関する記述であろう記録の写しが載せられているだけだった

そして、最近の船に関することは、一番最後のほうに「現在 アーランドのある大陸では、大きな川がある地域や海沿いの地域だが、大型の船を造船できるほどの造船技術があるのは『アランヤ村』ぐらいであろう」と書かれている程度だった

「まあ、考えてみれば 当然のことかな？この大陸で一番発展してるのってアーランドの街で、アーランドの街は内陸にあるから 船とは縁遠いわけだしね」

それに対して、『アランヤ村』みたいな海に近い場所では 育てることが出来る作物も限られてるから、生計を立てていくには 海で漁をすることになるだろう。すると、必然的に船が必要になって 造船技術があがっていったのだろう

「さて……次はどれを読んでみようかな……？」

そう言いながら、僕が新たな一冊を手に取りろうとしたときのこと

……

コンコンツ

玄関の扉がノックされる音が聞こえてきた

「はい、ちよつと待ってくださいーい」

そう言いながら 僕は玄関へと駆け寄って 扉を開けた。すると

そこにいたのは、見知った顔だった

「あつ、ステルクさん！お久しぶりです！」

「ああ、数ヶ月ぶりだな。元気そうで何よりだ」

ステルクさんは 微笑みながら軽く頷いた

……ステルクさんが こんな自然な笑顔でいるのは何気に珍しい事だ……だけど、それを言うとステルクさんは頑かたくなに笑ってくれなくなりそうなので、黙っておくことにする

「どうぞ あがってくださいー！ちよつと散らかってますけど……」

「気にするほどではない……というか、むしろ綺麗だ。それに、この部屋が「散らかっている」と言われるのであれば、彼女のアトリエの状態

を何と言えいいものか……」

そう言うステルクさんへ ソファアに座ることを勧めた後、僕は香茶を用意しに 一度キッチンへと向かった

そして 戻ってきた時 ステルクさんは僕がテーブルに置きっぱなしだった本たちの一冊を手にとっていた。そして、僕が香茶を持ってきたことを視認した後 手に持っていた本とテーブルの上の本をまとめてテーブル端へと避けてくれた

「あはは……わざわざ、ありがとうございます。先に僕が片付けておけばよかつたものを……」

「いいや、いきなり 訪問したのは私だ。……どうやら 勉強中だったみたいだな」

「まあ ちよつと興味が湧いてきたつて言うところですよ。はいっ、香茶です」

「ああ、ありがとう。…… 農業に剣術、料理に『錬金術』、医学……そして今度は船か……元々持っているものがあつたとはいえ、キミは本当に多才だな」

ステルクさんが香茶を口にしたのを確認した後、僕もイスに座り自分の分の香茶を飲みはじめ。……うん、今日もいい感じに淹れられる

2, 3口 香茶を口にしたステルクさんは、香茶の入ったカップから口を離し、僕のほうに軽く顔を向けて話しかけてきた

「……見た所 特に大きく変わった様子はないが、何か問題は無かつたか？」

前々から思っていたけれど、言動や鋭い目つきで色々勘違いされやすいが ステルクさんは何かと面倒見のいい人だ。いつも僕のところに来た時には 村のことを心配してくれているようなふしがある

それに、各地をまわっているステルクさんだが、自身の目的とは別に 出会った新米冒険者の世話や遭難者の救助をしたりもしているそう。おかげで、新米冒険者を中心に 大半の冒険者はステルクさんに何かしら関わったことがあつたりするのだ

「ここ最近は 特に何もありませんでしたねー。とは言っても1、2週間前まで 僕もちよつと出かけてたから、その前の1ヶ月くらいのことは 村の人から聞いただけで詳しくは知りませんけど」

「キミが出かけていた…？それは久しいな。…何かあったのか？」

そう問いかけてくるステルクさんの顔には 少しの驚きが含まれているように見えた。おそらく、ここ最近『青の農村』と『アーランドの街』以外に行ったりしなかった僕が 出かけたことが驚きなのだろう……

「何かっていうか……あつそうだー！」

僕がそう言いながらポンつと手を叩くと ステルクさんは「どうかしたのか？」といった様子でこちらを見てきた

まあ、たいしたことではない。ただ、「そういえば、きつとステルクさんは 知らないんだろうな」と思っただけだ

「ほら、前にロロナが言っていた『錬金術』の弟子でしになった子が、『冒険者』になって この前ウチに来たんですよ」

「弟子？…ああ、そういうえば彼女が嬉しそうに 話をしていたな。なるほど、確かに『錬金術』を上手く活用できるのであれば『冒険者』としてもやっていけるだろうな」

「あははは……ステルクさんが言うと、何だか説得力がありますね」

「……まあ 何の縁か、アーランドが誇る 2人の『錬金術士』を間近で見えてきたからな。その凄さは 人一倍知っているつもりだ」

ステルクさんは そう言いながら目をつむった。おそらく『錬金術』の…『錬金術士』のことを 記憶の中から思い返しているのだろう

僕もそれにならない、2人の『錬金術士』のことを思い出さ

……正直、ロロナに対しては「凄い」って言葉は 何だか似合わない気がする。本人はホワホワしてるし、普段は抜けてて どこか安心できない……でも、やってることは「超一流」だったりするからなあ

…
で、もう一人の『錬金術士』アストリッドさんは…：うん、「凄い」。
凄いなんだけど、コロナとは別の意味で安心できない。あの人は 本当
に何を考えてるか判り辛いから、どうしても苦手意識がある…

「…改めて考えてみると、『錬金術士』って変わってる人が多いのか
な…？あつ、でもトトリちゃんは特には…」

…うーん、あのフリフリした服装以外はいたって普通だったはず
だ。そして、その服はコロナが『錬金術士』の服っていうのは こう
いうものなんだよー！」ってデザインから作ってくれたものらしいか
ら、トトリちゃん本人のセンスじゃない

もしかして、僕が知らないだけで トトリちゃんもどこか飛び抜け
ていたりするのかな？

「逆に 変わった人でなければ『錬金術』が使えないのかもしれない」

僕の独り言に ステルクさんが反応し、答えてくれた。…変わった
人っていうのを否定しないあたり、ステルクさんも似たようなことを
考えていたのかもしれない

…でも…

「ステルクさん？どうして僕をジロジロ見てくるんですか…？」

「いやなに、そう言えばキミも『錬金術』を使ったということを出
してな」

「…それは 僕が変わってるってことですか？」

「フツ、私は まだ何も言っていないが？」

…：まあ、確かに 僕が元いた『シアレンス』と 今いる『アーラ
ンド』では大元の常識おおもとしが違う部分があるのは、僕は知っている。だか
ら、色々と僕の中の感覚とズレていたりするのは理解しているつもり
だ

だけど、ここ数年で もうコツチに順応じゆんのうしているという自負はあ
る。もうそこまで変わっているとは思わないんだけど…

「そんなことは無いと思うが？今でもキミは変わり者だろう。良くも

悪くも、な」

「……あれ？口に出てました？」

「いや、顔に出ていた」

ステルクさんは 真顔でそう言ってきた

アストリッドさんにも同じようなことを言われたことがある気がする……うーん、本当にそんなにわかるくらいに 顔に出ているのだろうか？さすがに 自分で見ることはできないから調べようがないなあ……

「えっと 話を戻しますが、そのコロナの弟子の『錬金術士』……トトリちゃんって言うんですけど、『アーランドの街』のずっと南にある『アランヤ村』ってところを拠点に活動してるんですよ」

『アランヤ村』……確か 前にキミが行った旅行先がそこだったか……。すると、キミと その子は顔見知りだったわけか？」

「はい……とは言っても、まだ小さなころだったので 向こうはちゃんとは憶えてなくてボンヤリといった感じでしたけどね」

「そうか。 フム……今度 近くを通る時に寄ってみるとするか。新米冒険者でもあるなら 少々心配だからな」

そう言いながら腕を組み頷くステルクさん。と、少し身を乗り出し 気味の体勢で 先程よりも小さめの声で「そういえば……」と僕に話しかけてきた

「……彼女は 最近アトリエには帰ってきてはいないのか」

「コロナですか？ そうですね、もう1年以上は帰ってきてないと思います。 あっ、最近は クーデリアが許可を出して、街に来たトトリちゃんがコロナのアトリエを借りて使ったりしてますから 気をつけてくださいね」

「……気をつけろ、とは？」

「とある人が「アトリエの煙突から煙が出た！」って、コロナが帰ってきたんじゃないかと ウキウキ気分でアトリエを見に来てたこと

があつて……。もうトリちゃんが街を出た後だったんで、その時のアトリエは無人だったんですがね」

「……………よくわからないが、記憶の端にとどめておこう」

1年目：イクセル「ある日の『サンライズ食堂』」

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。アールランドの街にある『サンライズ食堂』を任されているコックだ

『サンライズ食堂』は、少し前に内装を改装して、全体的に明るく、おしゃやかな感じになっていて、数年前とは随分、雰囲気が変わった。まあ、出してる料理は、特別高いものじゃない、昔のまま、リーズナブルな価格のものばかりだ。お客さん方に満足してもらえるように、尽力している

つと、まあ、そんな感じで、ウチの店は繁盛している……が、当然、年中毎日ずっと満員御礼ってわけじゃない。客が少ない時だってある

ちょうど今なんか、そうだ。陽が暮れきった……夜。いうなれば「大人の時間」

普段ならもうちよつと客が入って、俺もこんなにヒマはしないし、店の人間としては、客が少ないことを嘆くべきだろうが……まあ、今日ばかりは、客が少ないことに感謝している

何故って、そりやあ……

「かんぱーい」

店の出入り口から見て、一番奥の角のテーブル席。そこで、乾杯の声があがった……これこそ俺が「客が少なくて良かった」と思っている原因だ

そこに座っているのは、酒癖の悪さがハンパないティファアさん……ではないが、別の意味で扱いが難しいふたり組だ

「あははは、今日も随分とお疲れみたいだね……大丈夫、クーデリア

？」

「んー…まあ いうほどでもないわ。マイルこそどうなの？この間の
久々の冒険の疲れは ちゃんと抜けてる？」

奥のテーブルのふたり組…そう、それは俺が昔から知ってるマイル
とクーデリアだ

何が問題かというと……

マイル ↑151cm

クーデリア ↑139・8cm

…で、ふたりが飲んでるのは『酒』だ。そう『酒』なんだ

ふたりのことを知ってる俺なんかなら問題無いんだが、何も知らない
ヤツが見れば 今 俺の目の前にある光景は「未成年が 未成年が 未成年が
ふたりして…というか、特にマイルが童顔なことも 勘違いに拍車
をかけるに違いないだろう

そして、もし誰かが「子供がお酒を飲んだらダメじゃないか！」と
か言ったりしたら…キレて店にも被害が出る…誰がキレるとは言
わねえけどよ

まあ このふたりがウチに飲みに来るのは初めてな訳でも無いし、
客は客だ。面倒事はゴメンだが 注文されたものは出すし、ちゃんと
したサービスをするのが俺のつとめだ。やれるだけの事をやるだけ
だ

「じゃあ、やっぱり 仕事は忙しいんだ。休みはちゃんと取れてる？」

「仕事の合間に休憩をちょっと入れるくらいなら出来るんだけど、丸
1日休みなんかは取り辛いわね。通常の業務に冒険者制度の改善案
…それで 問題はいつも唐突に出てくるわけで……」

「今度 また村から人を何人か 手伝いに行かせようか？」

「それは有り難いわー…あつ、この前 来てくれた子、正式にギルドで働いたりしてくれないかしら？あの子、結構 見込みがありそうなのよ」

「それは本人に聞いてみないと。それじゃあ とりあえず、今度『青の農村』からギルドに手伝いに行く人数についてなんだけど…」

「んで、冒険者登録に来たバカが言ってきたのよ「ママのお手伝いかな？お嬢ちゃん 偉いね」って…ヒック」

「あー…あるよね、そういうこと。僕も 村長に会いたいわって家に来た旅の人に「お家の人はいるかな？」って言われてさ…」

「…やっぱ こうなっちゃったか…」

こいつら、最初のうちは 真面目に仕事の話なんかしてたりするんだが、酒が進むにつれて 愚痴っぽくなり、最後には 決まって自分たちの身長に関する話で悪酔いしだすのだ

そして、その悪酔いは ティファナさんのソレとはまた別の意味で対処し辛い。下手に触れようものなら 俺に風穴が空いちまう…

マイルスも クーデリアも、他のヤツと飲んだるときには こんなことになったりしないんだけどなあ…？

マイルスは、ステルクさんや前大臣なんかと ふたりで飲みに来るところがあるが、そんな時は むしろストツパーになっている。クーデリアも、前に口ロナと飲みに来た時は 別段 酔払ったりしてなかったし…

「ちよつとく おかわり頂戴〜！」

「僕にも さつきと同じの一杯追加でー」

「はーい、わかったわかった。大人しく待ってろー！」

料理とは違って、酒を出すのは そう時間はかからないのが幸いだ。酔払いふたりを 変に待たせて機嫌を損ねる心配がないからだ

用意した二杯の酒をテーブルへ運び、ふたりの前に置く

「沢山注文してくれるのは 店的には嬉しいんだが……酔いつぶれて
たくさん店の床で寝だしたりしないでくれよう？」

「だいじよーぶですよーイクセルさーん！飲む量はちゃんと抑えてますからー」

「そくよー？こんくらい によんだうちにもはいらないわー！」

……ふたりの言葉が本当であることを祈りつつ、俺は調理場に戻る
……やばい、不安でしようがない……

「んー？しえが低いことが りてんになりゆこと？」

「ほらー想像してみてください。憧れの人に 全身を包まれるよーに だき
かかえられるクーデリア自身をー」

「……ふふっ、ふへへへ〜じおしやま〜！たしかに それは悪くにや
いかも〜……じゃあ……あんたにやんかにも 何かりてんって……」

「なーんにもなーい！だってー、仮に 160より大きい女の子を
ぼくが「お姫様抱っこ」したとするでしょー？」

「……ああ……にやんかアンバランスねー。でも、あんたなら 倍く
りやい大きい子でもヨユーでしょー？」

「まー……5クーデリアくらいはラクラクですネー」
「にやによ、5クーデリアって……10くらいいきにやしいよ〜」

「あはははははー！」

「ぼくだって4年くらい前に 7cmくらいピョンと伸びたことが
あったんですよー？でも、年下のコオルに しんちよーぬかれたとき
は、イッシューまわって笑っちゃいましたよー」

「わかりゆわー……あたしも仕事から ここ6年くらいで色んな人に

会って「ああ、あによこがこんなにおーきく…」って思っちゃりすりゆのよ〜…もしかして、アレが『親の気持ち』ってヤツ!」
「それは ちよつと違うんじゃない?…あつ、そう言えば 僕の知ってる人に、お姉ちゃんなのに弟よりも小さくて 並ならんでると妹だと思われるーって嘆なげいてた娘がいて…」
「なにしよれ〜? あたし、兄弟なんていにやいけど 何だか他人事に思えにやいわ〜…にやんでだりよ?」
「あーはっはっはー!!」

誰か助けしてくれ…。話している本人たちは いたって楽しそうなんだが、なんか 聞いている俺のほうが いたたまれない気持ちになってきた…

これは 俺が何か言つて鎮しずめられるレベルじゃなくなってる
「身長なんて気にすんな」なんてことを言ったら「しつかりデカく育ったヤツが何言ってるんだコラー!」と言い返されてしまうのは目に見えてる…というか、経験がある
もはや 酔いつぶれて寝てくれた方が良いんじゃないやねえか、つて気がしてきた…ちよつと度数高めな酒を出してみるか…?

「サービスだ(建前)」と言つて出すための 度数高めな酒をジョッキについて、あいつらのテーブルへと運ぶ…

「これも マイスの背が低めにやのつて、親の影響が大きいんじゃない?」
「あー、確かにー。なんだか そんな気がするー…というか、ほぼ 確実にそーかなー?」

「マイスの親? そんな話、俺は初めて聞くんだが…?」
俺は、思ったことを つい口にしてしまったんだが、その発言でふたりが俺がテーブルまで来たことに気がつき、コツチを向いてきた
そして 俺の言葉に先に答えたのは 上手く呂律ろれつが回つてない

クーデリアだった

「あたしも マイスから話で聞いたらけらけろねー。れも、間違いにやく、ちーしゃいわくヒック…」

「…そうなのか、マイス？」

「それすよー？ まー…少なくとも 今の僕よりちーさい よー」

マイスも答えてくれたが、コイツもコイツで 間が伸びてるし呂律も怪しくなってきた

……色々と気になるところだが、とりあえず今は このふたりを大人しくさせるのが最重要事項だ

「ほら、サービスだ。飲んできな」

ふたりの前に酒を置いて、飲むように促す

「あー…じゃー、コレ飲んだらお開きつてことで、帰りましょーかー」

「しようねくヒック…今日はいちゅもより楽しくによめたよーにや気がすりゆわく」

ふたりは勧められるまま 酒を飲んでいってくれた。そして 飲み干し……

「イクセルさーん、おかいけー お願いしまー」

「あいよー」

「それじゃー ごちそーさまでしたー！」

「ごつちよくしやまく！」

「おう、気をつけて帰れよー」

……つて、あれ？てつきり、あの酒で寝ちまうもんだって思ったんだが、普通に帰っちまったぞ？

まあ、ちゃんと帰ってくれるなら いいんだが……あの最後の酒のせいで 夜道の途中でぶっ倒れてしまったりしねえだろうか…。そういうや、クーデリアのほうなんか かなり足がふらつき気味だったよ

うな……

その後、閉店の時間までの短い営業時間中、俺が仕事に集中できなかったのは言うまでもない

翌日の早朝に街で 二日酔い気味のマイスをみかけた

そう遠くはないとはいえ、こんな朝早くから『青の農村』から街に来るだなんて。ちよつとぐらい休んでもいいんじゃないだろうか？ 仕事馬鹿のマイスらしいといえばらしいし、きつと あいつも忙しいんだろうけど……

……俺も疲れてるんだ、そう 思わせてくれ……

1年目：クーデリア「無礼で面倒なヤツ」

冒険者ギルド

「…ふう、これで コツチの案件は終わりつと」

必要なことを記入し終えた用紙をまとめ、その紙束をカウンター下の棚の 所定の位置へと入れる。そして、まだ目を通して無い案件の紙束を 新たに取り出し、処理をしていく

冒険者ギルドの受付嬢も楽なものじゃない。あたしが主おもに受け持っている仕事は『冒険者』への登録、「『冒険者免許』の更新」…：そして、前の2つをしに来た冒険者がいない間に『冒険者ギルド』への苦情の処理、「『冒険者制度』の見直し及び調整」といった仕事もする

それらの仕事を『冒険者ギルド』内にあるカウンターでこなしているのだが、基本的に立ちっぱなしなのが この仕事のキツさに拍車をかけてしまっている

正直なところ、あたしも『冒険者ギルドの受付嬢』なんて仕事、頼まれたとしても あんまりしたくはない仕事だ…：が、ジオ様に「君になら任せられる」なんて言われたのだから 断る理由なんてあるわけがない

…それに、ミスが 何かと『冒険者ギルド』のことを気にかけているのもあつて、村から人を寄越よこしてくれたりするから、それなりに余裕はあつたりする

まあ…ミスは『冒険者ギルド』と色々縁があるから、うまく機能まわらしないと困るんだろう

「それにしても…」

また ひとつの案件を処理しをし終えたところで、カウンター上にある書類から意識を離し、少し考え更ふける

『冒険者ギルド』は 人材不足感が拭えない状況なのに対して、『青の農村』は そんな様子が見られないのは何故だろうか？

『青の農村』の運営よりも『冒険者ギルド』のほうが舞い込んでくる仕事の量が多いから っていうのもあるだろうけど、それだけじゃないさそうな気がする

この前 マイスが『冒険者ギルド』の手伝いに連れてきた人達だつて 初めてのヤツは不慣れさが見て取れたが、それでも以前 街のそこらへんにいるヤツを手伝わせた時よりも2、3倍仕事ができていた もちろん、マイスも 書類仕事の得意な人を中心に『青の農村』から連れてきてくれたのだとは思いうから、『青の農村』の人たち全員がこのレベルだとは思っていないけど……

「今度、話す機会があったら聞いてみようかしらね……」

このあいだ 飲みに行った帰りに家まで送ってもらった時、「あんな村まで帰れるの？」と聞いたら「大丈夫ー」と言つて 一瞬で消えたことといい、マイスには聞いてみたいことが色々とあるのだ

まあ、今 ひとりで考えても あまり意味が無いということであたしは再び カウンター上の書類へ目をやり、仕事を再開した

黙々と仕事を処理していたところに、あたしのいるカウンターへと歩み寄ってくる人影が 視界の端のほうに見え、あたしは作業の手を止めてソツチへと目をやる

……書類の山の処理なんかよりも、ある意味 面倒ね……。そう思つてしまった理由は もちろん カウンターへと歩いてきている人物のせいだ

長い黒髪を右サイドにまとめ、上半身を隠すような 装飾が付けた赤いマントを身に纏った少女

『ミニミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラング』。『貴族』出身の新米冒険者で、冒険者登録の際に色々あって トトリと縁が出来た子ではあるけど、あたしから見れば ただの冒険者だ。……一言で表すなら「高飛車で礼儀のなっていない子」だけだ

あたしとしては、家は違うとはいえ 同じ『貴族』として……というか、社会で仕事をしていく ひとりの人間として最低限の礼儀くらいは身に付けてほしいとは思っているが…

…さて、この子がココに来る理由といえ、間違いなく『冒険者免許』の更新だろう

「ちよつと」

「…何の用かしら」

そう あたしが尋ねると、『冒険者免許』をあたしに押し付けてきた「冒険者ポイント」は十分にたまっているはずよ。私の免許を更新なさい

……色々と言いたいことはあるけど、ここで変に時間を食って 他の仕事に遅れが出たら面倒だから、適当にスルーしてしまうことにした

冒険者ギルドの受付嬢として 何人もの『冒険者』と接してきた中で学習したものだ。それに、こいつはあたしが何か言ったところで大して変わりはないことは『冒険者免許』をあげた際に理解したのだ

必要な手続きをチヨチヨイと済ませていき、『冒険者免許』のランクアップを完了させる

冒険者ランク3「BRONZE」ねえ……免許取得からまだ1年経っていないこの時期でこのランクなのは 結構ハイペースだ。決して多くはないと思う。それなりに『冒険者』としての才能があつ

たということかしら

でも、これはこれで心配でもある。己おのれの力を過信し過ぎたり、調子に乗ってしまったりして、大なり小なり 大変な目にあうヤツはいくらでもいるのだ

その冒険者の実力…ランクに合った難易度の探索範囲をギルドが教えるのだが、今回ランク3になったことで広がった採取地の中には特殊な場所がある

「はい、ランクアップしたわよ」

そう言つて あたしはランクアップを完了した『冒険者免許』を差し出す。で、こいつはそれを「…どうも」と小さな声で受け取つてすぐに踵を返そうとする

「ちよつと待ちなさい」

「何よ…まだ何か用があるの!?!」

声を荒あらげて あたしを睨にらんでくるが、そこはスルーして カウンター下から常備してある地図を取り出して カウンターの上に広げてみせる。…その様子を見てか、機嫌悪そうな顔をしながらも カウンターに戻つてきた

…あたしも、こいつと長々と話す気はないから、必要最低限で済ませるべく 話す内容を頭の中でまとめ、口に出す

「街から東南東方向…そこに『灼熱の荒野』って呼ばれる採取地があるわ」

「ここね」と地図上を指さで指さし示しめしながら言う

「それが何なのよ」

「ここは名前の通り 年中もの凄く暑い地域なの。ちゃんとした対策をしてないと歩き回つてるだけでブツ倒れるわよ。その上 これまでの採取地にいるモンスターとは比べ物にならない凶悪なモンスターがいるわ」

「そんじよそこらのモンスターに 私がおくれを取るとでもいいたいのかしら?…まあ、暑さの情報には感謝するわ」

相変わらずな上から目線のセリフには わざわざ突つかかる気も起きない

だが、「飲み水は多めに確保しとくとして…」なんて独り言を小さな声でもらしてるのを見て 少々心配になる

あたしは実際に行ったことはないのだが、『灼熱の荒野』の暑さは本当に半端ないらしく、冒険者の遭難件数が最も多い場所でもあるのだ。生半可な準備では ダメなのだろう

『錬金術』で作られるものの中には そういった暑さ対策のアイテムもあるそうなのだが……残念ながら 今 街に『錬金術士』はひとりもない状況だ。「暑さ対策のアイテムが欲しい！」と言ったところで 無い物ねだりだ

「あつ……でもミスなら暑さ無効化するアイテム 作れるんじゃないかしら」

あたしは思ったことをそのままポロつと口に出してしまっていたようで、高飛車娘も カウンターから離れていこうとしていた足を止め 目を丸くしてコツチを見てきていた

ミスに半ば^{なか}押し付けるような形にはなるが、おそらくこれで心配はなくなるだろう……そう思ったのだが、ここで ふと疑問が湧いてきた

この子はミスのことを知っているだろうか？

この子とトトリに繋がりはあるけど、この前 トトリとミスが一緒に『アランヤ村』まで冒険してくるって言いに来た時は、トトリの幼馴染の男の子はいたが この子はいなかった。もしかしたら、あの時 ミスに会ってないんじゃないかしら？

この街出身なら 少なくともミスの名前ぐらいは知っているだろうけど……もし一度も会っていないなら、アイテムを作ってもらいに行くのは 少しハードルが高いかもしれない

「まあ、マイスのほうは 見ず知らずの相手でも気にしないんだろうけど…」なんて思っていたら、目を丸くして固まっていた高飛車娘が 口をパクパクしだし、そして……

「な、ななな!?なんでマイスに手助けしてもらいに行かなきゃなんなのよ!! ふん!私はアイツなんかに また借りを作らなくても自分の力でちゃんとやっついていけるんだから!!」

そう言っつて『冒険者ギルド』の外へと走り去って行ってしまった

……

「……………ん?どういうこと?」

残されたあたしは、さつき 高飛車娘が言っつたことを思い返してひとり首をひねった

あたしがトトリにマイスのことを教えて 少し経^たってから『アランヤ村』へと冒険に……その時にあの子はいなかった

なのに「また借りを作らなくても」……?

一緒に冒険しに行かなかっただけで、『青の農村』へはトトリと一緒に行って マイスと会っていた……?でも、1回 顔を合わせた程度の付き合いでは「貸し」も「借り」もあつたもんじゃない

だとすると……もしかして、もつと前からマイスとは面識があつた?

…あつ、そういえば 昔、広場でマイスが『貴族』の子供たちと遊んでいたのに 深くわした事があつたっけ?もしかして、あの時 遊んでた子の中にあの高飛車娘がいたとか?

記憶している範囲だけはあるけど、それらしき子はいなかったと思う……:それに、遊んでもらうことが「借り」などとは子供は考えたりはしないだろうし……

「……………これも ひとりで考えても意味が無さそうね」

カウンター脇わきへと避よけておいた書類を 目の前まで引つ張り、書類
仕事を再開する

…今度あいつに聞いてみたいことが増えた。忘れないうちに 聞
く機会があればいいんだけど……

1年目：マイルス「今日もノンビリ、お仕事 こなしつつ」

マイルスの家の前・畑

「ふっ……っつてえーい!!」

ザツザツザツ!

力を溜めて『クワ』を振るうことで、広範囲の土を耕す。一見粗いようにも見えるこの行動だけど、ちゃんと十分に耕せているので何の問題も無い

今日は たくさん育てていた大根が収穫をむかえ、大根が植わっていた場所に新たな作物を育てることができるようになったから、改めて 畑を耕しているのだ

力を溜めて一振り、もう一度 力を溜めて一振り……それを数回繰り返し、新たな作物を育てるスペースを全部耕し終えた……ちょうどその時。畑の外から誰かが僕を見てきていることに気がつき、そっちへと目を向けた

「やあ、朝早くから精が出るねえ」

そこにいたのは、何かが詰め込まれた大きなリュックサックを背負ったモジャモジャ頭の眼鏡の人：マーク・マクブラインさんだった。えつと……「異能の天才 プロフェッサー・マクブライン」と自称したりする人だけど、機械類に関する知識は 実際にすごいひとだ
「おはようございます……えつと、偶然『埋もれた遺跡』で会った時以來ですかね?」

「そんな事もあったねえ。あの時は有難う、おかげで あの遺跡の奥の方まで調べることが出来たよ。色々と有益なモノも見つける事が出来てね……まったく、あんなモノを遺跡に残してるだなんて、ウチの国の『自称：科学者』たちの無能さがよくわかるよ」

ゆつくりとした動作で頭を下げ、礼をしてきたかと思えば、顔をあげたときには心底嬉しそうな笑顔に、そして 次の瞬間には「ヤレヤレ」と呆れた顔になっていた

そう深い付き合いではないけど、この人は 自分の思ったことや感情を基本的に隠そうとはしないタイプだと僕は考えている。：誰とは言わないけど、少し見習ってほしいものだ

「あの時一緒にいたお嬢さん達は元気かい？まあ 今のキミの様子を見れば、何の問題も無かったのだろうっていうのは分かるんだけどね……………つと、いけない いけない、わざわざ世間話をするために来たんじゃないか」

背負ったりリュックサックをおろし、そのわきのポケットから何かを取り出そうとしているようだった

マークさんがリュックサックを漁っている間に、僕は畑の中をそばまで歩み寄った

「あつたあつた！ほら、コレなんだけどね…」

そう言いながら、リュックサックのポケットから取り出した 2枚重ねて三つ折りにされている紙を開いて 僕に見せてきた

……………これは 何かの機械の設計図だろうか？全体像の他に、細部まで描かれている部分もある。そして 2枚目には 3種類の歯車と外装らしきパーツが描かれていた

「実はね、その機械をつくるために色々細かな部品が必要になるんだ。…で、その2枚目のほうに描いてあるのが その必要な部品なんだけど……………また 今回も頼めるかな？」

「うーんと……………」

2枚目の紙に描かれている内容の細部にまで 目を通す。よくよく見てみると、部品の図のわきには それぞれのサイズの詳細や必要な個数が書かれていた

そして、一通り見たところ 特別複雑だったりはないので、そう難しそうでは無く、とりあえずは うけおっても大丈夫そうだった
「はい大丈夫です！作れそうですけど……………素材に何か要望はあったり

しますか？」

「いや、無いよ。まだ試作段階だからね、細かいところは試作を製造してから 実際に運用してみて考えるさ。…あつ、機械の部位によっては それなりの熱を帯びることになるから、耐熱性は重視したものにしておきたい」

…ということは、流石に『木』じゃダメってことだね。加工しやすけれど 耐熱性はいまいちだし……。でもまあ、機械っていったらやっぱり金属製なイメージだから当然と言えば当然かも

「それで、いつ頃には出来そうかな？」

「ええつと……。うん！今日中になんとか作れそうなんで、明日には渡せますよ！」

「いや、僕としては 早いのはとても有り難いんだけど……。けっこうな種類と数を要求してるけど、本当に大丈夫なのかい？」

「はい！素材として必要そうな鉱石なんかもコンテナに十分にありませんから！」

歯車やパーツの形に加工していくのも『鍛冶』や『装飾』の技術に応用すれば問題無いことは、以前 実際に作ったことがあるので心配はいらない。あとは 僕の気力しだいだから…まあ大丈夫だと思う

…と、僕の言葉を聞いたマークさんは 少し驚いたような反応を示した後、小さなため息をついて肩をすくめていた

「へえ、そうなのか……。こういう仕事に関しては 本当に信用できるいい人なんだけどなあ、どうしてかねえ…（ボソリ）」

「……？どうかしましたか？」

「いやあ 何でもないよ、コッチの話だから。それじゃあ、明日の昼前に また来るから。報酬は……。まあ、この前と同じ感じでいいかな？」

「はい、かまいませんよ」

僕がそう言うとき「じゃあ そういうことでヨロシク」と言いながら軽く手をあげた後、マークさんは村の外…街方向へと続く道を歩きだした

「……さて、頼まれた仕事をこなすためにも、種を蒔まいて 畑仕事を終わらせないと！」

ポーチから 種の入った袋を取り出し、それが何の種なのか確認してから袋を開ける。さて……おおよそ27×27の広さに種を蒔いて、そして『ジョウロ』で水やり…ササツと終わらせてしまおう

マイスの家・作業場

カンツ カンツ カンツ

コツコツ コツコツ

ううん……こういう細かいパーツを全部設計図通りに均一に作っていくのは、やっぱり気力を使うなあ……。さすがに 午前中だけでは終わりそうにはないか

用意した素材は『グラビ石』という鉱石を主原料にした『シユテルメタル』と呼ばれるインゴット。最上級や上級のインゴットではないものの 耐久性は申し分無い代物だ

ついぞと言ってはなんだけど、「軽量化された」という特性を付与しておいたインゴットなので、見た目のわりに 軽くなっている。……機械には詳しくないけど、それぞれのパーツは軽いに越こしたことはないと思うからね

「……つと、これで全体の半分かな？そろそろいい時間だし、お昼ごはんを用意しよう」

作った歯車を種類ごとにまとめて それぞれ別の麻袋に入れる。これで受け渡しの時に 色々と楽になるだろう

そして、僕は ついてしまった汚れを簡単に落とし、キッチンのあの部屋のほうへとむかう……

マイスの家

それは、キッチンで昼ごはんを作っている途中のこと

ふと部屋から誰かの気配を感じたので、調理の途中だったけど 部屋のほうへと顔を出してみた。すると、さっきまで誰もいなかったはずの部屋に ある人がいた

「……あれ？いつの間に 来てたの？」

「ついさっきです。お邪魔しています おにいちゃん」

そう言つてペコリと頭を下げたのは ホムンクルスのホムちゃん。僕のことを「おにいちゃん」と呼んでくるのは あいかわらずだ

「とりあえずソファアにでも座つてて。今 お昼ごはん作つてるから」

「はい、わかりました」

僕はキッチンに戻り、新たに一人前分の食材を用意し、調理を再開した

「…ということは、もう なーたちには会つてきたんだね」

「はい。この村に来てから まず最初に集会場にいきましたから。なーは立派に看板ネコをしていました」

そう言い終わると同時に、ホムちゃんは ナイフとフォークを使つて ひと口大くちだいに切つた『ホットケーキ』を口へ運び、モグモグしました

ホムちゃんの言う「集会場」というのは この『青の農村』で最も大きな建物のことで、この村の情報なんかは全部そこに集められるようになっていて、実質の村の中心だ

前までウチで暮らしていた猫の「なー」は、『青の農村』が正式にで

きた際に 諸事情で集会場で暮らすようになった。…とは言っても、基本的にはあまり変わらず 自由気ままに過ごしている。村の中を あちこち行ったり来たり、日向ぼっこしたり、モンスターの上で昼寝したり……

余談だけど、この数年で なーには数匹の子供ができたりもした

「ふう…ぐちそうさまでした」

用意した料理を全部食べ終えたホムちゃんが 息について軽く頭を下げた

「とてもおいしかったです」

「それは良かったー…ん？ちよつと食べカスが付いてるよ」

オシボリで ホムちゃんの左頬ほおに付いていた それを拭ぬぐってあげる

「あつ、…ありがとうございます」

「どういたしまして！……それで、今日はどうしたんだい？」

ホムちゃんは アストリッドさんに連れられて、どこぞへと行って いたはずだ。今、アストリッドさんとは一緒にいないが、何か用があつてここにきたのだろう

「実は、グランドマスターにおつかいを頼まれて……これがそのリストです」

そう言つて ホムちゃんはポケットから取り出したメモ書きを僕に手渡してきた

内容は「ああ、錬金術に使うんだろうなー」と思えるものばかり。そのほとんどが ウチで育ててるものだったり 貯蔵の中にあるものだったので、ホムちゃんにあげることができるだろう

ただ……

「ねえ、この一番下って……」

「はい…。ホムもソレには困り果ててしまっています」

そう、メモ書きの一番下…そこに書かれているのは…。「何か面白
そうなもの」。これはセンスが問われる…というか、あのアストリッ
ドさんが「面白い」と思うものって何なんだろう…？

「というか、アストリッドさんって 最近 何してるの？」

「グランドマスターはあいかわらずです。思いついたことを試してみ
たり、一日中寝たり…自由きまままで、猫のようでもあります」

「…うん、確かに あいかわらずだね」

アストリッドさんらしいといえばらしい。…これは 探し回っ
たりしなくても、そのうち「ヒマになった」とか言ってヒョッコリ
街に帰ってくるんじゃないだろうか？

なんというか 探し回ってる口口ナが少しかわいそうに思えてき
た

「まあとりあえず メモに書かれてるものを 取り出してくるよ」

「よろしくお願いします」

それにしても「面白そうなもの」か…あつそうだ！『アレ』なん
かいいんじゃないかな？

植木鉢うえきばちとかじゃなくて、庭とかに植えるように注意書きが必要だけ
ど、きつと『アレ』ならアストリッドさんも驚くだろう…。「面白い」
とってくれるかはわからないけどね…

1年目：ステルク「アランヤ村での出来事」

…マイスから ロロナの弟子の話聞いて数ヶ月経った ある時、アーランド南部のほうである男の目撃情報があったため、少しのあいだ 私は目撃情報があった地域の周辺を中心に活動することにしたのだ

そして、偶然にも目撃情報があった地域の近くに ロロナの弟子がいるという『アランヤ村』があったため 立ち寄ったのだが……

|||||

「あ、はい。一応『錬金術』のアトリエで……きやわああああ!」

「え、あ、わ、その……ごめんなさい!急に 顔が怖い人が来たから、その……」

|||||

…と、ロロナの弟子である『新米冒険者』兼『新米錬金術』の少女 トトリに驚き叫ばれた

そして、少女の叫び声を聞きつけて 少女の姉らしい人物が現れ

……

|||||

「きやあ!?だ、誰?この顔の怖い人!」

「さては 人さらいね!トトリちゃんがあんまりかわいいものだから……そ、そうはさせないわよー!」

|||||

……まあ、散々な目にあってしまったわけだ

そんなこともあったのだが、周辺地域での活動もあったため 私はここ最近『アランヤ村』を拠点にして活動を続けている

その中で、周辺地域の探索の際に 保険として必要となる『薬』類を 個人的な依頼としてトトリかのじよに頼んだりもしている

これは、トトリかのじよの『錬金術』のうでを確認する意味もあるのだが……まあ それはオマケのようなものだ。仮に 彼女のうでが伸び悩んでいたとしても、私は『錬金術士』ではないため、何もしてやれない……あくまで 私の自己満足のようなものだ

アランヤ村

それは、周辺地域の探索をいったん終え、物資の補給を兼ねた 束の間の休息のために『アランヤ村』に立ち寄った時のことだった

「なあ、頼むよ！おっさんってば！」

「くどい！それと、おっさん呼ばわりはやめろ！ 俺の名前はステルクだ。ス・テ・ル・ク！いい加減憶おぼえろ！」

「呼び方なんてどうでもいいだろ。なー、頼むってばー」

指摘し 訂正させようとするが、当少の本人は 少しも悪びれた様子も無しに 自身の要求ばかりを押し付けてくる

私が その場を離れようと歩き出そうとするが、少年は背後から私の着ているコートに掴つかみかかって離そうとせずに踏ふん張り、靴底からズリズリと音を立てながら引きずられはじめた

さすがに このまま引きずり続ける気にもなれず、少年をふりほどこうと身体を捻る

「ええい、離せ！私は弟子は取らん！」

そう、この少年は 前に『トトリのアトリエ』で出会った時からずっと私に「オレを弟子にしてくれ！」と言ってつきまとってくるのだ
それからというものの、私を見かける度たびに「弟子にしてくれ！」「弟子

にしてくれ！」と……。今日のようなやりとりも もう何度目か…
「やだ！いいって言うまで絶対離さない！オレは、おっさんみたいな
強い冒険者になりたいんだ！」

「私は冒険者ではない！騎士だ！」

『騎士制度』は共和国になった時に無くなったの……。ねえ『自称』
騎士様？」という呟きと共に 冒険者ギルドの受付嬢の呆れ顔がうか
んだ気がしたが気のせいだろう

そもそも、勝手に『騎士制度』を廃止したあの方が 悪いのだ。だ
というのに、「自称騎士」「元騎士」などと……

…いや、今は目の前の問題を何とかすることを優先すべきだろう。
だが、やはり 少年は掴むその手を離そうとはしなかった

「冒険者でも騎士でも、強けりやなんでもいい！」

「ああもう……。なんでそんなに強さにこだわるんだ」

「世界一の冒険者になるからに決まっているだろ！」

その理論は合っているようで噛み合っていない。第一、目標が「世
界一の冒険者」などという漠然としたものである時点で、色々心配
だ。目標は大きいにこしたことはないと思うが、霧のように掴み取れ
ないものであれば 無意味なものになってしまう

「さつきから言っていることが支離滅裂だぞ。大体、強くなりたいだけ
なら、私より師に相応しい人間がいくらでもいるだろう」

「だっておっさん、オレ達のこと助けてくれたじゃんか！」

ムツ……。そういえば、トトリもそんなことを言っていたな…。なん
でも、トトリと少年が『冒険者免許』を貰いに『アーランドの街』に
行っている最中、乗っていた馬車がモンスターに襲われて…。そこに私
が現れ モンスターを一蹴した、とか……。だが

「知らん、覚えてない。助けてたとしても、それは偶然たまたま通りか
かったというだけだ」

そう、私にとっては「モンスターに襲われている人を助けた」とい
う出来事は、日常茶飯事とまではいかなくとも、それこそ数えきれな
いほど経験しているのだ。そのうちの一組をしつかりと憶えている

かと聞かれても 困ってしまう

どうしたものか……と、ひとり考えていたその最中に ふと少年の顔を見たのだが、その顔が 悔しそうに歪んでいることに気がついた。そして、その歪んだ口から絞り出されるように 少年の声が漏れ出してきた

「オレが強かったら、助けてもらわなくてもよかったんだ！ でも、弱かったから……わかるだろ、そういうの！」

「それは……わからないでもない、な」

どういう状況で襲われたのか、モンスターと少年との力量差、といった私の知らない部分があるもの 少年の言いたいことは伝わってきた

「もしあの時、誰も助けがこなければ……もしかしたら 馬車が破壊され、少年やトトリにも大きな被害が出て、最悪の場合「死」さえ関わってきたかもしれないわけだ。結果論だ、と言ってしまうばそこまでだが それでも重要なことだろう

「それじゃあ、弟子にしてくれるんだな！」

「何故そうなる……それに……」

少年の思いに共感はできるとは思ったが、誰も弟子にするなどとは言っていないだろう……。それに……

私は少年の腰のベルトから下がっている武器に目をやる

その武器は『剣』……ただし、私の使っている『剣』とは ずいぶんと異なっている。…別に 少年の『剣』が特別なものだというわけではない

私の使っている『剣』は、剣先から柄の末端までの長さは 私の身長と同じくらいだ。対して、少年の『剣』は 彼の片腕の長さと同ほほ同じ程度の長さだ。 ふたつは 同じ『剣』というくくりではあるが、正確には『大剣』と『剣』というべきだろう

そこまで大きさが違えば、当然 重さも違う。さらに言うなら、適

切な間合いや むいている戦闘スタイルも異なっている。すると、基礎を教えることは可能だが 応用を教えるのは少し骨が折れるだろうことがわかる

……何が言いたいのかといえば、「せっかく師を得ようというならば 自身の武器・戦闘スタイルに近い人間が適てきしているのではないか」ということだ

この少年に適しているであろう 手数で攻める戦闘スタイルの『剣』の使い手……

真っ先に思い浮かんだのは、私の知る限り 最強の剣の使い手である 元・アーランド王国国王の「ルードヴィック・ジオバンニ・アーランド」……だったのだが、そもそも 私がこうして あちこちを旅している理由が、フラツと何処かへ行ってしまったジオおを探すためであり、そもそも会うことすらままならない

次に思い浮かんだのは、マイスかれだった。マイスかれは 主に使っている武器は『双剣』ではあるが、他にも何種類もの武器に精通しているようだったので おそらく問題無いだろう

私は早速さっそく 少年に提案することにした

「師にするのであれば、『青の農村』のマイスはどうか？ キミたちとは顔見知りなのだろう？ 彼なら キミこころを快く受け入れ、強く鍛えてくれるはず……」

「やだ！ 絶対にやだー!!」

予想とは異なり、少年はすぐさま私の提案を拒否した。しかも、「絶対」とは……かなり嫌なようだが……

「…何故だ？ 確かに、一見 頼り無さそうに見えてしまうかもしれないが、彼は この国でも指折りの実力者なんだぞ」

「そのくらい、メル姉に勝ったのを見た時からわかってるよ……でも、あの後 マイスに「どうやったら アンタみたいに強くなれるんだ!?」って聞いたたら……」

少年は 一度口を閉じ、息を溜め……そして 再び口を開いた

『クワ』をオレにつきだして「耕たがやそう！」って……！オレは野菜を育てたいんじゃないかって 強くなりたいたんだよー!!」

「ああ……そういうことか……」

少年が嫌がるのも納得できた。……まあ、仮に「強くなりたいたい！」と言った人が10人いたとして その10人に「畑、耕そうよ！」なんて言ったとすれば、ほぼ確実に10人中10人が拒否するだろう

……そして 一番頭を抱えたくなるのは、自分が、マイかスがイイ笑顔をして『クワ』を差し出しているその情景を、いとも簡単に思い浮かべることが出来てしまったということだ。……なんというか、いかにもマイかスらしいと思えてしまったのだ

「……なんというか、すまない」

「……？なんで おっさんが謝るんだよ？」

「なんで」と聞かれたら、「なんとなく」としか答えられない。私自身はやったことではないのだが、何故か 少年に対して申し訳ない気持ちになってしまうのだ

「……仕方ない、という言い方もおかしいかもしれないが……。少しくらいなら手ほどきをしてやる。こちらにもこちらの都合があるので、あまり長い時間は付き合えないがな。ついてこい」

「本当か!? やったー! よろしくお願いします、師匠ししょう!」

「ぬ……その呼び方はやめろ。思い出したくもない顔を思い出す……」

やっと 掴んでいた私のコートから手を離れた少年が、嬉しそうに跳はねながら 私の後ろをついてくる

「師匠」という呼び方……というより、「師匠」と呼ばれていたある人物に対して あまり良い記憶が無いということなのだが……

「えー、じゃあどう呼べばいいんだよ。おっさんもダメ、師匠もダメって」

「普通に名前で呼べばいいだろう!」

鍛練のできるような場所まで移動している最中、ふと とある『青の農村』の噂」を思い出し 少年に伝えるか少し悩んだが……まあ、どちらにせよ この少年は嫌がるだろうと思い、何も言わないことにした

1年目：トトリ 「メルお姉ちゃんと『青の農村』」

アランヤ村

「おっし！んじゃ、またなトトリ！」

「あ、うん。手伝ってくれてありがと……って、もう行っちゃった」

『錬金術』の材料集めも兼ねた冒険から 村に帰りついてすぐに、ジーノ君はどこかへと走って行ってしまった。…この前の時も、すぐいなくなっただような……

「どうかしたのかな…？」

「んー？よくわかんないけど、かなり 熱が入ってるみたいだし、『冒険者』としての自覚がでてきたとか……無いわね、あのジーノ坊やだもの」

「メルお姉ちゃん。メルお姉ちゃんも手伝ってくれてありがとうね！」

私の後ろをノンビリついて来ていたメルお姉ちゃんに お礼を言うと、メルお姉ちゃんは手をパタパタと振りながら 軽く笑いかけてきてくれた

「いいの いいの。あたしは普段から 仕事をキツチリ詰め込んだりしないのでノンビリするタイプだから。トトリの手伝いついでにちよつとやるくらいでちょうどいいのよ」

「ああ…そっか、メルお姉ちゃんが『冒険者』になった頃は 免許は最初から永久資格だったんだよね。いいなあ……」

「あはは、それをあたしに言われてもね……でもまあ、免許貰うだけ貰って 全く活動しない奴らがいたんだから、『冒険者ギルド』が制度の改正をして期限を作ったのは 当然の対応よね」

でも、なんだか損そんした気分……。たった数年…ほんの少しの時期の差で「永久免許」か「期限付き免許」かという違いがあるなんて……

「ううっ…私、取得から3年で ちゃんと目標ランクに到達できるかな…?」

免許更新に必要な冒険者ランクは7。今 私のランクは3…：ランクが高くなるほど上げ難いことを考えると、かなり厳しい気がする…

「なにシヨボくれた顔してるの。そんなんじゃないやあ 出来ることも出来なくなっちゃうわよ? ほらほら、まずは受けてた依頼を報告しに行くわよー」

「う、うん」

バー・ゲラルド

「ふう〜」

ゲラルドさんのお店で、達成した依頼の報告 そして新しく受ける依頼を探す…：そのふたつを終えて、先に座っていたメルお姉ちゃんと同じテーブルのイスに座って 息をつく

そこに、飲み物を持ってきてくれたおねえちゃんが来た

「トトリちゃんもメルヴィも お疲れ様。ゆっくりしていつてね」

「うん、ありがとう おねえちゃん!」

「あら、村に帰ってきた時はシヨボくれてたのに ずいぶん元気になつたわね。何かいいことでもあった?」

テーブルを挟んで向こう側に座っているメルお姉ちゃんが不思議そうに首をかしげながら、私に聞いてきた

「えつとね、さつき達成した依頼で冒険者ポイントがたまつたみたいで、次のランクにランクアップ出来そうなの!」

「へえ、心配してたわりには早いわね ランクアップ。これは さつきの心配も杞憂きゆうに終わるんじゃないかしら」

「えへへっ…だといいなあ」

つと、喜んでいるのもいいけど、冒険者免許のランクアップができ
るくらいにポイントがたまったってことは、そろそろ また『冒険者
ギルド』に行かないといけないうってことだね？

なら、必要なものを調査したりしないと……あつ、でも、馬車で
『アーランドの街』まで行くんだったら そんなに調査しなくても大
丈夫かな？

パリンツ！

「えっ？」

何かが割れたような音が聞こえたから そっちのほうへ顔を向け
てみた

その方向はお店のカウンターがある方向。そこにいたのは おね
えちゃんだった。なんだかよくわからないけど、こっちを向いて呆然
としていた

「おねえちゃん!?!どうかしたの？大丈夫？」

呆然としているおねえちゃんのことを心配になって、私は立ち上
がって おねえちゃんのいるカウンターのそばまで駆け寄った。そ
して、私が声をかけたら おねえちゃんは「ハッ!?!」とした様子で私
の顔を見てきた

「だ、大丈夫よ。うん、なんでもないから 心配しないで！」

「でも……」

本当にどうしたんだろう？なんだかいつものおねえちゃんと違う
ような気がするんだけど……

「本当に大丈夫だから、ね？」

「…うん、わかった」

…でも、やっぱり気になる

席に戻って 飲み物をちよつと口にしながらチラリとおねえちゃ
んの様子を確認してみる。……うーん、気のせいじゃないと思うんだ

けど…

「…ふたりしてお互いのことを心配し合って…：はたから見てるあたしたちから教えなくなるわね、これは…（ボソリ）」

「えっ？　メルお姉ちゃん、何か言った？」

「ううん、なーんにも言っていないわよー？」

「そう…？」

飲み物を飲み終えて、『アーランドの街』へ行く準備を始めようかな

…と思った時、ふと　あることが私の頭をよぎった

「ねえ、メルお姉ちゃん」

「ん？　なあに？」

「このあいだ　マイスさんと数年ぶりに会ったって感じだったけど、メルお姉ちゃんって　私が冒険者になる前から冒険者で、街方面にも行ってたんだよね？　その時にマイスさんと会ったりはしてなかったの？」

私に対して　メルお姉ちゃんは「ああ、そのことねー」と、まるで前々から聞かれることを　半分予想していたかのように淡々とした様子で答えてきた

「ほら、あたしって免許に期限がないから　そんなにランクアップのことを気にしなくてもよかったわけ。そんなこともあって　あたしは『アランヤ村』周辺を中心に活動してて、あんまり街には行ってないのよ」

「それに…」とメルお姉ちゃんは言葉を続けた

『青の農村』については色々話では聞いてたけど、特別　行きたいとは思ったりしなかったのよ。…まあ、そこにマイスがいるって知ってれば　立ち寄ったりはしたかもしれないけど。でもなあ…」

「でもっ…」

「冒険者の中では有名な話なんだけどね、『青の農村』で仲良くなったモンスターと 同族のモンスターが倒し辛くなる…っていう…」

なんとなくわかるけど…それって どういう事なんだろう？

そう思ってしまったい 首をかしげていると、メルお姉ちゃんは私の疑問を察してくれたみたいで、軽く頷いて 説明してくれた

「あたしが聞いたことがあるのは、『ウォルフ』と仲良くなった冒険者が 戦闘中に野生の『ウォルフ』をモフモフしたくてたまらなくなつて、まともな戦闘にならなかつた…っていうやつ。他にも似たような話もあるんだけどね」

「なるほど…確かに気持ち良さそうだったもんね…」

「…トトリはもう手遅れかしら？」

「そ、そんなことないよ！…たぶん」

…実は、前々から 今度『青の農村』に行つた時には 寝転んでる『ウォルフ』をモフモフしたいって思ってたんだけど…やめておいたほうがいいのかなあ？

「もしかして、他にも『青の農村』の噂ってあるの？」

「色々あるわよ？ 本当のことっぽいから まるつきりウソっぽいのみで」

目をつむって腕を組み「そうねー…」と、噂を思い出そうとしているような仕草をとったメルお姉ちゃんは、腕を組んだまま ピンツと人差指を立ててフリフリと振つた

「全12の農家だけど、その気になれば『アーランド共和国』の全人口が食べていけるほどの生産量だ…とか。村で暮らしていたら そのうちモンスターの言いたいことがなんとなくわかるようになる…とか。幸せを呼ぶ金色のモンスター…とか。戦闘訓練を受けていないはずの農家が『クワ』で『グリフォン』を追い払った…とか」

『グリフォン』!? 『グリフォン』って あの!？」

『グリフォン』っていったら、「新米冒険者が最初にぶつかるとか大きな壁」として話に聞く、もうきんるい猛禽類に似た頭と翼を持った猛獣だ

『アーランドの街』からほど遠くはない採取地にも生息していて、前にちよつとだけ見かけたことがある……全然勝てる気がしなかったから、気づかれる前に、すぐに逃げたんだけどね……

「そつ、あの『グリフォン』。信じられないでしょ？」

「うん。……あつても……」

ふと思いつ出したのは、メルお姉ちゃんとマイスさんの勝負

私が知っている人の中では一番強かったメルお姉ちゃんに、少々
の余裕をみせながら勝ったマイスさん……。そのマイスさんが使つて
いたのは『ネギ』だった

……後で聞いた話だと、『ツインネツギ』という、れっきとした武器
らしかった。……なお、その見た目通り、野菜の『ネギ』を加工したも
のだそうだ

「あんなおかしな武器でも強いマイスさんがいる村だから、その村の
農家さんが強くても、なんだか納得しちやいそう……」

「まあ、『クワ』で戦うつてのは、『ネギ』よりはマトモそうよねえ……」

メルお姉ちゃんも私と同じことを考えていたみたいで、苦笑いをし
ながら、私の言うことに同意してくれた

1年目：クーデリア「あいつに聞いてみよう」

青の農村・集会場

『青の農村』の中心。そこからすぐに見える 他よりもひときわ大きな建物：とは言っても2階建ての家がふたつくついたくらいの大ささだから、街の建物と比べると ちよつと横広く感じるくらいで 特別大きいというわけではない

他に特徴をあげるとすれば、外からも見える 人の頭がスツポリ入る大きさの鐘かねが 屋根の上にあることだろう。 下から階段で上される小さなスペースがあり、そこに鐘が設置されているらしい。そして、その鐘は 決まった時間に打ち鳴らされるそう

「らしい」「そうだ」っていうのには理由がある

まあ、ただ単純に あたしがこれまで この『集会場』に来ることも、興味を持つことも無かったというだけなだけけど…

「で、あの子たちは ここにいるの？」

あたしは、あたしをここまで連れてきたマイルスに問いかける

「あの子たち」っていうのは、このあいだ『冒険者ギルド』の仕事の手伝いをしてくれたひとたちのことだ。 久々の休みに なんとなく立ち寄ったマイルスの家で「そういうえば『冒険者ギルド』に来てくれた子たちって、普段何してるの？」と聞いたら『集会場』に案内してきたのだ

「うん。ほら、あの奥のカウンターに…」

マイルスが指差すほうへ つられるように視線をむけてみると… 確かに そこに『冒険者ギルド』に手伝いに来てくれた子たちがいた

奥に設置されているカウンターの 内側に3人、外側に1人。 全員

見覚えのある顔だった

内側にいる3人は何かの書類の束に目を通しながら ペンを走らせている。…そのうちの1人は、他の2人とは 何故か服装がずいぶんと違っているのが ちよつと気になった

外側にいた1人の子は 内側にいる子たちよりも少し歳が低い子で、ヒマそうに立っていた。けど、あたしとマイルスに気がついたように、笑顔で会釈をしてくれた後 コツチに歩み寄ってきた

「いらっしやいませ、クーデリアさん！何のご用事ですか？視察か何かのお仕事ですかー？」

にこやかに聞いてくるのに対し、少し「どうしたものか…」と思いつながりも 言葉を返す

「別に大した用は無いわ。ただ ちよつと立ち寄っただけだよ。…で、ここで何してるの？」

「私ですかー？私はこの『集会場』で給仕をしています！お姉ちゃんは コックさんです！」

おそらく、会話が聞こえていたのだと思う。カウンターの内側にいたうちの1人…服装が他の2人とは違っていた子が「どうも…」といった感じで 書類から目を離し、コツチを見ながら 軽く頭を下げてきた

「なるほど、ひとりだけコックだったから 服装が違ってたのか」と思いながらも 周りを見渡し、色々と納得する

出入り口の扉から見て 奥にあるのがカウンター。そして 2階に上がるための階段や、倉庫か何かがあるのであろう扉がカウンターの上のまた奥にあるものの、それ以外にこの建物内にあるものといえ ば いくつものテーブルとイスだけだ

おそらく『集会場』はその呼ばれ方とはまた別に「食堂」や「酒場」といった機能があるのだろう

…で、今はお昼にしては少々早く、どこのテーブルもスツカラカンだ。だから コックが書類仕事を手伝い、給仕がヒマそうにしていた

のだろう

「まあ、とりあえず 座ろうよ」

マイスがそう促し、あたしとマイスは手近なテーブルのイスへと座る

そして、給仕の子はあたしたちが座ったテーブルのそばに立ち、ニツコリと笑いながら 聞いてきた

「ちよつと早いですけど、お昼を食べていきませんか?」

その提案に あたしとマイスは顔を見合わせて頷き、給仕の子のほうを再び向く

「それじゃあ、そうしようかな」

「ええ。マイスが奢ってくれるみたいだし……何かオススメのをお願いするわ」

あたしの言葉に マイスが苦笑いするのが横目に見えたけど、あたしはそれをスルーする。給仕の子も 特に気にした様子も無く、ここやかなまま頷いた

「わかりました!それじゃあ クーデリアさん、マイス、今から お姉ちゃんに作ってもらいますから、ちよつと待っていてくださいね!」

「ではではー!」と言いながら 給仕の子はカウンターのほうへとテツテと歩いていった

……あたしは気になったことがあったから、少し声を抑えながらマイスに問いかけてみた

「ねえ、あんたって 普通に「マイス」って呼ばれてるの……?」

「そうだけど?」

「それがどうかしたの?」といった様子で 首をかしげるマイス

「いや、あの給仕の子、あんたよりも幼いわよね?」

あたしがそう言うと、マイスは 何故か首を振った

……まさか、あの子 実は結構な歳なの……!?

「あのね クーデリア……」

「な、なによ」

「僕を「さん」付けで呼ぶのは、トトリちゃんと そのお姉さんのツエツイさんくらいだよ」

「……あんた、一応は この村の村長よね？」

それはまあ 「親しみやすい」ってことだと考えたら、良い事かもしれないけれど……。でも、『青の農村』の誰にもつていうのは いくらなんでも……

いや、マイルスらしいといえばマイルスらしいけど……それでいいの？

……まあ、マイルス自身が そこまで気にしている様子もなかったから、このことは 一旦 スルーすることにし、別の話題をきり出すことにした

「ねえ、あの子たちがやってる書類って何なの？」

あたしが目をやるのは、カウンターで 何かの書類にペンを走らせている2人。：おそらく、ああした書類作業は これまでにも何度もやってきているんだと思う。だから『冒険者ギルド』に手伝いにきた時も、十分に仕事をこなせたのだろう

けど、ここは『青の農村』。『アーランドの街』から徒歩2、3時間の近場だから」という理由で、『アランヤ村』とかみたいにな わざわざギルドが扱う仕事や冒険者用の依頼を斡旋あっせんしていたりはしなかったはず……。すると、あの書類は何かしら？

「あれは、各農家が「ここ一週間で何をどのくらいつくったか」って言うのを書いたヤツを まとめたものだよ」

「……それって、全部 管理されてるってこと？」

「ううん、別にそういうわけじゃないよ。自分の畑で何を育てるかは

全部個人の自由だし……」

「ただ……」と、マイルスは言葉を続けた

「ある一種の作物が大量に市場に出回ったりしたら 価格が崩れちゃうから、もし過多に生産された作物があったら事前にいくらか買い取って ウチで加工したりするようにしてるんだ」

「じゃあ、逆に誰も育ててなくて 足りなくなりそうな作物があったら？」

「そういうのは、僕のほうに報告が入って 僕がウチの畑で作るんだ。そうやって なんとか間に合わせるんだよ」

マイルスの説明を聞いて あたしは「なるほど」と納得した。確かにそれなら市場価格を常に安定させながら 『青の農村』の農家の人たちも生活が十分にできるだろう

それに、生産量が少ない作物を マイルスがフォローするというのも、間違っていない対応だろう。『青の農村』の中で 最も作物を育てるのが上手いのはマイルスだろうし、持っている畑が 一番広いのもマイルスだ。おそらく、他の農家に頼むよりも早く・多く 作物を育ててくれるだろう

そして、そうやって各農家の生産量や全体の統計をとって まとめて記録し保存しておけば、そのデータは後々役立つことだろう。その作業を あのカウンターにいる子たちはしているのだ

……でも

「それって、あんたが考えて 始めたんじゃないでしょ？」

あたしがそう言うと、マイルスは驚き 不思議そうな顔をしながらも頷いてきた

「そうだけど……なんでわかったの？」

「だって、そういう計算しつくした考えって あんたには出来そうにないもの。それこそ ロロナと同じくらいに、ね」

そう、マイルスはロロナと同じで、「なんとなく こっちのほうが好きそう」といった感じに物事を選択する、直感タイプとでも言うべき

種類だと思う

いくら作物のことに關しては余念の無いマイルスであっても、そんな他の人にまで情報を求めて集めるなんていうのは、絶対と言っていいほどしそうにないことだ

「クーデリアの言う通り、あれはコオルが中心になって始めたことなんだ。……僕が知らないうちに」

コオルっていうと、あの赤毛の行商人の。たしかにあのあたりの人間が考えそうなことではあるかしら……

……っていうか

「あんたって、この村で何してるの？」

「作物育てて、薬調合して、武器とか農具作って、あとは……」

……村長って、なんだったかしら？

あたしがそんなことを考えてるうちに、給仕の子が料理を運んできてるのが視界の端に見えた。なので、一旦^{いったん}区切りをつけ、少し早めの昼食にすることにした……

あたしたちのところに料理が来た直後、『集会場』には別の客たちが来た。彼らはマイルスに軽く挨拶をした後、別のテーブルへといった

そして、食事を始めて少ししたところで、あたしはあることを思い出し、一旦手を止めてマイルスに話しかけた

「そういうえば、あんたってあいつとは顔見知りなのよね？」

「あいつ？」

「ミミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラングって貴族の子よ。ほら、黒髪を横に結んでる……」

あたしがそう言うと　マイルスは「ああ！」と　やはり何か思い当たったようで、頷いてきた

「今の髪型は知らないけど、シユヴァルツラング家の女の子なら　僕の知り合い、というか友達……いや、向こうが僕のことをどう思ってるかは　わからないけど……」

珍しく歯切れの悪い物言いのマイルスを　少し不思議に思いつつも、あたしは　次の疑問を投げかける

「今の髪型は知らない」ってことは、最近は会ってないの？」

「うん……。何年か前に色々あって、それ以降　ちゃんと会えてないんだ」

「色々あって」ね……。それが　この前あの高飛車娘が言ってた貸し借り云々のことなのかしら？それに、それ以降会ってないってことは、もしかして……

「……もしかして、あの子が『冒険者』になったの　知らなかったりする？」

「えっ!?それ　ホント!?　大丈夫かな……?怪我したり、大変な目にあったりして　泣いちゃったりしてないかな!?ど、どうしよう!ちゃんと『冒険者』としてやっていけそうか　見に行ったほうが……」

アワアワと慌てだすマイルス。その様子は　そう短くは無理付き合いのあたしが　初めて見るほどの狼狽ぶりだった

「……あんだ、トトリからも何も聞いてないの？」

「え?なんで　トトリちゃん?」

「何でも何も、『冒険者』登録がほぼ同時期だったりもして、何度も一緒に冒険してたりするのよ」

「そ、そういえば、トトリちゃんが「ミミちゃんって娘と一緒にく」って話してたことがあった気が……。もしかして、あの時の「ミミちゃん」って……」

「ええ、あんだの知ってる「ミミちゃん」でしょうね」

「そうだったんだ…」と驚いているマイルスだけど、その様子は なんとなくだけど落ち込み気味に見える気がした

マイルスは、自分が 何も知らなかったことに気を落としているのかしら？

気にするほどのことなのかしら？別に仲が良い感じじゃあ無さそうだったし…。いや、マイルスは「友達」だと言おうとした…：…何故か 断言はしなくて迷ってる感じはあったけど…

でも、高飛車娘たかひぐるめのほうは ほぼ確実にマイルスを避さけている。意図いとてき的に、だ

「いつたい、あんたとあの子の間で 何があったのよ」

「さ、さあ…？」

マイルスの返答に 少しイラツときたけど、その顔を見ると「心底わからない」といった様子で、眉間にシワを寄せながら首をひねっていた。こんなマイルスがウソを言っているとは さすがに思えない

「…：…そもそも、いつ知り合ったの？」

「えっと、たしか 6年前の1月ごろ…：ちょうど前の年の終わりの『王国祭』の『武闘大会』に出場した後くらいだったね」

「ああ…、確かに あんたってあの頃からドンドン注目されるようになっていったわよね」

さすがは国主催のお祭りのイベントと言うべき効果だった。あれでマイルスとマイルスが作るものは 一躍有名いちやくゆうめいになったと言えると思う

「…あつ、そういえば その年の3月くらいに街の『広場』であんたが『貴族』の子たちと遊んでたことあつたじゃない。ほら、あたしがペンダントの作り方教わったところ。もしかして、あの中にあの子がいたりした？」

「いや？たぶんいなかったと思う…。そもそも 自分から外に出てきて遊ぼうとするような活発な子じゃなかったし」

「それじゃあ 何処でどう知り合ったのよ」

「活発な子じゃなかった」っていうのが少し引つかかるが、今はとりあえず どういう経緯で知り合ったのかを知るほうが先決だと思い、マイスにそのことについて問いかけたのだけど……

「それはー……まあ、色々あって……」

マイスは おもいつつつきり言葉を濁してにごきた。その上 視線が明後日の方向をむいてる。これはもはや「すつごく隠し事してますよ！」と声を大にして言っているようなものだ……

「チャツチャと言っちゃいなさい！……て、言いたいところだけど……ハア、あんたが そこまでして言わないってことは、それ相応の理由があるのよね？」

「あはは……まあ、ちよつと、ね」

「わかったわ、これ以上は聞かないであげる。……さつ、冷めてしまわないうちに 食べてしましましょう」

そう言って あたしは食事の手を再開する

マイスとあの子の間で何があったのか……それは、今 無理矢理聞き出すべきじゃないと感じた

もちろん、気にならないわけじゃない

でも まあ、「いつか聞けたらいいなあ」程度の感覚でいよう。話せる時がくれば マイスのほうから話してくれるはずだろう

1年目：マイルス「フリーさんは いつもどおり」

マイルスの家

本日は快晴。畑の作物たちが 葉に命一杯光をあびている

1年の終わりが間近まで近づいて ここ最近 空気が冷たくなっただけ、日差しのおかげで 幾分 寒さがマシに感じられる

僕が座っているイスから見て テーブルを挟んで反対側にあるソファーに座っているのはフリーさん

フリーさんの表情は、普段『冒険者ギルド』で働いている時の依頼を見にきた冒険者に対して怯えている表情でも、ヒマしてポケーっとしている表情でもなく、キリツとした表情だった

「マイルス君。例のモノは…?」

「ここにあるよ」

「ふふっ…、ふふふふふー」

「やったー！新しい『金モコ印の安眠枕』だー!!」

「えっ、なにその名前！初耳なんだけど!?!」

僕の驚きの声に耳をかたむける様子も無しに、ソファーから立ち上がり 枕を抱きかかえて小躍りするフリーさん。顔も さつきまでのキリツとした表情の面影は無く、ほのかに頬を朱に染めた笑顔になっっていた

僕がフリーさんに渡した『枕』……フリーさんがつけた謎の名

称から判る通り、金色のモコモコの『ふわ毛』と『モコ綿』を使用した一品だ。それも、これが第2号だ

ことの発端は…とやりたいところだけど、明確な始まりというのはわからない。いつの間にやらフリーさんが「モフモフ大好き！」ってなったことが ある意味での始まりだったのかもしれない

金モコの正体が僕だと知った後にも「一日中モフモフしてたい」などといったけど、フリーさんの そのモフモフ欲は なんだか時間が経つにつれて大きくなっていつているように感じられた

そして、数年前のある日のこと……

「ま、前に「持って帰る？」って聞いたよね…？その…今、もらいたいんだけど…」

その言葉を聞いた時の僕は「えっ、なんのこと？」って状態だったけど、話を詳しく聞いていくにつれて フリーさんの言いたいことは理解できた

僕の『モコモ』をあげるって話は、僕自身はあまり覚えてないし、あまり気は進まなかった。…けど、目を潤うるませながら「お願い！」と頼まれてしまったら、なんとなく断れなくなつて…で、「何に使うの？」って聞いたら「枕に…」とのことだったので、僕が作つてあげることにしたのだ

それが数年前の話。そして、数週間前に「何年も使い続けて、しばらくで潰れてきちゃったから…」とフリーさんが新しい枕を頼んできたのだ

「何年も使い続けて、また欲しいって…そんなに使い心地が良かったのかな？」

自分のものだから つていうのもあるかもしれないけど、そこまで

特別凄いつて印象はない……

いやまあ 確かに『シアレンス』周辺にいた『モコモコ』の毛はモフモフしてて気持ちよかった記憶がある……。でも、それが金色になっただけで 品質に差は……あったのかな？金モコの毛の質なんて気にしたことなかったし……

っと、そんなことをひとり考えていたら、いつの間にかファイリーさんが 僕のことをジイーツと見つめてきていた

「どうかした？……もしかして、枕に何か ダメなところがあつた？」

「別にそういうわけじゃないんだけど……ふと閃いたんだけど、金の『モコモコ』と『モコモコ』で 金モコちゃんの人形作つたらどうかかな？」

「ほら、リオネラちゃんのところの ホロホロ君とアラニーヤちゃんみたいな感じで」と付け足して 自身の中のイメージを伝えてくるファイリーさん

でも……

「いや、何が悲しくて 自分の毛で自分の人形を作らなきゃならないのき……」

「ええ〜っ？結構 需要があると思うよ？」

「そもそも、需要とかの前に 根本的に毛が足りなくなるから」

ただでさえ、枕ひとつでも数週間の時間が必要だったっていうのに。それに精神的にもきついよ……色んな意味で無理がある

「……そういえば、今、モコちゃんの姿になったら どうなるの？」

「…聞かないで」

「ま、まるはだ……」

「言わないで！」

「ここ！今度 毛刈る時は わた、私が手伝ってあげるよっ!!」

「ううえ!?何で!？」

「落ち着いた?」

「…うん。ご、ゴメンね?」

「とりあえず、お茶淹れたから 飲もうか」

よくわからないテンションの上げ方をしてしまったファイリーさんを ひとまず落ち着かせて、淹れたお茶をすすめる

ここですすめたお茶は『リラックスティー』、『シアレンス』にいたころ 作り方を憶えたお茶だ。材料の関係で何年もかかってしまったけど、今ではほぼ完璧に再現することが出来るようになり こうして人に出せるまでになった

「ふう…とりあえず、ミス君の毛刈りのことは また今度でいいやあ…」

『リラックスティー』の効果もあってか、いい感じにリラックスしノンビリとした感じになったファイリーさん。これで とりあえずは大丈夫だろう

…できれば、このまま忘れて 二度と思い出してほしく無いなあ
…

コンコンツ

そんな中、玄関の扉がノックされる音が聞こえた。そして、僕が返事をする前に扉は開かれて ノックをした張本人であろう来客が家に入ってきた

「おーい、にいちゃん いるかー?」

そう言いながら入ってきたのは 行商人のコオルだった。コオルは僕を見つけると「よお」と手をあげながら軽く挨拶してきた

「いらっしやい、コオル。今日はどうしたの?もしかして、『アレ』の事で何かあった?」

「いや、ソツチは別に問題無いぜ。連絡と打ち合わせは 明日『集会

場』でするから心配するなって。…で、今回来たのは、これだよ」

僕はコオルが差し出してきた物を受け取り、確認する。それは封筒に入った一通の手紙だった

「いつものみたいだぜ。ついさつき届いたみたいだ。急ぎの用じゃないだろうけど、早く手に渡るほうがいいだろうからな」

「うん、わざわざ、ありがとう！」

「いいって、いいって！まあ、気が向いた時に返信書いて『集会場』の受付に持っていきなよ。んじゃあな、客がいる時に邪魔して悪かったな」

そう言うとコオルは、ソファアに座っているフィリーさんに軽く頭を下げた後、玄関から出ていった

テーブルそばのイスへと戻り、あらためてイスに座った僕は、受け取った手紙の送り主の名前を確認した

……うん。コオルが言っていたように、いつもの手紙みたいだ

封筒を開けようとした時、向かいのソファア座っているフィリーさんと、たまたま目が合った。そして、それを良いタイミングだと思っただように、フィリーさんは僕にオズオズとたずねてきた

「そのー…その手紙って、誰か友達からの手紙なの？」

「ええっと、友達っていうより…。いや、フィリーさんも知ってる人だよ？」

「えっ、そうなの？」

「というか、エステイさん」

「へえ……って、ええっ!?おっおお、お姉ちゃん!？」

そんなに驚くほどのことだろうか?大きく口を開けて、手でそれを隠すような仕草は、ちよつとオーバーアクションな気もするんだけど…

「いつもの」って言った気がするんだけど……お姉ちゃんからの手

紙って、よく送られてくるの…?」

「そんなに頻繁にじゃないけど…そうだなあ…少なくとも1ヶ月に1回はくるかな」

「ウソオ!? 婿探しの旅に出てから 家には何一つ連絡ないの!?!」

「えっ?! そうなの?」

それで あんなに驚いてたんだ…。それにしても、エステイさんも家に全然連絡してないだなんて…いったい何を考えてるんだろう

「それで… お姉ちゃんからの手紙って どんなこと書いてるの?」

「まあ、「最近どう?」とか「こっちは〇〇よー」とかが基本かな」

そう答えながら 僕は封筒を開け 中から便せんを取り出してひろげる。そして、手紙の内容に目を通しながら 言葉を続ける

「他には「フィリーは元気にしてる?」とか「フィリーはちゃんと仕事してる?」とか…」

「もうっ! お姉ちゃんもマイス君にわざわざ聞いたりして…! そんなに心配されなくても、私だってそれなりには…」

「あと、「今月はどれくらいクーデリアちゃんに怒られてた?」「依頼受けに来た冒険者に怯えたり気絶したりしてなかった?」「仕事やめるとか言って、泣いたりは何回してた?」、ええつと…他にも…」

「ふえええ! も、もうやめて〜!!」

フィリーさんは、泣き声まじりの叫び声をあげながら 家の外へと走り出してしまった…

あの方向は街のある方向…あのまま帰ってしまうつもりだろうか? 街と『青の農村』の間の街道では モンスターはまず出てこないから多分大丈夫だろうとはおもっけど…

「それにしても…」

僕が目をやるのは、エステイさんからの手紙。その内容の最後のほうは、他の内容が変わっても 毎回ほぼ同じ文が書かれているのだ。そして その内容というのが…

『もしも！ファイリーに仲良^よさ気^げな男の人が現れたら、絶対すぐに私に連絡して——折^おりに行くから』

……「折りに」って、いったい何をだろっ？

2年目：トトリ「賑やかな村」

冒険者ポイントがたまり 免許をランクアップできるようになった私だったけど、「年越しは家ですごそう」と思って、その間 ランクアップはお預けにして『アランヤ村』でのんびり活動をしていた

年を越して 新しい1年が始まって少したってから、ランクアップするために『冒険者ギルド』のある『アーランドの街』まで 村から馬車で出発：

そして、街についてから ランクアップをし、先生のアトリエを借りて錬金術による調合をちよつとして……街に到着してから 1週間ほどたつたとき、ふと「そういえば、マイスさんのところに顔出してようかな？」と考えた

ひとりで調べて よくわからないところがあったから、そこを『錬金術』のことを知ってるマイスさんに聞いたらいいな、なんて思いつきながら『青の農村』に行ってみただけど：

青の農村

「うわあ……」

この前来た時の のどかさからは考えられない賑やかさ。村にいる人の数も数十人と、比べることすらままならないほど大勢だ
「もしかして、今日って何かのお祭りだったのかな？」

建物とかに付けられている たくさんの装飾や、前来た時は無かった いくつかの露店が出ていることから考えて、きつと間違いないと思う

…でも、こんな中じゃあ マイスさんを探すのは難しそうだ。きつとマイスさんも 家でじつとなんてしてないと思うから……さすがに会えそうにないかな？

でも、マイスさんに会えそうにないからって、このまま何もしないで帰るのも なんだかなあ……。それに やっぱりこの賑わっている原因を知りたい……

ドツ

そんなことを考えなら歩いていたら 周りをちゃんと見れていなかったようで、何か……いや、ぶつかった時の感触からして……誰かにぶつかってしまったみたい

「あつー、ごめんなさい！ちよつとよそ見して……きゃ!」

とつさに 頭を下げて謝り、ぶつかった相手の人の顔を見て……驚いた。相手人の目が わたしを射抜かんばかりに鋭くて……つて

「……あれ？す、ステルクさん!」

「キミか……出来れば悲鳴をあげる前に気づいて欲しかったのだが……」

そう言いながら首を振るのは、わたしのアトリエに 何度か調合の依頼をしに来てくれるステルクさんだった

ステルクさんは私の『錬金術』の先生……ロロナ先生と なにやら関係があつたそうなんだけど……私は詳しくは知らない。でも、そのあたりの繋がりがあつてか こうやってお話をすることもあつたりする

ステルクさんは「それにしても……」と腕を組んで 何か考えるような仕草をしながら、わたしをジロリツと見てきた

「まさかキミは 今日のイベントに出場しに来たのか?」

「出場?……わたし、マイスさんにちよつと用があつて来たんですけど……今日ってやっぱり何かお祭りでもあつてるんですか?」

私が周りをキョロキョロ見ながら答えると、ステルクさんは 珍しく目を見開いて驚いていた

「何も知らずに来ていたのか。それは 運が良いのか、悪いのか……」

いや、あのイベントに出場さえしなければ 問題は無い、か？」

「えっと、その催し物もよおって 何ですか？」

「ああ、今日の祭のメインなんだが……」

『カブ合戦』がっせんというものだ」

「かぶ……がっせん……？」

ええっと、かぶ っていうと……あの野菜の『カブ』のことだよな？

『青の農村』は 名前の通り「農村」なわけだから、野菜に係る催し物があっても おかしくはない……よね？

がっせん……合戦？ 合戦は……戦い？ 『カブ』が戦うのかな？
……って『カブ』が自分で動いたりするわけないし、きつと 『カブ』の品質を競いあったりするんだろう

あれ？でもそれって……

「わたし、参加できませんよね？ だって、『カブ』なんて育ててませんし……」

「……？」

「えっ？だって『カブ合戦』って、農家さん同士でするんじゃないんですか？」

わたしの言葉に ステルクさんは首を大きくかしげた。そして、ひとつ息をついてから 口を開いた

「何を想像したのかは わからないが……『カブ合戦』というのはだな、端的たんてきに言えば 参加者同士が『カブ』を投げあい、当てた回数を競う催し物だ」

「投げあう……？って、なんですか それ!? 『カブ』って結構硬いですよ！危なくないですか!？」

「ああ。故ゆえに催し物が行われる際には 救護班がそばに待機している。それに、鎧よろいといった防具の着用も許可はされている」

いや そんな用意をしてまで、わざわざそんな催し物をしなくても

……

だって、あの『カブ』を投げ合うんだよね？あの白くて硬い『カブ』を…

ふと、そこで あることに気がついた

「ステルクさん、『カブ合戦』の「合戦」って、もしかして『雪合戦』とかそういう…」

「ん？…ああ、そのイメージであっている。後は 投げるものを『雪』から『カブ』に変えれば完璧だ」

なにそれ怖い。そんな危なそうな催し物に参加する人なんているのかな…？

そんなことを思ったけど、その考えはすぐに否定した

これだけ村に人が来ているんだ。きつと わたしが想像しているものよりもつとちゃんとした催し物なんだろう…

そうわたしは考えたんだけど、ステルクさんは…

『カブ合戦』はこの村の村長のいた町で行われていた 豊作を願う祭だそうだが…『カブ合戦』の開催は今年で3回目だが、参加は 基本的に「度胸試し」になっているな」

「それでいいんですか…？」

「鎧にぶつかってもグシヤリと潰れない立派な『カブ』だ」…という 宣伝になっているから、別段問題無いそうだな」

…本当にそれでいいのかな？

「そもそも、この村の祭は 基本的に「みんなで楽しく賑やかに」という村長のモットーの下 開催したのが始まりだからな。…もつとも、ただ単に村長がかなりの祭好き、というだけなのだな」

「イベント好き？」

「そうとも。王国時代に開催されていた『王国祭』が無くなった時には かなり気落ちしていた。そして、この村関係で忙しかったころはそうでもなかったが 少しヒマが出来始めると「なんか楽しいことないかなあー…」と言って だらけてな…」

「あれはあれで面倒だった」と、ため息を吐きながら言うステルクさん。だけど、その後「いや、それでもアイツと比べたら 全然マシか……いや、だが……」と、何かをブツブツ呟きだしてしまった

「そ、その村長さんって、なんだか変わった人ですわね」

「……何を言って……ああ、そうか。彼は自分からは あまり言わんからな」

そう言うステルクさんは、何だか呆れたような……でも「いつものことか」と諦めたような調子だった

『青の農村』の村長は キミも知っているマイルスだ」

「マイルスさん!?……あつ、でも なんだか納得かも」

「……まあ、先程キミが行っていた「変わった人」というのは否定できんかもしれんな」

頷くステルクさんに 私は「……ですよ」と返す。……わたしたたら、若干 苦笑いをしてしまったかもしれない……

「……って、あれ? 村長!? それじゃあこの前、わたしがマイルスさんを連れて行ったのって いけないことだったんじゃない!?」

「マイルスが「いい」と言って同行してくれたのであれば、問題無いだろう。連絡無しに出かけるヤツじゃない、おそらく 村の人たちには出かける前に何かしら伝えていただろうさ」

「それに」とステルクさんは言葉を続ける

「マイルスは 自分ができることなら何でもしてしまおうとする節がある。……時には マイルスがいない時を作って、他の住人に色々経験させたほうがいくらいだ。これからも 誘ってやってくれ」

「は、はあ。わかりました?」

本当にいいのかな? っと思ってしまうけど……マイルスさんが『アラヤ村』に来てくれた時のことを思い出してみると、嫌々付き合ってくれてるって感じではなかったように見えた気がする

「さて：私はそろそろ会場に行つて 準備をしなければならぬ」
「準備つて：、もしかしてステルクさん『カブ合戦』に出場するんですか？」

わたしがそう聞くと、ステルクさんは「いいや」と首を振つた

「私はマイスかれに手伝いを頼まれていてな。場外まで飛んでいく『カブ』を 観客席の手前で叩き落とす係だかかり」

「叩き落とすつて：：？」

「投げられた『カブ』がそのまま場外へいけば、観客に怪我人が出かねん。参加者の怪我は自己責任と言えるが、他の人間にまで怪我をさせるのはな」

やっぱり危ないお祭りなんだと 改めて認識し、「それでも開催されるのは人気があるからなのかな？」と ちよつと『カブ合戦』への興味が湧いてきた

「催し物の後には、例年通り 『カブ』を中心とした『青の農村』の野菜を使った料理が 無償でふるまわれる。せっかく来たのだ、『カブ合戦』を見学した後 貰うといい」

「では、失礼する」と言つて歩き出したステルクさんに、「はい、ありがとうございます」と言葉返して：：さてどうしよう？と周りを見渡す

「とりあえず、『カブ合戦』が見れそうなところに行こうかな？」

お祭りのメインイベントなら、たぶん村の中心あたりの広場なんかでやるんじゃないかな？

そう考えて、わたしは歩き出す

「：でも、せっかくなら誰か：：ミミちゃんとか 誘えばよかつたかな？」

村に来てから知つたのだから仕方がないつていうのはわかるけど
：：：やっぱり、お祭りは誰かと見てまわりたかつたなあ：

2年目：マイルス 『錬金術』のお勉強」

マイルスの家・2階 寝室

窓から入り込む淡い朝日で 目を覚まし、上半身を起き上がらせ
ベッドの上で伸びをする。そして、今日すべきことを思い浮かべなが
らベッドをおりる

「…んーと、昨日の『カブ合戦』のかたづけとかは 昨日のうちに終
わってるから…：畑仕事をした後は 調合だね」

ちよつとした用得 いくつか作らないといけないものがあるから、
今日は『錬金術』を使わないといけないんだよなあ…

そんなことを考えながら身支度を済ませ、階段を降りていく…：
さて、朝一番の一仕事、がんばろうつと！

マイルスの家・作業場

日課の収穫・耕す・種を蒔く・水をやる…：という一連いちれんの畑仕事を終
え、朝あさごはんも食べ終わった後、 さつそく僕は『錬金術』による調合
にとりかかっていた

「最後にこれを入れて…：つと。後は混ぜておくだけ」

錬金釜に突っ込んだ杖を離すことはせず、一定のペースで混ぜ続け
る。…：うん！見たところ 反応は上々、いまのところは 何の問題
無く調合はできているみたいだ

「いけない いけないっ。ちよつとの油断が命取り…：というか、爆発
を招くまねというべきかな？」

いや、でも爆発は 命は取らないとはいえ かなり危ないものだろ
う。「命取り」と言っても過言では無い気もしなくはない

そんなことを考えながら混ぜ続けていたら、不意に「ポンツ」という音が 錬金釜から聞こえてきた。どうやら 調合が完了したみたいだ

「さて、あとは 出来た物の質なんだけど……」

調合して出来た 錬金釜の『虹の精油』と呼ばれるものを瓶びんの中に入れてながら、品質を確認する。問題無く 事前に予想していた通りの品質のものが出来ていたので、ひとまず安心する

『虹の精油』を 事前に用意していた2つの瓶に入れ終えた時点で、錬金釜の中には もう2瓶分くらいの『虹の精油』が残っていた

別に 瓶の用意のし忘れなどでは無い。ただ、錬金釜に残っている『虹の精油』は そのまま次の調合に使う予定なのだ

「次は『魔法の絵の具』だから、これに『タール液』と……あと『星のかけら』を入れて」

そして再び杖で混ぜ始める

単純作業な部分が多いけど、失敗しないよう 細心の注意をはらって調合していこう

再び錬金釜から「ポンツ」という音が響き、調合が完了する。過程でも 何の問題も無かったから、おそらくは予定通りのデキの『魔法の絵の具』が調合出来ているはずだ

錬金釜の中から『魔法の絵の具』を取り出そうと思い、品質確認の為に錬金釜を覗きこみながら、事前に錬金釜のそばの机に用意しておいた 『魔法の絵の具』を入れる容器を取ろうと手を伸ばし 手探りで探して…

「もしかして コレですか?」

手探りをしていた僕の手に 何かが触れたので、それを握って形を確かめる。…うん、この形は探していた絵の具の入れ物に間違いはない

「うん、ありがとう！」

それじゃあ、これに『魔法の絵の具』を入れて……って、あれ？

僕は鍊金釜から視線を外し、机のおいてある方向へと顔を向けた。すると、そこにいたのは…

「トトリちゃん？」

「あつ はい。お、お邪魔…しちゃってます」

いつの間に……って、まあ 僕が『魔法の絵の具』の調合に集中している時なんだろうけど…

「えつと、ちよつと前に玄関をノックしたんですけど 返事が無くて…。でも、煙突えんとつから薄く煙が出てたから なんだろうなって思ってた…。それで入って ケムリが出てた煙突のある部屋に入ってみたら、マイスさんが調合してて。集中してたみたいだから 声をかけずに見学してました」

「ああ…やっぱり そういうことだったんだ」

いや まあ、うちに来る人の中には ノックもせずに入って好きにくつろいでいく人も幾いくらかいるから、その人たちと比べると 随分マシなわけだし…。そもそも、勝手に入られて困ることも無いんだからね

「あははは、待たせちゃったみたいでゴメンね。…で、今日はどうしたの？」

『魔法の絵の具』を入れ物に入れ終え、トトリちゃんに向きなおって問いかける。すると、トトリちゃんは申し訳なさそうな顔をした

「えつとその…少し頼みたいことがあつて…」

「ん？なにかな？」

『鍊金術』のことで 教えてもらいたいことがいくつかあつて……お願いできますか？」

トトリちゃんがオズオズと伝えてきた頼み事は、僕にとって決して出来ないわけじゃないけど すぐには領きづらいものだった

というか……

「僕に頼みに来るってことは、コロナは音沙汰おとさたが無いんだね」

「はい…。私も最初は先生に聞けたらって思ってたんですけど、『アーランドの街』にも帰って来てないみたいで…。いつ会えるかわからないのを待つわけにもいかないし。だから　マイスさんに教えてもらえたら…。って思ってた」

「トトリちゃんの言葉を聞いて「なるほど」と僕は頷く。だけど、それと同時に心の中では「どうしたものか…」と頭を悩ませていた

たしかに僕は『錬金術』をある程度は扱うことは出来る。自作の『錬金術』のレシピを書いてみたりもしている…。だけど、あくまでも「ある程度」だ。本職の『錬金術士』コロナとアストリッドさん2人には足元にも及ばないし、僕に『錬金術』の色々を教えてくれた　ホームクルスのホームちゃんも当然僕よりも上手だ

その3人を差し置いて　僕がトトリちゃんに『錬金術』のことを教えるだなんて…。まあ　みんながないのがいけないんだけど…

それに、トトリちゃんが言ってた「教えてもらいたいこと」って、僕でも教えられることなのかが　ちよつと心配だ

でも、トトリちゃんもまだ新米なわけだから、そんなに難しい調査にまで手は伸びていないだろうから、たぶん大丈夫…

『『プラティーン』とか『賢者の石』だったら　完全にお手上げだけだね（ボソリ）』

「…え？　マイスさん、何か言いましたか？」

「ん、ちよつとひとりごとを…」

軽く誤魔化した後　ひとつ咳払いせき払いをし、トトリちゃんへ言った

「うん、わかった！　僕は『錬金術士』じゃないから　そこまで難しいことまでは教えることは出来ないけど、僕が教えられることは何でも答ええるよ！」

「本当ですか!?　わあ…。ありがとうございますー！」

僕の言葉を聞いて　嬉しそうにするトトリちゃん

…その笑顔を曇くもらせないように　ちゃんと『錬金術』のことを教え

ることができると不安ではあるけど、最大限 できることをやろう。そう決めたのだった……

マイスの家

…そんなこんなで、座学で教えたり 実際と一緒に調べたりした。調合中に爆発することもなく、問題無くこなすことができた。そして、トトリちゃんが言っていた「教えてもらいたいこと」を全部教え終わった頃には もう日がほとんど沈んでしまっていた。なので、僕は 今日はこのまま家に泊まっていくことをトトリちゃんに勧めた。前に来た時も泊まっていたので トトリちゃんも勝手がわかるだろう

というわけで、家の泊まることになったトトリちゃんといつもの部屋でテーブルを挟んでソファーとイスに座り 晩ごはんを食べている……んだけど……

「うーん……？」

さつきから、トトリちゃんが何故か小さく唸っているのだ。…いたい、どうしたのだろうか？

「トトリちゃん どうかした？もしかして、嫌いな物でも出しちゃった？それとも 何か失敗してるのがあった!？」

「あつ、いえ そんなことは無いです。どれもすごくおいしいですよ！」

なら 何があったのだろうか…と首を少しかしげると、僕が言いたいことがわかったように トトリちゃんがこたえてきた

「その…今日教えてもらったことを色々思い返していて、ふと思ったことがあって……」

「思ったこと?」

「はい。ロロナ先生とマイルスさんでは全然違うなあつて……教え方が……」

ロロナと違うと言われて ドキッとしたけど、違うのは教え方だとすぐにわかりホツとした。…一瞬「気づかないうちに『テキスト錬金術』（ホムちゃん命名）をやっちゃってた!」と慌ててしまったけど杞憂だったようだ

立派な一人前の『錬金術士』を目指すトトリちゃんに、自分で言うのもなんだけど『テキスト錬金術』を見せるべきではないと思う。アストリツドさん曰く「錬金術っぽい 別の何か」らしいし……

話を戻そうか。トトリちゃんが言うには、ロロナと僕とでは『錬金術』の教え方が違っていているそうだ

ということは、やっぱり本職の人が教えるとなると ちゃんとした形式の教え方があったりしたんじゃないだろうか……? でもなあ……ロロナが誰かに『錬金術』を教えているところを見たことが無いから、どういうものがわからない

「トトリちゃん、参考までに聞きたいんだけど……ロロナにはどんな風に教わってたの?」

「ええっと、初めて会った……私の家の近くで先生がお腹を空かせて倒れてた時なんですけど、色々あつて 『錬金術』による調合の失敗で家が爆発して……そこから私が『錬金術』に興味が湧いて 先生に教えてもらったんですけど……」

……いや ちよつと待って。色々ツツコミどころがあるんだけど!?

『錬金術』で色んなアイテムを作ってたはずなのに なんで空腹で倒れてたのか……とか。なんで いきなり家が爆破されて そこで興味を持つちゃったのか……とか

そんな疑問は ひとまず僕の中で抑おさえておいて、とりあえずは トトリちゃんが語る「ロロナ先生に教えてもらった時のこと」に耳をか

たむけることにした…

|||||

「うんしよ、うんしよ…こ、こんな感じ、ですか？」

「うん、ぼつちり！あとはそのままぐるぐるかき混ぜ続けて！」

「ぐ、ぐるぐる…」

「ああ、ちがうよ！それじゃぐるぐるーだよ！もつとこうぐるぐるーって」

「は、はい！えつと…ぐるぐる…」

「そうそう、そんな感じ！次はその…青つぽい草。それをぱらぱらーって入れて！」

「青つぽい…これかな？ぱらぱらー…」

「上手上手！トトリちゃん、すごいよ！天才だよ！」

「そ、そうですか？えへ…」

「あ、まだ油断しちゃダメだよ。もうすぐぼんっ！ってなるから、それまでとにかくぐるぐるし続けて」

「は、はい！」

ボンッ

「きやあつ！あ…でき、た…？」

「うん、成功だよ！おめでどう！やったー！」

|||||

「…で、先生ったら私が『錬金術』ができたことを私以上に喜んで泣き出しちゃって…って、あれ？マイスさんどうかしたんですか？」

「あつ、いや ロロナらしいなーって思っで。あはははは…」

苦笑いが出てしまった僕に対し 不思議そうに問いかけてきたトトリちゃんへ返した言葉だけど、別にウソを言っているわけじゃない 本当にコロナらしい…というか、僕が手伝いにアトリエに行ったりしてた頃の コロナの調査風景と同じように感じられた。…よくもまあ トトリちゃんはアレを理解できたものだ。僕でも8割くらいしかわからないのに…

「…それで 今日のマイスさんの、準備や理論…一から確認する教え方が 新鮮に思えたんです」
「そっか。うん、まあ そうなるよね…」

いや だけど、どう言ったらいいものか…
コロナの教え方でわかるなら 別に問題はないし、特に気にすることも無いんだけど……それに

「コロナの 唯一のお手本になるのがアストリッドさんだもんなあ…」
別に「アストリッドさんの教え方が悪い！」とか言いたいわけじゃない。ギリギリ調査できそうなレシピを与えて、その後 自由にさせる(悪く言えば放置)。 あれはあれで「自分で考える力」や「自分から行動する力」を養^{やしな}わせるのには 中々だと思う
でも、その教え方はコロナがするには あまり合っていないと思う。……なんというか、コロナは 弟子を後ろから見守ってることとかができそうな気がしないのだ

「基本 誰にも教わらなかった我流^{がりゆう}『錬金術』に コロナ自身のほんわか具合が混ざって……それで その教え方になったわけか…」

正直、コロナ自身を矯正なんてできそうにないし、もう そういうものだと割り切るべきなのだろう……でも

さつきから ひとりごとを言いながら頭を悩ませる僕を 心配そうに見るトトリちゃん。そのトトリちゃんへ なんとすべきか、さ

らに僕は頭を悩ませた…

2年目：トトリ「いのーのてんさいかがくしや」

ロロナのアトリエ

『アーランドの街』にある先生のアトリエ…『ロロナのアトリエ』を
仮の拠点として使わせてもらい、『錬金術』で調査をしていく日々。マ
イスさんに 色々と教わったこともあって 調査はこれまで以上に
上手く出来た

……と、わたしの仕事に関しては 何の問題もなかったんだけど…

「お嬢さんが有名になった 今、僕はここにライバル宣言をさせても
らう！」

私に向かつて そう言ってきたのは、リュックサックを背負ったモ
ジヤモジヤ頭の眼鏡の人…前にミスさんと一緒に冒険した時に
出会った『異能の天才科学者 プロフェッサー・マクブライン』マー
クさんだった

ふらつとアトリエに来たかと思えば、いきなり この発言。正直
わたしの理解が追い付いていない状態だ

「ライバル宣言?！」

「そうとも。今 この瞬間から、僕とお嬢さんは敵同士だ！」

「ちよ、ちよつと待ってください！なんで敵同士にならないといけな
いんですか?！」

「おかしなことを聞くなあ。科学者と魔法使いが敵同士なんて、はる
か昔からの決まりごとじゃないか」

マークさんが言っている 決まり事なんてものは、一度も聞いたこ
とが無いから 当然信じられないし、それが敵になる理由になりうる

とも思えなかった

だいいち……

『魔法使い』じゃないです！『錬金術士』です！」

「似たようなものだろうか？ひよつとして違うのかい？」

「全然違います！『錬金術』っていうのは……」

そこから マークさんに『錬金術』の基礎の基礎……というか、まず先のとつかかりの部分を中心に説明する

……とは言つても、それは わたしが最初にロロナ先生に『錬金術』を教えてもらった時に、先生が教えてくれたもの ほぼそのまま……受け売りだったりしたんだけど……

とにかく、わたしのできる限り精一杯の説明をマークさんにしたのだった

「……ふむ。つまり『錬金術』は学問で、学べば誰にでも扱える代物しろものだ」と「そうです。先生がそう言っていました」

一度は納得したように頷いてくれたマークさんだったが、その表情から察するに いまだに頭の中の疑問符が消えてしまっていないようだった。そして、それを証拠付けるように マークさんが新しい疑問を投げかけてきた

「では、何故この国に『錬金術士』と呼べる人物は、お嬢さんと、先生と その師匠の2人しかいないんだい？」

「そ、それは……先生の教え方が下手だから、かなあ……？」

この前、マイルスさんに教えてもらった後にした話の最後に、マイルスさんがわたしに話したことがあった

マイルスさん曰く「ロロナの擬音語たつぷりの教え方は、性格がそのまま出てるんじゃないかな？ アストリッドさん……ロロナの師匠は特別何もロロナに付き添そって教えたりしなかったから、教え方のお手本が無かったわけだし……」

つまりのところ、コロナ先生から『錬金術』を教わるためには、先生の感性を理解できないとダメってことらしい

ついでと言ったらなんだけど、わたしの前に 何人かコロナ先生から『錬金術』を教わろうとした人もいたらしいけど、全然ダメだったらしい

「ああ、なるほど。指導者不足はどの分野でも深刻だからね。……しかし、そうかあ。てつきり『魔法使い』の類たぐいかと思っていたが、実際はこの国の自称科学者たちと、そう変わらないのか」

マークさんは今度こそ納得してくれたみたいでだった

…「自称科学者」っていうのが少し気になったけど、前に マイスさんがしてくれた「街にある機械は 遺跡から発掘されたものをそのまま使っている」や「機械のパーツなんかは そういう専門の人じゃないと価値が無い」みたいな話を思い出して、なんとなくわかったような気がして、深く聞かなかった

「とにかく、全ては僕の誤解だったというわけだ。すまない、この通りだ」

「そんな、別に謝らなくても…。わたし、全然 気にしてませんし…。あつ、でも」

「ん？どうかしたかい？」

ふと疑問が湧いてきて、わたしがそのことを言おうか迷っているけど、マークさんはわたしの顔を覗きこむようにしながら 言葉の続きうながを促してきた。なので、ちよつと迷ったけど 疑問をマークさんに言ってみることにした

「あの、マイスさんとはお友達なんですよね？『錬金術』のことは聞いたりしなかったんですか？」

「いや、彼とは友達ではないってあの時……って、そういうえば あの時はモンスターが追い付いてきて 言いそびれてしまったんだっただか」「やれやれ」といった感じで首を振るマークさん。その顔は眉毛が

垂れて 口がへの字に歪んでた

「僕がパーツの制作を彼に依頼したりしてるといって…あくまで仕事上付き合いがあるだけの仲だよ。彼の依頼への忠実さと速さは他とは比べられないからね。…じゃなきゃ 彼にわざわざ頼みたくはないよ」

その言葉の端々には はしはし なんだかトゲがあつて、なんだか マイスさんのことを嫌っているように感じられた…でも、なんでだろう？

「その…マークさんはマイスさんのことが嫌いなんですか？」

「うん、そうだよ」

「うわあ…即答だ。でも、なんで…？」

「…お嬢さんは、彼の家の前畑のそばにいるアレを見たことはあるよね？」

マイスさんの畑のそばのアレ…？アレって何だろう？

マイスさんの家の周りを思い浮かべて、マークさんの言うアレってというのが何なのか考えてみる…

すると、思い当たるものがあつた。胴に足と腕と頭がついた 人間と変わらないくらいの大きさの 土の塊。頭のとっぺんから大きな葉っぱが生えているて、それがピコピコ動いているのが凄く気になったのをおぼえている

「あの 頭に葉っぱが生えた土の人形ですか？あれが何か…？」

「そう！アレだよ！彼は言ったんだよ「これは『プラントゴーレム』です」って！」

「ぷらんとごーれむ？」

ええつと…『ゴーレム』っていうのは、遺跡なんかに稀にいる 昔人に作られたとされる機械の兵士だ…というのを 何かの本で読んだおぼえがある…けど、『プラントゴーレム』という言葉は聞いたことがなかった

で、なんでソレに対して マークさんは怒っているんだろう？

「彼は言ったんだよ、あんなよくわからないものを『『ゴーレム』だ」っ

て！僕はアレを『ゴーレム』とは認めないよ!!」

「えっ、『プラントゴーレム』っていうのは『ゴーレム』じゃないんですか?」

「さあ? わからない」

さつきまでの怒り様は何処へ行ってしまったのか…。マークさんはいきなり真顔になって「何を言ってるんだキミは」と言わんばかりに首をかしげてきた

「あの…マークさん、何か悪いものでも食べちゃいましたか?」

「なんだい、そのいいようは。しかたないだろう?アレを解体^{バラ}してみてもいいか聞いたら「元に戻してもらえそうにないからダメです」って断られたんだから、内部構造がどうなっているか、そもそも内部構造なんてあるのか、とか調べることも出来なかったんだから」
「マイスさんに『プラントゴーレム』のことを詳しく聞いてみたりはしなかったんですか?マイスさんなら 頼めば教えてくれそうですね」
「ど…」

わたしがそう言うと、マークさんは動きをピタリと止めて…。そしてポンツと手を叩いた

「それだ！そんな簡単なことにも気がつかなかったなんて。いやあ、盲点だったよ。今度 聞きに行ってみるとしよう!」

小躍りしだしそうなほど喜びだしたマークさん。だけど、すぐにまた真顔に戻ってわたしを見てきた

「…で、彼は『錬金術』と関わりがあるのかい?もしかして アレも『錬金術』の産物だったりするのかな?」

「えっ、それは知りませんけど…実は、マイスさんも『錬金術』を扱えるんです…。そうだ、マイスさんを知ってるのに『錬金術』のことを聞いてなかったのか、って話だったんだって(ボソリ)」

わたし自身が最初にした質問を忘れてしまっていたことを少し恥ずかしく思いながらも、マークさんの言うように『プラントゴーレム』

というものが『錬金術』と関係があるのか考えてみた

「…もしかして、前にミスさんが見せてくれた『アクティブシード』っていうのと、似たようなものだったりするのかな？」

そう思っただけで、確信があるわけじゃなく、なんとなくだ。…と
いうか、『アクティブシード』って動く植物のほうも、ほとんど知らないわけで、結局のところ、ミスさんに直接聞いてみるしかない
そうだ

わたしが そんなふうにはひとりで考えているのと同じく、マークさんも 何やらひとり考えているようだった

「ふうん…『錬金術士』と呼ばれる人物以外にも『錬金術』を扱える人がいたとは…。それも 彼がそうなのか。色々聞いてみる事が
増えたね」

そう呟いた後、マークさんは 私のほうへ向きなおって、軽く礼を
してきた

「善は急げ、だ。さっそく彼のところへ行ってみるとするよ。お騒が
せしたね」

「あつ、えつと…って、もう行っちゃった」

今しがた マークさんが出ていった扉をジッと見つめて…いて
も、どうしようもなかったから、調合の作業にもどることにした…

2年目：イクセル「また ある日の『サンライズ食堂』」

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。アーランドの街にある『サンライズ食堂』を任されているコックだ

『サンライズ食堂』は、少し前に内装を改装して、全体的に明るく、おしゃやかな感じになっていて、数年前とは随分、雰囲気が変わった

まあ、出してる料理は、特別高いものじゃない、昔のまま、リーズナブルな価格のものばかりだ。お客さん方に満足してもらえるように、尽力している

…つと、こういう紹介は、なんか前にもした気がするな…。まあいいか

今日も、もう日が沈んでしまい、薄暗くなった街だが、当店『サンライズ食堂』には、それなりの数の客が入っていて、そこそこの賑やかさが店を包み込んでいる

…で、今日の『サンライズ食堂』には、久々にマイルスが来ている。もちろん、一人でじゃない。が、連れはクーデリアではない

今日、マイルスと一緒に来ているのは……

「かんぱーい」「…乾杯」

「ステルクさん、先日のお祭りの時は、お世話になりました！」

「その礼なら、当日に十分貰った。それに、気にすることじゃない。あれは私にも良い息抜きになったからな」

今回のマイルスの連れ…ステルクさんは、グラスを少しかたむけて水でノドを潤しながら、マイルスの言葉に答えていた

その表情は普段通りの仏頂面にも見えなくはないけど、ステルクさんをよく知る人が見れば、彼の口元が軽く緩んでいるのを認識できるだろう。俺も、数年前から付き合っているから、なんとなくだけでも判別が出来るようになった

「それにしても…」

ステルクさんが見つめる先は　マイルスが持っているグラス。そのグラスには　酒がなみなみに注がれてある

「あまり飲みすぎるとんじやないぞ。キミはこの後　村まで帰らねばならんのだからな」

「わかってますよ。それに、僕が度をこえて飲み過ぎることなんてまずありませんからー」

そう言うマイルスに　俺は「前回　クーデリアと飲んでた時のアレは、度をこえてなかったか？」と言いたかったが、残念なことに　他の席の客が注文した料理を作っている最中で　言う余裕がなかった
：

「あれ？　そういえば　ステルクさんは水ですね。今日は飲まないんですか？」

「ああ、明日の朝には　街を発つ予定だからな。大事をとって　今日は酒を飲まないことにしたんだ」

「そうだったんですか…。僕につき合わせちゃったみたいで　何だかすみません」

「かまわん。本当に余裕がないなら　最初から断っているさ」

「気にするな」と言って　料理に手を付け始めるステルクさん。それにつられるようにマイルスも料理を口にしはじめた

うん、この様子なら　前回のマイルスとクーデリアの時のように　俺が気にかけたりする必要はないだろうな

そう思い、俺は　さつきから次々に入ってくる　料理の注文をこなすことに集中することにした

あれから少し経って　料理の注文がひと段落し、少し息をつく。

テーブル席にいる例のふたりは、一度マイルスが酒の追加を頼んだぐらいで、別段大きな動きはなかったが……

少し気になり、再びふたりの会話に、再び耳をかたむけてみることにした

「それでは、次回の祭りは……」

「来月は、毎年恒例の『冬の野菜コンテスト』ですよ！」

「では、とりあえずは今回の『カブ合戦』のような、私が手伝いとして必要になりそうな内容ではないのかな？」

「はい、そうなりますね……ついでに言うと、その次は、去年好評だった『大漁！釣り大会』の予定で企画を進行させてます。コッチも特別手伝いは必要じゃありませんから」

「どうやら、『青の農村』でのイベントの予定について話していたみたいだった。おそらく、イベントの内容によっては、ステルクさんはその時期に帰ってくるつもりだったのだろう」

：それにしても、『野菜コンテスト』に『釣り大会』か。両方

『サンライズ食堂』に、結構な影響がある祭じゃねえか

まずは『野菜コンテスト』だが、その時期の野菜のデキがわかるのはもちろん、最近の各農家の状態を確認することが出来る。それで、マイルスに常に一定量の出荷を依頼している、年中使う野菜のいくつか以外の、店で使う季節の野菜の取引先を決めたりするのに役立つイベントだ

つづいて『釣り大会』だが、：いくつかの魚の値段が下がったりはするが、そう大きくなく、誤差の範囲内だ。これは店の取引に直接関係してくるわけではない。じゃあ、どういう影響があるのかといえば……単純にその日は『サンライズ食堂』に食べに来る客が大幅に減るということだ。参加者がいる家庭や、参加者がおすそわけを持って行った家庭では何処も『魚料理』を自分たちの家で作るのだから、ある意味当然かもしれないがな

まあ、2つのイベントの詳細は、そのうち俺の手元に来るだろうから、今から、そう深く考えなくてもいいか

俺は『青の農村』の祭のことを、『青の農村』の人間の次くらいに知ることが出来る

理由は簡単だ。この街の中での『青の農村』の祭の告知・宣伝を『サンライズ食堂』でやっているからだ

正確には『サンライズ食堂』以外にも『ロウとティファの雑貨屋』や『冒険者ギルド』なんかにも告知用のポスターが掲示されていたりする。：最近、店の主人がいないが、前は『ロロナのアトリエ』でも告知があったりしてたんだが、今は、そのあたりがどうなっているのかは知らない

「イクセルさん、お酒のおかわりくださいーい」

「ん…？ああ!?お、おう、ちよつと待ってろよ！」

マイスの声で、思考から引き戻され、慌てて返事をしながら、新しいグラスと酒を用意する

「…大丈夫か？飲み過ぎてはいないか？」

「いえいえ、全然大丈夫ですよ」

心配そうにするステルクさんをよそに、マイスは軽く返事をする。そこに俺は、注文された酒の入ったグラスを持っていき、そしてふたりに声をかける

「いやあー、いちおうはまだ許容範囲だと思えますよ、ステルクさん。マイスが本当に酔払ったら、なんかこう…間の伸びた喋り方になりますから」

「そうなのか？」

おそらく、マイスが本当に酔っぱらった、その姿を見たことが無いのだろうステルクさんが、俺の顔を見た後、意外そうにマイスのほうへと視線を移した。…クーデリアと飲んでいた時のマイスを見たら、ステルクさんは何というだろうか…

「そうっすね…酔った時だと さつきマイルスが言ってた「全然大丈夫ですよ」が「じえんじえんだいじょーぶですよ」ぐらいにはなりませんね」

マイルスの前に酒の入ったグラスを置きながら そうステルクさんに言った後、今度はマイルスのほうを向き 言う

「つつても、今日はこんくらいにしとけよ？ いっぱい注文してくれるのは店的には嬉しいけど、連れに心配させちゃあ悪いぜ」

「そうですね。今日はこのくらいにしといて、僕も 明日の早朝の畑仕事に備えることにします！」

良い笑顔でそう答えるマイルスに、俺はもちろん、ステルクさんもどこか安心した顔をして「それがいいだろうな」と呟いていた

このとおり、マイルスは基本的には 人の話は素直に聞くし、普通に良い奴なんだよなあ。時々、突拍子のないことをしでかしたり、制御が効かなくなることがあったり、どこか常識がズレてたりもするが……基本は良い奴なんだ、基本は

「それじゃあ、ご馳走さまでした！」

「また街に帰ってきた時には 立ち寄らせてもらおう」

「おう、またな！ それじゃあ、おふたりとも 気をつけて帰りなよー」

食事を終えて 会計を済ませたふたりに、そう声をかけて カウンター内側の調理場から見送る

店から出ていく そんなふたりの背中ごしに、ふたりの会話が聞こえてきた

「…ちゃんと ひとりで帰れるか？」

「大丈夫ですよ。見ての通り、足取りもしっかりしてますから」

「ふっ、ならいい。……そういえば、今回はアレをしていなかったな」

「ああ、そういえばアレ やってないんですね。それじゃあ明日の……」

ガチャン…

会話の途中で店の扉が 自然に閉まりきってしまい、その後 ふたりがどういふ会話をしたのかは聞き取ることが出来なかった…

翌日の早朝に、『アールランドの街』の入り口である門から少し離れた場所で、なにやら 凄まじい戦闘すさまじいがあったそうだが、

目撃者の冒険者曰く、黒い服の 目つきの悪い男と 金髪の少年が、もの凄い剣げきのやりとりをしていたらしい

目撃者の冒険者が「レベルが違い過ぎる…！近くにいて巻き込まれでもしたら、死んでしまう!？」と 一目散に街へと逃げ帰ったため、その勝負の勝敗は不明のまままだそうだ

2年目：マイルス 「雨の日の来客」

マイルスの家

朝からシトシトと降り続ける雨。窓から見える空は 見るからに分厚そうな雲にさえぎられていて、日は顔を出せそうにもなかった

：とはいっても、外出する用がなかった僕としては 特別困ったりすることはなかったりする

雨は「恵みの雨」。よっぽど規格外な量が降ったりしない限り 何の問題もなく、むしろありがたいことだ

それに、外出し辛いからといって別段ヒマになったりすることは無い。調合や鍛冶、他にもいろんなことの勉強 といったことは いくらでもできるのだから

「うーん、今日は何をしよう…?」

装飾品じゃなくて、久々に武器を作ってみようかな……

でも、これまで作った武器よりも強い武器を作るとなると、再現のための素材の厳選から始めないといけないから、必然的に『錬金術』での作業が必要になるんだよね…

少し面倒にも思えるし 時間もかかりそうだから、最初はある程度進みそうになかった

けれど、よくよく考えてみると 別段他に優先してやらないといけないことがある訳でも無かったから、せっかく思いついたのだから挑戦してみるのもアリかもしれない

そう思い、家の『作業場』のほうへ行き さっそくとりかかろう……としたときだった

コンコンツ

玄関の扉をノックする音が 雨音に交ざって聞こえてきた

「はい、すぐ開けまーす！」

「誰だろう?」とか考える前に「待たせちゃったら 雨に濡れちゃうから早く家に入れてあげないと!」という思いが先走り、さつきまでしようとしていたことを 完全に放り投げて 僕は玄関へと駆けつけた

そして、玄関の扉を開けた。すると そこには…

「お待ちせしました。あつ、リオネラさん!ホロホロ!アラニーヤ! ささっ、いらっしやい!」

「お、おじやます…!」

「ちやつちやと 入らせてもらうぜ。これ以上濡れるのは勘弁だからな」

「そうねー」

極力 雨に濡れないようにしていたのだろう。前開きでフード付きのローブのようなものをスツポリとかぶっていたリオネラさん

そして、濡れるといるんな意味で面倒になる 人形のホロホロとアラニーヤは、ローブの中で リオネラさんに抱き抱えられるようなかたちで雨をしのいでいた…けど、ローブの大きき問題で、完全に雨を防げていたわけではなさそうで、少し濡れてしまっているようだった

リオネラさんたちを部屋に入れて すぐに僕は 今 必要なもの を考える

「すぐにタオルと…その後に 何か温かい飲み物用意するから! ちよつとまって!」

僕が収納からタオルを出していると、僕の背中に ホロホロとアラニーヤから声をかけられた

「おおい、部屋の暖炉に チョット 火を入れてもいいか?」

「私たち、しみちやった雨をちゃんと乾かさないと カビちゃうのよ!」
「うん、いいよ!雨で冷えちやった身体を温めるのもちようどいい

からね。…あつ、早く乾かしたいからって 近づきすぎてコゲないよ
うに気をつけてね！」

「わかってるって」

「それじゃあ、許可も貰えたし 火をつけましょう、リオネラ」

「うん、わかった」

そうして、僕が タオルを十二分に用意して持って行った頃に、
ちようど 暖炉の火もいらいに灯っていた

さて、タオルの次は 温かい飲み物だ。…何がいいかなあ…？

温かい飲み物：『ホットチョコレート』を 僕とリオネラさんの分
用意して、キッチンから部屋へと運ぶ

ホロホロとアラニーヤの分は用意していない。というのも、人形で
あるふたりは 飲んだり食べたりはできないからだ。…昔、ふたりの
分の飲み物をだした時に「イヤ、飲めねえんだけど…」とホロホロに
言われて、その時初めて知ったんだけどね…

「はい、リオネラさん。『ホットチョコレート』だよ。よかつたら 飲
んで温まってる」

僕が声をかけたリオネラさんは、ローブを脱いで その下に着てい
た大道芸人としての衣装の姿になっていて、ローブで防ぎきれなかつ
た雨は もうタオルで拭き終えていた

「あつ、うん、ありがとう マイスくん」

リオネラさんは、僕が差し出した『ホットチョコレート』の入った
マグカップを受け取って、暖炉の近く…ホロホロとアラニーヤが自身
を乾かすためにいる床の その場所のそばに座りこもっていた

「リオネラさん、これに座って」

そう言って 僕は いつものテーブルに自分の分の『ホットチョコ
レート』を置いて、その近くに置いてあるイスの内 暖炉に比較的一

番近い位置に設置してあったひとつを、暖炉のそばまで運んで　リオネラさんに座るように勧めた

最初の一瞬は　少し驚いたような雰囲気を感じさせたりオネラさんだったけど、すぐに　微笑み「うん、ありがとう」と言ってイスに腰かけてくれた

「ホロホロとアラニーヤの分のイスも持ってこようか？」

「イヤ、いいって。タオルで拭^{ぬぐ}っただけじゃあ　オレたちは乾ききらねえからよ。イスを濡らしちゃ悪いしな」

「そうね、もうちよつと暖炉の前で浮いて乾かしておくわ。その後はリオネラの膝の上に座るか　隣あたりでフワフワ浮いとくから気にしないで」

本人(?)たちがそう言っているのだから　これ以上気を使っても悪いだろうと思い。僕は　素直に自分の分だけのイスを持つてくることにした

運んできたイスに　僕が座ったその頃、暖炉のほうを向いていたホロホロとアラニーヤがクルリとこちらを向いた

「ん?どうかしたの?」

僕の問いかけに答えたのは、ふたりじゃなくてリオネラさんだった「ううん、たいしたことじゃないんだけど…。そろそろ　反対側を乾かそうかなって思って」

「ああ、なるほどね」

ホロホロとアラニーヤをフワフワと浮かせているのは、リオネラさんの力だということを出した。そして、ふたりの身体の厚さを考えると、確かに　色んな方向から乾かす必要があることにも納得した

『ホットチョコレート』を少しずつ飲むリオネラさんをチラリと見て確認した後、僕も自分の『ホットチョコレート』に口をつける

予定とは変わったけれど、こうやってノンビリするのも悪くないなあ…

『ホットチョコレート』をちよびちよびと飲み始めてから 少し経ったころ、未だ身体を乾かし中のアラニーヤが 僕に言ってきた
「それにしても、久しぶりね マイス」

「そうだね。だいたい…10ヶ月ぶりくらいかな？」
「だな。つつても、オレたちは半年くらい前に ココに来ただけだな」

僕の言葉を肯定しつつ、ホロホロがそう言った

…半年くらい前といたら、あの頃…『アランヤ村』に行っていたころのことだ。リオネラさんたちが来てたことは、帰ってきた時にコオルから聞いている

その時のことを 少し思い出していると、ふと リオネラさんがこつちを見ていることに気がついた。そして、僕もリオネラさんを見ると リオネラさんが口を開いた

「えつと…あの、コオルくんからは「用があつて冒険に出てる」って聞いてただけど…、その、何かあつたのかなーって…」

たぶん リオネラさんは、僕が『アランヤ村』から帰ってきたちよつと後に会ったステルクさんと同じで、そのころ僕は『青の農村』と『アーランドの街』以外に行ったりしていなかったから 遠出をしたことに少なからず驚いているのだろう

なので、ステルクさんの時と同じように、ロロナの弟子であるトトリちゃんのこととかを軽く説明することにした…

「……へえ…！そんなことがあつたんだ…」

『アランヤ村』にはあれから行ってねえけど…あのちびっこが『錬金術士』にねえ」

「なんだか 不思議な縁ね。…でも、あのギゼラさんが……」

一通り話し終わると、三人とも それぞれの反応を返してきた

…補足しておく、ひとつだけ「ギゼラさんの行方不明」については知っていることを全部話したわけではなく、外洋へと船で出ていったこと等は言わずに トトリちゃんから聞いた話を中心に話しておいた

「そういえば、ここ最近はいんまり噂を聞かなかったかも…」

「うーん、でもあのギゼラさんだから 何処かで元気にやつてる姿しか想像できないんだけどね…」

リオネラの言葉に、僕が本当に思っていることを隠さずにそのまま言ってみた。すると…

「そうだよなあ…」

「ねえ…あのギゼラさんだもの。なんだかんだ言って 大丈夫そう…」

「なんだか不思議だけど、そんなに心配にならないかも…」

ギゼラさんの活躍を間近で見たことのあるリオネラたちは 口を揃えてそう言った

ただ、そのリオネラさんの顔はぎこちない笑顔だった

…その理由はほかでもない。ギゼラさんの活躍と言えば大抵半分くらいは人に迷惑をかけたかたりするものだからだ

…まあ、リオネラさんも被害にあったことがあるってことだ。もちろん僕も

でも、あれはあれで楽しかったと思うけどなあ…？

2年目：トトリ「村に帰る、その前に」

コロナのアトリエ

…アトリエの中を 一通り見渡して もう一度確認し、ひとつ息をつく

「ふう…とりあえず、使う前と同じくらい綺麗になったかな…？あと、窓もちゃんと閉めたし、何か忘れてることは…」

手持ちのカゴの中も確認して、忘れているものは無いか確認してみる…：うん、大丈夫そう

後は 一回『青の農村』に顔を出しに行つて、マイスさんに『アランヤ村』に帰ることを伝えてから、また『アールランドの街』に戻つてきて 馬車で『アランヤ村』へ帰る予定だ

「よし！それじゃあ 行こう」

先生のアトリエの合鍵を取り出して カギをかける用意をしながら、私はアトリエから出た…

職人通り

アトリエから出てすぐ…閉めた扉へ向き直つてカギをかけるよりも前に、目の前に誰かがいた

その人に扉は当たらなかったものの、合鍵を取り出しながらで 余所見気味だったわたしは その人に軽くぶつかってしまった

「おっと。これは少し激しめのお出迎えだね。いや、これは喜ぶべきかな？」

「あつー！ごめんなさい…：つて、え？」

とつさに謝ったんだけど、よくよく聞いてみると ぶつかつた相手の人の言い回しは なんだか不思議…というか、変だった

よくわからないけど、とりあえず その人から離れた。そして その人の顔を見ようとしたけれど、どうしても やや見上げる感じになつてしまう…

どうやら、ステルクさんとそう違わないくらいの身長の人だつた

髪の毛は 特別目立つ色ではなかったけど、男の人にしては少し長くて 肩より少し下あたりまでであつた

…髪の毛の長い男の人といったら、馬車の御者をしているペーターさんあたりを思い浮かべるけど、この人の髪はペーターさんとは違い 少しウェーブがかかつていて…それでいてマークさんみたいにモジャモジャした感じは無く、綺麗に整えられてた

服は ところどころに装飾があつたりはしたけど、布地の色が 基本黒で一見落ち着いて見える…けど、逆にその黒が少ない装飾を引き立たせていて、なんだかオシャレに…見えなくもない、かな？

もしかして、『アーランドの街』に住んでる『貴族』の人なのかな？ 服の感じから なんとなくそんなふう考えた。なんだか、ミミちゃんとは また別の種類の『アランヤ村』にはいない、都会っぽい人」だった

私がそんなことを考えていると、その男の人は わたしに微笑みかけながら問いかけてきた

「その様子だと…今からおでかけだったかな？」

「あ、はい。村に帰るから その前にちよつと挨拶をしに…」
ここまで言つて気づいた

この人はアトリエの玄関のすぐ前まで来ていた。…つまり、もしかして アトリエに依頼か何かの用事があつて来たんじゃないか、ということだ

そのことに気づいたわたしは、慌てて姿勢を正した

「えっと、もしかして 何か依頼でしたか!？」

「心配しなくていいよ。僕がここに来たのは依頼じゃないから」

「……うゝえ、それじゃあ……？」

「少し用事があつただけさ。まあ それももう済んだけどね」

答えが返ってきたはずなのに、わたしの頭には 未だに疑問符が残った

まだ ほんの少しの時間しか経っていないはずなのに、いったい何の用事が済んだんだろう？

「っと。このままキミが出掛けるのを邪魔してもいけないね。…口口ナも帰ってきてきかないようだし、僕はこれで失礼するよ」

そう言つてその人は満足したように 微笑み、踵きびすを返して 街の中央方向へと歩きだしてしまった

未だに 何が何だかわからないままのわたしは、ポケットとその後ろ姿を見てただけど、ふいに その人が振り返つて こつちを見てきて口を開いた

「…そういえば、名前、聞いてなかったね」

「あつはい、トトリって言います!」

少し離れてしまつていたから わたしはいつもよりも声を大きく出した。男の人にはちゃんと聞こえていたようで、返事が返ってきた「トトリか、いい名前だね 憶えたよ。僕は…トリスタン、縁えんがあつたら また会おうか」

そう言つて男の人…トリスタンさんは再び歩き出していった

「…結局、何の用事だつたんだろう?」

疑問を残しながらも とりあえずアトリエにカギをかけ、でかける準備を終える

「先生の名前言つてから、もしかしたら 先生が帰ってきてないか確かめに来たのかな?」

そんなことを考えてみるけど、いつこうに答えは出てきそうにもなかった。

|||||

「あの子がトトリ……ロロナの弟子、か。想像してたよりも　ロロナとは違ったタイプだったなあ……。でも、なんだか雰囲気ではなんとなく納得できるのが　不思議なところだよね」

先程会った少女と、トリストアン自身の記憶の中のロロナとを重ね合わせて、ひとり思考をめぐらせる

「まあ、そんなこと言ったら、ロロナとその師匠は　随分と違ったか」
トリストアンはとある『錬金術士』を思い出し……何故か寒気がした気がして、身を震わせた……

|||||

青の農村・マイスの家の前

トリストアンさんとの出会いの後、街を出て『青の農村』のマイスさんの家まで来た

そして、玄関の扉をノックしたんだけど……

「……返事がない」

出かけているのかな？とも思ったんだけど、ふと　ちよつと前にも同じようなことがあったのを思い出す

「あの時は　確かマイスさんが『錬金術』に集中してて気づいてなかったんだよね」

その時のことを思い出しながら、わたしは視線を　目の前の扉から屋根から飛び出してている煙突のほうへと移してみる

…今日はその時とは違って煙は出てはいないけど、それでも、もしかしたら『錬金術』のレシピとかを考えていて、すごく集中していたりする可能性があるかもしれない

「いちおう、覗いてみるだけでもしようかな……」

そう思い、玄関の扉に手をかけた

ガチャ…

玄関の扉にカギはかかっていたみたいで、簡単に開いた

「カギが開いているなら 出かけている可能性は無いんじゃないかな？」と思っただけ、よくよく考えてみると マイスさんってなんだかカギをかけずにでかけそうな気もした。…なので、決定的じゃなかったから とりあえず『作業場』のほうを覗いてみることにした
「お邪魔します…」

『作業場』への扉を開きながら、そう言ってみただけ 周りから反応は何も無かった。わたしの目の前には、誰もいない『作業場』が広がっていた

一応、『作業場』の中を一通り見てまわってみただけ、武器屋さんにあるような『炉』には火は入っておらず、『錬金術』のときに使う錬金釜も 少なくともここ一日は使われた様子はなさそうだった
「やっぱり、何処かにでかけてるのかな？」

『作業場』の様子から考えると、その可能性は十分にあると思う

それじゃあ、マイスさんに挨拶するのは諦めて 街に戻ろうかな…って、考えたけど、今のマイスの家の状況が 少し心配だった
この前、『錬金術』についてマイスさんから教えてもらった時に 見せてもらったから知っているんだけど、マイスさんのコンテナには 見たことの無いような希少な素材や様々な金属のインゴットがたくさん入っている

『作業場』以外に 保存用のコンテナをたくさんそな沢山備えた『倉庫』が、玄関側から見て反対側にあるらしいけど…：…それでも、いろんなものが入ったコンテナが置かれている家に カギひとつもかけずに出かけているってというのは 心配だ…

「でも、マイスさんが帰ってくるまで わたしがココにいるってわけにもいかないし…」

そんなことを考えながら、わたしは『作業場』から元の部屋へと戻った

そして、部屋に戻って『作業場』との境さかいである扉を閉じた　ちょうどその時…

ガチャ…

扉が開く音が聞こえた

玄関のほうかと思つてソツチを見たんだけど、玄関の扉は閉まつたままだった。「じゃあ、何処から…？」と思つたけど、すぐにわかつた。玄関とは反対側にある　裏口というべき場所にある扉が開いていたからだ。ソツチには　渡り廊下があつて、先程思い出していた『倉庫』や　以前マイスさんの家に泊まつた時　に使わせてもらった『離れ』へと繋がっていたはずだ

その開いた扉の先には、誰かがいた

最初は「マイスさんかな？」と思つて誰なのか目を向けたんだけど、そこにいたのはマイスさんじゃなくて、知らない女の人だった

ブロンドの髪をふたつ結びにしている、服装は　ところどころにフリルがついているくらいで　特別変わっているとは思わない格好だった

けど、その女の人自身の特徴とはいえないかもしれないけど、もの凄く目立つものがあつた

女の人の左右、その肩ほどの高さに　それぞれ二足歩行の黒猫と虎猫のデザインのヌイグルミ(?)がフワフワと浮いていた

そして、追い討ちと言わんばかりに…女の人はその腕で　猫のヌイグルミ(?)と同じくらいの大さの金毛のモンスターだを抱き抱かえていたのだ…って、コレは　モンスターと仲が良い『青の農村』だと普通かもしれない

…あれ？「金色のモンスター」って、どこかで聞いたおぼえがある

ような…？それに、あの猫のヌイグルミも……

わたしがそんなことを考えているうちに むこうも何か色々考えていたみたいで、それを コツチよりも一足先に一通り終えたのか、何やら納得したように口を開いた

「ああ、なるほどな。あの子が例のロロナの弟子かあ」

「そうみたい。…へえ、確かに『アランヤ村』にいた子ね」

ただし、喋しゃべったのは 動作からして、それぞれ黒猫と虎猫のようだった……つて

「え……ええっ!？」

「ご、ごめんね…驚かせちゃって…」

驚いているわたしに そう声をかけてきた女の人は、ひとつ軽く礼をしてきた

「えっと、私はリオネラ、普段は人形劇をしてるの。…ほら、ふたりとも ちゃんと挨拶して」

「オレはホロホロってんだ」

「ワタシはアラーニヤ、よろしくね トトリ」

「あ…よ、よろしくお願いします…？……あれ？わたしの名前…」

わたしは疑問をこぼす。そういえば、わたしがロロナ先生の弟子つてことも知っていたみたいだし……

「ミスから色々聞いてたのよ」

「うん。…それに、前に『アランヤ村』に人形劇をしに行ったことがあつて、その時に会ったことがあるんだよ？」

アラーニヤに続いて リオネラさんが言ったことを聞いて、わたしはあることを思い出した

そういえば、ミスさんが昔『アランヤ村』に来た時の目的のひとつが「人形劇」だったって言ってた気が……それに、ジーノ君も マイスさんのこと「ネコの人形劇の人と一緒にいた にーちゃん」って言ってたっけ？

そうなると、わたしもリオネラさんたちとは会ったことがあるはず

…だけど

「ごめんなさい。その…昔のこと あんまり憶えてなくて」

「ううん、気にしないで。そのことも マイス君から聞いてるから…」
「ちよつと驚いたけどな。一度見たら忘れられないって自負があつたつてのによ！」

ホロホロは どうやら少し怒っている感じだった。仕草が一タイキイキとしてて、プンスカ！って音が聞こえてきそうだった

…でも、確かに ホロホロの言う通り、糸で吊られてるわけでもないのにフワフワと浮かぶその姿は、一度見たら忘れられそうになかった

「それで……トトリちゃんはマイスくんに何か用があつたの？」

リオネラさんにそう聞かれて、わたしは当初の目的を思い出した

「ええつと、実は これから馬車で『アランヤ村』に帰ろうと思って。

それで 色々お世話になったマイスさんに 挨拶をしようつて…」

「なるほどな。それで マイスが見当たらなくて困つてたわけか」

「そういうことなら、ワタシたちからマイスに伝えとくわよ。ワタシたち、マイスの家にお泊りさせてもらつてるから 伝える機会はいくらでもあるの」

ホロホロとアラニーヤにそう言われて 考える

確かにこのまま帰ってくるのを待つているわけにもいかない。馬車のことを考えるとなおさらだった

「それなら、マイスさんによろしく伝えてください」

「うん、わかった」

リオネラさんからの返事を聞いたわたしは、玄関から外へ出た

リオネラさんたちは 玄関先までそのまま出てきてくれ、みんなして手を振って 見送ってくれた。リオネラさんが抱き抱えていた金色の毛のモンスターも「モコ」と鳴きながら手を振っていた

わたしは振り返りながら 手を振り返した……

…その金色の毛のモンスターが、ゲラルドさんのお店でメルお姉ちゃんから聞いた『『青の農村』の噂』の中にあつた「幸せを呼ぶ金色のモンスター」なんじゃないかというのに気がついたのは、『アランヤ村』への道のりの半分くらいを移動した馬車の中だった

2年目：マイルス 「『野菜コンテスト』と僕」

青の農村

今日の『青の農村』は、普段の『青の農村』とは違った 賑やかさに満たされた世界になっていた

理由は他でもない、今日が『青の農村』のお祭り：『冬の野菜コンテスト』の開催日だからだ

『野菜コンテスト』は基本的に、『青の農村』で活動している各農家が その時期の 畑最高傑作といえる自慢の作物を出品し 競い合うお祭りだ

その性質上、このお祭りは あくまで村の農家内での勝負であり、先月あった『カブ合戦』のように『アーランドの街』や他の地域からの飛び入り参加ができない。それが理由で お祭りっぽい盛り上がりは弱く、『カブ合戦』等と比べると ウケはいまいちだったりする だけど、それは「お祭りで ハメ外して騒ぎたい！」と思う人たちから見た感想。

『アーランドの街』の食事処や商人にとっては、かなり重要なお祭りだ。『アーランド共和国』の食糧庫」とも呼べる一大生産地の情報が このお祭りに丸々詰まっていると言っても過言ではないからだ。故に、『アーランドの街』の商人だけでなく 他所よその地域を拠点に置いた行商人も、『野菜コンテスト』の開催の噂を聞きつけて 『青の農村』に集まってくるくらいだ

そう、『野菜コンテスト』は他のお祭りとは違った盛り上がりを見せる 大事なお祭りなのだ…

「…なのに、村長のマイルスが そんなにヤル気無くってどうすんだよ」
行商人のコオルが ため息をつきながら、僕にそう言ってきた

「だってー!…」

大事なお祭りだっていうのはわかるし、僕個人としてもお祭りは好きだ。だけど…

「どうして 僕が審査員席にいなきやいけないの!？」

「そりゃあ 審査員は村長であるマイルスが 一番適任だからだろ。作物にも精通してるわけだし」

「僕だって 自分の野菜をコンテストに出したい!」

僕の主張に対し、コオルはため息を吐きながら呆れたような視線を向けてきた

『野菜コンテスト』初開催の年に大差^四で全季^冠節優勝^成したのはドコのドイツだ。あれじゃあコンテストになんねえじゃねえか」

「それは そうかもしれないけど…」

だからって、「殿堂入り」とかいって 審査員のほうに押し込まれるのは、どこか納得いかない…

『シアレンス』じゃあ ずっと参加する側だったから、開催する側に立っていると どうしても少なからず違和感を感じてしまうのが現状だ。もう『青の農村』でのお祭り開催も 両手の指で数えきれないくらいになっているのに、だ

でも、まあ…

「みんな楽しそうだから いったかー」

村の『集会場』前の広場に設け^もられた 審査会場を見わたした

出品する作物を持つてくる『青の農村』の農家のみんな。その作物たちに目を光らせる商人や料理人たち。そして、村のあちこちにある^{でみせ}出店とそこで商いに精を出す店員。村の中を楽しそうに行き交う人たち

活気ある村の風景が 何か別の風景と重なった気がした

…僕はなんだか嬉しくなっていた

それは「歓声をあげたい」とか「小躍りしてしまいそう」といった嬉しさとは違う、内側からジワリと湧きだしてくるような感情だった

「……らしくない顔してるなあ……」

「えっ?」

不意に隣にいるコオルが　ボソリとこぼした言葉が耳に入ってきた

「らしくない顔」って、何のことだろう? タイミング的には僕のことだとは　なんとなくわかってはいるんだけど……

「マイルス、おばちゃんたちみたいなの顔してたぞ」

「おばちゃん?」

僕の疑問に「ああ」とコオルが頷いた

『アーランドの街』の広場なんかにいるだろ、広場で遊んでる自分の子供を見守ってるおばちゃんがさ。さっきのマイルスは　それに似てたぜ」

「ええと……つまりどういうこと?」

「そういうことだな」

コオルはそう言いながらカラカラと笑いだした

……これまでの付き合いから　大体わかるけど、こういう時のコオルは　大抵人をからかっているんだ。まったく……困ったなあ

でも、だたのからかいにしては　なんだか声のトーンが低い気がしたんだけど……気のせいかな?

ひとり悩み出した僕を見かねたようにコオルが明るい声で言った
きた

「まあ、マイルスには　審査の後に仕事があるんだし、ソツチを目指して頑張ればいいじゃんか」

審査の後に仕事……何かあったっけ?

首をかしげて考えてみるけど、全然思い当たらない

「審査の後の仕事って……あっ!もしかして、『青の農村^{ウチ}』からだして
た出店の店員やっていいの!?!」

「村長に出店の店員はやらせねえって、企画段階から言ったじやねえか。そもそも　なんでそんなに働きたがるんだよ…」

呆れたような顔をして首を振るうコオル。……あれ？僕、最近　呆れられてばかりじゃないかな？

…で、結局　僕の「審査の後の仕事」って何なんだろう？

僕の疑問を察してくれた…というよりは　さっきの会話の流れのままに、コオルが口を開き、そのことを話してくれた

「祭りの村を案内して　一緒に見てまわらなきゃだろ？」

「コオルと？」

苦笑いのコオルが「ちげーよ」と言いながら　他所^{よそ}を指差^{ゆびさ}した

つられてそつちへ目を向けると、『野菜コンテスト』の審査会場、そのまわりにつくられた観客席があった

そして、その一角にはリオネラさんが座っていた

リオネラさんも　審査員席にいる僕が見てきたのに気がついたよ
うで、微笑みながら　こつちに手首を動かし小さめに手を振ってきた。
ついでの　そばにいるホロホロとアラニーヤも手を振ってきた

リオネラさんたちに対し、僕も笑顔で手を振り返したのだけど、その途中　隣のコオルが僕に小声で耳打ちしてきた

「せつかく来てくれる客をエスコートするのも、村長…いや、ひとりの男としての務^{つと}めだろ？」

なるほど、それが審査の後の仕事ってことか

「うん！やつぱりコンテスト参加者以外の人にも　お祭りを楽しんでもらわなきゃね！」

僕が笑顔のまま　隣のコオルに返事をしたんだけど……何故か、コオルは苦笑いをしていた

「はあ…、まあミスがそういうヤツだったのは知ってたけどさ。…エスコートって言うくらいじゃ遠まわし過ぎたか？やつぱ　そつち方面は頭ん中に無いんだろなあ（ボソリ）」

……？コオルが何かボソボソ言ってるみたいだけど、うまく聞き取

れなかった

それと、よくよく考えてみると、それって「仕事」っていうよりもただの「友達との付き合い」じゃないかな？

そんなことを考えたが、そろそろ『野菜コンテスト』の審査の時間が迫^{せま}ってきている事に気がついて、気持ちを切り替えた

…さあ、今季のみんなの作物の出来はどうなっているのだろうか？

審査、そして 結果発表および賞品授与

全てを終えた僕は、ひとまず かたづけまでは自由となった

コオルは本職の商人として用があるということ、他のところへ行った

「さて…と」

それなりの人が行き交う広場で あたりを見わたし…そして、広場の端^{はじ}のほう…人の流れが無い位置に リオネラさんを見つけた

見つける事自体 思いの外^{ほか}簡単だった。なにしろ、人混みを避けるために 普段より少し高い位置でフワフワ浮かぶホロホロとアラニーヤが目印になっていたので

「リオネラさん！」

キヨロキヨロしているリオネラさんに、僕が早足で駆け寄りながら名前を呼ぶと、リオネラさんも気づいてくれた

「あつ、マイスくん」

「よお。仕事 終わらせてきたか？」

「お疲れ様。なかなかさまになってたわよ」

リオネラさんのもとにたどり着くと、ホロホロとアラニーヤ^{ねぎらい}が労いの言葉をくれた

今回のお祭りは、さっきの審査の他には、出店用の食材をウチから出したり 会場の設営にちよつと手を貸したくらいだったから、あま

り疲れたといった感覚が無いんだけど……労いの言葉は素直に受け取った

「今回の『野菜コンテスト』はどうだった？」

「うん、とつても良かったと思うよ。ちょうど去年も来たけど、その時よりも全体的に作物の質も上がってて……さすが、マイルスくんに教わった人たちだなーって」

「えへへ……」と嬉しそうに言うリオネラさんに、僕は少し笑いながら返した

「僕が教えたからってわけじゃないと思うけどなあ。参加者の農家さんの……ひとりひとりの頑張りが、結果として出ただけだよ」

「でも、頑張ってきたのはマイルスくんもだよ」

そう言つてニッコリと笑いかけてくるリオネラさん。その言わんとすることはわからなくもなかった

「そうだね。……似たようなこと、考えてたんだ」

「そうだったの？」

「うん。コンテストの前、リオネラさんと手を振り合う少し前に、ね。「あの古い一軒家にひとりりで住んでたのに、いつの間にか賑やかになったなあ」って。「いろんなことに挑戦したり、頑張ったなあ」って……」

もちろん、まだまだ やりたいことはある

特に『魔法』のことは、未だに思い通りにはいっていないことの筆頭だ。杖に事前に付与するタイプについては、ほぼ完璧に万人に使えるようになってきたけど、杖無しとなると、全然上手くいかないのが現状だ

「でも、ここまでやってこれたんだから、これからも やっていけるんだと思えるんだ」

不思議と不安は無かった

「…ふふっ、そうだね。きつと」

「なあなあ、せっかくの祭なんだからよ、見てまわろうぜ」

「ちよつとー！なんで今 そんな話で入っっていくのよ？」

「だってよ。オレたちはマイスンとこに泊まってるんだし、今わざわざしんみり話さなくてもイイじゃねえかー」

「それはそうかもしれないけど…」

ホロホロとアラニーヤのそんなやりとりが僕らの耳に入ってきて、僕とリオネラさんは そろって少し吹き出してしまった

「あはははっ、そうだね。ホロホロの言う通りだよ。コンテストは終わったけど お祭りの終わりまではまだ少し時間があるんだ、せっかくだから 楽しもう！」

「そうだねー！行こう ホロホロ、アラニーヤ、マイスくん」

「おうよ！」

「はーい」

僕らは『冬の野菜コンテスト』の余韻が冷めない村を歩きはじめた
さて、何処を見てまわろうか…

2年目：マイルス「変わった依頼書」

マイルスの家

『冬の野菜コンテスト』を無事終えてから、それなりの時間がたったリオネラさんはまた旅に出ていった。季節は春へと移り変わり、暖かくなつて 過ごしやすくなった。朝、顔を洗う水も 身を切るような冷たさではなくなっていた

そんな中、僕は困っていた
その理由はといえば……

「……どういうことなの」
僕ウチの家に来たクーデリアが 僕に渡してきたのは、1枚の依頼書だった

依頼書自体は『冒険者ギルド』で扱あつかっているものと同じ用紙、だから別に問題無く正式な依頼書なんだけど……
問題はその内容だった

「依頼内容が「護衛」って、初めて見るんだけど」

普通、依頼は内容によって「調達依頼」「調合依頼」「討伐依頼」に分類されているんだけど……渡された依頼には「護衛」とデカデカと書かれていた

「しかも、期限が「不定期」って……」

それって期限じゃないんじゃないかなあ……？

それに「不定期」って……どうすればいいんだろうか

「で、当然 受けてくれるわよね？」

「いや、ちゃんと説明しようよ……」

眉間にシワを寄せて「面倒ね」と吐き捨てるように呟くクーデリアに、どうしても苦笑いをしてしまう。その苦笑いを見られてしまった

ようで、一層鋭くなった目で睨まれた：

けど、すぐにクーデリアは睨むのを止め、ため息をついて、クーデリア自身から空気を変えてくれた

「それじゃあ、説明するわよ。1回しか言う気無いから、しつかり聞きなさい?」

「……はい」

ちよつと言いたいことも、あるにはあったけど、クーデリアのその有無を言わせない雰囲気は漂っていて、YESとしか言えなかった…

『冒険者』の制度は、問題があつてまだ未完成…というか調整が必要なのは知ってるわよね?」

「うん、それは知ってるよ」

例えば、『ペーパー冒険者』と呼ばれる類。冒険者免許を貰うだけ貰い、ロクに活動せずに『冒険者』への補助サポートだけを上手く受ける人たちだ。国営である『冒険者ギルド』は基本、国民からの税収の一部からお金が降りてくるのだけど、彼らは、それを何もしないでむさぼっていた

故に、『冒険者ギルド』は『ペーパー冒険者』を排除するために冒険者免許に期限を付けた。それと同時に、すでに免許を取得している『冒険者』の中で、『一定ランク以下で、一定期間中、一度もランクアップが無い冒険者』たちにも目を光らせ、必要とあれば免許を没収するという対策をとった

それで一応は『ペーパー冒険者』への対策はできたわけだけど、実のところ、まだまだ他の問題がある…:…:というのは、クーデリアと飲みに言った時なんか、愚痴ぐちで聞かされたことがあるので知っていた

ここで、ある考えに思い当たる
「もしかして、近いうちに、また何かの問題に対して対策を講こうじるつもりなの?」

僕の言葉にクーデリアは頷いた

「まだ「予定」としか言えないけど、近いうちにね」

「何の問題に対してなのかは知らないけど、この「護衛依頼」が対策を実施する前段階で必要になるってことか…」

「あら、思ってたより理解が早くて助かるわ」

言葉自体は驚いているようにも感じれなくもないが、クーデリアの顔を見れば「まあわかって当然」と言っているのがよくわかる

でも、いったい誰を護衛するんだろう？第一、誰かを護衛することで何かの問題が解決できるとは到底思えない。それに「不定期」という文字が謎を深めてしまっている

そんな僕の考えを読み取ったのかどうかは定かではないけど、クーデリアが依頼の詳細について 口を開いた

「今回出した依頼は 採取地をまわるあたしの護衛よ」

「えっ、クーデリアが 採取地を？」

いったいどういうことなのか僕が聞く前にクーデリアは言った

「あたしがあたしの仕事に集中するためにも護衛が必要な。例えば、『冒険者』たちが書いてきた地図をまとめて整理して作った 正式な地図に間違いがないか確認するのに、あたし1人だと モンスターのこととか色々面倒なのよ」

「でも、地図の確認とかって、それこそ『冒険者』に任せればいいんじゃない？」

「確認だけならね。あくまでついで。あたしの本当の仕事は、採取地の難易度の再確認と『冒険者ポイント』の見直しよ」

『冒険者ポイント』というのは、冒険者免許の『冒険者ランク』をランクアップさせるために必要なポイントだ。その『冒険者ランク』の冒険者が 活動の中でやるべき事ごとにポイントがあらかじめ決められていて、それらを達成し ポイントをためていくことでランクアップできるのだ

…で、そのポイントを見直すってことは、何かしらの不都合ができたのだろうか

これで おおよそではあるもののクーデリアが採取地をまわる理

由はわかった。だけど…

「冒険に出るってことは、ギルドのカウンターをそれなりの期間空けることになるけど……大丈夫なの?」

「そこが心配なのはあたしもなんだけど、『冒険者ポイント』の項目内容をちゃんと把握できてるのがあたしだけだから、あたしが出るしかないのよ…」

「そうなんだ…」

「二応、受付の代わりは用意できそうなんだけど……ちよつと頼りないけど」と付け足すクーデリア

こういう話を聞くと、毎度思うんだけど、『冒険者ギルド』って人材に困り過ぎているような気がする

……よくよく考えてみると『アーランド王国』時代の『王宮受付』も人材不足らしかったことを思い出す。「いつもエステイさんが大変そうにしていたなあ」と

「…話しを戻すけど、採取地の難易度の再確認と『冒険者ポイント』の見直しをするあたしを護衛するのがマイルスの仕事よ」

「護衛が僕の理由は…?」

「移動時間の短縮。特に帰りは『魔法』を使えば一瞬でしょ? 実力も申し分ないうえ、信頼もおけるし」

そう言われて「なるほど」と納得する。『冒険者ギルド』を長く開けておくのが心配なのであれば、確かに 移動時間はできるだけ短縮したほうが良いだろう

あと説明されていないことと言えば……

「不定期」っていうのは どういうことなの?」

「それは「あたしが『冒険者ギルド』を開けられそうなきに」ってこと。ほら、1回の冒険で全ての採取地はまわれないでしょ? だから採取地を何方向かに分け 冒険も何回かに分けるの。で、あたしが時間を取れる度たひに あんたが護衛について行くってわけ」

クーデリアの言いたいことはわかった

確かに 今現在『冒険者ギルド』が把握している範囲内の採取地だけでも けっこうな数・範囲になる。となると移動距離は長くなるし、確認すべきことも増える

そうなつてくると、移動時間を短縮したとしても かなりの期間冒険し続けることになるだろう。心配事である『冒険者ギルド』の運営」が危うくなることは ほぼ間違いないだろう

「で、この依頼 受けてくれるわよね？」

「うーん……」

僕がうなると、クーデリアは不機嫌そうに口を尖らせた

「何よ、報酬に不満でもあったかしら？ 結構 奮発してるはずなんだけど」

「そういうわけじゃないんだけど……」

いや、でも ある意味そういう話かもしれないので、否定はしきれない。……別に報酬が少ないってわけじゃないけど……

「じゃあ何なのよ」

「こういう正式な依頼書なんてなくても、クーデリアの頼みなら 今のくらいのことは報酬無しでも手伝うのになーって」

……何故か 僕の言葉の後、音ひとつ無くシーンと静まった

どうしたのだろうか？と僕が首をかしげると、クーデリアは「ハァー……」とひときわ大きなため息をつきながら額ひたいに手をあてて首を振った

「……あのね、お人好しなのは あんたの勝手だけど、仮にも『青このむらの農村』の村長なのよ？ こういうところくらい ちゃんとしたやり方で……」

「村長とかそういう前に クーデリアとは友達じゃないか。そんな他人行儀にならなくてもいいじゃない」

そう僕が言うと クーデリアはまた大きなため息をついた

「ありがたいのは ありがたいんだけど……「嬉しい」よりも「心配」って思いが強くて出てくるんだけど……」

「え?」

「無償奉仕ばかりしてて 収入無し、貧しい生活……ってコイツ 国一番の金持ちじゃない、心配する必要なかったわ……あつ、でも 村の運営のほうで……って、そつちもあの行商人がお金のことは仕切ってるぽかったし、問題無いはず……でも、なんでか心配なのよねえ、マイスは。だいたい……（ブツブツ）」

よくわからないけど、クーデリアがうつむき気味になって 何かブツブツと呟きだしちゃった……。そんなに何か考え込むようなことでもあるんだろうか?」

結局、報酬は「村長を借りるから」という理由たてまえで 『青の農村』のほうへと払われるように決めて 落ち着いた

そしてクーデリアは

「それじゃあ、次 あたしが時間取れる時が決まったら日にちとかの詳細を連絡するから」

と言いつつ『アーランドの街』へと帰っていったのだった

2年目：イクセル「パツと見、祖父と孫」

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。アーランドの街にある『サンライズ食堂』を任されている……って、このくだりは もういいか

陽も沈んだ『アーランドの街』。街の路地には 昼間の賑やかさはもう無いが、『サンライズ食堂』は昼とそう変わらないくらいに賑わっている

違いと言えば……まあ、昼間よりもアルコールの匂いがするってところだろうな

…で、今日の『サンライズ食堂』には マイスが来ている。もちろん 一人でじゃない

前回はステルクさんと来ていたが、今回 マイスと一緒に来ているのは……

「もう『大臣』の座を明け渡してから随分と経つというのに、アイツときたらなあ」

「あははは…相変わらずですからね、トリスタンさんは」

マイスと対面するようにテーブルについているのは アーランドの『前大臣』メリオダスのおっさんだ

実のところ、マイスとメリオダス前大臣は 結構交流がある

俺が知っているのは、マイスが『青の農村』をつくる時にメリオダス前大臣が色々と助力したーなんて話があったところだけど、詳しくは知らないが 実際はもっと前から繋がりがあつたらしい

まあ 単刀直入に言うと、それなりに仲が良いつてことだ

「第一なあ、わしがアイツの歳くらいの時にはだな…」

「へえ、そんなことが…」

…仲はいいんだ。ただ、メリオダス前大臣はお酒が入ると愚痴っぴくなるうえにテンションの上がり下がり激しくなるから 少し厄介で、この時ばかりは マイスも酒を控えて 聞き手に徹している
おかげで、店への影響は最小限に済んでいる
けど、やつぱり はたから見ると酔っ払いに絡まれている子供にか見えず、不憫に感じてしまう

…いやまあ、マイスは メリオダス前大臣と飲むのが嫌なわけではないらしいから、俺からは特別何か言ったりはしないんだけどな

今日も メリオダス前大臣が酔いつぶれるまで マイスが話しに付き合わされるんだろうな、なんて思いながらいつものように調理場でフライパンをふるう

「でも、同じ役職…立場に立ったことで、トリスタンさんも これまでのメリオダスさんの苦労を理解してくれてたりするんじゃないですか？」

「あの勤務態度では 少しも理解しているとは思えんが…そうだ！」

何やら途中で声のトーンが変わったメリオダス前大臣。いったい、どうしたんだ…？何故か少しだけ嫌な予感がするんだが…

「トリスタンはまだ家庭を持っていない！アイツも とつくにいい歳を超えた、いい加減 嫁さんの一人や二人貰って。そうすれば それ相応の落ち着きや責任感も持つだろう！」

「お嫁さんを二人もつくったらダメだと思えますよ？」

マイスのツツコミに対し、俺は「いや、そこなのか？」と心の中でツツコミを入れる

にしても、嫁さんを貰う…つまりは結婚かあ

いかんせん、少し耳が痛い。俺も20歳は超えたんだし、そういうのも考えなきゃいけないんだが…どうにもな…

よくよく考えてみると、俺の知り合い連中も そういった浮いた話は全然聞かないな

コロナは昔から変わらず天然だし、クーデリアは時々「ジオ様ー！」って時はあるが、そういう感じでは無いし、ステルクさんは相変わらずのお堅い騎士だし、エステイさんは……うん、まあ あれだし……
でもって、マイルスはマイルスだしなあ……

俺がそんなことを考えている間にも、向こうは向こうで話が進んでいた

「フムウ……今度、お見合いでもさせてみるとするか。仕事でなく見合い話なら さすがにアイツも逃げんだろう」

「それは……なんというか、ちよつと不安が残るような？あつ、でも、トリスタンさんって 街で見かけるときに女の人と楽しそうにお喋りしてるのを見かけたりしますから、お見合い自体は 上手くいくんじゃないですか？」

「だといいんだが……ひとつ気にかかることがあつてな」

「なんですか？」

「トリスタンの服装が 他の者たちと比べて時代やら流行からズレている気がしてな。そのセンスが受け入れられるか心配なのだ……」

「ああ……なるほど。確かにズレてるかも……」

ひとつ、ひとついいか？

俺はマイルスに言いたい「お前の服装も大概たいがいだろ!？」と

いやまあ、マイルス自身に似合ってるし、すごく遠いところの人間だから 文化が違って服のデザインに特徴があつたりしても、ある程度は仕方ないと思うが……。それでも、年中 肩出しファッションはどうかと思うぞ？

これは本当に言ってしまうか迷ったのだが……そういえば、『錬金術士』の服装も 負けず劣らずの個性が鋭く尖った 特徴のあるデザインが多かったことを思い出して踏みとどまった

コロナの師匠のアストリッドさんの服装は、まだ全然常識の範囲内だった。

コロナの服装は、杖と帽子がちよいと目立ってはいたが まあそれ以外だけ見れば、少しフリルが有るくらいで そこまででも無かったんで、ここ最近知り合った コロナの弟子のトトリは……手には杖を持って、頭には特徴的な装飾品、服は足を中心に肌の露出多めでスカートがやや透けていて フリッツリのフリルが……

正直、トトリのは どうしてあんな風になったのかが全然見当がつかない

俺が「もし仮に トトリに弟子ができたなら、もつと個性的な服装に……」なんて考えていると、例のテーブルから 面白そうな話が聞こえた

「そういえば、マイス君。キミもそろそろいい歳じゃないかい？ 誰かそういった相手はいないのかね？」

「僕にですか!？」

自分にその手の話をふられたのが予想外だったらしく、マイスは驚き、その後 難しい顔をして腕を組んで悩みだした

「うーん……考えたことなかった……」

「だろうなあ」と俺はひとり心の中で頷いた。これまで マイスのそういう話を聞いたことは無かったし、関心を持ってたりしている様子も全く無かった

けど、マイスはその気になれば そう問題無く相手が見つかると思うんだよな……

他所よその出身ってこともあってか 少し感覚や考え方が独特な部分があったりもする。だが、仕事をちゃんとし、『鍛冶』『薬学』など様々な知識や技術を持ち、それでいて 人当たりや面倒見もいい

基本的にマイスは良いヤツで、顔も広く 人気もあるんだ

きつと探せば『アーランドの街』にもマイスに少なからず好意のあるヤツは何人かいるはずだ。それが 恋愛感情とかじゃなく 信愛・尊敬等の別の感情かもしれないが

『青の農村』には「いるはずだ」とかじやなく間違いない。「いる」だろう

ミス本人はどうやら知らないみたいだが、『青の農村』を中心に『ミスファンクラブ』っていう組織が秘密裏にある……らしい。大体は 童顔のミス「村長」をマスコミ的な立ち位置に確立させようっていうノリだそうだが……まあ、十中八九 ミスの熱烈なファンが所属していると思う

…ああ、ついでに言うとう『ミスファンクラブ』の話は 雑貨屋のティファナさんから聞いた

ティファナさんは 昔からミスのことを気にかけてたり可愛がったりしていたから ファンクラブとやらに入っているも別段驚かなかった。けど、「イクセル君も入ってみる？」と聞かれた時には どう反応すればいいかわからなかった

「…やっぱり、思い浮かびそうにないです」

「そうなのかな？なら キミにもお見合いをセツティングしようか？」

「あはは…いや、遠慮しときます。今は 色々やりたいことがありますから」

「まあ…意外な縁から始まったりするものだったりもするからな。そう急ぐこともないか」

むこうも とりあえずはその話はまとまり、次の話題に移ったようだった

時間は経って、メリオダス前大臣は とうとう酔いつぶれてしまった

とはいっても、それ自体はあまり珍しくは無い。よくあることで、いつもミスが背負って家まで送り届けるところまで いつものことなのだ。最初の時こそ 小柄なミスが心配だったが、何度もあって 俺ももうその光景に慣れてしまっている

が、今日はいつもとは違うことがおきた

カランカランッ

「…やっぱり、ちようど予想していたタイミングだったね」

そう言つて『サンライズ食堂』^店に入つてきたのは、タン…じゃなくて トリスタン現大臣だった

「まったく、お酒を楽しんで飲めるのはいいことだけど、毎度毎度 他の人に迷惑をかけちゃダメじゃないか」

そう言いながら、トリスタン現大臣はマイルスが背負いかけていたメリオダス前大臣のもとまで行つて、マイルスに代わり 自ら^{みずか}メリオダス前大臣を背負つた

「トリスタンさん、どうしてここに？」

そう聞いたマイルスに トリスタン現大臣はいつもの調子で返した

「ああ、さつき言つた通り 毎度キミに迷惑かけるのもどうかと思つてね。それで、これまでの経験から「そろそろ酔いつぶれるころかな？」[？] と思つて ここに来たんだ。ちようどだつただらう？」

「そうだったんですか！それはわざわざ ありがとうございます」

「こちらこそ。親父つたら キミと飲みに行く日は決まつて機嫌がいんだ」

そう言つて笑うトリスタン現大臣は、ある意味突拍子もない提案をマイルスにした

「そうだね…キミが大臣になったらどうだい？そしたら親父もすごく喜ぶし 僕も…」

「なら、代わりにトリスタンさんがウチの畑仕事を…」

「うん、この話は無かつたことにしよう。それじゃあ！」

そう言つて メリオダス前大臣を背負つたトリスタン現大臣は店を出ていった

…この後、会計に来た際に マイルスから聞いた話だと、トリスタン現大臣は ことあるごとに大臣の仕事を地位ごと押し付けようとし

てくるそうで、さっきのようなやりとりはよくあるとのことだそうだ

トリストアン現大臣が『サンライズ食堂』に来て「知らないうちに見合い話を進められてた！匿ってくれないか!？」と転がり込んできたのは、その1週間後のことだった…

2年目：マイス「帰還」

男の武具屋

『炉』から発せられる熱が満ちる店内。ゆらゆら揺れる『炉』の中の炎にのみ照らされている。その薄暗い店内でおやじさんは槌つちを振るっていた

「おやじさん！頼まれてた物 調達してきましたよ！」

僕が少し声を張り上げ気味に話しかけて やつと僕に気がついたようで、おやじさんはキリのいいところで手を止めて槌を置いて こちらに向きなあった

「おお、相変わらず仕事が早くて助かるぜ！」

「この麻袋の中に入れてますから、確認をお願いします」

「おうよ！ちよいと待ってるよ」

僕が渡した麻袋を受け取ったおやじさんは、麻袋の口を開き 中の鉱石系アイテムたちを確認していった

そして、一通り確認し終えたおやじさんが僕のほうに向きなおり、軽快な笑顔をして頷いた

「頼んでたとおりのモンだったぜ！ありがとよ、ボウズ」

「いえ、おやじさんには相談にのってもらったりしてますから。お互い様ですよ」

「そうか？んじやあ、また 何か俺にできることがあったら相談してくれよな。コッチもまた頼むからよ」

「はい！その時はよろしくお願いします！」

僕が返事を返すと、おやじさんも「おうよ！」と力強い返事を返してきてくれた

「しっかし まあ、このレベルのモンの調達を頼むとなると、やれそうな『冒険者』あんまりいなくてよ。実力も目利きも良いボウズに頼むのが一番だな」

「あはは、そう言ってもらえるなら嬉しいです」

「おっと、『冒険者』といやあ、嬢ちゃんの弟子の嬢ちゃんが ウチに来るようになってよ。最近ほ また嬢ちゃんの事やってたみたいになつたんだ。そういや、嬢ちゃんに初めて会ったのは今から ちょうど1年くらい前になるっけか…」

「嬢ちゃん」が乱立して、どっちの嬢ちゃんが どっちの事なのか わかりにくいが…おそらくは、ロロナの弟子のトトリちゃんが『男の武具屋』に武具を作ってもらいに来るようになった…って話だろう

口が回り始めた おやじさんは中々止まらないことを思い出して「どうしようかなあ…？」と思つたけど、よくよく考えると今日は別に急ぐ用事も無い事に気づいた。なので、そのまま おやじさんの話に付き合ってみることにしたのだった…

職人通り

「また来いよ！」

「はい！それじゃあ 失礼しましたー」

店から出て 扉を閉め切る前に店内から聞こえてきたおやじさんの声に返事をして、改めて扉を閉める

「ふう…結局1時間くらい喋っちゃったなあ」

おかげで『男の武具屋』内の熱気に慣れてしまった身体が、夏へとさしかかろうとしはじめた街の風を冷たく感じてしまっている

「さて…と」

それじゃあ帰ろうか…と、街の出口である門がある場所へ行くための道のほうを向いた ちょうどその時のことだった

ガチャ

開いたのは『男の武具屋』の隣……『ロロナのアトリエ』の扉だった。そしてそこから出てきたのは……

「ふう、これでひと段落。あとはー……あつー！マイス君だー!!」

「ロ、ロロ……ロロナあ!?!」

ここ数年、旅に出たまま 街に全然帰ってきていなかった友達……ロロナだった

満面の笑みを浮かべたロロナは、こちらに駆け寄って来て、来て、来て……え?

ガシイ!

「えへへえーマイス君 久しぶりー！元気にしてたー？」ギューツ
「ちよ、ロ……ロナ、苦し……!」

思いつきり抱きついてきたうえに、ガツシリ掴んできて、それでもって 頬ほお擦りすりしてきて……

苦しいやら、恥ずかしいやら……幸い周りに誰もいなかったからよかったものの、これはいかなものだろうか?……って、なんだよく考えてみると「いつものロロナ」じゃないか

「それ でも、苦し……いものは苦し……いん……だけど、ね……」

「ふえ?……あつ、ごめんねマイス君!久しぶりに会えたのが嬉しくて……」

僕が苦しがつているのに気がついてくれたロロナは、ホールドを解いてくれた

「ふう……助かった。……それに「久しぶり会えた」って、会えなかったのは ロロナが全然帰って来なかったからなんだけど?」

「えへへ……それはー」

笑って誤魔化そうとするロロナに対し 目を細めると、ロロナはズーンっといった雰囲気になり「……ゴメンナサイ」と謝った

うん、こういう素直なところもロロナらしい

「それで、いつの間に帰ってきたの」

「ついさっきだよ。ちよつとやることができてるね」

「ついさつき…まあ、そうだとは思った。なぜなら、僕は『男の武器屋』に行く前に一度『ロロナのアトリエ』の様子を見に行っていた、そしてその時 アトリエに誰もいないことは確認していた

ということ、僕が『男の武器屋』でおやじさんと喋っていた約1時間の間に帰ってきたのだろう

おやじさんの話に付き合っただけで良かったと心底感じた。だって、あの時すぐに帰っていたら こうして帰ってきたロロナに会うことは出来なかっただろうから

「そうだ！立ち話もなんだから アトリエに寄って行ってよ！」

ロロナの提案に、僕は断る理由も無かったから 頷き、ロロナに手を引かれてアトリエへと入った…

ロロナのアトリエ

「一応 途中までは掃除したけど…まだ散らかってるけどゴメンね？」

「…いや、いたっていつも通りだと思うけど…？」

「それって 私のアトリエがいつも散らかってるってこと!？」

「うーん…否定できない」

「そんなあ!？」

涙目になるロロナを「まあまあ」と苦勞しながらも ひとまず落着かせた

そして、アトリエの一角に置いてあるソファァーに並んで腰をおろした

「ねえ、きつっき「やる」ことができた」って言ってたけど…?」

先程、アトリエの外で話していた時に聞いた内容のことを尋ねると、ロロナは「そうなんだあ」といつも通りのノンビリした調子で話しました

「前に話したことあったよね?わたしが『錬金術』を教えたトトリちゃんって弟子の娘のこと。そのトトリちゃんに久しぶりに会ったんだけど…」

「トトリちゃん?家ウチに来たり、僕が『冒険者』のお仕事を手伝ってるんだけど?」

「そうそう!トトリちゃん、わたしが知らないうちに『冒険者』になっちゃってて…って、え?手伝ってる?」

ポカンと口を開けて呆けた顔をするロロナに、トトリちゃんと会い、手伝うようになった経緯を簡単に説明する

「トトリちゃんが免許取得更新か何かでギルドに来た時にクーデリアが「何か困った時はコイツに頼ってみるといいわよ」って紹介したらしくて、それでウチに来たんだ。…で、実は僕、前に『アランヤ村』に行ったことがあって、その時トトリちゃんにも会ってて…:そんな縁で最近時々だけ手伝ってるんだ」

「へえ、そうだったんだ…!それじゃあ、トトリちゃんがお母さんを探してるってことも?」

「うん。知ってるし、トトリちゃんのお母さんには会ったこともあるよ。…:今、どこにいるかまでは知らないけどね」

…:ロロナに「トトリちゃんのお母さんは外洋に向かった」っていう話をしようか迷った。けれど、グイードさんからの口止めの件もあるし…:ロロナは嘘はつけない、隠せないタイプだから、話さないほうがいいだろうと判断した

それにしても、トトリちゃんの話が出てきたってことは、ロロナが言ってた「やること」って、もしかして…:

「あのね、わたし、トトリちゃんのお母さんを探すの、手伝おうと思うの!」

「そっか。トトリちゃんも先生のロロナと一緒にだと心強いだろうね」
「そのうえ、ミス君が一緒ならさらに安心だね!!」

胸を張って誇らしげに言うロロナを横目に見ていると……少し、罪悪感があった。でも、ここで本当の事を話したら……

「……どうかしたの？ミス君？」

「ん？ううん、いや、なんでもないよ」

そうだ。僕はグイードさんから話を聞いた時に決めただ。 「ギゼラさんの事を信じる」って。だから、トトリちゃんのお仕事を…一人前の『冒険者』そして『錬金術士』になるためのお手伝いをするって。僕はもう一度心の中でそれを誓い、心を切り替えた

「それでね、今さつき帰って来てから、トトリちゃんのお手伝いの下準備するためにアトリエを片付けてて…あっ！そうだ！」

ロロナがいきなりポンツと手を叩いたから何事かと思ったんだけど、その顔を見てみるとあからさまに「良い事思いついた！」という笑顔だった

「今度は何を思いついたの？」

「えっとね、わたしがいない間にトトリちゃんがこのアトリエ借りてたんでしょ？だったら、これからの事考えたら『錬金釜』がもうひとつあったほうがいいかなーって！」

「ああ、なるほど。ロロナ用とトトリちゃん用についてことだね」

確かに、ふたりでひとつの釜を使うのは無理があるだろう。別々のモノを作れたかったりすることがほとんどなわけだから、ふたつ用意するのは至極当然だろう

「じゃあ、そのふたつ目の釜を置く場所を確保するためにも、アトリエの中をしつかり片付けないとね！僕も手伝うよ！」

「本当?!それじゃあ、まずはー…」

その後、片付けの最中にたまたまアトリエ前を通りかかったクーデリアが、ロロナが帰ってきているのに気がついてちよつと騒がしく

なったりもした：

でもまあ、長い間帰って来なかったんだから、クーデリアから説教をされるのも当然だよね

2年目：マイルス 「護衛って何だっけ？」

絶望峠

『絶望峠』、アーランドの街から出て『旧街道』、そして 以前トトリちゃんたちと行ったことのある『埋もれた遺跡』を通ったその先にある採取地

その名前の通りの高所で、その中央付近には大きな谷がありそこにつり橋が架かっている

他の特徴と言えば…そうだなあ。空気が乾燥していてパツサパサで少し砂っぽいこと、それに ところどころに大きな機械の残骸が転がってあったりすることくらいかな？

…それで、僕がどうしてここに来ているのかというと、例のクーデリアからの護衛依頼だ

だけど……

「ねえねえ！くーちゃん、マイルス君、あっちで何か採取できそうだよ！」

「あつ、コラー！ロロナ！勝手にどっか行くんじゃないわよ」

何かを見つけると すぐにそこへとフラフラと行ってしまうロロナと、それを叱りながらもロロナの後をしつかりとついていくクーデリア。…うん、なんだか懐かしい光景だ

それで、どうしてロロナが一緒にいるのかっていうことなんだけど…それはアーランドの街から出発するその時にまでさかのぼる…

クーデリアから「『絶望峠』まで行くわよ」との連絡があつて、色々準備してから『青の農村』の人たちに出かけることを伝えた。そして、

待ち合わせの街の出入り口である門に行っただ。

そして、その門のそばにいるクーデリアを見つけてそちらへとむかった

「ごめん、待たせちゃった？」

「別に言うほど待ってないから。それに、こっちが正確な時間を明記してなかったんだし、気にすることはないわよ」

「ほら行くわよ」と言っつて、クーデリアが最初の目的地である採取地『旧街道』へと続く道があるほうへと行こうとし……ピタリツと動きを止めた

どうしたのだろうか？と疑問に思ったのだけど、ここでクーデリアの顔が 目的地への道のほうではなく、その道のわきの木のほうを向いているのに気がついた。そこに何かあったのだろうかと思い、僕もそっちへと目を向けてみて

「あれっ…？」

木の陰からチラリと見えるのは、どこかで見たことのあるピンク色の帽子とマントの端……。それに加えて、これまたどこかで見たことのある杖…

「ぶくーっ！」

しかも、木の陰から顔を半分覗かせている誰かさんは、涙目で頬を膨らませている……っつて

「ロロナ？」

「あんた、なにしてんのよ…」

木の陰に隠れてた人の名前を僕が呟くのとほぼ同時に、クーデリアが呆れたように言った

「むうー！」

「だから、なんでぶくれてるのよ」

「二人で冒険に行くなんてズルい！わたしも一緒に行きたーい！」

そんな事を言いながら木の陰から出てきたロロナが、僕とクーデリ

アのほうへと駆け寄ってきた

そんなコロナに、僕は気になることがあったので聞いてみることにした

「ねえ、トトリちゃんに「アトリエに来てね」って言うてからアーランドに戻ってきたんだよね？今からでかけたらマズいんじゃない？」

「大丈夫だよー。『アランヤ村』から『アーランドの街』まで来るにはかなり時間かかるし、きつと大丈夫！」

「きつと」って……本当に大丈夫かなあ？心配になっしょうがない。

そんな心配が顔に出てしまっていたんだろう。隣にいるクーデリアが僕の肩に手を置いてきた。

「まあ、本人がこう言ってるんだし、大丈夫なんじゃないの？…後は、あんたに頼んでた食料とかが、コロナが増えてもやっていけそうかどうかただけど…どう？」

「それは問題無いかな。『秘密バッグ』で繋がってる冒険用のコンテナの中に 十二分に入れてあるから」

「ならいいじゃない」

クーデリアがそう言うのと、僕とクーデリアの会話をずっと聞いていたコロナの顔がパアツと笑顔になった

「いいの!？」

「ええ、断る理由なんて無いし」

「まあちよつと心配ではあるけどね…」

「わあーい！やったー！実はね、色々用意しててー……」

元氣一杯にはしゃぎだしたコロナを見て、僕とクーデリアは「変わってないねえ」と顔を見合わせて笑った…

…ということが数日前にあったのだ。それから採取地を2つ経由して最終目的地だった『絶望峠』にこうしてたどりついたんだけど

「もうっ！勝手にウロチョロするのは相変わらずなのね」

「えへへ：ゴメンなさい」

ロロナの様子は本当に相変わらずだし、クーデリアもクーデリアで、ロロナの事を叱っているようでどこか楽しそうにしているし……

そこで気がついた。：いや、本当に気がつくのが遅かったくらいだろう

ロロナと一緒に冒険したがっていたけど、クーデリアもロロナと一緒に冒険したかったんだろう

思えば当然のことだった。ロロナが旅に出てからというもののクーデリアは「帰ってこない」「帰ってこない」とずっと何度も言っていたんだから。幼馴染の親友がずっといなかったなら一緒にいたいと思うだろうし、また昔のように冒険してみたいと思うはずだ

「：ロロナが帰ってきた時、僕もすごく嬉しかったしなあ（ボソリツ）街の『職人通り』でロロナに抱きつかれた時のことを思い出す

あの時は苦しさのせいもあって嬉しさを口に出すことはできなかったけど……うん、今考えてみると、やっぱりかなり嬉しかったんだ

「マイス君ー！」

「ちよつと、マイス！何してるのよー！早く来なさいー！」

ひとり、考えに浸っていると少し遠くまで行ってしまっていたロロナとクーデリアから声を投げかけられる。ロロナは大きく手を振っていて、クーデリアは腰に手を当ててコツチを見ている

「うん！すぐ行くよ」

「クーちゃん、どんな感じ？」

ロロナが、『冒険者』たちが書き記した地図をまとめたものを確認し

ているクーデリアの隣に行き、その地図を覗き込んでいた

「どうも何も、大体は問題無いわね。…ただ、やっぱり思った通りね」
「思った通りって？」

つり橋の状態の確認をしながらクーデリアに問いかける。するとクーデリアはこちらを見ずに 手に持つ地図に何かを書き込みながら僕の疑問に答えた

「この難易度の採取地の地図に関しては、もう十分過ぎているってことよ」

「それじゃあ、もう『冒険者』の人たちには 地図は描いてもらわなくていいってこと？」

ロロナの言葉にクーデリアは「そうじゃないわ」と首を振った

「地図を書かせるのは何もその情報が欲しいってだけじゃなくて、その冒険者の地図の描く能力を確認するためでもあるの。地図ロクに描けないヤツが、あたしたちが情報の欲しい 高難易度の高い 険しい採取地に行つて「地図全然描けませんでしたー」じゃダメじゃない」

「ええっと…？」

『錬金術』でいうと、難しい調査に挑戦する前に 難易度の低い調査で肩慣らししたほうが良いよね？ 地図を描くのも同じようなことが言えるってことだよ、ロロナ」

「あーなるほどーそういうことなんだ」

僕の例え話で本当にわかったのかどうかはわからないけど、とりあえずロロナは納得してくれたようだった

「それで、クーデリアとしてはまだ何かあるんでしょう？」

「そうね…『冒険者ポイント』の配分の見直しの時に、優先度を下げた加算されるポイントを減らすことを考えるくらいかしら」
「なるほどね。そういう調整の判断材料にするんだね」

僕が納得したちようどその時に、クーデリアは初めて僕の方を向いてきた

「で、そっちの確認は終わったの？」

「うん、問題無いよ。よっぽどの外的要因……わざと武器で切り付けたり、モンスターが攻撃したりしない限り、少なくとも後5年は安心だよ」

「なるほどね。わかったわ」

僕の返事を聞いたクレーリアは、再び手に持つ地図に目をやって何かを書きこんでいた。…おそらくは、さっき僕が言ったつり橋の寿命についてだろう。書き記しておき、情報を残しておくことで、時期が近づいてきた時に人を派遣できるようにしておくのだろう

…さて、これで今回の仕事は大体終わったかな？

2年目：マイス「二人で混ぜて」

前回のクーデリアの『絶望峠』までの護衛依頼……いや、ロロナが参加した時点で3人でのただの冒険になったから、護衛って感じは全く無かったんだけど……

まあ、それを終えてアーランドの街まで無事帰還できた

『青の農村』も、僕がいなかった間も何も問題無かったようで、みんな元気になっていた

僕が心配していたトトリちゃんも、僕らが帰還してから数日経ったころに街へ到着したようだったので、僕の杞憂に終わったようでひと安心だった

そんなある日の事……

ロロナのアトリエ

ロロナが『王宮依頼』を受けていたことからの習慣で、『ロロナのアトリエ』におすそわけを持ってきたのだけど、扉をノックする前に中が何やら騒がしいことに気づき、何事かと慌てて中に入った。するとそこには……

「もう、どうしてパイになっちゃうんですかー!」

「な、なんでだろうね……。あっ、でもこれ、実はすごいことかも!」

錬金釜の前で何か騒いでいるのは、このアトリエの主とそのお弟子さん……2人の錬金術士だ

トトリちゃんが少し怒り気味に声を張り上げ、ロロナが困ったように笑いながら手に持つ『パイ』を指し示していた

「わたしとトトリちゃんが一緒に調合したら、なんでもパイにできちゃうって……」

「パイができたらダメなんです！もう、先生はジヤマだから手伝わないでください！」

「がーん！そ、そんなあ……」

トトリちゃんの言葉に、ガツクシと肩を落として「ううう……」と涙目になるロロナ

うーん、おかしいな……？トトリちゃんが師匠で、ロロナが弟子だったっけ？この構図を見ると、どうしてもそう考えてしまう

……と、そんなことを考えていると、錬金釜の前にいたトトリちゃんがアトリエに入ってきていた僕に気がついたようで、コツチを見て少し驚いたような顔をした

「マイスさん!?えっと、いつからそこに……?」

「ついさっきだよ。なんだかいつもより騒がしかったから、何かあったのかと思って入ったんだけど」

「あははは……、ぐめんなさい。ちよつと色々あつて……」

どういふべき迷っているのであろう、トトリちゃんは困ったように笑いながら小首をかしげていた。

そして、ロロナの方はというと……

「マイスくん……トトリちゃんがあく」ガシツ!

僕に泣きついてきた。……もう、本当にどつちが師匠でどつちが弟子なのか……いや、どつちが年上なのかもわからなくなってきた。

「もう、ロロナったら叱しかられた子供じやないんだから……。ほら、拭くから顔を上げてよ」

「うう……グスンツ」

ポーチからハンカチを取り出して、こつちをむいたロロナの顔を拭いてあげる。すると、それをジーッと見ていたトトリちゃんが口を開いた

「……なんていうか、マイスさんって先生の扱いに慣れてるんですね」

「はははっ、それでもまだ偶たまにさっきのトトリちゃんみたいに振り回されるんだけどね」

僕がそう言うと、トトリちゃんは「そうですねー…」と諦め半分のようすで呟いていた

「まあ、ロロナの扱っていうなら、僕よりもクーデリアが上手いんじゃないかな」

「クーデリアさんですか？」

「付き合いが長いっていうのもあるだろうけど、知っての通りクーデリアは言うところはビシバシ言うからね。…とは言っても、それと同じくらい甘やかしたりもするから…アメとムチが上手い、とでも言うべきかも？」

「へえー、そうなんですか？私、先生とクーデリアさんが一緒にいるところを、まだ見たことがないから、なんていうか想像できないというか…」

「それもそうかあ。でも、ふたりが仲が良いのは見たらすぐにわかるはずだよ」

僕の言葉を聞いたトトリちゃんが「あのクーデリアさんと先生が…」と呟きながら何かを想像しているようだったが、それよりも復活したロロナの方に気を向けた

「それで？ロロナは、今日は何をしちゃったの？」

「うええっ!? マイス君、ヒドイ！まるでわたしがいつつも失敗してるみたいに言った！」

「それじゃあ、今日のは失敗じゃなかったんだね？」

僕がそう言うと、ロロナは言葉を詰まらせた。そしてその目は泳いでしまっていた。…うん、ロロナは相変わらず嘘をつけないみたいだべ、別に失敗じゃ…ない、わけでもないけど…あれは…ね？」

「ね？」って言われても…」

これじゃあ話が進まないなあ、と少し困っている僕に助け舟を出してくれたのはトトリちゃんだった

「その、実は……」

「…つてことがあつて」

「なるほど…」

トトリちゃんの話をまとめると、こうだった

トトリちゃんが仕事に必要なものを調査しようとした時に「わたしが見てあげるね!」と言ってそばまで来て見学を開始。しかし、そんな近くで師であるロロナが見ているとなると、トトリちゃんは調査に集中できるはずがなかった

「緊張しちゃうんで…」とトトリちゃんが言うものの、ロロナが「ええー? 気にしないでいいのにー」と拒否(?) したそうさだ。

…そして、そこでロロナのいつもの思い付きが発動したらしかった「あつ、そうさだ! ふたりで一緒に調査してみよー? 」

それはひとつの錬金釜での調査を2人でかき混ぜてみるというものだったらしく、トトリちゃんも興味があり承諾したそうさだ

でも、問題はそれからだったらしい

というのも、薬でも何でも調査しようとしたものは、結果的に全部『パイ』になってしまったそうさだ

「それで、仕事の調査が進まないトトリちゃんが怒つちやつた、と」
「はい…」

僕の言葉をトトリちゃんは肯定した。

それを聞いていたロロナにも後ろめたさは少なからずあつたのだろう、申し訳なさそうに顔を伏せがちにしていた。だけど、すぐに顔をパツと上げいつもの明るい調子で口を開いた。

「でもねでもね、これってとっても凄いいことだと思ふんだ! 」

「凄いかどうかよりも、まず受けている仕事を優先しようよ。『パイ』はその後で良いじゃない」

「うう…はあーい…」

シヨンボリと肩を落とすロロナに少し呆れながらも「ああ、いつものロロナっぽいなあー」なんて思いながら、僕はここからどうフオ

ローを入れるかを考えてみた。

…と、そんな中、コロナがまた顔をパツと上げて「そうだ！」と手をポンと叩いて微笑んだ。

「せっかくだし、マイルス君もトトリちゃんと一緒に調べてみようよ！」

「えっ」

コロナの提案に、僕とトトリちゃんがつい声をあげてしまった。いやだって、仕事のための調査を急ぐべきだろうって話をした直後にこの提案なんだから、それは驚きもするだろう。

「コロナ、さっきの話聞いて…」

「でも、面白そうかも…」

…トトリちゃんは何を言っているんだろうか…？

この時あることに気づいた。さっきあつたつていう騒動も なんだかんだってコロナの提案を受け入れてノツていったトトリちゃんにも非があるような気がすることに…

「そうだよ！やってみよう！ね？」

「はい！きつとマイルスさんなら大丈夫な気がします！」

はしやぐコロナとそれにのるトトリちゃん。…しかも、なんだかハードルが上がった気がしてならない

でも、この空気の中で断ってしまえるものだろうか…。いや、無理だろう…。でも断りたい…嫌な予感が凄くしてるんだよなあ…

「…わかったよ。ただ一回だけだからね？」

そう言いながら僕は『秘密バッグ』からまずは調合用の杖を引っ張りだす。そして、素材を入れているコンテナに繋がっているもう一つの『秘密バッグ』を取り出す

「それで、トトリちゃんは最初何を調合しようとしたの？」

「えつとですね、高品質の『中和剤』をつくろうかと思って」

「なるほど、確かに品質の高い『中和剤』があれば、これから先つくる

調合品の品質の底上げができるからね。…それじゃあ、調合素材にはこのあたりがいいかな？」

僕は『秘密バッグ』から素材をいくらか出して、品質や特性を確かめ選別して調合に使うものを選びだした。そしてそれらを錬金釜のほうまで持つて行く

「えっ!? マイスさん!? 素材をこんなには貰うのはちよつと…」

「いいよいいよ、気にしないで。ロロナとの調合で『パイ』になっちゃった分が帰ってきたと思ってくれたらいいからさ。受け取つてよ!」

「な、なら…」

トトリちゃんは僕から素材を受け取り、そのうちのいくつかを錬金釜の中へと入れた。そして杖を持ち、僕の方へと向きなおつてきた

「それじゃあ、やつてみましょうか!」

「うん! わかった」

そう言つて、トトリちゃんと僕は錬金釜の前に立ち、並んでそれぞれの杖で釜の中をかき混ぜはじめた

ロロナはと言うと、僕らから少し離れた位置からコツチをジイーつと見てきていた。そして、少し頬を膨らませながら僕らに言つてきた「なんで「ぐるぐる」って言わないのー?」

「いや、元から僕は調合の時にそんなことを言つたりしてないからね…?」

「先生、調合中に話しかけて集中を乱れさせないでください!」

「がーん! なんだか、今日はトトリちゃんが冷たいよお…」

クスンツと涙目になりながら数歩下がり膝を抱えて床に座りこむロロナ…。

…なお、トトリちゃんは調合のほうに集中しているようで気づいていないようだったが、ロロナは時折こちらをチラツチラツつと見てきては「よよよ…」と何真似をして気を引こうとしていた…もう一度言うけど、トトリちゃんは気づいていなかった

トトリちゃんと2人で釜を混ぜ続けること十数分……

ポフンツ

錬金釜の中から音が聞こえた。どうやら無事調査が終わったようだった

杖を釜から出したトトリちゃんと僕、そして膝を抱えて座っていたロロナが駆け寄って来て、3人そろって釜の中を覗きこんだ

そして、調査で出来上がったモノを僕が掴みあげてみせた

「……マイスさん、それ『中和剤』じゃないですよね、どう見ても」

「いちおう『パイ』でもないけどね」

「マイス君……それって」

ロロナの言葉に僕は頷いて、これが何なのかをハッキリと口にする

『種』：『アクティブシード』だね」

そう、僕としては馴染の深い『種』だ。それも拳こぶしだい大の大きさの種

……つまりは『アクティブシード』だろう。……ただ問題なのは、僕の記憶内にも全くない見た目だということだ

「でも、なんだか見た目が違うような……」

「一言で『アクティブシード』って言っても色んな種類があるからね。

……でも、コレは僕も見ることが無いなあ……」

「そうなんですか？」と少し驚くトトリちゃん。そんなトトリちゃんにロロナが首をかしげながら聞いていた。

「あれ？トトリちゃん、あくていぶしーどのこと知ってたの？」

「前にマイスさんが見せてくれて。その時はハスライダーっていう……」

そんな2人を見ながら、僕はこの『アクティブシード』がいったいどういうものか確かめるために、手に持つ種をポイツと床に落してみることにした

そして、そこからあらわれたのは……

直径1メートル弱の皿のようになった葉、その中央には花のツボミのようなものがついていた

その見た目に、僕は少し覚えがあった

「これは『水場草』？」

『水場草』というのは、いつでもどこでも綺麗な水が湧きだしてくる『アクティブシード』だ。今、目の前にあるものはソレに似ていた違いがあるとすれば……色合いが濃くなっていることと……本来水が溜まっているはずの刃の皿に何も溜まっていないことだろう

「やっぱりハスライダーとは違った感じですね」

……と、トトリちゃん。そしてロロナはといえば、ツボミのような部分をチョンチョンと指でつついている

「わあ!?何か溢れ出してきた!」

「本当だ……なんだろうこれ?」

『『水場草』と同じ感じだけ……水じやなさそうだ?』

溢れ出してきたいる薄緑色の液体をよく観察してみる……

「ええっ!?!」

「ふえ?トトリちゃんもミス君も、いきなりどうしたの?」

僕が『アクティブシード』から湧き出しているものに気がつくのとはほぼ同時に、トトリちゃんも同じことに気がついたようで、同じタイミングで声をあげてしまった

「ま、ミスさん。これって……!」

「うん……湧いてきているの、全部『中和剤』みたい。それもかなり高品質の」

いくなれば『中和剤版水場草』といったところだろうか

そんなこんなで、結果的にトトリちゃんは調査しようとしていた『中和剤』を思う存分入手することができたのだった……

2年目：マイルス「トトリちゃんからの相談」

マイルスの家

『中和剤』が湧き出る『アクティブシード』を調合してから十数日が経ったそんなある日の事、少し困ったことになっていた

「『香茶』を淹れたから、よかつたらどうぞ！」

「あっはい、ありがとうございます……」

ソファアの前に置いてあるテーブルに、ちょうどいいくらいの暖かさの『香茶』を置きながら僕が言った言葉に返事を返したのは、そのソファアに座っているトトリちゃんだった。しかし、そのトトリちゃんはといえ、こころなしに元気が無さそうに見えた

僕はソファアとは別の、テーブルそばに置いてあるイスに腰かけ、自分用に用意した『香茶』に口をつけた後ひとつ息をついてトトリちゃんに声をかけた

「それで、今日はどうしたの？……もしかして、あの『アクティブシード』に何か問題でもあった？」

最終的にトトリちゃんにあげるかたちになったあの『中和剤』が湧きだす『アクティブシード』のことを思い出し、そう言った

「だけど、その僕の予想とは裏腹に、トトリちゃんは首を振る

「いえ、そんなことはないです！高品質の『中和剤』を日にちもかからないで用意できるアレには、とつてもお世話になってますから」

「それじゃあ……？」

「あつ……ええつとー……」

何やら言い辛そうにして言葉を詰まらせてしまうトトリちゃん

……そんなにもトトリちゃんを困らせてしまうものが何かあっただろうか？そう思い、僕は頭の中で考えを巡らせてみる

「コロナ？」

真つ先に思いついたので、つい口に出てしまったが……正解だったらしい。なぜなら、僕の眩きを聞いた瞬間トトリちゃんはビクリツ！と跳ね上がったからだ

トトリちゃん自身も僕に気づかれたことがわかったようで、「アハハ……」と困ったように苦笑いを浮かべた

「えっ、本当にコロナなの!？」

「はい……そうなんです」

「また前回みたいに調合の邪魔をされるとか？」

そう聞いてみたけど、どうやらそうではないらしくトトリちゃんは首を振った

「なら、どうしたんだろう……？」と頭をひねって考えてみるが、僕は思いつけずにいた。そんな中、トトリちゃんが「実は……」と話しだす

「先生が「私もこれからはもつとちゃんと先生っぽくするよ……」みたいなことを言つて、私に『錬金術』のレシピをくれたんです」

「うんうん」

僕は話を聞きながら「以外にコロナもちゃんと先生してるだなー」って思い、何が悪かったのかわからず首をかしげたのだけど……トトリちゃんの次の一言で全て理解することができた

「そのレシピの内容が『パイ』の調合法だったんです。それもいろんな種類の……」

「……なるほど」

「納得しちゃうんですか!? ええつと、もしかして『錬金術』だとわたしくらいの段階で『パイ』を教わるのが普通の流れだったとか……？」

大きく頷いた僕の反応を別の意味でとらえてしまったんだろうトトリちゃんが、困惑した様子で問いかけてしまう

「あっ、いや違うよ。ただ「コロナらしいな」って思って頷いただけ、別に『パイ』の調合法を習うのが普通って意味じゃあ……って言つて

も、参考にする人がいないから何とも言えないなあ…」

僕が知っている錬金術士の師弟はアストリッドさんとロロナのみ。その上、僕がロロナと出会った頃にはもうすでに『錬金術』で『パイ』を作っていたから、あれがアストリッドさんに伝授されたものなのか、ロロナが自力でやるようになったのかはわからない

それとは別に、トトリちゃんの気持ちもわからない。『錬金術』のこと教えてもらえる！』って思ったのに『パイ』の作り方を教えられたら、それは何とも言えない気分になるだろう

そんなことを考えていると、トトリちゃんが不思議そうにして首をかしげながら僕に問いかけてきた

「あの…ミスさんは教わっていないんですか？ 『パイ』の作り方」

「うん、教わってないよ。…そもそも僕の『錬金術』自体、見様見真似で始めたものだったし。でも、その後ホムちゃんに基礎から教えてもらったりもしたんだけどね」

「ホムちゃん？」

より一層首をかしげるトトリちゃん

そういえばそうだった。ホムちゃんは今、どこぞに行ったアストリッドさんのお手伝いとして旅について行ってしまっている。だから、トトリちゃんはホムちゃんと会ったことが無いんだ

「ホムちゃんっていうのは、ロロナの手伝いのためにアストリッドさん…ロロナのお師匠さんが作ったホムンクルスの子なんだ」

「ほむんくるす…？なんだか、どこかで聞いたような」

「僕も詳しくは知らないんだけど、ホムンクルスっていうのは『錬金術』で生みだされた人間のような生命体…：…みたいな感じらしいよ。聞いたことがあるのは、もしかしたら『錬金術』のことを調べてる時に関連した文献でも見たんじゃないかな？」

「うーん…よく思い出せません」

「そっか。…でもまあ、ホムンクルスのことは時期が来たらロロナが教えてくれると思うよ」

「はい、わかりました！」と素直に返事をするトトリちゃんは、いつ

もの元気の良さが戻っていた

……結局、コロナが『パイ』の調合法を教えたことに関しては、解
決も何もしていないんだけど良かったのかなあ？

まあ、コロナに対しては「こういう人なんだ」て割り切ってしまう
しかないと思うし、このままでも良いか

職人通り

一通り話してスッキリしたんだろう。トトリちゃんは僕に礼を言
い、アーランドの街へと戻るようだった。なので、僕も街にちよつと
用があったから、せつかくだし僕もついていくことにした

けど、トトリちゃんに変に気を遣つかわせちゃったみたいで……

「すみません、こんなところまで送ってもらって……」

「いいよいいよ。最初に言った通り、僕も用があつてここまで一緒に
来たんだから。気にしないで」

そんなふうに話しながら『職人通り』にあるアトリエを目指して、ふ
たり並んで通りを歩いていく

……と、その途中にある一軒のお店の前でトトリちゃんが「あつ」と
小さめの声をこぼして立ち止まった

「あの、マイスさん。わたし、少しこのお店で買い物をしていこうと思
うんですけど……」

その言葉につられてトトリちゃんの指し示すお店に目をやる。そ
こはアトリエのすぐそばの『ロウとティファの雑貨屋』だった。おそ
らくトトリちゃんは今後の調合に必要な物をここで買って帰り
たいのだろう

さて、僕はどうするかなんだけど……

「うん、僕もティファアナさんに顔を出しておきたいから、一緒に入つて
も良いかな？」

「はい、かまいませんよー!」

トトリちゃんの承諾を得て、一緒に入店することに。

ロウとティファの雑貨屋

トトリちゃんと一緒に入った雑貨屋さんだけど、店内はいつもとは少し違う騒がしさに包まれていた

その騒がしきの発生源は、どうやらレジカウンスターのほうだった

「ううー!!今度の今度こそダメなんですー!」

「あらあらく…どうしたものかしら?」

レジカウンスターのそばにいたのは、フィリーさんとティファナさん。そして、そのうちのフィリーさんのほうが原因のようだった

僕と一緒に入店したトトリちゃんが、この騒ぎに驚いたように当のふたりのほうへと駆け寄り、いち早く声をかけた

「ティファナさん、それにフィリーさん!いったいどうしたんですか!?!」

トトリちゃんに気づいたふたりの視線が、トトリちゃんのほうへと向く

「あらく。トトリちゃん、いらつしやい」

「トトリちゃん?…ふえっ!ま、ミス君!?!」

トトリちゃんへと向いた視線が、流れるように僕のことも捉えて…そして、何故かフィリーさんは目を丸くし飛び上がるように驚いていた

さつきフィリーさんが言っていたことも気になった僕は、フィリーさんに声をかける

「フィリーさん、どうかしたの?もしかして何かあった!?!」

「ななな、なんでもないよ!?!あつ、私お仕事に戻らないとー!」

「えっ、ちよ」

僕が呼び止める前にフィリーさんは「失礼しましたー!」と言い放

ちながら走って店を出て行ってしまった…

「……………」

結局、何もわからずに取り残されてしまった僕とトトリちゃんは、顔を見合わせて首をかしげた

そして、唯一わかつているだろうティファアナさんといえば…

「今回は立ち直るのは早そうね〜」

と、ひとり何かを確信したように頷きながら微笑んでいた。

…そのティファアナさんの様子を見て、僕とトトリちゃんは再び顔を見合わせて首をより一層かしげたのだった……

2年目：マイス 「あの人との思い出・上」

冒険者ギルド

僕には気になることがあった

それは、先日トトリちゃんと一緒に立ち寄った『ロウとティファの雑貨屋』にいたフィリーさんのことだ

「…それで、よくわからないけどフィリーさんは店を飛び出していつちやったんだ。どうしてだと思おう?」

「いや、知らないわよ」

僕の質問に対して、カウンターにいるクーデリアはピシヤリと答えをかえしてきた

「とういかね、あたしじゃなくて本人に聞きなさいよ。ほら、あつちにいるんだし」

そう言つてクーデリアは、隣のカウンター…依頼を扱う受付のほうを指差した。そこにはちょうど女性の冒険者の応対をしているフィリーさんがいる。

「さつき聞いてきたよ。…でも、「なんでもないから」の一点張りで……」

「なら気にしなくていいじゃない」

「まあ、それはそうなんだけど…」

それでも、気になるのは気になるし、心配になってしまうのだ

折れたのは、僕の様子を見ていたクーデリア。ひとつため息をついた後、「しかたないわね」と言わんばかりの視線を僕に向けながら問いかけてきた

「で?その話つて何時いつの事よ?」

「えつと……一昨日おとといだったかな」

「一昨日…ああ、あいつが大ポカした日ね」

「大ポカ？」

僕が聞き返すと、クーデリアは淡々とした様子で「そうよ」と答えてきた

「あんたが気にするようなことじゃないけど。それに、だいたい月一くらいのペースでやっちゃってる事だから、もう恒例行事みたいになってるわよ」

「そうだったの？」

「ええ。それでもって、失敗した後のファイリーはアワアワしてて居ても邪魔なだけだから、失敗の後処理が終わるまでいつも『冒険者ギルド』から追いつてるのよ……で、一昨日はあいつの避難先だったあの雑貨屋に、たまたまミスが来たってことでしょうね」

「なるほど」と、頷きかけたけど「あれ？」と不思議に思うことがあり首を傾げた

「でも、それじゃあなんで逃げるようにお店から出て行っちゃったんだろう？」

「さあ？…おおかた、仕事で失敗したっていうのを あんたに知られなくなかったんじゃないかしら？」

…そうなのだろうか？

しかし、いつも一緒に職場で仕事をしているクーデリアが言うんだから、なんだかんだ言いつつも説得力はある

「でも、そんな気にしなくてもいいと思うんだけどなあ。むしろ、失敗の事を相談してほしいくらいだよ。僕だって『カマ』で品質を上げた作物を刈^かってる時に、勢い余って他の作物も『カマ』で刈っちゃったりもするし…」

「……後半の失敗談はひとまず置いてくけど、あたしもだいたい同意見ね。だってファイリーって、ミスに出会ってからずっと情けない姿ばかり見せてきてたんでしょ？それが1つ2つ増えようが、今更気にするとじゃないと思うわ」

うーん？…さすがにその考え方はどうなんだろう？行き過ぎな

気もするんだけど……

そんなふうにはクーデリアと話していたんだけど……

「ちよつといいかしら？ギルドのカウンターに用があるんだけど」

僕の背後のほうから、そんな声がかけられた

珍しく長話しすぎたのだろう。きつと冒険者さんが用があつて来て、世間話をしているのを見つけて邪魔に思ったんだろう

そう思い、僕はすぐにその場から移動しようと動きだす

移動と同時に、後ろに来た人に一言謝罪をいれる

「あつー……ごめんなさ……あ、あれ？」

振り返った先にいたのは、どこかで見たような気がしなくもない女の子。綺麗な長い黒髪を横で束ねていて、服装は動きやすさもありながら、どこか煌びやかで……

……あれ？

「ミミちゃん？」

「ハア？………っ!？」

僕の言葉に、相手も僕の顔を確認してきて……そして、驚いたような顔になる

反応からして、やっぱりミミちゃんなのだろう。いやあ、驚いた！まだどことなく幼さは残っているものの、僕の知っているミミちゃんより凛として……何というか、知らない間に立派になったなあ……

「……きゃ」

……ん？「き」？ミミちゃんがそんな声を漏らしたような気がしたんだけど……

がいた

「あら？ やつと起きたの？ ついさつき… って感じかしら。気分はどう？」

「どう、って特には… ああ、そうか」

何処かで見たとあるって感じたのは、ここがクーデリアの家だったからか

『貴族』の家とだけあって大きなお屋敷なんだけど、クーデリアと飲みに行った帰りなんかを送っていたりしたことが何度もあるため、屋敷の内装は大体知っているのだ

「あれ？ でも、なんで僕はここに？」

「消去法よ。あのまま『冒険者ギルド』内に寝っ転がせているわけにはいかないし、あんたの家に帰そうにも村の人たちのほとんどが農家でギルドに顔出さないから引き取り手がいないし、だからといって『アトリエ』あたりに持って行っても邪魔しちゃうだけ。…で、手伝い読んでウチの来客者用の部屋に運んだってわけ」

「なるほど…」

「…それに、なんか今のあんたを放っておく気にはなれなくて」

それはどういふことなんだろう？ よくわからないや

僕がそんなことを考えていたのがクーデリアにはわかったのだろう。訝しげに僕のほうを見てきた

「あんた、自分が何で倒れたか憶えてない？」

「え、ええつと」

倒れたのは…、確か『冒険者ギルド』で倒れて…で、なんで僕は

…

あつ、そうだ、ミミちゃんに叫び声をあげながら逃げられて…

「…少し、ステルクさんの気持ちかわかった気が」

「案外冷静なのね」

「考えをそらしておかないと、なんだか涙があふれてきそうで…」

ハア…と気づかないうちに大きなため息が出てしまい、自分でもか

なりショックだったんだというのが今更ながら良くわかった

「知らないうちに嫌われちゃってたのかな…」

「知らないわよ。あんたとあいつのそもそもの関係も知らないのに、嫌われたかどうかなんてわかるわけないじゃない」

僕の呟きに、少しトゲがありながらも律儀に答えてくれるクーデリア。…そういえば、前にクーデリアに聞かれた時は言葉を濁らせてはなさなかったんだっけ

僕とミミちゃんの関係、か…

知り合い、友達…それ以外…？上手く言葉が思いつかない

出会ったきつかけの話をするのが一番伝えやすいのだろうけど、それは内容的にも躊躇ためらわれた

そんな僕をどう思ったのか、クーデリアは「ちよつと待ってて」と部屋を出て行く

ほんの数分後、高そうなワインと二人分のグラスを持って来たクーデリアが客室内のテーブルにそれらを置いてイスに座った。そしてベッドに座っていた僕に向かいのイスを指し示してきた

「ほら、座りなさいよ。ワイン注いであげるから」

「えっ…？」

「喋り難いことも、お酒が入れば少しはマシになるでしょう？日も落ちちゃってるし、ちようどいいんじゃない？」

そう言いながらクーデリアは僕に微笑みかけてくるのだった

「クーデリアなら大丈夫かな…？」という思いが湧いてきて、つい誘いに乗ってしまう

イスに腰をおろし、クーデリアからワインの注がれたグラスを受け取りながら口を開く

「…確かに、ゆっくり飲みながら話すくらいがちようどいいかもね」

「あら、長くなるのかしら？」

「なんていったって、僕がミミちゃんに初めて会ったところの話から始まるからね。……ついぞと言つては何だけど、他の人には話して欲しくない話でもあるんだ」

「ここでひと息つき、グラスを傾けてワインで唇を濡らす」

「あれは、今から7年くらい前のことなんだけど……」

――マイスがアーランドに来てから3年目に入った頃――

アーランドの街そばの街道

その日も僕は『アーランドの街』へと顔を出しに行っていた

というのも、前の年の年末にあった『王国祭』のイベント『武闘大会』で優勝は逃したものの目立ったこともあつて、僕を指名した依頼が『王宮受付』経由でよくくるようになったからだ

なので、前まで街に行くのは一日置きくらいだったのだけど、その頃から毎日になっていた

いつものように、街の玄関口と言える大きな門にいる門番さんに挨拶をして僕は街に入り、そのまま『王宮受付』のあるお城のほうへと目指す……

はずだったのだけど、その日は違うところがあつた

門から街に入つてすぐにある少し開けた広場のような場所。町の外へと行く馬車が積荷を積んだり、最終確認をするために停車できるように広めに設けられたスペース

そこにいたのは、裾のあたりにフリルのついた可愛らしい水色の服を着た5、6歳くらいの女の子で、何かを探すようにあたりをキョロキョロと見渡していた

そのせわしない動きに、その女の子の肩より少し下まで届くツイン

テールはフリフリとよく動いて、その子をより一層幼く見せていた

最初は「迷子かな？」なんて思ったけど、よくよく考えてみると、お店のある中央の広場ならまだしも、こんなところで親とはぐれたりするかなーつと不思議に感じた

しかし、放っておく気にもなれないから、話しかけてどうしたのか聞いてみるべきだろう…そう思って女の子のほうへと僕の足は自然と動いていった

でも、そこで予想外のことが起きた

キヨロキヨロしていた女の子が、僕の顔を捉とらえてピタリツと止まったのだ

女の子の表情が明るくほころんで、一直線に僕のほうへと駆け寄ってきた

そして、その子は僕の数歩手前で立ち止まり、僕の顔を見た

「あの…！ぶとーたいかいいに出てたマイスさんですか」

「うん、僕がマイスだよ！それで、キミは？」

「えっと、ええつと…ミミは ミミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラングつていいいます。シュヴァルツラング家のむすめです」

そう、これが僕とミミちゃんの出会いだった

「あの…」

おかあさまがげんきになるおくすり ください…！」

2年目：マイス・回想「あの人との思い出・中」

「あの……おかあさまがげんきになるおくすり ください……！」
「えっ……？」

いきなりのごとでよく頭が回らず、どういふことなのか理解できなかつた

……とりあえず、順を追つて頭の中で整理していく

まず、ミミちゃんつていふ女の子の用件は、どうやら病気か何かで体調を崩しているお母さんに元気になつてほしいから、薬が欲しいよ
うだ

……けど、なんで街の門で待ち伏せしてまで僕に頼みに来たの
らうか？

そういえば「ぶとーたいかいに出てたマイスさんですか」つて言つてたよね……？

いやまあ、最近認知度が上がったのは『武闘大会』に出たからなんだけど……何か引つかかる気が……

「あのー……？」

ひとり考えに浸つていふと、いつの間にかミミちゃんが、どうかしたのかと不安そうに僕の顔を覗きこんできていた

「僕はお医者さんじゃないから、そういうのは……」
「でも、おくすりのちよーごーもできるつて……」

……いつたい、この子は何処でそんな話を聞いてきたんだろうか？ いやまあ確かに薬の調合はできるんだけど、病気を治すとかそういう話になると別問題になる

「そういうことは、僕じゃなくて専門の人に頼んだほうが……」

僕はそう言つて諭そうとしたんだけど、その途中から女の子の眉間にシワが寄り、眉がへニヤリと歪み、目をウルウルと潤ませだしてしまつた

…そんな悲しそうな顔をされると、放っておけなくなっちゃうよ

「……と、とりあえず、どんな風に元気が無いのかわからないといけな
いかなー？」

シユヴァルツラング家

ミミちゃんに連れられて訪れたシユヴァルツラング家のお屋敷は、『貴族』の家としては申し分ないくらい立派なお屋敷だった。

その屋敷の中をミミちゃんに手を引かれながら、ミミちゃんのお母さんのいる部屋まで案内してもらおう

その途中に出会った数人の屋敷のお手伝いさんは、何故かみんな驚いた顔をしていた

とある一室の扉の前でミミちゃんは立ち止まり、そしてその扉を開けはなった

「おかあさまー！」

「あら、ミミちゃん？おかえりなさい」

その部屋にいたのは、ミミちゃんとよく似た綺麗な黒髪をふんわりと束ねた女性

…ただその女の人は、部屋の一角…上質なベッドの上で上体を起こしている状態。顔も柔らかな笑みを浮かべてはいたけど、お世辞にも顔色が良いとは言えないくらいだった

「ただいまー」

お母さんに元気に返事をしながら、ベッドのほうへと駆け寄るミミちゃん

僕は「お邪魔します」と一言ひとこと言ってから、ミミちゃんの後をついていくようにして歩いていく

すると女性は、自分のそばに来たミミちゃん娘から目を離し、僕のほ

うへと顔を向けてきた。そして、一度ニツコリと微笑んだかと思うと、ミミちゃんのほうへと再び顔を向けた
「ねえ、ミミちゃん。お母さん、少しお水が飲みたくなっちゃったんだけど…」

「うん…ミミ、できるよーまってるね おかあさま！」

元気よく返事をしたミミちゃんは、先程入ってきたばかりの扉から飛び出すようにして出て行ってしまった

「あの、そこにあるのって…」

僕がベッドそばの台に置かれている水の入った容器とグラスを指差すと、女性は「ふふっ」と笑いをこぼした

「少しイタズラしてしまいましたね。…ただ、彼方あなたとお話したかったの…あの、マイルス…くん？でいいのでしょうか？」

「はい、そうです」

まだ自己紹介もしていないのに、何故僕の名前を知っているのか驚きつつも、ミミちゃんが言っていたのと同じように『武闘大会』の一件で既に知っていたのだろう…と、自分の中で結論づけた

「申し訳ありません」

「えっ」

ミミちゃんのお母さんが、僕にむかっていきなり頭を下げてきた
「前に娘が言っていました、「すごいおくすり作れるマイルスってひとに、おかあさまがげんきになれるおくすり作ってもらう！」と。…あの時、私からしつかりと言っていれば、こうして時間を取らせてしまうことには…」

「いえいえ！僕が好きで来ただけですから、そんな気にしないで下さい。でも…」

僕が言葉に詰まると、ミミちゃんのお母さんは「わかっています」と頷いてきた

「自分の身体のごとは、一番わかっているつもりですから…。もう、そう長くないことも」

「…ごめんなさい」

「それこそ、マイスクくんが気にすることではありませんよ？」

そう言いながらミミちゃんのお母さんは優しい微笑みを僕に向けてくれた

「……むしろ、少し感謝しているくらいです」

「……？」

「娘が…ミミがあんなにいい笑顔で帰ってくるのは、本当に久しぶりでした。それに、私が体調を崩して、ふたりで行くと約束していた『王国祭』にミミひとりに行かせてしまった時、そのミミを笑顔にしてくれたのは、彼方の活躍だったそうですから」

「でも…」

何もできない僕は、今からその笑顔を奪ってしまう。そう考えると、気が気でないと、

……実際、帰る時にミミちゃんにポコポコ叩かれ……たくさん泣かせてしまった

その後 僕は、ある人を探した

ある人…アストリッドさんを見つけ、今回の件を相談した

「お人好しなことは知っていたが、「大」がつくほどだとはな」

呆れ気味に言うそのアストリッドさんの顔を、僕はよく憶えている。「キミを元いた世界に帰すのとは別の意味で、そのご婦人を救うのは無理な話だ。怪我や流行り病ならまだしも、これまで長年付き合わざるをえない持病ほどのものとなると……仮に、天才である私が本腰をいれたとしても、何年かかるかわからん。タイムリミットのほうが確実に早いな」

アストリッドさんの言った「タイムリミット」という言葉が、やけ

に重く感じてしまう

「…もう極力、その女の子とも会わないように注意をした方が良いでしょう。どうであれ、優しすぎるキミには、この手の話は辛いだけだ」

アストリッドさんに言われた僕は……それでも数日後に、再びシュヴァルツラング家へと訪れていた

いや、正確には それから何度も、街に行くたびに立ち寄るようになってた

ある日は果物を持って、また別の時は野菜を持ってお邪魔した

そして、時にはミミちゃんやそのお母さんに冒険のお話をしたりもした

ある時はキッチンを借りて、ミミちゃんのお母さんの身体に気遣った料理を振るまったりもした

最初に再び訪れた時は、ミミちゃんのお母さんは驚いていたし、ミミちゃんはかなり不機嫌になっていた

けど、何度も行っているうちに、そんなことも無くなった

そのうち、僕が何かするとなるとミミちゃんもやろうとするようになった

…というのも、ミミちゃんのお母さんが調子が良い時に、食べれるようにと果物を切っていると「ミミがおかあさまのためにするの!」と、頑張ろうとするのだ

ミミちゃんは大好きなお母さんに、自分も何かしてあげたいという想いが強いんだろう

ただ、幼いこともあり やっぱり危なっかしいので、そういう時は僕がつきつきりで教えながらミミちゃんにやってもらうことにした

そうやって、ミミちゃんが頑張って切った果物や作った『おかゆ』を、ミミちゃんのお母さんはうれしそうに食べ、笑顔で「ありがとね、ミミちゃん」と頭を撫でていた。当然、ミミちゃんも笑顔だった

途中、思いつきから実行された『アランヤ村』への旅行などもあつて行けない時もあったが、僕はそうやって何度もシュヴァルツラング家に訪れた

そして、僕がミミちゃんとそのお母さんに初めて会ってから3年もの月日が経とうとしていた頃……僕はある事を実行することとなる

『春の野菜コンテスト』ですか？」

「はい！今度、以前話した僕が村長をしている村で、初めてのお祭りを開催するんです。村の農家が自慢の野菜を持ち寄って競うイベントがメインになりますが、良かったら来てみませんか？」

「お祭り……!?行きたい！ねえお母さま、行こう！」
「でも……」

3年の月日で少し成長したミミちゃんに言い寄られながらも、申し訳なさそうにするミミちゃんのお母さん

「大丈夫ですよ！街から村までの道のりは僕が用意している馬車がありますし、村の中の移動も車椅子を用意してます。…それに、少し恥ずかしいですけど、小さな村の初めてのお祭りですから、人が多くて困ったりすることはありません」

「……それなら、お邪魔させていただこうかしら？ねっ？ミミちゃん」
「うん！」

第一回『春の野菜コンテスト』当日

幸いなことに、ミミちゃんのお母さんも体調が良かったようで、ミミちゃんと一緒に出品されている野菜を見て回ったり、村に出ている様々な露店をめぐる事が出来た

ミミちゃんも、お母さんも、楽しそうにしていた…

そして、その帰り道の馬車

はしやぎ疲れたのか、お母さんの膝枕で寝ているミミちゃん。ミミちゃんのお母さんも、身体の負担を減らすために座席に取り付けておいたクツションが良かったのか、穏やかな顔をしているのが業者席の後ろにある小窓からうかがえた

「マイスくん……いいえ、マイスさん」

不意にミミちゃんのお母さんから、声をかけられた

「どうかしましたか？」

「いえ……お礼を言いたくて」

ひと息ついた後、ミミちゃんのお母さんのお母さんが改めて口を開いた

『武闘大会』のあった『王国祭』：あの最後の王国祭の時、私は体調を崩してミミと一緒に行く約束を破ってしまった…、その話は以前にしましたよね」

「…はい」

「あの時 私は、ひとりで屋敷を出て行くミミに「守れない約束」をしてしまいました。「次の時は一緒に行くから、ね？」と」

ミミちゃんのお母さんは、膝の上にある 寝ているミミちゃんの髪を優しく撫でながら言った

「あの『王国祭』が最後の王国祭になると知っていた訳ではありません。…でも、あの時、私はお医者様に「もう、1年も持つまい」と言われてたんです。なのに、あるはずのない「次」を約束してしまったんです」

僕は振り返り、小窓越しにミミちゃんのお母さんの顔を見る…

「でも、彼方がその「次」を……いえ、それ以外にもミミとの時間を、思い出を、笑顔をくれました。…私は感謝してもしきれません」

ミミちゃんのお母さんの頬には幾筋もの涙の後ができていた

…実際のところ、僕の存在によって、行動によって、ミミちゃんの

お母さんの余命が伸びたという確証は無い

そもそも、これまでずっと色々とやってきたのは、僕の個人的な感情だ

「……てほしかったんです」

「えっ……？」

「ミミちゃんには、沢山の……たーくさんの大好きなお母さんとの楽しい思い出を持っていてほしかったんです。……本当に僕の勝手な気持ちなんですけどね」

本当に勝手な気持ちだった

『親』

原因不明の記憶喪失になってからは、僕には僅かにしか思い出せない存在。

いることも、『変身ベルト』のことを教えてくれたことぐらいは思い出しはした。でも、その顔はハッキリとは思いつけず、どっちが人間で、どっちがモンスターだったのかすら思い出せない。……もちろん、名前なんかも思い出せなかった

そして、『シアレンス』にすら帰れなくなっている今となっては、二度と会うこともできないであろう存在だ

……だから、例え　もう短い時間しか残されていないのだとしても、ミミちゃんには『親』との思い出を……記憶を大切にして欲しかった

出会って間もない女の子に対して　そんな気持ちを押し付けるだなんて、僕ながら本当に……本当に自分勝手だと思う

「……僕のワガママに付き合わせて、本当にすみません」

「ふふっ……どうしてミスさんが謝るんですか？　そんなこと必要ありませんよ？」

そう言いながらも、ミミちゃんのお母さんは「でも……」と言葉を続けた

「できれば、私がいなくなった後も……少しだけでもいいので、ミミの事を気にかけていただけませんか？」

「…はい！初めからそのつもりです。ミミちゃんが「嫌」と言うまでは絶対に」

視線を前に戻しながら、僕は答えた

「だって、大切な友達ですから」

…ミミちゃんのお母さんがミミちゃんに看取られながら最期をむかえたのは、それから3ヶ月後のことだった

2年目：クーデリア「あの人の思い出・下」

フオイエルバツハ家

「…それで、その後はどうなったのよ?」

「そのあとですかー?…?ミミちゃんトーシゆが当主を継ぐちゆためのあれこれを手伝ったり色々と教えたりー…」

あたしの問いかけに、やや呂律が回らなくなってきた口で答えを返すマイルス

マイルスが話しやすくなるために勧め飲ませたワインだったけど、思った以上の効果…というか、マイルスが思った以上に早いスピードで酔ってしまっていた。それだけ、マイルスが精神的に弱っていたのだろうか?

「それから1年くらい経ったところですねー、ミミちゃんがいきなり「もうくるなー!今度シヴアルツラング家の敷地に足を踏み入れたら許さないわよー!」って言って…」

そう言いながら、マイルスがプルプルと震えだした

どうしたのかと思っただけど、俯うつむき気味の、マイルスの顔をよく見てみると、その目からは涙がダバダバと溢れ出てきていた

それを見た瞬間、「あつ、コレはダメね」と察してしまおう

「あははは、きつと…きつと僕は知らないうちにミミちゃんに悪い事しちゃってたんだー!だから嫌きりやわれたんだ、うわーん!!」

「ああ、もうっ!アンタももういい大人なんだから、そんなみつともない泣き方しないの!」

「だってー!」

泣きながらテーブルに突っ伏すマイルスを見て、あたしはついたため息をついてしまおう

…それにしても、泣き上戸になっちゃってるマイルスって、ロロナの泣いてる時に似てるわね…

…そして、ふと気づいた

泣き上戸…いや、それ以前にマイルスが泣いているのを見るのは、何気に今回が初めてなんじゃないかしら？

あたしとコロナ、それにあの騎士とで行った探索の帰り道でマイルスを拾い『アーランドの街』まで連れて帰ったあの時から、もう10年くらいの付き合いにはなるけど、これまで一度も泣いたところを見たことは無かった

もしかしたら、あの時…マイルスがアーランドで生活するようになって1年くらい経ったころのマイルスがすごく元気が無かった時。あの時はマイルスは、あたしの前でも泣いたりはしなかったし、弱音すら吐かずに気丈に振る舞っていた。

…あたしの前ではそうだっただけで、他の人には涙を見せていたのかもしれない。だけど、少なくともあたしは見たことは無かった

家事も、戦闘も、農業も、鍛冶も、薬の調合も、果てには『錬金術』さえできるマイルス

微妙にズレた感覚を持っていたりはしてるけど、あたしがコロナとケンカした時には、アストリッドにいきなり押し付けられても、何かを察してくれたのか、何も言わずに色々と手を貸してくれたりした、本当にお人好しなヤツ

そんな「何でもできるんじゃないか」と思えるマイルスでも、それこそコロナとケンカした時のあたしのように、こうやって嫌われたくないとか考えたり、過去の自分の行動を悔んだり悩んだりするのだ

テーブルに突っ伏したままのマイルスに、あたしは言葉を投げかける「…いつも元気で頑張り屋なのがマイルスの取柄だけど、たまにはこうやって弱音吐いちゃってもいいんじゃない？あんたの周りにはいるのは、そんな頼りない奴だけじゃないでしょ？」

「……………」

マイルスからは、返事は無かった

…というか

「すう…すう…」

いつの間にか、嗚咽が聞こえなくなっていたかと思えば、代わりに僅かだけれど寝息が聞こえてきた

「…たつく、しようがないわね」

あたしは立ち上がってマイスのそばまで行き、テーブルに突っ伏しているマイスを力づくで引っ張り上げ、半ば引きづるようにしてベッドのほうへと運ぶ。…マイスはそんなに大きくないはずだけど、流石にあたしではどうしても力不足気味だ

そして、放りだすようにしてマイスをベッドへと投げ出し、その後、簡単にマイスに布団をかける

「ふう…」

あたしはテーブルのほうへと戻って、再びイスに座る

マイスが大半を飲んでしまい、五分の一ほどまで減ったワインを自分のグラスへと注いで、それを少しずつ喉に通していく

…今回、マイスが話してくれたことで、おおよそだけどマイスとあの高飛車娘の関係は大体わかった

前に高飛車娘が言った「借り」というのは、おそらくは母親のことか、それ関連のことだろう

ただ、結局あの高飛車娘が何でマイスを拒絶するようになったのかはわからないままだ。母親がいなくなっただけから何かあったのだろうか？マイスが何かよからぬことをしてかしたとか？

状況だけから考えるなら、相続される遺産を高飛車娘が幼いことをいい事にチョロマカした…なんてところだろうけど…

「マイスがそんなことするはずないわよね…」

ベッドで小さな寝息をたてているマイスに目を向ける

というのも、性格的にも、金銭的にも、マイスがそんなことをする

はずがなかった

性格のほうはいわずもがな、金銭のほうも問題無い。だってマイルスは『青の農村』が出来た頃にはもうすでにアーランドいち一の大金持ちになっていて、『貴族』の遺産なんかに興味を持つはずもない

…となると、別に何かの出来事があつたの間にあつたのだろうか
「でも、大したことじゃなさそうなのよね…」

そう思う理由は、今日『冒険者ギルド』でマイルスから逃げた高飛車娘の反応を見ていたからだ

大声で叫びはしていたものの、その目には「恐怖」や「敵意」といったものは感じられなかった。そこにあつたのは「驚き」とか「焦り」とか、そういった類たぐいのものだった…と、少なくともあたしはそう感じた…
…もしかして、高飛車娘が着替えているところにマイルスが入ってきたとか？

…いや、ありえそうな…ありえなさそうな…微妙なところだけども…

と、ここで、グラスに注ぎ足そうと傾けた瓶からワインがこぼれ落ちなくなった。空っぽになってしまったみたい

最後にグラスに残ったわずかな量を飲んでしまい、グラスを置く

「…今から部屋に戻るのも手間ね」

イスから立ち上がり、その時の感覚であたしも酔いが回ってきているのを自覚し、この客室から自室までの移動を断念する

そして、この部屋のベッドに身を倒す

…ふと、すぐそばにマイルスの顔が見えたけど…気にしないことにした

「…おやすみ」

…翌朝

酔いが醒めた状態で目覚めたあたしが、目の前にあったマイスの顔を文字通り叩き起こしてしまったのは……その、不可抗力だということにしてほしい

2年目：ちむ！

ロロナのアトリエ

ある日のこと

アトリエに帰りついたトトリことトウトウ・ヘルモルトは、『錬金術』の先生であるロロナにドヤ顔で出迎えられた

「な、なんですかこれ？ いつの間にかこんな…」
「ふっふっふ…大変だったんだよ、見つからないようにこっそり作るの」

トトリが見つめる先にある物は、半透明の箱のようなものが赤い塊に挟まれていて、それに4本の足がついている何かの機械のようなものだった

「そこまでして隠さなくても…それで、何なんですか？これ」

「よくぞ聞いてくれました！これこそはホームンクルス自動精製装置…名づけて『ほむちゃんホイホイ』！」

「あの…その名前だと、まるでホームンクルスを捕まえるみたいなの…」
「まーまー、細かいことは気にしない。とにかく、この装置を使えば、いくらでもほむちゃんを作れるの！」

結局、何なのかわからないままに「どういふことなの…」と困り顔になってしまったトトリだったが、ふと、これまでの会話の中で知っている言葉があることに気がついた。

「ホームンクルス自動精製装置…ホームンクルスっていうのは『錬金術』で生みだされた人間みたいな生命体…でしたっけ？」

「そーだよー！」

「それで…ほむちゃんって確か、昔、先生のお手伝いをしていたっていう人（？）…でしたよね？」

「そうそう！…って、あれ？トトリちゃんにほむちゃんのこと、話した

ことあったっけ？」

途中までは嬉しそうに笑いながら頷いていたロロナだったが、自分はまだホムちゃんのことを話した覚えがなかったため、不思議に思い首をかしげた

「あつ、いえ。この前、マイスさんから聞いたんです。なんでも、マイスさんはそのホムちゃんから『錬金術』を教わったそうで……それで、今はアーランドにはいないってことも」

「そうなんだあ…、トトリちゃんにも紹介したいんだけど、師匠がどこかに勝手に連れて行っちゃって全然会えないの……」

残念そうに大きいため息をつくロロナ。窓の外へと向けられたその目には、どこか遠くまで旅をしているのであろうホムちゃんを映し出していた…

|| || || || || || || || || ||

そのころ、ホムちゃんは……

「前回、おにいちゃんが用意してくれた「おみやげ」ですが、グランドマスターは口と目を大きく開いて驚いていました」

「まあ、そうだろうね…。種を植えた場所から翌朝ゴーレムが出来ていたら、誰だつて驚くよ」

「はい。グランドマスターのあそこまでの驚き様は、これまでには無かったものです。……ただ、アレのせいで今回要求されている「おみやげ」のハードルが上がってしまっています」

……普通に『青の農村』のマイスの家に来ていた

|| || || || || || || || || ||

場所は戻って、ロロナのアトリエ

「あつ、ええつと、話を戻すけどね……この『ほむちゃんホイホイ』のここをパカツつて開けて、その中に特別な材料を入れてーつと。あと

は少しの間待つだけ！」
「少し、待つだけ…？」

半透明の箱の下の赤い部分に開いてある取り込み口に、ロロナが何か材料らしき物を入れてから、1分も経たずに、『ほむちゃんホイホイ』がカタカタと音を立てて揺れ出した

「あつ、もうすぐだよ。ちゃんとできるかなー？わくわく」
期待のままざしを向けるロロナ。

……だが、『ほむちゃんホイホイ』は音を立てて揺れ続けるばかりで、それ以上の変化が見られなかった

「…何も、出てこないですね」

「あ、あれ？そんなはずは…あれれれ？」

トトリの言葉に焦りを感じ出したロロナは、『ほむちゃんホイホイ』の周りをウロチョロ動き、どこかに異常があったりしないか確認する……けれど、以上らしき異常は無く、焦りだけが積もる

「おかしいな。なんで…もう！動いて、お願い！」

「あの、あんまり叩いたりしない方が…」

もう、にっちもさっちもいなくなつたロロナはポコポコと『ほむちゃんホイホイ』を叩きだし、その行動にはさすがのトトリちゃんもロロナを止めようとした

「だって、せつかく作つたのに。お願いだから動いてー！」

「わ、動き出した！」

「やった！よーし、今度こそ」

ロロナの願いが届いたのか、それともただの偶然か。『ほむちゃんホイホイ』はいっそう活発に動き出す！

そして、ついに4本の足の間から「ポコンッ！」と軽快な音を立てて、中から何かが出てきた

「…ほむー？」

「や、や…やったー！大成功ー！」

「うわあ！か、かわいい…！な、なんなんですか？この子？」

「えへへ、かわいいでしょ。この子がほむちゃんだよ」

「ほむちゃん」と呼ばれた3頭身ほどのそれは、トコトコと『ほむちゃんホイホイ』の下から歩いて出てきて、眠そうにも見える大きな目でトトリとロロナのことを見た

髪型はパツツン前髪にツインテール、服装は袖だけが異様に長いメイド服のようなものだった。どうやら女の子のようだ

「あ、ちよつと待って。ちつちやいほむちゃんだから、ちつちやむ、ちほむ…」

ホムちゃんを参考にしたとはいえ、大きさ等、色々と異なっている新生ホムちゃんに対し、ロロナは新たな名前をあげようと必死になって頭を悩ませる

「…ちむちゃん！この子はちむちゃんだよ！」

「ちむー！」

「鳴き声まで変わった!? あ、えつとその…初めまして…」

「ちむー！」

ロロナ、そしてトトリの呼びかけに対して元気に応える新生ホムちゃん…もといちむちゃん

…そんな小さくてカワイイちむちゃんにトトリが心奪われるのは、ある意味当然のことだったのかもしれない

「お返事した！ああ、かわいい…先生、触ってもいいですか？ あわよくば、ぎゅーって抱きしめても！」

「うん、大丈夫だよ。だってこの子は、トトリちゃんのお手伝いをするために…」

そう言いながら、ちむちゃんについて説明をしようとしたロロナだったが、ある事が気になってしまう

ガタン　ゴトンツ　ガタンガタン

「あれ？まだ動いてる…なんで？」

ちむちゃんを生み出して、停止するはずの『ほむちゃんホイホイ』がいまだに音を立てて揺れ続けているのである

「あのね、わたしはトトリっていうの。トトリ。わかる？」

「ち・ち・む？」

「うわあ、どうしよう…かわいいすぎる…」

「あ、トトリちゃんばっかりちむちゃんと遊んでるいい！」

異常をよそに、ちむちゃんと戯れなごむトトリ。

そんなトトリにつられて口ロナもちむちゃんと戯れようとするが、ガタンゴトンと鳴り続ける音がそれを良しとしない

「……じゃなくて、あの、あんまりのんびりしてる場合じゃないかも。

ちよ、止まって！止まれー！」

「先生、ちよつと静かにしてください。ちむちゃんとおしゃべりしてるんですから」

「いや、うるさいのはわたしじゃなくて、この装置で…」

そう言ったちよつどその時、よりいっそう『ほむちゃんホイホイ』が暴れ出し、大きな音を立て出した

「わ、わ、わ！もう、ダメかもー！」

「だから静かになって…え？きやああああ!!」

||||||

そのころ、ホムちゃんは……

「……………」

「あれ、ホムちゃん？どうかした？」

「いえ、何か爆発音のようなものが聞こえたような気がして…」

「爆発音？『青の農村』には爆発が起こるところなんてないはずだけど

…？『アーランドの街』なら、よくあることなだけだね」

「確かに、マスターのお手伝いをしていた頃は日常茶飯事で聞こえてきました。…少し懐かしいです」

…ミスと思い出話に花を咲かせていた

|||||

「あうう…。トトリちゃん、大丈夫…?」

「はい。なんとか…。はっ！ちむちゃん？ちむちゃんは?!」

『ほむちゃんホイホイ』による謎の爆発のせいか、白い煙に包まれたアトリエ内。その中で、二人の錬金術士の声が飛び交う

「ちむ…!」

「よかったー。無事だった…!」

「ちむー!」

「ちむ!」

「ちむ?」

「え?なんか、声がいつぱい…!」

煙が晴れてきて、トトリとロロナの目に入った光景は……

「きやあ!きやああ!ちむちゃんが、ちむちゃんがいつぱい!!」

トトリがその声をあげるのも当然だった。アトリエの床が見えなくなるほど大量にいるちむちゃん。しかも、皆ワラワラと動き回るため、実際の人数よりも多くみえることだろう

「ただ、大変!早くなんとかしないと!トトリちゃん、手伝って!」

「ちむー!」

「ちむ?」

「ちむ!」

アトリエ内、見渡す限りちむちゃん、ちむちゃん、ちむちゃん。

…そんな中にいれば、ひとりだけでもデレデレだったトトリは……

「幸せ…。もう、このまま死んでもいいかも…!」

「わー！ちむちゃんに埋もれてるー!?だめー！しっかりしてー！」

|||||

そのころ、ほむちゃんは…

「そういうば、ひとつご報告があります」

「報告？いったい何の？」

「ホムに弟が出来ました」

「弟!?…つていうと、アストリッドさんが新しくもう一人ホムンクルスを作ったってこと？」

「はい。…どうにも、ホムがこうして材料集めに出ている間、身の回りを世話する人がいなくて困ったらしく…」

「ああ、なるほどね…それで、その子の名前は？」

「ホムです」

「えっ」

「…：グラウンドマスターは考えるのが面倒だったのでは？」

…相変わらず、マイスとノンビリ話してした

|||||

「ふう…何とか片付いた…」

「あうう…。一人だけになっちゃた、ちむちゃん…」

「ちむー…」

片付けられた(意味深)ことよって、最初に出てきた一人だけになつたちむちゃん

ちむちゃんが減つたことを残念そうにするトトリ。そして、なんだか悲しそうに涙目になっているちむちゃん。…まあ、自分の仲間たち(？)が全員消されてしまったのだから、気を落しもあるだろう

「そんな落ち込まないで。専用の材料があれば、また増やせるから。とにかく、使い方を説明しておくね」

そんな二人を慰めながら説明を始めるロロナ

…その説明は、端的に言うなら「ちむちゃんを作るには、『ほむちゃんホイホイ』に『生命の水』を入れたらいいよ！あと、ゴハンの『パイ』を用意してあげれば、ちむちゃんが素材集めやアイテムの調合をお願いできるよ！」…とのことである

「…と、まあこんな感じかな。大体わかった？」

「えつと…。ちむちゃん作るには特別な材料が必要で、パイをあげて働いてもらう…」

「うん…ちむちゃんはパイが好物だもん」

ロロナのことを昔から知っている人ならば「あつ、作り手の影響がソコに出るのね…」と、半分呆れながら納得するだろう

「でねでね！パイが必要な時はわたしに言ってくれば、いくらでも…」

「丁度良かったです。おねえちゃんもパイ焼くの得意だし、必要になつたらいくらでも作ってもらえますから」

『錬金術』の先生であるはずのロロナの言葉もスルーしながら、安心したように言うトトリ

「へ…え？トトリちゃんのお姉さんも？」

「はい！美味しいんですよ、おねえちゃんのパイ。今度 先生が来た時、作ってもらいますね」

「あつ、でもねでもね！パイだったら私も結構…」

「ちむー！」

「うん、大丈夫。ちむちゃんの分も作ってもらうから」

めげずに『パイ』作りが得意なことを主張しようとするロロナだったが、今度はちむちゃんの「私もいるぞー！」と言わんとする主張の前にかき消されてしまう

…そして、トトリの耳にはロロナの声が聞こえていたのか否か、どちらかはわからないが、とりあえずまたもやスルーされた

「先生、今日はもうお仕事終わりにして、ちむちゃんと遊んでくれますね。行こ？」

「ちむー」

挨拶もそこそこに、ちむちゃんを愛いとしそうに抱っこしてアトリエから出ていくトトリ

「ううう…パ、パイ作りだったら絶対負けないんだからー！」

残されたロロナは、ひとりアトリエでそう泣き叫んだ

…一応、もう一度言っておくが、ロロナはトトリの先生である

＝＝＝＝＝＝

そのころ、ホムちゃんは…

「はむ、はむ…。『フレンチトースト』、美味しいです。濃厚でありながら、それでいてくどくなく、絶妙です」

「はははっ、それは良かった！いつもと違う作り方を試してみたから心配だったんだけど、口に合ったなら何よりだよ」

「はむ、はむ…。あつ…。『香茶』のおかわりください」

「はいはい。ちよつと待ってねー」

おやつ代わりに出された『フレンチトースト』を頬張っていた…。こっちは『パイ』以外も大好きである

＝＝＝＝＝＝

2年目：マイス 「不毛の大地…？」

マイスの家

その日も、日課になっている畑の世話を早朝から始め、朝日が完全に顔を出したころには終わることが出来ていた

それから土などの汚れを落とした後、朝食を取って「今日はこれから何をしようかなー？」なんて考えていた時だった

コンコンコン

「はいー！ちよつと待つててくださいーい」

聞こえてきたノック音に返事をしながらイスから立ち上がり、玄関へとむかう

「はい、お待たせしましたー？たー？」

玄関の扉を開け出迎えたのだけど、そこにいたのはローブのフードを異様に目深まぶかに被っている人だった

「ええつと…、どういったご用件でしょうか？」

「いやいや!?僕だよ、ぼ・く!」

僕の反応が何かいけなかったのだろうか？

その人は少し焦り気味に身を乗り出すようにしながら、フードを少しまくり上げて顔を覗かせてきた…つて、あれ…？

「もしかして、トリスタンさん…!?」

「やっと気づいてくれた…！つと、悪いけどあがらせてもらおうよ!」

落ち着きなくキョロキョロと周りの様子を見まわしていたトリスタンさんは、何かから隠れようとするかのように足早に僕の家へと入ってくる

「…ふうっ、これでとりあえずは一安心だ」

ソファアーに腰かけて大きく息をつくトリスタンさん

…なのだけど、不思議なことにローブを脱がない。いや、それどこ

るかフードすら取ろうとしていない

「あの、ローブはこのコートかけにかけられますよ?」

「あついや、これはその……いいんだ! うん、気にしないでくれ」

そう言いながらトリスタンさんはより一層フードを目深にかぶろうと端を引つ張りだした

……どうしたんだろうか? 大臣の仕事から抜け出している時は、隠れるような仕草をすることは多々あつたけど、今日はその何倍にも身を隠そうとしているような気が……

それに、そもそも仕事から逃げるためならば、前大臣のメリオダスさんと仲良くしている僕のところに来るとは思えない。…事実、これまで来たことがあるのは一度だけで、トリスタンさんはほとんどは街中をウロウロして逃げていたはずだ

「もう一回だけ聞きますけど、ローブ、腕がないんですか?」

「うつ!? ……でも、確かに今回来た理由を話すには、どちらにせよ事情を説明しなきゃならないのか……これはもう腹をくくるしかないか(ぼそぼそ)」

僕の質問に言葉を詰まらせたトリスタンさんは、ひとりでなにかをブツブツと呟いて悩みだした

……そして、トリスタンさんは僕へと向きなおって必死の形相で言った

「恥を承知で頼みたい! キミは、毛が…髪の毛が生える薬を作れないかい!?!」

「髪の毛?」

「そうだ!」

そうやってローブのフードをおろすトリスタンさん。フードの下から見えてきたのは……

『頭』だ。ただし、髪の毛の無い…正確には1センチにも満たない毛

はびっしりとある

…つまりは「丸ボウズ」というわけだ

「こんなのでは、人前に出れなければ、街を歩くことすらままならない！どうかしたいんだ！」

トリスタンさんの必死の訴えに……いや、それ以前にトリスタンさんの頭の様子を見た時から、僕は涙が止まらなくなっていた

そのことに、気づいたんだろう。トリスタンさんが驚いたように僕に言ってきた

「き、キミは僕の為に泣くというのかい！?!受付嬢の人たちが笑った、この僕を……」

「……わかるんです。風が、空気の流れが良く感じられますよね……」

僕が涙ながらに発した言葉に、トリスタンさんがハツとしたように目を見開いた。

「まさか……キミも……!?!」

「ははっ……少し、経験があつて……」

思い出されるのは、あの時

『ジョキジョキと『毛刈りバサミ』で全身（金のモコモコ状態）の『ふわ毛』を刈り取られた……全身がスースーしたあの日の事……』

…僕の場合、モコモコ状態から人間に戻れば少し寒い気がするだけで、ボウズ頭になったりしたことは無いんだけどね……

「まさか同士がいるとは……!」

目を潤ませながら言うトリスタンさんに、僕はどうしても気になることを聞いた

「でも、どうしてそんなことになったんですか？」

「……朝起きたらなってたんだ。ひとが寝ているうちに、あの親父が剃ったんだ！」

「えっ」

トリスタンさんの言う「親父」っていうのは、おそらくはメリオダ

ス前大臣だろう

あのメリオダスさんが、何の理由も無しにそんなことをするとは思えない。何かしらの理由…例えば、何かに凄く怒っていたりとか…
そこまで考えて、僕はふとある考えにたどり着いた

「あつ、トリスタンさん、また大臣の仕事ほっぽりだしたんですね…。それはメリオダスさんも怒りますよ」

「理解が早いね。…というか、さっきまでの涙はどうしたんだい」

「トリスタンさんの自業自得だと気付いたら、なんだか自然と引いちやいました」

「手のひら返しが早いなあ…」

困ったように笑うトリスタンさん。…当然ではあるけど、その顔にはいつもの元気は無い

「こんな風になったせいで、帰って来たコロナにも会えないよ」

「あれ？まだ会ってなかったんですか？」

そう僕が聞くと、トリスタンさんは軽く頷き、ため息をついた

「帰って来たって情報が僕の耳に届くのが少し遅くてね。それから抜け出す予定を立てて、いざ！って時にコレだよ…」

「…そうやって、何度も抜け出すとするからいけないんじゃないですか？」

「でも、いくらなんでも、コレはやり過ぎじゃないかな？」

「それはまあ確かに…」

毛の状態については同情してしまう部分がたくさんある

けれども、経緯のことを考えるとトリスタンさんの自業自得な部分が多くて、擁護ようごがし辛いのも事実だ

「それで、話を戻させてもらうけど…毛が生える薬とか伸びる薬、無いかな？」

「お願いー！」といった感じに言ってくるトリスタンさん。だけど…

「いや、そんなもの無いですよ？……なんで頼む相手が農家の僕なんですか」

「だって……ほら、キミって薬の調合もできるじゃないか。だったらあるんじゃないかなーって思ってるね」

確かに薬の調合はするけど、基本的に自分が使うようなものしか調合しない……というか、レシピなんて知らないからできない

そもそも、もし僕が「毛が生える薬」なんてものを調合できるのなら、今頃、武具屋のおやじさんがフツサフサになっているはずだ

「……本当に無いのかい？」

「無いです。僕が作れるのは、「傷を治す薬」、「毒を消す薬」、「麻痺を治す薬」とかの戦闘向けのもので、「筋力を上げる薬」、「頭が良くなる薬」、「体力がつく薬」とかの増強用のものと……あとは、「作物が良く育つようになる薬」ぐらいですよ。高々その程度です」

「いや、何か途中で普通じゃないのがあった気がするんだけど……？」
「……？そうだろうか？」

「あつ……！」

色々、自分が作れる・作ったことのある薬を思い出していく中で、ある薬を思い出してしまう

……「生える」というか「育つ」ことに関係があると言えばあるんだけど……

「いやあ……でも、アレはなあー……」

「なんだい!?何かあったのかい!？」

必死の形相になって迫ってくるトリスタンさんに、引きながらも、コンテナからある薬を取り出す

『『超栄水』っていう、「作物が良く育つようになる薬」を飲むように改良(?)した薬なんですけど……』

「……髪の毛への効力は？」

「試したことは無いですけど……たぶん無いです」

トリスタンさんは、僕の顔と『超栄水』を何度も見比べ……

「可能性が0^{ゼロ}じゃないなら、なんだって試してやるー!!」

そう言いながら僕の手から『超栄水』を奪い、それを一気に飲み干した。そして……!

その場にぶっ倒れてしまった

……言い忘れたが、『超栄水』は「作物が良く育つようになる薬」を飲めるように改良(?)したと言ったけれど、お世辞にも飲めたものじゃない。本当に死ぬほどマズイ

……飲んだことがある僕が言うのだから間違いない

なお、トリスタンさんは頭を嚴重に隠した上で僕が街へと運び、彼(とメリオダスさん)の家へと送った

……その間、トリスタンさんはうわごとのように

「ぼ、ぼくは……トウ、モロコシ……コーン、一粒、一粒……が、ぼ……く、なんだ……」

……と呟いていた……大丈夫だろうか？

2年目：マイス 「トトリとちむとマイス」

マイスの家

来客。村の人でも、外から来た人でも、僕にとってはよくあることだ

だけど、今日はちよつと変わっていた

見た目が、ではない。…あつ、いや『錬金術士』的にはそう特別変じゃないってだけで、それなりに目立つ格好ではあるけど……

そう、家^{ウチ}に来たのはトトリちゃん。いつも通りのトトリちゃんだ
その腕で抱^だき抱^{かか}えている存在を除けば、ね

「ちつちやい……ホムンクルス？」

見た瞬間にホムちゃんに近い感じがしたから、なんとなくだけけれど
そうだとわかった

ただ、それにしても小さい。頭身は人よりも、金のモコモコ状態の
僕に近く、単純な大きさだけでいえば金のモコモコ以下だろう

そんなちつちやな子が、ソファーに座るトトリちゃんに抱き抱えら
れたまま片手をピシツつと挙げた

「ちむー」
「……ち、ちむ？」

……たぶん、彼女(?)なりの挨拶なんだろう。でも、「ちむ」って
…?

「マイスさん、紹介しますね！わたしのお手伝いをしてくれるちむ
ちゃんです！」

「ちむー」

凄くニコニコした良い笑顔でちつちやいホムンクルス…もとい、ち
むちゃんを紹介してくれたトトリちゃん

その紹介に合わせて、ちむちゃんは再び元気よく返事をした。眠そうに見えるのは目だけで、ずいぶんとやんちゃそうな子だ

「僕はマイス。よろしくね、ちむちゃん」

「ちむむ」

挨拶をしたあと、ちむちゃんの頭を撫でてあげると、ちむちゃんはニコッと笑った

…どうやらこの子は、ホムちゃんとは違って随分と感情が顔に出やすいためだ

「ホムンクルスってことは…もしかして、その子を作ったのって口ロナ?」

「はい。えつとですね、先生が作った『ほむちゃんホイホイ』っていう機会みたいなものに「特別な素材」を入れたら、よくわからないんですけど、それが…こう…ガタガタと動き出して…」

トトリちゃんがその時のことを一生懸命伝えようとしてくれるけど、途中から段々と言葉に詰まりだし、首をかしげだしてしまった。…おそらくは、トトリちゃん自身、その時に何が行われていたのかが理解できていないんだろう

その結果、完全に言葉に詰まってしまったトトリちゃんは…

「こ、今度アトリエに来た時に見ればわかると思います!」

…説明を放り投げた

まあ、仕方ない。それだけホムンクルスを作るとするのは難しいんだろう

それに、気になるなら口ロナ本人から聞けばいい…て、あれ?

「そういえば、口ロナはアトリエで留守番してるの?」

「本当は一緒にここに来るはずだったんですけど…その、クーデリアさんに連れていかれちゃって」

「クーデリアに?」

何かあったんだろうか?猫の手も借りたい…そんな感じで口ロナを?

いや、もしかしたらロロナがクーデリアと何か約束していて、それをうっかり忘れてたとか?……前はよくあったからなあ……

「それが、アトリエに来たクーデリアさんがちむちゃんを見て「でかしたわ、ロロナ!」……って言って、それで今日は一緒に飲もうって先生を連れて行っちゃったんです」

「ちむちゃんを見て?でかした?」

「ちむ?」

いったい何のことなのだろう……?わからずちむちゃんを見てみるけど、ちむちゃん自身も当然わからないようで、僕と一緒に首をかしげた

あれから『香茶』を淹れ、「ちむちゃんは『パイ』が好きなんですよ!」と言うから『アップルパイ』をお茶請けとして出した

「ええつと……それで、今日はちむちゃんを僕に会わせに来たのかな?」

僕がそう聞くと、トトリちゃんは「あっ!」と忘れていた何かを思い出したかのように、驚き口に手をあてた

「実は、マイスさんに頼みたいことがあって……」

「頼みたいこと?」

申し訳なさそうにするトトリちゃん

「あの……また、一緒に調べてくれないか?」

「一緒に、調べ……?」

「ちむ?」

僕とちむちゃんは一緒に首をかしげた

……けど、僕はふとある事を思い出した

前にアトリエに行った際に、トトリちゃんとロロナと一緒に調べて全部『パイ』になったという、あの出来事。その時、僕がトトリちゃんと一緒に調べてみて出来たものは、高品質の『中和剤』が湧

きだす『アクティブシード』だった

……と、いうことは……？

「いいけど……何を調べたいの？」

『フラム』です。最近、強い敵が多くなってきて爆弾の消費が早くて……。それで『中和剤』みたいに増やせたら、そのまま使うのにも、もっと強い爆弾の材料にも出来て便利かなーって」

「なるほど」と僕は頷く

確かに『フラム』は素材を厳選すれば、それ単体でもかなりの威力になる。だけど、爆発範囲や威力の上限を考えると、それよりも強い『メガフラム』と使い分けながら使用していきたい

……となると、『メガフラム』の材料でもある『フラム』のほうを、以前の『中和剤』のように『アクティブシード』で生産できたりしないだろうか、とトトリちゃんは考えたんだろう

「ハゲルさんのところの『量販店』で取り扱ってもらうことも考えたんですけど……出来るまでの日数や金銭的な理由で、少し厳しくて……」
「わかったよ。それじゃあどうなるかは保証できないけど、やってみようか！……それで、そっちのアトリエに今から行けばいいのかな？」

「あつ、いえ。使う素材は用意してきますから、マイスさんの家の錬金釜を貸してもらえれば……」

「それじゃあ、隣の『作業場』に行こうか」

「はいー」

良い返事をしたトトリちゃんは、膝の上に座らせていたちむちゃんをソファアールにおろして、「それじゃあ、準備してきますね」と『作業場』のほうへと続く扉を開いて足早に言ってしまった

『香茶』の淹っていたティーカップや『パイ』を乗せていたお皿を片付けてから、僕も『作業場』のほうへと行こうとしたんだけど……その途中、僕の左足が何者かに捕まれた

驚いて足元に目を向けると……そこにいたのは、腕だけでなく全身

で僕の足にしがみついている　ちむちゃんだった。しかも、何故か涙目である

「どうしたの？」

「ちむ、ちむ。ちむちーむーちむ」

僕の問いかけに対し、足から離れたちむちゃんが身振り手振りを交えながら何かを伝えようとしてきた。

何かを嫌がっているようなんだけど……だけど、具体的に何を言っているのかわからない。……もしかしたら金モコ状態になればわかるかもしれないけど、今　変身するわけにもいかないしなあ……

とりあえず、状況や今ある情報で、ちむちゃんが何を嫌がっているかを推測することにした

今　僕が行こうとしていたのは『作業場』。そこには調合の準備をしているトトリちゃんがいる。……ちむちゃんが僕を止める理由はあるだろうか？

色々と考えているうちに、ちむちゃん……ではなく、ホムちゃんのことを思い出した

昔、コロナのお手伝いをしていたころのホムちゃんは、採取地に素材を探りに行ったり、調合をしたりしていた。……おそらくは、トトリちゃんの手伝いをするというちむちゃんも、こんな小さな体でも同じようなことができるのだろう

……ここで、ふと気づいた

『フラム』って、ちむちゃんに作ってもらったらダメなんだろうか？ いや、もしかしたらトトリちゃんは別のものの調合を頼んでいるのかもしれない

だけど、もしトトリちゃんがちむちゃんに何も頼んでないんだとすれば……意外と辻褃が合うのではないだろうか？

ホムちゃんは、会ってすぐのことが特にそうだったけど、命令を第一とし、それをこなすことだけに存在意義を持っていたふしがあった　ちむちゃんも同じだとすればどうだろう？ 自分の役目であるはず

の量産を『アクティブシード』に盗られてしまうとあれば、気が気でないのかもしれない。そうだとすれば、調査をやめて欲しいと訴えるかもしれない

その考えが正しいかどうか確かめるために、僕はしゃがみ込み ちむちゃんに問いかけた

「もしかして、『フラム』を作るのをちむちゃんがやりたいのかな？」

「ちむーちむー」

勢いよく頷くちむちゃん。どうやら僕の考えは当たっていたようだ

「だけど、そうになると気になることがひとつ…」

「ちむちゃんって、今、トトリちゃんからお仕事 何も頼まれてないの？」

「ちむー…ちちむ、ちむ」

首を振って、何かを撫でるようなアクションをした後、僕の足にしがみついた

「ええっと……」

誰が何を撫でて、何にギュツとしがみつくのか……

「もしかして……トトリちゃんはちむちゃんを撫でたり抱きしめたりするだけ……ってこと？」

「ちむーちむー」

再び大きく頷くちむちゃん

健康的で元気なことからもわかるけど、ちむちゃんはちゃんとゴハンはもらっているみたい。けどどうやら、お仕事はもらえてないようだ。…可愛がられているみたいだけど、それでは ちむちゃんにはかなり悲しい部分があるだろう

「でも、さっきトトリちゃんに「いいよ」って言った矢先に、「やっぱりダメ」なんて言えないしなあ…」

「ちむ!?!」

ガーン!?!といった感じに涙目になるちむちゃん

「いや、でも大丈夫！トトリちゃんに、ちむちゃんにもお仕事させてあげるように言っておけるからね？」

「ちむむ？ちむー！」

「本当？」と聞いてきたような気がしたので頷いてみせると、喜んで僕の胸に飛び込んできた。それは、僕を止めようとした時の抱きつき方とは随分と違っていた

さて、そうと決まればまずは『作業場』に行つて、トトリちゃんと調合してこよう

マイスの家・作業場

「……で、なんですかこれは……」

『アクティブシード』だよ。…初めて見るカタチだけどね」

「ちむ〜」

トトリちゃんとの調合は上手くいき、錬金釜の中には拳大の種が出ていた

ただ、問題があつた

どんなものだろうと、さつそく床に落して『アクティブシード』として落してみただけ……

生えてきたものは、『チャームブルー』……こつちで言うとりりー……ユリとかそのあたりの植物を大きくした感じで、花卉が真っ赤なものだった

……ただし、花は開いてなくてつぼみの状態で、『アクティブシード』特有の生きているような動きをしている

「マイスさん、これって『フラム』が元になってるはずですよね？……でも、前の『中和剤』の時みたいに『フラム』そのものはどこにも……」
「うーん……たぶんだけど、この子が外敵に反応する戦闘タイプだつ

てことだと思う。前の『中和剤』の時は『水場草』に似てたから補助中心の子だったから、てつきりこつちもそうなると思っただけだ……」

考えられるのは、今回調査したのが『フラム』という戦闘用のアイテムだったということだろう。その方向性を取り込まれて完全に戦闘向きな『アクティブシード』になった……と、まあ あくまでも予想だけだね

ただ、例が少ないため断言はできない

「そうですか……。でも、少し残念でしたけど、せつかくですから今度の戦闘の時に使ってみますね！」

そう明るく言うトトリちゃん

何はともあれ、これでちむちゃんに『フラム』を量産するっていう仕事を頼むように、トトリちゃんに言えるわけだ

……でも、あのフラムユリ、暴発しないか少し心配だなあ……

大丈夫だよな？ 使う人は爆発に定評のあるロロナじゃなくてトトリちゃんなわけだし……大丈夫、だよな？

2年目：イクセル「マイスと錬金術士ふたり」

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。毎度おなじみ、アーランドの街にある『サンライズ食堂』を任されているコックだ。

陽も沈み、街中の街灯が路地の石畳を照らす『アーランドの街』。そんな夕闇の街の一角にある『サンライズ食堂』は、煌々と灯りをともして賑わっている

それはさておき、今日はマイスのヤツが来店している。しかも、少しいつもと違った顔ぶれでだ

「かんぱーい！」「ええつと…かんぱい？」

マイスと一緒にあってテーブルについているのは、ロロナとトトリだった

この三人、繋がりがどうかといえば、「十分すぎるほどにある」。だが、こうして三人で『サンライズ食堂』に来ることは初めてだ……いちおう補足しておく、一人一人では結構 顔を出しに来る。それに、ロロナとトトリは、アトリエと店が隣なこともあって食べに来たりする。マイスとロロナは、ロロナが旅に出るまではクーデリアやステルクさんなんかを交えながら飲みに来ていた時期もあった

そんな初めての組み合わせの三人組だが、さっそくトトリが他の二人のペースを掴みずにいる

お酒が注がれたグラスを傾けるマイスとロロナの様子にチラチラと目をやりながら、ジュースの注がれたグラスに口をつけた。おそらくは二人の雰囲気を観察して、自分の立ち位置を考えようとしているんだろう

実際のところ、その判断は間違っていない。というか、自分で立

ち位置を見つけられなくても問題無いとは思う

マイスもコロナも、マイペースで独特の感性を持ち 我が道を行くヤツらだけど、決して周囲が見えないわけでは無い。特に身近な人には気がまわるから、様子を見ているトトリに気づけば 自ら手を引きに出るだろう

問題があるとすれば、マイスとコロナに酒が入る事と、酒の入った二人のことをトトリが知らない事くらいだ

…まあ、コロナは酔っても普段と方向性は同じだし、マイスもコロナと飲みに来る時はいつもストッパー側にまわるから、そんな大変な状況になったりはしないだろう

「えへへー。マイス君とこうやってお酒飲むのも久しぶりだねー」

「そうだね。コロナが旅に出て、それから帰って来てからも中々タイミングがなかったからね」

「えっと…先生とマイスさんって、昔はよく飲みに来てたんですか？」
トトリの問いかけに、マイスが料理に手をのぼしかけていた手を止め、そして少し考えるような仕草をした後、頷いた。

「そこまで頻繁には無かったけど、それなりについて感じかな？他にもステルクさんとかと一緒だったりした時もあったよ」

「マイスさんとステルクさんが…何だか想像がつかないかも」

確かに、トトリの感想には頷けなくはない

俺は昔からマイスとステルクさんが一緒にいるところを見てきたから慣れたが、あの二人が並ぶと、似合わないというかアンバランスなんだ。身長差はもちろんのこと、いつも明るくニコニコしているマイスに対し、ステルクさんは仏頂面。かなり違いがあるように感じられる

だが、実際のところ、以前『サンライズ食堂』に二人で飲みに来ていたように、結構仲は良い。想像だが、一見違うように見える二人は、共に根が真面目なあたり そりが合うのかもしれない

…まあ基本は真面目でも、マイスは身内に甘く ちよつとズレて

いたりするし、ステルクさんは頑固で 不器用だったりする。…やっぱり、微妙に似てないな…。むしろそれが良かったりするんだらうか？

「他の人と飲みに来たつていつたらー…？そうそう！マイルス君が初めてお酒を飲む時、くーちゃんも一緒だったけど、くーちゃんも初めて二人とも大変だったんだよー」

「あの時は僕もクーデリアも飲み方がよくわからなくて…：…すぐに酔いつぶれちゃったね」

「へえー…」

あの時は、最近のマイルスとクーデリアのように愚痴を言いだしたりするわけでもなく、少し時間が経つにつれ顔が赤くなり 段々と寝る姿勢になって、最終的に二人ともイスに座ったまま寝息をたてたんだ

二人ともそう体格が大きいわけでは無いが、完全に寝てしまい力が抜けている体は重くて、運ぼうとしたロロナが潰されていたのを憶えている

「そうだあー！トトリちゃんがお酒を飲めるようになったら、一緒に飲もうねー！ねっー！」

「え、ええっ？」

「うん！それは良い考えだと思うよロロナ。今14歳だから…：6年後だね」

「楽しみだけど、ちよつと待ち遠しいなあー」

「6年後…：6年後、か」

ニコニコ笑っているマイルスとロロナだが、当のトトリは少し複雑そうな顔をしていた

…：その視線と両手がトトリ自身の胸にいていたのは…：まあ、

そう言うことだろう。気にしているんだな…

料理を食べ進めたり、コロナが酒の追加を注文したりしながら、時間が過ぎていった

そんな中で、ふとマイルが何かを思い出したように はたと手を止めた。それを不思議に思ったコロナがマイルの顔を覗きこんだ

「どーしたの、マイル君？」

「いや……ひとつ思ったんだけど、トトリちゃんが14歳ってことはツエツイさんはそろそろ20歳だったりするのかな？」

「うーんと、わたしとおねえちゃんとは5つ違いだから……来年で20歳です」

「そっか。なら、その時には何かうちのお酒でもプレゼントしようかなー？」

「うちのお酒…？マイルさんって野菜とかだけじゃなくてお酒も造ってるんですか？」

「うん。育ててる果物類を材料にしてね」

「そうなんですか!?!…それじゃあ、今日 先生やマイルさんが飲んでいるお酒も…?」

「まさか…!」といった様子で尋ねるトトリ。その問いに先に答えたのはコロナだった

「違うよー？マイル君のお酒、街に出回って無いもん」

「えっ、そうなんですか？」

『青の農村』では果物の生産はそこまで多くないから 加工に回す分が少ないっていうのと、お酒を作ってるのが僕だけで数が少なくて、村のお祭りの時なんかだけでほとんど消費しちゃうんだよね。だから村の外にはまず出ないんだ」

そうなんだ。その酒はこの『サンライズ食堂』にも卸おろされることは

無い。

以前、『青の農村』の祭に参加した際にマイルスに飲ませてもらったが、あれはかなり美味く感じた。個人的には是非とも『サンライズ食堂』に卸してもらいたかったのだが、マイルスのほうにも事情があるそうで、諦めざるを得なかった

アレをプレゼントされるとなると、正直 羨ましい限りだ

トトリは「そんなもの、貰ってもいいのかな…？」と少し不安げだったが、相手はマイルス、別にそんな心配する必要は無い。それに来年のことだから、今色々考えても意味は無いだろう

……ふと思ったんだが、作物等の生産はもちろん 加工品なども作っている『青の農村』は、『アーランド共和国』の最大にして中心である街にほど近いという好立地なこともあつて経済的にかなり安定している

さらには、特産品と呼べるものや、だいたい月一である「祭り」なんかも、人の行き来による村の活性化に役立っているだろう

そう考えると、片手の指で数えられる年数でここまでの村を作り上げたマイルスは、なんだかんだ言つて有能なんじゃないだろうか？

……何事においてもマイルス自身が楽しむために始めているふしがあるが…、結果オーライだろう

結局、その日はトトリがいたこと自体が良いストッパーになつていたのか、マイルスもコロナもそこまで酔っぱらうことは無かった

ただ、当のトトリは店を出るとき「ちよつと食べ過ぎちゃったかも…」と言つていたが…：まあ、普通に歩いてきたからきつと大丈夫だろう。…もしかしたら太る事を気にしていたのかもしれないが…

2年目：メルヴィア「ある日の『バー・ゲラルド』」

バー・ゲラルド

ちよつとした暇潰しに、依頼にあった 村にほど近い採取地に出現するモンスターの討伐をしてきて、報告の為にあたしはゲラルドさんのお店に来た。相変わらずお客さんは少なく、ガランとしている

「いらつしや……なんだメルヴィアか」

マスターのゲラルドさんに、いつものように残念そうに言われて、あたしは肩をすくめるながらゲラルドさんのいるカウンターのほうへと歩み寄っていく

「まるで客じゃないみたいと言わなくてもいいじゃない。それに、ほら。今日は依頼の報告もしに来たんだしさ」

「…なんというか、珍しいな。お前が真面目に依頼をこなしているのは」

「あら？言ってくれるわね。…まあ、否定はできないかもだけど」

実際のところ、ゲラルドさんの言うようにあたしが真面目に依頼をこなすことなんてあんまりない。『冒険者』って仕事自体 あたしの気まぐれで冒険したりしなかったりって感じなのだから仕方ない

あたしがそんなことを考えているうちに、ゲラルドさんは達成した依頼の処理を行ってくれたみたいで、報酬を用意してカウンターの上に出していた

「お疲れ様。これが今回の報酬だ。……それと、すまないが少し頼まれごとをしてくれないか？」

後半は周りに聞かれないようにとボソボソと言ってきたゲラルドさん。……まあ、この後に何の事を言うのかは、あたしにはわかってた。なので、ゲラルドさんが言う前にあたしのほうから小声で返事を返す

「言われなくても……って言いたいところだけど、どうしたものかし

らねー？ツエツイのことは」

あたしがそう言いながらチラリとあたしから見て向かって左方向に目をやる。ゲラルドさんも同じ方向へと目を向けていた

「はあー…」

カウンターの端のレジが置いてある一角。そこにいるのはカウンターに肘をつけ、頬杖をつきながら力無くため息を吐いているツエツイ。原因は聞かなくてもわかる。トトリの事だろう

「前に村に帰ってきたのは何時だったか？」

ゲラルドさんに言われて思い返す

「えーっと、確か春先くらいじゃなかったかしら。それから2カ月半はごつちにいたから、だいたい5カ月くらいは会えてないわね」

「もうそんなに経っていたのか。…そりゃあ ああもなるか」

「とは言っても、いい加減 妹離れできないと苦労すると思うけどなあ…」

トトリには『アーランドの街』に拠点になる場所があるっていうのもあるけど、冒険者が長期間あちこちウロウロして数ヶ月家を空けることなんて、結構ざらだったりする

「トトリの姉離れのほうが早いんじゃないか？」

「あー、それは微妙ね。トトリはやらなきゃならないことや新しい発見とかが毎日色々あるから寂しさとか感じて暇がないだけで、案外ちよつとしたきっかけでツエツイのことが恋しくなっちゃったりすると思うわよ」

「ほお…：独り立ちにはまだ遠いか」

『冒険者』になったとは言っても、トトリもまだまだ14歳のお子様だもの」

「当然よ」とゲラルドさんに言ってから、それじゃあねと軽く手を振りツエツイのいるカウンターほうへと移動する

「ツエ〜ツイ〜？なーに ため息なんてついでなのよ」

「……あれっ、メルヴィ？！いつの間に帰ってきてたの？」

ツエツイは声をかけるまであたしに気がつかなかったようで、少し驚きながらコツチを見てきた

「ひどいわねー。フツーにお店に入ってきて、ゲラルドさんに依頼の報告してただけけど……もしかして、あたし存在感薄かったかしら？」

「まさか。むしろ濃すぎるくらいだと思うけど」

そんなことを言いながら微笑むツエツイ。どうやら、これくらいの軽口をたたける程度の元気は残っているみたい

……と、思ったんだけど、ツエツイの表情がまた暗くなった

「どうしたのよ。そんな顔しちゃって」

「…ねえ、メルヴィ。街ってそんなにいいものなの？」

ツエツイの質問の意図を考えながら、あたしは軽く首を振ってから答える

「別に？それに第一 何かの良し悪しでトトリが向こうで活動してるわけじゃないわよ」

「じゃあ…？」

『冒険者免許』が永久資格じゃないトトリは、冒険者ランクを期間内に一定以上に上げとかなきゃいけないからね。それを考えると、免許の更新ができる街の方がなにかと便利がいいのよ」

あたしが免許を貰った頃は始めから永久資格だったんだけど、ギルドのほうで色々あったみたいで、今では最初は期限付きの免許しか貰えないようになったらしく大変そうだな

「…その「期間内」っていつなの？」

「ええっと…確か免許取得から3年くらい？」

「3年!?それじゃあその間はトトリちゃんは帰ってこれないの!?!」

狼狽しちゃっているツエツイに、あたしは苦笑いをこぼしてしまおうけど、「まあまあ」と落ち着かせて言葉を続ける

「これまでも何回も帰ってきてるでしょ。それに、確か目標に設定

されてるランクは7くらいだから、そこまで行けば期間なんて関係無しに自由よ」

「そんなに簡単なものなの…?」

「んーまあ、トトリなら問題無いんじゃないかしら」

「…なんだか適当ね」

ツエツイは、うつむき気味になり目を瞑って眉間にシワを寄せ 何かを考え込みだした

そして、突然顔を上げたかと思えば、離れた場所で様子を見ていたゲラルドさんのほうを向いた

「そうだわー酒場こでも免許を更新できるようにすればいいのよ! そうしましょう、ゲラルドさん!」

いきなり話を振られたゲラルドさんは驚き、磨いていたグラスを落しそうになっていた。…何とか体勢を立て直したゲラルドさんは大きく息をついてから、ツエツイに言った

「オイオイ、無茶なことを言わないでくれ。アレは色々細かい規定がある重要なものなんだぞ。ウチみたいな 村の小さな一酒場が扱えるものじゃないんだ」

「そんなこと言って、ギルドの依頼は回してもらえてるじゃないですか」

「重要性和難しさが違うんだ。それに、その依頼のほうも受ける人間が少なくて困っているっていうのに……」

「トトリちゃんのためなんですから、いいじゃないですか!」

頬を膨らませて怒り気味のツエツイに睨まれたゲラルドさんは困ったように肩をすくめながら「トトリのためというか、お前がそうしたいだけじゃないのか?」と呟いていた

そんなふたりの様子を眺めながら、あたしは どうしたものかと考えていたんだけど、僅かに聞こえた扉の開閉音に気がついて店の入り口に目を向けてみる

そこにいたのは、ツエツイが待ち望んでいた人だった

当のツエツイはゲラルドさんに色々というのが忙しいらしく、来客に気がついていいる様子は無かった

そんなツエツイがどんな反応をするか楽しみに思いながらも、あたしは言葉をかける

「おかえり、トトリ。調子はどう？」

2年目：トトリ「アトリエでノンビリ」

わたしが『アランヤ村』に帰って来てから、もう一週間くらいになつていた

あの時は色々と凄かったなあ……特におねえちゃんが……。わたしのお仕事を手伝うためについて来た　ちむちゃんに大興奮。「私もその子欲しい！」と言ったかと思えば、「ロロナ先生に頼んで、私の分も作ってもらって！」とまで言っっちゃう始末

ちむちゃんが可愛いのはわかるけど、はしやぎすぎだよ、おねえちゃん……

その後、わたしと一緒に村に来てたミミちゃんや、ゲラルドさんの酒場にいたメルお姉ちゃんを引き連れてのお家での夕食は凄く賑やかになった。おねえちゃんが凄く張り切って料理を作ってたのが印象に残ってる

そのせいで、お父さんの影が薄かった……って、あれ？いつものことだ

トトリのアトリエ

そんなことがありながら、わたしはノンビリしつつも調査をしたりしながら過ごしていた

今日も、自分のアトリエで調査してたんだけど、その途中にミミちゃんがアトリエに来た

わたしは調査途中だったからどうしようかと思っただけで、ミミちゃんは「気にしないで。……この本ちょっと借りるわよ」と言っただけで、机の上にあった本を手にとってソファアのほうへと行って座った。たぶん、ミミちゃんなりに気を遣ってくれたんだと思う

「よし！だいたい出来たかな？後はここをこーして…つと」

調合の最後の仕上げをしている時、ふとある事がわたしの頭に浮かんだ

「ミミちゃん、最近よくアトリエに来るようになったよね」

「何よ。私が出来たら迷惑？」

わたしに声をかけられ、本から目を離してコツチを見てきたミミちゃん。ジツトリとした視線をむけられて、ちよつとビツクリしちゃったけど、わたしはそのまま言葉を続けた

「ううん、そんなこと。全然そんなことないんだけど、ただ……」

「ただ？」

「ミミちゃん、わたし以外に友達とかいないのかなーって」

「ぶっ!!あああんだ、何をいきなり……」

目を見開いて、顔を真っ赤にしたミミちゃん。その声は怒鳴り声に近かったけど、なんだか震えてた

「わっ、ごめん……凶星だった？」

「違うー友達は…確かにいないけど……いないんじゃないかって、いらないの！あんだだって、別に友達じゃないし！」

「え……わたし、友達じゃないの…？」

こうしてアトリエに遊びに来てるし、一緒に冒険したり、一緒にご飯食べたりしてるのに、わたしとミミちゃんって友達じゃないの…？

「うっ…そ、そうよ！あんだが錬金術士だから、仕方なく付き合ってるだけで……でなきや貴族である私が、下賤な田舎者のあんだなんかと！」

「でも……わたし、別に錬金術士としてミミちゃんの役に立ってないよっ…」

「う、それは……立ってる！立ってるわよ！そういうことにしときなさいー！」

でもミミちゃん、わたしとは違って凄く強くて…。わたしが爆弾投

げるよりも早く 武器でビシッ！バシッ！ってモンスターを倒しちゃうから、戦闘じゃああんまり役に立ててないし……

あと、わたしが錬金術で出来ることといったら薬の調合くらいだけど、そつちもあんまり役に立ってないような気が……

「本当？わたし、役に立ってる？」

「…って、今はそういう話をしてたんじゃなくて……。もう！あんたが変なことを言うから！もう帰る！」

「あつ、待って！ミミちゃん！」

本をソファアに置いて、ツカツカと外への扉のほうへと歩いて行つちやうミミちゃん

と、扉のノブに手をかけようとしたミミちゃんの手が空振りした

その理由は、外から来た人が ミミちゃんよりも先に扉を開けてしまったからだだった

「トトリ、いるかー？…って、ああ、お前か」

そこにいたのはジーノくんだった。偶然にも開いた扉の先で ミミちゃんの行く先を阻むように立ってしまってる。だからミミちゃんはジーノくんをジロリと睨んでた……。けど、そのジーノくんはといえば、ミミちゃんに気づいたみたいだけど特に気にした様子は無かった

ジーノくんが何で来たかは知らないけど、これはわたしにとっては良いタイミングだった

わたしは扉のほうへと駆け寄る

「ジーノくん、いいところ！今、ちやうど調合が終わったところなんだけど、おやつに『パイ』食べていかない？」

「おつ、マジで!?食う食う！」

「ほーらっ、ミミちゃんも！」

わたしはミミちゃんの手を掴んで、アトリエの中へ引つ張り戻す

「ちよっ、ちよっ！」

ミミちゃんはわたしに非難するような目を向けてきたけど、それは気にせずにいることにした

「うん！ウメー！」

「ま、まあ及第点じゃないかしら？」

わたしが出した『パイ』を食べて そう言ってくれるふたり。ジーノくんはいつも通りだけど、ミミちゃんはさっきの不機嫌さが感じられないくらいに機嫌を直してくれてた

「そういえばジーノくん、今日は何か用があつて来たの？」

「モグモグ…んぐつ…つんとな、今度いつ冒険に行くのかつてのと、俺も一緒に行くつて話。最近ヒマでさー」

「あれ？ジーノくん、ステルクさんに修行をつけて貰つてるんじゃないか？」

口の中にあつた『パイ』を飲み込んだジーノくんが、ちよつとつまらなさそうに言いだした

「いやさ、トトリが帰つてくる何日か前の修行中に、なんかハトが飛んできて、師匠が「すまん、急用ができた！」とか言つて、荷物をまとめて、どっか行つちやつたんだよ」

「ハト？」

「おう。そいつが来たら師匠慌てだしてさ、何だつたんだろ、あれ？」
首をかしげるジーノくん

「それって、伝書鳩でんしよぼとだつたんじゃない？」

そう言つたのはミミちゃんだった

「伝書鳩？本なんかで読んだことはあるけど…」

「街道が整備されて人の行き来が比較的楽になつた今では廃れ気味なんだけど、昔は使つてる人も多かつた方法よ。今でも緊急の用とかよく移動してる旅人・行商人なんかは結構重宝してるの」

「へえー」

ミミちゃんがしてくれた簡単な説明に、ジーノくんがわかっている

のかどうかわからない反応をした。……ジーンくんのことだから、わかってないんだろうなあ……

「あれ？でもなんで街道が整備されたら伝書鳩が使われなくなるの？」

「村や街の間を安全に移動できるようになったら、行商人とかが定期的な移動をするようになるからよ。そうなったら手紙なんかは荷物として運ばせられるの。当然、伝書鳩のほうのメリットもあるんだけど、ハトの訓練が大変つてことも考えると……つてこと」

「すごい！ミミちゃんって物知りなんだね！」

「と、当然よ！このくらいのことを知ってるのは貴族のたしなみなの！」

「貴族のたしなみ」かあ……。そういえば、初めてミミちゃんと冒険に言った時、ミミちゃんの鉾掘きにわたしが驚いた時もそんなこと言ってたっけ？

もしかして本で見たことがあるような片眼鏡モノクルをかけた家庭教師みたいな教育係とかいたのかな？

2年目：マイス「いろいろな挑戦！」

この前、家にトトリちゃんが来て……

『アランヤ村』に帰って、あつちのほうの採取地を一通り冒険しようかなって思ってるんですけど……マイスさん、付いて来てくれませんか？」

そう聞かれた

トトリちゃんの冒険者の活動を手助けするっていう約束もあるし付いて行きたいのはやまやまだっただけど、ちようど重要な予定があつたから申し訳ないけど断らせてもらった

その「重要な予定」っていうのは、『青の農村』での「お祭り」なんだけど……前にトトリちゃんの冒険に付き合つた時には、お祭りのことは村の人たちに任せていた。けれど、今回のお祭りはそうはいかなかつたから こうして残つたんだ

今回のお祭り、実はちよつとこれまでと違つた試みしつみをすることになつているからだ

……というよりも、今回のお祭り自体初めてだから、手探り状態で慌ただしかつたりする

青の農村

準備期間中、様々な問題がありながらも 無事お祭りは開催するこ
とが出来た

初のお祭りではあるけど、『青の農村』のお祭り」ということで、人は多く訪れてくれていようで、村はいつものお祭りとは遜色ないくらいの賑わいを見せていた

それでも、これまでのお祭りとは違う部分があるんだけどね

大きな違いといえ、このお祭りが何かで競う祭でもなければ、何かを祝う祭りでもないということだろう

じゃあ、一体どういうお祭りなのかというところ……

「はい！農業体験の受付はこちらですー！」

「薬学体験の受付はこっちですよー！興味のある方はぜひー！」

「ちゃんと2列に並んでくださーい。鍛冶体験の受付はここでーすーよー」

「料理体験く。ウチの村で育った野菜を使った料理体験はどくですか〜？」

普段は『青の農村』の『集会場』で、作物の種類ごとの生産量等の情報をまとめたりしている受付嬢の皆が、今日は集会場前の広場でもとは違った受付の仕事をしている

新しい試みのお祭り。それは『体験祭』というその名の通り、何かの物事を体験してもらおうお祭りだ

そもそもの始まりは、毎月行われている 今後のお祭りを何にするか決める会議：『お祭り会議』で「今年の最後のお祭りは何か新しいことをしない？」という話があがった時。その時に僕がポロツと言った一言が原因だった

「村ができる前に僕が皆に農業教えた感じで……何かを教えるお祭りって新しくないかな？」

会議に参加していたメンバーは、その頃からいた人と その頃を知っているコオルだったため、みんなイメージがすぐに湧いたから「面白そうー」とトントントン拍子に話が進んでいった

ただ、計画を建てていくにつれ問題も出てきた

一番の問題は、予想される参加者に対する教える人の人数と、その体験を複数人ができる場所の確保

特に教える人の確保には手間取った。村の人の中には、僕から農業以外を教わっている人もいたけど、それでも教える経験は無い人ばかり

りだったから 助っ人を呼ぶことになったりもした。そしてもう一つ、教える内容をしばって ある程度 簡略化することで、体験する人にも教える人にも優しくすることで なんとか対策した

そして、今、広場でやっているのは 午後からの第2陣の受付。それをやっている間、教える人たちは休憩時間だ

集会場

「お疲れ様ですー！」

僕がそう言って あるひとつのテーブルについている一団へと駆け寄る。そこにいるのは街からの手伝いで来てくれた二人だ

「おうーボウズ…じゃ、失礼だな…村長サンかな？」

「ようっ、マイス。大盛況だなーこりゃ」

豪快に笑いながら応える『男の武具屋』の主人・ハゲルさん。通称おやじさん

片手をあげて応える『サンライズ食堂』のコック・イクセルさん

二人ともそれぞれ「鍛冶体験」と「料理体験」の指導を手伝って貰っている

ついでに言うと、僕は「農業体験」…ではなく、「薬学体験」のほうを一人で担当している

『青の農村』は農村と言うだけあって 以前に僕が農業を教えた人が沢山いるから、農業の教え手には困らないのだ。

料理や鍛冶も、ほんの数人だけなら 僕が教えた人がいるにはいるけど、人数的に厳しいから…ということ、おやじさんとイクセルさんに手を貸してもらっている

…で、薬学だけ、教える人が 村にも街の知り合いにもいなくて、「やるか、やらないか」で迷った末に、「それじゃあ、僕一人でやってみるよ」となったわけだ

「薬学ってのは俺もあんまり知らないけど、俺たちのところほどじゃないが、人が沢山で大変そうだったな」

「あはは、さすがに一人だとしてんやわんやしちやったよ」

「…でもよ、「鍛冶体験」は炉の関係で人数制限があったかっつてもあるが、「料理体験」はものすごかったじゃあねえか。やっぱり、食い物のほうが剣とかよりも人気つーことかあ？」

おやじさんが何か少し残念そうに肩をすくめながら首をかしげた

「おやじさん、たぶんそうじゃなくて「一番身近で、ハードルが低くて参加しやすい」のが料理ってことだと思えますよ？ほら、鍛冶って金槌振るつたりするイメージがあつて「力がいりそうだなー」って思ってしまうとか」

「マイスの言う通りだな。薬学や鍛冶ってのは、薬とか剣を使う『冒険者』ならまだしも、一般の街の人には時々しか世話にならないから、あんまり手軽に手をだせそうにないんじゃないか？残りの農業は…：縁は無いけど、『青の農村』が有名過ぎて一周回って興味が湧くんだろうけどよ」

僕とイクセルさんの話を聞いたおやじさんは「なるほどな」と頷いて、おおよそ納得したみたいだ

そして、おやじさんはその太い腕を組んでニカリと笑った

「…にしても、これまで他人に教えるって機会が無かったから、わかんなかったけどよ、案外面白いもんだよな。うまく伝わんねえこともあるけどよ、それでも教えたヤツが、上手く作れて喜んでのを見るのも、何とも言えないもんがあるぜ」

「それは俺も思った！俺の場合、トトリに教えてたりするんだけど…：あれはただ単にレシピ渡してるだけみたいなものだからな。今日みたいに実際にやっているとこで教えるのは新鮮だったぜ」

「それはよかったです！体験の参加者が楽しむだけ楽しんで、教える人たちは疲れただけで楽しくなかった…：じゃあ、お祭りとしては失敗

ですから！」

「企画者も、イベント参加者も、見ている人も楽しめないとお祭りじゃない」、それが『青の農村』のお祭りの決まりだ。

バアアン!!

大きな音に驚き そちらを見てみたところ、どうやら『集会場』の扉が勢いよく開かれた音のようだ

「いたー！・ミス君、見つけたよー！」

その声の主であり、扉を勢いよく開けた犯人はロロナだった。ロロナはそのまま 僕らのいるテーブルへと駆け寄ってきた

「よう、嬢ちゃんか！相変わらず元気そうじゃねえか」

「元気がいいのはいいけどよ、もう少し静かにできないのか…？」

ふたりに声をかけられて そちらもむくロロナ。でも、その顔は頬がプクーツ！と膨らんでいた

「おやじさんも！イクセくんも！ミス君も！三人ともズルい!!」

ロロナにそう言われて、僕はおやじさんとイクセルさんと顔を見合わせた。ふたりも「何が何だか…」といった様子だったから、僕が代表してロロナに聞くことにした

「ロロナ？いったい何に怒ってるの…？」

「私も…私もこんな沢山の人に『錬金術』教えたいのにい！」

…ある意味、ロロナらしい(?)理由だった

この後、「午後だけでもいいからする！」と駄々をこねるロロナをなだめ、今から錬金釜や材料を集めるのは無理だということを伝えて、諦めてもらった

去り際に……

「次、同じようなお祭りするときには、ちゃんと声かけてね！『錬金術』の体験教室もするから!!」

……と言われて、頷いてしまったんだけど……大丈夫かな？

3年目：マイルス「久しぶりの来訪」

マイルスの家の前・畑

朝の冷え込みの中、僕はクワを振るう。ザクツ、ザクツという、土を耕す音が澄んだ空気に良く響く……：……ような気がする

ここから見える範囲の村の様子は、早朝と言うこともあつてまだ人の姿は少ないけど、寝床から起きてきたモンスター（青の布付き）を含め、ボチボチ多くなっていくだろう

『アーランド』で暮らし始めてから もう何年もたつけど、このあたりは冬になつても『シアレンス』のように頻繁に雪が降つたりしないようで、少しだけ勝手が違ったんだけど それにももう慣れた

『アーランド』の街の周辺はそういった安定した気候だけど、採取地のいくつかは年中暑かつたり、逆に年中寒かつたり……：……といった感じに、環境が変わらないような場所もあった

そっちは『シアレンス』の周辺にも春・夏・秋・冬で変わらない環境を持った場所があつたから、そこまで驚かなかつたけど、『アーランド』では『シアレンス』と違って、そういう変わらない環境に限って畑に向いた土地が無いのが少し残念ではあつた

環境が変わらない場所っていうのは、考え方を変えれば 年中同じ作物を育てられる……：……例えば、寒さの厳しい場所では年中冬の作物が栽培できるわけだ。……それができないのは少し残念ではある……：……その前に、採取地が離れているから行き来が大変かあ

「よしっ……とー今日のところはこんな感じかな？」

色々と考えながらの作業だったけど、流れは身体が覚えきつてい待っているから何の問題も無く種まきや水やりまでこなすことが出来た

「どうかね？最近の出来は」

「はい、上々ですよ。質も量も安定してますし、みんなしつかりと元気に育ってくれています」

僕はそう返事をしながら声のした方へと振り返った

「いらっしやいませ。ジオさん」

「ああ、お邪魔させてもらっているよ」

綺麗に整えられているアゴ髭に触れながら、軽く微笑みかけてくるジオさん

「ふむ……相変わらず素晴らしいものだな、君の畑は。…そして、村のほうは来る度に前よりも活気にあふれているように思えるくらいだ。君の手腕が見て取れるようだ」

「ありがとうございます……でも、村のほうは僕が凄いわけじゃないですよ。村のみんな一人一人が頑張ってくれて……「村の為に」って一丸になってくれているから、今のこの村があるんです。僕なんて、それこそコツチにしか能がありませんから」

そう言いながら、先程まで使っていた『クワ』と『ジョウロ』を手にとってみせる

でも、ジオさんは首を振ってきた

「謙遜しなくていい。それに、君だからこそここに人を集められ永住させるに至る事が出来たというのは、疑いようもない事実だ。誇りたまえ」

「そうですか……？」

うーん……正直なところ、実感は湧かない。そもそも、村の運営については 農業関係のこととお祭りのこと以外はあんまり関わっていないからなあ……

そんなことを思いながらも、このまま立ち話もなんだと思って、ジオさんを家に招き入れた

マイスの家

「こうやって君の淹れたお茶を飲むのも久しいな。……うむ、やはり良いものだ」

用意した『香茶』を口につけ、ひとつ息をつくジオさん

「そうですね。…確か前に来た時は……」

僕はずっと思い返してみても、ジオさんと会った時のことを思い出そうとする……

「…そうだ！一年と少しくらい前に、僕の留守中に来たってコオルに聞いたんだった。……ということは、それよりも前……二年半前くらい……？」

確か、トトリちゃんが『青の農村』に初めて来た後で、ちょうどトトリちゃんに付いて行って『アランヤ村』に言ってたから家を留守にしていたんだった！

ジオさんも僕の言葉に頷いて、思い起こすように目を瞑った

「そういえば、そうだった。立ち寄ったものの君はいなくて、行商の青年から君が出ていることを聞いたんだったな。村ができてからは街か村かしか移動していない印象があったから、あの時は「珍しい」と思ったものだ。最近も出ているのかな？」

「はい。知り合いの冒険者のお手伝いと、それと クーデリアからの『冒険者ギルド』の手伝いで、時々ですけど採取地に出かけてますー。『ほう……あのお嬢さんのお手伝いか……』。彼女は受付嬢をしていたはずだが、それで何故採取地に？」

ジオさんが反応したのは、ジオさんと面識のあるクーデリアのほうだった

「えつとですね、クーデリアが担当している『冒険者免許』…そのランクアップの基準になる冒険者ポイントの項目のポイント配分の見直しの為に、一度ちゃんと採取地で確認をしないといけないから……ということらしくて。それで、僕はその護衛を頼まれたんです」

「なるほど……。少し前に話には聞いていたが、冒険者制度の運営も一

筋縄ではいかないというわけか」

納得したように頷くジオさん。ひと息つくように再び『香茶』に口をつけた

……でも、『冒険者ギルド』って国営だから何かしらあったらあるなら報告とかがいくと思うんだけど……そのあたりの管轄は大臣さん辺りなのかな？

「あつ……そうだ」

「む、どうかしたかな？」

「いえ、さつき言った 僕が手伝っている冒険者についてなんですけど、ジオさんにも縁があるかなって思ってた」

僕の言葉に「ほお？」と興味ありそうにこちらに目を向けてくるジオさん

「もしかしたら他の誰かから聞いたかもしれませんが、その冒険者の子……トトリちゃんって言うんですけど、ロロナの『錬金術』の弟子なんですよ！」

「ロロナくんの弟子……だと……」

ジオさんは驚いたように目を大きく見開いた。……この様子だと初耳だったみたい

「そうか、彼女にも弟子が……なんとも感慨深いものだな……」

「それにしても……ロロナなら、ジオさんに会ったら真っ先に話しそうだと思うんですけど……？ 『アトリエ』にいるロロナには会わなかったんですか？」

「ムムツ!？」

「……？…どうかしました？」

変な声を出したジオさんに問いかけたんだけど、ジオさんは「いやっ、なんでもない……！」と首を振った

「いや なに、前を通りかかったんだが、ちようど出かけていたようだな。私も時間がそうあるわけでは無かったから、会えなかったんだ」

「なるほどー、そんなことがあつたんですね。コロナは、これからはトトリちゃんの手伝い以外ではそんなに長い期間 アトリエを空けな
いらしいんで、今度時間がある時に会いに行つてあげてくださいね
！」

「う、うむ。次の機会にはそうさせてもらおうとしようか」

3年目：トトリ「道中」

とある街道

『アランヤ村』周辺の採取地を全て周っておこう……というわけでわたしたちがやって来たのは、村から南西の方向にある半島。前は半島の手前の採取地までしか行ったことはなかったんだけど、今なら半島の端のほうまで行っても問題無い……と思う

「このあたりの道って、少し荒れてるよね」

いちおう、採取地と採取地の間を結ぶ 正式な道はずなんだけど、結構大きい岩が転がってたりデコボコしてたりと、「良い道」とは言い辛い

「この半島の端には村とか人の集まる場所が無いから 人が通ることが少ないの。いても、私たちのような冒険者くらい。荒れてしまつて当然だわ」

そう言うのはミミちゃん

『アランヤ村』に一緒に来てたから、今回の冒険に付き合ってもらつてる

「俺は好きだぜ？…こういう道。あんまり人が通つてないような道のほうが、未開の地を冒険してるって気がしてくるじゃん！」

そう元気な調子で言うのはジーノくん

わたしが『アランダの街』に行っている間も『アランヤ村』で冒険者としての活動をしたみたい

……あつ。ジーノくんが言ったことに、ミミちゃんが小声で「はあ、発想が子供ね…」て呟いた。でも、そういう子供っぽいところがジーノくんだしなあ

「そういえば……ジーノくん、凄く強くなったよね。前に一緒に冒険

した時よりもずつーと」

前の採取地でのモンスターとの戦闘を思い出して言う

「まあな！一人で冒険したりもしたし、師匠に修行つけて貰ったりもしたからな！」

ニシシと笑うジーノくん

ジーノくんの師匠：ステルクさんはアーランドの元・騎士の強い人で、わたしのアトリエにも時々来てくれて、色々アイテムを頼まれたりする

そんな強い人が師匠にいと、やっぱり強くなるのかなあ…？

わたしも、ロロナ先生がいたら もっと『錬金術』が…って、あれ？もう街の^{あっち}アトリエと一緒にいたりしたし、錬金術のレシピを貰ったりはしたけど… 『錬金術』の腕の上達に何か効果あったかな…？

「でも、師匠がいない時にも頑張らねえとダメなんだ。もっともっと強くならないとな」

「えっ、なんで？ジーノくん、今でも十分強いと思うんだけど…？」

「いいや、まだまだだ。師匠に勝つにはまだ全然足りないんだ！」

「ステルクさんに？ジーノくんが？」

ステルクさんが強いつて言うのは、時々聞いたことがある。あとは、わたしとジーノくんが『冒険者』になるために初めて『アーランドの街』に言った時の道中に、馬車を襲った強そうなモンスターを一瞬で倒して助けてくれた

実際に戦っているところは まだ見たこと無いけど、凄く強いはず そんなステルクさんに ジーノくんなんか敵うとは思えないんだけど……

「つーわけで、まずはマイスを目標にしようと思ってる！」

「へえーマイ斯さんを………マイ斯さんを!?!」

ジーノくんは軽いノリで言ってるけど、どう考えても順番がおかし
なよ!!

「村に来た時にメルお姉ちゃんに勝ったんだよ!?なんで、そのマイルさんがステルクさんの前段階なの!？」

それはまあ、メルお姉ちゃんとステルクさんのどっちが強いのかとか、わからないことは多いけど、それでもそんな気楽に挑む相手じゃないと思う。

「でもさ、あの時のメル姉 完全に油断してたじゃん。それにマイルはネギだったし」

「うん……ネギだったけど……」

「だけど、そのネギ、斧を弾き飛ばすんだけど……絶対 普通のネギじゃないよ……」

「それに、一緒に冒険した時の感じからして マイルは師匠ほどは強くは無いかなーって!だから、師匠の一步前の目標にするんだ!」

「ふんっ」

「…なんだよ」

ジーノくんを鼻で笑うような態度をしたのは、話を聞いていたミミちゃんだった

「どうしたの?ミミちゃん?」

「別に。ただ、何も知らないのがおかしかっただけよ」

「知らないって、何のことだよ」

「やれやれ…」といった感じに首を振ったミミちゃん

「あんたの師匠だつていうステルクって人とマイルの実力はほぼ互角よ。それも見抜けないようじゃ、まだまだね」

「あれ?ミミちゃんって、ステルクさんのこと知ってるの?」

「まあ、街じゃあそれなりに有名人だから」

そうそっけなく言うミミちゃん

マイルさんのほうは……わたしが初めて『青の農村』に行く時に、よくわからないけど「行かない!会わない!」って言ってたから、何かしら知ってるってことは知ってたけど……

そんなことを思い返していると、ジーノくんが不思議そうに首をか
しげながら ミミちゃんに言った

「互角って何だよ？あのふたりって戦ったことでもあるのか？」

「あるわよ。王国時代にあった『王国祭』で『武闘大会』っていうのが
あったんだけど、それで戦ったことがあるの。：聞いた話じゃあ、そ
れ以降も何度も戦ってるそうよ」

『王国祭』：そういうえば、前に『青の農村』でのお祭りの時に会った
ステルクさんが、なにかそんなことを言っていたような気もする

わたしは実際には知らないけど、昔はそんなお祭りが街であつてた
んだ：

『武闘大会』っ！なんだそれ、おもしろそうだな！…っで！師匠とマ
イス、どっちが勝ったんだ!？」

「うう!?そ、それは…：どっちだったかしらー？まだ私が小さかつ
た頃の話だから憶えてないわ。：でも、凄い接戦だったのは確かよ」

その答えにジーノくんは「ちえーっ」と、結果を知らなかったのを
残念がりながらも、「その『武闘大会』っていうの、またないかな？俺
も出てみてえ！」とテンションをあげていた

わたしは…ミミちゃんが途中 目が泳いだ気がしたのが少し気にな
ったかな？

そんな事を話しているうちに、次の採取地のすぐ手前に差し掛かっ
た

けど、そこで 遠目にだけど誰かがいるのが見えた

「あつ、あれってもしかして、マイスさん…？それにその近くにいるの
は…：クーデリアさん!？」

街からも『青の農村』からも遠いこんな場所に、マイスさんはとも
かく、なんで受付嬢のクーデリアさんまで!？」

むこうもこつちに気がついたようで、マイスさんが軽く手を振って

来た

けど、なんでかわからないけどマイスさんの動きがピタリと止まって……何故かガクンと肩を落としちやつてた。代わりにクーデリアさんが口を開いた

「奇遇ね、こんなところで会うなんて」

「そうですね！でもなんで、クーデリアさんがこんなところに？モンスターもいて危ないですよ？」

「そのためにマイスを護衛でつけてるのよ。…とは言っても、このあたりの敵なら あたしだけで十分だけど」

そう言うクーデリアさんは、受付で仕事をしている時と変わらない様子で余裕の表情だった。嘘を言っているような気はしないんだけど……信じられないなあ…

「クーデリアさんって、強いんですか？」

「そこそこには、ね。まあ、昔はよくロロナの素材集めに付き合ったりしてたから、嫌でも実戦経験が多くなっただけよ」

あつ、そっか。クーデリアさんってロロナ先生と幼馴染だったから、先生が駆け出し『錬金術士』のときから色々手伝ってたって、前にアトリエに来た時に話してたっけ？それなら、なんだか納得できるかも

…でも、ジーンくんはそうは思えなかったみたいで……

「えっ！ちっちゃいねーちゃんってつえーのか？うっそだー」

「あら？どこに風穴開けて欲しいのかしら？」

いつの間にかクーデリアさんの手に小型の『銃』が握られていて、ジーンくんに突きつけられていた

この事態に、さっきまで肩を落としていたマイスさんが、慌ててクーデリアさんの手を抑えた。そして……

「そ、それじゃあ、三人とも 気をつけて冒険してね！」

「ちよっ、離しなさい!!」

マイスさんが何か小声で言ったかと思うと、何か光り……マイスさ

んとクーデリアさんが消えてしまった

……もしかして、何か『錬金術』のアイテムでも使ったのかな？

「……よくわからないけど、行くっか？」

そう言っつてわたしはジーノくんとミミちゃんに……つてあれ？

「あれ……ミミちゃんは？」

ミミちゃんが見当たらず 周りをキョロキョロしていると、そばにあった木の陰からミミちゃんの顔がヒョッコリ出てきた

「どうしたの？」

「……もう行った？」

「行っつたって、マイスさんとクーデリアさんのこと？……ならもういな
いけど」

わたしがそう言っつてから、ミミちゃんは辺りをよく見渡した後、
木の陰から出てきた

「変なミミちゃん」

「何か言っつたかしら？」

「ううん、何も？」

3年目：トトリ「初使用!…えっ」

ローリンヒル

道中にミスさんとクーデリアさんとぼったり会ったわたしたち。あれから数日は経っているけど、わたしたちはまだ冒険を続けていた。そして、ついに村から南西の方向にある半島の一番端の採取地『ローリンヒル』までたどり着け、珍しくて品質の良い素材を集めることが出来ただけ……

「ねえ、ジーノくん。もう帰ろうよ」

「何言ってるんだ。せつかくだし、アイツも倒しておこうぜ!」

岩陰に隠れているわたしたち。そんな中でジーノくんが陰からひよっこり顔を出して見つめる先には、どこか別の方向を見ている巨大なぷに：「ぷにの化身」って呼ばれるモンスターがいる

高さだけでも大人の身長を超えていて、体積は人の何倍にもなるほどの大きなぷにで、おそらくはこの採取地のボス的な存在なんだろう

「万全の状態なら勝てるかもしれないけど、わたし、もう爆弾とか攻撃用のアイテムが無くなって……ジーノくんも疲れが溜まってるんじゃない?」

「大丈夫、大丈夫。第一、でっかくてもぷにはぷにだろ。何の心配もないって!」

そう言っただけで岩陰から飛び出し、ぷにの化身へと一直線に向かっていくジーノくん

「ああっ!待って!」

わたしは制止をかけたんだけど、わたしの声が入っていないのかのように、ジーノくんはそのままぷにの化身に斬りかかっていった

「ハア……こうなったら、私たちも行くしかないわね」

「で、でも、もうわたし爆弾が無いから、どうしたら……」

ため息交じりに一歩踏み出したミミちゃんに わたしがそう言う
と、ミミちゃんはもう一度大きなため息をついて首を振った

「そんなこと、私に言われても困るわよ。……まあ、攻撃は私とあいつに
任せてサポートにまわったらいいんじゃないかしら。薬はまだ残っ
ているんでしよう?」

「うん。そんなに多くはないけど、一戦分くらいは……」

「なら、頼んだわよ!」

そう言ってミミちゃんも武器の銚を構えてぶにの化身のほうへと
走っていった

その後ろ姿と一緒に見えたのは、ぶにぶにしていながら丈夫さを兼
ね備えた ぶにの化身の身体に上手く刃が通らず、半ばで剣を「ぶ
によん」と跳ね返されているジーンくんだった

「もう、ジーンくんだったら……」

つい、そう口に出してしまいがちながらも、わたしはジーンくんやミミ
ちゃんが何時いつ怪我を負っても回復してあげられるようにと、ポーチの
中にある薬を取り出して用意し始める

「……あれ?」

ポーチを漁っている最中に、わたしの手にビンや薬壺とは違う感触
のモノが触れた

何かと思い、それを取り出してみると……

「あつ、これって……前に『青の農村』のマイスさんの家で、マイスさ
んと一緒に調合して出来た『アクティブシード』：フラムユリとか
言ってたっけ?」

握り拳くらいの大きさの種に目をやりながら、あの時の事を思い出
す

……あの時は何事も無くって、本当にただの植物みたいに静かだった
けど……確かマイスさんは「外敵に反応する戦闘タイプだと思う」:

みたいなことを言ってたよね？

結局あれから使う機会が無くってポーチの底にしまったままだったけど……今使ったら役に立つのかな……？

「よくわからないけど、イチかバチか！ええーい！」

わたしは『アクティブシード』を地面に落す……というよりは、叩きつけるように投げた

すると、種が落ちた地点からツタのようなものが伸びて 光ったかと思うと、そこにはユリの花を大きくしたような『アクティブシード』になった。……ここまでは、マイスさんの家で見えた時と同じだったんだけど……

薄赤い花びらでつくられたツボミ。それがゆつくりとだけど開き出した

開ききった状態は、本当に「大きな赤いユリの花」って感じだった……でも、異様な部分が一か所。それは花の中心部分。普通の植物なら「おしべ」や「めしべ」っていう部分があるはずなんだけど、そこにあつたのは真っ赤な筒状の何か

「……なんだか見たことがあるような気が……」

それが何だったか わたしが思い出すよりも先に、その『アクティブシード』が ジーノくんとミミちゃんが戦っているぷにの化身のほうへと 開いた花の部分に向けて……

ジ ジ ジジ ジッ

まるで導火線が燃えるような小さな音が、わたしの耳に入ってきた
「もも、もも……もしかして!?!」

わたしはある可能性に気がついちゃって、一気に血の気が引いた
そして、ぷにの化身の近くにいるジーノくんとミミちゃんに向かって
て大声で叫んだ

「ふたりとも離れてー!!」

わたしの声に「えっ、なんで？」といった感じに振り返るジーノくと、バックステップでとっさに距離を取るミミちゃん

それとほぼ同時に、花から「ボシユン！」と音を立てて何かが発射された

それは花の中心部分にあった真っ赤な筒状の何か…『フラム』

ぼっかーっーん！

「ぶーんぶーん！？」

爆発音が続いて、ぶにの化身の驚いたような…悲鳴のような鳴き声が聞こえた

でも、爆炎と煙が晴れかけた先にいたのは、まだまだ元気そうなぶにの化身だった。もしかしたらあの『フラム』は、爆風こそ大きいけど威力自体はそこまででもないのかもしれない

「……って！まだ倒せてないんだっ!?早く何と…ない…と…と…と…?」

ジ ジ ジツ ジツ

ジ ツ ジツ ジツ

ジ ジ ジツ ジツ

また聞こえてくる音。それも今度は三つ

恐る恐る『アクティブシード』を見てみると、花の中心部分から三本の赤い筒が……

ボシユン！ ボシユン！ ボシユン！

ほんの少しずれたタイミングで射出される『フラム』。それはまるで吸い込まれるようにぶにの化身へと飛んでいき……爆発した

ぼぼぼっかーっーん！

「ぶーんぶーん！？」

また悲鳴のような鳴き声をあげたぶにの化身。今度はあの大きな

体が爆風で宙に浮いた

……しかも、またあの音が……

ぼぼぼっかーっーん！

「ぶにーっーん!?!」

浮き上がったぶにの化身へと飛んでいき、爆発する『フラム』。やっぱりダメージはそこまででも無いみたいで、ぶにの化身はまだ健在だけどその体は再び浮きあがり……そこにまた新しい『フラム』が……

ぼぼぼっかーっーん！

「ぶにーっーん!?!」

「うわぁ……」

つい、そんな声が漏れてしまう。……けど、仕方ないよね？

だって、この採取地のボスのはずのぶにの化身を。少ないダメージとはいえ一方的に攻撃し続けているんだもん……あつ、また浮き上がった

「……これ、このまま放っておいても倒してくれるんじゃないかな……？」

そう思つて、それまでの時間を採取か何かで潰そうと考^{あた}えて辺りを見回して……わたしはあることに気がついた

そのへんの木に頭をぶつけたのか「いてー!?!」と頭を押さえて転げまわるジーノくん

…タンコブは出来てるかもしれないけど、あれだけ元気ならジーノくんなら大丈夫……だと思ふ

そして、バックステップじゃあ完全には避けきれなかったのか、全体的に少し煤^{すす}けている上に、爆発ではじけ飛んだぶにの化身の肉片(?)が 顔や体のあちこちにベツチヨリ付いちやっているミミちや

ん

ミミちゃんは凄く笑ってた……目以外は

わたしは怒ってるミミちゃんにどうやって謝ろうか、必死になって考えることしかできなくて………爆発音とぷにの化身の悲鳴なんて、どこか遠くのもののようにしか聞こえなかった

3年目：イクセル「マイルスと冒険者ギルド」

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。毎度おなじみ、アーランドの街にある『サンライズ食堂』を任されているコックだ

今日も もう日が沈んでしまい 薄暗くなった街だが、『サンライズ食堂』には そこそそ客が入っていて 昼間ほどじゃないが活気はある

もうこれも、決まり文句になってきたな……

今日もマイルスが客として来てるんだが……あまり良い予感がしない

いや、別に一緒に来ているメンバーがマズいとかそう言うわけじゃない

マイルスと同じテーブルについているのは、クーデリアとフィリー。いわゆる『冒険者ギルド』の受付嬢コンビだ。

…そして、何がマズいかというと、マイルスとクーデリアの様子がよろしくない

マイルスは落ち込んでるし、クーデリアは何か機嫌が悪そうだ。これは間違い無く悪酔い一直線だろう

いや、だが……おかしいな

三人が店に入った時はそんな様子はなく、普段通りだったと思う。注文を受けた時もいたって普通だった

……となると、俺が調理している間に何かあったんだろう……今から料理持って行かないといけねえってのに、すつごくあのテーブルに近寄りたくない。仮に料理を持って行ったとしても、あんまり関わりたくない

けど、今のうちに何とかしておいた方が良いのも事実だ。悪酔いさ

れてしまったら、それはそれで面倒になる。フィリーがあのふたりを止められるとは思えないしなあ……

意を決して料理と飲み物を乗せたトレイを持ってカウンターから出る

そして、歩いてマイルスたちのいるテーブルへ近づいて行つたんだが、その途中、フィリーと目が合った。「目は口程に物を言う」とは良くいった物で、その目からは「た、助けてくださいー！」といった意思がありありと感じられた

フィリーとはあまり直接的な関わりは無いが、マイルスやクーデリアを通じて……そして、あのエステイさんの妹ということで、知らない仲ではない

そんな相手にそんな目で見られたら、ますます放置はできなくなる。まあ、すでに首を突っ込む気でいたから、最後の後押しって程度なんだが……

「おまちどーさん……つと。んで、お前らふたりは、なんでそんな顔してんだ？」

「別にいいじゃない。あんたには関係ないでしょ」

そう言うクーデリアに、俺は肩をすくめながら言い返す

「そうは言われてもな、ウチでそんな辛気臭い顔でメシ食われるとあんまり良い気はしないんだ。それが知り合いとなればなおさらだ」

「そんな気を遣うんなら、あんたの成長した分の身長 わけなさいよ」
そう言われて俺は苦笑いを浮かべてしまう

とりあえず、クーデリアのほうはいつもの身長のことと機嫌が悪くなっていたようだ。おおかた、仕事中に何か身長に関することがあつてそれを思い出し振り返して機嫌を悪くしていたんだろう

クーデリアの この手の悩みつてのは、もはや年がら年中なわけが俺が何か言ったところでどうしようもないからスルーすることにして……問題はマイルスのほう

「……で、マイルスは何落ち込んでるんだ？」

「知り合いに悲鳴をあげられたステルクさんの気持ちになつています……」

いや、なんだよ その例えは……

そう心の中でツツコミを入れながらも、その言葉からマイルスの身に何があつたのかを予想する

……けど、思いつかない。いやだって、そもそもステルクさんが他人に悲鳴上げられるのは その険けわしい表情や鋭い眼光からなわけで、身長も低い部類で童顔なマイルスとは天と地ほども差がある。

そんなマイルスが「悲鳴をあげられる」なんて状況は思いつかなかつた。……もしかして、実はマイルスがわかつていないだけで、俗に言う「黄色い悲鳴」ってやつだったのか……？

何があつたか考えたうえでマイルスに何か言おうとしたんだが、それよりも先にクーデリアが言ってきた

「あー…、マイルスのことはそんなに気にしないでいいわよ。結構前の事なのに、今さらぶり返してるだけだから……まあ、あたしも人のこと言えないかもだけど（ボソリ）」

「お、おう」

色々気にはなつたが他の席の客から呼ばれたから、一言言い残してから俺は移動した

……注文取つて、調理を開始してからマイルスたちの会話のほうへと耳をかたむけた

「ええっ!?マイルス君とミミちゃんって、面識あつたの!？」

そう驚きの声をあげていたのはフィリー

ミミつてのは……いつだったか、前にトトリがウチにメシ食いに来た時に話してくれた冒険の話の時に同じ名前が出てきたような覚えがある。おそらくは冒険者だろうし、トトリ繋がりでマイルスと面識があつてもそうおかしくは無いと思うんだが……

「とは言っても、最近ほとんど会って無くて……主に王国時代とその転換期あたりが一番交流があったかな」

なるほど、アーランドの王国時代からとなると、確かに驚きものだ
あつ、いや……そういえばマイスは昔っから変に顔が広がったりしてたな。というか、マイスがとっつき安い性格っていうこともあつて
だろう

「…で、あの子に最近嫌われてるっていうのよ。バツタリ鉢合わせて
悲鳴上げて逃げられたり、顔を見るなり物陰に隠れられたり……ね」
そうクーデリアが言うと、マイスはガツクリと肩を落としながらため息を吐いた。どうやら事実らしい

だが、どう考えても嫌われてるとは思い難い

詳しい事情まで知らないから断言はできないが、むしろそれって好かれてるんじゃないか……？いやだって、言っちゃ悪いが照れ隠しのように思えるんだが……

当のマイスはグラスをあおったかと思えば、大きなため息とともに弱々しく言った

「ハア……。ミミちゃんに何か悪い事しちやつてたなら謝りたいんだけど……心当たりがないのがなあ……」

「自覚が無いのが一番まずいんじゃないの？」

「で、でも……何かミミちゃんが勘違いしてるだけとかで、マイス君は悪くないかも……」

そう微妙なフオロー(?)を入れるフィリー

だが、その言葉に首を振ったのはクーデリアだった

「そういう考え方じゃダメに決まってるじゃない。マイスは口ロナとは別方向に天然なんだから……。あれよ。ふとしたところで大ポカして、それに気づかないでどーかなっちゃったのよー」

酒が入りだして口調が怪しくなりだしているが、言っていることはわかった

「そんなことないと思うけど……」

そう思ったのはマイルスだけの様で、フィリーは何か納得したように「あー…」と言って苦笑いを浮かべていた。どうやら何かしら覚えがあるらしい

ついでに言うと、俺も「なるほどなー」と頷いている側だったりする

というのも、クーデリアが言った通り、マイルスもコロナと同じく「天然」に部類されると思う。だが、その天然の中でもマイルスとコロナは微妙に違ってくる

例えるならば、コロナは 常にフワフワ浮かんでゆらゆら揺られながら道を進んでいるイメージ。対してマイルスは 他の人と同じく普通に歩いているかと思えばふとした瞬間に明後日の方向に突き抜けていくイメージだ

ふとした時、いきなり突拍子もないことをしでかすのがマイルスなのだ。そのミミってやつもそんな時に巻き込まれたかなんかして、トラウマでも持つてるのか……それともさつき考えたみたいに、やっぱりマイルスに気があるのかじやないだろうか？

結局、今日はマイルスが早々に酔い潰れ、クーデリアとフィリーに肩を貸されるかたちで店を出ていった

その姿を見ると、マイルスが「両手に花」のような構図にも見えなくも無かったが……それよりも「間違ってお酒を飲んじやった弟(兄)を連れて帰る姉と妹」と言ったほうがしっくりくるような気がした。もちろん、クーデリアのほうが妹だ

……あいつら三人とも同い年だったよな？

3年目：トトリ 『ネコと機械と青の農村』

馬車に数日間 揺られてまた訪れた『アーランドの街』

『アランヤ村』と行き来するのは大変だけど、村と街では出来ることが違う。それに、周辺の採取地で採れるものも違うから、両方で活動したほうがいいんだけど……

うーん……。やっぱり移動時間が少し勿体なく感じる。それに、わたしあんまり馬車が得意じゃないんだよなあ

座椅子は堅いから体のあちこちが痛くなるし、ガタガタ揺られ続けると気持ち悪くなる……

でも、だからといって徒歩で移動するのは余計に時間がかかってしまう

途中で通る採取地で『錬金術』の素材を採取できるとは言っても、わざわざそっちを選ぶほどのことじゃない

「もっと速い移動方法でもあったらいいんだけど……」

そこで思い出したのがマイルスさん

このあいだ、『アランヤ村』から見て南西方向にある半島方面の採取地の近くで出会った時、何かを言ったかと思うと マイルスさんは一緒にいたクーデリアさんと何処かへ一瞬で消えてしまった

あれは『錬金術』のアイテムを使ったんじゃないかなーってだからわたしは、実際にマイルスさんに聞いてみることにした

青の農村

マイルスさんに会いに行くため、今日は朝早くから街を出て『青の農村』へとむかった

『青の農村』へたどり着くと、まだ早い時間だというのに村の中では何人も人が行き交^かっているのが遠目にも見えた。いつだったか「農家の朝は早い」って話を聞いたことがあったけど、その話は本当みたい

……と、村の入り口に来た私のそばに、いくつかの影が集まってきた。ウォルフやたるリスといったモンスターたちだ

一瞬、身構えかけちゃったけど、よくよく見るとちゃんと青い布が付けられていたから、『青の農村』^{このむら}の住人(?) だった

「おはよう。お邪魔するね」

わたしがそう言うと、モンスターたちは軽く鳴き声をあげてきた。でもそれは威嚇とかとは全く違った柔らかい感じの鳴き声で……それに、こころなしかモンスターたちが笑っているようにも見えた

「にやうー」

「みゆうー」

「うなー」

そんな鳴き声の中に、少し毛色が違うものがあった。

その発生源を探してみると……

「あっー！」

一体のウォルフの背中の上に、小さな子ネコが3匹乗っかっているのが見えた。あのウォルフは さつきここまで歩いて来たモンスターの一体なはずだから、あの子ネコたちは歩く時の揺れの中でも背中にしがみついていたんだらうか？

「なー……」

あつ、また別のネコの鳴き声が聞こえた！

その声をあげたネコはすぐにわかった。モンスターたちの間をぬうようにして出てきた大人のネコ。そのネコはわたしの足元に来て

スリスリと身体をすり寄せてきた

「ごめんねー？わたし、今から行かなくちゃいけないところがあるの」
そう言うのと、そのネコはもう一度鳴いた後わたしから離れていき、
村の広場のほうへの道を歩き出していった

そして、その後を歩いて行くように子ネコを乗せたウォルフが……
そのまた後ろにモンスターたちがついて行っていた

「……もしかして、あのネコさんがモンスターたちのボスだったり
……つて、そんな まさかね」

そんな考えを頭の中から取り除き、改めてマイスさんの家へとむ
かった

そうして、マイスさんの家のそばまで たどり着いたんだけど……

「あれ？あの人つてもしかして……」

マイスさんの家の前にある マイスさんの畑のそばに、二人の人影
が見えた

一人は当然だけど、わたしが会いに来たマイスさん。そしてもう一
人は……

「おはようございます！マイスさん、マークさん」

「おはよう、トトリちゃん！また街に来てたんだね！」

「やあ、おはよう お嬢さん。お元気そうで何よりだよ」

いつも通りの笑顔で笑いかけてくるマイスさん

そして、いつも通り猫背気味……だけど、いつもよりもなんだか元
気が無いような気がするマークさん

「……？ なんだかマークさん、元気が無いような気がするんですけ
ど……どうかしたんですか？」

「いやね、ちよつとばかり制作意欲が湧いて造った試作機のロボットがあつただけだね。それを今しがた、彼にコテンパンにダメ出しされたところなんだよ」

そう言いながら肩をすくめるマークさん

「ろぼつと…？ いったい何の…？」

「気になるかい?! いやあー、気になるだろう!!」

わたしに顔をズズイッと近寄せたマークさんは、わたしの返答なんて聞かないで喋り出してしまふ

「僕が手掛けた新型の機械! 『農業用ロボ』第一弾! その試作機がコレだ!!」

そう言つてマークさんが 私から見て右方向へ移動すると、さつきまでマークさんの身体でわたしからは見えない位置にあつたソレが姿を現した

『タル』

……正確には、タルの上と下に何か機械部品のようなものが取り付けられてる

「……こんなのが、ろぼつと…？」

「むむつ、そんな残念そうな目で見られては困るなあ。…まあ、試作機だから勘弁してくれないかな?」

マークさんはため息を吐きながら首を振ったけど、次の瞬間には表情がキリツとした感じに切り替わり、語りだした

「上部に取り付けられたノズルからタル内部に蓄えた水を霧状に噴射し、ノズルが回転することにより360度・周囲5メートルの範囲内に水やりを自動でしてくれる! さらに!! キヤタピラによつて移動するから広範囲に対応できる!」

ええつと……

つまり、畑の水やりを全部やってくれるってこと!?! なんだか、凄そうなんだけど……

「でも、なんでそれが駄目だったんですか?」

「あー……うーんとね？サイズの的にウネの間の間隔よりも大きくて、乗り上げたり作物を踏みそうになったり……それに、傾いたら均等に水やりが出来なくて……。後は、作物によつて高さとかが違うから、こみみたいに色んな種類の作物を育てている畑には適していなくてね」

ピシツと伸びていた背筋ごと肩を落とすマークさん。……そして、またキリツとした表情で顔を上げてきた

「でも、問題はわかったんだ。次はもつといいものになるよ！……でも、またこれをラボに持つて帰らないとか。キヤタピラを動かす燃料もバカにならないし、運んでいくしかないかな……」

また肩を落とすマークさんに、マイルスさんが笑いかける

「よかつたら、僕が街まで運びましょうか？こう見えて、力仕事には自信ありますから」

「良いのかい？」

「はい！……あつ、でも最後の一角に水をやってからで！」

そう言つて畑の中へと入っていくマイルスさん

その数秒後……

「てええーい！」

ピシヤツ！！

マイルスさんの持つジョウロから広範囲にまかれる水。それは、広い畑の半分近くを潤うるしていた……

「ま、マークさん……」

「なんだい」

「アレを、越えられますか……？？」

「………科学に不可能は無いよ」

……少し、言葉に間が開いていた……

そして、わたしはと言うと、当初の目的をすっかり忘れていた

3年目：トトリ「……きやあ！」

コロナのアトリエ

先生のアトリエでひと仕事終えて、少し息をついていたころ
アトリエの玄関の戸がノックされる音が聞こえてきた

「はい、どうぞー」

「誰かが、直接依頼に来たのかな？」なんて思いながら、玄関のほう
を見ていると……

「失礼する」

扉が開きアトリエに入ってきたのは、とても鋭い目をして睨んでく
る人だった

「きやあ！」

「うわあ！」

わたしと一緒にいた先生も、わたしとほぼ同じタイミングで悲鳴を
上げた

けど、先生は「…ハッ！」としたかと思うと、安堵の息を吐き出し
た

「な、なんだ……ステルクさんじゃないですか。もう、驚かさなくて
ださいよー」

先生の言葉につられて、アトリエに入ってきた人を改めて見てみる
と……あつ、確かにステルクさんだ。顔が怖いことも含め、真っ黒な
服装もいつものステルクさんだ

「ご、ごめんなさい。ひさしぶりだったから、つい……」

「あれ？トトリちゃん、ステルクさんのこと知ってるの？」

「はい、何度かわたしの…『アランヤ村』のほうのアトリエに来てくれ
てて。色々お話しとかも……」

そこから先生に色々と説明しようとしたんだけど……

ふと、耳にドアノブが動くような音が聞こえてきて、そっちへと目

を向けてみると……

「帰る」

半分くらい もう外に出てしまつちやつてるステルクさんが、そう小さく言つて、そのまま行つてしまひそうになつてた!?

「えっ? あ、ちよ、ステルクさん!？」

「ま、待つてくださいよ! 謝りますから。ステルクさんつてばー!」

「……………」

「もう、いつまで拗^すねてるんですか? 機嫌直してくださいよ」

わたしと先生で ステルクさんをなんとかアトリエに引き止めることができたんだけど、ソファアに座っているステルクさんの顔はいつも以上に……という表現でいいのはわからないけど、すごい仏頂面だ……

先生が言つても、うんともすんとも言わないままのステルクさんをどうにかしないとと思い、わたしは頭を悩ませ……ふと閃く

「あ、あの、えつと……そうだ! ステルクさん、何か御用があつたんじゃないですか?」

「このアトリエの店主が戻つてきたと聞いたので、挨拶に来た」

ため息を吐いたステルクさんは、軽く首を振りながら続けていつてきた

「……まさか、その店主と弟子の二人に悲鳴を上げられるとは思わなかつたがな」

「だから、謝つてるじゃないですかー……」

「謝ればいいというものではないだろう」

先生の反論にもズバッと言り返すステルクさん

うーん……前に「驚かれるのには慣れてる」みたいなこと言つてた

けど、やっぱり悲しかったり怒りたかったりするのかな？

わたし、顔を見て叫ばれたりしたことないからわからないなあ……

「だってステルクさん、前より顔怖くなってるし……」

「なりたくてなったわけじゃない！」

「ひゃあ!?ご、ごめんなさい！」

……コロナ先生にむかっての言葉だったのかもしれないけど、その大きな声に わたしはつい謝ってしまった

「あー！トトリちゃんに怒鳴らないでくださいよ!!おとなげ大人気ないですよ！」

「君に大人気ないなどといわれたくは……はあ、もういい。私が悪かった」

「あつ、いえ、わたしのほうこそ……」

えっと、よくわからないけど ステルクさんも謝ってきたから、わたしも改めて頭を下げる

そんなわたしを撫でながら、コロナ先生はわたしにニツコリ笑いかけてきた

「大丈夫だよ、怖がらなくても。本当はすっごく優しい人だから、ステルクさんは」

「一緒に悲鳴を上げた君が言うな」

その的確なツツコミに、わたしも小さく「ですよね……」と呟いてしまった……

「……それより、ここに帰ってきたということはアストリッドは見つかったのか？」

「それは……手がかりすら見つからないというか……」

「そうか……まあ仕方ない。あいつが本気で逃げていたら、そうそう捕まえられんだろうしな。……もし、捕まえていたら、文句の一つでも言ってみてやりましたかっただがな」

ひとまずステルクさんの機嫌も直ってからのお話は、そんな内容から始まった

ええつと、アストリッドさんって人はコロナ先生の先生……だったはず。『ちむちゃんホイホイ』を使った時なんかにも先生が「師匠がー！」って言ってたし、その前にもミスさんから少しだけ聞いたことはある

「そういうステルクさんは、ジオさん見つけたんですか？」

「聞くな。見つけていたら、こんな顔はしていない」

「ですよー……はあ……」

ジオさんっていうひとは、確かステルクさんが探しているアーランドの元王様の呼び名で、本名は……なんだったっけ？

前に、ステルクさんから色々聞いたときに教えてもらったんだけど、すごく長くて王様っぽい名前だった……ってこと以外はある記憶えられてないかも……

アストリッドさんにしても、ジオさんにしても、わたしは実際には知らないから、なんか全然会話に入れないなあ……

「そうだ！どうせ見つからないんだし、ステルクさんもトトリちゃんのお手伝いしませんか？」

「えっ？先生、急に何を……」

いきなり手を叩いたかと思ったら、先生はそんなことをステルクさんに提案しだした

「どうせとか言うな……彼女の手伝いと言うのは？」

「トトリちゃんはお母さんを探してるんです。もう何年も帰ってこないから、自分から探すって。それで冒険者の資格までとってがんばってるんですよ」

「ほう、そんな目的があったのか」

「えっ、いや、そんなたいしたものじゃ……」

わたしはそう言ったんだけど、ステルクさんは「そう卑下することは無い」って小さく首を振ってくれた

そして、腕を組んだステルクさんは「フム……」と少し考え込むような仕草をした後、頷いた

「なるほどな。人を探しているという点で私達は全員共通していると……。それで君も彼女の手伝いを？」

「はい。師匠はもう諦めたというか、トトリちゃんのお母さんのついででいいやって」

「そうだな。わたしも、一人で行動しているから、警戒されている感があるしな……言葉は悪いが、彼女の手伝いをするのがカモフラージュになるかもしれない」

「そうです！かもフラージュです！」

ステルクさんとは 少し違う発音で言うコロナ先生に、わたしだけじゃなくてステルクさんも軽く首をかしげた

「わかって言っているのか……？まあいい、どうやらそういうことになったようだ。これからよろしく頼む」

「あ、は、はい！こちらこそ！」

なんだか、わからないうちに話が進んじやってる……

けど、別に悪いことじゃない。ステルクさんは強い人だってことはジーン君なんかからも聞いているから、むしろありがたいだと思おう

「よかったね、トトリちゃん！ステルクさん、すつごく強いから頼りになるよ！」

「全く、彼女より君の方が喜んでるじゃないか」

「はい、喜んでます。ステルクさんとお出掛けするの久しぶりですし、すつごく嬉しいです！」

「む、そう素直に返されては……」

ニツコリと笑って言うコロナ先生に対して、ステルクさんは少したじろぐような仕草をみせた。目も若干見開いてる気がするし、こころなしか顔も赤みがかっているような……

こんなステルクさんは初めて見た

「と、とにかく、色々準備もいるからな。今日のところは失礼する。」

用の時は遠慮なく声をかけてくれ」

そう言つてソファアールから立ち上がったステルクさんは、足早にアトリエを出て行ってしまった

それを見ていたロロナ先生は、少し申し訳なさそうに俯うつむき気味になつた

「あつ、行つちやつた。やっぱり忙しいのかなあ…？　もしかして無理に誘つちやつたかも…」

「忙しいというか、照れてたんじやないですか？」

「照れる？　ステルクさんが？　どうして？」

「いえ、なんとなく…。先生とステルクさんつて、よく一緒にお出かけしてたんですか？」

「うん。私が錬金術士になつたばかりのころ、すごくお世話になつたんだよ。懐かしいなあ…」

どこか遠くを見るように窓の外へと目をやる先生

けど、すぐに先生の顔はわたしのほうを向いてきた。その顔はいつも通りの先生らしい笑顔だつた

「これからは三人でお出かけできるね。えへへ、楽しみだなあ」

せつかください、明日くらいにでもステルクさんと先生を誘つて冒険に行こうかなつて思つて、わたしはコンテナの中の素材を確認しはじめ

足りない素材が採れる採取地に目星を付けて、予定を立てて……

そして、ふと さっきの先生とステルクさんの様子を思い出して、考え込んでしまう

「……わたし、おジヤマ虫だつたりしないかな…」

3年目：マイス 「冒険の前に一悶着：!？」

冒険者制度の見直しの一環として、実際に採取地をまわって色々と確認したりしているクーデリア

その仕事の際の護衛として、僕もついていつているわけだけど……もう大半の採取地を調べてまわることが出来ている。おそらくは、あと2回ぐらいの冒険で この大陸の採取地を踏破できるだろう

そして、今日からまた護衛として冒険に付き合う予定になっている 今回の最終目的地は、アーランドの街から見てちょうど北方向にある『黄昏の玉座』。……なんだけど、道の都合や、他にも寄って調査したい採取地があるらしいので、少しだけ東方向へとそれてから『黄昏の玉座』へと行くことになってる

冒険者ギルド

村のことを色々と他の人に頼んで、食料などの用意も終えた僕は、今回は『冒険者ギルド』までクーデリアを迎えに行った

「おまたせ！クーデリア。そっちの準備は出来てるかな？」

僕は、そう冒険者ギルドの受付の外側にいるクーデリアに声をかけた

すると、カウンターの内側……いつもクーデリアがいる位置にいる女性のほうを向いていたクーデリアが振り返ってきた

「ええ、問題無いわ。……それじゃあ、あたしが留守の間 頼んだわよ」

カウンターの内側にいる女性は、クーデリアの言葉に頷いた

それを「よろしい」と見たクーデリアは、続いて向かって左側のカウンターのほうへと目を向ける

「あんたもよ。あたしが居ないからって、仕事サボるんじゃないわよ」

「は、はいい、クーデリア先輩」

少しビクツ!?としながらも、ちゃんと返事をするフィリーさん
そんなフィリーさんに、僕は笑いかける。

「帰ってきた時には、何かお土産みやげを持ってくるよ!」

「本当う……あ、でも……うん、ありがとう……」

……あれ?

最初は喜んだ感じがしたけど、なんだか後半は少し微妙な反応になった気が……。どうしたんだろう?

「あ、あのね、ミス君。私、お土産よりも……ね?」

「……? 何かあるの?」

「モフモフを……モフモフを要求します……!」

「えっ、あ、うん」

「やったー!」

ピョンピョンと跳ねるフィリーさんをカウンター越しに見ながら、僕は何とも言えない気持ちになる。

……うん。いや、確かに昔からフィリーさんはモフモフ……特に金のモコモコ状態の僕をモフモフするのが好きだったけど……。で、フィリーさんって仕事が休みの時はウチに来て、そのたび毎回欠かさずモフモフしていくんだ

なのに、今回、わざわざこうやって宣言して許可を取るってことは……もしかして!いつも以上にモフモフされるってこと!?

そんな状況を想像して……ブルリツと身を震わせてしまう

と、とりあえず、喜んでいるフィリーさんに一言「それじゃあ、行ってくるよ!」と言って、クーデリアと『冒険者ギルド』を後にした

そして、街の外へと出るための門へと向かう途中、クーデリアが……

「モフモフねえ……高いか安いかわからない お土産ね」

「あははは……、精神的には大ダメージかな?」

僕はそう言うことしか出来なかった

そうして、門の近くまでたどりついたんだけど……

「……なんだか騒がしいわね」

「そうだね。少し前、来る時に僕が通った時はそんなことは無かったんだけど……」

「何かあったのかしら？」

少し心配になって、早足気味に門へと向かって行って、途中である事に気がつく。クーデリアのほうにチラリと目を向けてみると、クーデリアもこつちを見てきてたから、きつと同じことを思ったんだと思う

「…ねえ、マイス？あたし、なんだかこの声聞き覚えがあるんだけど」
「やっぱり…？そうなるの間違いないかなあ…」

そう言い合いながらついた、騒ぎの大元

そこには予想していた通りの人たちがいた

「今でも怖がっているじゃないか！この間だつて……」

「あ、あれはいきなりだったからですよ！もう、そんな根に持たなくてもいいじゃないですか！」

「根に持っているのはそっちだろう！昔の金の話などを今更ぐちぐちと……」

「ぐちぐちなんて言ってますせん！ちよつと思ひ出話しただけじゃないですかー！」

「あああつ、ケンカはダメですよ！二人とも…」

何やら言い合いをしているロロナとステルクさん。そのそばでオロオロしながらも、健気に何とか仲裁しようとするトトリちゃん

「どうしようか？」

「放っておいてもいいんじゃないかしら？……でもまあ、とりあえずトトリは放っておけないわね。流石にかわいそうだわ」

そう言うクーデリアは、やっぱりどうにも乗り気ではない感じだけど……まあいいか

とりあえずは提案通り、トトリちゃんのほうへと行こう

「この際だから言わせてもらおうがな、君は普段から……！」

「ステルクさんに言われたくないです！だいたいステルクさんは……！」

そう言い合う二人をスルーしてトトリちゃんのほうへ……

……こんな二人を見て、「偉大な錬金術士」と「国内屈指の実力者」だと思える人がいるかなあ……？

当然と言えば当然だけど、ケンカをしていて周りが目に入っていない二人とは違って、トトリちゃんは近づいてくる僕らにすぐに気づいた。そして目で「助けてくださいー！」と訴えかけてきた

そんなトトリちゃんの手をクーデリアが引いて、二人から離れさせた。二人はそれに気がつく素振りも無い

「大丈夫？トトリちゃん」

「いったいどうしたの……って言っても、大体想像はつくんだけど」

「私が「昔は一緒によく冒険してたんですか？」って聞いて、昔のことを話してくれ出したと思ったら、なんでか先生たち二人でケンカだしちゃって……」

トトリちゃんの言うことを聞いて、「はあ、やっぱり……」とため息をつくクーデリア。僕も「あははは……」と苦笑いをしてしまう

「あの二人、あんな感じになるとかなりの時間あのままだからね……どうしようか？」

僕はそうクーデリアとトトリちゃんに聞く

……というのも、僕は昔…王国時代に、ステルクさんがドラゴンからやられたケガから復帰した後の初めての冒険に付き合った時に

似たような経験があったから、あの二人のケンカは長引くだろうことを知っていた

あの時は……僕が一人で採取地に行つてモンスターを追い払つたりしたんだっけ？

しかも、その間の時間はかなりあつたはずんだけど、僕がまた二人のもとに戻るまでの時間、僕がいなくなったことに全然気づかなかつたんだよね、たしか……。

「……もう、あの二人を置いて、あたしたちの冒険についてくる？」

「えっ、あー……うーん……？」

クーデリアの提案に、トトリは少し悩みだし……

未だに言い争いをしているロロナとステルクさんを改めて見て、「どうしよう……」と本気で悩みだしてしまつた……

3年目：クーデリア「冒険。そして…!？」

　　マイスを護衛につけて、あたしは調査を兼ねた冒険へと出かけようとしていた。その時

　　街のすぐ外で口喧嘩しているロロナと元・騎士を見かけ、そのそばにロロナの『錬金術』の弟子であるトトリがオロオロとしている場面に会った

　　あたしと一緒にいるマイスはこんな光景は放っておけないタイプだろうし、あたしとしても、さすがにトトリがかわいそうに思えたから、とりあえず何とかしてみることに。……あと、ロロナが最近どうなのかも気になったし…

　　口喧嘩を続けている2人をよそに、トトリとあたしたちで色々話した。……あたしが冗談半分で言った「あたしたちの冒険についてくる？」という言葉に、トトリが本気で考え出した時には少し驚いた。……まあ、そもそもトトリが目指している採取地は大陸の東の端のほうで、あたしたちの最終目的地の『黄昏の玉座』とは方向が違うから一緒に行くにはどちらかが予定を変更しないといけないということが、話をしているうちにわかったりしたんだけど

　　そうしているうちに、口喧嘩していたロロナたちのほうもひとまず落ち着いてみたみたいで……

「…ん？彼女は何処に行った？」

「あっ、いた！トトリちゃん……って、あれ？　なんでクーちゃんとマイス君がいるのー？」

……って、ようやくあたしたちに気づいたようだった

　　もちろん、ふたりはマイスから説教を受けた。…というのも、マイスも昔に今のトトリの様な状況になったことがあったみたいで……

「もう…ふたりとも仲が良いのは別にいいことだけど、あの時の僕みたいにトトリちゃんをほったらかしにしたらダメじゃないですか！」

……と叱つてた

…ただ、問題があるとすれば、マイスにはこういう「叱る」っていうのが難しいみたいで、一通り言った後 相手が「ごめんなさい」などの反省の色を少しでも見せたら すぐにコロツといつも通りに戻ること

ネチネチと言い続けるよりはいいかもしれないけど……マイスって、基本的に甘々なのよね……

つで、その後にトトリから

「ここでこうして会ったのも何かの縁ですし、途中まででも一緒に行きませんか？」

っていう提案が出てきた

確かに、トトリが予定していたルートと あたしたちが予定していたルートは、途中までは重なっているから不可能ではない提案だ

別にこつちからすれば何の損も無い…特に断る理由も無い提案だったから、提案を受け入れて『ネーベル湖畔』あたりまで一緒に行くこととなった

べつ、別にロロナと一緒にに行けるから……とかじゃなくて！戦力的に 一緒のほうがお互い楽だろうって思っただけなんだから!!

ネーベル湖畔

そんなわけで、あたしたち5人は数日の冒険の後に『ネーベル湖畔』にたどり着いたわけだけど……

「…ふう、こんなところかしら？」

この採取地で確認しておかないといけなことを一通り確認し終えたあたしは、ひとつ息をついてから辺りを見渡す

『錬金術』の材料になるものを採取しているロロナとトトリ。そし

て……

「てえいあー……！」

『裂空』!!』

採取地のモンスターたちを一掃する元・騎士とマイルス。

このふたりは、今現在アーランドにいる人の中で、こと接近戦においては屈指の実力者。それこそ3本指くらいにははいるんじゃないか……というくらいには強い

そんなふたりが、こうして一緒になって戦っているとあれば、まず敵は無いだらう

「……というかコレ、過剰戦力、過ぎやしないかしら？」

「えー？くーちゃん、どうかした？」

一通り 採取を終えたロロナとトトリがいつの間にかそばまで来ていたみたいで、あたしの独り言を聞いていたロロナが首をかしげて聞いてきた

「大したことじゃないわよ。ただ、あのふたりがいたら、このあたりの採取地にいるモンスター相手に、あたしたちの出番は無いだらうなって思っただけ」

そう言っているうちに、この採取地にいるモンスターたちは大方追い払い終えたんだらう。さつきまで戦っていた元・騎士とマイルスがこっちに帰ってきだしていた

その様子を見ていたロロナとトトリは、納得したように軽く頷いている

「たしかに。ステルクさんもマイルス君も、とっても強いからねー！一緒の時はすごく頼りになるよ」

「そうですね。……それに今回はちよつと長めの冒険になりそうだから、アイテムの温存が出来て助かります」

トトリの言葉に「なるほど」と思った

確かに『錬金術士』には爆弾とかの戦闘で役に立つアイテムがあったりするけど、当然、使えば減る。もちろん、事前に多く調査してお

けば問題無いだろうけど……温存できるならしておけたほうが良いに決まってる

それに、さすがにアトリエの外…採取地なんかで調合なんて出来っこないだろうし

……あら？　そういえば、前にコロナとマイスと三人で『絶望峠』に言った時に、コロナが戦闘中に『パイ』を調合してた気がするようない……気のせいだったかしら？

「どうだったつけ？」と思い出そうとしているうちに、一元・騎士とマイスがそばまできた

「こちらは一通り片付いたが……そちらはどうだ？」

「大丈夫ですよー、ステルクさん。私もトトリちゃんも採取はばっちりです」

「クーデリアはどうかかな？」

「こつちも問題無いわ。元々『ネーベル湖畔』で確認しないとイケないことは少なかったから」

あたしの言葉に頷きながら「よかった！」と言うマイス

……そのマイスの視線がピタリと止まった。マイスの向いているほうへと　あたしも目を向けてみると、コロナの斜め後ろにいるトトリが何かを何かを考え込んでいた

当然、マイスが見逃すはずもなく、トトリに問いかけた

「トトリちゃん、どうかしたの？」

「あつ、えつと……実はマイスさんとステルクさんに聞きたいことがあるのを思い出して……」

「私たちに？」

意外そうに言う元・騎士と、「何だろう？」と軽く首をかしげながらも　トトリに、遠慮せず言うようにうながすマイス

「昔あったっていう『武闘大会』っていうお祭りで、マイスさんとステ

ルクさん、どっちが勝ったんですか?」

「…ん?」

「ぐふおっ!」

盛大なりアクションをしたのは元・騎士

トトリが王国時代のイベントを知っているのには あたしも驚いたけど、元・騎士の驚き様は異常ともいえる取り乱し方だった

「何処で聞いた!?…いやーどこまで知っている!」

ロロナが「す、ステルクさん!?落ち着いて!」と止めているが、トトリは元・騎士の反応が予想外だったらしく、こちらもかなり驚いていた

そこからトトリが説明しだして、わかったことなんだけど…

どうにも、前にトトリの幼馴染のジーノと それと高飛車娘…ミミの三人で話していた時に「マイスさんとステルクさん、どっちが強いのか」という話題になって、その時に街出身のミミが王国時代に行われた『武闘大会』について話したらしい

そして、マイスと元・騎士が互角の勝負をしていたことは憶えていたけど、肝心の勝敗は忘れてしまっていた…というところらしい。

「…で、さつき二人がモンスターと戦っているのを見て、改めて気になった。そういうことね?」

「はい」

他の皆も状況を飲み込めたようだ。特に元・騎士は一人で何やら安心しきった顔をしていた

…ああ、そういえば あの『武闘大会』の決勝戦でロロナに負けたのを引きずってるんだっただかしら? 「人には知られたくない…」とか言っていた憶えもある

けど、当時では一年に一度の大イベントで沢山の人が観客としていたわけだから、口止めなんてあんまり効果無いような気もするんだけど…

……それで、最初のトトリの質問に戻るんだけど、あたしもロロナも……当然、当事者である二人も結果は知っているわけだ。…そんな中で一番最初に口を開くのは……もちろんマイルスだった

「あの時は僕が負けたんだ。「決まった!」って思ってたよ」と気が抜けたのが敗因かな…?」

「とはいえ、接戦だったな。……それに、今でもさほど差は無いだろう。僅かな差で私が勝ち越せてはいるが、それでも一進一退と言ったところだ」

マイルスに続いて、元・騎士のほうも当時の事を思い出したりしながらトトリに話した

けど、その話に食いついたのはロロナだった

「えっ!?最近でも戦ったりしてたんですか!?!」

「ああ。ごく最近まで、街の近くまで寄った時には、いつも少なくとも1、2回は試合をしていた」

「ついでに言うと、その何回かは『冒険者ギルド』に「冒険者同士がケンカしてる!」っていう報告がきてたわ。…その度にマイルスに確認取って……面倒だったわ」

あたしがそう付け足すと、元・騎士とマイルスは「そんなことがあったのか?」「ええ、まあ」と軽く受け答えしていた

「そうだったんですか」と、とりあえず納得したトトリだったが、またオズオズと……今度はマイルスにむかって問いかけてた

「その……昔から武器は『ネギ』だったんですか?」

「「おたま(ね)(だよ)(だったな)」」

あたし、ロロナ、元騎士が声をそろえて言い、そしてマイルスは……

「おたまじゃなくて『アクトリマッセ』ですよ?」

そう抗議していた……

黄昏の玉座

『ネーベル湖畔』でロロナたちと別れてからも、あたしとマイルスは途中に別の採取地に寄りながらも無事『黄昏の玉座』へとたどり着いていた

さすがにこのあたりの敵となると、マイルスもあまり気を抜けないみたいで、武器も『ツインネツギ』から『プラチナエッジ』というちゃんとした剣の見た目のものに持ち替えていた

少しだけ時間がかかりながらも、特にこれといった問題も無くモンスターたちを倒せた

そして、ようやく調査や地図の確認を開始した

けど……

階段のように段々になっていく崖を登った先にある、この採取地の名称の由来にもなっている、まるで大きな玉座のような形をした……人工物か否かもわからない岩

その近くに、不思議なものが見えた

揺れながら渦巻く光の塊

光なんだけど不思議と眩しくはなくて、なんとなく淡い感じの光だった

「……何かしら、あれ？」

「どうした……の……えっ!？」

あたしの後をついて来ていたマイルスが、その光を見て驚いているのが横目に見えた

その顔に浮かんでいたのは驚き。ただし、あたしのように「未知のもの」に対する驚きではない

「アレが何だかわかるの？」

「うん。とりあえず壊さないで。……一応、周りを警戒しててくれな
いかな?」

「…わかったわ」

「光を壊す…?」と疑問に思いながらも、ここはマイルスに任せること
にして、その光に対して剣を振るうマイルスの様子を見守った

少ししてからピシユンツと音を立てて、その光は消えた……

それからマイルスから話を聞いたんだけど、あれは『ゲート』という
モンスターが出現する穴のようなものらしく、今回みたいに攻撃して
も何もモンスターが出てこないのは運が良いらしい

「でも、どうしてだろう…。僕が前いたところではよく見かけたけど、
アーランドでは初めて見たよ」

「あたしも初めて見たわ。聞いたのも初めてよ。……もしかすると、
他の場所にもあったりするのかな?」

「わからない…。でも、もし何かあったら『冒険者ギルド』に情報がく
るんじゃないかな?」

マイルスにそう言われて「また仕事が増えるの…」と飽き飽きとした
でも、もしマイルスの言う「モンスターがわいてくる」というのが事
実であり、他の場所にこの『ゲート』が出現しているとすれば無視
はしておけないだろう

なんにせよ、『黄昏の玉座』ですべきことをしてからね

そういうわけで、マイルスと共に 調査と地図の確認を再開した

3年目：マイス 「話は最後まで聞きましょう」

『黄昏の玉座』まで行った クーデリアとの冒険

帰ってきた『アーランドの街』も、『青の農村』の様子も相変わらずで一安心している部分もあるけど……やっぱり、今回の冒険で見かけた『ゲート』のことが気になってしまう

僕らが『黄昏の玉座』での調査を終えて街に帰ってきてから、もう十数日ほど経っていた

冒険者ギルド

「全然ね。今のところは、だけど」

そう言ったのは、カウンターを挟んだ向こう側にいるクーデリア

何の話かといえば、当然『ゲート』のことだ

「うーん……僕らもあの時が初めてだったわけだし、やっぱりそうそうあるモノじゃないのかな？」

「そうかもね。それに、これまでに発見された例もないから……せめて、どういった場所に、どういった条件で発生するか……なんてことがわかっていればいいんですけど」

「いやあ、そういったことは昔からわからなかったからなあ……」

『シアレンス』に居た頃から、ゲートについてはほとんど知らなかった

町の外……一般的には「ダンジョン」なんて呼ばれていた場所に発生する……といったくらいで、そのダンジョンの中でもない場所があったり、複数個存在する場所もあったりと、本当に状況はバラバラだったような覚えがある

そのうえ、ゲートにも属性があつたり……本当に不思議なことばかりだった

「他の冒険者：例えば、昨日帰ってきたトトリたちとかにも聞いてたりはするけど、見たことは無いみたいよ。……まあ、掲示板とかにも「見つけたら逃げ、ギルドに報告すべし」って張り紙してあるし、アレ一個だけってわけじゃなければ、そのうち報告は来るとは思うわ」

「うん……わざわざありがとう、クーデリア」

「別にいいわよ。あんたの話が本当なら、モンスターがドンドン出てくるんでしよう？そんなのギルドとしては放っておけないもの」

「当然よ」と言ったクーデリアだったが、その顔はすぐに困り顔になった

「問題は、見つけた後 破壊することは出来ても、それは根本的な解決にならないことね。：特に、あのゲートつてのが複数個存在して何度も発生するようなものならなおさらのことよ」

クーデリアは僕の顔をジーツと見た後、短くため息をついて首を振ってきた

「ゲートの事を一番知っているのはマイルスに間違いないだろうけど、そういう研究職じゃなくて農家だし、アレを調べ上げたりは出来そうにないわね……。第一、この国にそんなことが出来そうなのはいいない……」

そう言いながら またため息をつきそうになっていたクーデリアが、突然ピシツつと動きを止めて……。何やら苦虫を噛み潰したような顔になった

「…あいつがいるわね……。まあ、今はどこをほつつき歩いてるかは知らないけど」

「あいつ……？」

キカイ……じゃなくて、機械方面とかならマークさんかと思っただけど、ゲートはそういう部類じゃないし……。それに、なんでかは知らないけどクーデリアが嫌そうな顔をしてる……

「あつ……！」

クーデリアが嫌そうな顔をしている、つて部分から思いついたのは

少し失礼かもしれないけど、クーデリアが言わんとする相手がわかった

「ロロナの師匠である、アストリッドさんだろう」

「確かに、何かできそうな気もするけど……」

でも、今どこにいるかわからないからなあ……。前にホムちゃんに何処にいるか聞いたことはあるけど、その時も教えてもらえなかったから探しようが無い

「アストリッドさんがいないなら、同じ『錬金術士』であるロロナ……とか？」

「ロロナが、ねえ……」

「僕の言葉にクーデリアは腕を組んで瞼を閉じ……ほんの一瞬の間を置いて見開いた」

「無理ね」

「だよね……」

「うーん……対処法のことも含め、『ゲート』のことはとりあえず保留かな？」

職人通り

情報収集をはじめとした『冒険者ギルド』でしておかなければならなかった用事を一通り終えた僕は、村へと帰るべく街の外に出るための門へと歩いていった

「あつ、そういえば、クーデリアが言ってたけど、もうトトリちゃんとロロナ、帰って来てるんだっけ？」

『ネーベル湖畔』までは一緒に冒険して、その後、別れたんだけど、僕らは北方面の『黄昏の玉座』を目指して行って、トトリちゃんたちは東のほうの採取地を周って行くって話していたのを思い出す

距離的にかかる時間を考えると、こっちのほうが早く街に帰りつくのはわかっていたけど、思ったよりもその差は無かったみたいだ

「せつかくだし、ちょっと様子を見てこようかな」

何にしろ、このまま進んでいたらアトリエの前を通るわけだから、そんな寄り道つてわけでも無いし問題無いだろう

そんなことを考えながら歩き、そうかからずにアトリエの前に差し掛かったんだけど……

「ん……？」

玄関の扉の前に立って、耳を澄ませる。……なんだかアトリエの中が騒がしい気がした

「……なんだか、前にも似たようなことがあったような……」

確かあの時は、ロロナの発案でロロナとトトリちゃんがふたりで一緒に調査したら全部『パイ』になっちゃう……とかそんな理由で、ロロナがトトリちゃんに怒られてたんだっけ？

この様子だと、今日も何かが起こったようだ

「大変なことじゃないと良いんだけど……」

無意識にそう呟いてしまった僕は、一旦気持ちを引き締めた後、ノックをしてからアトリエの扉に手をかけた

「こんにちはー」

「どうしよう どうしよう どうしよう!?……あっ！マイス君!! 助けてー！トトリちゃんが、トトリちゃんが不良になっちゃったー!!」

「マイスさん！先生を落ち着かせるの、手伝ってくださいー!!」

「……どうなってるの？これ？」

ロロナのアトリエ

とりあえずその場を落ち着かせて、二人から話を聞く……本当に、前にあったような感じがする

「えつと、話をまとめると……『お酒』の作り方を知りたいってトトリちゃんが言ってる、それを「作って飲みたい」ってことだと思ってる、トトリちゃんが不良になっちゃった、と……？」

「う、うん」

僕が言ったことに素直に頷くロロナ

その様子を確認してから、僕は今度はトトリちゃんのほうに目を向ける

「…でもそれは、自分で飲むためじゃなくて、『アランヤ村』の酒場のマスターのゲラルドさんに前から頼まれていた「名物になるお酒をつくってほしい」っていうお願いをきくためだった…ってことかな？」

「はい、そうです」

トトリちゃんも、僕の言ったことを頷いて肯定してくれた

さて、この二つの話を合わせて考えると……

「…つまりは、ロロナのはやとちりだったってことだね」

「うぐう!？」

ちよつとオーバーアクション気味に胸元に手を当ててのけぞるロロナ

はやとちりしちゃったところも含め、ロロナらしいと言えばロロナらしいけど……

「慌てても何も解決しないわけだし、もうちよつとは ちゃんとトトリちゃんと話そうとしてれば、そんな勘違いをしないで済んだんじゃないかな？」

「うゝ……。ゴメンね、トトリちゃん」

「いいですよ、先生。…でも、次 何かあった時はもう少しお話を聞いてくださいね？」

「はい……」

「いいですよ」って言われたとたん表情が明るくなり、その次の注意で また表情が暗くなり肩を落とすロロナ

トトリちゃんが歳のわりに落ち着いてるって事もあるんだろうけど、これじゃあどっちが大人なのかわからないような……

「とりあえずは一段落ってことで、とりあえず、トトリちゃんの用事の話に戻ろっか？」

そう言うのと、ロロナとトトリちゃんは頷いた

「ええっと、お酒の作り方だったっけ？」

「はい。先生もいちおう成人してお酒飲めますし、知ってるんじゃないかなって」

「いちおうって……。ううっ」と、ひとり呟いているロロナをよそに、トトリちゃんは口元に手を当てて「あっ……！」と何かを閃いたのか小さく声をもらした

「そういえばこの前……イクセルさんのお店でゴハン食べた時に、『青の農村』でお酒を作ってるって話をミスさんから聞いたような……」

そういえば、そんなこともあったなー……なんて思いながらも、僕は頷いてみせた

「うん。そんなに多い量はないけど、果物と麦のお酒を少しずつ作ってるよ」

「……そうでしたよね！　なんだ、最初から先生じゃなくてミスさんに聞けばよかったんだ！」

「けふうっ!？」

ロロナがアトリエの床に倒れた。

倒れたロロナの口からは、小さく震え声で「先生なのに……私が先生なのに……」と聞こえてきた

「それじゃあ……僕がお酒の作り方を教えるから、トトリちゃんはそれを『錬金術』のレシピに変換していくことから始めようか!……ロロ

ナ、教えてあげられる？」

僕がそう言おうと……

「ふふんっ！先生に任せなさいい！！ トトリちゃん！わからないことがあつたら、遠慮なく聞いてね！」

ピョンツ！と元気良く立ち上がり、復活した

3年目：トトリ 『サンライズ食堂』での騒ぎ・上

ロロナのアトリエ

ある日の昼過ぎのこと

私はちむちゃんたちに手伝って貰いながら 受けていた依頼の分の調査をしていた

「ふう…、これで最後つとー！」

錬金釜の中からポンツ！と音が聞こえたから、わたしは釜の中を覗きこんで 調査が完了したことを確認する

「うん！いい出来！これなら依頼者にも喜んでもらえるはず。お疲れ様、ちむちゃん！ちむおとこくん！」

「ちむむ」

「ちちむー！」

わたしの言葉に 元気よく手を挙げて応える二人のちむちゃんたち

最近、新しくちむちゃんらの材料を手に入れたから、先生作の「ほむちゃんホイホイ」を使って二人目のちむちゃんを作った。二人目は男の子だったんだけど、一人目の女の子と同じ「ちむちゃん」って呼ぶのも少し変だから 二人目のちむちゃんには「ちむおとこくん」って名前を付けてあげた

ちむおとこくんは泣いて喜んでたよ……そんなに嬉しかったのかな？

「頑張ってくれた二人には……はい！とつてもおいしい『パイ』だよ！」

一人分ずつに切り分けておいた『パイ』を ちむちゃんたちの前に出す

「ちむ!!！」

「ちむー!!！」

「そんなに慌てなくても大丈夫だよ。はい、どうぞ」

『パイ』を受け取ったちむちゃんたちは、かわいらしくペタンと座つて『パイ』を食べはじめた

『パイ』を食べてる姿も可愛いなあ。……あつ、でも依頼品を届けにギルドに行かないと！ わたし、少し出かけてくるからね？二人はゆっくり『パイ』を食べてていいよ」

「ちむむ」

「ちーむー」

一旦 食べるのを中断して、お返事と「バイバイ」をするちむちやんたちに見送られて、わたしはアトリエから出発した

それにしても、やっぱり可愛いなあ……ちむおとこくんなんて、本人は気づいてないみたいだったけど、ホッペに『パイ』のかけら付けちやつてたし……

職人通り

『冒険者ギルド』の受付にいたフィリーさんに依頼品を渡して お仕事を完了したわたしは、アトリエに帰るために通りを歩いてた

クウ

無意志に鳴った自分のお腹に驚きつつ、周りに誰かいて 聞かれたりしてなかったかを確認した。：運良く、周りには誰もいなかったんだけど……

「そういえば、調合が忙しくてお昼抜いちゃってたんだ……。でも、夜ご飯までは時間はまだあるし……。どうしようかな？」

今 食べ過ぎるのも悪いけど、何も食べないとそれはそれできついアトリエに帰ってから わたしも『パイ』をちよつとだけ食べちゃおうかな……？

そんなことを考えている時、ふとあるお店の看板が目に入った

『サンライズ食堂』。先生の幼馴染のイクセルさんが働いているお店だ。わたしも何かとお世話になっていたりする

「何か軽い食べ物とかもあつた気が………いいよね？わたし、いっぱいお仕事頑張つたんだし！」

そう自分自身に言い聞かせ、「ちよつと贅沢かな？」なんて気持ちを押し込めて、わたしはお店の扉を開けた

サンライズ食堂

「こんにちはー」

時間が中途半端な事もあつてか、お店の中はひとつのテーブルを除いてガランとしていた………というか、あのテーブルにいるのって……

「あれ？先生？ステルクさんにクーデリアさんも」

「あつ、トトリちゃんだ！トトリちゃんもこつちおいだよ」

わたしに気づいたロロナ先生がイスから立ち上がつて、わたしのそばまで来たかと思えば、わたしの手を引っ張つて テーブルまで案内（？）してくれた。そして、さつきまで先生が座っていた席に、わたしを半ば無理矢理座らせてきた

「…あの、みなさんでパーティでもしてたんですか？」

「いや、偶然居合わせただけだ」

「んで、延々と昔話してんだよ。まったく、いい営業妨害だぜ」

「あんただつて一緒にくつちやべつてたでしようが」

いつも通り、簡潔に答えるステルクさん

そして、他にお客さんがいないから暇があるのか テーブルのすぐそばにいたイクセルさん

そんなイクセルさんにツツコミを入れるクーデリアさん

言葉だけだと少し刺々しくも感じられるけど、実際はそんなこと無かつた。皆さん、とても楽しそうで、あのステルクさんでさえ薄く笑みを浮かべていた

「それでねそれでね！わたしこの間、りおちゃんに会ったの？」

先生がそう言うのと、皆さん一様に「へえ……！」と言った感じに反応した

その中で、イクセルさんが真っ先に口を出した

「おっ、懐かしいな。元気でやってんのか？あいつ」

「えつとね……ラニヤちゃんとホロくんに怒られてた。劇で大失敗したらしくて……」

その時のことを思い出したのかな……？ 先生は苦笑いをしながらも 楽しそうに言った。…先生って顔に出やすいみたい

「相変わらずみたいね。…つーか、いつまで他所をほつつき歩いてるのよ。いい加減アーランドに帰ってくればいいのに」

「わたしもそう言ったんだけど……ほら、大分前だいぶんにステルクさんの顔を見て気絶しちゃった事あったでしょ？ それ、まだ気にしてるみたいで……」

「…それを聞いて、こういう反応をすればいいんだ、私は」

「あ、や、別にステルクさんが悪いってわけじゃ……」

そんな話を聞きながら わたしは「お話、楽しそうだなあ……」と思いながら、イクセルさんが運んできた軽食をちよつとずつ つまませてもらっていた

「……んん？ あれ？」

「どうしたの？トトリちゃん。……つて、ああ！そつか！トトリちゃん、りおちゃんとラニヤちゃんとホロくんのこと話したことあったよね？」

「あつ、いえ……リオネラさんたちのことは知ってるんですけど……」

わたしがそう言うのと「そうなの？」と先生は首をかしげていた。クーデリアさんも「あら？」と少し驚いている……というよりも、意外そうにしている

「リオネラさんと……人形の子たちは、昔『アランヤ村』に来てくれた

ことがあつたらしくて…」

「ん？らしくてつてどういうことだよ？」

イクセルさんの問いかけに、わたしは頷いてから答える

「えっと、ちよつと前に会つて「あつた事あるんだよ」つて教えてもらつたんです」

「ああ、そういえばあの子、フィリーとマイルと一緒に『アランヤ村』に行つたことがあるんだつたかしら？」

クーデリアさんが思い出したように そう呟いていた。

…それで、何が問題かと言うと……

「あれ？トトリちゃん、りおちゃんに最近 会つたの？」

「はい。そんな最近でもないんですけど、マイルさんのお家にお邪魔した時に ちようど遊びに来てたみたいで……あつ！その時、噂に聞いたことがあつた「幸せを呼ぶ金色のモンスター」を抱っこしてたんです！」

「「えっ」「」」

皆さんの反応は、わたしの予想以上に大きく……そして、反応は一人一人違つてた

「へえ！街には帰つてきてないのに、すぐ近くのマイルのところには来てるんだな。…これつて、もしかすると……」

「……そこまで、私の顔がトラウマになっているのか」

「ステルクさん!?!そうじゃなくて、りおちゃんとマイルくんが……！」

中でも反応が凄かつたのは……

「へえー、ふうーん……ほおー……そんなことがねえ……」

「く、くーちゃん？」

あのロロナ先生が一步引いてオロオロしまうくらい、さつきまでよりも凄く機嫌が悪くなつてた。…なんだか、すつごい暗いモヤモヤつてした何かが見えるような……

「…ねえ、トトリ？」

「はい!?!」

「その「金色のモンスター」っていうのは、どんな風に抱かれてたのかしらあ？」

てつきり、マイスさんのことを聞かれると思っていたから、わたしはクーデリアさんの質問に拍子抜けしてしまう。…あの時、マイスさんは出かけてたらしくて 結局会えてなかったから聞かれたら返答に困るから、とりあえず一安心した

「ええっと、それなら。こう…両腕で抱き抱える感じで……」

「……淫獣が（ボソ）」

「いん…う…えっと、クーデリアさん。今 何か？」

「何でもないわよ？」

ニコニコして言うクーデリアさんに何故か寒気を感じつつも、わたしは何とか「そ…そうですか」と言葉を返した

よくわからないけど機嫌が極限に悪くなったクーデリアさん

でも、相変わらず先生はオロオロしているし、自分の顔の事から一旦離れられたステルクさんは イクセルさんと何か耳打ちし合っている……

どうしたらいいのかわからず、わたしは固まったまま頭を悩ませていたんだけど……

その何ともいえない静かな空気の中で、お店の扉が開かれる音が聞こえてきた

他のお客さんでも、何でも……何か変化のきっかけになれば！

そう思っただけの扉のほうを見たけれど……

「こんにちは！イクセルさん、卸している野菜についてなんですけど、今 時間あります……あれ？」

3年目：トトリ 『サンライズ食堂』での騒ぎ・下

サンライズ食堂

ひよんなことから何故か凄く不機嫌になっちゃったクーデリアさん

先生も、ステルクさんやイクセルさんも どうしたものかと頭を悩ませている時……その空気を変えるきっかけが……!

「こんにちは！イクセルさん、卸おろしている野菜についてなんですけど、今 時間あります……あれ？」

『サンライズ食堂』に入ってきたのは、あろうことかクーデリアさんが不機嫌になった一因（だと思う）マイスさんだった

「あら、マイス。ちようどいいところに来たわねー」

「えっ、クーデリア？よくわからないんだけど……何かあったの？」

良い笑顔過ぎて 一周回って怖いクーデリアさんに手を引かれるままに、わたし達がいるテーブルまで来るマイスさん。だけど、マイスさんはクーデリアさんの様子にも気づいていないのか 至っぴいとも通りの感じで、「どうしたの？」と軽く首をかしげている

そんな様子を見たイクセルさんが、小声で「面倒そうだし、関わりたくねえけど……放置したらしたで、延々と店の空気が悪いままだし……」と呟いた後、ため息をついてからマイスさんに言った

「いや、たまたまウチに居合わせただけだ。……で、昔話をしてただけだよ、それでちよつとあってな」

「ええつとね……その、りおちゃんのこととで……」

続いて先生がそう言うのと、マイスさんは「ああ、リオネラさんのこと」と納得したように頷いた

それを見たクーデリアさんが、マイスさんに問いかける

「ねえ、トトリから聞いたんだけど……あんたの家ところに あいつが遊びに来てたりしてるってのは、本当の事かしら？」

「うん。2, 3カ月に一回くらいで『青の農村』に来てるよ」

「隠す気ゼロなのか!？」

「ええっ!？」

イクセルさんのツツコミに驚いたうえで、また首をかしげて「ど、ど
ういうこと?」と悩みだすマイスさん

そんなマイスさんを見てみると、本当にこの人がわたしよりも年上
なのかが疑わしく思えて……あつ、そんなこと言ったら、先生もか：

「あ、あのねあのねマイス君。その……りおちゃん、もう何年も街には
帰ってきてないの」

先生にそう言われて、一層首をかしげるマイスさん。そして、周り
を見て……

「えっと、街に来てないんですか?」

「全然、見かけてないぜ」

「少なくとも、私も会っていない」

「ええ、ギルドにも顔を出してないし、街で人形劇をしている人がい
たって話も聞いてないわ」

イクセルさん、ステルクさん、良い笑顔のクーデリアさんにそう言
われたマイスさんは、ゆっくりとわたしの方をむいてきた

「……そういうことみたいです、マイスさん」

「え、えええー!？」

「なるほどな……まあ、キミらしいと言えなくもないか」

腕を組んで頷くステルクさんに、マイスさんは困ったように「あは
はは……」と笑っていた

「はい……。街から近いですし、街方向の街道のほうから来ているのも
見たことがあったから、てっきり街に行っただ後『青の農村』に寄って
くれているのかと思って……」

マイスさんの説明を聞いて、わたしは「まあ、確かに思えなくもない……かな?」と納得する

他の皆さんも似たような反応で半分呆れ気味に笑っていた

「はあー、そういうことだったのか。…ま、昔っからコロナとは別の意味で抜けてるところが有るからな、マイスは」

「ええっ!?イクセくん、わたしそんなに抜けてなんかいないよ!」

コロナ先生の反論に「どっこいどっこいだろ」と返すイクセルさん
そして、クーデリアさんと言うと……

「……………ふんっ」

「あつ、ちよ……あいたたた!」

さつきまで自分が座っていたイスにマイスさんを座らせて、後ろからマイスさんの髪をワシヤワシヤと撫でまわしたり、ほっぺをグニーっと引つ張ったりしてた。マイスさんは、どうしてされているのかは わかっていないみたいだけど、リオネラさんの一件で負い目を感じているのか されるがままだった

…と、そんな中でわたしは、いつの間にかステルクさんがアゴに手を当て、何かを考え込むような体勢をとっていることに気付いた

「ステルクさん? どうかしましたか?」

「…ん? いや、少し疑念が湧いてな……」

そう言ったステルクさんは、やっとクーデリアさんに解放されたマイスさんに目を向け、口を開いた

「そのだな……まさかとは思うが、キミの村に王が訪れたりはしてないだろうな」

「周期はバラバラですけど偶に来ますよ? 最近だと、今年の初めくらいに7日間くらい……あつ、えつと、もしかして……?」

いつも通りに喋っていたマイスさんだったが、途中である可能性に気付いたんだと思う。一度ハツつとしたかと思うと段々と目が泳ぎ出した

その様子を見て、ステルクさんはイスから静かに立ち上がり テー

ブルそばの壁に立てかけておいた自分の剣を手にとって……

「つて、ダメですよ!?!ステルクさん!」

わたしが言うのとほぼ同時にロロナ先生も同じことを言い、抱き締めるような形でステルクさんを止めた。イスに座っていたわたしも立ち上がり、少し遅れて 剣を持つステルクさんの手を捕まえた

「ええい、止めるな! アイツに一発入れなければこの気、一向に収まらない!!」

そう言ってもがくステルクさんだけど……まだ冷静な部分もあるんだと思う。そうじゃないと、わたしと先生なんて力づくでふりほどけるだろうし……

カチャリ

そんな聞きなれない音が聞こえ、気になってステルクさんを抑えながらも その音がした方を見てみると……

「あの子だけならまだしも、ジオ様まで……!!」

そこには、イクセルさんに両腕を捕まえられているクーデリアさんがいた

あれ? クーデリアさんが持つてるのって…… 『銃』!?

「は・な・し・な・さ・い・よ! この!」

「離せるかつ! ステルクさんもそうだけど、店の中で銃撃ったり、剣振り回したりしたら、店の物も壊れちゃうだろ!」

「イクセルさん!?! マイスさんの心配じゃないんですか!?!」

「言いたいことはわかるが、半分自業自得みたいなもんだろ!」

「…残りの半分は?」

「天然だな」

わたしはそう言われて「ああ」ともらしてしまう。…だって、それで納得してしまうんだもん……

「くそ、離せ!」

「離しません！」

未だにもかくステルクさん。そんなステルクさんを止める先生

このままではらちがあかないと考えたのか、ステルクさんはコロナ先生に向かって口を開いた

「王が訪れていた。…ならば、王だけでなくアストリッドもかくま匿かくまっていたかもしれないのだぞ！」

「マイルス君はそんな事する子じゃありません！さすがに教えてくれま
すよ。…ねっ、マイルス君？」

そう言つてコロナ先生はマイルスさんのほうを向いた

これにはマイルスさんもしっかりと頷いて、返事をした

「来てないよ。アストリッドさんのことは調合素材を要求してきた時に、僕でも居場所を突き止めようとはしたけど、結局わからないままなんだ」

「だよなー」という感じで、流そうとした先生。…だけど、ふと動きを止めたステルクさんが怖い顔をして言った

「…待て、調合材料の要求とは何だ？」

「えっ？えっつとですね、定期的に ホムちゃんがつかいで『青ウの農村チ』に錬金術の材料を取りにくるんです」

「マーーーーーシュークーーーーーん!!」

「先生まで!? わーん!もう止められないよおー!!」

3年目：トトリ 『男の武器屋』 とコイバナ

『冒険者』というのは、様々な場所を旅して回るわけだけど……そんな中で、必要となるものがいくつかある

例えば、食料や水。現地調達も出来なくは無いけれど、もし行き当たりバツタリで入手が出来なかった場合、本当に死活問題になってしまうため 冒険の日数を考慮した最低限の分は出発の時に持っていくべきだろう

そして、もう一つ大切なものがある

それが『武器』だ

おもな街道なんかにはほとんど出現することはないけれど、その他の道や採取地には、人を襲うことのあるモンスターたちが生息していることが大半。場所によって強さの差があったりはするが、モンスターたちは手ごわくて、簡単に勝てるような相手ではない

そこで有用なのが『武器』というわけだ。

武器によって戦闘が問題無く行える上に、戦略だって格段に広がる。それに、冒険者本人の腕もあるけど、基本的には強い武器を用意できれば より強いモンスターを倒せる。それだけ武器は重要なものなのだ

：例外として、わたしやロロナ先生のような『錬金術士』であれば、武器をそんなに気にしなくても『錬金術』で調合したアイテムで戦えたりする人もいたりするけどね。

男の武器屋

わたしは、次の冒険に備えて、そんな大事な武器を手に入れるために、先生のアトリエの隣にある『男の武器屋』に来ていた

『男の武器屋』の店主のハゲルさんには これまでにもお世話に

なっていて、新しい鉱石から『錬金術』で金属を調合できるようになる度に、冒険を手伝ってくれるみんなの武器を作って貰ったりしている

そして今日は、ステルクさんのための大剣を作って貰いに来たんだけど……

「できたぜ。名前通り、ドラゴンさえも引き裂く大剣だ」

そう言つてハゲルさんが見せてくれたのは、『竜裂きの大剣』という名前の猛々しい大剣だった。そのデザインには、その名前にある「竜」……つまりはドラゴンを意識したような部分が見られた

「あの騎士の兄ちゃんが使うなら、これしかねえよな」

「えっ？ 凄そうな剣ですけど……ステルクさんとドラゴンって、何か関係があるんですか？」

ハゲルさんが満足気に言った言葉に、わたしは首をかしげる。

「なんだ、聞いてねえのか？ あの兄ちゃん、昔、ドラゴンにやられて大怪我をしたことがあってよ」

「ええっ!? ステルクさんが負けたんですか!?!」

ステルクさんは、わたしが知っている人の中でも1位2位を争うくらいの実力者だと思う

「昔」っていうから、もしかするとステルクさんも、今ほどは強くなかったのかもしれないけど……そんなステルクさんが負けるほどの相手ドラゴンを想像できなかつた

そんなわたしの不安をよそに、ハゲルさんは当時の事を思い出すように軽く首をひねりながら、そのことについて話してくれた

「いや、勝つには勝つたらしいんだがよ……その時、嬢ちゃんの師匠をかばってやられたらしい」

「ステルクさんが、先生を……素敵なお話ですね」

「だろう？……だが、問題はその後だな」

そう言うハゲルさんは、なんでもかもの凄く残念そうな感じに、眉毛

をハの字にして押し黙った

「何かあったんですか？」

「あったってどうか、何も無いってどうか……」

「うーん……」とひとしきり唸った後、ハゲルさんが大きく息を吐き……そして、首を振って肩をすくめてみせた

「だってよ、普通そんなことがありや、色々と火が点いちまうもんじゃねえか。男と女の仲ってのはよ！」

「は、はあ……？」

「なのに、あの二人ときたら、いつまでたっても煮え切らねえ……！」

嬢ちゃんはその通りドがつくほどの天然だし、兄ちゃんのほうはとんでもねえ朴念仁ぼくねんじんつうか……」

そう、ドンドン話しだすハゲルさん。まるで、これまで何処かで溜まっていたかのように言葉が次から次へと出てきている

けど……その、なんというか……

「あ、あのー……そういう話、わたしにはまだ早いつていうか……、あんまり聞きたくないっていうか……」

「何言ってるんだよ！嬢ちゃんくらい歳のごろなら、こういう話……えつと、なんていうんだっけか？……そう！コイバナだ。みんなコイバナが大好物なんだろ？遠慮しねえで最後まで聞いてけよ」

「みんな大好き、って……一体、どこの情報なんですか……？」

確かに、恋愛のお話に興味が全く無いとは言えない

「だけど、先生やステルクさんのような身近過ぎる人の、そういう話を聞くのは……なんだか嫌、というか……」

「まあ、あの二人がくつつかなかつたのには、本人たちの問題が大きいんだろうが……一時期は「三角関係」なんて噂もあってだな」

三角関係って……うわあ……なんだかドンドン生々しい感じになってきているような……って

「三角関係!?……先生とステルクさんに、もうひとり!?」

驚きのあまり、声に出してしまった後に、わたしは「しまった!？」と

感じた

というのも、わたしの反応を見たハゲルさんが「おっ、食いついたか！」と言つて「やっぱりこういう話に興味があるんだろう！」と軽快に笑つた。……ハゲルさん自身に悪気が無いのが、凄く面倒だ……

「三角関係だから、次の一步に踏み出せない状況になつてしまつていて進展が無かつた……ていう噂なんだけどな……」

お話を再開したハゲルさん

わたしはというと、これ以上 生々しい話になつて欲しくないから、心の中でずつと「3人目は知らない人でありますように……！」と祈り続けていた

「その三角関係の一人が、あのボウズ……じゃなくて、今はもう立派な村長だつたな！」

「村長……？」

「ほら、この村のすぐそばの農村の村長さんだよ」

「ううー……ミスさんだなんて……。思いつき知り合いだ……」

もうこれ以上ないくらい、話を聞きたくない三角関係になつてしまつて……

……あれ？

でも、そんな雰囲気に見えたことは無いんだけど

「まあ、三角関係つて言つても、男二人が女を取り合う……つて形じゃなくてな。嬢ちゃんが昔つから村長さんのことを 弟のように可愛がつてて、その二人の距離感が無駄に近いのが理由で、兄ちゃんが嬢ちゃんとの距離を縮められねえんじゃないかって話だよ」

ハゲルさんの話に、わたしは少しだけ安心した。……確かに、ミスさんが先生のアトリエに来た時に何度も思つたことだけど、先生とミスさんはとても仲が良い。なので、ハゲルさんの話も理解できただけど……

「マイスさんが…弟……？ お世話されるのは、先生のほうですよね？ 逆なんじゃあ……」

「……嬢ちゃんの言いたいこともわかる。確かに逆だな」

マイスさんは、ちよつとズレてたり 天然なところもあるけれど、わたしも色々お世話になつたりしているように、基本的にはお世話をする側だと思う

「まあ、その村長さんも村長さんで変わつて……これが兄ちゃんと嬢ちゃんを足して割つた感じに恋愛事に鈍くてな。……良い奴だし、あんまり人に嫌われるタイプじゃないんだが、むしろその人の良さと鈍感さのせいで 後ろから刺されたりしそうでよ……」

「あはは……たしかに」

苦笑いを浮かべてしまひながら わたしが思い出したのは、前に『サンライズ食堂』であつた騒ぎの事。…あれは恋愛の話じゃなかつたけど、大体マイスさんの「そういうところ」のせいだった

「でも、大丈夫だと思いますよ？…きつとマイスさんを男の人つて見ている人は ほとんどいないでしょうし」

「…嬢ちゃんつて、たまにえげつないこと言うよな……」

3年目：マイス 『大漁！釣り大会』

青の農村

『青の農村』では、ほぼ毎月、何かしらのイベントが行われている。それは恒例になっていいるお祭りであったり、突発的な思い付きからのものであったりと、様々な経緯でイベントが決まるんだけど……

今日のお祭りは四季の『野菜コンテスト』と同じくらい初期から行われている恒例のお祭り『大漁！釣り大会』が開催される

村の中には井戸といったものもあって、そこから生活用水を得たりするんだけど、それ以外にも村の端のほうに川もある。農業には水は重要なため、当然と言えば当然かもしれない

今日の『大漁！釣り大会』は、その川を中心に様々な場所で釣りをして、制限時間内に釣った魚の数を競うお祭り

単純明快なルールで盛り上がるので人気があり、その日の晩ごはんは『青の農村』は勿論、アーランドの街の多くの家庭で魚料理になるのも、もはや恒例だったりする

そういう楽しいお祭りなんだけど……今日は少しいつもと違うところがあった

それは……

「……」

「じー……」

「あのー……ステルクさん？ 参加者が怖がってしまいますから、その目あたりを観察するのは止めてくれませんか？ コロナは別に良

いけど……」

そう。参加者や見学者を始めとした、お祭りに来ている人たちをジツつと見つめる人が二人。ステルクさんとロロナだ

こんなことになっている原因は、少し前に判明した「リオネラさんとジオさんとホムちゃんは、街には帰ってきてないけど『青の農村』には来ている」……っていうあの一件だ

あれ以降ステルクさん、ロロナ、クーデリアは、仕事が無くてヒマな時にはよく『青の農村』に来るようになった。理由は勿論「来るかもしれない」と思い、その時を逃さないようにするためだと思う

そして、今日……人の多いお祭りの日にも人に紛れて来るのではな
いか……と、張り切って見張っているわけだ

「そうは言われてもだな……。人混みに紛れて王が潜入してくるかもしれないというのに、目を凝らすなどというのは無理な話だ」

「潜入って。そんなドロボウみたいなの……」

ジオさん……。「元」とは言っても王様なのに……

というか、ジオさんに限らずリオネラさんやホムちゃんもそうだけど、顔を隠したりすることなく普通に来るから、別にそんなに目を皿のようにしなくても 来ればすぐにわかると思うんだけど……

あつ。でも、ジオさんはお祭りの日に来るときだけは、少し顔を隠してるか

そんなことを考えていると、隣にいたステルクさんがいきなり走り出した

「わわっ!?ステルクさん、いきなりどうしたんだろ?……もしかして、ジオさんを見つけたとかかな?」

「……かもしれないね。うーん……ちよつと心配だし、一応追いかけてみようかな?」

「今日という今日は……！」

「わかったわかった。とりあえず、ひとまず落ち着かないかね？」

村の広場の近く。行き交う人たちの中で、ぽっかりと空いた 人のいない空間

そこで二人の人が、ステルクさんとジオさき…鼻から上のあたりを隠すタイプの小さな仮面をつけた紳士マスク・ド・Gが相對していた

「落ち着くも何も無い！」

「ムウ…。彼が密告したりするとは思えんのだが、尋問でも……いや、案外ポロツと出たか？」

困ったようにため息をついたマスク・ド・Gは、首を振って言う

「しかしだな、ここでお前の相手をしようにも出来んだろう？」

「……？…どういうことだ？」

「わからんか？…こんなところで私たちが騒ぎを起せば、せつかくのイベントが台無しになってしまわないか。この村の村長の彼を始め、今日この日まで色々と準備をしてきた村の人たちに迷惑をかけてしまうだろう」

マスク・ド・Gの言葉に、さすがのステルクさんも「ぐぬぬ…」と言葉を詰まらせてしまう。…けど、完全に引いたわけではなくて、やっぱりまだあきらめられない部分があるようだった

そんなステルクさんを見かねたのか、マスク・ド・Gが薄い笑みを浮かべてステルクさんに言った

「まあ、こうして見つけられてしまったのは事実だ。勝負といこうではないか」

「なに？」

自身の言葉を撤回するような物言いに眉をひそめるステルクさん
マスク・ド・Gは、その反応を特に気にする様子も無く……あるモノを取り出した

「ただし、コレでだがな」

「釣竿……だと……？」

「今日のイベントの内容くらいは知っているだろう?…私よりも多く魚を釣れたのであれば、何でも一つだけ言うことを聞いてやろう」
その言葉をどう思ったのかはわからないけど、ステルクさんの目が大きく見開かれた

…と、僕に遅れてロロナが現場に到着した

「あれ?あそこにいる、ステルクさんと話してる人って…マスク・ド・Gさん?」

「そうみたい。…というか、ロロナってマスク・ド・Gさんのこと知ってるの?」

「うん…とは言っても、昔あった『武闘大会』の時に戦ったってくらいで、ほとんど知らないんだけどね」

その言葉を聞いて、ロロナの中では「ジオさん〳〵マスク・ド・G」にはまだなっていないという事を確信し、とりあえず黙っておくことにした

そんなことを話しているうちに、ステルクさんとマスク・ド・Gの間で話は進んだようで、整えられたアゴ髭に触れながらマスク・ド・Gは「フム…」と小さく唸った

「とはいえ、参加する気で来た私と、そうではないお前との間には差があるだろう…。ハンデとして私の釣った数―4匹釣れば、そちらの勝ちとしてもかまわんぞ?」

「ハンデなど要らん!正面から挑み、勝ってやる!」

「心意気や良し!では、開始時刻までに準備をしなさい。この大会では釣りの道具のレンタルも行っているそうだ。村の者に聞いてみる」といい」

そう言うてから、「さて、私も場所に目星を付けておくか」と言つて何処かへ行くマスク・ド・G

対して、ステルクさんは辺りを見渡し…僕を見つけると、こちらへと早足で近づいてきた

「話は聞いていたな？」

「：わかりました。釣りの道具一式ですね」

「頼む」と短く言ったステルクさん。……そして、僕と一緒にいた口ロナなただけど…

「釣りかあ…。自信は無いけど、せっかくだし私もやってみようかな？」

そんなわけで、貸出用の釣り道具を取りに 広場の先にある『集会場』へと三人で行ったんだけど、そこには係をしてくれている村の人以外に、見知った人がいた

「あれ？トトリちゃん？」

「あつ、マイスさん。それに先生とステルクさんも。こんにちは」

ちようど貸出用の釣り道具一式を受け取っているトトリちゃんがいた

確かに、アーランドの街にいれば『青の農村^{ウチ}』のお祭りの情報も入ってくるだろうから、そこまで驚くようなことでは無いんだけど…：…それでも予想外だった

「君も参加するの？」

「はい。ちようどお仕事も入ってなかったの…。それに、先生が「ほむちゃんが見えないか見に行く！」って何度も言っていたのが耳に残ってて、それが気になっちゃって」

ステルクさんの質問に答えるトトリちゃん。そんなトトリちゃんを見ながら、口ロナが「そういえば…」と口を開いた

「トトリちゃんの家って海のすぐそばの漁村だし、もしかして こういうの得意だったりするのー？」

「じ、実は初心者で…。でも、お魚には慣れてますし、お父さんが釣りをしているところは見てたから、大丈夫…：…だと思います、たぶん

…」

「へえ、トトリちゃんのお父さんが…。 って、わたし、トトリちゃんのお父さんに釣り上げられたんだっけ…」

「何を言っているんだ、君は…」

ロロナの言葉に、少し唾然としながら、ステルクさんはため息をついていた…

そうして始まった『大漁！釣り大会』だったが、その結果は……

「負けた……」

そう落ち込むのはステルクさん。釣った魚の数は一匹だけという結果に終わった

「でも一番大きかったじゃないですか！ステルクさん、元気出してくださいよー」

そう励ますロロナは七匹。初めてにしては十分な結果だと思う

そしてロロナの言う通り、ステルクさんが唯一釣った一匹は110cm超えの大物。今回の大会が『大漁！釣り大会』ではなく『大物!!釣り大会』だったならほぼ間違はなく入賞していただろう

「勝負には勝った、か……」

ステルクさんとの勝負に勝ったはずのマスク・ド・G…もとい、ジオさん

19匹という十分な数を釣り上げたジオさんだったが、結果は二位だった

「それでは、最後に村長からの優勝トロフィーの贈呈だ」

そう司会進行のコオルが言ったから、僕はトロフィーを渡すために

一位の人の前まで移動した

「えつと…ええつと…いいのかな？」

「あはははつ、そんなに遠慮とかしなくていいよ。結果は結果なんだから、しっかりと胸を張って受け取って！」

「は、はい…！」

そう言葉を交わしてから、僕はトトリちゃんにトロフィーを手渡した

トロフィーの重さで少しふらつきつつも、トトリちゃんはしっかりと受け取ってくれ、広場には大きな拍手が鳴り響いた

優勝したのは、予想外のトトリちゃん

一匹一匹は大きくはないものの、24匹もの数の魚を釣って、堂々の優勝だ

「あのー…？ マイスさんは出場してなかったんですか？」

「…『野菜コンテスト』と一緒に、出場禁止処分受けてるんだ」

「えつ…！」

3年目：マイス「モコ！モコモコー！」

霧の廃墟

『アールランドの街』から西の方角に行ったずっと先にある採取地『霧の廃墟』
はいきよ

その名前の通り、年中 大抵の時間霧が立ち込めている地域にある
廃墟の周囲一帯の呼称だ

この採取地にある廃墟のような、以前は人が使っていたであろう：しかし、今現在は誰もいないような場所・建物といったものは、それほど多くは無いもの 大陸に点在している

こういった荒れた家には当然ながら人の気配は無く、一般的に周囲には幽霊系ゴーストのモンスターが多くみられる傾向がある

モンスターに襲撃でもされたのか、何か流行り病でもあったのか、他の土地に移住したのか……その理由はわからないけど、なんだか物悲しい雰囲気ゴーストが漂っている……気がする。もしかしたら、僕の先入観からくる勝手なイメージかもしれないけど

……さて。僕は今、その『霧の廃墟』に金色の毛のモコモコの姿で来ているわけなんだけど……それには理由があった

「情報通りなら、ココかな……？」

建物の屋根が半分くらい壊れているからあまり役割の意味が無い、蝶番ちょうつがいがさび付いている扉を開けて……その中にあるモノに目を向けた

揺れながら渦巻く光の塊……そう、『ゲート』だ

―数日前―

冒険者ギルド

それは、ある日の午後

トトリちゃんが『アランヤ村』に帰るといふ事を聞いて、以前に『サ
ンライズ食堂』で一緒にゴハンを食べた時に約束していた「二十歳に
なったツイイさんへのプレゼントの『青の農村』産のお酒」をトト
リちゃんに渡し、見送った後、そのまま『冒険者ギルド』へと行っ
ただけど……

「あら、ミス。ちょうどいいところに来たわね」

そう言つて『冒険者ギルド』で僕を出迎えたのはクーデリアだった

「やあ、クーデリア。…それで、「ちょうどいい」ってどういうこと？」
「あなたに知らせるために、時間を作つて『青の農村』へと行こうかと
思っていた…つてことよ」

「何かあったの？」

「前にあたしたちが『黄昏の玉座』で見た光…アレと同じかもしれな
いモノを見たつていう目撃情報が冒険者からあったのよ」

その話には僕は驚いた

確かに、理由は不明とはいえ一度発生していたのだから、同じ場所
…もしくは別の場所で発生してもおかしくは無いとは思う

「だけど、これまで目撃情報が無かったから「あの時が特別だったの
だろう」と思っていたんだけど……。これは本格的に色んな場所に発
生しているもおおかしくないことになりそうだ」

「それで、目撃情報のあった場所は？」

「ここから西北西にある『霧の廃墟』。その廃墟の中にあつたらしい
わ」

「わかった。僕が今から行つてみるよ」

僕がそう言つと、クーデリアは少し驚いたような顔をし……。その
後、「キッ！」と僕を鋭く睨んできた

「マイルス……一人で行く気なの？ 確かにあんたの強さならそこらのモンスターに遅れは取らないとは思うけど、まだアレには分からないことが沢山あるのよ？」

「アレって『ゲート』のこと？」

「そうだけど、そうじゃないわ。マイルスはアレを自分の知っている『ゲート』ってものと一緒だと断言してるけど、もしかしたらそうじゃないかもしれない……もっと危ないものの可能性だってあるわ」

「それはそうだけど……でも、一人じゃないと調べられないこともあるから」

僕の言葉に、クーデリアは「何よ、それは？」と視線と表情で問いかけてきた

僕は周りを見渡し……聞き耳を立てていそうな人がいないことを確認してからクーデリアに顔を近づけて、クーデリアだけに聞こえる様に小声で言う

「モコモコに変身して、その採取地にいるモンスターたちに話を聞いてみようと思うんだ。そうすれば、『ゲート』がどうやって発生したかっていう情報が手に入るかもしれないし……それに、もしかしたら『ゲート』から出てきたって言う子もいるかもしれないと思うんだ」

「……つまり、そうやって情報を得るために警戒対象になる人間は近くにいないほうがいいってことかしら？」

「うん。『青の農村』にいる子たちは人に慣れているからそんなことは無いんだけど、他所の子はどうしても人に敏感だから……」

そう言うと、クーデリアは腕を組んで悩み……大きく息を吐いてから首を振った。

「わかったわよ。……でも、自分の身の安全を第一に考えてよね？」

『青の農村』の近くならともかく、あの状態のあんたは、毛目当ての人に襲われかねないんだから」

「あはははっ……うん、それは命一杯気をつけるよ」

霧の廃墟

そんなわけで、こうして金モコ状態で『霧の廃墟』まで来たんだけど……

「うーん、やっぱり僕の知っている『ゲート』と同じっぽいなあ……」

『ゲート』を構成している光の色は赤……つまり「火」の属性の『ゲート』で、火の属性での攻撃は通じないはずだ

『黄昏の玉座』で見たのは白で「光」だったっけ？……色々属性があるのも僕の知っている『ゲート』と同じだね」

……となると、後はこの『ゲート』からモンスターが出てくれば ほぼ確定なんだけど……

そう思いながら、僕はジイーっと『ゲート』を見つめ続ける

……何分間か経っても『ゲート』はうんともすんとも言わなかった

原因を考えるとすれば、この『ゲート』の周囲にモンスターが十分にすぎで、これ以上出てこないように制限のようなものがかかっているか……それか、そもそもモンスターが出てこない……僕の知っている『ゲート』とは別物か……

「……とりあえず、この採取地にいるモンスターたちから話を聞いてみるかな」

そう考えて、廃墟から出たんだけど……

「ケケケケケッ!!」

「うわあ!?!」

出てすぐに遭遇した幽霊系のモンスター『スケアファントム』たちは、話をするなんて気は無さそうで、すぐさま襲いかかられた

そう。僕が金モコに変身したからといって、絶対にモンスターに襲われないわけじゃないのだ

話を通じないわけじゃない……とは思うんだけど、襲ってくるモン

スターも結構いる。それも「この種族のモンスターは襲ってくる」と断言できるわけでもなく、同じ種類のモンスターでも個体によって違ったりもするみたい

考えられる原因は、そのモンスターの「食性」、「縄張り意識」、「性格」など。そのあたりの違いによって襲ってくるかどうかが決まっているように感じる

「ハア、ハア……やっぱり幽霊系のモンスターは話を聞いてくれそうにもないなあ……」

幽霊系のモンスターは「怨念の集合体」だなんて言われていることもあるけれど、そういうところが理由なのかな？ とはいつても、調べようもないからどうしようもないんだけどね

「ええっと、ここにいる他のモンスターは……」

キョロキョロとあたりを見わたすと、金モコ状態の僕の背と同じくらいの高さの 黄色い棒のようなものが二本並んでいるのが見えた。ゆらゆらと揺れるその棒のようなものの正体は……

「ぷん〜」

黄色いぷにの頭(?)の上から生えている耳(?)だった

……実際にそれが耳なのかは不明だけど、その二本がウサギの耳のように見えるためかその種類のぷにには『耳ぷに』という名前が付けられている。なお、体が白い『耳ぷに』は『うさぷに』と呼ばれたりするようだ

何はともあれ、僕はその『耳ぷに』と話をしてみることにした

「こんにちはー」

「ぷににー」

ファーストコンタクトは成功だ。この調子で話を続けてみる……

「実は少し聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」

「ぷに?ぷににーに、ぷにぷぷっ」

「アツチにある光の渦の事なんだけど、何か知らない？」

3年目：マイス「モコツコモツコ！」

霧きりの廃墟はいきよ

僕は数日間かけて、『霧の廃墟』に存在した『ゲート』とその周囲、そして最寄りの採取地やそこと繋がる道にいたるまで、色々調べていった

新たに分かったことも少なからずあったけど、ゲートについては分からないことだらけだった。

それは、そもそも僕がゲートやゲートの主な成分である『ルーン』について元々詳しくなかったことも、分からなかった理由のひとつだと思ふ

「それにしても、思った以上にゲートから出てきたって言う子が多かったなあ…。でも、『シアレンス』で見かけるようなモンスターは全くなかった…。本当に『はじまりの森』に繋がっているのかな？」

そんな事を思いながら、ゲートへの対処の仕方を考えた

発生条件がわからない以上、やっぱりシアレンスにいたところと同じで、とりあえず壊すしかないのかもしれない

……まあ、何はともあれ調査はいちおう終えたわけなので、『青の農村』の家へと帰る事にする

息を整えて、ある準備をする

『リターン』！

そう唱えると、僕の視界は光に包まれた

青の農村・マイスの家の前

僕の視界をおおっていた光が消えると、目の前に見えたのは見知った家の玄関だった

……けど、そこで気がついた。
ドアの取っ手が目線よりも高い。…つまりは、僕が小さいんだ

あつ！金のモコモコの姿のまま帰ってきちゃったんだ!?

とは言っても、そこまで焦ったりはしない。なぜなら、『青の農村』自体は意外と金モコ状態で歩き回ったりして、村にいるモンスターたちから話を聞いたり、健康状態をチェックしたりしているので、村の人たちも金のモコモコにそこそ慣れているのだ

……もちろん、金モコが僕だと知っている人はいないから、ついうっかり「モコモコ」など以外の普通の言葉を喋ったら大騒ぎになると思うけどね……

とりあえず、裏手のモンスター小屋か何処かで変身してから、改めて家に入ろう

そう思っただけ……

「じー……」

「モ、モコ!?!」

視線……というか声を聞いて 慌てて振り返る。擬音語を口で言うような人物……その要素から思いついた通り、そこにいたのは……！

「わあ！モコちゃんだー!!」

「モコ!?!」

ほとんど跳びかかるようにして 金モコ状態の僕をガツシリと捕まえたのはロロナだった。ロロナもファイリーさんほどじゃないけど、昔から金のモコモコのこと大好きなのだ

……ついでに言うと、ロロナには、その……なんとなくタイミングが無くて「僕||金モコ」だということを未だにあかせていない

僕を抱きしめたまま立ち上がった後、両手を僕のわきに通して腕を

伸ばし……つまり、目線の合う高さを持ちあげた状態で、ロロナは僕に一方的に話しました。

「久しぶりだねー！元気にしてた？」

「も、モコ」

とりあえず頷くと、ロロナは「そっかー！」と嬉しそうに笑った。「トトリちゃんから「リオネラさんがマイスさんの家で抱き抱えてたー」って聞いてたから一応は知ってたけど、『青の農村』に住んでるんだね！」

そう言われて思い出したのは、ロロナがアストリッドさんを探しに旅に出た頃のこと

『青の農村』ができたのもちょうどそのころで、ウチの人たちに農業を教えた頃は金モコ状態になる機会も少なかった。そして、ちよくちよく帰ってきたりもしてたけど、本格的にロロナが街に帰ってきたのはつい最近で、その間は本当に金モコ状態では会っていなかったわけだ

そう考えると、ロロナにとつては本当に久しぶりの再会なんだろう……僕としては、つい先日に出会ったんだけどね……

そんな事を考えながら、僕はロロナの言葉に首を振ってみせた

「ええっ？ 何か違うの？」

「モコ！モコモコ、モココッ！」

身振り手振りを少し加えながら、「『青の農村』に住んでいるわけじゃない」と伝えようとする……伝わるかはわからないけど

そう伝えるのには理由がある。『青の農村』に住んでいると思われて、昔の……まだ「僕〓金モコ」と知らない状態のフィリーさんのように「遊びに来たよ！」と村に来られると、少し困る。二重生活は思った以上に色々大変なんだ……

「うーん……わかんないや……」

「モコ……」

「わわわっ!?そんなに落ち込まないで……！ うーん……困ったなあ……」

伝わらなかった事に肩を落とした僕（金モコ）を見て、ロロナは慌

ててしまい、何故か悩み込んでしまった

「そうだ！ おわびってわけじゃないけど、わたしのアトリエに『パイ』食べに来ない？ …うん！ そうしよー！」

「モココ!?」

僕の意思は!?

そう思い、反論して止めようと思ったのだけど、それよりも早くロナが僕を改めて抱きしめ、移動を始めてしまう

「それじゃあ、しゅっぱーっ！」

「モ……モココオ……」

息ができなくなるほどではないんだけど、少し強く抱きしめられてしまつて、逃げられず苦しいなか、ロロナに運ばれてアーランドの街へと連れていかれてしまうのであつた……

ロロナのアトリエ

「そこでちょっと待ってね。すぐにできるからー」

そう言つて抱きしめていた僕をアトリエのソファアに降ろしたロナは、コンテナへと向かつて行つた

「モココー……」

それにしても、どうしようか……

アトリエ（アトリエ）に来るまで、何人かの人に会つた

アーランドの街と外とを区切る門にいた門番さんは、ロロナに抱き抱えられた僕を見て驚いた顔をした……が、何があつたのかすぐに笑顔になつて通してくれた。街に入つてからすれ違つた人たちも大体同じ反応だつた

…考えられるとすれば、やっぱり首に巻いている『青い布』の効果なのかな？

昔、ジオさんが提案して広めてくれ、その後、『青の農村』の由来と

もなった青い布。元々はたまたま金モコ状態の僕が身につけていただけだったんだけど、そこから広がっていき、僕の家の人に住み着くようになった。「人に友好的なモンスター」の証となっていた。それが『青の農村』内だけでなくて、ちゃんと街の人たちにも定着したのかもしれない

…それはそれで嬉しいことなんだけど……この状況、どうしよう？
鼻歌交じりに「ぐるぐる」と言いながら『パイ』を調査しているロロナを見る

このままここにいってもそこまで問題ではない。もちろん、色々しなきゃいけないことはあるんだけど、必死になって逃げてまでするんじゃない

やっぱりまだ金モコ状態で一人で街を歩くのには不安がある。
……まあ、いざという時はアトリエの裏手の陰にでも隠れて変身すれば問題は無い……かな？

「モコ〜…」
それに……

「ふーんふーん、ふふふーん」

ロロナがあんなに嬉しそうにしているんだ。いきなりいなくなっちゃったりしたら、悲しんでしまうかもしれない。だから、少しだけの間、このまま付き合ってもいいよね？

コンコンコンツ

そんな事を考えていると、アトリエの玄関の扉がノックされる音が聞こえてきた

「はい、どうぞー」

ノックにそう答えるロロナを見て、僕は「昔は集中し過ぎてノックの音に気付かなかったり、逆に集中を乱して慌てちゃって爆発させちゃったりしていたのに、成長したなあー」なんて思っていたんだけど……

「お邪魔します…」

「ああ、ミミちゃん。いらっしやーい！」

ああ、本当だ。お客さんはミミちゃんだったのかー……って、ミミちゃん!?

そう驚く僕をよそに、釜をかき混ぜるロロナが申し訳なさそうにミミちゃんに言った

「ごめんねー。トトリちゃん、まだ『アランヤ村』に行つたままなんだー」

「そう、ですか。すみません、何度もお邪魔しちゃって……」

「いいよー、気にしないで。…あつ、そうだー！ 今ちようど『パイ』を作つてるところなんだ。もうすぐ出来るから、せつかくだし食べていってよー！」

そんなロロナの誘いにミミちゃんは「ええっと……それなら」と少し悩みながらも頷いたようだった

「それじゃあ、その子と待っててー」

「……？ その子？」

ロロナにそう言われて首をかしげたミミちゃんは辺りを見渡し……そして、ソファアに座っている僕に気がついた

「……………」

「モモコー……？」

どうしていいかわらず、こんにちは……？といった感じに軽く頭を下げてみる

「……………」

……どうやらミミちゃんのほうも どうしていいかわらなかつたみたいで、なんとなく頭を下げて僕の隣に座ってきた。……そこまでモンスターには敵対心……というか嫌悪感は無いみたいだ

その後、ロロナが作ってくれた『パイ』と一緒に食べたんだけど、金モコ状態では初対面なわけだから当然と言えば当然だし、モンスター

であることを考えればいいほうだったのかもしれないけど、ミミちゃんとは何とも言えない距離感のままだった

……でも、普段避けられてるから、それに比べたら凄く距離が近く感じてしまうのが悲しいところだなあ……

それと、コロナからの久々のモフモフは、とても疲れた…

3年目：イクセル「肉料理と酒」

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。毎度おなじみ、アーランドの街にある『サンライズ食堂』を任されているコックだ

今日も もう日が沈んでしまい、冷え込みだし薄暗くなった街。そして、今日の『サンライズ食堂』は客がほとんどいなかった。だが、別に何かあったわけではないから、たまたま今日がそういう日だった……というだけだろう

さて、今日もマイルスが『サンライズ食堂』に来ているんだが……かなり珍しい状況だ

とはいっても、別に組み合わせが珍しいわけではない
この組み合わせで『サンライズ食堂』にくるのが珍しいのだ

調理中の俺がチラリと目を向けたテーブルにいるのは、マイルスと
コオル

コオルっていうのは、アーランドが王国だった時代から街を中心に行商人をしていた子供だ

その言葉通り、王国時代なんかはまだ年齢も一桁で、今でもまだ未成年なのだが……五歳年上のはずのマイルスと同じか……それ以上に見えるくらいにはしっかりと成長している

……いや、この場合はコオルが異常に成長しているというよりも、マイルスが成長していないだけかもしれない。……絶対そうだろう

そんな「年齢が逆なんじゃないか？」と思えるコンビだが、その繋がりには結構深いものだ

というのも、マイルスが『青の農村』をなりゆきで立ち上げた際に、コオルは『アーランドの街』から『青の農村』へと活動の拠点を移し、王

国時代にマイルスと交流が有ったからか村の中でも重要な役回りに就いたのだ

それゆえに、村の行事とか何かあった時を中心にマイルスとコオルは一緒にいたり、同じ物事に共同で取り組んだりすることがあるわけだ

：けど、そんな二人だが、ここ『サンライズ食堂』にそろって来るか？と聞かれたら、ほとんど来ない

それぞれがなにかしらの用……例えば、野菜の取引の確認なんかに来たりはするが、二人そろっては無い。二人で一緒に何かを食べるにしても、わざわざ街に来なくとも『青の農村』の中にある『集会場』なんかで済ませられるからな

じゃあ何で今日は『サンライズ食堂』に来たのか……

まあ、注文の内容を見ればすぐにわかったんだがな

「よし、っと」

調理を終えて、盛り付け、テーブルへと運ぶ準備をする
その途中、耳にマイルスとコオルの声が少しだけ聞こえた

「でも………そういう………？」

「だから………だって言っただろ？………だな」

聞こえたのは途切れ途切れではあるが……何やらマイルスがコオルから教えて貰っているようだった

ちよつと気になるから、料理を持って行った時に少し二人から話を聞いてみることにする

……店的には嬉しく無いことなんだが、客が少ないから厨房を少し離れても問題無いだろう

「おまちどうさん！注文された料理、全部できませ」

そう言っただけで持っていくと、水の入ったグラスを持っていた二人がこちらを向いてきた

「あつ、ありがとうございます、イクセルさん」

そう、いつも通りに礼を言ってくるマイルス

対して、コオルのほうもいつも通りに……こちらはマイルスに比べ幾分フランクな感じで俺に言ってきた

「ありがとなー……ああつ、わざわざ来たかいがあつたぜ」

「そう言ってもらえると嬉しい限りだな。……つーか、ここに来るのはやっぱりコレ目当てか」

俺が言うコレとは、『イクセルプレート』という料理。自分で言うのもなんだが、超力作の一品だ

……で、何故それがそんなにコオルが嬉しそうなのかと言えば……

「……まあな。『青の農村』じゃあ魚系はあっても、肉系はほとんどメニューにないからさ」

そうコオルが言う通り、街とは違い『青の農村』では肉料理というものが1、2種類くらいしか無く、特別美味いほどではないのだ

その理由は……一見、複雑そうで簡単だ

『青の農村』が人とモンスターと共存する村だから……というわけでは無い。第一、モンスターの中には肉を主食にするヤツもいるんだから、そんな肉を禁ずる決まりがあったりはしない。……とは言っても当然のことだが村の住人・住モンスター(?)たちは互いに、モンスターが人を喰おうとしたり、逆に人がモンスターの肉をはぎ取ったりすることは無いのだが

じゃあ、何故、肉料理が発展しないのかと言えば……

「あはははっ……ゴメンね。肉料理はさっぱりで……」

そう申し訳なきように……そして、苦笑いをしているのは、目の前に魚料理が置かれたマイルスだ

マイルスは、以前いた地域の文化・食生活が理由で、昔から肉料理が

苦手なのだ。マイルスもマイルスなりに頑張ってはいるようだったが……一口二口が限界のようで、未だに苦手なままだそうだ

それが、『青の農村』の食事情とどう関係しているかと言うと……それは、『青の農村』の料理の大半がマイルスの故郷の料理を、マイルスが再現しレシピにしたものだということ

つまりは、そのレシピたちの中には肉料理は無い。そのうえ、種類が豊富で美味いため、『青の農村』の店・各家庭は、従来から変わりの無い肉料理から離れていき、マイルス発案のレシピの料理が浸透・定着していったわけだ

もちろん、新たな料理も開発されたりはしているのだが、第一人者マイルスが肉料理が苦手なことによって、他よりも肉料理がそこまで発達しなかったのだ

まあ『サンライズ食堂』では料理の改良は欠かしていないため、どんな種類の料理でも自信を持って提供できるので、肉料理であっても他所には負けない一品を出せるわけだ

「別に『青の農村』の料理だって嫌いじゃないぜ？むしろ、好きなくらいだ。けど、たまにはこう……ガツン！とくる感じの肉料理も食べたくなるからな」

「ううん……肉料理、開発……」

頭を抱えだすマイルスを見て、笑いながら「まあまあ、無理すんなって！」と言うコオル

色々と趣味趣向の違いはあるみたいだが、コオル一人で来ればいいところを、こうやってわざわざ二人で来るあたり、結構仲は良いみたいだな

「そういえば……話は変わるんだが、二人はさつきまで何話してたんだ？」

俺がそう聞くと、コオルが「ああ、あれか？」と口を開いた

「やっぱりマイルスは商売には向いていないなって話」

それを聞いた俺が「どういうことだ？」と首をかしげると、変わってマイルスが話を続けた

「この前、トトリちゃんのお手伝いをしたんだ、村の酒場にお客さんを増やすための名物酒作りのお手伝い。…その話をしたら、コオルに呆れられちゃって……」

「ん……？何でだ？ 何か面白そうな話じゃねえか」

「競争する店もほとんど無い……『青の農村』とは違って近くに大きな街も無い、そんな漁村の酒場なんだぞ？ まず外から人を集められるようにしなきゃ効果が薄い。交通の便はもちろんだが、まずは「来たい！」と思えるような 村のアップीलポイントが無いとだな……」
スイツチが入ったように語りだすコオルに、俺とマイルスは苦笑いを浮かべた

……これが商売人の性さがと言うヤツなのかもしれないな……

それにしても、あのトトリが作った酒か……少し興味があるし、ちよいと本人に話を聞いてみるか？

いや待て。確か、今はその『アランヤ村』に帰ってるんだったか？

……じゃあまたの機会だな

4年目：トトリ「お母さんとクーデリアさん」

冒険者ギルド

年も変わってから、また『アーランドの街』へと来たわたし

免許取得から3年の期限で一定以上の冒険者ランクにランクアップしていないと免許を取り消されてしまうから、色々頑張つて……それで、ポイントが貯まったから、ランクアップのために『冒険者ギルド』に来ただけ……

「んー…ふむ……」

「どうしたんですか？わたしの免許ジツと見て…」

ランクアップ手続きを終えて、わたしに免許を返そうとしていたクーデリアさんがふと手を止めて、わたしの免許を凝視しだした

「いや、今更なんだけど、あんたの苗字つてヘルモルトなんだなーつて。ひよつとして、あのギゼラ・ヘルモルトの身内だったり……なんてことは流石に……」

「あ、はい。お母さんです」

わたしがそう答えると、クーデリアさんは「うんうん」と一人納得したように……

「ま、そうよねー。見た目は似てなくもないけど、性格は別物だし、ただの偶然よねー」

……つて、わたしの言ったこと、ちゃんと聞いてない!?

「偶然じゃないですよ！お母さんですよ！クーデリアさん、お母さんのこと知ってるんですか？」

「…お母さん？本当に？」

「本当です!!」

わたしの言葉に訝しげに目を細めていたクーデリアさんだったけど、一度大きな息を吐くと信じてくれたのか大きく頷いた

「そう、本当なのね……よし、とりあえず母親の代わりにあんたのこと
2, 3 発ひっぱたこうかしら」

「何でもいいですから、それよりお母さんのことを……えっ？ ひっぱ
たく？」

何で？ ……というか、わたし、なんだか言っちゃいけないこと言っ
ちやったような気がー……

「いいのね？ そんじや歯食いしばってー……」

良い笑顔で肩をグルングルン回すクーデリアさん。ひっぱたく気
満々なのが見てわかる

「わああーひっぱたかないください！ なんでひっぱたかれないと
いけないんですかー!？」

「なんで、ですって？ あんたのお母さんのおかげで、あたしがどん
だけ大変だったと思ってるの!？どこで大暴れしたただの、橋を落しただ
の、往来のど真ん中で酒盛りしてるだの……毎日毎日、一体いくつの
苦情を処理させられたことか！」

そう言っただすクーデリアさん

その様子は前に『サンライズ食堂』でミスさんに向かって怒って
いたのと同じかそれ以上の勢いに思える

……というか、お母さんは何をしてるんだろう……？

『アランヤ村』でお母さんのことを聞いて回った時に、酒場でゲラル
ドさんから「遺跡を壊したー」……なんて話を聞いたけど。……あの時
は冗談半分、本当かなーなんて思いながら聞いてたけど、もしかして
……

「え……それ全部、お母さんが？」

「そうよ！ まだ冒険者制度が始まったばかりで、あたしだって仕
事に慣れてなくて、ただでさえてんやわんやしてたのに！ あいつ一
人のせい……！ あー！ 思い出したらまた腹が立ってきた！」

「あああ、ごめんなさい！ とにかくごめんなさい！ でもあの、お母さ
んってすごい冒険者だったって聞いてるんですけど……」

「聞いてるってどういうことよ。あんたのお母さんのことでしょ？」
ひっぱたこうとあげていた手を降ろして腕を組んだクーデリアさんが、不思議そうにして首を少しかしげた

「それが……わたし、お母さんのことほとんど覚えてなくて。それで噂くらいでしか……」

「ふうん……？ まあ、すごかったのは確かよ。良い意味でも、悪い意味でもね。……これでもかかってくらい迷惑かけられたけど、冒険者としての功績もそれ以上に挙げてたし」

「そうなんだ、良かった……あつ、でももしかして、お母さん実は嫌われてたり、とか……？」

「少なくとも、あたしにはね。他の人にはどうかは知らないけど……あつ、いや……うん。たぶん」

……？

よくわからないけど、なんだかクーデリアさんが何か言葉を詰まらせたような気が……。とういか、「たぶん」っていうのも、凄くに気なる

「……でも、悪口とか言われてるのは聞いたこと無いわね、不思議なこと……って！ なんてあたしがフォローするようなこと言わなきゃならないのよー！」

「わあーまた怒った!？」

「ああ、もうダメだわ！ 直接会って文句言ってやんなきゃ、気がすまない！ どこにいいんのよ、あんたのお母さんは?! こっちには長いこと顔出して無いし……」

「あ……やっぱり、クーデリアさんも知らないんですね。お母さん、もう何年も帰ってきてないんです」

「何年も？ それって……」

クーデリアさんの表情が驚いたものに変わって、声のトーンも少し低くなる

「で、でも、お母さんのことだし、きっとどこかで元気にやっていると思

うんです！ だから、わたしはお母さんを探すために冒険者になって、それで、ええつと……」

「…そうね。簡単にくたばるようなタマじゃないだろうし」

そう言うクーデリアさんの口元は、少しだけだけど笑みを浮かべているように見えた……

「っーかね！ そんな事はもつと早く言いなさいよ！ そしたら、あたしのほうでも情報を集めたりとか色々できたのに!!」

「ご、ごめんなさい。てつきり、先生から聞いてるかと思つて……」

「ま、いいわ。何かわかったら教えてあげる。他の冒険者連中にも聞いてみるわ。誰かしら知ってるかもしれないし……ね……？」

……どうしたんだろう？ クーデリアさんが段々と首をかしげていき、なんだか難しい顔をしだした

「……ねえ。あんたのお母さんのこと、ミスに聞いた？」

「えっ、あ、はい。聞いてますよ？」

「そう……それで何て？」

「たしか、「何年前か前に家に来てから会ってない」つて。その時期はちようどお母さんがいなくなった時期と同じだったみたいです」

「ふうん、そう……」

そう言ったかと思うと、クーデリアさんは目を閉じて 何かを考え込みだしてしまう

「あのー…、クーデリアさん？」

「…ん？ ああ、ごめんなさいね。ちよつと気になることがあつて」

気になること……？ それも気になるけど、それよりも聞きたいのは……

「前から気になってたんですけど、ミスさんつてわたしのお母さんと何か関係があつたんですか？ なんだか仲が良かったみたい聞いてるんですけど」

「あの二人の関係ねえ？ あたしも本人からは「友達」としか聞いてな

いけど。知らないうちに仲良くなってたし」

「そうなんですか？」

わたしが聞くとクーデリアさんは大きく頷いて、その後、何故かため息を吐いた

「まあ、はたから見れば友達というか……なんだかよくわからない関係ね。それもお金絡みの」

「お金絡み……？　　なんだか凄く嫌な予感がするんですけど……」

「あら？　良い勘ね………あんたのお母さん、マイルスに大量の借りがあ
るみたいよ？　それも下手すれば国の予算並みの」

……わたしは目の前が真っ白になった

4年目：トトリ「お財布事情」

ロロナのアトリエ

「うう……んっ……？」

あれ？ここは……先生のアトリエのソファア？

上半身を起き上げて、そのままソファアに座る

……うーん？いつの間にか寝ちゃってたのかな？

「あー、トトリちゃん起きた？」

「先生？ ええつと……おはようございます？」

トコトコと歩いてきたロロナ先生が「はい！お水」と、わたしにコップに入った水を渡してきた

「ありがとうございます」

「どういたしましてー！」

先生はそう言ってわたしの隣に座った

「心配したんだよ？ 冒険者ギルドでトトリちゃんが倒れたーって聞いて、ビックリしちゃた」

「冒険者ギルドで……わたしが倒れた……？」

そういえばわたし、『冒険者ギルド』に冒険者免許のランクアップをしに行っ……

……

……

……

あつ

「……………（ガクブル）」

「ふえ？水がこぼれ……わあ!! ど、どうしたの!？」

手も震えて、持っていたコップの中の水が、ピチャピチャとはねてこぼれてしまってる……けど、震えを止めようと思っても、上手くいかない

結局、コロナ先生がわたしの手の中からコップを取り上げて、とりあえずは落ち着いた……

「トトリちゃん、大丈夫!? な、なな何か痛いところとかあったり、気分が悪かったりするの!?!」

「頭……とお腹が痛い気が……」

「お薬、用意しなきゃ!……いや、それとも病院!?!」

「…そうだけど、そうじゃないです……」

これは病気とかそう言うのじゃなくて、もっとうこう……精神的な何かのせいであって……

「その、ですね。少し……全然少しじゃないんですけど……悩み事があって……」

「悩み事?それならわたしに相談してよ! わたしはトトリちゃんの先生なんだから、遠慮しないで! さあ、さあ!」

いつも通りに元気な先生を見て、少し落ち着きを取り戻したところで、例の事を順序立てて説明していつてみる

「悩み事っていうのは、わたしのお母さんの……お財布事情のことで……」

「トトリちゃんのお母さん……ギゼラさんの? そのお財布事情ってことはお金のこと?」

「ハイ……。それが、お母さんがミスさんに借金をたくさんしてるらしくって……」

「え? マイス君に?」

ここでミスさんの名前が出たことが予想外だったのか、コロナ先生は少し驚いて……そして、眉をハノ字に、口をへ字に曲げて「うーん……」と悩み込んだ

「ギゼラさんのことは、ミス君から色々聞いたことはあるけど……」

お金のことは一回も聞いたこと無いよお？ そのお話、何処で聞いたの？」

「クーデリアさんです……」

「くーちゃんから!?…ウソとかからかったりで言ったり……は、さすがにない、かな？」

「でも…」と先生はなんだか信じられないようで、首をかしげた

「その……実は、ちよつとだけ心当たりっていうか、似たようなことがあつて……」

「なあに？」

『アランヤ村』にあるゲラルドさんのお店で聞いた話なんですけど……、お母さん、一度もお酒とかの代金を払ったことが無いらしくつて」

「……………」度もっ？」

「はい、「払います」って言ったら「とても払える金額じゃないぞ」って……。一応ゲラルドさんは「土産話の代金だと割り切ってるから、気にしないでいいぞ」って言ってくれましたけど……」

そうは言ってくれたけど、ゲラルドさんのお店はあんまりお客さんが来ないから、お世辞にも儲かっているわけじゃなくつて、罪悪感が……

わたしがこの間作った『アンチョビア』：『ビア』と『コヤシイワシ』で作ったお酒が人気が出て、ゲラルドさんのお店の儲けに繋がつてくれれば……でも、アレ、生臭いだけで到底人気が出そうにないんだけど……つて、作ったわたしがこんなこと言っていて良いのかな？

「……そんなわけで、もしかしてお母さん『青の農村』でも似たようなことをやったんじゃないかなーつて。それでミスさんが代わりに払ったとか……」

わたしはそう思ったから、言ってみただけど……

でも、ロロナ先生は何故かさらに首をかしげてた

「ええつと、そういうことは無いと思うよ……たぶん」

「……？ どうしてですか？」

「だって、マイルス君言ってたもん「ギゼラさんイツパイ食べるから、めいっばい御馳走を用意するんだ」って。…そうしたら、ギゼラさんがお店で食べたりすることは無いと思うよ？ それに、マイルス君のおもてなしは凄いいけど、それで代金を請求したりはしないんじゃないかな？……わたしなんか、いつもおすそわけとかイツパイもらっちゃってるし」

ロロナ先生に言われて、わたしはふと思い出すことがあった

それは、まだロロナ先生が旅をしていて『アーランドの街』にいなかった頃。わたしとジーノくんが初めて『青の農村』のマイルスさんの家にお邪魔した。あの時、突然家に来たわたしたちをマイルスさんはお菓子や美味しいゴハンでもてなしてくれた。その上に泊まらせてくれて、翌日の朝ごはんも……

確かに、先生の言う通りで普段のマイルスさんのことを考えると、ゲラルドさんのお店みたいな状況にはなりそうには思えない。……でも

「それじゃあ何でクレーリアさんはあんなことを？」

「うーん…、そればかりはくーちゃんに直接聞いてみないとわからないかなー？ ……もしくはマイルス君本人に」

「マイルスさんに聞くのは、ちよつと気が引けるというか、何と言うか……」

コンコンコンツ

ふと、アトリエの玄関からノックの音が聞こえてきた

「あれ？お客さんかな？ はーい、どうぞー」

そう言っつて先生はソファアールから立ち上がって玄関のほうへと行っつた

「やあ、久しぶりだね、ロロナ」

アトリエに入ってきた人は、わたしもちよつとだけ知っている人で、先生の知り合いらしい人……

「わああ!?! タントさん!」

「あつ、トリスタンさん」

「えっ?」

わたしと先生が顔を見合わせる

「あれ? トトリちゃん、タントさんのこと知ってるの?」

「はい。前にアトリエの前で会って、ちよつとだけお話したことがあつて……。あのー…先生? トリスタンさん、ですよ?」

そうわたしがいうと、先生じゃなくてトリスタンさんが笑いながら答えてきた

「いいんだよ。僕がロロナにそう呼んでくれるように言ってるんだ」

「というか、けっこう最近までタントさんが偽名だったって知らなくて。それに、もう「タントさん」で呼び慣れちゃってるから、逆に今から変えるっていうのも……」

「偽名って……。一体何が……?」

先生とトリスタンさんが知り合いだつていうことは知ってたけど……なんだか複雑そうだなあ……。でも、仲が悪いつてわけじゃなさそうだし……。どういう関係なんだろう?」

「タントさん、元気そうでよかったです! 最近、前みたいに街中で見かけないからちよつと心配だったんですけど……。お仕事、忙しかったですか?」

「いやまあ、忙しくはあつたけど……。色々あつたんだよ……。あはははつ」
そう言うトリスタンさんは苦笑いをして明後日の方向を向いていた

……。なんだか、髪の毛を指でクルクルしてるんだけど……。それも凄く触ってる

「あつ、そうだ！タントさんなら何か知ってるかな？」

「えっ？トリスタンさんが？」

「うん！ギルドじゃないけど、一応クーちゃんと同じで国勤めだから」
国勤めって、確かに『冒険者ギルド』は国営だけど、ええ…そんな理由で大丈夫かな…？　　とうか、トリスタンさんも国勤めなんだ…ちよつと心配になってトリスタンさんを見ると「ん？どうかしたのかい？」と薄い笑みを浮かべて、軽く首をかしげてきた

そんなトリスタンさんに、ロロナ先生が話を切りだす

「さっきまでトトリちゃんと話してたこと…：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～マイス君とギゼラさんのこと」

「…：：：：：わあお」

「…：：：：えつと…、トリスタンさん？　　なんだか今までで一番嫌そうな顔をしたような気がしたんですけど…：：：：」

「あははは…：：：：最終的には色々と助かったんだけど、その組み合わせには本当に頭を悩まされたからね」

そう言うトリスタンさんは、なんだかとても遠い目をしてた…：

クーデリアさんの時といい…：：：：お母さんって本当にいろんな人に迷惑かけてるんじゃないやあ…？…：：：：今更、かな

「何から話せばいいのか…：：：。そうだね、まず今現在ある、とある制度についてになるんだけど…：：：」

「とある制度、ですか？」

「そう。国にとって大事なものが何かしらの被害を受けた時に使うための財源…：：積立金があるんだ。例えば自然災害。川が氾濫して橋が流されたり、落石で街道が塞がれたりした場合に、その復旧や被害への手当てに使える制度があるんだ」

トリスタンさんは「他にも、モンスターによるものや、冒険者による被害なんかも、その積立金からやりくりするんだ」と言って…：

「って「冒険者」ですか？その…：：：：もしかしなくても、それって…：」

「そう、その筆頭がギゼラっていう冒険者」

予想通りでした……。それも天災と同列扱い

「…で、その積立金の財源なただけで、税金と寄付金で成り立ってるんだ。その寄付金……というか、この制度のそもそもの始まりがマイルス…彼にあるんだ」

「マイルス君に？ どういうことですか？」

先生が首をかしげてますけど、わたしにはもう予想がついたっていうか……でも、そうであってほしくないという気持ちも……

「難しい取り決めなんかは省くけど、『冒険者ギルド』が出来るよりも前…、王国時代にマイルスがギゼラつて人の出した被害のお金を代わりに払ったことが何度かあって……で、共和国になってから制度を色々決めている時に、彼からの申し出もあってそのまま彼からのお金が使われるようになったんだ」

「ええつと……その、つまり……マイルスさんがずっと被害のお金を立て替えてたってことですか……？」

「まあ、そんなところだね。物事によっては一回で数十万なんて金額にもなるから、うちの親父なんかは色々と不満げにしてたけど、マイルス本人からの申し出だからそう強く否定できなくて……って、どうしたんだい？」

「うう……うぷつ……」

な、なんだか涙がいっぱい溢れてきて……それに凄く頭が……いや、吐き気も……それにお腹もキリキリ……

「わあああつ!? と、ととと、トトリちゃんの色が、それと涙で顔自体がすごいことになっちゃってるうう!？」

「ろりよなせんしえー!？」

一回で何十万ってこともあるって……それが何回もあったら、いったいお母さんはマイルスさんに何十万……いや何百万コール借金してるんだろう……あれ？ わたしが凄く頑張ってお仕事しても、一生かかるんじゃない？

わたしの手元には10万あるかないかで、おねえちゃんは働いてるけどゲラルドさんのお店だし……。お父さんは家にいるか釣りをして

るかで……あれ?……あれ?

「……ねえ、ロロナ。彼女、何でこんなに……」

「そのですね……ギゼラさん、トトリちゃんのお母さんで……」

「あっ……」

4年目：マイルス「春の陽気に誘われて…」

マイルスの家前・畑

早朝。まだ冬の寒さは残るものの、段々と春らしい陽気になってきた今日この頃

長年の習慣になっていて、むしろしないと落ち着かないレベルになっっている畑仕事で扱う井戸水。その身を裂くほどの冷たさも幾分和らいだ感じがする

畑の作物の様子を確かめながら作業を続けている僕に、声がかけられた

「あいかわらず、朝は早いんですね」

「なー」

お客さんの足元にいるのは、『青の農村』の看板ネコのマスコットに落ち着いている元・「こなー」、現・「なー」だ。……ついでに言うとうと、1、2年ほど前に3匹の子供を産んだお母さんでもあったりする

こんな朝早くは村の集会場、もしくはウチのモンスター小屋で寝ていることが多いのだけど……今日は早起きさんのようだ。その理由はもちろん、なーがすり寄っているお客さんにあるわけで……

「やあ！おはよう、ホムちゃん」

「はい。おはようございます。おにいちゃん」

「なー」

ホムちゃんの返事に続いて、なーからも元気な鳴き声が返ってくる。そんな足元からのなーの声につられるようにして、自身の足元に目を向けるホムちゃん。その顔はわずかながらではあるけど確かに微笑んでいた

その様子を僕も微笑みながら見ていたけど、あと少し残っている畑仕事のため意識を手元に戻す

……けど、自然と頭の中では「この後ホムちゃんに出す朝ごはんは、何がいいかな？」という考えがめぐっていた

畑仕事を素早く終わらせた僕は、身なりを整えた後すぐに朝ごはん作りにとりかかった……んだけど、これまでホムちゃんが来た時とは違うところがあった

というのも……

「…ホムちゃん？あっちのソファでなーと遊んでていいんだよ？」

「いえ、今日はここにいます」

そう言うホムちゃんが立っているのは、キッチンにいる僕の左斜め後ろ…ギリギリ僕の視界に入らない位置。視界に入らないとはいっても、気配なんかはするからむしろ視界に入っている状態なんかよりもよっぽど気になる

なーはなーで、ホムちゃんが構ってくれないことにすねたりすることも無く、それどころか途中までついて来て、行先がキッチンだと確認したところで「おっ、ごはん作るの？あたしのもよろしくー！」と言わんばかりに「なーう」とひと鳴きしてからソファへと一匹ひとりで行ってしまっている

「それにしても……どうしたの？　こんなこと、珍しい気がするんだけど」

「実は最近、グラントマスターが少し食事にハマっていて……」

食事に対して「ハマる」という表現はどうなんだろう…？

そう一瞬思ったけど、ホムちゃんの言う「グラントマスター」…アストリッドさんのことをよくよく思い出すと、そこまで食に対してこだわりがあったりするような印象が無いことを思い出した。あってもコロナが作った『パイ』を喜んで食べたりしてたくらいかな？

僕がコロナのアトリエに持っていったおすそわけも、食べるには食

べるけど「うむ、悪くはないな」以上の感想を貰えた試しがない。ロナやホムちゃんは「美味しい」って喜んでくれてたから、そこまで不味かったわけじゃないとは思っただけ……

そんな点も踏まえて考えると……確かに、僕の知っている限りではアストリッドさんは別段食事に対して特別興味を持ったりすることはあまり想像できなかった

というか、『錬金術』の研究をしているときなんかは、コンテナから適当に引っ張り出したものをつまんで終わらせたり、それどころか食事自体忘れそうなイメージがある

「……そう考えると、ちよつと意外……というか新鮮？」

「何がですか？」

「えっ？ いや、ちよつと独り言」

そう言うと、ホムちゃんは「そうですか」と、そこまで気にした様子では無かった

「それでグランドマスターのことなんですが……グランドマスターもとても気分が乗った時には自分で料理することもあります。基本はホムたちが用意します」

「うんうん」

「それで、グランドマスターが飽きてしまわないように、新たにメニューを増やしたいのですが……基本的にホムの持つ料理の知識は、つくられた際にグランドマスターから授かった『錬金術』の知識の延長線上に存在するものであり、それではグランドマスターを今以上に満足させるのは難しいと判断しました」

「なるほど……だから僕が料理を作るところを見てみたかったんだね」

ホムちゃんの意図は大体理解できた

最初の頃は自覚は無かったんだけど、僕の知っている料理は『アーランド』にある料理と似たものもあったりするけど、似たようなものが全然無い種類の料理も結構ある。それが今のホムちゃんの知識……その大元のアストリッドさんの料理に関する知識を超えるヒン

トになる。そうホムちゃんは考えたんだろう

「……おにいちゃん？ 何故ホムを撫でるのですか？」

「ええつとー……なんとなくかな？」

そう言葉を返すと「よくわからない」といった感じに、ホムちゃんはいつものすました顔で少しだけ首をかしげた

その様子に少しだけ頬が緩んだけど、せつかくだからちゃんと褒めてみることにする

「そうだなあ……あえていうなら「命令じゃなくても、アストリッドさんを喜ばせようって考えるホムちゃんは優しいなあ」とか、「そのために頑張るホムちゃんは偉いなあ」……って感じかな？」

「つまり、ホムを褒めている、と？ ですが、ホムがグランドマスターのために働くのは当然のことですが？」

「それでもだよ。……どっちにしたって、僕がホムちゃんを褒めたって思ったことは事実なんだから」

「……？ よくわかりません……ですが、何故だか悪い気はしませんね……」

ホムちゃんは、かしげていた首を元に戻したかと思うと、少しだけ撫でていた僕の手を押し付ける様に背伸びをした……

「……背伸びをしたら、おにいちゃんと同じ目線になりました。不思議な気分です」

「それは言わないで欲しかったなあ……」

会った頃からそういう身長差だったけど、最近ちよつとずつホムちゃんの身長が伸びている気がして、抜かれるんじゃないかと一人ハラハラしていたりするから、精神的にあまり良くない

「なく？」

「まだ……？」と言いたいのか、いつの間にかソファのある部屋からキッチンまで来ていたナーが鳴いた

「ごめんごめん、今すぐ作るよ！……そうだ！ホムちゃん、見学じゃなくって一緒に作らない？そのほうが色々わかるんじゃないかな？」

「それはいい考えだと思います」

そう言ったホムちゃんは、「では、手を洗ってきます」と、袖の長い袖を少しまくりながら水瓶のほうへと向かって行った

「前に、なーのゴハンの作り方を教えたこともあるし……きっと大丈夫だよね？」

少しだけ不安に思いながらも、僕は朝ごはんの材料を取り出し、
く……

………それにしても、何か忘れてる気がするんだけど………？

………まあいつか

4年目：マイス 「属性の結晶」

ウチに遊びに来たホムちゃん。そこまで急ぐ用は無かったみたいで、数日間『青の農村』でゆつくりと過ごすことになったんだけど……

マイスの家・作業場

カンツ！ カンツ！ カンツ！

僕が金槌を振り下ろすたびに、作業場内に金属同士がぶつかり合う音が響きわたる。煌々こうこうと燃える炎が見える『炉』の熱気が感じられる場所で、僕は作業を続けていた

そして、ホムちゃんはというと、作業場の一角に置いてあるイスに座っていた。そして、その膝の上に乗っているのはなー。そのなーをホムちゃんは優しく撫でている

……うーん、ずいぶん前にも似たようなことがあったような……？

「どうかしましたか？」

「ん？いやつ、昔にもこんなふうに作業している僕のそばで、ホムちゃんとなーがいることがあったなーって思ってた」

「そうですね、昔、ホムが街に居た頃は時間がありましたから、こうしてゆつくりしていることもありました。なので、おにいちゃんが調合をしているところや鍛冶をしているところは何回も……」

そう言っていたホムちゃんが、ピタリツと口を……それだけでなく、なーを撫でていた手を止めてた

僕は、金槌を振りながらも「どうしたんだろう……？」とホムちゃんの様子をうかがってた

そして、少し経ってからホムちゃんは目を細めながら首を少しかしげて言ってくる

「……もしかして、今日も前みたいに食材で武器を作ってるんですか

？」

「いや違うよ？……というか、なんでそんな残念なモノを見るような目で見てくるのかなあ？」

「ホムはあの光景を忘れられません。あの、ダイコンやネギといった野菜、そしてタマゴやバターといったものを持って炉へと向かう、おにいちゃんの姿を……あの時は、本当にお兄ちゃんがおかしくなったのではと心配になりました」

「なーう」

まるでホムちゃん言葉の肯定するかのように鳴くなー

……そんなにおかしかったかな……？

「それでは、今日は一体何を？」

「今日は、コレだよ……と」

そう言って、今ちようど作り終えたものをホムちゃんに見せた

『アースワンド』。地の属性を持つ杖だ

「杖ですか……？ これまでにも何度か見てきましたが……何か違うんですか？」

「属性が……というよりも、使ってる素材かな？」

僕はそばに置いていた鍛冶用の素材を入れていたカゴに手を突っ込んで、あるものを取り出す

「これは『火の結晶』っていうモノなんだけど、その名前の通りで火の属性のチカラの塊のようなものなんだ。……で、この杖にはその属性の違いの『地の結晶』を使ってるんだ」

「属性の塊……？ 属性の『結晶』というアイテム……？ 初めて聞きました。ホムの知識にもそのようなものはありません」

「あはははっ……、確かにアースワンドでは見かけないものだからね。ごく最近まで、僕も手に入らなかったし……」

そう、この結晶系アイテムを入手できたのは、本当に最近のことだというのも、結晶系アイテムは『シアレンス』に居た頃によく使っ

ていた素材で、その時の入手法は鉱石を採掘して掘り当てるか、ゲートを破壊してドロップするのを待つか、どちらかである。

…で、アールランド周辺ではいくら採掘しても結晶系アイテムが出てくることは無かった。その時点で、結晶系アイテムが『アールランド』には存在しないものだとは判断した

しかし最近、原因不明ではあるけれど、アールランド周辺にゲートが発生するようになったことによって、その結晶系アイテムを手に入れられるようになった

モンスターを出現させるゲートだけど、そのゲートにはそれぞれ属性があり、その属性の攻撃は効果が無かったりする。さらに、ゲートは破壊された時に結晶系アイテムを落すことがある……それが、基本的にそのゲートと同じ属性の結晶なのだ

クーデリアの護衛として付いて行った『黄昏の玉座』。そして、その後の『霧の廃村』でのゲートの目撃情報以降も、度々ゲートの目撃情報があり、その度に僕はそこに行き周辺調査とゲートの破壊を行ってきた

今、僕の手元にある結晶系アイテムは、その結果手に入れたものだ

その事を、ゲートのことも織り交ぜながらホムちゃんに説明をしていく

「……っていうことなんだけど……わかったかな？」

「おおよそは、把握できました。つまり、最近アールランド周辺におにいちゃんが前にいたところにあつたものと同じものが出現だし、これまで手に入らなかった素材が入手できるようになった……という事ですか」

「うん、そんなところ」

「わかりました」と頷くホムちゃん。だけど、そのまま首をかしげてしまった

「…それで、そのアイテムがあると何が変わるんですか？」

「うーん、そうだなあ…」

ごく簡単に言うと、これまで出来なかった「自分の知っているレシ

ピ通りに鍛冶ができる」ということになる

というのも、これまで属性付きの武器を作る際に、本来結晶系アイテムが必要なレシピだった場合、代わりに「炎属性付与」などといった「特性」がついたアイテムを素材にしていた。それでどうにか形にしていた

：ただ、なんとなく『シアレンス』のころよりも付与された属性の強さが弱いように感じられた。その理由を僕は、本来使うべき結晶系アイテムを使わなかったからだと推測した

だけど……その説明だと、ホムちゃんにはあんまり正確には伝えられないかもしれない。なぜなら、元のレシピ通りのものを知っているのは僕だけだし、その時の本来の強さを知っているのも僕だけ……その凄さを正確にホムちゃんへと伝えられる自信は無い

となると……もう少し噛み砕いて、簡潔に説明すべきかな？

「主に二通りの使い方ができるかな？」

「二通りですか？」

「うん。ひとつは、何かを作る際に純粋な属性のチカラを付与できるってこと。攻撃用の属性付与も、防御用の耐性付与も」

「なるほど。調合などの際に、結晶の持つ属性の力をそのまま利用するのですね」

「あともうひとつは、すでに作ってある武器や防具を強化する際に属性・耐性を付与できるってこと。これは使い方によっては武器の元々の属性を変えたり出来るから、自分の実力とか……その時の状況によっては結構便利なんだよね」

例えば、自分の鍛冶の熟練度の問題で「これ以上強い武器を作れない！……でも、この武器は風属性、これから行く場所にいる敵も風属性が多いから効果が薄い！」……なんて時。一個下のランクの武器だと攻撃力がこころもとない……という時に属性を変えてしまうわけだ

そうすれば、こちらの攻撃を属性耐性で軽減されることがなくなり、ダメージも安定するようになる……というわけだ

……つて、あれ？

「どうしたの？ホムちゃん？」

よくわからないけど、ホムちゃんがものすつごく目を細めて……と
いうかジトーっと見つめてきていた

「あの…ホムの耳が正常なのであれば、おにいちゃんは先程、すでに完
成してある武器に新たに効果を付与させることができるって言ってい
るように聞こえたのですが……」

「えっ？…できるけど…？」

むしろ、作る時以上に後からの強化のほうが重要だったりするだろ
う

特に杖は、強化の際に使った素材によって発動できる魔法・技が変
わるから、その杖との相性を考えながら素材を吟味して強化してい
かなければならない

「……おにいちゃんには常識を求めてはいけないのだと、ホムは理解
しました」

「ええ!?なんで!？」

「すでに完成した武器に新たに何か付け足すなんて非常識だと、ホム
はおにいちゃんに教えてあげます。……というか、叩き折れるのでは
？」

そんな事は無いと思うんだけどなあ……？

「…今からやってみせようか？」

その後、実際にホムちゃんに見せたところ、ホムちゃんは「もう、お
にいちゃんが何をしても驚きません」と言われた

……ホムちゃんからの評価は上がったのか、下がったのか、微妙な
感じ

あと、結晶系アイテムで最も多く手元にあった『火の結晶』をアス
トリッドさんへのお土産としてホムちゃんに一個あげた

4年目：マイス 「お酒、そして赤と青」

ロロナのアトリエ

「さつき渡したのがふたりの分で……コツチがちむちちゃんたちの分。ちやんとみんなの分あるから、仲良くわかるんだよ？」

「ちむー！」

「ちむむー！」

「ちむー！」

僕の言葉に、元気に返事をしたのは、いつの間にか3人になっていちむちちゃんたち

ちむちちゃん、ちむおとこくん、そして新たに加わったのがひとり目と同じ女の子……ちみゆちゃん、というそうだ

そして、そのちむちちゃんたちに渡したのは、おすそわけの『アップルパイ』

本当はロロナかトリちゃんに渡せたら良かったんだけど……どうやら二人ともちようど何処かへ出かけていて、アトリエにいたのはお留守番をしていたちむちちゃんたちだけだったのだ

ちむちちゃんが増えていたのには驚かされたけど、パイ系が主食のちむちちゃんたちのために『アップルパイ』は元々多めに作っていたから、きつと問題無い量だろう

「それじゃあ、ロロナとトリちゃんによろしくね！」

「ちむー！」

アトリエの玄関そばまで来て、三人並んで手を振るちむちちゃんたちに見送られながら、僕はアトリエを後にした……

職人通り

「それにしても……」

アトリエから職人通りに出た僕は、ひとりで少し首をかしげた

「……まさか、本当にちむちゃんたちの言葉がわかるようになるなんてなあ……」

そう。ロロナのアトリエにお邪魔した時、ちむちゃんたちしかおらず、ロロナとトトリちゃんは留守だったことはなんとなく察した。だけど、アトリエに来た僕に近づいて来て何かを言っているちむちゃんたちに少し興味が湧いた

アトリエの中なら……きっと大丈夫だろう

そう思っ、僕は『変身ベルト』を使い、金のモコモコの姿へと変身した。

当然、目の前にいたちむちゃんたちはもの凄く驚いていた。……けど、説明するとちゃんとわかってくれた。……そして、それと同時にあることがわかった

これまで「ちむちむ」と可愛いだけだったのに、ちむちゃんたちが何を言っているのが明確にわかるようになっていたのだ

金モコに変身することで、これまでもモンスターや石像などの声は聞けるようになったので、もしかしたら……とは思ってたけど……

そして、その後ちむちゃんたちから聞いたのは、ロロナは昨日から出ていること、トトリちゃんはほんの少し前に外出した……ということだった

話を聞いた後は、再び人の姿になり、「今回のことは秘密にしてねー？」とお願いしながらホームちゃんたち用の『アップルパイ』を渡した……というわけだ

「さて、とっ……あとはーイクセルさんのところに顔を出しに行かないと」

とはいっても、イクセルさんのいる『サンライズ食堂』はロロナのアトリエから、『男の武具屋』を挟んで隣にあるからすぐそばだ。職人

通りをこのまま進んでいけばいいだけだ

そうなんだけど……

「あれ……？」

『サンライズ食堂』の前に差し掛かろうというところで、ちよつと気になることがあった。なんだか中が騒がしい。これが夜ごはん時ならまだわかるんだけど……今は昼を少し過ぎたころ。あまりお客さんが多い時間帯じゃない

これが『ロウとティファの雑貨店』なら、ティファナさんのファンである常連客の人たちが、熱く語りだしてヒートアップし過ぎたんだろう……つてことで終るんだけど……

「そういえばアトリエの前に雑貨屋さんに寄ったけど、今日はなんでもかお休みだったんだよなあ？……あつ、もしかして……？」

頭の中で何かがカチツつと噛み合ったような音が聞こえた気がした

……いや、でもまさかこんな時間からお酒が入ったりなんて……

そう思いながら、僕は『サンライズ食堂』の扉を開く

サンライズ食堂

時間も時間なので、お客さんはあんまりいない。

だけど、そのわりには……というか店内はかなり騒がしかった

「ティファナさん?! いや、ちよ……は、離して……！」

「うう、無駄よお……いくら泣いて叫んでも、一度掴まったら、絶対離してくれないから……」

逃れようともかくトトリちゃん。半ば諦めたかのように脱力しながらも、涙目で震えるフィリーさん

その二人を捕まえているのは……

「うふふー、二人とも逃がさないわよ〜!」

顔がほんのりと赤く染まっているティファアナさん。つまりのところ、酔っ払いさんである

……こうやって、ここまで酔っぱらっているのを見るのは久々な気がする

ただ単にエステイさんが僕が遭遇していなかったかもしれないけど、エステイさんが街からいなくなってからにはティファアナさんがこうして外で飲む機会自体少なくなっているのも要因かもしれない
ついでに言うと、ティファアナさんはお祭りの時なんかには『青の農村』ウチの村に来たりはするけど、酔っ払って何か被害が出ることはない。というのも、ウチにも普通にお酒はあるけどティファアナさんは「街への）帰りがあるから…」と、『青の農村』でお酒を飲むことが無いのだ

……と、少し懐かしんでいる間にも、大変なことになってきているようだ

「フィリーさん! フィリーさんも捕まって……うわあああ! 手! 手!?! モゾモゾ動かさなさいくださいー!」

「やつぱり若い子は触り心地が違うわ……。うらやましい、にくたらしい、きもちいい! うりうりうりー!」

ううん……? それにしても、ティファアナさんってある一定以上酔うとこうして人に絡むようになるけど……初めて見た時も口口ナだったし、それ以降も……そして今回はトトリちゃんとフィリーさん。もしかして、女の人にはしか絡まないのかな……?

「きやあああー! やだ、やめてくださいってばー!!」

「き、気持ち悪いー! 本当にやだー!」

「そうか……お前らは知らなかったんだな。ティファアナさんの酒癖の悪さを……!」

嫌がって泣き叫ぶトトリちゃんとフィリーさん

その様子を調理場前のカウンター越しに見て、「やつちまったか……」

といった様子で首を振るイクセルさん。……ここでイクセルさんの存在に気付いたトトリちゃんが、ティファナさんに捕まえられたまま声をあげた

「あ、イクセルさんがいた！ 助けてください！お願いします！」

「……悪い。俺にはどうしようもできない。……諦めてくれ」

「そ、そんな…!?!」

トトリちゃんの必死の願いも虚しく、イクセルさんは「無理だ」と突き放した

そして、間の悪い事に、その様子をティファナさんがしっかりと見ていた

「むう、私というものがありませんが、イクセル君とお喋りだなんて……。そんな悪い子にはおしおきー！」

「へっ？わ、わ！服の中に手?! いやです！本当にいやですつてばー!!」

心の何処かで「またかあー…でも、なんだか懐かしいなあ」なんて呑気に考えてたけど……流石に助けてあげないとかわいそうだろう

そう思っ、僕は外出時に常に持ち歩いている緊急時用の『秘密バッグ』を取り出す

『秘密バッグ』は、家にあるコンテナ内部と繋がっている。…そして今取り出したものが繋がっている先は、武器を仕舞ってあるコンテナだ。そこから、痛みがほとんど無く気絶させやすい…ただし、人の背丈ほどある『ピコピコハンマー』を取り出す

「……いっつ、マイスー！いいところに!!」

『ピコピコハンマー』を取り出したあたりで、イクセルさんが、騒ぎの途中の来店で気づいていなかったのだらう僕の存在に気づき、そう声をあげてきた

その声を聞きながら、僕は『ピコピコハンマー』を振り上げ……

「少し……眠っててくださいー！」

……そして、自然な落下にあわせて、ティファナさんの頭めがけて

振り下ろした

ピコッ!!

「きゃん!?!」

軽快な音と本当に軽い衝撃共に、ティファアナさんが短い悲鳴を上げたかと思うとふらりとその場に倒れた

「ふええ……あれ?」

「や、やつと終わった……う?」

ティファアナさんが気絶したことによって止まった手に、少し驚きながらもまわりを……そしてティファアナさんを確認しだすトトリちゃんとフリーさん

そして、その目は目を回しているティファアナさんと、『ピコピコハンマー』を持った僕とを何回か行ったり来たりした後、僕の方を見て止まって……

「きゃあああああ!!?!」

……ふたりして悲鳴をあげて、ティファアナさんのせいで胸元を中心にはだけかけていた服をおさえながら、店の外へと飛び出していた二人の様子に違いがあるとすれば……顔の色だろうか?

フリーさんが顔を赤くして、トトリちゃんは顔を青くしていた

残されたのは、僕と、目を回して眠っているティファアナさん

そうなると当然、僕が話しかけるべきなのは……カウンターのほうにいるイクセルさんになる

僕は『ピコピコハンマー』を片付けながら、イクセルさんに話しかける

「あのー……いい加減、ティファアナさんにお酒出すの、どうにかしたらどうですか?」

「ティファアナさん本人に悪気も……ついでの自覚もねえから、なんて言って酒を止めたらいいかがわからなくてよ……。つーか、ミスはできるか？ 楽しそうに微笑みながら注文してくるんだぜ？」

うーん……。確かに難しいかもしれない。…でも、それで被害を受けるのはイクセルさんなんじゃ……？

「どうかミス。お前、どうかしたのか……？ なんか元気が無いよ
うな気がするぞ？」

「それはー…その、さつき二人に悲鳴あげられたのが……。前にミミちゃんに悲鳴をあげられた時も思ったけど、ステルクさんって凄いですね……」

「おいおい、感心するのはそこかよ」

少し呆れたように言ったイクセルさんに、「まあ、あの二人の悲鳴は羞恥心だろ」って慰められた後、僕はティファアナさんを送って行くことに……

それにしても……

「ティファアナさん、トトリちゃん、フィリーさん……何の集まりだったんだろう？……イクセルさんに聞いてみればよかったかな？」

そんな事を思いながら、ティファアナさんを雑貨屋さんまで運びながら……あることに気付いた

「あれ？ 雑貨屋さん閉まつてるけど……鍵、どこにあるんだろう？」

この時、ちよつと焦ってしまっただけど、よくよく考えてみればティファアナさんが施錠して外出したのだから、ティファアナさんが鍵を持っているのが当然だろう

……結局のところ、ティファアナさんの着ているエプロンの腰あたりに、チエーンで繋がれた鍵がちゃんとあった

4年目：マイス「探ってみよう、そうしよう」

冒険者ギルド

「はあー……」

「……なにここに来て早々、ため息なんか吐いてるのよ」

僕にそう言ったのはクーデリア。少し不機嫌そうな気もするけど、それ以上に「呆れ」が顔に出ているように思える

「そのー……、こっちのカウンターに来る前に依頼のカウンターに行ってたんだけどさ……」

「ギルドに入ってからソツチに行くのはあんたのいつもの流れだから、あたしも知ってるけど、それが………ああ、なんとなくだけ観察したわ」

そう言うクーデリアは、軽いため息を吐いて苦笑いをした

……たぶん、最近のあの人の様子から、何か感じ取っていたんだと思う。クーデリアは普段から近くにいるわけだから、何か異常があればいち早く気づけるんだろう

「……ファイリーさんが目を合わせてくれないんです」

「でしょうね。あんたが来た時と出て行った後のあの子の反応があからさまだもの」

「え……やっぱり、ファイリーさんに嫌われちゃったのかな………あいてっ!？」

『アーランド』で暮らすようになってから、そう短くない付き合いの友達であるファイリーさんに嫌われたことに肩を落とす……すると、そんな僕の頭に何か当たった

反射的に、下がっていた視線を上げると、そこにはカウンターからコツチへ半分くらい身を乗り出すような体勢でいるクーデリアが。その右手はピツチリと開かれていて、まるでチョップをくり出すかのような……

「……って、なんでチョップしたの!？」

「なんとなくよ!……どうせ、ミスに言ってもわかんないだろうし」
「ええ……?」

カウンター向こうへと戻り体勢を元通りにしたクーデリアは、両手を打ち合わせるような、こすり合わせるような動作をした後、その手をそれぞれ左右の腰のあたりにあてて、僕をジトーツつと睨みつけてきた

「ともかく。あたしとしては、あんたが出て行った後に一人でもだえて騒がしいあの子を何とかしてほしいところだけど……そもそも、どうして今みたいな状況になってるのよ」

クーデリアにそう言われて、僕は少しだけ考える

「……うん。やっぱり、原因はあの時の事しか無いと思うんだけど……」

「前にイクセルさんのお店に立ち寄った時に、たまたまティファナさんが酔払って……」

「……あたしは直接見たことは無いけど、凄い酔い方するらしいわね。……で、それで?」

「その時、酔払ったティファナさんにフリーさんとトリちゃん絡まれて……」

そこまで言って、僕は言葉に詰まってしまった

理由は、フリーさんとは別の問題の事を思い出してしまったから。……とても泣きたい気持ちだ……

「……?どうしたのよ?それでどうなったの?」

「あつ、うん。ええつと、それで僕がティファナさんを眠らせてとりあえず騒ぎ自体は解決したんだけど……その時、絡まれてた二人の服が少し肌蹴はだけて……二人そろって悲鳴を上げて出て行っちゃったんだ」
「で、こうなった、と。正直、色々飛び抜けてそうだけど……まあ、それはあの子の妄想が変に働いたのかしらね」

相変わらずの呆れ顔だけど、一応は納得したみたいでクーデリアは

小さく頷いた

「……けど、まだクーデリアの疑問は尽きていなかったようだった
「それで？何でさつきより落ち込んでるのよ」

「それは、そのー……実は、フィリーさん以上にトトリちゃんから避けられてて……」

「あー……、まあトトリももう16くらいだし、そういうこと気にする
年頃なんじゃないかしら？……でも、フィリー以上ってのは少し気にな
るわね。具体的にはどんな感じなの？」

「お店なんかでバッタリ会った時には「失礼しましたー！」って深々と
頭下げたままどっかに走って行って、アトリエにおじやました時は玄
関とは別にある裏口から出て行って……」

そう。トトリちゃんとは、最近は会話どころかまともに顔も見れて
いない。本当に泣けてくるくらいな状況なのだ

僕の言葉を聞いたクーデリアもさすがに想像以上だったみたいで、
意識してかどうかはわからないけど小声で「うわー……」ともらしてい
た

「難しいお年頃とは言っても、ものすごい避けられ方ね。……ロロナ
からは何か言われたりしなかったの？」

「それが、トトリちゃんがアトリエの裏口から出ていったのがわかつ
たのは、ロロナが「トトリちゃん!?待って〜！」って裏口から出ていっ
たからで……。ロロナもトトリちゃんに掛かりつきりみたいで、話せ
てないんだ」

「……本当に『サンライズ食堂』であつた事だけなの？」

「他に何かやらかしたんじゃないの？」と疑惑の目を向けてくる
クーデリア。でも、僕は首を振ることしかできない

……もしかしたら、自分でも知らないうちに何かトトリちゃんを困
らせるようなことをしちゃったかもしれないけど……うーん、
やっぱり見当がつかない

「まあ、あたしのほうから聞いてみたりはしてみるわ」

「うん、お願い……」

|||||

マイスが去っていった後の『冒険者ギルド』にて……

「にしても、あのトトリがそんなにマイスを避けてるなんて……」

クーデリアが一人で首をかしげていた

「最近『冒険者ギルド』に来た時は普通だったし、いつも通り勤勉に依頼をこなしてたみたいだったから、そんな様子は無かったと思うんだけど……」

そう考えていたクーデリアだったが、ふいにその表情と小さい身体をガチリツと固めた

「あ……。もしかして、あの時言ったギゼラとマイスの貸し借りのことで……？」

しかし、その考えを振り払うかのように、クーデリアは首をブンブン横に振った

「いやいや！トトリの性格なら、逃げたりしないで真っ先にマイスに謝りに行くなり、「わたしが代わりに払います！」とか言うだろうし……それに、マイス自身、取り立てたりはしないだろうし……」

しかし、クーデリアの独り言の口調は段々と勢いが無くなっていく
「……うん、今度あの子に会った時に、一応その辺りのことも聞いておこう」

クーデリアは失念していた。ギゼラがいろんなところで迷惑をかける人間だという事を……

クーデリアは知らなかった。ギゼラによる『バー・ゲラルド』でのタダメシの一件で、トトリが金銭問題に過敏になっていたことを……

|||||

職人通り

「うーん……」

クーデリアにはああお願いはしたものの、やっぱりいち早く原因を知って、悪い事しちやつたのならちゃんと謝りたい

……となると、自分で調べるのが一番だと思っただけど……でも、これまでの感じからすると直接聞きに行っても逃げられるだけだろう

でも、他の人からの情報収集も、クーデリアが何にも知らない様子からするとあんまり意味が無いかもしれない

「……やっぱり、アレが良いのかな？」

辺りをキョロキョロと見渡し、周りに人がいないことを確認して路地裏に入る。裏路地でまた周りに人がいないことを確認して、そこにあつた積まれた『タル』の陰に隠れる

そして、『変身ベルト』へと意識を向けて……

「とうっ！」

クルリツと回転しながら決めポーズをする！

「モコッ！」

そうすることで僕は「金のモコモコ」の姿へと変身するのだった

『シアレンス』にいた頃、冒険中に金モコの姿に変身したまま町に帰ってしまった時に偶然気がついたことだけど、金モコ＝僕ということが知られていないので、普段僕が見ていた街の人とは別の一面が金モコの時は見ることが出来たりするのだ

それはこの『アーランド』でも同じ……なんだけど、『シアレンス』よりもかなり人々のモンスターへの警戒心が強いため退治されてしまふんじゃないかとヒヤヒヤしたりもした。そのため、街中で金モコの姿でいるようになったりしたのは『青の農村』ができてモンスター

への理解がある程度得られるようになった、ごく最近のことだったりする

何はともあれ、金モコが僕であると知っているのは今現在がごく一部、数にして5人くらいだ

そして、その人数の中にはアトリエにいるコロナとトトリちゃんは入っていない。だから、金モコ^こ状態で二人に近づいて何とか僕が避けられている原因を探ることが出来るはず……！

……とは言っても、普通に喋ってしまうと十中八九バレてしまうから「モコモコ」としか言えないわけで……。そのため、原因を聞き出せるかはほとんど運任せになる

「まあ、もしも聞き出せなかったり二人がいなかったりした時は、ちむちゃんたちに何か知らないか聞いてみればいいかな？」

そういえば、ちむちゃんたちには「金モコ＝僕」であることは他の人には言わないように口止めは一応したけど……大丈夫だよな？

一抹の不安を感じながら、僕はアトリエへと向かった……

コロナのアトリエ

アトリエの玄関でノックをしたところ「ちむむ〜」としか返事が無かったから、なんとなくそんな気はしてたけど……どうやら、コロナとトトリちゃんはちようど出かけているようだった

「今日はお土産の『パイ』は無いのー？」とワラワラ集まってきたちむちゃん、ちむおとこくん、ちみゆちゃん。そして「あー、このひと(？)がこの前言った？」と4人目のちむちゃんが遅れて近づいてきた。なんでもその子の名前は「ちむぐれーとくん」らしい。他の三人が教えてくれた

ちむぐれーとくんと自己紹介と挨拶を終えた僕は、本題である

「最近、ロロナとトトリちゃんが僕のこと何か言ってた？」と聞こうとしたんだけど……その前に、アトリエの玄関のほうからノックの音が聞こえてきた

一瞬だけ「ロロナかトトリちゃんが帰ってきたかな？」と思ったんだけど、アトリエの住人である二人がノックするはずがないと気付いた

「じゃあ誰だろう？」……そう思ったのとほぼ同じくして、ちみゆちゃんが「ちむー！」と返事をして、玄関の扉が開いて誰かが入ってきた

「お邪魔するわ……なんとなくそんな気はしたけど、トトリはいないのね……って、あら？」

「も、モコ……?!?(み、ミミちゃん……?!?)」

そう、そこにいたのはミミちゃん……って、あれ?なんだか少し似たようなことがあったような……?

確かあの時は、僕(金モコ)がロロナに無理矢理連れて来られて……「アナタ、確か前にトトリの先生の『パイ』を食べにきてた子だったわよね……?」

僕が考えている事と同じような事を考えていたんだろうミミちゃんが、僕にそう問いかけてきた。表現的に微妙なところではあるけど、ミミちゃんが思い出していること自体は間違いでは無いので、僕は素直に頷いた

「モコッ」

「ふうん、やっぱり。でも、今日はそんな様子じゃなさそうだけど……その子たちと遊びに来たの？」

そう言っつてミミちゃんが目を向けるのは、僕からそう遠くない位置にいるちむちやんたち。ミミちゃんの、この指摘も「中らずと雖も遠からず」といったところなので、頷いてみせた

「モコッ」

「へえ、それじゃあアトリエには結構来たりはしてるのね」

……実は金モコの姿ではまだ3回目くらいです、と訂正するわけに

もいかないから、特に反応を示さずにスルーする。喋るわけにもいかないし……でも、ずっと長い間避けられている感じがある。ミミちゃんとかミユニケーションは取ってみたい気持ちは少なからずあるんだけど……

僕がそんなことを考えていると、ミミちゃんもミミちゃんでも何か一人で考えているようで、小さな声で独り言らしきものを呟っていた。「モンスターって普通に街に入れるのね……門番はスルーなのかしら？ この子だから？ それとも『青の農村』の子たちはみんな？ ……でもまあ、あの人のことを考えれば当然のことかも」

「モココ？（あの人？）」

僕がつい何気なく反応してしまうと、少し驚いたようにミミちゃんが僕のほうを見てきた

「もしかして口に出てたかしら？ まあ、そこまで困ることじゃないからいいけど。……話には聞いてたけど、やっぱりちゃんと人の言葉を理解してるのね。コッチはさっぱりだけど」

ミミちゃんは僕のほうへと近寄って来て、少しでも僕に目線を合わせるかのようになやがみこんできた。それでも、僕のほうが少し目線が低いけど……

そして、ミミちゃんは右手を僕の首元へと伸ばしてきた

「アナタも着けてもらってるじゃない、この『青い布』。これって「自分からは人に危害を加えない優しい子」しかミスさんから貰えないんでしょ？ ……あの人から認められた子なら、問題無いでしょうね」「モコー、モコモコ（あははは……、コレが大元だからちよつと違うよな）」

金モコの姿の時の僕を見かけたジオさんが、金モコが首に巻いていた青いバンダナを見て発想したのが『青の農村』の由来にもなる『青い布』だから、僕が巻いているのは特別そんな意味合いは無かったりするけど……でも、当然だけど僕は人を襲ったりする気は無い

……というか、ミミちゃんの言う「あの人」って僕のことだったん

だ

「アナタたちがどう思ってるか、ちゃんと理解できているかはわからないけど、ミスさんは凄い人なのよ？ 真面目で、誠実で、優しく……村ができるより前から街の人たちのために頑張ってる、みんなからの信頼も厚いわ。だから『青い布』をつけたモンスターを怖がらないの」

「フフン…」と僕の知っている昔のミミちゃんのようにかわいらしく、何故だか自慢げに話し出した。

「他にも色々あつて、街で新鮮な野菜が食べられるのはもちろん、基本的に食材の質が高いことやアーランドの食料自給率が100%以上なことも、あの人の功績と言えるわ。機械での生産業が国の主な産業だったアーランドで農業をこんなにも発展させたのは、本当に凄いことよ」

ミミちゃんの話は止まらず……

「それに娯楽に関しても、『王国祭』が無くなって少し活気が無くなっていたところに、村でお祭りをすることを決めたりして積極的に、年に何度も様々な趣旨のお祭りを開催することで、みんなを飽きさせないようにしてみせたの。しかも、お祭りの中には物流・交易を促進するような内容もあつて、経済的な効果が高いわ！……それに、最近では人材育成のことを考えているようなお祭りも開催したりしてるみたいで、先を見据えた村の運営も考えるくらい頭もいいの！」

なんだか段々とヒートアップしているような気もしなくもないよ
うな……？

「……モッコ、モコモコ（……というか、なんだかむずがゆい）」

陰口を言われてるわけじゃないから悪い気はしないんだけど……知っていること以外に、身に覚えのないことまで言われてしまったから、なんだか喜んでいいのか分からないし……

……ん？この様子だとミミちゃんは僕の事を嫌ってる感じではな

いよね？

なら、ミミちゃんにずっと避けられているのは何でなんだろう？

「そうね、あとはマイスさんの作る料理なんだけど……」

「モ、モコー……（な、長過ぎる……）」

ミミちゃんが僕について有る事無い事語り始めてから、どれくらい時間が経つただろう？ いつの間にか、窓からアトリ工内に差し込んできている陽の光は赤くなっていた

最初のうちは僕と一緒に語りに付き合っていたちむちゃんも、おのの作業に戻っている。飽きたからなのか、作業に戻らないと予定がおくれてしまうからなのかはわからない

と、ようやくミミちゃんも結構な時間が経つたことに気がついたみたいで、窓のほうを見て少し意外そうな顔をした

「あら？もうこんな時間？ 結局、トトリは帰ってこなかったわね。玄関の鍵が開いているから街の何処かに出かけただけだと思っただけだ」

「モコ、モコモコー（僕もそう思ってたんだけど）」

「留守なのに鍵かけてないのは不用心過ぎじゃない？それとも、あのちっちゃい子たちがいれば大丈夫なのかしら？ ……というか、私を置いて冒険に出てるの？もうっ、トトリったら」

そう言つて、ちむちゃんたちを見た後に少しだけ頬を膨らませるミミちゃん

前にトトリちゃんからミミちゃんの話だけは聞いたことはあったんだけど、その時の話だと少し大人びている印象があったけど、こうしてみると子供っぽさが随分と残っている気がする

「これ以上待っても今日はもう帰ってきてそうにないから、そろそろおいとましようかしら。……アナタはどうする？」

「モッコ (僕ももう帰ろう)」

頷いてみせると、意思は通じたようで「そう、なら一緒に出ましようか」とミミちゃんは言った

職人通り

帰る事をちむちゃんたちに伝えたと、わざわざアトリエの玄関先まで皆でお見送りに来てくれた

「お邪魔したわ」

「モッコ」

「ちむー」

「ちむむく」

「ちむっ」

「ちーむー」

僕とミミちゃんの言葉に、ちむちゃんたちはそれぞれ返事をする

それを確認したミミちゃんは、今度は隣にいる僕に目を向けて問いかけてくる

「アナタは一人で帰れるの？ それとも、私が送って行ったほうがいいのかしら」

「モッコー」

首を横に振ると、ミミちゃんはそれを予測していたようで「でしようね」と何故かうつつすらと笑みを浮かべて頷いてきた

……と、思ったんだけど、その表情が少しだけ変わった

よくわからないけど、ミミちゃんはなんだかわざとらしく明後日の方向を見たりして、少し目が泳ぎ出したのだ

「ええっと……ねえ、ちよつといいかしら？」

「モッコ？」

「あの人……マイスさん、私のこと何か言ってなかった？ 『青の農

村』に住んでる子なら何か聞いたことがあるんじゃないかって、思っ
て……」

「モ、モコ……？（え、どういふこと……？）」

僕が首をかしげてしまうのとほぼ同時に、ミミちゃんがブンブンと
首を振った

「いや、その別に何かあるとかそう言うわけじゃないから！だから、聞
いたことが無いなら別にいいの、気にしないで！それに、私のこと
嫌いとか言っていないだけで……」

段々と声が小さくなっていくミミちゃん。……と、バツつとミミ
ちゃんがしゃがみ込んできて、抑えた声で言ってきた

「その……もしよかったらマイスさんが私のこと怒ってないか、
それとなく調べてくれないかしら？もちろん、私が探ろうとして
るってことは秘密にしなさいよねっ！いい？わかった!」

そう、途中から一方的に言ってきたミミちゃんは「そ、それじゃあ
ね」と足早に去っていった

そして、残された僕はと言えば……

「ちむ」

「ちむちむっ……」

「ちちむゝ」

「ちむっ！ちむっ！」

「僕〓金モコ」を知っているちむちゃんたちによる、何とも言えない
視線を一身に受けていた

……でも、本当にどうしよう？

今日わかったのは、ミミちゃんが僕の事をそんなに嫌っているよう
じゃないこと。それと、僕が怒っているんじゃないかと気にしている
こと……けど、そんな怒ってしまうようなことをミミちゃんからされ
たような覚えは無い

うーん……僕が憶えてないだけで、何かそんな事があったとか？

そんな事を考えながら、裏路地の物陰に入り、変身して人間の姿に

なる

そうして、僕は村へと帰るのだった……

そして、家まで帰ったあたりであることを思い出した

「あつ…、ちむちゃんたちにトトリちゃんのこと聞くの忘れてた……
！」

4年目：どうしたのか……

サンライズ食堂

『サンライズ食堂』。言わずと知れたアーランド有数の飲食店
その店内の一角に位置するテーブルにつくとある二人。そこには
何とも言えない空気が漂っていた

「えー、あー……うん。「まさか…？」と思わなかったわけじゃなかつたけど、本当にアレが原因だったとは……」

申し訳なさ半分、呆れ半分といった様子で頭を抱えているのは、普段『冒険者ギルド』で主に冒険者免許関係の仕事をとり扱っている受付嬢・クーデリア・フォン・フォイエルバッハ

「そうだよ、クーちゃん！大変だったんだよ!？」

そうクーデリアに言うのは、クーデリアの幼馴染であり『アーランドの街』を拠点としてアトリエを営んでいる錬金術士・ロロライナ・フリクセル

涙目になりながら身を乗り出し気味でテーブル越しにクーデリアへと詰め寄ろうとするロロナに、クーデリアは手で軽く制して首を振る

「さすがに悪かったと思ってるわよ。ちよつとイタズラが過ぎたつて……。でも、こんな風ふうにしようなんて思っていなかったの」

「でも……」

「どうしたんだ？お前ら二人が一緒にいるつてのに、変な空気だな」

クーデリアとロロナの会話に唐突に割り込んできたのは、ここ『サンライズ食堂』の厨房を任されているコック・イクセル・ヤーン。二人の幼馴染でもある

どうやら、店内にいるクーデリアとロロナの様子を気にしていたよ

うで、仕事の手がちょうど空いたところで顔を出しに来たらしかつた
「あつ、イクセくん。あのね、マイルス君とトトリちゃんのことであつ
とあつて……」

「マイルスとトトリ？ ……ああ、もしかてマイルスがトトリに嫌われ
たーってヤツか？」

「あら？知つてたの？」

クーデリアの問いに「そりやあな」と返したイクセルは、そのまま
言葉を続けた

「マイルスとは食材の取引でよく顔を合わせるからな。その時に気を落
してるのはよく見かけてたし……それに、マイルスが言うには、トトリ
に避けられるようになったのは『サンライズ食堂』でのティファナさ
んの一件があつたあたりかららしいし、知らないふりは出来なかつた
からな」

そう言ったが、はたと口を止めて「そういえば……」と、今度は口
ナを見てイクセルは口を開いた

「あいつ、「コロナにも嫌われたかも……」って結構落ち込んでたぞ？」

「ふえ!?そんなこと無いよ!? わたし、全然……」

首を横に振って否定したコロナだったが、クーデリアには何か思い
当たる事があつたようで、コロナの言葉に口を挟んだ

「きつと、それはアレね。マイルスから逃げるトトリを心配して追いか
けてばかりだったから、コロナも一緒になって避ける形になってたか
らじゃないかしら? ……なんか、そんな感じのこと、マイルスが言つて
たわよ」

「あつ、なるほど……って、ええっ!? 知らないうちにマイルス君に悪い
事しちゃつてた!？」

納得して……そして、改めて慌てるコロナ

その様子を眺めていたイクセルだったが、今度はクーデリアのほう
を見て彼女に問いかけた

「……で、結局何が原因だったんだ? 少し聞こえてたさつきまでの

話じゃあ、ティファナさんの一件の時のが原因じゃないらしかつたが……?」

「うっ……そ、それは……ねえ」

イクセルの問いに、少しバツが悪そうな顔をして言葉を詰まらせるクーデリア

そんなクーデリアに変わり、落ち着きを取り戻してきたロロナが答えた

「それがね、トトリちゃんのお母さん……十何万、何十万にもなるギゼラさんが壊した物とか問題とかの修復費とか賠償金なんかをマイルス君が何回も立て替えてるって話を、くーちゃんがトトリちゃんにしちやつて……それで……」

「ああ、なるほど。そりゃあ逃げたくもなるくらい、顔を合わせ辛いだろうな」

ロロナの言葉に納得したように頷くイクセル。しかし、それとは別にクーデリアが少し声を荒げて言った

「ちよーあたしはそこまでリアルな金額は言っていないわよ!?! そ、それに、トトリの性格なら真っ先にマイルスのところに行つて「わたしが代わりに払います!」とか言うと思つたの! そうなつたら、きつとあの子が知りたがつてたギゼラのことマイルスから聞けるだろうし……」

「まあ、お前の言いたいこともわからなくもないな……。俺もギゼラつて人は知ってるが、その大半はマイルスから聞いた話なわけだし。それに金のほうも、いくら家族つて言つても、あのマイルスが変に取り立てたりしないだろ。……むしろ、憶えてないんじゃないか?」

クーデリアはもちろん、ロロナも別段イクセルの言葉に何かしらの反対意見を言つたりすることは無かつた

……だがそれは、逆にイクセルが首をかしげる結果を引き寄せることとなる

「……ん? じゃあ何でロロナはトトリをマイルスに会わせようとして

ないんだ？」

当然と言えば当然の疑問。その疑問にコロナはビクツ！と体を震わせた

「ええつと……実はギゼラさんってトトリちゃんの住んでる『アランヤ村』でもお金関係で色々とあつたらしくて。それで、かなりお金のお話には神経質気味になっちゃってみたいで……」

「そこにウン十万単位のマイスとの話がきたわけか」

「うん。……で、トトリちゃん、マイス君事態に苦手意識みたいな感じのものを持っちゃったみたいなの。……最近なんかはちよつと酷くなっちゃって、「マイス」って名前を出しただけで隠れちゃうように……」

「それ、「ちよつと酷く」ってレベルなの……？」

想像以上だったのだろう。クーデリアが引き気味で言った

「とりあえず、何とかする方法を考えないか？　ここまできたことだし、俺も手伝うからよ……」

イクセルがそう言うと、クーデリアとコロナはほぼ同時に頷いたのだった……

なお、当事者二人の内の片方…マイスはと言えば……

マイスの家

「あのね、リオネラが結構前から街に立ち寄ってなかったから「フリーさんに会いに行ってみない？」って言うのはわかるわ。でも、なんでマイスはついて来ようとしなかったのかしら？」

「それによ、不思議に思いながらも会いに行ったら行ったで、こつちも「マイス君には会えないよう……」なんて言いやがるし、無理矢理連れ

てきたらきたで……なんだよ、この空気？」
「……………」

そう言ったのは、虎猫の人形のアラーニヤと黒猫の人形のホロホロ。そして、そのふたりの主人であるリオネラも、そのそばにいた旅芸人として旅をしている3人(?)だが、どうやら『青の農村』に訪れていたようだ

「ふ、二人とも、大丈夫…?」

心配そうにしているリオネラの問いかけに対しての、二人：マイスとフィリーの反応はと言えば……

「うん…、大丈夫だよ……」

「だ、大丈夫じゃないです……!」

あからさまに落ち込んでいるマイスと、顔を赤くしてマイスがいる方とは別方向を見ているフィリー

二人は言っていることは正反対だが、はたから見ればどちらも「大丈夫じゃない」状態だろう

「……というか、けっこう前になんとか似たような状況が無かったかしら?」

「あー、マイスがあのもコモコしたヤツだつて知った時だったか?確かに似てなくもねえ……か? あの時はフィリーに毛をモフらせたら、よくわかんねえうちに解決したよな?今回もそれでいいんじゃないか?」

「えっ……いいのかな?そんなことで……?」

アラーニヤとホロホロの会話に困ったように少し首をかしげるリオネラ

……こちらもちちらで大変そうだった……

4年目：クーデリア「困りもの」

コロナと、ついでにイクセルと、マイルとトトリをどうにかしようって事を話し合ったあの日から数日経った今日。あたしはそう多くは無い仕事の休みを利用して『青の農村』のマイルの家へと向かっていた

会いに行くとは言っても、別に今日のうちに何かしらの作戦を実行したりするわけじゃない

むしろその前段階。二人の仲直り……というか誤解を解かせるための計画をたてるために、マイルの今現在の状態を確認したり、今後の予定なんかを聞き出したりするために今日は会いに行っているのだ

「どっかに行っていたりしなければいいんだけど……」

そう一応は心配しているのだけど、おそろく杞憂に終わると思っ
ている

というのも、『青の農村』が出来てからはマイルが遠出することはほとんどなくなっていたからだ。それこそ、トトリの手伝いでついで行くようになるまでは、ほとんど『青の農村』と『アーランドの街』の行き来くらいしか無かったらしい

そして、知つての通り今現在はトトリとの交流がほとんど無くなっ
てしまっているため、今、彼女の冒険の手伝いで外に出ていることも
無いだろう

……マイルが外出している可能性があるとするれば、ここ最近あちこちの採取地から目撃情報が出ている「謎の光の渦」……マイルが言うのは『ゲート』というものらしい……その確認・調査・破壊などを行っているという事態だろう

だけど、あたしの知っている限りでは昨日・今日には目撃情報が『冒
険者ギルド』にも入ってきていない。だから、マイルが独自に情報の
ルートを持っていたりしない限りは大丈夫だ……と思う

「まあ、一番の問題はトトリのほうなんだけど。そっちはコロナが「任せてっ！」て張り切ってたし……ちよつと心配だけど、イクセルあも手伝うらしいから、きつと大丈夫でしょう」

そう。マイルストトトリに元通りになつてもらうには、順序がある
まずトトリのほうを軟化させて話をし、落ち着いた状態でマイルストと会えるようにする。そうしてからトトリをマイルストに会わせ、ギゼラ例とマイルストの貸し借りを話してそれに関する双方の意見を出させて、解決させる。…それで晴れて和解となる

ギゼラ例とマイルストの貸し借りは解決できるのか？…という不安は「無い」と言えば嘘になるが、きつと大丈夫だ。前にも言ったが、マイルストのほうはあのことをごまかすまで大きな問題だとは思っていないと思う
まあ、そもそもの考え方に差があるんだろう、という気もするけど……それはマイルスト本人とちゃんと話せば、トトリもすぐに気づけるだろう

そんな事を考えながら街道を歩き続けているうちに、『青の農村』の入り口付近にまでたどり着いた

街道のわきから伸びる村の広場まで続く道のわきには、この村に属している農家と、その一軒一軒が持っている木でできた柵に囲まれた畑がある。そしてその畑には青々とした野菜が生なっていた

「今期も、全体的に豊作のようね。……って、あたしが心配するようなことでも無いけど」

そんな独り言をいつの間にかしてしまいがちながらも、あたしは『青の農村』へと足を踏み入れた

青の農村

村に入ってから、途中、顔見知りの村の人や旅の行商人なんかに声をかけられながら、マイルストの家の方へと進んでいった

当然ながら、この村の一員である青い布を巻いたモンスターたちにも会った

もうあたしは随分と慣れてきているつもりだけど……やっぱり、視界はじのほうから鳴き声を上げられると少し身構えてしまう。モンスターたちのほうからしたら、ちよつとした挨拶のつもりなのかもしれないけれど、こればかりは慣れそうにも無い

モンスターといえば、この『青の農村』にはいろんな種類のモンスターがいるけど、同じ種類のモンスターでもいろんなヤツがいるみたいだ

その辺りで寝ているヤツ

まるで警備兵のように村を巡回しているヤツ

村の人になでられたり、ブラッシングをされているヤツ

畑で農家の手伝いをしているヤツ

改めて思ったけど、何も知らない人が訪れてしまったら間違いなく自分自身の目を疑うでしょうね……

……つて、あら？　なんだか少し騒がしいような……

そう思つて、耳を澄ませてその騒がしさの発信源を探ってみると、どうやらちようど目的地であるマイルスの家のほうのようだった

わたしは少しだけ歩く速度を上げた

青の農村・マイルスの家前

「あれは……」

マイルスの家のそばまで来ると、騒ぎの原因がわかった

まあ、騒ぎと言つても、別段人だからができているわけじゃなくて、騒がしくしている人が4人ほどいたというだけだった

「……………落ち着いたか？」

「えつと……………どう？」

いつも以上に難しい顔をしている自称騎士。そしてそれと相対しているのはあたしが会いに来たマイルス

そのマイルスが「どう？」と確認しているのは、マイルスの背後に隠れようとしている二人……

「ううう……………まだ、ちよつと……………」

「ご、ごめんなさい……………」

フィリーとリオネラだった

残念なことに、二人そろってマイルスの背後に隠れようとしているために、二人ともはみ出してしまっていて全然隠れることが出来ていない

……………いや、そもそもあの三人の中でマイルスが一番小さいから、どちらか一人だけでも隠れるのは厳しい気がする。あのマイルスの背後に隠りたいならあたくしくらいの身長じゃないと……………自分で考えて少し悲しくなった

「それにしても、この状況は……………って、考えるまでもないわね」

あのリオネラがいること自体には少し驚きはしたものの、これまでも『青の農村』に訪れていることは知っていたからそこまででもない。

そして、フィリーとリオネラ、それに加えて自称騎士のステルクとくれば、騒ぎの原因はもう決まったようなものだ

そう考えていると、リオネラのそばを漂っている二匹のネコの人形・ホロホロとアラニーヤが、あたしの思っていた通りだと確信するようなことを言った

「久々で気絶しなかったのは良かったけどよ、怖い顔だからって悲鳴を上げんのはいい加減やめてやろうぜ」

「そうよ、リオネラ。そんな知らない怖い人じゃないんだから、ちゃんとしましょう？ それに、ここまですると失礼よ」

「わ……わかつては、いるけど……ヒイ!？」

マイスの背後から恐る恐るといった様子で顔を上げていったリオネラだったけど、ステルクの顔を見た瞬間、短い悲鳴を上げて顔を引っ込めてしまったようだ

そんな中、普段ギルドの受付で悲鳴を上げ慣れている(?)ファイリーのほうは、もう立ち直ってきたみたいで、ステルクのほうへと顔を向けられていた

……だが、まだ恐ろしきはあるみたいで、目が少しでも合いそうになると勢いよく目をそらしていた

けど、ああしてマイスのそばにいうことは、もしかすると、この間まであっていた「ファイリーがマイスと目を合わせない&マイスが出ていった後、一人でもだえる」問題はいつの間にもやら解決したのだろうか？

……よくわからないけど、おそらく、状況的にはそう思えなくも無い

……と、そうやって目をそらしたファイリーの視界にあたしがちょうど入ったようで、一瞬だけファイリーの動きが止まって……そうしてから口が開いた

「ううえ!? クーデリア先輩!？」

ファイリーの声でソコにいた全員があたしに気付いたみたいで、視線が集中してきた

あたしはため息をつきながら、驚いているファイリーに言う

「あら？ あたしがここに来ちゃいけないかったかしら？」

「べ、別にそんなことは……!？」 ただ、今日はお仕事があったんじゃないかな、って思っただけで……」

「今日のあたしの仕事は午前中だけよ。後は他の子たちに任せてあるわ……それにしても、相変わらず大変そうね」

そうあたしは途中から、フィリーとは別の人：ステルクのほうへと話を振った。言ったことはかなり言葉を削った状態だったのだけど、どうやら意味は問題無く通じたみたいで、ステルクは重い溜息を吐いてから重々しく口を開いた

「全くだ。少しこちらに用があったのと、王のことで聞きたいことがあったから立ち寄ったら……悲鳴二つで出迎えられるとはな……」

「そんなに落ち込まないでくださいよ、ステルクさん。二人ともステルクさんが嫌いとかそう言うわけじゃなくて、ただ単純に顔で驚いてしまっただけですから」

少し気を落しているように見えるステルクに対し、マイルスがフォローになっっているか微妙な言葉をかけた。当然、自称騎士のほうは何とも言えない顔になっていた

「顔だけで怖がられるというのは、たいがいだと思っただが……?」

「目が合うどころか、声をかけたりする間も無く姿を見ただけで逃げられるよりはマシだと思えますよ?」

「……どうしたんだ? 少し見ない間に、随分と卑屈気味になった気がするんだが……?」

「あははは……、ただの例え話ですよ」

フィリーとの関係は修繕された様だったから幾分いくぶん元気になったかと思っていたのだけれど、どうやらトトリに避けられていることはまだまだ引きずっているようだった。それも、かなり重そうだ

その事に一人頭を抱えながら、あたしはどうしたものかため息を吐いた……

4年目：マイス 「転換期は突然に・上」

マイスの家

「うーん……なにをしようかな？」

日課の畑仕事や朝ゴハンを取り終えた僕は、ひとり、今日の予定について考えを巡^{めぐ}らせていた

僕がそう悩んでしまうのには理由がある

ひとつは、来週に迫っている今月のお祭り。その企画・準備等については他の人に全部任せてあり、単純にヒマがあるからだ

そうだったのは、先月、先々月……そのまた前などのお祭りの準備の際に僕がいなかったことが何度かあったから

たびたび発見報告が来た『ゲート』、その調査・破壊のために僕がかけていた。だから、そういうことがあっても問題がないように今月は関わらない……というのが、コオルをはじめとした村の人たちの言い分だ

……ただ、どうにも何かがおかしい気がする

というのも、『ゲート』についての調査は、僕が出来る範囲でのことは最近に全て終わっている。さらに、おおよその性質・傾向も『シアレンス』に発生していたものとはほぼ同じだとわかっている。なので、この前、クーデリアを通して『冒険者ギルド』には『ゲート』は見つけ次第破壊することを推奨する」ということを伝えた

なので、僕がまたいきなりでかけていくことは無い……と、コオルたちに言ったんだけど、それでも準備に参加させてくれなかった……

……そういえば、普段なら街のお店やギルドなんかにお祭りの宣伝広告が張り出されたりしているはずなんだけど、今回は見当たらなかった

でも、来週開催されるって話は聞いてるんだけど……？

ええつと、話を戻そう

今日の予定について悩んでいるもう一つの理由は、先日家に来たクーデリアから今日は「何処にもでかけないように！」と強く言われているからだ

ステルクさんがウチに来て、家にいたりオネラさんとフィリーさんが怖がってしまった時。その時にクーデリアは家に来た。そして、クーデリアは僕のこれから数日間の予定を聞いてきた

最初は、ちよつと前までしていた冒険者免許のポイント見直しのための冒険…その護衛のための日程を考えているのだと思っただけで、そうじゃなかった

…：そこから何故か「でかけないように！」という話になった

あのととき、勢いに押されて「わかったよ」と言ってしまった。だから、その約束を破るわけにもいかないから、今日は極力外出するわけにはいかないのだ

「つまり、今日できるのは『作業場』での調合とか鍛冶とかになるかな？」

とは言っても、今は必要なモノとか試したいモノは特に無い。武器、防具、装飾品、農具はもう有り余るほどあるし、薬なんかも、各種備蓄分まで十分に補充している

あえて挙げるなら、『魔法』についてはしたいことが色々あるにはあるんだけど…

魔法使用の補助のための『杖』については、『ゲート』を破壊した時に採れた結晶系アイテムによる属性の調整もすでにしているため、もうやり切ってしまった感じがある

あとは『杖』を使わずに行う魔法使用の実践くらいだけど、それを出来る人が今はいない

僕はすでに使えるから、当然だけど実験にならない

候補に挙げる事ができるのは、『杖』での実験などこれまでも協力してくれているフィリーさん。もしくは、僕の使う『魔法』とは一味違うものの『魔法』を使えるリオネラさんあたりだろうか

リオネラさんはちょうどここ最近『青の農村』に滞在している……
んだけど……

「でも、リオネラさんってホロホロとアラニーヤと一緒に、今朝フィリーさんに会いに街に出かけちゃったからなあ……」

おそらく、リオネラさんがこれまで『青の農村』まで来ても『アーランドの街』に行かなかつたため、フィリーさんが連れ出してロロナやクーデリアあたりの知り合いたちに会わせにいったんだろう

先日、クーデリアは僕と話した後にはリオネラさんとフィリーさんとも何か話していたから、もしかしたらアレは今日のことを話していたのかもしれない。……となると、街ではいわゆる「女子会」なんてものが開かれているのかも

何はともあれ、つまりのところ『魔法』の実験もできそうにない状況というわけだ

「でも、色々してみたいことがありそうなのは『魔法』くらいだし……
そうだ！ 『魔法』には魔法のことが書かれている本……『魔導書』なんかがあったほうが良いんじゃないかな？」

「どういうことでも形から入るといえるのは、少なからず効果もあると思う」

「なら杖……というのも悪くないけど、『アーランド』だと杖は錬金術のイメージが強い気がする。だったら、『魔導書』が良いんじゃないだろうか？」

『シアレンス』でも『魔法』を覚える際に本を読んだりしたけど……
あんな感じのものを作ってみるのもいいかも

「うんっ！ それじゃあ早速作って……いや、この場合は「書く」って

言ったほうが良いのかな……？ と、とりあえずやってみよう!! なんだかやる気が出てきたぞー!」

……でも、もともになる書く本みたいなのは日記用のものの買い溜めくらいだから、そこから作らないとかな？

なんとかかもととなる本を作ることができ、中身を書き始めることが出来た

……それにしても、『錬金術』ってほんと何でも作れるなあ
植物から紙へ、紙から本へ……

大元の素材が必要だけど、逆に言えば大元の素材さえあれば何とかなってしまうというのがスゴいところだ。それに、いろんな道具が必要なわけじゃなく釜ひとつでできるのも

ただ、今僕の手元にあるできた本は元の素材の割には質が悪い。これは調合時間を極力最短にしようとしたからなのか、そもそも作ったのが錬金術士じゃない僕だったからなのか……どちらにせよ、立派なものにしようと思うのなら、他の人に頼んだ方が良いのかもしれない

とりあえずは、『魔法』の基礎の基礎から書きはじめることにしたんだけど……

『ルーン』の説明から書いた方がいいのかな？ それなら、絵も描き加えて『青の農村』の畑なんかで見られる『ルーニー』たちのこと……」

そう考えてみると、本当にいろんなことを書かないといけなくなりそうだな。これはこの一冊だけじゃあ全ての『魔法』について書き収まらないだろう

……いや、それに『ルーン』の扱い方について読者に伝わるように……でも、あれってなんとなくの感覚でやるって感じだから、どう書

けばいいんだろう？ ……そもそも、『アーランド』の人たちって『ルーン』を扱えるのか？ ……って、それって、杖無しの魔法使用の実験をしてみないと、ってことになるから堂々巡り？

コンコンコンッ

悩みだした思考につられてペンが迷子になりだしたその時、玄関のほうからノックの音が聞こえてきた

「はいー！ ちょっと待ってくださいーい」

手に持っていたペンを一旦テーブルに置き、僕はソファアールから立ち上がった。そして玄関へと駆けて行き、扉を開けてお客さんの顔を見た

「……えっ」

そこにいたのは……

「………と、トトリちゃん……!?!」

そう、玄関の先にいたのはトトリちゃんだった。ここ最近、避けられていてロクに会えていないからと言って、こんな特徴的な格好をした子を見間違えたりするはずは無い

ただ、うつむき気味なうえ、視線が泳いでいるため目も会わず、表情は読み取りずらかった

「あ……あのー………じ、実は、少しお話したいことがあって……」

「えっ、あ、うん。 ……何かな？」

「その……私の、お母さんのことで」

トトリちゃんのお母さん……ということとは、ギゼラさんのこと？
でも、なんで今いきなり？

……？

……はっ！まさか!?

← 僕はギゼラさんが何処に行ったのかを知っている

← でもそれをトトリちゃんに隠して「探すのを手伝ってあげる」という立場でお手伝いをしたりしている

← トトリちゃんがそれを知る

← 「良い人のふりして、嘘をついていたんですね……。マイスさん、最低ですっ……！」

← 僕を避けるように（今、このあたり）

……あれ？

もしかして避けられてたのって『サンライズ食堂』でのアレが原因じゃなくて、根本的に僕のせいだった……？

なんだか、急に口の中が乾いた気がした……

4年目：マイルス 「転換期は突然に・下」

マイルスの家

ここ最近、僕の事を避けていたようだったトトリちゃん
そのトトリちゃんが僕の家に来て口にした言葉……

「あ……あのー……じ、実は、少しお話したいことがあって……」
「その……私の、お母さんのことで」

僕はその言葉に内心動揺してしまっていた
なぜなら、「お母さんギゼラさんを探す」というトトリちゃんが冒険者になった理由の……そのギゼラさんが何処へ行ったのかを知っていながら、トトリちゃんには隠し続けていたから。もしかしたら、避けられていたのもソレが原因では？……つと

でも、その予想は違うんじゃないか、という感じもしてきた
というのも……

とりあえず家にトトリちゃんを迎え入れ、いつも誰にでもするようにソファアールへと案内した

そして、これまたいつも通りにお茶を用意して、トトリちゃんの座っているちょうど前あたりのテーブルの上にカップを置く

「あつ、ありがとうございます」

そう、少し言葉に詰まりつつもお礼を言ってくれたトトリちゃん。だけど、やっぱり目も顔も会わせてくれないし、少し落ち着きも無い感じがする

僕は、ソファーとはテーブルを挟んで反対側にあるイスに腰かけ、トトリちゃんと対面する形をとった

「……………」

「……………」

……そして、お互いに次の言葉が出てこず、僕とトトリちゃん、二人の間に妙な沈黙の間ができてしまっていた

……で、この沈黙の中に、僕が自分でしていた予想を「違うんじゃないか？」と思った理由……そのきっかけがあるんだけど……

「大丈夫、きつと大丈夫だよ……トトリちゃん、頑張つて……！ もしもの時は、わたしも手伝うから……！」

「……トトリよりも、コロナの方が緊張してるんじゃない？」

「この子が弟子以上に張り切っちゃったりするのは、いつもの事ですよ。ほら、「トトリちゃんの先生だからっ！」って感じに」

「し、心配しなくても、マイスくんは優しいから……ね？」

「うー……でも、話を聞いてからだとなんだかマイス君から謎の威圧感が感じられる気が……と、とトトリちゃんの立場だったら、きつと、もつと凄いいんじゃない?！」

「……事情は聞いてはいるが……しかしだな、こんな覗きの真似事をするのはいかがなものか」

「んなこと言ってもよ、この状況放置して帰れつて言うのもムチャなハナシだぜ？」

「そうよねえ……。仕事なんかにも手はつきそうにないし……下手したら自分の仕事場で爆発起こしちゃいそうな人もいるものね」

静寂の中、トトリちゃんが来た玄関とは反対側……つまりは裏手側の窓の外あたりからわずかに聞こえてきた複数の声

内緒話のような小さな声での会話は、モコモコの姿ほどではないけど、そこそこ聴覚に自信のある僕の耳にはギリギリ聞こえていたが、ソファアに座っているトトリちゃんには聞こえていないみたいで、相変わらずの様子だった

……そして、その外の内緒話の声なんだけど、その全てが僕の知っているひとのものだった

ロロナ、イクセルさん、クーデリア

続いて、リオネラさんとフィリーさん

最後に、ステルクさん、そしてリオネラさんといつも一緒にいるホロホロとアラニーヤ

この前、やけに予定を聞いてきた上に「出かけるな」と念を押してきたクーデリア。それに、今朝がた街の方へと行ったフィリーさんとリオネラさん&ホロホロ&アラニーヤがいるあたり……誰が計画したのかはわからないけど、おそらくこのトトリちゃんと僕との二人きりの対面は、家の外に隠れている皆がセツティングしたものだと思うんだ

……それに関しては色々と考えたいところではあるけど……とりあえず、もしこれが「ギゼラさんの行先を隠していたことについて」だったとすると、少しおかしい気がする

いや、だって、トトリちゃんのことを応援(?)しているロロナが今外にいるけど……僕の知っている限り、ロロナの性格だと「マイス君！なんでトトリちゃんにイジワルするのっ!」って真っ先に言っつきそうな気がする。……そうでなくても、トトリちゃんの隣に座るくらいのことではするだろう

でも、実際はそうはなっていない。……とすると、「ギゼラさんの行先のことを隠していたことについて」とは別のことでこんなことになっているんじゃないかな？

……あれ？

それはそれであんまり心当たりが無いような？ やっぱりティ
ファナさん絡みの『サンライズ食堂』でのこと？ いや、でもトトリちゃん
は「お母さんのことだ」って言ってたから、ギゼラさんのことのは
ず

とりあえず、このまま黙っていてもどうにもならないから、話を切り
だしたいんだけど……でも、何から聞けばいいのかな？ いっその
こと、外にいるみんなを呼んでみたり？ でも、みんなが僕とトトリ
ちゃんをわざわざ二人きりにしたのは、きつと何か考えがあつてのこ
とだろうから、それを壊すのも……

「あ、あのっ！ マイスさん!!」

考え込んでしまいかけていた僕に、トトリちゃんがいきなり大声で
呼びかけてきた。おかげで、驚いてしまい少しだけ飛び上がってし
まった

「うえっ!? どうかしたの、トトリちゃん?」

「そのーす……すみませんでしたっ!!」

ソファーから勢い良く立ち上がったトトリちゃんが、その勢いのま
ま後頭部が見えるくらい深く頭を下げてきた………って

「ええっ!? 顔を上げてよトトリちゃん! いきなり、どうしたの?」

「……ロロナ先生から聞いたんですけど、その……わたしが避けてた
せいで凄く落ち込んだとか……。それにイクセルさんからも、お酒を
溺れるように飲んで「僕がトトリちゃんに悪い事しちやっとなら
ちちゃんと謝りたいのに……」って死んだ『コヤシイワシ』みたいな目
ぼやいてた、って」

「いやいや、なにそれ!? 確かにそんなことは言ったかもしれないけど、
お酒を飲んでぼやいたりはしてないよ!? それに、落ち込んではい
たけど、あれはフリーさんと……それとロロナにも避けられ気味だった
のも大きかったから、そんなに気にしなくていいよ」

僕がそう言うと、窓のほうから小さな声で「うう、あれはその……」

「ご、ごめんねマイス君」と聞こえてきた……

「それに、またこうしてトトリちゃんと話せたから、もう大丈夫だよ」

「で、でもーっ……」

何かを言おうとしたようだったが、トトリちゃんは言葉を詰まらせてしまったようだった。……だけど、決心したようにそらしていた視線を僕に向けて、改めて口を開いてきた

「それに、わたし、お母さんのことでミスさんに謝らなくちやいけなくてー」

「ギゼラさんのことまで？」

ええっと……つまりは、最初に言っていた「話したい、お母さんのこと」っていうのは、「ギゼラさんのことで謝りたいことがある」ってことだったのかな？

ギゼラさんがしたことが何かで、トトリちゃんが謝らなくちやいけないと思うようなことといったら……

「冒険の途中にギゼラさんが泊まりに来た時に、「朝の運動だー」って言って素振りしていたギゼラさんの剣がすっぽ抜けて、ウチの作業場が半壊しちゃったこと？ それとも、僕がいないうちに「農業ってそんなに面白いのか気になった」って言って、地面を耕そうとして家にあった予備の『クワ』を十数本叩き折った……というか砕いたこと？ あっ、もしかして、村の『集会場』の建物を造る時にギゼラさんが「アタシも手伝おうじゃないか」なんて言って、柱と梁用の木材を全部へし折っちゃったことだったりするのかな？」

「ふっ……？」

……お茶を口にふくんでいた様子もなかったのに、トトリちゃんがむせた

というか、一瞬、トトリちゃんの口から赤い液体が噴出したように見えた気がした。テーブルの何処にも赤い液体が飛び散っていないから、ただの僕の見間違いなんだろう

「……予想はできてたし、覚悟もしてたけど……何やってるの、お母さんは……」

そう呟くトトリちゃんはプルプル小刻みに震えていた。……ついでに、窓の方からはトトリちゃんへの小声の応援のため息が増えたようだった

「でも、全部もうギゼラさんが謝ってくれたし……トトリちゃんが何か気にするようなことは……」

「い、今聞いたことも謝りたいですけど……そ、そうじゃなくて！ お金のことなんです！」

「……お金？ 何かあったかな……？」

「わたしのお母さんが壊したものとかのお金をつ！ マイスさんが代わりに払ったっていう!!」

僕の何かが気に入らなかつたのか声をあらげるトトリちゃんに言われて、思い出そうとしてみると……ああ、確かに。トトリちゃんの話うとおり、ギゼラさんの代わりにお金を支払ったことがあった

でもアレって……

「アレももうギゼラさんと話についてるから、それこそ気にしなくていいよ？」

「そうですね……だから、わたしがかわ……えっ？」

深刻な顔から一転してポカンと口を開けるトトリちゃん

「あれ？ そういえば話して無かつたかな？ ほら、昔に僕とフィリーさんとリオネラさんたちで『アランヤ村』に行つたことがあるって話」「あつ、はい。ジーノくんと一緒に初めてここに来た時に聞きました。確か人形劇と、わたしのお母さんに会うため……あつ、もしかして」

「うん。実はその時の僕の目的のいくらかは「立て替えた代金の説明と徴収」だつたんだ」

「うそっ!?! あの頃のごとは元々あんまり憶えてなかつたけど……そんな事があつたなんて」

驚いていたのはトトリちゃんだけじゃなかつた

窓の外からも全員分の驚愕の声が聞こえてきた。ただ、とつさに抑えたのか、そこまで大きな声にはなつて無くてトトリちゃんは気づい

「結局ですか!? やっぱり、沢山稼いで、お母さんの代わりにわたしが返します!」

「ええっ!? そんな、お金を返されても困っちゃうよ!?それに、コオルに怒られる!」

「なんでっ!?!」

その後、トトリちゃんと僕は少しの間、あーだこーだ言い合っただけど……

「マイスさんのばか! お金に無頓着のお人好しー!!」

……と、よくわからない罵倒(?)をして、トトリちゃんは家を飛び出して行ってしまった

……と思いきや、すぐに戻って来て

「あのっ!今度は逃げずにお茶と『パイ』を用意して……その、ちむちゃんたちと先生と待ってますから……これからよろしくお願いします」

と言い残して、今度こそ帰って行ってしまった

よくわからないけど、とりあえずトトリちゃんとは仲直り(?)が一応できたみたいで一安心することが出来た

……それにしても、結局、何でトトリちゃんは僕を避けていたんだらう?

4年目：トトリ「時には、忘れることも大切……かも？」

昔、お母さんがあちこちで活躍(?)をして、いろんな人に迷惑をかけたことがあったそうで……

その中で、お母さんが出した被害をミスさんが肩代わりしていたというお話……

コロナ先生やイクセルさんから、わたしが避けていたせいでミスさんが元気が無い事を聞いて、悩みに悩んだ末に、あの日、わたしはミスさんの家へ行った

お母さんとのお金の貸し借りをしていたこと、そしてそれがどうなっているかをようやくミスさんと話すことができた

一部、よくわからないところや納得できないところがあったりしたもの、それでも何とか折り合いをつけることができて、ミスさんとは前と同じような付き合いができるようになった

……そんなこんなで、後日、アトリエに来てくれたミスさんと『パイ』を食べながらお話をしたりしていたんだけど、その中で近々村のお祭りがあることを聞いた

どんなお祭りなのかを聞いたけど、ミスさんは首をひねって「実は僕も知らないんだ」と、不思議なことを言ってきた。詳しく聞いてみると、ミスさんはどうしてかわからないけど、お祭りの企画・準備に参加させてもらえなくて知りようが無かったらしい

そういえば、普段はティファアナさんのお店やイクセルさんのお店とかに調合の素材を買いに行った時にチラシを見たりしてたんだけど……今月は一度も見えていない。うーん……？本当にあるのかな？

青の農村

そんな疑問もあったけど、たまたまお仕事とかの予定が無くてヒマが出来たから、ミスさんから聞いていたお祭りの日に『青の農村』に行ってみることにしたんだけど……

「うーん…？　いつものお祭りの日よりも人が少ない。けど、普段よりは多いから、やっぱり今日は何かやってるのかな？」

村の入り口辺りから見えた光景から、わたしはそう思った

それに、村の中の道に普段は無い出店もあるから、お祭り自体はやっていることは間違いないだろう

「でも、何のお祭りなんだろう？……って、あれ？あんなところに、看板なんてあつたっけ？」

村の入り口から少し行つた所に、これまでのお祭りでも置かれたことがなかったような花飾りで装飾された看板がたつていた

「ええつと、なにに…『記念祭』？記念って、何のだろう？」

「この村ができた記念。ちょうど今日がその日ってことなんだ」

「へえー、そうなんですか…って、あつ、コオルさん、こんにちは」

看板を見つめていたわたしに声をかけてきたのは、『青の農村』を拠点に活動をしている行商人のコオルさんだった

コオルさんは、わたしが初めて『青の農村』を訪れた時からの知り合いで、こうして『青の農村』に立ち寄った時に時々会ってお話することがある

「あの、この『記念祭』って何をするんですか？」

わたしがそう聞くと、コオルさんは少し申し訳なさそうにしながら自分の赤髪をかいて言った

「ああ、悪いが今日のお祭りは何か特別な催し物があるわけじゃないんだ。……せいぜい、ここから見える『青の農村』と他所の行商人とかの出店が出てくるくらいだ」

「そうなんですか？　ここのお祭りって、いつも面白い事をやってい

るイメージがあつたんですけど……」

「そりゃあ、ウチの村長がそういうのが好きだからな。けど、今回は企画の原案から一切関わらせてないから、今回は大人しいんだ」

「村長が関わってない……そういえば、マイスさんがそんなこと言ってたっけ？」

私の言葉を聞いたコオルさんが、少し驚いた後、納得したように頷き出す

「なるほど、マイスから今日の事を聞いてたのか。身内用の祭りだから街には広告を出してなかったのに来たから不思議だったが、そういうことだったのか……つっても、広告を出さなかったのはマイスにバレないようにするためだったんだけどな」

コオルさんがそう言ったんだけど、わたしはどうにも気になってしまふことがあつて、つい首をかしげて問いかけてしまう

「あのー、村ができた記念のお祭りなんですよ？　そういうのって普通、村長がとりしきつたりするんじゃないんですか？　何でマイスさんに知られたらいけないようなことに……？」

「あーつとだな、一応言っておくが『記念祭』の開催は今回が初めてだ。マイスは「みんな楽しんで・賑やかに」がモットーで、そういうことに興味なかったから、記念の祭りはこれまで無かった。そもそも、この村は前身が10年前、村になったのは8年前でロクに歴史も伝統も無いからな。……そんな祭りだから祭りの基本方針は「村長に感謝し、^{ねが}ろう」っていう、村の人間以外は楽しみようが無い内容なんだ」「村長に感謝……？　ろう……？」

「ああ。この村は元々、村長の作った作物に……その農業に関心を持つたりして、学びたいって人たちが集まってできたものだからな。なんだかんだ言つて、尊敬もされているし、感謝もたくさんされてるんだよ。……オレはちょっと別なんだけどな」

普段は聞けないような話を聞いて、なんとなく不思議な気持ちになる

そして、そこまで聞いて、なんとなくだけどこのお祭りがどうい

ものなのかがわかってきた気がした。そうすると……

「……もしかして、マイルスさんに隠してたのって」

「まあ、俗に言う「サプライズ」っていうやつだな。そのうえ、その準備を手伝わせたりするのは格好がつかないだろ？」

「あははは……なるほど」

この前、マイルスさんに会って今日のお祭りのことを聞いた時に感じた「お祭りの準備を手伝いたい」という空気は、かなりの物があつた気がする

あの様子だと、たぶん内容を隠して少しだけ準備を手伝ってもらおうってなつても、いつの間にか「少しだけ」じゃなくて半分くらいマイルスさんがやっちゃってしまつて色々残念なことになるのはほぼ間違いないと思う

「……でも、いいんですか？」

「ん？ 何がだ？」

「もう、記念祭って始まつてるんですよ？ コオルさんはマイルスさんのところに行かなくても……？」

わたしは辺りを見渡す。村の中にある出店を見て回っている幾人もの人の中には、街の人や旅の人はいる感じはするけど、『青の農村』の人の姿は無い……ような気がする。たぶん、あの一番大きな建物『集会場』の中にでもいるんじゃないかな？

「それなら気にしなくていいぜ。今は日中だからな、オレなんかよりも年下のやつらを中心としたメンバーでマイルスに何かしてるはずだ。……で、オレやもつと大人の連中は夜だ。それまでは『青の農村』からの出店の店番や一応の警備、そして、お前みたいな知らないやつに今日の事を説明したり、オススメの出店を紹介したりするんだ」

「へえ、そうだったんですか」

とりあえずは、コオルさんから今日のお祭りがどういうものなのかを聞くことが出来た

その話からすると、どうやら今日はミスさんに会うのは難しそうだ

「……そうなるよ、わたしはどうしようか？」

催し物が無いって言うことは、観戦のようなこともできないわけで……でも、出店を見て回って掘り出し物を探してみるのも悪くは無いかも？

「……というわけで、見て回ろうと思い、ここから移動しようとしてミスさんに一言お礼でも言おうとしたところで、ふと、あることを思い出した

「……？　どうかしたか？オレの顔に何かついてるのか？」

「あついえ、そういうわけじゃ……でも、なんて言えばいいんだろう？」

「よくわかんねえな。何か言いたいなら、とりあえず言ってみたらどうだ？」

「そう言ってもらえるのはありがたいけど……うーん、本当にどこからどう話せばいいんだろう？」

「ええつと……ギゼラっていう人を知ってますか？」

「おお、知ってるぜ……というか、ウチの村の人間だったら大体のやつは知ってると思うぞ。よく、冒険の途中なんかミスさんのところに来たからな。それに、『集会場』の建設の時のこととか、色々逸話みたいなもんもあるしな」

「うう……その、ご迷惑をおかけしました……」

「なんでお前が謝るんだ？」

「コオルさんは不思議そうな顔をしているけど……うん。わたしとしてはどうしても、本当に申し訳ない気持ちになってしまう

「その、実はわたしのお母さんで……」

「………苦労してるんだな」

「予想外にも、コオルさんはわたしを責めたりすることもなく同情を……あれ？これもこれでなんだか悲しいような気も……？」

……つて、そうじゃなくて！

「この前マイルスさんに、お母さんの代わりにお金を払った分を返すすつてお話をしたら断わられたんです。……それで、その時にマイルスさんが「コオルに怒られる」つて言つてたんですけど……あの、どういうことなんですか？」

「オレに怒られる……？ ああ、うん……まあ確かにな。けど、その様子だとマイルスが本当に理解してるかが怪しいな……」

呆れたように大きなため息をついたコオルさん。そして首を振つた後、わたしの方を見てきた

「どこから話すか悩むが長くなっても悪いからな、端的に話すぞ。

……マイルスは、ちよつとした問題をかかえてるんだ」

「問題……？」

「そう、その一つが「お金を使わない」ことなんだ。正確にはほとんど使わないだけだな。街の雑貨屋や食堂なんかでも多少使つたりはしてるみたいだけど、ほとんどはマイルス自身の手で作つてしまうから、使う機会が無く使わないんだ」

コオルさんは、まるでそれが問題であるかのようにいうんだけど……でも、それつてただ単に節約してるつていうだけで、別に悪い事じゃないような気がするんだけど……？ むしろ、いいことなんじゃないかな？

そんなわたしの考えが読み取れたのか、コオルさんは首を振つた

「……これだけじゃあ、そう大したことじゃないかもしれないけど………もう一つあるんだ。「収入が多い」んだ」

「えつ、でも、悪い事じゃ無いですよ？それも」

「まあな。作物にしろ、それからできる加工品にしろ、その品質も量も、マイルスが培つてきた技術や努力の結果なんだから悪いわけじゃない。……けどなあ、どうしても限度つてもものもあるんだ」

またため息をついたコオルさんは、「ちよつとわかり辛いかもしれないが……」と言葉を続けた

「あのな、『お金』っていうモノは無限のようでも限りがあるんだ。巡^{めぐ}っているから無限に思えるだけさ。食べ物で言えば、食べる人から作る人へ。作る人も食べるし、それに食べ物^{たべもの}が料理^{りょうり}だったら食材を買わなきゃいけない……って感じに、お金は動くんだ」

「もちろん、食べ物以外でも同じようなことが言える」と付け足した。

「他にも、税金とかでも動いたりするんだが……とりあえず、置いておくぞ。そのお金の流れ^{ながれ}が滞^{とどま}ると経済^{けいぎ}に、社会^{しゃかい}に問題^{もんだい}が出るんだよ」
「えっ、でも、お金を貯^{たくわ}めてる人なんていくらでもいますよ？わたしだって貯^{たくわ}めてます。……それに、お金持ちの人たちはきつと、わたしなんかよりもっと貯^{たくわ}めてると思うんですけど」
「だから、限度^{げんどう}があるって言っただろう？」

何度目かのため息をついたコオルさんは、わたしに全ての指^{ゆび}を伸ばした右手^{みぎ}を見せてきた

「5」だ」

「5？」

「あとは「万」と「コール」だ」

ええつと、つまり……

「50,000コール……？」

「おう。とは言ってもだいたいってだけで、本当はもうちよつとごちやごちやした数字^{すうじ}だ」

そう頷^{うなづ}くコオルさん

……でも、結局何の数字^{すうじ}だろう？ 「コール」はお金の単位だから何かの金額^{かねりく}だろうけど……？ ここまでの話^わからすると、もしかしてマイスさんの収入^{しゅうに}のことかな？

『冒険者』になるために初めて『アールランドの街』に行くとき、御者^{ごしや}のペーターさんの嘘^{うそ}の「馬車代^{ばしやだい}、10万コール」を本気^{ほんき}にしてジーノ君^{きみ}と頑張^{がんぢやう}ってお金を貯^{たくわ}めた時^{とき}がある

あの時は結局、一ヶ月で3000コールくらいしか貯^{たくわ}められなかつ

た。けど、『錬金術』も戦闘も上達した今ならもつと稼げるとは思うけど……それでも5万コールも稼げる自信は全く無い
「すごいですね。一ヶ月で5万コールだなんて……」

「先月の一日平均稼ぎの話だからな」

「……へ？」

「だから、一ヶ月だと単純計算で150万コールだ」

「……ええっ？」

「ついでに言うと、先月は低いくらいだ。冒険とかに出てない月は倍くらい……最高額は倍以上の金額になるから」

「……農業って、そんなに儲かるものなんですか？」

「いや、マイルスが異常なだけだ」

倍以上……

単純に倍だけだったとしても300万……もし、それが1年……12ヶ月続けば合計3600万。でも、倍以上っていうのは、あくまで「最高額は」って話だから……いや、低いくらいって言う先月の金額で計算した月150万でも年1800万だから、大金と呼ぶには十分過ぎるよね

あれ……？もしかして、わたしがマイルスさんに頼んで冒険について来てもらったりしたこともあるけど、付いてきてもらうだけでマイルスさんに結構な損失を負わせてたの……？

「……で、だ。そんな収入のやつが自給自足で生活して、お金を貯め込みましたらどうなるか、わかるな？」

「……はい、大体は」

「そんなわけで、マイルスには適度にお金を使うように言っているんだ。……とはいっても、ギゼラ被害の代金のたて替えはオレが言うよりも前……村の前身ができるよりも前からやってたことみたいだけど。正

直、それが無かったら、村ができてオレが村の一員になって注意する前に何かしらの問題が起きてたかもしれないなかっただろうな」

……それは喜んで良いものなのかな？

だって、ということはお母さんのお母さんが、困ってしまう金額のマイスさんの貯金を抑えられるくらいのお母さん、何かしらの迷惑をにかけているわけで……それって、良い事とは言いにくいんじゃない？

「今はもう、マイスが毎月決まった額を国にあげて積立金の形式になる制度を定めてるから、お前のお母さんが借りてるってわけじゃない。というか、自然災害や他の冒険者による損害は全部マイスの金から払われてるから、そう気にすることじゃないぞ」

「気にするとか気にしないとか、そういう問題じゃあなくなってるような気が……。ていうか、わたし以外にもお腹が痛くなりそうな人がいるような気がしてきました……」

「まあ、国の上層部の人間あたりが腹じゃなくて頭が痛くなってるかもな。実際助かってる部分もあるだろうけど、大金を収めるヤツが何か要求するわけでもなく、毎月毎月、個人で収めてくるんだからな」

国の上層部って言うと、前に会ったトリスタンさんは大臣さんだったっけ？ お母さんとマイスさんの話を聞いた時に嫌そうな顔をしたたのは、そういう部分もあったのかもしれない

『錬金術』が使えたり、戦いも凄く強かったりするのを知った頃から「すごい人」とは思っていましたけど……もしかして、マイスさんって「とんでもない人」なんですか？

「マイスが何か頼み事でもすれば、国は断れないだろうから、そういう意味では影響力は強い……というか、その大元の財力がトップクラスだな。強さも国内屈指なわけだし」

そう言うコオルさんは、マイスさんがいるのであろう『集会場』のほうに目を向けて、苦笑いをした

「まあ、本当にすごいのは、それをほとんどの人に知られず、感じさせずにいられることと……本人が、自分のしていることとそのすご

さを全く理解してないことだな」

その後、コオルさんから……

「オレが知ってる限りでだけど、明確にギゼラさんのために肩代わりした金額はマイルスでも9ヶ月分くらいだぜ？まともに考えれば一生で払えるかってくらいだし、いちいち気にしたら大変だぞ？ 本人^{マイルス}は金額を憶えているわけがないし、貸しとも思っていないだろうから、なおさらな」

……って言われた

わたしが気にしていそうだから、心配してそうだと思って気を遣い言ってくれたのかもしれないけど……9ヶ月…月150万で考えても………

……うん。コオルさんの言う通り、マイルスさんのお金の事は考えないようにしよう……

4年目：マイルス「他人事でも心配事」

マイルスの家・前

「…つと！ ふう、こんなものかな」

『ジョウロ』片手に、僕は朝日に照らされた家の前の畑を見渡す様々な種類の作物を育てているため大きさや成長にばらつきがあるけど、どれも良い収穫が期待できそうだということは、これまでに^{つちか}培われてきた目で見ればわかった

水やりの出来ていない場所が無いことを確認し終え、僕は『ジョウロ』を片付け、家へと戻っていく

マイルスの家

朝の日課の畑仕事を終えて家へと入った僕の目に入ってきたのは……

「あつ…マイルスくん、お仕事おつかれさま。今、ちようど様子を見に行こうかなって思ってたところだったの」

「おせっかいかもしいれないけど、朝ゴハン作らせてもらったわ」

「まあ、リオネラが作ったもんだからマイルスのよりも美味くはねえかもしれないけど、食ってけよ」

……キッチンからリビングダイニングの部屋へと3人分の朝食を運んでいるリオネラさんとアラニーヤとホロホロだった

少し前に『青の農村』にやって来て、久しぶりに『アーランドの街』へも行ったリオネラさん

以前に顔を見て気絶してしまったステルクさんとも、偶然の遭遇でありながらもなんとかお話しができるまでになったりと、『アーラン

ドの街』を避ける理由も無くなっただけ……ここ何年間かはこのあたりに来た時には、いつも僕の家『離れ』で寝泊まりしていたためか「ここが一番安心できる、かな？」と、引き続き街ではなく僕の家『離れ』に泊まっている

僕としては特に困る事も無いし、話し相手が増えるからいつも通りに承諾した

そして、そんなリオネラさんだけど、いつもではないものの今日のように早朝からの僕の畑仕事に合わせるように起きて、朝ゴハンを作ってくれることがある。申し訳なさもあるけど、ありがたい事には違いないから、いつもその時は美味しくいただいている

「ありがとう！ ゴメンね、朝早くからこんなことしてもらっちゃって……」

「ううん、気にしないで。私がしたくてしてる事だから」

「そうよ。私たちは泊めさせてもらってるんだから、このくらいのことばさせて貰うわ」

「だな。それに、『デニツシユ』にスープを一品付けただけの簡単なものだから、大した労力じゃないから、気にすんなよ」

僕に気を遣わせないためか、そう言うリオネラさんたち

そんなリオネラさんが朝ゴハンをテーブルの上に置いて、ソファアに座っている人にむかって言った

「フリーちゃん。マイルスくんも戻ってきたから、いったん本は置いて朝ゴハンにしよう？」

「あつうん……って！ いつの間にも!? ゴメンねマイルス君！ お、お疲れ様っ！」

「あはは……そんなに慌てなくても」

何か用があったのか、それとも特に理由が無いのか、今朝、僕が畑仕事をしている時に街の方から朝一でやって来たフリーさん。畑仕事の途中に会って挨拶をしたんだけど……あの時間からすると、本当に僕らと変わらないかそれ以上に早く起きてこっちに来たんだと思う

そんなフィリーさんが、読んでいた本を慌てて閉じて壁際の棚へと置いたのを見て、僕は苦笑いをしてしまった。別に何か悪い事をしてたわけでもないのだから、そんなに慌てなくていいと思うんだけどなあ……？

「それじゃあさっそく、リオネラさんが作ってくれた朝ゴハンを食べようか」

……そんな感じに、今日という一日は始まった

リオネラさんが用意してくれた『デニツシュ』はとても美味しく、スープのほうもしつこ

くないアツサリとした味で食べやすくて朝ゴハンにはピッタリだった

そんな朝ゴハンを食べながら、色々お喋りしたり……フィリーさんが「私ももう少しお料理頑張ってみようかな……」なんて呟いたりしながら、僕は朝ゴハンを食べ終えた

そして、食後に少しゆっくりとお茶を飲んでいた時に、僕はふと、さつきフィリーさんが読んでいた本の事を思い出し、そのことについて聞いてみることにした

「そういえば……あの『魔導書』、読んでみてどうだった？」

そう、フィリーさんが読んでいたのは、この前僕が書きはじめた『魔法』について書いた本……『魔導書』だった

基礎の基礎とはいえ、ある程度まで書けた『魔導書』。実際に僕以外の人が読んでみたらどう思うのかが気になって、ちよウドウチにいたリオネラさんに読んでみてもらった。……経緯^{けい}はわからないけど、今朝はそれをフィリーさんが読んでいた

……で、聞かれたフィリーさんだけど、少しだけ「うーん……」と悩むような仕草をした後、ちよつと恥ずかしそうに笑った

「リオネラちゃんから貸してもらって読んでみてただけど、途中までだけど、思ってたよりも難しい内容じゃなかったかな？むしろ楽しんで読めるくらい。……けど、『ルーン』っていうのの扱い方のお話はちよつと理解し辛くって……」

「ああ、やつぱりそうか……。むこうじやあ当たり前みたいなどころはあつたけど、ここには考え自体が無いからなあ」

大自然の力そのもの……だとか、色々と表現を工夫しながら書いたつもりだったけど、そう目に見えてわかつたり何かでは計つたりすることが出来ないものだから、「ある」と言われて「それを感じろ」って言われても難しかったのだろう

うーん……『ルーン』の集合体である精霊『ルーニー』を知って貰えれば……、もしくは、『ルーニー』とこの世界の『精霊』との関連性を知れたら、もつと的確な書き方ができるかもしれないけど……

そう少し悩んでいるところに、今度はリオネラさんが僕に言ってきた

「私はなんとなくだけどわかつたよ」

「本当？」

「うん。……やつぱり、普段から目に見えない力を使ってるからかな？頭でわかるっていうよりも、感覚で……って感じだけど……」

物を触れずに動かしたり浮かせたりできる『力』を持っているリオネラさんには、どうやら『ルーン』は理解できる……というよりは、信じられるものなのかもしれない

そんなリオネラさんの言葉に、フィリーさんは興味深そうにリオネラさんの顔をジーツと見ながら口を開く

「へえ……。やつぱりそう言うのって感覚で使うものなの？」

「あの本に書いてた『魔法』がどこまでそうかはわからないけど……でも、少なくとも私の『力』は感覚やイメージに頼ってる部分が多いよ」

「そうなんだ。……感覚、かあ。『杖』での『魔法』を使っていけばその感覚が身体に染みこんだりするかな？」

フィリーさんの言葉は、後半のほうは顔を僕のほうに向けていたの

で、僕に対するものだろう。僕は素直に頷く

「たぶんね。『杖』に付与されたものとは言っても、僕の間ではそう大きくは違っているようには思えなかったよ」

「そっかー…。それじゃあ『魔法』に挑戦するのは、私はもうちよつと『杖』で頑張ってみてからにしようかな。その頃にはきつとその本も最後まで書かれているだろうし」

「期待にそえるように、頑張って書かせてもらおうよ」

『魔導書』については、もっと「詳しく、わかりやすく」ってところだろうか

もう少しじっくりと考える必要があるそうだな……

食後のお茶も終え、片付けもしてしまったところで、ホロホロとアラニーヤが僕に問いかけてきた

「おい、ミス。お前は今日は何か予定が入ってるのか？」

「無かったらリオネラとお散歩にでも行ってみない？もちろん、フリーちゃんや私たちも一緒にだけど」

「嬉しいお誘いだけど、今日は昼前から次のお祭りの話し合いがあるんだ。今度は絶対に出たいから、今からはちよつと厳しいかな」

僕がそう言うと、アラニーヤは「あら、そうなの」とこころなしに残念そうな声のトーンで言った

それとは別に、フリーさんが不思議そうな顔をして首をかしげた
「今度は絶対に…って？」

そのフリーさんの言葉に続いて、村にいて事情を知っているリオネラさんが口を開く

「あの、このあいだのお祭りは嫌いだった？」

「いや…：うーん、嬉しくなかったわけじゃあないけど…。やっぱり、村の人にも、外からきた人にも楽しんでもらえるお祭りがいいからさ。そういう視点だと、少し申し訳なきがあつたかな。…：それに、僕も準備に参加したかつた」

「……もしかして、一番最後が本音かしら？」

「そうだとしたら、ワーカーホリックってやつじゃねえか？」

アラーニヤとホロホロに、変なツツコミを入れた

「……でも、お祭りって準備をするところから楽しいよね？ だから、やっぱりそこからちゃんと参加したいんだ」

「よ、よくわからないけど……話からすると、今度のお祭りはマイルス君が張り切るから凄いいことになりそうだね」

「お祭りだから凄いいにこしたことは無いと思うけど？ とりあえず、来月のお祭りは楽しみにしといてね」

「うんっ……ん？」

あれ……？ 僕は何か変なことでも言ってしまっただろうか？

フィリーさんはひとり何かを考え込みだしてしまった

そんなフィリーさんの顔を心配そうにしながら、リオネラさんが声をかけた

「フィリーちゃん……？ どうかしたの？」

「来月……ええっと、何かあつた気がしたんだけど……？」

「んん？」つと、そう首をひねって何かを思い出そうとしていたフィリーさんだけど、不意にパチリツと目を見開いて手を叩いた

「ああっ！ そう、確か来月にトトリちゃんの免許の更新があるんだっ
た！」

「免許って『冒険者免許』か。……そういえば、もうそんな時期だっけ」

思い返してみると、僕の家にとトリちゃんとジーノ君が来たのは3年前の春から夏に変わるころだった

あの時は『冒険者免許』を貰った後、初めての冒険者ランクのランクアップに街に来て、その時にクーデリアから『青の農村』の事を聞いて来た……って話だったはず。……そこから考えると、それより少し前に免許を貰っていたことになる

なら、来月あたりでちょうど3年というのは、そうおかしくないこ

とだろう

気になるのは、トトリちゃんたちが無事免許を更新できるかどうかトトリちゃんはきつと大丈夫だろう。僕の知っている限りでは特別サボっているような様子は無かったし、調合の腕も十分に上がっていたから、心配はいらないはずだ

ジーノ君は、よくわからない。…というのも、トトリちゃんとは違って一緒に冒険に行く機会も少なかったから…特に最近は無かったから、実力がどうなっているかが不明だ。…けど、聞いた話ではステルクさんが剣の指導をしていたりするらしいから、強くはなっている…はず。それで大丈夫かはわからないけど…

でも、一番心配なのは…トトリちゃんと同時期に免許を取ったっていうミミちゃん、かな

大丈夫だと思いたい、けど、小さい頃のミミちゃんしかほとんど知らない僕としては不安で不安でしょうがない

本当に冒険者としてやっていけるのかな？

頑張らなきゃ、って気持ちだけが先走ってしまつて無茶をしてしまつていないかな？

怪我とかしてないかな？

わからないことだらけなせいで、色々心配しだすとキリが無くなつてしまう状況だ

…でも、理由はわからないけど、このあいだまでのトトリちゃんと同じかそれ以上に僕の事を避けてるからなあ、ミミちゃんは

心配だけど…うーん、どうしよう…？

4年目：マイス 「潜入！モコモコ作戦！」

一度気になると、なかなか頭から離れなくなる……なんて経験は誰も一度や二度あるんじゃないだろうか？ 人によつては数えきれないほどかもしれない

……そして、今僕はその最中である

解決するには、その気になることを調べて回るなり何なりして、答えを見つけるのが一番だと思う。それができない時は……忘れる努力をする、とか？

僕は自分の中のモヤモヤを拭い去るために、行動を開始することにしたのだつた……

職人通り

『ロロナのアトリエ』の窓から、人に気付かれないようにこっそりとの様子がかがう

運が良いのか悪いのか、トトリちゃんとミミちゃん……そして、おのおの何かしらの作業をしているちむちゃんたちがいた

トトリちゃんは釜をかき混ぜて調合をしていて、ミミちゃんはソファーに座って何か本を読んでいる。その様子からして、冒険前の調合をミミちゃんが待っている……もしくは、遊びか何かの約束をしていて、トトリちゃんが調合品納品の依頼が終わるのを待っている……といった所かな？

もし、これがトトリちゃんとミミちゃんじゃなくて、ロロナとクアデリアだったなら、後者で間違いないんだけど……

とりあえず僕は窓から離れた

「……よしっ」

路地裏の物陰へと引っ込み、周囲に人の目が無い事を確認。その

後、自分の腰に巻いてある『変身ベルト』へと意識を向け、クルリツと回転しながら決めポーズをとる

「モッコッ！」

すると、僕は一瞬光に包まれた後「金のモコモコ」の姿へと変身した

「これでよし、っと。……トトリちゃんやミミちゃんの『冒険者免許』の更新が心配だからじゃなくて、このあいだのミミちゃんからのお願いの事できただけ……うん、そういうことにしよう」

特に誰かが聞いているわけじゃないけど、僕はひとりで言い訳のよ
うなものを呟いてしまっていた

心配なのは本当だけど、金モコ状態でなんだかズルをしている気持ち
が少なからずあるのも事実だ。……でも、何もしないでひとりで不
安であるのが耐えられなかった。だから行動することにしたんだけ
ど……

……というか、本当なら免許更新の基準の一つである冒険者ランク
のことを本人達から聞いたら良かったんだけど……トトリちゃんは
ともかく、どう考えてもミミちゃんは話をする前に僕から逃げ出すだ
ろう。それじゃあ何も聞けそうにない、だから金モコの姿で様子をう
かがうことにしたのだ

そんな中、自分への言い訳として思いついたのが……前に、トトリ
ちゃんが僕を避けている時期にその理由を探ろうと、『ロロナのアト
リエ』に金モコの姿で行った時の一件だった

その時、ロロナもトトリちゃんもいなかったから、アトリエにいた
ちむちやんたちから話を聞こうとしたんだけど……そこにミミちゃ
んが現れた。そして、何処からどうなってしまったのかわからない
が、なりゆきでミミちゃんによる「マイスほくさんくについて」のお話を聞
かされることとなった

で、その後、アトリエから出ていくときにミミちゃんから言われた

ことがあった。それは……

「その……もしよかったですらマイスさんが私のこと怒ってないか、それとなく調べてくれないかしら？ もちろん、私が探ろうとしてるってことは秘密にしなさいよねっ！いい？わかった!」

……という内容

その後すぐにミミちゃんは帰ってしまってしまい、結果的に有無を言わせないような頼みごとをされてしまった

……ということで、そのミミちゃんからのお願いの返事……というか、報告を自分^理への言い訳^由にしてしまおう、と考えたわけだ

「でも、どうしてだろう?」

僕が疑問に思っているのは、ミミちゃんのお願いの内容だ

もちろん僕はミミちゃんに怒ってなんかいないわけで、なんでミミちゃんがそんなことをきになっているのかサツパリわからなかったりする。というか、ずっと避けられている感じがしていたから、むしろミミちゃんを怒らせてしまうようなことを僕がしたのではないかとずっと考えていたくらいだ

うーん……? これってもしかして、ミミちゃんが僕を避けている理由と関係があったり?

トトリちゃんから避けられていたのは一応解決した。できればミミちゃんからも避けられなくなるようになりたいんだけど……その避けられる理由がわかれば一歩前進できる気がする

「でも、免許のこともそうだけど、むこうから自発的に話してくれないと知れないからなあ」

「モロ」意外の、普通の言葉を喋ったりすると僕だとばれかねないから、こつちから具体的に話題をふることができないのだ。……もしかしたら、これがこの方法の最大のネックかもしれない。でも、他に方法も思い浮かばないし……

そんな事を考えながら、僕はアトリエにお邪魔すべくアトリエの玄

関のほうへとテコテコと歩き出す……

コロナのアトリエ

ノックをすると、「はい、どうぞー!」というトトリちゃんの元気な声が聞こえてきた

扉を開けアトリエに入った僕に、調合中で忙しそうなたトリちゃんは、釜をかき混ぜ続けながら、振り返らずに言ってきた

「ご、ごめんなさいっ! あと少しで調合が終わりますから、ちよつと待っててください!」

どうやら入ってきた僕を見ていなかったため、僕の事を依頼をしにきたお客さんか何かだと思ったようだ

さて、トトリちゃんは思った以上に忙しそうなのだけ……そんなって、別の人が僕に反応を示すことになる

「あら? アナタは……」

「モコッ!」

その人……ミミちゃんは、手に持って開いていた本から目を離し、僕へと向けてきていた。それに対し、僕は片手をピシッと挙げて返事をする

「トトリに用事? それとも、前みたいになつちやいのと遊びに来たのかしら? それとも……」

少しだけ考えるような仕草をしたミミちゃんだったが、一瞬ハツ!?としたような顔をした後……素早く、なおかつ静かに僕のそばに移動し、顔を近づけてきた。そして小声で……

「も、ももしかして……マイスさんに聞いてきてくれたのかしら!」
「モコッ!? (うえっ!?)」

その勢いから謎のプレッシャーを感じてしまい、無意識に後ずさり

して引いてしまった

けど、一度深呼吸をし気持ちを落ち着けて、改めて目の前のミミちゃんに向きなおり、しっかりと頷いてみせた

「本当!? ……で、その……マイスさん、怒ってなかったかしら?」

「モコモーコ（怒ってないよー）」

「ぞ、そう……」

今度は首を横に振ってみせた。そうすると、ミミちゃんは「ふう……」と息をついた。なんとなくではあるけど、それはまるで何かの脅威から逃れることが出来たかのような安心感から自然と出たため息のよう感じられた

「よかった……でも、もしかして、私の事を忘れてるだけだったり……」

眉間にシワを寄せて、ひとり不安そうに呟くミミちゃん

……どうしてそんなふうを考えるんだろう? ミミちゃんがここまで心配するようなことって何かあったっけ?

僕は思い出せる範囲でミミちゃんと会ってからこれまでの事を思い出してみただけど……やっぱり、心当たりは無かった

ミミちゃんの不安そうな様子を見ると、どうしても心配になり気になってしまったため、「何とか聞き出せないものか……」と僕は何かしらの行動を起こそうと思ったんだけど……

「ふうっ、終わったー! お待たせしましたー……って、あれ?」

それよりも先にトトリちゃんが調合を終えたみたいで、そんな元気な声が聞こえてきた

「ミミちゃん、お客さんどこに行ったか知らない? ……えっと、その子は?」

「この子は『青の農村』に住んでる子よ。それでもって、さつき入ってきたお客さん」

トトリちゃんがこつちを向いたからか、不安そうな様子を何処かに隠してしまったミミちゃんが淡々とトトリちゃんの疑問に答えた

そして、今度はミミちゃんが首をかしげてトトリちゃんに疑問を投げかけた

「つていうか、この子、アトリエによく来てるんじゃないの？ 前にもアトリエに入っていくのを見たんだけど……」

「ううん？ アトリエで見たのは初めてだよ？ あつ、でも、わたしが知らないだけで先生とはよく会ってたのかも。何回かその子のこと話してくれたし」

「そういえば、私がアトリエで初めて見た時はアナタの先生と一緒にだったわね」

「やっぱり、そうだったんだ。 ……そういえばわたし、この子とちゃんと会うのは、留守のミスさんの家に行った時以来かな……？ あの時はリオネラさんに抱っこされてるのを見ただけで、お話はしてなかったなあ」

そう言ったトトリちゃんは、何を思ったのか僕のそばまで来てしやがみ込み、視線の高さをなるべく合わせようとしてきた

「こんにちはーモコちゃん、だっけ？ わたし、トトリって言っただけど前に会った事あるんだけど……わかるかな？」

「モコッー！」

トトリちゃんの言葉に、僕はしっかりと頷いてみせた後、少しだけピョンピョンと跳ねアピールをしてみた。大袈裟なアクションかもしれないけど、この小さな体だとこのくらいのほうが伝わりやすかったりする……時もある

「うわーあー！ ミミちゃん、ミミちゃん、この子えらいよ！ わたしの言うことちゃんとわかってるみたいー！」

「そのくらい当然よ。あのミスさんのところのモンスターなんだから」

「えへへえ、こうやってじっくりと見てるとわかるけど、すごくカワイイよね。先生が「好き好き！」言ってたのが納得できるよー」
そう言いながら僕の頭を「よしよーし」と撫でまわすトトリちゃん

「でも、残念なのはもう「モコちゃん」って名前がついてることだよね……。もし名前がついてなかったら「モフ・ザ・ゴールドデン・モフコツト」って名前をつけてあげたかったのに……この子の毛の柔らかさがすっごく伝わってくるいい名前だよねー?」

「え、……そ、そうね」

「モコ……（ええ……）」

僕はこの時点で、今日は先程のミミちゃんの不安の理由や免許の話が話題にあがらないだろうと確信したのだった……

4年目：マイス 「続・潜入！モコモコ作戦！」

ロロナのアトリエ

「よしよし、良い子だね」

「……………（そわそわ）」

「も、モコ…………」

アトリエ端のソファアに座って、モコモコの姿になっている僕を膝の上あたりに乗せて撫でまわしてくるトトリちゃん

そして、その隣…………とは言っても、何故か一人分ほど間を空けて座っているミミちゃん。なんだか落ち着きが無い気がする

…………それにしても、僕も慣れたというか、諦めがつきやすくなったというか…………もう膝に乗せられるのも、撫でまわされるのも、抱きしめられるのもいつのまにか慣れてしまったので、もう抵抗する気も起きなくなっている

そんな感じで、『冒険者免許』の更新前の様子を探りに来た僕だったけど、ノンビリとした雰囲気の中で、そういった話題があまりそうになかった

…………でも、そうになると、今度は出ていくタイミングをどうしようか？

以前のように、ミミちゃんが出ていくときに一緒にになって出るのがいかなあ

僕がそんな事を考えていると、不意にトトリちゃんの撫でる手が止まった。そして「そう言えば…………」というトトリちゃんの声が僕の背後から聞こえてきたため、僕は膝の上に座ったまま少しだけ後ろを振り向いてみる

「この子ってどういうモンスターなんだろう？」

「どんなって…………『青の農村』に住んでるってだけだと思うけど、それ

以外ってこと？」

トトリちゃんの問いに、ミミちゃんがそう返す

その感じからすると、どうやらミミちゃんはトトリちゃんの疑問の意図を計りかねているみたいで、返答にも少し困っているみたいだった

「えっと、ほら、『青の農村』っていういろんなモンスターがいるけど、同じ種族のモンスターもいたりするよね？ でも、この子と同じようなモンスターはいないなーって思ってる」

「ああ、そういえばそうね……。それに『青の農村』以外でも似た奴を見たこと無いかも」

「うーん……。毛の感じとか『暴れヤギ』あたりに似てるかな？ でも、角は無いし、毛は金色だし」

『暴れヤギ』というのは白に近い灰色のふさふさの毛を持った獣だ。近縁種を飼えるようにした『ヤギ』が『黄金平原』あたりで育てられていて『ミルク』がとれたりするんだけど、『暴れヤギ』は名前の通り気性が荒いから人を襲ったりする

なので分類としてはモンスターらしい……。『アーランド』の分類って色々微妙な部分があるよね。今はどうなってるか知らないけど、僕がこつちに来てすぐあたりで見た凶鑑では、『盗賊』といった人もモンスター凶鑑に書かれてたし……

「それに……」

そう言っていたトトリちゃんの声が止まった……。っと思ったら、僕の肩あたりにあったトトリちゃんの両手が僕のそれぞれの足へと伸びてきた

「モココ!?!」

「あつちは四本足で、この子は二本だよ」

「そこはどっちかといえば『たるリス』に近いわね。耳が大きいあたりなんかもそうかも」

そう言って、今度はトトリちゃんの隣に座っているミミちゃんが手

を伸ばしてきて、僕の右耳を触ってきた

「モ、モコツ……！（く、くすぐりたい……！）」

最初はチョンチョンと軽くつつく感じだったけど、次には親指と他の指とで僕の耳の表と裏を挟み込むようにしてムニムニしだした。さらに、ズイスイツとトトリちゃんがのそばまで寄って、耳だけじゃなくて頭までモフモフと触りだした……こっちのほう慣れてるから気にならないや

「……ミミちゃんが耳を」

「ん？ 何か言ったかしら？」

「ううん、なんにも言っていないよ」

……うん、トトリちゃんが何か言ったけど、聞かなかったことにしよう

「……あれ？」

ふと、首をかしげたトトリちゃん。それに気づいたミミちゃんが、少し呆れ気味に小さくため息をついて口を開く

「トトリ？ 今度は何？」

「少し気になることがあって」

「気になること？」

トトリちゃんが気になっていることといえば……モコモコが他にいないって話かな？ もしかして、似たようなモンスターを実は見たことがあったとかかな？

「……ミミちゃんって『青の農村』に行ったことあったの？」

「モコツ？（えっ？）」

え、ええつと……どうしてそういう話になったの？ ちよつと話が見えないんだけど……？

そう思ったんだけど、横目でチラリと見えたミミちゃんがワナワナと震えていて、

「な、な、な……！　んなわけないでしょ!？」

「えっ、でもさつきわたしが『青の農村』にいるモンスターのこと言った時、「そういえばそうね」って頷いたよね？　行ったことないと言えないと思うんだけど？」

「そ、それは……言葉のあやというか、なんというか」

「ついさつきまでの勢いは何処へ行ってしまったのか。何故かミミちゃんは言葉に詰まってしまっていた

「わたしにはあそこにはいかないー、ミスには会わないーって言うてたけど、実は隠れて行ってたの?」

「本当に最近行ってないのよっ!」

「じゃあ、前は行ってたんだ」

「ぎくっ!」

トトリちゃんの膝の上で二人の会話を聞いているんだけど……ちよつと複雑な気分だ

「ミミちゃんが、トトリちゃんに僕に会いたくないという事を言っていたことが結構ショックだったりするんだけど……でも、この流れだと、もしかするとトトリちゃんが「ミミちゃんが僕を避けている理由」を聞き出してくれるかもしれないという期待感もあったりする

「はっ………！　ま、まさか……!？」

何かわかったのか、大きく開いてしまった口に手を当てて驚くトトリちゃん

「ミミちゃんの家も、ミスさんに借金を……!」

「していないわよ!!」

「え、違った?」

本気でそうだと思っていたのか、ミミちゃんが瞬時に否定してきたことにトトリちゃんはさらに驚いた様子だった

「あなた、シユヴァルツラング家を何だと思ってるのよ！　というか何よ「も」って。まるで他所よそではそうなってるみたい、な……」

怒りで肩を震わせトトリちゃんを睨みつけていたミミちゃんだっただけど、段々と力強さが無くなってきて……代わりには何かの考えに至いたったのか「えっ……えっ？」と声をもらしはじめた

「まさか……あんた？」

「ぐふう!？」

「ちよ、どうしたのよ!?　　というか本当なの!？」

ついにはトトリちゃんの肩を掴んで引き、グワングワンと揺らしながら問い詰めだしたミミちゃん。膝の上にいるとトトリちゃんの身体がぶつかってくるため、僕はすぐさまその場から抜け出し、ソファアそばの床に着地した

なお、トトリちゃんとミミちゃんはどうと……

「……借りてナイヨー。うん、マイスさんもそう言ってたもーん」

「じゃあさっきのは何だったのよ！　あと、死んだ目で人を小馬鹿にするような口調はやめなさい！」

……僕のことには気付かないくらい、騒がしくなっていた

うーん。このまま残っても、もう僕の知りたい情報が出てきそうにもないし……この機会に帰ってしまうのもありかもしれない

そんな事を考えていると、かすかにアトリエの玄関が開く音が耳に入ってきた。でも、どうやら騒がしくしているトトリちゃんとミミちゃんはそれに気づいていないようだった

いなかった口口口が帰ってきたのかと思い、僕は扉へと視線を向けた……

「邪魔するわよ。口口口はいるかしら……って、何よ騒がしいわね」

アトリエに入ってきたのはクーデリアだった

発言通りの目的なら口口口が目的だろうクーデリアだったけど、トトリちゃんとミミちゃんの騒がしさからすぐにそちらへと目を向け

ていた

トトリちゃんも、ミミちゃんに揺すられながらもすぐにクーデリアの声に気付いたようで、そっちへと目を向けていた

「あつ、クーデリアさん、いらしゃー……」

「ん？ 誰か来たの？」

トトリちゃんの言葉に反応し、そう言ってトトリちゃんの目線を追っていった………ミミちゃんとクーデリアの目線が合った

「……………」

「……………」

ええつと、なんで睨み合ってるんですか……？

クーデリアのほうはそこまででもないみたいだけど、ミミちゃんの方は明確にさっきまでよりも目が細くなっている

そのまま無言の睨み合いが続くかと思っただけど、不意にクーデリアの視線が動いた

「モコ？・(僕?)」

僕のほうを向いてきたクーデリアが、静かながら速い足取りで僕のほうへと来て……

ヒョイ

「モココツ!」

「じゃ、お邪魔したわ」

「ええ!」

僕を片手で持ちあげて、小脇に抱えるような格好で持ちアトリエから出ていこうとするクーデリア

その素早い流れからの退出に、さすがのトトリちゃんとミミちゃんも同時に声をあげてしまったようだった

「ちよ、クーデリアさん! 先生に用事があったんじゃないんですか

!」

「あつたと言えはあつたけど、大元はコイツだから。だから持っていく

わねー」

「その子、悪い子じゃないですよ！」

「知ってるわよ。こつちだつてそう短くない付き合いだもの。じゃあねー」

トトリちゃんからの問いかけもかいくぐり、クーデリアは僕を持っていないほうの手をヒラヒラと振って、これ以上有無を言わせないようにか素早くアトリエから出ていったのだった……

職人通り

「……………で、何してんのよあんたは」

アトリエから街の外への門へと行く道を少し行つたあたりで、クーデリアが歩きながらそう口を開いた。おそらく、アトリエから十分離れたのと、近くに人がいないことを確認したんだろう

「えつと、免許の更新が近づいてきたけど大丈夫かなーなんて思つて」
「なんでわざわざ変身してるのよ。何？　そういう趣味なの？」

趣味ってなんだろう？……と思ひながらも、僕は軽く首を振つてみせた

「ああでもしないとミミちゃんに逃げられちゃうから……」

「ああ、なるほどね……………はあ」

納得したように思えたんだけど、何故かクーデリアはため息を吐いて首を振っていた。……それに「不安の種が増えるだけじゃないの」って……何のことだろう？

「それで？　どんな調子かわかつたのかしら？」

「それが全然。こつちから話題を振れないから、どうにもならなくて……」

「あたしのところに来れば、一発だとは思わなかつたのかしら？」

「……………あつ」

確かに、クーデリアの言う通りだ

冒険者免許の管理をしている中心人物は、他でもないクーデリアだ。冒険者は数多くいるとは言っても、繋がりがあつたりトトリちゃんたちのことくらいは資料を探したりしなくとも大体の状況は把握できているだろう

……盲点だつたなあ

「でも、他人の情報でしょ？ 教えたりしてもいいの？」

「普通は教えないわ。でも、あんたは一応はトトリたちの保護者に近い立ち位置でしょ？ あたしもそれを把握してるし、少しくらい……ちよつと言葉を濁した感じじゃなら教えてあげるわよ」

そう言つたクーデリアは「あつ、そうだ」と思い出したように僕に言つてきた

「あんた、ギゼラが何処に行つたか知つてたりしない？ ちよつと調べてるんだけど……」

「……うーん……何処につて聞かれたらわかんないや」

いきなりの問いに驚いてしまつたうえ、少し「クーデリアなら言つても……？」と思つてしまつたから、少し言葉を返すのが遅れてしまつた

やつぱり、ガイドさんから「トトリちゃんに言わないように」と約束をしている以上、なるべく話が広まらないようにすべきだろう

「だけど、クーデリアに嘘を言う気にもなれず「行き先はわからない」と言葉を濁すことにした。……でも、リオネラさんにはしっかりと口止めをしたうえで話したし……やつぱり、クーデリアにも言つても良かったかな？」

…… 悩みに悩み、「念入りに聞いてきたら答えよう」と決めただけど

「……ふうん、ならいいわ」

クーデリアはそう言つて、それ以上は聞いてこなかった

4年目：トトリ「わたしの3年間と、これから……」

冒険者ギルド

三年前……『アールランドの街』に来たわたしは、ここで冒険者免許を貰って『冒険者』の仲間入りをした

沢山のひとと会って、いろんなところを冒険して……本当にいっぱい数えきれないほどの出来事があった

けど、思い返してみると、冒険者免許を貰ったあの時のことは今でも鮮明に思い出せる。……なんだか、長かったようで一瞬のようにも思える三年間だったなあ……

そんなことを考えながら『冒険者ギルド』に来たわたし

依頼の斡旋あっせんをしているほうではない、冒険者免許関係の仕事を取り扱っている方のカウンターを目指して歩いていく。すると、そのカウンターの向こう側にいたクーデリアさんがわたしに気がついたみたいで、していた作業を中断してこっちに向きなあった

「おっ、来たわね」

「待ってたわよ」と、カウンターそばまで来たわたしにそう言って軽く微笑むクーデリアさん

わたしは自然といつもよりも背筋を伸ばして、クーデリアさんの言葉に返事をした

「は、はいっ！今日で、よかったですよね」

「ええ、そうだけど……って、なんでそんなにオロオロしてるのよ」

そう言ったクーデリアさんは「はあ」と短くため息をついた

「いえ……そのー、大丈夫だって頭でわかっても、緊張しちやっつて……」

「まあ、当の本人以外の方が本人以上に不安がったり落ち着きが無かったりするくらいだから、あんたがそんな調子でも仕方がないわね」

「そうなんですよー。アトリエから出る時、先生ってば「トトリちゃんなら大丈夫だよっ！」って言って見送ってくれたんですけど……三日くらい前からずっとそわそわしっぱなしで、免許の更新以上に先生が調査に失敗しないかが不安で不安で……」

そこまで言って、わたしは気になることがあって、クーデリアさんに尋ねてみた

「……あれ？　クーデリアさん、最近、先生に会ったんですか？」

「残念ながら、ここ二、三日は忙しくて会えてないわ。……というか、やっぱりあの子もそんな感じなのね。トトリの腕を疑ってるとかじゃなくて、ただ単純に自分のことのように緊張してるだけでしょうけど」

「はあ……？」

「うんうん」と一人で納得したように頷くクーデリアさん

……あれ？　でもそれじゃあ、さっきクーデリアさんが言ってた、わたし以上に不安がってる人って誰なんだろう？　話の流れからするとロロナ先生じゃないみたいだけど……？

不思議に、思い聞こうか聞くまいか……と、悩みながら首をかしげていると、クーデリアさんが「ああっ！　いけない、いけない」と動き出して、カウンターの奥で何かゴソゴソとしました

「ちよつと話がそれちゃったわね。はい、新しい冒険者免許。今日はこれを貰いに来たんでしょ？」

「あ……わあー！」

クーデリアさんが取り出し、差し出してきた掌てのひらほどの大きさのそれを、わたしは両手でしっかりと受け取って目を走らせた

「わたしの免許ですよね？　わたし、まだ冒険者続けてもいいんですよね!？」

「ええ。これであと二年くらいは続けられるわよ」

「ありがとうございます！　ありがとうございます……二年？」

「うん。あと二年の予定よ」

自分の耳を疑って聞き返してみたけど、「おそらく、それくらいにな

るわ」と、なんとも曖昧な返答だったけど、クーデリアさんはその期間を再び言った

……………えっ？

「えー!? ……な、なんで二年間だけなんですか!? 前より短いじゃないですか!？」

「あー、うん。言いたいことはわかるけど、心配しなくても大丈夫よ。別にあんたの活動内容が悪かったとか、そういう理由でこうなったわけじゃないから」

カウンターに少し身を乗り出して問いかけると、少しバツが悪そうに答え、そのまま言葉を続けた

「ほら、冒険者の制度ってまだできてそう経たないから、結構あやふやなところがあるでしょ?」

「はい、確かに…………」

「それをこの際きれいに整備しようってことになってね。その作業に少なくともあと一、二年はかかるかなーって」

そこまで言われて、わたしはあることを思い出した

前に、先生とステルクさんとわたしと…………その三人で冒険に出かけた時。街からの出発の前にマイスさんを連れたクーデリアさんと会い、色々あつて途中の採取地まで一緒に行ったことがある

あの時、道中でクーデリアさんから聞いたんだけど、クーデリアさんは冒険者免許の更新に必要なになる冒険者ポイントの見直しのために、時々各地の採取地をまわっているらしい。以前に『アランヤ村』方面の採取地近くで会ったこともあったんだけど、その時も同じ理由で来ていたそうだ

そして、一緒にいたマイスさんは一応のための護衛みたい。クーデリアさん曰く、「いなくても採取地は周れるけど、いた方が余裕を持って調査ができる」から頼んだとのこと

もしかすると、あれもその「冒険者制度の整備」の一環だったのかな？

いやいや……今、重要なのはそこじゃない。ちよつと気になるけど改めて、今さつきクーデリアさんから言われたことを自分の中で回復して思い返し、情報をまとめる……………

「えつと……つまり、この免許は二年経ったら……」

「もう一回、延長の手続きが必要ってことになるわね。でも、その時は一生使えるものをあげられるから……たぶん」

「たぶんって何ですか!？」

「ウソよ、ウソ。こっちの整備の方は問題無く進んでるから心配はいらないわ。それに、仮に更新までずつとグータラしてたり、大問題を起こしたりすれば免許取り消しなんてこともあるかもしれないけど……あんなならそんなことないでしょ?」

ええつと、つまり、冒険者免許を初めて貰った時は『冒険者ランク』を一定以上にしないと免許剥奪」っていう制約があったけど、今回は無いってこと……なのかな？

それなら、今回ほど緊張したりする必要は……………って、あれ？

わたしが自分の中で納得して顔を上げてみると、何故かクーデリアさんがなんとというか……笑ってるような、困っているような顔をしているのが目に入った。…………? 何かあったのかな？

「クーデリアさん? どうかしたんですか?」

「……いや、いくらあいつの娘だつて言ってもトトリだからね、うん。

大丈夫……だと、信じてるわ」

「あつ」

そこまで言われれば、クーデリアさんが何を言いたいのかがわたしにもわかった

つまりはわたしのお母さんが街や村、そのほか採取地などで起こした問題のようなことを、今度はわたしが起こしたりしないか少し心配したんだろう。……でも、どうやらクーデリアさんはわたしの事を

ちゃんと信用してくれてるみたいだった

お母さんのことには少し申し訳なく思いつつ、信用されていることには嬉しさを感じたわたし

けど、それと同時にある疑問がわいてきて、それを聞いてみることにした

「あの一、わたしのお母さんって結構色々と問題を起こしているみたいですけど……冒険者免許を取り上げられたりしなかつたんですか？」

「しなかつたわよ。取り上げたところで被害を被るのはどっちにしろ『冒険者ギルド』^{コッ}だったもの。……そもそも冒険者制度が出来るよりも前から冒険者みたいな人だったし。というか冒険者の中でも特殊な存在で、あいつを冒険者にするまでに沢山苦労があつて、その前にも後にもそれ以上の苦労が……（ブツブツ）」

ええつと……どうしてかわからないけど、知らないうちに聞かない方が良い事を聞いちゃつたみたい……

話し出したクーデリアさんの口は止まらないし、なんだか喋つていくにつれて言葉の節々にトゲが出てきている。さらには段々と怒気がこもってきている……あつ、コメカミがピクピクしだした……

「あ……あ一、そ一だった一！ 明日が期限の仕事がまだ終わってないんだつた一。早く帰つて調査しないと一」

クーデリアさんからの返事も待たずに、わたしは一言「それじゃあ、失礼しました一」と言つてその場から離れた……

……この後にクーデリアさんのところに行く誰かに、心の中で「機嫌が悪いかもしれませんが、ごめんなさい」と謝りながら……

4年目：トトリ「村に帰る……その前に」

貰えたものが永久資格じゃなかったりと、少し思っていたのとは違うことになってしまった冒険者免許の更新

でも、これで免許更新のために必死に冒険者ランクのランクアップをしなくていいから、頻繁に『冒険者ギルド』に行かなくてよくなつたわけだ。つまり、時間的にも気持ち的にも少し余裕ができてきた……気がする

だから、『アランヤ村』に戻って少しゆつくりしようかな？……って思ったんだけど、前々からミスさんから聞いていた『青の農村』でのお祭りが間近に迫^{せま}っていたから、わたしは、せつかくだからと『アランヤ村』に帰るのはお祭りに参加した後にすることにした

青の農村

「わあ……！ 人、いっぱいだ。って言っても、前の『記念祭』が少なかったから、そう思っちやうだけで、いつもこれくらいだったっけ？」賑わっている村の通りを眺めて、わたしはついそんな言葉をもらっていた

前回の『記念祭』は『青の農村』の身内でのお祭りで特別なイベントも無かったから、宣伝が無かったこともあつて人はほとんど平日と同じくらいだった記憶がある。それが最も近いものだったから、必然的に今日は人が多いと思えてしまってるんだと思う

それにしても……

「くんくん……あつ、あのお店『フライドポテト』売ってる。あっちは『ポップコーン』だ！ 他にもいろんな食べ物のお店があるみたいだね。さすがは『青の農村』ってところかな？」

村の入り口付近にも関わらずいろんな美味しそうな匂いがしてく

る。比較的匂いがするもの以外のもののお店もあるみたいだから、本当にかかりの数のお店が出ているみたいだ

そして、「さすがは『青の農村』』というべきなのは、その安さ。街で同じようなものを買う場合の6、7割ほどの値段になっている。けど、安いからと言って品質が悪いようには見えなかった

たぶんそうなっている理由は、出店で出されている食べ物の原材料が『青の農村』の中だけでまかなえているからだと思う。例えば『フライドポテト』なら『じゃがいも』、『ポップコーン』なら『トウモロコシ』といった作物。どちらも村の中で育てているのを見たことがある。それらをお店に卸おろしたりすること無く出しているため、ほぼ原価のままなんだろう

……うーん。店先に見える商品や、他の人が食べてるのを見てると、匂いと合わせてだんだんとわたしも食べたくなってくる……

「いやいや！ ダメだよ。まだ参加するって決めてないけど、今日のお祭りは……」

「ん？ あっー！ トトリだ！」

立ち止まっていたわたしに、後ろからいきなりそんな声かけられた。その声は私の知っている声で、振り返ると思っていた通りの人がそこにいた

「あっ、ジーノ君。ジーノ君もお祭りに来てたんだね」

「おうっ！ ……じゃなくて!!」

「ええっ!?! どうしたの？」

元気に笑顔で返事をしたかと思ったら、目を見開いて私に顔を寄せてきたジーノ君。何なのかと思って、どうしたのかと聞いてみたんだけど……

「お前、このあいだの更新の時、一人で行っただろ？」

「……ああ、そっか。わたしと一緒に免許貰ったから、ジーノ君も同じ日に更新するんだったね」

そう、三年前に二人で一緒に『アランヤ村』から馬車に揺られて

『アーランドの街』まで来て冒険者になったのだ。一緒に冒険者免許を貰ったんだから更新する日が同じなのは当たり前のことだ

「ごめんね、ジーノ君。うっかり忘れちゃってた……」

「まあ、トトリの事だから直前まで調合とかしてて、バタバタしてたんだろ？　しょうがないヤツだなー」

さっきまで少し怒ったようにムスツとしてたジーノ君だったが、すぐに元通りになって笑顔に戻った

「こういう、切り替えが早くてさっぱりしているところがジーノ君らしさだと思う」

「あつ、でもそれじゃあジーノ君も冒険者免許、更新できたんだね」

「世界最強の冒険者になるんだから、それくらい当然だつて」

「そっか。……最近是一緒に冒険してない時も多かったから、大丈夫かちよつと心配だったんだよね」

わたしがそう言うと、「んな心配はいらねえつて」とジーノ君は元気に笑いながら言った

「トトリに誘われなかった時は近場で適当にモンスター倒してまわってたし。それに最近では師匠と離れたところまで行ったりしてたからな」

「師匠？　……それってステルクさんだったよね」

「そういえば……と、時々、街中でステルクさんを見かけない日があったことを思い出した」

何かお仕事でもあったのか、いつもステルクさんが探している王様を追っているのかと思ってたけど……もしかすると、その時もジーノ君とどこかへ行ってたのかもしれない

「でも知らなかったなあ。ステルクさんに修行をつけてもらってるっていうのは聞いたことあったけど、二人で冒険してるなんて初めて聞いた」

「言っただろ、最近つて。これまではそんなこと無かったのに、師匠のほうから「いくぞ」っていきなり言つて、オレをいろんなところに連

れ回したんだよ。……まあ、師匠の技も色々見れたし、強い奴とも戦えたから良い修行になったんだけどさ」

「でも、本当に疲れたんだぜー？」と、ジーン君は少し口をとがらせていた

……そんなジーン君の不満とは別に、わたしはある可能性に気がついた

「もしかして、それって……ジーン君が免許更新が厳しそうだったから、ステルクさんが手を貸してくれたんじゃない……」

「えっ？ 何か言ったか、トトリ？」

「ん、んーん。なんでもないよ！ あはは……」

もしかしたら、わたしの考えた通りかもしれないけど……でも、結果的にジーン君がちゃんと免許更新ができたから良しとしよう。うん、そうしよう

わたしがそんなことを考えていると、不意にジーン君が何かを思い出したように「あつ、ヤベっ！」と声をあげた

「急がないと受付が締め切られるかもしれないんだっ！ じゃ、トトリ。また後でなー！」

「え、うん。急ぐのはいいけど、人にぶつかっちゃダメだよー？」

足早に村の集会場前の広場の方へと駆け出したジーン君に、そう言葉をかけてその背中を見送った

「……確か、女性の部は男性の部の後だから、受付の時間はまだ余裕があるよね。わたしはちよつとゆっくり見てまわってから行こうかな？」

青の農村・集会場前広場

村の中を一通り見てまわった後、広場の方へと行ってみたんだけど

……

「あーっ、トトリちゃんだ！」

声のした方を見ると、コロナ先生がコツチを見て大きく手を振っていた

「先生も来てたんですか？ それなら、一緒に来ればよかったですね」「えへへ、そうだねー。あつ、ちょうど始まるみたいだよ」

「ほら」と言ってコロナ先生が指し示した方を見ると、広場の中央付近に設置された特設ステージにいくつかのテーブルとその一つにつき一人、男の人がいた

ステージにいる男の人たちが誰なのか確認する前に、特設ステージのわきにコオルさんが出てきた。コオルさんは発した声が大きくなる機械の一種『拡声器』を持っている。どうやら今回のイベントもコオルさんが司会進行役みたい

『参加者も、見学者もよく来てくれたな。今日も村長の思い付き企画を元にした催し物イベントを開催するぞー！ 第一回、『大食い大会』男子の部の始まりだー!!』

「「「うおー！」「」」」

特設ステージにいる参加者と、それを見守る観客たちの声が重なり合って、みんなの耳に届いた。それを聞いたコオルさんが満足したように頷く

『気合十分だな。それじゃあルール説明をするぞ。ルールは村長が出した原案は衛生面とか後片付けがすごく大変そうだったから色々変えさせて貰って「制限時間内に多く食べたヤツが勝者」、それだけにした。まあ、食べた量のカウント方法が少しだけ複雑だから説明するぞ』

コオルさんがそう言うと、村の人であろう女の子が、お皿に乗った『ケーキ』と『何かの焼き魚』を持ってコオルさんの隣に立った。お魚の種類は……うーん、焼かれてるからっていうのもあるけど、川魚に

詳しくないからよくわからないや

『まず、参加者には受付の時に「食べたいもの」を書いてもらった。で、今、もうすでに結構な量を用意した。短時間で作ったとは言っても、味は店を出せるほどだと保証する。どっかの働きたがりな誰かさんが丹精込めて即行で作ったんだからな』

「働きたがりな誰か」……わたしを含め、ほとんどの人が誰かわかっていないみたいだった

『そして重要な食べた量のカウント方法だが……皿の枚数で数える。そのために一皿の料理の重量は統一してある。だが、察しの良いヤツは気づいてるかもしれないが、料理によって食べやすさが違うから、「食べたいもの」を書いた時点から勝負が始まっている。特に魚みみたいな骨のあるのとかが、ケーキみたいに形が崩れやすいものは難しいだろうな。好きな食べ物を書いたヤツの中には苦勞しそうな奴もいるかもな』

女の子が持っている『ケーキ』と『焼き魚』を指し示しながらそう言うコオルさん。ステージ上の参加者の誰かが「げっ……!?」と声をもらったようで、それを聞いたコオルさんはニヤリと笑っていた

『最後に、この大会用に作られた料理は「大食い」ってこともあって結構用意されてるが、参加者のテーブルに運ばれることが無かったものはイベント後に格安で販売するぞ。「あいつら、こんなに美味しいのをあんな必死に食べて……もったいない」とか思いながら美味しく食べてくれ』

そんな最後の一言でひと笑いを起こしたコオルさんは、ステージ上の参加者のほうに目をやって確認をとると、一呼吸おいて声をあげた

『それじゃあ始めるぞ！ 覚悟を決めろ。『大食い大会』男子の部、用意……始め!!』

「始まりましたね、先生」

「うん……うわあ、すごい勢い」

参加者がいるそれぞれのテーブルへと、お祭り運営に参加している村の人たちによって次々に運ばれて来る料理

参加者によって食べているものは違うけど、参加者たちは一様にすごい勢いで食べはじめていて、見ているだけの観客の皆もそのヒートアップに感化されるように盛り上がっていった

「こんなに競い合うなんて……優勝賞品って何でしたっけ？」

「えつとね、『旬の作物盛り合わせ』と『青の農村の店、何処でも半額券』が何枚かと、あとは『村長に武器・防具・農具・調理器具、いずれか無料注文券』だよ」

「あつ、女性の部と同じなんですわね」

「そうだねー。今回は大食いってことでちよつと配慮があつただけで、別に景品が違うってわけじゃないみたい。けど、男の子でも女の子でも、競争相手が減るわけだから少しお得な気がするよね」

「少しというか、人数制限があつても無料参加な時点でお得ですよ……」

そう、この『大食い大会』、「吐きそうなほど食べる前に止める」という約束を厳守すれば無料で参加できるのだ

でもそれじゃあ、用意した料理は格安で売らしいし、これって絶対に赤字になるんじゃないや……。お祭りだからって、そんな事になったら大変なことになるはずなんだけど……

そこで、わたしはふとあることに気がついた

あつ……もしかしてお祭りって、ミスさんがお金を使うために開催されてるのかな……？

そんな事を考えながら参加者の人たちに目を向けていると、ある人に目がとまった

その人というのは、わたしの知っている人だった……

「ふう……入賞賞品が研究費の節約に使えそうだと思つて参加したけど、やっぱり僕には難しい大会だったかな？ まつ、今日の分の食費

が浮いたと思えばいいか」

そう言つて「うん、ごちそうさま」と手を止めたのはマークさんだった。どうやら食べていたのは『サンドウィッチ』だったみたい

というか、参加していること自体意外だなあ……

『おつと。時間が残っているが、さつそく脱落者が出たみたいだな。根性が……って言いたいところだけど、まあ吐かれるよりはマシか。他の奴も無理すんなよー』

そんなコオルさんのアナウンスが入るけど、他の参加者は変わらず勢いよく食べ進めて……って、あれ？

「こんだけ量産してるのに、このクオリティ……。それに、なんだこの味は!? 『ケチャップ』……いや、下の米を炒めた時の香辛料に秘密が? おいマイス! これどんな食材使ってるんだ!？」

『おいおい、料理の質問はプライベートでやれよ。……っていうか、手が止まつてるから負けちまうぞ?』

コオルさんに注意をされているのはイクセルさんだった。料理人っていう職業のせいか、完全に食べている『オムライス』の作り方に興味がいって、まだ一皿目で止まっているみたいだった

「そういうえば、ジーノ君も参加してるはずだけど……何処かな?」

そう思つて参加者の中から探していると……ジーノ君じゃない、別の人を見つけた

ただ、「知ってる人」というわけじゃなくて、「なんだかどこかで見たことがあるような……?」という感じで目がとまっただけなんだけど……

「うん! 美味しい! けど、少し限界……というか、胃もたれが」

「あなた、そんなこと言つてないで時間まで食べてー」

「くう……母さんの料理なら、いくらでも食べられるんだけどな」

その男の人に観客中の一人の女の人が声をかけていた。けど、やっぱり限界が近いみたいで、食べるペースは落ちていた

……うーん？ やっぱり、話したりした記憶は無いんだけど、なん
でかわからないけど顔に見覚えがある気がする。誰かに似てる気が
するような……しないような……？

ちよつと気になったけど、考えても考えても思いつきそうにも無
かったから、改めてジーノ君を探した。すると……

「辛えー！ でも、うめえー！ でも、やっぱ辛えー!! つーか、何皿
も食べていくうちにドンドン辛くなってきてる気がする!?!」

『言っておくが、ずーつと同じ鍋でできたもん出してるぞ。蓄積して
るんじゃないか？ まあ、そのうち一周回って辛くなると思う
ぞ』

「そうなのか!? じゃあ、もつと食わねえと!」

喋っているけど、同じかそれ以上に口を動かして食べ進めている
ジーノ君。ジーノ君が食べているのは……確か『カレーライス』だっ
け？ 前にマイスさんの家に泊まった時に、わたしも食べさせても
らったことがある。けど、わたしにはちよつと辛くて「あまくち」つ
ていうのに変えてもらった覚えがある

それにしても……美味しそうなものが沢山あつて食欲が刺激され
るにはされるんだけど……

「後にある女性の部は、参加者が減りそうですね。なんだか、見ている
だけでお腹が膨れてきそうです……」

「あははっ、そうだね。……でも、私『パイ』なら別腹だから頑張れる
よ！ 本当だよ!」

「……先生、参加する気なんですね」

ロロナ先生は「そうだ! 『パイ』各種って書いてたら、いろんな種類
の『パイ』作ってくれないかな? そうしたら飽きないし、美味しい
よ!」と、かなり張り切っているみたいだった

……この様子だと、女性の部は先生が優勝しちゃうんじゃないかな
?

「わたしはそのあたりのお店で、いろんな種類を少しずつ買って食べればいいかなあ？」

男性の部の制限時間が迫る中、わたしはどんなお店があったか思い出しながら何を食べようか考えていた……

結局、男性の部はジーノ君が、女性の部は先生………じゃなくて、ヒラヒラのかわいい服を着た女の子が優勝した

その女の子はどうやら先生と似たような戦法を取っていたみたいで、たべたいものを「デザート各種」と書いていたらしい

そして優勝の際の言葉は……

「やはり、おにいちちゃんの料理は絶品です……と、頑張つて作ってくれたおにいちちゃんに、ホムは最大限の称賛の言葉を送ります」

………つていう、ジーノ君が言った「やったぜ」みたいなのは違つた、なんとも言えない感想を言った

………あと、その女の子が表彰台に上がったあたりからずっと先生が……

「ホムちゃん!? ああ、あ！ あの子、あの子がトトリちゃん！ ほら、前に言ったことあるよね!」 憶えてる? ほむちゃん!」

………そう言いながら、わたしの肩を掴んでゆさゆさ揺らしてきて、ちよつとだけうるさかった

というか、競技中は気づかなかつたのかな? 先生らしいと言えば先生らしいけど……

4年目：クーデリア「追いついてきた過去」

ロロナのアトリエ

アトリエの玄関でノックをし、中から返ってきた「はい、どうぞー」というトトリの声が聞こえてきた。他に声も聞こえないところからすると、どうやらロロナはいないようだ

とりあえずそれに従い、あたしはアトリエへと入っていった

「あつ、クーデリアさん。今日はどうかしましたか？」

そう元気に挨拶をしてくれたトトリは、何やらポーチの中身を整理しているようで、おそらく外出の準備をしていたのだと思う

「あら？ 何処かに出かけるのかしら？」

「はい。免許の更新も終えてひと段落しましたし、村に戻って少しひと息つこうかなーって思ってた」

そう答えるトトリの姿を見て、あたしは少し頭を悩ませた

入れ違いにならなかったのを喜ぶべきか、それとも……とにかく、あまり気が進まない

「はあ……間が良いのか、悪いのか……」

「えっ、なんでですか？ あつ……もしかして、何かお仕事が？」

「ううん、そうじゃないの。ただ、ね……って、ここまで来て悩んでも仕方ないわね」

そこまで言って、わたしは一度大きく深呼吸をし覚悟を決める

「わかったのよ。あんたのお母さんの最後の足取りが」

「お母さんの……？ ええええええ!! ほ、本当ですか!! それってどこですか？ 最後っていつの？ 今はどこに？」

一拍置いてからのトトリの大声

その声は驚きによるものの様に感じられたけど、その中には間違いなく、少なからず喜びが含まれていた

「だけど……いえ、だからこそあたしはこれ以上の事を言うのは躊躇ためらわれた。このまま何の手がかりも無しに、何も知らないまま一人前の

『冒険者』として……『錬金術士』として過ごしていったほうが幸せなんじゃないだろうか、と

けど、それと同じくらいこれまで頑張ってきたトトリこの子を知っているからこそ、わかったことを黙ったままにいることは出来そうも無かった

「落ち着いて、順番に話すから。ただ……ひよつとしたら聞きたくない内容かもしれないわよ」

「え……？ それって……」

「どうする？ それでも聞きたい？」

少しの間、アトリエ内が静かになった。その空間の中でトトリはほんの少しだけ悩むような表情を見せたけど、最後にはその目でしっかりとあたしを見て口を開いた

「……………聞きたい、です。お願いします」

「わかったわ。それじゃあ話すわ。まず、いつの足取りかっていうことだけど、これはもう何年も前……つまり、あなたのお母さんが帰ってこなくなったって時期とほぼ同じだと思うわ」

「あつ……そう、ですか」

「だいぶ昔の話だから、もちろん今どこにいるかなんてわからない」

あたしの話が進むにつれて、トトリの表情が段々と残念そうに……悲しそうになっていくのがわかる

「で、問題はどこにむかったのかってことなんだけど……どうやら船で外洋にむかったらしいわ」

「船で……？」

「そう。あいつにしては珍しく、律儀に出港届を出してたわ。苦情の山に埋もれてて、このあいだまで見つからなかったんだけどね」

「船……そっか、だから国中探しても見つからなかったんだ！ お母さん、海の向こうのどこかにいるんですね!？」

ここで初めてあたしが思っていたのとは違う反応を見せたトトリ
なんで喜んでるんだろうか？ それがあたしにはわからなかつ

た

「なんだー、クーデリアさんが驚かすようなこと言うから、てつきり悪い話かと思っちゃいました」

「……本気で言ってるの？ それとも、無理してはしゃいでいるのかしら？」

「えっ？… どういう意味ですか？」

心底わからない、といった様子で首をかしげたトトリは、あたしに聞き返してきた

「あんたも、あの村の育ちなら知ってるでしょ？ フラウシユトラウトのこと」

「え、はい。聞いたことあります。確か、遠くまで漁をしようとするに出てきて、船を沈められちゃうとか何とか。そうそう。何年かに一度くらい、そのせいで大騒ぎに……あっ」

トトリの口が止まった。目も見開かれている

……そこまで、自分の口で言って気がついたのだろう

あたしは、ギゼラがいなくなつた頃の事を覚えていないというトトリへ、少しだけ当時の事を話す

「あの頃はまだ無茶な冒険者が多くてね。あんたのお母さん以外にも、海の向こうを目指した人も何人もいたの。……全員、船を海に沈められてるわ。助かったのは、運の良かった数人だけ」

「う……でも、数人は助かっているんですよ？ だったらお母さんも……ほら！ 最強の冒険者だったんだし！」

「……実はね、この話を聞いてからあたし一人であんたの村に行つてみたの。裏付けを取ろうと思ってね……でも、みんな口が重かつたわ。このことについては喋らないっていう暗黙の了解でもあったみたい。しつこく頼んだら、何人かは話してくれたけど……」

「……なんて、言ってたんですか？」

なんとか絞^{しぼ}り出したような声。聞いているこっちまで胸の奥が締め付けられたような感覚になる

でも、ここまで言ってきたから、当然ながら今更引き返すことはで

きない

「出港から数日後、船の破片だけが流れ着いたらしいわ。結構な量のね」

「……………」

トトリは言葉を詰まらせた。けど、彼女も引けない……引きたくない、信じたくない

「は、破片だけならそんな……ちよつと壊れちゃっただけかもしれないし、それだけじゃ……！」

「どう思ふかはあんたの自由よ。あたしからは何も言わない……言つても、下手な慰めにもならないし」

そこまで言つたところで、トトリも口を閉じた

……最後に、あたしは自分の服のポケットにしまつておいた『ある紙』を取り出してトトリに差し出す

「これ、あんたに渡しとくわ。あんたのお母さんの出港届……いかにも、そこら辺にあつた紙に書きましたーって感じだけど。それでも、あんたのお母さんの書いたものだしね」

「……………ありがとうございます」

「お礼を言われるようなことはしていない」……そう言いたかつたけど、こんな空気じゃあそんなことは言えなかつた

その代わりとはいえないけど、去り際に少しだけ言葉を付け加える「あんま、深く考え込むんじゃないわよ。気持ちに整理がつかないなら、ロロナにでも相談しなさい」

そう言つてから、あたしはアトリエをあとにした。話すだけ話して、勝手に見えるかもしれないけど、これ以上はあたしからしてあげられることは無い……けど

あいつには、一言言ひとこといに行かなくちやいけないかしらね

マイスの家

「……と、いうわけで、トトリにギゼラのこと、調べたことを全部教えたから」

あたしがさつきトトリとした話の内容を伝えたのは、他でもないこの家の主であるマイルスだ

マイルスは少し困ったように首をかしげた

「えーっと……なんでその話を僕に？」

「あんた、知ってたんでしょ？ ギゼラが船で海に出たって」

「えっ!？」

あたしの言葉によつぽど驚いたみたいで、マイルスはまるで飛び上がるかのように体をビクリと震わせた

その様子を見て、あたしはついついため息をついてしまいながらも、言葉を続けた

「ちよつと前に、変身してアトリエにいたあんたを回収した時。あの時、あたしがした「ギゼラが何処に行つたか知つてたりしない？」って質問にあんた「何処どこにつて聞かれたらわかんない」って答えたでしょ？ ……「知らない」の一言でいいのに変に遠回しに言つて、マイルスらしくないって思つて何か隠してる気がしたの」

「そうだったんだ……でも、じゃあなんで何も聞かなかつたの？」

「確信も無かつたし、わざわざ隠すことをそう簡単に教えてはくれな
いと思つた。それに、あんたは何の理由も無く秘密を作つたりする奴
じやないつてわかつてるもの。……まあ、だからつて何も調べないで
いるわけにもいかないから『アランヤ村』に行つたのよ」

そこまで言うと、マイルスはシュンとしてしまい、一言「ごめん」と
だけもらした

隠し事をされていたことに少しもムカツとしなかつたわけじやない。しかし、今の申し訳なさそうにへこんでいるマイルスの様子を見ると、ぐちぐちをお小言を言う気にもなれそうにもなかつた。なので、とりあえず最低限言いたいことだけを言うことにした

「別に謝る必要なんてないわよ。どうせあんたの性格からして、村で

口止めされたのを律儀に守って誰にも言わなかっただけなんでしょ？ なら、あたしから言えることは何も無いわ」

「でも……」

「それに、もし仮にあんたに何か言うべきだったとしても、それはあたしじゃなくてトトリの役目ね。いきなりトトリに何か言われてもいのように、今のうちにちよつとだけ覚悟でもしといたら？」

するとマイスは「あはははっ……そうだね」と言った後、顔を伏せてため息をついた

「……やっぱり、今度こそトトリちゃんに嫌われちゃうだろうなあ」

マイスの言う「今度こそ」っていうのは、少し前までトトリがマイスを避けていた一件のことを思い出して言っているのだろう

マイスがギゼラが船で出ていった話をどう知ったのか。その詳しい経緯まで知らないから口に出して断言することはできないけど、そこまで心配するほど悪くは言われないと思う

確かに一時期トトリとの関係は良くない時期はあっただろう。けど、なんだかんだ言ってトトリはマイスの事をしたっている。それに、ギゼラのことを一番隠しているであろう人物は、他でもない彼女の家族だ

それらをふまえて考えると……文句の一つ二つ言われて頬ほおを膨ふくらまされるくらいだろう

まあ、そう言って安心できるのなら、とつくに安心していることだろう

というか、高飛車たかひしや娘の話聞いた時もそうだったけど、マイスって嫌われるっていうのをかなり気にするふしがある。人として当然と言えば当然だけど……やっぱり、いきなり知らない土地に来てやつとの思いで築き上げた人間関係だからなのかしら？

なににせよ、これ以上はどうしようもないと感じたので、あたしは

ため息をついて別の話を切りだすことにした

「まっ、あたしたちがここで何か言ったところでどうしようもないことでしょうけど。……それじゃあ行きましようか」

「行くって、何処に？」

『サンライズ食堂』。あんたが黙ってたせいで休みを取ってまで『アランヤ村』に行かなくちゃいけないようになったんだから、お酒くらい付き合いなさいよ」

あたしがそう言うと、マイルスは困ったように笑う

「クーデリアも、秘密にしていたこと怒ってるんだよね」

「……マイルスって、気落ちするとすぐ偏屈になるわよね」

首をすくめながら、わたしは軽く笑ってみせた

「さっきのは建前よ、建前。そのくらい察しなさい……ほら、立った立った！」

この後、連れて行った『サンライズ食堂』で、いつものように互いにちよつとした愚痴を言ったりしながらお酒を飲み……そして、マイルスが先に酔い潰れたところまで、大体予想していた通りだった

ただ、最後のほうでマイルスの口から出てきた「近いうちにトトリちゃんに身長が抜かれるんじゃないか」という不安については、会った時から負けているあたしとしては何とも言えない気持ちになった……まあ、そんなふうに普段通りの愚痴を言えるなら、随分とマシになったんじゃないかしら？

あとは、次に実際にトトリに会った後かしらね。まあ、きつと何の心配もいらなんでしょうけど

4年目：マイス「悩みながらもノンビリと」

マイスの家

「うーん……」

あのことで「どうしたものだろうか？」と悩んだのは何回目になるだろう？ 一人で悩んでも答えの出ないことだとわかっていながらも、ついつい考えてしまっている

家のキッチンでお茶を用意しながら、あのこと……トトリちゃんがギゼラさんの行先を知ったことについて考えていた

そもそも、トトリちゃんは僕がそのことを黙っていたという事を知ったのだろうか？

知ったのであれば、きつと僕のことを嫌いになっていくだろう。でも、もし知らなくて、今度会った時に「お母さんのこと、わかったんです」と言つてトトリちゃんが話したら……僕は罪悪感でいっぱいになってしまいそうだ

「でも、どうなっても、あの時僕が「黙っておく」って決めたからこうなったわけで……やっぱり、トトリちゃんに何を言われても受け止めないとだよね……」

もう何度目かになる結論を自分の中で出し、とりあえずはこのことについて考えるのは一旦^{いったん}止めることにした

そして、用意し終えたお茶を持ってリビングダイニングのほうへと運んでいく

用意した二人分のお茶、その一つはもちろん自分のためにとっておき、もう一つのほうをソファーに座っているお客さんの前へ出した
「ああ、ありがとう。……キミの出す、こういったものに関しては、僕も素直に褒められるよ」

「あははっ。ありがとうございます、トリスタンさん」

お客さん……トリスタンさんは、僕の出したお茶に口をつけ「……

うん、ちょうどいいくらいだ」と感想をもらしている

……けど、そんなトリスタンさんの目がチラリと僕のほうを向いた「それにしても、珍しいこともあるものだね。キミでも、そんなに悩むことがあるなんてさ」

「そんなことないですよ。僕だって、普段から色々悩んでますし……って、あれ？」

トリスタンさんの言葉に答えたんだけど……ふと、トリスタンさんに悩んでいるってことを話した覚えが無い事に気がついた。じゃあ、なんでトリスタンさんは僕にこんなことを言ってきたんだろう？

つい首をかしげてしまったんだけど、その仕草でか、それとも別の何かかはわからないけど、トリスタンさんは僕に「驚くことは無いよ」と言ってきた

「キミって意外と考えてる事が顔に出てるよ。自覚は無かったかい？」

「あー……そういえば、昔、アストリッドさんにそんなことを言われたことがあったような」

「あ、あの人か……」

僕の言葉を聞いたトリスタンさんは、何故か苦笑いをしていた。けど、一度軽く首を振って気持ちを切り替えたようで、再び口を開いてきた

「で、どうしたんだい？ 村の運営で何か問題でもあったのかい？」

「いえ、そこは大臣のトリスタンさんが心配するようなことはありませんよ。考えてたのは、もっと個人的なことです」

そうは答えたものの、このまま悩んでいたことについて話すつもりは無かった。というのも、もうどうこう考えても仕方ない事だというのは自分でもわかっているから、わざわざトリスタンさんにまで話をしようとは思わなかったからだ

だから、話の流れを変えるために、他のことについて、今度は僕がトリスタンさんに聞いてみることにした

「でも、そんな大臣さんが今日はいきなりどうしたんですか？ 何か

話しに来たって感じじゃないですし……もしかして、また仕事から逃げてるんですか？」

「いやいやいや!! そんな事は無いよ!! ……まあ、確かにちよつと抜け出したりはしてるけど、また丸坊主にされるのは勘弁してほしいから、怒られない程度にはちゃんとやってるよ」

そう言つて身震いをするトリスタンさん。おそらくは、以前に「勤務態度が悪い!」と怒つたメリオダスさんに頭を丸刈りにされたのを思い出したんだろう

モコモコ状態で丸刈りになった事がある僕は、その様子を見て少しだけトリスタンさんに同情した。……だって、あれは何とも言えない嫌な感覚だもの……でも、僕の場合、何度も経験しているうちに変に慣れてしまつただけけどね

そんなことを考えていると、トリスタンさんが疲れた様子でため息をついたため、僕は改めてトリスタンさんのほうへと意識を向けた

「でも、逃げてきたつていう意味では間違つていないかな」

「そうなんですか? 大臣の仕事以外で何かあつたんですか?」

「お見合いだよ。前々から親父が勝手にセツティングしてたことが何度かあつたけど……最近は無くなったから安心してたけど、またいつの間にか手を回されててね」

そう言つて、またため息をつくトリスタンさん

……そういえば、以前にメリオダスさんとお酒を飲んだ時、メリオダスさんが「ヤツも家庭を持てば」とか何とか言つてた気がする。もしかして、あの後メリオダスさん、本当にトリスタンさんにお見合いをさせようとしていたのかな?

「……あれ? でも、逃げてきたんだつたら、なんでウチに?」

トリスタンさんのお父さん……メリオダスさんとは結構仲良くさせて貰っている。大臣を引退してからも度々『青の農村』を気にかけてくれたりして、わざわざその足で来てくれたことも何度もあつた。僕以外の村の人との関係も良好だ

だから、むしろ街よりもメリオダスさんの味方が多いと思う。つまりは逃げる場所としてはあんまり適^{てき}してないような気がするんだけど……

「むしろその逆だよ。親父も僕が『青^{こっ}の農村^ち』には逃げて来ないだろうと思っっているはずだ。そして、村の人たちが僕が来ていたことを伝えようとするしても、わざわざそれだけのための街まで行く人はいないだろう?」

「まあ、確かに野菜とかウチの作物を街に卸^{おろ}すのは早朝ですから、この時間になると街に行く人自体少ないかもしれないですね。しかも、メリオダスさんも探し回っているだろうし、会えるかどうかは厳しいかも」

そう考えると一日……とはいかずとも、それなりの時間を稼げるだろう。そうなれば時間的にお見合いも流れてしまっただろう

……でも、今から僕が動けばどうにでもなりそうなんだけど……どうしよう?

「それに、最初はアトリエでコロナに匿^{かくま}ってもらおうって思ってたんだよね。けど、ちょうど留守だったみたいでさ……久々にコロナとじっくり話したかったんだけどね」

とつても残念そうに首をすくめて首を振るトリスタンさん
アトリエに誰もいなかったって言うのは、トトリちゃんはクーデリアから話を聞いた後に『アランヤ村』に帰ったらしいし……もしかしたらコロナもトトリちゃんに付いて行ったのかもしれない

「それにしても……お見合いって、そんなに嫌なんですか?」

僕がそう聞くと、トリスタンさんはほとんど間を開けずに「もちろん」と返してきた

「もちろん、年齢的にも世間的にもいい加減結婚を考えた方が良いとは思うよ? でも、頭でわかってても、踏ん切りがつかないとか……諦めがつかない部分があるのも事実なんだよね」

「……? どういうことですか?」

「さっきの話の流れからこの話題を振ってきたから「もしかしたら気

づいてるのかな？」って思ったけど……うん、キミはそんな察しの良い人じゃなかったよね……」

「いや、だから何のことですか？」

よくわからないことを言いだしたから改めて問いかけてみたんだけど、トリスタンさんは「いやいや、気にすることじゃないよ。それに、キミにはそういう関係の無い事だろうし」と言っていて、それ以上は何も言ってはくれなかった

その代わりに……というのかどうかはわからないけど、トリスタンさんが「そういえば……」と口を開いた

「そういうキミのほうはどうなんだい？　僕が言うのも何だけど、キミももういい歳だろう？　結婚とか、そういう話はあつたりしないのかい？」

「うーん……無いですね。というか、そういう事を自分で考えることもほとんど無くて……。『青の農村』の村の人が結婚する、村をあげての結婚式に行った時なんか「村長は結婚の予定は？」とか聞かれたこともありましたけど……」

「そういう時に、その結婚式に来ている人なんかと話して、そのまま何かあつたりとかは？」

トリスタンさんの問いかけに、僕は首を振ってみせる

「それも無いです。聞かれた時には「結婚かー」なんてちよつと考えたりしますが、その後は新郎新婦の二人をお祝いするのに集中しますし、終わったら終わったで、式に出ていた分の仕事の調整とかありますから……というか、普段から仕事とか試してみたいこととか沢山ありますから、いつの間にか忘れちゃってます」

「なるほど、ね。確かに、仕事熱心なキミらしいと言えばキミらしいけど……」

「……ど、どうかしましたか？」

納得できていないといった顔で、ほんの少し首をかしげて僕をジロジロ見てくるトリスタンさん。その様子に、さすがに不思議に思い、僕はどうしたのか聞いてみた

「いやさ、キミはそうでも、周りはほつとかなんじやないかなーって思ってたね。女の子に告白されたり、縁談がきたことは無いの?」

「ええっ!?! 告白なんてされたこと無いですよ? 縁談なんか全然無いです。……そもそも、僕にそんなことがあるわけないじゃないですかー?」

少し驚きながらも、僕は笑いながらそう言った。けど、まだやっぱトリスタンさんは気になっているようで、そのことについて追究してきた

「本当かい? 仕事はもちろん、料理・裁縫・鍛冶は職人レベル、地位というか役職は「村長」って微妙だけど、経済面は問題無いどころか国でもトップクラス……そんな男を、女性やお偉いさんは獲り逃がそうとはしないと思うんだけどねえ」

「おえらいさん? えっと、それは……アレじゃないですか? それ以外がダメ過ぎるとか、あとは……男として、見られてない……とか?」

「……自分で言ってる、悲しくならないのかい?」

そう言われても、それ以外に思いつかなかったし……それに、本当に告白とか縁談とか全然無いのは事実だから、これ以上はどうも言えないわけで……

そんなことをダラダラと話していると、いつの間にか日が暮れ始めてしまっていた。どうやらトリスタンさんの思惑通り、今の今までメリオダスさんは来ず、ここまで時間が経ってしまったようだ

けど、トリスタンさんはあんまり喜んでいる感じではなく、むしろ何かを悩んでいるようだった

「帰ったら怒ってる親父が待ち構えてるわけだし、どうしたものかなあ?」

「それは逃げた時点で決まってる事ですよね? お見合いから逃げ

て、怒られない方法なんて……お嫁さんを連れて行く、とか？」
「難しい事言うんじゃないよ。それができていけば、何の苦労も無いんだから」

呆れた様子のトリスタンさんだったけど「あんまり気が進まないけど……」と呟いて、僕のほうを見て口を開いた

「そういうえば、キミの家って『離れ』があつたよね？ 今日だけでいいから使わせてくれないかい？」

……うん、なんとなく、そんな気はしていた
けど……

「すみません。もう先約つていうか他の人に貸してて……」

「そうなのかい？ 誰か旅の人かな？」

その質問に僕は頷く

「旅人といえば旅人ですけど……リオネラさんですよ。トリスタンさんも会ったことありましたよね？」

「ああ、あの子か。そう言えば最近また広場で人形劇をやつてるとか聞いてたけど……って、えっ？」

「そうですね。ステルクさんと仲直りしてからは、また街で劇をしてるんですよ。……とは言つても、今日村にいないのは劇のためじゃない、フリーさんの家に遊びに行つてるからなんですけどね。あつ、でも夜には二人で来るつて言つてたから、そろそろ夜のゴハンの準備しないと！」

リオネラさんもフリーさんも特に嫌いな食べ物はないから、作つてあげられるメニューの自由度は高い。けど、それだけに何を作るかは悩みどころだ

そうだなあ……何にしよう？

「ちよつと待つて。結構前から人形劇の噂は聞いてただけど……もしかして、ずっとここに泊まつてるのかい？ とうか、付き合つてるのかい？」

「いやいや、いつものことなんですよ。 これまでにも年に何回か

『青の農村』に来て人形劇をしてくれていたりしてたんですけど、その頃から講演料つてわけじゃないですけど、宿代わりに『離れ』とゴハンを提供してましたから」

「そ、そう、なのかい？ ……もしかして、告白とか縁談とかが来ないんじゃないかって、来ようがなかった？ もう付き合ってるかそれ以上と勘違いされてた？ それか誰かが邪魔してたとか、けん制し合ってたとか……いや、まさか……でも、それだけで貴族あたりが大人しくするとは………」

………？

うーん？ トリスタンさんが何かブツブツ言ってるのがギリギリ聞き取れるか取れないか微妙なくらいの大きさでよくわからないや。もしモコモコ状態ならちゃんと聞こえてたかもしれないけど……まあ、変身するわけにもいかないから、仕方がないだろう

その後……

「リオネラさんは昔からトリスタンさんのことをなんだか怖がってる感じがありますし、フィリーさんは男の人がまだ苦手ですから、夜ゴハンにはお誘いできません」

……と、申し訳なく思いながらも伝えると、トリスタンさんはあつさりとしてくれた

「いやあ、さすがに邪魔する度胸は無いかなあ……うん」

そんなよくわからないことを言ったトリスタンさんは「それじゃあ、お邪魔したよ」と足早に帰っていった

トリスタンさんが何を言いたかったのかはよくわからないし、ちよつと気になるけど……それよりも、今日の夜ゴハンのメニューを考えて、早く作らないと

4年目：マイルス「これまでと、これから」

マイルスの家

時折、自問自答しながらも少しの月日を過ごしていた僕だったけど、ついにその日が来た

リオネラさんが『アーランドの街』のほうで人形劇をするということだった。一通り仕事も終わっていたし、特に予定も無かったから、お昼過ぎに街へ行くリオネラさんを見送る時に僕も一緒に行って観てみようかなー、なんて考えていた

そして、リオネラさんとホロホロとアラーニヤが「そろそろ出ようかな」って言った、その少し後……玄関のほうからノックの音が聞こえてきた

「あつ、マイルスさん。それに、リオネラさんも……こ、こんにちは」

玄関の扉を開けた先にいたのは、トトリちゃんだった

なんでも、僕に話があるということだったから、人形劇の予定があるリオネラさんはそのまま見送る事にして……僕は家に残って、トトリちゃんとお話をすることに

……トトリちゃんの言う「話」というのが何の事なのか察しながらも、僕はいつものように来客用に『お茶』を用意するのだった

「はい、おまたせ」

「あつ、ありがとうございます」

ソファアーに座っているトトリちゃんの前あたりのテーブルの上に『お茶』を差し出すと、トトリちゃんは軽く頭を下げながら受け取って

くれた

それを確認してから、ソファとテーブルを挟んで反対側に置いてあるイスに僕も腰をおろす。そして、自分用に用意した『お茶』に一口つけて、この後話すことになるであろうことに少し緊張しつつも心を落ち着かせて、正面にいるトトリちゃんのほうへと目を向ける

「それで、今日はどうしたの?」

「えっと、どこから話したらいいのかな……あつ、そうだ」

最初、少しだけ悩むような様子を見せたトトリちゃんだったけど、ふと何かを思い出したのか、先程まで腰にさげていた……今は座っているソファのその横に置いていた『ポーチ』の中を漁りだした

「あつ! あつた!」という小さな呟きと共に顔をあげ、『ポーチ』から何かを取り出したトトリちゃん。その手にあつたのは手のひらほどの大きさの封筒で、トトリちゃんはそれを僕に差し出してきた

「お話しの前に……これ、マイスさんについて、お父さんから」

「お父さん? っていうことは、ガイドさんから?」

「はい。今日、家を出る時にいきなり渡されて……」

受け取った便せんは、大きさや厚さ、そしてガイドさんからと言う点を含めて考えると、やはり手紙なんだろう

封筒を表、裏とひっくり返したりして確認しながらの僕の問いかけに帰ってきたトトリちゃんの返答を聞いた僕は、ついついトトリちゃんのほうを見て目をパチクリとさせてしまう

……ただ、それを見て何か勘違いしてしまったのか、トトリちゃんがちよつと驚いたような顔をして首を必死に振ってきた

「別に中身はわたしも見てませんっ!? ……た、確かに、ちよつと気になったから透かしてみたら見えないかなーって思ったりはしましたけど……」

「いや、そんな事は聞いてなかったんだけど……? ええっと、そうじゃなくて、「今日」家を……『アランヤ村』を出発したの?」

僕がそこまで言ったところで、トトリちゃんにも僕の疑問がちゃん

と伝わったみたいで、「ああっ！」とポンと手を叩いてトトリちゃんは頷いてくれた

「この前、新しい道具を調合したんです！ 『トラベルゲート』って言うって……原理は少し複雑なんですけど、街と村を一瞬で移動出来たりするんです」

「ああ、なるほど。だから今日『アランヤ村』を出て『アーランドの街』のほうに着いてるんだね」

僕は納得すると同時に、あることを思い出して少し感慨深い気持ちになった

というのも、トトリちゃんの言った『トラベルゲート』という移動用アイテムについては、以前にロロナから聞いたことがあった。あの時は『リターン』の魔法と似たものもあるんだなー」くらいにしか思わなかったんだけど……こうしてトトリちゃんの口から「作った」という事を聞くと、「そんな難しいものを作れるようになったんだなー」と思えてきた

ほんの二年くらい前は、錬金術士でもない『錬金術』を少しかじってるだけの僕が色々教えたりもしてたんだけど……気がつけば、いつの間にか立派な錬金術士になっていたみたいだ

そんな事を考えていたんだけど、視界に「どうしたんだろうか？」と少し首をかしげているトトリちゃんが入り、現実を引き戻された

「ごめん。……とりあえず、これの中を確認してもいいかな？」

「あつ、はい。わたしも気になってるので、お願いします」

確認をとつてから、僕は封筒の封を切つて中に入っていた紙を取り出した。やはり手紙のようで、その折りたたまれた紙を広げると、グイドさんが書いたのだろう字が目に入った

内容は……

「あの……？ 何が書いてますか？」

「えーつと、ね……謝罪とお願い、つてところかな？ ……グイドさんが悪いわけじゃないと思うから、なんだか読んでもコッチが申し訳

ない気がしてくるけど」

手紙の内容はおおよそ「口止めしてすまなかった」、「トトリに例の話を伝えた」、「話を聞いたうえでトトリは俺に船造りを頼んできた」、「できればこれからもトトリの力になってあげてほしい」というものだった

途中、予想外の内容があったものの、大体の話は把握することが出来た。その上で僕がトトリちゃんと話すべきことは……

「……今日、トトリちゃんがしに来た「お話」って、ギゼラさんが船で海へ出た、って話なんだよね？」

「えっ!? 何で知って……もしかして、お父さんが手紙に……あつ……」

最初、驚いたように言ったトトリちゃんだったが、僕の顔を見て……たぶん、手紙を読んでいた時の僕が驚いていなかった事をわかってか、何かを察したように言葉を押し留め……再び口を開いて、別の言葉を発した

「……もしかして、ミスさんは知ってたんですか？ お母さんのこと」

「うん。トトリちゃんが『青の農村』に来た後、一緒に『アランヤ村』に行ったあの時。あの時にグイードさんにこっそり教えてもらってたんだ……ゴメンね、ずっと黙ってた」

「い、いえ、いいんです。お父さんも、おねえちゃんも、メルおねえちゃんも……村の人みんなが、黙ってたことですから」

トトリちゃんは顔を伏せ気味になってしまった。その様子を見て、僕は胸と胃が締め付けられるように苦しくなったような気がした……だけど、それは黙っていたことへの当然のむくいだと思い、僕はトトリちゃんの次の言葉をジッと待ち続けた……

「あの……ミスさん」

しばらくの静寂の後、トトリちゃんがそう僕に言ってきた

「話を聞いた時、ミスさんも、お母さんはもう……死んでいると思

ましたか？」

僕からしてみると、そのトトリちゃんの問いかけは予想外だった。だって、グイードさんの手紙の中に書いてあったから……「船が壊れただけで、そのせいで帰ってこれないだけで、お母さんは生きてるかもしれない」、だから「船造りを頼んだ」のだと

でも、今の問いは、まるで生きてるか死んでるか……どっちなのか迷いがある様子だった

何故、トトリちゃんはそんなふう迷っているのか、僕の勘違いなのか……

それを確かめる方法も、問いただす方法も持ち合わせてなかった僕は、これまで黙ってきたということもあって、聞いた当時に思った通りの事を口にする事に決めた

「話を聞いた時……薄情かもしれないけど、悲しいとか、心配とか、そういう気持ちはほとんど無かったんだよね」

「……………」

「だって、僕にとってギゼラさんはヒーローっていうか、一番すごい人だったんだ。フラウシュトラウトっていうモンスターの恐ろしさを全然知らないから言えるのかもかもしれないけど……そんな奴にあのギゼラさんが負けるなんて、僕には想像できなくてね」

「……船、壊れちゃったんですよ？」

「グイードさんが造った『フラウシュトラウト』に壊されない船だから、簡単には壊されないよ……とは言っても、僕が知ってるだけでも、一人だけ壊せる例外もいるけどね。ほら、橋とか遺跡とか壊した何処かの誰か……とかね」

僕がそこまで言ったところで、トトリちゃんの身体が肩を中心に少し揺れた

「それって、お母さんが自分で船、壊しちやったってことですか……？」

「かもね、って話だよ」

「……ふふつ。村でも色々壊されたミスさんが言うと、なんだか説

得力がありますね」

顔を上げたトトリちゃんの顔には、うつすらと笑みが浮かんでいた。なんだか、さつきまでよりも元気があるような気がする

「そっか……あの時、お父さんが言ってたのって、マイスさんのことだったんだ」

「……？ 何のこと？」

「わたし、お父さんたちに言っただんです「船が壊れて帰ってこれなくなっただけかもしれないじゃない」って。もしたらお父さん、少しだけ笑って「そうか……お前までそんなふうを考えるなら、本当にそうかもしれないな」って呟いてたんです。一緒にいたおねえちゃんは、何のことかわからないみたいでしたけど……」

トトリちゃんのお姉ちゃん……ツエツイさんは、僕とグイードさんがその話をしていた時、グイードさんに言われてトトリちゃんが来たらわかるように家の玄関の前で見張り役をしていたから、僕がグイードさんに何を言ったのか知らなかったんだろう

それから、トトリちゃんからこれからの事を聞いた

「どうやらトトリちゃんは船造りのために、グイードさんから言われた素材を集めて調査をしていくらしい。そして……」

「それで、持っている素材も必要な数が多くて足りなかったり、まだ見たことの無い素材なんかも集めないといけなくて……」

「その辺りは『青の農村』で採れるものとかだったら、いくらか用意できるよ。それに、どこか険しい採取地に行くって言うなら、遠慮しないで僕に声をかけて！ 色々と力になれると思うから！」

「えっ！ でも、マイスさんはやっぱり村長さんだし、冒険に付き合ってもらうのは……」

申し訳なさそうに言うトトリちゃんに、僕は首と手を振って「いや

いや」とそんな事は無いということ伝える

『大食い大会』みたいな、新しかったり、もの凄く準備が大変なお祭り以外は、僕がいなくても村のみんなで作っていけるから大丈夫だよ。それに……」

「それに……？」

「心配してない」なんて言っちゃったけど、やっぱり僕だつてギゼラさんには会いたいからさ。……僕にも、手伝わせてくれないかな？」

「……わかりました！ それじゃあ、お願いしますマイルスさん」

4年目：マイス「予想外の出来事」

先日、僕の家に来たトトリちゃん。そのトトリちゃんとの会話では、色々とおつただけけど……それはひとまず置いておいて、その中で、今後の事で大切なことがある

それは、トトリちゃんが海へ出ていったギゼラさんを探しに行くという事。そして、そのための船をグイドさんが造るといふこと。その船を造るための材料をトトリちゃんが集めてくるというものだから、その船の材料集めを僕も手伝うことになったんだけど……その材料を調合するための素材をトトリちゃんから教えてもらい、その中から僕に集められそうなものを考えた

その結果、一番僕が集めるのが適している素材は『木材』だという結論になった

船というものを思い浮かべてもらうとわかるかと思うけど、船の大半は木で造られている……つまり、『木材』は『数』も『質』も必要とされ、それが船の最終的な出来栄えにも影響してくる

だから、トトリちゃんに変わって僕が……とはいっても、『質』に関しては『素材』から船の材料へと『錬金術』で調合する際に、ある程度は他の素材でフォローをすることが出来るから、そこまででもないでも、『数』のほうが悪介だった。『木材』を集めているだけで、その間は他の事に手を出すヒマが無くなりそうなくらい必要個数が多かった。そうなると素材集めの他に、素材集めの他に素材・船の材料共々『調合』しないといけないトトリちゃんには負担が大きすぎるのでは？ ……と、思ったから、僕が集めることを買って出たのだ

幸いなことに、僕はこれまでにウチの『離れ』や『モンスター小屋』、他にも『集会場』などといった『青の農村』の建物を建てる際に『木材』を集め吟味してきた経験がある。その経験とこれまで得た知識を持ってすれば、船造りのための大量の『木材』集めもそれほど難しい

ことでは無いだろう

というわけで、トトリちゃんに素材集めのお手伝いを申し出た後日。僕はヒマを見つけては『木材』の調達を始めたのだった……

職人通り

そんなこんなで、結構な量の『木材』を集めた僕は、さつそくトトリちゃんに渡しに街の『ロロナのアトリエ』へと向かっていた

この前、『アーランドの街』から『アランヤ村』という長距離を一瞬で移動できる『トラベルゲート』というアイテムをトトリちゃんが持つていることが判明したため、もしかしたら村にいるのかもしれないけど……まあ、とりあえずアトリエへと行ってみることにしたのだ

「……んっ、とりあえずは、誰かいるみたいだね」

通りを歩いている途中、遠目に見えてきたアトリエの屋根……そこから飛び出ている煙突から薄く煙が出てるのが見え、僕はそう思った。あれは『錬金術』で『調合』をしている時に出るものだから、それが見えるということはトトリちゃんかロロナが調合をしているということだ

ただ……

「……あれ？」

歩いて行き、アトリエが近づいていくにつれて、僕はあることに気がついた

確かに、調合をしている時はあの煙突から煙が出ているのが見えるんだけど……それが、なんだか今日は心なしか濃い……というか、変に色づいている気もする

「調合してるものによつて、ちよつと変わったりするけど……それにしても、すごい気がするなあ……？ 毒薬でも調合してるのかな？」

でも、船の材料の素材の中には、毒とかそういうったものを必要としていた憶えは無い

だとすると……

「結構強いモンスターがいる採取地に行かないと採取できないようなものがあつたから、その採取地に行く準備だったりするのかな？」

そんな事を考えながら歩き続け、アトリエの手前まで来たんだけど……ここで、また別の事に……変化に気づいた

「……………なんだか、さつきよりも煙が濃くなってる」

それに、アトリエの中が何だかいつもよりも騒がしい気が……

そこまでで、僕はある考えに思い当たった

「これって、もしかして……」

僕がそうこぼしたその一瞬後に……アトリエの煙突・窓・扉から一気に煙が噴き出し、それと同時に爆発音が鳴り響いた

「ちむ〜！」

久々に聞いた爆発音と共に、玄関の扉から小さな影が飛び出して……というか、飛んできた。その声から正体はわかっていたので、僕はその影を受け止めた

「大丈夫……じゃないよね、どう考えても。吹き飛ばされたわけだし……」

「ちーむー……」

飛んできた影……ちむちゃんのうちの一人だった

大丈夫じゃないと思っただけで、受け止めた時は目を回してたものの、すぐに首をブンブンと振ったかとおもうと目をパチクリとさせて、ちよつとすす汚れているところ以外はいつもの様子に戻った。どうやら、身体は小さいけど結構丈夫らしい

この子は確か……

「痛いところはない？　ちむおとこくん？」

「…………ちむ、ちむー！」

僕の腕の中で、元気に手を挙げて「大丈夫ー！」と伝えてくるちむおとこくん。怪我も無いみたいなので一安心だ

「つて、それも大事だけど、他のみんなは大丈夫なの!？」

僕は、ちむおとこくんが飛び出してきた扉から中に入る。爆発の勢いのせいか扉も窓も開いたから、室内の煙はほとんど晴れてきていた。だから、アトリエの中はそれなりに見えるくらいにはなっていた「ロロナー、トトリちゃん？ それに、ちむちゃんたちもー、大丈夫ー？」

誰がいるのかはわからなかったけど、とりあえず、いそうな人の名前を読んでみた

すると、玄関に入って左手の方……から声が聞こえてきた

「ちむ？」

「ちむむっー！」

「ちむー！」

「ちむ〜」

そつちに目を向けてみると、ソファアーの下の隙間からちむちゃんたちが四人顔を出しているのが見えた。……また知らないうちに、女の子が一人増えていた

「ちむーー！」

僕が抱きかかえていたちむおとこくんがピョンとソファアーの上に飛び降り、そこから床に飛び降りて、ちむちゃんたちと再会(?)を果たした。ソファアーの下から出てきたちむちゃんたちは、みんなしてちむおとこくんに抱きついたり頭を撫でたりしている

どうやら、爆発の寸前にみんなでソファアーの下に隠れようとして、ちむおとこくんだけが少し遅れてしまつて吹き飛ばされたらしかった

「とりあえずコッチはもう大丈夫として……」

煙は外に逃げていつているため、さつきまでよりも見えるようになってきていた室内。僕は改めてアトリエ内を見渡した

「えっ……」

そして見つけた……同時に目を疑った

「どうやってたら、そんなふうになってるのかな……?」

僕が目やる先……そこには、素材や調合したアイテムを収納する『コンテナ』があるんだけど……

その『コンテナ』の中にダイブするかのように頭から上半身を突っ込んでしまっている人が一人。服装からしてロロナだろうが……なんだかジタバタしているから、いちおうは大丈夫……なの、かな?

「ろ、ロロナー? 大丈夫?」

「そ、その声はミス君……!! 助けてー!! 変な体勢で入っちゃって、その、腕と……とかがコンテナの端はじにひっかかって出られないのー!」

「ええっ、どうしてそんな事に……。とりあえず、ジタバタしないでジツとしてて」

「うん……」

ようやく大人しくなったロロナだけど……うん、どうしようか

体勢を変えられないとなると、一番手っ取り早いのは『コンテナ』を壊してしまうことなんだけど……確か、アトリエのコンテナって見た目以上に物が入ったり、トトリちゃんのアトリエのコンテナに繋がってたりする……って、トトリちゃんから聞いたことがある。そんなものを壊しても問題は無いのだろうか? もしかしたら、壊した瞬間、物が溢れ出てきたり……

そう考えると、僕がとれる手段は……

「ふえっ!?!」

僕は、ロロナの腰のあたりを片腕で抱え上げる様に掴んだ

「それじゃあ、いくよー!」

「ちよー! くすぐりたいよ!! とうか、最近ちよつと、ほんのちよーつとだけ運動不足でお腹周りは触らないで欲しいかなー……

「じゃなくて!? 何!? 何するのー!?」
「そー……れっ!!」

勢いで引き抜いて、「スッポーン」という音が似合いそうな感じで抜けたロロナ……だったんだけど

「ひどいよ、マイルス君！ 力任せで引つ張るなんて！」

「うう、ごめん。……やっぱり、痛かった？」

「それはもう……って、抜けたんだから良しとした方が良くないかなあ……」

そう言ったロロナは呆れ半分、諦め半分といった様子でため息をついた

「マイルス君、そういうえばトトリちゃんとは？」

「トトリちゃん？ まだ見つけてないけど……」

やっぱりトトリちゃんもいたらしい。僕はあたりをキョロキョロ見渡してみただけど……うーん、見当たらない。かなり散らかってしまっているから、その下敷きに……？

「たぶん、錬金釜の近くにいると思うんだけど……」

そう言いながらロロナは、爆発したのであろう錬金釜のほうへと歩いて行った

……っというか、もしかして……

「今日の爆発って、ロロナじゃなくてトトリちゃんがやっちゃったの!?」

「わ、わたし、最近は調合失敗したりはしてないよ!？」

「みぎゅー！」

「えっ」

僕の言葉に、振り返りながら反論してきたロロナだったけど……その時、ロロナの足元から、何か潰れたような声が……

「……ロロナ？　もしかして……」

「……………」

無言でその場から飛び退いたロロナは、素材や調査書、依頼書などが散らばったその場所をゆっくりと書きわけだし……止まった

それを見ていた僕はゆっくりと近づいて行き、そのロロナが見つめる場所に目をやった

「きゆうく……」

ロロナに踏まれたからか、その前の爆発でなのかはわからないけど、目を回して伸びてしまっているトトリちゃんが埋もれていた……

「とりあえず、ソファーに寝かせようか？」

「……うん」

救出したトトリちゃんをソファーに寝かせた後、ロロナはトトリちゃんに怪我が無いか確認をし、その間に僕とちむちゃんたちは散らかったアトリエの片づけをした

片づけが一段落したところで、僕はソファーのそばの床に腰を降ろしているロロナに近づいて声をかけた

「どうだった？」

「うん、ちよつとした擦り傷とか打撲とかはあったけど……お薬使ったからもう大丈夫だよ」

そう言いながらロロナは、寝ているトトリちゃんの髪を撫でていた

「それにしても、トトリちゃんが爆発させるなんて珍しい気がするんだけど……そんなに難しい調査だったの？」

疑問に思っていたことを聞いてみると、予想外にもロロナは首を横に振って「そうじゃないんだけど……」と言ってきた

「最近色々あって、トトリちゃんが元気が無くてね……わたしが、もっ

と気をかけてあげてれば良かったんだろうけど……」

「……何があったの？」

「わたしも詳しくは聞いてないんだけどね。トトリちゃん、ミミちゃんとかケンカしちゃったんだって」

「ええっ！」

トトリちゃんとミミちゃんがケンカをした……少し信じられないことだった

僕がミミちゃんに避けられていることもあって、二人が一緒にいるところはほとんど見たことは無いんだけど……それでも、話を聞く限りでは仲は良かったみたいだった

それに、この前の免許更新前に金モコに変身してアトリエに来た時に二人に会ったけど、その時はとっても仲が良かったはずだ

いったい、何があったんだろう……？

4年目：クーデリア 「面倒で不器用なあいつら」

冒険者ギルド

あたしは、つい頭に手を当ててため息をついてしまった

「何よ。文句でもあるの」

そのため息に反応して、カウンターの向こう側にいるある冒険者が、不機嫌そうに睨みつけてきた。元々そうでも無いうえ、彼女の内情も知っているため、そう怖くは無い

……まあ、もしもここにいるのがあたしじゃなくてファイリーなら涙目になって震えていたかもしれないけど、それがどうしたという話だ「別に。ただ、ちゃんと理解してるのか、気になっただけよ」

「何の話よ」

「冒険者ランクの話。あんたらみたいに高ランクまでなると、次のランクアップまでの道のりはドンドン長くなっていくから、ランクを一つ上げるだけでも相当大変になるわ。特にあんたみたいな活動方針の冒険者だと月単位でかなりの時間が掛かるわよ？ それでもいいの？」

あたしがそう言うと、目の前の冒険者……ミミ・ウリエ・フォン・シヴアルツラングは少し顔をしかめた。……けど、それはほんの数秒間だけで、すぐにあたしにむかって口を開いた

「……トトリが出来たんだもの。私に出来ないわけではない」

「それ、あたしの質問の答えになってないじゃない」

気付けば、あたしはもう一度ため息をついていた

……この発端は数日前、今と同じく『冒険者ギルド』のあたしが担当している受付の前で起こった出来事だ

あたしの冒険者ランクのランクアップをしにトトリが来ていた。そこにミミが来てトトリの冒険者ランクを確認したことで、ある問題

が起きてしまった

それは「トトリのランクが、ミミよりも高かった」というものだ
実際のところ、この問題は小さなものだと思う

いくら同時期に免許取得したからと言って同じ早さでランクアップしていくとは限らない。受ける依頼の数や内容が冒険者一人一人
で違うのだから当然のことだ。……事実、トトリと一緒に冒険者免許
を貰ったジーノという少年は、トトリはもちろんミミよりも冒険者ラ
ンクは低い

あの高飛車娘はそれが気に入らなかつた……というよりは、信じら
れないといった気持ちや、悔しさ、憤りを感じたんだろう。

でも、その時点ではまだその感情の矛先は自分自身に向いていたと
思う。プライドが高い性格だからこそ、歳も近く、同時期に免許を取
得し、共に冒険をすることも多かったトトリに後れをとってしまった
自分が不甲斐無く思えたのだろう

その気持ちは理解できないわけじゃない。けど、だからといって他
人を悪く言うような言葉は、本心であろうとなかろうと使うべきでは
なかつただろう。そこから二人の言い争いが……ケンカが始まって
しまったのだから

「別におかしくなんてないよ。わたしだって頑張ってるんだし」

「私が頑張ってるけども言いたいのか？ 言っとくけどね、私の方が
あんたの何十倍も何百倍も努力してるんだから！」

「ミミちゃんが頑張ってるなんて言ってるよ。何でそんなに怒る
の？ わたしは、ただ……」

「納得いかない！ 絶対間違ってるわ！ シュバルツラング家の当主
である私が、こんな田舎娘以下なんて！」

「むう……しよ、しょうがないじゃない。わたしのほうが上なんだも
ん」

「あら、珍しく言い返してくるじゃない。ランクが上だってわかった瞬間、偉くなったつもりなのかしら」

「そんなこと言ったら、ミミちゃんなんていつも偉そうじゃない！ シュバルツラング家のくなんて言っちゃって」

「実際そうじゃない、その何が悪いっていうの？」

「クーデリアさんが言ってたもん。『貴族』の名前なんて大した意味無
いって！」

「……ッ!? あんた、それ以上言ったら怒るわよ！」

「同じ『貴族』でもクーデリアさんは親切で良い人なのに、ミミちゃん
はいつつも偉そうで、意地悪なことばかり言ってる……」

「黙りなさい!!」

「きやつ!? あっ……ごめん。わたし……」

ミミからの一喝でトトリは一気に頭に登っていた血が引き、一歩立
ち止まる事が出来たのだろう……が、それはもう遅かった

「……そうよね。あんたは凄い冒険者の娘で、凄い錬金術士の弟子で
もあるし……私みたいに家の名前くらいしか無い人間なんて、さぞく
だらなく見えるんでしょうね」

「そんなことない！ そんなこと全然思ってる……」

「バカ！ あんたなんか大っ嫌い！」

もっと早く、最初のほうにどちらかが……もしくは双方が一度冷静
になることができれば、一言二言謝罪をする程度で事が済んでいただ
ろう。笑い話にはならなくとも、大事にはならなかったはずだ

けど、一流の冒険者と呼べるくらいになったとはいえ、二人はまだ
子供だやっていたことも子供のケンカだ。自分の言動を客観的に見
ることも、一度血の登ってしまった頭を早急に冷ますことも難しい、
思ったことや感情がつつい前に出てしまう、出してしまった手を

中々ひっこめない。そんなお年頃だから仕方ないと言えば仕方ないけど

それが先日^{こっち}の事だ

……まあ、^{こっち}ミミもこっちで、時間が経っていくぶん冷静になったんだろう。自分に非があることも自覚している様子で、トトリに謝りたい、仲直りしたい、という気持ちがあるのは確かかなようだ

けど、ミミがとうとうとしている行動は、正面から謝りに行くといったものじゃなく、随分と遠回りというか、ひねくれたものだった

トトリと同じランクまで上げてから会う

……ええ、うん。言いたいことはわからなくはない

確かに、そうすればどっちが上だだの、凄いだの凄くないだのゴチャゴチャ言うことも無くなり、ケンカの原因は無くなるだろう。……過程の部分は無くならないから、ちゃんと謝るべきだとは思うけど

でもまあ、あたしがどう思うとかよりも、本人が納得するのが大切なことだろう。じゃないと、無理矢理仲直りさせても変にしこりが残ってしまって結局面倒なことになるだけだし……

「はあ……まあ、あんたに相応の覚悟があるのはわかったわ。なら、あたしからは「頑張りなさい」としかいえないわね」

「別に、何も言わなくていいわよ」

そうツンと言葉を返してくるミミに「そう」と短く言ってから、あたしは改めてため息をついた

……いや、だって、ケンカの後、泣き出してしまったトトリに^{あの子}「ミミのほうはあたしが何とかしとくから」と言ってしまったため、恐らく近いうちにトトリが来て「ミミちゃんはどうでしたか？」みたいなことを聞かれてしまうのはほぼ確実だ

……その時、あたしは何て言えばいいのかしら？ しかも、それが何カ月も続くとなると……自分で引き受けてしまったとはいえ、考えるだけで気が滅入ってしまう

「……………ん？」

そんな事を考えていたんだけど、ふと視界の奥……『冒険者ギルド』の入り口近くの柱にそそくさと隠れる人影が見え……それが誰なのかわかったところで、あたしの中にある考えが浮かんできていた

不安要素が無いわけじゃないけど……まあ、大丈夫でしょ

そう考えて、あたしは少しだけ声を張り上げて、柱に隠れた人物のほうへと言葉を放った

「コソコソ隠れてないで、さっさと出てきてコツチに来なさい」

「……………はあ？ 何言ってる……………」

いきなりの事に何が何だかわかっていない様子のミミは、あたしの視線を追うようにして振り向き……そして、固まった

「なっ……………!？」

「え、ええつと……………こんにちは？」

「はいはい、こんにちは。……………で、何コソコソしてたのよ、ミス」

カウンターそばまで歩いてきた柱に隠れていた人物……ミスにあたしは聞いた。すると、ミスは自分の右手を首の後ろに回して、申し訳なさに首を下げた

「その、なんだか大事な話をしてるみたいだったから、僕が行ったらまた話を中断させちゃうかなーって思ってた」

「あんたって、変に気を遣うわよね」

ミスは「また」って言っているけど……似たようなことがあったのか、それとも前に『冒険者ギルド』でミミが悲鳴をあげて逃げ出した事を思い出し、そんなふうになったらいけないと考えた、ってことかしら？

免許更新の前あたりに、トトリとミミの様子をうかがうために『変

身』してたりしたけど……随分と弱腰というか、ミミに対して苦手意識というか一歩引いてしまっている気がする

そう思いながらも、あたしはマイルスから視線をずらして、ミミのほうを見てみた

「ちよ……なんでよりによって今……けど、あの子が……怒って無
いって……いや、でも……そもそも……」

……あら？

悲鳴をあげずとも、あたしとマイルスが言葉を交わしている間に逃げ出すのではないかとおもっていたのだけど、ミミは未だにカウンターの前にいた。あたしが知らない間に何かあって、ミミこの子の中で何か変わったのかしら？

……ただ、マイルスには完全に背を向けている上に、頭を抱えて何かブツブツと言ってる不気味なだけ……まあいいか

「じゃあマイルス。この子のこと、頼んだわよ」

「えっ!？」

マイルスとミミの驚愕の声が重なった。特にミミは抱えていた頭を瞬時にあたしの方に向けて目を見開いていた

「ちよつとー！ なんでこい……この人に私が……」

「時代が違うとは言っても、マイルスは最速で最高ランクまで上がった冒険者よ。あんたのランクアップの手伝いにはもってこいだわ」

「そのくらい知ってるわよ！ じゃなくて！ 私は手を借りなくても……」

「まだ貸し借りなんて言ってるのね……というか、いいの？」

あたしがそう言うと、ミミは「なんのこと？」と心底わからない様子で眉をひそめた

「マイルスだったからまだ良かったけど、もしも来たのがトトリだった

「らあんた何とかできる？」

「ぐう!？」

「というか、街を活動の拠点にしている時点でそういうリスクがかなりあるわよ。その点、マイルスに協力してもらえばランクアップに近づける上に『青の農村』を拠点にできるわよ」

そう言ってみせたけど、ミミはまだ抵抗するみたいであたしを睨みつけ続けている

「トトリだって『青の農村』には行くじゃない！ それに、冒険の時間のほうが長くなるからそこまで関係無いし、依頼を受けたり報告するのは結局街の『冒険者ギルド』でしょ、なら意味無いわよ！」

「そうかしら？ 村のほうにはお利口なモンスターたちがいるから、その子たちに頼んでトトリが来たら教えて貰うようにして隠れたりすればいいわ。あと冒険と依頼の事だけど、それも協力者がいれば色々楽よ。アトリエに行ってもらってトトリの足止めをしてもらっているうちに、あんたは安全にここに来れたり……ね」

そこまで言うと、ミミは押し黙ってしまった……

そして「リスク」と「マイルスの手を借りる」というふたつを天秤にかけて迷っているのか、「うーん……うーん……」と小さく唸りだした

……つと、今度はマイルスがあたしに「あのー……」と声をかけてきた

「なに？」

「僕が「嫌だ」って言うのは……？」

マイルスはそう言うけど、その表情は別に嫌そうにしているようには見えない

「却下。……というか、根っからのお人好しのあんたは断らないでしょ？ その相手が友達ならなおさらね」

「それはそうだけど、何がただか状況がわからないから………あれ？ 昔にも似たようなことがあったような……？ 確か、アレは……」

「そ、そんなことどうでもいいでしょ！ とにかくあんたはトトリに気を付けながら、その子のランクアップの協力をしてあげなさい！」
あたしの言葉の勢いに押されてか、マイスは「え、うん。わかったよ」と勢いのまま承諾した。あとはミミのほうだけ……

「……わかったわ。でも、あくまで私は私の実力でランクアップする。だから、トトリに会わないようにするために協力してもら……いいただきます」

「ふうん……まあ、そういうことで良いわよ。結局はあんたの問題だしね」

あとは本人たち次第だろう……トトリのほうも、マイスのほうも、
ね

あたしの受付から依頼の受付へと移動した後、カウンターから離れていく二人を見て、あたしはひとまずの安堵の息をついた。自分のことじゃないのに知らないうちに妙にみょう気を張ってしまっていたようだ

「あ、あの……？」

……と、あたしの右手のほうからそんな声が聞こえてきた

そつちに目をやってみると、カウンターに目のあたりまで隠れるくらいにしゃがみこんでいるファイリーが見えた。あの子が担当している依頼の受付にはさつきまで二人が行っていたはずだけど……その時に何かあったのかしら？

「何？ 持ち場から離れてまで話すこと？ それとも、あの二人のこと？」

「え、ええつと、二人のことでちよつと……大丈夫かなあ、って思ってる」

「大丈夫よ。あんたは知らないでしょうけど、この手の事には、マイスは過去の実績があるわ」

「いえ、そつちじゃなくて……」

そつちじゃない……？

となると……ああ、ミミとトトリじゃなくて、ミミとマイスとのほうかしら？ ミミが悲鳴をあげて逃げて、マイスがぶっ倒れた時にもこの子も『冒険者ギルド』にいたし、そのことを思い出して心配しているのね

「もしかして……あの二人の間のこと？ それも、そう大したこと無いだろうから心配いらないわ。マイスから話をきくかぎりじゃあ、きつとトトリとマイスとの時みたいにとつちかが変に勘違いしてこじれちゃってるだけよ」

あの二人の仲も早々と何とかしてほしいものよね。これまで、マイスがミミに避けられる度に、あたしがマイスにフオロー入れなきやいけなくて、ちよつと面倒だし早く和解してくれればいいんだけど……

「そういう話じゃないんですけど……！」

はあ……？ じゃあいつたい、なんのこと？

4年目：リオネラ「すれ違っている二人」

マイスクンの御好意に甘えて、マイスクンの家の裏手にある『離れ』を使わせてもらってから結構な月日が経った。これまでも『青の農村』に訪れては泊まらせてもらってはいたけど、それらは一週間にも満たないことがほとんどだったから今回ほど長期滞在しているのは初めてかもしれない

長期間になった理由は、ちよつと前までは諸事情で『アーランドの街』の近くにい辛く長期滞在し辛かったけど、それが無くなったから離れる理由が無くなって特別旅に出る必要がなくなったから

でも、それなら昔みたいに街で部屋を借りて住んでも良かったんだけど……これまでに何度も『青の農村』に滞在しているうちに、いつの間にかすつかり『青の農村』での生活に馴染んでしまっていて、なんとなく離れ辛くなってしまっていた

それに、街でしたいことって人形劇の公演が主だから、街からそう遠くない『青の農村』を拠点にしても別にそこまで困ることはないし、それに……

と、とにかく、そういうことで、未だにマイスクンの家の『離れ』でお世話になっている……というわけだ

……それで、街や村なんかで人形劇をしたり、時々マイスクンのお仕事を手伝ったりしながら生活してたんだけど……

そんなある日、マイスクンが家に女の子を連れてきた。なんでも、その女の子の冒険者のお仕事のお手伝いをするらしく、マイスクンの家その拠点にするらしかった

その女の子の名前は、ミミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラング。私はその子の名前を聞いたことがあり、その顔も見覚えがあった。フリーちゃんから聞いた「普段の仕事の話」で時々出てきた名前で

あり、他にもマイスくんの口からも何度か聞いたことがあった……確か、王国時代には付き合いがあつたけど、いつからか嫌われて顔を見るだけで悲鳴をあげて逃げられるようになった、とか……。顔の方は、街の通りや街での人形劇の公演で時々見かけた程度だけど

けど……今はこうしてマイスくんと一緒にいるわけだから、仲直りできたのかな……？

マイスの家

「というわけで、一緒にゴハン食べたりする機会もできると思うから、ふたりともこれからよろしくね！」

マイスくんはいつもの調子でそう言って笑顔を浮かべる。……でも、それとは対照的に、その隣にいるミミ・ウリエ・フォン・シユヴァルツラング……えっと、ミミちゃんはすました顔で私に軽く礼をしてきた

「………よろしくお願いします」

そう大きく無い声で短くそう言ったミミちゃんは、すました顔を崩すような素振りは全く見せないでそのまま口をつむつた。それ以上は何も言うつもりは無いみたい……

「こ、こちらこそ……」

「よろしくね、ミミ」

「おうっ！ 居候同士、仲良くしようぜ！」

私に続いてアラニーヤとホロホロが返事をする、ミミちゃんは一瞬目を見開いたかと思うと……すぐに元に戻って「……どうも」と短く返してきた

………そういえば、今は私が『離れ』を使わせてもらってるから、ミミちゃんが泊まれるところが無い気が……

「あの、マイルスくん。それじゃあ、私は移動したほうが……」

「ん？ ああ、それは大丈夫だよ。ミミちゃんにはこの二階を使ってもらうから。そのほうが、身を隠しながら状況を把握しやすいだろうし」

身を隠す……？ どういうことなんだろう？ それに、それじゃあ今度はマイルスくんが寝る場所がなくなるんじゃないか……

そう思って、改めてマイルスくんに声をかけようとし……その前に、私が言おうとしたことをわかっていたのか、「しーっ」と口の前あたりに右手の人差し指を立てて何も言わないように……という意味かはわからないけど私に伝えてきて、口パクで「だ・い・じょ・う・ぶ」としてきた

何か考えがあるのか、本当に大丈夫なのか少し心配だったけど、とりあえずは言われた通りを試してみることにした……んだけど……

たぶん、微妙に変な間ができたから……かな？ ミミちゃんがほんの少しだけ眉を動かしたかと思うと、唐突に顔を横に向け、隣にいるマイルスくんの顔を見てきた

けど、マイルスくんによる私へのジェスチャーと口パクはもう終わっていたから、何か勘付かれるようなことは無さそうだった

マイルスくんも、ミミちゃんが自分のほうを見てきたことに気付いたみたいで、いつも……よりはちよつときこちない感じだったけど、笑いかけながら口を開いた

「……い・どうかした？ 何かあったら遠慮な」

「……………別に」

マイルスくんの言葉を断ち切るようにして言ったかと思うと、そのままそつぽを向いてしまったミミちゃん。そして、マイルスくんは……

「……………」

表情をかたまらせて、何も言わないまま大きく肩を落としていた

……

「……なにこれ」

「なんか、めんどそうな二オイがすんなあ……」

マイスくとミミちゃんには聞こえないくらいの小さな声でアラニーヤとホロホロが呟くのが、私の耳だけに届いていた……

ミミちゃんが来た翌日

依頼の達成のため、ミミちゃんと……その付き添いのためにマイスくんが冒険に出発した

私はお留守番で、マイスくんがいない間の家と畑を代わりにちよつとだけ管理することに

これまでに何度も見てきた上に、時々手伝っていたこともあつて、畑の作物への水やりと収穫は問題なくこなせた。けど、流石にマイスくんよりもすぐく時間はかかっちゃったし、たがや耕したり植えたりはできそうにもなかった

マイスくんミミちゃんが冒険に出発してから数日後

ふたりは無事依頼を達成したようで、『青の農村』に戻ってくる前に街の『冒険者ギルド』に寄ってきて、すでに達成の報告と次の依頼の受注をしてきたらしかった

ただ……

「うう……」

明日、また冒険に出発するために、必要な食料・道具を買いにミミちゃんが『青の農村』のお店の一つ……コオルくんのところへ行ったところで、キツチンと一緒に夜ゴハンの準備に取り掛かっていたマイスくんが、いきなり肩を落とした

「わわわっあ……!? ど、どうしたの、マイス君!?!」

私が聞くと、マイルスくんは困ったような顔をして私を見て、「どうしたらいいんだろう……」ともらしてきた

「今回のことがミミちゃんとの仲直りのきっかけになると思ってたんだけど……でも、ゴハンの時も冒険中もほとんど話してくれなくて……」

「ああ……マイルスとあの子、初日からそんな感じだったわよね」

「マイルスは頑張ってる感じだったけど、妙な空気になったりしてリオネラも食い辛^{づら}そうにしてたな。……んで、その度にオレたちが話を切り換えてやってさ」

ホロホロの言葉に、申し訳なさそうに「ううう……ゴメン」と頭を下げるマイルスくん。そして、そのまま続けて口を開いた

「それに、今回の冒険でミミちゃんが達成した依頼なんだけど……その報酬の半分を僕に無理矢理押し付けてきたんだ。「僕は何もしてないから」って言って返そうとしたんだけど、ミミちゃん、話も聞いてくれなくて……」

……あれ？

マイルスくんが言ったことに疑問を感じて、私はマイルスくんに問いかけてみる

「何もしてない、って……マイルスくん、お手伝いしに付いて行ったんじゃない……？」

「うん、そうなんだけどね。本当は凄く手伝いたいんだけど……でもやっぱり依頼を受けたのはミミちゃん自身だから、僕は手を出しちゃいけないかなって。だから、僕は討伐対象以外のモンスターの相手をしたり、道中のゴハンや夜の見張りとかを頑張らせてもらったんだ」「なるほどな。つまり、オマエは依頼自体にはノータッチだから、報酬はミミだけのものだーって言いたいわけか」

「言いたいことはわからなくもないけど……でも、ねえ？」

アラーニヤの言う通り、確かにマイルスくんが言っていることもわかる。けど、依頼の邪魔になるだろう他のモンスターを倒したり、冒険の間の食べ物のこととかを全部されたとなると「何もしてない」とい

うのには素直に領^{うなず}け無い気もする

それに……

「あと、「次の冒険に必要な物はウチで準備するよ」って言ったんだけど、ミミちゃん、自分で買いに行くから絶対にいらないうって……」

「……それで、今さっきミミちゃんは買い物にでかけたんだね」

私がそう言うと、マイルスくんは肩を落としたまま頷いてきた

「うーん……でも、本当にどうしよう？ 渡された報酬分、今日の夜ゴ

ハンを一段良いものにしたらいいかな？ そしたら、ミミちゃんの次

の冒険の手助けになるだろうし……そうになると、今日の夜ゴハンのメ

ニューは……」

そう考え込み始めたマイルスくん

……私は、なんとなく……なんとなくだけど、わかってきた気がした

そのまた翌日の早朝

ミミちゃんは一人で冒険に出かけた。ミミちゃんが言うには「今回は近場での依頼だから敵も弱いから一人で十分」とのこと

私とマイルスくんは、ミミちゃんを見送った……そして、ミミちゃんの姿が見えなくなったところで、マイルスくんがまた大きく肩を落として大きなため息をついた

「……うん。あのミミちゃんがあんなに頑張ってるから良い事だよね！ ……でも、なんだか最初よりもミミちゃんとの距離が開いた気が………そんなことない、と思うんだけど……」

なんだか、どんどんマイルスくんの目が曇ってきているような気が……

でも、まだなんとか大丈夫みたいで、畑仕事や今月のお祭りの会議などはちやんとこなしていた。……けど、やっぱりどこか

そんなマイスくんを見ながら時に手伝ったりして過ごしてたんだけど、ある時、私のそばにいたアラニーヤが私の耳元に寄ってきて、小声で呟いてきた

「ねえ、リオネラ。やっぱりこれって……」

「……うん。たぶんだけど、その、マイスくんがミミちゃんのためにやってることが裏目に出ちゃってるんだと思う」

「だよなあ。……でも、マイスのこと知ってんならこれ位の事をしてくるだろうってのも、それが純粹な誠意だってこともわかりそうなんだけどな？ だからって、全部受け入れろってわけじゃねえけど。それに、甘えちまつてるオレたちがどうこう言えないかもしれないけどよ」

ホロホロが言ったことに、アラニーヤも「そうよねえ」と同意を示した

私も同じようなことを思っている。でも、それだけじゃあミミちゃんのことやってること・やってたことに説明がつかないような気もするのも事実だ

結局、これまでもほとんど話せていない、他人から聞いた話でしかミミちゃんを知らない、そんな私にはミミちゃんの性格や考えていることが把握しきれないから答えは出せそうになかった……

そのまた数日後

私はミミちゃんが冒険から帰ってくるまでに、何でマイスくんがミミちゃんの手伝いをするようになったのかを調べた

方法は単純で、ミミちゃんが受けている依頼を取り扱っているファイリーちゃんに聞いてみたのだ。偶然にも、ファイリーちゃんはその場を見ていたらしく……その上、その大元の原因のロロナちゃんの『錬金術』の弟子のトトリちゃんとミミちゃんのケンカのことも教えてくれた

……ただ、その話をしている途中にファイリーちゃんが「……って、そ

うだった!?!」つていきなり声をあげて……その後、これまでのマイルス
くんとミミちゃんの様子を詳しく聞かれた。途中から同情というか
呆れ気味の様子で「マイルス君……」つて呟いてたりしてた

……最後に「こ、これ以上ライバルはつくらないようにしようねっ
!」つてフリーちゃんには言つてたけど……何のことは、よくわか
らない。けど、アラーニヤとホロホロはなんだかわかった様子だっ
た。けど、聞いても教えてくれなかった……

それで、ミミちゃんが冒険から帰って来たんだけど……

「今度は付いて行つてないのに、ミミちゃんが僕にお金を押し付けて
きたんだよ……。今度は前よりも多いから、もしかしたら報酬の全額
かも……」

「また、オレたちにそんなこと言われてもなあ。本人にキツチリいっ
たらどうなんだ?」

「言つたから途方に暮れてワタシたちに相談しに来たんでしょ。マイ
スの顔を見たらわかるでしょ!」

より一層落ち込んだ様子のマイルスくんが、イスに座つてうなだれて
しまつていた。ここまで元気の無いマイルスくんは、前に一度同じくら
いの時があつたきりで、本当に珍しい

だからこそ、このままだといけない気がしてならなかった……

これ以上は本当に大変なことになりそうだから、どうにかしたいん
だけ……

こういう時に頼れるロロナちゃんは弟子のトトリちゃんのほうに
かかりつきりらしいから、相談するのは難しいだろう。他に誰か……
「どうしたら……」

「そんなの決まつてるじゃない」

そう言ったのは、アラニーヤだった

「ワタシたちで何とかしましょうよ。最終的には本人たち次第だけど、その手伝いくらいはワタシたちにもできるはずよ」

「で、でも、逆に迷惑になっちゃうんじゃない……」

私がそう否定しようとしたんだけど、それを遮さへぎるように、今度はホロホロが言ってきた

「迷惑かけてるなんて今更だぜ。そんなら当たって砕けろってんだ！
そうすりゃ、なるようになるだろ」

「それは……そうかも、だけど……」

「それにね、リオネラ……たまたま居い合あわせちゃったとか、そんなこと関係無しに……ミスが困こまってるなら、何とかしてあげたいでしょ？」

「だな。少なくともオレとアラニーヤはそうだぜ？ お前はどんなんだ？」

アラニーヤとホロホロに言われて、私は改めて考えてみる

「私も、なんとかしてあげたい。できるかはわからないけど……」

「でしょ？ なら決まりね！ 今から作戦をかんがえましょう」

「リオネラも無い脳ミソひねくりまわして考えろよ！ さて、どうしたもんなあ……」

4年目：ミニミ「後悔と迷い、戸惑いの連鎖」

古の修道院

振るい、突き、また振るう

手に持つ武器『ヴァルキリーアーム』を身体のように扱い、攻撃のための動作から生じる反動や遠心力を次の動作へと繋げるように動き、隙と無駄を最小限まで抑える

これまでの戦闘経験やその他の積み重ねの結果で身体に染み付いた動きが、流れるように続き、自分の何倍もの数の敵を翻弄し、一匹、また一匹と数を減らしていく

仲間を倒されて頭に血が上ったのか、奇声をあげてこちらへと突進してくる数匹の『アポステル』。2. 5頭身ほどの小さな悪魔のようなモンスターなのだが、手に生えた鋭い爪や頭部の左右に生えた角、射抜かんばかりの鋭い眼光のせいで「カワイイ」というものからはかけ離れてしまっているだろう

その突進してくる『アポステル』たちの速さ、そして距離を考慮したタイミングで私も奴らにむかつて駆け出す。そして……

「ぞこっ！」

『ヴァルキリーアーム』を勢い良く突き出した

冷静な判断を欠いていたのか、そもそもそこまでの知能が無かったのかはわからないが、突進してきた『アポステル』たちは想定できていなかったのであろう私の『ヴァルキリーアーム』の一撃を避けようとするこゝもかなわず、餌食となり地に倒れ伏した

キシヤアアアーツ！

さつきまでの『アポステル』とは別の奇声が聞こえた。今まで私が倒したモンスターたちが倒れている場所の先、数匹の『アポステル』に囲まれるようにして陣取っているモンスターの鳴き声だろう

そのモンスター『スカーレット』は、『アポステル』とよく似た見た

目のモンスターなのだけど、体色が真紅であり、その実力や凶暴性は比較にならないほど高く、ギルドからも「危険なモンスター」として認識されているほどだ。ここ『古の修道院』では一匹が『アポステル』の親玉として君臨しているようだけど……噂では、他人の手の入らないような危険な地域には、群れを成して生息している『スカーレット』もいるそうだ

「でも……私の敵じゃないわ!」

手始めに、一番手前にいる『アポステル』に狙いを定め、私は飛び出していく

突き。薙ぎ払い。回避からのカウンターで一発。数の不利なんて気にとめることも無く、私はモンスターを葬り^{ほうむ}続けていく

……こうして、目の前の敵だけに意識を集中させ戦闘に没頭している時間が、今の私にとって一番楽な時間かもしれない

ここ最近、トトリとのケンカ、マイルスの……なんて言えばいいのかわからないギクシャク感と、後々一人になった時に後悔や自問自答をしてしまうような出来事が多かった

何でこんなことになったんだろう? どこで間違えてしまったんだろう? ……特に、後者のマイルスのことについては、解決は出来ずとも回避することは簡単だったんじゃないかとさえ思えるほど「どうしてこうなった」という気持ちが強い

あの時、誘いに乗らなければ……って、あれはあの受付の口車に乗せられたからで……でも、トトリと鉢合わせしたくなかったのは事実だし……そもそも、あの時マイルスのことを「大丈夫、なんとかするだろう」って思ったのは私で、それで誘いに乗ったわけで……そう思ったのは『あの子』が「マイルスは怒ってない」ということを教えてくれたからで……それも、結局私のせいだ……

でも、その後のことでも、変に意地を張ってしまったたり、冷たい態度をとってしまったたり……でも、あれはこつちのことを何も考えてないマイルスも……いや、よくよく思い出してみれば昔からずっとあんな感じだったし……けど、こつちにも譲りたくないものはあるわけ

で、私はそれを曲げたくない……………となると、やっぱりあの誘いを受けた時点で…………

次々に仲間を倒されていくことに耐えかねたのか『スカーレット』が一段と大きな奇声をあげた

その声を鬱陶うっとうしく感じて眉をひそめつつ、私は武器を握る手にさらに力を込めた。自分の中に渦巻くモヤモヤやイライラのはげ口として、目の前の敵に渾身こんしんの一撃を与えるべく、一旦大きく息を吐いてから改めて狙いを定める

「ミミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラング、参まります!!」

「ふう、物足りない気もするけど……………まっ、こんなところかしらね」
先程までの奇声が聞こえなくなり静かになった廃墟の修道院の屋内で、私は一つ息をついた

今回の主な目的は、最近『古この修道院』を根城として周囲の街道で暴れ回っている『アポステル』の群れ……………その親玉の『スカーレット』を討伐することだった

ついでに地図を作成したりもするのだけど……………物足りないというのは、ここが今の私の冒険者ランクからすると少し難易度が低い採取地とされているから。おかげでモンスターたちも歯こぐたえが無い相手に感じられてしまっていたわけだ

まあ、だからってさっきまでの相手が全部『スカーレット』になつてたら、逆に厳しい戦いを強しいられてしまうし……………それに、冒険者ランクを一刻も早く上げるためには依頼をえり好みするつもりは無いし、これまでに『古この修道院』の調査をしたことが無かった私が悪いんだから文句は言つてられないのだけど

「まあいいわ。早く次の作業に……………」

そう思い、次の作業へ移ろうとしたんだけど……………そんな私の耳に複

数の声が入ってきた

とは言っても、さつきまでの『アポステル』や『スカーレット』のような奇声ではなく、ちゃんと理解のできる……言葉として意味を成なしている声だった

その声たちの主を私は知っている……というか、今回の冒険の同行者だ

「すごかったわねえ。これまで何人も強い人は見てきたつもりだったが、その中でも洗練されてる、って感じでちよつと見惚れちゃったわ」

「だな。騎士のにいちやんやマイルスとも全然違うタイプで面白かったぜ。まあ、その槍やりつつーか、銚ほこみたいなの、自分の身長よりも長いもん使ってるヤツを見たこと無かつたしな」

「一流の冒険者って、みんなこれくらい凄い人ばかりなのかな……？」
……現在進行形で私の頭を悩ませている存在である三人（？）。ぬいぐるみっぽいネコの人形二匹とその持ち主の旅芸人。順にホロホロ、アラニーヤ、そしてリオネラというそうだ

三人のことを全く知らないわけじゃない。最近はもちろん、ひと昔前にはよく『アーランドの街』の広場で人形劇を公演していたから、街で暮らしている人間なら大抵は彼女らのことは知っている

小さい頃、私も何度か観に行ったことがあったし……お母様に会いに屋敷に来たマイルスさんも、お母様に「不思議な人形劇」のお話をしたことがあつてそれをそばで聞いていたから、私も知らないわけじゃない。けど……

「おうおう！ オマエ、こころじゃ敵無し、って感じだな。けど、変に調子に乗って足元すくわれんなよ？」

「こらっ、一言多いわよ！ ……それにしても、アナタに同行してもらえて助かったわ。こんなに強い人が護衛にいてくれると心強いわ」

近くまで寄ってきた三人のうち、人形のふたりが身振り手振りを少し加えつつ、そう言ってきた……

ふたりが言うように、私と彼女ら三人との関係は一応「護衛と護衛対象」ということになっている

というのも、冒険に出る時に着いて来ようとしたマイルスに「今回の冒険に付き合おうと帰りが村のお祭りの直前くらいになる。開催に関わるような迷惑はかけたくないし、今回も難しい仕事ではないから一人で問題無い」という理由付けをして、マイルスの同行を阻止することができたのだけど……

そこにリオネラが「あの、私が同行させてもらってもいいですか？」と口を挟んできた。私は意味がわからず……さらに、マイルスの家に居候しているという彼女との距離感が未だに掴めていないこともあって反応に困っていた……が、その合間に心配し「やっぱり僕も」と言うマイルスを彼女がいつの間にか説き伏せてしまい、なんだかんだでついてこられたのだ

一応出発の時に、聞いていなかった目的を聞いたところ探し物があるらしく、私の行先にそれが入手できそうだったから連れて行ってほしかつたらしい。そして、「もし必要なら、正式な護衛の依頼として依頼の手続きをするけど……」と言ってきた

……まあ、邪魔にならなければいいか、ということまで連れてきたんだけど、良くも悪くも人形ふたりが騒がしかった。ずっと静かなのよりはマシかもしれないけど、肝心の人間のほうは中々会話にならないのだ

……できれば、リオネラさんこから色々聞き出したかつたんだだけど……

けど、聞けないのであれば、それならそれでやらないといけない事を早く済ませてしまって、帰ってしまえばいいだけだ。……マイルスがないから依頼の報告と受注の時は細心の注意を払わないといけなけれど……前回は一人でもどうにかなったんだし、今回も大丈夫でしょ……たぶん

そんなことを考えてただけど、その中からふと思いついたことがあり、そこにいるリオネラさんに聞いてみることにした

「あの、少しいいですか？」

「は、はい……」

……ここに来るまでも何度か似たようなことがあったけど、なんで、私が声かけるだけでビクリと跳ねあがるような反応をするのかしら？

なんというか、既視感が……ああ、あの受付嬢の反応に似てるのね、少し涙目っぽいし……ってことは、もしかして私とあまり話そうとしないのってあの受付嬢みたいに「空気がピリピリしてるから」とか「怖いから」とかいう理由じゃないでしょうね……？

そう思いながらも、わざわざ話をそらす気にもならなかったから、気にしないふりをして最初に聞こうとしていたことをそのまま言う

「探し物がある、って言ってましたけど……見つかりましたか？」

「そ、それは……」

私から視線をずらしたかと思うと、そのまま目が泳ぎ始めている。となると、次はきつと……

「ちようど今から探すところだぜ。モンスターがいちゃあ、おちおち調べ周れないからな」

「理由はわからないけど、ここは目撃情報は多いからきつと見つかるはずよ」

「そうですか。なら、私の地図作成の作業中にその近くで探してみてください。そこまで離れなければ、もしもの時も護れますから」

私の問いに答えたのはリオネラさんのそばにいる人形のふたりだった。どうやらリオネラさんが困っていたりすると、代わりに答えたり、リオネラさんに発破をかけたリするようだ

にしても、このふたりって……もしかして実はモンスターの一種だったりするのかしら？ 喋る人形なんて聞いたこと無いし、それにモンスターなら『青の農村』と関わりがある時点でなんとなく納得でききるし

だからなんだって話だけ……そう思ったほうが、人形が喋るよりも抵抗感が無いというか、不気味に思わないのよね。何故かしら？

地図作成のため、目印になるものや建物の形・構造を記録していった。そして、あらかた終わったところで、最後に、階段の先にある『タール』などが置かれている小さな物置のような空間があったのだが……そこに、見慣れないものがあつた

「……何かしら、あれは？」

黒い塊。微妙にだけ紫色の光を放ちながら渦巻いているのがわかる謎の物体

……けど、何か見覚えと言うか、何か記憶にひっかかる気が……

「おつ。あつたぜ、リオネラ。けど、黒だな。ちよつと残念だ」

「そんな事無いよ、これはこれで大丈夫だと思う」

「良かったわね。もし無かつたらどうしようかと思つたけど……後は運次第かしら」

よくわからないけど、どうやらコレが言つていた「探し物」らしい……で、結局コレは何なのかきこうとしたのだけど、それよりも早くリオネラさん達が動いた

「んじゃ、いっちよやるか！」

「そうね。いけるかしら？」

「うんっ！」

そう言つて、三人がそろつてその黒い塊にむかつて手をかぎすような仕草をしたかと思うと……

一瞬の閃光と共に「パアアン！」とまるで何かが破裂するような大きな音。そして、それに続いて「ビシュン！」とあまり聞き覚えのない音が聞こえた

突然の光に、とつさに目を瞑つたために何が起つたのかわからなかったけど、目を開けてみると、さっきまでそこにあつたあの黒い塊が無くなつていて、リオネラさんはそのそばでしゃがみこんでいた

「あら、今日はついてるんじゃないかしら？　ちゃんと手に入ったわね」

「だよな。この前の……つっても結構前だけど、そんな時は何個も壊しても落ちてなかったもんな」

そんな声をかけられながら立ち上がったリオネラさんの手には、片手で握れる程度の大きさの塊……さつきまでであった黒い塊によく似た宝石のようなもの……があった

「それは？」

「え、ええつとね、『闇の結晶』って言って、『ゲート』を破壊した時に時々手に入る『属性の結晶』の一種なの」

リオネラさんにそう言われて、私はあることを思い出した。『ゲート』……確か前に『冒険者ギルド』の掲示板なんか情報貼り出されていたり、噂になっていた「モンスターが出てくる光の渦」のことだ

これまで実際に見たことは無かったんだけど……まさかさつきのがそうだったとは。思えば、さつきの黒い塊も、光というのはわかり辛かったものの、その情報通りだった

「それって、何かに使えるんですか？」

「使えなくはないけど……専門的な知識や技術が必要だから、基本的には綺麗なだけ、かな？」

「いちおう言っとくけど、技術がねえからリオネラにも扱あつかえない代物シロモノだぜ」

リオネラさんに続いて黒猫のほうがそう言ったんだけど……つまりそれって意味が無いんじゃない？……？

その考えが口に出る前に、それを見越したように、今度は縮模様のようなものがある猫のほうが喋った

「リオネラが欲しいって思ったのは本当よ？　必要があるって考えたからこうして探してたの」

「けど、使い道が無いなら一体何に……」

そう私が言っている途中に、リオネラさんが私の手を取って……その『闇の結晶』というものを握りこませ……って、ええ？

「ちよ!?! 何? 何なのよ!?!」

「ひい!?!」

「どっかの誰かみたい短い悲鳴をあげるなっ!」

意味がわからず少し混乱気味に手を振り解いたので、当然ながら『闇の結晶』は手からすっぽ抜けてしまったのだけど……上手く黒猫のほうがかッチしたようだった

「おお、危ないところだったぜ。ずいぶんと言葉使いが荒くなったけど……やっぱそっちが素なのか?」

「うっさい! 何よ、いきなり!」

「まあ、いきなりといえはいきなりだったけど……でも、ワタシたちからすれば、結構考えた末の判断なんだけどねえ」

そう言ったのはもう片方……そして、それに続くように今度はリオネラさんが口を開いた

「その、ね。今度はお金じゃなくて、この『闇の結晶』をマイルスくんにあげてほしいかなって」

「……はあ?」

何が言いたいのかしら? というか、何を考えてそんな事を……

お金っていうのは、これまで冒険から帰った後に渡したお金のことだと思う。でもアレは冒険の手伝いやマイルスが準備してくれた食事に対しての支払いであって、貸し借りを考えないための正当なもの……けど、実際は渡した額のほうが相場の金額よりも低いだろう。だから本当はもつと支払いたいくらいだ

そんな私の考えをよそに彼女らは話し続ける

「この結晶を扱える人っていうのはマイルスくんことで、色々実験とか、装備を作ったりするのに結晶を使うから結構必要になって……だから、それをあげたらきつとマイルスくん、喜ぶよ?」

「なにバカなこと言ってるのよ。誰があんな常識知らずなトンデモ人間のこと

好きに、なるわけ、無いじゃない……！　あの人のことなんて……なれるわけ……！！」

自分の視界が少しにじみだしているのがわかった。それがどういうことなのかは、ごく最近に経験したばかりなのですぐにわかった。私はすぐにその場から駆け出して廃墟から飛び出していた

気づけば、『古の修道院』から少し離れた細い街道のそばに生えていた木に持たれかかって、息を整えながら座っていた

かなり全力で走っていたから随分と体は熱くなっていたけど、何故か頭の方は段々と冷静になっていっていた

仮にも護衛対象である相手を置いて行くなんて、あるまじきことだ……でも、せめて溢れ出してきたこれを……涙を抑えてからじやないど誰にも顔を見せられそうにない

そうやって自分を落ち着けようとすればするほど、私の頭の中にはいろんな考えが飛び交っていた

……何故だろう？

トトリとケンカしてしまった時は、トトリに言われたことに腹を立ててしまって、その怒りが言葉と行動に出てしまった部分が多い……と自分ではそう思っていた

でも、今回はどうだろう？

誰に対して怒った？　あのホロホロっていう黒猫の人形？　それとも、わけのわからないことを言っ私に無理矢理物を渡そうとした

三人ともに？

そもそも、何で私は泣かないといけなかった？

自分で考えてみたけど、それはよくわからなかった。言われたことの中に、何か悲しくなるようなことがあっただろうか？ 何か私自身が考えていたことの中なんかに、知らないうちに悲しくなるようなことがあっただろうか？

そんなことを考え続けているうちに、いつの間にか涙が止まり始めていることに気がついた

……わけがわからない。何でなんだろう……もう一度考え直してみたらわかるだろうか？

そう思いながら、地面に座ったままうつむいていた顔を上げたのだが、陽が落ち出していることに気が付き、優先順位を変えることにした

陽が落ち切る前に、リオネラさんと合流しなければ。そう思いながらも、どういう顔で、なんて言っただけか、いいのかわからなかった……

4年目：自分の気持ちと他人への想い

『古の修道院』での一件で、一時的に離れ離れはなばなになってしまったミミとリオネラたちだったが、飛び出していったミミを追いかける形でリオネラが合流したことで事なきを得た

だが、何事も無く……とはいかなかった

合流してすぐ、リオネラたちが「勝手なことを言っでごめんなさい」といった主旨しゅしでミミに謝罪をしたのだが、ミミがそっぽを向いて「別に……」と返した。そのまま妙みょうな沈黙の中、何とも言えない空気のまま『青の農村』まで帰る事になったのだ

そのせいもあって、ミミは達成した依頼の報告をしに行くことも無く、そのまま『青の農村』まで帰ってしまったのだが……幸いなことに、期限が近い依頼ではなかったため、大事には至らないだろう

そんなミミとリオネラたちが帰ってきて、一番心配したのは他でもないマイルス

もとから和氣藹々わきあひあひといった様子ではなかったが、出発時よりもあからさまに不機嫌&落ち込んでるような空気をふりまく二人を見たら、マイルスは何かあったのかと心配で心配で気が気でないわけだ

だが、当のミミは口々に会話をしてくれる様子も無く、リオネラもリオネラで、ミミを不機嫌にさせてしまったであろう話の内容が「ミミは、マイルスのことが好きか否か」というものなので話ずに話せずにした。結局、マイルスが知ることができたのはリオネラから聞いた「私たちがミミちゃんのこと、怒らせちゃったの」というごく端的たんてきな内容だけだった

そんな事もあってその日の晩御飯は、何とも言えない気まずさのようなものがあった

そんな晩御飯があった日の夜のこと……

マイスの家・離れ

マイスの家の裏手にある、昔、マイスが来客用に作った『離れ』。そこを今はリオネラが借りて使っているのだが……

そのリオネラは、『離れ』の中……角に置かれているベッドの上に座って、アラーニヤとホロホロを抱き抱えていた。ふたりを抱えているその右手には『古の修道院』で入手した『闇の結晶』が握られている

寝る準備をしているというわけでもなさそうなりオネラ。だが、その表情はやはりというべきか悲しそうに歪ませており、彼女と交友の深い人物……例えばロロナやマイス、フィリーあたりが見れば「あつ、泣き出す寸前だ」とわかってしまうことだろう

そんなリオネラのそばで、いつもよりも気まずそうな様子でホロホロとアラーニヤはリオネラに話しかけていた

「あー……悪かったつて。オレもミミがあんなふうになるとは思わなくつてよ。……それに、やつぱりこれまでのアイツの様子を見てたらそうなんじゃねーかとしか思えなくてだな」

「ちよつと！ 反省してすぐに何言ってるのよ！ あのくらいの子つて色々デリケートだから、そういうこと思っても言わないほうがいいのよ」

……謝るにしても微妙で、リオネラを慰める気があるのかもわからないふたりの会話だが、なんにせよ計画を考えたのはリオネラたちであり、内輪で誰が誰に謝ろうが結局はミミとの問題なので何の解決にもならないのだが……

そんな中、不意にノックの音がリオネラの耳に聞こえてきた。発信源は『離れ』の出入り口……その先には『マイスの家』の裏手と繋がっている簡易的な渡り廊下がある

「もうこんな夜だけど、マイスくんが心配して来たのかな？」……と思ったりオネラは特に疑問にも思わず立ち上がり、鍵をかけてあつた

出入り口の戸を開けに行った

「……こんばんは」

「えっ……？？ み、ミミちゃん!？」

そう、そこにいたのはマイルスではなく、ミミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラングだったのだ

リオネラにとつて、ミミの来訪は予想外だった。それも当然。『青の農村』に帰るまで……帰ってからまともに話もしてくれなかったし、完全に怒らせてしまったと思っていたから

そのミミがむこうから来て、自分の目の前にいる……リオネラはこの機会を逃さないようにと、さつきまで思っていた申し訳無い気持ちを言葉にして改めて謝罪をしようとしたが……残念なことに、リオネラはそこまで器用ではない……むしろ不器用な部類なので、言う事がいまいちまとまらなかった

「あつあの！ あの時、余計なことで、ほ、ホロホロも悪いと思つてて……!!」

「えっと、そのそんなに慌てなくても……それに、もうリオネラさんには謝つていただいてますから、これ以上謝られると……ちよつとどうしたらいいかわからなくなります」

「それに……」と、ミミは言葉が続けた

「私はその……お礼を、言いに来たというか……その……」

「お、おれい?」

ミミの言葉に何のことかわからず首をかしげるリオネラ。対して、ミミのほうはといえ、何やら煮え切らない様子で少し躊躇ためらうように言葉を詰まらせていた

だが、意を決したように一度大きく息を吸つたかと思うと、ミミは正面からリオネラを見た

「あなたたちに言われて、よくわからない気持ちになつて自分の中の気持ちもグチャグチャになつて……それで、改めて自分で考えてみた

んです。自分がマイルスさんのことをどう思ってるか……どうしてそう思うのか。おかげで色々気づくことができ、気持ちに整理もつきました……ありがとうございます」

「私、何もしてない気が」

そう言つて、よくわからなかった様子で未だに首をかしげているリオネラだったが、ふと何かを思いついたようで手に持っていた『闇の結晶』をミミにさし出した

「これ、あの時、渡し損ねたから良かったら……」

リオネラの言葉は、言葉足らず気味ではあったもののミミには伝わったようで……しかし、その上でミミは『闇の結晶』を受け取らずに首を振ってみせた

「私がしないといけないのは謝罪ですから、それは私が渡すべきではありません。リオネラさん、あなたがマイルスさんにプレゼントしてあげてください」

そう言う「では」と一言言い残して、ミミは『離れ』から出ていき『マイルスの家』のほうへと行つてしまった……

歩いて行くミミの後ろ姿を、『マイルスの家』の裏口の戸が閉まるまで見ていたリオネラだったが、少し考え込むような仕草をした後、『離れ』の出入り口の戸を閉めた

「えーっと、つまりどういうことだ？」

「わかんないわ。ただ、もう怒ってるって感じでは無かったわね」

「うん……けど、なんで謝罪なんだろう？」

そう、リオネラの中でひっかかっていたのはミミが言っていた「謝罪」という言葉だった

「だよな。相手がトトリだってんなら、フィリーから聞いたケンカのことですわわかるんだけど……なんでマイルスになんだ？」

「さあ……？　ワタシたちが言ったことでそういう風な内容は無かったです……惚れてるかいなかなんていうのはもつと関係無いだろうし……聞きに行つてみる？」

アラーニヤの問いかけにリオネラは数秒考え込んだが、静かに首を

振ってそれを否定した

「たぶんだけど……ミミちゃん、マイルスくんのところそのまま行ってると思うの。お話を邪魔したらいけないから、ね？」

「……そうね。今日はもう休みましょう」

「まあ、明日の朝にでも様子を見りゃいいか」

マイルスの家・作業場

鍛冶をするための『炉』、装飾品等の加工をするための『装飾台』、薬品を調合するための『薬学台』、そして『錬金術』を行うための『錬金釜』と、様々なものが配置されている『作業場』。そこにマイルスはいた。マイルスの寝室は『マイルスの家』の二階なのだが、今はミミに貸しているためリビングダイニングのソファで寝ている。

だが、今日はミミとリオネラのことから心配になって仕方なかったこともあって、妙に目がさえている。そのため、眠気がくるまで『作業場』で何かしらしようと考えていたのだ。

今現在、マイルスは『装飾台』で装飾品を作っているのだが……普段の彼の作業風景とは少々異なっていた。というのも……

「うーん……やっぱり、ふたりには仲直りしてほしいけど、僕じゃあどうしようもできないのかなあ？ 原因はリオネラさんのほうだったらしいけど詳しくは教えてくれなかったし……それに、なんとかしようにも、僕の話聞いてくれるかどうか……」

そう。マイルスは小声で心配事を呟きながら、目を瞑って首をひねったりしながら装飾品を作っていたのだ。それでも失敗をせずに『銀の腕輪』を作っていているのは彼のこれまでの経験の賜物たまものだろう。

「他に僕にできそうなことといったら、空気を和やわらげる……とか？ 美味しいものを食べると自然に笑顔になれるし、そこから会話はずが弾めば二人が話しやすくなって関係改善に……！」

「良い事思いついた！」といった様子で少し元気に呟きだしたマイルスだったが、不意に手を止めて……腕を組んだ

「でも、今日の夜ゴハンでもそんな様子は無かったし……もつと頑張らないとダメなのかな？ それとも、何か嫌いなものでも入れちゃったのかな？ 他には……ただ単純に美味しくなかった、とか？」

段々と不安になっていき、「あれ？もしかして、僕の料理の腕落ちてる？」と震えだしたマイルス

「そういえば最近、リオネラさんに「おいしい」って言われてない気が……ミミちゃんには小さい頃以降は一度も言われてない………もしかして、嫌々食べてるとか……!?!」

「心配しなくても、今日の料理も美味しかったですよ。それはもう真似まねできないくらい」

「そっか！良かったー！もしかしてリオネラさんが気をつかって、実は僕がリオネラさんに渡した自家製携帯食が美味しくなかったのが、二人の仲が悪くなった原因じゃないかなって考え始めてたんだけど……って、あれ？」

嬉しそうにそう言いだしたマイルスだったが、ついさつきまで自分ひとりだった事を思い出して、声が出たほうへと振り向いた

「こんな時間でも作業したりするんですね、マイルスさん」

「う、うん。なんとというか、こう……まだやる気が有り余ってる時なんかは時々夜でもやってるんだ」

そう、そこにいたのは、ミミだった

ミミのほうから話しかけてきたことに、久々過ぎて驚いたマイルスだったが、すぐにいつも通りの調子で返答してみせた

「それで、ミミちゃんは何か用があつて会いに来てくれたの？」

「はい。少しお話しをしたくて……大丈夫ですか？」

「もちろん大丈夫だよ！でも、ここじゃあなんだからあつちに行く？」

「いえ、ここがかまいません」

そう言うミミは、マイルスが使っていない『薬学台』のほうからイスを引っ張ってきて「お借りします」と一言言ってから座った

「それで、お話っていうのは……？」

「……マイスさんに、言いたいことがあったんです」

さつきまでマイスの顔をしっかりと見ていたミミだったが、ここに来てマイスから視線をそらした

マイスはその事が気になりつつも、「もしかしたら、また知らないうちにミミちゃんに悪い事しちやっただ!？」と、緊張し始めてしまっていてそこまであまり気がまわらずにいた

「謝りたいんです。マイスさんに初めて会った時のこと……それと、マイスさんを追い出すように別れたあの日の事を……」

「……え？」

「つ……覚えてません……か？　そう、ですよ。忘れてしまうほど嫌な思いをさせてしまって……」

そう言っとうつぶむいてしまうミミを見て、マイスは首と手を必死に横に振って、それを否定する

「いやいやいや！　憶えてる、憶えてるよ！　憶えてるけど……もしかして、そのことで僕が怒ってるって思ってたの？」

「それは……って、何で知ってるの……知っているんですか？」

そう言われて、マイスは「まずい！」と思った。というのも、マイスが金モコ状態の時に聞いた話から考えて言ったことで、本来ならマイスが知らないはずの内容で……

「……でも、マイスさんはモンスターという言葉がわかるから、あの子に「秘密にして」と言ったところで効果は薄いに決まっていますよね……」
……どうやら、ミミが勝手に自己完結したようで、マイスも騙したようで申し訳なく思いながらも、一安心して小さく息を吐いていた

そして、マイスは考えた。初めて会った時と最後に会った時……確かに、ミミから色々言われたりしたことは憶えてはいるが……なんというか、怒りたくなるようなことだったかと言われたら首をかしげってしまう

なので、マイルスは思ったままのことをミミに伝えることにした

「とにかく、僕はあの時のことは気にしてないよ。だから……」

「お医者様でも無理な病気を「治してください」って無理矢理頼んだ上に、出来ないって知ったら、その……泣きながら叩いたりヒドイこと言ったのに、ですか？」

「それは、まだミミちゃんも小さかったし仕方のないことだと思うよ？ それに……あの時は僕が最初からちゃんと断らなかつたのがいけなかつたんだから」

そう言うマイルスに対し、ミミはというと未だに納得してない様子だった

「何の理由も言わずに、叩き出すみたいいきなり絶対に家に来ないように言ったのは……」

「それは……確かに、ショックだったかな。でも、僕って前から知らないうちに人を怒らせちゃったりするから、ミミちゃんにも何か悪い事しちゃったんじゃないかなーって」

申し訳なさそうに言うマイルスを見て、ミミは再びマイルスから目をそらした。そして自分の唇をかみしめた後、ポツリ、ポツリと声をもらしていく……

「謝る必要なんて……マイルスは何も、悪い事なんて……してないから」

「でも、あのミミちゃんがそう言ったんだもの。何か理由があつてのことだろうし、僕は……」

「無いわよ！ そんな理由なんて！」

突然の大声。そして、その口調もさつきまでとは……マイルスが知っているミミの口調とは違うものになっていた

「……………」

しかし、マイルスはただただ優しい目で、うつむいたままのミミを見ていた

……もし、ミミが高笑いをしながら同じセリフを言ったとしたら、

マイルスは大変ショックを受けたことだろう

だが、マイルスには見えていた。うつむいているミミの顔のあたりからいくつかの雫が、ミミの膝の上に置かれている手のあたりに落ちていくのを……だから、マイルスはミミの言葉を聞き入っていた

「理由なんて……あれはただの意地っ張り、私の我儘で……マイルスのことが、邪魔になるからって……!」

「……我儘だって立派な理由だよ？ 子供は……ううん、大人だって自分の我儘を押し通したいことなんていくらでもある。だってそれが「自分がしたいこと」なんだから、それを諦めて押し留めてるなんてそんなの辛いばかりだよ……僕なんてよく我儘を押し通して村のみんなに迷惑かけてるから」

そこでマイルスは一旦息をつき、「それに……」と言葉を続ける

「僕はミミちゃんがやりたいことを、頑張りたいことを応援したいんだ。それでミミちゃんと会えなくなるのは……やっぱり寂しいけど、それでも僕は友達を応援するよ」

「……………っ!」

「だから、あの時の事は気にしないで。……それでも、どうしても気になるって言うなら、代わりにミミちゃんの言う我儘のこと、僕に相談してくれないかな？ 僕にできることなんて限られてるから力になれるかはわからないけど、友達の手助けをしてあげたい……それが僕の我儘だよ」

マイルスはそこまで言うのと、静かに立ち上がった。そして『装飾台』の脇に置いておいたポーチからハンカチを取り出した。そしてミミのそばまで行き、そのうつむいた顔に流れている涙を拭いて……

「自分で……できるから」

「そっか。じゃあ、これ使って」

ミミに言われて一旦手を引いたマイルスは、その手に持つハンカチをミミに手渡し、それから自分のイスへと戻っていく

ハンカチを受け取ったミミは、少し泣き顔を隠すように意識しながら

ら涙を拭きとっていつていた

……ひととおり拭い終わったミミは、まだ目元あたりなどが赤かったが、それ以外は普段通りになっていた

ハンカチはまだ手元に持ったままだったが、それはそのままに、ミミは口を開いた

「ごめんなさい。少し時間を取らせて……」

「いいよいいよ、気にしないで。僕としては、ミミちゃんとまたこうして話せてるだけで嬉しいから、全然気にならないよ」

「昔から、欲が有るのか無いのかわからなかったけど……あいかわらずよね」

そう苦笑いをしたミミ

だが、一つ息を吐いたかと思うと、その表情は真剣な……でも、どこか柔らかさのあるものになった。それを見て、マイルスもまた先程までの聞く姿勢に戻る

「……マイルス」

「……………」

「私、あなたのことが……………」

好き、でした」

「……………」

「でも、あなたは大きすぎた」

普段なら、マイルスが「僕、ミミちゃんほとんど身長変わらないんだけど……」などとツツコンでいただろうが、マイルスは静かにミミの事を見続けていた

「私だつてずっと頑張つてきた……けど、今でもあなたは大きすぎる。一緒にいた頃も、会わなくなつてからも……」

そう言うミミは、あたりのもの……『作業場』にあるマイスのある意味の仕事道具を一通り眺め……そして、最後にはやはりマイスに目をとめた

「優しくて、有名で、いろんなことに精通してて、信用があつて、老若男女関わらず慕われていて、尊敬されてて、それでいて驕らず、人の役に立ち、沢山の人を笑顔にする……私の……『貴族』の理想よ、『貴族』でないってこと以外は、これ以上ないくらいに、ね」

「……そう言われると、なんだかむず痒いかな」

そうつい漏らしてしまったマイスに、ミミは「私としては、胸を張つて欲しいところだけど……」と呟き、肩をすくめてみせていた

そして、ゆつくりと首を横に振つた後、また話しだした

「でも、だからこそ、マイスの凄さがわかつていくにつれて、私は小さい頃みたいに「好き」なだけじゃいられなくて……他にも妬みや僻み、色々混ざつてきているってわかつてきた。だからそばにいたくなかつた、優しいあなたに暗い感情を持つ自分が嫌で……でも、それを抑えても、そばにいたらずつと甘えてしまいそうで……そうしたら、私がシユバルツラング家に相応しくない存在になつてしまいそうで……」

「それが「我儘」……」

「ええ。嫌だからって理由だけで、それまでの恩……あなたが私とお母様にしてくれたことも、お母様が亡くなつてから私が当主になるためのあれこれを手伝ってくれたことも……そうまでしてくれるあなたの気持ちも、全部投げ捨てた。そんなことしても、本当の成長に繋がるわけがないのに」

「そんなこと無いと思うな。今までの話だけでも、ミミちゃんには立派な目標があるってわかるし……こうして今では一流の冒険者にまなつたんだから、無駄なんてことは絶対に無いよ！」

そう断言してにこやかに笑うマイルスを見て、ミミは自然と微笑んでしまっていた

「マイルスにそこまで言われると、余計なくらい自信がついちやうわよ。あと……色々言えて、やっとマイルスの顔をちゃんと見れるようになった気がするわ」

「それじゃあ、「はじめまして」なのかな？」

いつもの調子に戻ったマイルスがそんな冗談を言ったことで、ミミは少し呆れ気味ではあるものの、その冗談に乗ってみせた

「それはいき過ぎ……でも……そうね、新規一転つてことで名乗らせてもらおうかしら？」

ミミは一度軽く咳ばらいをし、今日一番の微笑みをマイルスに向けて言った……

「シュバルツラング家当主、ミミ・ウリエ・フォン・シュヴァルツラング。「シュバルツラング家」の名を、あなたの名にも負けない立派な名にしてみせます。そして……これからもよろしくお願いしますね、マイルス」

4年目：マイス「嬉しい気持ちは次へと繋ぐ」

冒険者ギルド前

アーランドの街。その名の通り、旧・『アーランド王国』、現・『アーランド共和国』の中心となっている街だ。ゆえに人口は最も多く、人や物が最も集まる場所でもある。

そんなアーランドの街だけど、今日、僕が歩いてきた道は人一人も見当たらないほどで、人によっては不気味に思えるほどとても静かだった

けど、別に何かがあったというわけでは無い。ただ単純に早かっただけ

季節的に一年の中でも特に日が長くなっているここ最近だけど、それでも僕が冒険者ギルドにたどり着いた時は日がやつと昇りだしたくらいで、朝と言うよりもまだ夜に近いと思えるくらい、今日は「朝が早かった」のだ

そんなに早くに街に来たのには、理由があるのだけど……それにしただって、僕でも「やつてしまった」と思うくらいに無駄に早く到着してしまっている。原因は、歩いて行けばちようどいい時間に着くぐらいに『青の農村』を出たのに、昨日の夜の出来事の影響で気分が高揚してて気付かないうちに足取りが軽くなって……結果、予定の半分以下の時間で村と街の間を移動してしまっていたのだ

おかげで……

「……うん。やっぱりまだ開いてないよね」

『冒険者ギルド』の営業時間よりも早くに着いてしまうということに……おそらくあと一時間強は時間があると思う

他所で時間を潰す……と言っても、今は早朝。当然だけど時間が潰せるような場所もないことだろう

これは、もう大人しく待っておくしかないのかもしれない。まあ、仕方ないか……

「……こんな朝早くに誰かと思つたら」
「ん？」

『冒険者ギルド』の扉にむかつた状態で立っていた僕に、誰かが声をかけてきたようだったので、そちらの方へと目を向けた

そこにいたのはクーデリアだった。何故か少し呆れたようにため息を吐きながら首を振った後、ポケットから何かを取り出しながらコツチに歩いてきた

「ほら、退きなさい。開けらん無いでしょーが」

そう言ったクーデリアの右手には『鍵』^{かぎ}が。どうやら、ポケットから取り出していたのは『鍵』のようだ

「……つて、この鍵^{かぎ}ってクーデリアが開けてるんだ」

「たまたまよ、いつもじゃないわ。……まっ、ここに勤めて結構経つからかなり色々と任されるようになってきたのも事実だけど」

そんな話をしているうちにガチャリという音が聞こえ、「ほら開いた」と小さく吐き捨てる様に言ったクーデリアが『冒険者ギルド』の出入り口の扉を開いた

「ん、こんなところにずっと立つてるわけにもいかないでしょ？
まだ時間外だけど、入んなさいよ」

冒険者ギルド

働いている人たちや冒険者、依頼主等々の人で少なからず賑やかさがある『冒険者ギルド』だけど、今入ってきた僕とクーデリアが今日初めて入った人^{ひと}ってことで、普段なら考えられないくらい静まっている

クーデリアはカウンターの向こう側まで移動し、定位置の冒険者免許の受付のほうへと移動し始めた。僕もそれに合わせて、その反対側に当たる……クーデリアの正面の位置へと歩いて行った

そして、互いにいつもの位置に着いたあたりで、「……っで？」とクーデリアが腕を組んで少しだけ首を傾けて僕に問いかけてきた
「こんな朝早くからどうしたのよ……まあ、なんとなく想像はついてるんだけど」

「そうなの？ ……というより、クーデリアこそ何かしないといけないことがあつて早く来たんじゃない？」

「ただの当番。それに、そこまで急いでやらないといけない仕事も無いわ」

「だから遠慮は必要ないわよ」と続けたクーデリアは、僕の顔をじーつと見てきた

その視線を。話の催促さいそくだと判断した僕は、とりあえず事情を話すことにした

「えーつと……実はこんなに早くには来る予定は無く、本当は『冒険者ギルド』のお仕事が始まるのに合わせて来ようと思つてただけ……色々あつて凄く早くに着いちゃつて」

「どうせ、ミミと仲直りできたーつて変に舞い上がつてスキップでもしてたんでしょ？」

クーデリアが言ったことを聞いて、僕は驚き目を見開いてしまう。何で知つてるんだ!?

「わかるわよ、顔に書いてあるんだもの。もっと簡潔に言うと、今日のアんたは笑顔が三割増しつて感じ」

「三割つて何とも微妙な……けどクーデリアの言った通り、昨日の夜、ミミちゃんとかちゃんと話せたんだ！ 凄く久々だったから本当にうれしくて……!」

「ふん。ま、一応「おめでとう」とだけは言っておくわ」

何故か一瞬だけ僕から目をそらしたクーデリアだったけど、すぐにまた僕の顔を見て、組んでいた腕の片手を自分のアゴのあたりに持っていていき、ほんの少しだけ首をかしげてきた

「……で、結局あんたを避けてた原因つて何だったのよ」

「それがね、ミミちゃん、僕が怒ってるんじゃないかって思ってたみたいで……」

「怒る？ あんたが？ そもそも怒ってるかもしれない相手に対して、悲鳴をあげて逃げたりするものなの？」

「クーデリアには話したことがあるけど、僕とミミちゃんが別れる時ってよくわからないまま僕が付き離された感じだったんだけど……その時とか、その前に言ったこととかを時間が経っていく中で自分を責めてたみたいで……まあそれも、ミミちゃんがひとりで思い込んでしまった感じがあるんだけど。それでドンドン僕と顔をあわせ辛くなっていたというか、どう接したらいいかわからなくなったらしくって……」

「……本当にそれだけ？」

疑わしいものを見る目で僕を見てくるクーデリア。そんな視線を受けながら、僕は他に何かあったかを思い出していく

「えっと、僕と距離をおいた理由になるんだけど……僕は大きすぎるんだって」

「……あんたとあの子って同じくらいの身長よね？ 何？ 遠回しにあたしに……」

「いや、そういう意味じゃなくって……自分で言うのはちよつと恥ずかしいけど、ミミちゃんにとつて僕は理想の貴族に近いのかなんとか……それで、近くにいたら甘えてしまつて自分がダメになつてしまひそう、って」

僕がそこまで言うと、さつきまでの視線は何処へ行つたのか、クーデリアは納得した様子で小さく頷きだした

「あーなるほど。お金にがめつい連中ならあんたに取入ろうつてするでしょうけど、貴族の名にこだわってるあの子なら……。あたしは詳しくは知らないけど、家名を広めるために冒険者にまなつたつて聞くし……そんな考えを持つようなやつからすれば、確かに大きすぎる目の上のたん瘤こぶでしょうね」

「……ミミちゃんが言つてたんだけど、僕つてそんなに有名なの？」

『青の農村』はもちろん『アーランドの街』でも知らない人はいない

わ。あとは、行商人とか商人を中心に『青の農村』って名前と商品と一緒に結構広く知れ渡ってると思うわよ。保存のきく加工品なんかはほとんどあんたが作ってるんでしょ？」

「ああ、そっか。野菜とかなら他の人の出回ったりするけど、加工品のほうは僕が作ってるからなあ」

「まあ、そのあたりがどう宣伝されてるかは、あんたのところのあの赤毛の行商人に聞けばわかるんじゃないかしら？」

赤毛の行商人というと……コオルのことか。確かに、外との交易とか難しい事は全部任せてるから聞けばわかるかも知れない。今度機会があつたら聞いてみるのもいいかもしれない

「……そういえば、この報告をするためだけに『冒険者ギルド』まで来たの？」

クーデリアにそう聞かれたが、僕は首を振って本来の目的のほうへと話の舵かじをきつた

「実は、どうしてもしておきたいことがあって……ちよつと無茶苦茶むちゃくちやなお願いなんだけど、クーデリアに頼めないかな？」

「んなこと言われても、内容によるわよ」

「で、なんなの？」と聞いてくるクーデリアに顔を近づけて、僕は少し抑えた声でお願いを試してみる

「話せるようになってやつと本当の意味でお手伝いができるから、リンクアップのための依頼を見繕みつくろってあげたいんだ……ミミちゃん名義で依頼を受注したいんだけど、どうにかできないかな？」

「……本当に無茶苦茶ね」

クーデリアはこれでもかと言うくらい大きなため息を吐いてきたけど、「しょうがないわね」と、冒険者免許の受付から、隣の依頼の受付へ移動し、僕を手招きして呼んだ

「今回は色々と事情があるからってことで特例。けど、わかっていると
思うけど、ちゃんとあの子にやらせないよ？ 間違っても、あんた

がやって、それをあの子の手柄にするのはダメよ。……ミスなら心配いらないうってあたしは信じてるけど」

「うん、その信用は絶対に裏切らない。そんなことしたら、クーデリアにもミミちゃんにも怒られちゃうし、絶対しないよ！」

クーデリアは僕の言葉に「そつ」とだけ短く返して、僕に依頼書の束を渡した……

ミスの家

僕が家に帰り着くと、リオネラさんが朝ゴハンを作ってくれていて、ミミちゃんとりオネラさんたちがお話をしていた

「どうやら、帰り着く少し前に作り終えていたらしく、僕を待っている間お話でもしよう……ということになっていたそうだ。昨日ふたり（とホロホロとアラニーヤ）が帰ってきた時はギスギスしてる気がしたけど、こつちも仲直りできたみたいで僕は一安心した」

そして、朝ゴハンとその片付けを終えてから、ミミちゃんに依頼を受けてきたことを話した

「少しごねられたものの、昨日の帰りの時に『冒険者ギルド』に寄って依頼を新しく受けられなかった事を指摘すると、少し申し訳なさそうにしながら「……ありがとう」と受け取ってくれた」

「それに、それを全部達成すればきつとランクアップできるくらいポイントが貯まると思うよ！」

「そうなの？」
「そう言いながら、僕が持つて来た依頼書の内容を確認していくミミちゃん」

「……と、その手が止まって、僕のほうに顔を向けて目を細めてきた

「……ミスの依頼が混ざってない？」

「そんなこと無いよ？」

「いや、だってこれ、というか後半からは全部………薬の調合依頼じゃない!？」

そう。依頼にはモンスターを討伐する『討伐依頼』の他に、採取地で採れる素材アイテムを納品する『調達依頼』、そして薬や爆弾等を調合する『調合依頼』が存在する。僕がとってきた依頼の大半がそのうちの『調合依頼』だったのだ

そして、ミミちゃんが驚いている………というか、ちよつと怒り気味な理由はもちろん………

「調合なんて、私はできないんだけど………どうするつもりなの!？」

調合というのは専門知識が欠かせないものなのだ。いきなり「やれ」と言われたところで出来るはずもない

「まさか、ミスがものを私が納品して……!?! 言っとくけど、私はそんなこと………」

「もちろんさせないよ。……とりあえず、話を聞いてくれるかな?」

僕がそう言うと、少し興奮気味だったミミちゃんも「………しかたないわね」と、なんとか感情を抑え込んでくれたようだった

「えっと、冒険者ランクを上げるための冒険者ポイントの中には、依頼の種類ごとの総達成数によって得られる項目があるんだよ。これまでに『討伐依頼』や『調達依頼』はミミちゃんも沢山達成して来たよね? だから………」

そこまで言っただけでわかったのだろう。ミミちゃんが僕の言おうとしたことを引き継いで言った

「これまでずっとやってきた二種類よりも『調合依頼』をした方がポイントは貯まりやすいってこと?」

「そう! 今の状況じゃあ間違いない、一番手っ取り早いよ」

僕はそう言って笑いかけるけど、当のミミちゃんはまだムスツとしていた

「………けど、結局私が調合出来ないと意味無いじゃない」

「大丈夫！ 僕が教えるから！ ……というわけで、ミミちゃんは『薬学』と『錬金術』、どっちで調べてみたい？」

「はっ……？」

「あっ！ 『薬学』っていうのは、街のお医者さんなんか薬を処方する時に作る方法とほぼ同じやつで……『錬金術』っていうのは、見たことあるかもしれないけど『錬金釜』でぐるぐるかき混ぜるやつだよ！」

「えっちよ、そうじゃ……ちよつと考えさせて」

何かブツブツを呟きながら、頭を抱えて悩みだしたミミちゃん。

……一体、何をそんなに悩まないといけないんだろう？

それに、時々「トトリ」って言ってる気が……やっぱ、今回の一件はトトリちゃんとのケンカが発端だったらしいし、そのあたりで何か考えないといけないことでもあるのかな？

「……決めたわ！」

「うん！ それで、どっちでやってみる？」

「私は……！」

|||||

その日、珍しく『青の農村』で爆発音が聞こえたという……

4年目：イクセル「賑やかな団体さん」

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。毎度おなじみ、アーランドの街にある『サンライズ食堂』を任されているコックだ。

日も沈み、街中の街灯が路地の石畳を照らす『アーランドの街』。そんな夕闇の街の一角にある『サンライズ食堂』は、煌々と灯りをともして賑わっている。

さて、今日もマイルスが『サンライズ食堂』に来ている。ここ最近忙しかったのか中々見かけなかったんだが、どうやら一段落したみたいだ。

ただ、それとは別に気になるところがあるんだが……。

「「「かんぱーいー」」」

そう声が上がったのは、マイルスがいるテーブルからだ。そのメンバーは……マイルス、ロロナ、クーデリア。そして、フィリー、リオネラ。普段よりも大人数なため、テーブルの上の料理は大皿のものが目立つ。

俺も知っている面々ではあるが……問題はその男女比だ。マイルスのヤツ、知り合いとはいえよく女子四人の中に一人で堂々といれるものだと思う。

それに、マイルスは女顔つつーか童顔だから、傍から見る分にはそこまで違和感はない……本人たちもそんなこと頭に無い様子で楽しそうにしている。それだけ仲が良いっていうわけだろうし、別に悪いわけじゃないんだが。

まあ、マイルスが女性と来ることなんてよくあることだし……そういえば、昔、『王国祭』の『武闘大会』があった時かなんかに、今と同じメンバーで「祝・ロロナ優勝」とか言ってマイルスがメシを奢ってたな

んてこともあったな。そう考えると、そこまで気にするようなことも無いのか？

そんな事を俺が考えているうちに、御一行はグラスに口をつけ喉を潤して息をついていた。

「つぶはー！ おいしいー！」

「ロロナ。あんたらしいと言えはらしいけど、ちよつと行儀が悪いわよ」

「えー、そう？ だっておいしいんだよ？」

「理由になつてないわよ、それ」

本当にうまそうに、そして豪快に勢い良く飲んでるロロナに、お小言を言うクーデリア。

「こうやって、このお店でご飯食べるのもひさしぶり。なんだか少し懐かしい……」

「えー、そう？ あつ……でも、それってリオネラちゃんが最近まで街に来なかつたからじゃないかな？ マイス君のところにいるつてことも中々知れなかつたし……」

「そ、そのことは……ゴメンね」

「ううん、いいよ。その……理由が理由だけに、私も気持ちには痛いほどわかるから……」

本人が言っている通り、『サンライズ食堂』に来るのは久々なリオネラ。そして、リオネラの言葉に何故か苦笑いをしながら頷いているファイリー。

この二人は、仲が良くてよっぽど気が合うのかなんなのか、俺が知っている普段の二人よりも数割増しで楽しそうに話している。……客観的に見て性格が似ている部分があるように思えるし、そういうところで意気投合しているのかもしれない。

……で、マイスはというと……

「はい、どーぞ！」

「あつ……マيسくん、ありがとう」

「フリーさんもっ！」

「ありがとー。いつものことだけど、マيس君が盛り付けると、キレイだよね」

そう。マイスは、テーブルの上に大皿で出ている『サラダ』を一人一人に小皿で取り分けていた。

マイスが世話焼きな部分が有る事は俺も知っているからそこまで違和感なんかは無いんだが……「いつものこと」って言ってるし、マイスはいつもやってているのだろうか？ いや、けど、『サンライズ食堂』で取り分けているのを見たことはほとんど無いんだが……別の機会、例えばマイスの家にお呼ばれでもされた時に、そういうことがあつたのかもしれない。

「確かに、マイスってこういうことに無駄に器用よね。売るための商品とかならともかく食べるために取り分けるんだから、そんな綺麗じゃなくてもいいじゃない」

「無駄っていうほどじゃないと思うけど……あつ、マイス君！ 私の分は多めでー！」

「うん、わかった！ 全部取り分けてしまったわけじゃないから、おかわりもできるよ」

そう言いながら取り分け終えたマイス。……よくは知らないが、最近はこういう雰囲気なことが多いんだろうか？

やっぱり、顔見知りということもあつてちよつと気になってしまったんだが……残念、とはいっても店的には嬉しい事に、新たな客が入ってきて注文もきたので、俺は仕事に集中することとなった……。

一通り注文をさばき終えて一段落したところで、再び例のテーブルのほうの様子をうかがい、その会話へと耳をかたむけてみることにし

た。

「へえー……話には聞いてたし受付に来たトトリちゃんとかミミちゃんにも会ったりしてたけど、やっぱりアトリエとミス君の家も大変だったんだね」

「そうだね。トトリちゃん、上の空^{うわ}って感じでよく調合失敗して爆発させて……なのに私、先生なのに何もしてあげられなくて……」

「こつちもこつちで色々あったよ。爆発も何回かあったし……。でも、リオネラさんが手伝ったり気をきかせてくれたりしたから、そこまででもなかったかな？」

「そ、そんなこと……！　むしろ、余計なこといっぱいしちゃって、迷惑かけて……！」

どうやら話題の中心はトトリとミミの二人らしい。トトリはもちろんのことだが、ミミって子のほうもトトリに連れられて『サンライズ食堂^チ』に来たこともあるから知らないわけじゃなかった。そして、話の内容はちよつと前からあっていた二人のケンカのことようだった。これについても、俺は大方知っている。……というのでも、アトリエから爆発音が昔のよう^{ひんぼん}に頻繁に聞こえて、心配になつてどうしたのか様子を見に行った時に、ロロナから「誰にも言わないであげてね」とコツソリ事情を教えて貰っていたからだ。

……で、今のテーブルの様子からすると、色々と苦労もあつたようだがどうやらケンカはどうにかなつたらしい。直接関わつたわけじゃない俺だったが、やはり心の何処かで一安心していた。

……と、俺はそんなことを考えていたんだが、テーブルのほうでは同じ会話を聞いていて何やら疑問をおぼえた人物がいたようだ。その人物……フィリーがグラスを両手で包み込むように持ったまま、首をかしげて疑問を口にした。

「あれっ？　アトリエのほうの爆発は『錬金術』で失敗したんだってわかるけど……ミス君のほうはなんで爆発したの？」

その言葉を聞いて、俺も「そういえば」と思った。そう、普通の家ではそうそう爆発なんて起きることは無い。……どうやら俺は、ロロナのアトリエが近所にあるからか、その辺りの感覚が変にズレてしまっているみたいだ。

疑問を投げかけられたマイルスはと言うと、一瞬だけ「えっ？」と何を言っているのか心底わからない、といった様子で首をかしげたが、すぐにどういふことを聞かれたかわかったようで、「ああっ、それは……」と言葉を続けた。

「こっちも『錬金術』の爆発だよ。ミミちゃんが依頼品の薬を作るために調査して、それで依頼分全部できるまでに結構な回数失敗しちゃって……。爆発も、最初は村の人もモンスタースーツもすごい驚いて慌てたりしてちよつとした騒ぎになったり」

「ミミちゃんが『錬金術』を!?!」

そう言っただけ驚いていたのは、フィリーとロロナだった。『青の農村』を拠点にしているリオネラは当然のように知っているようで驚いておらず、クーデリアのほうは「でしょうね」と呟いているのでどうやら想定内の範囲内だったようだ。

「うん。冒険者ポイント貯める目的で依頼を達成していくのに、薬の調合が手っ取り早いからってことで、僕が使える『薬学』か『錬金術』、そのどっちかを教えようってことで……。それで、ミミちゃんが『錬金術』がいい」って」

「た、たしかに、ミミちゃんが報告しにきた依頼の中に、お薬を納品する依頼があったけど……。アレってミミちゃんが調合したのだったんだ……。私、てつきりマイルス君が作ったものかと」

「ミミちゃんはそのう事嫌いだからね。それに、ミミちゃんのためにならないから、僕もそんな事しないよー」

『冒険者ギルド』で依頼の受付をしているフィリーには心当たりがあったようで、そのことをマイルスに言っていたが、それに対してマイルスは少し困ったように笑ってみせながら答えていた。

……と、そこに割り込むヤツが一人。他でもない、ロロナだ。

「え、ちよつ、ちよつと待ってー!? えつと、つまり……マイス君がミちちゃんの『錬金術』の先生ってこと!?」

「つまり何も、そのまんまじゃない」

クーデリアからのツッコミを意図的わざとにかはわからないがスルーしたロロナは、テーブルから乗り出すようにしてマイスのほうへと顔を寄せていく。

そして、わざとかはわかからないのだが、リオネラがロロナを焚きつけるようなことを言った。

「本当に先生と生徒みたいだったよ。一から丁寧に教えて、何回失敗してもマイス君が「何が悪かったか、一緒に考えようっ!」って言って……み、ミミちゃんも、休憩してる時なんかに文句言ったりもしてたけど、マイス君のお話はちゃんと聞いて一生懸命に調査してて……」

光景を思い出してなのか、それとも別の理由があるのか、微笑みながらそう言うリオネラ。

その言葉にそれぞれ反応をしているが、マイスが「ええ、そうかな?」と自己評価が上手くできてないこと以外は、ほぼ全員「へえ」と意外そうな……でもどこか納得したような様子でリオネラの話の話を聞いている。

「う、ううー!」

……が、ここで黙っていないのはロロナだった。その理由はといえ
ば……

「わたしもいろんな子に教えてきたのに……『錬金術』ができたのはトトリちゃん一人だけなのに、マイス君は……なんで〜っ!? やっぱり、わたしの教え方がヘタなんだー!!」

酒が入って酔払っているせいか、怒っているのか悲しんでいるのかわからないテンションでそう言うロロナ。

……どうやら、今日真っ先に酔い潰れるのはロロナのようだ。こういう気分的に悪い状態だと悪酔いしやすいことが多いからな。

「もう、泣くんじやないわよ。ほらっ、拭いてあげるから顔をあげなさい」

「うー……」

「そ、そうだよ？　もしかしたら、マイルくんが異様に教えるのが上手いってだけかもしれないし……」

クーデリアが、涙が溢れてきていたロロナを慰め、そこにリオネラがフォローを入れた。そして、そのままの流れでフィリーがマイルに問いかける。

「っ！　そうだ！　マイル君が人に教える時って、何か気をつけてることとか、コツとかあったりするの？　それがわかれば、ロロナちゃんに人に教える時に役立つかも！」

「えっ？　うーん……そうだなあ」

思いつかないのだろうか？

マイルは困ったように顔を歪めて、首をかしげだした……が、なんとかか思いついたのだろう。マイルは顔を上げて口を開いた。

「気をつけるとか、コツとかとは違うかもしれないけど……」

「二「しれないけど……？」」」

マイル以外の全員が、マイルの言葉を待ち……

「成功でも失敗でも、とりあえず回数をこなすこと……かな？」

「……それだけ？」

あつけにとられた様子で聞き返すロロナに、マイルはイイ笑顔で「うん！」と頷いている。

「農業でも料理でも鍛冶でも裁縫でも、難しくても簡単でも、とりあえず何回もやっていってればいつかは出来る様になるからね。教える時も同じかな？　とりあえず根気。技術とか何とか言ってるよりも根気が大切だと思う」

「……ランクアップって聞いて「この子ミミも頑張ったんだろうな」なんて思ったけど……なんというか、よく頑張れたわね、あの子」

クーデリアが行ったことはおそらく、聞き耳を立てていた俺も含め、マイルス以外の話を聞いていたヤツ全員の総意だっただろう。……ついさつき、「先生と生徒みたい」と言っていたリオネラでさえ、困ったように笑ってばかりだ。

「根気……わたし、頑張ってたつもりだったけど、まだまだ頑張りが足りなかったのかな……？」

「あつ、でも、今回はちよつと違うかも？ ミミちゃんが失敗しないようになったのって『錬金術』のコツを教えた後だったし……」

『錬金術』のコツ？ そんなのあつたの？

クーデリアがそう言いながらマイルスを……そしてその後、確認を取るようにロロナの方を見た。当のロロナはと言えば、思い当たる『コツ』が無かったのか、逆に思い当たるものが多すぎたのか首をひねって考え込み出している。

「えつと『作るものを使う相手の事を想いながら調合する』ってやつ。特に薬を作る時はやりやすいんだけど、今回は見ず知らずの依頼主が相手だから逆に難しくって……でも、調合素材を一個分余分に入れて「その一個分を、冒険の時に誰かに使うって考えてみて」って言ったら、ミミちゃん、ドンドン調合失敗せずに出来るようになったんだ」

それを聞いた俺は「それだけで、そんなに変わるものなのか？」と思ひ、テーブルにいるファイリーとリオネラも疑問に思っているようだったんだが……

似たような経験があるのか、ロロナは頷き……でも、どこか引つかかっているような様子で、首をかたむけたままだった。

そして……クーデリアのヤツは「あー……」と何か納得したように
笑みを浮かべていた。

4年目：トトリ「潮風が通る港」

アランヤ村・埠頭

私の故郷『アランヤ村』は、海に面した小さな漁村んだけど……その特徴とも言える港に私は来ていた。

とは言っても、漁に出ていない船が泊まっているような場所からは少しだけ離れた港の端っこのあたりで、漁船はほとんど泊まっていない。

村の中でもはずれのあたりに位置する埠頭なんだけど、普段は獲れ過ぎて余る『コヤシイワシ』のおこぼれを狙うネコさんくらいしかないんだけど……あつ、それと、わたしのお父さんが釣りをしていることも時々ある。お父さんが川から流れてきたコロナ先生を吊り上げたのも埠頭だったつけ？

そんな埠頭に来ているのには、ちゃんとした意味がある。

海の沖の方へと伸びる埠頭の先のあたり……こんな場所には似合わない木製のイスに座り、木製の机に向かっている一人の人。その人は歩いてきているわたしに気がついたみたいで、顔を上げ「よう」っていった感じに軽く手をあげてきた。

「お父さん。言われてた材料、もう一個持って来たよ」

「おおつ、思ったより早かったな。俺の予想じゃあ、あと一週間くらいかかると思ってたんだが……」

持ってきた船の素材をお父さんの前まで持ってくると、お父さんはイスから立ち上がってこっちに来て「どれどれ……」って素材の端から端まで注意深く観察しだした。

お父さんは少し前にちよつと変わった。厳密に言うとお母さんが海に出たってことをわたしが知ったことを話して……その後、お母さんが、お母さんの乗った船がどうなったかを聞いて、わたしが「わた

しにも船を造って」って頼んだ少し後……ぐらいたったと思う。

猫背気味だった背筋はしつかりと伸び、目もころなしか前よりもパツチリしている。言葉使いもちよつと荒々しいというか、男の人っぽい感じになって……あと、自分の事を「私」って言ってたのに「俺」って言うようになったりもした。

でも、もしかしたら変わったんじゃないかって戻ったんじゃないかって、わたしは思ってる。

だって最初はいきなりで驚いたけど、わたしは何故かあんまり違和感を感じなくて「お父さんだ」って冷静に認識できていたから。それに、おねえちゃんもお父さんの変化には何も言わなくて……あつ、でもそれはもしかしたら、わたしが船で出ていこうとすることに頭がいつぱいだっただけかも……？

……と、とにかく！ わたしがお母さんのことを憶えてなかったのと同じで、昔のお父さんのことも忘れちゃってただけなのかもしれないってこと！

集中してるお父さんの確認作業を邪魔するわけにもいかないから、わたしはなんとなくあたりを見わたした。

ふと目にとまったのは、机の上に置かれている船の設計図らしき用紙。ときおり吹く潮風に飛ばされないようにと重りで抑えられている設計図には船みたいなの他にも色々書き込まれてる。

たぶんこれに書いてある内容の中に、船を造る条件として言われた「持ってくる船の材料」とその詳しい大きさや作り方も書かれているはずなんだけど……見てみただけど何が書いてあるのかさっぱり。昔、『錬金術』のレシピを見た時、全然わからなかったのと同じで、船のことを勉強していったら何が書いてあるか理解できるようになるのかな？

「……おう、これなら申し分無いな。この調子で次の材料も持って来てくれ」

「うん！ ……それで、そろそろ組み立てていったりするの？」

わたしは何も浮かんでいないあたりの海面をキョロキョロと見渡しながら、お父さんに聞いてみる。

自分の用意した素材が船になっていくのは凄く興味があるから、できればこの目でちゃんと見てみたいんだけど……。

けど、お父さんは首を振った。

「いいや、本格的な組み立てはまだ後だ」

「ええ〜？　なんで？」

「お前には設計図通りに材料を教えているし、お前もそれに忠実に作ってきているってことは間違いないだろう。……だが、こういうパーツに別れたものとなると、どうしてもどこかに微妙なズレができちゃってしまったりするんだ。そして、大きな物ほど少しのズレが後々大きく響く……それが起きないように、計算し直したり微調整を加えるのが、今の俺の仕事なんだ」

「そうだったんだ……！　ここでただ座ってるだけじゃなくて、そんな大事なことでたなんて」

「うん……まあトトリとしては、褒めてるつもり……なのかな？」

「えっ？」

わたし、何か変なこと言ったかな？

でも、前に話した時「お母さんにも触らせなかった」って言ったし、船造りってそういう細かいところが大事なんだろうなあ……お母さんの場合、五月蠅うるさかったから手伝わせたみたら甲板や船底を壊したっていう、根本的な問題があったらしいけど……。

「前に話した……あつ、そうだ！」

わたしはあることを思い出して、お父さんに聞いてみることにした。

「お父さん！　この前の、お母さんとの結婚の話……！」

「こらっ、バカ!?　それは十年後って話だろ!?　ハイ、この話はお終い！」

「えー……」

お母さんが冒険者になった経緯とか、昔のお母さん話をしてくれる

んだけど、どうしてもこの話だけはお父さんはしたがない。わたしは凄く気になるんだけど……どうして教えてくれないんだろう？

わたしがちよつと頬を膨らませてみせると、お父さんは困ったように頭をかいた。

「勘弁してくれ……。他のことなら話すからさ、な？」

「そう言われても……うーん……？」

「あつ、そういえば、お母さんってマイスさんと仲が良かったっていろんな人から聞いたんだけど……どんな感じだったの？」

前々からちよつとだけ気になっていた内容ことなんだけど、誰に聞けばいいかよくわからなかったから聞けず、そういつたタイミングも無かったから、ずつと心の奥にしまっていた疑問。

そのわたしの疑問を聞いたお父さんは、不思議そうに小さく首をかしげてきた。

「どんな感じって……マイス君かれから聞いてないのかい？」

「何があつたーとか、何を話したーとか、出来事は色々教えてくれたんだけど……逆に言うときそういうことばかりで、どういう感じだったかとかは全然知らなくて」

「ああ、なるほど」

「マイスさんが話してる様子からして仲が良かったのは本当みたいだけど、周りの人は「よくわからない」とか「変わった二人組」って言うて、実際はどうだったのかなーって」

わたしがそう言うとき、お父さんは腕を組んで「うーん……」ってうなづいた。

「……まあ、確かに何とも言えない感じではあつたかな。とはいっても、二人が一緒にいるのを俺が見たのは、十年くらい前に彼が『アラシヤ村』こに来たあの時だけだから、俺が知ってるのもほとんどギゼラあから聞いた話かたよだけで偏かたよってる。……それでもいいか？」

「うんっ！ 教えて、教えて！」

「ギゼラが彼と会つたのは、さつき話したのと同時期……つまり、十年

前くらいなんだが……冒険の途中に街の近くまで行ったら面白い子に会った、つてというのがギゼラあいつが帰って来てから言ったことだ。あとは、メシが美味かったのだの……モンスターと暮らしていたとか信じられない話もされたな」

「へえー。でも、それつてそのままのマイスさんっぽい」

「だな。俺は実際に『青の農村』とか彼の家に行ったことは無いが、至つて事実を述べただけだと思う」

頷いていたお父さんだったが、顎に手を当てて「だがな」と続けた。

「問題と言うか、ちよいとわからないところがあるんだが……まあ、それは置いて、その後の事なんだが……」

「ええ……そんな言い方されると気になるんだけど」

「まあまあ、聞いてればおのずとわかってくるつて。つで、それから少し経つてから、彼とそのお友達が『アランヤ村』に来たんだが……はたから見ても二人は凄く仲が良かったな。二人で随分と話し込んだりとか基本一緒にいたし、ギゼラが「腹減つた」つて言ったら彼がここで獲れた魚を使った料理をすぐさま作つたり……どつちが客なのかわからなかったな、あれは」

そう聞いても、わたしは苦笑いをこぼすことしか出来なかった。

というのも、人の家に来て色々世話を焼いたりするマイスさんは嫌と言うほど想像するのが簡単だったから。……というか、アトリエに来た時も先生に変わつてお茶を用意したりするし……きつと、マイスさんはそういう性格なんだろうなあ……。

「……その後は、トトリたちと一緒に来るまで彼が『アランヤ村』に来ることはなかったな。けど、ギゼラとの付き合いはずつと続いていたみたいだったけどな」

「そうなの？」

「ああ。ギゼラあいつが冒険に出て言った時は毎回……下手すると行きと帰りに彼のところに立ち寄つてたみたいだからな。んで、その時の話を冒険譚ぼうけんたんの最後に話すのさ。メシの事とか、彼の近状とか……まあ、それで「農業を他人ひとに教えてる」とか「それが村になった」とか、そう

「いう話も知ったわけだ」

お父さんの話を聞けば聞くほどこれまで他の人たちから聞いた話と同じで、なんだか拍子抜けと言うか「やっぱりそうだったんだー」って感じで、特に驚きもしなかった。

「ということは、二人の関係ってみんなが言ってたようにただの仲良し……お友達ってことなのかな？」

「……あれ？ でも、お父さんは変なところがあるって言ってたようにな……？」

「あー……さつきあは言ったが、やっぱり直接あの様子を見たことが無いとわからないものかもな。なんつーか、仲が良過ぎるんだよ」

お父さんはそう言ったんだけど……わたしはつい首をかしげてしまふ。

「仲が良い、って。でも、ミスさんと仲が悪い人なんてほとんど見たことが無いし……それくらいが普通なんじゃないの？」

「いやまあ、ギゼラも彼もそんな人見知りをするようなヤツじゃないし、むしろ社交的だけどだな。でもなあ……『アラ^うンヤ^ち村』に来た時だって、これまでに一回しか会って無いはずなのに、まるで長年の付き合いがあるみたいに仲が良くてだな……」

「……嫉妬？」

「イヤ違う、断じて違うぞ？ 確かに、お土産として彼から貰った物を持って帰ってたりしてて、いっだったか、ギゼラが珍しく小洒落^{こじゃれ}たネックレスをつけてたことがあって「これ？ ミスのヤツがプレゼントしてくれたんだよ」とかおかしそうに笑ってた事もあった……だがない、相手はツエツイよりほんの少し年上なだけの子供だからそんな気にすることじゃ……」

そうこころなしに早口で言い放つお父さんだったが、ふと口を止めて首を振った。

突然のことでどうしたのかと思ったんだけど、わたしが何か言うよりも先に、お父さんはため息をついて再び口を開いた。

「それに、怪しい……というか、一番気になってる部分は明確にわかってるんだ」

「……？」

「初めて会った日のこと……ギゼラは「どんな話をした」とかそういうことは一度も話さなかったんだ。マイルがどんな感じの子だったとか、どういうところだったとか、メシはどんなのだったかは聞き飽きるほど聞いたたつてのにな。他の日だとどんな話をしたかは聞かなくても話してきたのに、初日の話だけは聞いてもいつもはぐらかされたな」

「ええ？　でも、なんでそんなに隠すのかな？」

「さあな。ただ、それがきつと仲が良過ぎることにつながってると思うんだが……」

「さっぱりだ」と肩をすくめるお父さん。……わたしも同じような気持ちかもしれない。

「……まあ、俺が話せるのはこのくらいかな？　参考になったかはわからないが……」

「うーん？　仲が良かったのは間違いないんだろうけど……でも、なんだかよくわからない感じもするし……？」

他の人たちが何を見たり聞いたりしたかは知らないけど、もしかしたら今の私みたいになんとかの違和感のような物を感じたのかも？　だから、二人の関係を「よくわからない」とか「変わってる」って言っただのかもしれない。

「他にあの二人のことで話せるようなことはあったかな？」

何か思い出そうとしているお父さんを見ながら、わたしも何か聞きたいことが無いか考えてみた。

二人のこと……お母さん……と……マイルさん……

「あつ」

「ん？　どうかしたか？」

「いや、でも……聞いても大丈夫かな？」

「聞きたくないってなら止めないが……まあ、こないだの結婚の話とか以外なら、答えるぜ？」

「えつと、じゃあ……」

いろんな意味で心配だけど……わたしは意を決して、お父さんに問いかけてみることにした。

「お父さんは、お母さんがマイスさんにしてた借金のことって知ってる？」

「……なに？」

「あつ、知らないんらしいんだけど……」

わたしがそう言つて早々に話を終わらせようとしたんだけど、お父さんが首を勢い良くブンブンと振つてそれを止めた。

「いやいや、よくないだろ。……で、何なんだそれは。あれか？　ギゼラがまた何かやらかしたのか？」

「また、つて……やらかしたというか、やらかした処理というか……橋とか遺跡とか、お母さんが壊したものを修復する費用とかを、マイスさんが肩代わりでずっと国に払つてたつていう」

そこまで言つたところで、お父さんの目つきがいつも以上に……船で海に出てお母さんを探しに行くつて言つたわたしに本気が聞いた時と同じかそれ以上に……真剣なものになっていることに気がついた。

「……いくらとか……額はわかるか？」

「……八桁はちけたくらい」

「……今から造る船、何隻せき……いや、何十隻分だろうな。はははははは……」

「気持ちは凄くわかるけど、怖いからそんな目で海を見つめて笑わないで……」

「んなこと言っても、そんな金額払わせといて何も無しってわけには
いかないだろ？ だからと言って何とかできるわけじゃないし……
笑いたくもなるさ……はあ」

大きなため息を吐いたお父さんに、わたしは改めて「大丈夫だよ」と
言ってみせる。

「お母さんがちゃんと理解してたかは微妙だけど、いちおうは話は
通ってたみたいだし……それに、直接マイスさんと話したんだけど、
「好きでやってる事だから気にしないで」って」

「いやいやいや。気にしないとかいり額じゃないだろ？ そんな金額
を放り投げて、いったいあの子はどういった生活してるんだ」

「えっと、お金が貯まる一方で困ってるみたい」

「……農業ってそんなに儲かるものなのか？」

「わたしもそう思って『青の農村』の人に聞いたんだけど、マイスさん
が異常なだけだって」

お父さんの顔はピシリと固まった……と思ったら、ゆっくりと柔ら
かい笑みを浮かべた。

「……トトリ。このことはツエツイに話したか？」

「ううん。……なんていうか、話したらダメな気がして……」

「だよなあ。ツエツイは良い子なんだが……その責任感が逆に仇にな
る。その場で倒れたり、胃に穴が開いたりしそうだ」

「うん……」

揃そろって「うんうん」と頷うなずくわたしとお父さん。

こうして、この話はわたしたちふたりの心の中にしまわれることと
なった……。

「……でも、本当にいいのか？」

「大丈夫だよ、マイスさん本人が言ってたわけだし。それに……マイ
スさんって何でもできる代わりに金銭感覚とか一般常識とか投げ捨
てちゃってる人だから」

???????

「ヘクシヨン……！」

「オイオイ、大丈夫かよ」

「風邪かしら？」

「マイスくん、だ、大丈夫？ 今日休んでたほうがいいんじゃない？」

「うーん？ そんな感じじゃないんだけど……」一応『カゼグスリ』飲んでおこうかな？」

4年目：マイス「ゆつくりのんびり、そして準備」

前にミミちゃんやクーデリアから聞いていた「マイスは有名」っていう話を、ついこのあいだふと思いで出して、そんなに名前が知れ渡るほどのものなのか、その辺りに着いて知って良そうなコオルに聞いてみた。

その時のコオルの反応はと言うと……

「えっ、今更かよ……」

呆れを通り越して、引いていた……気がするけど、気のせいであつてほしい。

コオル曰く、初めてウチに来る商人のうち一割が「たまたま立ち寄った」、もう一割が「街の近くだったから」、残りの八割が「マイスもしくは『青の農村』の噂を聞いて」という内訳らしい。中でも村長……つまりは僕にわざわざ挨拶しき来てくれるような人はほぼ僕の名前を知っている人たちだったらしい。

思い出してみると、最近はそれほどではないものの一時期は本当毎日のように、時には一日に何人も挨拶に来ていたことも確かにあつた。……アレって、有名だったからとか、そういう理由だったんだ……。

ただ、どうも僕の有名さは偏かたよっているらしく、直接的に関わりのある『アーランドの街』の人たちや商人たち以外にはよくて「名前は聞いたことがある」程度らしい。

だからと言って、他所から来た商人は詳しく知っているというわけではない。だって、挨拶に来た人たちの大半が僕に会って子供だと思ったり、信じなかつたりしていたから……きつと僕が出荷したものを手にした商人さんから話を聞いて「これは『青の農村』のマイスっていう村長さんが作ったのか！ とても凄い人に違いない！」くらいしか知らなかつたに違いない。

……でも、それってそんなに有名じゃないってことなんじゃ……？
そう思ったのだけど、コオルは「商人の情報網を舐めちやいけない
ぜ？」と不敵に笑ってくるだけだった。……つまりは「商品と名前だ
けが広がってる」というこのとなのかな？

……とりあえず、僕の噂に変な尾ひれがついていないことだけ祈る
ことにした。

ロウとティファの雑貨店

「……ということがあってー」

「あらあら。マイスくんらしいけど……でも、もつと自分に自信を
持つてもいいのよー？」

「あははっ、そう言われても実感がないもので……」

そんな先日の出来事を、いつも通りにカウンター越こしに僕と話して
いるのはティファナさん。昔から何かとお世話になっている人だ。

……まあ、ある状況に遭遇した場合、僕のほうが「お世話」という
か「対処」をしているのだけど……それを除けば、本当にお世話になっ
ている。

昔のように毎日ではないものの、僕は定期的に街へと行っている。

その理由は、僕のところから商品を卸おろしているお店や『冒険者ギルド』
といった施設の様子……それと、そこにいるみんなに会いに行く
ため。もちろん、他に外せない用事なんかがあった場合、行くことは
できないんだけど……それでも、定期的に街を散策している。

ティファナさんのお店も例外ではなく、ある時期からお店に置いて
もらうようになった調合品や加工品の補充・現状確認をしに行くんだ
けど……いつの間にか、こうした世間話などといった談話になって、
何かきっかけがあるまでついつい長居してしまうこともしばしばあ
る。

そして、今日もそんな日……というわけだ。色々確認を終えた後に、悠々と雑談を楽しんでいる。

「お店に置いてある商品の中でも、マイルスくんが卸してくれてる物は人気商品よー？ それ目当てで来るお客さんもいるわ」

「そうなんですか？」

「ええ。ほら、あそこにいる人たちもマイルスくんのところの商品をよく買って行ってくれてるのよ」

そう言つてティファアナさんが目をやったほうへ、僕もその視線を追った。その先には、商品が置かれている中でも店内の端のほう、そこにたむろつていた三人の男性……ティファアナさんのお店でよく見かける常連さんたちだった。

その常連さん三人は、ティファアナさんから急に視線を向けられたからか少し慌てた様子で壁際の棚の商品のほうを向き、わざとらしい咳せきばらいをしたりしていた。

まるで、何かしていたのを隠そうとしているような……つて、あの人たちが落ち着きが無いのはいつものことか。

店内にティファアナさんがいなくなったら三人で何かを話し合つて、ティファアナさんが奥から出てきたら出てきたでワイワイ嬉しそうにして、僕がティファアナさんと話してる時もこつちをチラチラ見ても何か言ってるし……あの人たちが静かなところはあんまり覚えがなかった。だから、今、なんだか変なものいつものことというだけかもしれない。

「でも、待てよ？」と僕は首をかしげる。

ティファアナさんは、あの人たちがウチから卸している商品を買つてるつて言つてたけど……卸している商品の中に、あの人たちが何度も買うようなものがあつただろうか？

「えっと、ティファアナさん？ あの人たちって具体的にはどんなものを買つて行くんですか？」

「マイルスくんが昔から卸してくれてるお花よ。誰かへのプレゼントか

何かじゃないかしら？ 後は、簡単な傷薬とか栄養ドリンクを時々……」

「お花はともかく、薬のほうは意外ですね。てっきり冒険者の人たちが買って行ってるのかと思ってました」

あの人たちは冒険者じゃなくて、街の中で仕事をしている人だと思っただけ……それだとモンスターなんかに襲われたりしないだろうから、傷薬なんて何度も買うほどいらなと思うんだけど……？

ティファアナさんも僕と同じ考えを持っていたようで、頬に片手を当てて頷いてきた。

「そうなのよー。もしかしたら、何か危ない事でもして怪我しちゃったんじゃないかって、私もちよつと心配なの。でも、聞くのも何だか悪い気もするし……」

「てい、ティファアナちゃんが私達の心配を……!?! 感無量だ!!」

「ああつ……! その慈悲深さがティファアナちゃんの美しさをより引き出してる!」

「でも、カミさんとのケンカで出来た怪我だから言い辛い……」

そんな常連さんたちの声が、僕の耳に辛うじて入ってきた。何とゆうか、いつも通りなようだ。

……でも、「かみ」さんって誰なんだろう？ 街って広いし人も多いから僕の知らない人がいて当然だんだけど……なんというか、このあたりでは聞かないような変わった名前な気がする。

僕とは違い、ティファアナさんには常連さんたちの声は聞こえていなかったようで「あつ、でもね」と、先程までの話からちよつとだけズレた内容の話を切りだしてきた。

「もちろん、冒険者の人たちもマイルスくんのお薬を買いに来てるわ。それにリピーターも多いのよ。きつと、どれもマイルスくんが安く卸してくれるから、うちでもお手ごろな値段で出せてお客さんも手が出しやすいからなんだと思うわ」

「あはは、このお店の売り上げの手助けが少しでもできているなら嬉

しいです！」

「うふふっ……やっぱりマイルズくんは謙虚^{けんきよ}ね。「少し」なんてものじゃなくて「たくさん」助かってるわ」

とつても優しい微笑みを浮かべたティファアナさんは、そう言いながら僕の頭を撫でてきた。

「あのー……僕ももうそんな子供じゃない、いい歳になってるんで、ちよつと……」

「あらあら……でも、もうちよつとだけ」

そんな綺麗な笑顔で言われると無理矢理振り払う気も削^そがれてしまい、もうなすがままにされるしかなかった。

「まただ!! また彼はティファアナちゃんに撫でられている!!」

「やっぱり撫でやすい身長がポイントなのか? くっそう! この平凡な身長が憎い!」

「身長を小さくする方法は……いや! 子供になる、若返る薬は無いのか!」

ひとしきりティファアナさんに撫でられ……撫でられ……なで

……。

……さ、さすがにそろそろ止めてもらいたいかなー?

そう思つて、改めてティファアナさんに声をかけようとしたんだけど……僕が声を出すより先に、来客を告げる店の扉に着いているベルの音がカランコロンと鳴った。

「あら、いらっしやい」

そう言いながらティファアナさんはゆつくりと撫でていた手を僕から離した。

ようやく解放された僕は、ちよつとだけ髪^{かみ}が乱れていないか気にし

て手で整えつつ、振り向くようにしてお店の入り口のほうへと目を向けた。

そこにいたのは……。

「あつ、ミミちゃん！　こんにちは！」

「えっ、あ、こんにちは……じゃなくて!？」

僕の挨拶に頭を軽く下げて応えようとしていたミミちゃんだったが、クワツツと目を見開きながら下げかけていた顔を上げて、声をはりあげてきた。

「何？　何してたのよ？　何か変なものを……いや、むしろ自然過ぎておかし過ぎるものを見た気がするんだけど……?？」

「何って言われても……」

「ただ撫でてただけよー？　ほら、こんな風に……」

そう言って再び僕の頭に手を乗せて撫でてくるティファナさん。さつきまでとの違いは、僕が入り口のほうを向いているために後ろから撫でる形になったことくらいだろう。

その様子を見たミミちゃんは、一瞬だけ固まった後、大きなため息を吐きながら肩を落とした。

「……貴方、あなた仮にもあの『青の農村』の村長なんだから、いい加減子供扱いされるのからは卒業しなさいよ……」

「あはははははっ。僕もそう思うんだけど、どうしようもないというか……それに、ティファナさんからは前からずつとされてるから、なんというかあらがえないというか……」

「もうっ……ミスって本当に良くも悪くも変わらないわね」

そう言っではまたため息を吐いて首を振った。……けど、ほんの少しだけ口元が笑っているような……でも、十中八九呆れて笑ってるんだろうなあ、あれは。

「それで、ミミちゃんは何か買い物に来たの?？」

何とも言えない空気をどうにかしたく、僕がそうミミちゃんに話を振ってみることにした。すると、ミミちゃんは「まあ、そんなところ

よ」と返してきた。

「ちよつと冒険に必要な物のストックを補充しに来たの。最低限の自分の分くらい自分で用意してなきや、やっていけないでしょ」

「なるほどね。……って、あれ？　もしかして、これからトトリちゃんたちと冒険なの？」

「そうなんじゃないかな？」と思って聞いてみたんだけど、どうやら僕の予想は外れたみたいで、ミミちゃんは首を振った。

「トトリは村に船の材料を届けに行ってるわ。「最後のー！」なんて言ってたし、じきに船も完成するだろうからってことで、その時のために準備してるってわけ」

「へえ！　半年も経ってないのに、もうそこまで！　トトリちゃんは凄いなあ」

「そうね。正直、私も驚いてるわ。でも、それは材料の調合素材集めをマイルスが手伝ったからってことも大きいと思うけど？」

「それを言ったら、ミミちゃんだって………ん？」

話の途中、ある違和感を感じたため、僕は口にかけていた言葉を途中で止めて振り返った。

振り返った先にいたのは、当然と言えば当然だけどティファアナさんだった。

ただ、さつきまでと違うのは、僕とミミちゃんをジーっと見つめ、何故か少しだけ眉をひそめて首をかしげていることだ。……何か気になることでもあったのかな？

「あの、どうかしましたか？」

僕が問いかけてみると、ティファアナさんは「うーん……ちよつと、ね」と首をかしげたまま返してくる。

「そのね、本当に大したことじゃないかもしれないんだけど……この前はマイルスくんのことを「マイルスさん」って呼んでた気がするんだけど、今日は「マイルス」って呼んでるなあって思って」

「んなっ!？」

ティファアナさんの言葉に、僕よりもミミちゃんが凄く反応した。

そしてティファアナさんはというと、そのままミミちゃんに問いかける様に言葉を続けてた。

「ほらあ。かなり前だけど、お薬の説明をした時に「これもマイルスさんが……」って言ってたじゃない？ でも今日は違うから……何かあったのかなーって」

「別にそういうわけじゃないわよ……！ あれは、その、呼び捨てなんて失礼で出来ないし、他人ひとに言う時だって……でも、この人があいかわらずマイルペースで変わらな過ぎてついこつちも昔みたいになるっていうか、染みついててつい素が出ちゃうっていうか……！」

……何故かミミちゃんがもの凄く早口なんだけど、一応は聞き取れたのでなんとか理解することができた。

思い返してみれば、ミミちゃんの僕の呼び方は一転二転している。

まず、出会ってすぐの頃は「マイルスさん」と呼んでいた。そして、僕が何度もシュヴァルツラング家を訪れていくうちにいつの間にか「マイルス」って呼ぶようになって。でも、会えなかった時期を超えて最近に会った際には最初の頃のように「マイルスさん」って呼んできて……で、本当にここ最近でまた「マイルス」って呼ばれるようになった。

ミミちゃんが考えていることが完全にわかるわけじゃないけど……この前の話とかと合わせて考えると、会えなかった時期にミミちゃんは色々考えて僕に「さん」を付けて呼ぶようにしたのかもしれない。

結局は昔みたいになつてまた「マイルス」って呼んでくれるようになったんだけどね。

最近では口調も随分と砕くだけてきて、昔のたどたどしい丁寧語で話すミミちゃんを知っている僕としては逆に違和感を覚える部分もあるけど、これが今のミミちゃんということだろう。

「って、私は本人マイルスの前で何言ってるのよ!? バカみたいじゃない!!」
そう言ったかと思うと、ミミちゃんは声にならない叫びをあげて、ついさつき入ってきた扉から店の外へと飛び出してしまった。

「……あら？　買い物に来たんじやなかったのかしら……？」

「あは、あはははは……」

……これは、今すぐ追いかけるべきなのか？　それとも、冒険に必要そうな道具を一式僕の方で用意して持って行ってあげるべきか？

つい苦笑いを浮かべてしまいがらも、僕はそんな事を考えた。

それにしても、もう船の材料は全て集まったのか。そうになると、僕も色々準備しなきゃいけないね……。

4年目：トトリ「完成！」

アランヤ村・トトリのアトリエ

「んー、ふわあ……」

朝日が昇ってきて、窓から差し込んできた光を感じながら、わたしは重いまぶたを開ける。

ソファア-の上で上体を起こし、両手を頭の上まであげて伸びをする。……そうすると、つい欠伸あくびも一緒に漏れてしまっていた。

「……ん。またここで寝ちゃった」

先生のアトリエにはベッドが無いからソファア-で寝させてもらってるんだけど、そつちでの生活が習慣として身に染みついてしまっているため、いつからか、自分こっの家ちでもソファア-で寝るようになってしまっていた。部屋にある大きなベッドはほとんど使う機会が無くて、ちむちやんたちを連れてきた時の遊び場兼寝床けんになっている。

……でも、ちむちやんたちと一緒に寝たい時には、わたしもベッドと一緒に寝転ぶんだけどね。逆に言うと、そんな時くらいにしか使わないかな？

それに、今回はちむちやんたちは連れてきていない。

その理由は、こつちにそんなに長く滞在する予定じやないとか、本格的な調査をする予定も無いとか、色々。そもそも、わたしがここにいる理由がそのまま一番大きな理由になるんだけど……。

ちむちやんがいらないのを残念がったのはおねえちゃんだった。おねえちゃん、ちむちやんたちのこと大好きなんだよね……ちむちやんたちを初めて連れてきた頃から凄く可愛がってたし、「トトリちゃんだけズルい！ 私もこの子たち欲しい！」って言うくらい好きみたいだったし。

そんなことを思い出しながら、まだちよつと眠くて閉じてしまいうなまぶたを擦りこすつつ、わたしはアトリエから移動した……。

ヘルモルト家

アトリエから隣の部屋に移動すると、そこには広いスペースにイスとテーブルが一式。その奥に見えるキッチンスペースには朝ごはんの用意をしているおねえちゃんの背中が見えた。

「おねえちゃん、おはよー……」

「あら。おはよう、トトリちゃん。もうすぐできるから、ちよつと待っててね」

「んー、わかったー……」

料理を作りながらこつちを振り返って言うおねえちゃんに返事をしつつ、わたしはテーブルそばにあるイスのうちの一つに座る。

先生のアトリエではごはんの用意とかも自分でするんだけど、うちに帰ってくるについついおねえちゃんに甘えてしまう。でも……ちよつとくらい良いよね？

「……あれ？」

イスに座って、料理を作ってるおねえちゃんの後ろ姿をボーっと眺めてたんだけど、ふとあることに気がついて首をかしげる。

お父さんがいない。見えないとか気づけないとかじゃなくて、いない。

といっても、船造りをしだしてからのお父さんの存在感は強過ぎるくらいだから、最近じゃあ見えなかったり気づけなかったりすることのほうが珍しくなってきたらだけ……。

けど、こんな朝の時間にこの部屋にいないなんてことはこれまでに無かったから、どうかしたのか気になってしまう。……まさかとは思うけど、寝坊なんてことは無いよね？

「おねえちゃん。お父さんは？」

「お父さんなら港よ。私起きた時にはもう家を出る準備してて「飯時には戻ってくる」って言って、行っちゃったわ」

「えっ？ そんな朝早くから？」

おねえちゃんが起きる時間っていつたら、お日様が登り始めるころだったはずだ。そんな時間からお父さんは出ていったのかな？

「そうなのよ。このあいだから「大詰めだー」なんて言ってる気満々だったし、船造りの続きがしたくてしたくてたまらなかつたんじやないかしら？」

「そ、そうなのかな？　なんだか子供みたいかも……」

「んー……そう、見えなくもないのかしら？　とにかく、もうそろそろ一旦戻ってくるころだと思っいったんわ」

おねえちゃんがそう言ったのをまるで見計らったかのように、玄関の扉がゆつくりと開いた。

「ふう、いい仕事してきたぜ。……おつ、トトリ、起きてたか」

「おはよう、お父さん」

「おかえりなさい。トトリちゃんはいさつき起きてきたところよ」

おねえちゃんの言葉にお父さんは「そうか」とにこやかに返事をしていた。

わたしはお父さんをジーツと見つめる。そうしていると、イスに座ったお父さんが気付いてくれたみたいで、ちよつと驚いたようにほんの少し目を見開いた。

「どうしたんだ、トトリ？　俺の顔なんかジツと見て……何か付いてるか？」

「ううん。そうじゃなくって……船、どれくらいできたのかなーって思っって」

そう、わたしが今回『アランヤ村』でゆつくりと滞在している最大の理由が、言われていた全ての素材を集め終えて本格的に始まった造船……その船の完成をいち早く知るためだったりするのだ。

だいたい完成予定日を聞いておいてその日に来るっていうのももちろん問題は無かつたんだけど、なんとなく出来たその時に『アランヤ村』にいたかつた……そんなちよつとした理由だ。

そんなわたしの気持ちを知ってか知らずか、お父さんはちよつとわたしの方に顔を近寄せつツニヤニヤしてきた。

「おつ、気になるか？ 気になるよなあ？」

「むう。気になるから聞いているのに……」

「悪い悪い。つい、気分が高揚しちゃまってな」

もったいぶるようにして一人で愉快そうに笑うお父さんにわたしは頬を膨らませ、ちよつとだけ睨みつけてみた……けど、あんまり効果は無かったみたいで、お父さんは変わった様子も無く笑ったまま。

「いやあ、実はな。今さつき完成したところだ」

「えっ……」

「本当は昨日のうちに完成させてしまいたかったんだが、思っていたよりも早く日が落ちてな。……で、今朝、最後の仕上げをしてきたつてわけだ」

「ええーっ！」

思わず大声をあげてしまった。別に、知らないうちに完成していたことにおどろいているとか、そういうことじゃ……全く無いわけじゃないけど、どちらかと言えばただ単純に船の完成が嬉しいってだけ。

「本当!? 本当に船、できたの!？」

「嘘なんて言うものか。なんなら今から見に行くか？ トトリが想像してるよりも立派で腰抜かすと思うぜ？」

「うん、行く！ ねえ！ 早く行こうよ！」

嬉しくて嬉しくて、ついつい跳び跳ねる様にしてイスから立ち上がってしまう。お父さんのほうももつたいぶろうとしていたくせにお父さんも見せたくて仕方ないのか、わたしと同じくらいの勢いでイスから立ち上がった。

けど……

「その前に、朝ごはんをちゃんと食べてからね？」

「はい」

おねえちゃんがテーブルにお皿を置く音と同時に、わたしとお父さんも再びイスに座った。

「そっか……できた、のね……」

「えっ？ おねえちゃん、何か言った？」

「……早く行きたいからって、よく噛んで食べないとダメよ、って。ね？」

「……？ うん、わかったー」

アランヤ村・埠頭
ふとろ

「わあ……!!」

朝ごはんを食べ終えてから、お父さんとそろって飛び出すように港へと向かったわたしだったけど、港に入るちよつと前くらいからいつもは見えない大きなマストが見え始めていて、より一層早足になって……ほとんど全速力くらいの速さでその船のそばまで行っていた。

「できたんだ……本当にできたんだ！ わたしの船！ お父さん、ありがとう!!」

「なに、トトリのがんばりのおかげさ。お前が文句のつけようの無い一流の素材を集めてきてくれたからできた船だ。同じくらいのもんを造れって言われても二度とできるかわからねえほどの出来さ。これ以上の船は無いってくらいにさ」

そう言っつて、わたしと並んで船を見つめるお父さん。

確かに、お父さんの言う通り……船の事がよくわからないわたしでも一目でわかるくらいに立派な船だ。そんな船にわたしが乗るなんて……!

「……つて、喜んでる場合じゃない!? お母さん! お母さんを探しに行つてあげないと!!」

「おいおい。まだ、船の動かし方も教えてないだろう? あと、航海に必要な物も用意できてるのか?」

「あつ……! お父さん! 早く教えてよー!」

「慌てるなつて。これだけ待たせたんだ、もう少しくらい待つてくれるさ」

そう言つてお父さんは、わたしの頭を撫でてきた。

「ほら、まずは荷物の準備だ。必要な物を教えておくから、それを揃えるぞ」

「わかつた!」

わたしは準備のために、来た道を駆け足ですぐさま引き返す。

駆け出してからすぐ、振り返つて未だに埠頭の船のそばにいるお父さんに向かって大声で呼びかける。

「お父さん、早くー!」

その声はちゃんと聞こえたみたいで、お父さんはこっちに手を振つてきた。それを確認してから、わたしはまた駆け出した。

「……頼んだぜ。俺が精魂込めて造つてやつたんだ。何があつてもトトリのこと守つてやつてくれよ」

アランヤ村・広場

「もうっ! お父さん、ちゃんと走つてきてるかなー?」

港から村に入つてすぐの広場まで来たところで、わたしは立ち止まつてもう一度振り返つた。

……お父さん、まだ見えてこないつてことは、ゆっくり歩いてきて

るんじやないかな？

「トトリちゃん！」

その声をかけられて、反射的にそつちを向いた。

……というか、この声って……

「先生！ ……あれ？ 街にいるはずなのに、どうしてこんなところに？」

「どうしてって、『トラベルゲート』で来たからだけど？」

「いや、そういうことじゃなくて……」

『トラベルゲート』は、一度行ったことのある場所に一瞬で移動できる便利な『錬金術』の道具だ。^{アイテム}ちよつと前にわたしも調査したからよく知っている。

……って、わたしが聞きたいのは「何かの用があつて『アランヤ村』に来たのか」って事なんだけど……。

「私がトトリちゃんに会いたかつたから！ ……あと、もうそろそろ船が完成する頃だろうからってことで、伝言を頼まれて来たの」

「伝言？」

「うん。「何か必要な物があつたらコツチで用意するから、遠慮しないで言いに来てね」って、マイス君から」

何日も航海することになるだろうから、お父さんも言っていたように出港する前に荷物をしっかりと用意をしておかないといけないだろう。そして、色々な物を買ひ揃えようとすると、必要なお金は結構な額になるはず……そう言う時に協力してくれる人がいるのは凄く助かる。けど……。

「ありがたい……ですけど、申し訳ないというか、これ以上はどうか……」

「アハハ……うん。トトリちゃんの気持ちもわかるよ」

前にお母さんの借金の件をそばで見えていたからか、コロナ先生は苦笑いをしながら頷いてくれた。

でも、何か他に思うことがあるみたいで、ロロナ先生は「うーん」とちよつと悩むような仕草をした後、私へ向いて言った。

「ねえ、トトリちゃん。マイルス君に食料とか荷物のことを頼る代わりに……ギゼラさんを探しに行くの、マイルス君も連れて行ってあげたらどうか？」

「えっ？　マイルスさんって強いですし、それはむしろお願いしたいくらいなんですけど……大丈夫なんでしょうか？」

わたしが気になるのは、お母さんを探しに行く冒険の期間の不透明な長さだ。ほぼ未開の、前人未踏と言つても過言じゃないような海の旅。安全性はもちろんだけど、海が何処まで続いているのか、本当に終点があるのかも不明な冒険になりかねない。

そんなこれまでの冒険以上に不安要素のある冒険につき合わせてしまつていいのか躊躇いがある。長期間、マイルスさんが『青の農村』を離れば、マイルスさん本人はもちろん村にも大きな損害が出ることは間違いないはず……。そこにわたしは不安はあった。

そうわたしは思ったんだけど、先生は首を振つてきた。

「ううん。マイルス君の事情はわたしもわからないけど……だけど、マイルス君はギゼラさんを探したいんだと思う。きつと、それをいろんな理由で我慢してる」

「どうしてそう思うんですか？」

「ついこの前、ステルクさんが言つてたの。マイルス君、何年か前から船に関する本を買いあさつてたつて。それがもしかしたらギゼラさんの行先を知つて、調べたり、勉強したりしてたんじやないかって……でも、船を造つてくれる人がいなかったのか、別の理由があつたからか、何かしたくても何もできなかったんじやないかな？」

そう言つた先生は「だから、ね」と続けて言つた。

「わたしが言うのはなんだかおかしいかもしれないけど、マイルス君の背中を押してあげたいんだ。きつとトトリちゃんやトトリちゃんのお姉さんとお父さんと同じくらい、マイルス君もギゼラさんのことが大好きで……心配してると思うから」

そう先生に言われて……うん。その前から、わたしの答えは決まっていた。

4年目：マイス 「出発！ ……その前に」

アランヤ村・埠頭

空も、海も青く澄み渡り、正に出港口びよりと言える今日。僕はトトリちゃんに連れられて、『アランヤ村』の港まで来ていた。

トトリちゃんに連れられて……というのはその言葉の通りで、今朝ついでさつき『青の農村』から『アランヤ村』まで連れてきてもらった。そうした理由は、主に準備と移動時間の点から『トラベルゲート』が便利だったということだ。

僕が『魔法』の中に似たようなものはあるにはあるんだけど……アレは微妙に調整できるとはいえ、基本は自分の家へとしか移動できないから『トラベルゲート』ほどは使い勝手が良いわけじゃないんだよね……。まあ、その気になれば「言った事の有る所であればどこでも移動できる」っていう『トラベルゲート』が凄すぎるってだけだろうけどね。

さて、それはともかく……。

「グイードさーん！」

「ん？ ああ、来たか」

埠頭の先のほうで海に浮かんだ大型の船を眺めていたグイードさんに、歩きながら手を振って声をかけてみる。すると、グイードさんはこっちに気付いてくれたようで、こっちに顔を向けた後、軽く手をあげて返事をしてくれた。

『青の農村』で色々あつて……出港予定日ギリギリまで遅くなつてすみません」

「いやいや、謝る必要なんてないさ。こっちもこっちで準備があつたし……そもそも、その準備がスムーズにいったのは、キミの協力があつたからだよ」

「あはははっ、そう言ってもらえると助かります」

そんなふうには話しているうちに、僕と一緒に来たはずなのに何故か遅れて歩いてきていたトトリちゃんが僕の隣まで来た。

トトリちゃんは一つ息をついたかと思うと、グイードさんのほうを見て口を開いた。

「お父さん。出発の準備できた？」

「大方な。あとは最終確認なんだが……船の持ち主のお前が把握できないとマズイだろ？ 今から一緒にやるぞ」

「うん、わかったー」

グイードさんの言葉に頷き応えるトトリちゃん。

それにしても最終確認か……。きっと確認するべきことが沢山あるだろうから、僕も手伝ったほうがいいんじゃないかな？

そう思っただけ……そんなことを考えていたのを察したのか、ただの偶然か、トトリちゃんがこつちを向いた。

「マイスさんは、ゲラルドさんのお店に行ってください。他の人たちもみんな集まってるはずですから」

「えっ？ うん。わかったよ」

僕は言われるがまま頷き、グイードさんに一礼してから港を村の中心のほうへと戻っていった。

「……で、なんで少し元気が無くなってるんだ？」

「あっ……わかる？ ……って言っても、もう慣れてきたっていうか、あきらめたんだけど……『青の農村』でちよつとその、村の人が何人かマイスさんをお見送りしてくれた時に色々あつて」

「彼をみんなが引き留めたとかか？」

「ううん。問題だったのはマイスさんのほうで……開いた口が塞がらなかったっていうか……」

「……彼も彼で、あいかわらずってことか」

バー・ゲラルド

そういえば、僕以外は誰が一緒に行くんだろう？

先日、コロナに頼んでおいた伝言を聞いたというトトリちゃんがウチに来て、必要な物資の準備の協力をお願いされた後、「一緒に来てくれませんか……？」と冒険のお誘いを受けた。

もちろん僕はそのお誘いに乗ったんだけど、その後は自分の家や畑のこと、村の運営のこと、ウチの離れに泊まっているリオネラさんのこと等々、いろんなことをなんとかしないといけなかった。そのため、他に誰がくるのかとかそんなことを聞いているヒマが無かった。だから、今回の冒険のメンバーは知らないのだ。

……まあ、トトリちゃんの知り合いの誰かのはずだから、僕が全く知らない人ってことはたぶん無いはずだから……うん、きつと問題は無いはずだ。

そんなことを考えながら、僕は扉を開け『バー・ゲラルド』へと入った。すると、そこには………

「おつ、やっと来た！ 遅いぞ、マイスー！ オレ、待ちくたびれたぜー」

酒場の中心あたりに置かれているテーブルのそばのイスで、僕を見て飛び上がるようにして立ち上がったのは、これからの冒険への期待に胸を踊おどらせて、待ちきれない様子のジーノくん。

「トトリが「来る」とは言ってたけど、本当に来たのね。……まあ、だから何ってわけじゃないけど」

ジーノくんと同じテーブルのイスに腰かけていたのはミミちゃん。なんとも言えないことを言っているけど、振り向くような形でこつちを向いているその顔は心なしか微笑んでいるようにも見える……

気が一瞬だけした。

「今回はよろしくねー。……そういえば、手合せとかはしたけど、一緒に冒険に行くのは何氣なにげに初めてね」

カウンターのそばにいて、こつちに向きなおってニカリと笑いながら手を振ってきたのはメルヴィア。カウンターそばにいた理由は、おそらくカウンターの向こうにいるトトリちゃんのお姉さん・ツエツイさんと話をしていたからだろう。

「いやあく、キミと一緒に来てくれるとは。こと戦闘に関しては心強い限りだから大歓迎だよ！ うん、あのお嬢さんの人選は間違い無いね」

ジーノくんやミミちゃんがいるテーブルのそばに立って、長めのモジャっとした髪を揺らしながら一人でうなず頷いているのは、「異能の天才科学者、マーク・マクブライン」ことマークさん。

僕は他に誰かいないかも一度だけ確認してみたけど……他に冒険者らしき人はいそうになかった。

どうやら、この四人と僕が、今回のトトリちゃんのお供ともというわけなようだ。とりあえず、ある程度は知っている人たちだったから一安心だ。

ジーノくんは、一緒に冒険に行った回数は少ないものの、『青の農村ち』のお祭りに来てくれたりと、直接ではないものの度々会っている。

ミミちゃんとは、色々あつてつい最近まで会うことも話すことも無かったけど、先日のあの出来事以降は昔みたい……ってほどじゃないけど、仲良くさせてもらってる。

メルヴィアは、さっき本人が言った通り、今まであまり直接的な付き合いは無い。けど、この前僕が『アランヤ村こ』に来た時なんかには沢山話したりしたし、別に嫌ったり嫌われてたりするわけじゃなくただ単に「機会が無い」って感じかな？ ……でも、思い返してみると

一度も『青の農村』に来てくれたことは無いかも……何か理由があったりするのかな？

マークさんは……機械の部品を作るのを依頼されたり「農業用ロボット」なんてものを見せに来たりと、付き合い自体はそこそ長いんだけど、特別仲が良かったりはしない。僕としては仲良くしたいんだけど……なんていうか、マークさんのほうが一步引いているというか……こっちも、何か理由があるのかな？

まあとにかく、よほどのことが無い限り、気まずい空気になったりはしないだろう。

……とは言っても、他の人たち同士の中の良いところは知らないから、不安要素が無いとは言えないけど。

「それにしても……なんだか普段の冒険よりも人数が多い気がするけど、やっぱり冒険の難しさを考えてってことなのかな？」

そう、普段は大体三人程度での冒険が基本だったはずだ。いちおうこれまでも例外的に多い人数で冒険したことはあるけど……

僕の疑問に答えたのはマークさんだった。

「そういった理由もあるだろうね。あとは、人数が少ないと戦闘中に船の安定とか進路をとったりできなくなつて、色々面倒なことになりそうだからじゃないかな？」

そう言われて「なるほど」と頷きかける……が、その前にマークさんが言葉を続けた。

「まっ、とは言つても、僕は飛び入り参加なんだけどね」

「えっ、そうなんですか!？」

驚いた僕は、他の人たち……ジーンくんやミミちゃん、メルヴィアのほうを見た。

「え、そうだったのか?」

「そうだったのよ。トトリも驚いてたし、人数が増えて積荷の量を増やさないといけなくなつて、準備の時間と手間が余計にかかったり……」

「まっ、積荷に関しては、どこかの誰かさんが元々余分に用意してくれ

てたらしいから、買い足したりしなくても大丈夫だったんだけどね？」

「どこかの誰かさん」って……あつ、僕のことか。

余ったのはトトリちゃんが『調合』の素材にでも使ってくれればいいや、つてオマケつてことで多めに用意してあげてただけど……まさか、そんなふうに役に立つとは思ひもしなかったなあ……。

「けど、なんでマークさんはいきなり参加しようって思ったんですか？」

「お嬢さんの手伝いをしたいっていうのが半分。あとは、自分のため……好奇心からかな？ ほら、海の向こうってほとんど未踏の地じゃないか。もしかするとまだ手付かずの遺跡があつて、そこに機械やら僕の研究意欲をくすぐるものもあるかもしれない！ ……そう思ってたってわけだよ」

聞いてみれば、なるほど、確かにその通りかもしれない。それに、実際にマークさんらしいというか……。

と、不意にマークさんが首をかしげ、眉をひそめた。

「というか、僕からすればキミが本当に来たことに驚きだよ。仮にもあの村の村長なんだし、農業なんてやってるから厳しいんじゃないかなって思ってたんだけど？」

そんなマークさんの言葉に同意を示したのはメルヴィアだった。メルヴィアは「あー、たしかに」と頷いた後、僕に問いかけてきた。「食べ物の出荷数も減りそうだし、毎月お祭りもやってるらしいじゃない？ そういうのは大丈夫なの？ 今回は普通の冒険よりも長くなると思うんだけど……？」

「大丈夫ですよ！ もしものことも考えて、コオル……村の人に家の保管庫の鍵を預けてますから作物関係は心配いりません。お祭りとか、それ以外のことも前々から準備だけはしてましたから！」

「前々から？」

「トトリちゃんからお誘いを受ける前からです。……実のところ、誘

われなくても追いかけてでも付いて行くつもりだったので」

僕がそう言うと、ジーノくんが「マイルも飛び入り参加する気だったんじゃない」と笑い、ミミちゃんが「なんだかんだ言って、ギゼラさんのことが心配なのね」とギリギリ聞き取れるくらいの小声で呟いていた。

……と、まあ周りのみんなは大抵、僕の言ったことにそんな反応を示したんだけど……その中で一人、マークさんだけが眉をひそめ首をかしげて、僕の顔をジーッと見つめていた。

「……？　どうかしましたか？」

「どうかしたというかなだね。ちよつと嫌な予感がするから、聞きたく無いような気もするけど……」。 「追いかけてでも付いて行く」って、キミは自分の船でも持っているのかい？」

マークさんが口にした疑問を聞いた僕は、素直に首を振る。船なんて、大きいのも小さいのも、持っているどころか記憶にある限りでは一度も乗ったことは無い。

……だからと言って、もしもトトリちゃんが出港していたとしても追いかける術すべが無いってわけでもない。

「船は持ってませんが、似た用途ようどの一人乗りの『ハスライダー』っていう葉っぱがありますから、追いかけることはできますよ。あと、その気になれば海面を走れますから」

「「「「「……はっ？」「「「「「」

間の抜けた声を出したのは、マークさんとジーノくん、それとメルヴィア。あと、話を聞いていたのだろう、カウンターの向こうにいるツェツイさんとゲラルドさん……ついでに、名前も知らないお客さん三人。……でも、一体どうしたというんだろうか？

少し気になりはしたけど、話を途中でやめるのもどうかと思ったので、そのまま話を続けることにした。

「ただ、大型の船とは違って波に弱いことと、帆ほといった動力は当然無いから移動自体は自力で自分の体力との勝負だから、一日で移動できる距離が短いっていう欠点があるんです。だから、それだけで旅す

るっていうのは無理があるので……本当に追いかけられるくらいしか出来ないんですけどね」

そう言って自嘲気味に笑ってみせる。……………が。

「いやいやいや!? 何言ってるのよ、マイルス。冗談言うならもう少しちゃんと考えたの言ったら……?」

首と手を振って何故か否定してきたのはメルヴィアだった。

僕としては冗談なんて一言も言っていないんだけど……どうやらメルヴィア以外の人も大体同じ意見らしく、頷いている人もちらほらいた。

……でも、本当に本当なだけだなあ。

どう言ったらいいものかと頭を悩ませてみる……けど、その答えが出るよりも先にミミちゃんの声が聞こえてきた。

「……気持ちはわかりますけど、マイルスが言っている内容は事実ですよ、メルヴィアさん。私、前に『青の農村』で実際に見たことがあります」

「えっ、ウソ!? ホントだったの!?!」

「んじゃあ、本当に海の上を走れるのかっ?! すっげー!」

……いや、冗談じゃないってことはわかってくれたみたいだったけど、何でメルヴィアもジーノくんも、僕が言った時には信じてくれなかったのかな……?」

「そういう、感覚がズレてて常識が通じないところがあるから、好きになれないんだよねえ……」

他の声に埋もれた小声の呟きだったけど、マークさんの声がかろうじて僕の耳にはいつてきていた。

『アーランド』で暮らすようになってから結構経って、自分では馴染んだつもりだったんだけど、まだどこか変なところがあったのかな? ……ああ。なんだか自覚ができていないだけに、かなり悲しくなってきた……。

「ごめんなさい、お待たせしましたっ！ 今から出発しようと思う、ん
……です、けど………ミミちゃん。何があつたの、この空気？」

「ん、いやね。マイルスがちよつとトンデモないこと言っただけよ」

「なんだ。いつものことか」

4年目：トトリ「船上の日常」

ついに完成した……お父さんが造ってくれた船。それは、普段『アランヤ村』の港を出入りしている船とは比べ物にならないもので、初めて見るくらい大きくて立派な船。

そして、その船でお母さんを探しに出発するその日。

荷物を積み込み、一緒に来てくれるみんなと船に乗り込む私たちを見送りに来たのは、おねえちゃんやお父さん、ゲラルドさんにパメラさん、ペーターさんといった村の人たちだった。

わたしがお父さんに「船を造ってほしい」と言った時にずっと反対しておねえちゃん。結局は船を造ることを許してはくれたけど……やっぱり、お母さんみたいに帰ってこなくなるんじゃないかって心配してるみたいで、それが顔にとつても出てた。そんなおねえちゃん心配が杞憂きゆうに終わるように、わたしがしつかりしないと！

……だから、「ハンカチ持った？」とか、そんな細かいところまで心配しなくても……

海・船の上

そんなふうには、村のみんなに見送られて『アランヤ村』を出発したのが十数日前。出発する時にお父さんが教えてくれた「ギゼラお母さんは東へ行くと言っていた」という言葉から、わたしたちも船の進路をそちらへ向け……今は数個の小島に立ち寄りから数日間海を進んだところ。

そして今現在、甲板から見えるあたり一面は、見渡す限りの大海原。海のすぐそばの『アランヤ村』で生まれ育ったわたしだけ、この空と海に挟はさまれた青一色の景色はもの凄く新鮮なものに感じられている。

「……お母さんも、これと同じ景色を見てたのかなあ」

村や街、その周りの街道といった場所では、建物や道が新しくでき

たりと、時代が変われば景色も少しは変わったりするだろう。

けど、海や空は変わりようが無いはず。なら、何年か前にお母さんもここで同じ景色を見ていたとしても、何もおかしくはない……と思う。

「なにボーっとしてるのよ」

不意にかけられた声に振り向くと、そこにいたのはミミちゃんだった。最初は、初めての船に乗った感覚に慣れなくて時々ふらついたりしてたけど、今ではそんなことは無さそうで、いつも通りのミミちゃんだった。

わたしはミミちゃんの方へ向き直りながら、さっきまで考えていたことを大まかに説明してみる。

「えつとね。天気が良くて波も穏やかだったから、なんだか気が抜けちゃってて……それで、お母さんもこうやって海見たのかなーなんて思ってたの」

「なるほどね。……まあ、変にずっと気を張ってるよりはいいんじゃないかしら？」

そう言ったミミちゃんは、わたしの隣あたりまで来て、並ぶように立って水平線を見た。

船の帆に吹き付けるのと同じ海風がミミちゃんのサイドテールに結んでいる黒くて長い綺麗な髪を揺らし、その髪の流れが、わたしからはミミちゃんの横顔越しに見え隠れしながら揺れているのが見えた。

「……ん、何よ？ 私の顔に何か付いてる？」

「う、ううん！ そうじゃなくって、えつと、マークさんは大丈夫かなーって思ってた！」

ミミちゃんにそう、なんとなく別の話題を振った。ここでマークさんを選んだのには色々理由がある。

まず、この船の進路確認・舵番かじばんについては交代でしているんだけど、今の時間は男の子チームが担当。わたしたち女の子チームは散策したり、甲板でのんびりしたり、お昼寝をしたりと各々休憩おのほのをしている。

……でも、もうお昼が近いから、今ミスさんは船内の一室でゴハンの用意をしている。つまり、残っているのはジーノくんとマークさん……なんだけど、ジーノくんは方位磁石と地図コンパスとにらめっこしながら一か所でジツとしておくんて出来ない。だから、頼りなのはマークさん、つてことなのだ。

……けど、マークさんはマークさんで悪い人じゃないんだけど、ミスさんとは別方向に感覚がズレているというか、何を考えているのかわからなかったり、何をするか予想できなかつたりと、ちよつとだけ不安だつたりする。

だから少し気になるんだけど……。

そんなことを考えてるわたしの前で、ミミちゃんは肩をすくめて「大丈夫も何も、ダメだつたら私たちはこんなところでノンビリできてないわよ。一応さつき確認してきたけど、ちゃんと進路をとれてるみたい。……どうしても心配だつて言うなら、今から一緒に見に行く？」

「ううん、大丈夫。ちよつと気になつたつてだけで、そんなには心配してなかつたから」

「……まあ、あえて心配するとすれば、こんな海の上でいきなり船をイジツたりしださないかつてことくらいかしらね」

「あはははは……ありえないつて否定しきれないのが怖いよね」

ミミちゃんの言つたことに、わたしはただただ苦笑いをこぼすことしかできなかつた。

というのも、元々「未踏の遺跡があるかもしれないから」なんて理由で飛び入りに近い形で今回の冒険に参加してきたマークさんだけでなく、船に乗り出発してからというもの「ほーう……ほうほう」なんてふうにに眩きながら興味深そうに船のあちこちを見てまわつていた。そして、ひとしきり見てまわつた後、「いやあ、この船は素晴らしい！ 帰つたら是非ぜひともこの船を造つたというキミのお父さんとじっくり話してみたいよ！」と楽しそうに言つてきたのだ。

……そして、それ以降もマークさんは船を見てまわつて、時折ときおりノー

トに何かを書いたりしていた。たぶん、何か閃いたんだと思う……けど、聞いてみても「今はまだ構想途中だ。人に見せられるような代物じゃないよ」って、なんにも教えてくれない。

前に、『アランヤ村』に来たマークさんが、馬車の車輪の運動効率が悪いとか何とか言って改造したことがあつただけど……今回もそういう方向で思いついたのかな？ でも、あの時改造された馬車って色んな意味で凄くなつて、初めて乗った御者のペーターさんが大変なことになつちやつたんだよね……。

今回は馬車の時とは違って大切な冒険の途中だから、いますぐ何か変に改造されて大変な目に遭うのはやめてほしい。

……こんな海のご真ん中、改造するための素材なんて無いわけだし、きつと大丈夫……だよね？

そんなふうには海を眺めながらミミちゃんと話していると、船の中から誰かが出てきた。

それは、ゴハンの用意をしていたミスさん……ではなく、メルお姉ちゃんだった。

ひとつ大きな欠伸あくびをしながら出てきたメルお姉ちゃんは、そのまだ少し眠たそうな目でわたしたちをみつけたようで、ゆつくりとした足取りでこつちへ向かってきた。

「おはよう、メルお姉ちゃん。よく眠れた？」

「おはよートトリ。うーん……微妙なところかなあ」

右手で軽く口元を隠しながらまた欠伸をしたメルお姉ちゃん。やっぱりまだ眠いんだろう。

「寝ないで一晩過ぐすこと自体は普段の冒険でも経験はあつただけど、こうやって仮眠取った後もなんか違うんだよね。やっぱり、海の上で慣れない環境だから か……それとは全く関係無しに、あたしももう歳つてことなのかしら」

「えつと……それはどうだろう？ と、とにかく、寝ずの番は大変だか

ら、負担的にも誰かに任せてばかりじゃなくて、こっちも当番制で交代して正解だったってことだよな？」

寝ずの番。お父さんに教えて貰った事なんだけど、夜の航海は非常に危険なため何処かに留まって日の出を待つのが基本らしい。その際に敵の襲撃、天気の変化に対応するべく、起きておく人が必要になるっていうこと。もちろん、何かあった時は寝てる人も起こすんだけど……。

なお、一人で寝ずの番をするのはメルお姉ちゃん、マークさん、マイスさんの二十歳以上組。わたしやミミちゃん、ジーノくんは誰かしらと二人で……ということになってる。

「いやあー、でも何も危なげも無くって退屈なわけだし、いつそのことみんなで寝ちやえばとか思っちゃうわけよ。まあ、安全面的にそれはできないってことは重々承知してるんだけどさ」

そんな事を言いながら「んー！」と伸びをするメルお姉ちゃん。話したりしているうちに目も覚めてきたみたいで、その表情もいつも通りになってきている。

そのメルお姉ちゃんの言葉に反応したのはミミちゃんだった。

「気持ちわかるけど、陸地ならともかくこんな海上じゃあ危険すぎるでしょうね。「海は少しの気候の変化ですぐに表情を変える」なんて言ったりするらしいし」

「確かに。ちよつと風が変わっただけで波も結構荒れる……時化の時なんか、村から見てるだけでも「ヤバイ」ってすぐわかるくらいに波が暴れ回ってるからねえ。……でも、その言葉は初めて聞いたわ」

メルお姉ちゃんの言葉に、わたしも頷きミミちゃんにちよつと聞いてみる。

「わたしも初めて聞いたんだけど……「山の天気はよく変わる」っていうのと似たようなお話なの？」

「どうかしら？ 人から聞いた話だし、私もよくは知らないのよ。ただ、その話と関連した話が印象深かったから、たまたま憶えてたっただけ」

「人から？」

わたしがつい首をかしげてしまいながら聞き返したところ、ミミちゃんは「ええ」と頷いて言葉を続けた。

「ミスから聞いたの。確か、大元の理由は……海、というか『水』が『変化』という事象に関わりが深いから……とか何とか言ってたわ」「えつと、わかるような……わからないような……？」

「ミスって遠い国出身らしいし、そっちのほうの考え方なのかしらね？」

メルお姉ちゃんがそう言うと、ミミちゃんは「そうだと思うわ」と頷いていた。

ミスさんが『アーランド共和国』とは別の遠くの国出身だという話は聞いたことがあった。確か、ミスさんの農業や料理、鍛冶、装飾品加工や薬の調合といった技術は、元いた場所ちゆうらいの由来ゆらいのものだとか。あと、『青の農村』で開催されるお祭りの多くも、元いた場所ちゆうらいのお祭りを参考にしたりしているらしい。

……けど、噂なんかでは聞いたことはあるけど、ミスさんから直接聞いたことは無かった気がする。

ミミちゃんが言った今の話で少し興味も湧わいたし……今度、機会を見つけてミスさんに元いた場所の話聞いてみようかな？

「あつ、ミスと言えば……」

何かを思い出したかのように。ポンつと手を叩いて目を少し見開くメルお姉ちゃん。

わたしとミミちゃんは「どうしたんだろう？」とメルお姉ちゃんの顔を見つめたまま次の言葉を待ってみた。

「さっきまでの話とあんまり関係無いけどさ。村から出発する時、あたしたちはツェツイと話してたりしてたじゃない？ その時のミイスのこと思ひ出してき。アレって何だったのかなーって」

「アレ？」

何かあつたかな？

その時はおねえちゃんに色々心配されて、あんまり他に気がまわら

なかったからよく憶えてないんだけど……ミスさんって、何かしてたっけ？ とりあえず、わたしのすぐそばとかにはいなかった気がするんだけど……？

そんなふうに思い出せないわたしとは対照的に、隣にいるミミちゃんはずぐに何かに思い当たったみたいで「ああ……」って何とも言えない感じで声をもらしていた。

「いや、うん、あれは……あのパメラさんがミスに抱きついていたのは、いろんな意味で衝撃的だったけど……」

「あっ！」

ミミちゃんが言ったことを聞いて、わたしもその時の光景を思い出した。

パメラさんは『アランヤ村』でちよつと変わった雑貨屋さんをしていて、とつても綺麗な人んだけど……確かあの時は、ミスさんの後ろからミスさんの頭のとっぺんにあごを乗せるような感で抱きついて……えつと、その……メルお姉ちゃんに負けず劣らずな大きさの胸がミスさんの肩に乗って……。

……で、そんなミスさんを、パメラさんのお店によくかよってる村の男の人たちが凄い目つきで睨んでた……。

うん、ミミちゃんの言う通り、いろんな意味で驚いた。

「ああ、それもちよつと気にはなったわね。しかも、当のミスはほとんど動じてないっていうか、気にも留めた様子もなかったし。パメラさんって『アーランドの街』出身らしいし、前から会ってて似た様なことが前にもあつてミスが慣れちゃったのか……それが、ミスって女の子っぽい顔してるし、実はホントに女の子だったり？」

「いや、女の子だからって無反応ってことは無いと思うけど……」

「そう？ でも、それは置いておいても、ミスって女装とか似合うと思うんだけどなあ」

ううん……なんだか話がズレてきているような……。

それに、ミミちゃんはミミちゃんであごに手を当てて何か考え込みだしてるし……。

「そういう話じゃなくて！ メルお姉ちゃん、さつき「それも」って言ったけど、気になったことって別のことなの？」

わたしがそう言うと、メルお姉ちゃんは「ああ、そうだった」ってハツとした。

「そのとき、マイルスが話してたじゃない」

「パメラさんと？」

「そっちはパメラさんが「何で来てくれないの？」とか「やつぱりウチの商品に興味無いの？」とか大きめの声で言ってる聞こえたからそんなに気にはならないわよ。そっちじゃなくて、ゲラルドさんのほう」
そう言われて思い出した。そういえば、パメラさんに抱きつかれたマイルスさんが、そのままゲラルドさんと何か話してたっけ？ でも、それってそんなに気にすることなのかな？

「前にマイルスが村に来た時はゲラルドさんとはそんなに話したりしてなかったんだけど……あの時は、なんか少し話し込んでた気がしてさ」

「そうなんだ。うーん……？」

「気にし過ぎじゃないかしら？」

わたしとミミちゃんの反応に「そうかな？」と小首をかしげるメルお姉ちゃん。

……と、そんなところに、船内からゴハンを用意し終えたマイルスさんが現れて、お話はそこでいったん終わりということになった……。

「……で、あの時、ゲラルドさんと何話してたの？」

食事中という短い時間であっても進路がズれるのは大事に繋がる……ということでもしもの事態にそなえて、船の後方付近にある舵輪だりん近くの一角で、マイルスさんが用意してくれた『サンドウィッチ』を皆で食べていた。

……ちよつと前に「船内の設備の問題で、料理のレパートリーが制限されてる」とマイルスさん言っていたっけ。

そんな食事の途中に、メルお姉ちゃんがさっきの話をいきなり切りだしてきた。わたしとミミちゃんはまだ何のことかわかるからいいけど、ジーノくんやマークさん、聞かれたマイルスさんはサツパリの様子で首をかしげていた。

さすがにどうかと思ったから、わたしは「出発する直前のときの話です」とマイルスさんに補則して伝えた。すると、「ああっ！」とマイルスさんはわかつてくれたようだ。

何のことかわかった様子マイルスさんはメルお姉ちゃん……ではなく、わたしのほうを向いて口を開いた。

「すっかり忘れてた！ トトリちゃん、『秘密バッグ』って持ってきてる？」

「えっ、はい。船じゃあ『調合』は出来ないから冒険中に使った爆弾とかお薬とかの補充のために持ってきてます」

どういう事かと言うと、マイルスさんの言った『秘密バッグ』という道具は、その中がわたしのアトリエにある、素材や調合した道具などのアイテムが入っている『コンテナ』に繋がっているという不思議な道具。事前に調査してコンテナに入れておけば、荷物を最小限にしておいても、旅先で必要な時々コンテナからアイテムをとりだせるという優れ物なのだ。

「ちよつと今、中身を確認してくれないかな？」

「いいですけど……？」

けど、それがどうしたっていうんだろう？ それに、ゲラルドさんと話してたっていうのと、何か関係があるとは思えないんだけど……？

「……あれ？」

取り出した『秘密バッグ』を漁あきつてすぐに、見覚えの無いものがあることに気がついた。わたしはそれを取り出してみる。

「…………お弁当箱？」

「あ、やっぱりもう入ってたかあ。でも、コロナがいじったっていうコンテナなら中のものは痛んだりしないはずだし、問題無い…………かな？」

　　マイスさんはそう呟いているけど、わたしを含めその他のみんなはどういう事かわからず、マイスさんのほうを見た。

「えっとね、ゲラルドさんに言ってあったんだ。もしツエツイさんが仕事に手がつかなくらいに元気が無かったらアトリエのコンテナにお弁当を入れて一日待つてみるように、って言ってあげてつて。それを受け取ったトトリちゃんが感想をそえた手紙と一緒にお弁当箱を戻せば、ツエツイさんの心配も和らぐんじゃないかなーと思ってね」

「そうだったんですか!？」

「へえー、ツエツイのことを考えてねえ…………良い事だけど、やつちやつたかなーこれは」

　　驚いたわたしとは別に、メルお姉ちゃんは呆れ顔に近い表情でため息をついていた。

「メルお姉ちゃん、どうかしたの？」

「いやさ。トトリに物を送れるつて知ったら、ツエツイつてば毎日のようにフルコースなみに突っ込んできて色々大変になっちゃうだろうなーつて」

「ああ…………うん」

　　メルお姉ちゃんに言われて、わたしにもその光景がすぐ頭に浮かんだ。おねえちゃんならそんなことをしそうだ…………。

「…………とりあえず、食べ物に密閉できるお弁当箱で、コンテナの中をしめらせたりしないように。あと、取り扱いに注意が必要な物もあるから他の物は触らないように…………そんなことを書いた手紙をいれておこうかな…………？」

　　マイスさんも悪気があったわけじゃなくて善意でやったわけだし、おねえちゃんのほうもわたしが心配かけちゃってるわけだから「しな

いで」とは言い辛い……。ならせめて、危なくないようにしてもらえないと思う。

「どうしたんですか、マークさん？ 『秘密バッグ』、気になりますか？」

「いやあ、そんなものがあるなら、船に積み荷をたくさん積まなくても何の問題も無かったんじゃないかと思ってね」

「あっ」

「……キミといい、キミの先生といい、『錬金術士』は頭が良いのか悪いのかわからないねえ、本当にさ」

4年目：マイス「遭遇！　そして戦闘開始！」

海・船の上

航海を始めてからそこそこの時間が経った。慣れない船での生活や操縦、その他、普段の冒険と勝手が違うことも多々あり、やっと慣れてきたといったところだろう。

けど、操舵輪そうだりんの前で方位磁針と地図を持っている僕は、慣れからくる安心感が感じられないくらいには気が張りつめていた。

そんな僕のそばにいたミミちゃんが手持ちの望遠鏡で十二時の方向……つまり、船の真正面のほうを見ながら僕に問いかけてきた。

「ねえ、間違い無いの？」

「うん。方角的にも地形の特徴的にも間違い無いよ」

僕の言う地形とは、肉眼でも遠方にうつすらと確認できる陸地……その陸地のちようど真ん中あたりがポツカリと開いている。そこには陸地が無いのだ。

「アレが『フラウシュトラウト』がよく出現するっていう『海峡』だろうね。きつとその地形や海流の関係で良い餌場になってるからナワバリになってるんだと思う」

『フラウシュトラウト』というモンスターの生態については全く知らないが、生物であるならば、この推測はあながち間違っではないと思う。

それに……間違っついようがいまいが、今重要なのは『フラウシュトラウト』のナワバリが目前まで迫っているという事だ。これまでの『アランヤ村』での被害情報から考えても、そのナワバリから出てこないという保証はないため、一刻も早く戦闘準備を整えておかなければならない。

「ミミちゃん。海峡が見えてきたことを皆に伝えてくれるかな？　それで戦闘準備をしたら甲板で手分けをして周囲を警戒して……何かあったらすぐに対応できるように」

「わかったわ。……マイスは？」

「僕は何かあるまでここで進路を確保しておくよ。さすがに有事には僕も出るけどね」

そこまで言うともミミちゃんは「わかったわ」と言いながら僕に望遠鏡を投げ渡し、駆け足でその場から離れて行き……何故かピタリといきなり立ち止まってコツチを振り向いてきた。

「マイス」

「ん、どうかした？」

「私一人で言いたいところだけど……貴方あなたの力ちからも、トトリのために貸してちょうだい」

「もちろん！ そのために僕はここにいるんだよ」

「そつ、ならいいけど。……頼りにしてるんだからね」

「あつ、ちよつと待って」

用は済んだとばかりに再び駆け出そうとするミミちゃんを僕は引き止める。少し眉間にシワを寄せたミミちゃんが再びこつちを向いた。

「僕もミミちゃんを頼りにしていい？」

「……っ!! もちろんよ！ マイスは、私を誰だと思ってるのかしらね」

そう言つて今度こそ駆け出していたミミちゃんは、甲板下の船内へと入っていった。中で自分の武器の手入れをしていたり休憩をしている人に声をかけに行ってくれたんだろう。

その、入っていく際に僅かに見えたミミちゃんのゆるみゆるみのようなのを必死に堪えようとしている笑顔を確認した僕は、一つ短く息をついた。

「ミミちゃん、やっぱりどこか気を張り詰め過ぎてるっていうか、気負い過ぎていうか……あの時言つてたことが何か関係してるのかな？」

あの時……ミミちゃんのランクアップのお手伝いをしていた時期のある日の夜。ミミちゃんがこれまで思つてたことを話してくれて、昔みたいに話せるようになるきっかけとなったあの出来事。

あの時に、ミミちゃんが言っていたことから感じられた……うん、もつと前から、初めて会ったころから少なからずあったのだろう『貴族』のプライド」とでも言うべきもの。「シユヴァルツラング家の名を立派な名にしてみせる」そんなふうなことを言っていたけど、それはミミちゃんの主な原動力であると思うが、同時にミミちゃんを追い詰めてしまうものでもある気がする。

別に悪いってわけじゃないんだけど……もう少し気持ちに余裕を持っておかないと、いつも「こうでないといけない」って自分を正しているのは凄く疲れてしまうと思う。

それに……。

「もう一人前の冒険者で実力もあるんだし、もつと自信を持っていいと思うんだけどなあ」

「でも、向上心があるってことだし……」って小声でもらしつつ、僕は空を見上げた。

空は快晴。視界の端の方に見える船の帆は程よく吹いている海風を受けてピンつと張っている。そのまま視線を卸していけば、空とはまた少し違った色合いの「青」をした海が見え、波は低く穏やかだった。

まさに「航海日和」といったところだろう。

けど、同時に『フラウシュトラウト』がいるだろう場所の目と鼻の先なわけで、気を引き締めて行かないといけないわけで……。

「……あれ？　そういえば……」

ふと、今更だけど気になることが思い浮かんできたので、つい一人で首をかしげてしまった。

……と、そんな僕に声がかけられる。

「フラウシュトラウトの住処のそばまで来てるって聞いたんだけど……どーしたの？　何かあった？」

そうやって僕のそばまできたのは戦闘用の『斧』をかついだメルヴィアだった。僕が見ていなかった間にいつの間にか船内から出てきていたんだろう。

そんなメルヴィアの言葉に、僕はすぐに答える。

「船の前方に例の海峡が見えてきたんだ。……それで、ちよつと聞きたいことがあるんだけど……メルヴィアって『フラウシュトラウト』がどんな見た目のモンスターか知ってる？」

「知らないわよ？」

「えっ……うそ」

「いやだつてさあ。フラウシュトラウトが出没したことがある場所って、近くても『アランヤ村』から見たら沖おきのほうだし。直接見たことのある奴だつて、船ごと襲われても運良く船の残骸と一緒に流れ着いたりして生き延びられた数人で、錯乱状態だったり、よく憶えてなかったり、「漁船ふねよりデカかった」とかアバウトなないようだったり……」

「だから『アランヤ村』の中でもちゃんと知ってる人はいなわよ」とメルヴィアは肩をすくめながらため息を吐いて首を振ってきた。

でも、それって……。

「こうやって今みたいに周囲を警戒して何か見つけたところで、それが『フラウシュトラウト』かどうかわからないってこと？」

「……船を沈められたら、フラウシュトラウトなんじゃないかしら？」

「いや、もうそれ『フラウシュトラウト』かどうかなんて考えてる場合じゃないじゃないよ!？」

僕がそう言つてツッコんでみても、メルヴィアは「そうよねー」と困ったように苦笑するばかりだった。

ああ……今になって段々と不安になってきた……。

「おーい。ミスもメル姉も、なに話してるんだよ？」

そう僕らに声をかけてきたのはジーノくんだった。

さっきのメルヴィアみたいに僕が気付かないうちに……つて、よくよく見てみると、甲板上の前のほうにはトトリちゃんとミミちゃんが、中央あたりにはマークさんがいつの間にか出てきていて、周囲に目をやっていた。どうやら僕がメルヴィアと話しているうちに、僕らがいいた後方以外で手分けして周囲に異常があつたりしないか監視を

しはじめていたようだ。

それを理解したうえで、僕はジーノくんの問いに答えた。

「見た目を知らないから、『フラウシュトラウト』がいるかどうかかわからないなー、って話をしてたんだ。ジーノくんも知らないよね？」

「ああ、知らないぜ。けど、わかるだろう？」

「え？」

「なんか強そーなのが出てきたら、ソイツがフラウシュトラウトだー！」
……うん。なんというか、ジーノくんらしいというか……これまたアバウトというか……。

ジーノくんの言葉について僕は頭を抱えてしまったけど、そばにいるメルヴィアはケラケラと笑っているようだった。

「ジーノ坊やの言うことにも一理あるわね。……それに、相手が何であらうとあたしたちは船を襲ってくるヤツを倒せばいいだけだし。うん、一々難しく考える必要無かったわ！」

「まあそれはそうだけど……それでいいのかな？」

でも、今、この問題をどうにかできるわけでもないのも事実だし……とにかく船を進めて行くしかない……のなか？

僕らのそばまで来ていたジーノくんが、マークさんのいる船の中央付近へと移動し二人で左右にわかれて監視をし始めてから数十分経ったかというころ。

海峡が肉眼でもシツカリハッキリと認識できるほどの位置まで来て「もしかして、何も無しに通れるんじゃない……？」という考えが浮かんだあたりで唐突にそれはおこった。

最初に感じたのは、気のせいかと思ってしまふほど微妙かすに僕の耳に届いた「ブクブク」という何かが泡立つような音。そして、海面のどこかにそういった泡のようなものが無いか僕が確認するよりも先に船が揺れた。

轟音。

大量の海水が打ち上げられ、そして重力によって叩きつけられる音。それとほぼ同時に聞こえてきたのは、水音に勝る音量の何かの咆哮ほっこう。

「……来たか！」

その咆哮に反射的に身をすくめつつも、僕はその発生源を睨みつけた。

ソイツがいたのは、トトリちゃんミミちゃんがいる甲板の前のほうのそのまた先の海……つまりは、船の進行方向の海面から顔を出していたのだ。

全体は把握できないが、海面から上は目視することができる。

その体は、顎アゴや腹側の喉のどや胴どうと言った部分は白いが、その他は深い海のように蒼あおかった。

その頭部は、いつだったか本で見た砂漠地帯なんかにいるという『コブラ』という蛇へびを思い起こさせる形状をしていた……が、口から覗くギザギザの歯や、頭のとっぺんあたりから後方に流れる様に生えている触覚のようなもの、背面に一对の翼のような小型のヒレがあることが、他の生物とは大きく異なったモンスターだと感じさせた。

また、頭部を支えている首が伸びている海面、そのギリギリあたりから左右に伸びているのは巨大な爪つめとヒレがついている腕だった。……つまりは、今見えているのは胸部から上だけということなのだろう。

ということとは、目の前にいるのは、胸部から上の大きさだけでこの船の甲板を見下ろせるほどの高さを持つ巨大な生物であるということだ。

……ジーンくんじゃないけど、これは見たらわかった。

「こいつが『フラウシュトゥラウト』……！」

それ以外はありえない。こいつの他にいるっていうなら連れてこいって言いたくなるくらいだ。

……いや、『フラウシュトラウト』でない可能性は万が一くらいはあるかもしれない。けど、ひとつだけ確かなことはあった。

船を見つめるソイツの額ひたいあたりにある傷。それは完全に塞がってはいるようだけどとても大きく、この巨大なモンスターの生命力を持つてしても治しきれないほどの古傷だ。

もはや直感でわかった。ギゼラさんだ。あんな傷をつけられるのはギゼラさんしかいない、と。今、確かに僕らはギゼラさんの足取りをたどれているのだと確信を持った。

……と、それとほぼ同時に、フラウシュトラウトが船を……もしくは船の前のほうにいたトトリちゃんたちを睨みつけた状態で、先程よりも大きく咆哮をした。それは完全に敵意を向けたもので、いわば宣戦布告のようなものだった。

「もし、話ができそうなら……」なんてことを一瞬でも考えていた僕だったけど、どう考えても無理そうだ。

咆哮を合図に、みんなが各々の武器を構え臨戦態勢りんせんたいせいを取る。僕も地図と方位磁針を即座にしまい、それぞれの刀身とうしんが三つに分かれた双剣『ドラグーンクロウ』を取り出し構えた。

フラウシュトラウトは………海へと沈んでいった。

「……へ？」

誰かが呆けた声をもらったのが聞こえた。けど、それはみんな同じようなことを思ったことだろう。

けど、どう考えてもおかしい。ものの数秒前に射殺さんばかりの眼光を浴びせてきたモンスターがいきなり逃げ出すなんてあり得るだろうか？

目に、鼻に、耳に。少しの情報も逃さないようにと、周囲を探るべく神経を張り巡らせた。

「………！ 三時の方向!!」

僅かな水音が聞こえ、反射的に聞こえた方向を叫びながらそつちへ

と向いた。

三時の方向……つまりは右を見ると、船から二百メートル以上離れた海にフラウシュトラウトが見えた。聞こえた水音が小さく感じられたのは、先程よりも遠かったからか、勢いが無かったのか、その両方か、また別の理由か……。

そんなことを考える間もなく、遠くでフラウシュトラウトが天を仰ぐように上を見上げて咆哮をあげた。

その咆哮を耳にしつつ、僕は少しの違和感を覚えた。

「……？ さっきのは威嚇だったけど、今は……？」

「前と同じく威嚇なんだろうか？」そんなふうに考えたところで、また僕の思考をそらせる出来事が……『現象』が起きた。

ポツ、ポツ、ポツ。

髪に、鼻先に、『ドラグーンクロー』を持つ手に、何かが落ちてきた。その正体はすぐにわかった。なぜなら、なじみのあるものだったから。

雨粒……つまりは『雨』。特別なものではない、日常でも見かけるもの。

けど、僕は驚いた。

とつさに空を見上げ……さらに驚く。

「えっ……なんで!! さっきまでは確かに晴れてたのに……!!」

そう。ついさっきまでは快晴だったというのに、いつの間にか空一面に灰色の雲が広がっていたのだ。それに釣られるように、こころなしか風が強くなって、波も高くなってきている。

まさかとは思うけど、さっきの咆哮が雨雲を呼んだ……!?

その考えに至り、見上げていた顔をフラウシュトラウトがいたほうへと向け……そして僕は目を見開いた。

フラウシュトラウトは変わらずそこにいた。けど、問題はそこではない。

フラウシュトラウトの後ろから迫ってくるもの。水の塊、巨大な波。その高さは僕らのいる船の甲板を超えるほど高く、船を丸ごと飲

み込まんとするほどだ。

「みんなっ！ 船のどこかに掴まりなさい!!」

呆然としているところに、メルヴィアがはりあげた声で現実を引き戻される。僕はすぐさま船の縁の柵を掴んだ。こころもとない気もするが、波がすぐそこまで迫ってきていたため、他へ行く時間が無かった。

横目で他のみんなも柵やマストに掴まっていることを確認したところ……船の横つ腹に波がぶつかった。

海に浮かぶ船の性質上、巨大な波が近づくにつれ船もあわせて少し浮かび上がってきたため、遠目では船を丸ごと飲み込むくらいの高さの波だったが、実際には甲板上に十センチにも満たない水が流れる程度で済んだ。

だけど、その流れは速かったため、もし何かを掴んでいなかったとすれば足を取られて流されてしまったことだろう。それに、船自体も大きく揺さぶられていたから、投げ出されていたかもしれない。

甲板上を見渡してみたが、みんなも無事なようで、船そのものにも特に損傷は見られなかった。

「よかった……」

ホツとしたのもつかの間、フラウシュトラウトの咆哮が轟いた。先程の巨大な波で船が沈まなかったことに苛立っているのか、敵意がさらに増した眼差しで船を睨みつけてきていた。

そして、フラウシュトラウトは船へと波をかきわけ近づいてきた。今度はその牙や爪で船を壊そうとしているのかもしれない。

そのフラウシュトラウトの動きから目を離すわけにもいかない。けど、僕には他にも気になることがあった。

「波も風も少しづつ強くなってきてる……?」

どうしてかはわからない。もしかすると、さっき僕が考えたようにフラウシュトラウトの行動に何か関係があるのかもしれない。だ

けど、理由はひとまず置いておいても注意すべきことがある。

それは強くなってきた風だ。帆船は風の力を利用して効率的に推進力を得るのだけど、それは同時に良くも悪くも風の影響を受けやすいということ。このまま風が強くなっていけば帆ほに風を受け過ぎ、荒れる波と合わさって船の大きな揺れ・破損・転覆の原因になりかねない。

なら、僕がまずすべきことは……。

「トトリちゃん！」

「は、はいっ!？」

急いで駆け寄り声をかけるとトトリちゃんは驚き身をすくめつつも、元気のよい返事をしてくれた。状況も状況だから、要点だけを端的に伝える。

「帆っ！ このままだと危ないから、僕がたたんでくる！」

「わかりました！ お願いします！」

そう伝えると、トトリちゃんはハツとした後、大きく頷いてきた。グイードさんから船の動かし方の他にも色々教えて貰った、と言っていたので、この状況での危険性を理解できていたのかもしれない。

なににせよ、安全面でも戦闘への参加という面でも、いち早く帆をたたむ作業を終えるにこしたことはない。

僕は急いで駆け出した。

「よしっ！ ……これで……最後！」

たたんだ帆をギュッと縛しばり、風を受けないようにまとめてしまう。帆を張っていたマストの上部にて作業を終えた僕は、甲板を見下ろして戦況を確認する。……どうやら、あまり良い状況では無さそう
だ。

フラウシユトラウトは船からほんの数メートル先にいた。そして、

船そのものとは別に、船に乗っている人間もそれぞれ排除すべき敵として認識しているようだ。

そこから噛みついてきたり、ブレスを吐いたりして甲板上のトトリちゃんたちを攻撃していた。そして、作業中に見ただけで、驚くことにフラウシュトラウトは短く叫ぶことで雷を落としてきていたのだ。やはり、天気急な変化もフラウシュトラウトのしわざだと考えていいようだ。

それに対して、トトリちゃんたちはといえば、フラウシュトラウトに有効打らしい有効打がうてずにいるようだった。

というのも、フラウシュトラウトがいる場所が、近くはあるものの絶妙に離れているため、近接攻撃がギリギリ当たるか当たらないかといったくらいでしか届いておらず、攻撃機会自体が限られていることが大きな問題となっていた。加えて、荒れる波やフラウシュトラウトの動きで少なからず揺れる船。さらには降りだした雨で気を抜くと足を滑らせてしまいそうになることも影響しているだろう。

荒れる海の上に飛び出すわけにもいかず、ミミちゃんとジーノくんはフラウシュトラウトが攻撃してくる際のわずかな接近にタイミンクを合わせて出の速い攻撃を与えることしかできていないようだ。

メルヴィアはブーメランのように斧を投げ、マークさんは背負った機械から拳を模したものを射出し……二人ともミミちゃんやジーノくんよりは攻撃はできてはいたけど、それでもいまひとつな様子だった。

こんな時にでも問題無く戦えそうな『錬金術士』であるトトリちゃんも、何故か攻めることができずにいるようだった。

気になるのは、トトリちゃんが使っているアイテム。他の人がフラウシュトラウトの攻撃を避けきれずに負ったダメージを、すぐさま回復させているようなんだけど……それら高性能な回復アイテムと比べ、フラウシュトラウトに使っている攻撃用の爆弾などのアイテムはどうしてか『フラム』や『レヘルン』といったいわゆる初級のものばかりつかっているのだ。

そんなトトリちゃんをフラウシュトラウトが狙いを定めたようだった。

目をトトリに向け、首を引くようにして僅かに頭を後ろへ引く。それで反動をつけたかのように、鋭い牙がいくつも並んだ口をあらわにしたフラウシュトラウトの頭が勢いよく甲板上のトトリちゃんへと伸びた。

「させるかっ！」

僕は、フラウシュトラウトの頭部とトトリちゃんの間あたりを目がけて飛び降り、着地と同時に迫りくるフラウシュトラウトの牙へ向けて両手で『ドラグーンクロー』を抜き放った。

両腕に大きな衝撃を感じたのと同時に、フラウシュトラウトのうめき声のような鳴き声が聞こえてきた。どうやら迎撃は成功したようだった。

「マイスさん!？」

「コツチは終わったから参加するよ。……あと、他の爆弾はどうしたの?」

色々と言葉を省いた質問だったけどトトリちゃんには意図は伝わったようで、うつむき気味に心底困った様子でトトリちゃんは答えてきた。

「それが、爆発範囲に船が入ってしまいそうで、問題無く使えるものがないもの凄く限られてしまってるんです……」

それを聞いて納得した。

確かに、胴体近くは船の側面や縁のあたりを巻き込みそうだし、頭部は頭部でマストの帆を張ったりまとめたりするための横に伸びる棒を巻き込むことだろう。なら、狙うのはその中間、首のあたりなんだろうけど……それでも船を巻き込みかねないことには変わりはないさそうに思える。

だから、威力も爆発範囲も小さい初級のものばかりを使っていた……いや、使えなかったということか。

思えば、ミミちゃんやメルヴィアの動きにも違和感を感じた。もし

かしたら二人も足元の船への損傷を気にして、十分に武器をふりまわせていないのかもしれない。

「いちおう、比較的爆発範囲が狭くて威力は凄い爆弾もあるんですけど……その性質の関係で「絶対に」とは言えなくて、使えなくって……」

そう申し訳なさそうに言うトトリちゃん。

けど、これは……………。

根本的な準備不足。

トトリちゃんがいる手前、口に出すことはできなかつたけど、そういう結論に至ってしまったって。

メルヴィアが言っていたように、『フラウシュトラウト』という存在は具体的な情報の無い相手だった。

それでもその被害などから「海上で戦う」ということは間違い無いと推測はできただろう。ならば、それに合わせた準備、戦略を練るべきだった。そうすれば今のようには、フラウシュトラウトの立ち位置のいで近接攻撃も満足にできず爆弾も有効利用できないというジリ貧な状況にはならなかつたはずだ。

こうなってしまったのは、船の完成にうかれて気持ちが先走っていたからか……………いや、おそらく普段の冒険では多少苦労しても勝てるのがほとんどで、戦闘への認識にどこか「なんとかなる」といった気持ちがあつて、そこから無意識に気が緩んでいたのが原因かもしれない。

「船が壊れてしまえばお終い」。ギゼラさんがもしかしたらしてしまっていたかもしれない失敗を、僕たちも犯しそうになっているかもしれない。

自分が立っている足元にさえも気を配らないといけないという状況。そして、その他の環境も異なっている海上・船上での戦闘に、みんな本来の動きが出来ずにいる。

僕は、未だに波が高くなり続けている荒れた海を睨む……。

「状況を変えようにも、あんなに海が荒れてたら……なら……！」

4年目：トトリ「海上の決戦」

海・船の上

「ど、どうしよう……！」

降りしきる雨が船の甲板を叩く音と、波が荒れ狂う音とが混ざり合った音。それが周囲から絶え間なく聞こえてくる中で、わたしはつい不安をもらしてしまってた。

思ったように動けず、これまでにない苦戦を強いられている。攻撃用のアイテムも回復用のアイテムも両方まだ余裕はあるものの、この状況からか心には余裕は無くても自分でも焦^{あせ}ってきてしまってるのがわかった。

きつと、みんなも同じようなことを思っていると思う。

ついさつきフラウシュトラウトの攻撃からわたしを守ってくれたマイスさんも、戦闘に参加する前に少し話したけど、なんだかとても困ったような顔をしていた。他のみんなも頑張ってくれてるけど、内心では苛^{いらだ}立ってたり焦っていたりしているに違いない。

「せめて、もっと強い爆弾を使えたら……」

わたしがそう呟いたのとほぼ同時に、フラウシュトラウトがザブンと海へ潜り……そして、船からそれなりに離れた海面から現れた。

その距離はこれまでより遠くて、ジーノくんとミミちゃんの剣と槍はもちろん、メルお姉ちゃんの斧も、マークさんが背負う機械から発射されるトゲ付きグローブも届きそうにないほど離れている。

「でも、わたしなら届くかも！ それに……」

アイテムを投げるのはたくさん練習した。それに実際の戦闘でも何度も投げてきた。そこで得た知識と経験があれば……例えば、杖に引っ掛けて振りかぶり遠心力を活かして飛ばせば、このくらいの距離ならきつと……た、たぶん届くはず！

そして、それくらい遠くまで投げれば爆発範囲に船を巻き込んでし

まうことは絶対ないと思う。そうなれば、強力な爆弾でも遠慮なく使えるから、この戦況だつてひっくり返してしまえるだろう。

そう思つて、例の爆弾をポーチから取り出そうとしたところで……フラウシュトラウトの咆哮が聞こえて身体が強張こわばつてしまった。

……あれ？

なんていうか、こう……今の状況に何かを感じて、わたしは爆弾を取り出そうとしていた手を止めて、顔をポーチのある手元からフラウシュトラウトのいる方へと向けて……気がついた。

「あつ……!!」

遠くのフラウシュトラウト。そのまた後方から迫ってくる大波。

……そう。この戦いが始まる最初の最初と同じ状況にいつの間になつていたことに気がついた。

あの時の事を思い出し、ポーチから手を抜き出してとつさに近くの柵さくに掴まる。みんなもわかつてたみたいで、わたしが柵に掴まった時にはすでにみんなどこかで波を耐える準備をしていた。

そして、あつというまに大波は船のそばまで押し寄せてきて、船を傾け、のみ込んできた。

お父さんが造ってくれた船は本当に凄かった。これまでのフラウシュトラウトの攻撃でも大きな損傷は受けなくて、大波にのみ込まれて転覆することも無く耐えてくれている。

そんな船と一緒に大波に耐えていたわたしだったけど、ふとある事に気がついてゾツとした。

大波が通り過ぎ大きな揺れがおさまったところで、わたしはフラウシュトラウトを確認した。……どうやら、船がまだちゃんとしていることが気に入らないみたいで、短く吠えた後、また海へと潜つていった。きつと、また船のそばに出てくると思う。

ひとまずの安全を確認した後、わたしは一番近くにいたマークさん

にへと声をかけた。

「マークさん！」

「うん、大丈夫だよ。海への冒険と聞いた時から機械の海水対策、防水加工には着手していてね。今、戦闘に使ってる装置も対策はばんぜ……」

「そんなどうでもいいことじゃなくて!!」

「それはいくらなんでもヒドくないかな?」ってマークさんが呟いたけど、そんなことを気にしている場合じゃなかった。

「波、最初のより大きくなってませんでしたか!?!」

わたしがそう言うと、マークさんじゃなくて、もう少しだけ離れたところにいたメルお姉ちゃんが声をあげてた。

「なってたわね。軽くあたしの膝上ひざくらいまできてたわ。まだみんな耐えられたから良かったけど……これ以上高くなるのは考えたくないわ」

「そうは言っても、高くなったのは事実じゃない。しないのか、できないのかはわからないけど、連続してあの波を起こさないのが不幸中の幸いかしら」

そう言ったのは、離れたところから駆け寄ってきたミミちゃんだった。その視線はさっきまでフラウシュトラウトがいた海面の方へと向けられている。

マークさんとはといえば、かけていたメガネを外して少し振るった。そしてまたかけなおして……ため息を吐いていた。

「波も一層荒くなってきてるし、雨量も増えてきてる。……こういう時、雨粒が付くのはメガネの欠点だね。それは僕だけの問題だけど、雨は人の体温を奪うということも忘れちゃいけないよ。あの波のことも含めて、今以上の長期戦はどう考えても危険だろうね」

マークさんの言う通りだろう。こっちだって少しずつだけど、みんなで攻撃していつて確実にダメージは蓄積させていつてそれなりに削れていると思う。けど、持久戦になったら、回復アイテムがあ

るとはいえ、あんな大きなモンスターに体力勝負で勝てるとは思えなかった。

「くっそー！ 陸の上でなら絶対負けねえのに！！ なんとかできないのか!？」

「一番近い陸地は、見えていた海峡のところだろうけど……フラウシュトラウトが行かせてくれないんじゃないかな。それに、あの大波の事を考えると、陸地のほうが危険かもしれないよ」

マストにしがみついていたジーノくんが苛立たしげに声をあげるけど、それにどこからかマイスさんが否定的な意見を言っていた。

マイスさんがどこにいるのか探そうとしたところで、雨音に紛れてパシャパシャという足音が聞こえてきた。振り返って見ると、わたしの後ろのからマイスさんが駆け寄ってきていた。

「トトリちゃん！ さっき言ってた強い爆弾用意しといて！」

「えっ!？」

い、いきなりどうしたんだろう!？ それは、もし使えたらフラウシュトラウトに大ダメージが与えられるし嬉しいんだけど……でも、船のことを考えると危ないから無理だし……。

驚くわたしをマイスさんはスルーし、そしてそのまま声を張り上げてきた。

「メルヴィアとマークさんは、アイツの頭に思いつき強い喰らわせてー！」

「はあ!? あんた、何言ってるのよ!？」

「今の状況を打開するには大きな一撃を与えるのが理想ではあるけど、出来ないと思うよ?」

色々と言うメルお姉ちゃんとマークさんもスルーして、マイスさんは続けて言い続ける。

「ジーノくんとミミちゃんは、アイツの喉のどに思いつき突っ込んで！」

「おうー わかった!!」

マイスさんの言葉にジーノくんだけが元気に返事をした。……というか、「わかった」なんて言ってるけど、ジーノくん絶対何もわかつ

て無くて勢いだけで返事してると思うんだけど……。

いったいマイルスくんは何を考えているのか……それを聞こうとしたんだけど、わたしが口を開こうとした時に「ゴゴゴ……」という地鳴りのような音と共に船が大きく揺れ始める。

倒れないように踏ん張っていると、さっきまでとは反対の方向の船の側面。その海面からフラウシュトラウトが水しぶきをあげながら現れた。

みんなが身構える中で、わたしの隣に来ていたミミちゃんがフラウシュトラウトを見たままマイルスさんへとビシツと言いつつ放った。

「マイルス！ あんた、無茶なことばかり言ってるけど、何か考えがあつてのことよね?!」 信じてるわよ!」

「うん。ミミちゃんにもトトリちゃんにももう嫌われたくないから、ウソは言わないし、いつだって全力でやるよ! だから……グイードさんの造った船を信じて!!」

……えっ? どう……いう……こと?

「ちよつ、信じるとかそれ以前にもう凄く不安になるんだけど……やっぱり何するか教え……」

訳の分からないわたしと違い、ミミちゃんは目を細め、口のはしつこと眉をピクピクさせて「ギギギ……」とマイルスさんのいる後ろを振り向いて……

そこでフラウシュトラウトが大きく吠^ほえた。そうなるこそつちに意識を向けるしかできない。

「それじゃあ行くよ!」

そう言ったマイルスさんがフラウシュトラウトの方へと走り出した。凄^{すさまじ}い速さで近づいてくるマイルスさんに、フラウシュトラウトがその鋭い目で狙いを定めた……ように見えた。

わずかに首を引いたフラウシュトラウト。そして、その勢いでフラウシュトラウトの頭部が……鋭い牙が見える口を開きながらマイルス

さんの進む先へと勢いよく伸びた。

けど、その時にはミスさんは甲板上にはいない。走った勢いのまま飛び上がっていて、噛みついてくるフラウシュトラウトの上を通り越すような感じになっていた。

飛び上がったミスさんはいつの間にか両手を頭の上上げるようにして『剣』を構えて、その手元が何故か光ってて……………て、えっ？

わたしは自分の目を疑う。というのも、ついさつきまでミスさんが持っていたのは竜とかそう言ったモンスターの爪みたいな『双剣』だった。『双剣』だから右手と左手に一本ずつ持っていたはずなんだけど…………。

なのに…………だ。今の飛び上がってるミスさんは両手で一本を持つようにして振り上げてる。

あれ？ でも、『剣』にしては持つところ…………柄が長い気が…………？
けど、だからと言って、ミミちゃんの持っているような『槍』にも見えないし…………？

いや、ううん……………瞬時に色々な考えをめぐらせてたけど、わたしはすでにそれがなんなのかわかった。ただ、今のこの状況と噛み合わなくて、理解できてなかった…………理解したくなかった。

そう、アレは…………!!

噛みついてくるフラウシュトラウトの頭と、走った勢いのまま飛んでいっているミスさんがすれ違う瞬間、ミスさんの手元に集まっていた光がはじけたっ！

「てえやああああー!!」

振り上げていたモノをミスさんは両手で思いつき振り下ろし、その光景を見ているわたしたちが驚きの声をあげるのとほぼ同時に、フラウシュトラウトの頭に吸い込まれていった。

「『クワ?!』」

マイスさんが振り下ろしたモノ……『クワ』がフラウシュトラウトの頭部にぶつかった瞬間、硬いもの同士がぶつかり合うような音……じゃなくて、まるで本当に土を耕たがやしたような音が響きわたった……ような気がする。それと同時にフラウシュトラウトの頭部が船の甲板へ叩きつけられる。

そして、わたしはある事を思い出した。

前にメルお姉ちゃんが話してくれた『青の農村』の噂」の中に「戦闘訓練をうけていない農民が『クワ』で『グリフォン』を追い払った」という噂を。

あれ、信じてなかったんだけど……今だと「追い払った」んじゃないやなくて「倒した」んじゃないかなって思えてきた……。

「ぎやあ!?!」

その衝撃、そしてフラウシュトラウトの体重がかかったことで船が揺れ傾く。倒れないように必死に踏ん張ったけど、つい尻餅についてしまい、そこでフラウシュトラウトのほうが見えた。

船の縁へり近くの甲板にもたれかかるように乗っているフラウシュトラウトの頭。そしてその向こう側に、走って飛んでいった勢いのまま飛び、荒れる海のほうへと落ちていくマイスさんが見えた。

「マイスさん!?!」と、心配から声をあげそうになった私よりも先に、そのマイスさんが大声をあげてきた。

「みんなー!!」

「……ったく! あたしとの試合の時みたいにかかやらかすとは思ってたけど、これは予想外ね!」

メルお姉ちゃんが笑顔でそう言い、船の傾きによる甲板の傾斜を利用するように滑るようにして、叩きつけられているフラウシュトラウ

トの頭の方へと急接近していった。おつきな『斧』を構えているその細く見える両腕にはその外見からは考えられないほどの力が込められていて……

「けど、この思い切り方は嫌いじゃないわね！ そ！ れ！ に！
こんくらい近づければ……やっと思いつきり振るえるわ！」

その込めた力を開放して薙ぎ払うようにして振るわれる斧。甲板上のフラウシュトラウトの頭部その側面に直撃して、大きな音と悲鳴にも聞こえる鳴き声と共にフラウシュトラウトの頭がはじかれ、それにつられるように首がわずかにそれた。

メルお姉ちゃんの側面からの一撃の衝撃と、その痛みからかフラウシュトラウトの首が少し縮こまったことによって、さつきまでとは少しずれた位置で甲板よりも少し上の位置まで浮き上がったフラウシュトラウトの頭。

そして、そこにいたのは……。

「いいタイミングだねえ。さてつと、コイツの本領発揮といきましょうか」

フラウシュトラウトの頭に向かって背を向けているマークさん。その背中には、さつきまでトゲの付いたグローブを発射していた機械が背負われているはずなんだけど……。

気のせいかな、その形が少し変わっていて、トゲの付いたグローブが外に飛び出していて、その根元には何か部品が折りたたまれているような……？

「ワン！ ツー！ ファイニッシュ!!」

フラウシュトラウトの鼻先目がけて背中の機械からグローブが飛び出し、引っこみ、もう一度飛び出し、引っ込んだ。そして最後には足を屈めていたマークさんが飛び上がるのと同時に、グローブもその根元のバネのようなものをめいっばい伸ばすほど空へと向かって飛び出した。その一撃は正確にフラウシュトラウトのアゴの先端あたりをとらえ、フラウシュトラウトの頭をかちあげた。

元々、メルお姉ちゃんの一撃で頭を揺らされていたこともあったのかも知れない。フラウシュトラウトはマークさんの攻撃で苦しそうなうめき声と共に、船の甲板の真上の範囲から外れるくらいにのけぞった。

「おっしやあー！ いくぜ!!」

そう元気の良い声が聞こえたかと思うと、わたしのすぐそばをすり抜けるようにしてジーノくんがフラウシュトラウトのほうへ向かって走り出していた。

「続くわー!」

わたしの隣にいたミミちゃんが、ジーノくんにわずかに遅れるようにして走り出す。

一直線にフラウシュトラウトへ向かって行ったジーノくんは、船の縁^{へり}を踏み^ふみ台にして飛び出し、その勢いのままフラウシュトラウトへとぶつかっていった。

「うおおおりやああああー!」

風切り音が聞こえてきそうな速さで横一線に振るわれたジーノ君の剣は、普段はなかなか見えない……のけぞっていたことで露^{あらか}わになつていたフラウシュトラウトの白い喉元^{のどもと}に走り、そこにパツクリと開く赤い線を作りだし赤色が舞った。

「……………ハア!!」

ジーノくんが続いて同じく船から飛び出したミミちゃんが、ねじつた上半身、肩から腕、手首までもを一体として勢いよく槍をフラウシュトラウトへと突き出した。振り続けている雨の壁に穴を穿^{うが}つその一閃^{いっせん}は、ジーノくんが喉元に付けた傷の真ん中の一点に導^{みちび}かれるように突き刺さり、衝撃と共に周囲の肉がはじける。それと同時に、フラウシュトラウトがさらにのけぞり、ミミちゃんはそれに合わせてフラウシュトラウトの首を蹴り槍を引き抜く。

ジーノくとミミちゃんがフラウシュトラウトに大ダメージを与えた。それは喜ぶべきことだったんだけど、二人は勢いよく船を飛び

出していつてしまっていたため、甲板に戻ってくることは出来ず……
ジーノくんは前のめりになって空中で前転し始めながら、ミミちゃんは槍を引き抜いた時の体勢の関係で後ろ向きに倒れ込みながら……
波が荒れ狂っている海へと落ちていつていた。

「このままじゃ、さっきのミスさんみたいに落ちちゃうー!」と、いてもたってもいられず二人にむかって声をあげようとした……その時。ミスさんの時と同じく、落ちていく本人たちの声がわたしの言葉を止めた。

「いつけえー! トトリいー!!」

いつもと変わらない笑顔で、いつもと変わらないキリツとした綺麗な眼で、ジーノくとミミちゃんがわたしに大声でそう言ってきた。

「何を?」という疑問は湧わかなかつた。二人の顔を見、声を聞いた時には、頭で考えるよりも先にわたしの身体からだは動いていた。

ポーチから取り出したのは『N/A』という爆弾。爆発範囲は狭いけど材料を吟味ぎんみすることで凄い威力になる爆弾。

その凄さは、わたしにこの爆弾のレシピが書いてある調合書を渡した時に口ロナ先生が「変に調合に失敗したら、このアトリエごと吹っ飛んじやうくらい爆発しちゃうの!」という一言もあつたから間違い無い……はず。

その『N/A』を持った時点でわたしは助走をつけるため走り出した。視線の先にはミスさん、メルお姉ちゃん、マークさんに重い一撃を加えられたうえ、ジーノくとミミちゃんによってひっくり返りそうなくらいのけぞつたフラウシュトラウトの姿が。

そのフラウシュトラウトがいる位置は突き飛ばさるように押し出されたため、爆発範囲に船が巻き込まれないくらい離れておりながら、投げたものが確実に狙ったところに届く絶妙な距離。

狙うは、ジーノくとミミちゃんによってつけられた喉元の真新しい傷。……そして、その向こうにわずかに見える、お母さんが付けたと思われる古傷。……それらがある頭部へむかつて……わたし

は『N/A』を思いっきり投げた。

「えいやーっ!!」

『N/A』がフラウシユトラウトの頭に当たるか当たらないかというあたりで、「カチンツ」という音が聞こえたような気がした。

その一瞬後に『N/A』が轟音と共に周囲の雨粒を吹き飛ばし爆発した。その衝撃の範囲はフラウシユトラウトの頭をまるまる包み込むくらいものだった。

……けど、それで終わりじゃない。

もう一度爆発が起きた。

たまらず鳴き声をあげるフラウシユトラウトに三度目の爆発が襲いかかり、本当に悲鳴のような鳴き声が爆音に紛れて周囲に響いていた。

そして、四度目の爆発。

これまでで最も大きい音と共に発生した爆発。その衝撃は喉元の傷から……それだけでなく古傷のほうからも血を噴き出させ、ただでさえ体勢の悪かったフラウシユトラウトを完全に海面と平行になっ
てしまいうくらいまで倒してしまった。

平行、とは言っても、フラウシユトラウトは空中にとどまることなんてできない。ひっくり返るように海面へ倒れ込んでいく。

大きな音と水しぶきと共に、フラウシユトラウトはついに海へとおちた。

心臓が耳元にあるのかと思うくらい心音が聞こえる中、落ち着けようとしたところで……これまでに何度か感じた揺れをまた感じた。

そう。頭を中心に様々な箇所を負ったフラウシユトラウトが、再び海から顔を出したのだ。

「嘘……」とわたしが声をもらす……よりも先に、フラウシユトラウ

トがひととき大きな咆哮をあげ……わたしたちのいる船とは反対の方向、大海原のほうへと方向展開してゆつくりと海へと沈んでいった。

……気がつけば、空からは暗雲は消えていて、あれだけ降っていた雨もやんでいる。さらには、波も船の揺れもおさまっていて、まわりはフラウシユトラウトが現れる前の穏やかな海へと戻っていた。

「か、勝った……？」

「まあ、あれだけの傷を負わせたんだし、むこうから逃げたわけだから「勝ち」なんじゃないかしら？」

フラウシユトラウトが去っていった海を見ながら言ったわたしの呟きに、斧を肩でかついだメルお姉ちゃんがそう応えた。そして、わたしの肩を叩いてニツコリと笑った。

「やったわね、トトリ」

「やった……やったー！ 勝ったんだ！ わたしたち、フラウシユトラウトに！ 勝った……あっ」

やっと実感がわいてきて、飛び上がるように喜んだ……んだけど、わたしはある事を思い出して動きをピタリと止める。

「そ、そうだ!? ミミちゃん！ ジーノくん！ マイスさん！」

そう、フラウシユトラウトに向かって飛び出して海に落ちた三人。

わたしは慌てて駆け出し、船の縁から身を乗り出すようにして海を覗きこみ……覗きこみ……覗き………？ 数回まばたきをして、目を擦る。……あれ？

「どうしたの？ トトリちゃん？」

「あ、いえ、その……？」

今、船の上にいるメルお姉ちゃんとマークさんはわたしのことを「トトリちゃん」とは呼ばないし、それにこの声は確実にわたしの視線の先……海の方から聞こえてきている。

それで、海のほうなんだけど……

海の上に座ってこつちを見上げてるジーノくん。

海の上に直立してこつちを心配そうに見ているマイスさん。

ミミちゃんは……海に立つマイスさんに『お姫様抱っこ』されて顔を真っ赤にしてる。

その……これってどういうこと？

わたしがその疑問を口にするよりも先に、わたしの隣から……いつの間にかわたしと同じように海を覗きこんでいたマークさんが、マイスさんに問いかけた。

「それがキミが前に言ってた、海面を走る方法なのかい？」

「はい！ 僕が履^はいているのが『みずぐも』っていうクツで、ジーノくんが乗ってるのは『ハスライダー』っていう『アクティブシード』です！」

「いや、うん。いろいろと意味わかんないから」

マークさんがいるのとは反対のわたしの隣にきたメルお姉ちゃんが苦笑いまじりにそう言った。

わたしはといえば……よくよく見るとジーノくんの下にあるのがわかる大きな葉っぱに「そういえば、初めてマイスさんに行った冒険で教えて貰った『アクティブシード』の中に、そんな名前の奴があったっけ？」という覚えの記憶を探っていた。

「まあ、海があればたらバランスとるのに手一杯になっちゃうし、下手すると簡単にひっくり返るから戦いながら使うっていうのはできそうになかったんだよね」

「はあ……？ わかったような、わからないような……？ と、とりあえず、上がるための縄梯子^{なわばしじ}持ってきてますから、ちよつと待っていてください」

そう言つて、メルお姉ちゃんと一緒に縄梯子を取りに行つただけ

ど……

「ちよ、ちよつと……！ 早く降ろしなさいよ！」

「えっ？ そんなこと言っても、ミミちゃんを海に降ろすわけにもいかないし……」

「そもそもなんでジューノは葉っぱに乗って、私はお、その……だ、抱かれなきゃいけないのよ!? 極力借りは作りたくないのに……!」

「借りも何も、当たり前前的事をやってるだけ……それに、ただ単にどっちが先に落ちてきたかってだけで……」

「いいから早く降ろしなさい! これ以上このままっていうなら、この際、泳いだっていいわ!」

「でも……あつ、そうだ! 先に上がって!」

「はあ? 上がるってどうやって……何屈かがんで……というか、何で持ち上げて……えっ、ちよ、ま……きやああー!」

……何か聞こえて気がするけど、気にしない方がいいの、かなあ?

4年目：マイス「決戦を終えて……」

海・船の上

激闘の末^{すえ}フラウシュトラウトを撃退した僕たちは、海峡を越え船を進めた。行き先は、『アランヤ村』から出発した際にグイードさんから聞いた、ギゼラさんが行くと言っていた方向、東へ東へと進んで行く。いままでのところ、探しているギゼラさんに繋がりそうなモノは、ギゼラさんがつけたのであろうフラウシュトラウトの額の古傷だけだった。

もちろん、もう十年近く前のことだから今でも何か痕跡^{こんせき}が残っていたほうが凄^{すご}いと思う……。けど、トトリちゃんをはじめ、僕を含めた船の乗員のみんなはギゼラさんを探すためにこの大海原へ冒険に出たのだ。限界はあるかもしれないけど、できる限りギゼラさんの手掛^{てが}かりを探すというのは全員が一致した考えである。

「……おーい、ちよつとー」

ただ、フラウシュトラウトと出くわした海峡からは、すでに随分と離れてしまったことが少し気にかかるころではある。

グイードさんが話していたことだけど、『アランヤ村』に流れ着いた船の残骸^{ざんがい}がギゼラさんの船の一部だったとして……その残骸を生み出したのが古傷をつけられたフラウシュトラウトだったとしたら……はたして、こんな離れたところまで漂流することが出来るだろうか？ 破損した船はもちろん、船が沈んで身一つになったらなおさら難しいんじゃないだろうか？

可能性があるとするれば、船の破損が小さかった……もしくは、大きくても船が沈んでしまったりすることのない部分だったか……いや、そもそもギゼラさんが僕らがフラウシュトラウトと出くわした場所と同じ場所を出くわしたとは限らないし、多少のズレは……。

そこまで考えて、僕は「はて」と一人心中で首をかしげた。

僕は何を心配しているんだろう？

ギゼラさんがすごく強いってことはよく知ってるし、不安要素だったフラウシュトラウトも多少てこずったものの「ギゼラさんほどじゃあ……」というのが正直な感想だ。海の上というフラウシュトラウトに有利な状況であつてもギゼラさんがやられるとは思えない。

なのに、何故か僕の中では不安が大きくなっていつている。

手掛かりがほとんど見つからないから？ いや、でも、そんなの今に始まったことじゃないから関係無い。もつと何か別にあつたかな……？

「聞いているー？ マ・イ・スー！」

耳元でそんな声をあげられて、僕は反射的に身をすくめてしまった。

していた動きを止め声のした方へと目を向けると、そこにいたのはメルヴィア。そして、その後ろにはトトリちゃん和ミミちゃんもいた。

「ん？ どうかした？」

「どうかした、じゃなくってさあ。今、止めてくれたけど……それやめてくれないかしら？ 正直、ちよつと怖いんだけど」

そう言ったメルヴィアが目をやったのは僕の手元。メルヴィアが言っている「それ」というのはもしかして……。

「えつと、『クワ』のこと？」

『クワ』そのものっていうか、素振りしてることよ。ミスならそんなことしないって思っではいるけど、見えると船を壊さないか気が気じゃないのよね」

「……？ なんぞ？」

いや、まあ、確かに考え事しながら甲板で『クワ』の素振りをしていただけで……あくまで素振りだし、実際に耕してるわけじゃないからそんなに気にしなくていいと思うんだけど……？

僕が首をかしげていると、ミミちゃんが「はあー……」と大きなため息を吐いた後、ジトーつと睨みつけてきた。

「フラウシュトラウトへのあの一撃を見た人なら誰だって気にするわよ。……というか、なんで素振りなんてしてるのよ」

「なんでって、その……最近農作業とか土いじりができてなくて、なんだかウズウズするっていうか、落ち着かないっていうか……。こんなに長い期間、冒険に出ることって無かったし、そもそもほとんど海の上で落ちつかなくって」

「だからって、こんなところで『クワ』を振り回さなくつても……」

苦笑いをしてそう言ったトトリちゃんだったけど、不意に表情を変え、頬ほおに手を当ててどこは他所よそを見ながら呟つぶき出した。

「あつでも、なんとなく気持ちわかるかも。わたしも最近『調査』できてないから……。時間ができると、つつい杖でグルグルしちやいたくなつちやつて。……そういえば、初めてロロナ先生が来た時、先生も『調査』しながら「久しぶりだな」なんて言ってたっけ？ 同じような気持だったのかな？」

トトリちゃんの呟つぶきに反応したのは、メルヴィアだった。なんというか……。本当に何とも言えない顔してる。

「ああ……。ロロナさんが始めてきた時ってアレでしょ？ グイードさんに釣られて、あんたたちの家が半壊した……。」「ちよつと待ちなさい。意味わかんないわよ」

「何言ってるのよ」と、ツツコミを入れるミミちゃん。僕も同じ気持ちだ。

ただ……。ロロナがグイードさんの釣竿で釣り上げられたっていう話は聞いたことがあるから、なんとも……。でも、ヘルモルト家が半壊って、何があつたんだろう？

「まあ、そんなことは置いといて。とりあえずマイルスは『クワ』を片付けておきなさい」

「ええ……」

「ええ」じゃないわよ。まったく」

メルヴィアに呆れ気味に言われて、僕はしぶしぶ『クワ』をリュックにしまう。

「……マイスのも、当然のように何でも入るのね」

「え？」

「んーや、なんでも」

「オーイ！ でっかい島が見えてきたぞー！」

『クワ』の素振りをやめさせられてから数時間。海風を感じながら甲板の端で日差しを浴びながらノンビリとお昼寝をしていると、船の先端あたりからジーノくんの元気な声が聞こえてきた。

その声に僕は立ち上がり、そっちのほうへと向かう……。

僕が船の先端あたりへとついたら頃には、すでに僕以外の人も全員来ていた。

「島が見えたの？」

「あつ、いえ。「島」っていうよりは……もしかすると、「大陸」って言うていくくらい大きなところかもしれないです」

僕の問いかけにトトリちゃんがそう答えた。

それを聞きながら船の正面の方向を見る。確かにここに来るまでに見かけたり立ち寄ったりした孤島とは比べ物にならない大きさの影が見える。こっちのほうは未開の地という事もあつて正確な地図も無いため確認することはかなわないけど、おそらく目の前の陸地は「大陸」というものだろう。

その陸地の上空には灰色の雲が広がっていて陸地がうつすらと白く見えるため、もしかしたら雪が降っているのかもしれない。

「なあなあ！ あそこに上陸しようぜ！」

「どうするの、トトリ？」

興奮を抑えられない様子のジーノくん。そして、トトリちゃんにどうするか問いかけるミミちゃん。

トトリちゃんはといえば、ジーノくんほどではないものの興奮している様子で、大陸に目をやったまま「わあー……！」と小さく歓声をあげていた。

「うん！ このまま進んで、どこか船を泊められそうな場所を探して上陸しよう！」

「了解^{りょかい}。んじゃ、ちよつと海岸のほうを見てみようかしら」

「なら僕はイカリのほうを準備しとくよ。使う時には声をかけてくれたまえ」

そう言うと、メルヴィアは望遠鏡を片手に陸地のほうを覗きこみはじめ、マークさんはイカリの用意のために移動しはじめた。

「なら、わたしたちは……」

「うーんと」と小首をかしげるトトリちゃん。その隣でジーノくんが腕をビシツとあげた。

「オレはいつでもいけるぜ！」

「何言ってるのよ、バカ。小島ならまだしも、大陸に上陸するならちゃんとした準備をしなきゃダメに決まってるじゃない。ほらトトリ、必要な荷物をまとめてきましよう」

「うん、そうだねミミちゃん。行こっか」

ビシツと言ったミミちゃんはトトリちゃんと一緒に船内へとむかった。荷物の準備のために倉庫の方へと行ったのだろう。ジーノくんも「おい、ちよつと待てよー？」とその二人を追って行く。

うーん……僕はどうしよう？

他に何か準備するべきことって何かあったっけ？

「あつ、そうだ……！」

海岸

「……で、何してるのよ」

陸地が見えてきてから一時間足らずでたどり着き、船をちようどい海岸に泊め終えた僕らは雪で白く染まった大地に上陸したんだけど……そこでの作業を始めようとしたところで、準備をしている僕にミミちゃんが少し手元を覗きこみながら問いかけてきた。

「ほら。さすがに船をここに放置しとくわけにはいかない。だけど、誰かが残るってわけにもいかないよね？」

「確かにそうですけど……何かあるんですか？」

不思議そうに見つめてくるトトリちゃんに「ちよつと待ってね」と言ってから、必要なモノを全て取り出す。

「よーし！ みんな、出ておいでー！」

取り出したモノ……何種類もの『アクティブシード』を雪の積もった地面へと放り投げる。すると種が成長し……『剣草』、『はにわサボテン』、『マジックソラマメ』、『ジャック』……様々な種類の『アクティブシード』が姿を現した。

この子たちがいれば、船を守ってくれるはずだ。

「ちよ!?! なにこれ!?!」

「ん？ メル姉^{ねえ}、知らねえのか？ この前、オレが乗ってた『ハスライダー』ってやつ仲間なんだってさ」

驚いているメルヴィアに、前に僕が『アクティブシード』の説明をしたことのあるジーノくんが簡単に説明していた。

「これかあ……僕はあんまり好きじゃないんだよね、よくわからないし」

「……まあ、『青の農村』にいるモンスターたちと同じようなもんでしょ。そんな気にはしないわ」

ああ、そういえばマークさんは『プラントゴーレム』も嫌いだって言ってたっけ？ でも、『アクティブシード』も『プラントゴーレム』もすつごく便利で良い子たちなんだけどなあ……？

ミミちゃんは、特に嫌いだったりしてわけないみたい。昔から『シアレンス』でのこととか、モンスタールのことなんかも話してたら、色々と慣れてるのかもしれない。

「そういえば……『アクティブシールド』ならわたしも持つてるからおつと！」

トトリちゃんはそう言うと、ポーチから何かの種……おそらくは『アクティブシールド』なんだろうけど……それを取り出して、地面へ投げた。

そこから生えてきたのは……ああ、思い出した！ いつだったか、前にトトリちゃんにお願いされて『フラム』を二人で調べた時にできた、その見た目から『フラムユリ』って名付けたものだったはずだ。

「げっ!?!」

「んなっ!?!」

「……?」

なんだか知らないけど、『フラムユリ』を見たジーンノくとミミちゃんが驚いて身構えていた。……というか、ミミちゃんは凄いですピードで僕の後ろに隠れて……一体、『フラムユリ』で何かあったのだろうか？

「これで船から離れても大丈夫かな？」

「たぶんね。けど、僕は『アクティブシールド』を何日も放置したことはないから、どうなるかはちよつと……」

一日持つことはほぼ確定だろうけど……そもそも、使用者である僕が離れても大丈夫かっていうのもちよつと不安だし。

そう言ったことも考えると、いちおうの保険もかけておいたほうがいいかな？

「うーん。もうちよつと色々対策しておこうと思うんだけど……ちよつとまだ時間がかかりそうだから、トトリちゃんたちは先に冒険しに行つててくれるかな？」

「えっ……!?! でも、大丈夫なんですか？」

「うん。ちようど雪が積もつて足跡も残りそうだし、追いかけるの

は出来るよ」

そう言うと、トトリちゃんは改めて「うーん……」と数秒悩んだけど、最後には「わかりました。それじゃあ、お願いします」と言ってくれた。

他の皆にも事情を話して、トトリちゃんと一緒に先に行ってもらったことにしてもらった。

「……さて、『アクティブシード』のみんなには船の上と陸とに分かれてもらって……後はあの種を埋めよう」

「あの種」というのは『プラントゴーレム』の種だ。埋めるてから一日経つと、埋めた場所の周囲の土を元に身体を生成するゴーレムで、埋めた人の言う事を聞くようになるのだ。そしてこれは『錬金術』で『調合』した時に偶然数個できたものの残り。

その種を埋めておけば、もし一日経つて『アクティブシード』が種に戻ってしまっても、交代するように『プラントゴーレム』が出来てくれれば船を守ってくれるはずだ。

「早く埋めて、みんなを追いかけないとな」

『クワ』を取り出して、雪に覆おおわれた地面を見つめる。

……これ、雪が厚いと埋めるのに時間がかかりそうだなあ……。

海岸での作業を終えた後、僕はみんなの後を追った。

そして、雪の積もる大地にあった針葉樹の林を抜けたあたりで見えてきた、見たことの無い形の家がいくつもある村と……そのずーっと先にある雲に突き刺さるような細長い塔が見えてきたあたり

……

………僕の耳に、トトリちゃんの悲痛な泣き声が聞こえてきた。

4年目：マイス 「辿り着いたその先に」

『アランヤ村』から船で出発し、フラウシュトラウトを激戦を経て撃退した僕たちは、海峡を越え、数日間の航海の末に雪に覆おおわれた大陸にたどり着いた。

みなで冒険に出るから、その間の船の安全を確保するために僕が少し残ってちよつとした作業をすることに。なので、みんなにはちよつと先に探索を始めておくようお願いして、僕はひとりで作業をした。

「作業」なんて言ったけど、そう大したものじゃない。特別時間がかかるわけでもなく小一時間で終わった。

それからみんなを追いかけた。幸い、雪が積もっていて足跡があつてなおかつ今は雪は降っていないため、みんなの足取りをたどることはそう難しいことじゃない。そうして足取りを追っていると、こんな極寒の地でも群生している樹木があり『青の農村』の近くの林とはまた少し違った雰囲気があつた。

……けど、そんな雰囲気を楽しむ暇なんて、僕には無かつた。なぜなら、そのあたりに差し掛かつたあたりで僕の耳にトトリちゃんの泣き声が入ってきたから。

その泣き声は遠く、わずかにしか聞こえなかつたけど、それを聞き間違いなどと疑うことは一瞬たりともなかつた。聞こえた瞬間、ついさつきまで歩きながら確認していた足跡にも目もくれず、泣き声が聞こえてくる方へと走る……。

林を抜けるあたりで見えてきたのは、『アーランドの街』の建物とも『青の農村』や『アランヤ村』の建物とも違つた形式の建物群……この雪の大地にある村だつた。そして泣き声が聞こえてきているのは、その村の端……少し手前のあたりだつた。

そして僕の目が捉える。

泣き声がしている場所の……雪に覆われた地面に刺さっている板状の石の近くにへたり込み、大きな泣き声をあげているトトリちゃんを。

そして、そのトトリちゃんを少し離れた場所から見守るようにして様子をうかがっているのは、メルヴィアたち。そのそばには見たことの無い子……おそらく、この村の人だろう女の子もいた。

その光景を見て、僕は動かしていた足を止めた。そこにいる誰かに話を聞かなくてもわかってしまったから。

……これが、僕らの冒険の終点であり、ギゼラさんの冒険の終点でもある『最果ての村』へ僕が足を踏み入れた瞬間だった……。

最果ての村

僕は、地面に刺さっている意思の板……石碑から1メートルほど離れた地面の雪の上に座っている。

僕と石碑との間の地面には、僕とは別の誰かが積もった雪に残した跡があるのがわかる。それはもちろん、少し前までここにいたトトリちゃんがへたり込んでいた時に残ったものだ。

石碑の前で泣き続けていたトトリちゃんだったけど、ある程度時間が経つにつれ段々とその泣き声は小さくなっていき、最終的には鼻をすする音くらいにまでおさまっていった。

そしてそのタイミングで、メルヴィアたちのそばにいた女の子がトトリちゃんのほうへと駆け寄っていき、トトリちゃんに何かを伝えた。話の内容は聞きとる事は出来なかったが、立ち上がったトトリちゃんは女の子に連れられて村の奥の方へと行ってしまった。

トトリちゃんと女の子が行ったところで、トトリちゃんが泣いてい

た事もあつてなんとなく合流のタイミングを失った僕は、ようやくみんなのところに行くことができた。……僕がいたことは、トトリちゃん泣いている途中には気がついていなかった。

メルヴィアから聞いたんだけど、トトリちゃんはこの村のまどめ役の人のところに行つたらしい。なんでも、ギゼラさんのことについての話とか。

そのことを知っていたのは、この一緒にいた女の子から聞いていたのか……もしくは、僕がくるよりも前に何かあったもしれない。

そんなことがあつて僕らはとりあえず、まどめ役の人と話をしているトトリちゃんを待つこととなり、各々、村の中やその周囲で時間を潰すことになった。

僕が選んだのは、今いるここ。村はずれの石碑……おそらくお墓なのだろうもの前。雪の上に座っているため、お尻に少し冷たさを感じているはずんだけど、ほとんど気にもならなかった。

ジツと石碑を眺め……何か色々と思つて考えているはずなのに思うように頭が回らない感覚を感じながら、僕はただただひたすらに見続けた。

「ギゼラさんのこと、聞きに行かなくていいの？」

不意にそんな言葉が後のほうから聞こえてきた。

声の感じから、それはミミちゃんだとわかり……なんとなく振り返る気にもなれず、石碑に目を向けたまま答えることとなった。

「行かない……っていうよりも、行けないかな？」

「なんでよ」

「なんでかな、泣けないんだ。すごく悲しいはずなのに……さ」

「だから、行っちゃいけない気がするんだ」、そう続けた。僕は座つたまま、視線を石碑からその先の空へと移す。

見えるのは灰色の雲が広がる空。所々にある小さな雲の切れ間から青い空がうつすらと見えていたりはするものの、この雲の天井はどこまでも広がっているんじゃないかと思えてしまう。

「ギゼラさんなら、あのギゼラさんなら大丈夫だろうって、そう思ってたからあんまり心配にならなかつたんだと思ってたけど……僕が非情なだけだったのかな……」

「それって、どっちかというところと「受け入れられてない」ってふうに思えるわよ。……その気持ちはわからなくも無いけど」

その言葉が聞こえた後、背後のほうから雪を踏みしめる音が近づいてきて……そして、僕から見て右隣のほうでその音が止まった。

「こういうのを受け入れられるかどうかっていうのは、時間がかかったりするものじゃない。別に焦ったりする必要は無いと思うけど」

「そう、かな……?」

「そうよ。私はそうだった、あの時……お母様が亡くなる時、そうだったもの。お母様がかけてくれる言葉はちゃんと聞こえたし憶えられた……けど、自分がそこにいないような感覚になって、なんだかよくわからなくなつて……お母様が亡くなつてからも、泣きはらしてからも、そんな感じだった」

「でもね」とミミちゃんは続けて言った。

「そこから立ち直るきっかけをくれたのは、アナタなのよ、ミス。アナタはあの時、私たちの周りの事をしてくれた。お母様が亡くなつた後は、黙つて家のことを全部して、私に考える時間をくれた。そして、私がお母様の言葉を思い出して一歩踏み出す時には、その手助けをしてくれた……当主の引継ぎの手続きとかそういう難しいことは、ひとづつ人伝に聞いたことみたいでちゃんと理解してなさそうだったりしたけど」

「あはは、そんなこともあつたね。あの時は、エステイさんにお世話になつたなあ……」

「ミスのほうで何があつたかは知らないけど……とにかく、今思えば嫌なくらい気を遣つてもらつたわ。だからこそ気づけた。「このまま泣いてるわけにはいかない、他の人の模範になるような立派な『貴族』にならないと」って」

そう言つたミミちゃんは、しゃがみこみ、僕に並ぶようにして石碑

を向いた。

「まっ、そう考えるようになったらなつたで、何処かの誰かさんがそつくりそのまま大きな壁として私の前に立ちはだかっちゃって、また複雑な気持ちになつていったんだけど」

「ええつと……もしかして、それって僕のこと……なのかな？」

「もしかしてでも、なんでも無いわよ。と・に・か・く！ 悲しんでもいいし、泣いたつていいけど……それでも、ずっと立ち止まっているわけにはいかない。マイスにだつて目標とか、やるべきことがあるでしょ？ ……なら、なおさらよ」

「私は、当然「立派な『貴族』になる」ことと……あと、今は「トトリをツエツイさんたちの所に無事送り届ける」ことかしら」と言つて、ミミちゃんは話を^{しめ}めた。

チラリと横目で隣にいるミミちゃんの様子を確認しようとしたところ、そのミミちゃんと目が合った。どうやらミミちゃんも僕を見てきていたようで、ちようど視線が合わさつてしまったようだ。……そして、その目は「マイス^{あなた}はどうなのよ」という、僕のことを問いかけてくるものだと、一目見てわかつた。

……目標、やるべきこと……そんなものが、僕にあるだろうか？

いや、そもそも今回の冒険だつて「ギゼラさんが気にならない」と言えばウソになるけどトトリちゃんのお手伝いっていう側面が強くて、自分の中にあつた目標とかそういうのじゃなかつた気がする。

なんというか……でも、自分の意思が無かつたとかそういうわけじゃなくつて……。「しないといけない」とかそういう使命感でもなく、何か自分の中で大きな目標があつてそのためにつていうわけでもなく……こう、いつもの自分という感じだつた。

そう。思えばあの時から僕はそんな感じで、『青の農村』ができたり、お祭りを開催し始めたりもしたけど、その根本はそう変わらなかつたんだ。

「あつ。そういえば……うん、そうだった」

「どうしたのよ、いきなり？」

僕がついこぼしてしまっていた呟きに、ミミちゃんが少しだけ首をかしげて問いかけてきた。

「そういえば、あの時……ギゼラさんと初めて会った時も、どうすべきかとか、自分に何ができるかとか、これからの事とか色々考えたなーって思い出して」

「初めて会った時のこと……そういえば、ギゼラさんが村でやった無茶苦茶なことか冒険の武勇伝はミスから聞いたことはあつたけど、その話は聞いたこと無かつたわ」

「ミミちゃんに会うより少し前のことだけど、面白くもない話だったからね。「元シアレいた世界に帰る」っていう目標が潰つぶえて、気力も無くなつて精神的にキツかつた時に、たまたま僕の家シアレにギゼラさんが来たつてだけの話だし。……でも、あれが僕にとっては大きな転機だったかな」

文化も色々と異なる土地……もつと言えば「世界」自体違うのだと考えられる『アーランド』。そこから『シアレンス』に帰るための最後の頼みの綱だった『魔法』。それでも帰れなかつた僕が絶望した数日間。そして出会つたギゼラさん。

あの時、僕は色々と変わったんだと思う。

僕は大きな目標の代わりに、「自分でできること・できそうなこと」に全力で取り組んでいくことにした。農業に、鍛冶、料理。そして誰かのお手伝い。……結局は僕がしてみたいことをしてばかりになつてたんだけど、でも僕がやってきたことの結果、気づけば村ができたり、お祭りが行われるようになったりと何かへと繋がった。

それらが僕自身や周りにどんな影響を与えたかとかはわからない……けど、確かなことはある。あの出来事が無かつた場合の自分を想像することが出来ない……だから「これで良かったんじゃないかな？」と僕は思ってる。

「うん。とつても悲しいことは間違い無いけど……ギゼラさんの事を想^{おも}つて泣いたりするのはひとりの時で、今じゃなくていいのかもしれないね。なら、僕が今することは……」

僕は再び石碑を見て……心の中で一度頭を下げて、ゆっくりと立ち上がる。そして頭の上まで指を組んだ両手をあげて身体を伸ばし、「ふう」と息を吐きながら腕を降ろす。

そして考える。僕が今、この村ですることを……

「この村って食べ物ってどうしてるんだろう？ 石碑^{ここ}ばかりに気を取られてたからちゃんとしてなかったけど、村の中に畑とかあるのかな？ もしそうなら、こんな雪の積もる寒い地域だし、育ててる作物の種類も気になるなあ……」

「へ？ いや、確かにマイルスらしいといえはらしいけど……それでいいのかしら？ けど、他でもない本人が言ってるわけだし……」

……あれ？ なんでだろう？ 何故かミミちゃんがひとりで頭を抱えだしてる。

そんなミミちゃんのことにも気になったけど、すぐに復活したようだから心配はいらないだろう。

そう判断した僕は「それじゃあ、さっそく村の人たちに話を聞いてみるよ！」とミミちゃんに伝えて、人が良そうな村の中心の方へとむかって歩き出した。

「まっ、ちよつとは元気になってくれたみたいだし、これで良かったのよね？ ……マイルスにまでどうにかなられちゃったら、私だって困るもの」

歩いて行くマイルスの背中を見つめながら立ち上がるミミが、ボソリと独り言をこぼす。

自分とは才能も理想も、持っているモノが根本的に違う存在……けど、まぎれもない憧れであり目標であるマイルス。

そんな彼も一緒に長期の冒険。その中で日常や戦闘、そしてつい先程の出来事を間近で見えて感じたものがミミの中でグルグルと回っていた。

「……私も、自分のこれからの事、考える時間が必要なかもしれないわね」

そう言いながら自然と目がいったのは、少し前にトトリが連れていかれたこの村の代表の人の家。今、そこではトトリがギゼラの事を聞いているはずだ。

「トトリも……大丈夫かしら」

「それにしても……」帰る」って目標が無くなるってどういうことなのかしら？ 事情が変わった？ でもそれならもつと違う言い方をするようない……？」

4年目：マイス「帰りの旅路……？」

石碑の前から移動した僕は、村の中へと進んで行き住んでる人たちから食べ物はどうしているのか等、どういった生活をしているのか聞いてまわった。

そうして知ったことなんだけど、僕が予想していたように村の中に畑があつて、そこでの栽培する作物を中心に生活をしているらしい。

ただ問題もあつて、それも予想の範囲内だった。そう、たびたび降る雪によって作物が埋もれてしまうということ。育てている作物が寒さに強いものであつてもそれには限度があるし、当然のことだけ成長の妨げにもなる。さらに言うなら、雪を退けるための「雪かき」は体力も時間も消費するし、下手をすれば作物を傷付けてしまいかねない作業だ。

実際にその畑を見せてもらつて改めて実感したけど、見ただけでやりがいがありそ……大変そうだとわかった。雪が降るのは毎日では無いと思うけど、それでも大変な作業であることには変わりないだろう。

そんな状況を見て、僕は「なんとかしてあげたい」と思ったんだけど、そのための方法が明確には浮かんでこなかった。

一番楽なのは作物の上に雪が積もらないようにすることなんだけど……残念なことに、すぐにできるような方法を知らない。

そもそも『シアレンス』では作物の上……というか畑には雪がほとんど積もらず、多少積もつたとしても「埋もれる」というほどになつたことはなかったのだ。他の地面には積もっているのに、だ。

そのため、僕が作物の上に雪が積もるのを経験したのは『アーランド』に来てから……年末年始の寒い時期の冬の日だ。そして、今現在はほとんど積もらない。おそらくだけど、これには『ルーン』もしくはその集合体・精霊とされる『ルーニー』が関わっている……のかも

しれない。それ以外に違いが思いつかなかったから、という凄く不確かな理由なんだけど……でも、ありえそうな気がする。

そんなふうには、畑で村の人たちと話したりしながら色々調べたり試したりしていたんだけど、そのうちトトリちゃんとミミちゃんが来た。

トトリちゃんが言うには「帰る」とのこと。

今回の冒険の目的はギゼラさんを探すことで、望んだ形ではなかったものの目的は達成されている。確かに長くこの場に留まる理由はない。それに、トトリちゃんが言っていた「おねえちゃんとお父さんに早く教えてあげないと」というのは共感できる。……辛い内容であつても、最期のこととは知っておくべきだろう。

そういうわけで、僕は最果ての村の畑の事に後ろ髪を引かれつつ、帰るための準備を始めた……。

海岸

「まさか埋めた日のうちに掘り返すことになるなんて……でも、放置するわけにもいかないからなあ」

そう言いながら僕が掘り返しているのは、泊めてある船の護衛のために埋めていた『プラントゴーレム』の種。

埋めたまま一日経つと『プラントゴーレム』が生成されるのでこのままにしておく、帰って誰もいなくなつた上に船も無いところに『プラントゴーレム』が一体ポツンといる……そんな状況になってしまう。だから、活動させていた『アクティブシード』たちを回収するのと共に、『プラントゴーレム』の種も回収しているのだ。

……まあ、『プラントゴーレム』になつてから船に乗せて帰るのは色々大変だし、ある意味種の状態でよかったかもしれない。

僕がそうしている間に、トトリちゃんはトトリちゃんのほうで出発

の準備をしている。あとは、ジーノさんとマークさんが村の外に行っていて、その二人を連れ戻すためにメルヴィアが行っている……らしい。というのも、畑にいた僕の所にトトリちゃん和ミミちゃんが来たあの前にすでにわかれていたそう和、それを僕が知ったのは、船を泊めている海岸に行くまでに話を聞いたから。

つまり、二人の回収和僕の回収を手分けをしていたらしい。

……そういえば、ジーノさんとマークさんは「村の外」って言うたけど、何処に行ってたんだろう？

「あら、やっぱりトトリたちの方が早かったみたいね」

遠くからそんな声が聞こえたため、掘り返す作業を一旦中断して僕は顔を動かしてそちらを向けた。

そこにいたのは、こちらへとむかって歩いてくるメルヴィア和ジーノくん、そしてマークさんだった。むこうも僕が見てきたことに気がついたよう和、メルヴィアが「よっ」といった感じに軽く手をあげてきた。

「マイスー？ 何してんの……って、ああ。そういえば海岸から離れる時に船護まもるための何かをするって言うたっけ？ それに関係あるんでしょ？」

「うん、そうだよ。まさか一日足らずで戻ってきたから、用意しておいたものを回収してるんだ。そういうメルヴィアは何処まで行つたの？」

「あたし？ あたしは……ほら、あの村から柱みたいな長細い塔とう見えただしょ？ あそこまで行つたの」

メルヴィアにそう言われて、村の風景を思い出す。

……うん。確かにあった。近いと言えば近いかもしれないそこそこ離れた距離に、灰色の雲の天井に突き刺さるような高い塔があったのを思い出す。

思い出した僕が何かを言う前に、メルヴィアに変わってマークさんが口を開いた。

「遠目で見えた時から気になってね。実際にその足元まで行つてみたん

だ。まっ、残念なことに扉がしつかりと閉ざされていて外回りしか調べられなかったんだけど……でも！ あれはなかなか興味深いものだったよ！ アーランドにある遺跡とは様式が違ってね。もしかしたら用途が違うのかもしれない。そうなると塔の形状も考慮に入れると、個人的にはちよつと残念だけど機械には関係無い遺跡かもしれないね」

「オレは、トトリは村の中で安全そうだからってことで、一緒に行つてたんだ。まっ、モンスターは出てこなかったんだけどさ」

マークさんに続いてジーノくんがそう言う。

「それでもって、二人が出ていくのを見ていて行先を知つてたあたしが「帰る」って言いに行つたってわけ」

「なるほど、そういう事だったんだね」

考えてみれば、二人が出ていったのはトトリちゃんがギゼラさんのことを聞きに代表さん……ピルカっていうおばあさんの家に行った後のことだろう。そう考えると、トトリちゃんはもちろん、トトリちゃんを見送つてから僕のそばに来ていたミミちゃんも、ジーノくんとマークさんが何処に行つたかは知りようが無かつたはずだ。だからメルヴィアだけが知つていて彼女が行つたんだろう。

何はともあれ、これで全員集まつた。

とは言つても……。

「それじゃあ、コッチの作業はもうちよつと時間がかかるから、先に船のほうに行つてトトリちゃんたちの手伝いをしてあげてくれない」

「うん、もちろんそうするわよ」

メルヴィアに続いて、ジーノくんとマークさんも頷いた。

「わかつたー！ マイスも早く来いよー！」

「ふむ。なら、キミが船に乗つた時には出発できるようにしておこうか」

そう言つた三人が船へとあがつていくのを見届けた僕は作業を再開する。

「よいしょつと……ん？」

ふと、積もった雪を踏みしめるような音が聞こえてきたような気がして、地面へ向けていた視線を上げた。

見たのは白銀の世界、そしてその中にまばらに生えている針葉樹たち。音の原因でありそんな人やモンスター姿は見当たらない。

「気のせい……かな？」

「まっ、いつか」と、僕は改めて作業を再開する。

のんびりとやって皆を待たせたりするわけにもいかないから、なるべく手早く済ませないと。

海・船の上

あの後、『プラントゴーレム』の種を回収し終えた僕は船へと乗った。

そこまでの移動の際にも、僕以外の足音が聞こえたような気がした。けど、振り向いてみても誰もいなかった。

「もしかして……幽霊!？」なんて一瞬思ってしまったけど、よくよく考えると幽霊ってフワアって浮いて移動するから足音なんてしないことにすぐ気がついた。パメラさんっていう実例もあるから間違い無いはず。

そんなことを考えながら、僕が一番最後なので船の乗り降りのためのハシゴを回収した……んだけど、その時も甲板を小走りするような足音が聞こえたような気がして振り返った。でも、やっぱり誰もいなかった。……うん、疲れてるのかな？

そんなこともあったけど、無事船は『アランヤ村』へと出発した。ただ、気になることもあった。

出発の号令の時元気に声をあげていたトトリちゃんだったけど、やっぱり元気が無さそうで、どこか無理矢理な空元に思えたのだ。

「未だ詳しいことは聞けていないけど、これまで必死に探し続けたお母さんが亡くなっていたのだから当然のことだろう。それこそ僕なんかよりも大きなショックを受けているに違いない。」

トトリちゃんにかけるべき言葉も思いつかず、とりあえず方位磁針を片手に操舵輪そうだりんのそばにつき、波や風を見ながら進路を確保し続けた。

けど、その航海の途中、僕の気がかりは無くなった。

その理由は、ふと海風に紛まぎれて聞こえてきた会話にあった。

「……えへへ、久しぶりに大泣きしちゃった。恥ずかしいな」

「恥ずかしくなんてないわよ。あんな時くらい、泣いても当たり前じゃない……私だって泣いたんだから」

「ミミちゃんのお母さんも……もう?」

「ええ。あんたと違って、最期の時まで一緒だっただけマシ……いえ、幸せだったんでしようけど」

「そっか……」

「私、さ。小さい頃は体が凄く弱くて、いじめられっ子だったのよね」「うそっ!?!」

「なんで即座に否定するわけ?」

「ご、ごめん。だって今のミミちゃんからだど、全然想像できなくて……」

甲板の中腹……そのあたりから聞こえてくる会話。その声からしてトトリちゃんとミミちゃん。僕のいるところからはちようど見えない位置で確認は出来ないけど間違い無いだろう。

「それで、悪ガキどもにいじめられてよくお母様に泣きついてたの。それこそ数えきれないくらいに、ね」

「……………」

「いつだったかしら? ある日、泣いてる私にお母様が言ったのよ。」「ミミちゃんは立派な『貴族』なんだから、いじめられたくらいで泣い

ちやダメなのよ」って」

そしてミミちゃんが続けて言ったのは、お母さんが教えたという『貴族』のことだった。「生まれた時から偉い人で、偉いから周りの誰も尊敬するような立派な振る舞いをしないとイケない」……といった内容だったらしい。

「ほんと小さかった私はあんまり理解できなくて……ちよつと迷った後、お母様が言ったのよ、「もし、今度泣きそうになったら、私はシュヴァルツラング家の娘なんだ！　って思ってみなさい。力が湧いてきて、きつと我慢できるから」って」

……『貴族』の話も含めて、どこか受け取り方によっては『貴族』であることを鼻にかけているようにも思える内容だけど、僕はそうじゃないって事がすぐにわかった。ミミちゃんのお母さんのひととなりを知っているから、きつと何かミミちゃんに伝えたかった……伝えたかったけど伝えきれなかったことがあるんだろうと。……もちろん、今となってはどういう意図だったのかなんて聞くことはできないけど。

そしてこの話が、僕がミミちゃんと出会う前の話だという事も推測できた。というのも、僕があった頃、泣き出しそうになった時やことあるごとに『シュヴァルツラング家』であることを意識したような発言をミミちゃんがしていたのを憶えているからだ。

「そんな私でも、さすがにお母様が亡くなった時は泣いちゃった、ってお話」

「……そっか。だからミミちゃん、いつつも家のこと……」

「さすがにね、『貴族』じゃなくても凄い人がいるっていうのを間近で見してきたし、この歳にもなれば『貴族』の名前なんて大した意味のないものだってわかってる。けど、それを認めたら、お母様がウソをついてたみたいになっちゃうじゃない。だから私は、シュヴァルツラング家の名前を聞けば、誰もが憧れるような人になりたいって……」

初めて聞くミミちゃんの言葉。

これまで小さかった頃も近くで見えてきて知っていたつもりだった

し、このあいだ仲直りした時に色々と話したからミミちゃんの事を
知った気でいたけど……本当は何も知らなかったんだなあ……。

ミミちゃんが度々口たびたびにしていた『貴族』という言葉。『シアレンス』
にいたところからずーつと関係も無く関心も薄かった言葉だけど、ミミ
ちゃんにとっては本当に本当に大事なものと初めて理解する
ことができた。

「……ありがとね、ミミちゃん」

「別にお礼なんていらぬわよ」

「だって元気付けてくれたんでしょ？ わたしのこと」

「勝手にそう思っただけさ」

心なしか元気が出てきたように聞き取れる声色になってきたトト
りちゃん。それに対しピシッと言い放つミミちゃん。

「……………う……………ああああ……………」

ん？ なんだろう？

声からしてミミちゃんっぽいんだけど……何かあったのかな？

そう思ったのとほぼ同時に、僕と同じ考えを持ったのだろうトトリ
ちゃんの声も聞こえてきた。

「あれ？ どうしたの？ 急に……………」

「なんでこんな話しちゃったのかしら……!? 自分で話しといてなん
だけど、無茶苦茶恥ずかしくなってきたわ……………」

「ええ？ あつ、すごい。ミミちゃん顔真っ赤」

「く、くううう！ わ、忘れなさい！ 今すぐ記憶から消去しなさい
!!」

「む、無理だよ。ぼつちりおぼえちやったもん！」

「普段は忘れっぽいけど、こういう時だけ……………いい!? 絶対に
誰にも言っちゃダメだからね！ 言ったら……………ぜ、絶交なんだから
!!」

「誰にも言わないよ。ミミちゃんが私だけに話してくれたんだもん
ね」

「だから、そういうことを……ああ！ もういい！」

「あはは……なんか、今日のミミちゃん、かわいい」

「普段はかわいくないみたいない方ね。……ま、笑えるくらい元気が出たなら、話した甲斐かはあったかしらね」

「……ありがとう。ミミちゃんが一緒に、本当良かった」

「あんたみたい危なかつしい子を一人になんてしておけないもの」

「……ええつと……なんだか大変申し訳ない気分というか、何と云うか……」

その、僕も聞いてしまってるんだけど……うん、そうだ。僕が聞いてないふりをしておけばいいだけだよ？ そうすれば問題無い……はず。

「そ、それよりも、進路は大丈夫なの？ 変なとこ進んでたら一生帰れないわよ!!」

「……ミミちゃん、また顔真っ赤になってるよ？もしかして、今度のは照れ隠し?」

「ち、違うわよつ!! そうじゃなくて進路よ！ 進路!!」

「大丈夫。今はマイルスさんが見てくれるから心配いらナイよー」

「くつ!! なんてこういう時に限ってマイルスが当番なのよー！ 空気を読みなさい!!」

いや、ミミちゃん。当番制で交代こうたい交代こうたいなのに「空気を読む」なんて言われても一体どうしろって言うのかな？

……そう心の中でツッコみつつも、トトリちゃんが元気が出たことに、僕はとりあえず安堵した。

「あつ……」

……? 今度はトトリちゃんの声みただけど、どうしたんだらう? ?

気にはなったものの、何故か話し声がこれまでよりもトーンダウン

しているようで、しっかりと聞き取る事が出来ず、何を話しているのかわからなかった。

少しの間、聞こえないかと耳をかたむけ続けてみたけど、聞き取れそうにも無かったので「まあ、いつか」と諦めかけたその時……僕のいる方へと二人分の足音が近づいてきているのがわかった。方向からして、トトリちゃんとミミちゃんの間違い無いだろう。何かあったのかな？

そんなことを考えているうちに、二人がヒョッコリと顔を出してきた。

「あのー……マイスさん」

「トトリちゃん？ どうかしたの？」

もしかして、偶然だけど盗み聞きをしてしまったことに気づかれたのかな……？

そう思っていた僕をよそに、何故かトトリちゃんは申し訳なさそうな顔をしている。

「その、実は……『トラベルゲート』持つてるの、忘れてました」

「『トラベルゲート』？ それって確か……」

理論上、言った事のある場所なら一瞬で移動出来てしまうという『錬金術』のアイテムだったはずだ。でも、それがどうしたんだろう……？

つい首をかしげてしまった僕に、トトリちゃんの隣にいたミミちゃんがコメカミに手を当てて、ため息を吐いた。

「それが、船ごと移動したりもできるらしいのよ……信じられないことよね」

「えっ」

「少し演算方法とか座標のこととかもありますけど……アトリエから座標を少しずらして、港から少し出たあたりの海に座標を合わせれば問題無いはずですよ」

そう言ったトトリちゃんに、僕はおそるおそる問いかける。

「船だけが飛んでいって、僕らが海の上に取り残されるって可能性は

「……？」

「無いと思います……たぶん」

たぶんって、凄く心配なんですけど……？

でも、使えるなら使うに越したことはないだろう。

……というわけで、トトリちゃんたちにこの場にはいない三人にその話をしに行かせ、僕はとりあえずすることもないため戻ってくるのを待った。

数分後、船内からトトリちゃんが他の皆を連れて甲板に出てきた。

ジーノくんはよくわかっていない様子だったけど、メルヴィアはケラケラと笑い、そしてマークさんは「はあ。前回に続いて今回の件……本当に錬金術士は頭がいいのか悪いのかわからないよ」と眩きながら首を振ってた。

「え、えっと……それじゃあ『トラベルゲート』を使いますね。えーいっ！」

アラヤ村・埠頭

僕らの視界を光が包んだかと思うと、数秒後にその光が引いた。

そして見えた景色は、見覚えのある港だった。どうやら無事『アラヤ村』へ帰り着いたらしい。

「ふう、本当に船ごと移動出来たのね」

やっぱり、どこか不安があったのだろう。安心したように息をついていたのはミミちゃんだった。

マークさんはマークさんで、アゴに手を当てて興味深そうにしている。

「はあ、やっぱり不可思議ふかしぎなものだね。……で？ 元々あった船の上に移動していたりしないのかい？」

「そ、そんなことないですよっ！ 怖いこと言わないでください！」
そう言つて否定するトトリちゃん。

……でも、見えない場所に移動するわけだからそういう事故も起きたりしそうではある。何か予防策はあったりするのかな？

慌ててる様子の特トリちゃんを見て笑っていたメルヴィアが「さて」と口を開く。

「まあまあ、とりあえず手早く船を港につけちゃいませよ」

「あつ、うん、そうだね！ 早く帰つておねえちゃんとお父さんに、お母さんのこと教えてあげないと！」

「港に船をつけたら、トトリちゃんは早く家に帰つてあげたらいいよ。船の荷物の整理とかはこつちでやつとくからさ」

僕がそう言つと、トトリちゃんは少し迷つた後「……ありがとうございます。ございます」と軽く頭を下げてきた。

……そして、ほどなくして船は港へついた。

トトリちゃんは「それじゃあ、よろしくお願いします」と行つてから家へと走つていった。

「さて。片付けよつか」

「おう！ 俺も手伝うぜ！」

「私も手伝つてあげるから、さっさと終わらせませしよう」

僕の言葉にジーノくんとミミちゃんが元氣よく返事をした。同じく、メルヴィアもやる気はあるようで軽く腕をまわしている。

あと、マークさんなだけど……。

「僕としてはこの船の製作者と話をしてみたいんだけど……お嬢さんが話しに行ったわけだし、数日間間まを開ける必要がありそうだ。まっ、片付けついでに改めて船の細部を見て周るとしようかな」

一応、手伝つてはくれるみたい。

……つと、さつそく始めるとしますか。

「わあ……！ さつきまで海ばっかりだったのに、見たこと無いおうちがたくさん！ ちっちゃなお船もいっぱい！ ねえねえミス、ここがおののうそんつてとこ？」

「違うよー？ ここは『アランヤ村』。『青の農村』はずつと内陸のほうだよ」

「へえ。ここがアランヤ村なんだー」

「そうそう。トトリちゃんの家とかがここにあるんだよー……あれ？」

甲板にあった『たる』を移動させようとしていたんだけど、ふと誰と話しているのか疑問に思った。

今、甲板にはみんないるけど、その誰とも声の感じが違う気がする。でも、最近聞いたことがある声ではあるんだけど……。

そう思い自然と声のした方を向いてみると、そこには『アランヤ村』や『アーランドの街』で見かける服装とはまた違った様式の服と装飾を身に纏った緑色の髪をした女の子だった。背は低く、おそらくは十歳ちよつとくらいだと思われる。

その女の子は、つま先立ちをしながら船の縁から『アランヤ村』を眺めて「うわー！」とか感嘆の声をあげている。

そして、よくよく周囲を見てみると、僕以外の皆もその女の子に目をとめピタリと固まっているようだった。

さつきの声といい、女の子の見た目といい、どこかで……いや、つい最近見たような……？ それに、今さつき僕の名前や『青の農村』つて言ってたから会ったことがあるのは間違いないと思うんだけど……。

「あつ、えつと確か……ピアニヤちゃん、だっけ？」

「……？ うん、ピアニヤだよ？」

僕の声に振り返った女の子は不思議そうにコテンと首をかしげた。思い出した！ 最近も最近……『最果ての村』で会った女の子！

石碑の前で泣いていたトトリちゃんが泣き止んだ後に、トトリちゃんをピルカおばさんの家へと案内した女の子で……その後、僕があの村の畑で土いじりをしていた時にも来て「何してるの？」って話しかけてきた子だ！

その時、畑のことの延長で『青の農村』の事を話したりしたから、僕の名前も『青の農村』のことも知っているわけだ。

「マイスター、あそこ地面に葉っぱがいっぱい！ 白くないよ！」

「ああそっか、あつちは雪が積もってるからね。こっちは雪が積もってる方が珍しいけど、逆にむこうは草が生い茂ってるのが珍しいよね」

「なるほどなー」なんて思いながら笑っていたんだけど、そんな僕の肩にポンツと誰かの手が乗った。振り返って見ると、ジトーつと僕を睨みつけてるミミちゃんがいた。

「ちよつと……何と気藹々と話してるのよ！ 誰よあの子！」

「えっ？ 誰ってピアニヤちゃん。ほら、あの村にいた子だよ」

「あの村って……」

「ああ、確かにこんな子いたような気もするわね。……で？ なんてこの船に乗ってるのかしら？」

驚いたような顔をしたミミちゃん。そしてメルヴィアが思い当たることがあったように頷いて……そして僕に疑問を投げかけてきた。「なんでって、それは………なんで？」

考えてみたけどその理由が思いつかなかった僕は、その疑問をそのままピアニヤちゃんの方へと流した。

よくよく考えてみればそうだ。『最果ての村』にいた子がなんでここに？

ピアニヤちゃんはキョトンとしていたけど………ハツつとしたかと思うと、右手の人差し指だけを立てて口元に当て、目をギュッと瞑って……

「しいっ！」

「いや、それはさすがに無理じゃないかな？」

冷静にツツコミながらも困ったようにモジヤモジヤした髪をかくマークさん。

「えっと……とりあえず、トトリのところに連れてくか？」

何が何だかわかっていなさそうなジーノくんがそう言ったけど……本当、どうしたらいいんだろう？

4年目：マイルス「ヘルモルト姉妹とピアニヤちゃん」

えーっと、なんでか理由はわからないけど船に乗ってついて来てしまっていた『最果ての村』の女の子・ピアニヤちゃん。

当然、そのピアニヤちゃんをどうするかという話になるんだけど……あの村に行く手段は他でもない船しか無く、その船の持ち主であるトトリちゃんには話を通さないといけないよね、ってなった。

けどトトリちゃんは、ツエツイさんとグイードさんにギゼラさんのことを伝えるために少し前に家に帰らせわけで……そこに突入するのはさすがに気が引ける。

僕以外も同じことを思っているようだったんだけど、一人だけ空気を読まない人がいた。

そう、動いたのはジーノくん。「んじゃあ、連れてくかー」とピアニヤちゃんに近づいて行き、その腕をガシツツと捕まえた。いきなりのことにピアニヤちゃんも驚いて「いやー！」とジーノくんを振り解こうと暴れててしまう。

これ、まだ子供っぽさが所々に残ってるジーノくんだったら良かったけど、他の人だったら事件の様相になってた気がする。

……それはひとまず置いてくとして……。

何とかジーノくんの手を振り解いたピアニヤちゃんは駆け出して、僕の後に隠れてしまった。それも、僕の服を思いつきり掴んでしまった。

僕を盾にしてジーノくんから逃げ続けるピアニヤちゃん。……その逃走劇(?)は、その状況を見ていたメルヴィアが呆れ気味に笑いながら「もうマイルスが連れてつたら？」と言うまで続いた。

……で、その結果、なりゆきで僕がトトリちゃんたちの家にピアニヤちゃんを連れて行くことになってしまった。

ピアニヤちゃんは、僕が「トトリちゃんの家に行ってみようか？」と

言う。「トトリのお家？ 行く行くー！」と元気に返事をした。……これ、最初からちゃんと話しておけば、ジーノくんも逃げられなかったんじゃないかな？

気がすすまない中、船のことは皆に任せて僕はヘルモルト家へ向けて港を出た。

港から村へと入った時に、遠目に『バー・ゲラルド』へと入っているグイードさんの姿を見た。なので、とりあえずトトリちゃんはギゼラさんのことを話し終えたのだろうということにはわかった。

……まあ、それでもどういう顔でヘルモルト家へと入ればいいかは思い浮かばず、気はすすまないままで……。

そんな気持ちのまま色々と考えながら歩き続け、結局ヘルモルト家の玄関前にたどり着くまでそれは続いた。……隣にいるピアノちゃん、村の様子を見て興味深そうにしたり、楽しそうに鼻歌を歌ったりしてただけだね……。

ヘルモルト家

……で、ヘルモルト家について、お邪魔したんだけど……。

「私はツエツイっていうの。よろしくね、ピアノちゃん」

「つえ……ちえちー？」

「ふふっ、言い辛いわよねー」

向かい合って床にペタンと座っているツエツイさんとピアノちゃん。上手く言えなくて首をかしげているピアノちゃんを見るツエツイさんは優しく微笑んでいる。

そんな二人がいるそばで、僕はといえばトトリちゃんの前で正座をしていた。

「だから、その……連れてきたっていうのは、あの村からじゃなくって

船からってことで、僕が連れ去ったとかそういうわけじゃないんだって」

「マイルスさんがウソを言うとは思えないし、本当のことだとは思いますが……」

そう。ヘルモルト家に入った後、驚いているトトリちゃんにピアニャちゃんが言い放った言葉……「マイルスに連れてきてもらったのだ！」という一言によって、トトリちゃんが色々と誤解をしてしまったのだ。そのため、今の今までその誤解を解くため説明をし続けた。

その甲斐かあつてか、ようやくトトリちゃんも落ち着いてきたみたい。

「……でも、船に勝手に乗ってきちやっただとしても、その理由って何なんでしょう？」

「さあ？ そればかりは僕もわからないや」

「なんにしても、ピアニャちゃんは村まで送り帰してあげないといけませんね」

トトリちゃん言葉に僕が頷く……それよりも早くに、ツエツイさんと喋っていたはずのピアニャちゃんの声が僕らの耳に入ってくる。

「いや！ ピアニャ、帰りたくない！」

予想外の大きな声に僕もトトリちゃんもビククリしてしまう。

「帰りたくないって、なんで………というか、おねえちゃんまで何で驚いてるの？」

トトリちゃんが言ったから気がついたけど、確かにツエツイさんは口をポカンと開けて驚いているようだった。そして、わずかながら肩を震わせてもいる。

「だって、ピアニャちゃんを帰すって……！」

「そこに驚いてたの!？」

「でも……そうよね。こんなかわいい子がいなくなったら、お家の人も心配してるわよね」

「いや。そうだけど、そうじゃないっていうか……もう！ おねえ

「ちゃんは少し黙ってて！」

「そ、そんな!？」と、さつきまでとはまた違った驚きの表情を見せるツエツイさん。

……ツエツイさんって、こんな人だったっけ？ いやまあ、僕も数えられくらいしかツエツイさんとは会ったことは無いから、僕が知らない一面があってもおかしくは無いけど……。

「それで……ピアニヤちゃん？ ピリカおばあちゃんにも何も言わないで出てきたんだよね？ なら、ちゃんと帰って……」

「やだー！」

トトリちゃんがなんとかしてピアニヤちゃんに言い聞かせようとするけど、村に帰すつて話になるとピアニヤちゃんが駄々をこねてイヤがるため、中々話が進まない。

「絶対心配してるだろうし、でも無理矢理連れてくのもちよつと……どうしたらいいんでしょう、マイスさん？」

「村の外に初めて出て、初めてのことばかりで興奮気味っていうのもあるかもしれないから、少し時間をおいて落ち着いてから話したらいいんじゃないかな？」

「うーん……そうですね。そうしてみるのがいいのかも。それじゃあ、その間ピアニヤちゃんは……」

トトリちゃんがピアニヤちゃんはこれからどうするかを言うその前に、いい笑顔をしたツエツイさんが口を開いた。

「わかつてるわ。私が面倒をみればいいのね。任せといて！」

「別にそうは言っていないんだけど……。それに、おねえちゃんもお仕事あるでしょ？」

「大丈夫よ。ゲラルドさんのお店、お客さんが少ないから私がいなくても問題無いもの」

「それはそうだけど。その少ないお客さんもおねえちゃんがいないかつたら来そうにないし……ゲラルドさんのお店が別の意味で心配になってきた」

そんなふうには、トトリちゃんとツエツイさんが話している。

……まあ、確かに、ツエツイさんもお仕事をしてるからずっと家にいるわけにはいかないし、仕事場の『バー・ゲラルド』は酒場だからピアノちゃんのようなちっちゃい子をずっとおいておくのもどうかとは思う。けど、だからといってピアノちゃんを家に一人にしておくのが心配だというのもわかる。

「もしあれだったら、僕の家で預かるけど？ 絶対はずせない仕事は早朝の畑仕事だけでそれ以外は案外自由だから問題無いよ。もしもの時も、村にも街にもお世話してくれそうな安心できる人がいるから」

僕の言葉には三人とも反応をした。特にピアノちゃんの反応は素早く、パアツと笑顔になったかと思うと、ピョンピョン跳び跳ねだした。

「マイルスのお家って、あおののうそんだよね！ ピアニヤ、行きたい！ 美味しいの、いっぱい作ってるんだよね？ 見たい！ 食べたてみたい！ あとモフモフ！」

『最果ての村』の畑で会った時に『青の農村』のことを色々話したからだろうか。部分部分を記憶していたのだろうピアノちゃんが凄く興奮した様子で跳び跳ねている。

「そんな……！ 胃袋を掴むだなんて、卑怯よっ！」

「卑怯って……。何言ってるんですかツエツイさんは……。そういう話じゃないですよね？」

「ピアノちゃん、お腹減ってない？ 今から何か美味しいもの作ってあげるわよ？」

「わーい！ 食べるー！」

ツエツイさん、全然聞いてない……。というか、ピアノちゃんも切り換え速いなあ……。

「あー……」

台所でゴハンのしたくを始めるツエツイさんと、特に案内もされないのに台所そばのテーブルのイスに座って「まーだかな」と楽しそ

うに待っているピアニヤちゃんを見て、「どうしたものか……」とひとり呟いていた僕に、トトリちゃんが声をかけてきた。

「その、マイスさんのところに預けるっていうのは、ちよつと遠慮したい、っていうか……」

「そうなの？ トトリちゃんなら『トラベルゲート』ですぐに来れるし、いいかなーって思ったんだけど」

僕がそう言うと、トトリちゃんは何故か僕から目をそらしながら「それはーその……」と続けた。

「なんていうか、ピアニヤちゃんが戻ってこなくなりそうで……」

「住み着いちゃうってこと？ いやでも、向こうで役立つような冬の気候の土地での作物栽培のことを教えるつもりで、むしろ帰る準備になると思うんだけど……？」

「その、物理的な意味じゃなくって……マイスさんの家で、マイスサンと一緒に生活してたら、ピアニヤちゃんがマイスさんみたいに感覚とかがズレちゃったり一般常識から飛び出してしまうって、普通こつちに戻ってこれない残念な子になっちゃうんじゃないかなーって思ってる」

「……あれ？ これって遠回しに、僕が残念な人だって言われてる？」

アランヤ村・埠頭

「……というわけで、ピアニヤちゃんはヘルモルト家に滞在することになったよー……」

「それはわかったけど……なに本気で凹へこんでるのよ」

「いや、だって……」

港で船の整理をちようど終えていたみんなに、ヘルモルト家であった事の経緯を簡単に説明し、ピアニヤちゃんがどうなったかを伝えた。そこで、ミミちゃんが落ち込んでいる僕にツツコミを入れてきたのだ。

答えになつてない僕の言葉に眉をひそめたミミちゃん。苦笑いをしてるメルヴィアがミミちゃんの肩をポンポンと叩き「まあまあ」といさめている。

「察してあげなさいよ。「ウチで預かるのを、トトリちゃんに遠慮された」なんて言つてたけど……そこでトトリの毒舌にやられた、つてことでしょ」

「ああ……」

「ん？ 何が？」

メルヴィアの的を射た推測に、ミミちゃんに加えマークさんも納得したように声をもらしていた。神妙な顔をしているメルヴィアもだけど……もしかして、三人は似たような経験があったりするのかな？ けど、ジーノくんは何が何だかわかっていない様子で、首をかしげて不思議そうにしている。

「まっ、トトリのアレはいつものことだし、マイルスもそんな気にしない方がいいわよ？」

「うん、頑張つてみる……」

「頑張るって……本当に大丈夫かい、キミは？」

マークさんにも心配されているみたい……

でも、シャキツとしないといけないっていうのも事実。僕は自分の頬をパンと叩き、気持ちを入れ替える。

「そ、それはともかく！ 長期間あけてたから心配つてこともあって、今から僕は『青の農村』に帰るつもりなんだけど……二人はどうするの？」

そう言った僕が目を向けたのはミミちゃんとマークさん……『アランダ村』に住んでいるメルヴィアやジーノくんとは違う、『アーランドの街』に住んでるメンバーだ。

その内、先に答えたのはマークさんのほうだった。

「僕はもう少しここに滞在しようと思ってるよ。前にも言つたけど、あの船を造った人と是非とも話してみたいし……それに、色々と改良の余地もありそうだったから、その辺りについても意見交換したいか

らね」

「私は……でも、トトリはギゼラさんのこともあるし、ピアさつきニヤのこともあって大変そうだから、街に帰ろうかしらね。……トトリも色々考える時間があってもいいでしょうし」

『アランヤ村』に残るマークさんとは違い、ミミちゃんの方は街に帰るつもりようだ。

せっかくだし、送って行ってあげようかな？ 移動時間の短縮になるから、ミミちゃんも助かるはずだ。

その考えがミミちゃんにもわかったようで、目を合わせると「じゃあ、後で村の入り口で」と言われた。

てつきり「あんたの手は借りないわ！」とか言われると思ったんだけど……その辺の基準はミミちゃんの中でどうなってるんだろう？

まあ、嬉しいからいつか！

4年目：マイス「帰還」

青の農村・マイスの家前

「よつと」

ピアニヤちゃんのことと忙しそうなたトリちゃんや、なんだか近寄れない雰囲気でゲラルドさんと話していたグイードさん以外の人たちに、帰る事を伝えてまわった僕は、『青の農村』へ帰ることにした。

『魔法』を使って『アランヤ村』から一瞬で帰ってきた僕は、久しぶりの『青の農村』をグルツと見渡す。僕の家の前から村全体が見えるわけじゃないけど、見える限りでは特に変わったところは無さそうに思える。

「ふーん、やっぱり似てるわね。けど、『魔法』も『錬金術』も便利なおことは違くないけど、ちよつと慣れないわ」

僕の隣でそう言っているのはミミちゃん。『アランヤ村』の入り口付近で合流して、一緒に帰ってきたのだ。

ミミちゃんが比べているのは、トトリちゃんが使っていた『トラベルゲート』のことだろう。確かに似たようなものだけど、厳密には色々違う……と思う。『トラベルゲート』の原理を知らないから、なんとも言えないんだよねえ……以前、トトリちゃんに聞いてみようかと思ったこともあったけど、結局その機会が無くてそのままだ。

「そういうえば、今の以外にも『魔法』ってあるのよね？ 他のやつを使ってるどころ、見たこと無い気がするんだけど……」

そう少し眉をひそめて僕に問いかけてくるミミちゃん。

ミミちゃんには昔、いろんな事を物語風の話にしたりして話したことがある。『ルーン』のことや『はじまりの森』のこと、世界を創ったという『四幻竜』のことなんかも話した。その中で『魔法』についての話もしているから、いろんな種類があることは知っているのだ。

「確かに他にもあるし、僕は使えるけど……でも、一番「使い勝手がい

い」というか「使う機会がある」のが『リターン』なんだ。他のも少し調節すれば普段の生活でも使えなくはないけど、基本的に戦闘向きのばっかりだし」

「へえ……その割には戦う時にも使っていないんじゃない？」

「まあ、大抵の場合は剣で斬ったほうが早いからね……そんなこともあるから、『シアレンス』の僕以外の人も『リターン』が一番使ったと思うよ」

別に魔法攻撃がダメージが低いとかそういうわけじゃない。ただ単純に使う必要性が無い場合がほとんどだというだけ。別に使ってもいいんだけど……そもそも僕は『魔法』が苦手でもないけど特別得意なわけでもない。だから、剣で戦ったり……モコモコ状態で殴る投げたほうが手っ取り早いのだ。

まあ、属性攻撃に弱い相手に関しては、適した属性の魔法を使つて上手く立ち回るとというのが有効的だったりする。……けど、『アーランド』に来てからはそのあたりを気にして戦ったことはない。後は、剣とかよりもリーチが圧倒的に長いというものもあるんだけど……そこまで必要になる機会は無い。

あつ『フラウシュトラウト』との戦いでは剣は届き辛いから使おうかとも考えたけど、大波が段々高くなつてて時間をかけられないこともあつて、僕一人で攻撃するよりもみんなで思いつきりやつた方が良さだろつてことで、結局『魔法』は使わなかったんだよね。

あと、『シアレンス』のみんなの魔法事情だけど……一緒にダンジョンに行った時なんかに使ってる人もいたけど、それ以上に別のところですれ違つたかと思えば僕が行つた先にいたりする「瞬間移動」が何度もあつたため、おそらくは『リターン』とかは頻繁に使われてたと思う。

ああ『魔法』といえば、このあいだの冒険の間にも色々して、そろそろ実際に他の人に……

そんなふう色々考えていたんだけど、ふとミミちゃんが少し細

めた目で僕の事をジイーっと見つめてきている事に気がついた。

「どうかした？ あつ、髪にゴミが付いてた？」

「そんなことじゃないわ」

「…………… なら何なんだろう？」

そう思い、ミミちゃんのことを見たまま首をかしげてしまった。

すると、ミミちゃんは何故か僕から目をそらして口を開いた。

「ねえ…………… マイスさん」

「うん？」

「……………ちよつと聞きたいことがあるんだけど、あなたが前にいた場「ん？ おつ！ マイス、帰ってきてたのか!？」

ミミちゃん何か言おうとしたところで、冒険中は聞けなかった久しぶりの声が元気に……………というか、勢い良く聞こえてきた。声のした方へと目を向けると、そこには冒険に出る前に色々村の事を頼んでおいたコオルがいた。それも、何故か慌てたように僕のほうへと駆け寄ってきてる。

…………… つ！ もしかして、僕がいない間に何かあった!？」

「どうしたの!？ なにか……………」

「はい！ これ返す!!」

目の前まで来たコオルは僕の右手首を掴みあげたかと思うと、指を無理矢理開かせた後、その手になにかを握りこませてきた。

「オレは返したからな？ あと、二度とこんなもん預けんな!」

「えっ!？ ……つて、コレのこと？ だから、そんな大事なものじゃないし……………」

「はあ……………こっちの気も知らずに良く言ったもんだ」

コオルは呆れたように大きなため息を吐いてるけど、コレってただのカギだし、大切じゃないって言えばウソになっちゃうけど、なくなったらなくなつたでどうにかしようがあるからなあ……………。

そう思っていたのが、顔にでも出てしまってたのかな？ コオルが「わかってないあたりも相変わらずだな」と苦笑いをしながら呟いていた。

そして、「まつ」と言葉に区切りをつけた後、さつきまでの「笑い」とは違ったニカリとした軽快な笑みを浮かべた。

「冒険の結果がどうだったとかは聞かないけどさ、マイルスが元気そう良かった。オレたちはみんなそう思うはずさ。……街の連中に顔出しに行つてきな。こつちには夕飯前くらいに帰つてきて、それからみんなに会えばいいって」

「えっ」

「えっ」じゃねえよ！ なんだかんだ言つても『青の農村』の連中は長い間お前がいなくて心配してたんだよ！ だからその分、お前が帰ってきたわけだし今晚は村をあげて宴会でもしようかってわけだ。そのくらい察しろよ」

そう言うとコオルは「ほら、行った行った」とシツシツといった感じに手で払うような仕草をした後、村の『集会場』のあるほうへと駆け足で走っていった。村のみんなに僕が帰ってきたことを伝えに行つたんだろう。

「良かったわね。ずいぶん慕われてるみたいじゃない」

「うん、まあそうなんだけど……あつ、そういえばミミちゃん、何か言おうとしてなかった？」

「……出鼻をくじかれたし、またでいいわ。ほら、さつさと移動しましょ？ そうじゃないと、あんた夜までにここに帰つてこれないわよ」

そう言つてミミちゃんは村の外へと続く道……その内、『アーランドの街』方面の道を歩き出した。

コオルに言われたのもあるけど、元々街の人たちにも挨拶をしに行くつもりだったので、僕もミミちゃんを追いかけるようにして街へと向かうことにした。

その、街までの道中……

「そういえば、さつき渡されてたカギって何だったの？　なんだか、あの男の人の様子が変だったけど……？」

「村ができたころに『モンスター小屋』の近くに建てた『倉庫』のカギだよ。普段使う素材なんかは『作業場』のコンテナに入れてるんだけど、そこに入れられなかった素材とか「出荷し過ぎないように」って手元に残した栽培し過ぎた作物とか、普段触らないような大きな金額のお金とかを保管してある場所なだけ……」

当然のように、その『倉庫』の中は『錬金術』のアイテムの効果により中のものが腐ったり痛んだりといった劣化が起きない状態に保たれている。そのため、入れた時と同じ状態で保管されている。そんな優れ物だ。

「そんなところのカギを渡してたの!？」

「うん。僕がいない間、何かあった時にその助けになるかなーって思ってた」

「つまり、マイスの財産のほとんどを預かったようなものよね……そんなもの持ち歩きたくないし、すぐに本人に返したいに決まってるわよ」

ミミちゃんと何気ない会話をしながらたどり着いた『アーランドの街』。

街に入った後、顔見知りの人とすれ違って挨拶をしたり馴染みのお店に顔を出したりもしたんだけど、途中立ち寄った『ロロナのアトリエ』は留守だったみたいで、ちむちゃんたちしかいなかった。ロロナは調査のための素材を採りにでもいつていたのだろうか？

そんなことがありながらも、僕は街中を歩き続けていた。

最終目的地は『冒険者ギルド』。ミミちゃんも今回の冒険のことで『冒険者』として報告することがあるらしく、僕について来ていた。

冒険者ギルド

「ここもいつも通りだね」

「そんなニコニコ変わられても困るでしょ」

ミミちゃんのツツコミに「それはそうだけど……」と返しつつ、僕は入り口付近からカウンターのほうへと目を向けた。

入り口から見て真正面にあるカウンター……そこは『冒険者免許』のあれこれを取り扱う受付なんだけど、そこにはいつもの受付嬢がいた。

間違い無い、クーデリアだ。

そう思って、その受付に真っ直ぐ歩いて行く。

途中、クーデリアも僕に気がついたようで、少しだけ目を見開いた後うつすらと笑みを浮かべ……たかと思えば、ため息をつくような動作をし、組んでいた腕のうち左手で僕から見て左のほうを指差した。

クーデリアの意図がよくわからず、とりあえず釣られてそっちの方を見てみると……依頼そとの受付には、何か喋っている様子の踊り子のような恰好をした人と二体のネコの人形の後ろ姿があった。そして、おそらくそのカウンター向こうには、いつもの受付嬢がいるんだろう。

クーデリアもその二人の事を僕に教えようとしたんだろう。僕はつられるようにして進行方向をそっちへと変える。

「元気そうなのは何よりだけど……お喋りばかりしてクーデリアに怒られないようにね？」

「大丈夫だよー。そんなことで怒られることなんて……たまにしかない

いし、そんなに気にしなくても……………」

僕の声に、そう答えた受付嬢……………ファイリーさんは不意に動きをピタリと止め、後ろを向いていたリオネラさんは声に反応してこっちへ振り向き固まった。

「ま、ミス君!!」

「ファイリーさん、リオネラさん、ひさしぶり!」

「ひさしぶり……………じゃなくて!? 怪我とか……………無いよね、ミス君だもん」

「ひさしぶりだね、ミスくん」

なごんだり、驚いたり、一人で解決したりと忙しそうなファイリーさんに対し、リオネラさんは心なしか声はずんでいるもののそれ以外はいつも通りの様子だった。

僕はリオネラさんの両脇でフワフワ浮いている二体のネコの人形に対しても声をかける。

「アラニーヤとホロホロもひさしぶり。調子はどう?」

「いつも通りってところかしら」

「まっ、これで「ミスくん、大丈夫かな?」って延々と心配する眩きから解放されると思うと、むしろ今から絶好調って感じだな」

ホロホロがそう言うと、リオネラが「ちょ、ホロホロ!」と焦ったように声をあげた。そんなことを気にした様子も無く、ホロホロは続けて言ってきた。

「ついでに言うと、ファイリーもファイリーで面倒だったぜ? 例の枕をモフモフし続けて「モフモフが足りない」とか呟いてたし……………あれはちよつと気味悪かったな」

例の枕……………?

そう言われてすぐには思い出せなかったが、いつからだったか、ファイリーちゃんにお願いされて作ってあげた金のモコモコのモコモと綿でできた枕があったのを思い出した。

つまり、昔から金モコモコをモフモフするのが好きで定期的にモフモフ

していたフィリーさんが、僕が遠出をしている間モフモフできず、枕で何とかしようとしたけど結局満足できない状況が続いてた……つてことか。

そう思ったのとほぼ同時に、僕は背中がゾクツと寒くなったように感じた。

「だから、その……ね？ 今度、いや今からでもモフモフさせて……ね？ ねっ！」

「……いや、そう言われても」

フィリーさんが金モコをモフモフするのは昔からなんだけど、激しくなればなるほど精神的にキツくなっていくんだよね。体は疲れて無いはずなのに、気力が根こそぎなくなるというか……。

だから、今回みたいなパターンはマズイ気がするから、できれば断りたいんだけど……断ったところで、後回しになるだけだったりするのが辛いところだ。

「ちよつと」

不意に、僕の後ろの方から声をかけられた。

……とはいっても、僕はさつきまで一緒にいたから……つてあれ？ そういえば途中からいなくなった気もするけど……僕が勝手に動

いてたとはいえ、一体どこにいつてたんだらう？

「モフモフ」って何よ？」

「それはもう、その言葉通りモフモフっつとすること……」

その人の問いに答えたフィリーさんだったが、今日何度目かの硬直……でも今日一番の固まりっぷりで硬直した。

「げえっ!? み、みみみミミちやつ！ ミミ様!？」

「さつきの言い方だと、まるでマウスをモフモフするかのよう……って、毎回毎回ビクビクしないですって言ってるじゃない！ いつ治るのよ、それは！」

そういえば、いつだったかフィリーさんはミミちゃんが苦手だという話を聞いたことがある。まあ、今のミミちゃんは気が強い感じがあ

るし、昔からフィリーさんが苦手意識を持っているタイプに当てはまりそうだから、苦手になってもおかしくないのかもしれない。

「いえ、そのっ！ モフモフするのはモコちゃんをであって、べ、別にミス君をつけてわけじゃ……！」

「……そうなの？」

そうミミちゃんが問いかけたのは僕……じゃなくて、リオネラさんだった。

リオネラさんは性格的にはフィリーさんに似ている部分があるけど、フィリーさんと違いミミちゃんを怖がったりはしていないようだ。以前に、僕の家で一緒にいた期間があったからかもしれない。

「えっとね、ただ『青の農村』にいるモンスターを愛^めでるっただけで、それ以上のことは特には……」

「その中でもフィリーのお気に入りの子がいるっただけのことよ」

「ウソじゃねーぞ？」

そうアラニーヤとホロホロが補足するように言うけど………まあ、確かに言ってることはウソではない。

けど、ミミちゃんが言っていたように「僕をモフモフする」っていうのも間違っていないんだけどね。

そう、リオネラさんたちに言われたミミちゃんだったけど、やっぱりどこかふに落ちないようで、難しい顔をしている。

「……でも、それにしてはなんか動揺し過ぎな気もするんだけど？」

「そっそそんなこと、ないよっ？」

「んや。今の返答じゃあ「何かありますよ」って言ってるようなもんじゃねえか」

「シーツ！ こらっ、そんなこと言ったらダメじゃない！」

ホロホロとアラニーヤが余計なことを呟いているようにも思えるけど……そのせいかどうかはわからないけど、どうやらミミちゃんはフィリーさんを問い詰め続ける気のようにだった。

「あははっ……どうしよう、これ？」

「どうしようもどうしようも無いわよ。たつく、予想以上にうるさくしてくれちゃって」

困って一人で笑ってしまっていた僕のすぐ隣に、いつの間にかクーデリアが来ていた。カウンターも越えて来てるんだけど……仕事は大丈夫なんだろうか？

そんな僕の心配をよそに、クーデリアは一番近くにいる僕くらいにしか聞き取れそうにもないような小さな声で言ってきた。

「冒険の結果。大まかなことはあのミミって子から聞いたわ。言いたいことも、聞きたいことも色々あるけど……まあ、それは今度飲みに行った時にでもゆっくりと聞かせてもらおうわ」

そこまで言ったところで……初めてクーデリアは僕の顔を見た。

「なにはともあれ、冒険お疲れ様。あと………おかえりなさい」

4年目：イクセル「団体様ご案内」

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。アールランドの街にある『サンライズ食堂』を任されているコック……といっても、もうこうやって働くようになってから長いし、そんな自己紹介に力を入れる必要もねえかな？

さて、月明かりが街を照らし始めている今日の『サンライズ食堂』なんだが……ちよいといつもと違った状況だったりする。

「いや……昼にミスから「今日、クーデリアと飲みに行きますね！」とは聞いてたが……」

注文されていた料理たちを、先に出しておいた飲み物のグラスに気をつけながら置いてから、オレは短く息をつきながら肩をすくめた。

「なんか増えてないか？」

「あはははっ……すみません」

別に正式に『予約』として席を確保したりしてたわけじゃねえから人数が増えてもそう問題無い。だから謝ってきたミスには「別に悪いってわけじゃないぜ？」と言っておく。

そう、たとえ二人から七人に増えても……。

「いや。でも、どうしてこうなったんだ？」

俺が疑問を口にする、ミスが「それは……」と説明し始めた。「冒険から返ってきた時の約束だったんだけど、今日改めて飲む約束をクーデリアとしたんだけど……その後、家でフィリーさんとリオネラさんたち会って、今晚僕の家泊まっていいか聞かれて、約束があるから家をあげるって話から久しぶりだし一緒に行こうかって話になっただけ」

名前を出されたフィリーとリオネラが「ど、どうも」といった感じ

に軽く頭を下げてくる。

……ついでに、ネコの人形のホロホロ・アラニーヤも「よお」と手をあげてきた。マイルスが言った「たち」ってのは、このふたりのことだろう。律儀に数に入れる、そういうところはマイルスらしいちゃあらしいけどな。

そんなマイルスの後を引き継ぐようにして、クーデリアが「……で」と喋り出す。

「あたしはあたしで、「あの話」をするならコロナもいたらいんじやないかって思って、コロナを飲みに誘いにアトリエに行ったの。……そしたら、コロナを挟んで睨み合ってる職務放棄常習犯と元騎士がいて、二人を無視してコロナを飲みに誘ったらコロナがその二人を誘っちゃって……」

「それはーその……ケンカなんてしないで、みんなで楽しく過ごせたらなーなんて思って」

笑いながら言うコロナに、それ以上何も言えないのか諦めたようにため息をつくクーデリア。

そして、そのクーデリアに「職務放棄常習犯」と言われたトリスタンは「最近我真面目に仕事してるつもりなんだけどなあ」と不服そうに呟いていて……「元騎士」のほうのステルクさんは言われ慣れてしまってるのか無反応でいつもの仏頂面だ。

……というか、この時点でツツコミどころがいくつもある。例えば、フィリーとリオネラ当たり前のようにマイルスの家に泊まろうとしてる事とか、トリスタンとステルクさんがアトリエで睨み合ってた理由とか。

まあ、前者のほうは、直接その場を見たことは無いが前にも何度か話には聞いていた。そして後者のほうは、元々あの二人は性格が正反対というかそりが合わないので仲が悪くて昔から剣呑な空気になることはあったから、その延長だとも考えられなくはない。

……まっ、そういうのは考えたところでどうしようも無いから、ひとまず置いておいて、だ。

「この面子^{メンツ}が集まるのって、何気に初めてじゃねえか？」

そう。今日『サンライズ食堂』に来ている七人。俺も入れると八人だが知らない仲間じゃない。八人のうち七人は、ロロナ本人を含め王国時代にロロナの手伝いをしてきたメンバーで、共に採取地へ行ったりもしたことがある間柄だ。

そして、その中に含まれていない一人・フィリーだが、冒険こそ一緒に رفتたりしていないものの、王国時代からマイルスとリオネラとは非常に仲が良く、その関係で王国祭の時なんかにはロロナやクーデリアといった他のメンバーとも顔を合わせたりもしている。そして、アーランドが共和国になった後……フィリーが『冒険者ギルド』の依頼の依頼の受付嬢になってからは国勤めの連中を中心に関わりが深くなっていた。あとは……フィリーの姉のエステイさんが何かと顔が広がったっていうのも大きいかな？

そんなわけで今ここにいるメンバーは、多少個人個人に浅い深いの差はあれど、少なからず長い付き合いのある間柄ってわけだ。

「た、確かにそうかも……」

「私、マイルス君やリオネラちゃん、クーデリア先輩とは一緒なことはあるけど、こんな大人数は初めてだよ」

リオネラとフィリーが頷き合っている。……が、注意深く見ればわかるがこの二人、ステルクさんとは絶対に目を合わせていない……いや、合わせられないと言ったほうが良いかな？ あの二人、ステルクさんの顔を見ると悲鳴上げて気絶したりするし。

けど、いつだったかマイルスが「少し改善して、話せるくらいにはなつたよー」とか言ってたんだが……コレじゃあ本当か怪しいな……。

「みんなそれぞれ都合があるからね。お仕事があったり、冒険に出てたり……僕だとお祭りの準備や片付けとかの日もあるし」

「偶然にしる何にしる、とても珍しい状況だとは思うよ。……できれば、そういう運はもっと別の機会に使いたいものだけだね」

マイルスの言う通り以前に比べ、何かしらの役職についたり、人気になつて仕事が増えたりしている。だから、ただ単純に時間が取り辛く

なっている部分もあるだろう。

まあ、昔もさすがにこの人数は集まらなかったけどな。そういう意味ではトリスタンが言っているようにかなり珍しいだろう。

「でも、ちよつと前にここに集まったことがあったような……?」

「そういえば」と思い出したように呟いたのはコロナ。

確かに、人数は今よりも少ないもののたまたま集まった時があった。けど、あの時は……。

「確かあの時は、あたしとコロナ、イクセルとステルク……あとは、トリとマイルスが途中で来たかしら?」

「ああ。あの時か……」

クーデリアが当時の事を思い出しながら、指折り数えてメンバーを言っていく。そして、ステルクさんが釣られるようにして、その時の事を思い出し短くため息をついた。……気持ちはわかる。

「あの時は……なあ?」

俺がそう言ってみると意図が通じるヤツには通じたようで、クーデリアとステルクさんが「うんうん」と頷き、コロナとマイルスが「あはははっ……」と苦笑いをこぼしていた。

ただ、その時いなかっただトリスタンやフリーは何のことかわからないようで、軽く首をかしげている。……が、その場にいなかったはずのリオネラが申し訳なきように口を開いた。

「あの、もしかしなくても、あの時のこと……だよな?」

「でしょうね。あの時はマイルスに迷惑かけちゃったわね……」

「つつても、アレは半分くらいマイルスも悪いだろ」

リオネラのそばに浮いているホロホロとアラニーヤがそう言った。

まあ、ふたりが言ったようにあの時のゴタゴタはマイルスのせいって言うのは間違っていない。

「……で? 結局何のことなんだい?」

しびれを切らしたトリスタンが疑問を口にした。

「えつとですね。街に帰ってこないりおちゃんとかジオさんがマイルス

君のところ定期的に来てて、それがバレてくーちゃんとステルクさんが暴れちゃって……」

「そういうキミこそ、ホムあの少女が訪れていたことを知ったら彼に掴みかかったじゃないか」

「そ、それは……！　だって、マイルス君がほむちゃんのことを秘密にしていたからっ！」

そう慌てたようにステルクさんに言うロロナだったが、その話を聞いていたトリスタンは「ああ」と納得したように呟いた。

「なるほどね。マイルス彼が責められてるのは秘密にしてたからか。……けど、彼がそんなことするとは思えないんだけど」

「それがだな、街に寄ってから来てるもんだと勘違いしていて、特に誰かに言ったりすることは無かったっていう天然丸出しの理由でさ」

「……それは彼らしい失敗だ」

「えっと、話はわかりましたけど……なにもマイルス君本人の目の前でそこまで言わなくても……」

「……ううん、いいよフィリーさん。あれは、僕が悪かったんだから……でも、ちよつとへこむなあ」

何とも言えない感じで始まった飲み会だが……忘れちゃならないことがある。

そう、俺は『サンライズ食堂』を任されているコックであるということ。客が入れば接客しなきゃならんし、注文が入れば厨房に戻って作らなきゃならない。

幸い、今日はそこまで客は多くないが、それでも度々たびたびあいつらがいるテーブルからは離れないといけなくなる。……こんなことなら、俺の権限で多少無理矢理にでも貸し切りにしときゃよかった。つっても、このメンバーになるっていうのは、当のマイルスやクーデリアにも

わかっていなかったことだから仕方ないんだけどさ。

そんなわけで俺はテーブルから離れているんだが……今ちようど、あいつら以外の客の最後の一組が支払いを済ませて出ていった。

それを見送りつつ……ついでに、店先の看板を「OPEN」から「CLOSED」変えてしまう。もうこれで、今日は客は来ないだろう。身勝手な感じもするが、今日は昼間に繁盛したし、売り上げ的には問題無いだろうと自分に言い聞かせて店内へと戻る。

「そういえば、コロナちゃん最近アトリエにいなかった時期があったけど何してたの?」

「んつとね、ステルクさんと一緒にちよつと調査に行ってたの。ほら、例の各地に現れてるっていう新種のモンスターの」

「私のところの依頼には出てないけど、噂はよく聞くよね。その新種のモンスターとの縄張り争いで他のモンスターたちも活発化してるっていうし……」

「いようがいまいがどうでもいいし、こんな夜中まで仕事しろってわけじゃないけど、あんた大丈夫なの?　口うるさく言われてたりするんじゃない?」

「親父にかい?　心配はいらないよ。「マイスとの約束で」って言ったら「そうか」の一言だけでそれ以上グチグチ言わなくなるから。……あつ、そういえばマイスに「今度、また飲みに行こう」って伝えてって言われてたんだっけ?」

「失礼を承知で言うが……私は時折、キミのその童顔が羨ましく思うことがある。少しの話なのだが、一日で子供三人に顔を見ただけで泣かれ、その上「その子供たちの方がお気の毒だ」とトトリ彼女の弟子に言われ……」

「そんなこと言ったら、僕はステルクさんのその身長が羨ましいです

……。それに、ステルクさんって顔が怖いと言われるって気にしてま
すけど、『ウオルフ』みたいなカツコイイ顔だと僕は思いますよ?」
「……それは褒めていいるのか? いや、待てよ……そういえば、キミの
村の人間にはそう怖がられた覚えが無いような……?」

あいつらがいるテーブルでは、みんながみんな食べ物や飲み物を口
にしたりしながら、各々好き勝手に喋っている。

にしても、今日は珍しくマイルスとステルクさんが一番酔いが回って
そんな雰囲気だ。マイルスは一緒に飲む相手によつてペースが変わる
し酔払うことも時々あるからそこまででもないが、ステルクさんがあ
そこまで飲んでいるのは初めて見る気がする。

そんなことを考えたり、みんなの会話に耳をかたむけたりしなが
ら、いくつかの料理と自分の分の飲み物とを用意する。そして、それ
らを持ってテーブルの方へとむかった。

テーブルにたどり着くよりも先に、ロロナが俺に気付いて「おーい
!」と手を振ってきた。

「イクセクーん! あれ? どうかしたの?」

「ちようど客も途切れたし、俺も参加しようと思つてな。ていうか、店
も閉めて貸し切り状態にした」

「なら、厨房を借りて僕が何か作つてきましょうか?」

マイルスの申し出を「いいよ。追加で作つてきてあるから」と断り、別
のテーブルからロロナが持ってきたイスに勧められるままに座った。

「それじゃイクセクーんも来たことだし、改めて……かんぱーいっ!」

ロロナの声に合わせて、俺を含め他のメンバーも「かんぱーい」と
自分のグラスをあげた。

「ええつと……何のお話してたっけ?」

「さあ? バラバラで途中入れ替わったりししながら喋ってたから、明
確に何の話ってわけじゃなかったし」

「はて?」と首をかしげるロロナにクーデリアが「別に何つてわけ
じゃなかったわね」と言ってる。

そこに、薄ら笑いを浮かべているトリスタンが面倒な提案をしてきたのだった。

「じゃあ仕切り直しってことで、ここはイクセル彼に新たな話題を提供してもらったらどうだい？」

「おいっ、無茶振りかよ!？」

いやまあ、確かに会話の流れを止めたのは俺だろうけど、それはいくらなんでも……といっても、酒がすでに入っていることもあって、コロナを始め大抵のメンバーが止めるどころか期待の眼差しを俺に向けてきてるから、逃れにくいことこの上ない。

話題ってなんかあったか……？　いつそのこと、仕事の片手間で耳にしていたこいつらの会話を掘り返して聞いてみてもいいんだが、そんな中何か気になったこととか……。

「……ん？　そういや、最初の時にクーデリアが言ってた「あの話」って何だったんだ？　なんかマイルスと……あとコロナとも話す予定だったみたいな感じに言ってたが……」

俺がそう言うと、クーデリアとマイルス以外が「あつ、そういえば……」といった感じに二人のほうを見た。その様子からすると、まだその話題はあがっていなかったようだ。

「ああ、アレね。……とはいっても、今その話をしてもいいものかしら？　でも、今ここにいるのは見知った顔だけだし……」

「……悩むようなことなのか？」

俺がそう問いかけるとクーデリアは「ええ、まあ」と少しまだ迷いながらも頷いてきた。

「ほら、ちょっと前までマイルスが長く冒険に出てたじゃない。その話をしようって約束を帰ってきたマイルスとしててね」

「このあいだのって言うと、トトリちゃんたちと船で海に出た、あの……」

フィリーがそう言ったことで、コロナとステルクさんを中心に他の面々も何のことかわかったようで、表情が変わる。個人的に一番関わりが薄いと思っていたトリスタンも何の事かわかったようで、珍しく

真剣な表情になっていた。

当然、俺にも心当たりがあった。以前に店に来たトトリから船を造っているという話を聞いていた。それにこの前は、ウチに野菜を卸しているマイルスから「長い期間、家をあけるから」との話しを聞いていた……その目的も。

「確か、トトリの母親……あのギゼラさんを探しに行ったんだっただよな？」

まだトトリは街には来ていないが、マイルスは帰ってきている。……だが、帰ってきたマイルスが特別喜んでるような様子も見せていないから、ギゼラさんはまだ見つかっていないだろう。ギゼラさんの手掛かりが見つかったのか、それとも中々見つからず一旦帰ってきたのかはわからないが……何かあったんだろうか？

「……なるほど。それでロロナ彼女も誘おうとしていたのか。弟子の事を心配していたからな」

「そ、それを言ったらステルクさんだってジーノくんのこと心配してたじゃないですか！」

ステルクさんとロロナがそんなふうにしたが……それよりも気になってしまうのが、いつの間にかテーブルに突っ伏しているマイルス。寝ているってわけじゃなさそうだけど……。

「……お墓が、ありました」

そう、唐突にマイルスが言った。

テーブルに突っ伏しているためか声が若干くぐもっているが、その声はしっかりと聞こえてきて嫌と思えるほど耳に残った。

「……そうか」

沈黙した『サンライズ食堂』の中で最初に口を開いたのはステルク

さんだった。その顔はいたっていつも通りに見える。

しかし、そのステルクさんの一言に釣られるようにして、マイルスは突っ伏したまま喋りだした。

「フラウシュトラウトに遭遇して、撃退して。海峡を越えてずっとずーっと行った先の雪の積もった大陸、その海岸近くにあった村のはしっこにお墓があつたんです」

「……ってことは、フラウシュトラウトにやられて、そのまま流されてその大陸までたどりついたってことか……」

俺も『フラウシュトラウト』という外洋に生息するモンスターのは聞いたことがあつた。だから、海上という不利な状況でさすがの冒険者ギゼラも負けてしまったのではないか、と思つた……………

「あつ、たぶんそうじゃないと思います」

「……はあ？」

マイルスはテーブルからいきなり顔を上げたかと思うと、首を少しだけかしげながらいつものように喋りだした。

「だって、船が壊されて流れ着くにしても大陸からは遠すぎて無理がありそうですし。それに、その村の人たちもギゼラさんの名前とか知ってたから、普通に生きてたんだと思いますよ？」

「えっ？ ええっ!? ま、マイルス君どういふこと!? でも、トトリちゃんのお母さんのお墓があつたんだよね？」

「あつたけど……そのあたりのことはトトリちゃんが知ってると思う」

混乱した様子でマイル스에 問い詰めたロロナだったが、当のマイルスは相変わらずの調子で妙な返答をするばかりだった。

「ちよつと待って、マイルス君……」

「もしかして、その……何も知らないの？」

何とも言えない変な空気になり始めたところで、その場にいる全員の気持ち代弁するようにフィリーとリオネラが問いかけ……みんなの視線がマイルスに集まる……。

「えっと、実は……」

「実は」じゃないわよ、この大バカ!!」

「あいたつ!? ちよ、叩かなくっても……」

「いや、マイルス。さすがにこれは俺もクーデリアを止めねえわ」

クーデリアに勢いよく「パツシーン!」と頭をはたかれるマイルスを見て、俺はため息をもらしつつ苦笑いをした。

「だって、ほら! 大泣きしてたトトリちゃんの隣について行って話を聞くななんて邪魔になるだろうし凶々しい気もするし。それにその後も、まだ泣きたいはずなのに一生懸命元気なふりをして「おねえちゃんとお父さんにも教えてあげないと」って言ってるトトリちゃんに「僕にも教えて」なんて言える神経を僕は持ってないし……」

「……まあ、それはそうだろうが……何というか、こちらの悲しみ損と
いうか、真面目に聞いたこと自体おかしく思えてな」

ステルクさんのため息交じりの言葉に、マイルスは「えっ! そんなに!」とショックを受けていた。

「つくづく思うけど、マイルス^キって抜けているというか……色々と残念な感じだよな」

「と、トトリちゃんにも言われたけど、トリスタンさんにまで……」

いや、でもこの場に関してだけで言うと、ほぼその意見で満場一致になると思うぞ? マイルス。

まあ、そんなわけで仕切り直しの話題だったはずが、また改めて仕

切り直す必要ができるほどグダグダになったわけだ。

……その後、思いつきりへこんだミスがやけ酒気味に飲みだした
ことにより別の意味で大変になったんだが……それは誰にでも想像
できるほどベタな酔いつぶれ方だった。

5年目：マイルス「いつもの日常と、あとちよつと」

マイルスの家前・畑

船での長期の冒険の都合で手入れができていなかった家の前の畑。ただ、『青の農村』のモンスタ_子ーたちが気をきかせてくれていたみたいで、最低限ではあるものの整備をしてくれていたみたいで、特別荒れたていたりすることはなかった。

そんな畑だけど、僕が手をつけることができたのは冒険から帰ってきた翌日、街や村の人たちに挨拶をしてまわった後、夜『青の農村』の皆でちよつとした宴会をし、家に帰って寝て、起きてからだった。

……冒険の間、『プラントゴーレム』の種を埋めた時以外ほとんど土いじりができていなかったこともあって、久々の畑仕事はすつごく楽しかった。

それから数日。その間にも、みんなと飲みに行ったり、他にも色々とおったんだけど……。

今日の朝、畑を確認してみると、比較的育ちの早い『カブ』が収穫できる大きさまで大きくなっていた。農業を再開して初めての収穫となる。そして、その『カブ』は「過去最高の出来」と言えるほどの傑作_{けっさく}だった。

その『カブ』の内の一つを手に取りクルツと一回転させて状態を確認し、大きく頷いた。

「うん！ これなら今年のアレにも問題無いだろうね。堅さも申し分ないし……となると、今回の収穫は全部そちにまわしたほうがいいかな？」

自分の食べるものことなど他のことで使う機会が無いかを思い出し、今後の予定を考えて行く。

うーん……。ここまで出来が良いと幾らか残しておきたい。それに、やっぱり自分でも食べてみたい。けど、確保しておかないといけ

ない個数もあるし、それは余裕を持って余分に用意しておきたい気がする。

そう考えると現時点では色々と厳しい部分があるんだけど……

「……けど、まだ時間的には少し猶予があるから、収穫したところでまた新しく『カブ』を育てれば、アレの前にはもう一回は収穫できるよね？　なら、今日収穫したのは、使うのと確保しとくのは半々にしておこっか」

今さつき収穫したばかりの『カブ』たちを二分して別々にし、一方は自分の家で保管して、もう一方は村の『集会場』で保管すればいいだろう。

あとは、畑の空いたスペースに『カブの種』を蒔まかないといけないから、家のコンテナから取ってこないといけない。

考えがまとまった僕は、さつそく行動に移そうとしたんだけど……ちようどそこに声をかけてくる人がいた。

「ふむ、相変わらず朝早くから精が出るな。出来は……もはや、聞く方が失礼かな？」

その声に戻り返ると、畑から少し離れた道にジオさんがいた。

コツチへとゆつくりと歩いてくるジオさんに、僕は笑いながら挨拶を返す。

「おはようございます、ジオさん！　それと、出来のことは失礼でも何でもないんで聞いてくださいよ。僕だって、今日みたいにもいつも以上に出来が良い時はちよつとだけ自慢したいんですから」

「……ふ、ふはははっ！　そうかそうか、それは悪かった」

僕の冗談交じりの返事に、ジオさんは一瞬動きを止めて目をパチクリとした後、笑い声をあげながら軽く謝ってきた。

……それにしても、笑い過ぎな気もするけど。

未だに笑みを浮かべているジオさんは、僕のすぐそばまで来ると二つに分ける作業の途中の『カブ』たちに目を止めた。そして一通り見た後、大きく頷いた。

「なるほど。確かに良い『カブ』だ。これは、君が自慢したくなるとい

うのもわかるというものだ」

「はい！ 本当に良い出来で、これなら自信を持って『カブ合戦』に使えます！」

『青の農村』の年始、毎年恒例のお祭りとなつている『カブ合戦』。それには良い『カブ』が必要なんだけど、今日収穫した『カブ』は申し分無いだろう。この『カブ』なら思いっきり投げられて地面とかにぶつかつてもグシャリと潰れてしまつたりはしないだろう。

「今月末に開催する予定なんですけど……そうだ！ ジオさんも参加してみませんか？」

「あの祭りにか……。興味が無いわけじゃないが、遠慮しておこう」「そうですね？ ちよつと痛いけど楽しいですよ？」

「だがなあ。私が参加したとすれば、アイツも参加して私に「日頃の恨み」とばかりに『カブ』を全力で投げつけてきそうでな……」

「アイツ」と言われて一瞬誰なのかわからなかったけど、少し考えたらそれがステルクさんの事だとわかつた。

確かに、ステルクさんはジオさんの事を探し回っているし、日頃愚痴を時は「王はく」「あの方はく」と大半がジオさんに向けたものだ。時々、ロロナのことや無茶をする新米冒険者のことも言つてたりするけどね。

でも、ジオさんとステルクさんの真剣勝負の『カブ合戦』も見ごたえがありそう……と思つたけど、それに巻き込まれる他の参加者が大変そうなのもすぐに想像できるから、僕のほうから言つておいてあげただけど、参加はしてもらわない方がいいだろう。

……よくよく考えてみると、『青の農村』にはジオさんやステルクさんが参加して楽しむそうなお祭りが少ないことに気付いた。

以前、二人揃つて参加してくれた『大漁！釣り大会』のような釣り系なら楽しんでくれそうではあるけど……。これまで催し物の企画を考える時には選択肢に入れてなかつたけど、今度は剣とかを使うようなお祭りを考えてみようかな？

僕が、一人でそんな考えに浸っていることに気付いてかどうかはわ

からないが、ジオさんは話に節目を付けるかのように一つ咳ばらいをして、改めて口を開いた。

「まあ、元氣そうで何よりだ。……さて。少しばかり話をしたいのだが……時間はあるかな？」

その問いに、僕は「種を蒔いて、水をあげたら」と伝えた。

……畑仕事はまとめてやらないと「後で」なんて思ってたらウツカリ忘れてしまうっていうのは、これまで何度も経験してきたからよくわかってる。

マイスの家

畑仕事を終えて身支度を整えた後、軽い朝ゴハンを用意して先にリビングダイニングに入って待ってもらっていたジオさんの前にも置く。

「ああ、すまない。朝早くからいきなり訪問したというのに、ここまで用意してもらってしまって」

「気にしないでください。友達が泊まりに来ることも多くて、朝に複数人分を用意するのも慣れてますから」

「それに、この村は食材を追加するのも楽ですから」と、『青の農村』であることを全面的に押すような言い方で、付け加えて言っておいた。

「さて。今日ここに来たのは、君に頼みたい事があるからなのだよ」

朝ゴハンの途中、食べる手を止めたジオさんがふとそんなことを言いだした。

「……その前に二つ、確認しておくことがある」

「確認……？　なんですか？」

「キミは『アーランド共和国』が、『アーランド王国』とその周囲の村や街、地域が併合して出来たものだと知っているね？　そして、そ

の動きは今でも続いている。事実、併合の準備をしている国や地域が今もあるのだが……まあ、それはひとまず置いておこう」

そこで、朝ゴハンと一緒に出していた『香茶』を一口口ひとくちひとくちにするジオさん。そして「ふう」と一息つくと再び話し出した。

「併合したからには、アーランドはその一帯も平和に保たねばならん。その責務が私にはある」

「それはまあ……国の一部になったわけですし、ジオさんは国王を辞めても『共和国』首長ですし」

けど、それが何なのだろう？

そう疑問に思っただけで、その疑問が解消される前にジオさんが「次にだが……」と別の事を話しだした。

「最近、新種のモンスターらしき存在が確認されている。数はそれほどでもないらしく、人の住む地の近くには出没していない……が、その新種たちと縄張り争いがあったのか、他のモンスターたちの動きが活発になり、一部獰猛になっているともいう」

「それは、噂くらいには聞いたことがありますけど……」

確か、このあいだ『サンライズ食堂』で飲んだ時に、ロロナとリオネラさんとフィリーさんもそんな事を話していたはずだ。あとは、『青の農村』を立ち寄る行商人の人たちもそんな事を言っていたのを憶えている。

……ついでに言うと、その行商人たちは「その点、ここは良い。この周囲の街道は『青の農村』のモンスターたちの縄張りで他のモンスターが近寄らないからね」と村の中にいるモンスターを撫でながら言っていた。

「……で、だ。一つ目の話がここで関わってくる。ココからは少々離れた地域なんだが、その活発化したモンスターたちが偶然か何か徒党を組み、侵攻してしまった地域があつてだな……」

「えっ!?!」

「幸い、迅速な対応が行われモンスターたちも撃退でき、人的被害はほとんどなかったんだが……迎撃のために様々な物資が大量に消費さ

れたうえ、モンスターたちの侵攻によって農作地も荒れてしまった。元々、特別豊かな土地で無く蓄えもそう多くなかったこともあって、一番の問題は食料でな、次の収穫を待つこと無く近いうちに蓄えが尽きてしまうことは目に見えているそうだ」

それは間違い無いだろう。畑が荒れてしまえば、作物の栽培はまた一から始めなければならぬ。ものによつて成長速度に差があるけど、そうすぐ育つものは少なく、そういうものほど一回の収穫で採れる量は少ないのが基本だ。

そして、荒れた農作地で作物を育てている間食べられるものは限られているわけで……そこに住んでいる人たちの人数にもよるけど、そういう厳しい状況だと言うことは間違い無い。

……ん？ ということは、さつきまでの話の事も考えると……もしかして、僕へのお願いって……。

そう僕が思い当たったのとほぼ同時に、その予想通りの言葉がジオさんの口から出てきた。

「そこで、アーランドから支援物資を送りたいのだが……」

「それを『青の農村』も協力して欲しいってことですね」

「そう。国での蓄えもあるにはあるのだが、量が量なのでな。食料関係に関しては一大生産地である『青の農村』に半分ほど出してもらいたいんだ」

「それ以外の物資はこちらが……」と、あくまで作物等、食料関係に絞って手を貸して欲しいと言うジオさん。

対して僕は……まあ、そんな話を聞いてしまつては何もしないわけがない。

「はい！ ぜひ協力させてください！ ……でも、どこから確保しよう？」

そう。問題が全く無いわけじゃない。

『青の農村』でも色々と蓄えていたり保存しているものはあるんだけど、あれらを管理しているのは村長僕じゃなくてコオルのはずだし、

その量は僕は把握していない。だから勝手に「使ってください」とは言えないし、もし支援物資として出してしまった後『青の農村』に何かあったら、今度は『青の農村』が大変なことになってしまう。それでは元も子もない。

「あつー！」

ウツカリ忘れていたけど、あるじゃないか！　すぐに動かさせて勝手に使っても誰も困らない、そんな蓄えが！

それに、あそこなら作物の他にも『鉱石』とかもある。食べ物だつて採れたてのまま保管していたもの以外にも、日持ちがとても良くなった加工品もたくさんある。

何の問題も無くなった僕は、さつそくどのくらいに必要なのかジオさんに確認をしてもらうことにした。

その後、実際に僕の『倉庫』にジオさんを案内したんだけど……。

「私に娘でもいれば……いや、連中に「財産目的では」と言った手前……だが、野放しにしておくのも、いかななものか……」

それに本人の意思が……」

何だかわからないけど、すつごくブツブツ言い出していた。

5年目：マイルス「ロロナの心配事」

ロロナのアトリエ

「さて！ 今日みんなに集まってもらったのは他でもありません！」

「ふんすっ！」と気合十分でそう言ったのは、このアトリエの店主であるロロナ。そして、そのロロナに「みんな」と言われたのは僕たちなんだけど……。

「……集まったとは言っても」

「オレらとマイルスだけなんだけどな」

そう言ったのは、ソファーに座っているリオネラさんのそばに浮かんでいるアラニーヤとホロホロだ。

ふたりが言ってる事は事実で、ソファーに座ってるリオネラさんとそのそばにいるアラニーヤとホロホロ、そして僕もリオネラさんと同じくソファーに座っていて、ロロナはそのソファーの正面あたりで両手を腰に当てて立っている。……以上だ。

……と、そのことに不満があるのか、ロロナは頬を膨らませる。

「うーっ、なんでー!? 他の人たちにも声かけるようにいったよね？」

ロロナの疑問にリオネラさんが「それは、その……」と答え始めた。「えっと、フィリーちゃんは受付のお仕事があるから……クーデリアさんも同じで……」

「イクセルさんももうそろそろ昼のかき入れ時ときだからお店を離れられないよ。トリスタンさんはメリオダスさんに怒られてて無理っぽくて。あとステルクさんは……病院で寝てる」

リオネラさんに続いて、僕が他のメンバーについて言ったところ、ステルクさんの話のところでもロロナが「ええっ!?!」と目を見開いても凄く驚いた。

「ええっ!?! なんでステルクさん、病院で寝てるの!?! 大丈夫なの!?!」

ワタワタと慌てふためきながらもステルクさんのことを心配するロロナ。

……けど、話を聞けばすぐ落ち着くと思う。だって……

「少し前から『青の農村』にジオさんがお仕事で来てて、今日たまたま出くわしちやったみたいで……それでその、ステルクさん、派手に負けて気絶したんだ」

「あ、あはははっ……な、なーるほどー………というか、またジオさんに挑んでたんだね」

さっきまでの心配は何処へやら。以前に似たような状況を経験したことがあるのか、ロロナはすぐに理解して安心(?)していた。

でも、確かに「日常茶飯事」とまではいかないけど、ジオさんを見つけたステルクさんが戦いを挑んで返り討ちにあうということは時々あることだ。だからか、なんとというか「あつ、また頑張ってるんだなあ」程度にしか思わなくなっている。

……ジオさんに負けた後のステルクさんは、僕に鍛練の相手を頼んできたりするんだけど、それだけが少しだけ面倒なんだ。

別に鍛練とか試合とかが嫌なわけじゃない。けど、想像すればわかるかもしれないけど、ジオさんに負けた後つてことでステルクさんが少し気が立っていることが多くて、そういう時以外にする手合わせよりも限界ギリギリまで戦うことやりあうになるから凄くつかれるんだよね……。

「そんなわけで、僕たち以外は来てないんだけど……結局、どういう用なの？」

僕がロロナに聞いてみると、ロロナは「あつ、それはね」と素早く切り替わり、僕らに声をかけた理由を喋りだす。

「実はね、トトリちゃんのことなんだけど」

「トトリちゃんの？」

そう聞き返してみると、少しうつむき気味に頷いたロロナ。

そんな様子や「トトリちゃんのこと」っていう言葉で、僕にはロロナが言いたいことが大体わかった気がした。

「ほら、探してたトトリちゃんのお母さん、亡くなってたんだよね？」

それで、今はまだトトリちゃんむこうにいるけど、こつちに来た時何

かしてあげられないかなーって思っ

「ロロナちゃん……」

「やっぱり、そういう……」

予想通りといえば予想通りなんだけど、それはそれで少し困っ
てしま

というのも、こう言った話というのはやはり繊細なものだと思
う。色々根掘り葉掘り聞いたりするのは当然失礼だし、逆に絶対に触れな
いように意識してしまい変に距離を取ったりしてしまっても「気を遣
わせちゃってる」と思われてしまい、申し訳ない気持ちにさせてしま
いかねない。

「特に何もしないでいつも通りにしておくのが一番じゃないかな？」

「だな。「いつも通り」ってのは面白みに欠けるかもしれないけど、一
番安心できるもんだと思うぜ？」

「そうね。それに、街に来るのは気持ちに整理がついた頃だと思
うから、特別してあげられることもないんじゃないかしら？」

僕に続いてホロホロとアラニーヤがそう言った。

ロロナはといえば、まだ納得していないみたいで腕を組んで悩
み続
けている。

「先生として何かしてあげられればいいんだけど……でも、ホロく
んやラニヤちゃんが言ってることもわかるんだよね……」

「ミミちゃんとケンカしてた時みたいに、わたしはいつも通
り
……？」と、やっと考えがまとまりだした様子のロロナ。

つと、そこに……

「つーかよ、トトリアイツつてもう街に来ないんじゃないか？」

「……えっ？」

ホロホロがポロツとこぼした一言に、ロロナが目を見開いてピシッ
と固まった。

「だってよ、アイツが街に来るのって『冒険者』として色々やらなきやならねえことがあるからだろ？ で、今回、冒険者になった理由の「お母さんを探す」ってのが無くなったんだ。なら、『冒険者』辞めて『アランヤ村』でノンビリすごすってこともありえるだろ？」

「え……………ええええええっ!?!」

数秒間固まっていたロロナだったけど、復活と共に、両手で頭を抱えるようにして過去最大かもしれないくらいの絶叫をあげた。

「ちよつ……………ホロホロ?!」

「あんたねえ。ちよつとは後先考えてものをいいなさいよ」

ホロホロを咎めるリオネラさんとアラニーヤだけど、当のホロホロは「けどよおー」と特に悪びれた様子は無さそうだった。

「でも、ホロホロの言ってることもわからなくはないんだよね」

「そ、そんなあ!？」

「いや、あくまで一つの可能性としては、だよ？」

今にも泣き出しそうな表情でシヨックを受けるロロナをなだめつつ、僕はその辺りのことを考えてみる。

そもそも、トトリちゃんが『冒険者』になったのはホロホロが言っていたように「お母さんを探す」だ。……………で、トトリちゃんは昔からそう思っ、でも自分は強くないし何もできないから、と諦めていた。そこに現れたのが、たまたま『アランヤ村』を訪れて……………というか、行き倒れてたらしいロロナ。そしてそのロロナが見せた『錬金術』に可能性を見出しロロナに教えてもらい『錬金術士』となった。

『錬金術士』になったトトリちゃんは『ヒーリングサルヴ』といった傷薬や『フラム』といった爆弾など、初歩的な錬金術のアイテムを調合して、「これなら私でも冒険者になれる。お母さんを探しに行ける！」と『冒険者』になるために『アーランドの街』に行くこととなった……………。

……………と、この一連が街に来るまでの流れだったはずだ。全て人から聞いた話だということや、ツエツイさんがトトリちゃんが『冒険者』に

なることを反対したこととか途中にあつた出来事を省はぶいているもの、大きく間違つてはいないだろう。

そうなると、ホロホロの言つたように大元にある「お母ギゼラさんを探す」という動機が無くなった以上、これから先『冒険者』を続ける理由も無くなり街に来ることも無くなつてしまつてもおかしくないと思えるかもしれない。

けど、それはトトリちゃんが昔から何も変わつていない場合に限り、それと違う。

実際のところ、僕はトトリちゃんが『錬金術士』や『冒険者』を辞めてしまうとは思えなかった。なぜなら、『錬金術』で調査している時や色々な採取地を冒険している時のトトリちゃんが「お母さんを探すため」というだけでなく、それとは別に楽しんでいるように感じられていたから。なら、「なる理由」だったものが無くなったところで「辞める理由」にまでならないんじゃないかな?……というのが、僕の考えだ。

……もちろん、さつき言つたように「一つの可能性として」トトリちゃんが辞めてしまう可能性は残り続けているとは思うけどね。

「僕個人の考えだけど、トトリちゃんが『冒険者』や『錬金術士』を辞める理由は無いと思うし、安心していいんじゃないかな?」
「で、でも……」

それでもどこかそう思えてしまう要素があつて不安が残っているんだろう。どっちにしろ「絶対」とは現時点では言い切れないことはロロナ自身もわかっているのかもしれない。

「はっ……!!? そうだ!!」

不安そうに眉を力無くへニヤリとさせていたロロナだったけど、いきなり顔を上げて手をポンと叩いた。

『錬金術』は楽しい! そう思ってもらえれば続けてくれるよね!」「え、ええつと、ロロナちゃんが言いたいことはわかるけど……具体的にどうするの?」

「というか、ロロナの中ではトトリちゃんが辞めようとしてる事が前提になっちゃってるんだね」

僕のほうから「そういう可能性もある」って言うておいてなんだけど、ずいぶんと後ろ向きというか……いや、それでも悲観しきっていないことを考えると、むしろ前向きなのかな？

……と、僕はそんなことを考えていたんだけど、ロロナは僕のツツコミは耳に入っていないなかったのかりオネラさんに言われたことを考え出してた。

「うーん？　実際に何か調査して……でも、それじゃいつもと同じかあ。他に何か……あつ、アレだ！」

「アレ？」

ロロナが言ったことに、僕とリオネラさんが首をかしげて聞き返した。すると、ロロナは「そうだよっ！」と元気よく応え、僕の手をガシツツと掴んできた。

「マイルスくん！　一緒に調査しよう！」

「一緒に？　……って、ああ、そういうことか」

「そうっ！　わたしとマイルス君と一緒に調査すればとっても楽しいし、出来るものもきつと面白いものはず。それならきつとトトリちゃんも喜ぶよー！」

「本当にそうかどうかはひとまず置いてさ……なんだか、ドンドン最初の話からズレていつてない？」

ちよつと先行きが心配になって、聞いてみたんだけど……またもやロロナは最後まで聞いてなくて、「よーし！　ならさつそく準備つ準備！」と、アトリエ内のコンテナのほうへと足取り軽くスキップして行ってしまった。

「……んで、何のことなんだ？」

「一緒に調査」とか言うてたけど……？」

さっきの僕とロロナの会話の内容がよくわからなかったんだろう。ホロホロとアラニーヤが僕に聞いてきた。……少しだけ首をかしげ

ているリオネラさんも、おそらくはふたりと同じ状態なんだと思う。「前の話なんだけど、トトリちゃんとロロナ、トトリちゃんと僕とで、二人で一緒に一つの錬金釜を混ぜて調査したことがあって……ロロナが言ってたのは、そのことなんだと思うよ」

「えつと……それって、楽しいことなの？」

「微妙かな？　だって、トトリちゃんとロロナが調査してた時は何でも『パイ』になっちゃって、ロロナは「先生はジャマだから手伝わないでください！」なんてトトリちゃんに言われてショック受けてたし……」

リオネラさんの問いかけに、僕はそう返した。もう二、三年前のことだけど、一緒に何かしたがって結果怒られてショックを受けていたロロナの姿はよく憶えている。なんというか、少しだけどっちが師匠なのかわからなかったなあ、あの場面は……。

そういうことを思い出してみると、下手をするとむしろトトリちゃんをイライラさせてしまいかねないような気もしなくも無いような……？

「でも、まあ……」

僕は、鼻歌交じりにコンテナを漁あさっているロロナの後ろ姿を見て、小さく呟いた。

「あんなロロナを見てたら、難しいこととか色々考えてるのが馬鹿らしく思えちゃうような気もするんだけどね」

「うん、そうだね。なんていうか、こう……無意識に和なごんじやうとか。そういうのもロロナちゃんの良いところだと思う」

「だな。つーか、やっぱり何かしようとしなくて、いつも通りにしてりゃいいんじゃないか？」

「でしようね。……とは言っても、あんな楽しそうにしてるのを止める気にはならないけどね」

そう言って、僕とリオネラさんたちは顔を見合わせて笑った。

その様子に「どうしたんだろう？」と、コンテナを覗いていた顔をあげて振り返ってきたロロナだったが、結局は何もわからなかった

みたいで首をコテンツとかしげた後、またコンテナを漁りだした。

「……そういえば、ロロナちゃんとトトリちゃんだと『パイ』になって……マイスくんだとどうなったの?」

「僕がトトリちゃんと一緒に調合すると、調合しようとしたものが何かしらの形で現れる『アクティブシード』になったね。『中和剤』がずっと湧き出したり、『フラム』が敵にむかって勝手に射出される……そんな動く植物」

「なんというか、いまさらだけど……」

『錬金術』ってのは、本当に何でもありだな」

その後、ロロナと一緒に「ぐるぐる」と『ヒーリングサルヴ』という傷薬を調合してみたんだけど……出来たのは、拳大の『種』だった。

僕とトトリちゃんがトトリちゃんと調合した時みたいになったのかと思っただけど、試しに植^使えてみたところ、生^はえてきた『アクティブシード』は手のひらサイズの『パイ（1／6ピース）』が『実』のように鈴なりに生^なっている木だ。当然のように木の根や枝は生きているかのようにウネっている。

「……というか、この生ってる『パイ』の中から少し溢^{あふ}れてる緑色のつて……」

その色や、調合に使った素材から考えて『ヒーリングサルヴ』っぽいんだけど……大丈夫なのかな?

「はむっはむ。……うん! おいしーよ!」

僕が注意深く観察している横で、ためらいも無く^も腕^もいで口に運んだロロナ。

……一応、おいしいらしいけど……どんな味なんだろう? という

か、そもそも本当においしいのかな？

前にホムちゃんから聞いたことがあるんだけど、昔コロナが作ってたっていう『エリキシル剤』という薬を使った『エリクパイ』は「エリキシルテイスト」……まあ、遠回しに言って不味まずかつたらしいけど……ある点を除けば同じ薬系である二種類の薬なんだから、『ヒーリングサルヴ』も不味そうなんだけどなあ？

「……ね、ねえ、マイルスくん」

震え気味の声で僕に耳打ちしてきたのはリオネラさんだった。

「どうしたの？」

『『ヒーリングサルヴ』って、「飲み薬」じゃなくて「塗り薬」だよね……？ 食べても平気なの……!?!』

「体に入れば同じ……じゃないよね、どう考えても」

口から体内に入れるのと、傷口に塗るのは根本的に違うだろう。

困ってしまって苦笑いをした後、僕はついたため息をもらしてしまっ
た……。

「うーん……これってトトリちゃんよりも、トトリちゃんのアトリエにいるちむちゃんたちの方が喜びそうかも？ よーし！ 今度こつちに来た時に見せてあげよーつと！」

……大丈夫かなあ？ いろんな意味で心配になった。

5年目：マイス「ノンビリ過ごす日々」

僕の生活リズムには何通りかある。

共通しているのは、朝一番の畑仕事だ。雨の日には水やりをしなくていいので短縮されるけど、それ以外はいつもやっている。他にも、一日一回、時間は決まっていないけど『青の農村』をぐるっと一周し、村のみんなに挨拶をしてまわり、ついでに調子も確認する。

あとは、毎日ではないものの少なくとも二日に一回ペースで『アーランドの街』を訪れ、作物や加工品などを卸おろしているお店に顔を出しに行き、ついでにそれらのお店がある『職人通り』や時々依頼を受ける『冒険者ギルド』の顔見知りの人たちに会ってまわったりもしていた。

また、村のお祭りの前には話し合いや準備があつたりするので、そういう時には他の時間を削って村の『集会場』などにいることが多いなる。

冒険者ギルド

さて。今日の僕はと言えば、朝一番の畑仕事を終えた後はそのまま『アーランドの街』へと足を運んでいた。特別何か用事があつたりしたわけじゃない。ただ、なんとなく「今日は朝の街を歩いて周りたいなー」と思ったただけだ。

……こういう時は、トリスタンさんのような『大臣』みたいなお仕事でなかったことを良かったと思えた。きっと、今ののように思い付きで行動なんてしたら怒られそうだし、やっぱり僕の性分からして、自分のペースで仕事ができる今の仕事のほうがあっているんだろう。『村長』もそんなにすることがなくてよかった……。

……とまあ、そんなわけで、街を歩いて回った僕だったけど、今は『冒険者ギルド』でフィリーさんとお喋りをしている。

少し前には、『冒険者免許』を取り扱うほうの受付でクーデリアと話していたんだけど……その内容は、主に近頃動きが活発になっているモンスターたちについてだった。『青の農村』周辺ではそんなことは無いけど、ジオさんも話していたように各地で大なり小なり影響が出ているそうだ。ただ、それでも時間と共に鎮静化していくだろう、というのが『冒険者ギルド』の見解らしい。

で、今しているファイリーさんとの会話の内容はと言えば、先日『青の農村』であった『カブ合戦』のことだった。

「はあ……お仕事がお休みだったら、私も行ってたのに……」

「あははっ、来年は『カブ合戦』に出場してみる？」

そう聞いてみたけど、ファイリーさんは困ったように笑いながら小さく首を振った。

「それはさすがに遠慮しようかな……観てるだけなら楽しいけど、アレ絶対痛いもん」

「それはまあ「厄払い」だし、ちよつとくらい痛くないと」

『カブ合戦』には、その年の豊作を願うという意味合いもあるが、『カブ』をぶつけることにより付いている厄を払うという意味合いもある。簡単な話、悪いものを身体から叩き出すわけだ。

なので、『カブ合戦』は多少痛くないと意味が無い……というのは言い過ぎかもしれないけど、ある程度痛いのは仕方のないことだ。

「えつと、いちおう聞くけど、今年の怪我人の数は……？」

「三人。……あつ、でも今年は骨にヒビが入った人はいなかったよ」

「これまではヒビが入った人もいたんだね……そつちに驚きだよ」

まあ、そうはいつでもイベント後に『青の農村』の総力をあげてすぐさま適切な処置を行うため、痛みも抑えられた状態で一週間ほどで全快する。そもそも僕は、病気なんかは専門外だけど、ただの怪我や傷なんかは治すのは得意だし。

「もちろん、「みんなで楽しく・賑やかに」っていう『青の農村』のお祭りの本分だから、参加者のみんなも楽しんで帰ってもらうことを前

提にしてるよ。参加前に怪我をする可能性を知ってもらって、その上で参加してもらおうし。それに、もし怪我をした場合は、さつき言った通りすぐに治療するんだ」

そうすることで、参加者全員が最後には全員笑顔で帰れるようにと勤めている。そのおかげか、参加希望者はリピーターを含め年々増えて行くばかりであり、僕としては嬉しい限りだったりする。

「と、とにかく、『カブ合戦』はちよつと……あつ、そういうえば来月は何かあるの?」

「来月は恒例の『冬の収穫祭』。だから、催し物への出場は難しいよ」「ああ、そつか……。私は野菜とか育ててないもんね。でも、美味しいものが沢山あるから収穫祭は好き……。なんだけど、つつい食べ過ぎちゃうからなあ。気を抜いたら太っちゃうし。でも……」

楽しみなのか嫌なのか、どっちとも取れるようなことを言いながら「うーん、うーん」悩んでいるフィリーさん。

「太っちゃう」って、そんな気にするようなことじゃないと思うんだけど……。というか、フィリーさんは細過ぎるくらいだし、むしろ沢山食べた方が良いと思うんだけどなあ?

「ねえ、ちよつと」

僕がフィリーさんに「そんなに気にしないで食べて良いんじゃない?」と言おうとしたところで、僕後のほうから誰かが声をかけてきた。背中を向けていた僕はもちろん、僕とのお喋りに気をとられていたのかフィリーさんもハツと驚いたように背筋を伸ばしていた。

「う、うええうっ?! ミ、ミミ様あ!?!」

「だ・か・ら! いちいちビクビクするんじゃないわよ! 私が何かした!?!」

「ご、ごごご……ごめんなさいー!」

……フィリーさんは、相変わらずミミちゃんの事が苦手みたいだ。それはひとまず置いて、ミミちゃんがここに来たって事はほぼ間違いなく依頼を受けに来たんだろう。となると、僕がここには邪魔になっってしまう。フィリーさんとは沢山話したし、このままダラ

ダラと話し続けてしまいそんな気もするから、この機会に僕は移動しようかな？

そう思い、僕は動き始めた。

「それじゃあフリーさん、お祭りの話はまた今度ってことで。それとミミちゃん、お仕事頑張っつてね」

「待ちなさい」

別れを告げて移動しようとした僕を、ミミちゃんが呼び止めてきた。

「今日は……マイスに用があるの」

「な、なあんだ、良かったー……」

自分に用があつて来たわけじゃないという事に安堵してため息をもらすフリーさん。そんなにミミちゃんが苦手なのかな？

……そんなフリーさんは、ミミちゃんにジロリと睨まれて「ぴい!？」と短い悲鳴をあげた。……その、自業自得だと思う。

「マイス、ちよつと付き合いなさい」

「えつと、冒険について行けばいいのかな？　なら、ちよつと準備する時間が欲しいんだけど……」

家をあげるとなると、コオルを初めとした村の人たちに言いに行つておかないといけないから、一度『青の農村』に帰りたい。そういう理由があつてそう言っただけ……

「必要ないわ」

「えつ?」

「今日は、その……私がマイスの家にお邪魔するだけだから」

そう言われた僕は、ミミちゃんに言われるがままに『青の農村』へと戻ることとなった。

「なんで、いきなり僕の家?」

はじめはそう思ったんだけど、よくよく考えてみれば誰かが家に遊びに来るなんてことはよくある事だった。

そして、それがミミちゃんとなれば珍しいこと。むしろ嬉しいくらいだ。

というわけで、帰り道の途中からは気分が高揚し始めていた……。

マイスの家・作業場

「なるほど……そういうことだったんだね」

納得した僕は、ひとり頷く。

というのも、僕の家についたところでミミちゃんが言ってきたのだ。「錬金釜を使わせて」と。

以前、とある一件で僕はミミちゃんに『錬金術』を教えた。何度も失敗したものの、ミミちゃんはコツを掴んで、最終的には簡単なものであれば調査できるようになった。

その際に教えたレシピは『薬品系』、その時に依頼にあつた傷薬などだ。中には、ミミちゃんの普段の冒険なんかでも使えるものもあつたから、おそらくは、冒険用にとっておきたいから調査しに来たんだろう。素材も持参しているし、前々から考えていたのかもしてない。

「迷惑なら迷惑って言いなさいよ」

「あはははっ、そんなこと無いよ。っていうか、僕としてはもっと頼ってほしいくらいなんだけど……」

「お断りよ。貴方に頼つたら、何もしないでよくなって人としてダメになつていくもの」

「ええ……そ、そこまで言うほどじゃないと思うんだけど……？」

僕は抗議混じりの疑問を口にしたんだけど、ミミちゃんは最初から答える気が無かつたのか無反応で錬金釜の中を杖でぐるぐるとかき混ぜ続けている。

なんとも言えない空気の中、僕は「どうしたものか」と頭をかいた。ミミちゃんは『錬金術』の基礎を学んでいるしレシピもすっかりと

把握している……けど、「絶対大丈夫」とは言い切れない。なので、爆発しそうになつたり何かあつても対応できるように、僕はミミちゃんがいる錬金釜から少し離れた場所……『薬学台』の机に備え付けてあるイスに腰をかけて見守っている。

調査中に集中を乱れさせてはいけないからコツチから話しかけるのは……だからと言って、調査を手伝おうとしても「手助けはいらないわ！」って怒られそう。もちろん他の事をして目を離すのも、どこか不安があるので出来そうにもない。

特に急いでやらないといけないことが無いから、のんびりしてても問題は無いんだけど………何もしないっていうのも、やっぱりヒマなものである。

「ねえ」

ヒマでヒマで仕方なくて、錬金釜をかき混ぜる動きに合わせて揺れるミミちゃんのサイドテールを見て「色が色なら『トウモロコシ』のヒゲみたい……それはどちらかといえばクーデリアか」なんてどうでもいい事を考えていたら、ミミちゃんが錬金釜を見つめたまま話しかけてきた。

「トトリ、もうこつちに来ないのかしら……」

「うーん。……んん？」

ミミちゃんの問いかけに僕はほぼ反射的に相槌あいづちを打ったんだけど、その内容をよく聞いてみると「はて？」と思うところがあり、首をかしげた。「こんな話、ちよつと前にもやったような……？」と。

そう、あれは『カブ合戦』が行われるよりも前のことだ。あの時はロロナが僕とリオネラさんたちを呼んで色々話して……。

「えつと……もしかして、ロロナに何か言われ……いや、言ってるのを聞いた、とか？」

僕の言葉に、ミミちゃんの肩がビクンツと跳ね上がった。後半にだから、きつとたまたまアトリエの前を通りかかったところに、アトリエ内で心配するロロナの独り言がこれまたまたまた聞こえたのかも

しれない。

うん、ロロナの独り言は声が大きいからありえそうだ。……で、それを聞いたミミちゃんは「もしかしたら……」と変に不安をかきたてられてしまったのだろうか。

「べ、別にいいじゃない。覗き見とかしてたわけじゃないもの」

「それはそうだけど……そんなに速くかき混ぜるとそのうち爆発しちゃおうよ?」

「ちよつ……それは早く言いなさいよ!」

そんなこと言われても、ついさつきミミちゃんがいきなり速くかき混ぜはじめたから、今よりも早くに言うのは無理があるんだけど……。

一度深呼吸をして、かき混ぜる速さをゆつりとしたペースに戻していくミミちゃんを見て、とりあえず爆発の心配がなくなった事を確認すると、僕はついさつきのミミちゃんの問いに対する答え口にした。「ギゼラさんを探す」っていう目的はこのあいだの冒険で無くなったけど、トトリちゃんが『冒険者』や『錬金術士』を辞める理由は無いと思うし、そんなに心配しなくてもいいと思うよ? ……って、ロロナにも言っただけだなあ……」

「本当に、そうかしら……?」

またかき混ぜている錬金釜を見つめたまま疑問を口にしてきたミミちゃん。

……ロロナもそうだったけど、声色からも感じ取れるくらい本当に寂しそうに言うから、凄く心配しているのがわかる。

「絶対、とは言えないけどね。でも、調合してる時……は、よくわからないかもしれないけど、一緒に冒険してる時……トトリちゃんは嫌そうにしてた?」

「……してなかったわ。激戦の後とか、もの凄く暑かった時とかに疲れた顔するんだけど、綺麗な景色とか珍しい素材とかを見るとすぐに元気になって……嫌そうどころか、凄く楽しそうだった」

「だよな?」 きっと、トトリちゃんは冒険自体好きなんだと思う。

だったら「これからもいろんなところを冒険してみたいっ！」って『冒険者』を続けるだろうし、そうなれば街にも来る……とは思うよ?」「なんで、最後は自信なさそうに言うのよ。……どうせなら、キツパリと言ってくれた方がこっちとしてもありがたいんだけど」

顔は相変わらず錬金釜の方へ向けたままだけど、ミミちゃんは不満そうに言ってきた。

けど、僕としてはミミちゃんに嘘を言う気は無いから、やっぱり断言することは出来そうにない。

だから、どう答えたものかと悩んだ……けど、僕が言う前にミミちゃんが「……わかってるわ」と呟き、そのまま話し出した。

「冒険者を続けるとしても、永久資格さえもらえれば別に街に来なくてもいい。それこそツイイさんたちがいる『アランヤ村』で活動すればいいだけなものね……家族と一緒にいれるなら、その方が良いに決まってるもの」

……ミミちゃんにそう言われると、僕から何か言うなんてことはできそうにも無かった。

物心ついた頃には家族がお母さんしかおらず、そのお母さんも早いうちに無くなってしまったミミちゃんにとって「家族」と言う存在はとても大きく意味のあるものに違いない。その気持ちを知っているだけに、同意も否定も出来ない。

「ミスは……ミスさんはどうなんですか?」

「えっ?」

さっきまでの強気な喋り方とは打って変わって、丁寧な喋り方になったミミちゃん。でも、時々見かける猫かぶりとは違う感じで……まるで昔のミミちゃんに戻ったかのような「柔らかい」という表現があっている声色だった。

けど、僕はそこにはそこまで驚かなかった。これまでも何度かそう言うことはあったから、「どうしてそうなるんだろう?」という疑問

はあってもそれ以上のことは無い。

問題は祖の内容だ。僕はどう、って……話の流れからして………何のことだろう？

「その……家族と一緒にいたいとか、思わないんですか？」

「あ……あー、うん。なるほど……」

そういうことかと納得した僕だったけど、また「あれ？」と疑問に思い……すぐに納得した。

……そういえば、ミミちゃんが小さい頃に読み聞かせのようにして、前にいたシアレンスの事とか、魔法の事とかを物語風にしたりしてみて色々話したけど……僕自身のことってほとんど話したことがなかったような気がする。

人間とモンスターの『ハーフ』であることは隠し事ではあるが、それ以外のことは知られてもいい事ばかりで……というか、『アーランド』に来た頃にいろんな人に聞いてまわったりしていたから、結構知られている。そして、その知られている事の中にミミちゃんへの答えもある。

……となると、あの事を話さないといけなくなるのかなあ？

「……家族と一緒にいたい、っていう気持ちは無くはないんだけど……色々あつて、結構昔に諦めてるんだ」

ミミちゃんは鍊金釜をかき混ぜている手を完全に止めて、僕のほうへと振り向いてきた。その目は「何で？」と疑問を投げかけてきている。

「理由はいくつかあるんだけど……一番大きいのは憶えてないからかな？」

「憶えて、ない？」

「そうなんだ。ミミちゃんには話すのは初めてかもしれないけど、僕って実は半分くらい記憶喪失なんだよね。一回全部忘れて、今は所々思い出してるって感じで」

「じゃあ……」

「うん。お父さんとお母さんのこともよく憶えてなくってさ、色々教

えてもらったり、褒めてもらったことは憶えてるんだけど、それ以上は全然思い出せないから、もうね」

「だから諦めたんだ」と僕は言った。その時には、ミミちゃんは錬金釜をかき混ぜるための杖から手を離して、完全に体を僕のほうに向けていた。

そんなミミちゃんが気まずそうに目をそらしながら、口を開いた。「もしかして、この前言ってた「シアレンスに帰るっていう目標がつかえた」っていうのも、その記憶が戻らないからで……」

「あつ、いや、それはまたちよつと事情が違うんだけどね。記憶が無い僕が生活してたのが『シアレンス』で、そこに帰れないのはまた別の理由があつて……それはーそのー……」

「……何？ ハッキリ言ってくれないの？」

どう言ったものかと悩んでいると、その様子が気に入らなかったのか、ミミちゃんが少し声色がいつもの鋭い感じに戻ってきて……ついでに、片方の眉も跳ね上がってる……。

……でも、「僕は異世界から来たんですー」なんて言ったところで信じてもらえるかどうか……いや、意外と信じてもらえるかも……？

それに、やっぱりウソを言いたくはないし……ああ、だけど昔魔法の事とか『はじまりの森』のこととかを物語のようにして話した時期があるから「また、作り話？」とか言われるかも……？

迷いに迷ってしまい、沈黙が続いた『作業場』。

そんな中、「ポフンツ」と軽快な音が僕らの耳に入ってきた。かき混ぜるのをやめてしまっていた錬金釜だけど、どうやら最低限以上のことはできていたようで無事調査が完了したようだ。

その音につられて、僕もミミちゃんも錬金釜のほうを見た。

そして、ミミちゃんが再び僕のほうを見て……ひとつため息をついてから錬金釜へと向きなおり、錬金釜の中から調査したものを取り出し始めた。

「まっ、こんなものかしら」

取り出した『薬用クリーム』を見てそう呟くミミちゃん。……と、その時……………

「お邪魔してまーす。マイスさん、います……………か？」

なんとっ！ 家のリビングダイニングに繋がる扉からトトリちゃんが入ってきた……………で、言っていることからして、僕がいないか『作業場』を見渡そうとして…………『薬学台』のところにいた僕を見つけるよりも先に、鍊金釜のそばで『薬用クリーム』を持っているミミちゃんに目を止めた。

「げっー！」

ミミちゃんのほうもトトリちゃんに気がつき、二人の目が合った。

トトリちゃんは、両手を口元に当ててワナワナと震えている。

「み、ミミちゃんが……………調査してる!？」

「うぐっ……………これは、そのっ……………！」

対するミミちゃんは、顔を真っ赤にして言葉を詰まらせていた。

…………別に調べてただけなんだし、そんなに恥ずかしがったりしないでいいと思うんだけど……………？

「そういえば、前に冒険に行った時にくれたお薬……………」お店で買った」って言ってたけど、いい特性が色々付いているからどこのお店で買ったんだらうって思ったけど……………もしかして、あれもミミちゃんが……………？」

「そ……………そうよっ！ 悪い!? 文句でもあるの!？」

より一層顔を赤くしたミミちゃんが、何故かケンカ腰でトトリちゃんに言い放った。……………が、そばまで駆け寄ってきていたトトリちゃんがミミちゃんの手をガシツと掴み、引き寄せる。

「悪くなんてないよ！ この『薬用クリーム』もすぐく上手に出来るし……………凄いよミミちゃん！」

「んなっ!? べ、別にあなたに褒められても嬉しくなんて無いわよ！ それに、『鍊金術』を覚えたのだって、あなたの手伝いをしたいからでも何でもなくて……………そうっ！ 冒険者としての活動の幅を広げて、

より有名になるためなんだからっ！」

「ミミちゃん、何言ってるの？ 誰もそんなこと聞いてないんだけど……っ？」

人の顔ってこれ以上赤くならないんじゃないかな？……ってくらい真っ赤つかになつてしまっているミミちゃんと、そんなミミちゃんにいつもの調子でズバツと言うトトリちゃん。

そんな二人を見ている……っというか、取り残されてしまっている僕なんだけど……っどうしたらいいんだろう？ さすがに、今のあの二人の間に入っつていこうとは思わないんだけど……。

と、そんな時、さつきトトリちゃんが入つて来た扉から、別の人が入つてきた。

「トトリいー？ マイスいたのー？ ……っつて、何があつたのよ、これ？」

「あれ？ メルヴィア？」

そう。入ってきたのは、トトリちゃんと同じ『アランヤ村』出身の冒険者・メルヴィアさんだった。トトリちゃんとミミちゃんがきやあきやあ言っているのを見て、一人首をかしげていた。

僕に気がついたメルヴィアは「あつ、邪魔してるわ」と言つて軽く手を振ってきた後、そのまま僕に聞いてきた。

「で、どうしたのよ、トトリは？」

「どうしたつて言うほどのことじゃないんだけどね」

そう言つて事のいきさつをメルヴィアに話そうとしたんだけど

……

「あーっ！ マイスいたー！」

「うわっ!？」

声と共に、誰かが僕に跳びついてきた。それをなんとか受け止めて、誰なのかその顔を確かめてみると……

「ピアニャちゃん？」

「うん！ ピアニヤだよ！」

なんでピアニヤちゃんが……て、どう考えてもトトリちゃんとメルヴィアが連れてきたんだらうけど……でも、どうして？

そんなことを考えていると、また開け放たれた扉のほうからトタトタという足音が聞こえてきた。それも一人じやなさそうな足音だ。

「ピアニヤちゃんっ！ 勝手に行っちゃダメって言ったでしょ！」

「あら。ミス、ここにいたのね」

「ツエツイさん!? それに、パメラさんも!?!」

なんでこの二人まで!?!

一気に人が増え、賑やかになった『作業場』……。

いや、でも本当にどうしたんだらう……?!

5年目：マイルス 「『青の農村』は今日も賑やか」

僕の家には、『錬金術』による調査をしに錬金釜を借りに来ていたミミちゃん。

僕はそんなミミちゃんの調査を見守りつつ、ミミちゃんと話していたんだけど……

そんな『作業場』には、さつきまでミミちゃんとの話の話題になっていたトトリちゃんが入って来た。それに続くようにしてメルヴィアが。さらには、ピアニャちゃんにツエツイさん、パメラさんまで家に来ていたのだ。

そんなわけで、ずいぶんと賑やかになった僕の家だけど、さすがに『作業場』で立ち話っていうわけにもいかないのです、ミミちゃんがしていた調査の片付けをしてから、リビングダイニングの方へと案内した。

マイルスの家

「はい、『香茶』です。よかったですどうぞー」

そう言っただけは、みんな分用意した『香茶』の入ったカップをテーブルに置いた。テーブルを囲む形で配置されているのは、三人がけのソファー一つに一人がけのイスが三つ。……これらが全て埋まるというのも珍しい気がする。

「あれ？」

ふと目にとまったのは、三人がけのソファー。そこに座っているのは左から順にミミちゃん、トトリちゃん、ツエツイさん。……で、それがどうしたのかという……

「てつきり、ピアノちゃんを挟んでトトリちゃんとツエツイさんが座るのかと思ってたんだけど……」

当のピアノちゃんはひとりでイスのほうに座っているのだ。……残り二つのイスには、それぞれメルヴィアとパメラさんが座っている。

僕の疑問に答えたのは、『香茶』を受け取って一口口にしたツエツイさんとトトリちゃんだった。

「私もそうしたほうがいいと思ってたんですけど……」

「ピアノちゃんが「こつちがいい！」ってイスから離れなかったんです」

ああ、なるほど……。だからキッチンで『香茶』を準備している時に、少し騒がしかったんだ。……まあ、ピアノちゃんくらいの子なら、特に理由も無く我儘を言ったりしたくなるものだろう。

そんなことを思いながら、ピアノちゃんのほうへ目をむけたんだけど……不思議なことに、何故かピアノちゃんはイスから立ち上がっていて、ニッコニコの笑顔で僕のほうを向いていた。

「ん！ マイス、ここ座っていいよ！」

「えっ、でもそしたらピアノちゃんが座るところがなくなっちゃうよね？ 僕のことには気にしなくていいよ」

「大丈夫！ ピアonya、マイスのおひぎの上に座るから！」

「「「えっ!?!」」」

「ちよ?!」

「あらあら。仲良しね」

僕の声に被るようにトトリちゃん、ツエツイさん、メルヴィアが。ワんテンポ遅れてミミちゃんが驚きの声をあげ、パメラさんだけがいつもの調子でニッコリ笑った。

「ねえマイス、早く早くー！」

「早くって……ええ？」

「どういうことだろう？ 『最果ての村』だと普段から誰かの膝の上に座るのが普通だったんだらうか？ それにしたって、僕以外でもい

いはずなんだけど……それに、これまでトトリちゃんたちの家にいたわけだし、トトリちゃんとかツエツイさんにせがむならわかるんだけど……？」

「ピアニヤちゃん！ お膝の上がいいなら私がつ！」

「おねえちゃん、必死過ぎ……。でも、ピアニヤちゃん。ピアニヤちゃんとマイルスさん、あんまり大きき変わらないし、潰れちゃうかもだからやめといたほうが……」

「トトリちゃん……さすがの僕もそこまで小さくないと思うんだけど……？」

それに、トトリちゃんよりも大きいから、そこまで言われるほどじゃ……いや、でも、少し追い付かれてきてる気もするけど……それに、同じくらいだったミミちゃんももう僕よりちよつと背が高く……で、でも！ さすがにピアニヤちゃんには負けてないよ!？」

そんなふうに関心焦ってしまった僕だけど、ピアニヤちゃんが膝の上に座ってくることは別に何の問題も無いから、座ってしまったおうかと思っただけ……そこに、別の人がピアニヤちゃんに声をかけた。

「ピアニヤちゃん？ お膝なら、あたしのところも空いてるわよ？」

「ほんと!? なら、そっちに座る！」

そう言っただけピアニヤちゃんはテトテトと駆け寄り、パメラさんの膝の上に飛び乗った。

ツエツイさんが「そ、そんなあ……」と肩を落として落ち込んでいる……のは、ひとまず置いて、僕は膝に座ったピアニヤちゃんの頭を優しく撫でているパメラさんが気になった。

「へえ、パメラさんとピアニヤちゃんって仲が良いんですね」

「そうよ。ツエツイがトトリとメルヴィアと一緒に冒険に出た時には、あたしのお店で預かってるの。だから、仲良しなのよ」

「マイルス！ お店屋さんごっこ楽しいよ！」

そう笑顔で言うピアニヤちゃんを見て「本当に楽しかったんだろう

なあ」と思った。……でも、色々と気になる内容があつただけ？ ツエツイさんが冒険つて……大丈夫なのかな？ いちおう、トトリちゃんとメルヴィアつていう一流の冒険者がついているなら、よほど強いモンスターが出てくる採取地じゃなければ大丈夫だとは思うけど……

もしかして、ギゼラさんから受け継いだ冒険者の才能がツエツイさんにはあつたり……？ いや、さすがにそれはないか。

ほんの数秒間。そんなことを考えていたんだけど、その間をどう思つたのかパメラさんがクスクスと笑い出した。

「あらあら……嫉妬しちゃつた？」

「えっ、なんでですか？」

「もうっ！ マイスつたら相変わらずつれないんだからー」

そう言つてパメラさんが頬ほおをプウツと膨ふくらませた。けど、僕には何が何やらで……？

と、そんな様子を見てか、トトリちゃんが少し首をかしげて言つてきた。

「あの……前から思つてたんですけど、マイスさんとパメラさんつてお友達……なんですよね？」

「友達」つて言つた後に変な間があつた気がしたんだけど、気にはなつたもののソコがどうしたのかわざわざ聞く気にもならなかつたから、とりあえずトトリちゃんの問いに答えることにした。

「そうだよ。アーランドがまだ『王国』だつたところからの付き合いなんだ」

「そうよく。でも、聞いてよトトリ。マイスつたらあたしがロロナのところでお世話になつてた頃は会いに来てくれたのに、お店を開いてからは全然来てくれなかつたのよ？ それに、『アランヤ村』でもマイスのほうから会いには来てくれなくて……ヒドイと思わなくい？」

「ええっ……それはちよつと、どうかと思いますよ？」

そう言つて非難の目を向けてくるトトリちゃん。

確かに、パメラさんが言つてゐることは大体あつてゐる。事実、『アラン

ヤ村』の『パメラ屋さん』というお店に関しては、途中まで気づいていなかったということもあって全く立ち寄ったことが無い。

だけど……

「でも僕、開店してすぐの頃のお店に行った事ありますよ？　ただ、何も買うものが無くて帰ったんですけどその時「冷やかしなら帰って〜」って言われて……それ以降は申し訳なくていかなかったんですけど」

「あ、あら〜？　そんなことあったような……なかったような？」

「たしかにパメラさんのお店の商品って、マイルスが欲しがりそうな物は無かったような？」

パメラさんのお店の品ぞろえを思い出すようにして呟くトトリちゃん。

……と、そこにミミちゃんが一言挟み込んできた。

「そもそも、王国時代の頃からマイルスは、他所の店で何か買ったりしなくてもいいくらい大抵のものは自給自足できてたんじゃなかったかしら？」

その言葉に、トトリちゃん……あとメルヴィアが「ああ……」と声をもらしながら納得したように頷いていた。なお、ツエツイさんは驚いたように「えっ!？」と声をあげていて、ピアニャちゃんは話がよくわかっていなかったみたいでコテンツと首をかしげていた。

「そういえば……結局、なんでみんなして『青の農村』に来たの？」

みんながひととおり『香茶』を飲み終えたあたりで、僕はトトリちゃんに向かってそう話を切り出した。

「あつええつと、それは……」

トトリちゃんは少しもりながら、パメラさんの膝の上でいまだ『香茶』をゆつくりと飲んでるピアニャちゃんをチラリと見た後、改めて口を開いた。

「ピアニヤちゃんから色々話しを聞こうとしてたら、ピアニヤちゃんが『おおのうそん』に行きたい!」って言いだしちゃって。それで、仕方ないから一回連れて行ってあげようかなって思ってた……で、おねえちゃんが「トトリちゃんとピアニヤちゃんが行くなら私もっ!」って」

トトリちゃんに続いて、今度はメルヴィアが話します。

「んで、トトリたちがツェツイが少し村から離れることをゲラルドさんに伝えに行った時にあたしもそこにいて、ならあたしもついて行くかなってなって……ほら、最近のツェツイってちよつと心配じゃない?」

メルヴィアの言いたいことはなんとなくわかった。

僕はツェツイさんとはそこまで親しいわけじゃない。だから「前と比べて」なんてことは言えないけど、それでも最近のツェツイさんはピアニヤちゃん関係になると変になる気がする。……それは心配になってもしかたないと思う。

「それで、店番がヒマだったあたしが気分転換にピアニヤちゃんに会いに行こうとしたら、たまたま『青の農村』へ出発しようとするみんなに会ってね。なら、あたしも里帰りにーってことでついて行くことにいたの……別にここが故郷ってわけじゃないんだけどね」

最後に、頬に手を当てながらそう言ったのはパメラさん。

ヒマだったからって店番を投げ出したっていうのがいろんな意味で心配なだけ……当のパメラさんは特に気にした様子も無く、その顔にはいつも通りの微笑みが浮かんでいた。……本当にいつもそんな感じでお店をやってるのかな?」

……さて、みんなからどういう経緯で『青の農村』に来たのか聞いたけど……」

「……つまり、特別何か用があったってわけじゃないんだ」
「そうですね。ただの観光ってことになるかと……」

もちろん、別に観光が悪いってわけじゃない。実際のところ『青の農村』を訪れる人のうち、作物の買い付けなどの「商売目的」の次く

らしいの多いのが「観光目的」なくらいだ。だから、むしろあがたいくらいだったりする。

となると、問題はここからの観光の内容なんだけど……

「お祭りは、ついこの前あったから次は来月だし……後は、お店と畑ばっかりで見て楽しめるなんてものはほとんど無いかな？　後は普通の村っぽいノンビリした雰囲気……って、それは『アランヤ村』でもできるか」

「あの、リオネラさんはいないんですか？　人形劇ならピアノヤちゃんも喜ぶと思いますよ？　それに、わたしも観てみたいかなあって」
「リオネラさんは街のほうで活動しているから、すぐについていうのは……あつ、でも今日の昼過ぎに『青の農村』の広場で人形劇をするって予定が入ってたっけ」

トトリちゃんたちと海に出たあの冒険の際に、長期間家をあけてしまふのにその管理をリオネラさんに任せてしまうのは悪いと思ひ、あの時にリオネラさんには活動拠点を僕の家『離れ』から街のほうへと移ってもらっていたのだ。だから、最近も活動拠点は街のほうのままなんだけど……あの時はたしか、フィリーさんやクーデリアもリオネラさんが住む場所を探すのを手伝ってくれたんだよね。

そんなリオネラさんだけど、『青の農村』にも定期的に人形劇をしに来てくれている。ちょうど今日の午後がその時だったのだ。

でも、今はまだ昼前の午前中。まだまだ時間がある。

「昼は僕がご馳走するとして……それまでどうしようか？」

僕の言葉に、トトリちゃん、ツエツイさん、メルヴィアが「うーん」と頭を悩ませていた。

農業……は、興味を持つてるピアノヤちゃんだけなら体験させてあげたりしてもいいんだけど、他の人たちを放っておくわけにはいかなから少し難しい。街に行く……ってなると、もう街でいいんじゃないかなって話になる。

そうなる……他に何かあるかなあ？

そんなふう悩んでいるところに、小さなため息が聞こえた。聞こえた方を見ると、そこにいたのは少しだけ呆れたような顔をしたミミちゃんだった。

「何悩んでるのよ。『青の農村』には、モンスターと戯れることが出来るっていう他所じゃ絶対できないことがあるでしょ」

「あっ」

僕とトトリちゃんの声が重なった。そして、そのまま顔を見合わせる。

「……じゃあ、とりあえず外に出よっか？」

「そうですね」

青の農村・広場

みんなを連れて家から出て、とりあえず『広場』のほうへと行ったんだけど……

「大丈夫……なのよね？」

「うん。まあ、あたしもよく知らないけど」

そう、心配そうにしているツエツイさんとメルヴィアが見ているのは、僕らを取り囲むようにして集まってきたモンスターたち。

『青ぶに』、『緑ぶに』、『耳ぶに』、『ウオルフ』、『たるリス』、『近海ペンギン』、『サラマンドラ』……あとは、暴れなくなった『暴れヤギ』など、冒険者なら普段敵として相対しているモンスターたちだ。

村のあちこちにいるモンスターたちのうちの何体かが、歩いている僕に気がつき「おっ、ミスだ！」と寄って来て、それに釣られるようにして「なんだなんだ？」とさらに寄って来て……『広場』に着くころには十数体のモンスターが取り囲むまになったのだ。

『青の農村』には何度も来たことあるけど、わたしもこんなに一杯が来るのは初めてかも……」

「あたしもよく。なんだか、人気者になっちゃったみたい！」

トトリちゃんはモンスターの多さに少し腰が引けてしまっている。

けど、パメラさんの方はむしろ嬉しそうに「いやくん」と体をくねくねさせていた。

「うわあ……い！　いろんなのがいっぱい！　えへへっ、お友達になれるかな？」

「大丈夫よ。『青の農村』のモンスターたちはマイルスに似て優しい子ばかりだから、こつちから叩いたり危害を加えなければ何もしてこないわ。その『近海ペンギン』なんかいいんじゃないかしら？　頭を優しく撫でてあげたら喜ぶわよ」

そう言つてピアニヤちゃんにモンスターとの接し方を教えてあげているのはミミちゃんだ。まだ小さかったころに『青の農村』に来てモンスターたちと遊んだことがあるからか、ミミちゃんもモンスターたちも互いに慣れている様子だった。

なお、ピアニヤちゃんに「よしよし」された『近海ペンギン』は嬉しそうに翼をパタパタさせていた。

「なー」

「あつ、この鳴き声は……」

僕にとつては聞きなれた泣き声に反応したトトリちゃんが、キョロキョロした後僕に僕の足元に目を止めた。

つられるようにして僕も自分の足元を見て……予想した通り、「なー」が僕の足に行儀良く座っていた。そのなーを、僕は一度しゃがみ込んで両手で優しく抱き上げた。

「な〜う」

「あははははっ、元気そうだなによりだよ」

抱き抱えてあげると、なーは甘えるようにひと鳴きした後、僕の胸に体全体を使ってグリグリと擦り付けてきた。それに合わせる様にして、僕はなーの喉元を撫でさすつてあげた。

「マイルスさん、そのネコさんってやっぱり『青の農村』の子なんですか？」

「そうだよー。正確には、『青の農村』が出来る前から僕の家で暮らし

てた子なんだけどね。今ではこの村の立派な看板ネコだよ」

「でも、ネコがモンスターと一緒にいて危なくないんですか?」

そうツェツイさんが心配そうに僕の腕の中にいるなーを見つめながら問いかけてきた。

「大丈夫ですよ。みんな優しくて、襲ったりしませんから! それに……」

僕がそう言っていたあたりで、『緑ぷに』が「ぷににー(ボクにもかまってー!)」と駆け寄って……というか、跳とび跳はねてきたんだけど……

「フニヤシャー!!」

「ぷぷっー!?!」

僕が抱き抱えていたなーが、勢いよく振り向き見下ろすようにして足元の『緑ぷに』を威嚇した。すると『青ぷに』は跳とびあがり、すぐさま近場の物陰……ツェツイさんの足元に逃げてしまった。

ついでに、なーの威嚇には『青ぷに』だけでなく、トトリちゃんやツェツイさん、メルヴィアも驚いていた。……なお、パメラさんはいつもの調子で、ミミちゃんとピアニちゃんとは他の子に夢中だったからリアクションは無かった。

「……と、まあこんな感じに、『青の農村』じゃあ一番なーが強いから何の心配もいららないんです」

「は、はあ……?」

自分の足元に来た『青ぷに』に驚きつつ、困り顔でどうしたらいいかわかっていない様子のツェツイさんが、何とも言えない返事を返してきた。

「まあ強いって言っても、『島魚』よりも強い奴は村の近くに来たこと無いから倒したことは無いんだけど……」

『島魚』より弱い敵になら簡単に倒すみたいって言われても……てか、それって軽く並みの冒険者よりも強いじゃない、ホントにネコなの……? 『グリフォン』を『クワ』で追い払う農家」の噂といい、本当に規格外ばっかね『青の農村』にいるのは」

おでこのあたりに片手を当てて「やれやれ」と軽く首を振るメルヴィア。

補足しておく、人よりも大きい二、三メートルほどの……『シアレンス』にいた時、本で見た「クジラ」という生き物に似たモンスター『島魚』だけど、別になーが食あたりはしていない。というか、なーにコテンパンに負けたあと何故か仲良くなって、今でも時々、街はずれの川を泳いで『青の農村』まで遊びに来たりする。

「あつ、ついでに言う、さつきなーが怒った時は「私が遊んでもらってるんだから、邪魔しないで！」って言ってたんだよ」

「いや、そんな当たり前みたいになココ言葉を翻訳されても……」

「……でも、ミスさんなら仕方ないか」と呟くトトリちゃん。このくらい、僕じゃなくても『青の農村』の人なら誰でもわかるんだけど……ああ、あとホムちゃんもしっかりと理解できるはずだ。

……そんな感じに始まった、『青の農村』のモンスターたちとの触れ合いだったんだけど……

「わああ！ モサモサで、揺れて、楽しい！」

そうはしゃいでいるのは、モサモサの毛を揺らしながら走る『暴れヤギ』の背中にまたがっているピアニヤちゃん。楽しそうにしているピアニヤちゃんはもちろん、『暴れヤギ』のほうも嫌がつてる素振りは無く、むしろ自分の上ではしゃいでいる声を聞いて楽しんでいるようだった。

「ピアニヤちゃん、いいなあ……。ね、ミミちゃん。わたしも乗りたいなあ……。なんて言うてみたり」

『暴れヤギ』をあの子から取り上げるわけにはいかないでしょ？ ならトトリは別の奴を……『近海ペンギン』には乗れないし、『サラマンドラ』なら乗せてくれると思うけど？」

「でつかいトカゲ……カツコイイ気もするけど、ゴツゴツしてて足が痛そうだからやめとく……」

トトリちゃんの言葉に、「えっ、乗る？ 乗っちゃう？」とスタンバイしていた『サラマンドラ』がガツクリと落ち込んだ。

……けど、そんな心情から来た仕草とは知らず、トトリちゃんは「ほら、なんだか元気なさそうだし、乗ったら悪いよ」と言い、それが『サラマンドラ』にはある種の追い討ちになっていた。

「ねえ、パメラさん……。私の気のせいじゃなかったら、この子たち、私の後ろずつとついて来てる？」

「ええ、ずうう〜とついて来てるわ！ ツェツイのファンになっちゃたんじやないかしら〜？」

歩いては立ち止まり振り返るツェツイさんの後ろには、『青ぷに』と『たるリス』が何故かずつとついてまわっていた。

人同士でも好き嫌いがあるように、モンスターでも「この人は好き、この人は嫌い」といった感情はある。だから、本当にたまたまその『青ぷに』と『たるリス』が「ツェツイさん大好き！」ってなったんだろう。

「……ヤバいわ、コレ。なんでこんな甘えた声出すのよ。これじゃあ本当にあたし『ウォルフ』倒せなくなっちゃいそう……」

「クウ〜ン……」

「ああつ!? よーしよーし！ ココかー？ ココがいいのかあー？」

寝転がって可愛らしく鳴く『ウォルフ』と、その無防備なお腹をしゃがみ込んでワシヤワシヤと撫でまわすメルヴィア。そのメルヴィアの顔は、普段のカラツとした軽快な笑顔とはまた違った、なんといかトロけた笑みになっていた。

「あははははっ。平和だなあ……」

つい一ヶ月ほど前に『フラウシユトラウト』と激闘をしたのを忘れてしまいそうなくらい、平和な時間……。

この時、僕の身に危機が迫っていたとは、到底気づくことが出来な
かった……。

5年目：マイス「懐かしい風景……？」

ミミちゃんが僕の家で『調合』をし、そこにトトリちゃんたちが来て、なんやかんやあって『青の農村』観光になったあの後。

『青の農村』のモンスターたちとみんなが遊んでる中、僕は途中にトトリちゃんに一言「それじゃあ、お昼頃になったらウチに戻って来てね」と言ってから家に帰って昼ごはんを作り、戻ってきたトトリちゃんたちにふるまった。

一口目で「おいしー！」とはしゃぎ、それからは口元を汚しつつも美味しそうに食べてくれたピアニャちゃんをはじめ、みんな喜んでくれたみたいでなによりだった。

……ただ、ツエツイさんだけ何度か難しい顔をしていたのが気になったんだけど……あとでメルヴィアが教えてくれたんだけど、前からトトリちゃんが「マイスさんが作ってくれた料理がおいしかった」とか言ってる、ツエツイさんはそのことで対抗意識を持って素直に「おいしい」という感想だけを出せなかったんじゃないか……という事らしい。

その後は、予定通りに午後『青の農村』に来たりオネラさんの人形劇を皆で観に行った。ピアニャちゃんはもちろん大興奮。他のみんなもオネラさんの人形劇を楽しんでいた。

人形劇が終わってからは、リオネラさんたちがいつものように僕の家に来て、そこでいまだに興奮気味だったピアニャちゃんに捕まり……主にホロホロとアラニーヤがもみくちゃにされながらも、リオネラさんはトトリちゃんたちともお話をした。

そんなこんなしていたら、あつという間に日が暮れ出し、「もう、夜ごはんも食べていく？」ということ、僕は夜ごはんの準備に取り掛かった。この時はツエツイさんが「私も手伝います」と手を貸してくれた。

……で、ツエツイさんと二人で腕によりをかけて作った夜ごはんだったんだけど、食べている途中にピアニャちゃんが船を漕ぎ始めた。一日中はしゃぎっぱなだったから、本人も自覚しないうちに限

界まで行ってしまっていたんだろう。

そして、寝てしまったピアノちゃんをどうしようかという話になったところで、僕は初めてあることを知った。

なんと、トトリちゃんたちは最初から僕の家うちに泊まる気だったらしい。

まあ、考えてみれば、うちで夜ごはんを食べる時点で事前に決めておいてなんとかしておかないと『アランヤ村』にいるグイードさんが困ってしまうのだから、最初から決めていたんだろう。……聞いてみれば、グイードさんには『バー・ゲラルド』で適当に食べてもらうことにしていたそうさ。

リオネラさんをはじめ、トトリちゃんも過去に泊まったこともあるように、僕としては誰かが泊まってくのは別段問題は無かった。だから、承諾したんだけど……ある問題があった。

寝る場所だ。ベッドは家の二階に一つ、『離れ』の一つで、あとはソファーには寝れそうだけど……どう考えても少なかった。……が、そこにパメラさんがある提案をする。

「なら、『離れ』の床を片付けて、そこでみんな一緒に寝つ転がらなくい？ そのほうがお泊まり会って感じがしていいって思わない？」

……というわけで、予備の布団・毛布を取り出して『離れ』に敷き詰め、そこで寝てもらうことになった。

そのメンバーは、すでに寝てしまっているピアノちゃん。そしてトトリちゃん、ツエツイさん、メルヴィア、パメラさん。あと、『青の農村』で人形劇をした日には決まって泊まっていくリオネラさん。最後に、最後の最後まで街に帰るかどうするか踏ん切りがつかずにいたミミちゃんが、トトリちゃんに「ミミちゃんも一緒に寝てお話ししよう！」と言われたのが決め手になって泊まっていた。

賑やかな『離れ』を見つつ、さすがにあの輪の中には入れない僕は、普段通りに家の二階のベッドルームで寝た。

……女の子のお泊まり会かあ。楽しそうだなあ。

今度試しに、知り合いの男の人を集めてお泊まり会を……と思ったけど、結局、お酒が入って酔払って酔いつぶれて……つてなるだけだと気付き、諦めることにして目をつむったのだ……。

そんなことがあったのが昨日の事だ。

今日は、朝ゴハンを食べ終えてからみんな揃って『アーランドの街』へと向かった。トトリちゃんたちは、最初から「二日目は街」と決めていたそうだ。

僕も、特に予定が無かったから一緒に行くことにした……というより、ピアニヤちゃんに「マイルスも行こっ！」と手を引かれたからつてというのが一番の理由だったりする。

街についてすぐ、リオネラさんとホロホロ、アラニーヤと僕らは別れた。というのも、今日は街で人形劇をするからその予行練習や準備が必要だったらしく、残念だけど時間の問題で街の観光には付き合えない、とのことだった。

『職人通り』に差し掛かったところで、今度はトトリちゃんと別れることに。それは、アトリエにいるコロナにこの前の冒険の事を報告しておきたかったからだそう。全員で行くこともできなくはないけど、内容が内容だけに……それに、今後の自分の活動のことも相談してみたいからとのこと、先「コロナと二人でお話をしてみたい」とトトリちゃんが言ったのだ。

そう言われてしまえば、僕らはもちろん、ツエツイさんもトトリちゃんの意味を尊重するほかなかった。

ということ、僕と、ピアニヤちゃん、ツエツイさん、メルヴィア、パメラさん、ミミちゃん、観光をすることになった。

とはいっても、トトリちゃんがコロナとお話を終えるまでは、移

動範囲は『職人通り』だけなんだけどね。

ロウとティファの雑貨店

『アーランドの街』の観光といえば、街ならではの大きな建物たちや、街の産業を担う工場施設、広場に置かれている機械を見たりすること挙げることが出来ると思う。

でも、それが楽しいかというのは個人の差もあるだろうけど、微妙なところじゃないかな？

じゃあ何がいいか……無難なところでショッピングお買い物だと思う。

というわけで来たのは、『ロロナのアトリエ』のすぐ隣……ティファナさんがやっている雑貨屋さん。ここは僕が昔からお世話になっているお店だ。

「ティファナちゃんは今日も美しい……！」

「ああ、見ているだけで素晴らしい気持ちになれる」

「さ、さて。今日は声をかけるために何を飼おうかな……」

……そして、この人たちも昔から知っている三人組のおじさんたちだ。他にもティファナさんのお店の常連さんはいるけど、毎日のように来ているのはこの人たちだけだと思う。

他の常連さんといえば……

「いやあ、今日のティファナさんは輝いて見えるよ」

今日はロロナのお父さんのライアンさんまでいる……大丈夫なのかな？ こう言う時はいつも奥さんのロウラさんに叱られるイメージがあるんだけど……

でも、『青の農村』のお祭りに夫婦そろって来てくれたりもして、夫婦仲はいい……のかな？

それで、そのティファナさんとはといえば……

「あつ！ コレ、マイスの家にもあつたお薬！」

「そうよー。マイスクンがウチに卸してくれてるものなの」

「へえー……あれ？ コツチのヤツはなあに？」

「それはねえ……」

『最果ての村』では見かけない商品を、キラキラと目を輝かせて見てまわるピアニヤちゃんに、ついていき教えたりしているティファアナさん。

「……女神か」

「小さな子供のお世話をするティファアナちゃん……イイ」

「この風景を切り取って絵画にしたい」

「そんな絵画があれば数十万……いや、お金で価値を付けるのは無粋だな」

常連さんに続いてライアンさんが無駄にイイ笑顔で頷いている。

「ここは昔からいつも人気よねえ」

「私は冒険者になってからしか来たこと無いけど……そうなの？」

「そうよ。あたしが隣でお店をしたころから大人気だったのよ！」

「隣って、ライバル店だったってことじゃない」

昔を懐かしむようにしながら店内を見ているパメラさんに、たまたま近くにいたミミちゃんが何気なしに問いかけたりして話している。

「今日は何て素晴らしい日だ……！」

「パメラちゃんのお店にも通って財布がすぐに空っぽになった日々を思い出すよ」

「隣の少女も、近い将来とんでもない美人さんになる予感がピンピンするよ」

「うんうん、美しいのはそれだけで素晴らしいことだ」

常連さんたちがティファアナさん一筋っていうわけでもなかったという事に、少し驚いた……けど、頷いているライアンさんを見て「奥さんがいても来てる人もいるし、そういうものなのかな？」と変に納

得してしまった。

「雑貨店って言うだけあって、ホント品揃えが豊富ねー……んんっ？
このブレスレットなんていいんじゃない？」

「うーん……でも、トトリちゃんにあげるには少し大人っぽくないかしら？ それなら、こっちの髪飾りのほうが……」

「自分用って考えはないのね……まあ、ツエツイらしいっちゃらしいけど。じゃあ、ツエツイの分はあたしが見繕ってあげましょうかねつとー！」

「あつ！ コレがいいかも！ それで、ピアニヤちゃんにはこのリボンを……」

商品を見てキヤアキヤア言いながら買い物をしているメルヴィアとツエツイさん。楽しんでいるようで何よりだ。

「なんとけしからん服装を……だが、屈さんぞお！」

「う、美しい……女神が一人、二人、三人……」

「もう、ここが天国なんじゃないかな？」

「こんなに美しい女性たちに囲まれているのであれば……死んで本望だと思う」

「『全く持つて、その通りだ』」

ライアンさんの一言に揃って頷く常連さんたち。

……あつ、ジロジロ見てたのをメルヴィアに気付かれて、常連さんたちが思いつきり睨まれた。短い悲鳴をあげたり、バツが悪そうに一つ咳払いをしながら常連さんとライアンさんが手近にある商品棚に目を落した。

「ありがとうございますっ！」とかいう小さな声が聞こえた気がしたけど……気のせいだよな？ 誰かはわからないけど、お礼を言う理由なんて無いわけだし……聞き間違いだと思う。

……で、商品棚を見ながらも、コソコソと集まって小声で話します

常連さんたち。

その声が、ほんのわずかにだけ僕の耳にも入ってきた。

「いやあ、今日はなんて素晴らしい日なんだろうねえ……」

「ライアンさんの言う通りだ。今日は過去最高の日かもしれん」

「ボケても今日の事だけは忘れないと思う」

「記念日にするべきだろう。何の日と言うべきか……」

見えるのは背中だけだけど、四人とも未だに無駄にイイ笑顔のままなんだろうということが安易に想像できた。

「だが、問題は彼だ」

「ああ、その通りだ」

「これは……まぎれも無い罪じゃないだろうか？」

……ん？ 常連さんたちは一体何の話を……

「今いる女性客全員を連れてきたのは彼だった」

「囲まれていたな。そして、あの緑髪の小さな子と手を繋いで……」

「しかも、その子の反対の手はあの清楚な長髪の美女が握っていて

……疑似家族か!? それとも本物の家族なのか!？」

えっと、緑髪っていうとピアニヤちゃん……ピアニヤちゃんの手を握ってたのはツエツイさんだったよね？ そして、あともう一つの

ピアニヤちゃんの手を握っていた人っていったら、もしかしなくても……

僕がその考えに至ったのとほぼ同時に、常連さん三人の顔がグルンと振り向き、鋭い視線が僕を射抜いた。

「二有罪、もはや弁解の余地も無い」

ひい!?

常連さんの目つきが怖い！ ステルクさんが「怖い」とか言われてるけど、それとは比べ物にならないくらい怖いよ!？」

睨まれた瞬間、とっさに顔をそらしたけど……でも、未だに痛いほど視線を感じる。

……と、そんな僕に救いの手が差し伸べられた。

「こちら、同士諸君。そんなに殺気立ってはいけないよ」

そう、それはライアンさんの声。

「彼は『青の農村』の村長で内にも外にも顔が広い。女性も男性も知り合いが多く、その人たちに村や街を案内することも多々ある。……今日はたまたま女性ばかりだったというだけだ、そこに我々が口出しをしていいものじゃない」

「ライアンさん、あんたって人は……」

「二人が出来ている」ていうのは、あんたみたいな人の事を言うんだろ
うな」

「あんたは紳士の鑑かがみだよ」

……なんだかよくわからないけど、いい話になったみたい。

でも……まあ、今日はライアンさんがティファアナさんのお店に来てたことをロウラさんに報告するのはやめておこうかな？

「ピアニヤちゃん、ちよつといいかしら？」

「んー？ なあに、ちえちー？」

「ピアニヤちゃんにコレが似合うんじゃないかなーって思っ。一回着けてみない？」

ツエツイさんに呼ばれてトテトテと走り寄っていくピアニヤちゃん。

……と、さつきまでピアニヤちゃんのそばをついてまわってくれていたティファアナさんが、僕のほうを向いて手で「おいで、おいで」としてきている事に気がついた。

「どうしたんだろう？」と思いつつ、僕はティファアナさんのほうへと歩み寄っていく。

「すみません、ピアニヤちゃんの相手をしてもらっちゃって……」

「あらあら、別にいいのよ。むしろ楽しかったから。かわいくて、とても素直で良い子だったわ」

僕の謝罪にニツコリと微笑んでこえるティファアナさん。

ただ、その顔に少しだけ影がかかり、寂しそうな表情に変わった。
「……でも、ちよつと感傷的になっちゃった。私たちにもこんな子がいたら……って」

「ティファアナさん……」

「私はあの人一筋だから、とうの昔に諦めた話なんだけどね」

そう言うのと、またいつもの微笑みを浮かべたティファアナさん。

「もしよかったら、またピアニャちゃんを連れて遊びに来てちょうだい？ 歓迎するわ」

「……はいー」

「ありがとう」と呟いてニツコリと笑うティファアナさん。それはいいんだけど……

「あの一……この歳になって頭を撫でられるのは、さすがにちよつと恥ずかしいんですけどー？」

「ふふっ、あとちよつとだけ……ね？」

そんなふうには微笑みながら言われると断れないというか……

でも、金モコ状態で撫でられるのは慣れてるんだけど、人の姿で撫でられるのは、やっぱりちよつと……

「ギルティ……」

「ライアンさん、さつきと言ってることが……」

「いやあ、気持ちは痛いほどわかるけどねえ」

「うんうん、そうなって当然でしょう」

……後ろの方で何か聞こえるのは、気にしないことにしよう……
うん、そうしよう。

……と、そんな時。お店の扉がバアンと勢い良く開かれた。

その音にみんなの視線が集まったんだけど、そこにいたのは……

「ろ、ロロナ？」

どうしたんだろう？ 隣のアトリエから走ってきたのか肩で息を
してるし……なんでかは知らないけど、顔もなんだかいつものホワン

とした感じじゃない……

「マイス君!!」

「えっ、僕!?!」

「ロロナは僕の事を呼んだかと思うと、勢い良く掴みかかってきて……!?!」

「ずるい!!」

「……へっ?」

「昨日、わたしが「トトリちゃん元気にしてるかな……」って心配してる時に、トトリちゃんたちと遊んでたんですよ!? しかも、一緒にゴハン食べたたり、りおちゃんの人形劇観たり……!」

「ちよつと涙目になっているロロナが、僕の肩を掴んでガツクンガツクンと揺さぶってきた。」

「そんな視界が揺れている中、ロロナの肩越しに、ロロナを追いかけお店に入ってきたのだろうトトリちゃんが見えた。……その顔は「ああ……こうなっちゃたかあ」となんだかもう諦めてる感じで……。」

「それに! 夜はみんなで泊まり会してたんですよ!? ずるい! 誘ってくれないなんてヒドイよ、マイス君!!」

「みんなでお泊まり会って、僕は別に参加してな……ぐえっ!?!」

「より一層揺さぶりが強くなっていき、時折首がギョってなってしまうこともあり、かなりキツイ……というか、そろそろオエツってなりそう……。」

「ううーっ……! もう、こうなったら今日はわたしも参加するから!」

「えっ? 先生、わたしたち今日のうちに『アランヤ村』に帰る予定なんですけど……!」

「絶対、ぜえーっただいだからね! わかった!?! 絶対、マイス君のお家にお泊まりするもん!!」

ロロナ……揺さぶるの止めて……。それに、トトリちゃんの話、ちゃんと聞いてあげて……

「ろ、ロロナあ！ コイツの家にお泊まりだなんて、お父さんは認めないぞ!?!」

「お父さんは黙ってて！ わたしだってもう子供じゃないんだから、友達のお家にお泊まりするのに外泊許可なんてお父さんに貰わなくても……お父さん?」

「……あつ、しまった!?!」

や、やつとロロナが揺さぶるのを止めてくれた……。オエツつてなる前でギリギリな感じだけど、ひとまず助かった。

……けど、目の前の状況はなんとも不思議な感じだなあ。

ピアニヤちゃんはわけがわからない様子だけど、トトリちゃんやツエツイさん、ミミちゃんは「この人がロロナ先さんのお父さん!?!」と驚いていて、さつき睨みつけて退散させたメルヴィアなんかは驚きを通り越して引いていた。

相変わらずいつも通りなのは、慣れた様子で優しい目で「あらあら」様子を見るティファナさんとパメラさんくらいだろう。

……で、ロロナはといえば、さつきまでの慌てっぷりや涙目は何処へ行ってしまったのか、まさに「怒ってます」といった顔をしていた。……まあ、そうは言ってもロロナの顔なんだからそんなには怖くは無いんだけど……それを向けられているライアンさんは顔を青くしている。もしかしたら、ロロナの怒り顔の後ろにロウラさんの怒り顔を幻視しているのかもしれない。……助けを求めようとしていたけど、常連さんは「我関せず」と商品棚に目を落していた。

「お・と・う・さ・ん?」

「い、いやあ、ロロナ。これには深いわけがだなあ……あは、あははは

はっ……………」

……………今日のフリクセル家は騒がしくなりそうだなあ……………。

5年目：トトリ「突然の……」

アランヤ村・トトリのアトリエ

「はあ……」

部屋の角つこに置いてある机の前のイスに座っているわたしは、気付けばため息を吐いていた。

机の前のイスに座っているとはいっても、別に棚に並べてある『錬金術』の参考書を読んでいたり、レシピを考えていたりしたわけじゃない。むしろ、何もやる気が出ないというか……心配で、不安で手がつかないというか……。

「トトリ?」

「わあっ!?」 ぴ、ピアノちゃんかあ……」

窓から見える景色を眺めていたら、ピアノちゃんに声をかけられた。いつの間にか知らないうちに、わたしのすぐそばまで来ていたみたい。

「ちむ〜」

「ちむちーむ」

「ちつむ、ちつむ」

「ちちむー」

そのピアノちゃんさんの足元には、ちみゆみゆみゆちゃん、ちみゆみゆちゃん、ちむどらごんくん、ちむまるだゆうくんがいた。きつと、おねえちゃんが出掛けているあいだピアノちゃんさんの遊び相手になってくれてたんだと思う。

「えっと、ピアノちゃん、どうかしたの?」

「んー……トトリ、なんか元気ないなって思っ……何かあったの?」

ピアノちゃんに心配をかけちゃって……ことを申し訳なく思いつつ、ピアノちゃんに聞かれた「わたしが元気が無い理由」について

思い出した。

ピアノちゃんやおねえちゃんたちと『青の農村』と『アーランドの街』を観光してまわったあの一泊二日の旅行を終えた後『アランヤ村』に帰って来たわたしは、ゲラルドさんのお店で依頼を受けつつ……何か忘れているような気もしたけど、ノンビリと過ごしていた。そう、あの時も自分のアトリエで調合の準備をしていたんだけど……

^{昨日}一日前・トトリのアトリエ

「あー、うー！ ヒマだー……」

「もうジーンくん。ヒマだからって、わたしのアトリエでゴロゴロしないですっ！」

「えー、だって……」

ジーンくんが寝転がっているのは、わたしのアトリエにあるベッド……とはいっても、先生のアトリエに行ったりソファで寝ちゃったりすることが多くて、ほとんど家にいるちむちゃんたちの遊び場になっっているんだけど……そこでジーンくんはゴロゴロしてた。

「何かすること無いの？」

「することって言っても、日課の鍛練は朝一で終わらせちゃったし……それに、冒険しようにも村の近くは弱っちいのばっかで、遠くは準備が面倒だからなあ」

そう言っただけをとがらせている様子を見ると、なんていうか、『冒険者免許』を更新して一人前の冒険者になっただけだし、『フラウシュトラウト』っていう凄いモンスターと一緒に倒したりしているのに、ジーンくんって全然変わらないなあ……って、すっごく思った。

まあ、いきなり変わられても気持ち悪いんだけど。

「そういえば、最近はステルクさんに修行をつけてもらったりはしてないの？」

「いや、してるぜ？ 試合とかもしてるし……でも、師匠に全然勝てないんだよなあ……。それに、この前「街に行く」って言ったつきり、師匠まだ帰って来てねえんだもん」

「へえ、そうなんだ」
でも、おねえちゃんたちと街に行った時にはステルクさんに会わなかったような……？

もしかして、前に言ってた王様を見つけて追いかけてたのかなあ？

……って、そんなこと考えてたら、なんでかわからないけどジーノくんがわたしのことをジーノつと見つめてきてた。なんだか目をキラキラさせて、イヤな予感がするんだけど……。

「そうだ！ ヒマだし、この際トトリでもいいや！」

「わたしでもいい……って、何の話？」

「試合っ、試合の相手！ よしっ、そうと決まればさっそくやりに行こうぜー！」

試合の相手……？ ええつと、それってつまり……？

「え、ええつ!? 無理！ そんなのできっこないよ!? わたしがジーノくんの相手なんて……」

「んなことわかってるって！ まっ、ヒマ潰しにやろうぜ、やーろーおーぜー！」

「で、でも……」

そうやってやるのを渋ってたんだけど、そうしているうちに段々とジーノくんの機嫌が悪くなってた。そして、ついには「ぶー、ぶー」言いだした。

「なんだよー。やってくれないなら、ここでずーっとダラダラし続けてやる！ ……だら〜……ぐだ〜……でろでろ〜」

変なことを言いながら、ベッドの上で両手足を投げ出してダラけたり、転がったりしだしたジーノくん。

そんなことをされ続けたらさすがに調合にも集中できなくなっちゃうから、しないでほしいんだけど……でも、そうなるとジーノく

んの試合の相手をしなくちゃならなくなるわけで……。

色々迷った末、わたしはため息を吐きつつベッドで寝転がっている
ジーノくんと言った。

「もうっ……一回だけだよ？ 一回やったら帰ってね？」

「よっしやー！ じゃあさっそくやろうぜ!!」

「えっ、ちょ……まだ、準備が……きやー!？」

……こうして、わたしは村から少し離れた岬にある原っぱに腕を
引っ張られていった……。

そして……

「……えっ」

「あれ？ ……か、勝っちゃった？」

いきなり連れ出されて爆弾とかを持ってこれなかったから、杖だけで戦うことになったんだけど……今、わたしの目の前には尻餅をつくようにして倒れているジーノくん。そう、わたしはジーノくんに勝ったんだ。

「や、やったー！ わたし、ジーノくんに勝っちゃった！」

「……」

予想外のこと、わたしは跳び跳ねて喜んでしまう。……けど、ふと視界の端の尻餅をついたまま呆然とした顔をしているジーノくんが目についた。

「あっ……ごめんね。ジーノくん、手加減してくれてたんだよね？」

なにのわたし……」

「……うっ、ぐすっ」

わたしが謝っていたら、呆然としてたジーノくんの顔が段々歪んできて、目じりのあたりに涙が溜まり始めた。

……!? も、もしかして、パッと見たところ大きな怪我とか無さそうに見えるけど、実はどこかに……!？」

「ジーノくん!? どうしたの!? どこか痛いところが……!」

「うるさい! 触んな!!」

駆け寄って怪我が無いか確かめようと伸ばした手をジーノくんに振り払われた。

そして、ジーノくんは立ち上がって……

「う……うわあああーん!!」

大声で泣いて走り出してしまった。

「ジーノくん!」

「くっ、遅かったか……!」

走っていったジーノくんを追いかけようとしたんだけど、いきなり後ろの方から声が聞こえてきて驚いてしまい、足が止まってしまう。

そして、反射的に後ろを振り向いた。そこにいたのは、直前まで走っていたのか息が荒く肩で息をしているステルクさんだった。

「ステルクさん! どうしてここに!」

「村に着いたら、キミたちが戦いに村の外の出たと聞いてな。もしかと思い、急いで追いかけたのだが……」

そこまで言うのと、ステルクさんは少しだけ目を伏せてしまう。

「……アイツも、私と同じ十字架を背負ってしまったか……」

「何の話ですか? ……って、そうだ! ジーノくん追いかけないと!」

「行くな!」

走りだそうとしたところで、ステルクさんに強い口調で呼び止められてしまう。

「今、キミが追いかけたところでアイツの傷口に塩を塗ってしまうだけだ。……ここは私に任せてくれないか」

「ステルクさん……お願いします」

今現在・トトリのアトリエ

「……ってことが、昨日あつてね」

「ふーん……よくわかんない」

「あはははっ。そ、そうだよねー」

キョトンとして首をかしげているピアニヤちゃんを見て、自然と笑いが込み上げてきた。

……でも、こうやってアトリエでボーっとしててもどうしようもないわけ……でも、やる気も出無いし……どうしよう？

「……ちよつと、外の空気を吸ってこようかな？」

そう思い立ち、わたしはイスから立ち上がる。

「トトリ、どこ行くの？」

「うん、ちよつと気分転換に村の中を散歩してこようかなーって」

「そっかー。ピアニヤはちえちーにお留守番頼まれてるから、待ってるねー」

「ちむむー？」

「ちむーちむちむっ」

「ちくむくー！」

「ちちむ、ちむー！」

ピアニヤちゃんとちむちゃんたちに見送られて、わたしはアトリエを出た……。

アランヤ村・村中心広場

「なんとなく出てきたけど……どうしようっ」

村の中を歩き回ってみてもいいような、広場のベンチに座って空を眺めてみるのもいいような……ゲラルドさんのお店に行って、お酒は飲めないけど誰かと話してみるのもいいかもしれない。

……と、そんな事を考えながら歩いていると、広場に入ってくる人

影が見え……それが誰なのかわかったところで、わたしは駆け出した。

「ステルクさん！」

「キミか。となれば……」

「ジーノくんは……ジーノくんはどうなったんですか……?」

わたしがそう聞くと、ステルクさんは眉間にシワを寄せて、ただでさえ普段から怖い顔なのに一層顔を怖くした。

「アイツは……その、なんといいか……」

「もしかして、ダメ、だったんですか……」

「いや、そうじゃないんだが……何と言ったものか」

何故かはわからないけど、中々教えてくれないステルクさん。

もしかして、本当にダメで、わたしには会いたくないなんてジーノくんが言ったんじゃない……そう思うと涙があふれてきて……!

「お、落ち着け! 実は、そのだな……まだ、アイツを見つけられていないんだ。昨日と今日で村の中を何度も周ったんだが……影も形も見当たらずな」

「それって、もしかして……! 家出ですか!」

「彼も『冒険者』なのだから「家出」という表現はいささかおかしいと思うが……? いや、むしろ逆に家に引きこもっているのか? アイツの実家は私も知らないから行けていないし、あり得ない話ではないかもしれない」

「それならわたしが……!」

ステルクさんが調べられていないというジーノくんの家へ案内しようとして、ステルクさんの手を取って歩き出そうとしたんだけど……

「ジーノ君なら、もう村にはいないよ」

「ひゃっ……! お、お父さん!? いつの間に!」

「それで、村にはいないとは、どういうことでしょう?」

いつの間にかわたしたちのすぐそばにいたお父さん。そのお父さ

んにわたしは驚いてしまったんだけど、ステルクさんはそこまで驚かなかったみたいで、すぐさまお父さんの言葉の意味を聞いていた。

「昨日のことなんだけど、釣りをしようと思って港に行ったらジーノ君が泣いていてね、どう声をかけるべきか迷っていたら偶然マイス君が来たんだ」

「マイスさんが?」

「ああ。後から聞いた話なんだけど、なんでも本当はトトリが前に言ってたっていう『お酒』のことがどうなったかを調べに来たらしいよ? で、村に来たから私なんかも挨拶しようと思って港に来たらしい」

『お酒』っていうと……『ビア』と『コヤシイワシ』を調べて作った『アンチョビア』とか、ついこのあいだ作った、『バクダンウオ』を使った『爆弾酒』、『トゲマグロ』を使った『マグロワイン』、『蝶々魚』を使った『バタフリキュール』とかのことなんだと思うけど……。

確か、一番最初にゲラルドさんにお酒の事を頼まれた時に、お酒の作り方をマイスさんに教えてもらったんだよね。その時の事を覚えて、マイスさんは気にしてくれてるんだと思う。

……そう考えると、せっかく教えてくれたのに作ったお酒が生臭くて気持ち悪いものなのは、凄く申し訳ない気がする。ゲラルドさんのお店が生臭い理由がお酒のせいだって知ったら、マイスさんショックを受けるんじゃない? でも、ゲラルドさんはあんなので喜んでるし……。

「話を戻すけど、ジーノ君はマイス君と話したかと思ったら、ちよつとしたら何かせがむようにしてね。その後、大きな声で「んじゃ、『青の農村』に行くぜー!」って言って港を飛び出していったんだ」

「あれ? お父さんはお話に参加してなかったの? ……あつ、もしかしてお父さん、気付かれてなかった?」

「ジーノ君にはね。マイス君はいるのはわかってたみたいで、ジーノ

君が飛び出していった後に私に声をかけてきたよ」

「そこで、さっきのお酒のことを聞いたんだ」とお父さんは付け足して言った。

ええっと、つまりジーノくんはマイルスさんと何かを話した結果、『青の農村』に行っただってことで……。

「も、もしかして！ ジーノくん、冒険者を辞めて農家になるの!？」

「さすがにそれは無いと思うが。だが……あんなに嫌がっていた道を選ぶほど、精神的に追い詰められていたんだらうな……」

……？

ステルクさんの言ってることはよくわからないけど、とにかくジーノくんは『青の農村』にいるっていうことは間違い無いはず。なら、今から会いに行つて、あの時の事を謝つて……。

そう考えると、ふいに肩をポンと叩かれた。わたしの肩に置かれた手はお父さんのだった。

「会いたいわって気持ちもわかるけど、今はジーノ君にとって大事な時、色々考えたくないといけない時期なんだと思う。だから……少しの間だけ待つてあげるといいよ」

「そう、なのかな？」

「そう心配そうな顔をするな。……私が『青の農村』へ様子を見に行つておこう。だから、キミは自分のすべきことをしていればいい」

ステルクさんにそう言われて……やっぱりまだ気になるけど、わたしはジーノくんのごことはステルクさんと……あと『青の農村』にいるマイルスさんを信じることにした。

わたしがすべきこと……？

そういえば、何かあつた気がするんだけど……アトリエでも何か思い出しそうだったんだけど……？

「あ……ああっー!! そういえば、どうして村に帰りたくないのか、ピ

「アニヤちゃんに聞くのすっかり忘れてたー!？」

????

ボキンッ

「あっ」

「ジーン君、これで三本目なんだけど……力任せに地面に降ろせばいいんじゃないんだよ?」

「つつても、思いつきりやらないと修行って感じがしねえし……」

「だからってさあ。もうっ、ギゼラさんじゃないんだから十何本も叩き折られたら困るんだけど」

「えっ、トトリのかーちゃんも折ってたのか!? なら、それと同じくらいの数折れば、オレもトトリのかーちゃんみたいに強く……」

「えっ、いや、その理屈はおかしくない?」

5年目：マイルス「ジーノくん強化計画！」

青の農村・マイルスの家前

空は快晴。今日も農作業日和だ。……って、雨が降ってても、雪が降ってても、雷が鳴ってても農作業はするんだけどね。でも、やっぱり気分というものもある。

そんな事を考えながら作業をしているんだけど、今、僕以外にも僕の畑で作業をしている人がいる。

「ふっ！ たあ！ おりゃー！」

元気の良いかけ声と共に『クワ』を振り下ろすのは、ある理由で『アランヤ村』から来ているジーノくんだ。

来てすぐのころは、ただただ力任せに農具を扱い壊してしまうことが多かったジーノくん。でも、最近はまだ無駄な力が入ってはいえるものの農具を壊さなくなり、作業のスピードも速くなってきている。

「っし、終わったー。マイルス、耕し終わったぜ。今度は何植えるんだ？」

まだ収穫段階に入っていない作物たちに『ジョウロ』で水をあげているとそんな声が聞こえた。振り返ってみると、『クワ』を地面に垂直に立て。その先端に右手を置いて空いた左手で額の汗をぬぐっているジーノくんがいた。

「今回は『イチゴ』と『キャベツ』、あと『サクラカブ』を植える予定だよ。玄関の隣に出してるから、それを蒔まいてくれないかな？」

「玄関の隣……ああ、あのカゴの中か！ わかったー！」

元気良く返事をして、種を取りに行くジーノくん。

その後ろ姿を見ていた僕は、こうなった経緯を……数週間前のことを思い出した……。

数週間前・アランヤ村・埠頭

とあるちよつとした用事で『アランヤ村』を訪れた僕は、「せつかくだし」ということでグイードさんに挨拶をしようと思い、グイードさんが釣りをしていることが多い港の方へと行った。

で、グイードさんを探すよりも先に、港の一角で膝を抱えて座っているジーンノくんを見つけた。……そして、よくよく見てみると、ジーンノくんがいる場所から少し離れたところに、何やら困り顔のグイードさんがいることに気がついた。

「どうしたんだろう?」と思い近づいていつている途中で気がついたんだけど、ジーンノくんの肩が時折震え嗚咽が聞こえてきてきたのだ。これにはさすがに驚き、色々と気になることもあったけど、真つ先にジーンノくんに声をかけることにした。

「ジーンノくん、どうしたの?」

「ぐしゅ……ん、マイス……?」

こつちを向いたジーンノくんの顔は、目元を中心に赤くなっていて、涙と鼻水で濡れていた。

「ホントにどうしたの!? そんなに泣いて……ほらっ、このハンカチ使って」

「うるさい! ほつといってくれよ……それに、泣いてなんかかない」

そう突っぱねられたけど、「はいそうですか」と引き下がり、放っておくわけにもいかなかった。なので、隣に座って根気強く話し続けた。……すると、ポツリ、ポツリとだけど、何があったのか話してくれた。

要するに「トトリちゃんと勝負をして負けてしまった」ということらしかった。こう言うの簡単そうに思えてしまうかもしれないけど、本人にとつては色々と複雑で難しい問題であることは疑いようがなかった。

でも、錬金術士相手に勝つということ自体、難しいとこだと思う。正直なところ、何かしらのルールを作ってないと延々と回復された

り、離れたところから爆弾とかで一方的に攻撃されるし……

そう言ったら、ジーノくんが一層泣き出してしまった。……なんでも、トトリちゃんは杖だけで戦ってたらしい。……そ、そっかあ……。

「でも、単純な強さで負けたんなら、今よりも強くなればいいんじゃないかな？」

「んなこと言っても、オレ、これまでもずっと特訓してきてるんだぜ？」

なのに、それ以上強くなるってどうすりゃいいんだよ……」

「それは、ええつと……これまでやったことの無い特訓の方法を新しく加えるとか？」

「やったことの無い特訓？　けど、これまでに色々……」

そう言つてたジーノくんの口が止まったことを不思議に思い、チラリと隣を見てみると……目をキラキラさせたジーノくんが僕の事をジーツと見てきていた。

「ミス！　オレに畑仕事を手伝わせてくれ!!」

現在・青の農村・ミスの家前

……そんなことがあってジーノくんは、こうして僕の家ウチで農作業をしながら普段の特訓をしつつ過ごしていた。

何故、ジーノくんが畑仕事をしたがつたかというと、以前にジーノくんに「なんで強いのか」聞かれた時に農業を勧めたのが原因……だと思う。まあ、ウソじゃなくて本当のことなんだけど……。

そうして僕はといえば……

「ミスー！　種、蒔き終わった！　そっちも終わったかー？」

「うん、こっちも終わったよ。……これで、今日の作業は全部終わりだね」

「よっしゃー！　じゃあ、あっちでやろうぜ!!」

「はいはい、片付けてからね？」

農作業が終わった後、ジーノくんの朝の特訓を手伝うようになった。朝ゴハンはその後、ということになった。

ジーノくんのする特訓というのは、素振り半分、実戦半分といったところだった。僕が手伝うのは実戦のほう……つまりは試合だ。これまでステルクさんと何度も試合をしてきたことがあるから、僕としてはそこまで難しくなく、むしろいい刺激になっていたりする。

そんな実戦特訓が始まるまで、僕もジーノくんの隣で軽く素振りをしていたんだけど……ふと、ジーノくんの手が止まっていることに気がついた。

「……？　どうかした？」

「ん〜？　いや、ここに来て畑仕事とか特訓とかし始めてさ自分でもこれまでよりも強くなってきた気がするんだ」

それはそうだろう。農作業は足腰が鍛えられる他に、体力やらスタミナやら根本的な能力のアップも期待できる。そういつた基礎能力が上がれば剣の扱いにも影響が出てくるから、強くなった実感もあるはずだ。

でも、その割には、ジーノくんはうかかない様子なよう……？

「なんていうか、こう……いい感じなんだけど、なんか足りない気がするんだ」

「足りない？　そんなふうには思えないんだけど……？」

「足りないったら、足りないんだって!!　って……あ、あー！　アレだ！」

僕が何か言うよりも先に、ジーノくんが自分の中で勝手に解決したようだ。……で、結局何が足りなかったんだろう？

「必殺技だよ！　必殺技!!　いくら強くなってもキメ技がねえとダメだよな！」

「えええ……？　そういうものなのかな？」

でも、まあ、言いたいことはわからなくも無い。やっぱりカッコイイ技の一つや二つは欲しい気がするし、ロマンというのもわかる。特にジーンくんのような性格の子なら、そういう傾向は強いんじゃないかな？

「なあなあマイス、なんかいい必殺技ないか？」

「必殺技……というわけじゃないけど、『ルーンアビリティ』って技ならいくつか」

「本当か!？」

「うーん……ジーンくんが使ってるような剣だと……」

僕は手に持っていた双剣『アクトリマッセ』をしまい、代わりに『秘密バッグ』でコンテナから片手剣『まごの手』を取り出した。そして、誰もいない方を向いて『まごの手』を構えてみせる。

「まずは『ラッシュユアタック』」

流れるような動きで『まごの手』を何度も振るってみせる。

「……振るのはちよつとはやいけど……なんていうか、普通じゃね？」

「次は『ダッシュユスラッシュ』」

その名の通り走り込んで距離を詰め一撃をかまし、そこから連続攻撃に繋げる技だ。

「なんていうか、跳びかかっただけだな」

「敵を何らかの異常状態にする『マインドスラスト』とか？」

振るわれた『まごの手』に毒々しいというか不気味な光が灯り、それが斬撃の軌跡をなぞるように光る。

「……普通に斬って倒した方がよくね？」

「そ、それじゃあ、『ラウンドブレイク』」

体を軸にして回転し、敵を斬りつけ、「ボス」などと呼ばれるよほど強い敵でもない限り相手を吹き飛ばせる大技だ。

「おおっ！ やつと必殺技っぽいのが……でも、威力の割にスキが大

きすぎないか？」

「ええいつ！ 『パワーウエーブ』！」

抜き放った『まごの手』から衝撃波が発生し、十メートル近くまで飛んでいった。

「こつちも中々かっけえ……けど、もう何発か一気にとばしたいなあ……」

……とりあえず、片手剣用の『ルーンアビリティ』をジーノくんに見せてみたんだけど、どうやらお気に召さなかったようだ。

「なんつーか、全体的に地味じゃなかったか？」

「ううん……まあ、『片手剣』の『ルーンアビリティ』って連続攻撃の起点か、連続攻撃の最後のスキを消すために使うことが多いからなあ」

特に、『ダッシュスラッシュ』と『ラウンドブレイク』はその特色が特に出ている。他にも『パワーウエーブ』は片手剣じゃ普通は届かない距離の相手への攻撃といった補助的な意味合いが大きく、ジーノくんが想像しているような必殺技とは少し違うのだろう。

『両手剣』とか『ハンマー』、『斧』、あとは『槍』なんかだったらもうちよつと派手なのがあったりするけど……そのためだけに武器を変えろわけにもいかないからねえ……」

他にも僕が普段使ってる『双剣』にも『ルーンアビリティ』があるけど、それらもどちらかといえば『片手剣』の『ルーンアビリティ』と似た傾向だから、必殺技とは言えないかもしれない。……便利ではあるんだけどね。

「違う武器の『ルーンアビリティ』も使えないわけじゃないし……『ミリオンストライク』あたりを使ってみてもらおうかな？」

『槍』の『ルーンアビリティ』である『ミリオンストライク』は、槍の一突きと共に複数回の突き攻撃が発生する……一回突いただけでダダダダダダッと、攻撃判定が出るのだ。

その手数とリーチの長さから中々使い勝手のいい『ルーンアビリティ』なんだけど……あとはジーノくんが気に入るかどうかな？
もしくは、一から何か技を考えてあげてもいいんだけど……

「必殺技に関しては、私が教えてやろう」

「えっ」

ふいにかげられた声に、僕とジーノくんが一緒になって声をあげた。

そして、その僕らにかけられた声のした方向を見てみると、そこにいたのは……

「ステルクさん！」

「師匠！　なんでここにいるんだ？」

『アランヤ村』におらず、聞いてみれば『青の農村』にいるという情報を掴んでな……どうしているのかと思い、少し覗きに來たんだ」

そう言ったステルクさんは「さて」と呟き、胸の前で腕を組み、その目でジーノくんをジロリと睨んだ……ように見えるけど、きつとただ単に見ただけなんだろう。ジーノくんも特に反応していない。

「そういうわけだ。これから、お前に必殺技を教えてやろう。ただし、生半可な覚悟では習得できないぞ？　やれるか？」

「やるやる！　ぜってーやってやる!!」

必殺技を教えてもらえることがそれほど嬉しかったのか、ピヨンピヨン跳び跳ねて喜ぶジーノくん。

そんなジーノくんを見て、小さなため息を吐きつつもなんだか嬉しそうな様子のステルクさんが、僕のほうを見て、「ところで」と口を開いた。

「キミには手伝ってほしいことがあるんだが……」

「何ですか？」

「それはだな……」

そう言っつてステルクさんは僕に耳打ちしてきた……んだけど、その

内容は僕としては素直に領けるものじゃなかった。

「それはさすがに手伝ええないというか……他に方法は無いんですか？」

「そうは言ってもだな。アイツを本当にトトリに勝たせるというのも難しいだろう？ となれば、モンスターに詳しいキミがなんとかして……」

「もっと平和的なきつかけからの仲直りはできないんですか？ いくらなんでも、ロロナが連れ出した何も持っていないトトリちゃんに、僕がモンスターをけしかけて、そのモンスターからジーノくんがトトリちゃんを助けるって……トトリちゃんを危険な目に合わせて怖がらせることもですけど、モンスターの方のことも考えると、僕は協力できませんし、むしろ止めたいですよ」

「キミの言いたいこともわかる。しかしだな、今回はアイツの強さに対するプライドが関わっているから、平和的にというのはなかなか……」

ステルクさんの言いたいこともわかる。

モンスターも、話を聞いてくれない、人を襲ってまわるモンスターを僕が探して何とかして連れて行ったり、僕がジーノくんが武器をつくってあげたりすれば、まだ気持ちの落としたころはあるからいいけど……けど、やっぱり戦えない状態のトトリちゃんをモンスターの前で一人にするというのはどうしても容認できない。ジーノくんが助けることが決まってるとはいえ、下手をすれば大きなトラウマになってしまうかもしれない。

……なら、どうしたらいいか？ 時間が解決してくれる、とかそう言う感じでもないし……

「ん？ 師匠たち、何話してるんだ？」

「いや、何も」

……本当にどうしたものでしょう？

5年目：「ミニ」あの事

冒険者ギルド

ああ、イライラする。いえ、イライラとはちよつと違うかしら？
ソワソワというかモヤモヤというか……とにかく、あんまり良い気分じゃない。

私がそうなってしまったている原因は、自分でも大体わかってるんだけど……

「み、ミニ様……？」

「なに」

「ぴい!?」（ここのこ）、これ、今回の依頼の報酬ですう!!」

受付嬢 フィリーがそう言つて差し出された、こなした依頼の報酬を受け取つて内容を確認した。……まあ、比較的近場の採取地のやつでそう難しくないものだったし、こんなところかしら。

……にしても、「様」付けが基本になってきてる気が……なんでかしら？

「あ、あのー……もしかして、怒ってます？」

「別に怒ってなんかないわよっ!」

「ふええ……やっぱり無茶苦茶機嫌悪い〜!」

「と・に・か・く! あんたには関係無いから黙りなさい!」

弱々しい声で泣きわめき始めそうになっている受付嬢を叱りつけ、これ以上ここにいと余計にイライラしてきそうなので、早々にこの場を後にすることにした……。

アーランドの街・広場

『冒険者ギルド』を出た私は、ある目的のため『アーランドの街』の中央あたりにある広場に来ていた。

その広場の中心にある噴水のそばのベンチに腰掛けて、私は「ふう」と息をついた。

「……まあ、あてもなく来たところで会えるとは思ってなかったわ」

「誰が」かというところ、この広場など人通りの多い場所で人形劇をおこなう旅芸人のリオネラさんだ。「旅芸人」とは言っても、最近はおつばら『アーランドの街』や『青の農村』を中心に活動しているみたいだけど……。

でも、いつ、どこでやるかわからない人形劇を目印にしてリオネラさんを探すというのも、普通に考えれば無理な話だった。もしかしたら、街じゃなくて『青の農村』にいるのかもしれないし、そもそも毎日人形劇をしているとも限らないわけで……そこは、一回でどれだけの収入を得られるかっていうことが関係してきそう……だけど、今回はそんなことを知りたいわけじゃない。

「リオネラさんなら、あの事も何か知ってると思っただけど……」

詳しくは知らないけどリオネラさんは、マイルとかなり親しい間柄だということがわかってる。なにしろ、マイルの家に頻りに泊まっていたのだから……というか、一時期は同棲に近い状態だったみたい。

まあ、私はマイルの性格とかお人好し加減を知ってるからわかるが、マイルのほうからしてみれば本当にただ単に泊まらせてあげてるっただけで、二人の間に深い意味はなさそうなんだけど。

けど、どうしたものだろう？

このままりオネラさんが来ないか待ってみるか、それとも今日は素直に諦めてまた後日探してみるか……。

以前にあったある一件でいくぶん話しやすい相手になったリオネラさんではなく、別の人であるあの事を知ってそうなる人にターゲットを変えて聞いてみるっというのも、アリと言えばアリなんだけど……：……：べ、別に面と向かって話せる相手が少ないとか、そう言うわけじゃないんだからっ！

「あーっ！ ミミちゃんだー！」

「ひゃっ……って、ロロナさん？」

唐突にかけられた声に驚き、色々考えてうつつむき気味になっていた顔を上げると、そこにはトトリの錬金術の先生でありアーランドの発展に大きく貢献したとされる錬金術士ロロライナ・フリクセル……通称ロロナさんがいた。これまでにアトリエで会ったり、トトリとの冒険で一緒になったりと、これまでも付き合い自体はあった人だ。ベンチに座ってる私の前まで来たロロナさんは、ちっちゃな子が見せるような柔らかな笑みを浮かべながら私に話しかけてくる。

「奇遇だねー。わたしはなんとなくお散歩したい気分だったから街をウロウロしてたんだけど、ミミちゃんは？」

「え、あっはい、私は冒険中に達成した依頼を報告した帰りで……それで、ここであつと休憩してました」

「そっか、お仕事頑張ってきたんだね。いいよねー、一仕事終わらせた後のひなたぼっこは格別で……ベンチもいいけど、オススメは『青の農村』でモフモフした子に抱きついてしばふに寝転んじやうことかな」

「あつ、夏はぶに系がいいよ」と付け足して言うロロナさんに、「ひなたぼっこではない」と言おうかと思いつつもなんとなく相槌を打つ。すると、何故だかよくはわからないけど、ロロナさんは楽しそうに体を揺らし始めた。

「それでそのまま寝ちゃってもいいんだけど、面白い形の雲を探してみたりしても楽しいんだよ。例えば、『シーフードパイ』の形とか……」

……きつとこの人は、小さい頃から変わらずこんなホワホワした感じだったんだろうという気しかしない。あつ、よだれが少し垂れてる。

この人が、あの稀代の錬金術士様だというのだから世の中わからないものだ。……そんなことを言ったら、マイルスも大概か。

「うー、パイのこと考えてたら、なんだか食べたくなってきちゃった！」

今からアトリエに帰って調合しよつかなー。よかつたらミミちゃんも来ない？」

「えっ、ええつと……」

トトリはまた『アランヤ村』に帰っているからいないだろう。けど、よくよく考えてみると……もしかしたら、ロロナさんもあの事を何か知っているかもしれない気もしなくは無かった。

そうになると、このお誘いは良い機会なんじゃないかしら？

「それじゃあ……お邪魔させてもらいます」

「うんうん！ それじゃつしゅっぱーっ！」

ロロナのアトリエ

「ふんふん、ふふふーん。そおれ！ ぐるぐる」

軽快……というか愉快的な掛け声と共に錬金釜をかき混ぜるロロナさん。

色々とおつてなりゆきで錬金術を習った私から見ても、謎の掛け声は必要なのかわからずなんとも不思議に思えてしまう。同じ『錬金術』なはずなのに、私がするものとは別物のように感じているのはどうしてだろう。

私はというと、錬金釜をかき混ぜて『パイ』を作っているロロナさんの後ろ姿をソファに座って眺めていた。

……この光景に何の疑問も違和感も覚えなくなってきたあたり、私ももうずいぶん毒されているのかもしれない。

「ねえ、ミミちゃん」

不意に、こっちに背を向けたままのロロナさんから呼ばれた。

ロロナさんの手は相変わらず杖を持っていて釜の中をかき混ぜ続けていたため、聞き間違いか何かかと思っただけ、そう間をおかずにまたロロナさんの声が聞こえてきた。

「もし間違ってたならゴメンなんだけど……もしかして、何か悩んでたりする？」

「えっ」

「なんとなくなんだけど広場で見かけた時、目と目の間がキューってなつてたから何かあったのかなーって」

目と目の間がキューって……つまりは、眉間に皺が寄っていたという事なんだと思う。けど、私、そんなふうになつてたのかしら？

見抜かれ、指摘されてしまったのはあまり気分の良いものではなかった。けど、あの事は最初から聞くつもりだったから、不機嫌さを何とか胸の内に留めつつこのままの流れで行くことにする。

「えっと、実は悩み事ってほどじゃないんですけど、気になつてることがあつて」

「気になつてる？ なあに？」

「マイルスが前にいたところのことなんですけど……」

そう。私がずつと気になっていたことは、マイルスが前にいたという『シアレンス』のことだ。正確に言えば本当は少し違うのだけど、おおよそはそのとおりだ。

これまでに何度かマイルス本人に聞こうとし、出鼻をくじかれたり、他の人の乱入があつて結局聞けずじまいになつてしまつている。

それを聞いたロロナさんは、何を思ったかはわからないけど「うーん……」と首をかしげて小さくうなりだしてしまつていた。

……混ぜるスピードがこころなしに速くなつてるんだけど、大丈夫かしら？

「マイルス君が前いたところって確か、し、し、し……しーくわーさー？」

「……『シアレンス』です」

「そう！ それ！ ……って、あれ？ ミミちゃん知つてたの？」

「それは、まあ」

かき混ぜつつも振り向いてきてキョトンとしているロロナさんを

見て「もしかして、名前しか知らない？」という一抹の不安を感じつつも、とりあえず他の情報が無いかコロナさんの目を見て次の言葉を待ってみる。

「となると……あとは何も知らないかなあ。あはははっ……」

知らなかった。名前も曖昧だったことも含めると、私の人選が悪かったと思うしかないのかもしれない。

「師匠を探しに旅をしまわった時に、その『シアレンス』のことも聞いてまわってみただけど、最初に街で聞いた以上のことはわからなかったんだよね……」

ちよつと失礼だけどちゃんと調べようとしていたことに驚きつつ、また行き詰ってしまったことに肩を落とす。

コロナさんもミスとは仲が良さそうだったから何か知っているんじゃないかって思ったんだけど……。

「そういえば、ミミちゃんは『シアレンス』のこと気になってるの？」

当然と言えば当然の疑問が、コロナさんの口から出てきた。

「実は……」

ここまで来たら隠すことでも無いので、事の顛末をコロナさんに説明した。

トトリのお母さんを探す旅で、たどり着いた場所でミスの口から聞いた言葉を。その後、ミスから直接聞こうとした時に、ミスが喋ろうとしない内容があったことを。

それを聞いたコロナさんは大きく首をかしげてしまい、釜をかき混ぜている手も完全に止まってしまっていた。

……最終段階に入っているのであればある程度は放置していても問題無いと思うんだけど……爆発、しないわよね？

「なるほど……『シアレンス』に帰れない理由かあ。それは聞いても話してくれなかったんだね？」

「はい。結局トトリたちが来てうやむやになったんですけど……」

「そっかー、わたしは初めて聞いたよ……。そういえば、会ってちよつ

としたころからマイルス君は全然『シアレンス』のことを調べたりして
る感じはなかったけど、それも関係したりするのかな？ うーん、よ
くわかんないや」

そう言つて腕を組んで悩みだすロロナさん。

当然私も、ずつと前から悩んでいる。

何故『シアレンス』に帰れないのか。そこからアーランドに来たは
ずなのだから、帰る事だつてできないほうがおかしいと思う。

そして、何故『シアレンス』に帰れない理由を私やロロナさんにも
言わないのか。理由を聞けば絶対納得できるとは言えないかもしれ
ないけど、少なくともこんなモヤモヤした気持ちにはならず済んだ
はずだ。

「うーん……イクセくんなら何か知ってるかな？」

「イクセくん？」

聞いたことの無い名前……いや、トトリに連れられて行つた
『職人この通り通り』にあるレストランのコックがイクセルつて名前だった気
がする。そのあだ名か何かだろう。

数軒隣の店だし、知り合いなのかもしれない。

私の言葉をどう受け取つたのかはわからないけど、ロロナさんは
「あつ、えつとね」と私に何か説明するように話し出した。

「私が『シアレンス』のことを聞いたのつて、マイルス君からじゃなくて、
エステイさんとイクセくんからだったの。エステイさんは今は街に
いないけど、イクセくんならもつと何か知ってるんじゃないかなーつ
て思つて」

ロロナさんがそう言つたところで、まるでタイミングを計つたよう
に鍊金釜から「ぽんっ」と音が立った。どうやら調査は無事成功した
ようだ。

「それじゃあせつかくだから、さつそくイクセくんのところに行つて
みよっか！」

「え、でもお店は営業時間で邪魔になるんじゃない……」

「大丈夫、大丈夫。今はそんなお客さんが多い時間じゃないし、多めに作った『パイ』をお土産に持つてくから！」

そう言つて、つい今さつき出来たばかりのパイをかかげるロロナさん。紫色のクリームや上に乗っているモノからして『ベリーパイ』だろう。

でも、それって……

「飲食店に飲食物を持ちこんでも良かったかしら……？」

不安を感じつつも「それじゃ、いこー！」とやる気満々のロロナさんを止めることはできそうになかったため、仕方なく大人しくついて行くことにした……。

サンライズ食堂

「こんにちはー！ イクセくん、いるー？」

「友達ん家に遊びにでも来てんのかよ、お前は」

「えっ？」

「おいおい……今はちようど客がないけど、ここは店だぞ？」

ため息を吐いているイクセルさんからは、諦めているような様子が感じられ、おそらくはこう言つたやり取りは初めてではないんだとわかる。

「あつ、これ『ベリーパイ』！ 出来立てだからイクセくんも一緒に食べよう」

「当り前のように誘うなよ。つーか、食いもんならウチで買つてけ」
「飲み物は頼むからね？ ねっ？」

ロロナさんのお願いに、イクセルさんは呆れ顔を見せつつもカウンター席を指し示した。

『香茶』用意すつから、まあ座つて待つてろ」

「はーい！ ミミちゃんもこっちこっち」

「は、はあ」

トコトコとカウンター席に駆け寄つたロロナさんが、振り向いて隣

の席をポンポンと叩き私に勧めてきた。……二人のノリについてい
けず置いてけぼりをくらった感覚だけど、いまさら帰るわけにもいか
ず勧められるがままにロロナさんの隣の席に座ることに……。

「あの……ロロナさんはこの人とどういった関係なんですか？」

「イクセくん？ 幼馴染だよ。私とくーちゃんとイクセくん、ちつ
ちやいころからよく一緒に遊んでたりしてたんだー」

それを聞いて納得した。だからあんなノリの会話を普通に慣れた
様子でしていたのか、と。

……いや、ロロナさんは大体誰とでもあんな感じか。

そんなふうにはロロナさんと話しているうちに、イクセルさんが『香
茶』を用意し終えたようで、私たちの前に持ってきた。それに合わせ
る様にしてロロナさんが私とロロナさん自身、そしてカウンター向こ
うのイクセルさんのほうへと、切り分けた『ベリーパイ』を配った。
「それじゃー、いただきますーすー！」

「……いただきます」

「おう。んじゃ、俺も休憩がてらちよつと食うとしますか」

私たちは各々自分の分の『ベリーパイ』を一口食べた。

いつだったか、トトリが「先生は錬金術でパイを作るのが上手なん
だよ」とか言ってた通り、そして、これまでもたまたまお邪魔した
時にいただいた『パイ』たちと同じく、『ベリーパイ』はとても美味し
かった。お店で出てもおかしくなくらい……というより、お店より
も美味しいのだから自然と二口目にいってしまおう。

「んで、珍しい組み合わせに思えるんだが……今日はどうかしたのか
？」

はっ!? 『ベリーパイ』に夢中になり過ぎて、ここに来た本来の目的
を忘れるところだったわ!?

何か付いてしまっていないか気になる口元をハンカチで拭いっつ、
姿勢を正し顔を上げる。

見えたのは、興味深そうに……というよりは、単純に意外で少し驚いているといった様子のイクセルさん。おそらくは、ここにあともう一人……トトリあたりがいれば何の違和感もなかったことだろう。

「ふひゅあへ、ひよほは……」

「口の中のもの、飲み込んでから喋ってくれよ。さすがに何言ってるかわかんねえから」

口元を両手で隠しながらモゴモゴ喋ろうとする口ロナさんと、それを止めるイクセルさん。

口ロナさんは一度頷くと、そのままモグモグして「……っつきゅん」と喉を鳴らしたかたかと思うと、口を隠していた両手をそのまま頬に当てて満足そうな笑みを浮かべた。

「えへへ……はっ?! え、ええつとね、今日はミス君のいた『シアレンス』のことでちよつとあつて……」

「ああ、あの事か。何かわかったのか?」

「わかったっていうか……わからないことが増えたっていうか……」

「あつ、それについては私から……」

二人の会話に割り込む形で私が声をあげる。……この話を持ってきたのは私なのだから、事の経緯は自分でちゃんと説明したかった。

アトリエで口ロナさんに話したことと同じ事を、イクセルさんに説明した。すると、イクセルさんは納得したように大きく頷いた。

「なるほどな。そういう流れでウチにも来たつてわけか」

「はい。それで……何か知ってたりしませんか?」

そう問いかけたのだけど、残念ながらイクセルさんも何もわからないようので、ゆっくりと首を振ってきた。

「いや、今初めて聞いた話だ。そもそも『シアレンス』のこと自体、ミスやエステイさんから最初に聞いたこと以外、わからないままだよ。料理とか食文化のことなら結構詳しく聞いてるんだけどな……」

「そっか……イクセくんも私と同じ感じだったんだね」

「そうなるよ、マイルス以外で知ってそうなのって、その……エステイさん、って人だけですか？」

けど、エステイさんという人は今は街にいないとかコロナさんが言ってた。となると、後はやっぱりリオネラさんあたりなのだろうか？

「妹のフィリーが何か知ってるとは思いますが……待てよ？ アイツなら何か知ってるかもしれないな」

……と、私も知ってる名前を出して悩んでいたイクセルさんが、不意に動きを止めた。なにやら心当たりがあるみたい。

「えっ、イクセルくん、アイツって誰？」

「クーデリアだよ、クーデリア！ アイツ、前に俺も知らねえマイルスのことを言ってるさ。だから、もしかしたら何か知ってるんじゃないかって思ってるさ」

「げっ」

つい口に出してしまったけど、私にとって嫌な奴の名前が出て来てしまった。

……正直なところ、私だけで考えた時モリオネラさんと同じくらい知ってる可能性はありそうだとは思ってた。けど、個人的に嫌いだったから話を聞いてみる相手から真っ先に除外しておいた。……だといふのに、ここで名前が出てくるなんて……。

「ねーねーイクセルくん。くーちゃんが言ってたマイルス君のことって何？」

「ああ、結構前の話なんだが……二人がウチに飲みに来てた時に酔っ払っていつもの身長自虐ネタで絡み辛い空気を作ってた時に言っただんだよ」

当時の様子を思い出しながら、語り始めたイクセルさん。

身長自虐ネタって……まあ、確かにクーデリアあの受付嬢はちっちゃいし、マイルスも成人男性にしてはかなり低いだろう。それを酔っ払いが話の種にしてしゃべくりまわっていると……下手に触れようものならキレられたりしそう。マイルスはキレたりはしないとは思うけど

……世の中「泣き上戸」なんて人もいるそうだし、もしかしたらもの凄く泣くかもしれない。

「確か、「マイルスが小さいのは親の影響だ」とかそんな感じに言ってたんだ」

見たことの無い、酔っ払ったマイルスの姿を想像していたのだけど、そんなことがどうでも良くなる情報が私の耳に入った。

クレーディアが話していたのは、マイルスの親の話!? でも、それはおかしいんじゃないか……だって……

「ちよつと待ちなさい! この前、マイルス本人に聞いたたら「記憶喪失で、親のことはほとんど憶えてない」って言ってたわよ!」

驚きから、普段の口調に戻ってしまっていたことに途中で気付きつつも、そのままイクセルさんに疑問を投げかけた。対するイクセルさんは、私の言葉に特に驚いた様子も無く「あー、となると……」と、腕を組んで考え込むような姿勢を取った。

「クレーディアはマイルスから聞いたただけって言うってたんだが……その辺りはマイルスの記憶喪失がちよいと特殊な状態なのに関係してるんじゃないか? 一回キレイサツパリ無くなった後、部分部分をちよくちよく思い出してる「虫食い状態」って最初の頃聞いたぞ?」

「……つまり、マイルスの親に関する記憶は大半が欠けてるけど、身長のことか思い出してたっていいたいの?」

「じゃないか? アイツがウソ言うとは思えないし……まあ、なんでそのことをクレーディアが知ってたのかは知らねえけどさ」

まあ、それならまだ筋は通ると思う。納得はできないけど。

だってそうでしょ? クレーディアには話したのに、マイルスは私には隠してたのよ? ……「身長なんて大した情報じゃない」ってマイルスが勝手に判断して、私に話した時は「よく憶えてない」って適当にすませた可能性もあるにはあるけど……。

「あー……けど、そう考えると……『シアレンス』に帰れない理由」

かあ……」

「……？ イクセくん、どうかした？」

うなるイクセルさんを不思議がったロロナさんが、少しカウンターに身を乗り出しながらその様子をうかがった。

「いや。普段、自分の身に危機が迫ってもウソ言わないようなあのマイスが秘密にしようとするなんて、よっぽどのことだと思ってさ。ほら、リオネラとかジオさんの事とかの時も隠そうとしてなかっただろ？」

イクセルさんが言ったことに、ロロナさんが「ああ……」と納得したような声をもらす……が、私からすると何の話かわかるはずがなかった。

でも、マイスがウソを言うような人じゃないということは私もわかってる。……だからこそ、あんなあからさまに隠し事をされたのが嫌な意味で記憶に残ってしまったのだけでも。

「……で、アイツが何の意味も無く隠したりするはず無いだろ？ でも、それを興味本位で調べてまわってもいいものかって思うわけだ」
「気にならないって言ったらウソになるけどな」と続けて言ったイクセルさん。

……確かに、その通りだと思う。

私なんかと違ってマイスは大した理由も無しに人をつっぱねたりする人じゃない。それはわかっている。

隠すには隠すなりのちゃんとした理由があるはず。間違いはないと思う。

けど、納得できない。

本当に帰れないのか。なんでそうなったのか。

そして……それと同時に、私は思っている。これが私がやるべき事なんじゃないか、と。

でも、私は知っている。

今ならわかる。小さい頃に、『シアレンス』の話を聞かせてくれたマイスの様子を思い出せば、マイルスは『シアレンス』のことを忘れられないんだと。帰れるのであれば、帰ってみたいという思いがあるということを。

帰れない理由は教えてくれない。でも、確かなことはある。

何でも、どんなことでも、自分で出来てしまうマイルスが、唯一かもしれない「できないこと」と自分で認めていること。

ならば、と私は思ったの。

これがマイルさんに私がしてあげられる唯一の恩返しなのではないか、と。

だから、帰れない理由を知りたい。その理由をなんとかしてあげたい。

私にできることなんて何もないかもしれない。でも、何もせずにはいられない……気がすまないから。

……こ、こんな恥ずかしいこと、マイルスはもちろん、他の人にも言えるわけがない。

でも、今のままじゃ何も出来ないままだというのもわかっている。

私は、「どうしたものかしら？」とため息混じりに呟くことしかできなかつた……。

5年目：マイルス「ジーノくん強化計画!!」

マイルスの家

「ぶはーっウマかったー! やっぱ、修行の後のメシは最高だぜー」
「おい、なんだそのだらしない様は。気の知れた相手の家であってもそのような腑抜けた態度は見過ごせないな……そんなことでは、剣の腕が上がるうとも騎士としては半人前以下だぞ」

「いや、オレ騎士じゃないし、なる気もねえんだけど?」
「だとしても、だ。最低限の礼儀作法すらなっていないのは、問題外だ」

朝の畑仕事と僕との修行の後に食べ始めた朝ごはん。それを食べ終えたジーノくんが、座っていたイスにふんぞり返るようにして倒れ込んでいた。そして、その様子を見たステルクさんがジーノくんを注意している。

さて、賑やかな僕の家だけど、なんで農業をするために僕の家泊まりこんでいるジーノくんだけでなくステルクさんもいるのかという……。

きっかけは、少し前のある日。畑仕事を終えてジーノくんの修行に付き合っていた時のこと。ジーノくんの「オレには必殺技が足りていない」という趣旨の発言から、ジーノくんに合った『必殺技』を考えることになったんだけど、それは難航することとなった。

そこに現れたのがステルクさん。そのステルクさんがジーノくんに必殺技を教えると言つて、それからはジーノくんの修行にステルクさんも付き合うようになったのだ。……とはいっても、ステルクさんはジーノくんのように僕の家に泊まったりはしてないんだけどね。

それからというもの、僕らの生活リズムは……早朝に起きて畑仕事。それが終わったら基礎トレーニングや僕とジーノくんの試合などといった特訓。それから朝ごはんを食べて、それ以降はジーノく

んはステルクさんと必殺技の特訓……といったふうになった。

……で、ステルクさんはいつもじゃないけど、畑仕事のすぐ後の特訓にも参加することがあり、そういう日はこうしてステルクさんも一緒に朝ゴハンを食べるようになってる。

僕としては、作った料理を美味しく食べてくれているから嬉しいので、全く問題無い。

それに……

「おにいちゃん、ホムは食後のデザートが欲しいです……ダメですか？」

朝から誰かが唐突に訪ねてくるなんてことは今日のようによくあることなため、急ぎよ朝ゴハンの量を一人、二人分くらい増やすのも慣れてる。

そう、こうやって素材を貰いにホムちゃんが来たりするように……。

「そう言うと思ってたよ。今日は『プリン』を用意してるからね……はいっ、どうぞ」

準備していた『プリン』をキッチンから持って来て、座っているホムちゃんの前のテーブルに置いた。

それを見ていたジーノくんが、もたれかかっていたイスから跳びあがり、大声をあげる。

「あーっ！ チビッコだけずりい！」

「チビッコ」ではありません。ホムはホムです。それに、ホムはくーちゃんより身長が高いのでチビという表現は適切ではないかと」

ジーノくんの言葉にホムちゃんは抗議していたが、当のジーノくんは聞いていないようで『プリン』をうらやましそうに見続けるだけだった。

……クーデリアよりも身長が高いつて、前に聞いた話だとアストリッドさんがホムちゃんを創る時にわざとそうしたらしいけど……。

そういえば、ほんとなんとなくだけど、最初に会ったころよりもホムちゃんの身長が伸びている気がしなくもないような……？

そんなことを考えつつも、『プリン』を凝視し続け段々と顔が近づいていくジーンくんをみかねて、これ以上イジワルをするのも悪いから、またキッチンへと行き、もう一つの『プリン』を取ってきた。

「心配しなくてもジーンくんの分の『プリン』もあるよ。はい、どうぞ！」

「わあっ！　ありがとな、マイルス！」

「いやいや、気にしないで。最近修行を一段と頑張ってるジーンくんへのちよつとしたご褒美だからね」

『プリン』のお皿につけておいたスプーンを手に取り、勢いよく食べ始めるジーンくん。ホムちゃんのほうもゆつくりとモグモグ食べ始めた。

……と、ふと視線を少しずらすと、朝ごはんを食べている途中だったステルクさんが呆れたような顔で見えてきている事に気がついた。

「どうかしたのかな……？」

「どうかしましたか、ステルクさん？」

「ゴイツがいつまで経っても子供っぽいのは、キミのような甘やかす人間がそばにいるからなのだろうと思ってるな」

「ええっ、甘やかすってほどじゃあ……それに、ジーンくんの近くに僕以外にそういう人はいたかなあ？」

ジーンくんの家族には会ったことはないからどんな感じかはわからないけど、他に甘やかしているような人は……実際にその場を見たわけじゃないけどツェツイさんあたりはそう厳しくしたりしてないかな？　メルヴィアも、なんだかんだで気にかけてそうな気もするけど……でも「甘やかす」ってほどの人はいないと思うんだけど……。

「……まあ、キミの場合、誰にでも甘い気もするかな」

「さつきもでしたけど、あんまり褒められてる気がしないんですけど……」

「そうだろうな」

何故か「フツ」と鼻で笑ってきたステルクさん。

とはいえ、褒められてなくても、笑われてても、僕は僕がしたいからやってるだけなのでそこまで気にしない。それに、これはステルクさんがジーノくんの今後の事を過剰に心配しているからそう思ってしまったっただけで、別に全員が全員、僕の行動をそう思っていたりするわけじゃないだろう。

「あつ、ステルクさんの分の『プリン』もありますから、ゴハンを食べ終わったら言ってくださいね！」

「そういうところがなんだが……やはり自覚は無いようだな」

「はあ、なるほど……この「ジーノくん」が強くなるために、おにいちゃんの家で働いていたんですね」

そう納得したように頷いたのは、『プリン』を食べ終えて『香茶』をノンビリと飲み始めたホムちゃん。

『プリン』を食べている途中にホムちゃんが「そういえば、この二人はどうしてここにいるのですか？」と聞かれたので、おおよその経緯をホムちゃんに説明していたのだ。

「というわけで、今は僕が基礎能力の底上げを手伝って、ステルクさんが必殺技の習得をさせてるんだ。もう、今の時点でもジーノ君は前よりも随分強くなったと思うよ」

「そうか!? オレ、そんなに強くなれたかな!」

僕の言葉に反応したのは話していたホムちゃんじゃなくて、その隣にいたジーノくんだった。……で、そのジーノくんの様子に厳しい顔で苦言をもらすのは、『プリン』を食べているステルクさん。

「世辞を言われた程度で調子に乗るな。鼻根が無いわけじゃないんだ、もっと現実を見て己を鍛えろ」

「ちえーっ、また師匠のお小言が始まったー……メンドクセエ」

「だから、そういった不誠実な態度はだな……！」

口調を強くしつつ、本当にジーノくんへのお小言を始めたステルクさん。その手には『プリン』の乗ったお皿があるのが、少しだけ和なごんでしまうポイントだろう。

ステルクさんのお小言は長くなりそうだし、その間に片付けられるものから洗い物を初めてしまおうかなあ……？

なんて考えていたところに、ふとホムちゃんがある質問を僕らに示してきた。

「強くなりたいたのであれば、まずは武器を強いものに変えてみてはいかがでしょうか？」

あたり前と言えばあたり前の発想。強さというのは戦う本人の強さはもちろん関係してくるが、その人が使う武器も無関係ではない。もし能力・経験などが同じ人同士が戦った時、武器の差がものをいうように、武器の強さも最終的な強さに深くかかわっている。

それをわかってしているステルクさんや僕は、ホムちゃんの言葉に「まあ、確かに」と小さく頷いた。

けど、ジーノくんはなんだか納得していないというか、ちよつとふに落ちてい無さそうな顔をしている。

「強い武器って言ってもなあ……オレが今使ってるのって、トトリが「一番すごいので作ったんだよ！」って自信満々に渡してきたやつでさ。だから、これ以上強いのもってねえと思うんだけど……」

「そうですか。では、今使っている武器を強化してみるのはいかががでしょうか？」

ホムちゃんの提案がいまいち理解できないようで、首をかしげるジーノくん。

対するホムちゃんと言うと、僕のことをジッと見つめてきていた。……まあ、今さっきジーノくんにしてきた提案のこともあわせて考えると、そういうことなんだろうなあ……。

「できますよね、おにいちゃん？」

「うん、できるよ。それなら、その一番すごいもので作った武器をそれ以上強くするのもそう難しくは無いかな?」

「んー……どうということだよ、ミス?」

腕を組んでますます首をかしげてしまっているジーンくん。そして、よくよく見てみると、ステルクさんも眉をひそめて僕のほうを見てきていた。おそらくはステルクさんもどうということなのか気になってるんだろう。

『鍛冶』ですでに完成している武器を素材を使って強化するんだ。鉱石で鍛え直して攻撃力^さを上げたり、魔力がこもった素材を使ってモンスター^さの魔法攻撃への耐性を上げたり……あと、炎の力を秘めた素材で武器に付け加えさせたりする属性付与なんかもできるよ」

「すでに出来上がっている武器を……そんな技術もあるのだな……」

驚いた様子でそう呟くステルクさん。ジーンくんも「はあー……へえー」と本当にわかったのか少し心配なことを呟きながらうんうんと頷いていた。

「強化に使う素材によって、武器がどう強くなるのかは全然変わるんだけど……でも、強くなるのは間違い無いよ」

「でもさあ……やっぱり武器のおかげで強くなるのって、なんかズルみたいだし、カッコよくないだろ?」

口をとがらせるジーンくん。必殺技のこともそうだけど、ジーンくんにはジーンくんの美学のようなものがあるみたいだ。

「それでしようか?」

そんなジーンくんの言葉に疑問を示したのはホムちゃんだった。

「達人は得物^{えもの}を選ばないとは言いますが、逆はそうでもないと思います。伝承などに「選ばれた者にしか抜けない剣」があったりするように、強い武器というのは人を選ぶものなのです。もし仮に「何でも切ってしまう剣」や「炎を噴き出す武器」があったとすれば、持ち主が未熟だった場合、持ち主自身が怪我を負ってしまうでしょう」

「それはまあ……確かに……」

「それに、良い素材ほど厳しい環境にある傾向があるので、強化素材を探すこと自体が良い修行になるかと。それに、数多あまたとある素材の中から「これだ!」という強化素材を見つけ出せるかというのは、冒険者としての才能が試されるものだと、ホムはそう思います」

ホムちゃんがそこまで言ったところで、ジーノくんがイスから勢いよく立ち上がった。

「おっしやー、やってやるぜ! そうと決まれば出発だ!! マイス! 帰ってきたら俺の剣、鍛えてくれよな!」

そう言って、そばの壁に立てかけてあった剣を手に取り家の外へと飛び出していくジーノくん。その後ろ姿はあつという間に開け放たれた玄関の戸から見えなくなった。

「こら、待て! この後は必殺技の……ああ、くそっ! そもそもなんの冒険の準備もせずに行く気かアイツは!!」

食べ終わった『プリン』が乗っていたお皿を素早くテーブルに下ろして、慌ててジーノくんを追いかけるステルクさん。ここで、そのまま放置せずにちゃんと追いかけるあたり、ステルクさんはなんだかんだ文句なんかも言いながらも面倒見がいい人だと思う。

「……って、冒険に出たってことは、数日間は帰ってこなかったりするよね? そうしたら、ジーノくんがやっていた範囲の野菜も僕がお世話しないといけないか」

とは言っても、そこまで広い範囲じゃないからそう難しいことじゃないし、問題は無いんだけど……。

「おにいちゃん」

と、そんなことを考えていると、不意にホムちゃんから呼ばれた。どうしたのかな、と思い、そっちを見てみると……

「……………」

無言で、胸の前あたりで右手で小さくVサインファイを作っているホム

ちゃん。その顔はこころなしか得意気にしている感じが……
……えつと、どういうことだろう？

ホムちゃんの行動の意図がわからず目を白黒させていた僕をよそに、ホムちゃんはVサインをしていた右手を下ろし、フリルの付いたいつものスカートに包まれた自分の膝ひざの上をポンポンと叩く。

……ああ、これはあの合図か。

僕は家の中を……そして、窓から見える景色を確認し、回転しながらピヨンと跳び跳ねて『変身ベルト』で金のモコモコの姿へと変身した。

「えつと、それじゃあ……」

座っているホムちゃんのすぐそばまでテコテコと駆け寄り、ピヨンとホムちゃんの膝の上へ飛び乗った。

すると、ホムちゃんの両腕が金モコ僕の脇わきの下を通ってギュッと抱きしめてきた。そしてそのほんの数秒後に、僕の頭の上にポスンとなにかが乗った気がした。……両手で僕を抱きしめていることを考えると、おそらくホムちゃんが僕の頭にあごを乗せてきたんだろう。

いやまあ、このくらい慣れたものだから別にいいんだけど、それよりも……

「……もしかして、ジーンくんたちを冒険に行くように仕向けたのつて、こうするためだったりする？」

「はい。ホムが久しぶりのおにいちちゃんと遊びたかったので、お出かけしてもらいました」

特に悪びれた様子も無くそう言うホムちゃん。

……まあ、武器を強化すれば強くなるのは事実だし、ホムちゃんは別にウソを言ったりしたわけじゃないんだけど……ちよつと驚きだなあ。

驚きから来た沈黙を、ホムちゃんはどう思ったのか少しトーンの落ちた声で尋ねてきた。

「おにいちちゃんも彼らと一緒に行きかけたのですか？ それとも、

おにいちゃんには別に何か用事が……」

「そういうわけじゃないんだけど、なんて言ったらいいのかな……？
とりあえず、嫌とかそういうことは全然ないから、気にしないで」
そう言っつて、僕は僕を抱きしめているホムちゃんの手を撫でてあげ
る。

すると、頭の上のホムちゃんのあたまが動いている感じがした。こ
の感じは、あごでグリグリしてる……わけじゃなくて、おそらくは頬ほお
擦すりをしているんだろう。

……まあ、お皿洗いはちよつと後回しにしないと、かな？

5年目：クーデリア「怪しい誘い」

サンライズ食堂

最近の『冒険者ギルド』はといえば、通常業務に加え冒険者制度の整備のための業務もあり、特別ヒマだったりするわけじゃ無い。とはいえ、冒険者制度が始まってすぐのころに比べたら、時間的にも気持ち的にもかなり余裕はあるんだけど……。

あとは、『青の農村』出身の数人を中心に『冒険者ギルド』で働く人員が増えたことも余裕ができたことの一因でしょうね。新人の中にはまだ失敗したり、あたしの半分も仕事をこなせない子もいるけど、それでもやる気はあるし、それに比例してドンドン成長していつていから今後はもつと余裕が生まれるはず……。

まあ、何が言いたいのかというところ……休みもそこそこ取れるようになり、こんなへんてこな時間に『サンライズ食堂』に来るなんてことも出来るようになった、ということだ。

とは言っても、あたしが「来たい！」と思って来たわけじゃなく、休暇中に会ったある人物に連れられて来たってだけなんだけど……。

「さあさあっ！ くーちゃんも飲んで飲んでー！」

「飲んでって……こんな時間からそんな飲む気にはなれないわよ」

グラスではなくわざわざボトル一本で注文した『ぶどう酒』を、まだほとんど減っていない私のグラスに注ごうとしているのはロロナ。他にもない、あたしを『サンライズ食堂』に連れてきた張本人である。「むー……飲んでくれないの？」

「ううっ……!? の、飲まないなんて言っただけじゃないわよ！ でも、もうちよつとゆっくり飲んでいくから……ね？」

……肩を落として上目遣いで言うロロナの破壊力に負けて言っちゃったけど、正直なところ飲む気はほとんど無い。時間帯とか気分の問題もあるのだけど、それ以上に怪し過ぎるのよね……。

まず、さつきから言っているように、飲みに誘うにとしては時間がかしい。今はちようどおやつ時、お茶に誘うならまだしもお酒は無いだろう。お酒が好きなヤツだったらわかるけど、コロナは特別お酒好きでもないから違和感がある。

続いて、あたしたちが座っている位置もおかしい。スイーツ系のメニューが充実しているとは言い難い『サンライズ食堂』はおやつ時は客が少ない時間帯だ。今もあたしたち以外に客はいなくてスツカラカン……だというのに、数あるテーブルの中でも、店の奥の一番端のテーブルにわざわざ座っている。

普段のコロナなら、景色が見えて明るい通りに面した窓際の席か、客がいなくてヒマしてるイクセルと話せるカウンター席を選ぶと思っただけ……。

あとは、コロナがやけにあたしにお酒を勧め^{すす}てくるのもおかしい。これまで一度もこんなことは無かったんだけど……あたしを酔わせて、どうにかするつもりなのかしら？

……アストリッド^あの女がいるのなら、アイツが何か吹き込んだらうってすぐにわかるんだけど……。「帰ってきた」なんて話は全然聞かないから、その線は無さそうなのよね。

「……って、あんたのが空っぽになってるじゃない。ほら、あたしが注いであげるから、ボトルを貸しなさいよ」

「えっ、注いでくれるの？ 本当？」

「なんで嘘を言わなきゃならないのよ。せつかく丸々一本注文したんだから、美味しく飲んじやわないともったいないでしょ」

「えへへっ、それじゃあくーちゃんに注いでもらおっかなー」

そう言っ顔をほころばせるコロナから『ぶどう酒』のボトルを受け取って、コロナのグラスに注いであげる。

「おいおい……お前が酒を勧められちまってどうするんだよ……」

カウンター奥の厨房のほうから、そんな呟きがわずかにだけ聞こ

えてきたんだけど……ってことは、やっぱり何か裏があったようね。それも、イクセルも絡んでいるみたい。

……まあ、とりあえずはもう少し様子見でいいかしら？

「くーちゃん、のんれる〜？」

「はいはい、ちゃんと飲んでるわよ」

あれから二十分ほど経ったけど、つまむものを少し頼んだりしつつもあたしたちは『ぶどう酒』を飲んでいた。

状況は見ての通り。ゆっくり飲んでいたあたしに比べ、勧められるままにハイペースで飲んでいたコロナの方が酔払っている。

「……にしても、キレイに出来上がっちゃってるわね」

「え〜？ なあに？」

「別に何でもないわ。って、ちよつと、口周りが汚れちゃってるわよ」「んー」

少し身を乗り出しつつ、腕を伸ばしてコロナの口元をハンカチで拭ってあげる。拭っている間は口を閉じておとなしくしていてくれたけど、ハンカチを離れたとたん、ニヘラツと笑った。……なんていうか、普段以上に酔払っていて、幼児後退気味になっている気がしなくも無い。

「ねーねー、くーちゃん」

「はいはい、何かしら？」

「くーちゃん、もう酔払ったー？」

今それをコロナが聞くの？

そう思いつつも、これは最初とかにあたしにやけにお酒を勧めてきてたことに関わっている気がする。そう考えると、なんとなくそれっぽい返答をしてコロナが何を思っこんだことをしているのか聞き出してみるほうがいいのかもしれないわね……。

「ええ、まあそうね……いい感じに酔っぱらってるんじゃないかしら？」

「そっかー！ よかったー」

あたしなんかよりもよっぽど酔払って顔を赤くしているロロナが、「うんうん！」と嬉しそうに頷いている。

「というか、「よかった」って……ホントにどうということなのかしらね？」

「じゃー、教えてっ！」

「……は？」

「だーかーらー、教えてよくーちゃん」

えっと……何を言ってるのかしら、ロロナは？

いや、たぶん、きつとロロナの中ではちゃんと何か順序があった上で聞いているんだと思う。

けど、残念ながらコツチからしてみれば何が何だかさツパリだ。やっぱり、酔払っちゃってるから色々とおかしくなっちゃってしまっているんでしょね……。

「……で、何を教えてほしいの？」

「うー！ くーちゃんのイジワルー！」

「いや、話を聞きなさいよ!?!」

自己完結が早いというか、あたしに話しかけてきてるはずなのに、あたしを見ていないというか……勝手に機嫌悪くなっちゃうし……。

……というか、ロロナが思っている以上に酔払っちゃってる？ あたしが色々警戒し過ぎて、飲まされないようにと逆にロロナにお酒を勧めていっちゃったけど……飲ませ過ぎたかしら？

「いいもん、いいもんっ！ くーちゃんが教えてくれないなら、わたしにも考えがあるんだからー！」

「だから話を……何する気？」

「トトリちゃんのとこに遊びにいっちゃうんだからー！」

「いやそれ、あたしは何も困らないし、むしろ困るのはトトリなんじゃ……って、もういない」

もうすでに『サンライズ食堂』から飛び出して行ってしまっていた

ロロナ。かなり酔払ってたけど、走って出ていけてたし、いちおうは大丈夫……なのかしら？ そうなると、心配すべきはあの酔っ払い状態のロロナの相手をしないといけないトトリのほうかもしれない。

……あら？ そういえば、トトリは『アランヤ村』のほうにいるはず……ってことは、ロロナは『錬金術』の道具で『アランヤ村』まで行くつもり？ だとすれば、あの酔っ払い状態で道具を上手く使えるかが心配になってくる。間違っただけなら移動しちやったりしないかしら？

そんなことを考えても、もう行ってしまったのだからあたしにはどうしようもないのだけど……。

「……で、結局なんだったのよ、今のは？」

あたしがそう言いながらカウンター向こうにいるイクセルをジロツと睨みつけると、イクセルは「俺っ!？」と驚いた様子で声をあげてた。

「何驚いてんのよ。あんたも絡んでるんでしょ？」

「まあ、半分……いやっ、三分の一くらいは俺のせいと言えばそうなんだけどな？」

バツが悪そうにしながらも笑いながら髪をかくイクセルに、ちよつとイラツとしながらもあたしは次の言葉を待った。すると、「どこからどう話したらいいのやら……」と悩んでいたイクセルが、何かを決めたのか大きく一度頷いてから口を開いてきた。

「ちよつと前の話なんだが、ロロナがトトリの友達のミミを連れてきてだな……」

あの高飛車娘

「……つまり、きっかけはミミで、そこにあんたがミスとあたしの話を出して、ロロナはそれを探ろうとした……ってわけ？」

「ん、まあ大体の流れはそんな感じだ」

頷くイクセルを見て、あたしは大きなため息をついた。

つまりは、コロナは「マイルスが元いた場所シアレンスに帰れない理由」や「マイルスの両親のこと」を、知っていいそうなたたしから聞こうとしていたってことなのね。まあ、確かにマイルスはそれらのことや、それに関係するあの事ひとを他人に話したりはしていないから、気になるのはわからなくもない。

「なるほどね。でも、なんでそれがこうなるのかしら?」

「そのあたりは、コロナあいつもコロナあいつなりに考えたんだとは思うぜ? その上でマイルス本人じゃなくお前に聞くことにして、マイルスの親の話をしてた時みたいに酔払わせてみたらいいんじゃないかって」

「後半のほうって、どう考えてもあんたが情報源よね? 確かにあの時のあたしは酔払ってたけど……」

そこまで言って、あたしはもう一度ため息をついた。正直なところ、「何事かと思えばそんなことで……」という肩透かし感がある。

「たくつ。そんなこと、酔払よっぱらわなくてちやんと答えるつてのに……」

あたしがそう言うと、その内容が予想外だったのか、イクセルが驚いたように目を見開いていた。

「やっぱ、何か知ってたんだな? ……けど、あのマイルスが秘密にしてることだから、てつきり教えねえものだとばかり思ったんだが」

「どこの馬の骨とも知らない奴ならそうするわ。けど、ミミはともかく、コロナやあんた相手ならあたしは言ってもいいと思ってるのよ」「マジか!?!」

これも予想外だったみたいで、イクセルはカウンターから飛び出してきた。あたしのそばまで来て、小声で問いかけてきた。

「……で、結局何なんだよ、マイルスが隠してることって」

「本人に聞きなさい」

「……………はっ?」

「あたしからは言えないの。本人に聞いてみればいいと思うわ」

「いやいやいやっ!? お前教えるっていったら?」

「答える」とか「言ってもいいと思ってる」としか言っていないわ。だから、教えない」

そう言うと、イクセルはあたしが言ったことを思い出そうとしているかのように、腕を組んで首をひねって頭を悩ませ始めた。……が、すぐに「でもなあ……」と納得していない様子であたしを見てきた。

まあ、わからなくも無い。立場が逆だったとすれば、アタシも納得できていないだろうもの。

仕方がないから、教えない理由を丁寧に答えてあげることにした。

「マイルスが隠す理由も、中々話せないその気持ちもわからなくはないの。だから、アタシの口からは絶対に言えない。……けど、赤の他人じゃなくてコロナやあんたくらいの間柄なら別に隠さなくてもいいんじゃないかって、あたしは思ってるわ。なんていうか、マイルスは臆病になり過ぎてる気がするのよね」

「はあ、なるほど……やっぱ、よっほどのことなのか?」

「突拍子の無いというか、常識外れというか……帰れない理由の方も、思い出せてないはずの両親のことを知ってる方も、ね。聞いて驚かない奴はいないと思うわ」

「そっか……あー。そうになると、気にはなるんだがやっぱ聞き辛いなあ」

自分のグラスに入っていた『ぶどう酒』を飲み干して、あたしは立ち上がった。そして、自分はどうするべきか悩んでいるのだろうイクセルへ向かって、あたしは言う。

「まっ、どうしても知りたくなったらあたしに言いなさい。仲介くらいはしてあげるから。……あっ、でも今日の話は他の奴にはしたらダメよ。あくまであんたやコロナだったらいってだけなんだから」

「あー、了解」

ちよつと間の伸びた頼りない返事ではあつたけど、イクセルもそんな口が軽いつてわけでもないからここまで注意しておけば大丈夫だとは思う。

「……つと。そうね……大丈夫だとは思うけどいい機会だし、いちおうフリーとリオネラには他人に勝手に話さないように言つといたほうがいいかしら」

そう思ったち、あたしは『サンライズ食堂』を出て、二人がいそうな場所を周つてみることにした。

ちよつとお酒臭いかもしれないけど……まあ、大丈夫でしょ。

「フリーとリオネラも知ってるのか……。いやまあ、マイスの家に泊まつたりしてると聞いてたし、仲も良いらしいから、そこまで驚くことじゃねえのかもな」

そう一人で納得するイクセル………が。

「あつ………あいつら、金払ってなくね？」

5年目：マイルス「ジーノくん（の武器）強化計画！」

武器を強化するためのに、その強化のための素材を探しに冒険に出たジーノくん。

ジーノくん一人なら色々心配だけど、ステルクさんもついて行っているのでこの冒険も修行の一環となっこていることは間違い無いだろう。こつちも畑の方はもともとそうしていたように、僕一人でも問題は無いから大丈夫だ。

まあ、そもそもはホムちゃんがジーノくんたちを冒険道に行か出せるために言ったことが始まりなんだけど……でも、いちおうはジーノくんが強くなることに繋がるから「結果オーライ」というものかもしれない。

……で、ジーノくんたちが冒険に行った後の僕はと言えば、恒例の釣り大会……今回は『大物!!釣り大会』なんだけど、その準備なんかはあったものの比較的ノンビリと過こしていた。

ノンビリとしていたのには、ジーノくんたちが帰ってきた時にいてあげられなかったら悪いからっていうのもあるんだけど、ホムちゃんが「今回はいつもよりゆつくり滞在できます」と言ったからっていうもの理由だったりする。せつかく僕ウの家チに遊びに来てくれてるんだから、僕もホムちゃんと久々に色々したかったからね。

というわけで、ホムちゃんと……家でノンビリしたり、なーやその子供たちと遊んだり、『青ウの農村チ』のモンスターと戯れたり、一緒に料理をしたり……「最近、腕が鈍っているのでは？」と『錬金術』の指導をホムちゃんから受けたりもした。

でも、まさか『トラベルゲート』の調合が目標に設定されるとは思わなかったよ……。

『ネクター』という気付かけ薬ぐらいがギリギリ調合出来るラインだった僕には、『トラベルゲート』は凄く難しくて調合にとりかかる前

に別のアイテムの調合で調合の腕を上げる必要もあつて……本当に大変だった。けど、ホムちゃんがそばで指導してくれてたから、まだマシだったのかもしれない。それに、出来上がった『トラベルゲート』は凄く便利なものだから、こうやって教えて貰いながら調合出来たのはむしろ良かったんじゃないかな？

……そう思ってたんだけど、ホムちゃん曰く『トラベルゲート』は使う時にちよつと失敗すると変なところへ移動してしまったり、地面に埋まってしまったり、二人が増えてしまったりと、色々危ない部分もあるらしい。

ロロナもトリちゃんも、よくそんな危ないものをポンポン使えるね……。

僕は『リターン』の魔法があるし『トラベルゲート』は怖いから極力使わないようにすることに決めた。

マイスの家・作業場

そして、そろそろホムちゃんも帰らないといけなくなってくる時期になってしまっていた。そんな中、ホムちゃんの要望で、今日も僕の家『作業場』で調査をすることになったんだけど……

「今日は、『グナーデリング』に『精霊の首飾り』？ でもこれ両方とも『トラベルゲート』よりも簡単な物だけど……今日は『錬金術』の練習じゃないの？」

「これも、『錬金術』の練習です。本当ならば先日の腕磨きの際に調合しておけばよかったのですが……ホムとしたことが、失念してしまいました」

えーつと……？ つまり、僕の錬金術の練習が目的じゃなくて、『グナーデリング』と『精霊の首飾り』を作ること自体が目的って事なのかな？

「でも、なんでその二つが必要なの？」

「お土産です」

「お土産って……ああ。いつものアストリッドさんへの？　でも、それくらいのだとアストリッドさんは満足しないんじゃない？」

「その心配の必要はありません。ホム自身へのお土産ですから」

「ホム」のってことは、ホム^自ちゃん^分へお土産ってことかな？　……うん、「自身」って言うてるし、以前に言ってた新しくできた弟の「ホム」へのお土産ってわけじゃないと思う。

ということは、やっぱり自分で身につけるアクセサリーが欲しいってなんだろう。ホムちゃんも女の子だし、オシャレとかに興味を持つお年頃なのかもしれない。

……あれ？　でも、ホムちゃんって何歳だっけ？

最初に会ったのが『アーランド』に来てから初めての年越しの後頃で……ってことは、今は十二、三歳？　いやでも、初めて会った時からそこそこ大きかったから、もう六……いや、四歳くらい加算したくらいの方が……？　けど、アストリッドさんがホムちゃんを作ったのってあの頃で間違いないはずだから、やっぱり……。

え、ええつと……考え始めたらよくわからなくなってきたから、ホムちゃんの歳のことはとりあえず今はおいておこうっ！　うん、そうしよう！

とにかく、ホムちゃんは指輪や首飾りといったアクセサリーが欲しいんだろう。でも、それならアクセサリーを取り扱っているお店に行ったら色々あると思うんだけど……？

あつ、でも、ホムちゃんはおつかいで採取地へ行ったりするわけだし、見た目以上に性能を気にしているのかもしれない。確かにそれなら『錬金術』なんかで特性を吟味^{ぎんみ}しながら作った方が良いと思う。

……けど、そういうことなら僕の『錬金術』の腕を磨くにしても難易度は低いから、別に『錬金術』にこだわらなくてもいいかもしれない。

「ホムちゃん。アクセサリーが欲しいなら、レシピもたくさん知ってるから僕が『裝飾台』で作ってあげるよ？」

そう。僕は『錬金術』でなくてもアクセサリーを作る事が出来る。むしろ『装飾台』での作成のほうが得意で、品質的にも性能的にも自信を持って出せる物を作る。それに、アクセサリーの種類の多さだって『装飾台』でのほうが多い。指輪なんて二十種類くらいあるから色やデザインも選べる。

それに、アクセサリーも武器のように後から強化することもできるから、性能の底上げだってできる。……これは、『装飾台』で作った物じゃなくて『錬金術』で作った物でもできなくは無いただけだね。

だから、良い提案だと思ったんだけど……僕の言葉を聞いたホームちゃんは、何故か今にも泣き出しちゃうんじゃないかってくらい悲しそうな目になっていた。

『装飾台』では、おにいちゃん一人で出来てしまうのでホームが手伝えなくなってしまう……」

「そっか……そうだね！ よしっ、『錬金術』で作ろう！」

そんな顔をされてしまったら、もし仮に断る理由があったとしても断れない。今のよう理由が無い時はなおさらだ。

そうと決まれば、さっさとサクッと完成させることができた。

……そんなこんなで『グナーデリング』と『精霊の首飾り』の調合にとりかかったわけだけ……『トラベルゲート』の調合に成功するくらいには『錬金術』を扱えるようになった僕にはさほど難しい調合ではなく、意外にもサクッと完成させることができた。

「……………♪」

僕の調合した『グナーデリング』と『精霊の首飾り』を受け取ったホームちゃんは、いつもよりも口角が上がっていて、こころなしか頬が紅潮しているように思える。

ホームちゃんも『錬金術』を使えるわけだし、そんなに珍しいものでもないと思うんだけど……そんなに嬉しかったのかな？僕は知らなかったけど、実はアストリッドさんから服装なんかは決められて

制限されているとか？

いや、いくらアストリッドさんでもそんなことは……しそうだなあ。だって、確かコロナの『錬金術士』としてのあの服装も、アストリッドさんが監修したものだって聞いたし……。そうなると、弟子どころか自分が生み出した存在のホムちゃんの服装には、アストリッドさんはより一層口出ししてそうな気がする。

……今度時間がある時に、ホムちゃん用にアクセサリーを色々作っておいてあげようかな？

「もしかして、もっといろいろ「アレもダメ、コレもダメ」なんて言われて制限されてるんじゃない？」と、アストリッドさんもとの下で働くホムちゃんのこと心配になってきてしまった僕。

……でも、アストリッドさんはそんな悪い人じゃないから、そんなホムちゃんを縛りつけて働かせるようなことはしてない……。……とは言い切れないのが余計不安になってしまいう要因だろう。

ホムちゃんにその辺りはどうなっているのか、聞いてみようとしたちようどその時……。

「たっだいまー！　　マイス、いるかー？　　オレの武器、強くしてくれー！！」

元気の良い声が『作業場』の外から聞こえてきた。その声色からも、内容からも、声の主が誰なのかすぐにわかった。なので、声の主……。強化素材探しの冒険を終えて帰ってきたジーノくんと、一緒にいるであろうステルクさんを出迎えに、声のしたほう……。家の玄関のほうへと僕は駆けていく……。

帰ってきたジーノくんとステルクさん。

僕が出迎えに行っただけ……。会って早々、挨拶や冒険がどう

だったかなどといった世間話もそこそこに、はやる気持ちを抑えきれない様子のジーノくん引つ張られるような形で、僕は『作業場』へと戻っていくこととなった。

そして『作業場』に入つてすぐにジーノくんは僕に、集めた素材を見せてきた。

『グラビ石』、『樹氷石』、『鋼鉄鉱』、『ウイスプストーン』、『黒の魔石』、『竜のつもの』、『竜のウロコ』がそれぞれ数個……見たところ、どれも品質は申し分の無いくらい立派なものだった。

それらを僕に渡し、自慢げにするジーノくん。

「どうだ？ これでオレの武器、もつと凄くできるだろ？」

「うん、バッチリだよ！ 一部、あんまり武器強化にはむいてなさそうなのもあるけど、そのあたりを選別して強化に使えば、かなり強くなると思うよ！ ただ……」

ゴースト系モンスターを倒すと落すことのある「結晶化した魂」などといった噂がされる『ウイスプストーン』や、その名の通り黒いオーラが見えてきそうな力を放つ『黒の魔石』といった素材は、これまでの経験上あまり剣などの強化にはむいていない気がする。

そして、それらのむいていない素材以上に問題なものがあるんだけど……

「ジーノくん……コレとコレは何かな？」

そう言つて僕が指し示すのは、「片手に収まるサイズの黒くて丸い塊」と「縦長な薄茶色の結晶」。どちらも『アーランド』はもちろん、前にいた『シアレンス』でも見たことの無い物だった。

しかも、普通、素材であればなんとなくどんな効果があるのかわかるのに、この二つはよくわからないという不思議さもオマケでついて来ている有様だ。

……で、持ってきた張本人であるジーノくんはと言えば……

「さあ？ オレもよくわかんねえ。えつと、確か……黒いのは見かけないちつこいモンスターに襲われた時に、殴り返してやったらソレを

落ちて逃げてって……茶色いのは森ん中でモンスター群れに囲まれた時に、師匠と一緒にぶっ倒してたら気づいたら落ちてたんだ。……んで、見た時にビビツときたから持って帰ったんだ！」

「へ、へえ……うん。話を聞いたところで、全くわからないや。強化に使っても大丈夫なのかな、これ？」

まあ、確かにジーノくんの言う通り、何かしらチカラがありそうな感じはするんだけど……でも、そのチカラがどういうものなのか見当が全くつかない。

そんな確証の無い物を大事な武器の強化に使うのは、さすがに気が引ける。仮に失敗したり、変な効果でも付いた時には、ジーノくんの剣が使い物にならなくなってしまいうわけだし……それだけは避けないといけない。

となると……この、よくわからない二つの素材は、今回の強化には使わない方が良さだろう。

「そう！ 見た瞬間に「これだ！」って思ったんだ！ だから、その二つは絶対強化に使ってくれよな、ミス!!」

いつもの三割増しくらい軽快な笑みでそう僕に言うジーノくん……。

「……うんっ、頑張ってみるよ」

そんな真っ直ぐに言われたら期待に応えないわけにはいかないだろう。

「ホムが言うのもおかしいかもしれませんが……おにいちちゃんは、少しは断る事も覚えた方が良くと思います」

そう言っ僕をジトーツと見てくるホムちゃん。

あと、ステルクさんは何故かため息をついていた。……こつちも僕のせいなのかな……？

ホムちゃんとステルクさんから何とも言えない視線をあびつつも、

僕はこれからのことを考えて準備とかを始めることにした。

「えつと……じゃあまず、この強化用の素材は僕のほうで選別して……それと、ジーノくんが今使ってる武器も僕のほうで預かるよ。強化する武器が僕の手元に無いとどうしようもないからね」

「あつ、そっか。……武器の強化ってどんぐらいかかるんだ？」

腰につけていた剣を鞘に納めたまま僕へと渡しながら、ジーノくんはそんなことを聞いてきた。

「強化の作業自体は一日もかからないけど……僕は強化以外にもしいといけないこともあるから、もうちよつと時間はかかると思う。他にも素材の選別もあるし、今回は初めて見る素材もあるから慎重にやりたいんだよね……そうになると、二、三日はかかるかな？」

「その間は、その剣も使えないというわけか……。だが、修行の手を止めるわけにもいかんだろう。何か代わりになる剣をコイツに貸してやってくれないか？」

今日かにかかる時間についての話を聞いて、僕にそう言ってきたのはステルクさん。

僕はステルクさんの言葉に「わかりました！」と頷き、強化用の素材とジーノくんの剣を『炉』から少し離れたところにある台にひとまづ置いた。そして、武器をしまっているコンテナからジーノくんの剣に近い剣を探しだして、その剣をジーノくんに渡す。

「んー……じゃあ、オレは強化が終わるまで、またマイスン家^ちで畑仕事しながらこの剣で修行すっかなー」

カンツカンツカンツ

不意にそんな何かを叩くような音が聞こえてきた。

音のした方へと顔を向けてみると、そこにあつたのは窓……そして、窓の向こうではバツサバサはばたいている鳥が見る。……ということはおそらくついさっきの音は、あの鳥が窓ガラスでもつついた音だったんだろう。

……あれ？ あの鳥ってハトだよな？ つてことは……

「クルッポークルポッポー」

その、窓の外のハトが何かを言った……と思う。金モコ状態なら何を言っているのかわかったと思うけど、残念なことに人の姿じゃあおおよそのニュアンスというか、感情くらいしかわからない。

えつと……なんだか少しだけ焦っているような……？

……と、そんなハトの言葉に反応したのはステルクさん。

「そうか、ならば……おい、また外へ冒険に出るぞ。必殺技も最終ステップまでできている……であれば、必殺技は敵との実戦の中で完成させた方がいいだろう」

何かブツブツ言った後、ステルクさんがいきなりそう言っただけでジーンと冒険に出ようとした。それに反発し不満を口にするのは、当然ジーンくんだ。

「えくっ！ ほんの何日かなんだし、『青の農村』で修行してりやいいじゃんかー！ それに、マイスのメシ食いたいし……」

「グダグダ言うな。引きずって運ばれたくないなら、さっさとしろ」
「ちえー、今日の師匠はいつもに増して意地悪だぜ……」

口をとがらせるジーンくんの言葉に、一瞬ピクツとしたステルクさん。

そのステルクさん、ものすごく小声で「アイツと比べれば、この程度意地が悪くもないだろうに……」って言っただけ……アイツって、誰のことだろう？

帰ってきたと思ったら、またどこかへ行ってしまったジーンくんとステルクさん。

たぶん、あの窓の外ステルクさんのにいたハトが何か関係あるんだと思うんだけど……一体何だったんだろう？

いつものように近くにジオさんがいて勝負をしかけにでも行くのかと思っただけ、その場にジーンくんを連れて行くとは考え辛い気が

する。ステルクさん、ジオさんに挑む度に気絶するほどボコボコに負けることが多いし、そんな姿をジーノくんに見せようとはステルクさんは思わないと思う。

じゃあ、他に考えられる可能性は……

「……ホムちゃん、今回も二人を追い出すために何かした？」

「いえ、ホムは何も。……まあ、そろそろ帰らないといけないのにおにちゃんとの時間を邪魔されて嫌な気分だったのは事実ですが」

「うーん……なんて言うか素直だね、ホムちゃんは」

「おにちゃんほどではありません」

そう、いつものすまし顔で言うホムちゃん。……なんとなく、その頭を撫でておいた。

「で、結局なんだったんだろうね？」

「それはホムにもわかりません。……そんなことより交代です。今度はホムがおにちゃんを撫でます」

そう言ったホムちゃんは、『作業場』内にある『薬学台』……その机とセットになっているイスを引つ張り出し、そのイスに座ってスカートの上から自分の膝ひざの上をポンポンと叩いた。

……って、また今日もか。僕が先に撫でたせいかもしれないけど……

「あー……でも、ジーノくんの剣を強化しないといけないし……」

「それはホムが帰ってからしてください」

そう言つて手招きをしてくるホムちゃん。

ホムちゃん、気持ちに素直になつたつて感じがしてたけど、同時にわがままになつた気もするなあ……。いや、でもこれまでが他人ひとに言われたことを頑張つてばかりいたんだし、これくらいわがままなら聞いてあげてもいいのかもしれない。

……というわけで、これ以上しぶ渡ることはせず『変身ベルト』で金のモコモコの姿へと変身し、イスに座っているホムちゃんの膝の上へと飛び乗った。

すると、今日はホムちゃんは左腕で僕を抱かかえ、右手で頭を中心に撫でまわし始めた。

それにしても、ホムちゃんといい、フリーさんといい、リオネラさんといい……なんで金モコこの状態になると膝の上に乗せたがるんだろう？ それに抱だき抱かえるのも……こっちは絶対ヌイグルミ扱い何だと思うけど。

「他に何か理由があるのかな？」と疑問に思い、撫でられている間ヒマだし、せつかくだからホムちゃんに聞いてみようと思つて口を開いた……その時………

「こんにちはー。マイスさんはこっちにいますかー……つて、あれ？」家に繋がっている扉のほうから『作業場』に入ってきたのは、トトリちゃん……つて、前にも似たようなことがあつたような……？

そう思つただけけど「えつと、確か先生が言つてた……ホムちゃんだよな？」と思ひ出そうとしているトトリちゃんの背後から顔を出した子……ピアニヤちゃんの視線が、ホムちゃんの膝の上の僕に止まつていた。

ああ……ピアニヤちゃんの目、すっごいキラキラしてる。
それがわかつた瞬間、僕はこの後どうなるかがすぐに想像できた。

この後、ホムちゃんとピアニヤちゃん僕で、金モコの奪い合いが始まつた……。

5年目：マイス 「強化計……あれ？」

マイスの家・作業場

「ええつと……これってつまり……？」

そう頭を悩ませてしまうのは、今僕がいる『作業場』の状況。

別に、何かを作っていたらおかしいものができたとか、強化をしていたら失敗してしまったとか、そういうことじゃない。だからといって、誰かに荒らされてしまっているわけでも………けど、一番近いのはこれかもしれない。

目をやるのは、『鍛冶』をするための設備『炉』のそばの壁際。そこにはある素材が入った木箱が置いてあるんだけど……そのそばの壁に立てかけていたはずのジーノくんの武器『ウインドゲイザー』がなくなっていた。

……それだけなら、「盗まれた!？」と驚き、慌てて探し回っていたと思う。けど、それだけじゃなかった。

『ウインドゲイザー』を立てかけていた場所に、代わりに、ジーノくんに貸しておいた剣が立てかけられているのだ。

つまり……

「僕の知らないうちに、冒険に出てたジーノくんたちが帰って来て、交換していったってことかな？」

強化するために僕が『ウインドゲイザー』を預かった後、ジーノくんとステルクさんはまた特訓のために冒険に出て……で、僕はその翌日から『ウインドゲイザー』の強化に取りかかり、そして強化が終わったのはそのまた翌日の昼前……つまりは昨日の昼前だった。

強化を終えた後の僕はと言えば、その日の内は家に遊びに来たフリーさんやリオネラさんたちに協力してもらって色々実験したりして、家のすぐそばにずっといた。で、今日はと言えば、朝の畑仕事を終えた後は一回街に行って、『広場』や『冒険者ギルド』、『職人通り』

をぐるーつと周って来たところで、それから帰ってきて……今現在に至る。

……となると可能性があるのは、僕が街に行っていた今日の午前中にジーノくんたちが帰って来ていたというものだろう。

そして、僕が不在の中、強化し終えている『ウインドゲイザー』に気がつき持ち帰った……そんな気がする。

「んー。ちょっと使う時に注意が必要になったから、そのことを説明したかったんだけど……まっ、ステルクさんが一緒にいるからすぐにそのことに気付くよな？」

『ウインドゲイザー』、一歩間違えたら状況によっては大変危険なんだけど、ステルクさんがいるなら大丈夫だと思う。……いろんな意味で。

トンデモ強化がされてしまった『ウインドゲイザー』だけど、そんなふうになったのはどう考えても、ジーノくんが集めてきた強化用の素材のせいだと思うんだけど……なってしまったものは仕方がないだろう。

「でも、やっぱりちょっと心配だなあ……」

武器の扱いに関しては、特殊になったところで上手く順応して問題無く使えるようになってくれるとは思ってる。けど、ジーノくんはちよつとその……良くも悪くも調子がいいから、トンデモ強化された『ウインドゲイザー』を持っただけで勘違いして「オレ最強！」とかなってるんじゃないかと、少し不安になってしまう。

……まあ、そんなこと言ったら、武器を強化するという発想自体間違っていたって話になっちゃうんだけど……。でも、強くなれるのは本当だしなあ。

あつ！ あと、心配なことが他にもう一つあった！

それはジーノくんのことじゃなくて、トトリちゃんのことだ。

ジーノくんたちが再び冒険へ出たちようどその後、ピアニヤちゃんを連れて僕の家に来たトトリちゃん。前の時とは違って二人だけだったのは、用を済ませたらすぐに『アランヤ村』へ帰る予定だった

からなんだと思う。

……で、トトリちゃんが僕の家に来た理由なんだけど……結局、わからずじまいだった。というのも、トトリちゃんとピアニヤちゃんが来た時、僕は金のモコモコの姿へと変身していて都合上「モコモコ」としかしやべれなかつたから、詳しく聞くことができなかったからだ。

一緒にいたホムちゃんが何かしらのフォローをしてくれたり、僕が外に出て変身する時間を作ってくれたらよかつただけど……。ホムちゃんはホムちゃん、金のモコモコほに跳びつき抱きついてきたピアニヤちゃんと僕の奪引つ張り合いい合いを始めてしまい、そのため僕は二人によって拘束されてしまいどうしようもなかつたのだ。

唯一わかつたことといえば、僕を引つ張り合う二人を見たトトリちゃんが困つたように笑いながらもらした独り言……

「ジーノくんもいないし……。あの事をミスさんに相談したかつたけど……。今はいないみたいだし、わたしのほうでも準備が必要だし、他の予定もあるから、また今度でいい……。かな？」

……から読み取れる内容くらいだろう。

とは言つても、「ジーノくんのこと」、「ミスほに用があつた」、「準備が要るくらいには大きなこと?」、「今すぐじゃないと困ることではない」くらいかな? ただ、三つ目はトトリちゃんの表情からして結構悩んでいる様子だつたし、早いにこしたことはないのかもしれない。

こつちから聞きに行くという手もあるにはあるにはあるけど、あさって明後日『青の農村』チであるお祭り『大物!!釣り大会』のことを考えると遠出はし辛い。

……いちおう、このあいだホムちゃんに教えてもらいながら作つた『トラベルゲート』と使えば、一瞬で行き来ができるけど……。でも、僕が聞いたのはトトリちゃんの独り言で、なにに「何か僕に用があつたの?」なんて言いに行くのは不自然過ぎると思う。他に何か『アランヤ村』に行く用事でもあれば気にせず行けるんだけどなあ。

「うーん。何かするにしても、とりあえずはいつも通りに過ごして……。それで、お祭りが終わって一段落してからかな?」

場合によっては、お祭りの後の次のお祭りについての話し合いで、村のみんなに「用ができたから次はあんまり手伝えない」などと言っておく必要があるかもしれない。

まあそれに、そのうちジーノくんたちがまた僕ウチの家に来るかもしれないしね。

というわけで、僕は『作業場』から無くなったジーノくんの武器や、その他諸々のことはひとまず置いておき、今日これからどうするかを考えることにした。

『大物!!釣り大会』の準備や打ち合わせも終わってて、あとは前日の会場作りくらいだし……今日はアレの続きをしておこうかな?」

それから四日後……。

『大物!!釣り大会』をちゃんと片付けまで無事に終え二日経った『青の農村』は、お祭りの熱気を残しつつも普段通りの雰囲気へと段々と戻っていつていた。

僕と言えば、いちおうお祭りが終わった後に「もしかしたら、また遠出するかもしれない」とコオルたちに伝えて、一度『アラソヤ村』に……とはならなかった。

その理由は、『大物!!釣り大会』に来てくれたリオネラさんとフリーさん。その内のフリーさんの予定が大きな要因だった。

それはフリーさんが近々丸一日取れる休暇。それに合わせて、比較的自由に時間を作れる僕とリオネラさんで前日からアレの最終テストのための準備をしておこう……ということになったんだ。

その取れた休暇というのが今日のこと。『大物!!釣り大会』の翌日……つまり昨日はリオネラさんと僕とで準備をしていたというわけ

だ。

本当は昨日、準備が終わり次第『トラベルゲート』で『アランヤ村』に行ってみようと思ってたんだけど、あれやこれやと色々用意していたら気付けば夜に……となってしまう、結局『アランヤ村』には行けずじまい……。

だけど、そうやって前日にちゃんと準備をしていたからか、当日……今日のアレの最終テストはスムーズにいき、午前中までで終えることができたのだった。

マイスの家

「……ってことで、今回みたいな感じで問題無いと思うんだけど……どうかな？」

僕がそう確認を取ると、僕が座っているイスからテーブルを挟んで反対側のソファアに座っている二人……フィリーさんとリオネラさんたちが小さく頷いてくれた。

「うん。内容とか流れは今度が初めてなんだし、今日くらいでいいと思うようマイス君」

「わ、私もそう思う。それに人数が多かった時のことを考えたら、このくらい基礎的で簡単な部分だけじゃないと教える人も大変になっちゃうから……」

フィリーさんに続きリオネラさんが。そして、そのまた次に続いたのはアラーニヤと

ホロホロだった。

「そうねえ……仮に『青の農村』の人たちだけだったとしても、結構ギリギリな人数な気もするものね」

「だな。マイスはともかく、リオネラとフィリーにはいっぱいはいっぱいじゃねーか？」

「人数の方も考えないとかあ……。ある程度手分けすることも考えられなくはないけど……あつ、でも、それ以前にコッチの問題もあるね」

人数の事を考えていると、ふとある事を思い出し、僕は「どうしたらしいかなあ？」と頭を悩ませる。

悩みながら僕が手に取ったのは、テーブルに積まれていた『本』……そのうちの一冊だ。それが僕が悩んでいる原因のものだ。

実際のところは、手に取った一冊だけでなくテーブルの上にある『本』全てが関係してるんだけど……。

フィリーさんもリオネラさんも、僕の様子から、僕が言いたいことがわかったみたいだ。

「あつ、そつか。今みたいにみんなで一冊を見るわけにはいかないだろうし、回し読みってわけにも……」

「やつぱりしつかり読めない、ちゃんと理解できなくて上手くいかないと思うよ?」

「そうだよ。でも、そうなるって沢山書かないといけなくなるから、時間が凄くかかるなあ……」

「えっ」

僕の言葉に、フィリーさんとリオネラさんが揃って驚いたように声をあげた。

いや、驚いたと言うにしても随分間の抜けた感じではあるんだけど……一体どうしたんだろう?

その僕の疑問を解決してくれたのは、ちよつと呆れたような口調で「やれやれ」と話しだしたアラニーヤとホロホロ。

「もしかして、全部手書きで本を作る気なの? 最初の1冊目とかだけならまだしも、何冊も作るのにそれは無茶だと思わよ?」

「つーか、普通なら印刷するって考えが浮かぶもんだろ」
「印刷……ああつ! なるほど!」

なるほど、それは盲点だった!

確かに、世の中に出回っている本は印刷されたものが多い。手書きのものが全く無いわけじゃないけど、手書きそういったのものは大抵世界に1冊しか無いようなものばかり。

おそらく、そうやって印刷技術が広く使われているのは、アーラン

ドが持つ機械と技術力の賜物なんだろう。

「でも、印刷のことって詳しくは知らないんだよね。どうやってやるのか……そもそも何処に行けば出来るんだろう？」

そう。印刷というものは知ってるけど、それがどういったものかはほとんど知らない。なので、どうしたらいいのかがよくわからないのだ。

「ええつと……た、たぶん、街の工場のどこかで印刷もやってると思うんだけど……。工場のことって国の人が把握してるはずだから、大臣さんあたりに聞けばわかるんじゃないかな？」

リオネラさんの言う通り、遺跡から発掘された貴重な機械を使用している工場というものは基本的に国が何かしら管理をしていたりすることが多い。だから、何かしら知っているとと思う。

なんにせよ、現大臣であるトリスタンさんには印刷以外にも、アレのことで話しておかないといけないこともあったから、工場云々は抜きにしても近々会いに行くことにしよう。

「あとは……あの人に聞いてみるとか？ ほら、あの……えつと、いのーの……」

「異能の天才、プロフェッサー・マクブライン？」

僕がそう聞くとフリーさんは「そうそう！」と頷く。

「あの人って機械のこと詳しいんだよね？ だったら、印刷のための機械の事とかも知ってて、もしかしたら造れたりするんじゃないかなーって」

「なるほど。確かに工場で印刷してもらえたとしても、その間は他の人たちの邪魔になっちゃうわけだし……それならそんな立派なものじゃなくても、個人で使えるものがあつたほうが都合がいいかもね」

となると、マークさんに事情を話して協力……というか依頼をすべきだろう。

ただ……その場合、心配なのはマークさんにこの『本』たちの内容を知られることかもしれない。

なぜなら、この『本』の内容は『魔法』について「……そう、この本は以前から書き進めていた『魔導書』なのだ。そして、マークさんは『魔法』といった非科学的なものを嫌っている……というよりも敵視している節がある。

もしバレたら、協力してもらえないどころか、邪魔をされてしまうかもしれない。

……あつ、でも『魔法』については大々的に発表するつもりとか、いましているのがその準備なわけで、結局そう遠くないうちに知られてしまうわけで……それじゃあ、どっちにしろ何か言われたりするんだろう。

「そう考えると、マークさんからの協力は……ああ、でも『魔法』のことはちゃんと説明して、納得してもらわないと後々大変になるかなあ？」

最初からわかっていたつもりだったけど、やっぱりいろんな意味で前途多難な気がする。……だからといって、この計画を途中でやめてしまうつもりは全く無いんだけどね。

そうやって、フリーリーさんとリオネラさんたちと一緒に「あーだ」「こーだ」と話し合っていると、不意に玄関のほうからノックの音が聞こえてきた。

「はーいー」

そう僕はノックに返事をし、イスから立ち上がって玄関のほうへと行く。

すると、僕が玄関へとたどり着くよりも先に、扉が開いた。

「失礼する、ミスはいるか」

「きやつ……！」

「……………」

入ってきたのは、こころなしか焦った様子のレストランさんだった。……僕から見て後ろの方から短い悲鳴が二人分聞こえてきたんだけど、それを聞いて、何とも言えない顔をして沈黙している。

「はい、いますよー……って、あれ？ ステルクさん、ジーノくんはどうしたんですか？」

「……なに？ どういうことだ？ ここにいるんじゃないのか？」

僕の言葉でステルクさんが僅かに首を傾げ、そのステルクさんの言葉を聞いて今度は僕が首を傾げる。

……よくわからないけど、こういう時は一回ちゃんと話して状況を整理するべきだろう。

「えっと、ジーノくんは一週間くらい前にステルクさんが冒険に連れて行きましたよね？」

「ああ。あの場でトトリあの少女に合わせるわけにはいかなかったからな」

なるほど。だからあの時、半ば無理矢理にでも冒険に連れて行くとしたのか。そうなると、もしかしてあの時に窓をつついてたハトは『青の農村』にトトリちゃんが来たことをステルクさんに伝えてたのかな？

「その翌日、ハトにあの少女がいないことを確認させ、それから『青の農村』へ戻るようにしたんだが……」

「でも、僕とステルクさんは今日まで会ってないですよ？」

「いや、それは……帰る途中で別のハトから「そう遠くない場所に王がいた」という報告を受けてだな、そこでジーノあいつとは別れたんだ」
「えっ」

えっと、つまり途中までは一緒だったけど、それ以降は知らないってこと？ いくらなんでもそれは……。

って、よくよく見てみれば、服の所々がボロボロになってる。汚れこそすでに払い落とされていたのか見えないものの、その様子からするとジオさんには結構コテンパンにやられてしまったのかも。

「別れたのは『青の農村』からそう遠くは無い場所だったんだが……本当にここにはいないのか？」

「はい、あの日以降は会ってませんよ。……あつ、でも、五日くらい前に『作業場』に置いてあった強化した剣が、ジーノくんに貸してた剣

と入れ替わってたんで、ここには来てたんだと思います」

「なに？　ここにきていたのであれば、会ったんじゃないのか？」

「それが、ちょうど僕が出かけて留守だった時に来てみたいで、会えてなくって……」

僕がそう言うと、ステルクさんの眉間にはシワが寄り、目が細められた。……僕の気のせいじゃなければ、眉毛もピクピクしている……

「……何故、キミが留守だったというのにジーンは『作業場』に入れたんだ？」

「え？　何故って……むしろ何で入れないんですか？」

……気のせいか、ステルクさんのほうから「プツン」と何かが切れたような音が聞こえたような気がする。

でも、別に切れるような紐とかは見当たらないけど……

「だから……！　……ハア。キミそういう奴だったな。むしろ、家に鍵がかかっているほうが珍しいか」

ステルクさんにそこまで言われて、何の話かやつとわかった。

つまりステルクさんは、僕に「出かけているのに、何故鍵をかけていなかったか」と問い正したかったんだろう。ステルクさんなりに心配してくれているんだと思う……でも、「鍵がかかっているほうが珍しい」っていうのは、いくらなんでも言い過ぎなんじゃ……。

「僕だって、出かける時とか夜には鍵をかけるようにはなりましたよ？」

「なら何故ジーンが来た時には鍵は開いていたんだ？」

「街に行っても一、二時間しかかかりませんから、鍵をかける必要は無いかなあ、と」

「意識が低いというか、危機感が無いというか……泥棒が入ったり、何かあった時に困るのはキミなんだぞ？」

そう言っただきくため息を吐くステルクさん。

でもなあ……

「でも、鍵をしても入られる時は入られますし、あんまり意味が無い時もありますし」

「なに？ 泥棒に入られたことがあるのか!？」

「ドロボウというか、アストリッドさんなんですけど……」

そう。あれはアーランドがまだ王国だった時代……アストリッドさんが知らぬ間に僕の家に入し、薬などを持って行ってしまったことがある時期があった。それは、ロロナが王宮の課題を全てこなした後、アストリッドさんが『アーランドの街』から旅立つまで続いたんだけど……その間は本当に鍵は意味が無かった。

とは言っても、そのアストリッドさんの行為に多少は困りはしても、そこまでではなかったから諦めていたというか、持って行ってもいいことにしてただけだね。

ステルクさんはといえば、さつきまで驚いた様子だったのに、アストリッドさんの名前を出したあたりでピタリッと固まり……数秒後、一段と大きなため息を吐いて首を振ってきた。

「……そういえば、そんな話を昔していたな……。だが、アイツを基準に考えるのは流石にどうかと思うぞ」

「それはまあ、僕もなんとなくそんな気もしていたんですけど……」

そう言ったところで、僕とステルクさんの間に、何とも言えない空気が漂った。

なんとというかここで話は区切れたんだけど、「それで……何だっけ？」といった感じに次の言葉が出てこなかった。それは、目の前のステルクさんも同じ感じみたいだった。

そんな僕とステルクさんに助け舟を出したのは、ソファーでビクビクしてるフィリーさんとリオネラさん……ではなく、リオネラさんのそばで浮いているホロホロとアラニーヤだった。

「んで、結局ジーノって奴はどうなったんだよ?」

「それに、騎士さんはその子に何か用があったの?」

ふたりの声に、ステルクさんは視線をずらし、僕は振り返ってソファアのほうを見た後、僕らは再び顔を見合わせた。……ステルクさんの視線に、フィリーさんとリオネラさんが跳びあがるのは……もういつものことだ。

「ジーノくんは一人で冒険に出てるか……もしくは、『アランヤ村』にかえっちゃったとか？」

「考えられるのはそのあたりだろう。どちらにせよ、無茶をしていなければいいが……。……にしても、私としたことがキミのペースに乗せられて、随分と喋ってしまったようだ。少し余裕があるとはいえない早く対処すべきだというのに……」

まるで僕が悪いかのように言われたような気がして、そこを否定しようと思った……。んだけど、ふとそれよりも気がかりなことに気がつき、そっちのことを聞くことにした。

「対処って、何かあったんですか？」

「ああ。実は王と戦った後、私を起こしたハトがいたんだが……」

「起こした」ってことは、つまり、ステルクさんは寝ていたんだろうか……。いや、それよりもまたハト……。前に、話に出てきたハトと同じハトか、それとも別の……。もし、別だとすれば、ステルクさんはいったい何羽のハトを飼っているんだろう？

「そのハトはギルドからの緊急の連絡を持ってきていて、内容は……。『スカレット』の群れが『アランヤ村』近郊を移動している……。という報告だ」

「ええっ!？」

『スカレット』といえば、その名の通り真つ赤な悪魔系のモンスターだ。その体は比較的小さくて、人の子供くらいの大きさしかないけど、その力は本物でなおかつ性格も狡賢く残虐で、一体だけでも中級冒険者がてこずる相手だ。

そんな『スカレット』が群れでうろついているとなると、かなり危険な状態だ。

「幸い、『アランヤ村』のすぐそばというわけでもなく多少距離はあるため、『スカレット』たちが直接『アランヤ村』を襲う可能性も限りなく低いそうだ。ただ、村のそばの採取地にいついてしまう可能性や群れであるという危険性を考慮して、ギルドは討伐隊を編成すること

を決めた。それで、キミやジーンあいつに声をかけに来たのだが……」

「経緯はわかりました。それで、今『アランヤ村』は……？ トトリちゃんも向こうにいるはずなんですけど……」

「王と遭遇できたのが、街から見えて『アランヤ村』とは反対方向だったから、私もこの目でその様子は見れていない……が、ギルドの依頼を取り扱っている酒場があったらどう？ あそこに情報が行き、そこから村全体に外へ出ないようにと伝達が回っているはずだ。あとあの少女には、もしも村の外にいた場合を考えて、すでに私の方からハトを飛ばしている。ハトには直接トトリ本人に渡すように言っているから、村にいなかった場合も周辺を探して手紙を渡すから問題無いだろう」

「内容は、簡潔に何が起きているかと村に帰るように、と書いてある」と、手紙の内容を付け加えて説明してくれるステルクさん。とりあえず、ひとまずは大丈夫なようだ。ただ、不安要素が全く無いわけでもない。

そして、話の流れからして僕もステルクさんと一緒に討伐隊に入るべきなんだろうけど……

「あの、僕、先に『アランヤ村』へ行ってもいいですか？」

「なに？ だが、街で人員を集めた後、彼女に……ん、ろ、ロロナ君の手を借りて討伐隊は『アランヤ村』に行く予定なのだが……今一人で村へ向かったところで、逆に遅れるぞ？」

「大丈夫です！ 僕も『トラベルゲート』を持ってますから、一人でもすぐに行けます！ ……トトリちゃんやメルヴィアがいるとはいっても、やっぱり村の人たちは不安になると思うんです。だから、少しでも早く村に行つて、何か助けてあげたいんです!!」

そう言つて僕はステルクさんの目をジッと見つめる。

対するステルクさんは、普段よりも微妙に険しい顔で睨みつけてきて……少し間をおいて、小さく息を吐いた。

「……そうだな。あまり考えたくはないが、もしもの場合に村を守る人間が一人でも多くいた方がいいだろう。それに、キミの言う通り、村の住人のことを考えるのであれば、なおさらな」

「はい！ それじゃあ、準備してすぐに……」

「ただし、わかっているとは思いますが、一人で討伐に出たりするような勝手な行動は控えておくように。敵の群れの数はかなり多いらしい。そんな中に特攻するのはいくらなんでも無謀だからな」

そう言うと、ステルクさんは「では、私は街に行く」と僕の家から出ていった。

そのステルクさんの背中を少しだけ見送った後、僕は振り向いてファイリーさんとリオネラさんたちの方を向く。

「色々やってた途中でごめんなさい！ そういうことだから僕は今から出掛けるんだけど……みんなはここで好きなだけくつろいで！

あつ、もしあれだったら、冷蔵庫の中のもの勝手に食べてもいいからっ！」

「私たちもちゃんとお話は聞いてたから、そんなに気にしないで。それに、ミス君が帰ってくるまで、このことは任せてよ！」

胸を張ってそう言うファイリーさん。ステルクさんは相変わらず苦手だけど、昔と比べたらいろんな人とお話できるようになっているし、お留守番をしてくれるのなら、とても頼りになる。

「うん。だから、ミスくんは『アランヤ村』に行つてあげて。……ピアニヤちゃんもきつと不安になってると思うから……ね？」

リオネラさんのほうはといえば、前に『青の農村』に遊びに来ていて、リオネラさんの人形劇を観ていたりもしたピアニヤちゃんのことを特に心配した様子だった。

僕は家の事を二人に任せることにして、ササツと最低の準備をして、家の外へ出た。

そして、僕は初めて使うアイテムを取り出し、かかげる。

『『トラベルゲート』！』

5年目：マイス「いつもと違う『アランヤ村』」

アランヤ村

「……よつと。ちゃんと来れたみたいだね」

『トラベルゲート』を使うのは初めてだったけど、問題無く『アランヤ村』へと移動出来たみたいだ。

同じような瞬間移動する『魔法』……『リターン』を普段から使つてはいるけど、ホムちゃんから失敗例を聞いたせいか『トラベルゲート』を使うのはちよつと怖かったりする。

さて、『トラベルゲート』で移動した僕が現れた場所はちょうど村の入り口なんだけど、そこからは『アランヤ村』の中心である広場とそれを取り囲む家々が一望できる。

見たところ大きな混乱なんか起きていない様子は無いが、いつも通りと言うわけでもないみたい。普段なら広場には立ち話をしている人たちやベンチに座ってノンビリとしている人なんかを見かけるんだけど、今日は全然見当たらない。たぶん、『スカーレット』の接近の情報を受けて、みんな自分の家などの屋内にいるんだろう。

「じゃあ僕は……まず、トトリちゃんとメルヴィアを探さないとかない？」

僕がすべきことは、村の人たちの安全確保と、もしもの事態への準備、あとはステルクさんが連れてきた討伐隊に参加するための準備。それらをするためには、この『アランヤ村』を拠点にして活動している二人に会って協力してもらったほうがいいと思う。

「二人は……アトリエか、ゲラルドさんの酒場にいるかな？」

どっちもありえそうだけど、有事つてことで、村にいる冒険者である二人は一緒にいる可能性が高い気がする。そして、そうなるとギルドからの情報が直接くる酒場にいるんじゃないかな？

普段はお客さんが少ない酒場だけど、村で一番大きな建物だから色

んな人が集まって身を寄せ合っているかもしれない。そうなる、その人たちに討伐隊のことなどを伝えて少しでも安心させてあげる必要もある。

そう考えて、僕は村唯一の酒場『バー・ゲラルド』へと歩き出した……んだけど……

「んん？」

広場にある建物の一つの扉が勢いよく開け放たれたのだ。

たしか、あそこは……実は、まだ行つた事は無いんだけど、パメラさんのお店だつたはず……。

驚きながらも、よくよく見てみると………というか、もう僕のすぐそばまで迫つてきてたんだけど、扉を開け放つたのと同時に走つて出てきたピアニヤちゃんが、僕に跳びついてきた。

「いらつしやい！ マイスうー！」

「いらつしやい、つて……ええ？」

てつきり怖くて僕に跳びついてきたのかと思つただけど、ピアニヤちゃんにはそんな様子は無くて、むしろいつも通りに楽しそうな笑みを浮かべて元気になっているように思えた。

と、開いた扉から少し遅れて、お店の店主であるパメラさんが「まつて〜」と、ピアニヤちゃんを追いかけるようにして出てきた。

……つて、あれ？

「なんでピアニヤちゃんが、パメラさんのお店に？」

ピアニヤちゃんに対して「過保護」つて言うか「大好き！ 大好き！」つて感じだつたツイイさんのことを考えたら、絶対危なくないようにと酒場かヘルモルト家で一緒にいると思つたのだが、何故かわからないけど見当違いだつたことになる。

どういうことなんだろうと思つて疑問を口に出した。それに答えたのは、いつも通りのほんわりとしたパメラさんだつた。

「なんで、つて……ツイイがウチに預けて、トトリとメルヴィとおでかけに行つたからよ〜？」

「……………へ？」

「あつ、でも、トトリだけすぐに帰って来たんだけど……ちよつと前に、村から飛び出して行くのがお店の窓から見えたわ。何か忘れものでも取りに来てたのかしら？ それにしても、時間がかかってたよ
うな気もするんだけど……」

パメラさんの言葉を聞いてすぐは意味がわからなくて、呆然としてしまっていた。……が、すぐに何を言っているのかがわかった。

思い出したんだ。前に、トトリちゃんとピアニヤちゃん、ツエツイさんパメラさん、それにメルヴィアといったメンバーで『青の農村^ウ』に遊びに来てくれた時のこと。

パメラさんとピアニヤちゃんが仲が良いことに気がついて、僕はちよつとパメラさんにそのことを聞いてみたんだ。そしたら「ツエツイがトトリとメルヴィアと一緒に冒険に出た時には、あたしのお店で預かってるの。だから、仲良しなのよ」って答えが……。

……

……………

………つて、

「え、ええええーっ!?」

「わっ!?…びっくりした。ミス、どうしたの？」

つい出してしまった大声に、僕に抱きついてきていたピアニヤちゃんが驚いてしまったみたい。でも、それを怒ったり文句を言ったりすることも無く、ピアニヤちゃんは「何かあったの？」と僕の顔を心配そうに見つめてきて………つて、そうじゃなくて!

「え、つまりツエツイさんとメルヴィアは冒険で村の外に出てて、トトリちゃんもちよつと前に村を出たってこと!?!」

「そうだけど……それがどうかしたの？」

キョトンと不思議そうに片手を頬に当てたまま首をかしげるパメラさん。

いや、逆になんでそんなに呑気にしてられるんだ!? ……いや、もしかしてパメラさんとピアニヤちゃんは『スカーレット』の群れの

事を知らない？ 「不安をかりたてるようなことはしない方が良い」って誰かが判断して、情報を知らせたのは最低の人にだけだったとか……？

あり得るかもしれない。パメラさんはともかくとしても、ピアニャちゃんと一緒に住んでいるトトリちゃんやツイイさんが危ない目に遭つてると知つたら凄く不安になるだろうし、心配で心配で取り乱してしまつたりしそうだ。まだまだ小さな子だから、なおさら精神的に不安定になりやすいと思う。

その真偽はわからないけど、思っていた以上に良くない状況だ。

『スカーレット』の群れの詳しい位置情報や、ツイイさんたちがどの方面に行ったのかといったことが無いから遭遇してしまつているかどうかはわからないけど、それでも危機的状況な可能性があることは間違い無い。

それに、トトリちゃんが村を飛び出して行ったというのは、きつとステルクさんのハトから手紙を受け取って『スカーレット』の群れの事を知つたトトリちゃんが「おねえちゃんたちが危ない！」って心配になつて探しに行つたんだと思う。

僕は嫌な汗が流れるのがわかつた。それと同時にゾクリツと寒気が走り、全身の筋肉がキュツと縮こまるような感覚に陥おちいつてしまう。似たような感覚は、今回ステルクさんから『スカーレット』の群れのことを聞いた時点でもあつた。だけど、今のはそれとは比べ物にならないくらい重くずっしりとのしかかつて……いや、絞めつけてきた。

大変だ！ マズイ。心配だ。どうしよう……色んな感情や考えがグルグル回つて落ち着けなくなる。

メルヴィアも、戻つて来て後から出ていったつていうトトリちゃんも、一流の冒険者だ。並大抵のモンスターには遅れはとらないと思う。

だけど、不安要素もある。それは『スカーレット』の群れの数が多いという情報。もし本当に多かつたとすれば、トトリちゃんや

メルヴィアでも単純に数の暴力で苦戦して、負けなかったとしても少なからず傷を負ってしまおう。それに、もし敵の数が多かったとしても、うまく逃げればさえすれば何の問題も無い。

……けど、今回は冒険者じゃないツイツイさんがいる。逃げるにしても、戦うにしても、ツイツイさんを守ろうとすることで本領発揮が出来ない状況に追い込まれてしまう可能性が高い。二人の実力を見まして、さらに、後から村を出たトトリちゃんと早くに合流できたとしても、かなり厳しくなる気がする。

トトリちゃんが『トラベルゲート』を使えば……でも、アレを使うにはちよつと隙が出来ちゃうし、移動する人・物が多くなればなるほど使う際の座標の設定とかが難しくなる。だから、乱戦になったら……下手をすれば、誰か一人がおいてけぼりになったり、『スカールレット』の群れも一緒に村まで移動しかねない……だから、まず使えないだろう。

「ミス、どこか痛いのか？ お顔、キュってなってるよ……？」

「顔色も悪いわよく？ 一回、横になつたらどうかしら？」

心配そうに僕の顔を覗きこむピアニヤちゃんとパメラさんが見え、僕はハツとした。……そうだ、村で色々考えてても、不安がつてもどうしようもないんだ。むしろ、その様子のせいで、ピアニヤちゃんやパメラさんまで不安にさせてしまう。

……危ないだなんてことは、最初からわかってた。いや、『アランヤ村』の人たちが危ない状況に置かれるからこそ、僕は来たんじゃないか。

気持ちを切り替えるべく、僕は両手で自分の両頬をパァン！と叩き、「フウ！」と短く息を吐いて背筋を伸ばしてピアニヤちゃんとパメラさんの顔を見る。

そして、いつものように元気に笑顔で話しかける。

「僕は大丈夫だよ！ だから、ピアニヤちゃんはトトリちゃんたちが帰ってくるまでパメラさんのお店のお手伝いをしてあげてくれないか。」

かな？」

「うー？ うん！ ピアニヤ、今日はそうするつもりだった！ ピアニヤが作ったやつも売るの！」

「後で僕も見に行くからね。……パメラさん、ちよつとの間、ピアニヤちゃんのことお願いします」

「任されたわ。だ・か・ら・くあとでちゃんとお買い物しに来てね♪
約束よ〜？」

ピアニヤちゃんとパメラさんの返事を確信した僕は、二人にお店に戻るように言ってから、村の入り口の方へと駆け出した……。

『アランヤ村』を飛び出した僕だったけど、内心、これからどうなるかが不安だった。なぜなら、メルヴィアとツエツイさん、それにトトリちゃんが言った場所がわからないからだ。

……トトリちゃんが飛び出して行けたのは、話を聞く限り最初はメルヴィアとツエツイさんと一緒に行く予定だったから、二人が行く場所を事前に知っていたんだと思う。

だけど、僕はその場所を知らない。もし仮にトトリちゃんたちが戦闘をしていれば、近くまで行ければ、戦闘音なんかですぐわかるはずだ。ただ、最初から方向を間違えてしまったり、分かれ道を間違えてしまえば会えるはずも無く、見つけるのは至難の業だろう。

だけど、僕には全く手が無いわけでもなかった。

幸いなことに、僕よりも少し前にトトリちゃんが村を出ていった。その痕跡をたどっていけばいいのだ。

僕は走りながら意識を『変身ベルト』に向けて……途中、勢いそのままにピョンと跳んで金のモコモコの姿へと変身した。

金モコ状態なら、視線が低くなり、地面に残ったトトリちゃんのも
のだろう真新しい足跡を確認しながら走る事も難しくなくなる。

また、『ウォルフ』ほどじゃないけど鼻も良くなって、『錬金術士』特
有の薬草やら火薬やらの匂いの残り香をたどる事が出来る。

そして、その大きな耳で音も良く聞こえるようになり、離れた場所
からの音も正確に聞き取れるようになる。

ついでに、根本的な身体能力も人の姿の時よりも強化されているか
ら、速く走る事が出来る上にスタミナも増えて長時間走れるようにな
るため、単純に広範囲を探し回る事が出来る。

「無事でいて……！」

『スカレット』の群れと戦ってるかもしれないトトリちゃんたち
の安否が心配でしかたない僕は、自然と走るスピードも上がっていつ
てしまっていた。

……途中から、真新しい足跡が増えたけど……別々の道に分かれて
たりすることもなかったから、僕は気にせず走り続けた……。

5年目：トトリ「緊急事態発生!？」

トトリのアトリエ

「おねえちゃんたち、帰ってこないなあ……」

アトリエの中を当ても無くグルグルと歩き回っていた足を止めて、わたしは窓の外に見える空を眺めた。

そもそもの始まりは、メルお姉ちゃんの提案からだった。

おねえちゃんとメルお姉ちゃんが小さい頃にしていた約束。それは、お母さんのように冒険することに憧れていた二人が、将来一緒に冒険に行くというもの。実際は、おかあさんがいなくなってから、おねえちゃんがお家のこと（うち）を一手に引き受けるようになって、その約束は長らく果たされることは無かった。

けど、わたしが一人前の冒険者になったということもあって、メルお姉ちゃんはこの機会におねえちゃんを冒険に連れて行く計画をたてていたらしく、わたしにも協力してもらえないかなって声をかけられたの。

結果的に言えば、おねえちゃんを冒険に連れ出すことには成功した。おねえちゃんは最初こそ行くのを渋ってたんだけど……一度近所の採取地まで冒険に行ったところ、次回誘った時には「実は今度はいつなんだろうって誘ってくれるのを待ってたの」なんていうくらい楽しみにするようになってた。

で、今日がおねえちゃんと三回目の冒険つてことになってたんだけど、わたしはある理由で出発直前にアトリエに残ることにした。

というのも、前回の冒険の時にわたしとおねえちゃん盛り上がったちゃって、メルお姉ちゃんをほったらかしにしまったのだ。今回の件を提案してきたのがメルお姉ちゃんだということからわかるように、メルお姉ちゃんだっておねえちゃんとワイワイ冒険がした

い。なのに、わたしは「協力する！」なんて言いながらも、自分ばかり楽しんでしまった。

そんなことがあったから、今回はその反省を踏まえてわたしが「アー！ ソウ言エバイライヒン依頼品ノ納品期限、明日マデアシタダツター！ 早くハヤ調査シナイトー！」って言って途中で離脱して、メルお姉ちゃんとおねえちゃんの二人だけで楽しんでもらおうと行動したんだけど……

「メルお姉ちゃんが一緒だし、大丈夫だとは思うけど……うーん……うずうず……」

冒険の目的地だった採取地は、これまでおねえちゃんを連れて行った冒険の中では一番村から遠い……とは言っても、日をまたがないといけないほど遠く離れてない。

まあ、だからと言って今帰ってくるには早すぎるんだけど……なんでか、早く帰ってこないかなーって思ってる自分わたしがいる。

「うずうず……いらいら……そわそわ……あーっ！ 気になってなんにもできないーい！」

うー……！ そんなにすぐには帰ってこないってわかっているつもりなんだけど、どうしても落ち着けない。

……わたしが『冒険者免許』を貰いに行つたあと帰ってきた時なんか、おねえちゃんが「トトリちゃんはいつ帰ってくるの!? 毎晩ごちそうを用意して待ってるのに！」なんてお父さんに行つてたりしたけど……もしかして、今のわたしと似たような気持だったのかなあ？ 「はあ……やっぱりわたしもついて行けばよかったかなあ」

今からでも遅くない……？ でも、二人がいい感じに楽しんでるところに乱入しちゃうのは、なんだか気まずいし。

なら、二人には合流しなくて、陰に隠れて見守っておくとか？ ……ううん。それもちよつと無理かな。おねえちゃんが戦つてるのを見たら、フォローしたくて絶対に手を出しちゃうと思う。

「どうしたらいいんだろう……」って、一人で悩んでいたら、不意に「カンツカンツカンツ」と何かが叩かれる音が聞こえてきた。

悩み込んでうつむき気味だった顔をあげてみると、さつきまでわたしが空を眺めていた窓の外に、見覚えのあるハトさんがいた。

「あれ？ このハトさんってもしかして、前にステルクさんに先生の名前を……う、ううん、ただのステルクさんのハトさんだったね……うん。そういう話だった。わたしは何も見えてない、何も聞いてない……」

ステルクさんに口止めされてたことを、寸前のところで何とか言わずに踏みとどまることができた。今は周りに人はいないけど、普段から気をつけてないと人前でポロツと言ってしまうようで怖い。

……本当に怖かったのは、ハトさんに先生の名前を覚えさせて「ロ・ナー」って言わせてたのを、必死に口止めするステルクさんなんだけどね……。

「つて、あれ？ このハトさん、足に何か付けてる。……あつ！ これが『伝書鳩』なんだね」

前にミミちゃんから聞いた話を思い出して、わたしはピンときた。……でも、なんでわたしのところに？

不思議に思いながらも窓を開けて、ハトさんにアトリエの中に入ってもらおう。そして、ハトさんに怪我をさせたりしないように気をつけながら、足につけられている手紙を取り外そうとした。

手紙はハトさんがジツと大人しくしてくれたから、初めてだったけど難なく取り外せた。

わたしは何が書いているのか気になって、さつそく丸められている手紙を開いた。

『村周辺にスカーレットの群れが目撃された。非常に危険なため、こちらが討伐隊を編成し駆け付けるまで村の外には出ず、外にいる場合は至急帰還せよ』

「えっ」

ハトさんが飛ぶのに邪魔にならないサイズの小さな手紙。それにぎゆうぎゆうに書かれていた短い文章を見て、わたしは一瞬固まって

しまう。

でも、事態を把握できてすぐに、わたしは杖いつものポーチを掴み取ってアトリエを飛び出していた。

ステルクさんは「村の外に出るな」って言ってた。理由も、『スカレット』の群れの危険性も、全部わかったた。

でも、だからこそ「村の外出るな」って言葉を気にしている場合じゃないってわたしはわかったた。

「おねえちゃん……！」

おねえちゃんとメルお姉ちゃんが無事であることを頭の中で祈りながら、わたしは村の外……おねえちゃんたちが行ってるはずの採取地へ向けて全速力で走っていく……！

採取地のはずれ

『アランヤ村』を飛び出してから、おねえちゃんたちが行ったはずの採取地へと向かって、わたしは走り続けてた。

周りなんて気にしないで、ただただ道を走っていった。他の採取地をつつきって通り過ぎて言ったりしながらも、ずーっと走り続ける。

その途中、採取地や道を走っている最中に行く手に真っ赤な悪魔『スカレット』が四、五体の塊でいることが何度もあった。きつとそいつらがステルクさんからの手紙に書いてあった「スカレットの群れ」の一部分だったんだと思う。……何回も会ってるから、全体の群れの数はかなり多いのかも。

その可能性が、わたしを不安にさせ「もつと急がないとー！」とおねえちゃんたちのもとへとせかしてくる。

だから、『スカレット』たちなんて一々立ち止まって相手をしてあ

げるヒマなんてなかった。だから……

「どいてー！ どかないと爆弾で吹っ飛ばしちゃうんだからー!!」

そう言いながら、走る足を止めずにポーチから引つ張り出した爆弾系の道具を行く手を遮る『スカーレット』たちめがけて投げつける。……そして、そのまま走り続けてく。

再び『スカーレット』が見えてきたら爆弾を投げつけて走り去り、また見つけては投げて、またまた見つけては……

そんなことを何回か続けたところで、おねえちゃんとメルお姉ちゃんがいるはずの採取地にたどり着いた。

だけど、そこに二人はいなくて、『スカーレット』が数体いるだけ……。でも、『スカーレット』がわたしを見るまでそんなに警戒してなかったことを考えると、ここでおねえちゃんたちが『スカーレット』と戦ったりしたわけじゃなさそう……？ もしかして、もつと採取地の奥の方に行ってるのかも。

そう考えたわたしは、こここの『スカーレット』もとりあえず倒してしまふことにした。

「とりやあー！」

放り投げた爆弾が狙い通りに『スカーレット』たちの所まで飛んでいき、轟音と共に爆発した。爆破したモンスターの確認もそこそこにしてわたしはまた走り出す……。

そうして、また何度か爆弾で倒しながら奥地へと進んで行く……そこには、わたしが予想した通りにおねえちゃんたちがいた。

けど、二人の数メートル先には十体ほどの『スカーレット』の群れが……ううん、メルお姉ちゃんが倒したのか、周りの様子からして元々はもう数匹『スカーレット』いたんだと思う。

『スカーレット』に相対しながらも片膝をついているのは、身体のあちこちが赤くなってるメルお姉ちゃん。おねえちゃんはその後ろに隠

れるようにしていた。

「おねえちゃん！ メルお姉ちゃん！」

走ってきた勢いのまま、わたしはメルお姉ちゃんと『スカーレット』たちの間あたり……ややメルお姉ちゃん寄りの場所に飛び出した！

「トトリちゃん！」

「ナイスタイミング……とは言い難いわね。もうちよつと早いと嬉しかったんだけど……」

いつもと違う、泣き声が混ざったような声で名前を呼ぶおねえちゃん。

そして、メルお姉ちゃんもいつもの軽口はいまいちで、声も元気とは言い難いメルお姉ちゃんらしくないものだった。

……その理由はわかった。メルお姉ちゃんの身体のあちこちの『赤』、それがモンスターの返り血だけじゃなくて、身体の内側にある傷から溢れ出したメルお姉ちゃん自身の血なんだということをおねえちゃんはメルお姉ちゃんの後ろに隠れてるんじゃない、メルお姉ちゃんがおねえちゃんを背中に隠して『スカーレット』の攻撃からおねえちゃんを守っていたんだということ。

グガアアアアア！

『スカーレット』の群れの内の一体……他よりも少しだけ体が大きい個体が大きな叫び声を上げてきた。もしかしたら、群れのボスなのかもしれない。そのボスの目は、間に入ってきわたたしを睨みつけていて、まるで戦線布告のようにも思える。

けど、そつちが気合十分なのと同じように、わたしの方もヤル気は満々だよ！

「むう、よくも二人を……！ 許さないんだから！ わたしのためにおきの爆弾で……」

そう言いながら、わたしは肩から下げているポーチに手をつき込み、爆弾を掴んで取り出し……

爆弾を掴んで取り出し……

爆弾を掴んで……

爆弾……………

「……あれ？　もうない？　やだ、使い切っちゃった!」

えつと……まあ確かに、ここにくるまで沢山投げてきた。でも、それでもいつもの冒険でもあれ以上に投げることも普通にあるし、いつも多めに用意してる爆弾系の道具が底を尽きるなんてことは……

あつ……!　そうだ!　わかった!!

いつもは冒険に出る前にポーチの中身を補充して、帰って来てから採取した物とか大事なものをコンテナに片付ける習慣になってる。

けど、今日は最初からおねえちゃんとメルお姉ちゃんで行ってもらって、わたしは冒険に行く気は無かった。だから、ポーチの中の道具は前回の冒険が終わってから何も補充していない状態……つまりは色々と不足しているのが当然なくらいで、ここに来るまで爆弾がもったこと自体運がよかつたくらいだと思う。

「トトリちゃん……」

「うん、まあトトリらしいけど……この状況じゃ笑えないわよね」

……わたしの様子から察しちやっただのか、おねえちゃんとメルお姉ちゃんから何とも言えない視線と言葉が……。

ゴギヤアアア!!

そんなわたしの都合なんてお構い無しに、また『スカーレット』のボスが大きな叫び声をあげた。

どう考えても襲いかかってくる一歩手前の状態だろう『スカーレット』たちを見ながら、ポーチの中を漁り^{あき}続けてみる……。

……うん。やっぱり爆弾は使い切ってしまったみたい。お薬も『ヒーリングサルヴ』っていう初歩中の初歩の薬しか残ってない。しかも、コンテナからアイテムを取り出せる『秘密バッグ』も、使える隙^{すき}があるかはわからないけど一瞬で村に帰れる『トラベルゲート』さえもアトリエに置きっぱなしになってしまってるみたい。

せ、せめて爆弾が一個でも残ってたら、威力や効果は弱くなるけどアイテムを複製できる『デュプリケイト』で爆弾を増やして何とかできると思うんだけど……無い物ねだりだっというのはわかってる。

「こんなことなら来るまでの間は『デュプリケイト』使ってたのに……うううう……で、でも大丈夫！ これくらい武器だけでも……！」
ポーチに突っ込んでいた左手を出して、覚悟を決めて両手で杖を構えた。

……でも、マズイ状況だということは間違い無い。十体近くいる敵に対してわたしは一人。

ううん、一人だったら避けたり逃げたりしながらやりようがあったと思う。けど、今、わたしの後ろにはおねえちゃんと身体中に傷を負って血を流し、片膝をついて斧を杖のようにしてなんとか顔をあげてるメルお姉ちゃんがいる。避けたりなんかしたら、おねえちゃんたちが大変なことになっちゃう！

でも、戦って勝たなきゃ、村に帰る事も出来ない……。

口では勢いに任せて強気にも思える言葉を吐いてたけど、今、少しでも気を抜いたら脚も腕も震えあがってしまうそうなくらいになってた。

わたしが動くか、『スカーレット』たちが動くか……どっちが先に動くかと言う状態で止まっていた戦況。それを動かしたのは例の群れのボスの『スカーレット』だった。

空を向けてクルクルと振るわれる指、その指先辺りには直径十センチくらいの大きさの『闇の球体』が形成され……「ガアア！」という掛け声と共に腕が振り下ろされ、『闇の球体』はわたしの方へと向かって射出されたっ!!

後ろにはおねえちゃんたちがいる。避けるわけにはいかない。わたしは杖を前に突き出すようにして、どうにかガードしようとする。

速いスピードで迫ってきた『闇の球体』について目を瞑つむってしまいな
がらも「どうか……！」と防げるようにと心の中で祈る。

「あぶねえ!!」

「バシユーン!」と何かがさく裂したような音。でも、わたしは何の衝撃も感じてなかった。

いや、でも……聞こえた。炸裂するような音じゃなくて、聞きなれた声が。

瞑ってしまつてた目を開けた先……そこに見えた背中は……

「えっ………ジーン………くん?」

「ん? 変なこと言うなあ、トトリは。オレが誰に見えたつてんだよ?」

剣を構えたままチラツと振り向いて返ってきた言葉。それは間違い無くあのお調子者で元気なことが取柄なジーンくんの声だった。

「な、なんでここにいるの!?!」

「へ? トトリにリベンジするために決まつてるだろ」

「いや、そうじゃなくつて………なんでわたしがここにいるのがわかつたの、つて聞いているの!」

「なんでつて………あともう少しで村に帰り着くつてところでトトリに会つただろ? んで、オレが「勝負しろー!」つて声かけたのにトトリはどっかに走つて行つちまつて………んで、ムカついたから追いかけてたらここまで来てたんだ」

ええつと………つまり、わたしがおねえちゃんたちの所に走つて行つてる途中に会つてたつてこと? でも、わたしはジーンくんに気付かなくて、そのまま走つて行つて………うん、『スカーレット』の群れを何回か吹き飛ばしたことは憶えてるけど、ジーンくんがいたなんてことは全然覚えがない。

いや、そもそもここに来た理由が「助けに来た」とかじゃなくて「リベンジするため」とか「ムカついたから追いかけて」なんて言つてる

時点で、色々残念というかジーノくんらしいというか……

「つーか、どうなってるんだよ？　こんなところに『スカーレット』こんな奴らはいないはずだろ？　それに、メル姉はともかく、なんでトトリのねえちゃんまで……」

「ジーノっ！　危ない!!」

振り向いてわたしたちのことを見て不思議そうにしているジーノくんだったけど、不意にわたしの後ろにいるメルお姉ちゃんが声をあげた。わたしはどうしたのかと驚いたんだけど何のことなのかはすぐにわかった。……振り向いているジーノくんに向かって『闇の球体』が二つ飛んできてたのが、見えたのだ。

ジーノくんを突きとばしてでも……!

そう思っって一歩踏み出そうとしたんだけど……

「こんくらい、問題ねえー!」

ジーノくんはそう言っって、チラツとだけ前を見て……手に持つ剣を二回振るった。

すると、どうしたことか剣に当たる少し前に二つの『闇の球体』は「バシユーン」と音を立てて爆散して……あつ、もしかして、最初にわたしを守ってくれた時もこうやって防いでいたのかな？

………っつて

「いやいやいや!?　ジーノくん、何したの!?!」

「何っつて、見りゃわかるだろ？　斬った」

「普通あんなの斬れないよ!?!　それに見えてなかったのに反応するなんて……」

「師匠たちも普通に出来ると思うんだけどなあ？　それに不意打ちも、師匠よりも軽いし、ミスよりも遅いし、どうってことないって」
そう言っったジーノくんは、こつちを睨んできている『スカーレット』たちのほうに向きなおり、剣の刃の無い方で自分の肩をトントンしながら「でも……」っって言葉を続けた。

「身体が軽かったりいつもよりも動けたりするのは、たぶん修行以外にも、ミスがしてくれた剣の強化が何か関係あるとは思っうけど……

ここに来るまで何回も使ったけど、よくわかんねえんだよなあ？ 他にも色々変なことになってるし」

剣の強化……？ 今、ジーノくんが持つてるのって、前にわたしがあげた『ウインドゲイザー』って剣のはずなんだけど……見たところ間違ってると思うんだけど、どういふことなんだろう？

というか、「よくわかんない」とか「変」とか……そんなものを使つてて大丈夫なのかな？

グガアアアアツ!!

その時、ボス『スカーレット』がひとときわ大きな叫び声をあげた。剣に有効なはずの遠距離攻撃であるはずの『闇の球体』による攻撃が何度も通じなかったから苛^{いらだ}立っているのかもしれない。……そのくらの知能はあるはずだし。

でも、その考えが間違いだつてことをすぐ知ることになった。

「……笑ってる？」

明確にそう思えたわけじゃないんだけど、なんとなくボス『スカーレット』の口が歪んだような気がしたのだ。

わたしたちの前で、叫び声を聞いた時点で剣を構え直していたジーノくんも、わたしと同じような違和感を感じてたみたいで「なんだ？」って小さく呟^{ささや}いていた。

「……っ!? トトリ、後ろだ!」

いきなり振り向いてきたジーノくんに言われて、反射的に振り返る。すると、そこには草むらから飛び出してくる数体の『スカーレット』が……!!

そうだ……っ! ここに来るまでにわたしが何体もの『スカーレット』に出会ったように、目の前にいた奴らだけじゃなくて他にも沢山いた事を、わたしたちはすっかり忘れてしまった。

「ジーノくん、トトリちゃん、前っ!!」

次に声を上げたのは、怪我をしているメルお姉ちゃんのそばにつきそうようにして震えていたおねえちゃんだった。

言われて再び前を見てみれば、群れのボスたちが一斉に『闇の球体』をこつちにむかつて打ち出してきていたのが見えた。つまり、後ろか

らの強襲に合わせて挟み撃ちにしてきたわけだ。

前方から迫ってくる『闇の球体』。後方からは別の『スカーレット』たちが襲いかかってきている。

時間も無い。でも、どっちから対処すれば……!? じゃないと、わたしもジーノくんも、おねえちゃんたちも……!!

「モツ……コオオオオオーツ!!」

何かの鳴き声と共に、金色の丸い塊が後方から襲いかかってきていた『スカーレット』の先頭の一体にもすごい勢いでぶつかった。

弾き飛ばされるように吹き飛んだ『スカーレット』。そっちに目がいつていると、ジーノくんの「でりやあ!」という掛け声と共に複数回破裂するような音が聞こえた。どうやら、前方から迫ってきていた『闇の球体』をまた全部斬ったんだろう。

……と、『スカーレット』にぶつかった金色の丸い塊が、クルクルと回ったままお姉ちゃんたちのそばの地面に落ちる……かと思ったその時、「シユタツ!」とソレは着地した。

「モコちゃん!」

そう、その金色の丸い塊は一時期噂にもなったという「幸せを呼ぶ金色のモンスター」であり、先生のアトリエや『青の農村』のマイスさんの家なんかで度々見かけた、先生なんか「モコちゃん」って呼ばれているモンスターだった。『スカーレット』には丸まった状態で突撃してみた。

その存在に、わたしだけじゃなく、おねえちゃんやメルお姉ちゃん、ジーノくんも驚いていた。

モコちゃんって、首に青い布を巻いているから『青の農村』の一因なんだと思うけど……だから『青の農村』や『アランダの街』周辺が行動範囲だと思ってただけけど、ここ『アランヤ村』のそばまで来てたりするとは予想外だった

でも、おかげで『スカーレット』たちの攻撃を防ぐことができた。

「モコッ！・モコモコ、モーコモコッ！」

おねえちゃんたちのそばに着地したモコちゃんは、何かを喋っているかのように鳴きだした。けどそれは、そばにいるおねえちゃんたちやわたしに話しかけているというよりは、モコちゃんの視線の先にいる『スカーレット』たちに向けられたもののように思える。

そのわたしの考えは正しかったようで、モコちゃんがか言った後にモコちゃんが見ている『スカーレット』が、そのまた後に反対側……ジーンくんが剣を構えている前方のほうにいるボスの『スカーレット』が鳴いた。

グキヤアア！

ガアア！　グガガガギヤア！！

「モコッ!？」

……？　よくわからないけど、モコちゃんはまるで言い返された鳴き声が予想外だったみたいに驚いた様子で短く鳴き声を上げた。

モンスターたちの言っていることが理解できるらしいミスさんがここにいたら、モコちゃんたちが何を話しているのかがわかったんだろうけど……残念だけど、わたしにはさっぱりわからなかった。

心なしか大きな耳がいつも以上にダラーンって垂^たれてしまっている気がするモコちゃん。

そのモコちゃんに声をかけたのは、わたしやおねえちゃんじゃなくて、モコちゃんとは反対方向にいる『スカーレット』を睨みつけていたジーンくん。ジーンくんは目の前の敵から目を離さずに背中を向けたままモコちゃんに向かって声を張り上げる。

「助かったぜ、ちっちゃいの！　よくわかんねえけど、お前『青の農村』ミスンところの奴だろ？　オレがこいつら全員ぶつ倒す！　悪いけど、後ろを……トトリたちを任せていいか!？」

「モコ……モコッ！」

ジーンくんの呼びかけに、少し悩むように……でもすぐに切り替え

たのか、元気に返事をしたモコちゃん。

「ジーンくん！ わたしもっ」

「心配すんな、もうさつきみたいにはならねえ！ オレが……オレたちがトトリも、トトリのねえちゃんも、メル姉も守ってやるからな!!」
「ジーンくん……!」

「いくぜっ!」

「モコオ!!」

掛け声と共に、ジーンくんは目の前にいる『スカーレット』の群れに向かっていった。そのジーンくんに『スカーレット』たちはまた『闇の球体』を数発打ち出したけど……

「だりやあつ!!」

走ったままジーンくんは剣を振って、それらを斬りかき消した。

そして、その勢いのまま……剣も振った流れのままに……群れへと突っ込んでいく。

グギャア!

ギギツ!

ガアア……

ジーンくんの振った剣が直撃したモンスターはすぐさま倒れていく。

……それでも、『スカーレット』たちもバカじゃなくて、何体かはすぐにジーンくんから距離を取っている。ジーンくんはその一体を追うように動き、そいつを切り裂いた。

けど、別方向に避けていた『スカーレット』は剣の届く範囲から抜け出していた……ように、わたしにはそう見えてたはずだった。

ギイ!?

グウ……ガ……

ジーンくんの剣の刃が届かない範囲まで下がっていたはずの『スカーレット』たちが、まるで斬りつけられたかのようにいきなりのけぞった。それだけじゃない。体に斬りつけられたような跡ができた

かと思えば、そこから「パキ……パキツパキツ」と凍りついてきたのだ。

でもわたし、あの『ウインドゲイザー』を作った時に「氷属性付与」の特性を付けた覚えはないんだけど……それに、付けてたとしても、あんなに凍りついたりはしないはず……。

傷口周りにできた氷の塊のせいか、それとも体を凍えさせる冷たさのせいか、『スカーレット』たちの動きは鈍っていく。そのため、マイスさんに負けないくらい素早い動きで追撃をかけてきたジーノくんの攻撃を避けることが出来ず、モロに受けてしまっていた。

「モッコモコー!!」

そんな鳴き声が聞こえてそっちの方を見ると、一体の『スカーレット』の両脚を両手で掴んで自分の身体ごとグルングルンと回転しているモコちゃんが。

グギヤア!?

ガア……

ギイッー!

その様子はまるで小さな竜巻みたいで、わたしたちの後方に現れた『スカーレット』の群れへと突っ込んで巻き込んでいった。最後には、掴んでいた脚をはなし放り投げ、遠くにいた別の一体へと勢い良くぶつめた。

さらに、いつの間にか『スカーレット』のすぐそばまで近づいていたかと思えば、アツパーで打ち上げて……モコちゃんも跳びあがつて『スカーレット』を掴み、そのまま落下と同時に地面に思いっきり叩きつけた。

……前に『青の農村』に行った時に、マイスさんが「村ではネコのが一番強い」みたいなことを言ってたけど、どう考えてもこのモコちゃんのほうが強いと思う。

そうやってジーノくんとモコちゃんが『スカーレット』を倒しているうちに、いつの間にかあと一体までになっていた。

残っていたのは、あの体が大きいボスらしき『スカーレット』。そいつが、ジーノくんと向かい合った。

グゴアアアツ!!

「見せてやるよー！ 師匠直伝の必殺技!!」

そう言ったジーノくんは、わたしでも目で追うのがやつとなくらいの連続攻撃をボススカーレットに浴びせ……一旦距離を取ったかと思えば、凄く速く突進して……

「うおおおー！ アイんツエ……うわあつ!!」

さっきまでに倒した『スカーレット』のものだろう『角』を踏んでこけた。それも、ジーノくんは持っていた剣を放してしまって、剣は空中に放り出されて……って、あれ？

ギイイヤアアアアアア!

……ボススカーレットに突き刺さった。しかも、次の瞬間、ボススカーレットを中心に一瞬で大人よりもはるかに大きい氷の結晶の山が出来て……「パキーン!!」と砕け散った。

そこに残っていたのは、ジーノくんが放り投げてしまった剣『ウインドゲイザー』だけだった……。

「あいたたた……！ あれ？ た、倒せたのか……？」

「モコツ」

前のめりにこけてしまい鼻を赤くしたジーノくんが、自分の目で見ることが出来なかったからかあんまり納得できていない様子で、確認するように言っていた。それに答えたのは、周りの敵をすでに全滅させていたモコちゃん。いつの間にかわたしたちのそばまで戻ってきた。

「……な、なんかあったのかな……？ おねえちゃんたち、大丈夫!?!」

周囲にもうモンスターの気配がないことを確認したわたしは、周囲への警戒をとおねえちゃんたちのもとへ駆け寄った。

「ええ、私は……でも、メルヴィが……!」

「いやあー、まさかトトリとあのジーノ坊やに助けられる日が来るとは……長生きはするものねえ」

そういつもの軽口の調子で言うメルお姉ちゃんだけど、その顔も、腕も、脚も……身体のあちこちが赤く染まっている。どう見ても無事ではなかった。

「わああっ！凄いい血が！ 死んじやう！ メルお姉ちゃんが死んじやう！！」

「死にやしないわよ、この程度で……あーでも色々限界。ちよつとだけ寝かせて……」

メルお姉ちゃんはそういうけど、大変な状況だとわたしは思った。

だって、メルお姉ちゃんの身体には、致命傷と言えるほど深い傷は見当たらないものの、さつきから言っているようにあちこちに沢山傷を負ってしまってる。そのせいだと思うけど、地面に広がっている血の量から見積もって、どう考えても血の流し過ぎだった。

「ダメー！ 目を閉じちやダメー！！」

「メルヴィ？ やだ、しつかりして！ メルヴィつてばー！」

「……だ、大丈夫だって。だからちよつと揺すらないで……体に響く……」

早く止血をしないと……これ以上血を流してしまったら、本当に寝たまま二度と起きなくなっちゃう！！

でも、爆弾が底を尽きたように今のわたしのポーチの中はお薬も残念な状態で、とてもメルお姉ちゃんの全身の傷を治して塞いでしまえそうにない……どうすれば……!?

その時、メルお姉ちゃんを薄緑色の光の流れが包んだ。……ううん、メルお姉ちゃんだけじゃない。わたしやおねえちゃんも、それぞれ薄緑色の光の流れに包み込まれたのだ。

「きやー!」

「なに？ なんなの!？」

わたしもおねえちゃんも驚き慌てたけど、薄緑色の光はほんの数秒ですぐにわたしたちの周りから消えた。

「トトリちゃん、大丈夫!？」

「う、うん。たぶん何ともないと思う……って、あれ?」

とりあえず自分の身体に何かあったか確認しようと、身体に目を走らせていたんだけど……その途中にチラッと見えたメルお姉ちゃんに違和感を覚えた。

「メルお姉ちゃんの怪我……治ってる?」

「えっ、ウソ」

ううん、間違い無い。相変わらず血まみれのままだけど、そこには傷らしきものは見当たらない。実際に触って確かめてみたけど、手に血はつくけどメルお姉ちゃんの肌はどこもツルツルしてた。

「ん……んんんっ! 静かになつてくれたのはいいけど、ベタベタ触られると寝てられないんだけど……あら? まだちよつとフラフラするけど、身体が痛かったのはなくなってる?」

「治してくれるの早いね、ありがとっ」なんてメルお姉ちゃんは言ってくれたけど、わたしは何もしていない。

いったい誰が……。というか、いったい何が……?

そう思ってたあたりを見まわしてみたけど、目に止まったのはジーノくんだけだった。……いちおう聞いてみることにした。

「……もしかして、ジーノくんが何かしたの?」

「いや? オレはなんにもしてないぞ? たぶんアイツだって」

肩をすくめて首を振りながら、ジーノくんはそう言った。

「あいつ?」

「ほら、あのちっこいのだよ! アイツから変な光が出たの、オレは見ただ。……今は、もうどっか行っちゃってしまってるみたいだけどさ」

ジーノくんにそう言われて周りを見てみたけど、確かにジーノくんが「アイツ」と言ったモコちゃんはどこにも見当たらなかった。

色々ど気になるけど、もう絶対に『スカーレット』が現れないと決まったわけじゃなかったから、とりあえずこの場を後にすることにした。

わたしとおねえちゃんて、怪我は治ったけど本調子じゃないメルお姉ちゃんに肩を貸し、唯一戦えるジーノくんが護衛として付き、わたしたちは『アランヤ村』へと帰っていく……。

5年目：マイス 「お説教と……あの噂」

マイスの家

雲一つ無く晴れ渡る青空。

今はすでにお日様は昇りきって青空になっているけど、早朝は、昇り始めた朝日によって生み出された夜から朝へ変わる色のコントラストがとても綺麗な空だった。そんな空の下でやる畑仕事は爽やかで、普段よりもとても作業がはかどった。

空だけじゃなく、いろんな要素が今朝は良かった気がする。作物を揺らす風は強すぎず心地よくて、気温も寒くなく暑くもなく……井戸水はちよつと冷たかったけど。

これからは日が出てきたらすぐ暑くなってくるだろうから、今日みたいな日は十分無いと思うと少しだけ憂鬱な気もする。まあ、夏は夏で色々いいことはあるんだけど……。

「——だというのに……聞いているのか？」

ピクピク動いているステルクさんのコメカミ……って、これは今朝のことじゃなくて、今、目の前で起きてることだっ!?

僕は慌てて姿勢を正して首を振る。

「えつと、途中から聞いてませんでした！ だいたい、「そもそもキミは、先に一人で行った目的をわかっていたのか」あたりから……」

「……素直に言ってくれるのはありがたい。しかし、ちゃんと聞いてもらいたいかったのだが？」

「そうは言っても、そこから先はそれまでの繰り返しの愚痴だったし……」

「……確かに、愚痴っぽかったというのは否定できないが……しかしだな、そもそもその原因はキミなんだぞ？」

ひたいに片手を当ててため息をつくステルクさん。

……でも、そう言われてしまうと、僕としては素直に聞くことしかできない。だって、ステルクさんの言う通り、僕に非があるのだから。

「いちおう、私が注意しておきたかったことまでは聞いていたようだが……確認までに、自分が何故怒られたのか、言ってみてくれ」

『アランヤ村』に着いてすぐに一人で村を飛び出して行ったことと、その時と帰って来た時に誰かにちゃんと行って連絡してなかったから……ですよね？」

今、僕がステルクさんに怒られているのは、昨日のスカレットの群れの一件の事だ。

そもそも僕は、いち早く村に行つて村の人たちに少しでも安心してもらい、なおかつ最悪の事態に備えて村の防衛の準備をしておくために、一人で先に『アランヤ村』に行っていた。なのに、僕はそれらの事を放り投げてスカレットの群れがいる外へと飛び出してしまったのだ。

さらに、出ていく時はパメラさんとピアニヤちゃんに会つただけで、外に行くとも言つておらず……外にいたトトリちゃんたちの所に駆けつけ『スカレット』たちを倒した後は、ちよつとした事情からそのまま一人で村に帰つて、それから出発の時にピアニヤちゃんたちとしていた約束の通り『パメラ屋さん』に行つて買い物をして、店を出るとちよつとトトリちゃんたちが帰つて来てて、そこでちよつと話してから『青の農村』に帰つた……。

うん、冷静に考えれば問題だらけだ。ステルクさんが怒つて当然だと思う。

だから、こうして怒られて……

「……後半だけだ」

「えっ」

「前半の村を飛び出して行ったことは、状況が状況だけにキミを咎めるつもりはあまり無い。聞いたところによると、結局は外にいたトトリたちとは合流は出来なかつたらしいが、それでもキミが他の場所彼女で『スカレット』を殲滅したおかげで彼女たちのもとへ向かう『ス

「カーレット』は滅つただろう」

「だから、そちらは強くは非難はしない」と言つて小さく頷くステルクさん。

そう。村を飛び出した後、トトリちゃんを追いかけるために金のモコモコの姿に変身した僕は、「飛び出したはいが何処どこにいるかがわからず、とりあえず『スカールレット』たちを倒しまくつた」……という扱いになった。「マイス僕＝金モコ」という事実を隠している以上、そういうことでもしていないとマズイのだ。

「だが、誰かに言伝をしておいたりしてまともに連絡をしていなかったのは大問題だ。私たち討伐隊が村に行っても、村の人はキミを見ておらず、一緒にいたロロナ彼女君がたまたま様子を確認しに行った『パメラ屋』で、キミが来ていたことをやっと知れた」

目をつむり腕を組んでいるステルクさんだけど、話しだすにつれて段々と口調が強くなっていき、喋るのも早くなっていく。

「……かと思えば、いざ討伐隊を動かしてみてもキミ以外とは会えてもキミは見つからず。スカールレットの群れの討伐を終えても見つからないからと、一度『アランヤ村』に戻つて体勢を立て直してからキミを探すために再び討伐隊を動かそうとしたら、すでに一人で帰つて来ていて、それどころかすでに『青の農村』に帰つてるとききた……一体、何を考へてるんだ!？」

「ごめんなさい」

僕は、謝ることしか出来なかった。言い訳をしようにも、完全に僕が悪いから何も言えないからだ。

『アランヤ村』の誰かにちゃんと言つておこうなんて考えは全く思い浮かんでいなくて、そのまま勝手に行動してしまつたのも僕の失敗だ。さらに、村の外で討伐隊の誰にも会わなかったのは僕が金モコの姿のまま隠れて通り過ぎたからで、『青の農村』に勝手に帰つたのも「家のこと、フィリーさんとリオネラさんに任せただけ、日が暮れてからも任せておくのは悪いよね」と、傾きはじめて太陽を見て「早く帰らない」と思つた個人的な理由からだ。

……でも、これって振り出しに戻っただけで、またお説教&愚痴を言われる時間に戻るだけなんじゃ……？

そう僕は思っただけけど、それは杞憂に終わった。

「ハア……。まあキミは、どこかズレていたり抜けていたりはあるが、話を聞かない人間では無いと思っている。今後はこういった事が無いようにしてくれ」

「は、はい！ 気をつけます」

僕はステルクさんの言葉に返事をしつかりとして、頷いてみせる。

それに満足したのか、ステルクさんも小さく頷いて、「では」と玄関のほうへと向かおうとする……。

「えつと、もう帰るんですか？ もしよかつたらお昼ゴハンでも……」

「気遣いはありがたいが、遠慮しておこう。もう一人、じっくりと話をせねばならない奴がいるからな」

「えっ？」

「うちの馬鹿弟子だ。どうやら、あの少女とは上手くいったようだが……アイツにはキミ以上に言っておかなければならないことが沢山あるからな」

「馬鹿弟子って……」

それに該当するのはジーノくんだけなんだけど……「馬鹿」ってヒドイ言われようだ。

でも、トトリちゃんとは上手く仲直り出来たみたいで良かった……。

ジーノくんといえば、ウチの『作業場』から剣を持って行ったのは、やっぱりジーノくんだったみたいだ。トトリちゃんたちを守るように戦っていた時に彼が手に持っていたのが僕の強化した『ウィンドゲイザー』だったから間違い無い。

ジーノくんが集めてくれた素材で強化してみたらトンデモ性能になっちゃったから、色々と心配だったけど、とりあえずは無事に使いこなしてくれていたから一安心した。

一回強化するたびに実際に使ってみて『ウインドゲイザー』の性能の変化を確認していたから、「何を使ったからこうなった」といった素材ごとの強化に使った時発揮する効力は大体把握できてる。

中でも突拍子のなかった物は、ジーノくんが持つてきた素材のうち僕も見たことの無い、「片手に収まるサイズの黒くて丸い塊」と「縦長な薄茶色の結晶」。

「片手に収まるサイズの黒くて丸い塊」は、一回前に強化に使った『樹氷石』によつて付与された氷属性と魔法攻撃力……その十倍近いチカラが何故か付与された。おかげで、「斬った傷口周辺から冷えていき動きを鈍らせる」程度だった氷属性攻撃が、「斬った傷口から氷が生えるように発生し、こめた力によつては対象および周囲をカチコチに凍らせる」程度のものとなつてしまった。

……一個しか無くて、一度の例しかないから断言はできないけど、おそらく前に強化に使った素材の何倍ものチカラが付与される素材だったんだと思う。

「縦長な薄茶色の結晶」は、ただ単純に剣で斬れる範囲が伸びただけだった。

……いや、それ自体おかしいんだけどね？ いやだつて、剣が長くなつたわけじゃなく、振つたら斬撃が飛ぶとかじゃなくて、剣の切っ先の延長線上の何も無いはずの空間で物が切れるようになったのだ、おかしいと言わずに何と云えばいいんだろう？

なお、何も無いのに切れる距離は、剣の切っ先から三十センチほど。さつきは違ふと否定したけど、「遠距離攻撃」というよりも「剣が長くなった」ような感覚だった。

他の強化に使った素材たちは、剣そのものの強度や攻撃力を強化したり、装備者の身体能力を強化するような効果があった。

竜から取れた素材なんかは一回の強化でかなり強くなつただけど……正直、「片手に収まるサイズの黒くて丸い塊」と「縦長な薄茶色の結晶」が異常過ぎてそこまで凄いととは思えなかった。……感覚がマヒしちゃつてるかなあ？

なにはともあれ、ジーノくんの『ウィンドゲイザー』は上限十回の強化を終えて、「斬れる範囲が妙に長く、斬ったものをカチコチに凍らせ、装備者の基礎能力を底上げする剣」となったわけだ。

僕が強化したのでモンスターを『はじまりの森』にかえす『タミタヤの魔法』はかかっているから、モンスターが大変なことになることはまず無いんだけど、気をつけないと人は少なからず影響を受けるから、一歩間違ったら大惨事になりかねない。いちおう、気をつければ氷属性攻撃は抑えることはできるけど、対人戦では使わないほうが良いと思う。……強くなるための武器強化がとんでもないことになってしまったものだ。

そんなわけで、ジーノくんが『ウィンドゲイザー』でトトリちゃんに再戦を挑もうとしてるなら、僕は責任を持って止めないといけない。

まあ今さつきのステルクさんによれば、幸い、トトリちゃんとジーノくんはスカーレットの群れの一件で仲直りというか和解はできたみたいで、二人が再び戦うことは当分無いと思う。

だから、あえて気をつけるところといえば……

「ステルクさん、ジーノくんと試合をする時は気をつけてくださいね……っ」

「ん？ ……どういうことだ？」

よくわからない、といった様子で首をかしげるステルクさん。

とは言っても、特訓に付き合ったりするステルクさんは……たぶん大丈夫だろう。あの人は「剣の力だけで勝てると思うなっ！」なんて言いながら対処すると思う。むしろ、熱くなっただけでこれまでよりも厳しくなり、熱くなりすぎて本気を出しちゃったりするかもしれない。

僕は……え、ええつと、『ウィンドゲイザー』尖った性能になっちゃったし、今度、何かもつと使いやすい普通の剣をジーノくんにプレゼント使用かな？ あは、あははははっ……。

「ああ、私からもキミに言っておくことがあった。……私と一緒に『アランヤ村』に行つた彼女も、キミの事を心配していた。一度顔を出しに行くといい」

最後にそう言つて、ステルクさんは僕の家から出ていった。

彼女……ああつ、きつとロロナのことだろう。討伐隊を編成した後
の『アーランドの街』から『アランヤ村』への移動は、ロロナの手を
借りるつて言つてたから間違い無いと思う。

となると、ロロナも僕がいないつていう場にいたわけで……ああつ
……絶対すごく心配させてしまつてる気がする。

すつごく昔の話だけど、僕が行つたはずの採取地に僕がいないつて
ことですごく心配してたことがあつたし……。そういえば、あの時も
僕は金のモコモコの姿に変身してたんだつけ？ それで隠れてたん
だけどステルクさんに見つかつて、一心不乱に逃げ出して……あれが
金モコ状態で人前に出ちゃつた初めての時だつたつけ。

とりあえず、ステルクさんの言う通りロロナのアトリエに顔を出し
に行こう。

「うーんと……『パイ』を作つて持つて行こうかな？」

機嫌取りつて言えば機嫌取りなんだけど、心配をかけちゃつたお詫
びの意味も込めて用意するのが良い気がする。……うん、そうしよ
う。

マイスの家・キッチン

「よし……つと。あとは焼きあがるのを待つだけだね」

オーブンを閉じ火を入れた僕は、ひと息ついた。あとは少し待てば
『ロロナのアトリエ』に持つて行く『アップルパイ』が完成する。

……一瞬、鍊金釜をぐるぐるして『鍊金術』で調合作しようかと
も考えてしまつたけど、普通に作ることにした。

僕は、オーブンの中の生のパイを眺めながら、昨日のスカレットの一件を思い出した。

何処に行ったのかわからないトトリちゃんたちを追いかけるためにした金のモコモコの姿への変身だったけど、実のところ別の理由もあつて変身していた。

それは『スカレット』たちへの説得だ。村を襲おうとしたわけじゃなく、ただ単に近くを通っていただけなのであれば、すぐに移動してもらって争わずに済めば……そういう思いが少なからずあつたのだ。

実際のところは、僕が駆けつけた時点でトトリちゃんか誰かが『スカレット』を何体も倒してしまっていて、『スカレット』たちの頭に血がのぼっていたのと、駆けつけた時にトトリちゃんたちの後ろから襲いかかっているのが見えてつい僕も攻撃してしまったりしたら、『スカレット』たちが話しを聞いてくれる可能性は凄く低かった。

けど、何も言わずに倒す気にはなれず、僕は『スカレット』たちの説得を試みよるとしたんだけど……怒りを露わあらにしながらも二体の『スカレット』が以外にもちやんと言葉を返してした。

「グキヤアア！（うるせえ！）」

「ガアア！ グガガガギヤア！！（言うこと聞かねえよ！ 住処すみか奪った奴らのお!!）」

その『スカレット』たちの返答に、僕は驚きを隠せなかった。詳しく聞こうとしたけど、それ以降彼らは殺気と敵意しか向けて来なくて話してくれそうにも無かった。

住処を奪った!? でも、僕はそんな事をした憶えは無かったし、『スカレット』の群れを追いつ出すような開発をアーランドがしていると聞いたこともなかった。

けど、すぐに僕自身の間違いに気がついた。その時、僕は人じやな

くて金のモコモコだった。つまり、彼らを追い出したのは人間ではなくてモンスターだったということ。

最初は、四足歩行だけど毛のモジャモジャ感とその色が似ているヤギ系モンスターの『黄金羊』との縄張り争いに負けたのかと思っただけ……こうして家に帰って来てから、ある事を思い出した。

『サンライズ食堂』で、昔からのメンバーで食事をしたあの時。

ジオさんが支援物資の協力をお願いしに来たあの時。

それ以降にも度々話には聞いていた噂……

「新種のモンスターが現れて、縄張り争いが起きてモンスターたちの動きが活発化してる……だったっけ？」

腕のいい冒険者が、これまで誰も言ったことの無い採取地の奥地へと行くことで、新種のモンスターが発見されるということは多くは無いは言っても、これまでに何度もあったことだった。

そういったモンスターたちが奥地から出てきて縄張り争いが勃発しているのかと思い、これまで噂のことはそこまで気にしてはいなかったんだけど……

「……もしかして、そういうことなのかな？」

ある可能性を考えて、僕はそう呟いた。

……当然だけど、その呟きに答えてくれる声は無く、僕の耳には『アップルパイ』が焼けてき始めた音だけが入ってきていた……。

5年目：マイルス「トトリちゃんのおしやべり」

マイルスの家

「マイルスさん、聞いてくださいいよ！ 先生がヒドインですつ!!」

そうちよつと怒った様子で僕に言ってきたのは、僕がギルドから資料を借りてきてとある調べ事をしていたところに、ついさつき家ウチに駆け込むようにして来たトトリちゃん。

僕は、用意して来た『香茶』をソファアに座っているトトリちゃんの前に出しながら、トトリちゃんの言う「先生」……つまりはコロナの事を思い出した。

コロナが「ヒドイ」って言われても、僕はなんだかしっくりこない。いつものんびりほわほわなコロナだし、何か失敗なんかはしても「ヒドイ」って人に言われたりするようなことをやったりはしないはずだ。このあいだ『アップルパイ』を持って行って様子を見に行つた際も、勝手な行動をした僕を叱しかつてきたりはしたけどそれ以外はいつも通りのコロナだったから、何か変なことになったりはしていないと思う。

他に考えられるとすれば……

そういえば、前にコロナのことでトトリちゃんに相談されたことがあったような……？ 確か、あの時はコロナに貰った『錬金術』の参考書が『パイ』のレシピだったとかで……

「あはははっ。もしかして、何か変な『パイ』のレシピでも渡された？

『エリクパイ』とか『金パイ』とか

「えっ！ なんですか、それ」

「ううん。違うんならそれでいいよ」

「はあ……っ」

何のことかさっぱり様子で首をかしげるトトリちゃん。

それでいいと思う。『エリクパイ』も『金パイ』も、僕は話でしか知らないんだけど、それだけでもおかしなものだというのは嫌というほどわかってた。だから、そんなのをトトリちゃんに作らせるのは、

さすがに気が引ける。

……そういえば、空から星や『うに』を降らせるアイテム『メテオール』をぶち込んだという謎のパイ『パイメテオール』っていうのもあったらしいけど……パイを降らせるという意味不明の効果があるかどうかとか……。

まあ、とりあえず気を取り直して、僕はトトリちゃんに改めて何があつたのかを聞くことにした。

「そうじゃないとしたら……コロナは何をしたの？」

「先生、自分のお友達なのにパメラさんを生け贄にいにしようって言うんですよ!? ヒドイと思いませんか!?!」

「へえ、パメラさんを生け贄に……生け贄!?!」

生け贄つとって、あの生け贄つとだよな? それって、死んでいるパメラさんに務つとまるものなのかな?

「そうですねっ! やっぱりマイスさんでもヒドイって思いますよね!?! お願いです、先生を止めるのに協力してください!!」

いやいや、色々と驚きなのは確かだけど、なんて言うか「ヒドイ」とはちよつと違う感想っていうか……どうしてこんなことになっているんだろう?」

でも、その疑問はすぐに解けた。

そういえば、『アランヤ村』で過こしているパメラさんは、幽霊じゃなくてちゃんとした身体を持っていた。僕は詳しくは知らないんだけど、確かアストリッドさんが作ってあげたんだっけ? それにコロナも関わっていたらしく、僕は前にそのコロナから話をちよつとだけ聞いたことがあつたから思い出せた。

……でも、トトリちゃんはそのパメラさんが幽霊だつてことを知らないみたい。この様子だと『アランヤ村』の人たちはみんなそうなのかも?

「……となると、止めるかどうかは置いといても、コロナに説明不足だつてことも含めて一回三人で話したほうが良さそうかな? でも、その前に……」

色々考えていて、少し首をかしげながらうつむき気味になっていた僕は、顔を上げてトトリちゃんのほうを見た。

「えっと、それで……………生け贄って、何のこと？」

僕がそう言ったところで、僕とトトリちゃんがいるこの場の時間が止まった…………。そう思えるほどの静けさが部屋を満たしていた。

そんな沈黙が一分満たないくらいの時間があつた後、先に動いたのはトトリちゃんだった。

「…………そういえば、前回ここに来た時にマイスさんが留守でいなかったから、あの事話せてなかったんだった…………」

「あの事？」

僕が聞き返すと、トトリちゃんは「はい」と言つて頷き、話し始めた。

「実は、ピアニヤちゃんがわたしたちに付いてきちやつた理由に關わつてくるんですけど…………」

「…………なるほど。そういうことだったんだね」

トトリちゃんから説明を聞き終えた僕は、納得して一人頷いた。

『あ最果ての村』から見えた『塔』に『悪魔』が封じ込められて、何十年かに一度出てきてしまう『悪魔』に食べられたくないからピアニヤちゃんはこつちに来て…………。それで、ピアニヤちゃんや村の人たちのために『悪魔』を倒したいけど、外から『塔』に入るには生け贄を一人差し出さないと扉が開かない…………かあ」

「はい。でも、村の人たちを助けるためとはいえ、誰かを犠牲にするなんて絶対したくないし…………それで先生に相談してみたら、パメラさんを生け贄にするって言いだしちゃって…………」

「それで最初の話に戻るわけだね」

ようやく、僕の頭の中で今回の話の一本の道筋ができた。

それにしても、ギゼラさんを探す冒険で『最果^あの村』にたどり着いた時、マークさんが『塔』に行ったって言ってたけど、その時言ってた「しつかりと閉ざされていた扉」のカギがまさか生け贄だったとは。危険な『悪魔』を封印しているだけに、製作者側からしては簡単には開けさせたくなかったんだろう。

でも、いつ出てくるかわからない『悪魔』を倒すには、こっちから扉を開けないといけないわけで……それで生け贄が必要になって……

「でも、もう死んでるのに、生け贄になるのかなあ？」

「へっ？　もう死んでる……って、どういう？」

「うん。それは今度パメラさんに会った時に本人に聞いてみて。僕が説明してもいいんだけど……やっぱり実際に見てみないと信じられないと思うから」

今のパメラさんは何をどうしたのかはわからないけど、普通に生きている人とかかわらないから、僕の口から「実は幽霊なんだー」って言ったところで信じられないだろう。前みたいに浮いたり、透^すけたり、すり抜けたりしてれば、すぐに信じられると思うけど……。

でも、よくよく考えてみれば、そのあたり以外は普通に陽気なお姉さんって感じなんだよねえ。

「ということとは、この前家^{ウチ}に来たのは、生け贄の事を相談するためだったのかな？」

「あつ、はい。それと、できれば『悪魔』を倒しに行くのに、一緒に来てもらえないかなーって……」

「もちろん、トトリちゃんからの頼みであれば手伝うよ！　……まあ、ちよつと今後の予定と相談しなきゃいけないんだけどね。だから、大体の日にちを教えてくださいければ問題無いよ」

「ありがとうございます！　えっと、予定ではもうすぐ……だったんですけど、こないだの『スカーレット』のことでお姉ちゃんを不安にさせちゃったから、少し『アランヤ村』にしようかなって」

そこまで言ってトトリちゃんは「それに……」と言葉を続けた。

「今度、村でお祭りがあって、そのお手伝いをしないといけないから……『塔』に行くのはその後になると思います」

「お祭り？ 『アランヤ村』ってお祭りがあるの？」

『アランヤ村』にはそこまで頻繁に行っているわけじゃない。だから、これまでにお祭りをしているような様子に出くわしていない可能性もある。……けど、トトリちゃんたちはもちろん、前に家^{うち}に来ていたギゼラさんからもお祭りについては全く聞いたことが無いのはさすがにちよつと不思議だ。

だから、そういった疑問もこめてトトリちゃんに問いかけてみた。「あつ、はい。わたしも知らなかったんですけど、昔はやってみたいですよ。それが復活して開催するってペーターさんが言っていました」

トトリちゃんが言う「ペーターさん」っていうのは、『アランヤ村』で馬車の御者をしている男性だ。トトリちゃんのお姉さんのツイェツイェさんやメルヴィアと同年代で幼馴染……だったはず。

「はず」だとか、全体的に情報が少ないのは、ただ単純に僕がペーターさんと関わりが少なかったから知らないだけだったりする。

というのも、僕が初めて『アランヤ村』に来た時はツイェツイェさんとメルヴィアの後ろについて行く……というより、メルヴィアに引張られてる子ってイメージだった。そして、トトリちゃんが冒険者になつてから僕が『アランヤ村』に時々立ち寄るようになってからはといえば、僕が行きは人or金モコ状態の徒歩で、帰りは『リターン』の魔法で移動していたため、馬車を使う機会が無くてやっぱり関わりが無かった。

……いや、いちおう滞在している時に挨拶くらいは交わしたりしたけど、何故かペーターくんが僕を避けている気がするんだよね……。何故か嫌われてるっていう意味では、マークさんが似たような感じだったけど、マークさんと違ってペーターくんから避けられる理由が全く見当がつかない。

まあ、そんなこんなでペーターくんのこととはあんまり知らないのだ。

「それにしても、『アランヤ村』でお祭りかあ……ねえねえ、どんなこととするの?…」

「それが、ペーターさんが教えてくれなくて……名前は『豊漁祭』で、あと……あつ、そうだ!…」

トトリちゃんが何かを閃いた様子で手を叩く。

「実はペーターさんに頼まれたことがあって……人を集めてくれって」

「人を?…」

「はい。祭りで何かするみたいで、そのために「若くて美人の女の人を八人集めてくれ」って言われて……それで、そのことで相談が……」

そうトトリちゃんは、ちよつと申し訳なさそうに僕にその相談を打ち明けてきた。

「若くて美人の女の人……心当たり、ありませんか?…」

「ええつと………参考までに聞くけど、これまでに集まったのは?…」

「おねえちゃんとメルお姉ちゃん、パメラさん。あと、ロロナ先生、ミちちゃん、クーデリアさん、フィリーさん……です」

「七人つてことは、あと一人足りないんだね。……にしても、見事に僕の知ってる面々だなあ」

『アランヤ村』のお祭りなのに、半数以上が村の外の人つて……大丈夫なんだろうか? 記憶にある限りじゃあ、『アランヤ村』には普通にツエツイさんたち以外にも女の人はいたと思うんだけど……他の準備とかで忙しいから外からも人を集めようとしてたりするんだろうか?…」

若くて美人の女の人、か……

『青の農村』には結婚してる子してない子、どっちの女の子もいるけど……さすがに行つたことも無い、知り合いもない村のお祭りに出してくれる人はいそうにないかなあ」

「わたしだけじゃなくて、ミスさんも一緒をお願いしてくれたら……」

「せめて何をするのがわかってたら、僕も誰かに勧めたりできるんだけど……そこがわからないじゃ、ちよつとね」

「あははは……ですよねー」

がつくりと肩を落とすトトリちゃん。だけど、言ってることからすると、この僕の返答はなんとなくは予想していたみたいだ。

トトリちゃんには悪いけど、さつきも言った通り、何もわからないお祭りに無理矢理参加してもらうっていうのはさすがにできない。

そう考えると、やっぱりトトリちゃんの知り合いで、なおかつ『アランヤ村』に行つた事のある人がベストだろう。せめて、後者はともかく前者の方……トトリちゃんの知り合いだということはほとんど必須条件になるんじゃないかと。となると……

「あつ、リオネラさんには声をかけてみた？ 人混みはまだちよつと苦手みたいだけど、『青の農村』のお祭りには何度も来てくれてるし、お祭り自体はほとんど問題無いと思うよ。それに、ロロナやフィリーさんが行くつてなってるんなら、たぶん断らないんじゃないかな？」

それに、何をするかはわからないけど、リオネラさんにはホロホロとアラニーヤとの人形劇があつてお祭りを盛り上げることもできるから、いたら心強いんじゃないかなーって思ったんだけど……。

「えつと、実はリオネラさんにはもう声はかけてみてたんです」

「あれ？ そうだったの？」

「マイスさんの言う通り、先生とフィリーさんの名前を出したら行きたそうにしてくれたんですけど……その、お祭りの日の午前中に続き物の人形劇の公演の予告をもう出しちゃつて、今からそれを取り下げるのは心待ちにしてくれているお客さんたちに申し訳ないから予定は変えられない……つて」

「なるほど。それは仕方ないね」

きつかけはともあれ、長い間ホロホロやアラニーヤとやってきている人形劇だからこそ、真剣にしつかりと向き合つてやっていきたいって気持ちがりオネラさんにはあるんだろう。

でも、聞いたところでは『豊漁祭』自体には興味があるみたいだ。きつと人形劇の予定さえなければ、トトリちゃんの頼みの対し領きお

誘いに乗っていたんじゃないかな？ だとすれば、『豊漁祭』にはお客さん側でも参加できたほうが良いと思う。

「なら、僕は人形劇を終えたりオネラさんと一緒に、『トラベルゲート』を使って『豊漁祭』に行ってみようかな？ 個人的にも興味があるし」

「それでも、いつになるかわからないから、リオネラさんを人数に数えられませんか……。ああつ、あと一人どうしよう」

「悩ましそうに大きなため息をつくトトリちゃん。」

僕としても、何とかしてあげたいところだけど……。やっぱり何をするのかがわからないっていうのがネックになってしまう。

「じー……」

「ん？ どうかした？」

「美人かどうかは微妙だけど、カッコイイっていうよりはカワイイ感じで整ってて、目もパツチリしてて、まつげも長くて……。腕とかもそんなに太くないし……」

「な、なんだかわからないけど、トトリちゃんが僕の事をジロジロ見ながら、何かブツブツと言いだした。」

そして……

「マイルスさんって、若くて美人さんですよね？」

「それって、女の人って話だったよね!? 僕は男だよ!」

「でも、服を変えて、ちよつとお化粧したら行けると思えますよ？ マイスさん、童顔ですし」

「でも何も、そこはどうしようもないよ……」

女装とかそんな話に持っていかれるのはさすがに遠慮したいから、困っているトトリちゃんには悪いけど、僕はこの話題はもう切り上げてもらおうことにしよう。

……未だに「えー……」と残念そうにしているトトリちゃんに嫌な寒気を感じつつ、僕は逃げるようにして新たな『香茶』を淹れにキッチンへと向かうのだった……。

「あつ、マイスさんにもう一つ聞いておかなきゃいけないことがあったんだ！」

「……なんだか今日は、いろんなことを聞かれるね」

まあ、そういう日があってもおかしくはない。それに、頼られたりするこゝ自体は僕はむしろ嬉しいことで大好きだ……無理難題じゃなければね？

そう思いながら、トトリちゃんの口から出てくる次の言葉を待ってただけど……

「この前わたしたちを助けてくれたモコちゃんに、近々ちかぢか会いに行こうって話になって……モコちゃんって、『アランヤ村』の近くとか『アーランドの街』でも見かけますけど、普段どこにいるんですか？」「えっ!? ……ええつと何かお礼とかなら、僕が伝えたり渡したりするよ」

「いえ、おねえちゃんたちが直接お礼が言いたいって言ってるんで……それに、やっぱりわたしもモコちゃんにちゃんとお礼をしたいですからっ！」

そうイイ笑顔で言うトトリちゃん。

……これは観念するしかないだろう。

大丈夫、昔、フリーリーさんやリオネラさんが遊びに来たときにやっていた要領で、トトリちゃんたちを家で待たせて僕が外のどこかで変身してくればいい。それでなんとかなるはずだ。

あとは、僕がボ口を出さないように注意すればいいだけだからね。

うん、問題無い、問題無い……問題無い、よね？

少し不安に思いながらも、「いつツエツイさんたちが来てもいいように準備しておこう」と心の中で決めた僕だった。

5年目：トトリ「いつも通りの『青の農村』」

青の農村

「こうして来たってことは、やっぱりあの子も『青の農村』に住んでる子なのかしら？」

「それが、違うみたいで……。マイスさんが「いるように言っておく」って言ったし、普段はあちこちに行ってるらしいから『青の農村』に住んでるってわけじゃないみたい」

「ふうん、そうなんだ。まっ、青い布巻いてたし『青の農村』の子だつてのは間違いないだろうけど」

おねえちゃんの問いに答えたわたしの言葉に、メルお姉ちゃんが相槌を打つ……。そんな事をしながら、わたし達は並んで歩き『青の農村』へと足を踏み入れた。

「……で、どこにいるのよ？ モコちゃんっていう例の金色のモンスターは？」

そう。メルお姉ちゃんが言う通り、今日わたし達が『青の農村』に来たのは、『アランヤ村』の近くまでスカーレットの群れが来たあの時にわたし達を助けてくれたモコちゃんに会うため。

あの時はお礼も何も言えなかったから、わたしもおねえちゃんたちも一度ちゃんと会ってお礼を言いたかったのだ。

それで、そのモコちゃんがどこにいるのかって話だけ……

「たぶんマイスさんのところに……。あつ、でももしかしたら村の中をウロウロしてるかも？ 落ち着いてるってイメージがあんまり無いし……」

「なら、途中で誰かに聞いてみたりしながら、マイスの家を目指せばいいんじゃない？」

「そうね。もしかしたらその途中でバッタリ会うかもしれないし」

メルお姉ちゃんの言葉に頷いたおねえちゃんが、そう言って「じゃ

あ、行きましょ?」と続けた。

……と、畑や畑に囲まれたお家に挟まれている村の中の道を歩いていると、向かっている方向から大きな荷物を背負った人がコツチに来ているのが見えてきた。

見えてきたその顔はわたしの知っている人だった。

その人はコオルさん。わたしが初めて『青の農村』に来た時に会ってから、ここに来るたびに何度も会っている人で、お友達……ってほどじゃないけど、こうして会っては世間話をしたりするくらいの仲になっている。

『青の農村』を拠点にして活動しているけっこう大手の行商人さん……らしいけど、わたしにはそんな印象がなくて、普段の村の運営とかお祭りとかをまとめている「村の偉い人」ってイメージが強いかなあ?

なんていうか村長のミスさんを差し置いて、実質の村のナンバーワンな気がする。それに、時々突拍子の無いことをするミスさんのブレイキ役っていうイメージも……ちゃんと抑え^{おさ}きれてない気がするけど。

「こんにちは、コオルさん。お出かけですか?」

「おうっ、トトリか。ちよつと街の奴と新しい取引があつてさ、それでちよつとな。……と、そつちにいる二人は、確か前にも『青^ウの農村^チ』に来てたよな?」

そう言つてコオルさんが目をやったのは、おねえちゃんとメルお姉ちゃんのほう。

そういえば、おねえちゃんたちとちゃんと会つたのは初めてだった気がするから、せつかくだし紹介しておいた方が良いよね?

「えっと、こつちがわたしのおねえちゃんで、こつちが幼馴染で村の先輩冒険者のメルお姉ちゃん。……で、おねえちゃん、メルお姉ちゃん、この人は『青の農村』を拠点に行商人をしてるコオルさんだよ」

「はじめまして、ツェツィーリアです」

「どうもー、メルヴィアよ」

軽く頭を下げて挨拶をするおねえちゃんと、手をヒラヒラさせて挨拶をするメルお姉ちゃん。

それに対して、コオルさんは二カりと笑って二人へ向かって話しました。

「ああ、よろしく。紹介してもらった通り、オレはコオル。トトリにはウチのお祭りに参加して盛り上げてもらったり、ウチの村長を連れだしてくれたりしてもらって、ずいぶん世話になってる」

「あの……お祭りのほうはともかく、村長のマイスさんを連れだすのはご迷惑になっていないんですか？」

コオルさんの言っていたことが気になったんだろう。おねえちゃんが、ちよつと不安そうにコオルさんに尋ねた。

聞かれたコオルさんはいええ……困ったように笑いながら首をすくめていた。

「それがそうでもないんだよな、これが。アイツの場合、程よく休めばいいのに普段からずーつと働かし、祭りの準備でも人の仕事を取ってしまいかねないくらい働こうというからな。アイツのチカラは心強くはあるし色々頼ってる部分はあるんだけど、働き過ぎられるとそれはそれで困ったことになるんだよ、いろんな面でな」

そう言って「ハアア……」と深いため息をついたコオルさん。

説明を聞いてもおねえちゃんとメルお姉ちゃんには、具体的にそれがどう問題になるのかわからなかったみたいで、少しか首をかしげてしまった。前にそのあたりのことを聞いたことがあるわたしはいええ、「あははは……」となんとなく笑っておくことしかできなかったよ……。

「そういうえば、トトリたちは何の用で来たんだ？ またマイスか？」

「マイスさんって言えばマイスさんかまだけど、正確にはモコちゃんに用があつて……それで、前に来た時にマイスさんにモコちゃんに会えるようお願いしてたんです」

わたしがそう言うと、コオルさんは納得したみたいで「ああ、なる

ほど」と頷いた。

「しつかし久しぶりだな、アイツに会いに『青の農村』に来る奴は」
「えっ、前は沢山いたりしたんですか？」

「まあな。一時期から「幸せを呼ぶ金色のモンスター」だとかそういう噂が広まってき、そのころはよく外から来た奴が「いませんか？」って村の人間に聞いたりしてたんだ」

「あつ、その噂ならアタシも結構耳に挟んでたね。ちようどアタシが『冒険者』になったころだったかしら？ 他の噂が悪い意味で気になつて、アタシ自身はコツチには行かなかつたけどさ」

「今はこうして普通に來てるけどね」とメルお姉ちゃんは付け足して言った。

そういえば、わたしが「幸せを呼ぶ金色のモンスター」の話聞いたのはメルお姉ちゃんからで、その時、他にも「クワでグリフォンを追い払う」とか色んな噂のことも聞いたんだっけ？

わたしはそんな事を考えていたんだけど、目の前にいるコオルさんは目を瞑つて少し黙つたかと思えば、短いため息を吐いた。当時のことでも思い出していたのかもしれない。

「あの頃は大変だったぜ。そういう奴が來る度に「マイルのところに行つてみる」って毎回毎回言つて……」

「マイルさんのところに？ それって、やっぱりあの子はマイルさんがお世話してるんですか？」

「んー、そういうわけじゃねえんだけど、今は違うが、当時はマイルしか村のモンスターたち全員のことを把握できてる奴がいなくてさ。あとは……あのモンスター自体がちょっと特殊っーか……」

腕を組んで喋っていたコオルさんだったけど、そこまで言つたところで口を止めて少し俯いたような体勢で首を振つた。そして、顔を上げたかと思えば、わたし達にニカリと笑いかけてきた。

「話そうと思えばいくらでも話せるけど……そろそろオレも時間だし。悪いけどここまでだな」

「あつ、すみません、呼び止めちゃつて」

「気にすんなって。まあ、今回トトリたちはマイルスに事前に言ってるみたいだし、問題無いと思うぜ？　じつくり話してみたりしていきな」

そう言っつてコオルさんは「じゃっ！」とわたし達を通り過ぎて街の方へと向かって行つた……。

「あのコオルつて人が言うには、アタシらが考えてた通りマイルスの家に行けばいいってことよね？」

「うん、それで間違い無いと思う」

メルお姉ちゃんの確認にわたしは頷いてみせる。

……と、おねえちゃんが何故か歩いて行つてるコオルさんの後ろ姿をじーつと見つめていた。

「どうしたの、おねえちゃん？」

「えっ、ちよつとね……あの人、ジーンくんみたいに砕けた話し方だったけど、その割にはなんだか凄く真面目そうな感じがして……ちよつと驚いちゃつたの」

おねえちゃんの言うことは、なんとなくわたしにもわかつた。

けど、わたしの場合はコオルさんの事を色々知ってるからだつたりもするんだけど……。

「聞いた話だと、村のお金のこととかお祭りの計画とかはコオルさんがまとめてるらしいよっ」

「それって村長のマイルスの仕事じゃないの？」

メルお姉ちゃんの指摘に、わたしとおねえちゃんは「そうだよね」と頷く。

……？
本当に、事実上の村のトップつてコオルさんなんじゃないかなあ

そんな事を思いながら、わたし達は改めてマイルスさんの家へ向かって歩き出した……。

マイスの家前・玄関

いちおう村の中にモコちゃんがないか、キョロキョロ周りを見て確認しながら歩いていったわたし達。

そして、特に何も無くマイスさんの家へとたどり着くことが出来た。

さっそくノックをしようとしたんだけど……少し気になることが……。

「……？　マイスさんの声？」

そう。普通にしても外から聞こえるくらいの声でマイスさんが何かを言ってるような気がする。

思わず漏れ出していたわたしの呟きに、おねえちゃんが頷いてくれた。

「そうみたい。お客さんが来てるのかしら？」

「例の金色のモンスターとかかもよ？　でも、マイス以外の男の声もするから違うかも。なんか聞いたことがある気がするんだけどなあ？」

そう言っつて、メルお姉ちゃんは首をかしげる……と、思いきや、そのまま横移動をして玄関の横にある窓から中を覗きこみ始めた。

「あっ、なるほど。アイツだったかー。それにあの様子だと、ノックしてもしかたないしだらうし入っちゃおうか？」

窓から離れて、再びわたしとおねえちゃんのそばに戻ってきたメルお姉ちゃんが、そう言っつて玄関の扉を開いた。

……っつて、勝手に入ってもいいのかな？　……これまでにいるかどうかわからなくて、何回か入ったことはあるけど。

ちよつと不安に思いながらも、わたしはメルお姉ちゃんに続いてマイスさんの家へと入っていく。

マイスの家

「理論はだいたいわかった。……け・ど！ 僕は認めないよ！」

「ホントに頭が固いんですね、マークさんは！ 何度も説明しましたけど、この『魔法』は『ルーン』を用いる確立された技術もちなんです！

メカニズムもマークさんに合わせて理論的に教えたでしょう!？」

「だーかーらー！ そのそもそもの『ルーン』が気に入らないって言うてるんだよ!! 『プラントゴーレム』の説明の時にも聞いたけど、なんだいその不思議パワーは!? 人やモンスターが内に秘めてるだとか、大地や空気中にも存在してるって言うけど、僕は一回も見ただこと無し感じたことも無いよ!？」

「見た事はあるでしょう!? うちの周りなんかにもいるフワフワ浮いてたりする『ルーニー』を！ あの子たちは『ルーン』の集合体で、精霊とかそういういったスピリチュアルな存在で……」

「不思議パワーが不思議生物を呼んだだけじゃないか！ アレらが生物かどうかは怪しいけども！」

「えーっと……どういふ状況なんだろ、これ」

本が数冊おかれたテーブルを挟みながらも、それぞれイスとソファーから腰を浮かし気味に身を乗り出すようにして言い合っているのは、この家の持ち主のマイスさんとマークさん。

何のことを話しているのはさっぱりだけど……二人ともケンカしているかのように、結構大きな声で言い合ってる。

「よくわかんないけど……力づくで止めてみる?」

「ちよつとメルヴィ!? いくらなんでもそれは……!」

握りこぶしで自分の手のひらを殴るようにして手を叩いてたメルお姉ちゃんを、おねえちゃんが驚きながらもすぐに止める。そうするとメルお姉ちゃんは「冗談よ」とケラケラ笑った。

……まあ、わたし達がそんなことをしている間にも、マイスさんとマークさんの口論は白熱していつて……。

「ですから！　そこで『ルーン』と使用者の意識とイメージが……」
「そのことはもう大方わかっているんだって！　問題はその『ルーン』の存在の証明であってだね、キミの言う『魔法』の原理じゃないんだよ!!」

「あるつたらあるんです！　コロナの師匠のアストリッドさんは、僕が何か言う前に空気中から『ルーン』を抽出して勝手に納得してたのに……マークさんは頭が固すぎます……」

「なんだいその言い草は!?　化学が錬金術により劣つてるとでも言いたいのかい!?　いいだろう！　僕も科学のチカラで『ルーン』とやらを見つけ出してみせようじゃないか!!」

マークさんがそう言って勢いよく立ち上がり、わたし達のいる玄関のほうへとカツカツと歩いてきた。

……で、こつちに來たマークさんも、そのマークさんを目で追っていたミスさんも、ここでようやく私たちのことに気がついたみたいで、ふたりともハツとした顔を一瞬だけしてた。

さつきまでの強い口調と勢いは何処へ行ってしまったのか、いつもの猫背とゆるい表情になったマークさんは、わたし達を見てにへらと笑った。

「いつぞやぶりだね、お嬢さん。いやあ、お見苦しい所を見せちゃったね。どうしても熱くなってしまう話題でね、少々騒がしくなっちゃったよ。……まあ、僕はこれで失礼するから、ゆっくりしていくといい」

そう言ったマークさんは、わたしの横を「おっと失礼」と一言言ってから通り過ぎ、玄関の扉を開けた。

……と、はたと何かを思い出したのか「あつ」と声をもらして振り返り向いてきて、わたし達のほう……では無く、その向こう側のミスさんのほうを見て口を開いた。

「そうそう。最初のあの話だけど、アテがあるから二、三日で用意しておくよ。料金は……まあその時に話そうか」

「あつ、はい。わかりました」

さつきまでの言い争いは何だったのかと思ってしまうほど、アツサリとマークさんとミスさんの間で交わされる会話。

それにわたしが驚いているうちにマークさんは「じゃっ」と外へと出ていってしまう。

そうして残されたのは、ミスさんとわたし達なわけで……イスから立ち上がったミスさんがわたし達のほうへと向きなおった。

「いらっしやい。ええつと……とりあえず『香茶』を淹れなおしますから、みなさん座って待っててくれませんか？」

用があるのはモコちゃんにだから『香茶』は断ろうかとも考えたけど、マークさんが出ていった後のあの場の何とも言えない空気のせいでなんとなく断れなくて、わたし達は言われるがままイスとソファ―に座ることとなった。

……少し経ってから、キッチンのほうから『香茶』を持ってきたミスさんに、わたしはさつそく話を切り出そうとして……それよりも先に、ミスさんのほうからわたしに話しかけてきた。

「来てくれたところに悪いんだけど……実は僕、今からちよつと予定があつて家をあけなきゃいけないんだ」

「ええつ!? そんな……」

「あつ、ううん！ トトリちゃんたちは家にいてくれていいんだよ？ 今からでかけるついでにあの子に「トトリちゃんたちが来た」って伝えるから」

そう言つてミスさんは、こつちを向いたまま玄関のほうへと後ろ歩きで歩いて行く……。

「ん？ でもそれなら、アタシたちも出ていって会いに行つたほうが早いんじゃないの」

うん。確かに、メルお姉ちゃんの言う通りだと思う。わたしも、マ

イスさんと一緒に出た方がいいんじゃないかなーって気はしてる。「それに、マイスさんがいないのに居座るのって迷惑にならないかしら……?」

お姉ちゃんも申し訳なさそうにマイスさんに言っている。

けど、対するマイスさんは玄関の扉に背中をくつつけた体勢で、ブンブン首を横に振ってた。

「ううん！　せつかくきてくれたんですから、家でゆっくりしていただくさい！　……というか、留守番してもらっちゃう感じで、むしろありがたいくらいですよ？　だから、冷蔵庫の中身を勝手に食べちゃうくらい好き勝手にしてくれてもいいです！」

「いや、いくらなんでもそれは……」

いちおうわたしがマイスさんにツツコミを入れるけど……半分予想していた通り、特に触れられずにスルーされてしまう。

そして、マイスさんはそのまま扉を開けて……

「そんなにかからずに帰ってきますけど……気にせずゆっくりしててくださいーい」

そう言い残して出ていってしまった。

「……なんかマイス、変じゃなかった?」

玄関の扉をジーツと見つめ続けてたメルお姉ちゃんが、ポツリとそう呟いた。

「そうかしら?　マイスさんが親切過ぎるのはいつものことだと思うんだけど……?」

「それはそうだけどさあ、なんかねえ……」

おねえちゃんの言葉に、腕を組んで首をかしげるメルお姉ちゃん。見慣れているはずなのに、目がメルお姉ちゃんの胸元にいつちやうのは……わたしじゃなくてメルお姉ちゃんが悪いと思う。

……って、今はそういうのじゃなくて！

「何言ってるのメルお姉ちゃん、マイスさんが変なのはいつものことっていうか、昔からだよー?」

「……………」

……なんでだろう？ メルお姉ちゃんとおねえちゃんの視線がわたしに突き刺さってる気がする。

コンコンコンツ

と、不意に玄関のほうからノックの音が聞こえてきた。

「はーいー！」

アトリエにいる時の癖で、ついつい反射的に返事をしてしまつて、ハツとなつて手で自分の口を押えちゃつた。

そのわたしの返事を聞いてかどうかはわからないけど、ゆつくりと玄関の扉が開いて……

「モコッ！」

プルプルと震えながら背伸びをし、がんばつて扉を開けているモコちゃんだった。

その姿を見て笑いそうになり、それをなんとか抑えながら……わたしはあの時のお礼を言う前に、モコちゃんを迎え入れる。

「いらっしやい、モコちゃん」

「いらっしやい、つて、ここアタシ達の家でもないんだけどねえ……」

そんなメルお姉ちゃんからのツツコミが聞こえたけど、気にしないことにした……。

豊漁祭 《上》

『アランヤ村』。

『アーランド共和国』の中心地である『アーランドの街』から見て南にある海岸沿いの村である。

海のすぐそばということもあって、主な産業は漁業。そこで得られるものを自分たちで使ったり、村の外の人間と売買することで生計を立てている村だ。……もちろん、漁業以外の農業等も「盛ん」とは言えないが行われている。

また、アーランドの中で唯一の外洋に出れる船を有している場所でもある。

正確には「外洋船を作れるのは、造船技術が発達している『アランヤ村』くらいだろう」という見解と「大きな船を満足に泊められる立派な港がある土地が無い」という理由で、アーランドには『アランヤ村』以外には外洋船が存在しないのだ。

そんな唯一の要素も持っている『アランヤ村』だが……お世辞にも「賑やか」とか「活気がある」とは言えない村である。

別に、村人がいなくて村としての機能が死んでしまっているとか、そういった深刻な事態に陥^{おちい}っているわけではない。多いとは言えないが、村人たちはちゃんとして各々自分の仕事を持ち、時に助け合いながら生活している。

では、何が問題か。

それは、外からの人の出入りが少ないことだ。

来る人は魚やその加工品の買い付けに来る商人か、たまたま近くの採取地を探索していた通りすがりの冒険者。あとは、この村でアトリエを開いている錬金術士トトウリア・ヘルモルト、通称トトリの知り合いくらいだろう。そして、そのどれもがあまり頻繁にやって来るわけでも、大勢で来るわけでもないため、村がそう賑やかになることは無いのだ。

「外洋船は？」と思うかもしれないが、そっちはそっちで「利用する

利点が無い」&「大きな危険がともなう」ということで、必要とする人自体が稀まれである。

というのも、外洋に出てもあるのは、未踏……ではないものの未開である島々や大陸であり、冒険者以外にはあまり見向きもされない。さらには、外洋に出れば出るほど遭遇するモンスターが強くなるうえ、一度撃退されたとはいえ『フラウシュトラウト』のような規格外の凶悪モンスターの出現も有り得ないわけじゃないため、高ランクの冒険者であつても気軽に往ける場所ではないからだ。

まあ、そんなわけで『アランヤ村』は賑やかで活気のある村とは言い難いわけだ。

……比べる対象が、街のすぐそばの『青の農村』だということは、ちよつとかわいそうな気もするが。

アランヤ村

そんな『アランヤ村』なのだが……『アランヤ村』を訪れた『青の農村』の村長という肩書を一応持っているマイルスには、今日の『アランヤ村』は心躍るものだった。

「うわあー……！　賑やかだねえ、やっぱりお祭りはこうじゃないと！！」

そう！　なんとといっても、今日は『アランヤ村』の『豊漁祭』の開催日。

村のあちこちが飾り付けられ、食べ物・飲み物・お土産物各種の店が村のあちこちに出ている。また、アランヤ村の人たちの宣伝の賜物たまものか、はたまたどこからか噂を聞きつけたのか、村の外から来た人も多いようで普段とは比べ物にならないほど人通りが多い。

『アランヤ村』は今まさにお祭りの空気で満たされているのだ。

そんな場所に来て、あのお祭りでも有名な『青の農村』の村長であるマイルスがテンションを上げずにいられるだろうか？ いや、そんなはずはない。

なお、村長だからではなく、正しくは……『シアレンス』で季節ごとのお祭りが楽しみのひとつになり、アーランドに来てからは年に一度の『王国祭』だけで少し不満を感じ、共和国になり『王国祭』がなくなってしまうてからは、新たにできた自分たちの村でお祭りを開催するようになるくらい……お祭りがいつの間にか好きになってしまったからなのだが……。

その『青の農村』のお祭りが、マイルスが時には私財をガッツリ使っているという事実を知れば、その祭り好き加減も知れることだろう。……お祭りで消費したマイルスの私財の総額（そつがく）を知る事はあまりオススメしない。

さて、そのマイルスだが、今日の『豊漁祭』には一人で来ているわけではなかった。

「はく。『青の農村』の祭と比べりや人数は少ねえけど、村の規模的には上出来な感じか？」

「そうね。むしろ、普段との人の多さの差はコッチのほうが大きいんじゃないかしら？ ……リオネラ、人が多いけど大丈夫？」

「う、うん。こういう人混みは『青の農村』のお祭りで慣れたから……」
……アラーニヤの問いにそう答えながらも、時折周りをキョロキョロして少し落ち着きが無い様子なのはリオネラ。そう、マイルスは以前考えていた通り、『トラベルゲート』を使って午前中に街での人形劇の公演を終えたりオネラを連れて『アランヤ村』に来たのだ。

そしてもう一人……。

「……がマスターの弟子の生まれ故郷ですか……。おにいちゃん、ホムは彼女のことを何と呼べばいいのでしょうか？」

「えっ？ うーん……普通に「トトリ」とか「トトリちゃん」でいいん

じゃないかな？」

「わかりました」

マイスの言葉にいつもの仏頂面で頷いたのはホムンクルスのホム。ホムがこんな質問をしたのは、創造主であるアストリッドを「グランドマスター」と呼び、そのアストリッドの弟子であるロロナを「マスター」と呼んでいるので、そのまた弟子であるトトリのことも「○マスター」などと呼んだほうがいいのでは？ と、ホムちゃん自身が考えたからなのだろう。

……そういうことを聞くのは、マイスにはなくてアストリッドに聞くべきなのだが、この場にいない以上仕方ない。

ホムがマイスたちと共にいるのは本当に偶然で、今朝たまたまマイスの家を訪ねてきたからである。……少し時間がズレてしまっていたらマイスがいなかったわけなので、なんとも運が良いというか……。

マイス、リオネラ、ホムの三人組は、あちこちに出ている出店を眺めたりしながら、とりあえず村の中心の広場のほうへと歩いて行っていた。なお、普段よりも人の行き来が多いため、アラニーヤとホロホロはリオネラの両サイドには浮いておらず、アラニーヤをリオネラが、ホロホロをホムが抱きしめる様にして持ち運んでいる。

……と、そんなマイスたちの進んでいる方向から三人の知った人が歩いてきた。むこうもマイスたちに気付いたようで、ちょうど目が合った。

その人物とは、『アランヤ村』出身の冒険者であるジーノ。マイスはもちろん、リオネラやホムともいちおうは面識がある。

「あつ、マイス。それに、人形劇のねえちゃんたちみっこも……」

「やあ、ジーノくん！ お祭り、楽しんで……て、どうしたの？ その左頬？」

いつもより二割増しに元気な挨拶をしたマイスだったが、何やら元気が無い……というか、上の空なジーノを不思議に思い首をかしげていた。そして、変な様子のジーノの中でも目立っている、何故か

真っ赤になっっている左頬のことを本人に聞いてみるのだった。

「虫歯？ いやでも、なんだか手形のようにも見えるような……？」

「な、なんでもねえって!! じゃあな!」

マイスの言葉で何故かハツとしたジーンは、それ以上の言及げんきゅうを避けるように、手で頬を隠しながら別れの言葉と共に足早にマイスたちの脇わきを通り過ぎていった……つと。

「あつ」

余りにも普段のジーンとは違う様子だったため、ちよつと心配になり通り過ぎていったジーンのことを振り返ってまでして目で追っていたマイスだったが、謎の眩きと共に不意にジーンの背中が止まったことに少し驚く。

そして、そのジーンもマイスたちのほうへと振り向き、口を開いた。

「酒場、今日は何もしてないから入るなよ! 絶対だぞ!」

「え? うん、わかったよ……?」

いきなりで何のことかさっぱりだったマイスだが、とりあえず反射的に了解の返事を返した。それに満足したのか、ジーンは再び歩き出し、マイスたちからドンドン離れていった……。

「……なんだったんだろう?」

「さあ? ホムにもわかりません」

マイスの眩きに首を振りながら言葉を返すホム。その言葉にマイスは「だよな」と相槌を打ち、その上で気になっていたことを口にする。

「左頬は目立ってたけど……なんだか全体的に顔が赤かったような気がするんだけど、僕の気のせいかな?」

「確かにそんな気が……。それに、なんだか耳まで赤かったような気もするよな……?」

マイスの言葉にリオネラが同意して、付け足して言った。

ジーンの変な様子や謎の注意が何だったのかはわからず、揃って首をかしげる三人……。とはいえ、ジーン本人が何処かへ行ってしまう以上考えても答えは出てこないわけで……

「もしかして風邪かな？」

「せっかくのお祭りなのに……ちよつとかわいそうだね」

「ホムは「バカは風邪をひかない」と聞いたのですが……」

三人の中では、そんな結論で落ち着いた。

……実際は風邪などではなく「ジーン（ぼうけんしゃ）」だったのだが……それはまた別の話である。

そんなこんなで、ミスたちは噴水のある『アランヤ村』の広場までたどり着いた。

ここにくるまでに見たお店の中に気になったお店は三人とも各々あったのだが……それよりも先に確認しておかなければいけないことがあった。

「トトリちゃんやロロナたちが手伝っていることが何かあるはずなんだけど……いったいどこにいるんだろう？」

そう。ミスが言っているように、トトリたちもこの『豊漁祭』で何かをしているはずなのだ。ミスと一緒にいるリオネラもそのためにトトリから声をかけられていたのだが、人形劇の都合で断ったという経緯があった。

「若くて美人の女性を八人……でしたか？ 看板娘にしては人数が多いとホムは思うのですが？」

「そうなんだよね。それに、何をするのかはトトリちゃん自身も知らないみたいだったし、よくわからなくて……」

せめて何をしているのかがわかっていたら、どのあたりにいそうだとかわかりそうなのだが、ミスたちにはそれすらわかっていないのでどうしようもなかった。

ミスが「トトリちゃんたちに会うのはひとまず諦めて、お祭りを楽しんでしまったほうがいいかな？」と考えだしたのだが……

「……？ あっち、人が集まってる？」

リオネラが不意にこぼした眩きにマイルスト、そしてホムも反応した。

二人がリオネラの視線を追ってみると……確かに、一角に人が沢山集まっている。よくよく見てみれば、その人々が幕を下げられた劇場のような屋根付き箱型の大きなステージを囲むようにして集まっていることがわかった。

それを見て、マイルスが首をひねる。

「あんなところにあんな建物無かった気がするけど……もしかして、何かイベントでもしてるのかな？」

「そうなんじゃない？ それ以外にあんなのをわざわざ作る理由がわからないわ」

「つつても、そんなに盛り上がってる様子じゃねえから、まだ始まっていないのかもしれないな」

アラニーヤとホロホロが各々見た感想を言う。そして、それに続くようにして、ホロホロを抱き抱^だかか^かえているホムが、マイルスの顔を見ながら彼に問いかける。

「おにいちゃん、行ってみますか？」

「うん……でも、もう人がいっぱい、あの中に割って入って前にいくのはさすがにできないし……正面じゃなくて、人の少ない脇の方から観てみることにしようか」

その提案に、ホムもリオネラも頷いた。特にリオネラのほうは心なしか力強く頷いていた気がする。ある程度は人混みに慣れたとはいえ、やはりできる限りは避けたいのだろう。

……というわけで、マイルスたちはステージの方へと移動を始めた。

三人が端の良い感じの位置に移動出来たころ。ちょうどその時にステージ上に一人の男性が上がり、観客たちがにわかに騒がしくなり始めた。

そう。『豊漁祭』のメインイベントが始まる時が来たのだ……。

「あーあー。会場にお集まりの主に紳士ジェントルマンの皆様。大変長らくおまたせしました。アランヤ村『豊漁祭』メインイベント『美少女水着コンテスト』、いよいよ開幕です！」

ステージの端はしでそう高らかに宣言したのは、『アランヤ村』出身、村と街の間を中心とした馬車の御者を生業なりわいにしている青年、ペーター。そのペーターがステージ脇にあった縄を引っ張ると、ステージの大半を隠していた幕が左右にシャーツと開かれた。

幕に隠されていたステージ、そこにいたのは……並んで立っている、水着を着た八人の女性だった。

「こ、こ、こ、こんなの聞いてないですよー!?!」

そう弱々しい声で泣きそうになりながら、しゃがみ込んだ上に腕で何とか体をかくそうとしているのは、フィリー。緑と黄緑をベースとしたボーター柄がらの、バスト部分はチューブタイプの上下セパレートでわかれた水着を着ているが、本人が隠そうとしているため中々にわかり辛い。

「いえ〜い！ みんな楽しんでる〜?」

フィリーと打って変わって楽しそうにポーズを取ったり、観客に手を振ったりしているのは、パメラ。彼女が身につけている水着は白と黒を基調として落ち着いた色合いの草花のデザインのだが……形状がなんとも表現し辛く、胸部は二本の帯が交差して左右の胸を隠すようになっている。……とにかく、色合いとは裏腹に大胆なデザインの水着だった。

「ま、たまにはこういうのもいいかもね。ほら、アンタも前出なさいって」

特別恥ずかしがる様子もみせたりせず、そんな事を言いながら隣にいる幼馴染の背中を叩いているのは、メルヴィア。着ている水着は「ビキニ」と言われて真っ先に思いつくであろうセパレート水着。色

は明るいメルヴィアらしい、赤、橙、黄、黄緑の暖色のグラデーションになっていた。

「や、やだー！ ちょっと、押さないで！」

一歩下がっていたのにメルヴィアによって前に出されたのは、ツイ。茶色をベースとしたチエック柄のスカート付きワンピースタイプの水着を着ていて、これまでの水着の中では肌面積が少ないように見える。が、実は背中のはうはバツサリと開いているため、背中側にフェチズムを感じる人であれば趣おもむき深いもの……なのかもしれない。

「あ、あははは……さすがにこれは、恥ずかしいね……」

頬を赤く染め、本人の言葉通り恥ずかしそうにしているのは、ロロナ。普段着ている服と同様に赤とピンクを基本色としたビキニ水着。ただ、メルヴィアとは違い、腰にパレオと呼ばれる布を巻いているため、全体の印象がまた違ったものとなっていた。

「恥ずかしいなんてもんじゃないわよ！ なんてあたしが、こんな見せ物みたいにつ!!」

恥ずかしさと怒り、その他諸々が混ざってしまい色々と大変そうなのは、クーデリア。彼女が身に付けているオレンジ色の水着はオーソドックスなワンピースタイプの水着で、あえて特筆するべき点は、肩紐や水着の縁ふちなどに細かなフリルがついていて可愛らしいことくらいだろう。

「トトリ……？ あんたには後でゆつくり話があるから、覚悟しておきなさい」

もの凄く鋭い目つきで、今回ステージに上がっている女性陣を集めてまわった人物を睨みつけているのは、ミミ。その水着は見る人別世界の人間が見れば「赤のチャイナドレス」と表現しそうなデザインで……違いといえば、水着ということもあって丈たけが股またと同じくらいまでしかないこと

くらいだろうか？

「そ、そんなこと言われても、わたしも知らなかったしー！」

睨まれながらも、自分も被害者であることを主張しているのは、トトリ。彼女はクーデリアと同じく縁に小さなフリルがあしらわれた、青と水色のビキニ系のセパレート水着を着ている。また、左右の腰のあたりに結ばれている青いリボンがワンポイントとなっていていいアクセントになっていた。

水着姿の八人の女性に、会場の熱気はさらに高まる。当然だ。男は単純で……なおかつ紳士となれば、その結束力も半端ではない。これが盛り上がらないはずがなかった！

「さてさて、それでは順番にお話をうかがっていきましょう。なお、このコンテストの優勝を決めるのは皆さんの票です！ 最後の投票の際に、お気に入りの娘のエントリーNO^{ナンバー}を書いて投票してください！」

ペーターからの説明を受けて、紳士と少々の淑女たちは応えるように「おおー！」と歓声をあげた。

そして、ここからが本番。

出場者を一旦、観客からは見え辛いステージ脇の舞台袖そでにさげ、一人づつステージに出てもらいインタビュをする……いわゆるアピールタイムだ。

……出場者たちにアピールする気があるかは不明であるが。

「それではエントリーNO. 1番！ アーランドの冒険者ギルドの受付嬢！ フィリー・エアハルトさん！」

「え、え、わ、私ですか？ あ、あの、そのう……」

ペーターに呼ばれて舞台袖から出てきた……というよりは、ノリの

いいパメラとメルヴィアに押し出されて出てきてしまったフィリーは、未だに落ちつかない様子でキョロキョロしながら縮こまってしま
う。

そんな様子はお構いなしに、ペーターはイベントを進行していく。

「いやー、本日ははるばる遠いところをありがとうがとうござい……」

「きやあああ！　ちち、近づかないでください！　それ以上、だめー
！」

……まあ、そうなるだろう。慣れた『冒険者ギルド』の受付ならま
だしも、こんな大勢の人前、それも水着姿で男性に近づき喋るなんて
ことは、あのフィリーには無理な話だ。

だが、そんなフィリーの性格や事情も知らず、察してやれるほど立
派な大人ではないペーターはいえ……

「え……でも、近づかないとお話をうかがえないですし……」

無自覚ではあるものの、容赦無くフィリーに近づいた。

「いやー！　こないでー！　変態!!」

そうなれば当然逃げだすのがフィリーだ。涙目になりながら一瞬
にして舞台袖のほうへと帰って行ってしまった。

なお、観客たちの方からは何故か「ありがとうございますっ！」と
いう声がちらほら聞こえてきていた。

「あー……トツプバッターということで、かなり緊張されてたみたい
ですね」

最後まで的外れなことを言うペーター。実に残念……残念なのは
元からだった。パーツパーツは結構美形なのに猫背やら表情やら内
面がアレなため、ペーターは残念な奴なのだ。

「気を取り直していきましょう。エントリーNO. 2番！　村のオジ
サマ方に密かな人気を誇る『パメラ屋』の店主。パメラ・イービスさ
ん！」

「は〜い♪　今日はあたしのために集まってくれてありがとう〜！」

ノリノリ以外に言葉の見つからない調子のパメラ。おそらくは彼
女が最も観客へのファンサービスをする人物だろう。

なお、人気だったのは『アランヤ村』のオジサマだけではなく、『アランドの街』でも一定数のファンを持っていた。そして、実はどこから聞きつけたのか、観客の中に街在住のパメラファンが混ざっていたりする。……奥さんのいるオジサマは、怒られたりしないのだろうか？

「いやあ。ノリノリですね、パメラさん」

「うふふ。あたし、こういうのに一度出てみたかったの」

そう言つて体を左右に揺らしながら笑うパメラ。紳士な観客の大半はその揺れに合わせて揺れる豊満な胸に目を取られている……。これはパメラの計算ではなく偶然だろう、魔性というやつかもしれない。

「さすがパメラさん。見た目だけでなく、心も若々しい。……しかし、本当に歳をとつてませんね。村に来たのは何年も前なのに、全く見た目が変わつて無いような……。何か、若さを保つ秘訣でもあるんですか？」

「無いわよ？。ただ、あたしは歳をとらないの。死んじやつてるから」
ペーターの、本人にとつては何気ない質問。だが、それへのパメラの返答によつて場の空気が一瞬固まった。

「……え？。すみません、よく聞こえなかつたんですが……？」

「だから、もう死んじやつてるの。だから、歳はとらないの」

今度こそ鮮明に、全員の耳に届いたであろうパメラの言葉。そこで「え、ええ〜っ!？」といった感じに大騒ぎにならず、「何言つてるんだ？」となるのは良いのか悪いのか……。

そんな中で、街からのファンで昔のパメラを知っているオジサマは「まったく、そんなことも知らないのか……それにしても、他人を驚かそうとするおちゃめさは相変わらずだな」と、優越感に浸りつつ彼氏面をしていた。……なお、そんなことを考えている人は複数人いるため、パメラは色々とオジサマ方をカンチガイさせてしまっているようだ。

「んー、えー……ま、祭りのテンションで少々舞い上がっているようですね」

「またもや的外れな事を言うペーター。……だが、今回はさすがに仕方ない気もする。」

「次、次に行きましょう！ エントリーNO. 3番は……ああ、まあ来るんじゃないかと思ってました。メルヴィアさんです」

「はい、どうもー」

先程までの紹介よりもあからさまにやる気がなくなっているペーター。また、呼ばれたメルヴィアもいつも通りの調子で軽い挨拶をして出てきた。

「はい、ありがとうございます。それでは続いて……」

「ちよつとちよつと。さすがに扱いが悪すぎるんじゃないの？」

紹介してすぐに退場させようとすることに、抗議の声をあげるメルヴィア。しかし、幼馴染で気の知れている間柄だからか、ペーターは遠慮も無く、自分の気持ちのまま態度もそれ相応に適当な感じで、メルヴィアを軽くあしらうように言う。

「それは司会者権限という事です。はいはい、時間もおしてますからー」

「ふーん、今日はずいぶん強気なのねー。いくら優しいあたしでも、怒ることくらいあるのよー？」

まあ、ペーターが強気でいったところで、昔からの力関係が覆くつがえつたりはしないのだが。

さすがのペーターもメルヴィアが怒っていることには気付きき、途端に低姿勢になる。

「あ、あの……今はほら、大勢のお客さんが見てますから……ね？」

「見てない時ならいいってことよね？ それじゃ、後でゆっくりお話ししましょうねー？」

いまさら低姿勢になったとしても、メルヴィアの怒りが治おさまるわけではないので、ペーターが後々痛い目を見るのは逃れられない運命だろう。

なお観客の中に、二人の最後のやり取りを聞いていやらしい想像をしてしまった紳士たちがいたとか。……さすがに想像力が豊か過ぎ

では？

「……少し、調子に乗り過ぎたかもしれません。まあ、後のことは後で考えるとして！」

撮り返しのつかないところは、考えても無駄なのでひとまず置いておく。ある意味賢いかもしれない。ペーターだが。

「続いてのエントリーNO. 4番……来ました！ 文句なしの優勝候補！ ツエツイーリア・ヘルモルトさんです!!」

「は、はい！ うう、恥ずかしい……」

鼻^{ひいき}頂^ぎされまくりな紹介で呼ばれたのは、トトリの姉であるツエツイ。

鼻頂されている理由は、司会のペーターがツエツイに惚れているため。本人はそれを隠しているつもりだが、村の人はだいたい察している模様。幸か不幸か、当のツエツイには気付かれていないが……ある理由で逆に「ペーター君は私の事を嫌っている」と思っている始末。「ありがとうございます！ 素晴らしいです！ あーつと、その……」

「素晴らしいだなんて、そんな……。流れで参加しちゃったけど、やっぱり場違いだったかなって」

勢いは良かったのに、目の前に水着姿のツエツイがいるからか次第に言葉が出て来なくなってしまうペーター。いつもそんな感じだからトトリやジーノに「へたれ」と言われてしまうのだ。

なお、対するツエツイはペーターが言葉に詰まったことをマイナスな方向に捉^{とら}えてしまったようで、遠慮というか自虐的な事を言っただけだった。

ここで上手くフォローできれば、ツエツイの中のペーター株は爆上がりなのだが……

「いえいえ、そんなことは決して！ つまり、だから……」

……やはり、ペーターはペーターである。肝心なところを言っていない。

「司会者――！ なーに緊張してんのよー！」

「う、うるさい！ 口を挟むな!!」

そんなペーターを舞台袖から茶化すメルヴィア。それにペーターは即座に反応して言葉を返す……こうやってメルヴィアに対して言うように、ツエツイにも思ったままのことをビシツと言えれば……無理か、ペーターだもの。

「あつ、ごめんね。私の水着なんて見ても、コメントしづらいわよね。次の人にかわるから」

「あ、待った！ もう少し……ああ……」

悪い意味で自己完結して舞台袖に戻ってしまうツエツイ。そんな彼女を引き止めることが出来ず、伸ばした手だけが虚しく空を切る。

「時間おしてるんじゃないやなかったのー？」

「だ、だからうるさい！ あー……こほん。さあ、まだまだ祭りはこれからです！」

メルヴィアの紹介の時に使った適当な理由を、メルヴィアにそっくりそのまま返されたことで、ペーターはイベントを進行せざるをえなくなつた。

「次はこの方、エントリーNO. 5番。まさかまさかの超有名人のご参加です！ ロロライナ・フリクセルさん！」

「あははは……よ、よろしくお願いします」

天才錬金術士と名高いロロナ。水着の恥ずかしさに加え、有名人などと言われ慣れていないため、ロロナの顔は一層赤くなつた。

ただし、有名人とは言ってもその容姿についてはあまり詳しく出回っていないようで、初めて会つたメルヴィアには「えっ!? このカワイイ子があの!?」と驚かれたりしている。有名とはなんだつたのか。

「いやあ、驚きました。まさかこんな小さな村のお祭りに参加していただけるとは」

「それは、トトリちゃんに頼まれたからで……こんなことやるってわかってたら、出なかつただけだ」

そんな事を言ったら、参加者の半分以上は参加していなかつたと思

う。もしそうになっていたとすれば、『豊漁祭』は……少なくともこのコンテストは開催されなかっただろう。それでいい気もするが、ペーターはもの凄く落ち込んでいたことだろう。

「しかし、ぐ高名な錬金術士というのに、ずいぶんとお若い……いや、むしろ幼いと言ったほうが……」

「うぐっ！ わたしも気にはしてるんですけど……もうちよつと威厳とかほしいなって……」

威厳の無さは童顔とか見た目の幼さ以上に、その性格や普段の言動にあると思うのだが……。結局はそう簡単に変えようが無いので、どうしようもない。

「顔だけでなく、体つきもどちらかという幼児体型なんですわね」

「うぐぐっ!?!」

ショックを受けるロロナ。

だが、観客からは少なからずペーターの評価へ疑問の声が聞こえてきた。おそらく、ペーターの中ではツエツイあたりが基準になっているのだろうか……それでも、幼児体型寄りと言うのは厳しい気がする。

「まあでも、そのへんのギャップがいいという人もきつと……あいたっ!?!」

「ちよつと！ あんた、なにロロナ泣かせてんのよ!!」

「せ、先生の悪口言わないでくださいー!」

どこからか石がペーターめがけて飛んできたかと思えば、ロロナとペーターの間に割って入るようにしてクーデリアとトリが舞台袖から飛び出してきた。

観客の紳士たちの一部が「ああいうのが幼児体型だろJK」「本物の幼児体型キタコレ」「合法と違法……」「いや、17ならもう合法じゃないか?」「えっ、あれで17?」とわざめいたが、クーデリアが睨みつけると大人しくなった。

……また「ありがとうございますっ!」と聞こえたような気がするが、何にお礼を言っているのだろうか? そして、彼らは本当に『アランヤ村』の……いや、『アーランド共和国』の人間なのだろうか?

「わああ!?! 出番まだの人は出てこないでください! ええつと……とにかく、ありがとうございます! ロロライナ・フリクセルさんでしたー!」

「うう……。しばらく立ち直れないかも……」

なんだかんだバタバタで終わったロロナの紹介。

ちよつと目に涙を溜めて舞台袖へと帰っていくロロナ。その姿を見てか、観客に紛れていた元騎士が目を光らせ、司会のペーターをロックオンしていた。ペーターに、このイベントコンテスト後にまたイベント(意味深)が追加された瞬間だった。

「えつと、それでは続きまして、エントリーNO. 6番! この方もアーランドの冒険者ギルドの受付嬢。クーデリア・フォン・フォイエルバツハ嬢です!」

「つ……。なによ!?! ジロジロ見てんじゃないわよ!」

怒りも隠さず、恥ずかしそうになながらも律儀にステージに出てくるクーデリア。

その言葉に、会場からは歓声にまぎって「恥じらっているクーデリア嬢、いい……」とか、また「ありがとうございますっ!」といった声が聞こえてきた。

「さてさて、こちらのクーデリア嬢。一見、参加者中最年少に見えますが、実は……」

「ちよつと。どういう意味よ、それ」

ペーター、毒舌のトトリとはまた違った感じで地雷を踏み抜いた。それはもう思いつきり。

「へ? そりゃあ、見たまんまの……」

「言ってごらんなさい?」

ペーターは何故こうもギリギリで気付けるのだろうか? 逆に言うど、ギリギリまで気付かないのだが。

笑顔でニツコリ笑っているクーデリア。その背後には真っ黒なオーラが……。鬼の顔さえ見える気さえしてくる。

「……あの、言ったら殺すぞ的なオーラを感じるんですけど」

「うん、殺してあげる♪ だから、早く言ってみなさい?」

クーデリアは笑顔で優しく言う……が、怒っているというのは誰が見ても一目瞭然なように、威圧感がもの凄かった。

なお、観客の中には「逝いってきます!」と言ってステージに上がるうし、周りに止められている紳士がいたとか、いないとか。

「……あ、ありがとうございます! それでは次の方に見てみましょう!」

「チツ……せめてぶん殴って、ストレス解消しようと思ったのに」

とにかくイベントを進行させ、勢いで逃げたペーター。その結果に舌打ちをして割と本気で残念がるクーデリア。

……と。

「ん?」

舞台袖にさがっていったクーデリアが、ふとその足を止める。その視線の先は観客たちのいる方向……それも端のほう……。

「あーっ! あんた来てたのね、リオネラ!」

「え、ええっ?」

そう。クーデリアが見つけたのは、イベントを見学していたリオネラだった。

クーデリアの言葉に反応して舞台袖から顔を出したのは、フィリーとロロナ。

「ホントだ、リオネラちゃん来てる!」

「ほむちゃんも一緒にいる!?」

二人は……あとクーデリアも、舞台袖に戻ったかと思えば、ステージの裏にあるのであろう出入り口から大きめのタオルを巻いて身体を隠し出てきて、リオネラとホムの方へと駆け寄った。そして……

「リオネラ! こうなったら、あんたも道連れよ! ついてきなさい!!」

「え……ええええっ!? そ、そんなあ」

「大丈夫だよ。水着も、リオネラちゃんが人形劇してる時の服と、さほ

ど変わらないから！」

そう言つて、クーデリアとフィリーはリオネラを左右からとつ捕まえて、『バー・ゲラルド』のほうへと連行していった。

「ほむちゃんも行くこうっ！ それでそれで、カワイイ水着色々着ちやおう!!」

「マスターの命令であれば、ホムは従います。……ですが、なんでしよう？ 仕事と違ってあまり嬉しくありません」

そう言いつつも、特に抵抗もせず口口口に連れていかれるホム。

なお、リオネラとホムと一緒にいたマイルスはといえば……

「いやあ、キミがああ『青の農村』の村長さんか！」

「いつもあなたの村の商品にはお世話になってます」

「噂はかねがね。少しお話を聞いてもいいですか？」

「ええつと、今はちよつと……つて、ああつ!? 連れてかれちゃった……」

半ば無理矢理連れていかれそうになつてたりオネラとホムを見て「さすがに止めないといけないよね」と、動き出そうとしていたのだが……それを察知した近くの紳士たちが世間話をする流れでマイルスを困^{かた}い、それを阻止したのであった。美女の水着のためなら、紳士にとつてこれくらい朝飯前だった。

そして、ここを取り仕切っているはずのペーターはといえば……

「おおつ、飛び入り参加者か！ なんかコンテストっぽくていいなあ!!」

止めるどころか、テンションを上げていた。

「さあ！ 飛び入り参加者が準備をしているうちに、次に行きましよう！ ……あー、なんかまたギスギスしそうな予感。エントリーN O. 7番！ アーランドの名門貴族！ ミミ・ウリエ・フォン・シユバルツラング！」

「どうも、みなさま。本日はよろしく願いたします」

ステージに出てきたのはミミ。それも猫かぶりモードである。

「あれ……?」

「どうかいたしまして?」

「いえ、なんかおしとやかといいますか、想像と違うというか……」

「そうですか? 貴族として当然の立ち居振る舞いをしているだけです」

当然、猫かぶりモードに知らないペーターには違和感たっぷりなわけで、驚き首をかしげっていた。

「さつき、トトリに毒づいてましたよね?」

「人違いでは?」

ペーターの指摘を受け、張り付けていた笑顔をわずかにひきつらせてしまうミミ。だが、それでも華麗に流そうとする。

……が、そこで手を緩めないのがペーター。その先に待っているのが自分自身が大変な目に遭う未来と気付かず、そのまま突っ込んで行く。

「村で何度か見かけた時は、もっとこう偉そうというか、暴君のようなイメージがあったんですが……」

「……一つ、気付いたことを言わせてもらってもいいでしょうか?」

「あ、はい。なんででしょう?」

相変わらず笑顔のミミ……だが、先程のクーデリアと同じく、その体からとてつもない殺気を放ちだしていた。

「先ほどから場がギスギスしているのは、参加者のせいではなくて……あんたが言わんでいいことを、誰彼構わず、べちゃくちや喋ってるせいではないかしらねえ……?」

もつともな意見である。というか、そうやって指摘してあげているミミはむしろ優しいのではないだろうか? 無論、ペーターは次にならないことを言った時点で終わりなのだが。

「す……すみません……その、大勢の美女を前にして、テンションが上がってしまった……」

「あら、美女だなんて恥ずかしいですわ」

珍しく比較的まともな返答ができたペーター。

喜んでいるように見えるミミだが、当然これも猫かぶりの演技だろう。本心ではどう思っていることやら……。

……観客の中に「猫かぶりミミちゃんカワイイprpr」と言っている紳士がいたが……餡あめかアイスクャンデーでも舐めているのだろうか？

「……で、ではミミさん、ありがとうございます……！」

なんとか死地を脱したペーター。だが、基本的に自業自得なため、仕方のないことだと思う。

「さ、さあ！ このコンテストの終わりも近づいてきましたが、まだまだ盛り上がっていきましよう！ エントリーNO. 8番！ このコンテストの開催にも尽力してくれました、我が村が生んだ錬金術士、トトウーリア・ヘルモルト！」

「はい！ トトリです。よろしくお願いします!!」

恥ずかしい……というよりは、緊張で固くなっている様子のトトリ。……舞台袖から聞こえてくる「トトリちゃん！ 可愛いわよー！」という声援は、間違い無くツエツイによるものだろう。

「いやあ、ありがとうっ！ あなたのおかげで我々は、至福かつスリリングなひとときを過ごすことができました」

「そ、そんな。わたしは声をかけてまわっただけで……」

「至福」はともかく「スリリング」だったのは、九割がたペーター自身のせいだと思うのだが……残念ながら、そこにツツコむ人物はいなかった。

「せつかくですし、何かやりませんか？ サービス的なことを」

「……は？ そ、そんな！ 無茶振り過ぎますよ!!」

「やっぱりそういうのが無いとコンテストっぽくないだろ？ ここは一つ、俺を助けると思ってます、な？」

同じ村で育ってきた仲からか、メルヴィアに対してとはまた違った感じに遠慮のないペーター。そもそも彼には気遣いとかは出来るのだろうか？

「そ、そんなこと言われても、サービスって何を……えっと、ええーっ

と……」

「できません」とバツサリ断ってしまえばいいのに、その真面目さからか「何かしなければ！」と必死に頭を悩ませ始めてしまうトトリ。そして、導き出した答えは……

「う……うつふくん♥……とか、言ってみたりして……」

「……………」

「……………」

「「「「……………」」」」

色気のかけらもない「うつふーん」に、司会も本人も会場の観客たちも数秒間停止した。

そんな中で真っ先に動いたのは……無茶振りを振ったペーターだった。

「……………はい！　ありがとうございます！」

「ちよ、ちよっとー！　せめて何か言ってよー！」

まるで何も無かったかのように流して終わらせるペーターに、顔を真っ赤にしたトトリが非難の声を上げる。

なお、固まってしまった紳士たちだが、羞恥心で顔を赤くするトトリを見て「これはこれで……」と満足したようだった。

「さあ、ここからは準備が完了しこちらまで来た、飛び入り参加者二名となります！　まずはこちら。エントリーNO. 9番！　アトリエの寡黙な小さき従者。ホムさんです!!」
「……………」

舞台袖からゆっくりと歩いてきたホムは、正面を見て丁寧にお辞儀しげぎをした。

着ている水着は黒に近い紺色の地に水色の水玉模様。また、デザイン的に特徴的なのは、腰から伸びている二段のスカートと肩の部分に

フリツフリのフリルがついていることだろう。そのせいか、見方によつては水着というよりバレエの衣装……レオタードなどに見えるかもしれない。

普段からレオタードを着ている人がいた気がするが、気にしてはいけない。

……というより、彼女たちの衣装を決めたある人物の趣味なのでは……？

「少々表情が固いようですが、やはり飛び入り参加ということで緊張されているのでしょうか？」

「そんなことはありません。ホムはこの程度で緊張したりはしません」

そう淡々と返すホム。それを聞いてひとまず安心したのかなんなのか、ペーターは「そうですね、そうですね！」と満足そうに言つて進行を続けた。

「飛び入り参加というわけですが、そこまでコンテストに自信があるんですか？ それとも、何か目的でも……？」

「マスターに命令されただけで、特に深い意味はありません。むしろ、『青の農村』のお祭りとは違い、参加賞どころか入賞賞品すらないので、出る意味が全くありません。命令でなければ出てませんでした。」

「あ、あははは……さすがにあの村の祭りと比べられると……それに、『豊漁祭』自体久しぶりの開催で手探り状態だったから、多めに見ていただければと」

御者の仕事で『アランヤ村』と『アーランドの街』を行き来しているため、街のすぐそばにある『青の農村』のお祭りについてはペーターも知っていたのだろう。ホムの言ったことに苦笑いをして事情説明……というか、言い訳をした。

まあ、確かにペーターの言う通り、『青の農村』と比べるのはあまりに酷くだろう。色々と条件が違うのだ……主に財力とか。

「では、次回のお祭りはもっと良くなるものだと思っておきます。そうなれば、グラントマスターも喜ぶと思いますので」

「は、はあ?」

ホムが言っていることはわかるが、主に「グランドマスター」という一言のせいであまり意味がわからず、ペーターは疑問符を浮かべる。

なお、ホムが言っているのは他でもない『水着コンテスト』のことで、グランドマスターことアストリッドはコレを見て喜ぶだろうとホムは判断したのだ。その見解は間違いでは無いと思う……が、アストリッドは「騒ぎ立てる汚らしい男共はいらん」と言つて会場の紳士たちを吹き飛ばすだろう。言葉通り、ドツカーン!と。

その証拠とも言えるのは……

「グランドマスターといえば、以前「お前に欲情する変質者は容赦無く殲滅していい」と許可をもらっているのですが……あなたは殲滅ホコボコにしている変質者ですか?」

しっかりと教育されているホム自身だろう。うみだされた時に与えられている知識の他にも、やや男性に対してキツめの教育が施されているようだ。ただ、今回のに関してにはホム自身の身を守るという意味では間違っていない教育だろう。

そして、「変質者ですか?」と聞かれたペーターはといえば……

「まっさかー。お前みたいになつるペタは誰にもそんな目で見られねえ。まあ後七年……いや、十年後なら可能性はあるかもだけどさ」

司会の口調ではなく、素の口調でそう返した。

「それは良かったです。……ですが、無性にボコボコにしたい気分です。先程のくーちゃんの気持ちがあつたような気がします」

そう呟くホムに名前を出されたクーデリアはといえば……というより、とある身体的特徴を持った人たちは、ペーターに鋭い視線と殺気を向けていた。ペーターなんかはどう思われてもいいだろうが、はつきり口にされると少なからずイラツとくるものがあつたんだろう。ペーターはまたもや敵を作ってしまったわけだ。

そして、ペーターの言葉は他の場所にも影響をおよぼしており、会場の紳士たちの間では「大は小をかねる、大きいにこしたことはない」「小さいからこそコンプレックスからの羞恥心が……」「大きいのを気

にする娘もいだろう?」「でかけりやいってもんじやない」「大きい胸より小さい胸。美女より永遠の少女だぜ!」等々……ある種の競争に発展しそうなほどの論争が巻き起こり出していた。

もちろん紳士以外の観客たちはドン引きで、紳士たちから数歩離れた。

「さあさあ、これでラストです! エントリーNO. 10 番最後の参加者も飛び入り参加の方で……もしかすると、会場のみなさんの中には彼女たちを知っている方やファンの方もいらつしやるのではないのでしょうか? 不思議な人形劇の旅芸人、リオネラ・エインセさん!」
「あわ、あわわわわ……っ!」

目を点にして、固まっている状態でステージに出されたリオネラ。その両サイドにはいつも通りホロホロとアラニーヤが浮いている。……逆に言うと、二人を浮かせている力のコントロールが切れていないので、極限状態ではなくまだ少しは余裕があるのだろう。

そんなリオネラの水着は、ロロナが着ていたものと似たようなタイプだった。上下がわかれている黄寄りのオレンジ色のビキニ水着に腰にはパレオを巻いている。決定的な違いは、上下の上のほう……胸の大きさによる差以外にも、肩紐ならぬ首の後ろで結ぶための紐に途中までネットのようなアミアミがついているのだ。そのデザインは、谷間を隠すわけでもなく、開けっ広げにしてるわけでもなく……言うなれば谷間のチラリズムに挑戦しているモノだった。

「オイオイ、落ち着けて。フィリーの奴も言ってたけど、普段の服とそんな変わんねえぞ?」

「いや、そうは言っても水着は水着でしょ? それに、パレオはまいてるとは言っても左足は半分くらい見えてるし、中だって普通に水着でズボンじゃないわ」

「そんなこと言われたってどうしようもないっていうか……ううっ」

「はははっ、相変わらず賑やかで楽しいですねえ」

さんにんのやり取りを見て愉快そうに笑うペーター。

彼が……いや、彼だけでなくリオネラたちを知っている大半の人が、ホロホロとアラニーヤ人形たちが喋る事に驚くことはない。その理由は、ある時点からリオネラたちがホロホロとアラニーヤの言葉を人前でも隠さなくなったからだ。それがどういう心境の変化から来たかはわからないが、今では人形劇の前にさんにんの漫才のようなやりとりがあるのが恒例になっているほど周りにも受け入れられている。

なんというか、アーランドの人たちは寛大……というか、順応が上手い気がする。その最たる例が、モンスターたちと暮らす『青の農村』だったりする。

「とりあえず、いつもみたいにしてみたらどうだ？　人前に出るって意味じゃ同じだしよ」

「そうね、もうステージにでちゃってるけど、人形劇の前みたいに一回深呼吸して……」

「う、うん、わかった。すう……はあ……」

ホロホロとアラニーヤに言われて、目をつむり二度三度深呼吸をするリオネラ。そして、最後にもう一度スウツと息を吸った後、パチリと目を開き……腕を左右に広げた！

「そ、それでは、始めさせていただきます！　今日の演目は……!!」

「いやいやいや!?　そこまでいつも通りじゃなくていいわよ!」

「そうだって！　一番短いのも十分くらいかかるのに、今は無理つてもんだぜ!」

「えっ、あつ……!」と、自分が間違えていつものように人形劇を始めそうになった事に気付き、顔を真っ赤にするリオネラ。失敗したこ
とへの反射的な対応なのか、両手を下腹部あたりで重ねて頭を下げる
……………と。

むによん。

目の前の光景を見て、そんな音が聞こえた気がした紳士たちがいた。

手を重ねていたりオネラだが、緊張のためか腕は伸びきった状態だった。となれば、彼女の出場者の中でもトップクラスの胸は彼女自

身の胸に左右から挟まれることとなる。さらにお辞儀をしたことで、多少頭や髪で隠れるものの谷間が正面から見えやすくなった。……それも左右の腕におされ、アミアミに押し付けられる形で。

「「「おおお……」」」

「へ？」

何故歓声が上がったのかわからないリオネラは顔を上げる。それと同時に会場からは、主に紳士の人たちによる拍手が沸き上がった。

「え、ええつと……あ、ありがとうございます……？」

その拍手が結局何なのかわからないまま、リオネラはこれまた人形劇の時のくせで拍手の中を舞台袖へと帰って行った。

……これは、後からどうしてそうなったか聞いたときには、顔をこれでもかというほど真つ赤にしてもだえることだろう。そして「もう人前に出れない……」と……。その場合は、周りの人たちが励ましてあげられればいいのだが……。

「トトリ、こういうのをサービスって言うんだぞ……」

そう呟いたのは司会のはずのペーター。今回は何か地雷を踏んだりしたりはしなかったが、リオネラ・ホロホロ・アラニーヤのさんになんだけでよかった感があり、司会がその役目をはたしていなかったという意味では一番酷かったかもしれない。

「以上で、全参加者の紹介が終わりました。会場のみなさん、参加者の方々にもう一度盛大な拍手を！」

ペーターの言葉に合わせて、会場からは本当にたくさん拍手が鳴り響いた。

そして、それと同時に進行で、ペーターと共にこのイベントの開催につくしている係の人たちが、会場の観客たちから一人一枚の投票権を回収していく。

そして、投票権が全て集められ少し経ってから、ステージ上のペーターの元に一枚の紙が届けられた。

「……と、早くも集計結果が出たようです。記念すべきアランヤ村『豊漁祭』『第一回水着コンテスト』、その優勝者は……」

どこからか聞こえてくるドラムロール。それが最後に「ダンッ！」と大きく一回鳴ったところで、ペーターの口から優勝者が告げられる。

「エントリーNO. 5番！ ロロナさんです!!」

「へ？ わ、わたしですか？ えええええ!!」

予想外だったのか、いささか大袈裟に驚くロロナ。そんな彼女をたたえるように会場から再び大きな拍手が沸き起こる。

その拍手にまぎって、「キャベツ娘ー!」とか「さすがだ、鉄腕怪力娘!」とかいう声も聞こえてきたが……それが何のことなのかは、街出身の人ならわかるかもしれない。

「おめでとうございます! 国一番の錬金術士の称号に続いて、村一番の美女の座まで手に入れてしまいましたね」

「いいのかな？ わたし、この村の人じゃないのに……」

そんな事を言ったら、参加者の大半が『アランヤ村』に住んでいる人ではないこと自体が問題になってくるだろう。

だが、そう言っていることからわかる通り、ロロナはどこか遠慮している上に納得できていないようだったが……

「と、とにかくありがとうございます!」

これまでなんだかんだでお祭りのイベントを優勝して来た経験からか、とりあえず綺麗にまとめることが出来ていた。

「最後まで初々しいロロナさんでした! さて、それでは今回のコンテストはここまでっ! また次回をお楽しみに!」

最後にペーターがそう言っしめて、『水着コンテスト』は幕を下ろした。

だが、『豊漁祭』自体はまだ終わっていない。そして……

……次回はあるのだろうか？

豊漁祭《下》【*1*】

アランヤ村・『バー・ゲラルド』前

『アランヤ村』の中心地にあたる広場。その一角に面した酒場『バーゲラルド』の出入り口から出てきたトトリは、数歩歩いてから肩を落としながら「はあ」と大きな種息を吐いた。

「つ、つかれたー……なんだか、水着から着替え終わったとたん疲れがドツと来た気がする……」

今トトリが感じているモノは、普段良く経験している冒険帰りの疲労感とはまた違ったものなのだろう。どちらかといえば、『錬金術』のレシピを丸一日かけて考えた後の精神的疲労感のほうが近いかもしれない。

実際のところは、大勢の人前に出るといふ緊張や無意識中の興奮、水着である事による更なる緊張と羞恥心、その他諸々もろもろによつて特別動いたりしたわけでもないのに疲れんだろう。

そんなお疲れの様子の様子のトトリ。そのトトリに続いて『バー・ゲラルド』から出てきたのは、同じく水着から普段の服へと着替え終わった『水着コンテスト』の参加者たちだった。

水着から着替えてやっといつもの調子に……となつているわけではないようだ。もちろん、水着の時のように手などで素肌を隠そうとする必要は無いため、そういった素振りは見られない。だが、差はいくらかあるもののトトリのように疲れ気味だったり、機嫌が悪かったりと、いつも通りとは言えそうにもなかった。

多数派なのは、ステージ上での恥ずかしさや精神的な疲れは残っていないながらも「全部終わったことだし、もう過ぎた事なんだからしかたないよね」と、気持ちを切り替えていこうとしている人たち。ツイ、ロロナ、フィリーやリオネラたちがそうだ。

「すみませんロロナさん、あんなイベントに参加させちゃって……」
「ああっ、気にしないでくださいっ！ わたし、昔にこういうことはよくあったから……」

「ごご、ごご、ごめんね、リオネラちゃん。無理矢理連れてっちゃって……あの時の私、なんていうか極限状態っていうか、最高にはいになっちゃってて」

「気にすんなって。オマエだって大勢の前で気絶しないで頑張ってたんだろ？ だったらこのくらいは目えつぶってやれるぜ？」

「さすがに全く怒ってないわけじゃないけど、許せないってほどでもないわよ。ね、リオネラ？」

「う、うん。だから……ね？ 今からお祭り、一緒に楽しもう？」

やはり『水着コンテスト』は大変だったようだが、この様子からすると彼女らは持ち直してお祭りを楽しめることだろう。

少数派は、疲れや恥ずかしさよりもイラだちが勝まさっていて、その顔はいかにも「イラついてます」といった感じだった。そうなっているのはクーデリアとミミという、ステージ上でも結構イラついていた二人だ。

「ああっもう！ なんでこんなことに……！ こんな祭、来るんじゃないかって……ま、まあロロナの水着が見れたのは良かったけど」

「あのバカ御者をぶん殴りたい気持ちを抑えてまで貴族らしくしてたっていうのに……なんで私が優勝じゃないのよっ!？」

「バカね。あんたがロロナの可愛さに勝てるわけがないじゃない」

「何よ!?! そう言うあんたこそ、ちんちくりんで見向きもされてなかったじゃない!？」

段々と険悪な雰囲気になっていき、睨み合いだす二人。

その二人を止めたのは、事態を見ていて疲れた体に鞭打って間に入ったトトリだった。

「ちよ、ちよっど!?! ミミちゃんのイラだった理由とか突っ込みたい所はあるけど、とにかくケンカはよくないですよー!？」

「もとはといえば、あんたが!!」

「ひゃあ!? だ、だからあんなことするなんて知らなかったんだつてー!?!」

クーデリアとミミに睨まれて縮こまるトトリ。

まあ、仕方がない。クーデリアとミミが『水着コンテスト』に出ることとなった原因は、彼女たちの言う通りトトリが誘ったからで……でも、詳細不明の誘いにホイホイ乗ってしまった彼女たちにも責任が無いわけではない。

騒がしくなり始めた面々を一步離れたところから見ているのは、諦め半分だったり、イラついていたりしているメンバーとはまた違った様子の三人。

「着替えている時にため息を吐いていたりしてたので、てつきりはしやぎ疲れてしまったと思ったのですが……どうやらホムの見当違いだったようです」

仲良くお喋りしていたり騒がしくしている姿を見て、淡々とそう述べたのはホム。その表情は相変わらずの無表情で、疲れはもちろん、コンテストのことも何とも思っていないように見える。

「まっ、なんだかんだ言いながら、みんな元気は残ってるみたいね。一安心、これでお祭りを周れませぬーつてなったら、残念なんてもんじゃないわよ」

いつもの調子でケラケラと笑っているのはメルヴィア。コンテストの紹介の際にぞんざいに扱ってきたペーターには色々と言っていたりはしていたものの、コンテスト自体はどこか楽しんでいる雰囲気も感じられたし、苦でもなかったのだろう。

「そうよね。お祭りはこれからなんだから、もっと楽しまないと。……つてことで、このままみんなと一緒にまわったりしちやわな〜ん?」

こちらも、普段通り……というか、幾分テンションが高くなっているように思えるのは、パメラ。今の様子やコンテストが始まった時からノリノリだったことからわかるように、参加者の中でのイベ

ントを最も楽しめたのは彼女だろう。

さて。クーデリアとミミ、あとトトリによる騒ぎの中の眩きだったが、そのパメラの言葉はそばにいたホムやメルヴィア以外にも聞こえていたようだった。

「うんっ、いいねそれ！ パメラの言う通り、せっかくだしこのままみんなでお祭りまわっちゃおう！」

パメラの提案に真っ先に賛成したのはロロナだった。どうやら気持ちを入れ替えることができたようで、すっかりいつもの調子に戻っている。

そんな彼女が乗ったとなれば、その性格からして周りの人も誘うのは目に見えたことだ。そして、それに釣られる人はいても、誘いを断るような人はまずいないだろう。

「ね、ね！ くーちゃん、一緒にまわろうよ！」

「あのコンテストの後にみんなまとまって歩いてたら、どう考えたって悪目立ちするじゃない！ イヤよ、そんなの!! ……で、でも、まあロロナがどうしてもって言うなら、考えてあげなくもないけど……」

「トトリちゃんも、一緒に行こう！」

「はい！ お祭りのお店の準備の手伝いをちよつとしましたから、どこに何があるかわかっています。せっかくだすから、案内します！ よかったら、ミミちゃんも一緒にどうかな？」

「なんで私があんた達と……」

トトリの誘いに不満げに言うミミ……だが、おそらく、ほぼ間違い無くほんの少し後には陥落して一緒について行くことになっていることだろう。

連鎖的に広がっていき、「ロロナちゃんが言うなら」とリオネラも乗り、それについて行く形でファイリーも賛同した。そして、特に誘いに乗る理由も断る理由も無いメルヴィアやツエツイもその流れからか「じゃあ、あたしたちもせっかくだし」と誘いに乗ることとなった。

「ほむちゃんも……あれ？」

だが、その流れが不意に止まることとなった。

止めたのは、流れのままホムも誘ったロロナ。誘いの言葉を途中で止めて不思議に思い、かつ、驚いて声を上げた。

……そうなった原因は他でもない、誘う為に目を向けたホムにあった。

いつも通りの無表情に見えるホムの顔。だが、ホムのと付き合いが長く彼女の事をよく知っている人物であれば、その一見無表情に見える顔もそうではないことがわかったであろう。

ロロナもそうだった。目の前にいるホムの表情が悲しそうな表情に見えたため、つい誘いの言葉を止めてしまったのだ。

だが、当のホムはいえ、そんなロロナの様子を逆に不思議に感じて首をかしげたのだった。

「……？ マスター、どうしたんですか？ みんなで一緒にお祭りを見てまわるという話だったのでは？」

「へ？ あ、うん。そうなんだけど……」

言っていることや、その声色からしていつも通りな感じに思えるホムだったが、やはりロロナは何か引っかけた。というよりも、悲しそうに見えたその表情がどうしても気になって仕方なかった。

「えっと……ほむちゃん、もしかしてイヤだった？」

「別に嫌というわけではありません。マスターの命令であれば従います」

「ううーん。ほむちゃんらしい答えといえばそうなんだけど……」

ロロナは首をひねって考え込んでしまう。というのも、ホム本人は「嫌じゃない」とは言っているものの、やはりどうもおかしいように思えたからだ。ただ、このまま考えているだけじゃ、どうしてそう思ったのかという答えが出てきそうな気もしなかった。

そこに助け舟を出したのは、いつものようにリオネラのそばで浮いていたアラニーヤとホロホロだ。

「ねえ、きつとあの事じゃないかしら？ リオネラのほうはすっかり

忘れちゃってるみたいだけど……」

「だな。オイオイ、お前が気にしてんのはマイスのことだろ？」

その言葉に、ホムがピクリと反応した。そして、周りのみんなも……もちろんリオネラも。

おそらくリオネラは「何か忘れているような……？」程度には違和感を覚えていたのだろう。それをあのホロホロに指摘されるまで気付かないとは……

「あつ、そういうえばコンテストのほむちゃんを連れてった時、マイス君も近くにいたっけ？　もしかして、一緒に来てたの？」

「はい。ホムは今朝おにいちやんに会ってお祭りのことを聞き「一緒にまわろう」ということのでついてきました。来るときには、そちらのリオネラとも一緒でしたが」

「わつ、私は、前々から「せつかくだし、人形劇が終わってからでもいいから、お祭りに行ってみない？」って言われてて、それで……」

「それでマイスさんが二人を連れてきてたって事なんですね。……そういうばリオネラさんのほうは、わたしがお祭りの事を言いに行つた時にマイスさんがそんなこと言ってた気がするような？」

トトリを始め、そこにいたメンバーが『アランヤ村』にいるとは思わなかった二人が何故『水着コンテスト』の会場にいたのかをやっと知った。

そして、ホムの言ったことを聞いたロロナは、ちよつと考えるような仕草をした後、少しだけ頬を膨らませた。

「むー、マイス君ったらまたわたしに内緒でほむちゃんと遊んでー、ズルい！　……けど、先に約束してたのに、その予定を勝手に変えちゃったらほむちゃんに悪いよね」

『水着コンテスト』に無理矢理参加させた時点で、色々と勝手に予定を変えてしまっている気もするのだが、それを指摘する人物は残念ながらその場にはいなかった。

事情を知り、ホムがなんとなく悲しそうにしていた理由もおおよそ察したロロナが出した結論は……

「とりあえずまずは一緒にマイルス君を探そつか！ その後は……それから考えよう。」

「マイルスを探す」ということは、人が沢山いるお祭りの中を歩いて探すわけ……

結局ホムは、みんな一緒にお祭りを見てまわる一員に組み込まれたわけである。

さて。そんなこんなでマイルスを探しながらお祭りムードの漂う村を歩いていた一行だったのだが……なんとも不思議な光景が、彼女らの目に入った。

「……………」
賑わっている通りから少し外れた一角。そこにいつもの仏頂面で腕を組んで佇たまたんでいたのはステルクことステルケンブルク・クラナツハ。心なしかその顔は疲れているような気が……おそらくは気のせいではないのだろう。

というのも、その原因と思われるものがすぐそばにいたため、容易に「疲れているのだろう」と想像できたのだ。

「~~~~~」

ステルクの肩に乗っかり鼻歌を歌っているのはピアニャ。
いわゆる『肩車』というものをしていっているわけだ。ピアニャが着ている服の形状の問題で少々スカートの裾すそがめくれ上がって色々どギリギリである。だが当のピアニャはといえば、まだそういう年ごろではないのか、女性だけの村で育ってきたからか、別に恥ずかしがったり気にしている様子はない。

「あつ、トトリだ！ おーい！」

「……………ハア」

肩車されているため普段よりも視点が高くなったからか、すぐにトトリたちに気付いたピアニャが元気に手を振る。が、その下にいるス

テルクは対照的に元気が無かった。

……で、そんなピアノヤとステルクを見て真っ先に動いたのは、ピアノヤのことを愛めでているツェツイだった。

「ピアノヤちゃん、早く降りなさいっ！ はしたないわー！」

「えー、楽しいよ？ それに、今のピアノヤ、ちえちーよりもおつきい！」

「はいはい、私より大きくていいからこっちに来なさい」

「はーい」

もうすでに十分満足していたのか、あつさりと身を振りよながらステルクの肩から離れ、両手を伸ばしてきているツェツイのほうへと移り渡り抱きつくピアノヤ。そして抱きしめられたままゆっくりと地面に降ろされる。

「ええっと……ステルクさん、何してたんですか？」

大きなため息を吐いたステルクに、ロロナは少し遠慮気味におずおずと問いかけた。

「……祭りの途中、たまたま会ってな。何故かなつかれ、よじ登られ、力づくで振り解くわけにもいかず放置していたらああなった」

「あ、あはははっ……すみません、ピアノヤちゃんがご迷惑を……」

笑ってごまかそうとしてみたものの何を言えばいいかわからず困ってしまい、結局頭を下げるトトリちゃん。その謝罪にステルクは「別にキミが謝ることじゃない」と返した。

「へえ、なんていうか意外ね。ステルクさんって、子供に好かれやすかったりしたかしら？」

「何言ってるんの、むしろ真逆よ。目が合えば泣かれるくらいには、子供から嫌われてるわ」

「まっ、子供じゃなくても目が合わせられない人もいるようだけど」

メルヴィアの言葉にクーデリアが指摘をし、それに続くようにしてミミが呆れ気味に言う。その視線の先には、自覚があるのかビクツと体を跳び上がった二人……フィリーとリオネラが。当然だが、二人してステルクと目が合わないようにと顔をそらしている。『青の農

村』等でマイスを挟んで何度か会っていたはずだが、残念ながら未だに克服できていないようだ。

多少目つきがキツイのでしょうが無い部分はあるかもしれないが、相変わらず失礼な態度をされてしまうステルク。だが、彼にとつては目をそらされる程度は不本意ながらよくあることなためあまり気にしていない。……不本意ではあるし、「全く気にしていない」とは言えないのだが……。

そんなステルクに、追い討ちをかけるように失礼なことを言う人が一人。

「ピアニヤちゃん、大丈夫？ 何もされてない？ 怖くなかった？」

そう、ツエツイだ。「怖くなかった？」の前に「(顔が)」と付きそうな気がするが気にしたところで意味がないだろう。

ステルクとツエツイと言えば、『トトリのアトリエ』で顔を見て悲鳴をあげてしまつたうえ、「かわいいトトリちゃんを攫さらいに来た人攫さらいと勘違いしたされたという、結構無茶苦茶な初対面を果たした二人だ。

もちろん誤解はトトリによつてすぐにとかれ、ステルクが帰つた後にはどういう人なのかをトトリから聞いたため、「ちよつと顔が怖いけど親切な元騎士さん」という認識になっている。

……なっているはずなのだが、居候のかわいいピアニヤのことということもあつてか、まるでステルクが犯罪者か何かかのようにかなり失礼なことを言つてしまつている。

……で、そう聞かれたピアニヤはといえば……

「……？ ううん。ピアニヤ、怖くなかったよ？」

「わあ、ピアニヤちゃんすごい……。わたしなんて慣れるまで顔もちゃんと見れなかったのに」

心底感心したように言つたトトリの眩きが、ステルクの心に突き刺さつた。救いなのは、ステルク自身そのことにはある一件で薄々気づいていたため精神的ダメージが少なかったことだろう。……つまり、前に同じような思いをして耐性がついていたわけだ。救いとは何だったのだろうか？

と、トトリの眩きを聞いて反応を示した人がステルク以外にも一人……他でもないピアニヤだった。

「どうやら先程まで「怖い」とステルクが結びついてなかったらしく、トトリが言ったことを聞いて初めて「顔」のことなのだとわかったらしい。その結果、ピアニヤが改めて導き出した答えは……」

「この人の顔、怖くないよ？ ウォルクくんみたいでカッコイイ!!」

「ウォルクくん……って、確かマイスさんのところにいる『ウォルフ』のこと、ピアニヤちゃんがそう呼んでたっけ？」

「^彼マイスもそう言っていたが……私はそんなに狼のような顔をしているのだろうか？」

「だからといって乗られるのはさすがに困るのだが……」とステルクは付け足して言った。それは、『青の農村』ではモンスターによつてはその背中に乗ったりすることが出来るという事を知っているから言ったのだろう。

微妙に落ち込んでいるステルク。そんな様子の彼に困ったように笑ってから話しかけたのはロナだった。

「あはははっ……そんな流れで聞くわけじゃないですけど、マイス君見かけませんでしたか？」

「彼か……どうかしたのか？」

「今、ちよつと探してるんです。わたしが連れてつちやったほむちちゃんと約束があったみたいで……」

「なるほど。彼なら少し前に広場のあたりを少しウロウロした後どこかへ歩いて行くのを見た、ちょうどアツチのほうだったな」

そう言つてステルクは、『水着コンテスト』の会場のある方向を指差した。

……と、ロナをはじめ、その場にいたメンバーが釣られるようにしてその指差した方向を見たのだが……そこに、ギユウギユウ詰めとまではいかない人ごみを避けながら走ってくる影が見えた。

その人物はかなり慌てている様子で、トトリたちが気付いたよりも

かなり後……ほんのすぐそばに来るまでトトリたちのことに気付かずにはいた。

「ハア、ハア……！ あつ、トトリ……げっ!? メルヴィア!?」

「おーおー。終わってからちゃんとしてくれるなんて、「後でゆっくりお話ししよう」ってあたしとの約束、ちゃんと覚えてくれてたみたいねー?」

走っていた途中で無理矢理立ち止まろうとしてバランスを崩し、尻餅をつくペーター。その彼の前に立ってニツコリと笑うメルヴィアの後ろには、『水着コンテスト』でペーターと険悪な雰囲気になったクーデリアとミミもいて、その鋭い視線を向けていた。

なお、ペーターにとって唯一の癒しであろうツェツィは、ピアニヤにかかりつきりなため、ペーターが来たことにも気づいていない様子だ。

そんな三人に怯えていたペーターだったが、何故かすぐに立ち直り……メルヴィアに跳びついた。

「も、もうこうなったらっ、後はどうなってもいいから助けてくれ、メルヴィアー!!」

「え、ちよ、きやつ!?」

いきなりのペーターの奇行に、クーデリアとミミが引いた。そして、くつつかれたメルヴィアは珍しく女の子っぽい悲鳴を上げたかと思えば、ペーターを力任せにふりほどこうとし……ある事に気がついた。

「ちよ、ちよつと? なんであんな全身びしょ濡れなのよ?」

「なんでって、そりゃあ海にブン投げられたからで……だから、助けてくれて言ってるだろ?」

「いや、「だから」って話の流れが……は? 投げられた? 海に?」

わけのわからない話に首をかしげるメルヴィアだったが……その答えはすぐに目の前に現れた……。

「ペーターくん! どこに行ってるんですか!」

「ヒイツ!? き、来たあ!!」

その声にペーターは短い悲鳴をあげ瞬時に移動し、メルヴィアの背後に隠れる。

それ以外の全員はその聞きなれた声^{こゝろ}がした方向に目を向けた。そして彼女らが想像した通りの人物がそこにいた。

「まだ話は終わってませんよ！ ほら、他の人を巻き込もうとしないでください！」

「」「マイス（さん）（くん）!?!」「」

一同は驚きの声を上げる。なぜなら、いつもニコニコで温厚なイメージがあるマイスが、珍しくぶんぷんと怒っているのだ。なので、皆驚いており、声こそ出していないものの、普段表情に乏^{とほ}しいホームやステルクでさえも目を丸くして驚いていた。

なお、その声には「えっ、なに!?!」とマイスが驚かされていたりする。

「えっ、ちょっと待って。さつきペーターが言った「海に投げられた」って、もしかしてマイスが?」

疑い半分といった感じでマイスに問いかけるメルヴィア。周りも「え、うそ!?!」とその可能性に目をみはったが、マイスはと言えば……少し恥ずかしそうな……申し訳なさそうな顔をして口を開いた。

「うっ！ それは……ついカツとなつてしまつて手が出ちゃつたというか……でも、あれは全然反省しないペーターくんがいけないんだよ！」

段々と声色が弱くなりながらも最後まで言葉を続けるマイス。

……つまりは海に投げたこと自体は認めているわけだ。

「ま、マイス君も、そんなふう^{ふう}に怒つたりするんだね……」

「うん……ちよつと……ううん、かなり以外かも」

そこそこの年月を共に過ごしてきたフィリーとリオネラがそう感想をこぼした。

確かに、彼女たちの言う通りマイスが怒ることは本当に稀なことである。いつもニコニコしているだけでなく、はしゃいだり、悲しんだり、落ち込んだりと感情表現……というか、比較的感情が顔に出やすいマイスだが、怒っているのを見たことがある人はいないので?と

思えるほどみんなの記憶に無いのだ。

そうになると、みんなは必然的に「どうしてマイルスはそこまで怒っているのか？」と言う疑問を持つわけだが……そのことについては、すぐにマイルス本人の口から出てきた。

「何なんですかあの催し物は！ 無理矢理参加させられてる人ばかりで、楽しめてる人がほとんどいなかったじゃないですか!! 観ている人たちだけでなく参加者も楽しめないダメですよ!」

「「「「ああ、なるほど……」」」」」

街を中心に活動している面々とトトリが大体納得した様子で頷いた。が、逆に言うと、それ以外のメンバーはどういうことかわからず首をかしげた。

その中の一人、メルヴィアが手近にいたトトリにどうということか問いかける。

「なるほどって言ったけど、何か知ってるの?」

「何かっていうか、『青の農村』のお祭りというか、マイルスさんはいつもお祭りをする時は「みんな楽しく・賑やかに」っていうのが信条みたいで……いつもお祭りを開催する時はみんなが楽しめるように考えてるんだって」

「まあ、それでも『カブ合戦』とか危なそうなお祭りをやってるんだけど……」と呆れ気味に笑うトトリ。それを聞いてメルヴィアは「ふーん」と何とも言えない返事をしたが一応は納得できたみたいでそれ以上は何も聞いてこなかった。

そして……

「あれ? わたしも昔からお祭りにはけっこう無理矢理参加させられてて……マイルス君、一回も怒ってたことなかった気がするんだけど……?」

「それはあれなのでは? キミは今回のようになんだかんだ言っているけど優勝してしまうから、言うにも言えなかったからではないか?」

「それも彼を差し置いて……」

「うぐっ!」

心当たりがあるようで、ショックを受ける自称：姉。

「……って、あれ? 先生が優勝したっていうのを知ってるってことは……ステルクさん、見てたんですか!」

「んんっ!」

そして、弟子のほうに指摘され狼狽うろたえる元騎士もいたとか……。

「他の村のお祭りに僕の考え方を押し付けるつもりはありませんけど……それでもアレはあんまりですよ! せめて、事前に催し物の内容を伝えた上で了承を得て、参加者を決めるべきです!」

「ばっ、バカ言うなよ! そんなことしたら、参加してくれる人がいなくなるだろ!」

「みんなが参加したがるらないような催し物を開催しようとしなくてください! みんなが参加したがる、観たがるイベントを考えるのが運営ってものじゃないですか!!」

「んなこと言われても……水着が見たかったんだから仕方ないだろ!」

言い合いにもなっていないくらい一方的なやり取りをするマイルとペーター。

マイルのお祭りに対する熱意がどこから来ているのかというのも気になるところではあるが……それより、自分の素直な意見と欲望をさらけ出して、無意識に周囲の女性陣へのヘイトをためているペーターが心配である。自業自得ではあるが、骨も残らないのではないだろうか?

だが、そんな自分に迫る危機にも気付かず、先程の自分の言葉から状況の打開の糸口を見つけた(つもり)のペーターがニヤリと笑う。

「そ、それにつ! なんだかんだ言っても、お前だつて楽しかっただろ!?! 水着姿の女の子を見てウハウハだっただろ!」

海に投げられた恐怖心がまだ残っているからか少し歪んでしまっているが、勝ち誇ったように言うペーター。

しかし、先程から心配されているように、彼の周りにはあの『水着コンテスト』の参加者たちがいる。ついでにある人を気にかけている元騎士様もいる……幸い誰にも聞こえていなかったようだが、元騎士がペーターの言葉に「むっ……」と少し顔を赤くしながら反応してしまったのは秘密である。

ドヤ顔でマイルスと見たペーター。だが……

「楽しいわけないじゃないですか!!」

ペーターが言った後、ほとんど間を開けずにマイルスが返した言葉がそれだった。

その強い口調で放たれた言葉に、ペーターのみならず、他の人たちも目をみはった。そして、その中には「マイルスがお祭りに向ける熱意はそこまで……」と感心する人もいた。

………が。

「水着は、みんなを着て浜辺でお城作ったり綺麗な貝殻探して遊んだり、水をかけあったり対岸まで泳いで競争したりするから楽しいんであって、見ているだけで楽しいわけないじゃないですか!!」

さも当然のように言っている……が、残念。マイルスは間違っではないかもしれないが色々ズレていた。

そして、上げた例が妙に具体的である。

みんながポカーンとしている中、ここぞという時に何故か察しがいペーターが、例が具体的な理由を察してしまった。その結果……

「お……お前みたいな勝ち組に、俺たちの気持ちかわかるもんかー!!
うわあーくん!!」

悲痛な悲鳴をあげ、子供のように泣きながらどこかへと走って行ってしまった。

なお、そんな言葉を投げかけられたマイルスはといえば……

「勝ち……？ え、別に勝負してたわけじゃないはずんだけど……？」

言われたことがわけがわからず、逃げ出したペーターを追いかけるのも忘れてその場で首をかしげていた。

忘れていたとは言っても、マイルスはペーターが逃げ出してしまったことにすぐに気付き、「あっ！」と追いかけてしようとした。……が、その肩に手を置き、止めた人物が……メルヴィアである。

「えっーとさ。まだペーター^{アイツ}に言いたいことはあるかもしれないけど……今日のところは許してあげてくれないかしら？」

「でも……」

「いや、うん。気持ちわかるわよ？ あたしだってちよつとお話したいし……けど、さっきので心がポツキリいつちやつたと思うから、さすがに今日はね？」

まだ納得できていない様子マイルスだったが、「お願いー」と頭を下げられてしまっただけはどうしようもなかった。ムカムカは残っているものの、ここはメルヴィアの顔をたてて……とまで考えているかはわからないが、マイルスは手を引くことにした。

なお、他の女性陣も別にペーターを追うようなことはしなかったし、追うのを止めたことに何か言ったりすることも無かった。

何とも言えない沈黙の中、クーデリアがポツリと疑問を口にする。

「……ねえ。水着を着て遊ぶ話、やけに具体的だったけどそういう経験ってあるの？」

「え、うん。前にいた町の中に大きな湖があってね、そこで毎年の夏に『湖開き』があつて、夏の間は街の人たちでよく遊んでたんだ」

「ふーん……そう」

マイルスの返答に当たり障りの無い相槌をつくクーデリア。内心ど

う思っているかは本人以外わからないだろう。

そして……そうだ！ 『青の農村』にもあんな湖作つてみようかな！……と、とんでもない計画をマイルスが考え始めたことも、本人以外気付きようが無かった。

さて。ペーターとマイルスのゴタゴタで色々あったが、無事再会したマイルスとホム。だったのだが……

「この後は別れる？ どうする？」となったところで、みんな……というか主にロロナの意見で「みんな一緒にまわろう！」ということになった。それもマイルスだけでなく、なし崩しにピアニヤとステルクも。

そうしてようやく動き出した一行だったが……その途中「あつ、そういうば……」とメルヴィアがいい笑顔である話題を放り投げた。

「そういうえば、二人つて誰に投票したんですか？」

メルヴィアとしては空気を面白おかしいものに帰るための話題提供だったのだろう。だが、当の本人達……「二人」と言われて視線を向けられたステルクとマイルスからしてみれば、面倒極まりない話題だろう。それに、周りの女性陣が食いついたことも含めて……。

「わ、私はたまたま立ち寄っただけで、コンテストは別に……。それに！ あのようなものはいかなものかと思ひ、投票はしなかった」

心なしか顔を赤くしてそう言ったステルク。

メルヴィアあたりは「やっぱり堅物なのねー」という感じで流していたが、クーデリアは「……まあ、大体予想はつくけど」と、面白くない物というか敵でも見るような目をステルクに向けていた。

さて。我ががマイスだが……見たところ、話題を振られてもステル
クほど狼狽えたりはしていないようで、一見いつもと同じ様子だっ
た。

そんなマイスに視線が集まる。

「僕が投票したのは……………」

【*1*】

「僕が投票したのは、コロナだよ」

マイスがそう言った瞬間、その場の時間が止まった……………ように感じ
られた。特に、ステルクあたりはピシツと凍り付いたかのようにだっ
た。

そんな中で普通に時間が動いていたのは……………他でもないコロナで
ある。

「そっかー、マイスくんはわたしに……………って、えええつゝ!？」

見事なまでにテンプレ通りのノリツツコミである。

「えっ、えっ、どうして!? わたし、マイスくんのことだから「一番楽
しそうにしてたから!」とか言つてパメラに投票したつて思つてたん
だけど……………なんで!？」

「なんでって、それじゃあ『水着コンテスト』の主旨が変わっちゃよう
ね? ちゃんと「水着姿が良かった人」に投票しないと」

その言葉に、大抵の人が「マイスって水着コンテストの主旨を理解
できてたんだ」と少なからず驚いていた。

「お祭りの主旨をちゃんと理解していないで参加する人がいたら、他
の参加者も開催者側も大変なのは痛いほどわかつてるから……………」

過去にそういう経験があったのか、マイスは少し目をそらしながら
「あはははっ」とかわいた笑みを漏らす。

「で、でもでも! わたし、司会者さんも言つてたけど、子供っぽくな
かった……………? 体型はどうしようもないけど、水着は色とか形ももう

ちよつと挑戦すれば大人っぽくなつたんじやないかなーって思つてたりするんだけど……」

「ううん、全然そんなこと無いよ。むしろコロナっぽくて似合つてたんじやないかな？ でも、別のタイプにも挑戦してみるのはいいことだと思う。今度、水着を着る機会があつたら思い切つて見たら新しい発見もあるはずだよ！」

「えつ、そ……そうかなあ？ えへへへつ……♪」

「マスターは、おにいちゃんの中で「コロナっぽい」^が「子供っぽい」と大して差が無い認識だという可能性を考慮してないのでは……？」
「うん、してないと思うよ……。けど、先生は嬉しそうだから言わない方がいいんじゃないかなあ？」

ちよつと顔が緩んでいるコロナを見て、妹兼元助手と弟子がそんな会話をしていたとか……。

「色々思うところはあるけど……あんな素直ストレートに自分の感想を言つてるのを見ると、清々すがすがしくて好印象よね」

「それがどうかは置いとくとして……何故私を見ながら言う」

「ん？ 別に何でもないわよー？」

そんなやりとりが、受付嬢と元騎士の間であつたとか、なかつたとか……？

5年目：イクセル「女じゃなくても三人寄れば」

サンライズ食堂

イクセル・ヤーンは『サンライズ食堂』のコックである……何言ってるんだ俺は。

ともかく、今日も今日とて包丁を走らせ、鍋をかき混ぜ、フライパンを振るい、料理を腹を空かせた客たちの前へと運んでいた。

……時々、「ちゃんと休んでるか？」と心配されたりもするが、そんな心配されるほどでもない。この生活リズムになってからは結構経っていて慣れているし、その気になれば休みの二日や三日程度取れなくもない。それに、今の生活元々好きでやってる仕事だから別に苦でも何でもないというのもある。

まあ、そんな俺のことはさておき……今日も『サンライズ食堂』は賑やかだ。昼間とはまた違った空気の、酒飲みたちが大半を占める大人の時間っていうやつだ。

そんな中に一人……俺はもうとつくに見慣れてしまったが、夜の雰囲気にはそぐわなさそうな外見見た目をした奴が、連れの二人と一緒にあってテーブルを囲んでいる。

「……って事がきつかけだったんです。それからマークさんとは付き合いがあつて、今回で手を貸してもらうことに決めたのは、その付き合いから来てるんですよ」

「あえて補足しておく、あくまで仕事上の付き合いだけだったんだけどね？　でも、あのお嬢さん繋がりで接触機会が増えたせいで、何か多少は気の許せる相手にいつのまにかなっちゃってたけど」

「まあいいじゃねえか、マー坊ぼう！　マー坊が村長さんがこうして一緒に飲むようになったのも何かのご縁ってやつよ！　将来、それが思いもよらないことに繋がるかもしれないねえぞ？」

「苦労が増える予感しかないんだけどねえ」と、嫌そうな顔をしな

がらジョッキを傾けたのは、この『アーランドの街』でも珍しい機械技術者であるマーク・マクブライン……自称「異能の天才科学者、マーク・マクブライン」だ。

そのマークと対面する位置にあるイスに腰かけて豪快に笑っているのは、『サンライズ食堂』のすぐ隣の店『男の武器屋』の店主であるハゲル・ボールドネス。おやっさんも勢いよくお酒をあおっている。

……で、その二人に挟まれるような位置取りに座っているのは、ご存知「見た目は少年、中身も少年」な『青の農村』の村長マイルスだ。酒は言うほど飲んでいない。理由は長年の経験でわかっている。こいつはどこか遠慮がある……のではなく、時折気分的な時もあるが、大抵相手によって飲み方を変えている。今回の場合、マークやおやっさんと飲むのは初めてで最初は様子見してて、二人が思った以上に飲みだしたから自主的に介抱する側にまわることにしたんだろう。店側からしてみれば、酔っ払いが三人出来上がってしまうより凄く楽でありがたいんだが、どう考えても損な役回りだ。人がよすぎるとどうか、変に気を遣い過ぎていうか……まあ、マイルスらしいと言ってしまうえばそこまでなんだけどな。

そんなマイルスをよそに、より酒を飲むペースが上がってきているマークとおやっさんだが、二人の間には遠慮とかそういうものはなかった。

というのも、この二人は何故か異様に仲が良い。こうやって『サンライズ食堂』に飲みに来るのも初めてではなく、度々来ては酒飲んで、酔払って、騒いで帰ってく。実のところ、ここ最近では夜の『サンライズ食堂』の常連だったりする。

歳は離れているし、そんな接点も無いだろうからこんなに仲良くなるとは俺からしてみても驚きだった。……まあ大きかれ小さかれ何かあったんだと思う。それこそさつきおやっさんが言っていたような「ご縁」ってやつなのかもな。

「おーい。もう一杯、追加してくれないかなー？」

「マー坊もイケル口だな！ よしつ、俺も負けちゃいらねえ……」

こつちもジョッキ追加だ!!」

カウンター奥の厨房で、別の席の客の料理を準備をしながら聞き耳を立てていた俺の背中に、そんな声がかげられた。

「あーい！　すぐ用意するから、大人しく待ってろよー！」

知った顔の常連客ということもあつて多少普段の接客口調よりも砕けた言い方で返事をする。

そんな俺の耳に、「楽しく飲むのに、別に競わなくても……」というマイスの呟きがギリギリ聞こえた。……あいつのことだし、他人が楽しそうに飲んでいるのは止めたり出来なんいだろうけどなあ……。

さて。料理を終え、客に運び、新しく酒を用意した俺は、この酒を注文したマークとおやつさんのほうへと向かう。

「だいたいキミは非常識すぎるんだよ。キミにとっての普通が全員にとっての普通だとは思わないで欲しい」

「そのことはこの十年ちよつとの月日で十分にわかっていますよ。だからマークさんにはああして事前に説明をしたんです」

……何の話をしているかはよくわかんねえけど、いちおう言っておきたいことがある。

マークが言ってることは、マーク自身にも言えることじゃないのか？

そして、マイス………お前はいくらかマシになったのは確かだが、俺から見ると未だにけっこうズレてる気がするんだが？

視線と言葉を交わす二人の間に割って入ったのはおやつさん。

「まあまあ、村長さんもマー坊のことも考えてのことだったって話だろ？　別にいいじゃねえか。それに、俺も話は聞きはしたんだがけっこう面白そうな話だったよな。俺としては協力は惜しまないつもりなんだが……マー坊はどうなんだ？」

「それは、まあ……ハゲさんの言う通りだと僕は思いますよお？　研

究時間は削られてしまうけど、僕個人への見返りも十分にあるし……それに、この国が抱えている問題への良い一手になると思ってますから」

「なんだ？　なんか随分とデカイ話になってるみたいだが……？」

「あつ、イクセルさん」

俺の言葉に真つ先に反応したのはマイスだった。

俺はマークとおやっさんに酒の入ったジョッキを渡しながら、さっきの話のことをそのまま聞いてみることにする。

「んで、結局何の話だったんだよ？　国の抱えてる問題とか言ってたけど？」

「なに、この国の教育への注力の足りなさを嘆なげいているだけさ」

「教育？」

マークの返答に俺は首をかしげた。

教育と言えば、いわゆる「お勉強」ってやつだろう。正直なところ俺はあんまり関心が無い……というかそう気にするものじゃなかった。というのも……

「あれだろ？　読み書きとか計算とか……そんな感じだろ？　注力も何も、問題無いと思うんだが……普通にどこの家でもやってることだし」

「うん、やってるね。でも、僕が言ってるのはもう一步先……もつと高い基礎能力や専門的な能力を育てる教育の事なんだ」

「どうということだろう？」

俺のそんな疑問が顔に出てしまっていたのか、「それはですね」とマイスが説明を始めた。

「とつても凄い技術なのに『錬金術士』がほとんどいないことや、機械技師と呼べるような人がマークさんくらいしかいないことは、そういう人たちを育てられる環境が無いからってことです。それに、専門的な学問だけじゃなくて基礎的な読み書き・計算の能力もあまり高いとは言えないのが現状で……ほら、『冒険者ギルド』が今はちよつと落ち着きましたけど、少し前までは人材不足で大変でしたよね？　あれは

処理しないといけない書類の量が処理できる量をオーバーしてしまつてできる人が少なくて続けられる人がごく少数だったからだそうです」

「性格とかの適性もありますけど、基礎能力の問題かと」と言つてマイスは話をめた。

まあ、言わんとすることはわかつた。

確かに、錬金術士や機械技師の少なさについては俺も疑問に思ったこともある。それに、『冒険者ギルド』のほうもクーデリアが「休みがほとんど無い……」と数少ない休みに『サンライズ食堂』に来てぼやいていたことがあつたのを覚えている。

だが、それをどうするっていうんだ？

その疑問に答えたのはおやつさんだつた。

「んじゃあ、興味を持つて行動力がある子供の頃から色々教えたりやらせてみたりした上で、きちんと学べる場を用意してやろうつて話になつたつてわけだ……村長さんのところだな！」

その言葉に、俺は「そうなのか？」とマイスのほうへと顔を向けた。

「ええつと……本当は他にも色々あつたんですけど、今回の学校の設立の件に関しては、だいたいその通りです」

「……………ん？」

「まあ、そういう反応になるよな」

ゲラゲラ笑うおやつさんを無視して、俺はいちおう確認のためにマイスに問いかけてみることにした。

「今、学校つて言ったか？ 学校つてあの学校なのか？」

「あはははっ、おやじさんもマークさんもそうでしたけど、凄く驚きますね」

「だつてなあ、話には知つているけど学校なんてもんは『アーランド』には無いし……いや、どういふものかくらいは知つてるけどよ？」

「その辺りは、良くも悪くも機械の恩恵なんだろうね。よほど精密なものでない限り大抵の人に使えて、なおかつ日々の生活の糧を十分に

得られる。その恩恵が浸透し当たり前になった事で、今ある以上の物を開発しようとしなくなったり、知識や技術を蓄える必要性も薄くなったわけだ。その程度で満足してしまうとは、僕としてはどうにも理解し難いけどね」

ミスと俺のやりとりの途中で、そうマークが持論を展開した。珍しく機械に対して否定的……かと思つたが、どうやらどちらかと言うと使う人間側のほうを否定しているようだ。

ミスのやることにはもう驚かないくらいに思つてたんだが……これはさすがにそうは言つてられないな。色々と予想外だつた。

だが、よくよく考えてみれば、ミスは前々から学校の設立こういふことを考えていたんじゃないだろうか？

というのも、前に『青の農村』で『体験祭』というお祭りが開かれたことがあつた。料理・鍛冶・薬学・農業といったことを参加者が実際に体験してみるという趣旨のイベントで、俺も料理体験の手伝いを頼まれて協力をした。

今思えば、あのイベントを開催した時点ですでに学校の設立を考え始めていたような気がしてならない。何かの物事を大人数に教えるというものの練習のような……さすがに考え過ぎか？

「あつ、でもこの話、本当はトップシークレットですから、『青の農村』の今度のお祭りまで秘密にしといてください！」

「んなこと言われてもな……自信を持つて言うことじゃないかも知れねえけど、ついついぽろつと喋つてしまふような気がするんだよなあ」

ミスには悪いが、本当に言つてしまふそうなんだよな……。それに、今俺たちが話しているのは『サンライズ食堂』の店内。普通に別の客たちにも聞こえていたと思うから、今の話を完全に秘密にするつて言うのは難しいだろう。

けど、ミスもそのことは気付いているみたいで、不満そうにしながらも悔しそうにし「ムムム……」と俺を見つめて……本人は睨んで

いるつもりだろうが……きた。

そんなマイスの肩をマークがポンポンと叩く。

「まあ、いいじゃないか。アツチを喋ったわけじゃないんだし……キミとしては、アツチの事のほうが悪くおきたかつたんだろう？」

「それはそうですね、あとちよつとでできる今回の件の案を国に提出する前に噂が流れるのはちよつと……」

そう言つて、何かを考えたのか数秒間目を瞑つて黙つた後、短いめ息をついたアイス。

俺はと言えば……

「アツチ？」

「あー、それに関しては俺も聞いてねえんだよなあ。けど、学校と同じで次のお祭りん時に発表するつて言つてたぜ？」

おやつさんとそんな話をしていた。

……結局、謎は謎のまま……というか、気になることが増えてしまったまま夜は更けていったのだった。

なお、その後もハイペースにお酒を飲み続けたマークとおやつさんは見事に酔っ払い、残されたほぼ素面なマイスは予想通り大変そうにしていた……。

5年目：トトリ 「予想外の……!？」

青の農村・マイスの家前

「こんにちはー!」

ノックをして、マイスさんの家の玄関の前でそう元気に呼びかける……けど、家の中からの反応は全然無くていい。

でも、そのくらいのは慣れていい。わたしにも覚えがあるけど、調査とかに集中していると他のことには全然気づかなくなる、なんてことはよくあることだもん。……ホントかウソか、メルおねえちゃんはその隙スキにわたしの……ううっ、アレ本当だったのかな？

……と、とにかく! こういう時は一回マイスさんの家の中でも『作業場』って呼ばれる『錬金釜』や『炉』とか作業のための設備と、それらで作った物が保管されている場所に行ってみるのが一番だ。

わたしは玄関の扉の取っ手に手をかける。ちよっと力をかければ、いつものように普通に扉を開くことができた。

「おじやましまーす」

返事は無いだろうと思っていながらも、いちおうそう言いながら家に入る。そして、入ってすぐのソファやイス、テーブルが置かれている広い室内を見渡し……誰もいないことを確認してから、入って左手のキッチン……ではなく、反対の右手の方向にある扉、『作業場』に続く扉のほうへと歩いてく。

「マイスさん? いませんか?」

扉を開け、顔をひよっこり覗かせて『作業場』の中をしてみる……けど、そこに今日はマイスさんはいないみたいでだった。

……その後、二階の寝室や家の裏手にある『離れ』や『モンスター小屋』も覗いてみただけど、マイスさんの姿は何処にもなかった。

これは完全に留守……なんだろうけど、いくらなんでも不用心じゃないかな?」

比べれば大したこと無い金額なのはわかってるけど……比べる相手が間違ってる気もするけど。

ええつと……話はちよつとズレちゃったけど、つまり………用件を伝えるにはミスさんがいないといけなくて、いないとなると困るけど「忙しいのかも」って遠慮するべきか迷って、ならそもそも誘うこと自体色々迷惑をかけちゃうから遠慮しないといけない気がしてきて……

「ミスさんに一言バシツと言ってもらえるだけであんまり悩まなくてよくなるんだけど、今ココにはいなくて……あれれ？ それは最初に考えてた気が……？」

なんだか、今日の前にある問題がグルグルと巡り巡って戻って来てしまった気がする。

「うーん、どうしよう……えつと、ミスさんがどこに行ったか、あなたは知らないよね？」

首をかしげながら悩んでいたんだけど、ふと目に入った相手に声をかける。

それは、ミスさんの畑そば……畑と家の間の空間に悠然と立っている。大人の男の人の身長より少し大きいくらいの高さの太い胴に、てつぺんに双葉の大きな葉の生えた反球体のような頭、肩から伸びる地面まで届く長さのゴツイ腕、他のパーツと比べると頼りなさげな小さな脚、それらがついた ひとがた 人型土の塊。

昔はただの土の塊だと思ってたけど、今は知っている。これが『プラントゴーレム』という存在で、ミスさんが普段使っていたりわたしも持っている『アクティブシード』と同じく『種』から成長したモンスター……みたいな味方だということを。

その『プラントゴーレム』だけど、わたしの問いかけには特に反応してくれないみたいで、土の塊なのにまるで生き物が呼吸をしているかのように肩などが上下に揺れ続けていた。

……もしかしたら、本当に呼吸をしているのかもしれない。口は見当たらないけど。

でも、『プラントゴーレム』ってよくわかってないらしいし、そのくらいしててもおかしくないのかも？　そもそもマークさんがマイスさんを嫌っていた大きな理由がこの『プラントゴーレム』だったらしく、いつだったか「わからないなら、実際に調査したみよう」とかそんな感じになって……それからどうなったんだろう？

「マークさんとマイスさんといえば、農業用機械ロボットとかも作ってたはずだけど、最近全然見てない気が……どうなったのかな？」

正直、農作業でマイスさん以上の働きをする機械なんて作れっこないと思うんだけど、あのマークさんがだからって早々に諦める気もしない。「これが出来ないんじゃない？」「出来るようにしたよ！」「こういう判断も出来ない……」「なら、次はそうしてみせよう！」「じゃあ次は……」って感じに、いたちごとこになってたり……？

「いやいや、でも……」と、いろんな可能性が浮かんできて気づけばついつい考えてしまってた。

……と、不意に視界が陰かげった。

最初は「太陽に雲がかかったかな？」って思ったんだけど、そうじゃないことはすぐにわかった。だって、わたしの視線の先の畑には陽の光がちやんと降り注いで、陰になってるのはわたしのいるところだけだったから。

じゃあなんで？

そう思っただけで反射的に空をみあげるよりも早く、わたしの肩に何かが触れた。

「へっっ。」

と思っただけで、脚のほうにも何かが……!?

肩を見てみると、何やら薄茶色の四角い棒のようなものが見え……って、これってどこかで見たような？　それもついさっき……あっ!!

思い出した。あの『プラントゴーレム』の指って確かこんな感じ

だった気が……………

そう気付いてすぐに、バツと『プラントゴーレム』がいた方向を見ると、その高い身長のため上から見下ろすように見てくる……………やけに頭の上の葉っぱがピコピコ動いている『プラントゴーレム』が、身体を少し傾けて左手をわたしの脚に、右手をわたしの肩に伸ばしているのがわかった。

「ちよ、なにこれ……………ひやわああ!？」

わたしがそれを確認したすぐ後に、わたしの視界は大きく動いた。浮遊感と少し回ったような感覚……………。

どうしてそうなったのかはすぐにわかった。地面に立ってたはずなのにいきなり持ち上げられたのだ。脚を肩を持たれて、まるで『お姫様だっこ』……………じゃなくて、『プラントゴーレム』がバンザイするようにしてわたしを頭の上まで持ち上げているみたいだった。

そう。それはまるで、前にわたしたちを助けてくれたモコちゃんが『スカーレット』を投げ飛ばす前に持ちあげてた、あの時みたいで……………

「え、ええつと……………プラントゴーレムさーん？　もしかして、わたしを投げたり……………しない、ですよね……………?」

その可能性が頭によぎってしまつて、つい体を強張らせてしまう。そんなわたしを安心させてくれる言葉を『プラントゴーレム』が言ってくれるはずも無く、いつも通り黙ったままで……………答えは言葉じゃなくて行動で返ってきた。

「ぎゃあああああーっ!？」

つい悲鳴をあげてしまつてるけど、別に投げられたわけじゃない。でも、わたしの視界は少なからず揺れ、視界の先の風景はドンドン右から左へ流れて言っている。

そう。今、わたしは……………

「なんで……！… なんで走ってるの〜!？」

持ちあげられたまま『プラントゴーレム』が走り出し、そのまま道を進んで行つてた。

わたしは進行方向の横を向いた状態で脚と肩だけ固定され、ガツクンガツクン揺れている。……初めてペーターさんの馬車で旅した時、すつごく気持ち悪くて今もあんまり好きじゃないけど、それと同じくらい乗り心地(?)は悪い。というか状態が状態だけに、そして『プラントゴーレム』が何を考えてるのかわからないだけに、命の危険すらうつつすら感じられる。

気づけば、通り過ぎて行く景色に畑が無くなつてた。きつともう『青の農村』から出てしまつてるんだらう。

「というか、どこに行つてるのこれ!？」

……えっと、いい加減止まってくれないと、そろそろ気分が悪くなつてきて……うぶっ……。

アーランドの街・門

「トトリちゃん、大丈夫？」

「う〜……なんとか……」

気分が悪くてその場にへたり込みフラフラしているわたしの顔を、片膝をつきながら心配そうに覗きこんでくれるのはマイスさん。

そう。『プラントゴーレム』が、街と外との境界である門の前でようやく止まったかと思えば、いきなり地面に降ろされ、そこにいたのがマイスさんだったのだ。

こんなことをした『プラントゴーレム』はどうしてるのかと思ひ振り返してみると、へたり込んでいるわたしの後ろで、いつものように静かに立っているだけだった。……でも、気のせいかこころなしに「ドヤア……」としてる気がする。わたしが勝手にそういうイメージを持つてしまつてるだけかもしれないけど……。

「えーと……いちおう聞くけど、どうしてこんなことに？ この子に運ばれてきたように見えたけど……？」

「それが、わたしにもさっぱりで……マイスさんの家に行って、マイスさんがいないからどうしようかなーって考えてたら、いきなり持ち上げられて、それで……」

わたしがあつたことを説明してみたけど、マイスさんは困った顔をして首をかしげてしまった。

「うーん？ この子は相手が外敵じゃない限り勝手に手を出さないし、基本的に種を植えた僕が命令しないと何もしないはずなんだけど……？」

「そうなんですか？ じゃあ、なんで……？」

「前に自主的に畑周りの雑草取りをしてくれてたことがあつたけど……もしかしたら、僕を探してたトトリちゃんを、僕のところまで案内してくれたとか？」

「えー、「マイスさんはどこー？」って聞いてみたりしましたが、そんなまさか……」

ヴオン

わたしと、目の前にいるマイスさんの動きがピタリと凍ったように固まった。

そして、首だけゆっくりと動いて、謎の音のした方向……『プラントゴーレム』が立っている方向を見た？

「まさか……？」

「本当に……？」

ヴオン

わたしとマイスさんの問いかけに、先程聞こえた謎の音と共に『プラントゴーレム』がゆっくり頷いた。……初めて反応をしてくれた瞬間だった。なんだか嬉しくないけど……。

わたしはマイスさんへの用事なんてすっかり忘れて、同じく困惑しているだろうマイスさんのほうを見た。すると、ちょうどマイスさんもわたしを見てきて、視線が重なった。そして……

「ふ……不思議な子もいるものだね」

「マイスさんが言うことですか、それ？」

5年目・マイス「塔での決戦！……その前に」【*2*】

【*2*】

東の大陸・塔への道

僕の元を訪ねてきたトトリちゃんから、「『塔の悪魔』を倒す」と伝えられたのが昨日のこと。

僕らは『トラベルゲート』を使い『東の大陸』に移動し、今、その悪魔とやががいるという『塔』を目指して、雪が降り積もり道があったかも確認できない雪原を歩いている。

塔へと向かっているメンバーは過去最多であろう八人プラス一人。トトリちゃん、ミミちゃん、ジーノくん、メルヴィア、ロロナ、マークさん、ステルクさん、そして僕。最後の一人は、生贄役のパメラさんだ。

道中、悪魔のいる『塔』の影響なのか。全くと言っていいほどモンスターの気配がしないため各々自由気ままに、気になるものを見つけるとは近寄ってみたり、誰かと一緒に話ながら歩いていたり、これから大物を倒しに行くというのになんだかいつも通りな感じだった。

そんなことを考えながら歩いている僕は、一人でこれからの戦闘の事を考えていた。

人が多いというのは、手数的にもスタミナ的にも良い点がある。……が、同時に立ち回りや連携が難しくなってくるというのも事実だ。敵の大きさにもよるけど、大人数だとかえって戦いにくくなってしまふ可能性だったある。

僕がここまで戦闘のことを意識しているのかというと、この前、最初に『東の大陸』にたどり着いた際の航海……そこで『フラウシュトラウト』と戦った時に、戦略の重要さを感じたからだ。あの時のように、海の船の上という特殊な状況ではないとはいえ、どうしても慎重になってしまう。

「ロロナとトトリちゃん以外は、みんな基本接近戦主体だから……面倒だとか思わないで、やっぱりここは僕が後衛にまわるべきなんだろうなあ」

というわけで今回は気分一新、いつもとは違う用意をたくさんしてきてるんだけど……ぶっつけ本番な部分も沢山あるから、大丈夫かちよつとだけ不安だったりする。

それに、いきなりいつもの無いような動きを要求するわけにはいかないから、あくまで僕の中だけで「ああしよう」「こうしよう」と考えているだけで、戦略とは言えないレベルだろう。……でも、もしもの事態も考えて、緊急で指示を出すことも想定しておいた方が良いかもしれないかな？

「まーいーすーマイスくん?」

「ん? あ、あれ? ロロナ?」

さつきまで先頭あたりでトトリちゃんやパメラと一緒に歩いてたはずのロロナが、気付かないうちに僕の隣にいた。先頭のほうを見ていると、トトリちゃんとパメラの周りにはミミちゃんとジーノくんがいた。ロロナと入れ替わったんだろう。

となると、あとはなんで僕の所に来たかなんだけど……。

「それでどうかしたの? 『塔の悪魔』との戦闘の事でトトリちゃんから何か伝言とか?」

「んえ? 別にそう言うわけじゃなくって……というか、トトリちゃんとはパメラが幽霊だって事とか、会った頃のことを話してただけで……」

ああ、なるほど。

確かに、『塔の悪魔』の話をしに来てくれた日に僕が説明した時点でトトリちゃんはあんまり納得できていない様子だった。だからトトリちゃんは、本当に生贄になる前にパメラ本人と事情を知っているだろうロロナに聞いておきたかったんだと思う。

「あれ? じゃあなんで僕のところ?」

「ええつとね、なんとなくチラツて見た時にマイルス君がなんだか難しい顔してたから、どうしたのかなーって思ってた。ねっ、ねっ？ 何か悩み事があるなら、わたしに相談してくれていいんだよ！」

昔、アストリッドさんに言われたりもしたけど、僕って本当にすぐに顔に出るんだろうなあ。

そしてロロナは何もしていないのに何故か得意げな顔をして「さあさあ！」と、僕に相談してくるようにと詰め寄ってきた。

でも……………。

『塔の悪魔』の大きさとかがわからないから、どう立ち回ったらいいかわからない、って話だからロロナでも……………というか、誰に聞いても答えが出てこない類の悩みなんだよね……………」

「あはははっ、それはー……………うん、わたしもわかんないかな」

ヘラリと何かを……………頼ってもらおうとしたのに何のチカラにもなれなかった後ろめたさを……………隠すかのように笑ったロロナだったけど、すぐに悲しげな顔になりガツクリと肩を落とした。知ったかぶりをしたり、嘘をついたりすることは、ロロナにはできなかったんだろう。

「でも、なんだか意外だなあー。マイルス君がそんな真剣に戦うことを考えてるなんて……………なんだかもっと「なんとかなるって」って感じであんまり考えてないんだと思ってた」

「ロロナの言ってる通りで大体あってるけど、今回は相手が相手だしさ。それに、ピアニヤちゃんの故郷は絶対に守ってあげたいからね」
「ああ、そっか……………そうだね」

そう言ったロロナは、視線を正面方向に見える『塔』から左手の方向にずらしていた。

その視線の先に見えるのは、針葉樹林の向こう側……………遠くに見える独特の形をした住居群。そう、ピアニヤちゃんがいた村だ。唯一林に全く隠れていない一番上の建物が、以前トトリちゃんに色々話してくれたピルカさんっていうおばあさんのいる家だったはずだ。

そんな事を考えていると、不意にロロナが「よし！」と意気込みだ

した。

「うんっ！ トトリちゃんのこと守ってあげなきゃだけど、わたしも先生としてピアニャちゃんのためにも頑張らないと！」

「……ん？ 先生って、ピアニャちゃんのこと？」

トトリちゃんはロロナの弟子だ。だからロロナはトトリの「先生」ってわけだけど……今のロロナの言い方だと、まるでピアニャちゃんの先生でもあるような感じがしたんだけど……？

「あれ？ 言ってなかったっけ？ ちよつと前にトトリちゃん家ちでピアニャちゃんに『錬金術』を教えてあげたんだ。ピアニャちゃん、飲み込みが早くてすごかったんだよー」

「へえ……あつ、そういうえば前にピアニャちゃんがパメラさんのお店で手伝いしてるって時に「ピアニャが作ったのも売ってる」みたいなこと言ってたけど、アレって『錬金術』で作ったものだったのかな？」
僕がそう言うと、「たぶん、そうだと思うよ」とロロナも頷いてくれた。

「でも、あの時よりも前ってなると……いつの間に教えに行ってたの？」

ちよつと気になってつい聞いてしまったんだけど、何故かロロナは「あー……」と謎の声をもらしながら目をそらしてきた。

「教えに行っちゃったっていうか、たまたまトトリちゃん家でお世話になってたわたしに、トトリちゃんが調合してるのを見て興味を持ったピアニャちゃんが「教えて！」ってせがんできたんだよね」

「たまたまってことは、他に別の用事があつて来てたの？」

「ええつと、そういうわけでもなくて……」

菌切れの悪いロロナに、さすがの僕も首をかしげてしまった。一体、何があつたというのか……それとも、それほど言い辛いことでもあつたのか……？

「実は、わたしもよくわかんないんだよね……。トトリちゃん言うには、ベロンベロンに酔っぱらったわたしがいきなりアトリエに来たとか何とか……？」

「それって、『バー・ゲラルド』で飲んでたってこと？」

「うん、違うよ？ だってあの日は確か、昼間っからイクセくんのところでお酒を飲んでて……」

昼間からお酒って……それも、話によると凄く酔うくらいに飲んでみたい。なんだか、不自然でロロナらしくないっていうか……。

自棄^{やけ}飲み？ って、ロロナはそんなことしないで、トトリちゃんあたりに泣きつきそうだなあ。……弟子に慰めてもらう師匠ってどうなんだろう？

僕がそんなことを考えているうちに、ロロナは当時の記憶を掘り返していたようで……ハツとしたかと思えば手を叩いていた。

「そうそう！ あの時はくーちゃんと一緒に、それでくーちゃんに……あーっ!? そうだ、思い出した!!」

いきなり大声を上げたかと思えば、「あつ、でも今はミス君が……でも、これってチャンスだったたり……？」と、おそらく本人は独り言のつもりで小声でブツブツ言っているんだろうけど、僕の聞こえていた……何のことなのかはさっぱりだけでも。

「うん……うん、そうだよな。よし、決めた!」

何かを決めたというよりは、まるで覚悟を決めたかのような雰囲気があるロロナ。

けど、いったい何を決めたっていうんだろう？

「ねえ、ミス君……。ミス君、わたしに何か隠し事してるよね？」

ロロナにしては珍しく真剣なトーンでの質問。

心当たりは……ある。というか、普通にあの時にこういう状況はすでに覚悟していた。

「ミス君がわざわざ隠してることだし、言い辛いんだろうなってことはわかってる。わかっているんだけど……やっぱりミス君本人の口からちゃんと聞きたくて……」

「ロロナ……」

そこまで真剣に、真正面から言われたら答えるしかないだろう。色々不安もあるけど、それは全部話してから考えればいい。

僕はさきほどのコロナのように、覚悟を決めて口を開いた。

「……やっぱり、もうコロナの耳にも入っちゃったんだね。学校を作るって話」

情報漏洩した場所がアトリエと同じ通りにある『サンライズ食堂』だったから、知って当然と言えば当然だろう。まあ、あのことはすでに仕方のないことだと割り切ってる。

「そう、学校を……って、そうじゃなくて、わたしが聞きたいのはマイス君の……えっ？ 学校？」

「基本的な教育に加え、希望で『農業』とか『鍛冶』とかも教えられるようにする予定で、その中に『錬金術』も入れる予定はあって……でも、実現できるか分からないし、国に提出した「学校設立の案」が通るまではコロナには伝えずじやうって決めてただけど……もうばれてるなら隠す必要も無いかな」

「え……ええええっー!？」

大声をあげるコロナ。……って、あれ？ これって何かおかしくないかな？

だって、コロナはどこからか学校の話聞いて「マイス君の口から聞きたい」って言ってたんだよね？ だったら、そんなに声をあげてまで驚く必要は無いとおもうんだけど……？

いや、もしかしたら、これまでの付き合いの中で一番驚いているかもしれない……と思ったのは、僕の勘違いなのかな？ もしくは、声をあげたのは、まだ国からの許可がおりてないことに対してだったのかも？

そのどっちが正しいのか……もしくは、どちらでもないのか……どうなのかはわからないけど、隣を歩いているコロナの頬ほほはプクーツと

膨らんでいた。

「ミス君、ズルーい！ 前に『体験祭』の時に言ったよね!? 今度そういう事する時はわたしもするって！ 何で言ってくれなかったの!!」

「えっ。だから正式に決まったわけじゃないから、まだ言うわけにはいなくて……ほら、期待させちゃって結局ダメだったら悪いし」

「それでもだよ！ それに、トトリちゃんやピアニちゃんだけじゃなくて沢山の人に教えたいから、わたしも『錬金術』の学校を作るの考えてたんだもん!! 教科書だつて作ってるんだよ!」

「ええっ!? そうだったの!?!」

「今度、持って行って見せてあげる！ ううん。今度じゃなくて、これが終わって帰ったらすぐ行くんだから!!」

叫んだり、何か言い合つて騒いだりして賑やかなミスとロロナを、振り返つて見つめるトトリ、ミミ。

「後ろに行った先生、なんだか賑やかだね……今日はピクニックだっけ?」

「たくっ、ミスもミスよ。これから大物と戦うつて言うのに緊張感もなにもないじゃない」

「ついさつきまで雑談をしていた二人がそんなことを言うという、「お前が言うな」状態だったのだが、残念ながらそこを突っ込む人はいなかった……。」

そして……。

「……………」

賑やかな二人をジツと見つめる人物が、トトリとミミ以外にももう一人いたそうな……。

5年目：トトリ「塔での決戦」

東の大陸・リヒタインツエーレン塔 入り口

「ふう……そろそろいいかな？」

天高くそびえる塔の入り口、その扉の前でわたしはあたりを見わたした。

問題は……うん、無さそう。もう大丈夫かな？ 何人かとは目が合って、その中にはわたしの意図を読み取ってくれたのか、頷いてくれた人もいた。

今回、『塔の悪魔』を倒すためにここまで来たわたし達だけど、この入り口にたどり着いてから、すでに少し時間が経っている。そう、ちよつと休憩を取っているのだ。

別に、ここに来るまでにモンスターと遭遇して戦ったから……とか、そう言うわけじゃない。

休憩を取る事になった、その原因は……塔の入り口の脇に転がっている、元パメラさん。パメラさんっぽいけどちよつと違う、気は全く無い等身大ぬいぐるみ。

ええつと……何て言えばいいんだろう？

幽霊のパメラさんが歩いたり物を触ったりするための肉体の代わりで、それ身体を作ったのは先生の先生で先生もちよつとだけ関わって、首のボタンを押したらヒラヒラのドレスを着たパメラさんが飛び出してきて、そのパメラさんには足が無くて、ちよつと透けてて、浮いてて……と、とにかく、本当に幽霊だった。

そんなわけで、一応聞いてたわたしでも驚いちやうくらいなんだから、事情を全く知らなかった人はもつと驚いたわけで……それで、ちよつと落ち着くためにちよつと休むことになっちゃったわけだ。

驚きのあまり呆然としたり、叫び声を上げたり、腰を抜かしたり……あつ、ある意味一番反応が怖かったのはマークさん。なんていう

か、その……人を見るような目をしてなかった。いやまあ、幽霊は人として数えていいのかわかんないけども。

当のパメラさんは、驚くわたし達を見て喜んで、わざと驚かせようとしてきたりもして、ひとしきりやった後、満足したのか疲れたのか「先に帰ってるわ」と身体を残してフワフワどこかへ飛んでいってしまう始末。

ま、まあっ、とにかくもうみんな大丈夫そうだし！ 塔に入って『悪魔』をやっつけよう!!

そういうわけで、わたしは先生やミスさん、みんなに声をかけ始めた。

リヒタインツエーレン
塔 ・ 1F ***

パメラさんを生贄にして解放された扉。それを開けた先にあったのは、真っ直ぐに上へ伸びる幅のある階段だった。

周囲に床は無く、脇の柵を手すりから下を覗きこむと闇が広がっていて、その何も無い空間が地下のほうまで続いていることがわかる。そして、上を見上げると天井はあるけど、とても高くて……このフロアだけでもかなり広大な空間みたいだ。

そんな浮世離れた塔の内部に目を奪われつつも、わたしたちは階段を上り続けていく。

「……おや？ どうやら、あそこで一旦階段は終わりみたいだね」

マークさんが見つめる先……わたし達が上っている階段の先に大きな円柱状の足場が見えてきた。

そして、ほどなくしてわたし達はそこにたどり着く。円柱の上部、円形の足場の上でわたし達はあたりを見わたそうとして………身体が固まった。

真っ先に目に付く、上がってきた階段から見て真正面にある二体の

石像。その間から伸びる道は、途中から階段が途切れてた。でも、問題はそこじゃない。

そのちよつと手前。その場所にソレは立っていた。

見た瞬間、わたしはすぐに理解できた。アレが『塔の悪魔』なんだと。ただ、その姿は想像していたような姿ではなかった。

襟えりなどの裏地は血のように赤く、ボタンや刺繍などは黄金の輝きを放っていて、黒に近い紺の礼装。似たデザインで銀の装飾が施されたシルクハット。

洗練されたデザインの礼装せれを纏う姿はまるで貴族のように優雅ささえ感じさせるもので、わたしが想像していたような悪魔らしい姿をしていなくて、お母さんと相打ちになるような屈強さも全くと言っていいほど感じられない。ただ、目も鼻も無い真っ黒な顔と、そこにギザギザの歯をのぞかせながら三日月形に笑みを浮かべている口。そして、背中から伸びる一對の翼のようであり、風でなびくマフラーのようでもある二本の『闇』が、目の前の存在が人の形をした「人ならざる者」だということを示していた。

その凶悪な口以外黒く塗りつぶされた顔にはあるはずの無い目と目が合ったと思った瞬間、身体が固まってしまい背筋がゾワゾワする感覚に襲われる。

嫌でもわかる。強いとか弱いとかじゃない、もっと違う恐ろしさ。まるで、身体そのものじゃなくてその奥深くにあるものが感じ取っているかのような、逆らいような無い感覚。

その恐怖心を何とか押し殺しながら、わたしは視線の先の『塔の悪魔』を睨みつけ……ふと、ある事に気付く。

「……あれ？　もしかして、ちよつと元気が無い？」

別に『塔の悪魔』に目に見える大きな傷があるわけでも、肩で息をしているわけでもない。だけど、本当になんとかなくただけどそう感じたのだ。

考えられる事と言えば、前に『塔の悪魔』が起きた時にお母さんが戦って……その時のダメージが残っているか、お母さんのせいで人を

食べる暇無く塔に押し戻されてお腹が空いてしまったか……もしくはその両方なのかもしれない。

なんにせよ、これはチャンスだ。わたしは覚悟を決めて、震える手で杖を強く握りしめる。

そして、それとほぼ同時に感じた。

前に

隣に

後ろに

「トトリがそんなカツコイ顔するんじや、アタシも頑張らないわけにはいかないわね。……よつし！ それじゃいっちょ派手にやっちゃいましょつか!!」

「案ずるな、憂^{うれ}いはいらぬ。私が騎士として、キミの盾となり刃となり、道を切り拓こう」

「見たところ、この塔は外部も内部も石造りとは思えないほど丈夫みたいだ。僕らが暴れたところで何ともないだろうね、遠慮なくいかせてもらおうじゃないか」

「心配すんなって。なんかあっても、オレがこん前みたいに助けてやるからな！」

「トトリはトトリでいつも通りに自分の出来ることを一生懸命やって頂戴。……そうしてくれるから、いつも私達が安心して背中を預けられるんだから」

「今回は僕もサポートに回るよ。だから、慌てたりせず一步一步確実に進んで行こう！ 一流の冒険者になれたトトリちゃんになら出来るよ!!」

『塔の悪魔』から放たれるプレッシャーよりも強く感じる。これまでも色々なところでわたしを支えてくれた人たちの存在を、その安心感を。

「えへへっ……凄^{すご}い場所にいるはずなのに、ものスツゴイ強いモンス

ターが目の前にいるはずなのに、「皆がいるからきつと大丈夫！」って
思えちゃうんだよね。わたしも前に……って、そんな昔話はいつか！
よしっ、悪魔さんなんてコテンパンにやつつけちゃおうっ!!」
「……はいっ、先生ー」

先生の言葉に頷いて、わたしは大きく息を吸った。

それぞれその手に武器を持って『塔の悪魔』を睨みつけているみんな
に向かって、わたしはできる限りの気持ちを込めて、お願いをする。

「お願いします……わたしに、わたしに力を貸してくださいっ！」

返事は聞かなくてもわかった。そして、みんなの口からは想像
通りの答えが返ってきてくれた。

そしてそれと同時に、偶然かなんなのか『塔の悪魔』がそのギザギ
ザの歯を開て『声の無い笑い声』を上げた。すると円柱の上部の円形
の縁ふちをなぞるようにして青紫の炎のような何かがゆらめき出した。
でも、わたしは驚きも恐れもしない。みんながいてくれるから。

こうしてわたし達と『塔の悪魔』との決戦が始まった……!!

『アクセルデイズター』!!」

でも、「サポートに回る」とか言ってた人が、開始直後に『竜の牙』
で作った槍を構えて、きりも錐揉み回転しながら『塔の悪魔』に向かって飛
んでいくのは、さすがに驚いちゃうかなあ……あは、あははははっ
……。

ジーノくんが素早い連撃で武器の性能を最大限に活かし、メルお姉
ちゃんが床を砕かんばかりの一撃をお見舞いし、ミミちゃんが身長ほ
どもある槍を見事に操った槍術で貫き、マークさんが自作らしい機械

でのトリツキーな攻撃をくりだし、ステルクさんがその剣と飛ぶ斬撃で断ち斬り、ロロナ先生が凄い爆弾で吹き飛ばす。

対する『塔の悪魔』の一撃一撃は、その成人男性と同じくらいの体格から考えられる最大限の重さで、背中から伸びる二本の『闇』が刃のように鋭くなる攻撃は何もかも貫くほど。また素早さも高く、最高と思える速さでは残像が見えるほどのものだった。

だが、マイルスさんの特攻から始まった『塔の悪魔』との戦闘。けど、その戦闘自体はわたしが想像していた以上に余裕があつた。

要因は大きく分けて三つ。

一つは、予想外にも『塔の悪魔』が弱っていたから。

もう一つは、わたしを含め八人という多いメンバーで単純に一人一人への負担が少なくスタミナがもっているから。

そして最後に、最初の特攻以降、マイルスさんが本当にサポートに徹しているから。

ただ、「サポート」とは言っても、それはとても奇妙というか、目を疑うというか……

「ワン！ ツー！ ファイニッシュ!!」

敵に背を向けたマークさんの、その背中に背負われている機械から飛び出す拳ゲローブによって放たれるストレート・ストレート・アッパーの三連コンボ。それが『塔の悪魔』に命中したんだけど……当たり前が良くなかったのか、『塔の悪魔』丈夫だったのかどちらかはわからないけど、マークさんの攻撃では『塔の悪魔』の体勢を崩すには至らなかった。

そのため、攻撃を終えて離脱しようとするマークさんの背中に、『塔の悪魔』が追い討ちをかけようと『闇』を鋭くさせて迫る………が

「『アーススパイク』っ！」

そう叫ぶマイルスさんの声が聞こえたかと思うと、マークさんに迫っ

ていた『塔の悪魔』の目の前に、人の身長ほどありそうな鋭く尖った岩が「ズゴンッ！」と床から飛び出した！

『塔の悪魔』はその岩に行く手を阻まれるどころか飛び出してきた岩に突きあげられてしまい、かする程度のように見えただけそれでも後退してしまっていた。

「続くわ！」

謎の岩によつて後退した『塔の悪魔』……それを予想していたかのようによつての間にか『塔の悪魔』の死角から接近していたミミちゃんが、上半身のねじりや肩から腕にかけてのバネを最大限に活かした渾身の一突きをお見舞いする。

が、やはり『塔の悪魔』も黙ってはいない。体勢を多少崩しながらも先端を鋭く尖らせた『闇』を射出するようにしてミミちゃん攻撃しようとし……

『パラレルレーザー』っ！

またミスさんが叫んだかと思えば、ミスさんの近くに人の頭ほどの大きさの水の丸い塊が二つ現れ、それぞれの水の丸い塊から勢い良く水が『塔の悪魔』へと向かって放たれた！

バックステップで『塔の悪魔』から離れようとしていたミミちゃんを避けるようにして、両サイドから『塔の悪魔』へとぶつかっていった水。それにより、より体勢が崩れたのか、狙いが定まらなかったのか、『闇』はミミちゃんの身体をかすめる程度にしか当たらず、傷はほんの僅かだけで済んだ。

しかも、その傷は……

『キュアオール』っ！

ミスさんの身体から溢れ出した薄緑色の光が、幾筋もの流れに分かれ、その一つ一つがわたし達一人一人へと飛んできて……わたしたちを包み込むようにして薄緑色の光が淡く広がった。

そうしたら、ふつと体が軽くなるような感じがした。

そして……注目するべきなのは、さつき『塔の悪魔』によって小さな傷を負ったはずのミミちゃん。その綺麗な肌のどこにも傷が無くなってた。他の人たちも、これまで受けていた傷がキレイサツパリ治ってしまってる。

「やっぱ、これってあの時の……？」

メルお姉ちゃんの眩きを耳にしたわたしは、心の中で頷いた。

きつとわたしとメルお姉ちゃんが思い出している「あの時」は、同じ場面だと思う。

『アランヤ村』のそばに『スカーレット』の群れが現れたあの時。おねえちゃんを庇かばって傷だらけになったメルお姉ちゃんと、爆弾を使い切ってしまったわたしを、ジーノさんとモコちゃんが助けてくれた後のこと。傷だらけで血を沢山流していたメルお姉ちゃんを治してくれた謎の光……あの時は、その場からいなくなったモコちゃんが無かしてくれただんだと思っただけ……でも、同じような現象を、今、目の前でミスさんが引き起こしている。

え、ええつと……モコちゃんと同じ薄緑色の光もそうだけど、それ以前にミスさんがしているが引き起こしているんだと思う謎の現象が衝撃的過ぎて、色々と気になってしまう。

それはわたしだけじゃなくて、他のみんなもそうだった。最初なんかは固まってポカーンとしてたり……今はもう普通に戦ってるけど、それでも時々ミスさんをチラチラ見たり、謎の現象にビクツと体を震わせたり……。

そんな中、最初っから特に何もリアクションをしないで戦ってた人もいた。

それは、ジーノさんとミミちゃん、あとマークさんだ。

ジーノくんは、たぶんいつも通りに何にも考えてないだけだと思うけど……ミミちゃんとマークさんはどうして驚きも動揺もしなかつたんだらう？

ミミちゃんたちにも、ミスさん本人にも、すぐにでも話を聞きたいところだけど……それはさすがに目の前の『塔の悪魔』が許してはくれそうになかった。

『塔の悪魔』の攻撃はミスさんが防いだり逸そらしたりしてくれているけど、それも全部の攻撃に対して出来ているわけじゃない。ただ単に間に合わない時であれば、これまで二回『塔の悪魔』が使ってきた一人を『闇』で包み込む大技らしき一撃は、ミスさんでもどうしようもなかった。

……それでも、あの薄緑色の光で回復してるから、何の問題は無いんだけど……。

でも、今の一番の問題は……

「ったー……コイツ、ちゃんと攻撃が当たってるのかー!」

「剣が当たった感触自体はちゃんとあるだろう。……だが、そう思いたくもなる気持ちはわからんでもない。ここまで反応が皆無だとな……」

『塔の悪魔』を攻撃してから離脱したジーノくんが苛いら立たしげ気に愚痴を言い、それにステルクさんが言葉を返した。

二人が言ったように、『塔の悪魔』にいくら攻撃をしても悪魔は、その服や体に変化は起きず、動きが鈍ただたることも無く唯々ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべるばかりなのだ。

通常のモンスターであれば、いくら強大な相手であっても……例えば『フラウシュトラウト』のような人よりもはるかに大きいモンスターでも……強烈な一撃を当てることが出来れば傷を負うし、攻撃を続けていれば疲れるし、追い詰めれば怒りや焦りといった感情を見せってくる。

だけど『塔の悪魔』にはそういった様子が全くと言っていいほど見られない。まるで幻でも見ているかのようで、本当にそこにいるのか疑問に思ってしまうほどである。

そんな奴を相手にしていたら、どうしても焦りや不安がうまれてしまい行動に粗くなったり、連携に乱れが出てしまいかねない。それにそうなってしまうと集中が乱れる分気力も無駄に使ってしまい、いくら八人いるとはいっても消耗が激しくなって歩が悪くなってしまう。事実、ジーノくんがそうであるように、ステルクさんや他の人たちにも苛立ちや焦り、不安の色が顔に出てきていた。

このままじゃマズイ……! !

そう思いながらも、攻撃を続ける以外に何かできそうなことも思い浮かばないため、どうしようもない。でも、ここまで攻撃を続けて来たわけだから『塔の悪魔』も間違い無く弱っていつてははずなんだけど……。

「……っ!? 何か来るわよ!!」

メルお姉ちゃんの注意喚起に、わたしはハツとして『塔の悪魔』のほうを見た。

すると、『塔の悪魔』の足元からモヤモヤとした闇が湧き出し、地面を這うように低く広がりはじめている。そして、その靄が数か所に分かれて集まりはじめ……それが、『スカーレット』によく似た見た目の悪魔になった。その違いは体の色が赤くなくて黒いこと。

「ええっ!? 『黒の悪魔』!? それもなんでいきなり……! !」

『塔の悪魔』と、現れた八体の『黒の悪魔』から目を離すわけにもいかないため振り向くことはできなかつたけど、その声だけで先生が驚きアワアワしてる姿が目に見えかぶ。

見たところ『黒の悪魔』は『塔の悪魔』が呼び出した……というか、闇から生みだしたようにも思えるんだけど……。

とにかく、ここに来て予想外の敵増援。ただでさえわたしたちの方は、手応えが少なくて焦りが出てき始めてるのに……これ以上は精神的にだけではなく体力的にもキビシクなくなってきってしまう。

さすがにこれはなんとかしないと、考えたくないけどこのまま負けちゃうなんてことも……何か新しい一手を考えて流れを変えないと

「つて、あれ？」

と、不意にわたしの頭の中で疑問符が浮かんだ。

いきなり湧いて出てきた『黒の悪魔』。急な増援に間違い無くわたし達は焦るし苦戦もしてしまいかねない。

けど、なんでそんなことが出来るなら『塔の悪魔』は最初から『黒の悪魔』を呼ばなかったんだろう？

その表情通り、必死に戦っているわたし達をあざ笑うために、ワザと使つてこなかった？ ……でも、最初からずーっと大きなダメージを与え続けているのはわたしたち。優勢だったならまだしも『塔の悪魔』のほうが劣勢だったのに、そんなことをするとは思えない。

なら、他に考えられる理由は……なるべく使いたくなかったか、ここまででは使う気が無かったか……？

そこでふと思ひ出した。さっきわたし自身が考えてたことを……「このまま負けちゃうなんてことも……何か新しい一手を考えて流れを変えないと！」……もしかして、攻めあぐねていた『塔あつの悪魔ち』も似たようなことを考えてた？

『塔の悪魔』がわたし達と同じような思考回路を持っているかはわからないけど、そういう可能性は十分にあると思う。

わたしは、そのことをみんなに伝えるために、一旦大きく息を吸つた。

「みなさん！ これまでにしてこなかったことをしてきたのは、表面的には見えなくても『塔の悪魔』も追い詰められていつてる証拠だと思います！ あと少し……あと少しです！ 頑張りましょう!!」

「……なるほど。悪魔というものがどこまで生物的かはわからないけど「生存本能による必死の抵抗」……そういう風にも考えられなくはないね」

わたしの言葉にマークさんが一応は納得してくれたみたいで、あごに手を当てて頷いてくれた。

他のみんなも、どこまでわたしの言ったことを信じてもらえているかはわからないけど、否定するような言葉は聞こえなかった。……ただ単に、目の前のことをどうにかしようと考えていて、聞いてないだけかもしれないけど……。

グガアアアアア！

「来るぞ!!」

『黒の悪魔』の一体が大きな泣き声を上げたのと同時に、八体全員が一斉に動き出した。それも、一体一体がそれぞれわたし達一人一人を狙うようにして突撃してきた。

そうになると、さすがにわたし達も目の前の相手の攻撃をどうにかしないといけないわけで、他の人へのサポートが難しくなる……。

……八体？　　そういうえば『塔の悪魔』は？

はたと気付き、わたしに迫^{せま}ってくる『黒の悪魔』を倒すための『N/A』を取り出し投げつつも、視線を周りへと向けてみた。

すると、ちょうど見えた。

迫ってくる『黒の悪魔』と対峙するミスさん……その側面から接近している『塔の悪魔』の姿が。

これまでさんさんミスさんが行動を邪魔してきてたから、『塔の悪魔』から目をつけられていたのかもしれない。そして『黒の悪魔』を呼び出し一斉にわたし達を攻撃したのは、一番邪魔になっているミスさんを倒すべく、ミスさんの隙^{すき}を作りながら周り^{わたし達}に邪魔をされな
いたための一手だったのかもしれない。

とにかく、「ミスさんが危ない!？」と思ったわたしだけけど、その声が出る間も無く『塔の悪魔』は攻撃範囲にミスさんを捉^{とら}え
……

「とりやああ!!」

ミスさんが光る何かを持った腕を振るった瞬間、『黒の悪魔』共々『塔の悪魔』は吹き飛ばされた。

……………えっ？

わたしがさつき投げた『N/A』の爆発音と『黒の悪魔』の断末魔が聞こえてきたけど、そんなことはどうでもいいくらい、わたしはマイスさんのほうに目が釘付けになっていた。

その手にあるものを見てみると、どう見ても光り輝くものでは無さそうだった。どうやら、あの時のようにマイスさんの手元が光っていただけみたい。

その、マイスさんが持っているものとは……

『ジ・ウ・ロ』

えっと……つまり、いつもマイスさんが畑で水を撒まいている時のように、周りに水を振り撒まいて……その水に当たって『塔の悪魔』は吹き飛んだってこと？

『フラウシュトラウト』の時の『クワ』がまだマシに思えてしまうほど、非常識というか、なんとというか……。そもそも、そんな水を毎日受けているマイスさん家ちのお野菜ってどうなってるの……？

そんなわたしの驚きをよそに、マイスさんは止まったりせずかぶに次の行動に移っていた。

どこからか『瓶ビン』を取り出し、吹き飛んだ先で着地して立ち上がった。『塔の悪魔』に向かって、マイスさんは思いつき投げつけた。調合した『毒薬』か何かかな？

それはクルクルと回りながらも弧を描いて『塔の悪魔』へと一直線に飛んでいき……勢いよくぶつかり「パリンツ」と軽快な音を立てて割れ、中の液体が飛び散った。

飛び散った液体を思いつき被かぶった『塔の悪魔』だけど、特に毒と

かに侵^{おか}されている様子は無いように思えた。

あの『毒薬』は不発だったのか？ それとも、『塔の悪魔』が元々異常状態に対して耐性が高かったのか？ ……どちらかなのか、両方なのか、はたまたどちらでもないのか。よくわからないけど、なんにせよマイスさんの攻撃は効果が無かったようだ……………

……と、マイスさんが吹き飛んで少し離れた場所にいる『塔の悪魔』に向かつて、勢いよく右手をつき出した。すると、その手の平から拳よりも小さいくらいの「火の玉」が『塔の悪魔』目がけて飛び出し……………

『エクスプロージョン』!!』

……………『塔の悪魔』に触れたかと思った瞬間、いきなり炎の「赤」が膨張して…………文字通り「巨大な炎の柱」になった。

離れているわたしの髪やスカートを勢いよくはためかせる膨張による爆風はもちろん凄^{すご}いんだけど、それ以上に光源の少ないこの塔の内部を煌々^{くわんくわん}と照らすほど燃え盛っている直径三メートル、高さ六メートルほどもありそうな炎の柱が凄^{すご}いとかを通り越して唯々^{ただただ}眺めることしかできなかつた。

長く感じられたけど、実際はほんの一、二秒間だけの存在だった「炎の柱」が消えた時、その場に残っていたのは……………

『!!』

全身が炎に包まれ火だるまになりながら、笑いとも叫びともどちらとも取れそうな「声の無い声」を上げて狂乱する『塔の悪魔』だった。

その姿を見て…………未だに口は笑みを浮かべ続けている『塔の悪魔』を見て、底知れない恐怖を感じていると、かなり驚いた様子のマイスさんの声が聞こえてきた。

「そんなんっ!?! あんなにみんなで攻撃して、『エクスプロージョン』を

使う前に『油』をかけたのに、まだ倒れてないなんて……！ 早くこの隙すきに追撃をしないと!!」

「いや、追撃って言ってもあれじゃあ近づけないし、そもそも必要なさそうな気が………というか、『油』をかけたってどういうことなんですか!?!」

「えっ、だって『油』つて良く燃えるよね？ その性質は火属性攻撃をする時に活かせるよね？」

「ええっ………そんな「常識でしょ？」みたいな言われても………って、あつ」

ミスさんとそんなやりとりをしているうちに、ふと赤い光が消えた。……燃えていた『塔の悪魔』がまるで塔の内部の闇に溶け込むように霧散したのだ。

「か、勝った………のかな？」

そう口にしてみるけど、どうにも実感が湧いてこなかった……。

その原因は………まるで幻のようにその体を残さず消えていった『塔の悪魔』のせいか、終始よくわからないことをしていたミスさんのせいか……。

半々、つてことにしておこっか……。

5年目：マイルス「雪に覆われた村で」

最果ての村

『塔の悪魔』との決戦を終えた僕たちは、悪魔を退治したことを伝えに『ピアニヤちゃんがいた村』へとその足で向かったのだった。

そして今、『塔の悪魔』のことを話してくれた長のピルカさんの元へとトトリちゃんが行っている。その間、残っている僕たちは適当に待機ってことになって、僕は家から持ってきた「雪や寒さに強い作物の種」をあげたり、実際に植えてみせたりしようと思ってたんだけど……

「キミが色々常識外れなのは知っていたが、まさか『魔法』などといったものを……」

「けど、それでも「マイルス君なら」って思えちゃうのが、なんというか……普通に受け入れられちゃうよねー」

おでこに手を当てて首を振るステルクさんと、「あははは」と笑う口ロナ。他の人たちもそれぞれ反応をしている。

僕は今、寒さから逃れるため村の民家の一つに入れてもらい、ピルカさんに会いに行ったトトリちゃん以外の皆と一緒にいた。

そうなった理由は、『塔の悪魔』との戦闘で使った『魔法』が原因だ。まあ、使うかもしれないと思った最初のころからこうなる可能性については考えていたんだけど、『塔の悪魔』との戦闘で白熱し、すっかり忘れてしまった。

で、そう遠くない内に知る事になるんだし、ここで必死に隠す必要も無いから、『魔法』という技術であることを話したんだけど……そして、なんだかちよつと気になる言い方ではあるけど、いちおう納得というかわかってくれたみたいだった。

「ミミちゃんとくまさんは驚いてなかったけど……もしかして、知っ

てたりしたの？」

首を傾げているロロナが、『塔の悪魔』との戦いの時、僕の使う『魔法』に驚かずに一緒に戦っていたミミちゃんと……あとマークさんを見て疑問を投げかける。

すると、マークさんが嫌そうな顔をして髪をかきながら、「だから、何度も言うけどその「くまさん」呼びはよしてほしいと……」って呟いてたけど、諦めたように首を振ってからそれに答えた。

「ちよつとした事情があつてね、『魔法』についてはマイルス彼から詳しく解説までされてて、見たことも一応あつたんだよ。……まあ、最後のヤツの威力はさすがに想定外だったけどね」

「私は、実際に見るのは初めてですけど話にだけは聞いてました。『火』、『水』、『地』、『風』、『光』、『闇』の属性エレメントと、それらにそれぞれ『初級』、『中級』、『上級』があつて……あと攻撃用ではない『愛』の『魔法』や、例外、もつと特殊な古代のものも存在すると言われているのか」

マークさんに続いて答えたミミちゃんが『魔法』について簡単な説明を皆にしてくれた。

個人的には、昔、ミミちゃんとベッドで休んでいるミミちゃんのお母さんに聞かせていた数あるお話の中で一、二回しか話していなかったはずの『魔法』について「をミミちゃんが憶えてくれたことに驚かされた。

『アーランド』ちじゃあまず必要無い知識だし、かなり昔のことだから憶えていてもほんのちよつとだけだと思っていたから、完全に予想外だ。なんだか、ちよつとだけ嬉しい気がする。

ミミちゃんの説明に「へー」とか「そうなんだ」とか反応をしている面々なんだけど、そんな中で一人、ステルクさんが隣ジレクにいる弟子に目を向けていた。

「お前もさほど驚いていなかったように思えるが……『魔法』を知っていたのか？」

「いいや？ 別に知らなかったけど？」

首を振るジーノくんに、ステルクさんがその鋭い視線で「ならば何故……？」と問いかけた。すると……。

「だって、ミスなんだろう？ オレの剣を意味わかんねえくらいの性能にしたりするんだから、あんくらい変なこと出来ても別におかしくないなーって思ってる」

「……まあ、確かに規格外であることは間違い無いのだがな」

「単純だからこそ、深くは考えんのか……」と、妙に納得した様子で一人頷くステルクさん。そんな師匠を気にする様子も無く、ジーノくんは「あー、腹減ったー……」なんてぼやいているようだ。

「ねえ、ミス」

とりあえずこの場が落ちついてきたかと思っただけで、そんな時、不意に僕に声をかけてきた人がいた。メルヴィアだ。

「さっき使ってた『魔法』ってさ、ミス以外にも使えたりするのかしら？」

「え、うん。剣とかの扱いと同じで得意不得意はあるけど、大抵の人は使えるよ。実際に、今、次のお祭りでの発表にそなえて『青の農村』の皆には『魔法』の秘密特訓をしてもらってるんだ」

「告知の広告には『重大発表！』って書いてて、他に詳しいことは書いてなかったけど……なんだか、次のお祭りは大事おわいごとになりそうね……」

僕の言葉を聞いてそうもらしたミミちゃん。

実際の「重大発表」は『魔法』のことだけじゃなくて、一部の部外者の耳にはすでに入っている『学校』のことも含まれているんだけど……そうになると、本当に大事というか大騒ぎになるかも……？ いまさら止めたりする気はないんだけど、色々な事態を想定して準備しておかないとかな？

と、質問をしてきた本人であるメルヴィアは「ふーん……」と、何とも言えない反応をしていたんだけど……再び僕に向かって口を開いた。

「じゃあ、人間じゃなくてモンスターが『魔法』を使ったりすることは？」

「すごく似ているのを使っていたりはするんだよ？ 『アーランド』周辺でわかりやすいのは『幽霊』系や『悪魔』系の闇の攻撃とか。……と
いうか、場合によってはモンスターのほうが凄かったりするんだよね。真似するのが難しいくらい範囲が広がったり……」

これは事実だったりする。理由はわからないけど、『シアレンス』にいたころ出会ったモンスターの中には、僕の使える『魔法』では真似できないような芸当を見せるモンスターたちがいたのだ。

例えば、灼熱の『ソル・テラーノ砂漠』にいるゴースト系のモンスター『トマトーガイスト』。彼らを使う地属性魔法は、僕が今回使った『アーススパイク』によく似ている地中から尖った岩を発生させる『魔法』なんだけど……決定的に違うのがその数。一つや二つではなく、数個の岩が連続して発生するのだ。

そういったように、他のモンスターたちも僕らが使う魔法とはよく似ているけど違うものをつかったりしている。

『錬金術』のレシピみたいに自分で一から『魔法』を作り上げれば再現できるのかもしれないけど……今度、試してみようかな？

僕はそんな試みを思いつき考えてたんだけど……その時、メルヴィアはといえば……

「なら、あの子がミスと同じ『魔法』を使ってもおかしくはないのね。でも、ちよつとねえ……？」

………？メルヴィアは一体、何を言ってるんだらう？

僕もなんだか少し気になるんだけど、メルヴィアのほうもこっちを横目でジッと見てきている。

「お、おまたせしましたーっ！」

メルヴィアがまた何か言おうとしたのか口が動き始めたでしょうどその時、僕らがいる民家に、ピルカさんのお話を終えてきたのだら

うトトリちゃんが入ってきた。必然的にみんなの視線と意識はトトリちゃんのほうに向いた。それは、メルヴィアも同様だった。

「トトリちゃん、お疲れさま。どうだったー？　ちゃんと話せた？」

トトリちゃんに「こつちおいでー」と手招きをしながら、どうなったかを聞くロロナ。それに、トトリちゃんは笑顔で答える。

「はい！　悪魔は倒したからもう大丈夫って、ちゃんと伝えました。……あと、ピアニャちゃんは『アラうランヤち村』にいてもいいけど、黙って勝手に出ていったことは怒らないといけないから、一回連れて帰ってきなさいって」

『塔の悪魔』のことはもちろん、どうやら、僕らについて来てしまったピアニャちゃんのこともちゃんと話せたみたいだ。

確か、ピアニャちゃんが『最果こてのこ村』を出た理由って「いたら目覚めた悪魔に食べられちゃうから」で……今回の一件で『塔の悪魔』が倒されてことで村を出ていく理由が無くなったわけだ。でも、それでもピアニャちゃんの意味を尊重し自由にさせてあげるあたり、ピルカさんは本当の意味で「優しい人」なんだろう。

そんな、良いことしかないような話なんだけど……それにしても、トトリちゃんがやけに笑っているとかニヤついている気がする。

そのことが気になったのは僕だけじゃなかったようで、ミミちゃんが片方の眉を跳ね上げ、ちよつとだけ首をかたむけて怪訝けげんそうにした。

「ニヤニヤしてて、変というか、気持ち悪いというか……。何かあったの？」

「気持ち悪いって、そこまで言わなくても……。えつとね、『塔の悪魔』を倒したことを伝えたらね、ピルカさんが「おぬしからすれば、母親の仇かたきも同然か」って言われたんだけど、わたしそんなこと考えてなくって……そう話したら「じゃあ何でそこまでして倒したんだ？」って聞かれちゃったんだ。けど、よくわかんなくて結局なんとなく「冒険者だからです！」って答えたんだ。それを思い出したら、なんだ

かちよつと笑えてきちゃって」

ちよつと顔を赤くしながら「あははっ……」と笑うトトリ。そんな様子を見たメルヴィアが、おかしき半分、感慨深き半分といった感じの何とも言えない表情をする。

「冒険者だから」ねえ……言うようになったじゃない。前は魚にも負けそうな子だったのに」

まあ、確かに「冒険者だから」って理由は、封印された強大な存在である『塔の悪魔』を倒しに行った理由にしてはアバウトすぎるっていうか……。そんな事を言ったら、僕なんか「トトリちゃんに誘われたから」とかしか言えないような気もして強くは言えないんだけどね。

でも、それならピルカさんが言ったっていうような「母親の仇」とかのほうが自然というか、納得できると思う。

……………。

……………？

……。

え？

「えええー……っ!？」

「ひゃわうっ!?! ど、どうしたんですか、マイスさん!?!」

僕があげてしまった大声にみんなが驚き、トトリちゃんなんかはビクツと跳び上がって、目をパチクリまん丸にして僕を見て……………つて、そんなことよりっ! どうしたも、こうしたも……………!!

「いや、えっ、ちよ!?! 何? どういうこと!?!」

「落ち着け。そんなに慌てるとはキミらしくない……………キミは慌てさせる側だろう」

「ステルクさん、そういう話じゃ…………と、とにかく落ち着いてくださ

いつ、マイスさん！」

トトリちゃんがそう言うけど、落ち着くって、そんな場合じゃない
というか、どう考えても聞かずにいるわけにはいかない話だから、落
ち着くわけにもいかない！

「そんなこと言われたって！ だって、その……！ 母親の……」

「母親の仇」ってどういうこと!?!」

「「「「えっ」「」」」」

僕の言葉を聞いたみんなが一瞬真顔になり……空気がピタツと固
まる。

その様子に、僕はなお混乱してしまい「えっ、えっ」とみんなの顔
をキョロキョロ見渡すことしかできなかった。

謎の空気の中、一番最初にオズオズと……というか、まるで頭の中
で現在進行形でゆっくり整理しながら話しているかのように話し始
めたのはトトリちゃん。

「ええつと……どういふことって言われても、そのままの意味と言
うか……あれ？ 何がどうしてこうなってるの?」

……そのままの意味って……というか、トトリちゃんも何だか混乱
しているというか、こんがらがっているというか、そんな感じが……
と、ここで「あつ」と声を上げたの人が一人。ロロナだった。

「そういえばマイス君、トトリちゃんたちと行った東の大陸への冒険
の後にあった飲み会で、「お墓は見たけど、聞くタイミングが無くて
ギゼラさんがどうなったかは知らない」って言ってたっけ……」

「ああ……あつたな、そんなことも。まさか、私ですらおおよその話は
聞いたというのに、まだ知らなかったとは……」

ロロナの話聞いて何か思い出したのか、ステルクさんも目をつ
むって眉間にシワを寄せて言った。その二人の話聞いて、トトリ
ちゃんをはじめとした他のメンバーが「えっ!?!」と目を見開いた。

「……って、ステルクさんは知ってたんですか!?!」

僕の驚きに、ステルクさんは短く「まあな」とだけ答えてきた。そして、驚かされてばかりな僕に、他の人たちも各々口を開きはじめた。

「いや、むしろなんで知らないの？ 逆に驚きなんだけど……」

「オレでも知ってたぜ？ なんでマイスは知らねかつたんだ？」

『アランヤ村』の人たちの次か同じくらいに知っておくべきだろうあんたが、何で今の今まで……はあ」

……ミミちゃんには呆れたようにため息までつかれてしまった……。

「す、すみません、マイスさん。わたしが最初に気付かないといけなかつたのに……！ えっと、また今度、機会を見てお話しますね？」

「……うん。お願い」

僕が気を遣うべき相手のトトリちゃんから、ものすごく気を遣われている。

なんだか少し泣きたくなってきたかも……。

「それに、ギゼラさんの仇って知ってればもつと色々……効くかわかんないけど、最終兵器とかも用意したのに……」

「何よ、最終兵器って」

「というか、あの火だるまじや気がすまないのね……」

ミミちゃんとメルヴィアにツツコミを入れられてしまった……。いつもならそう気にしないんだけど……今日は早く家に帰ってベッドで寝たくなった。

「……僕も知らなかつたんだけど、なんだか言い出すには難しい空気だね、これは」

「えっ……でも、くまさんは別にいいような……っ？」

「だからその呼び方は……まあ、確かにあのお嬢さんトトリのお母さんとやらと僕はほとんど接点も無いし、僕も別に構かわないんだけども。………にしても、キミもなんだかうかない表情かおをしているような気がするけど………」

「いやあ、その、『魔法』って前にもどこかで聞いたことがあったような気がする、ずっと引つかかって………いつだったけ？ 確か、マイスくんが言ったんじゃないかかった気がするんだけど………？」

5年目：マイス「ある日の日常」【*3*】

【*3*】

ロロナのアトリエ

「ええつと……？ これはどういうことですか？」

何かを複製調合しているのか、てくてこ歩き回ったりしながらも何やら作業をしているちむちゃんたちがいる『ロロナのアトリエ』。

そのアトリエ内で、数冊の本を膝に乗せてソファアの真ん中に座ったトトリちゃんが、その左右に座っている僕とロロナを交互に見比べた。その困り顔に、僕は苦笑いをしてなんとなく意味の無いごまかしをするしかできそうになかった。

「あ、あはは……」

「じー……」

ロロナはと言えば、トトリちゃんをただただジツと見つめるばかり。

アトリエに来たばかりのトトリちゃんに状況説明をしていない僕が言うのもおかしいけど、これじゃあトトリちゃんが困るのも仕方がないだろう。

ずっとただ見つめてきているだけのロロナに少し気が引けたのか目をそらしたトトリちゃんは、僕のほうを向いて涙目で「なんなんですか、これく!?」と訴えかけてきた。

「えつと、いきなりで何が何だかわからないかもだけど……その教科書のことではよつとあつてね。で、トトリちゃんが来て……」

「それで、トトリちゃんの意見を聞きたいのー！」

僕の言っている途中で、ロロナが大きな声で割って入ってきた。

ここまで聞いたトトリちゃんは、「わかったような、わからないよう

な……?」と何とも言えない顔をして首をかしげてしまっている。
……僕はとりあえずここまでの経緯について話すことにした……。

一時間ほど前

そもそもの始まりは、『塔の悪魔』を倒しに行く道中でロロナと『学校』のことについて話したことからだった。

学校で学べることの一つとして『錬金術』も検討していて、僕は学校の設立が許可されてからロロナには伝えて協力してもらえないかお願いをするつもりだったんだけど……なんと、ロロナはロロナで『錬金術』を教える学校のことを考えていたそうで、教科書とかも作ってみたりしているらしかった。

そんなわけで、最終的に『塔の悪魔』を倒すのが終わってから、作った教科書見せるから!」って話になって……結局はさすがに疲れてしまったたり、僕が『魔法』を使いそのことでバタバタしてしまったりしたことで、その日の内にロロナの教科書を見ることは出来なかった。でも僕も忘れてたわけじゃなくて、「次にロロナのアトリエに行くときに、僕のほうで作ったのも持って行って見せ合えたらいいなあ」って考えていたのだ。

そして後日、僕のほうで作った教科書を持ってアトリエにお邪魔したんだけど……

「マイス君の教科書、なんでこんなに分厚いのー!? こんなんじゃない、読み始める前に頭がパンパンになっちゃうよ!!」

「ロロナの書いた教科書って何を書いてるか半分くらいわからないんだけど……。これ、ちゃんと伝わるかな?」

「ええっ!? そんなこと言われても……。それに、マイス君のは……!」

「いや、でも大切なことをちゃんと書いておくならこのくらいは……。というか、ロロナの教科書のここって手順が足りてないんじゃない？」

「なら……」

「あと……」

現在・ロロナのアトリエ

「……って、ことがあって、そこにちょうどトトリちゃんが来て……」
「学校とか、初めて聞いた内容こともありますけど……なるほど、大体わかりました。それで「意見が聞きたい」って話になったんですね」

納得したように、自分の膝の上に置かれている教科書の一つを手にとって表紙を眺めるトトリちゃん。

「トトリちゃんなら、どっちの教科書がいいのかわかるよね！ ねっ！」

「それはまあ、作った二人よりも鼻^{ひいきめ}真目無しに見れるとは思いますが……でも、先生にそんな期待の視線を向けられるのはちよつと……」

キラキラとした目で見つめながら顔を近づけてくるロロナに、トトリちゃんはちよつと引きつつ「というか、そもそも競う必要性は……？」と首をかしげていた。

「それじゃあ、トトリちゃんは教科書を読んでみて！ その間にお茶、用意してくるから！」

そう言つてソファから立ち上がり鼻歌まじりに歩き出したロロナ。

そんなロロナの背中を目で追う、並んで座っているトトリちゃんと僕。……と、偶然か何か、僕がトトリちゃんのほうを見たのと同時に、ちよつとトトリちゃんも顔を僕のほうへと向けた。

その偶然にお互い「あつ」とちよつと驚きつつも、僕のほうから話を振つてみた。

「あははは……ごめんね、いきなり巻き込んだんやって。それで、『ロロナのアトリエ』に来たのって何か別に用があったんじゃ？ もしそうなら、そつちを優先してくれていいんだけど……」

「いえ、別に何かあったわけじゃないですから、大丈夫です。それに、学校で教える『錬金術』……わたしも興味ありますから、協力させてください！」

そう言つて、元気な笑顔を見せてくれるトトリちゃん。

けど、その笑顔はすぐに消え「あつ、でも……」となんだか不思議そうにして、少しだけ首をかたむけた。

「なんていうか、意外ですね」

「意外？」

「先生は子供っぽいところがあつて意地になつたりしますからまだわかるんですけど、ミスさんもつていうのは……。こういう時に真つ先に譲るといふか一歩引くイメージがありましたから」

そしてまた「意外でした」と言いながら、今度はイタズラをした子供のようにトトリちゃんは笑った。

僕としては、そんなふうにいるつもりはないんだけど……でも、トトリちゃんにそういうイメージを持たれているってことは、少なからずそう見える時があるんだろう。

でも、僕つていつも自分がしたいようにやってばかりだから、そんなことはないと思うんだけどなあ……？ 時々、お祭りでコオルに出場禁止を言い渡されてりはするけど、それはトトリちゃんが言ってることとちよつと違う気がするし……。

それに……。

「僕は意地を張つてるといふか、いろんな人に教えるための大事なもののんだから出来る限り良い物にしたいってだけで、その為に意見交換を沢山するべきだろうなって思つて……」

「そういうことにしますね♪」

「ええっ……」

何故かトトリちゃんにそう適当に話をぶった切られてしまった。別に「意地を張ってる」って勘違いされたままでもいいんだけど……でも、なんかやっぱり納得できないというか……。

けど、すでにロロナが作ったほうの教科書に目を落してしまっているトトリちゃんの邪魔をする気にもなれず、「仕方ないか」と諦めることにした。

手持ち無沙汰になった僕は、ロロナがお茶を用意していることを思い出して、実は家であらかじめ用意して持ってきていた『アップルパイ』をカゴから取り出した。かなり余分に作っておいたため、僕とロロナだけでなくトトリちゃんの分もちゃんとある。

残った分は……いつも通りちむちゃんたちにおすそわけすることにしよう。トトリちゃんはもちろん、お茶を用意しているロロナもまだ時間がかかりそうだから、先にちむちゃんたちを集めて『アップルパイ』をあげることにしよう。

僕がちむちゃんたちを集めて『アップルパイ』をあげながら戯^{たわむ}れているうちにロロナが『香茶』を淹^いれてきてトトリちゃんと僕、あとロロナ自身の分をそれぞれの手元へ回し……僕もそれに合わせて『アップルパイ』を一人分にわけて配った。

そして、トトリちゃんが教科書を読んでいる間、僕とちむちゃんたちの戯れにロロナも参加して遊んでいたんだけど……

「ええつと……とりあえず、こっちはこままでつてことで……」

不意にそんなトトリちゃんの声が聞こえたので、目の前で揃って並んで床をゴロゴロしているちむちゃんとロロナから目を離し、ソ^そファー^ちのほうを見てみた。すると、そこにはちちょうど僕の作った教科書を閉じるトトリちゃんが。どうやら僕らの作った教科書に目を

通し終えたみたいだ。

「トトリちゃん、見終えたかな？」

「あっはい！ どっちの教科書も大体読めました。けど、ちよつと……」

元気に返事をしたトトリちゃんだったが、その声は何故か段々と躊躇ためちっているかのような弱々しいものになっていった。

そのことは気になったけど、僕が問いかけるよりも早く、起き上がったロロナがトトリちゃんに詰め寄っていった。

「で、どうだった!? わたしのとミス君の、どっちが良かった？ わたしのだよね!？」

「えつと、それは、そのー……」

「ね？ね？」と問い詰められているトトリちゃんは、そんなロロナの顔を直視できていなくて、その視線は泳いでいる。

……ロロナの作った教科書をすでに見ている僕としては、トトリちゃんがなんでそんな反応をしているのかが、なんとなくわかってるんだけど……。

「ロロナ先生の教科書はですね……」

「うんうん！」

「ぐーるぐーる」とか「ぱらぱらー」とか擬音ぎおんが多いのと、「青い草」とか「ちよこつと」とかアバウトな表現も多いから……十人読んで一人でも理解わか出来たなら運が良いレベルだと思います」

「うん！……あれ？ちよつと待って、それって……?？」

頷いた後に、数秒間ピタリツと固まったかと思うと、コテンツと首を傾げるロロナ。

どうやら、ロロナの教科書を呼んだトトリちゃんの感想は、僕が予想したのと同じようで……

「凄くわかり難にくいです」

「がーん!？」

「まあ、そうだよね」

その場に崩れ落ち、両手をガツクリと肩を落とすロロナ。

でも仕方ないと思う。調合に必要な素材などといった『レシピ』の他に、その手順とかも書かれているんだけど、それがトトリちゃんと言ったように擬音とアバウトな表現が多くて、どう考えても字で読んだだけじゃ理解でそうにもない内容だったのだ。

「じゃあじゃあ！ わたしのよりも、マイルス君の教科書のほうが良かったのー!？」

僕は本職の『錬金術士』じゃないわけで、経験こそあるけれど、そこまで『錬金術』そのものや教えることに関して自信があるわけじゃない。

だけど、ロロナの作った教科書の事を考えると……たぶん、消去法というか「どちらかを選ぶなら」と選択を迫られたなら選ばれる程度には、僕の作った教科書も完成してはいるはずで……。

「えっと……どっちもどっち？」

「……ええっ!？」

膝ひざについていた体勢から立ち上がりながら「どっちもどっちかあ……それって、わたしは喜んでいいのかな？」ってロロナが言ってるけど、僕としてもロロナのフンワリ教科書と同じくらいと言われるのは、さすがに予想外というか……!

「あの一、トトリちゃん？ そう思ったのはどうしてなのかな？」

「どうしてって……丁寧で図解とかもあってわかりやすく書いてますがけど、これ、心こころ構かまえとか、下準備、後片付けのこととかばっかりで、肝心の『錬金術』のレシピとかが書かれてないんですけど」

「そうなの!？」

「そうなのって、ロロナ先生、読んだんじゃないんですか？」

「ええっとな、厚さを見てちよつと嫌になって、目次の項目の多さでめまいがして……そこから全然頭に入ってこなくて」

「「……………」」

「あつ、そういえば『実習編』と『応用編』を出すの忘れてた！」

僕としたことがウツカリしてた。まさか『基礎編』だけ出して、他を忘れてしまったただなんて！　そういうことならコロナやトトリちゃんがあんまりいい評価をくれなかったのも、当然のことで納得できる。

というわけで、僕はさっそく残りの『実習編』と『応用編』の二冊をカゴから取り出した。

「うわあ……」

「？　二人ともどうかした？」

『実習編』と『応用編』の教科書を取り出したところで、コロナとトトリちゃんの変な声を出した。どうしたのかと思ひ二人の顔を見てみると、僕の手元……教科書を持っている手を、目を細めて見ていることに気付いた。

「マイス君。一冊だけで厚さ十五センチくらいあるのに、それが全部で三冊って……。『錬金術』を勉強しに来た人がそれをいきなり渡されたんじゃないか、やる気削がれちゃうんじゃないかなあ……？」

「先生の言う通りです。それに、勉強しに来てくれる子にそれを持ち運ばせるのは、さすがにかわいそうですよ？　一回、内容を整理して必要性の低い部分は削りましょう」

「ええっ、そうかな？　一つの教室でみんな一緒にするんだし、ちよつとした失敗が周りの人を巻き込みかねないから、危なく無いように漏れの無いようちゃんと書いておかないといけないと思うんだけど……」

そう一応は反論してみるものの、コロナにもトトリちゃんにも首を振られた。目を細められた時点で「もしかしたら……」って予感がしてたからそこまで驚かないけど、そんなにダメだったかなあ？

「うーん、『錬金術士』の二人が揃って言うなら間違いんだろうし……とりあえず、まずは『基礎編』からチェックしていくってことでいいのかな？」

「はい、それでいいと思いますよ。まずは目次の項目を見て、そこで必

要無さそうな項目にチェックを入れてから、内容を詳しく見ていって……もし書き込んでもいいなら、斜線を引いたり、書き加えてりしていけたらいいんじゃないですか？」

トトリちゃんの提案に、僕は「大丈夫だから、そうしてみよっか」と頷く。

教科書はまだまだ沢山ある。代わりはあるし、それにこれから新しくモット良いものを作るわけだから、今手元にある教科書はどうなっても構わないわけで……むしろ、書き込んだりして有効利用できるならそうしたほうが良いだろう。

僕とトトリちゃんが顔を見合わせて頷き、そして、二人そろって口ロナの方を見る。すると、口ロナも頷きニッコリと笑った。

「よーしー！ それじゃあ、三人でやってみよー!!」

こうして、僕の作った教科書を元に、新たな教科書を作る作業が始まる事と……………

「…………って、あれ？ わたしの教科書は？ わたしの教科書は使えないの!?! 使っちゃダメなの!?!」

……始まる前に、僕とトトリちゃんには涙目になって今にも泣き出しそうになっている口ロナを慰めなぐさ元気付けないといけなくなったのだった。

「お邪魔するよ。口ロナはいるかな？ ……って、おや?..」

ノックをし『口ロナのアトリエ』入ってきたのは、この『アーランド共和国』で大臣を務めているトリスタン・オルコック。彼がアトリエに入ってみた光景は……

「じゃあ、『基礎編』の「調合を始める前に」^{から}「素材を置いておく場所の注意点」は一纏め^{ひとまと}にして、「調合の前にする準備と確認」って一つの項目にしちゃってー……」

「そうですね。そうすれば今の三分の一くらいまで減らせると思いますが」

「うん。あとは、さっきエツクを入れた削れる部分を削って……」道具の名称と用途」を「錬金釜等、用具・器具の基礎配置」の中に入れて込んだら『基礎編』は大体いいんじゃないかな？」

ソファアにコロナ、トトリ、マイスの順に並んで座っている三人。トトリが膝の上で教科書を広げペンを持ち、その両サイドからコロナとマイスがその教科書の覗きこむような形になっていた。時に指差しし、時にペンを走らせながらも、教科書の内容について意見交換をしているようだった。

「仲が良さそう……いや、あえて「忙しそう」^{いそが}って言うっておくべきかな？」

あごに手を当てて呟くトリスタン。その呟きに、議論がようやく一段落した様子の三人のうちトトリが気がつき「あっ」と声をあげた。

「トリスタンさん？ えっと、いつの間に……？」

「あっ、ほんとだ！ いらっしやーい」

トトリに続きコロナが気付き、ニッコリとした笑顔でトリスタンを迎え入れた。

また、マイスもほぼ同時に気付いており、「こんにちは！」いつもの調子で挨拶をしていた。

「何やら忙しそうにしているみたいだけど、お邪魔だったかな？」

そんな事を言いながらも、申し訳なさそうにするわけでもなく、さわやかな笑みを浮かべるトリスタン。「タントリス」という偽名を名乗ってアトリエに来ていたころから変わらない通常営業の彼である。

「大丈夫ですよタントさん、今日中に終わらせないといけない仕事もないですから……あっ、『香茶』用意してきますね！」

そう言つて立ち上がり『香茶』を淹れる用意をし始めたロロナ。それとほぼ同時にミスも立ち上がり、何かをし始めた。

……と、ロロナがふいにそのお茶を用意している手を止めないまま、振り返つたりせず口を開いた。

「ミス君。『アップルパイ』つてタントさんの分以外にまだある？

できたら……」

「今日はちむちゃんたちにあげるにしても多く作り過ぎてたから、まだあるよ。だから、ロロナの分ももう一皿用意してる」

「あれ？ そうなの？ えへへっ、ありがとうー！ あっ、トトリちゃんもさつき食べたけど『アップルパイ』どう？」

「わたしはさすがにもういいです。……これ以上はゴハンが食べられなくなりますし」

トトリが断つたことに「そっかー」と少し残念そうにながらも、ロナは『香茶』を淹れながら「ぱい、ぱい、アップルパイ♪」とよくわからない歌を鼻歌交じりに歌い始めた。

……と、ここまでの流れをアトリエの出入り口近くでずっと見ていたトリスタンだったが、ゆつくりと歩いて今座っているのはトトリだけとなったソファアのそばまで来た。

それに気づいたトトリは、トリスタンに気を遣つて中央からソファアの左端に寄り、右半分をあけ渡した。そんな気遣いに「ああっ、ゴメンね」とトリスタンは珍しく申し訳なさそうに軽く頭を下げ、ゆつくりと腰を降ろした。

「ねえ、ちよつといいかい？」

「はい？ なんですか？」

色々書き加えたりした教科書に再び目を落そうとしたトトリだったが、トリスタンに声をかけられたことでそれを止め、その目をトリスタンのほうへと向けた。

トトリが見たのは、トトリではなく『香茶』を用意しているロロナを見つめているトリスタンの姿。

「最近、忙しくてあんまりアトリエに来てないこともあって、僕があ

の二人が一緒にいるのを見る機会が減ってるんだけど……。大体い
つもあんな感じなのかな？」

「あんな感じ？」

タントリスの言う「あの二人」というのがロロナとマイスであるこ
とはトトリにもすぐに理解できたが、「あんな感じ」のほうはいまいち
理解出来ず聞き返してしまうこととなった。

「ほら、間にキミがいるにはいたけどヤケに距離が近かったり……。あ
と、ついさつきみたいは何も言っていないのに一緒になって準備した
り、先読みしたみたい何かしたり……」

「距離が近いって言っても、わたしが会ったところからそうでしたよ？」

おやつの準備もマイスさんが「おすそわけ」を持ってきた時はいつ
も先生が『香茶』を用意してますから……。あつ、でも「前はほむちや
んがやってくれてたんだよねー」とか言ってたっけ？」

途中疑問を挟みながらも「前からだ」とするトトリ。

その言葉に苦笑いをしながら、首をすくめるトリスタンは短くため
息をついた。

「まあ、確かに「昔から」っていうのも間違っていないと思うけど
……。だけどねえ？ なんていうか、前とは違う気がするっていうか
……。見られてる側じゃなくて見てる側が変わっちゃったのか
なあ？」

後半は呟くように小さな声になったトリスタンの言葉に、ちゃんと
最後まで聞き取れなかったトトリは一人首をかき上げてしまう。

「弟みたいに、ねえ……」

ロロナと、そのロロナに『アップルパイ』の乗った二枚の皿を持っ
て近づくマイス。トリスタンは、その二人の姿を目を細めて見ながら
そう呟いた……。

5年目：トトリ「発表祭？」

『青の農村』。

『アーランドの街』からそう遠くない位置にある、その名の通り農業なりわいを生業として生きている人たちが中心になってできている村。

『アーランド共和国』の人たちにその名前を知らない人はいないと思う。けど、わたしの想定と異なり、もしかしたら知らない人がいるかもしれない……それでも、本人が知っていないだけで、きっと必ずどこかで関わっているはずだ。主に食べ物関係で。

生産した作物が最も有名な場所。だけどそれ以外にも、街に住んでいる人や頻繁に出入りする人、行商人さんなんかには、また別の有名な部分がある。

それは、月に一度行われる『お祭り』。月ごとに別のお祭りが盛大に行われるため、他人を飽きさせず、毎回のように沢山の人が集まる。その影響力は、「お祭りの日には街の店の客が半分以下に激減する」という話を聞けばすぐに理解できると思う。

そんな『青の農村』の代名詞の一つと言える『お祭り』が、今日開催されるんだけど……今回はどうなるんだろう？

青の農村

「うーん……ここから見える景色はいつも通りだけど……」

わたしは『青の農村』の入り口付近から村全体を見渡してみた。そこから見えるのは、大抵のお祭りで目にする食べ物やお土産ものを扱っている露店が、村の中を通っている道の脇に何軒も出ているいつものお祭りとそう変わらない光景。

事前にちよつとだけ聞いていて、今日のお祭りが気になっていたわ

たしはこうして『青の農村』に立ち寄ってみただけど……。

「これは、やっぱり宣伝の仕方が問題だったんじゃないかなあ？」

というのも、普段はお祭りの名前とその中でイベント、その参加条件や開催時間、詳しい内容を書いた広告やチラシを張ったり配ったりしてるんだけど……今回はそのほとんどが秘密にされた状態で告知された。

あえて言うならデカデカと書かれた「重大発表あり」という文字が印象的だったけど、逆に言うと、そんなふんわりとしたことしかわからなかったわけなんだけどね。

そんなふうに宣伝されたのには理由があるのは、さっきも言った通り、わたしはミスさんからお祭りの内容を聞く機会があったから事前にわかっている。

その理由っていうのが、「サプライズ」っていうのと「混乱になりかねないから」。

前者のほうはミスさんが「お楽しみはとつといたほうがいいよね？」という考えを押し付けたかららしく……後者の方はコオルさんが「こんな大事の情報を中途半端に出したら、村に押し付けてくるヤツもいるだろうから」ってことで止めたからで、その二つの意見から、内容を限りなく最小限にした宣伝にしたそうさ。

……村長のミスさんよりもコオルさんのほうがちゃんと考えてる気がするけど……でも、それを含めていつも通りといえども通るりなんだよね……。

そんなことを考えながらわたしは歩きはじめ、おそらく今回もイベントの中心部になっているだろう『集会場』前の広場へと向かうことにした。

普段よりも道は人通りが多いけど、いつものお祭りの時よりは少ないから、他人にぶつかったりしてしまうことも無くスムーズに進むことができた。

……できるのは助かるんだけど、人が少なくなっているのはちよつと心配になってきちゃうなあ……よく知っているミスさんが中心と

なって開催してるわけだし、自分のことでも無いのにどうしても成功・失敗を意識してしまう。まあ、お客さんが少なくて村に損失が発生したところで、マイルスさんならなんでも出来てしまいそうなんだけどね？

そこそこの人混みをかき分けて『集会所』前の広場までたどりついたんだけど……わたしの心配とは裏腹に、今日のお祭りにセツティングされているのだと思うステージがある広場にはかなりの人が集まって、そこだけはいつものお祭りと比べても劣らないくらいの人が多かった。

「ああ、よかったー。さすがにイベントをする場所にはちゃんと人があつまってるんだ……って、あれ？」

もうじき始まる謎に包まれたイベントのために集まっているのだろう人たちをなんとなく見渡してただけど、その中に見知った姿があつて……その人が誰なのか気付き、わたしは驚いてしまう。

「め、メルお姉ちゃん!？」

「あら、トトリじゃない。奇遇ね……って言っても、もしかしたらとは思ってはいただけど」

わたしが近くまで駆け寄って声をかけると、メルお姉ちゃんはいつもの軽快な笑顔で手をヒラヒラと振って応えてくれた。

それにしても、メルお姉ちゃん『アランヤ村』にいるって思ったのに……

「メルお姉ちゃん、どうして『青の農村』に……って、お祭りだからなんだろうけど……でも、ここまで来るの大変じゃなかった？ 言ってくればわたしが『トラベルゲート』で連れてきてあげただけど……」

「ありがと。でも、そのあたりは大丈夫よ。マイルスに事前に事前に頼んでたから」

マイルスさんについて、いつの間に……。

たぶん、あの時……『塔の悪魔』を倒しに行った後、わたしがピルカおばあさんと話に行っていた間か……それか、合流した後わたし

とマイルスさんでお母さんの最後のことやわたしが聞きそびれていた『魔法』のことを話した、そのまた後に……？

いや、でも、いつに約束をしたとしても……

「お祭り目前で忙しいはずなのに、よくマイルスさんもいいって言うてくれたね」

「そこは正直ダメもどだったから、あたしも驚いたわ」

「ダメもどって。そんな風に思ったなら、わざわざマイルスさんに頼まなくてわたしに言うてくれたらよかったのに」

「あはははっ……。でも、やっぱりマイルスとは一回、面と向かって話しておきたかったし、多少無理を言うてでも迎えがてらに時間を作って貰うにはしかたなかったかなーって」

メルお姉ちゃんの言葉を聞いて、わたしは「ん？」と首をかしげる。

言うてることが何かおかしかったとか、そういうことはなかった。話の流れから、メルお姉ちゃんがマイルスさんに前々から何か用があつて会おうと思つていた……。つてことはわかつた。でも、ただ単純に「メルお姉ちゃんがマイルスさんに用事……。？」と不思議に感じ疑問に思つてしまった。

「メルお姉ちゃんがマイルスさんに用事があつたなんて、なんだか珍しいね？　どうかしたの？」

「どうかしたっていうか……。まあ、ちよつとね」

不意にいつものメルお姉ちゃんらしい軽快な笑顔から、少しだけ申し訳なさそうな……。でも、誤魔化そうとするような笑い方に変わつた。言うてることからしても、あからさまにお茶を濁して何かを隠そうとしていることはすぐにわかる。

自分で言うのもなんだけど、そんなふう「何かありますよー」つて感じの反応をされてスルー出来るほど、わたしは我慢強くない。だから、メルお姉ちゃんにそのところを問い詰める以外の選択肢はなかった。

「むー……。何か隠してるでしょー！」

「うん」

「うんって……ええ……？」

特に悪びれたりせず、メルお姉ちゃんは素直に頷いてきた。その素直さに毒気を抜かれたというか、肩透かしを受けたかのような感覚になって、わたしは勢いを削がれてしまう。

でも、やっぱりなんだか納得がいなくて、メルお姉ちゃんをジッと睨みつける……。けど、メルお姉ちゃんはひるんではくれず、むしろおかしそうにケラケラと笑ってきた。

「まあまあ、そんな顔しなさんなって！ そうねえ……今言えるのは、あたしが隠していることはトトリももう知ってることのお祭りの内容に関係がある……。かもしれないし、無いかもしれないってことくらいかしら？」

「またそんなこと言って、また誤魔化そうとしてるよね……」

「そんなことないわよ？ ……それに、トトリも勘付いててもおかしくないくらい判断材料はあると思うんだけどねえ？」

「材料？ えっ、調合の話なの？」

「いや、違うわよ？」

あれ？ 違った？ ……でも、ちよつと間違えたからって「何言ってるの、この子」って呆れ顔しなくても……。

……それで、結局何の話だったんだろ？

わたしが改めて問い詰める……。それより前に、周りから「わあ!!」と歓声が上がった。

人が多いから、多少ざわついているのが普通だったんだけど、そんな中でいきなり上がった歓声にわたしは驚いてしまい、悲鳴とかは出さなかったけど肩をちよつとだけビクリと震わせてしまった。

何事かと、慌てて周りを見渡してみると……。『広場』の中央あたりに設置されているステージの上に、いつの間にかマイスさんが上がっていた。

ってことは、ついに今から今日のお祭りのメインイベント……と言っているモノなのかは置いて……。例の「重大発表」が始まるみたい。

わたしとそばにいたメルお姉ちゃんは、さつき歓声をあげた周りの人たちと同じく、ステージの上に立っているミスさんへとその視線を向けた。

『魔法』と『学校』、そのふたつに関する発表。

それにわたしは期待感を抱きつつも、「もしかして、あまりにも常識外れで受け入れられないんじゃないか……」という主に『魔法』に対する不安感を拭えないまま、わたしはその発表を最後まで見届けるために真っ直ぐにステージのほうを見続けるのだった……。

「絵本など物語で描かれた『魔法』。それが今日、夢物語などではなく、実在のものとなります！ ……こんな感じに!!」

オオオウー!!

「一言で『魔法』と言っても色々あって……日、水、地、風といった属性の他にも………」

オオオウー!!

「そしてこの『魔法』、多少の得意不得意はあっても大抵の人が扱うことが出来ます！ ほらっ、コオル、みんな。せーのっ!!」

オオオウー!!

「安全面も配慮されています。人はもちろん、敵対してないモンスターや動植物、建物などにダメージといった影響を与えることは無いです、ご安心を！」

オオオウー!!

「この『魔法』を……それだけでなく、学問の基礎や『農業』、『鍛冶』、『薬学』、『機械学』、『錬金術』といった様々な知識や技術を学べる場を……『学校』を設立しようと思います!!」

オオオウー!!

「子供たちの学び舎となる『学校』ですが、それだけでなく、学習意欲のある人ならだれでも受けられる授業を開くことも計画していて、いろんな人が自分の学びたいことを学べる場となります！」

オオオウー!!

「どのような強化があるのか、費用や設備の詳細、校舎の完成、授業の開始……等は、今後、順を追って公開・発表していきますのでお楽しみに！」

オオオウー!!

マイスさんによる挨拶から始まって、説明の後に『青の農村』に住んでいる人たちの協力もありながらの実演……そんなことを織り交ぜながらの小一時間の発表だったんだけど………

「あれ？」

拍子抜けというか、アツサリし過ぎていた気がした。

もちろん、ステージのある『広場』に集まっている人たちは『魔法』にも『学校』にも驚いているように見えた。

見えたんだけど……なんていうか、その、取り乱したり、怖がったりすることも無く驚きながらも盛り上がって、普通に受け入れている感じが……。

いや別に、嫌がったり、『魔法』のことを悪く言っただけだし、いやじゃないんだけど……でも、『塔の悪魔』との戦いの時に、戦闘中なのに固まってしまうほど驚いてしまったわ。わたしたちが変だったように思っただけで、……この周りの人たちの反応がなんだか納得いかなかった。

一瞬、頭に「わたしが気付いてないだけで、実は周りの人たちはもの凄く驚いてたり……？」っていう考えがよぎった。

けど、いちおう周りを見渡して見た時に、隣にいたメルお姉ちゃんもと目が合っていて……その表情から、私だけじゃなくてメルお姉ちゃんもお祭りに来ている人たちの反応に疑問を持っているんだとわかった。

から、「わたしの気のせい」じゃないんだと確信した。

……でも、じゃあなんでそんなに驚いてないんだろう？

一人で考えてもわからないままのような気がするから、わたしはとりあえずメルお姉ちゃんに聞いてみることにした。メルお姉ちゃんも「なんで？」って顔をしてるけど、わからない同士で話してみたら何か思い当たることを思い出したり、きっかけが生まれるかもしれないし……。

「ねえ、トトリ」

ちよつと悩みながら口を開こうとしたところで、わたしよりも先にメルお姉ちゃんがわたしに声をかけてきてくれた。

「んーと。なんていうかさ、あたしはもうちよつと混乱したりするものかと思つてただけど……みんな普通に楽しそうにしてるっていうか、期待ばつかで不安そうじゃないっていうか」

「あつ、だよ。やっぱりメルお姉ちゃんも同じようなこと考えてたんだ……。何か問題が起きてほしいわけじゃないけど、塔で戦つてる時に見て驚いた自分がおかしかったのかなつて思えてきちゃうよ……」

「そうよねえ。マイルスも喜んでるっていうか安心してるだろうし、それに关してはあたしだって喜ばしいことだと思うし水を差したりする気はないんだけど。でも、なんか納得いかないのよねえー」

メルお姉ちゃんが少し口をとがらせて言つてることの大半が、さつきわたしが考えてたことと同じで内心ホツとする。

でも、メルお姉ちゃんも「何故そうなのか」というところはサツパリみたいで、眉間にシワを寄せて首をかしげてた。

「フム。それは偏ひとへに「経験ひとこえの差」というものだろう」

ふたりして頭を悩ませてたところに、不意にそんな聞き覚えの無い声がかけられた。

声のしたほうへ目を向けてみると……そこにいたのは、『アランヤ村ち』でも『青の農村こ』でも見かけ無いようなカッチリとした服を着て、きれいな装飾がされた杖をついた、鼻下とあごに整った髭ひげ

をたくわえたおじさん……おじいさん？ だった。

このおじさん、どこかで見たことがある気がするんだけど……？
そう思い、必死に記憶の中から目の前のおじさんのことを思い出そうとして……はたとあることに思い当たった。

いつだったか、『青の農村』で開催された『大漁!!釣り大会』っていうお祭りにわたしがたまたま参加して優勝しちゃった時、二位だったのがこのおじさんだった。

思い出したところで、そのおじさんが言ったことをわたしは聞き返してみることにした。

「経験の差、ですか？」

「そう。ここまでそう短くない付き合いがあるのだ、マイスと共に『魔法』の実演をしてみせた『青の農村』の住人はもちろん、何の祭りかわからなくとも来る者や常連は、彼が何かしたところで今更いまさらそう驚いたり恐れたりはせんさ」

アゴ髭に手をやってそう言うおじさんに、わたしとメルお姉ちゃんは目を細める。

「いやまあ、マイスさんはあんなのだし、言いたいことはわからなくもないんですけど」

「だからって、ここまで許容できるっていうのはちよつとね？」

「逆に聞くと、一人で街に出回る作物のその多くを生産し、凶暴だと認識されているモンスターたちと共に暮らし、そのモンスターたちと意思疎通が可能で、農具・調理器具・野菜などで戦い、『カブ』を投げ合ような変な祭をはじめとした様々な祭を開催し、野菜コンテストや釣り大会では一人だけ桁外れな成績を残して「殿堂入り」と言う名の「出場禁止処分」を受ける……そんな人物に常識を求めることなどできないだろうか？」

「ああ……」

そうおじさんに言われて、わたしもメルお姉ちゃんも納得すること

しかなかった。

で、そういう結論にたどり着けば……

「常識を求めようにも、彼はそう簡単にはまがらん。それに、彼は色々飛び抜けたりズレたりしているもの、幸いにも彼のそういった点は基本的には他人の利益にもなるようなことばかりだ。なら受け入れてしまったほうが楽だろう」

「そうなりますよね」

そして、そうなったら後は多少驚いたりしても「でも、マイルスなら……」って受け入れられる形になって、それが続いていくにつれて、マイルスさんの周りの人たちは常識外れのことに対して耐性がついていって……で、今の……今日の『魔法』への反応みたいに驚きながらも普通に受け入れられるようになった、ってことなんだと思う。「わたしも、これまでの付き合いで慣れてたつもりだったけど、まだまだだったんだなあ……」

「トトリ。コレは「慣れちゃいけない」ってほどじゃないけど、慣れなくっていいことだと思うわよ?」

苦笑いしながら首を横に振るメルお姉ちゃん。

まあ、わたしも慣れるべきだなんて思っては無いんだけど……でも、わたしたちももう膝上ひざうえか腰のあたりまで浸ひたかっている気がするんだよなあ……。

「……ところで、だ。盗み聞きのように悪いが、先程の話からすると君たちはマイルス彼が『魔法』アレを使って戦っているのを間近で見たことがあるようだが……どうだったかな? できれば感想を聞かせてほしいんだが」

内緒話でもするように、手を口元に持って行きつつ少しだけ顔を近づけてこころなしかさつきまでよりも声を小さくして、おじさんは問いかけてきた。

どうって聞かれると……

「本当に凄くて、とつても不思議でした。威力って意味では……相手が『塔手の悪魔』だったから最後の以外はパツとしない感じでしたけど、

それでも下から横から不意打ちありで臨機応変に戦えてたと思います」

「んー、あたしも概ねトトリと同じ感じかしら。あえて付け足すなら、あたしらが見た時はいろんなのつかってたけど、『魔法』にも『属性』つてのがあるらしいから本来は相手の弱点に合わせて戦うんだと思うわ。そう出来てれば、強い奴相手でも上手く立ち回れるんじゃないかしら?」

メルお姉ちゃんの言ったことを聞いて、わたしも納得して頷いた。というのも、わたしたち『錬金術士』が使う爆弾等の攻撃用アイテムにも『属性』があつて、それを敵の弱点を見極めて使うのが『錬金術士』の戦闘のキモで……それと同じだと思うとあの多彩な『魔法』の意味がよくわかったからだ。

「フム、なるほど。『魔法』は中々のものようだな。……しかし、大抵誰でも使えるようになるというのは、利点でもあるが同時に気がかりな点でもある。そのための先程見せた安全性なのだろうが……やはり彼女伝いの情報だけでなく、一度マイスから直接話を聞いてみるべきだろうな……」

わたしたちが言った内容で満足してもらえたかはわからないけど、おじさんが何か呟きながらも一人頷いているところを見ると、とりあえずは満足してもらえた……のかな?

「ん、時間を取らせてしまい、すまない。そしてありがとう。私が言うのもおかしいかもしれないが、今日はこのお祭りを楽しんでいってほしい」

「あつ、はい! おじさんも楽しんでいってください」

「ああ、そうさせてもらおう」

そう言つて「では」と言い残したおじさんは、発表が終わつてまだ余韻が冷めやらない『広場』の人混みの中に消えていった……。

「……で、トトリ? あの人、誰だったの? 知り合い?」

「知り合いと言えば知り合いなんだけどー……実はわたしが話したのは初めてなんだ。前に釣り大会の時に話してるのを見かけたから、ロナ先生やステルクさんのお友達か何かだと思っただけど……？」

5年目：マイス 「悩んでも、世界は回り時間は進む」

「ははっ、ありがとね。お祭りの直前で忙しいだろうってのに、こんなワガママに付き合ってくれて」

「お祭りの参加者だから」って……相変わらずと言うか、何と言うか……。ペーター^あをブン投げたって聞いた時もあったけど、お人好しに加えて祭馬鹿が入ってるわよね、マイスって」

「いや、別にそれが悪いわけじゃないし、むしろそのゆるい感じが実は凄い人なのにとつつきやすいつていう魅力でもあると思うわよ?」

「……ああつと、待って。ワガママついであってわけじゃないけど、少し時間貰えないかしら? 確認と……それと、一言二言、言っておきたいことがあるってだけで、そんなに時間はかからないから」

「ん、ありがとね。……で、さっそくなんだけど、モコ助^こって今どこにいるのかしら?」

「へえ。村長さんっていつでも、さすがに『青の農村』のモンスターのことを何でも知ってるってわけじゃないんだ。でも、あの子のことだから、てつきりマイスが家の裏に回ったら入れ替わりで出てくるんだと思っただけどなあ?」

「……………」

「……いやあ、そんなに目を泳がせながら言ってもねえ? って、そんな顔しないでよ。別に獲って喰おうってわけじゃないんだから。……にしても良く顔に出るって言うか、マイスってウソつけない性格

してるわよね。まあ、そんなあんたについてこの間まですっかりダメさ
れてたわけだけど」

「なんでわかったの？」って……まあ、半分くらいは勘で、あとは今
日発表するっていう『魔法』を見た『塔の悪魔』との戦いの時も「ん
？」って思ったんだけど……最初はあの時かしらね」

「ジーンに続いて助けに来てくれた時……あの時にちよつとひつか
かったのよ、『スカーレット』みたいにあんなグルグル振り回されたり
しなかったし、立場が全然違ったんだけど……なんか被^{かぶ}つたの。『ス
カーレット』を投げ飛ばした後のモコ助の姿が、あたしを投げて地面
に叩きつけた後のあんたの姿にさ」

「で？　なんで『変身魔法』使ってコソコソするような真似するのよ？
場合によっては……」

「……………」

「『ハーフ』って、そういう事情が………まいったわねえ、随分予想
からズレてて、言いたいことがあつたけど言えそうにないわ。でも、
そうねえ……変身するのは、みんなからちやほやされたいからとか
？」

「……むしろ、もみくちやにされて疲れる？　でも、それはその姿を利
用した自業自得のような気もするけど……にしても、本当に下心が無
いわねえ。トトリたちにも接してるわけだし、個人的には安心できて
うれしいけど、別の意味で心配な気もするわ」

「つと、ゴメンゴメン、話がズレちゃったわね。えーと、あたしが言い
たいのは……事情があるにしても、やっぱり近い人に騙されてたつ
て知った時は少なからずショックを受けるものよ」

「別に、トトリやツエツイ、他の人たちに明かしてほしいってわけじゃないわ。誰にもバレずにいられれば何の問題も無いわけだし」

「だけど……………マイスは辛くないのかなって」

「自分って自分自身のことを一番よく知ってるもの。あたしは、ギゼラさんのことをトトリに黙ってた時、「トトリのため」って思ってもやっぱり何処か引つかかってさ」

「……………」

「……………そっか。ならいいんだけど」

「まっ、これも何かの縁だし、困ったり迷ったりした時はあたしのところに相談に来てくれていいわよ？ 解決してあげられるかはわからないけど、愚痴ぐらいは聞いてあげられる」

「あたしじゃなくてもいいんだけどね。マイスはあたしが知ってる範囲だけでも、一人で頑張り過ぎてるように見えるし、時には他人に頼ることも覚えたらいいと思うわ」

「あとは……………ありがとね。あの時、トトリやジーノが助けに来てくれたけど、でもモコ助マイスが来てくれて良かったわ」

マイスの家・二階・寝室

「……………あ」

特に何があったわけでも無く、不意に目が覚めた。上体を起こし、

うつすらと開いた目から見えたのは、窓の外のほんの少しだけ明るくなってきた空。その感じからして、いつもの時間に目が覚めただけみたいだ。

ようやく朝日が顔を出し始めた空を見て「今日はいい感じに晴れそうだなー」と思いながらも、僕はあることに考えが回っていた。

「ううん……また、見ちゃったな……あの夢」

夢とは言っても、あり得ないことが起こったりするものじゃない。実際にあったことが出てきてるといふ夢。

あのメルヴィアとのやり取りがあつたのが、数日前のお祭りの時……前々からちよつと頼まれてて、その日の朝に『アランヤ村』に迎えに行つた後のことだつた。

メルヴィアが、金のモコモコが僕だと気付いた……正確には、半分確信して鎌をかけてきたみたいなんだけど……まあ、それに僕が見事に引つかかってしまってバレちゃったわけだ。

メルヴィアは「他の姿に色々変身できる『魔法』」つていう微妙に違う予想をしてたみたいだつたんだけどね。

だけど……別にあの時の事を夢に見て、僕はそう目覚めが悪いってわけでも無かつた。

もちろん、メルヴィアが僕のことには驚いたんだけど……でも、僕が『ハーフ』だつてことを知っても驚きはしても嫌そうな顔とかはしてなかつたし、いつもの調子で受け入れてくれたことにはむしろ嬉しさやありがたさを感じたくらいで、嫌つていう気持ちも無かつた。

でも、何故かこうして何度も夢で見ることになっている。

悪夢つてわけでもないし、逆に良い記憶だったから夢で見てるって感じでも無い気がした。

「うー……なんでだろう？」

そんなわけで、ここ最近、朝起きてはこうして首をかしげて考え込むことが多くなつてしまつている。

そして……………

「つと、そんなことより、早く畑仕事を始めないと！」

毎回、今やるべきことを優先してやっているうちに「まっいつか。そのうちわかるだろうし」と思考を切り上げている。

「ああっ!? 今日ってアレだった！ 早く仕事を終わらせて最後の準備にとりかからないと!!」

青の農村・集会所前『広場』

前回のお祭りを終えてから、僕たちは本格的に『学校』造りに力を入れていることになった。

各教科の教科書や教師、学校施設の建物の計画とそれを立てるための土地の確保。他にも『青の農村』にわざわざ足を運んで聞いてくる問い合わせで生徒募集に関する質問等も増えてきて、準備はもちろん事務的な対応にも追われている。

……が、新しい出来事っていうのは、一つも物事に対してだけ新しく起きるわけじゃない。

これまで通りの生活の中にも季節の流れや、ちよつとした変化なんでものも家ごとに……人、一人一人に起こっていたりするものなのだ。

そう。例えば――

「汝^{なんじ}――。彼女を妻とし、病める時も健やかなる時も支え合い、死が二人を別^{わか}つまで、永遠に愛することを誓いますか?」
「ち、誓いますっ」

「汝——。彼を夫とし、病める時も健やかなる時も支え合い、死が二人を別つまで、永遠に愛することを誓いますか？」
「……誓います」

——幸せな門出とか。

……この愛の誓いを確認する役回りも、随分と慣れてしまったものだ。

歴史も何も無い『青の農村』が出来て初めて結ばれたカップルが結婚するってなった時。

「式とかどうする？」って話になって、村のみんなで祝うように決めて……で、ほとんど農家ばかりで「あーでもない、こーでもない」と話し合って形となった『青の農村』流のなんちゃって『結婚式』なんだけど……それを誰がどうまとめるかって話になった時、僕を除いた全員が「村長で」と満場一致で決めてこんなことになったのだ。

みんなで決めた台本を読むだけなんだけど、最初のころはやっぱりきんちようしたりしちやって、終わった時にはドツと疲れたりした。けど……

僕の目の前で愛を誓いあい、そしてキスを交わす男女。

……新郎新婦の幸せそうな姿をこうして間近で見れる立場って言うのも悪くない。

最近はそう思うようになってた……。

青の農村・集会所

『広場』での誓いを終えた後は、『集会所』内での身内でのお祝いになる。

……まあ、新郎新婦っていう主役がいて、ちよつと料理に手が込ん

でて豪華なだけで、あとはお祭りの打ち上げなんかとさほど変わらな
い賑やかなパーティーなんだけど……それはそれで『青の農村』らし
くていいだろう。

そんな中、僕はと言えば新郎新婦へのお祝いの言葉を終えて、彼ら
から少し離れた場所で一人グラスを傾けていた。

……と、そんな僕に声をかけてくる人が。

村の誰でもありえそうなんだけど……こういう時は決まって彼が
真っ先に来る。

「よっ。なに一人で寂しそうにしてるんだ？」

「寂しそうにして……僕、そんな顔してた？」

「いや、巢立っていく雛鳥を見る目してて気持ち悪かったな。似合わ
ないっいたらありやしないって」

そう言っただけなら笑うのはコオル。『青の農村』の初期の頃から
のメンバーの中でも『行商人』ってこともあつて僕個人とは付き合い
が長い彼とは、こうして冗談交じりに話すことも多い。

多いんだけど……本当にそんな目をしてたのかな、僕は？

そんなことを考えて首をかしげる僕。その隣に来たコオルは「でも
なあ……」と呟いてから言葉を続けた。

「マイルスところに教わりに来たヤツの中で最年少だったアイツが結
婚して……早いもんだよな」

「最年少って言ってもコオルのいつこ下だったよね？ まあ確かに、
あの頃に比べてずいぶんと立派になったけど」

そう。彼は僕のところ『農業』を教わりに来たメンバーで、その
時はまだギリギリ歳が一桁で、でも人一倍『農業』に真剣だった。……
本当に立派になったものだ。身長なんて、とつくの昔に僕の上を行っ
ている。

そんな農業一筋に思えた彼も、今日、はれてお嫁さんを貰ったわけ
だ。

お相手は村や街から見ても南のほうにある、麦の生産で有名な一帯『黄金平原』と呼ばれる採取地近くで暮らしている農家の娘さん。農業の勉強のために『青の農村』に来て、彼とはそこで出会って交際を始めたらしい。

その事を思い出して、「やっぱり彼は農業繋がりで物事をかんがえるのかなー?」なんて考えてただけど……そんな僕をコオルが肘でつついてきた。

「なあなあ、気付いてるか? 初期メンバーどころか、今『青の農村』で成人してて結婚してないのって、俺とマイルスだけなんだぜ?」

「あれ? そうだっけ?」

言われて、村に住んでいる面々を思い出してみても……農作物の生産量の集計や、最近では『冒険者ギルド』で働いたり、学校の設立関係でも手を貸してくれている農家以外の住人の事を思い出してみても……僕は頷いた。

「ああ、そっか。すっかりしてて大人びてる子もいるけど、まだ十代前半だったね。あはははっ、そっかーみんな幸せそうじゃなかったよ」
「って、そうじゃなくてだな……」

「ハア」とため息を吐いて首をふるコオル。

……? 何か間違ってたかな?

「いやな、俺はともかく、マイルスの結婚はまだなのかーって、ウチの連中がみんな言ってるんだよ。直接言われたりしてないか?」

「ああ……」

そう言われて思い返してみる……。結果……

「……数年は、結婚式の度に言われてるかな?」

「それでも相変わらずってわけかー……そういう相手も全くいないのかよ、お前は」

「相手かあ……」

考えてみるが……うん、やっぱり思い浮かばない。

結婚というものを上手くイメージできないっていうのもあるんだけど、それ以上にそれ以前の問題が多すぎる気がする。

そもそも、身長とか童顔とか、常識が無いと言われやすいこととか……僕の外見的・内面的な部分を考えただけでも好きになってくれる人ってというのは少ない気がする。

その上、「異世界出身」、「人間とモンスターの『ハーフ』」っていう二大問題がその先に待ち構えているわけで……うん、やっぱり結婚は色々難しい気がする。

……そもそも、僕自身が数歩ひいちゃっているというか……

ここで、僕の中で何かガチツとはまる音がした気がした。

『だけど………マイルスは辛くないのかなって』

『自分って自分自身がしてることを一番よく知ってるもの』

ああ、メルヴィアと話したことが夢に出るまで何か引つかかっているのは、他でもない自分自身が自分の事を不安に感じているからなんだろう。

メルヴィア以外にもこれまでに僕のことを受け入れてくれた人はいた。それに、それ以外の人も「話も聞かずにつっぱねるようなことはしない」って僕は思っている。

だけど、だ。

周りの人を信じる気持ちよりも、「もしも……もしも、嫌われてしまったら」という不安感が勝ってしまったっているからだろう。

そしてそれを、「別に教えなくても……」とか「話すタイミングが無くて……」と言わなくていい理由を言い訳して自分にも隠してしまうおうとしている……そんな気がした。

自分のことながら、「なんとなくんだけど、そうなんじゃ……？」ってというのが、情けないところだ。

……リオネラさんやフィリーさん、クーデリアやホムちゃんにも受

け入れてもらえているのに、「周りの人とは違う」って不安に思っ
てしまっているのは、客観的に見てもよっぽど自分に自信が無いんだ
と思う。

「結婚」だとか、その相手がとか、そんなことはまずこのことを何
かしてからじゃないとダメだね。

ああ、でも、きっと何か別の事を始めたら一生懸命になっちゃって、
今考えてることとか、結婚のこととか忘れちゃいそうなんだよなあ。

そう思っ
て、僕は心の中で自分の単純さを自嘲気味に笑うのだった
……。

……マイスがひとりでそんなことを考えているその時。
思考に浸っている彼の周りでは……

「おいおいウソだろ!」

「結婚の話をして三歩歩けば忘れる村長が……!」

「あんなに考え込んでる!」

だとか……

「相手がいるかって話であんなったのよねっ?」

「そうだけど……ああっ!　もしかして、気になるお相手が!」

「本当!」

だとか……

「気になる相手って……もしかして私かしら!」

「アンタはもう旦那がいるでしょ」

「村の中で修羅場って……」

だとか……

「村長はウチの娘と……!」

「バカを言うな！ それならウチの娘のほうか！」
「わたしの養子になってくれないかしらねえ……」

だとか、聞き耳を立てていた村の人たちが、本人をよそに騒ぎだしていた。

今日の主役である新郎新婦は……

「そ、村長にやつと春が……!?!」

「えつと、そんなに驚くことなの？」

「あの人、昔つから周りに男も女も寄ってくるのに、そんな話はからつきしで……周りからも、もはやマスコットの扱いだから……」

「ええっ!?! ……あつ、でもわかるかも」

他所出身の新婦が、新郎の話を聞いて驚いたりしていた。

そして、マイスの隣にいるコオルはと言えば……

(……まあ、女を連れ込んでも料理を振るまつたりするだけのマイスに、相手も何も無いか)

と、ある意味一番的確なことを考えていた……。

しかし、こうして騒ぎとして話が広がったように、人とはこういった類の話には目が無い物だ。

そして「人の口には戸が立てられない」そんな言葉が世の中には存在するように……。

5年目：結婚疑惑騒動【*4*】

【*4*】

職人通り

日が沈みかけて薄暗くなってきた水路沿いの通り。

夕焼けが幅のある水路の水面を照らして、見た者に美しさや哀愁を感じさせるものである……。のだが、今、そこにいたある人物は「こんがりとおいしそうに焼けた『パイ』みたい」という感想を心の中で述べていた。

そんな、感想を聞いた人がいれば「お腹が空いてるのかな？」と思われそうな人物は、昼間と比べて人通りが少なくなっている『職人通り』を一人歩いていた。

「ふんっふんっふふーん♪」

彼女……『稀代の錬金術士』ロロライナ・フリクセルの感性で言うなれば、「ひと仕事終わらせた後のこの「ワァーッ!!」って感じの解放感!」……という、わかるようなわからないような表現になってしまいが、まあおおよそは通じるのではないだろうか。

それが大きな仕事ならなおさらで、その上これからお楽しみが待っていることを考えれば、この彼女の歳とは不釣り合いなほどのテンションは仕方のないことだと思える……。かもしれない。

鼻歌交じりになっていたり、アトリエから『サンライズ食堂』までの短い距離をちよつとスキップ気味になっていたりするのも「仕方のないこと」と目を瞑ってあげるべきだろう。……そういうことにしよう。

一応、コロナがこうなったのにはちゃんとした理由がある。

少し前に名指しで入った依頼で始めた数日間かかりつきりになる大きな調査が無事終わり、今日に納品とその報告を終えたのだ。そして、報告ついでに「くーちゃん」ことクーデリアに会い、そこで口

ナノの思い付きでクーちゃんを夜ごはんを食べる約束をしたのだ。

調合でアトリエにこもっていた間は、わざわざアトリエまで来てくれる人しか会えず……それで、久々に会ったクーデリアと「ごはん食べに行きたいなー」と思ったのだろう。

実のところ、ロロナはクーデリアと少し前にも『サンライズ食堂』に飲みに行っていたのだが、彼女は自分でも気づかないうちに飲み過ぎ、結局何を話したのかも思い出せないくらい酔払ってしまった。しかも、目が覚めたら何故か街じゃなくて『アランヤ村』の弟子のトリ住むの家にいて……と、ロクに記憶に無いのだからロロナにとつては「久しぶりにクーちゃんと飲みに行く」ことに違いない。

まあそんなことがあったから、『アランヤ村』にいたピアニャに『錬金術』を教える機会ができたのだから、彼女にとつては一概に悪いことだけではなかっただろう。

少し話がずれてしまったが……そんなことがあったから、ロロナは心の中で、今日はお酒はちよつと気をつけながら飲むことに決めていたりする。

しかし、料理はしつかり食べるつもりではある。調合の事中はどうしてもそれ以外は片手間になってしまい、さしいれ以外はあんまりちゃんとしたモノを食べられなかったため、少々料理に飢えているのだろう。

さて、そんなロロナなのだが……テンションが上がったままでスキップし過ぎてしまいうっかり『サンライズ食堂』の前を通り過ぎてしまったようだ。幸い、すぐに気付き慌てて入り口の前まで退き返していたのだが……大丈夫なのだろうか？

サンライズ食堂

「おっじゃましまーす」

まるで友人宅に訪問しているかのように軽快な挨拶で店内に入る

ロロナ。

とは言っても、これはいつものことであるし、『サンライズ食堂』自体そう特別厳しかったりするわけではないお店なので、仮にロロナのことを咎める人がいたとしても幼馴染であるコックのイクセルくらいである。それも、いつものことなので本気で怒ったりしているわけではない。

それは今日も同様の用得、カウンター奥の厨房にいるイクセルが「またかよ」とちよつと呆れ気味の表情を一瞬浮かべたものの、慣れた様子で「おう」と返事をロロナにするのだった。

「今日は客が多めで奥の角テーブルになるぜ。クーデリアのヤツがもう先に座ってるからわかんדרろ？」

そう言われたロロナが店内に目をやると、イクセルが言った通り奥の席にクーデリアが先についているのが見えた。さきほどの挨拶もあつてクーデリアも当然ロロナが来たことには気づいており、自分のほうを見たロロナにチョイチョイと軽く手招きをする。

手招きに誘われるままテーブルまで来て席につくロロナに、両肘をテーブルについて指を組みその上にあごを乗せたクーデリアが口調だけ少し機嫌悪そうにして話しかけた。

「遅かつたじゃない。もうあんたの分の飲み物も料理も先にきてきに頼んどいたわよ」

「えへへーっごめんね？ あと、ありがとね、クーちゃん」

「べ、別にいいわよ、お礼なんて。ただあたしがボーつとして待つとくのが嫌だつただけなんだからっ」

勝手に頼んだことを特に追及したりせず、ただちよつと恥ずかしそうにしながら謝り、そしてお礼を言うロロナ。

ロロナからすれば「イクセルくんの料理はどれもおいしいし、クーちゃんが選んでくれたものなら間違い無いよね！」というある種の信頼感があつたためなのだが……。

まあ、クーデリアはクーデリアで「ロロナの好みはわかつてるし、食べたいだろうものを選ぶのなんて朝飯前だわ」と内心ドヤア……とし

ていたのだが、本人以外知り様がないため別にどうというわけではない。本人が一人で得意げにしているだけである。

「にしても、仕事終わってからのあたしよりも約束の時間に遅れるなんて、何かあったの？」

「えつと……一回アトリエから出たんだけど『サンライズ食堂』に着く一歩手前で「あれ？ 裏口閉めてきたっけ？」ってなって引き返して……アトリエに戻ってからアレもコレも心配になって確認したら……ね？」

「ね？ って、まったく相変わらず抜けてるわね……。まあ、遅れた事はともかく、戸締りを気にしていることにはある意味安心したわ」

「それほどでも」

クーデリアの妙な言い回しには特に気にした様子も無く、照れる口ロナに、クーデリアは「別に褒めてないわよ」とスパツとツツコミをいれた。

さて、そんな感じに始まった口ロナとクーデリアの食事会だったが……ふと口ロナが「そういえば……」と何故か小声でクーデリアに話しかけた。

「依頼の報告に行った時もそうだったんだけどね、なんだか街の人から遠巻きに見られたりチラチラ見られたりしてる気がして……ここのお客さんも見てきてる気がするし、アトリエに帰ってから自分で確認したんだけど、わたしの髪とか服とかに何かゴミでもついてたりする？」

そう心配そうに問いかける口ロナ……なのだが、対するクーデリアは苦笑いをするばかりだった。

「いや別についてたりはしらないと思うわよ？ ……ていうか、それはどう考えてもアレのせいでしょ」

「アレ？」

「……？ その話もあって今日は誘われたと思ったんだけど……って、ああ。そういえばあんたは……」

互いに頭に疑問符を浮かべ首をかしげ合っていた二人だったが、先

『サンライズ食堂』にコロナの大声が響き渡った。

それほどの大声であり、そのような大声が出るほどの驚きだったのだと嫌でも理解できることだろう。

その突然の大声に客の中には耳を塞いだ者もいたが、コロナと同じテーブルについていた……つまりは一番近くにいたと言っているクーデリアだが何故か別段どうといったことはないようだった。慣れの差だろうか？

と、周りも周りで大変そうだが、大声をあげたコロナ本人が一番大変なことになっていた。

「えっ!? 何? どういうことっ!? 結婚って、相手は!? マイス君のところのお向かいさん!? それとも二軒隣の娘さん!? ああっ! もしかしてその妹さんのほう!? 他には、最近『学校』のことで一緒にいることが多いっていうりおちゃん!? それならフィリーちゃんもよくマイス君の家に行ってるからもしかしてっ!? そ、そそそういえば、わたしの知らない間に『錬金術』を教え合ってたっていうトリちゃんもありえるの!? はうわ!! ……も、もしかして……くーちゃんが!?!」

さつきまでのほんわかオーラは何処へやら。あわてふためき、一人で大騒ぎである。

そして、そのコロナのそばにいるクーデリアとイクセルはといえば……

「この場合、瞬時にこれだけの人数を挙げたコロナに驚くべき? それとも、それだけの候補を挙げられてしまうマイスの普段の行いを責めるべき?」

「マイスだろ? つーか、前のほうで出た奴らは『青の農村』の人なのか?」

「で間違いないと思うわよ? まあ、二児の母、結婚一年目、12歳つていう、どう考えても結婚は無理な面々なんだけど……コロナ、「仲が良さそう」ってだけで名前を挙げてるんじゃないでしょうね……?」

「……ならミスだけじゃなくて、どっちもどっちじゃねえか、コレ？」

呆れ気味のイクセルの言葉にクーデリアが「まあ、そうでしょうね」と返す。

正直なところ二人にとってもこのコロナの慌てっぷりはさすがに予想以上だったのだろう。そのコロナの勢いのせいかもうすでに疲れしているように見える。

だからといって、このコロナを放置するわけにはいかない二人はわかっている。……それに、勘違いはちゃんと訂正しておかないと後々不味いことになるに違いないだろう。

「ちよつと、コロナ」

「うえ!?! な何、くーちゃんっ? 友人のスピーチの話?！」

「おいおい、コイツどこにぶっ飛んでんだよ!?!」

コロナの反応にイクセルは驚き、クーデリアはため息をつく。

「いい、コロナ? よーく聞きなさいよ? マイスは結婚しない、本人から確認も取ったから間違い無いわ」

「ふえ?！」

「だーかーらー、噂話は嘘だったってこと。たっく、噂話一つにいくらなんでも慌て過ぎよ」

クーデリアの言葉を聞いて何回か目をまたたかせたコロナは「ふひゅく……」と息を吐き、脱力した様子でイスの背もたれにだるーんともたれかかった。

「な、なーんだ……ミス君が結婚するわけじゃ……って、あれ? じゃあなんでわたしがチラチラ見られたりしてたの?！」

「そりゃあれだ。普段ミスのヤツの近くにいる奴や関係がある奴が何か知ってるんじゃないか、はたまた「お相手」なんじゃないかっていう憶測が飛び交ってな。それで注目を集めてたんだと思うぜ? なんだって、うちの客も「何かしらねえか?」って俺に聞いてくるしな」

「そんだけ今、注目の的なんだよ。ミスとその周りがな」と付け加

えて締めくくるイクセルに、ロロナは「へえー」とわかったのかわかってないのか微妙な反応をしている。

「噂が流れた当初は今さっきのロロナほど……じゃないけど、アツチもコツチも大騒ぎだったのよ。当然、ほんの二、三日で治まるわけはないし。その上、何故か『冒険者ギルド』でもその話で持ち切りで……おかげでジオ様に久々に会えたんだけど……。あとは……噂の真偽については私は結局、本人に聞いて確認取ったわね」

「俺も同じ感じだな。ウチはミスところから色々仕入れてるからな。その時に確認したんだよ」

「そ、そうだったんだ……そんなことがあつてたなんて……」

驚愕しているロロナは、口をポカーンと開け、目を真ん丸にしている。

時間のかかる調査だったとはいえ、いつものように釜をぐるぐる混ぜたりあんな事があつたのであれば、いつの間にか知らぬ間に外ではそんなことがあつていたのだと知れば、それは驚いても仕方のないことかもしれない。

「まあ、仮に本当だったとしても、あたし達は特に何もすべきじゃないと思うんだけどねえ……」

「ええっ!? どうしてクーちゃんはそんなこと言うの!?!」

ぽつりと呟くように言ったクーデリアの言葉に、ロロナが思いつきり反応する。が、クーデリアは特に驚いたりもせず、さも当然の様に答える。

「なんでって、そりゃあ……ミスはこの国でも特殊な立場だったりはあるけど、結局は本人たちの問題じゃない? そこにあーだこーだ口出しするのは良いとは思えないもの」

「それは、そうかもだけど……でも、ミス君はまだちっちゃいし……それになんだか——」

「ちよっ、それはどういう意味? なんかにケンカ売られてる気が……ま、まあ、身長はひとまず置いておくとしてよ? あいつだって「約」とは言っても結婚には十分な歳はいつてるわ。というか、

むしろそろそろいい加減結婚してもおかしくないくらいで、逆に言うところそろヤバイわけ……」

「ちよつと待った！……それ、俺たちにもぶつ刺さつてねえか？」

話し出したクーデリアに割り込む形でイクセルが制止をかける。

……内容が内容なだけに、三人の間に何とも言えない空気が流れた……。

「なんか変に嫌な気分になったけど……そういうのは、お酒を飲んで忘れちゃいましょう」

「あ、あはははっ……そうだねー」

「ちよ、ずりーぞりー!? 俺仕事だから飲めねえのに！」

「それにしても、結婚の噂なんてたつてたんだー……うーん？ さしいれを持つてきてくれた時には、マイス君いつも通りだったし、そんな噂されてたなんて思えないけどなあ？」

5年目：マイス「来訪者」

青の農村・マイスの家

このところ段々と肌寒さを感じ始めるようになったけど、昼下がりとともなればさすがにまだ温かくはなる。いわゆる季節の変わり目の時期だ。

ここ最近の僕は、畑仕事などといった普段の仕事以外にも『学校』設立に関わるアレコレもあり、多忙と呼べる日々を送っている……って言うのは言い過ぎかもしれないけど、いつでも何かしらやるべきことがあつて暇をしない。個人的には、時間に追われながらもとても有意義な日々だと思う。

……とはいっても、今日はいつもととはちよつと違つたりする。

というのも、今日はお客さんが……とだけ言うと「よく来てるじゃない？」なんて思われるかもしれないけど、とにかく今回は珍しい組み合わせの人たちが一緒になつて来ているのだ。

僕の座っているイスから見て、テーブルを挟んで反対側にある三人がけのソファアの真ん中を開けて並んで座っている二人は、先日にも『魔法』のことを詳しく聞きに僕のところに来たジオさん。もう一人は、かつてこの国がまだ『アーランド王国』だったころに王宮の……ある意味では『冒険者ギルド』の先進であつた『王宮受付』で受付嬢をしていたエステイさん。

エステイさんとは約月一である近状報告のような手紙のやりとりこそあつたものの、こうして実際に会うのはとても久しぶりだったりする。

「珍しい組み合わせ」なんて言つたけど、実際のところはジオさんとエステイさんという組み合わせ自体は有り得ないものじゃない。国上層部の関係者つていうのもあるし、二人の間には他の人たちとはまた別の信頼関係のようなものがある……ように思える。

だから、二人が一緒にいること自体に「なんで？」とは思ったりはしない。

けど、僕がこうして二人一緒に会ったのは、本当に指折り数えるほどの回数しかなかったりする。一番最近は……確か『青の農村』が正式にできた日だったかな？

……まあ、そんな二人が今僕の家に来てるわけなんだけど、その来た理由って言うのが………

「……なるほど。つまり、あの噂は事実ではなく嘘で、それは別にキミの口から出た言葉から広まったりしたのではないのだな？」

「はい。全く身に覚えがないから、たぶんどこかの誰かが冗談半分に行ったことが人伝で広がっていったんだと思います」

「あの噂」……少し前から、『アーランドの街』や『青の農村』を中心に爆発的に広がった「マイルスが結婚する」っていう根も葉もない噂。そのことについてジオさんとエステイさんに説明を求められ、とりあえず僕の知っている限りのことを話したところ……ジオさんから確認をされたため、僕は領いて答えた。

すると、ジオさんはその整ったあごひげを親指と人差し指でつまむようにして触れながら「フム……」と何かを考えるかのように目を瞑った。

そんなジオさんと入れ替わるようにして、今度はエステイさんが僕に話しかけてきた。

「にしても、性質の悪い噂よねえ。冗談や悪ふざけで流していいものじゃないわよ、コレ。もし私がマイルス君の立場だったら……噂の出所をつきとめて犯人をぶつ○すところよ」

最後のほう、エステイさんの声のトーンが変わり、一瞬何かおかしい感じがしたんだけど……結局、その違和感が何だったかはわからなかった。

でもまあ、エステイさんの言っていることもわからなくもない。事実、噂を本当のことだと思ってしまう人が僕が知っているだけでも何人もいて色々と問題が起きた。

「まあ、確かに困りましたよ……。会う人会う人に「あの話、本当？」とか「おめでとう！」とか「お相手は？」とか聞かれたり……。『青の農村』のモンスターたちがどこからか花を摘んできてくれて申し訳なかったり……。『青の農村』の子供たちが何かコソコソしていると思つたら「まいす、けつこんおめでとう」って書いた横断幕を作つてるところを発見しちゃって、「あの話は嘘で結婚しないよ」って言うにも言えないけど、言わなかったら言わなかったで後でもっと大変なことになるのは目に見えてるから言わないといけないっていう板挟みになったり……。『結婚はしないよ』って説明したらしたで、いつもより顔が暗くなつてた子の顔がパアツて明るくなって「なら、おとなになつたら、わたしとけつこんして！」って言ってきて、便乗して別の子も何人が言ってきて、それにどう答えればいいのかわからなくって……。」

「ええつと、ツツコミたいところはいっぱいあるんだけど……。……とりあえず、お疲れ様」

エステイさんが、苦笑いをしながらそう言つて、いちおう僕を労つてくれた。

まあ、確かに噂のせいで何度もとっても疲れたりした。

なんというか、嘘の噂が広まったのは僕のせいじゃないのに、信じなくなっていている人たちを見る度にもものすごく申し訳ない気持ちになつていって、何かがゴリゴリ削られて精神的に疲れてくるっていうか、そんな感じで……

でも……

「慣れてくれば、『青の農村』で他の人の結婚式があつた後の「村長はまだ結婚しないんですかー？」がちよつと大きくなったバージョン、つて思えるようになってきて、対応にもそう疲れなくなつてくる

んですけどねえ」

「……私が知らなかっただけで、マイルス君も結構周りから言われたりしてるのね」

エステイさん、最後に僕の耳でもギリギリ聞こえるか聞こえないかくらいの声で「けど、まだ二十代だからって余裕があると思ってるんでしょけど……」って呟いて……。

「余裕」って、それは体力には自信があるから、これくらいじゃどうかなってしまったりしないとは思って……それに精神的にもある意味「気持ちの持ちよう」だから、今回みたいにならんと考え方を覚えてみたり、慣れてきたりすれば余裕は余裕だろう。それは間違っていないと思う。

と、そこに、考え事を終えたのかジョオさんが話に加わってきた。

「フム、この村の住人には聞かれるそうだが……実際のところ、どうなんだ？　結婚は考えたりはしていないのか？」

「考えたことが無いってわけじゃないですけど……とりあえず結婚は「しない」って思ってます」

僕がそういうとジョオさんはわずかにだけ目を細め、エステイさんはただただジッと僕の目を見てきた。

「ええっと、理由は色々あるんですけど……『学校』のことでいそがしかったりしますし、それに畑仕事とかに打ち込みがちですから、どうしても結婚（そういつたこと）とかを考える時が無くて……それに、考えてもすぐに別の事を考え出しちゃうくらい興味を持ってないわけですから。なら、今自分がやれる仕事とかを一生懸命できるのが一番かなーって……」

「いちおうは全く何も考えなしに言っているわけではない……ということか」

「なら、ここまでの話を総合的に見ても、私達から言うべきことは無いかしらねえ？　……個人的には色々と言いたいけど」

そう言っただけ息を吐いたエステイさん。

……って、あれ？

「私達？ 個人的？ ってことは、もしかして今日は国勤めとして何かお話でもあつて……？」

でも、そんな話は最初からずっと全く聞いてない。というか、噂の事を聞かれてからはほとんど喋ってるのは僕だったし……もしかしたら、噂の事を聞くために来たのかな？

「ああ〜つと……も、もうだいたい用は終わってるからマイルス君は気にしないでいいわよ？ ……ですよねっ？」

「何故私に振る!?! ……まあそういうことだ。気にしないでくれたまえ」

「は、はあ……？」

流れからすると、どう考えても他に何も情報も無いから噂のことを聞きに来たっぽいんだけど……何か……絶対何か隠してる感じがする。第一、話を聞くためだけにわざわざジオさんとエステイさんの二人が動くとは思えない。……となると、やっぱり別に何かがあるに違いない。

……と、思っただけで、僕はそれ以上考えるのはやめることにした。

そもそも相手はジオさんとエステイさんだ。いい人である二人が何か隠してたとしても、そんな悪い事をしたりはまずしないに決まっている。なら、下手に探ったりせずにおいた方が良さだろう。

「オホンッ。まあ、今回は噂一つで随分と大事になってしまったわけだが……その影響はまだ尾を引いているようだ。早く何とかなつて欲しいものだが……」

「ああ、それはそうですね。慣れてきたって言いましたが、やっぱり良い気はしませんから……。僕のほうでも手は打ってみましたけど、あんまり効果が無くって……」

「手、って……何をしたの？」

「噂なんて気にしないで、いつも以上に「いつも通り」にしてみました！」

そしたら、周りの人は「いつもと変わってない」って気づいてくれるだろうし、もつとずつと見てたら、相手の影も形もないことがわかりますから！」

「マイス君のいつも通りって……前と変わってないなら、朝起きて、畑仕事して、挨拶してまわって、街に顔出して、また街でも挨拶してまわって、依頼を受けに受付に行って、他にもお店やアトリエに寄って………噂がなかなか消えないのって、そうやって何人もの娘こに会ってるからなんじゃ……」

ロロナ【*5—1*】

【*5—1*】

青の農村

見渡す先に見えるのは点在する建物と、その周囲にある畑。道を行きかうのは、村の住人と、荷物を背負った行商人、あとは青い布を巻いたモンスターたち。

『青の農村』のいつもの風景に目をやりながら、わたしは一度大きく深呼吸をして心を落ち着かせる。

「来ちゃった……で、でも別にいいよねっ！ 用があるんだから！」

そうっ！ 今日『青の農村』に来たのは、学校で使う『錬金術』の教科書の作製の集まりのため！ じゃなかったりする。……わたしのところに大きな仕事が入ったり、それに合わせてトトリちゃんが『アランヤ村』のほうに帰ったりして、「他にもやらなきゃいけないこともあるし、そこまで急がなくてもいいから」ってことで、『錬金術』の教科書作りは一旦ストップしてる。

「けど、ちよつと気になるところがあるから相談したい、ってことで、会いに行っても問題無いよねっ？」

そういう建前でこうしてここまで来たけど……だ、大丈夫だよね？ わたしがここに来た本当の理由は、「マイルスが結婚する」っていうあの噂のことを確かめるため。

くーちゃんやイクセくんはああ言ってたけど、あの後、アトリエに帰ってからも「噂は嘘っていうのは本当なのかな……？」って心配になってモヤモヤした。もちろん、くーちゃんやイクセくんのことを疑うわけじゃないんだけど……でも、やっぱり気になって、どうしてもマイルス君本人に確認を取りたくなったのだ。

……で、「またこの間みたいにな、いつも通りに『パイ』を持って来て

くれたりしないかなあ。それで他愛のないお話をして……」って待ってみて一日。

「学校の校舎のこととか他にもいろんな事しないとイケないらしいし、忙しいかもしれないから、わたしの方から何か持って行ってあげたほうがいいかな？」って思いながらも、なんだか一歩が踏み出せなくて悩んで一日。

「そういえば、ミス君ってどんな女の子が好きなんだろう？」って途中考えながら作っていたせいも、ちよつと混ぜ過ぎて調べていた『パイ』を爆発させちゃって一日。

……そんなことがあって、ようやく今日、決心とさしいれの『ベリーパイ』が完成し、こうして『青の農村』まで来ることができたのだ！

「ここまで来たんだから、いまさら引き返すわけにはいかないよ、わたし！ それに、アレは嘘なわけだし、あくまでその最終確認っていうか、そんな感じのをするだけで、緊張する必要は……！」

「いや……こんなところにつつ立って、ひとりで何ブツブツ言ってるんだよ、ねーちゃん？」

「わひゃあ!?! ……って、コオル君？」

いきなりかけられた声に驚いて跳び上がってしまった。その驚きで高鳴ったドキドキを抑えつつ、わたしがその声のしたほうへと目を向けると……『青の農村』を中心に活動している行商人のコオル君がいた。

わたしがアトリエを始めてからの付き合いで、当時の名残で未だにわたしのことを「ねーちゃん」と呼んでいるコオル君。本人も「行商人」って名乗ってはいるけど、最近は昔みたいに自分の足であちこち行っている様子は無く、村での交渉や売買が主な仕事になってるみたいで、普通の商人みたいになってたりする。……陰では『村長補佐』とか『村長代理』とか言われてたりもするみたい。

そのコオル君が、わたしを見ながら呆れたようにため息をついている。……そ、そんなにわたし変だったかな？

「んで、どうしたんだ？ 今日学校のアレは無いはずだし、買い物に

でも来たのか？」

「えつと、そういうわけじゃなくってね。ちよつとマイルス君に用があつて……」

わたしがそう言うと、何故かコオル君は明後日のほうを見て「あ……」つてなんだか声をもらしながら、髪をかいた。

「んつとな……今日はアイツ色々あつてさ、用があるなら明日とかにした方がいいぜ？」

「あつ、やっぱり学校のことと忙しかつたりするの？」

「そういうわけじゃないんだけど……面倒事つーか、なんて言うか……」

なんだから煮え切らない感じって言うか、何なのか具体的には言つてくれないコオル君。

……？ どうしたんだろう？

もう次のお祭りの準備でも始まつてるのかな？ それなら、内容を秘密にするために隠したりしてもおかしくなさそうだけど……。

不思議に思いながら、なんとなく遠目に見えるマイルス君の家のほうへと目を向けてみて……

「あれ？」

遠目に見えるマイルス君の家の玄関から、マイルス君と……初めて見る気がする女の人が出てきた。

『青の農村』の人ならわたしも大体知ってるし、違うと思う。じゃあ、作物とかの取引をしに来た人？ ……それにしても、服とかが煌びやかキラキラしてような気がして、商人さんつて感じでもない気がする。

そんな見たことのない女の人は笑顔を浮かべながらマイルス君に手を引かれて、わたしのいるほうとは逆方向、『集会場』のある広場の方向へと歩いていっていた。

その遠目に見える後姿を指差して、コオル君に聞いてみた。

「ねえ、コオル君。あの人が初めて見るんだけど……『青の農村』の人？」

そつちに目をやったコオル君は「ああ」と言ってから続けて……

「あれはマイスの見合い相手だよ」

「えっ………みあい、あいて？」

「ああ。確か、どつかの『貴族』の御令嬢らしいぜ？ つつても、話を聞いたのはマイス本人で俺も詳しいことは知らねえんだけど……まあ、大方、こないだの噂で色々あった関係だと思っぜ？ なんでも、国のほうから話が来たみたいで……つて、ねーちゃん、聞いてるか？」

職人通り

「……あ、あれ？」

気付けば、目の前にはアトリエの玄関が。アトリエの外壁を照らしているのは夕日で、空は赤く、端のほうは黒くなりはじめていた。

昼間なら人も行きかっている『職人通り』。でも、あたりを見渡してみただけど、時間の問題か人通りも少なくなり始めているみたいで、誰も歩いていない。

わたし、いつの間に帰ってきたんだろう？

えっと、確かあの後……歩いて帰ってきたっけ？ それとも『トラベルゲート』で？ 経っている時間からして歩きっぱいけど……うーん、憶えてない。

あと、アレは……

「夢……とか、そういうわけじゃないよね……」

それはなんとなくわかってる。それに、遠目で見ただけなのに焼き付いて離れないくらい憶えてる。

マイス君に笑顔で手を引かれていた女の人。その手を引くマイス君も笑顔だった。

「……とりあえず、中に入る」

不意に吹いた、冷たくなり始めた風に身を震わせながら、わたしはアトリエのカギをあけて中へと入った……。

コロナのアトリエ

夕日の差し込む窓のそば。ソファアに何をやるわけでも無く座る。そんなわたしの隣には、『青の農村』まで持って行つてたカゴが……。『ベリーパイ』……美味しくできたはずなのになあ……」

カゴの中には、さしいれ用に作つてた『ベリーパイ』が出ていった時と同じ数だけそっくりそのまま残つていた。

「もつたいないし、晩ゴハン代わりに食べちゃお……」

一緒に用意していたお皿に『ベリーパイ』を一ピース取り出し、ソファアから立ち上がつて『香茶』も自分の分だけ用意してから戻つて来て座る。

「それじゃあ……いただきます」

一口、『ベリーパイ』に口をつけてみる。

うん、おいしい。『香茶』にもよくあつてる。やつぱり今回の『ベリーパイ』は過去最高の出来な気がする……するんだけど……。

「ふえぼでも、ふあんふえだおなんでだろ……」

味も、品質も申し分無いはず……なのに、何故かわたしの頭の中に浮かぶのは、口の中と目の前にある『ベリーパイ』じゃない、全く別の『ベリーパイ』。

『アーランド共和国』がまだ『アーランド王国』だったころ。まだまだ一人前とは言えないわたしとホムちゃんで忙しくしてた時に、マイス君が手伝いに来てくれたあの日。依頼の調合ついでに追加で三人分作つた『ベリーパイ』。

後に依頼主さんからは「最高の『ベリーパイ』だった！」って大好評をもらったんだけど、調合後のティータイムに食べたほむちゃんに

は「これより美味しい『ベリーパイ』をホムは知ってます」ってダメだしされて、それにシヨックを受けてるとマイルス君が慰めてくれて……。

口の中にあつた『ベリーパイ』を飲み込み、「ふう……。」と小さく息をつく。

「ごっちの『ベリーパイ』のほうが上手く出来てるはずなのに、なんであの時の『ベリーパイ』が食べたくなって思っちゃうんだろ……。」

なんで？ わからない。わからないけど……なんだか、自分の手元にある『ベリーパイ』にもう一口、口をつける気にはなれなかった。

「どうしたんだい、ロロナ？ そんな、涙なんて流しちゃって」

「ひゃい!？」

不意に耳元で聞こえてきた声に跳び上がってしまいそうになり……手元にあつた『ベリーパイ』と『香茶』に気がついて、それをなんとか抑え込んだ。……『香茶』のほうはちよつと跳ねちゃったけど……。

そして、声の主を探して目をやると……

「つて、タントさん!？ なななつ、なんでいきなり……!？ ちゃんとノックして入ってきてください!」

「したよ？ けど、返事がなくてさ。「留守かな？」って思ったんだけど、ドアは開いててね、気になって入って見たんだけど……まさか、ひとり黄昏たそがれてるロロナが泣いてるなんて思わなかったよ」

「な、泣いてなんかいません！ これは……そう！ この『ベリーパイ』が美味し過ぎて感動しちゃったから涙が出ちゃっただけです!」

タントさんに「それって、やっぱり泣いてるんじゃないや」ってツツコマれたけど、そんなのよりもなかはわからないけど「誤魔化さないど!」って思ったわたしは、そう言って手元の『ベリーパイ』を口に詰め込んだ。美味しい、美味しいんだけど……やっぱり何かが違う気がする。

「それで？ モゴモゴ……ふあんとうふあんふあこふはじふあんにのんのふおうでいふふあ タントさんはこんな時間ふあいだふはふおおふおふえうに何の用ですか？
？ ひよーほーのらんはんはふあ 調合の依頼なら、いふあふあらへつはいい 今なら絶対に ふあいだふはふおおふおふえう 大爆発を起こせる
自信ふいふいんのほひはふふえほがありますけど？ ングツ……」

「いや、別に依頼ってわけじゃないんだけどね？」

ちよつとだけ苦笑いをしてたタントさんの顔が、ふと優しい微笑みに変わり……その右手に持っているモノを前に出してわたしに見せてきた。

「ちよつと仕事の都合で良いお酒が手に入ってきた。一人で飲むのもあれだし、よかったら一緒にどうかなって思っ……」

「……『ベリーパイ』にあうお酒ならいいですよ」

「あーうん、それはどうだろう？」

……なんでだろう？ また苦笑いされた……。

「失礼する。以前に出してもらった報告書と品物の件で少々……なんだ、この状況は……」

所用で『コロナのアトリエ』に踏み込んだステルクは、アトリエ内の様子を見て眉間にシワを寄せた。

……というの……

「だからですね！ マイス君が、女の子に興味を持ったり「結婚したいー！」って思ったりするのは男の子だから仕方ない事だっというの
はわかってるんですよ！ 特に、くーちゃんたちも言っていましたけど、永遠の青少年って感じでももういい歳ですし、結婚の事を考えるのもいいと思うんです……でもっ！ それをなんでわたしに相談しないで、お見合いなんてするんですかー!!」

「ああ、うん、そうだねー」

「そもそも、初めて会う貴族の子なんかじゃダメですよ！　マイス君、良い子だから騙されちゃいますよ!!　それにっ！　結婚なら、昔っからマイス君と仲が良いりおちゃんとかファイリーちゃんとか……『貴族』がいいなら、あんな子よりくーちゃんのほうが百倍カワイイじゃないですか！　そこから間違えてます!!　その後も、相談してくれれば、付き合うきっかけ作りとか、いい雰囲気作りとか、デートプランとか、告白の練習とかいっぱい手伝ってあげるのにー!!」

「はははっ、その通りだね。……おかしいなあ？　予想してたのとかなり違うんだけど……」

「タントさん！　聞いてますか!?!」

「ああ、はいはい。聞いてますよーっ」と

明らかに酔っぱらっていて普段より二割増しの音量で喋るコロナと、そのコロナに絡まれて心なしかげんなりしているタント……もといトリスタン。

さすがのステルクも、これはメンドクサイことだとすぐに理解するが……放置することもできず、また、コロナあっちがこちらに気付いたこともわかったので、一人諦めたようにため息を吐いた。

「あーっ！　ステルクさーん!!　いいところにー、一緒に飲みましょう！　のんじやいましょう!!」

「……断る理由は無いが、何故酒と一緒にパイを……とてもではないが、良い組み合わせとは思えないのだが……」

「なんですか……わたしの『ベリーパイ』が飲めないって言うんですかー!?!」

「パイは飲み物ではないだろう……」

事の経緯はともかく、これは重傷だ。そう判断したステルクは今後どうするか頭を悩ませつつ改めて大きなため息を吐いたのだった
……

「最初は良いタイミングに会えたと思ったけど……ここで、よりもよってコイツが来るなんて……運が良いのか、悪いのか……」

ロロナ【*5—2*】

【*5—2*】

職人通り

お昼時を過ぎ、人の行き来がピークを越えたちやうどそのころ。まばらな人通りの中を歩いて、私はある場所を目指して歩いていった。「あらら。ちよつと外装が改装されてるかしら？」となると、内装のほうはもつと変わってるでしょうね。まっ、結構な期間来てなかったし、そのくらい変わってて当然と言えば当然かあ」

目的地の『サンライズ食堂』の前に立って、その店構えを一通り見てみれば、自分の記憶の中にある『サンライズ食堂』よりも小洒落た外装になっていることに気付く。

けど、その外装の装飾は店を綺麗に彩^{いろど}ってはいるものの、装飾過多と言うわけでもなく、むしろ最低限のものといえるほどの規模でそれでいてパツと見で「オシャレ」だと思わせられるもので……綺麗だと見させても決して「高そうだ」とか「入り辛い」とは感じさせない、正に『サンライズ食堂』らしいものだ。

ここ何年か街を離れていたけど、その間に『サンライズ食堂』以外にも人も物も変わった^りしているみたいで、帰ってきてから色々と処理しないといけない諸々の問題をやつと^のことで処理し終えて、こうして街に出てみるとその変化を発見できた。

……というか、数年ぶりに帰って来た^つて来^つていうのに今の今まで色々バタバタしてて、自由な時間がロクにとれなくて、のんびりするヒマも無かった職場環境自体が問題がある気がするけど……。

こんなのだから出会う機会が無^くつて結婚もできないんだと思う。うん、職場が悪いのだ。やりがいはあるけど、それはそれ。

まあ、そんなことはひとまず置いて、私は、今にも腹の虫が鳴いてしまいそうなほどのこの空腹感を何とかすることを優先することにした。

遅めのランチを食べるために『サンライズ食堂』の扉のノブへと手をかけ…………ふとある事を思い出す。

「そういえば、初めて会ったマイス君を『サンライズ食堂』に連れてきたのもこんな変な時間だったかしら？」

街の外で倒れているところをロロナちゃんたちに拾われて運ばれてきたマイス君。そんなマイス君が目覚めたあと、身元を確かめたりするためにちよつと話した後にゴハンに連れて行ったのがこの『サンライズ食堂』だった。

その縁もあつてか、マイス君はその後何度も『サンライズ食堂』に脚を運ぶようになったらしく…………そのまた後には、育てた作物の取引相手にもなったとか。

「あの頃は弱々しさもあつて本当にかワイイ子で…………いやまあ、今もカワイイ系なのは間違い無いけど、触れると火傷しかねないというか、扱いが難しくなっちゃったのよねえ。本人に悪気も無ければ、別に何か罰せられることをしてるわけでもないんだけど」

そもそも今の今までバタバタしてたのも…………もつと元を辿れば、長い間街の外での活動が多かったのに今になつていきなり街に帰ることになったのも、マイス君のせいなのだ。でもやっぱり本人に悪気も自覚も無ければ、むしろ周囲の行動による被害者的な立ち位置で…………けど、それでもやっぱり無自覚の行動のせいっぽいきがするのよねえ…………？

…………そんな、影響力も全く無くってかわいい男の子ってだけだった昔のマイス君を思い出しつつ、私は改めて『サンライズ食堂』の扉を開け、中に入った…………。

サンライズ食堂

「イクセくくん。お酒おかわり〜！」

「ほどほどにしとけよー」

「いいから早く〜！」

私は目を疑う。

というのも、『サンライズ食堂』に入って見えたのが、どう考えてもお昼過ぎこんな時間にあつていい光景ではなかったから。

これで飲んでるのがあのティファアナさんならまだわかるし、「旦那さんのこと思い出しちゃったのかなー……」なんて思いながらも絡まれているかなわれないからコッソリ逃げ出すんだけど……カウンター席で飲んで、カウンター向こうのイクセル君に絡んでいるのは、『サンライズ食堂』の二軒隣りにある『アトリエ』の現店主……ロロナちゃんである。

「ほらよっ。追加だ」

「わーい！ お酒だ〜♪」

「何日もウチで飲み食いしてくれるのはありがたいことだけど……いい加減、こんな真昼間から酒を飲みまくるのは止めた方が良くと思うぜ？」

「飲んでないとやってられないんだもーん」

そう言つてグラスを傾けるロロナちゃんを見て、頭に手を当てて「はあ」と大きなため息を吐くイクセル君。どうやら、今日以外にもあつているらしいロロナちゃんの相手に疲れはじめてるみたい。

「まあ、三杯目からは酒じゃなくて薄めたジュース出してるから、酒をあびるほど飲むより身体に負担は無いだろうし好きにさせるか」

「ふえ？ イクセくん、何か言つた？」

「いや、別に？」

あつ、いや、思つたよりも余裕そうかも。

でも、ロロナちゃんの身体を気遣つて、途中からお酒を出さずに別の物を出してるらしいけど、それってどっちの値段で請求してるのかしらね？ あと、お酒じゃないって気付かないロロナちゃんって……。

『サンライズ食堂』内の光景を見て、店に入つてすぐのところではただ呆然と立ってそれを見ていた。

と、イクセル君が入店してた私にようやく気付いたようで、コツチを見て「いらつしやいま……」と途中まで言つて、あからさまに嫌そうな顔をされた。

いや、なんでよ？

「ちよつとー？　いくらなんでも、久々に会つてそんな顔されたらグサツとくるわよー？」

「怖いから、笑いながら言わないでくださいよ……。しばらくぶりっすね。……あと、別にエステイさんがウチに来ることが嫌というわけじゃなくつて、タイミング的には最悪だつてだけですから……」

「それつてどういう意味……つて、あら？」

イクセル君の言つてることがよくわからなくて聞き返してみたんだけど……ちようどその時、視線を感じて反射的にそっちの方に目を向けたんだけど、そこにいたのは……

「じー……っ」

お酒(じやなくてジューズかもしれない)が入つたグラスを片手に、可愛くほつぺを膨らませて私をジツと見つめてくるコロナちゃんが。

ああつ……私にも、する行為が一々可愛かつた幼少期があつて……つて、コロナちゃんももうとつくに二十代後半……四捨五入したら三十路のいい歳になつてゐるんだつたわね。それでこの衰えを見せない可愛さつていうのはズルいと思う。

……でも、なんで私の顔をそんなに見てくるのかしら？

会うのが久しぶりだから驚いてる？　それとも……もしかして、私の顔を忘れちやつたとか？　いやまさか。

「……すか」

「ん？」

「エステイさんなんですか!?　あんなことしたのは!?　ヒドイです！」

ミス君がわたしに相談する時間も与えないように立て続けに……未だに結婚できないことへの八つ当たりですかー!?」

「お？（威圧）」

今、何言ったよ？ この子？

「どれもこれも、わたしが頼りないからだー!! わーん！」

そう言っただけ泣きながらカウンターに突っ伏せるロロナちゃん。
……で？ さつき何言ったよ？ うん？ なんかとんでもないこと
言った気が……

「ああ、こいつ相当酒が回ってるなあ、言ってることが支離滅裂だ。飲んだ酒の量はたかがしれてるのに……やっぱこういうのって飲んでる時の気分っていうか気持ちの持ちようが関わってくるものなんですかね？」

「まあ、そういうこともあるとは思わ。……で？」言ってることが支離滅裂」ってわかるってことは、ロロナちゃんが何を言ったのかわかってるのよね？ 私の聞き間違いとかじゃないってことよねえ？」
「さ、さーなんのことやら……？」

あつ、イクセル君ったらあからさまに目をそらした！ ってことはやっぱりロロナちゃんがよく手入れされたナイフのような言葉をブン投げて来たのは幻聴でも何でもなかったって事ね。

これは、一回しっかりとおはなししないと……

「……って、あらっ？」

「くうー……すびい……」

突っ伏したまま寝息をたててるロロナちゃん。……ホントに子供みたい。いや、こんな酔払いな子供は可愛げ無いだろうけど。

「……で？ どうしてこんなことになっちゃってるの？」

「あー、話を聞く猶予はあるんですね」

「いちおう、ね。あとのことは、ゴハン食べながら考えることにするわ。色々と思うところはあるけど、どうにも私の知ってるロロナちゃんと違い過ぎて……いやまあ、コレがここ数年で成長した結果だって言うなら、寝てても一発入れるつもりだけど」

私は気持ちを落ち着かせつつ、ロロナちゃんの寝ている隣の席に座

り、そのままの流れで適当なものをメニューの中から選んで注文する。

イクセル君のほうももう切り替えたみたいで、注文を聞いてから「あいよー」とちよつと気の抜ける返事をして調理にとりかかってくれた。そして、調理をしながら私にここ最近にあったことを話してくれた。

「どこから話せばいいのやら……そうっすねえー」

そこからイクセル君が話してくれた内容をまとめると……

・始まりはおそらく「マイルスが結婚する」と言う噂から。

・広まり出して少してから初めてコロナちゃんがその話を知った。そこからちよつと落ち着かない感じ。

・それから数日後くらいからコロナが『サンライズ食堂』に入り浸ってお酒を頼むように。

・そんなコロナを心配してか、様子を見に来て付き合う人が数人。クーデリアは気になるが昼間は仕事に忙しいため中々様子を見れず、主にトリスタン君やステルク君が、らしい。

・そんなことになった原因は、酔払ったコロナの口から出てくる言葉からすると「国からの話がきたお見合い相手がマイルスのところに来て、そのことをマイルスが話して^{相談して}くれなかったから」らしい。

「けど、酔払っていくにつれて怒り方っていうか、その内容が微妙にズレてくるんすけどね？ そのお見合い相手とマイルスのヤツが凄く仲が良さそうだったとか、手を繋いでたとか……俺から言わせてみれば、マイルスが相手を邪険にしたりすることはまず無いし、スキンシップも元々多いタイプだから、そのくらい気にすることじゃないと思うんすけどねー」

「いやっ、ソコは気にすべきだと思うわ。けど、それよりも……」

ただ寄ってきたいい匂いに鼻をくすぐられつつも、聞いた話の中から気になる言葉があったため、私は首をかしげる。

「二国から話がきた」って、そんなの有り得ないはずなんだけど」

「へ？ そうなんですか？」

「ウソじゃないわよ。これでも一応私もその話に一枚噛んでるもの」

私の言葉により、調理を続けながら器用に一層首をかしげるイクセル君。そんなイクセル君に簡単に説明をしてあげる。

「もうかなり前……王国時代のころの話なんだけどね？ マイス君が、公共の橋とかの修復にかかる大金をポンツと出せる大金持ちだつて判明した頃に、国の上層部のほうでちよつとした会議みたいなのをやって「マイスの扱いをどうするか」って話をしたのよ。それで、「国の上層部とつながりの深い女性を用意して婚姻を結ばせる」とかいう政略結婚みたいな話も出たり「財産目当てで近づく輩も出るのでは？」って話になったりしたのよ」

そこまで聞いたイクセル君は相当驚いていた。まあ、噂がたつてからならまだしも、そんな昔からそう言った話があつたというのは流石に予想外だつたんだと思う。

「結局は、歳や本人の意思の有無の問題もあつて「干渉してはいけない」って話と「恋愛は本人たちの意思を第一に」、あとは「財産目当てで近づく者にはそれ相応の対応をする」って話にまとまったの。で、その話はそういうことに一番関わりが強い『貴族』の当主にも話が行ったんだけど……その中心になったのが、今で言う元国王と元大臣の二人だつたの」

「ああつ、元国王のあの人も……それでエステイさんもよく知ってるんすね」

納得した様子で言うイクセル君の言葉に「まあね」と短く答えておく。

で、そのままの勢いでイクセル君は私に疑問を投げかけてきた。

「今回もそういう話し合いがあつたり？」

「ええ。今回はマイス君本人に結婚の意思があるかどうかとも直接確かめたんだけど……それで、とりあえずは現時点で「結婚する気は無い」って話だつたから、そうなつたらコツチから何かしようって話に

はなりようがないわけよ。それで、これまで通りにー……って話だったはずなんだけど」

「なのに見合い話がマイスのどこに来てたってことかあ……」

調理を終えた料理を皿に盛りつけながら不思議そうにするイクセル君。

「まあ、実際のところ「見合い話」自体は別に規制してるわけでもないし、そういうのは全くありえないわけじゃないんだけどね？ でも、それが過去に話があったはずの『貴族』出身の子で、「二国から話^がきた」ってことになるよ、どうにもおかしいのよ」

コロナちゃんが愚痴っていたという話が……つまりはコロナちゃんが誰かから聞いたという「マイス君のお見合い相手のこと」の話自体が間違っている可能性もあるにはあるんだけど……

「なんにせよ、さすがにこれは調べてみないといけないわねえ……と、その前に腹ごしらえね♪」

「あいよ、お待ちせしましたっつと」

こうして、私の意識は目の前に出された料理の方へと向くのだった……。

「というか、見合い話なんてあるなら、私に回して欲しいんだけど」「えっと、それって……エステイさん的には、マイスはアリってことっすか？」

「あー………ヒール履いた状態で身長差10〜15cmくらいなのは、ちよつと無理かなあ」

「「マイスへエステイさん」でそんなくらい差はありそうですけど？」

「違う、そうじゃない」

ロロナ【*5—3*】

【*5—3*】

サンライズ食堂

「聞こえてきてる声からして、今日もコッチにいるみたいだけど……さあて、今日はどうなってるかしらねー?」

日がほとんど沈みかけた街。

まるで、朝起きて窓にかかっているカーテンを開け、空模様を確認するかのような調子で『サンライズ食堂』の扉を開けて入ったのは、仕事を終えて来た『冒険者ギルド』の受付嬢の一人、クーデリアだった。そんな彼女が目にした光景は……

「こら〜! わたしのお酒が飲めないのか〜……こきゅこきゅ……ぷはあく〜!」

「そう言いながら、自分が飲んでるじゃねーか」

「当然でしょー? だって、わたしのお酒なんだもーん♪」

「今お前が飲んでるの酒じゃなくなつてただのブドウジュースなんだけどな」

ここ最近、『サンライズ食堂』に入り浸っていることが多くなつた……今日の昼ごろにも飲んでて、一度寝落ちしてしまつた後、また起きて飲みだしたロロナと、その酔払つたロロナを少し面倒くさそうな表情をしつつも対応をするイクセルの姿だった。

ロロナ以外にも一応客がいるようだが……ごく一部、何故かハラハラしている様子の客を除いて、面白おかしく酔払っているロロナを肴にお酒を飲んでるようだ。

「イクセくーん。結婚つてそんなに良いものなのー? なんて、マイス君とかエステイさんがしたがってるのか、わかんないんだけどー?」

「んなこと俺に聞くなよ、オイツ。つーか、ついでのようにこの手の話題である人の名前を出さないでくれよ!? あん時もそうだったが、聞いているコツチが気が気じゃなくなるんだよ」

「……まあ、ここ最近はこの感じだし……でもねえ……」

「マイルスが結婚する」という噂と、その後発覚したという「マイルスがお見合い」という出来事から、色々と変になってしまったロロナを見たクーデリアは、今回が初めてでは無いものの「どうしてこうなった」と思い……それと同時に「まあ、これはこれでカワイイんだけど」とも思っていた。

「……つと。いけない、いけない。今日はやる事ちゃんとやらなきゃね。いい加減、ロロナにも真つ当な生活に戻って欲しいし」

そう独り言を呟きながら、クーデリアはロロナの座っているカウンター席へと近づいて行くのであった……。

「今日も随分と飲んでるみたいね、ロロナ」

「ん〜? あーっ、クーちゃん!」

のろ〜つとしたゆっくりな動きで首を動かし、左隣へと来た人物に目をやり……それが誰なのか理解してから間の抜けた声でそう言ったロロナ。

クーデリアは呆れた顔をしつつもどこか嬉しそうにし、ロロナから特に了承を得たりすることも無く「よっ……と」と、軽く飛び乗るような感じで隣の席についた。

「いらっしや〜い。クーちゃんは、今日は何飲んでく〜?」

「あんたは店員か。……つと、今日はお酒は遠慮しとくわ。この後にも、ちよつとした用事もあるから」

「えー? そーなのー?」

クーデリアの言葉に、ロロナは心底残念そうにした後、口をとがらせて「ぶ〜、ぶ〜」とひとりでブーイングをします。

そんなロロナを見て、短くため息をついたクーデリアは「……で?」

とコロナに向かって疑問を投げかける。

「それで？　いつまでこんなことしてるのよ？」

「……………ミス君が謝ってくれるまで」

「いや、あいつからしてみれば、何が何だかわかんないと思うわよ。」
「そーだよねー。アトリエにも「サンライズ食堂」にも全然来ないミス君には何にもわかんないよねー。あーあ、お見合い相手と一緒にいるのがよっぽど楽しいんだろーな……………ごきゅ、ごきゅ、っは……………ふーんだっ！」

そう言ったコロナは、グラスに入っていたお酒……………と称して出された『ブドウジュース』をそうとは知らずに一気に飲み乾してから、頬をぷくーっと膨らませた。

クーデリアのほうはといえば、カウンター奥にいるイクセルに視線で「そうなの？」と問いかけていた。

頷くイクセルを見て「ここ最近アトリエにも『サンライズ食堂』にも来ていない」というのは事実らしい。が、クーデリアは『サンライズ食堂』は少なからずミスと取引をしていることを知っているの
で、全く関わりが無いというのはおかしいと思ったのだが……………。

クーデリアは「それは、今聞いても意味がないのかしらね？」と一旦思考から追いやることにした。もし、そのことでなんとかできるなら、コロナに居座られて一番被害を被っているであろうイクセルが真っ先に何かしているはずで……………そんな様子が無いということは、ソレでは意味がないということに違いないからだ。それに……………『冒険者ギルド』のほうにもここ最近顔を出しに来ていないのだから、そこはまず間違いないだろう。

だが、今までの情報で、クーデリアは自分がこれからどういう風
話の方向を持っていくかを、すぐに決めることができた。

そして、そのまま……………考えた通りの道筋で話が進むようにと、口
ナとの会話の舵を切るのだった。

「あー、そのことなんだけどね……どうやら、ロロナが思ってるのとは随分状況が違うらしいわよ?」

「違うって、何が?」

「お見合い相手との結婚話は破談に終わった」、あと「忙しいのはただ単純に『学校』関連のことが沢山あり過ぎるから」って話よ」

「……ふーん」

クーデリアの口から簡潔に述べられた話に、ロロナは何とも言えない返事しか返さなかった。……というのも、クーデリアの言っていることを素直に受け止められなかったからだ。

「忙しい」というほうの話はまだわかる。ロロナと……『アランヤ村』に帰省しているトトリが手伝っている『錬金術』関連は、元々マイスが大部分を準備していたことや、ロロナとトトリという強力な協力者がいるため進行具合は良い。……のだが、他は別だ。トトリがない間は『錬金術』関係を一旦止めて他に注力するというぐらいには差があり、そこまでヒマがないというのも領けなくも無い。

が、「お見合い相手」の話については、ロロナはほとんど信じられなかった。互いに初対面であろう相手に対してあそこまで仲が良さそうにしているマイスとその見合い相手……そんな姿を他でもない自分自身の目で見たロロナには「あれは絶対話が良い方にまとまるに決まっている」という考えがどうしても離れそうになかったのだ。

幼馴染として長年の付き合いがあるクーデリアには、色々と表情に出やすいロロナの考えていることくらい、手に取るようにわかるのだろう。納得してない様子のロロナを見てカウンターで頬杖をつき、ジトっとした視線をロロナの方へと向けた。

「何? あたしの言うことが信用できないってわけ?」

「そういうわけじゃないけど……でも……」

「はあ……まあ、今まで「こうだ!」って思ってたことを一瞬でひっくり返すっていうのは難しいかもしれないわ。でも、本人の口から……マイスの口から聞いたら、嫌でも納得できるでしょう?」

そう言われたロロナは……再び頬を膨らませた。

酔いが回ってきているロロナにでもわかる。マイルがこの場にいることを考えると……クーデリアはロロナに「マイルに会って直接聞いてこい」と遠回しに言っているのだ。

結果が正しくとも間違っているようにも、確かにそれが一番手っ取り早いだろう。だが、それができていればここまですることともなかったはずだ。本当は結婚寸前までいって今も家でイチヤイチャしている可能性だってある……そこに突入できるほど、今のロロナの神経は凶太くなかった。

が、クーデリアもそこをわかっていなくてこんなことを言っているわけではない。ロロナという人間をわかった上で……言葉でチョイチョイ突いてくる。

「ロロナとマイルって、ここ最近全然会えてないのねー。……そういえば前に、トトリがマイルを避けて、まともに顔を合わせなかった時があったわよね。ロロナはトトリにかかりつきりでロロナの方もマイルに会えてなかったけど……あの時のマイルってば、ロロナに会えないことでもかなりショック受けてて凹んでたわよねー?」

「……………うっ」

「まあ? あの時トトリから悲鳴上げられたり避けられたりして、元々弱ってたっていうのもあるんだろうけど………あー。でも、今は毎日のように仕事に追われる日々よね? 流石のマイルでも何日も連続で働き詰めだと、精神的にクルものがあるんじゃないか、あ、今も弱ってるのかしらね? だとすると……?」

「……………うー」

「アトリエにも『サンライズ食堂』にも、ついでに言うと『冒険者ギルド』にも顔を出しに来れてなくて、街に来れず、みんなに会えずに一日中働いて……で、気付いたら日はとつくに暮れてて真夜中で……あとは寝るだけ。きつと、お酒を飲んで喋ったりはしゃいだりするヒマも無いんでしょうねー?」

「うー……………うー!」

「今頃、何してるのかしらー? 夕食で使った食器を片付けて、日課の日記で仕事のことだけを書いて、戸締まりを確認して、ベッドに入っ

て……「ああ、昨日と同じことをしただけだったなあ……」なんて考えながら、独り寂しく……でも、マイルのことだから「みんなのためにも頑張らないと!」って次の日も体に鞭打って――」

「うゝ!! そんな無茶しちゃダメー! せっせも自分だけでできるからって、一人で何とかしようとしちゃって……もう怒った! わたしがちゃんとビシツと言つてあげないと!!」

そう言うのと、コロナは勢い良く立ち上がり店の外へと飛び出して行った。

今の話からすぐさま飛び出していくまでの流れ……アルコールが回っているため全速力は出せていない様子だが……少なくともコロナは未だにマイルに対し庇護意識を持っているようだ。

飛び出して行くコロナの背中を見送ったクーデリアとイクセル、そして居合わせた客たち。

その中のイクセルは、「料金……は、またツケにしとくか」と呟きつつ、カウンター席に残されているクーデリアへと声をかけた

「なあ、今ので良かったのか? なんか途中から話がすり替わって……お見合い相手のことなんか、あいつコロナの頭ん中からすっぽ抜けてるぽかったぞ?」

「別にいいのよ。今した話が、頭の片隅にでもあればどうにでもなると思うわ……というか、最悪コロナをマイルに会わせるだけで解決するだろうって話だったし」

まるで人から聞いたことのように話すクーデリア。
それに違和感を感じたイクセルは首をかしげた。

「……もしかして、今回の話、お前クーデリアはよくわかってなかったりするの?」

「んなわけないわよ。とはいえ、人から聞いた話であたしが直接確かめたわけじゃないけど。でも「見合い相手」の話と『学校』のことで忙しい」っていうのは本当みたいよ? それより後は、コロナをマイルのところに行かせるためのまかせだけ」

「オイオイ、でまかせかよ。それと、人から聞いたって……ああつ、も

しかしてエステイさんか？ 今日昼会った時に「調べる」って話してたけど、仕事が早いなっ!？」

「違うわよ?..」

昼間に来たエステイ客のことを思い出してそう言ったイクセルだったが、それはクーデリアによってバツサリと否定された。むしろ「そんなことあったの?」と首をかしげている。

「じゃあ誰が?」とイクセルが言うよりも先に、クーデリアがそのことについて口にする。

「どこぞの元騎士よ、「手伝ってくれ」って。コロナをどうにかするのはあたしとしても悪いことじゃなかったし、それでこうして伝えて、マイスのところに行かせたのよ」

「ステルクさんが? いやまあ確かに、コロナ様子を見に来たりして気にしてる感じはあったけど.....。んで、その本人じゃなくて何でお前が? ステルクさんは何してんだよ?」

「さあ? あいつが何考えてるかとか、そこまではあたしも聞いてないけど.....今回の黒幕でも叩きに行ってるんじゃないかしら? まっ、小物臭のするあんなのを黒幕って言うのは変かもしれないけど」

「黒幕?」と、話についていけずに首をかしげるイクセルをよそに、クーデリアは席から立ち上がる。

「さてつと。送り出したけど、色々心配だし後を追ってみようかしらね.....で? あんたたちはどうすんの?」

そう言っただ店内のとあるテーブルに目を向けるクーデリア。そのテーブルについている人物.....酔払っているコロナをハラハラとして見ていた二人の客.....似合わない帽子とローブを纏っているフィリーとリオネラはビクツと体を震わせた後、恐る恐るといった様子でゆっくりとクーデリアのほうを向いた。

「え、ええつと.....クーデリア先輩? いつから気づいてたんですかあ.....?」

「いつからって、最初からよ。そんな「気にしてください」っていう変装してれば目はいくし、それに……二人して膝の上にそんな人形抱えてれば、ねえ？」

クーデリアの言う通り、ファイリーとリオネラの膝の上にはそれぞれアラーニヤとホロホロが抱えられている。それで気付かない方が難しいかもしれない。

……が。

「ロロナは全く気づいてなかったみたいだけど」

「あはははっ……ま、まあロロナちゃんも酔払ってたし、マイルスくんのことでもいいっぱいだったみたいだから仕方ないような……？」

ちよつと苦笑いを浮かべたりリオネラがそう言い、クーデリアも小さく頷いて「よねー」と声を漏らす。……と、それとほぼ同時に、納得したような顔をする。

「あんたらはロロナの事……というか、ロロナがマイルスのことどう思ってるのか気になって、こんなことしてたんでしょ？ まっ、はたから見ても酔払っているロロナはそういう感情を持っているように見えるもの」

「ぎくっ!?!」

「本人たちに直接聞けないあたり、あいかわらず引っ込み思案というか、へたれてるっていうか……」

「う、うう……」

二人して自覚があるのか、クーデリアに言われたことがグサリと来ているファイリーとリオネラ。

ちよつと凹んだ様子の二人をチラリと見ながらも、クーデリアは自分が言いたいことをサラッと伝える。

「……で？ もう一回聞けど、あんたたちはどうすんの？ ロロナとマイルスのことが気になるなら、追いかけた方が良さ……それに、長年ロロナの親友してきた身から言わせてもらおうと、一回きっかけさえあれば、あの子は後は真っ直ぐだと思わよ？」

「……先輩はそれでいいんですか？」

クーデリアの言わんとすることを理解したファイリーが、逆に問いか

けた。リオネラもフィリーと一緒にクーデリアの顔をジツと見つめている。その視線は何をうつつたえかけているのだろうか……？

視線を浴びながらも、クーデリアは淡々と答える。

「いいも何も、本人たちがそれがいいって言うなら、あたしは何も言わないわよ。……それに、どこの馬の骨とも知れない奴ならまだしもマイスなら、ね」

「そう、ですか……」

何とも言えない顔で、どう思っているのかわからない相槌を打つリオネラ。

そんな様子を見て、ため息をついた後……クーデリアは『サンライズ食堂』を後にするのだった……。

その少し前のこと……

職人通り

「……って、ことがあつてですね……」

「ほお。私のほうでも「お見合い」については噂程度で聞いてはいたが……まさか「国から」という話だったとは……」

「マイス君のほうから話を聞こうと思つて行つてみたんですが……タイミングが悪くて、学校の事と今月のお祭りの準備とが重なつちやつて村全体が大忙しみたいで……」

「聞けそうにも無かつた……と」

アトリエの横……階段を下つた先の井戸のあるスペースで情報交換をしているのは、エステイとジオ。二人とも国の上層部に関する人物なのだから「国の施設の中で話せばいいのでは？」と思うところだが……ここ数年間、街の外で活動してばかりでその最中にする情報交換が道端で、ということもあつてか、街でもこうしてフラツと道端

で話すことが多くなっていた。

ジオはその整った顎鬚あごひげを指でいじりながら、「ふむう……」と思考顔をする。

「国の運営に関わっている上層部のほうで確認を取ってみればいいのかもしれないが……見合い話だという事を考えると、その相手である『貴族』を特定して調べた方が早い気がするなあ」

「それもそうですね……。マイス君彼との見合い話で得するのは他でもないその相手ですし、「国」っていうのを出したのも彼が断わり辛くするためのものという可能性も……」

そう言っただけで頷き合うジオとエステイ……だったのだが、不意に二人の耳に別の声が聞こえてきた。

それはすぐそばというわけではなく……どうやら、階段を上がったほう……アトリエの前のあたりだろうか？ 二人は静かにして、その声に耳をかたむけるのであった……。

「アトリエちにいない、ってことは……今日も『サンライズ食堂ち』か。……こっちのほうは僕的には有り難いんだけどなあ」

アトリエの前でそう呟いたのは、国の大臣を務めているトリスタン。ここ最近、いつもと調子が違うコロナを気遣っている人の一人である。

と、『サンライズ食堂』のほうへと向かおうとするトリスタンだったが、そこから近づいてくる影が一つ。トリスタンはそれに気づき……暗がりの中でうつすらと見えてきた顔が見知ったものである事を理解し……「うげっ」と嫌そうな顔をした。

しかし、特に何をするわけでもなく、通り過ぎようとしたものの……その人物はトリスタンの前に立ちはだかるようにして立ち止まり、トリスタンも立ち止まらざるを得なくなった。

「何？ 僕はあんたに用は無いんだけど？」

「こちらまでわざわざ話す気は無かったんだが……一応、言っておくべ

きだろうと思っただけなら」

不機嫌さを隠そうともせずと言うトリスタンに対して、相手は……ステルクはいつもの仏頂面で返す。

「手短に済ませてくれないかな？ どっかの自称で仕事してる人とは違って、こっちは国勤めの仕事をやっと終わったんだ。時間を無駄にはしたくないんだよ」

「……その立場を上手く使ったようだな。マイス^彼との繋がりも十分にあるお前が言えば、『貴族』側も疑ったりすることも無い。彼のほうに話を通すのも容易いだろう。そして、狙ったのは……この状況か。ロロナ^{彼女}があそこまでなるのも計算していたというのであれば、悪趣味にもほどがあるがな」

ステルクの言葉を聞いて、トリスタンは一瞬眉をひそめた……が、すぐにいつもの飄々とした調子に戻り、軽く肩をすくめた。

「へえ、わざわざ調べたのかな？ それはどうもお疲れ様です……？ 何かな？ 別に何か悪い事をしたってわけじゃないだろう？」

マイス^彼の事を気にしている人がいたから、ちよつと紹介してあげただけ。鼻根無しに見れば彼も良いお相手じゃないか。あの『貴族』の娘さんも喜んだことだろうね」

「……まあ、喜んではいたな。だが、お前の思った通りには行かなかつたようだが？」

調べた時にその貴族の娘^こに会ったのだろうか？ 何故か神妙な顔をして言うステルク。対してトリスタンは別段興味無さげである。

「そうだった？ まあ別にそれでも構わないけど。最悪、彼を足止め出来ればいいだけだし」

「やはり、目的はあくまでそこか。彼女^こと彼の距離^人を離す……そこに意味がある、と」

「そこにすぐ気づくあたり……そういう点では、あんたもコツチ側じゃないの？ だから、わざわざ調べたりしてまで、邪魔してこないと考えてただけ……というか、僕以上に二人のことを間近で見る機会の多いあんたなら、僕以上に思うところはあったんじゃないかな？ 僕の勘違いだったなら、それはそれでライバルがないわけだ

し、僕は嬉しいんだけど」

そのトリスタンの問いに、ステルクは何を思ったのか何も言わなかった。

が、数秒間を空けてから静かに口を開いたのだった。

「……私がこうして動いているのは、彼女のあんな姿は見てられなかったからだ。そして……それを解消するには、原因である「見合い話」の真偽を確かめるのが最も最短だと踏んだから。ただそれだけだ」

「それはまた随分と献身的なことだ」

いつもの仏頂面を保って言うステルクに対して、やれやれといった様子で首を振るトリスタン。

そんな会話を陰で聞いていたエステイとジオが、顔を見合わせココソと話しだした。

「……なんか、知らないうちに話が進んじやってますね？ 私たちよりもよっぽど早くステルク君が動いてたみたいですし……」

「そのようだな、予想外だ。にしても、トリスタンはメリオダスの奴に似てきたんじゃないか？ なんとというか、妙にコスイ手を考えるとうか、そういったことをするとところが……」

「ああ、まあ、たしかに……」

二人はトリスタンの父親であり、アーランドで以前に大臣を務めていたメリオダスのことを思い出していた。メリオダスもメリオダスで裏で動くこともあったのだが……アトリエの取り潰しを進めていた時の妨害策略といい、なんかこう「もつと直接的で効果の強いモノが他にあつたんじゃないか？」と思えることばかりだったのだ。

今回のトリスタンが裏で動いた「お見合い」の一件ももつとストリートなやり方もありそうなきもするのだが……？

そんなやりとりをしていたエステイとジオだったが……

「で、どうします？ 今、トリスタン君たちの前に出ますか？ それとも……」

「フム……知ったからには動くべきだろうが……んん？」

ジオがその先を言うよりも先に……どうやら、怪談上のほうで別の動きがあつたようで……ジオたちは再び意識をそちらへと向ける。

その変化は単純明快だった。

日も沈み、人通りもほとんどなくなった道にいたトリスタンとステルクのほうへ、駆け足で向かってくる人影があつたのだ。その人物が……

「……あつ、コロナ？」

「むっ……」

少し赤くなつた顔をしてこちらへと駆けてくるコロナに気がついたふたりは、それぞれ声を漏らした。

その声で誰なのか気付いた様子のコロナは……ちよつと一瞬だけ目を見開いた後……勢い良く頭を下げた。

「こんばんは！ えつと……！ お仕事が大変でつ、マクラギゆくつとしてつ、泣いてつ、最近全然会えてなくてつ、お酒も飲んでなくつて！ あと、それから、それからつ、お見合い相手はいなくつてつ、学校が大変でつ、結婚するつて！ ええつと……と、とにかく！ また今度！ それじゃっ!!」

「えつ、ちよ……!?!」

「ごめんなさいっ！ わたし、いますぐミス君のところに行かなきゃいけないんです！」

通り過ぎて行くコロナに、トリスタンは制止をかけようとする……が、コロナはそう言い放ち、そのままの勢いで行ってしまう。二人を通り過ぎたコロナはそのまま階段を下って行くのだが、盗み聞きをしていたエステイとジオは、物陰に隠れて走っていくコロナをやり過ごすのだった……。

……残されたのは、ポカンとした様子のトリスタンとステルクだ

け。

そんな二人の耳に、石畳を叩く数人の足音が段々と近づいてくるように聞こえてきた。二人が『サンライズ食堂』のほうへと目を向けてみると……

「偶然……というか、もしかして待ち伏せでもしてたの？」

そう言ったのは、クーデリア。その後ろにはフィリーとリオネラが少し不安そうな顔をしてついてきていた。

クーデリアの言葉に、ステルクが小さく首を振る。

「偶然だ。たまたまトリスタンを捕まえられたのがここだったというだけだ。……それにしても、随分と錯乱している様子だったが……アレで大丈夫なのか？」

「さあ？」「マイルスに会わせられさえすれば何とかなる」って言ったのはあんたでしょ？ あたしもそんな気はするし、大丈夫じゃないかしら？」

「いや、そっちではなく、アレで無事に『青の農村』までたどり着けるのかどうかという……」

「あー……追いかける身としてはありがたいけど、あの子『錬金術』のアイテムで移動するなんて考えがすっぽ抜けてるくらいだからねえ。それにお酒も入ってるから……」

クーデリアが言うにつれて、クーデリア本人を含め全員が段々と不安顔になっていく……が、クーデリアは途中で手をパンツと叩いて「まっ！」と切り替えるように声をあげた。

「なんかあったときの「もしも」のためにも、あたしたちが後をついてほしいってだけの話よ」

「そうだよね！ 何かあった時のためについていかなくちや！」

「う、うんっ！ 早くコロナちゃんを追いかけないと！」

クーデリアに続いて、フィリーとリオネラがそう言うのだったが……

「まー、んなこと言ったところで、どう考えても建前なんだけどな」

「そうよねえ。特にリオネラとフィリーはどう考えても……ていう

か、何かあった時、フィリーって何が出来るのかしら？」

ホロホロとアラニーヤから、ビシツとツツコミを入れられるのであった……。まあ、仮に凶悪なモンスターが襲いかかってきたとして、冒険経験もまるで無いフィリーには何もできないだろう。

なお、『アーランドの街』と『青の農村』間の街道というのはアーランド共和国の中でも最も「安全」と言える街道であるため、モンスターに襲われるなんてことはまずありえないだろうが。

なにはともあれ……クーデリアたちはロロナの追跡を再開するのであった……。

フィリーとリオネラの後ろには……

「……そういえば、僕が独断でしたことだって、^彼ミスは知ってるの？」

「私からは話していないから、まだ知らんだろう。……まあ、仮に知ったところで彼は気にしないだろうがな……」

トリスタンとステルクが続き……そのまた後ろを……

「無関心ってわけでもないだろうけど「へー、そうだったんですかー」で済ませちゃいそうなのよね、ミス君って」

「心が広いというか、広すぎてあまり理解してないというか……それが彼の持つ美德でもあるのだろうか」

エステイとジオが隠れながらついて行く形で、一団はロロナの後を追って『青の農村』を目指すのであった……。

マイスの家

「……ひとまず、こんなところかな？」

まとめ上げた書類の整理をしていたミスが、ひと息ついてから背もたれに体重を預けて「うーんっ！」とイスに座ったまま伸びをした。

街での取引なんかは、別の用で街に行く村の人……例えばコオルとか……に頼んでしまい、学校関連とお祭りの準備に集中しているマイス。

そのふたつに絞ったところで、やるべきことは沢山あり過ぎるくらいなのだ……特に、学校のほうは『錬金術』関係はまだしも他はやるが多すぎるくらいで、終わりが見えないというのが実の話だ。それでも、おおよその目安を立てておき、一区切りついたところでマイスは「今日はそろそろ切り上げようかな？」と片づけを始めることにしたので……。

バアアンツ！

「えっ!?!」

ノックも無く、勢い良く開け放たれた玄関戸。それに驚いて声をあげてしまったマイスが見たのは……

「ふー、ふー……!?! はっ、ま、マイスキゅ……けほっ!?! こほっ!?!」

肩で息をしながら、何やら息苦しそうになっているロロナだった。

何か言おうとしたようだったが、息が整っておらず、むせてしまったようだ。

「ええっ!?! ちょ、どうしたのロロナ!?! 何かあったの!?! と、とりあえず、落ち着いて……深呼吸してっ」

「すうー……はあー……すうー……!」

何ななんだかわからず焦った様子の子のマイスがうながすままに、ロロナは深呼吸を数回しながら自分の息を整えていった。

「どうかな? もう大丈夫? もしダメだったら、何かお薬でも……!」

「だ、大丈夫だよ……もう、落ち着いてきたから」

そう言って……まだちよつと辛そうにしながらも笑顔を見せるロロナ……だったのが、「はっ……!?!」と声をあげて目を見開いたかと思うと、笑顔を消してマイスのほうを見て大きく息を吸い……その分の空気を「声」として発した。

「マイルス君っ！ 結婚しちやダメ!!」

「……………」

ロロナが全身全霊を込めて発したであろう言葉に、マイルスは首をか
しげ……………」

「……………」

マイルスの家の外からは、複数人の声が聞こえてきた。

幸い……………かどうかはわからないが、家の外からの声には、マイルスは
目の前のロロナの言葉に思考も意識も持って行かれたため気づかず、
ロロナも……………」

「マイルス君みたいな純粋な良い子にはわかんないかもだけどね、世の
中には『せーりやく結婚』っていうあんまり良くないものもあってね、
そうじゃなくってこう……………やっぱり結婚はちゃんとお付き合いをし
た『恋愛結婚』のほうが良いと思うよ！ それにそれに……………んえ
？ あ、あれ？」

自分が思ったことを口にしてはいるはずなのに、自分自身でもズレを
感じたようで……………途中で止めて首をかしげて悩みだしてしまってい
て、外の声なんてものには全く気付いていなかった。

……………さて、面と顔を合わせているマイルスとロロナ以外の外に隠れ潜
んで様子をうかがっている人たちでさえも頭に疑問符を浮かべてし
まっついて、混沌とした状況となっているマイルスの家。

そんな状況で真っ先に動いたのは、唐突のことでもその状況が
わからず情報量が少なく早く処理出来たマイルスだった。

「え、ええつと……………もしかして、僕が結婚するって話を聞いて……………？」

ロロナ？ アレは誰かが勝手に流した噂話でウソなんだ」

「とつづくに誤解は解けたと思ってたし、おすそわけ持っていた時の口ロナ、いつも通りだったから、とつづくに知ってるものだ」と……そうマイルスは思っているのだが……。

実際はまだ「マイルスが結婚する」という噂は消えきっていないし、マイルスが思っている「おすそわけを持っていった時」は、まだ口ロナが噂のことは知っていない時なので、今のマイルスの考えは絶妙にハズレてしまっていた。

「あつ、それはくーちゃんたちに教えてもらったから……じゃなくて！ それじゃなくなつてあつち！ 『貴族』の女の子とお見合いしてラブラブって話っ！」

「らぶらぶ？ そんなことはしてないんだけど……？ そもそも、あの娘と会ったのは断るためだったわけで……」

「へっ？ 断るって……で、でもでもっ！ あんな仲良く手繋いで歩いて行つてー！」

「手を繋いで……ああつ、もしかして移住を考える前準備で村の中を案内した時の？」

次々に出てくるワードに目を白黒させながら「えっ？ えっ？」とドンドンこんがらがって来てしまっている口ロナ。

「い……いじゆ、移住って……も、もしかしてっ同棲!?!」

「……とりあえず、このまま立ち話つて言うのもなんだし、『香茶』を……いやっ『リラックスティー』淹れてくるからソファアに座って待つててくれる？」

「え、うん、ハイ……オネガイシマス」

目を回して頭から煙を出すんじゃないか？ と思つてしまいそうなほど混乱して頭を悩ませ始めた口ロナは、マイルスの申し出に素直に頷くことしかできなかつた……。

マイルスが淹れてきた『リラックスティー』を飲み、少し落ち着きを取り戻した口ロナ。

そんな口口ナに、マイルスは「国から紹介されたお見合い相手」について説明していったのであった。

そして……

「えっと、つまり？ お見合い話は相手が準備をしておいてたから一応は受けたけど最初から断るつもりで……断る理由として『学校』のことで色々ある事を説明したら……」

『子供たちが集い学び……それだけでなく、望めば誰でも専門技術を学べる施設……素晴らしいですわ！ 街で噂話程度で聞いてはいましたが、こうして直接詳しく聞いてみると、この上なく興味深く、理想的でもありますわ！ その計画、私にも協力させてくださいまし！ これでも幼い頃から貴族として英才教育を受けた身でありますので、一般教養の勉強関連であれば私がお手伝いも、もつと言えば教鞭を取ることも可能ですわよ！ なので是非、是非っ!!』

「……って、『学校』のほうで熱烈にアタックを受けて、それでそのまま……」

『先生になるのであれば、『青の農村』へ移り住むのもよいかもしれませんがね！ お父様がなかなか行かせてくれませんでした、「モンスタ―と共に暮らす村」、前から興味はあったんですの♪』

「……で、頻繁に村に来るようになった……ってこと？」

話を聞き終えた口口ナが、未だに少し疑い気味にマイルスに聞き返した。

それに対して、マイルスは大きく頷いた。

「あはははっ……科目によつては、建物や道具以上に教える立場の人が不足気味だったから、こつちからしても願ったり叶ったりで……」
「それで、教育に熱意のあるその娘が来てくれたのが嬉しくつてはしゃぎ気味で案内してた……って……うん。経緯からして、どうしてそうなったのかよくわかんないよ……」

そう言つて苦笑いをする口口ナ。

……だが、一番よくわからなくなったであろうは、娘を見合いに出した親だろう。婿を取ってくるわけでもなく、嫁に出るわけでもな

く、娘が勝手に独り立ちをしだしたのだから困惑する他無い。

そんな人がいることなど知らず、マイルスは「まあ……」と少しだけ話題を変えて、その貴族の娘について話した。

「なんでもその子、小さい頃から家で教育を受けているのが実は退屈で嫌で仕方なくって、その度に「私一人わたくしでなく、共に学び、遊び、競い合う相手がいれば……」って思ってたらしくてさ。それで『学校』の計画にも乗り気になったみたいなんだ」

「まあ、それは……わからなくてもいいかな？」

『錬金術』をほとんど独学で学んできて、これまでに成功例は少ないものの『錬金術』を教えてきたロロナには、どこかしら少なからず思うところはあったようで、すぐにではないものの納得した様子で頷いた。

話が一段落し、今一度『リラックステイー』でのどを潤したロロナは、再度マイルスに確認をし始めた。

「まとめると……「お見合い相手」は「協力者同志」になって、「街に顔をださなかった」のは「学校のことと本当に忙しかったから」？」

「うん、そうなるね。特に後半のほうはお祭りのこともあって色々予定の調整が難しくって……あっ、でもお祭りが終わったらちよつとは余裕ができるんだけどね？　だがら、『錬金術』の授業とかの話は、それからトトリちゃんがこっちに来てから……ってことになるかな？」

「そのあたりは、前に確認した通りだね。その気になれば『トラベルゲート』で呼びにもお邪魔しにも行けなくもないし、それでいいと思うよ」

ひっかかっていたことの真偽を確かめ、今後の事も確認し、これが一件落着……

……とはならなかった。

ふと、何かを思い出したように、マイルスが「そういえば……」と口を開いた。

「今日来た時「結婚しちやダメ」って言ってたけど……アレって「結婚する」って噂のことじゃなかったのなら、結局なんだったの？」

「ふえ？ えっと、だからそれは『青の農村』に来てた「お見合い相手」のことで……って、あれ？」

ここで、ロロナもある事を思い出した。

マイスの家に来てから、『せーりやく結婚』だとか『恋愛結婚』だとか言っただが、その時ロロナ自身、自分で何か違和感を感じた。

というか、ロロナがマイスのところに急いできたのは結婚云々ではなく、クーデリアに焚きつけられた際の「仕事に疲れて、みんなに会えなくて、凹んで一人寂しくしてるかもよ（意識）」という言葉を真に受けて心配になったからで……。

しかし、もつと大元を言えば、今日クーデリアから聞いた「お見合い相手との結婚話は破談に終わった」、「忙しいのはただ単純に『学校』関連のことが沢山あり過ぎるから」という話が信じ切れず、本当かどうかという話で……。

だがここでロロナは、初めてある事に「はて？」と首をかしげた。

（わたしって、いつからマイス君に「結婚してほしくない」って思ってたんだらう？）

今日、クーデリアと話す前……昼間にエステイと会ったころには、マイスのことが心配でどうこう言っていたりはした。だが最初は、「お見合い相手」のことも知った時、その人と笑顔で歩いていたマイスを見た時は、ロロナ自身も理解できないようななんかモヤモヤした感じで……そこから少しして「お見合いなんて！ その前にわたしに相談しろー！」って考え始めたわけで……でも、この時点でもうおかしい？

ロロナは気づいた。その初期の時点で自分が言っていたのは、「結

婚してほしくない」気持ちからくるマイスを引き止めた^{非難}たいがための言い訳であると。

そう、コロナは自覚した。

そして、改めてコロナは考える。「なんで結婚^そしてほしくない思ってるんだろう？」と。

友達が、弟分が唯々^{ただただ}心配だからか。もしくは、先を越されたくないからか。はたまたま……………？

思考の末、自分自身の中にあつたその答えにたどり着いたコロナは

……

「えっ……………あ……………あう……………!」

顔を耳まで真っ赤にし、頭からぷしゅーつと蒸気を出し、口をぱくぱくさせ、ふるふると体を震わせた。

「えっ、ちよっ……………コロナ!? どうしたの!」

コロナの急変っぷりに慌てるミスだが、コロナを心配して彼がイスから立ち上がりソファーに座っているコロナの方へと駆け寄ろうとし……………結果、その行動がコロナの顔をなお赤く染め挙げてしまう。

「うえう!」

「熱? 風邪? でも、さっきまではそんな感じはしなかった気が……………もしかして、何か急性の病気だったり!」

「いやっ、これはっ、えつとーそのっ! う……………はっ!? そ、そうっ! ……ここに来る前に『サンライズ食堂』^{イクセクんのところ}でお酒飲んでたからで……………

走ってきて休んだから、酔いがぶり返してきたっというか!」

ミスに今の状態を、そうなった感情を伝えるのは躊躇われたのか、言葉を濁そうとするコロナ。その途中で、いかにも今何かを「閃いた!」といった感じにハツとした顔をした後……………言い訳にはあまりにもうそ臭いことを言っつて誤魔化そうとした。

外で盗み聞きをしている面々も「それは流石に……」といった様子で聞いていたのだが……

「ええっ!? 走ってきただけってことは、街から村までの夜道をアイテムも使わないで一人で走って来たの!? それもお酒を飲んでからって……!!」

マイスは「酔いがぶり返す」云々の話ではなく、別のところにももの凄く驚いていた。……マイス自身も似たようなことがないわけでもなかったりするが、そういう時は基本、アクティブシールド『ハスライダー』を使い自分の足は使わずにすいすい滑って帰るため、マイス曰く「酔っていてもいなくても関係無い」らしい。

なお、ロロナは「アイテム? ……ああっ!!」とマイスの言葉を聞いてようやく『錬金術』で作った道具……主に『トラベルゲート』のことを思い出していた。

「そんなの、危ないよ! こんなに酔払っちゃうまで飲んだのに街の外に出るだなんて、ダメじゃないロロナ! いくらこのあたりには襲ってくるようなモンスターはそうそういないって言っても、夜道は暗くて危ないし、一人だったら何かあった時どうにもできなかつたりするんだよ!」

「ひゃいー! ご、ごめんなさい……」

珍しく怒気のコもった声を発するマイスに、ロロナは驚き委縮してしまう。それに、その雰囲気だけでなく言ってることも最もなことであるため、素直に謝るしかない。

「まったく……そんな状態で帰しても心配なだけだし、『トラベルゲート』も酔払ってたら上手く使えそうに無いし、もう遅いから、ロロナは今日はウチに泊まっていい。いい?」

「はい………へ? お泊まり?」

『離れ』はいつ誰が来ても良い様にしてるから、たぶん大丈夫だと思っうけど……ちよっと待ってて、確認してくるから! あっ、酔払っ

ちやつてるんだから、危ないし、勝手にどっかに行ったらダメだよ。」
そう言つてマイルはそのまま外に出ていき『離れ』の方へと行つて
しまった。

そして、残されたロロナはと言えば……

「い……いきなりお泊まりつて、そんな……！ でも、この前にはトトリちゃんたちが泊まったつて言つてたし、りおちゃんとかファイリーちゃんなんてしよっちゆうだつて言うし……わたしがお泊まりしても何にもおかしくは無いよね……!? それに……ま、マイル君だからつ、マイル君だから、本当に心配してくれてるだけで別に他意は無いはず……あれ？それはそれで、ちよつとモヤツてするっていうか、なんて言うか……うゝ！ ど、どうしたらいいのゝ!?」

独り言をブツブツ呟きながら、真つ赤になつた顔を両手で隠してブロン首を振つて悶えていた……。

いつぼう、『離れ』があるほうとは反対側……マイルの家の正面側の外では……

「あたしの予想通り、ロロナはあなちやつたわけだけど……マイルスは悪い意味で予想を裏切らないわねえ」

「……………」

「……………」

「リオネラと騎士のにいちやんが固まっちゃまつてるんだが……どうすんだ、これ？」

「……………どうしようもないんじゃないかしら？」

「ああつ………どうしてこんなことに……!? それに、僕がああの立場に
いれば、あそこでロロナに言い寄つて……！」

「そんなこと言つて、昔っからいざという時に一歩引いちやつたり、

「彼女のアトリエのために」ってカッコつけて口ロナちゃんの前から去ったくせに会えないことを後で一人で後悔しちやつたりするへたれだからなあ、トリスタン君ってー」

「まだまだどうなるかわからない状態ではあるようだから、そう悲観することは無い。……まあその前に、君には少々話があるのだが……」

「え、ええつと、色々あり過ぎて頭がごちゃごちゃしてきてるけど……なんでお姉ちゃんとジオさんがここにいるんですかあ!?!」

外も外で騒がしくなってきた……。

5年目：ジオ「クイズ大会」

『魔法』。それは、物語の中の空想の産物であった……が、『青の農村』の村長が中心となり、世間一般に知られるものとなった。

『学校』。そんな魔法をはじめ、ありとあらゆる専門的なことを教えたり、基礎教育を行う場……なのだが、町にも無かったそれが『青の農村』にて設立されることとなる。

『結婚』。愛し合う者同士が結ばれ生涯を共にするもの……なのだが、噂が噂を呼び話題の中心であるはずの村長も知らぬ間に、「結婚する」等の噂が広まって大騒ぎになったりもした。

そんな、何かと話題に欠かない『青の農村』だが……忘れているのではないだろうか？

この村を語るには欠かせないアレを……。

青の農村・集会所前『広場』

『……というわけで、予選最終組の最終問題……『カブ』は冬の作物である』の正解は……「○」です!!』

ワアアア!!

『拡声器』によって大きくなって発せられたマイス君彼の声に、広場内に設けられた試合用の特設ステージを囲むようにして設けられた観客席にいる観客たちの声が湧き立つ。

『さて、予選最終組の中で最も正解数の多かった解答者は……ライアンさんです！ おめでとーございますー!』

「どうだ、見たか！ この私の実力を！」

「素敵よ、アナター！…この調子で頑張つて〜」

「ライアンさん」と呼ばれた男性がガッツポーズをし、観客席からはそんな彼に向かって手を振り感性を上げるご婦人が……。

フム……確か、あの二人はロロナ君の御両親だったかな？

『これで、この『クイズ大会』本戦に進出する解答者が出そろいました。マークさん、トトリさん、クーデリアさん、ライアンさん、の四名です！ 解答者の準備が済み次第、本戦を開始しますので、少々お待ちください！』

ワアアア!!

これから始まる本戦への期待からか、再び湧き立つ会場。

そう言ったマイス君は『拡声器』を口元から離し、数歩下がって運営席へと戻った。おそらくは本戦であり決勝戦である次の試合の最終確認をしているのだろう。

しかし、いやはやこれは……

「なーに、ニヤニヤしてるんですかー？」

「いやなに、この普段の様子とは似ても似つかない賑やかさ。流石は『青の農村』の三大名物の一つと言える「お祭り」だな……と思つてな」
観客席の一角に座って、今日の祭りのメインイベント『クイズ大会』を観覧していたところ、隣に座っていたエステイクくんがジトツとした目でこちらを見てきていた。

まあ、それは素直に答えて華麗にスルーする……はずだったのだが、どうやら今の回答だけでは満足できていないようで、納得していない……ああ、いや、これは……ただ単純に機嫌が悪いだけか？
「どうしたんだ？ せっかくの祭りなのだから、もつとこう……楽しんでらなうだ？ そんな辛気臭い表情はこの場には似合わないぞ」
「そんなこと言われたって、せっかくの休みがお守兼監視もりになったらこんな顔にもなりますよ……ハア……」

「何？ 休暇なのであれば、それこそ好きにすればいいではないか。遊ぶなり休むなり、自由にすれば——」

「じゃあ午後からの会議、私が引つ張って行かなくてもちやんと出席してくれますか？」

「……善処しよう」

「ほらっ！ ダメじゃないですか!？」

ズビシツと勢い良く指を指しながら、私のことを非難してくるエステイ君。……まあ、確かに、自分がすべきことをしようとせず逃げず遊ぶ者が居れば非難もしたくもなろうが……今回は流石に違うと思うのだが？

「いやいやっ、あの会議は別に私がいる必要も無いだろう？ いたとこで座っておくしかすることは無いと思うのだが……第一、あのあたりの仕事は、今の私がする仕事ではないと思うんだが？ 君にも心当たりはあるだろう？」

私がそう聞き返すと、エステイ君は「うっ」と言葉を詰まらせた。やはり彼女自身も何か思うところはあったようだ。

「まあ、確かに……そもそも、他所との併合の調整や調査、併合した地域との交流が今の私達の仕事であって……今はあの一件で街に帰ってきてますけど、「いるから」ってわざわざ他のことの話をこっちにまで持ってこられちゃって困ってるんですよ……」

「あの一件」というのは、いわずもがな「マイルスが結婚する」という噂話から始まったあの一連の騒ぎだ。

あのマイルス君が本当に結婚するとあれば、国としてはかなりの大事だった。そうでなくとも、ただでさえ彼は周囲への影響力が強い。ただの単なる噂話であつてもただ黙って見過ごしておくわけにはいかなかったのだ。「今回は違つても、今後実際にもしもがあつたら……」そんなことを今回の一件を機会に、準備をしておいたりする必要もあつたわけだ。

……なのだが、どうやらエステイ君はそういった「国としての立場」というものだけでなく「個人的に」色々と気にかかっていたよう

……
おそらくは、今機嫌が悪いのも、私を監視しておかなければいけないから、というだけでなく、マイス君の結婚話という彼女が若干過敏気味な「結婚」に関わる話だったから元々ストレスが溜まっていたのもあるのだろう。

まあ、そんなエス^彼テイ^女君を責めるつもりは無い。「結婚」に過剰な反応を示すのは流石にアレだが、同じくマイス君に振り回されている身としては、頷けるところは少なからずあったりするのだ。

それに……私だって休みたいのだ。

「だろう？ 私だって全く協力しないとっては言っていない。ただ、なんでもかんでもやらせようとするのは間違っているのではないか？……という話だ。それに、これだって十分立派な仕事だと思うぞ？ あの一件の中心人物であるマイス君と、彼の住む村の様子を観察は」「そう言う割には、抽選で当たって出場出来ることに喜んだり、クーデリアちゃんに負けて本気で悔^{くや}しがってましたよね？」

「それは、彼女に負けたからと言うか、ただ単純にクイズに不正解してしまったのが、思いの外^{ほか}悔しかったからなのだがな……」

第一、この『クイズ大会』、参加できるのが受付をして「控え札」を貰った後、催し物開催前にクジ引きで呼ばれた番号の「控え札」を持つた人……十六名だけというかなり倍率の高いものなのだ。

イベントの開催時間を考えれば仕方ないことだが……故に、参加者……解答者として選ばれたら嬉しくもなるものだ。

そして、私がああクーデリア君に負けたというのは……まあ事実だ。剣の腕とかであれば負ける気は無いが、今回は仕方ない……悔しさはあるがね。

この『クイズ大会』……十六名を四グループに分け、そのグループごとに一位を決めて、各グループの一位がこれから始まる本戦で争うこととなるのだが……その内容は、この祭りの名前の通り……

『えーつと……準備が完了したみたいなので、本戦を開始したいと思

います！ さあ、解答者の四名が入場します。皆さん大きな拍手でお迎えください！』

ミス君^彼の言葉に、会場には拍手と歓声が飛び交い……特設ステージにはその解答者4名が順々に出てきた。

「はあ……入賞賞品が魅力的だったから出たけど、やっぱり僕にはこういう賑やかなのは合わないな……。まあ、今更棄権したりする気はないんだけど」

「あはははっ……でも、マークさんはメガネのせいかな凄くさまになってますよ？ それに比べてわたしは……なんとなくで選んでただけなんだけどなあ？」

「まっ、勝負なんて時の運だったりするし、そんなに気にするもんじやないわよ……そう、だからジオ様を負かしてしまったのも仕方ないことなのよ、うん……」

「はっはっはー！ そんなに落ち込まないで、過去は気にせず、これからの勝負に目を向けるべきじゃないかい？……それはそうと、口ロナもどこかで見てたりしないかな？」

一名を除いた三名は、それぞれなんともやる気があるのか無いのかわからない感じがするが……大丈夫なのだろうか？ 特にその内の一人はどうやら私が関係しているようで、何とも申し訳ない気持ちになつてしまう。

そんな中、ミス君^彼による本戦の説明が始まった……。

『さて、『クイズ大会』の本戦ですが……ルールは予選と同じです！

僕が問題を出し、その答えを「○」^{マル}「バツ」で解答……解答方法は問題を出してから制限時間内にステージ上に、それぞれ四角い白線の枠で囲まれた○か×の場所に移動してください！ ……あっ、視覚的に何を選択したのかわかりやすくするためだから、白線から他の解答者を押し出したりしたらダメですよ！ 絶対、ダメですよ！ いいですね？』

コレハ、「フリ」カ？

「フリ」ダナ

オスナヨ！ ゼツタイオスナヨツ！

……何やら、会場の一部が騒がしい気がするが……？

まあ、大勢の観客の前で他の人を押し出せるような、凶太い神経の持ち主はそうそういないと思うが……。

『問題は計四問。最終的に正解回数が多かった解答者が優勝となります！ 同点だった場合、その人たちだけで問題を追加していき決着をつけます。……あっ、この本戦では予選とは違い、問題はこの箱の中に入っている「村の住民みんなで考えた高難易度問題」をランダムに引いていきます。……あれ？ コオル？ 僕は聞いてないんだけど？』

台本を読んでいるミス君が振り返り、運営陣にいる赤毛の青年に問いかけている。視線を向けられた青年は、肩をすくめて首を振ってからミス君が持っているのは別の『拡声器』を手に取り、声をあげた。

『いやだつてさ、村長が用意してた「超難易度問題」、大半がマニアックな農業関係で面白みに欠けてたぜ？ だから、『学校』のことで村長が色々やってる時に、連中を集めて別の問題を作ったんだ。一応はオレのほうで監修はしてある。色々ギリギリの奴もあるが……確率も低いし、面白おかしくなると思うぜ？』

『うーん……まあ、僕が知らない内に色々あつてたりするのはいつものことだし、別にいつか』

私が言うのもなんだが、村の長がそれでいいのだろうか？

今回の祭りだけにとどまらず、いろんな意味で心配な発言があつたが……当の本人たちはもちろん、解答者の四名もそこまで気にしてない様子で……どうやらこのまま始まるようだ。

『それでは……始めますー！』

そう言つて、ミス君は丸い穴の開いた箱に手をつ突つ込み……その中から、半分に折られた一枚のカードを取り出した。

『第一問！』『青の農村』に一番多いモンスター種族は「ぷにぷに系」である。「○」か「×」か！』

無作為抽出による出題だったが、それは如何にも『青の農村』らしい問題で、一問目にはちょうど良いであろう問題だった。

ロロナ君の弟子のトトリ君と眼鏡の青年・異能の天才科学者マーク・マクブラインことマーク君が「○」に、残りの二人が「×」に移動し、解答は半々に分かれた。

さて、果たしてその正解は……………？

『正解は……………「×」です！ 実際が一番多いのは「狼系」で、初めて僕の家で暮らすようになったのも「狼系」の『ウォルフ』の子だったりします。それが、影響があったりするのかなあ？』

「ええ〜……………よく見るし、一番弱い子たちだから、『青の農村』に多い気がしたんだけどなあ……………」

外してしまったトトリ君が肩を落とす……………が、まだ一問目であることを思い出したのだろう。気持ちを切り替えるためか、首をブンブンと振ってから「よしっ！」と胸の前で両手で握り拳を作って、やる気を出している様子だが……………さて、巻き返せるものかな？

『続いて、第二問！ 12年ほど前に街で開催された『王国祭』、そのメインイベントの『武闘大会』で優勝したのは……………ロロナことロロナイナ・フリクセルさんですが……………では、優勝した時に授与された称号は「じょうわんかいりきむすめ剛腕怪力娘」である。「○」か「×」か！』

マイス君彼がその問題を読み上げている途中、観客席の何処かから「うえう！? ちょ……………!!」と驚き焦っているような声が聞こえたような気がしたのだが……………おそらくは気のせいではなく、ロロナ君女の声だったのだろう。

なお、ステージ上では彼女の弟子のトトリ君が「えっ? 先生が優

勝!？」と初耳だったようで少々驚いていた。

そんな中、解答は……マーク君以外全員が「×」に移動する結果となった。

当時、私もその場にいたのだが、色々とショックがあつてよく憶えていないのだが……はたして？

『正解は………「×」！ 正しくは「鉄腕怪力娘^{てつわんかいりきむすめ}」でしたー。……でもあの『武闘大会』のロロナつて、爆弾ばかり使つて別に鉄腕でも、怪力でも無かつただけけど……なんであんな称号になつたんだろう?』

「この私が、ロロナのことで不正解になるわけがないだろう！ 娘のことくらい、知つてて当然だからなっ！」

ロロナ君の父親のライアンと言う男性がしたり顔で笑つて……さて、そんな父親を見て彼女は どう思っているのやら……。 ついでに言うと、私の隣には「ああいうのはノリが一番なのよー……たぶん」と呟くエステイ君が。おそらくなんとなく思い付きで作った称号なのだろう。

『第三問！ はっ? あ……えつと、『青の農村』のマスコットキャラはミス村長そのひとである。「○」か「×」か……え、ええ……そんなの問題にする?』

困惑しながらも最後まで読み上げる彼は、立派だろう……顔が赤くなっているのは気のせいでは無いはずだ。

……それにしても、この問題を考えたのは『青^この農村^村』の村民なのであれば……それはまあ、困惑もするだろう。

そんなミス君はともかくとして、解答はクーデリア君が「○」、その他の「×」を選んだようで……正解は……?」

『正解は………「○」!? え、嘘……いやまあ、可愛いモノ扱いされてる気は昔からしてたけど、ここまでとはさすがに……えつ、アン

ケートまでして確定済み？ いやなんでそこまでしてるの!? 次点は金色のあの子？ え、ええっ……それってつまり……』

「はあ、能天気に見えて、彼も彼なりに苦勞をしていそうだね……まあ、随分と妙な苦勞ではあるけどねえ」

困惑し続けた最後には頭を抱えだしたマイルス君を見て、何を思ったのか同情するような目で見るマーク君。まあ、その反応は仕方ない気もするが……。

『っ……ふう！ えっと………気を取り直して、最終問題です！』

自分の顔を両手でパンツと叩いたマイルス君が、気持ちを切り替えた様子で箱の中から最終問題となる問題の書かれたカードを一枚取り出し……

『………』

見た瞬間、破り捨てた………なにい!?

『コオル？ ちゃんとチェックしたのコレ？ ギリギリも何も、面白くもならないような、アウトなヤツ入ってたよ？ これは人の心を抉えぐっちゃう……書いた人は後でお話があるから、ね？』

エッ、アウトツテドンナ……オ、オコツテル!?

ガクブル……アレ？デモカワイイ？

オコツテルソンチョウサン、イイツ……

珍しく怒っているマイルス君に、会場の人たちは全員驚きを隠せない様子なのだが……

しかし、さっきの第三問ですらOKだった彼がここまでする問題とは、一体なんだったんだろうか？ 不謹慎かもしれないが、気になつてしまうな……。

『はいはいっ！ 今度こそはまともな問題を！ つと……最終問題！

『トマト』、『ハウレンソウ』、『キュウリ』、仲間外れは『トマト』である。「○」か「×」か!』

最後の最後に作物の問題ときた。確かに『青の農村』の人間が考え

そんな問題の代表格と言えるかもしれない。

解答は、マーク君とライアンと言う男性が「○」、トトリ君とクーデリア君が「×」を選び……

『正解は………「×」！ 仲間外れは『ハウレンソウ』。『トマト』と『キュウリ』が夏の作物で連作できるのに対し、『ハウレンソウ』は秋の作物で一回収穫したらそれで終わりなんだよね』

「まあ、実際に作ったことがなくても、市場に出回っている様子とかちよつと思えばわかる問題よね」

「えっ!? わたし、『ハウレンソウ』だけ苦いって思ってたんですけど………」

……どうやら、トトリ君のほうは正解は正解でも、理由までは合っていないかったようだ。予選もなんとなくで選んでいたそうだし、たま運が良かったタイプだったんだろう。

そんなこんなで『クイズ大会』本戦の前問題を終えたわけだが、その結果は……。

『最終的に一番正解数が多かったのは………クーデリアさんです!』

「まっ、このくらいの問題なら、難なくやれるってことよ………少し大人気なかったかしら?」

『クーデリアさんには、豪華優勝賞品と……えっ? 「天才〇×^{マルバツ}女王」の称号を……?』

「ちよつと!? いらないわよ、そんな絶妙にダサイ称号は!!」

台本呼びながら首をかしげるミス君とそんな彼にツツコミを入れるクーデリア君。

そんな二人の様子で最後にひと笑いが起き………『クイズ大会』の幕は下りた。

そして……

「ふむ……一番盛り上がったところで動いたのだが……」

「それくらいで見失うわけないじゃないですか！ ほら、会議に行きますよ」

……私は会議からは逃げられそうになかった……ハア……。

ロロナ【*6*】

【*6*】

『その1：トトリ「変な先生」』

青の農村・マイスの家

変だ。

わたしが感じた事を言い表すとすれば、たったそれだけになると思う。

でも、「何が？」って聞かれたら、ちよつと説明が必要になるかもしれないけど……それでも、それでもやっぱり「変」の一言が一番ピツタリ合っているんじゃないかな？

それが何の話かって言うと……

「それじゃあ、「調査」だけじゃなくって「採取」を焦点に当てた授業も行^{おこな}っていくってことでいいんだよね？」

「はいっ、それがいいと思いますよ。いくら『青の農村』内で手に入る素材は多いって言っても、限度がありますし……って、あ……」

「……」
これまでにこうして集まっただけの作業でほとんど完成したと言っている教科書。それが置かれたテーブルを囲んでわたしと先生、あとマイスさんで『錬金術』の授業の事について会議をしていた。……けど、その途中、先生がぼけーっとしていている時がこうしてよくある。

窓の外から見える空に浮いている雲を見て……とか、そういうわけじゃなさそうなんだけど……？ だって、今回なんか、ロロナ先

生の顔はテーブルを挟んだ反対側にいるミスさんのほうを真っ直ぐ向いているんだもん。……ミスさんを見てるのに、ミスさんが言ってることに気付かないっていうのも、変な話だけど。

そして……「こうしてよくある」って言ったように、これは今日が初めてじゃないし、何回もあつてる。

『塔の悪魔』を倒してから少しの間、わたしは『アランヤ村』のほうでゆっくりしてた。で、ちよつと前からまた『アーランドの街』やそのそばの『青の農村』なんかに通つて『学校』の『錬金術』関連の事をまた手伝ったりするようになったんだけど……その、こうしてまた来るようになった頃から、ロロナ先生の様子がちよつと変になつた。

つまりは、『塔の悪魔』を倒した後……わたしが『アランヤ村』にいる間に先生に何かあつたんだと思うんだけど……全く見当もつかないんだよなあー？

そんなことを考えているうちに……つて言つても、時間にしてほんの数秒だったとおもぅんだけど……わたしだけじゃなくミスさんもロロナ先生の異常に気がついたみたいで「あつ、またかあ」とちよつとだけ困つたように笑いながら肩をすくめてた。

そして……

「ローローナー？」

「ん？ ……んー……あ、えつ……うえええつ!？」

イスから立ち上がつて、先生に近づいて行き……先生の目の前で軽く手を振りながら名前を呼ぶミスさん。

ロロナ先生は、その手と声でようやく動いて……ミスさんの顔を見てビクツと跳び上がりながら変な声を出す。

なんでかはよくわからないけどワタワタともの凄く慌てるロロナ先生と、その様子を見て苦笑いをするミスさん。

……これも実はよく見る光景になつてたりする。先生が動かなく

なった時、その場にミスさんがいたらまずこうなるんだから、ある意味当然かも？ それに、先生がこうなるのってミスさんの家に来てる時が大半だし……。

そんな光景を見てわたしは「変」って思うわけだけど……おそらくは「アーランドーのお人好し」であるミスさんは、そんな考え変よりもっと別のことが真っ先に来るみたいで……

「ロロナ、最近なんだか元気がないみたいだけど……大丈夫？ 体調が悪いとか、どこか痛いとか、熱っぽいとか……何かお薬とか必要なら用意するし、看病だって！」

「か看病!? それはそれで……じゃなくて!? えええ、ええつとー……調子が悪いってわけじゃないけど、何というか……と、とにかくっ！ 大丈夫だから！ 本当に大丈夫だから!!」

「うーん……ならいいんだけど？ 本当に何かあるんなら、遠慮しないですぐに言っただけ？」

赤くなってる先生の顔を覗きこんだりしながら心配するまいすさんと、手と首をブンブン振ったりして言葉だけじゃなく身振り手振りで「大丈夫！」ってことを必死に伝えようとするロロナ先生。

まあ、そこまで必死に否定されればさすがのミスさんも「そう?」と一応手は引くんだけど……最後の最後まで、何も言っただけでもその表情だけで「ホントのホントに大丈夫？」と心配してるのが丸わかりだ。

そして、これまでの傾向から考えると、次にミスさんはきつとおやつと飲み物を用意してくる……と思う。たぶん。

そうわたしが予想した通り、ミスさんは動き出した。

「それじゃあせつかくだし……って言うのはおかしいかもしれないけど、今から休憩にしようか? 『ドーナツ』作ってくるから、適当にのんびり待ってて！」

そう言うミスさんは、わたしや先生が何か言ったりするよりも早くスタコラサツサと『キッチン』のほうへと行ってしまふ。

……となると、この場に残されるのはわたしと先生なんだけど……
「……………」

またぼけーっとして、マイスさんが消えた『キッチン』のほうを
じーっと見ているみたいで……とにかく、変っていかおかしって
いうか……。

「……………はあ」

「うわあ」

落ち込んでるって感じじゃなくて、物憂げって言うか影というか深
見っていうか……がある感じの……、先生らしくない子供っぽくない
大人しめのため息をついていた。

それがあまりにも似合わなくて、ついつい「うげっ」ってなっちゃっ
て変な声が漏れ出てしまった。

先生、本当にどうしちゃったんだろう？

やっぱり、わたしがこっちにいないうちに何かあったんだろうけ
ど、いったい何が……？

あつ、それとも、もしかして、ただ単に頭ぶつけちゃったとか、変
なものの食べちゃったのかなのかな？

あと……

「……………」

窓の外にチラチラ見えるあの黒いのって、もしかしなくてもステル
クさん……だよな？　なんであんなところに……？

『その2：メリオダス「今、欲しい物」』

オルコック家邸宅の一室

コツ　コツ　コツ　コツ……　コツ　コツ　コツ　コツ……

室内に一定のリズムで鳴り響く音。

それは靴が床を叩く音……室内を特にあてがある訳でも無く、だがジツとしていられずに自宅の書齋の端はじから端を行ったり来たりしている……他でもないわしの足音だ。

「うむう……」

こうして頭を悩ませる時というのは、以前は王宮の大臣用の執務室でということが多かったが、大臣職から身を引いた今では書齋で……いやつ、今はそんなどうでもいいことを考えている場合ではない!!

わしが頭を悩ませることとなっている原因は、他でもないあのバカ息子トリスタンだ。

昔から何かとありはしたが、奴に後任の大臣を任せてからもうすでに十年近い月日が経とうとしている。

勤務当初から口だけは達者だったがどこか物の見方に偏りかたよがあるように思えたが、まだ精神的な幼さが残っている程度に思っていた。事実、それは時間が経つにつれ大体解消されていった。

しかし、バカ息子トリスタンの仕事が向上したのは途中まで。いつからか悪くなつていったのだ。

いや、「いつからか」という表現はいささか不適切かもしれない。あのバカ息子トリスタンの勤務態度が悪くなったのは大きく二回のタイミングがあつたように思える。

一度目は、今から6、7年ほど前だっただろうか？ 目に見えてやる気無くし、本当に最低限の最低限という程度の仕事をやる程度になつてしまった。

二度目は、今から3、4年ほど前……のはずだ。これまでのやる気の無さは何故か解消され……その代わり、頻繁に仕事から抜け出すようになったのだ。これには王国時代の他所から帰つて来たばかりの生意気さがあふれかえっていたころのバカ息子トリスタンが戻つて来た感覚を覚えたものだ。

しかし、まあ、そんなトリスタンバカ息子が最近また仕事を頑張りだしている……と思った矢先に大事が起き……その後の出来事が、あろうことかそのトリスタンバカ息子が引き起こしたものだど知ることとなった。

それが、今、わしの頭を悩ませていることの大元の原因だ。

肝心の国のことは周りに任せっきりで、外での仕事活動にいそしんでいる……ということになっているが、ほんの最低限の報告以外ロクに情報や連絡を寄越さない元国王兼現国王、ルードヴィック・ジオバンニ・アーランド。

昔からわしの頭を悩ませている一番の人物なのだが……その元国王がついこの前家に来て話したのは、トリスタンバカ息子が、世間一般に言われる「マイスの結婚騒動」に乗じる形で「国」の名を騙かたってマイス彼の元に見合い話を持っていったという話……つまりは、あのトリスタンバカ息子がまたやらかしたというわけだ。ただし、今度はある意味盛大に、だ。

そもそも、元国王が国に戻ってきたのも、その「マイスの結婚騒動」によるもので……いやっ、その話はもういい。もうマイス彼自身の口から結婚の話は真っ赤なウソだということは聞いているし、噂も完璧に消えたわけではないが大分下火にはなってきている。

も！ ん！ だ！ い！ は！ 問題は！！ トリスタンバカ息子がマイス彼に見合い相手を勝手に仕向けた理由だ！！

結婚はウソつてことになってるけど、本当にウソなのか？ ↓マイス彼とそういう仲になりそうな相手って？ ↓もしかして……口ロナ錬金術士!! ↓いやいや、まさか……でも、二人の距離って妙に近いなあ↓……とりあえず邪魔をして、その間に何としてもコッチが距離を縮めよう！

「馬鹿か、アイツは！ ウソだと知っておきながら、その対応！ 焦ったからといってそんな姑息な手段を取るとは!! 彼の迷惑になる可能性を考えんかったのか!？」

もちろん、話はトリスタンバカ息子本人からではなく、元国王から又聞き

ような感じで聞いたものであるうえに推測も混ざっているかもしれないため、全てが正しいとは限らないだろう。

だがしかし、もはや、「馬鹿」以外の言葉が思いつかない……わけでもないのが、一番の悩みどころだ。

というのも、彼が進めている『学校』の設立、それにトリスタンが差し向けた見合い相手だった人物が協力することとなり、結果的にではあるが、マイルスが抱えていた悩みの一つを少なからず解決することとなったのだ。……トリスタン自身、そうしようと思っていなかったことだろうが、それでもマイルスの助けになった事には変わらない。

そして、もう一つ。わしを大いに悩ませることが……！

それは、元国王から去り際に付け足されるように聞かされた一言……。

『ああ、そうそう。少々面倒……と言っては悪いかもしれないが、そのお前の息子の想い人の錬金術士だが、どうやら『青の農村』の村長に気があるようだな……肝心のマイルスのほうは不明なのだがな』

つまりは「トリスタン↓ロロナ↓マイルス」の「三角関係」ということらしい……。

……息子があの錬金術士に好意を持っていたということは……言われるまで、知りもしなかった。でなければ、未だに結婚しないトリスタンに見合いの場をセッティングしたりはしない。だが、よく考えてみれば「何故今の今まで気付かなかったのか？」と思ってしまうほど、トリスタンの行動にはあの錬金術士が関わっていた。

アトリエを閉鎖させるための工作をしていたころも、思い出してみればトリスタンがまともに工作をしていることは無かった。

そして、トリスタンの勤務態度が悪くなった二回のタイミング。一度目は「錬金術士が街を出て旅をし始めたころ」やる気をなくした。二度目は「錬金術士が街に帰って来たころ」仕事から抜け出すようになった。

「……むしろ、何故今まで気付かなかったんだ!? これでもかと

いうくらい、察せそうなタイミングはあったじゃないか!!」

我ながら、鈍感すぎるというか何というか……この察せなさには、脳裏に一瞬だけ、息子が飛び出して行った時の仕事ばかりに目をやっていて家庭を疎かにしていたころの記憶がよぎってしまった。……あの時とは色々状況や事情は違うというのに、な。

「というか、わしはどうすればいいんだ!? トリスタン^アにはいい加減身を固めてほしいとは思っているが、だからと言ってマイルス^彼に少なからず迷惑をかけたことがどうでもいいというわけではない。それにマイルス^彼にも幸せな家庭を築いて欲しいと思っている。しかし、やはりそこは息子の恋を応援したいという気持ちが出てくるのだが……何故、よりもよってその間に入るのが、あの錬金術士とは……悪い、と言うわけではないのだが、何と言うか気不味さが……ああーっ! どうすればー!!」

あてもなく書斎の中をウロウロしてしまっていた脚を止め、頭を抱える。しかし、答えなど出るはずも無く……唯々^{ただただ}、頭と胃が痛くなってきた。

胃薬……は、今、ちょうど手元に無い。

こういう時は様子見がてらにマイルス^彼に厄介になることが多いのだが……今、どういう顔をして会いに行けばいいのやら……。

……あと……ここ最近、生え際の後退が激しくなってきた気が……加齢のせい、だけではない気がするのだが……

『その3……?』
『助けて……』

アーランドの街・広場

『アーランドの街』の中心部にある広場。

人々が行き交い、子供がはしやぎ遊び、婦人^{マダム}たちが世間話に花を咲かせる……そんな活気のある場所、のはずなのだけど、その一角が周囲に比べて妙に淀んでいた。

「……はあ」

偶然にも揃ってため息をついたのは、ベンチの両端に座っている二人。

一人は、旅の大道芸人の人形師・リオネラちゃん。旅の大道芸人って言うっても、ここ最近はほとんど街と『青の農村』を中心に活動しているから、「旅の」って感じはしないかもしれない。

もう一人は、この『アーランド共和国』の大臣を務めているタントリスさん。一応はそこそ偉い立場なはずなんだけど、仕事をほったらかしにすることも多々あるらしい。……今日は、仕事をちゃんとやってきたのかな……今の時間からして、やってない気がするけど……？

そんな二人が、揃いも揃って落ちこんでるっていうか、凄く暗い。リオネラちゃんなんて、ホロホロ^ふくとアラ^たーニヤ^りちゃんを抱き抱えた状態で、ドヨンとした暗いオーラが見えるのに口元はうつすらと笑って……最初にその顔を見た時は、背筋がゾツとした。

そんな二人が何をしているかと言えば……

「……こんなところにはいないで、彼のところに行ったらどうなんだい？」

「それはー、その、マイスクンは、今は『学校』のことで忙しいから……『魔法』のことなら私も手伝えるけど、それは昨日で、今日は違うし……」

目を合わせたりすることも無く……というか、その目が光が無いとどうか薄いんだけど……ただただ、二人揃^{そろ}ってベンチに座って脱力していた。

そこまで言ったりリオネラちゃんに変わって、今度は抱き抱えられているホロホロくんが喋りだした。

「そういうオメーは何してんだよ？」あの嬢ちゃん　「コロナんところに行つて、いつもの歯の浮きそーなセリフでも吐いてきたらどうなんだ？」

「コロナは今、弟子のトトリと一緒あの子に彼の家マイスに行つてるよ。さつき言つてた『学校』のことなんじゃないかな？　……正直、暑い眼差しをマイスアイツに向けてるコロナを目の前で見たら冷静でいられる自身がなくてね。だから、今会いに行くのは遠慮してるんだ」

「まあ、簡潔に言つとへタレちゃつたのね」
ぐはっ!？」

タントリスさんの言い訳じみた語りに、アラニーちゃんビシツがビシツと言いつつ切つた。……それでダメージを受けてるのが、タントリスさんだけじゃなくてリオネラちゃんも、つていうのが何とも言えない。……ついでに私も……。

「はあ……」

再び揃つてため息を吐いた二人は、また

「色々扱いやすそうだからって『貴族』のところに発破かけたわけだけど……よくよく考えてみたら、キミみたいな娘にやつてもらつたほうが良かった気がするよ」

「そんなことない、と思います。長年一緒にいたけど、マイス君、私をそういう目で見てそうに無かつたから……」

「まあ、じゃなきや、キミがマイスアイツの家に泊まつてたつていう時期に、アイツが手を出してそのままゴールイン……いや、なんでそうならなかつたのさ？」

「な、なんでかなあ……あはははは……はあ……はあ……」
力無く笑つたかと思えば、ひととき大きくため息を吐くリオネラちゃん。

そんなリオネラちゃんに、やっぱり目を向けることも無くトリスタンさんは言葉をかけた……。

「……キミも随分と変わったよね？　昔は僕の顔を見るだけでも逃げ

出しそうだったのにさ」

「それは、あなたを怖がる理由が無くなったから……。もう逃げなくてもいい世界に、マイルスくんが変えてくれたから……。マイルス、くんが……。だから、もう私はこれ以上は……。ぐすっ」

「ああ……。確かにあの『魔法』でそういうチカラに対する意識は大きく変わったからね。それにしても、「変えた」かあ……。そういう意味では僕も少なからず……。いやっ、でもそのあたりは口ロナの存在が大きいかな？……。はあー……。もうちよつと頑張ってみてそれでも口ロナが彼と結ばれたら……。仕事もやる気でないし、昔みたいになちよつと旅に出てみようかなあ？」

感極まったのかすすん泣きはじめてしまいうりオネラちゃんに、ポケーつと空を見上げて役職をほっぽりだそうと考え始めているトリスタンさん。二人とも目が……。

と・い・う・か!!

私も色々吐き出したい気持ちとか、愚痴とかいっぱいあるんですけど!!?

でも、そばに居る二人がちよつと私よりもいろんな意味で重いつていうか、そこに割って入って何か言うほどの覚悟が無いっていうか……。

私、ファイリー・エアハルトは、たまたま居合わせてしまったがために、ベンチの両端に座っているリオネラちゃんとトリスタンさんに挟まれる形で、冷や汗を流しつつ背筋を伸ばして黙って座ってます……。

とっ、とにかく！ 誰かこの重苦しい空気から助けてください！?

5年目：マイス「……………」。

青の農村・マイスの家

家のコンテナや倉庫の中に保管されている様々な素材を種類ごとにまとめて作ったりストの書類束に目を通してながら、僕はつい「うーん……」と呻うなってしまった。

もちろん全体に目を通すわけだけど、特に注意深く見るのは『木材』、『鉱石類』に属する素材たち。

何故かと言えば……

『学校』施設の建設材料だから、気にかけてかないといけないからね……」

そう。建物そのものにして、中の設備……机や椅子といった基礎的なものから、錬金釜や炉ろといったものまで……必要なものは山ほどあるのだ。それも、一個人いちごしんが使うためではなく、『学校』という集団で活動する場で使うもののため、文字通り規模が違う。

なので、そのための素材の管理は大切。大切、なんだけど……ちよつとした問題にぶつかってしまった。

「うーん……？　思ったよりも減へつてないなあ？」

そう。素材が想定していたよりも消費されていないのだ。

予定よりも建設や設備の作製が遅れている……そんなわけでもない。むしろ、全体的に見て、予定よりも早く進んでいるくらいだ。だから、むしろ減へりが大きくなって然るべきなんだけど……

素材が減へっていない。なのに、建築の進捗状況自体は問題無く進んでいる。それって少しおかしな話だけど……じゃあ「欠陥建築」だとかそういう話なのかと言えば……それも違うと思う。

というのも、なんとなくだけど、原因はわかる気がしているのだ。

「ちむちやんのせい……っていうか、おかげだよね？」

トトリちゃんのお手伝いのためにコロナが作った『ほむちゃんホイ』という装置から生み出されるホームクルス、通称「ちむちゃんず」。長女のちむちゃんから始まり、紆余曲折あつて最終的に男の子4人、女の子5人の計9人となったちむちゃんずは、今現在『トトリのアトリエ』と『コロナのアトリエ』のそれぞれのアトリエに配属され活動している。

『コロナのアトリエ』のほうにいるちむちゃんずなんだけど……その子たちが自分たちで申し出てきて、仕事が無い時に同じ規格の物が複数個必要な建築資材を『複製』してくれることになったのだ。特に、『塔の悪魔』を倒した後、トトリちゃんが『アランヤ村』に帰っていた時期は沢山『複製』してくれてたみたいで……

で、その『複製』なんだけど……その言葉通り、作って欲しいモノを見せたら、それと全く同じものを作ってくれる。それも何の素材も無しに、だ。

前に一回、ちむちゃんたちにどうしているのか聞いてみたことがあるんだけど、全く教えてくれそうになかった。というか、本人たちも「え？」と首をかしげてた……不思議なこともあつたものだと思う。

そんなわけで、素材の消費も無しに沢山の建築資材をそろえることができたわけで……それが結果的に、今、僕の目の前にあるリストの『木材』や『鉱石類』の縁の少なさで目に見える数値として現れてきたわけだ。

代わりに、つてわけじゃないけど、『パイ』の素材となる『食材』の素材がそこそこ減った。……まあ、ちむちゃんたちが手伝ってくれる理由が、僕の作った各種『パイ』が欲しいっていうものだったからね？

「まあ、このまま何も問題が発生しなかったら……とりあえず、素材に關しては不足したりはしそうにないかな？」

建築等には僕がたくわえている物を使って村の人たちに負担は駆けさせないって言った時、コオルには「えー……」って、ものすつごく嫌そうな顔をされて何度も拒否されたりもしたんだけど……彼が

心配していたであろう「足りなくなる」っていう事態にはなりそうにも無い。

次会う時にはこのリストと今後の建設予定をまとめたものを用意して、「ね？ 大丈夫だったでしょ？」と胸を張ってみせよう。

そんなことを考えていると、不意に玄関のほうからノックの音が聞こえてきた。

「おーいつ、マイスいるかー!」

噂をすればなんとやら。聞こえてきた声は、さっき僕が思い浮かべていたコオルのものだった。

ちようどいい……と思っただけで、ここでふとある事に気付く。……なんか普段よりも声色が強めって言うか、焦り……？

いや、理由はわからないけど、その声だけで「普段は無い何かがあった」と察せる程度には様子がおかしかった。だけど、鍵のかかってない玄関を返事も聞かずに開けたりするほど切羽詰まっているわけでもなさそう……一体どうしたというんだろう？

「はーい、つと。どうしたの?」

玄関戸を開けて顔出すと、そこには予想していた通りコオルがいた。そのコオルは僕の顔を見て「よう」と軽く手をあげて挨拶を簡単に済ませ、そのまま本題を喋りだす。

「いやな、さっき昔からの行商仲間が村に来ただけど……そいつが、大怪我したモンスターを連れて来ててさ」

「大怪我!」

「ああ。なんでも『青の農村』に来る道中で倒れてるのを見つけたとか……つつつても、見つけてすぐにそいつが手当てしてくれたみたいで、命に別状は無さそうだぜ」

一気に心配になった僕を、手で「まあまあ」と制止しながらコオルは「けど……」と言葉を続けてきた。

「もう見つけてから一日以上は経ってるのに目を覚まさない、って心

配しだしてさ。んで、オレのところに来たってわけだ。……んで、怪
我の原因を考えると、事故か人為的なものか他モンスターかなんだけ
ど……なんにせよ、目覚めた瞬間パニック状態になるかもしれないねえ。
そうなった時、落ち着かせられそうな奴って言ったらマイスが真っ先
に思い浮かんだんだ」

「だから、僕のところには？」

「一緒にいろいろしてるから、やるのが沢山あって忙しいのは百も
承知だ。村の事とか『学校』のこと……そのあたりはいくらかオレが
代わりにやってやれるからさ、ちよいと引き受けてくれねえか？」

確かに、個人的に『モンスター小屋』を持っているのは流石の『青
の農村』でも僕ぐらいだ。ちゃんと落ち着ける場所がある……それは
傷を負っているモンスターにとってはかなり重要なことだ。

それに、もし仮に人為的な原因で怪我を負ってしまったのであれば
ば、人に対して極度の警戒心を持つかもしれない……モンスターが原因
で怪我を負ってしまったのであれば、モンスターに対して極度の警戒
心を持つかもしれない。

ぼくであれば、そのどちらにも対応できる……まあ、コオルは
僕が『ハーフ』であることは知らないわけだし、ただ単に「モンスター
と一番仲良くできる奴だから」っていう感じに考えて僕のところに来
たんだらうけど……。

もちろん、断る理由も無い。なので、僕はコオルに向かって大きく
頷いた。

「任せてよ。仕事の中には僕がやらなきゃいけないことも少なからず
あるから、流石に一日中そばに居るってことは出来ないけど……で
も、そういうところはウチのモンスターたちに手伝って貰ったりして
何とかするから。……で、その大怪我したモンスターっていうのは今
どこに？ あと、どういった種族なのかもわかったら、色々準備し
やすいんだけど……」

行商人さんが『青の農村』まで連れてきたってことは、『島魚』みた
いな大きなモンスターではないんだらう。

おおまかな大きさや骨格、その種族の習性などがわかっていれば、休養させる場所の環境や必要な物などを今すぐにまとめられる。なので、できれば先に知っておきたいんだけど……

コオルは、僕の問いに「あー、うーんとだな……」と呟きながら頭をかいて明後日の方向を向いたりした後、ちよつと考え込むような仕事を「実はだな……」と粗らめて口を開いた。

「新種……のような、そうじゃないような？」

「えっ？ どういうこと？」

「いやっ、たぶん同じ種族のモンスターは見たことあると思うんだけどな……大怪我^回してるヤツで二匹目っていうか」

なんとも言えない感じのコオルに、僕はつい首をかしげてしまう。

そんな僕の様子を見てか、コオルは苦笑いを浮かべる。

「まっ、実際に見てもらったほうが早いかもな」

「ついてきな」。そう言って歩き出したコオルを……まあ、村の中だし、玄関の鍵は閉めなくていいか……僕は追っていくことにした。

ああ、そういうことか……。

僕は、コオルが言っていたことがどういうことなのか、理解した。

コオルに連れられてきた場所にいたのは、包帯などの治療処置をしたのだとわかるものが身体のあちこちにみうけられる……目を閉じてぐったりとしている一匹の『モコモコ』だった……。

ロロナ【*7—1*】

【*7—1*】

ロロナのアトリエ

「それでね、それでね！ わたしが師匠を探してあちこちを旅してた時の事なんだけど……」

「へえ……そんなことがあったんですか」

「というか、それだけ探し回って見つからない先生の先生って、いったい何処で何をしてるんだろう？」

アトリエで会話をはずませているのは、ソファアーに並んで座った先生とミミちゃんとわたし。それぞれの膝の上には『パイ』の乗ったお皿があり、手元には『香茶』の淹はったティーカップがある。

今日は特別お仕事も無く、マイスさんのところでの『学校』の『錬金術』関連のことも無かったため、アトリエでちむちゃんたちと戯れてたんだけど……。

そこにミミちゃんがたまたま来て、ロロナ先生の発案で「せつかくだし……」っておやつにすることになった。『パイ』と『香茶』を用意し、それから雑談をしながらおやつを……って、そんな感じだった。

なにはともあれ、お母さん探しとか、冒険者免許更新のためのランクアップとか、そういうことを考えなくていいノンビリとした時間を過ごしているわたし達。

でも、わたしとしては未だに気が抜けないっていうか……いや、でも、ちよつとはマシになったんだけど……。

何が？ って、先生のことだ。

ロロナ先生ってば、あれからというものの頻繁にポケーツとしてるこ

ちゃんは会話の花を咲かせていた。

「まあ、師匠は昼過ぎに起きて一日中ダラダラしたり、変に早く起きたと思ったらフラフラと出て行って夜遅くに帰ってきたり、昔からアトリエはわたしに任せっきりで気まぐれで自分勝手な生活してたから……。アトリエの存続が決まった後もいきなり旅に出たと思ったらフラツと帰ってきて、アトリエを開いてお客さん奪っていったり……」

「真偽のわからない噂しか聞いたことがありませんでしたけど……。口ロナさんの話している内容と雰囲気のせいかな、なんというか、悪名高さに関わるような所業以上に「気まぐれなネコっぽい」という印象が強くなってきた気が……」

「うーん……。わたしはネコって言われると師匠より、本物のネコと一緒にいることが多かったほむちゃんが思い浮かぶんだよねえ……。はあ……。師匠はともかく、ほむちゃんになかなか会えないのが寂しいなあ」

「ほむ……。ああつ、マイスのところに時々いる女の子がそんな名前……。あら？」

原因……。原因かあ……。このまま何にもなくなっていくなら別に知らないままでもいいんだけど、まだまだ続くようなら原因を調べて解決しないといけないよね？ 結局はわたしにも色々影響が出ちやいそうなわけだし……。

「ちよつと、トトリ？ ねえ、聞いているの？」

「えつああ、うん！ わたしも『ミートパイ』よりも『おさかなパイ』のほうが良いと思うなっ！」

肩を叩かれてとっさにそっちの方へ目を向けると、ジトーつとした視線を向けてくるミミちゃんが。

わっ、わたし、何かしちやったかな……？

「何言ってるのよ？ そんな話、してないんだけど……？」

「あはははっ……。ごめんさい。ええつと……。それで？」

「いや、ほら、さつきまで普通に話してたはずなのに、口ロナさんがい

きなり黙っちゃって、反応もなくなったの。変よね……一応は小声で何か言ってるっぽいけど」

ミミちゃんに言われて、わたしから見てもミミちゃんとは反対の隣に座っているロロナ先生の方を見た。そこにはどこかを見てポケータツとしているロロナ先生の姿が。

これは……

「ああ、またかあ……」

「また？」

「うん。ちよつと前から時々こうやってポケータツとすることがあるの。ゴハン食べてる時とか、調合してる時とか……あと、マイスさんのところで『錬金術』の授業のことで話し合いしてる時とかに」

他にも、ホントに何気ない時にいきなりなるから、本当に困ってしまふ。

わたしの話を聞いたミミちゃんは目を細めた。

「調合の時って、それって工程によってはかなり危ないんじゃない？……って、ああ。最近聞く爆発の噂って、それで……。結構頻繁になってるみたいだし、思った以上に大変な状況ね」

「そうなの。ロロナ先生に直接聞いても、隠そうとするか、そのままポケータツして始めちゃうかどうしようもなくって……。たぶん、わたしが『アランヤ村』に帰ってる間に何かあったんだとは思っただけ……。ミミちゃん、何か解ったりしない？」

「そんなこと言われてもねえ……」と言って、腕を組み首をかしげて考え出すミミちゃん。わたしもちよつと考えてみるけど……うーん、やっぱりわからないんだよね……。

……ついでに言うと、わたし達がこうやって話したり、うんうん唸っててもロロナ先生は相変わらずぼーっとしているままだったりする。

そうやって少しの間、わたしとミミちゃん二人揃って考え、悩み込んでただけ……

「……やっぱり、そうよね」

「えっ？ ミミちゃん、何かわかったの!？」

「違うわよ。私なんかよりよっぽどそばにいるトトリが考えてもわからないことが、私にそんなポツと思いつくわけないじゃない。……今更だけど、そう思っただけよ」

「ああ、まあ……そうだよね」

ガツクリと肩を落とすけど、そう簡単にわかるものなら、わたしだったこうも悩んだりすることは無かったことには間違いない。確かにミミちゃんの言う通りだ。

でもなあ……

「せめて何か、もうちょっとヒントでもあれば」

「んなこと言っちゃって、本当に何かあったのかどうかもわからない曖昧なところから始まっての時点で、そもそも答えがあるかどうかも怪しいくらい……」

そんなことを話していると、不意に玄関のほうからノックが聞こえてきた。それに続いて……

「こんにちはー!」

っていう元気な挨拶が。ノックしてすぐに入ってこなかったり、その挨拶の声からしてお客さんは……。

誰か察しがついたところで、わたしはいつものように返事を返した

「あつ、はい。どうぞー」

「お邪魔します。こんにちははトトリちゃん！ あつ、コロナとミミちゃんもいるんだね」

「ええ、ちよつとお茶にお呼ばれして……。とりあえず、お元気そうだなによりです」

入って来たのはマイスさん。そのマイスさんに、ミミちゃんがちよつと固めの挨拶をして、コロナ先生はあいかわらず……。あれ？

「う、うえう!? ま、まままマイス君!? えっ、いや、ちよつ! なんだでもない! なんでもないよ!? うん!!」

「……何言ってるんですか、先生?」

ちょうど復活したところだったのか、いつものマイルスさんに目を覚まさせられた時のように慌てた様子で……何故か、何か言い訳でもするようにアタフタしだしてた。

……つと、そんな変な先生は置いといて……つと。

「なんていうか、マイルスさんがアトリエに来るのって久しぶりですね。最近はずいぶん忙しそう、わたしたちからソツチに行くことが多くなりまして……もしかして、何か用事でもあったんですか？」

「うん、実はそうなんだ……けど、うーん……？　この中だと、やつぱりコロナに聞くのが一番かな？」

「先生に？」

わたしが首をかしげるのとほぼ同時に、「ええっ!?　わ、わたしい!?」という先生の驚いてる声が聞こえた。

それにしても、マイルスさんが先生に聞きたい事って何なんだろう？　言ってる様子からすると、一応わたしからも聞くことは出来そうない感じには聞こえたけど……『錬金術』のこと？　いや、でもそれなら、普段マイルスさんのところまでしているように話せばいいだけだし、今後モコツチから行く予定がすでに立ってるのに、今、わざわざ来るようなことは無いはずだけど……？

と、そんな時に、である。

誰かが、わたしの腕をガシツと掴んできて……いきなり立ち上がり、せむしように引っ張られた！

見てみると、いつの間にか立ってわたしのすぐそばまで来ていたミミちゃんが。腕を掴んできたのはミミちゃんのように……って、なんで？

そんなわたしの疑問を他所に、ミミちゃんが話します。

「それでは、ちょうどいいタイミングですし、私はこれにて……。あっ、トトリは少々借りていきますので」

「えっ？」

「ちよ、ミミちゃんどうしたの？　なんか微妙に猫かぶってるし……」

「というか、そんな引つ張らないでー!？」

いきなりのことにポカンとしている先生とマイルスさんをよそに、「それでは、ごゆっくり」とよくわからない一言を言ってからわたしを引つ張ってアトリエから出ていくミミちゃん。

えっ、えっ? 一体、何がどうなってこんなことにー!?

職人通り

ミミちゃんに引つ張られ、先生たちを置いたまま外に出て来てしまった……。

「ちよ、ちよっと!?! ミミちゃん! どうしたの? 冒険に行きたいなら、そう言ってくれば……ていうか、それならそれでアトリエで準備してから……」

「別にそういうわけじゃないわよ。ただ、ちよっと、あそこは二人きりにしたほうが良さそうだなって思っただけ」

……? 何の話だろう? 気にはなるけど……

「そんなことより、今、先生を放置するのは色々とマズイと思うんだけど……マイルスさんという時って、普段以上にポケーツとしてることが多いし、わたしが間に入っていないと絶対マイルスさんの迷惑になっちゃうよー!」

「ああ、やっぱり……っていうか、そこまでわかってて、その場にも居合わせるのに、なんでこうも気付かないのかしらね?」

「えっ? 何が?」

わたしがそう言うと、なんでかわからないけど、ミミちゃんがとても深い^{ふか}ため息を吐いた。

……いや、だから何で?」

「トトリ? 一応確認までに聞いておくけど……マイルスと一緒にいる時に、あなたの先生はボーっとすることが特に多いのね?」

「うん、そうだけど？　いつつもマイルスさんに声かけられたり手をパタパタされてやつと、さつきみたいに慌てて……。おかげで話し合いがあんまり進まなくて、マイルスさんに余計に時間を作って貰わなきやいけなくなつて。先生にはわたしが「しっかりしてください！」つて言ってるんだけど、全然治らないんだよね……」
「ハア……」

いやつ、だから何でそんなため息を!?　ついでに、なんでそんなかわいそうなものでも見るかのような目でわたしを見てるの!?

「コロナさんがボーつとしてるの……これが原因ね」

「へえ……えつ!?　これって何!?　もしかして……!　わたし!？」

「違うわよ!」

ビシツとツツコんでくるミミちゃん。

「わたしじゃない……それじゃあ、なんなの!?　教えて、ミミちゃん!!」

「何つてそれは……まあ、なんというか、その……ねえ?　どう言ったらいいのかしら?」

何故かちよつと顔を赤くして言うミミちゃん。……いや、でもっ!

「そんな勿体ぶらなくていいから!」

「あー、もうっ!!　アレよ、アレ!　こ……!　恋煩いよっ!!」

こいわずらい……?　

……?　

……。

……!　

!!??　

「はあつ、うえつ!!　誰が!　誰に!？」

「コロナさんが、マイルスによ。……どうやら一方通行みたいだけど」

そう言いながら、窓からアトリエ内を覗くミミちゃん。

まだアトリエを出てすぐの場所だったことを思い出し、ちよつと声

のトーンを抑えながらわたしはミミちゃんのそばに寄って言う。

「いやいやいやっ……ええっ!? ロロナ先生が!? ホントに!?」

「あんな熱い視線をチラチラ向けてて、好きじゃないってことは無いでしょうし、さっき私と話してた時にボーっとしだしたのは今思えばマイスの名前出した時だったし……。たぶん、ボーっとしてる時はいつもマイスのことでも考えてたんじゃない?」

「うわあ……ウソだあ。マイスさんほどじゃないにしろ、あんな子供っぽい先生が、そんな……恋愛だなんて……。信じられないっていうか、有り得ないっていうか」

「あんだ、自分の先生に対しても相変わらずキツイわね」

「えっ、何が?」と首をかしげると、またミミちゃんにため息を吐かれた……。

「トトリが何にもわかってなかったのは理解したけど……一応聞くけど、邪魔とかはしてないわよね?」

「う、うん、たぶん……大丈夫、だと思う。……けど、やっぱりなあ……。ええ、なんで二人が……?」

「そうかしら? 私からすると、結構お似合いだと思うけど? 昔から仲は凄く良さそうだったし、相性は問題無さそうだし……二人して、かなり凄い人なはずなのに全然それっぽくないところとかも」

「ああ……うん」

ミミちゃんの言葉を聞いて、わたしは妙に納得してしまう。

でもなあ……? ロロナ先生もだけど、マイスさんも先生以上に恋愛せういっのが似合わないっていうか……わかるのかなあ?

「しっ!」

そんな事を考えていると、急にミミちゃんが静かにするように言ってきた。「どうしたんだろう?」って思っていると、アトリエから先生とマイスさんが出てきた。

『ロウとティファの雑貨店』方面に来られると見つかってしまいそ

うだったけど……二人は『男の武具屋』や『サンライズ食堂』のある方向へと歩いて行ったので、その心配は無かった。

それにしても……二人はアトリエで何を話して……今からどこへ行くんだらう？

「……って、あっ！」

並んで歩いている二人……そのうちのロロナ先生の手が、隣で揺れているマイスさんの手に伸びて……!!

引っ込んだ!!

「いやっ先生！　なんでそこでいかないんですか!？」

「そう言うトトリは、あの二人のそばにいて何で気付かなかったのよ？」

「……ホントなんでだろ……?」

もしかしなくても、わたしが察せてなかっただけで、あの二人の間で結構色々あつてたりした？　まさか……ねえ？　ううん……?」

って、ちよつと目を離してたうちに、二人がむこうのほうまで行ってしまった。

……で、誰かと話してるみたい。あれは……

「ステルクさん？　あっ、先生たち、もう行っちゃった……」

「そうみたいね。……って」

わたしとミミちゃんが見ている先でロロナ先生とマイスさんが『冒険者ギルド』があるほうへと歩いて行き……その後ろ姿を見送ってたステルクさんが……

「あっ」

いきなり膝をついて倒れた。

ええ……一体何があつたの……?」

ロロナ【*7—2*】

【*7—2*】

ロロナのアトリエ

ああ……どうしたらいいんだろう……！

「ミミちゃんもトトリちゃんも、いきなりどうしたんだろう？ ……前あつたみたいなのに、避けられてるとか、嫌われたとか、そういうことじゃない……よね？」

トトリちゃんたちが出て行つたアトリエの玄関戸のほうを、ちよつと不安げな表情をして見つめてるマイルス君の顔……なんだけど、どうしてかまっすぐに見つめることができそうもないっ……！

眩しいっていうわけじゃないんだけど……いや、でも最近のマイルス君は心なしか輝いて見える気もするから、案外眩しくつて目を向けられないだけで……？

そう思つて、改めてマイルス君の顔をみようと目を向けると……

「もしかして、冒険か買ひ物の約束でもしてたのかな？ ロロナは何か聞いてたりする？」

……ちよつどマイルス君もこつちを振り向いてきて……目が……合、つて……

……。

……。

……。

「……ロロナ？」

「カッコイイとカワイイって、両立するんだね」

「……えっ？」

「……はっ!? わっ、わたし、何か言つちやつてた!？」

首をかしげてわたしの顔を覗きこんでくるマイルス君を見て、何か

ポツと口にしちやった気がする。

けど、自分じゃ何を言ったのかわかんなくて、あろうことか目の前にいるマイルス君に聞いちやっただけけど当のマイルス君は何か考え込んで……いきなり「ああっ」って合点がいったようにポンと手を叩いた。

「ああ、確かにミミちゃんはカツコイくてカワイイと思うよ！ 昔は唯々カワイイだけだったけど、知らないうちに冒険者になって、槍を振るう姿はあの頃からは考えられないくらいカツコよくなって……」「ふーん……マイルス君は、ミミちゃんみたいな娘が好きなんだ……」「うん、好きだよ？ ……あれ？ 何か違ったかな？」

いつもの調子で素直に頷くマイルス君。その後、ちよつと間を開けてから、コテンツと首をかしげ眉間にうつつすらシワを寄せてる……。

……ついでに言うと、実はわたしも首をかしげたかったりする。だって、マイルス君は「何か間違えた？」って考えてるけど……第一わたし、自分自身が何を言っちゃったのか全然わかって無いから、マイルス君がいきなりミミちゃんのこと話し出したこと自体、全然意味わかんないし……。

とうか、えっ？ 普通に頷いたけど、マイルス君は本当にミミちゃんのことを好きなの!?

……いやいや、落ち着こう、わたし。今、目の前にいるのはあのマイルス君。きつと、わたしが思ってたような「好き」じゃなくて、友達とか、家族とか、そんな感じの相手への「好き」だろうし……うん、間違いないよ。

トトリちゃんアトランヤ村の『豊漁祭』の『水着コンテスト』の時だって、わたし達の水着姿そっちのけでお祭りのありかたそのものに文句を言うくらいだし、異性そのあれいこれうは全然無い……はずっ！

……あれ？ ってことは、わたしがマイルス君のことをあーだこーだ考えてたのって、実はあんまり意味が無かったり……？

そもそもわたしって、どうしたいんだろう？

マイルス君のことは……それはまあ、その……好き、なんだけど「そ

れで?」って話になっちゃう。

「ロロナ?」

えつとね。別にね、今の生活っていうか、こんな感じの関係も嫌いじゃないしこれはこれで悪くないとは思うの。

でも、なんていうか、ね?……今思い返してみるとマイス君のお見合いの話の時もそうだったんだけど……マイス君が誰かとくっつくっていうかイチャイチャしてるのを見たりすると、その、胸のあたりがこうモヤモヤアゝのギュウツって感じになってどうしようもなくなってしまうこともあったり。

そういう時は、会いたくないって気持ちが出てくるんだけど、もつとマイス君のそばにいたいって気がするのも間違い無くって……。ならどうしたらいいのかって考えたら……そ、そういうのも有りなのかな!?

「ロ・ロ・ナ? ……ううん、またなのかなあ?」

なら、どうしたらいいの?っていう話になるんだけど……やっぱり、こう、誘惑とかして、マイス君をわたしにメロメロにさせちゃえ
ば……!

……いや、だから、それがさつき思い出した『豊漁祭』の一件で無理なんじゃないかって思ったわけで……。

そそそつそれに、ね?! やっぱり誘惑っていうと、ちよつとその、恥ずかしかったりするし。人前……それもマイス君一人の目の前でっ
ていうのがまた一層恥ずかしくなっちゃうっていうか……!!

恥ずかしい………人前………誘惑? ……豊漁祭………

——『う……うつつふくん♥……とか、言ってみたりして……』——

「つく!? (こほつ)ほつ!」

「!?」

『豊漁祭』の時のトトリちゃんを思い出して、つい吹き出しちゃったっ!

あの時は、あまりの出来事に声も出せなかったけど、今こうして思い出すと変に笑えてきちゃうっていうか……いやいやっ、ダメだよわたくしっ! トトリちゃんだって無茶な注文に一生懸命こた応えようとして精一杯にやった「サービス」なんだから、笑っちゃ失礼だよ!!

……あれ? なんてかわかんないけど寒気が。

ああ、そっか。あの時のトトリちゃんを思い出したら「もしマイルス君を誘惑しようとしたら、わたしもあんな感じに……?」って……。

や、やめとこっ。わたしが「うっふくん」ってしたところで、わたしは恥ずかしいだけだし、マイルス君はそんなことでなびいちゃうような子じゃないし……たぶん。

「急に黙ったり、顔が赤くなったり、いきなりむせたり……大丈夫なのかな?」

冷静になつてようやく落ち着けてきたところで、マイルス君がそんなことを呟いているのが聞こえた。

ああ……うん。放置しちゃってゴメンね、マイルス君。

けど、わたしがちゃんとか何を言う前に、マイルス君は「ちよつと台所借りるね」とだけ言うって行っちゃった……。

アトリエ奥にある、『錬金術』で料理を作るようになってからは使う機会はメッキリ減った台所。そこから戻ってきたマイルス君の手にはティーポットとティーカップが。お茶を淹れてきてくれたみたい。それも、マイルス君の手持ちにあつたらしい『リラックスティー』の茶

葉を使ったお茶でとっても飲みやすいの。

こういう気遣いをしてくれるのがまたマイルス君のいいところで……ちよつと気を遣ってくれ過ぎちやてて申し訳なく思うこともあるけど……うんっ！ でも、やっぱりマイルス君の魅力だと思う！

「それにしても……家ウチに来た時もそうだし、アトリエの爆発の話も聞いてたから一応は知ってたけど、思った以上にヤバイ気がするんだけど……本当に病気とかじゃないの？」

「あ、あはははあく！ ゴメンね、心配かけちゃつて。その、ね？ ホントに病気とかそんな大変なことじゃないんだよ」

まあ、わたしとしては病気とかとは別方向に大変なんだけどね……。

そんなわたしの気持ちはマイルス君も察せないみたいで、真剣そうな顔をしてわたしのことをジーツと見てきて……ううっ、いろんな意味で目を合わせられない……！ しかも「ヤバイ」なんて普段のマイルス君じゃああんまり使いそうもない言葉を使っちゃってるし、かなり本気で心配してくれてる!?

嬉しい……気もしなくはないけど、今、そんな真剣な目をして問い詰められでもしたら、わたしは何を口走っちゃうことか……！

さ、さすがにそれは危ない気が!!

ここは早く別の話をして、話題をそらさないと！

えつと、ええつとー!?

「っ！ そんなことより、空は青いね！」

「……？ まあ、青いけど……赤かったり、黒かったりもするよ？」

「あ、あー、うん！ そうだねー！ アハハー!!」

「……………」

……何言ってるんだろう、わたし。マイルス君の意識をちよつとくらはズラせたかもしれないけど、どう考えてもこれは失敗じゃないかな……会話も全然続かないし。

でも、このちよつとしたスキを見逃さないで、次の手を打たないと、マイルス君にあることないこと問い詰められて大変なことに……！

「話題……何か話題を……わだいー」

「……本当に大丈夫なのかな？」

その心配そうにまっすぐ見つめてくる視線が、今はちよつとツライよ……。

うう……昔は心配をするのはだいたいわたしの方だったのに、今じゃ立場が逆転してマイルス君がわたしのこと心配してることが多くなった気が……。それに、わたしも『パイ』をごちそうすることはあるけど、その倍以上の頻度でマイルス君が何か作ってきてくれたりするし……。

何かあった時だって、ここ何年かはもういつも頼ったりお世話になったりするのわわたしのほうがほとんど。それに、マイルス君は大抵のことは自分だけでできちやちや^{ちやちや}て……今、トトリちゃんと一緒にわたしも手伝ってる『学校』の錬金術のことだって、わたしの方から「手伝う」って言ってなかったらマイルス君だけでやっちゃったんだろうなって気がするくらい頼ってもらえそうにないっていうか……。

……ん？ 頼る……？

ちよつと待って。何かつい最近、マイルス君がわたしのことを頼るようなことがあったような気が……？

「なんだったつけ……？」って思い出そうとして悩むこと数秒。わたしはそうかからずにある事に思い当たった。

「あつ、そうだ！ 今日来た時にマイルス君、トトリちゃんやミミちゃんじゃなくってわたしに用があつて来たんだったよね？ アレってなんだったの？」

「えつと、アレは……」

そう途中まで言いかけたマイルス君だったけど、その先は言わなくってわたしの方を見てコテンツと首をかしげた。

忘れた、ってわけではなさそう？ なんていうか、表情が「はて？」って感じじゃなくて不安そうっていうか……わたしを心配してる感じ？

……なんとなくだけど、たぶん、さつきまでわたしがワタワタしてたのを「もう大丈夫なの？」って心配してる……のかな？

そうなんだろうって思っ、わたしが「大丈夫！」って意味を伝えようと大きく頷いてみせると、マイルス君の表情は少しだけ和らいで……そして改めて話し出してくれた。

「実は……」

「なるほどー、新種のモンスターについてだったんだ」

マイルス君が話してくれたことを簡単にまとめると、『青の農村』に新種のモンスターらしき子が保護されたから、一緒に暮らすか暮らさないかはひとまず置いておくとしても、状況把握のためにも色々と情報が欲しい……ってことみたい。

途中、ちよつと悩むような素振りがあつたりしたから、もしかしたら「村に新種のモンスターが来た」っていう初めての出来事がマイルス君の中でもまだ整理しきれてないんじゃないかなあ？ まあ、そうじゃなきゃわたしに相談なんてしてこないだろうし……っていうか……。

「ええつと……それで、なんでアトリ工に？」

「ロロナかトトリちゃん、どっちかがいるんじゃないかなーって思っ
てさ」

そういえば、今日ココに来た時に、用があるのがわたしかトトリちゃんかで迷ってそんな感じがあつたのを思い出す。けど、わたしかトトリちゃんかって……『錬金術』？ いやつ、よっぽど難しいモノじゃない限りマイルス君自身でどうにかできるはず。それに、『錬金術』が新種のモンスターを調べることに関わる気もしない。

……そんなことをわたしが悩んだのを知ってかどうかはわからないけど、マイルス君はそのまま話し続ける。

「僕以上に冒険してるトトリちゃんは新種のモンスターに実際に遭遇していきそうだし、ロロナは前に話してたのを思い出してさ……ほ

らっ、新種のモンスター調査の為に一時期街を離れてたって」

「あーそれでかあ……」

言われて思い出したけど、確かにわたし、前にちよつと新種のモンスターを調べてたことがあったんだった。そのことをミス君が覚えていたのなら、わたしに聞きに来てもおかしいことじゃない。

「確かにそんなこともあったけど……うーん、ちよつと前の事だからうろ覚えなんだよねえ……それに、自慢じゃないけどわたしってあんまり物覚えは良くないし……」

「超が付くほど一流の『錬金術士』になつて物覚えが悪いっていうのはどうかと思うけど……」

「それは……キュピーンって閃いて、パパツとしてからのぐるぐるって感じにしてるだけで、別に物覚えがどうこうってことじゃあ……つて、ああつそうだ！」

話してる途中、ある事を思い出してわたしはつい手をポンと叩いてしまいつつ、ミス君にその思い出したことについて話してみる。

「あの調査つて、『冒険者ギルド』のほうからお願いされた話だったんだ。で、最後は報告書を作つて提出したの。だから、くーちゃんのところに行けばその報告書とか……もしかしたら、他の人が寄せた情報なんかもあるんじゃないかな？」

「なるほど、『冒険者ギルド』かあ……。確かにモンスターの事とか街の外の情報はギルドに集まりそうではあるよね、うっかりしてた」

そう言うミス君は、髪を軽くかきながら少し恥ずかしそうに笑つてた。まあ、冒険者ギルドには街の外で起こった出来事が報告が……たまに苦情とかも……入ってきたりする。だから、情報が欲しいならとりあえず『冒険者ギルド』っていう考えも簡単に浮かびそうだけど……いやつ、でもそれだと、もしかしたらわたしは今日ミス君に会えてなかったかもだし……。

そんなことを考えているうちに、ミス君が「それじゃあさつそく『冒険者ギルド』に行つてみようかな」つて言つてソファから立ち上

がった。

「あつ！ それならわたしもついて行くよ。トトリちゃんたちもどつか行っちゃって手持ち無沙汰だし、それに何か手伝えることがあるかもしれないから！」

……半分くらい、一緒にいるための建前なんだけどね？

それにしても………何か忘れてるような気が……？

ううん………なんだろう？ そもそも、あの時つてなんでわたしが調査に行っただけ？ それこそあの『青の農村』の村長であるマイス君が行ってたほうが色々とわかったりしてた気がするんだけどなあ？

でも、それとは別に、他にも何か忘れてる気がするんだけど……。頭をひねってみただけ、全然思い出せなくて……まあ、きつとそこのうち思い出すと思うし、今はとりあえずマイス君と一緒に『冒険者ギルド』を目指してアトリエから出発することにした。

ロロナ【*7—3*】

職人通り

「……………」

様々な店が立ち並ぶ『職人通り』。その脇を流れる水路へ転落防止のために設けられた柵に片手を置き、陽の光を反射しきらめく水面を私はなんとなく見つめていた。

また、ここに来てしまった。

後悔……とはまた違う、どちらかというと自身の情けなさを痛感するようなネガティブな感情が自分自身の内から湧いてきていることを理解していた。

しかし、そもそも『職人通り』をなんとなく散策したりすることは、以前からよくあったことだ。

だというのに、何故、最近ではこんな感情を抱くようになってしまったのか……。

私自身の気持ちの持ちようそのものが変わったから……………正確には、彼女の感情の変化を知ったからだろうか？

いや、好意自体は以前から見え隠れしていたようにも思えるので、「感情の変化」というよりも「自覚からくる行動・態度の変化」と表現したほうが適切かもしれない。

まあ、昔からロロナ彼女はマイス彼のことを何かと気にかけて、逆に気にかけられたりしていたし、多少方向性の違いはあれど底無しのお人好しでどこか抜けていたりお騒がせな部分ながらも憎めない人柄なあたり、何かと波長が合っている節はあった。故に、二人が親密交友関係になることは傍はたから見て至極当然のことに思えるため、そこに疑問を持つことは無い。

だが……

「理解することはできても、何故か納得はでき……したくない、か」

何故、自分自身がそんな風に思うようになってきているのかは、恥ずかしながら一応はおおよその見当がついている。しかし、そうやって冷静に自己分析が出来ている反面、その結果を頑かたくなに認めようとしてない自分がいるのもわかっていた。

理屈だけでは語れない。この感情というものはそういうものなのだろう。……そしてそれは、向かう対象が違えどロロナ彼女も抱いている感情のはずだ。

マイス彼の結婚の噂やお見合いの話聞いてからというものの、『サンライズ食堂』に酒を飲みに入り浸ったりしていたロロナ彼女だが、その健康面で不安になる生活はつい先日改善された。……が、そのかわりに、急に放心したり一人で悶えたりするようになり……あれはあれで、私としては見てられないものだ。

「……私は一体何をしているのやら」

ロロナ彼女のことを考えていると、気付けば知らぬ間にこの通りの途中に見える彼女のアトリエの方へと視線を向けてしまっていた自分に少しばかり情けなさを感じてしまっていた。

私は短くため息をつき、再び顔を正面の水路のほうを向く。

第一に、だ。こういった問題は周りがとやかく言うものではないだろう。

ロロナ彼女が誰が好きであろうとソレが彼女の意思であるのだから、その背中を押すならまだしも、禁止したり他の選択肢を強要するのは人としてあるまじき行為だ。

そして、それはマイス彼も同じ。マイス彼にだって、好意を向けられた場合に答えを選択する権利はある。もちろん、相手の好意に対して真摯しんしんな態度で向き合うのであれば、であるが。相手の好意を利用してやろうなどと考える輩やからには周りから何かしらの手を加えなければならぬ。……まあ、マイス彼であれば方が一にも無いと思うが……。

「そういう意味では、何かしでかさなにか心配な顔がいくつか浮かぶな……」

前に「もし仮に」と付くが、今^{彼女}ロロナが抱いている想いが叶えられそうになつたとしよう。

あの二人は何かと顔は広く、本人たちに自覚があるかはわからないが少なからずそういった好意も複数人から向けられているような節がある。その好意を持つていた人々が少々騒いだりするだろう……が、おそらくは大事にはならないと思う。

しかし、下手に行動力と実力を持つ人間が何かしそうではある。

例えば、^例結婚の騒動^動で最近街に戻ってきたエステイ先輩。

^{彼女}ロロナがアトリエを継いで王国課題をこなしていたころの先輩であれば、「ちえー、羨ましいなー」などと少々妬^{ねた}ましそうにしながらも何だかんだ最後には祝福していただろう。

だが、年が経つにつれ先輩のその手の話へのあたりの強さは年々増しているように感じるのだ。実のところは何かするかしないかはどちらとも言えないので、未知数と言ったほうが正しいもするが……なんとなくだが、何かするような確立のほうが高い予感がするのは、気のせいだろうか？

そして、絶対と言っていいほど何かするであろう人物は、あのアストリッドだ。

何のためかは知らないが、今はまるで逃げているかのようによくとく姿を隠しているアストリッドだが、少しばかり歪んでいる気もするが弟子である^{彼女}ロロナへの溺愛^{たぐら}っぷりは相当なものである。その弟子が誰かと結ばれるなどという話になれば、何もしない方がおかしいくらいだ。翌日、槍が降つても私は驚かないだろう。

しかも、性質^{たち}が悪いことに、アストリッド^奴なら大抵のことはできてしまいそうなので、言葉通り「何をしてもおかしくはない」のだ。

「だが、そもそも何故私は自分の気持ちよりも、彼女の周りの事に気を遣わなければならないんだ？ それはまあ、何者かが^{彼女}ロロナの邪魔をするというのであれば私はその企^{たくら}みを阻止すべきだと思うが……」

しかし、^{彼女}ロロナの行く手を誰も阻^{はま}まず、彼女が抱くその思いが遂^とげられる——それはどういう事を意味するか。

……それがわからないほど、私も頭が回らないわけではない。
ならば、何故私は……？

「ハア。惚れた弱み、と言うやつか……」

「弱み、つてもしかして例の首の……？」

「いや、そういう弱さではなくてだな。もつと言えば、首ではなく君の……」

……待て。あのことを知っている……それ以前に、この声は……!?

「ふえ？ 私？」

ハツとし、水路方向へと向けていた顔を身体ごと左手方向へと向けると……覚えが無いといった様子で小首をかしげている。口口ナの顔が目に入った。

つい漏れ出してしまった独り言を何処まで聞かれたのか焦り、そのせいで思考が停止しかけたのだが……口口ナの隣にミスがいることに気づき、別の意味で思考がガチリと固まってしまう。

「ンンツ……!？」

「ステルクさん、どうかしました？」

「い、いや。なんでもない」

私の様子にすぐに違和感を覚えたのだろう、相変わらず察しのいいミスが問いかけてきた。

慌ててなんとか取り繕ったが……何かおかしいという印象は払拭しきることができなかったようで、ミスの表情は心配そうに歪んだまま。だが、人が良過ぎるが故かミスは「わかりました……」と言いつつ、それ以上は追及してはこなかった。

「あつ、そういえば……」

それ比べ、口口ナのほうは私の焦りには気づいていないようである。直前にあった私の「君」発言のほうに気を取られていたようだった。

たし、今回に関しては、彼女たちに気付く前に考えていたことが考えていた事だけにあまり突っ込んで聞いて来てほしくはなかったのも、良かったのは良かったんだが……。

「なんだかボーっとしてたみたいでしたけど……ステルクさんは、こんなところでどうしたんですか？ 何か悩み事だったり？」

前言撤回。私が触れてほしくないところを的確に踏み抜いてきた。もちろん、彼女の事だからわざとではないだろうが……それでも何とも言えない気持ちになってしまうものだ。

「他人の恋愛事情に振り回されそうだと考えていた」などと言うわけにも、ましてや「君（の好意）のことを考えていた」などと齒の浮くような小恥ずかしいことなど言えるわけも無い。すぐそばに^彼マイスがいるのだからなおさらだ。仮にいなかったとしても……

と、とにかく、今は話をそらしておくのが正解だろう。……偶然にも、ちようど気になる事もあるのではな。

「そういう君たちこそ、どこかへ行こうとしていたようだが何かあったのか？」

質問に対して質問を返すという、あまり褒められたことではない対応をした。……が、^彼ロロナも^{彼女}マイスも別段気にした様子も無く、「それは……」と口をそろえて話し出すのだった。

「……なるほど、例の「新種のモンスター」たちについての情報か」

聞かされた話によれば、今、^彼マイスが村長を務める『青の農村』に「新種のモンスター」がいるそうだ。そのモンスターを保護した^彼マイスには何やら思うところがあつたようで、これまでに集められた「新種のモンスター」について調べることにしたらしい。

……というか、これまで^彼マイスは「新種のモンスター」との接触が無かったのか？

いや、まあ確かによつぽど「会つてみたい」などと思つて普段人が入り込まないような奥地に突つ込んだりしない限り、ただ単に冒険をすれば絶対会えるというわけでもなかったのは事実だ。現に、何かと街の外を移動することも多い私でも、数えるほどしか遭遇出来ていない……と思う。行き慣れた採取地ならまだしも、あまり言つた事のない場所、ましてや前人未踏の地などになれば、一見で新種か否かなど判断できんがな。

「とりあえず、事情は理解した。それで、『冒険者ギルド』へと向かつていたと」

「はい。ロロナに薦められるまで『冒険者ギルド』に行くつていうのをうっかり失念してて……」

「あつ、そうだ！ ステルクさんは何か知つてたりしませんか？」

ポンと手を叩いた後こちらへと飛んできたロロナの問いかけに、私は軽く首を振つてから答える。

「あの時以外にも遭遇したことはあるにはあるが、ほんの2、3回だ。その上新種のモンスターはすぐに逃げ出してしまつてな。故に、私もロロナと同じくらいの情報しか持ち合わせていないな」

「……？ ……ああつ！」

私の言葉に数秒間をあげてから大袈裟とも取れる反応を示すロロナ。そのそばにいるミスはいきなりの事にビクリツと体を震わせて驚いているようだ。

……だが私は、私の言葉に対するロロナの表情の変化を見て、大方何がどうしたのかということの見当はついていた。

「私に「何か知らないか」と聞いた時点でなんとなくそんな気はしたが……新種のモンスターの調査は君と私が引き受けた依頼だっただろう？」

「あ、あはははー……つ、えつと、忘れてたとかそういうのじゃなくてですね？ アトリエから出る時、何かあつただけどなーつて思つてはいたんですけど……」

「それを「忘れていた」と言うんだろう」

忘れてたことに後ろめたさが流石に感じられたのか……しかし、な

んとかその場を乗り切ろうとしての判断か、明後日のほうを見て笑いながら本当に誤魔化す気があるのか分からないことを言っていた。当然そんなもので誤魔化しきれはるはずもなく、私の言葉に「うぐうつ!？」と言葉を詰まらせたが。

……と、その視線に気づいたようで「いや、そのちよつと……」と少し遠慮気味に口を開いた。

「ふと、その調査にどうして僕は呼ばれなかったのかなーと思って……」

「ん？ それは……」

調査にミスが呼ばれなかった理由を、彼自身が知らなかったことに一瞬驚いたが、根は馬鹿がつくほど真面目で責任感もある彼の性格を考えると知らされてない事にも納得し……しかし、疑問を持っても知らないままというのもどうかと思ったので教えようとしたのだが……。

私よりも先にロロナ彼女が言ったのだ。それも首をかしげながら。

「あれ？ なんでだっけ？ マイス君がいた方が調査がはかどりそうなのに」

「……君たちが言い出したことだったんだがな」

昔から変わらない……どころか、年々酷くなってるのではないかと思えてくるロロナ彼女の抜けっぷりに頭を抱えつつ、私はひとつため息をついてから改めて話を再開する。

『冒険者ギルド』に報告書を見に行くのだろうか？ その時に、理由についても受付嬢の彼女に聞いてみればいい」

「受付嬢……もしかして、くーちゃんか？」と呟きつつも、名前は出てきてもまだ「どうしてその人物がでてくるのか」がピンときていない様子彼女のロロナ彼女と、そもそもその理由の方を知らないためピンときようがないミス彼は、疑問を抱えたまま『冒険者ギルド』へと向かって行

くのだった。

そんな二人の後ろ姿を、何とも言えない気持ちで見送っていたのだが……

「……………」

不意にロロナの横顔がわずかながら見えた。どうやら左隣を歩くマイスのほうをチラリと見たようだ。

そして——後ろ姿なので正確に確認できるわけではないが——両手で握り拳を作り、まるで「……よしっ！」と気合を入れるかのような仕草をしたかと思えば……

「……………!？」

ソーツとロロナの左手が伸びる。

その先には歩調に合わせて揺れるマイスの右手。

触れるか、触れないか。そんなギリギリまで近づいたかと思えば、ロロナのほうから寸前で手を引き……しかし、先程よりもマイスの腕の振りがわずかに大きかったのか、二人の手が触れた。

二人してピタリツと手も歩みを止め固まってしまった。

時間は……長く感じられたが、実のところはほんの数秒だったかもしれない。

「はて？」といった様子で首をかしげたマイスが、固まったままのロロナの左手を取った。そしてそのまま握って、手を引き歩き出す。

対して、固まってしまっていたロロナのほうは、顔をそれまで以上に赤く染めて手をギュツと握り返し……

……………。

……………。

……………。

「……………グハッ!？」

気づけば、私の視界には石畳しか映っていなくなっていた。

本人たちの問題だとか、むしろ周りに気を付けなければなどと考えていたが……

「目の前で見ると……思いの外、ダメージを………受ける、もの………だな………」

やはり、私の思っている以上に、俺の中でコロナという存在が大きいのということだろうか……？

駆け寄ってくる足音と「ステルクさん!? どうしたんですか!?!」というトトリ彼女の弟子の声を遠くに聞きつつ、私の意識は闇に飲まれるのだった。

冒険者ギルド

ギルド全体が静かながらも確かにざわめき……あたしから見て右手のほうから、「けけ、けつ結婚、報……告……!?!」とかいう声と共に何か倒れるような音が聞こえてくる。

見てみれば、予想通り依頼関係の受付にいたファイリーが直立体勢でそのまま綺麗に真後ろへと倒れてた。

特筆すべきは……その感情の振れ幅が激しい感があるファイリーにしては珍しく「目は点、口は横一線」という真顔であることと、顔色と言うか全身が真っ白になってしまっているように見える気さえするほど生気が感じられないこと……かしら?

原因?

そんなの視線を正面に戻せば原因それは嫌でもわかる。

「……………」

幸い(?)ファイリーの声は届いていなかったようで、いつものこやかな表情で「おーい!」といった感じに左手を振ってコツチに歩い

てくるマイルスと……

「えへへ〜」

こっちはそもそも周りの声が聞こえているのか怪しい、親友としては何ともコメントし辛いデレッデレの表情をして、歩くマイルスの右手を自身の左手でしつかりと握って連れそっているロロナ。

そりや、ギルドにいた全員がざわつきもするし、ファイリーあの子がぶっ倒れるのも納得できる。

ファイリー自身、マイルスにそういう気持ちがあつたのはもちろんのこと、その立ち位置的に運が無かつたのかりオネラとトリスおサボリ大臣タンに挟まれることがここ最近多いようで心労が絶えない様子だった。

その上で目の前こんなものの光景見せられたら……ねえ？ 「あの二人なら……まあ、いいんじゃないかしら？」と思っていたあたしですら、今のは少し動揺しちゃったわけだし。

そんな二人が手を繋いだまま、ついにあたしがいる受付カウンターの前まで来た。

「こんにちは、クーデリア。お仕事の調子はどう？」

「まあ、ボチボチつてところかしら。誰かさんの影響せいで雑務が増えたりもしたけどもう落ち着いたし……マイルスは、いつも通りみたいね爆発しろ」

一瞬さつきのファイリーの発言「何の報告かしら？」と言いそうになつたけど、よくよく見てみれば本当にマイルスはいつも通りの調子で、変なのはロロナのほうだけだつてことに気付いてその言葉は飲み込んだ。

その辺りの探りをいれるためにちよつと含みを持たせて言ってみちゃったけど、当のマイルスはさほど気にしていない感じ。この調子じゃあ、あくまでロロナからの一方通行だつていう状態からは進展してはいなさそうね。

「で？ 今日はどうしたのよ？ あんたたちつてことは冒険者免許のこととか冒険者方面コッの話じゃないんでしょ？」

「えっと、実は「新種のモンスター」のことで聞きたいっていうか、報告の確認をしたいんだけど……」

ミスが新種のモンスターについて知らない様子なことに少し驚いたけど、冒険する頻度は昔より格段に減り『青の農村』内での活動が多くなっている今のミスが新種のモンスターを知るには、会いに行ったり、逆に来たりしない限りはそうそう無いだろう……って事に気がついて、ひとまずは納得する。

じゃあ、なんで今の今までノータッチだったのに、今回そんなことを聞きに来たのかって話になるんだけど……その疑問をあたしが投げかける前に、あることに気付いた。

何やらミスが「あれ？ あれ？」といった感じにキョロキョロしているのだ。一体どうしたのかしら……？

「えっとファイリーさんが見当たらないけど、今日はお休み？」

「ああ、そういう……ほら。「結婚報告」がどうとか言っつて、あそこに倒れてるわ」

あたしが軽くあごでクイツと指し示すと、ミスは覗きこむように少し受付カウンターに身を乗り出し……「わっ!」と声をあげた。

倒れてるファイリーをみるやいなや、ミスは握っていた口ロナの手を離し……そして握ってきた口ロナの手からもそのままスリと容易く抜け出して、ピョンとカウンターを飛び越えてファイリーのもとへと駆け寄っていった。

「大丈夫ですか!?! いったい何が……ファイリーさんが気絶するといえれば、ステルクさん？ でもさつき会ったステルクさんにはそんな様子は無かった気がするんだけど……というか「結婚報告」って誰の？ エステイさん……じゃないよね？」

……ミスが何か呟いてるのが聞こえたけど、気にしないことにしましょう。

特に最後のはいろんな意味で危ない気がするんだけど……まあ、そこで自分の事だったとは夢にも思っていないのが、ミスらしいっちゃらしいわね。

そんなマイスのことはひとまず置いておくとして……とりあえず、あたしの前に残っているロロナへと意識を向ける。

ロロナはといえば、ついさつきまでマイスに握られていた左手を自身の右手で大事そうに撫でながら、デレデレと笑みを漏らしていた。

……そこまでデレッツデレにとろけている様子を見せられると、直前にあたしのなかで否定したばかりの「二人の関係が進展したのではな
いか」という考えが再びわき上がって来てしまう。

あたしは冗談半分で、からかうように少しニヤニヤしながらロロナへとカウンター越しに顔を寄せる。

「何？ もしかして、今日はデートだった？」

「ふえうっ!?! で、でででーと!?!」

「あら、違ったの？ てつきり、ロロナのほうから告白して付き合いだしたんじゃないかって思ったんだけど」

「やつやだく何言ってるの、くーちゃん！ 付き合うだなんて、そんな………って、あれ？」

そこまで言って、ようやく変だと感じたんでしようね。

首をかしげて固まったかと思えば、ギギギツと軋むような音が聞こえてきそうなゆっくりとした動きで傾いていた顔を真っ直ぐに戻し、表情を固めたまま目を白黒させた。ついでに汗がダラダラ流れている気もする。

「目は口程に物を言う」なんて言葉があるけど、今のロロナの表情は「な、なんで……!?!」と驚愕しているのがまるわかりだ。おそらくは「ロロナ↓自分からマイスへの好意」にあたしが気付いていることに驚いでいるんでしようね。

あたしは、流石に好意の事をロロナ自身の口から語らせるのはどうかと思うところがあつたため、軽く首をすくめてみせた後、こつちから話を切り出した。

「言っとくけど、バレバレよ？ ……まあ、肝心のマイスはサツパリみたいだけど」

そう言いながらチラリと視線だけ依頼関係の受付の方へと向けて

みると、そこでは倒れていたフィリーを手厚く介抱するマイスの姿が。こつちの話なんて聞こえている様子も無ければ、そんな余裕も無さそうだ。

「それは、その……あのねっ！　そういうことじゃないっていうか、マイス君はマイス君だし……！」

「誤魔化そうとするヒマがあるなら、マイスを口説き落とす方法でも考えたら？　さっき言ったみたいに、マイスはその手の話にはトコト疎いんだから、あんたのほうから積極的にいかないとどうしようもないわよ」

「そんなことしてるうちに、他の娘に盗られちゃうんじゃない？」と付け足して言うと、ロロナは「がーん!？」と本当に口で言っただきく目を見開いた後、ガツクシと肩を落とした。

「ううっ！　そ、そんなこと言われたって……！」

まあ、中々一歩踏み出せない気持ちを理解できないわけでもないから、ロロナの漏らす弱音にあたしはうんうんと小さくだけ頷いて見せる。

……けど、ロロナこの子のその奥手さをなんとかするべく、背中を押すなり何か考えたり、実際に動いてあげるべきかしら？

「そ、そんなことよりっ、今は「新種のモンスター」のことだよ！」

自分の恋路を「そんなこと」呼ばわりまでして話題をそらそうとするロロナに愛らしさを感じつつも、その行く末に不安を覚え、ついため息が出てしまったあたしは別に悪くないだろう。

「マイス君もあんなに気にしてるんだから、私の事よりコツチのほうに大事なの！　頼ってくれたんだしなんとかしてあげないと！」

「気にしてる……ねえ？」

マイスが「新種のモンスター」に会ったのは今回が初めて。それでいきなり気にし始めるってことは、絶対と言っていいほど何かあるんだとは思っけど……まさか……？

「まさか「新種のモンスター」って、あつちのモンスターだったりする

のかしら?」

「アツチノ? くーちゃん、何か知ってるの?」

「知ってるって、そりゃあ……ん?」

確かにあたしは今、直接的な言い方はしなかったけど……それでも、あの事を知っている人なら十分に理解できる範囲内の言葉を使つたはず。

「ロロナの天然?」とも思ってたんだけど、よくよく思い返してみればこの子ロロナってばついいこの間もあの高飛車娘ミミと一緒にマイルスのあの事を知らない様子だったし……。

「この子よりも先に、マイルスと色々話さないといけないみたいね……」
「ふえ?」

なににせよ、「新種のモンスター」のこともあるわけで、マイルスと話す時間を設ける必要があるのよね……。内容が内容だし、流石に人の目が多い『冒険者ギルド』でじゃあ難しいし。

それにしても……

「そうそうくーちゃん! なんであの調査の時、マイルス君は呼ばれなかったの? マイス君ってモンスターたちとお話しもできたりするし、一緒に冒険したかったんだけど……」

「あんたねえ……トトリの船でギゼラ探しに出るって時期と被って「ギゼラさんのこと気になってるだろうし、マイルス君にはあつちに行ってもらって、ロロナたちが調査にまわる」って、あんたとここで相談して決めたじゃない」

「あつ……!」

……ロロナの天然って、ここまでひどかったかしら?

5年目：マイルス「モコモコとモコモコと行商人」

青の農村・モンスター小屋

人とモンスターと一緒に暮らす『青の農村』。その村の村長を一応やらせてもらっている僕の家の裏手……『離れ』と隣接する『倉庫』、そのまた隣に建てられている一軒屋『モンスター小屋』。……まあ、『小屋』って言うてはいるけど、僕の住んでいる家のような普通の家と大きさはあんまり変わらなかつたりするんだけど。

名前から分かる通り、モンスターたちが住む家のその内の一つ。

『青の農村』が村として形になってからというものが増えるのと比例するかのようにモンスターも増え、それに合わせて『モンスター小屋』も村の中に数か所建てられたんだけど……昼間は基本モンスターたちは外で活動してるし、外で寝る方が性に合ってるっていう子も多かつたりするから、家と言うよりも、「雨や雪からの避難所&もしもの時の病院代わり」くらいの扱いの建物だつたりする。特にウチの裏手のはその傾向が強い。

そんな『モンスター小屋』に、僕は今いるんだけど……

「モコモコ、モコ?..」

「……………もこ」

「モコ。モコツコ、モーコ?..」

「もこー」

「モコ…………」

(まいったなあ…………)

困ってしまった僕は、金変のモコ身モコし状態のまま腕を組み首をかしげ
てうなつた。

問題の中心は、もちろん……って言っているかはわからないけど、少し前にコオル伝いで僕のもとで保護された『モコモコ』だ。

僕が初めて会ったころ、まだ意識が戻っておらずぐったりとしていたモコモコ。けど、応急処置もちゃんとされていたこともあってか『モンスター小屋』で看病するようになってからというものの怪我はみるみるうちに回復していき、ほんの数日でほぼ全快した。

で、身体の傷が治っていけば、衰弱気味だった精神面も自然と回復に向かっていき……怪我が全部治りきるかどうか、といった時期くらいからモコモコは目を覚ますように……。

けど、それがまた新たな事実とそれに伴う問題を浮かび上がらせることとなった。

逃げたんだ、僕を見て。

治りかけていた怪我が少し悪化してしまうくらい暴れてしまい、落ち着かせるのも一苦労だった。

一旦離れて金モコ状態で再び会うことで一応はなんとかなったんだけど……それでも、金モコが僕と同じ匂いがするからか、暴れはしなくなった者の警戒心を解いてはくれなかった。そのため、なんとなくの感情しか読み取れないくらい意思疎通が出来なくなっていた。こっちから話しかけても、返事が返ってこない……完全な敵意を向けられてきて会話にならないことはあったけど、こういったことは初めてだった。

そんなこともあって、目が覚めてすぐのころは食事や怪我の治療の経過確認など最低限の時間意外は、僕以外の他の子……例えば、一番付き合いの長いウオルフとかに……交代交代でモコモコのことを見守ってもらうようにした。それでも、最終的なことも考えて、日々接していく時間を僕も少しずつ増やしていったらただけだね。

でも、これでわかったことがある。

この保護されたモコモコが負っていた怪我は、人間によって負ったものだといいこと。本人から直接聞いてはいないから確定じゃないけど、ほぼ間違い無いと思う。

それに、そういうことも別段初めてというわけでもない。『青の農村』にいるモンスターの中にはそういう経験がある子も実はいるんだ。……だからこそ知っている。その子たちとしっかりと向き合うには、お互いにしっかりと根気と時間が必要だってことは……。

「モコ、モココー……」

(でも、そういうことがある、って言うのはわかってただけで、やっぱり……)

さつきも言ったように「初めて」じゃない。でも、だからと言って全くシヨックでないわけでもない。

そもそも、モンスターを『はじまりの森』へ返す『タミタヤ』どころか『魔法』そのものすらなかった世界なんだ。そんな世界で、モンスターがはびこる地で人々が生活していくには何かしらの対処法を持たないといけないのは当然のことだ。

文化から何から違う世界。だから「仕方ないことだ」と割り切った部分もある。……第一、僕だってタミタヤを使っているとはいえない。モンスター^{相手}の意思をくみ取らずに戦って倒すことなんて、それこそ何回も数えきれないほどやってきた。この気持ちは「偽善」に他ならない。

それでも、こうして『青の農村』が出来てからは、隔たり無く受け入れ……また、人とも交流を深め、互いに理解し合い、一緒に楽しく過ごせる環境づくりをして……ほとんど自己満足なんだけど、「これでいい」って自分の気持ちに折り合いを付けて完結させていた。

……だというのに、僕と同じ世界から来たであろう『モコモコ』が傷ついているのを見たら、どうしてこうも心が揺さぶられてしまうんだらう？

「モコモコモコー」

(他でもない、みんなに失礼なことだよね)

「キユウ？」

そんなことを考えていたら、手近にいた、今日の午前中モコモコのことを見てくれている『たるリス』くんの頭を、金モコ僕の小さな手でいつの間にか撫でてしまっていた。

『たるリス』くんは、僕がどう思っただんな風と言っているのかまでは流石に理解できなかったみたいだけど、僕の感情は感じ取ることはできているみたい。でも、その上で、なんで撫こでうられるなのかはわからないみたいで、首をかしげる塔にその丸い身体を傾けている。

僕はそんな『たるリス』くんにあとの事を頼んで『モンスター小屋』から一匹ひとり出て行ったのだった……。

青の農村

「モコー、モモッコ……」

(ゆっくり時間をかけてでも心を開いてもらって、何とかしてモコモコあの子に何があったのか聞くとして……)

怪我のことはもちろん、そもそもどうして『アーランドこっち』に来ちゃったのか、その経緯も……

「モコ？」

(つて、それはモコモコあの子自身だけじゃなくって「新種のモンスター」全体にいえることかな?)

というのも、調べてみてわかったけど、やっぱりと言うべきか各地で目撃情報が挙がった「新種のモンスター」とは8割くらいは『シア

レンス』で見かけるようなモンスターたちだった。

人前に現れたり、他のモンスターのナワバリに割って入ったり、元いた群れを分散させてしまったり……間接的な部分を含めれば、本当に色々な方面に影響を与えただろう「新種のモンスター」。それが『シアレンス』のモンスターだったということには驚かされた。

それで改めて詳しく情報を見ていつてわかったことがあるんだけど……「思ったより少ない」それが素直な感想だった。

もし、いつからか『アーランド』でも見られるようになった『ゲート』。その内のいくつかが『シアレンス』の世界」もしくは『シアレンス』の『ゲート』と同じく『はじまりの森』に繋がっていたでしょう。その場合、そのゲートのある場所一帯は『シアレンス』のモンスターだけになっていてもおかしくない。

けど、「群れを見た」という話はほとんど0に近い。多くて3、4匹が一緒にいたつてくらいで、全体のうちのほとんどが1、2匹の目撃情報なのだから……正直『ゲート』で繋がっている」つていう仮説の信憑性は半々くらいも無いかもしれない。

「モココ、モココ……」

（なら、なおさらその子たちがコツチに来ちやった理由がわからないんだよなあ……）

今現在、そのあたりのヒントになりそうな情報を持っているだろう存在は、先程の『モコモコ』である。……が、今の状態から見ると、その子から情報を聞き出すには時間がかかってしまうだろう。

なら、それまでボーっとしておくか……と言われて、大人しくしておくはずもない。他に何か糸口が無いか模索するべきじゃないかな？

「モココ……モココッ！」

（他の「あっちの子」にも会ってみたいし、今度は外に行ったりして『青の農村』のモンスターたちに何か心当たりが無いか聞いてみようかな……そうと決まれば！）

僕は人の姿に^戻変身せず、^{モコモコの姿}金モコモコ状態のまま村の中心部のほうへと出て行くことに決めた。

その足でテツテコ駆けていく……んだけど、家の前方にあるウチの畑の範囲を越えたあたりで、ふと僕の家こっちに來ている人がいることに気付いた。

「モコモ……」

（あれは……）

「よお、チビモコモ」

その人物は、活発な印象のある赤毛の商人、昔から何かとお世話になつてゐるコオルだった。

コオルも金モコモ僕に気付いていたみたいで、立ち止まって片手を軽く上げてきた。僕もそれに倣ならうようにして、彼の少し前で立ち止まり「モコモツ」と手を上げて答えてみた。

「あつちから出てきたつてことは、例の仲間の様子を見てきたところか？」

「例の仲間」っていうのは、怪我をしていた『モコモコ』のことだろう。

あの子を僕のところ僕に連れてきた時の様子からもわかるように、コオルは『金のモコモコ』と今回の『モコモコ』とが同族である事をすでに理解しているんだろう。まあ、毛の色や身アクセサリーに着けている装飾系統の有無の違いはあれど、それ以外はほぼ同じだからわかつてもおかしくはないかも。

何はともあれ、コオルの言った通りなので僕は頷いて見せることにした。

「モコモー！」

「ならよかった。まつ、怪我の悪化なんかはそうそう無いだろうけど、どんな様子だ？ ……やっぱ、まだマイスモコモのことは怖がつてるか？」

「モコモ……モコモ……」

「……そっか。まつ、そんな思い詰めることは無いさ。お前の底なし

のお人好し加減を一身に受けてればそのうち相手もわかってくれる、そこんところはオレが保証してやる……って、マイスに言つてやつてくれ」

「モコ〜」

まったく、コオルつたら。そうやって、本職の行商に加えて村の運営のことにも色々してくれてるっていうのに、更にはわざわざこーやって来て他人への気遣いをしてまわるんだから……。

けど、コオルが言ってくれているように、こつちから誠心誠意をもって接していけば、きつとあのモコモコも心を開いてくれるに違いない。今、僕は、そう信じることができる。

コオルの言葉に自信が湧いてきて……それとは別に「やれそうなのとはやっていってみたいと！」って気持ちもドンドン湧いてきた。

だから、コオルに一言二言言ってからその場から離れようとした……んだけど、

「あくもこちゃんだ〜！」

「ん？ ほんとうだ〜」

「もふもふ〜！」

「モコツ」

(あつ)

おそらくは、手を繋いで散歩していたんだろう『青の農村』の仲良しちびっ子三人組。

遊び盛りな年頃の子たちが僕のような絶好の遊び道具を見つければ……それは当然、飛びついてくるに決まってる。

「あそぼ〜」

「あそんで〜」

「あそべ〜！」

「モ、モコーツ!?!」

(えっあつ、ちよ！ わー!?)

逃げるには一歩遅く、あっけなく捕まってしまう……胴、耳、腕をそれぞれ捕まれ、拘束されてしまう。

村のちびっ子たちに連行される中、金セコ僕の大きな耳には「……まあ、子供と遊ぶのは良い気分転換になるかもしれないねえし、とりあえず放置でいいか」という、声の感じからして苦笑交じりだろう呟きがかろうじて聞こえてきたのだった。

ロロナ【*8—1*】

【*8—1*】

青の農村・マイルスの家

「へえ。それじゃあ例の「新種のモンスター」は、やっぱりあんたのところのモンスターだったのね」

日は落ち切り星々が夜空を埋め尽くしたところ、僕のした説明を聞いた上でクーデリアは納得したように頷きながらそう言っていた。

僕がどこにいるのかといえば家のキッチンスペース、その台所で晩ゴハンを作っている。

クーデリアはといえば、キッチンののはじ、ちょうどリビングダイニングと繋がっている通路の手前あたりでイスに腰かけていた。普段、僕の家に来た時はリビングダイニングのソファァーが定位置にはなっているんだけど「顔も見えないし、声も届きにくいから」といって、話すためにわざわざイスを動かしてこっちまで来たのだ。

そんな状態で僕らは最近のこと……主に、この前『冒険者ギルド』に言ってみせてもらった報告書、その内容である「新種のモンスター」についての話していた。

まあ、そもそも今日こうしてクーデリアが家に来ているのは、報告書を見に行った時に「その話もあるし、今度あんたの家に行くから」って話が発端だったりするんだけどね……

「ってことは、やっぱり例の『ゲート』から出てきてるのかしら？　一応色々聞きはしたけど……調査してたころってちよつと前のことだし、しつかりとは憶えてないんだけど、そういうことなんでしょ？」

「それこそ、ギルドの資料庫を漁れば報告書も見つかると思うわ」とクーデリアが付け足して言っているのを聞きながら、僕は『アーランド』近郊で見られるようになった『ゲート』について調べていた当時

の事を思い返していた。

そもそもはクーデリアの別の調査で、護衛というかお手伝いをしていた際に採取地で『ゲート』を発見したのが、本当はもつと前から在ったのかもしれないけど僕の中では始まりだった。それから、情報を集めてみたら他にも目撃者や発生地が複数件あることが判明し、個人的にも気になったため僕が調査に乗り出したんだ。

「でも、あの時周った『ゲート』の目撃情報があつた採取地じゃあ、今「新種のモンスター」って言われてる『シアレンス^{あっ}』のモンスターには全然会ってないんだよね」

それがどうしてかわからず、フライパンのほうを見たままつい眉をひそめてしまった僕がそう言うと、クーデリアは普段とはちよつと違う声色で——きつと、顔を見れてたら意外そうに目を少し見開いてたりしてたのかな？——「あら？」と言つたのを皮切りに喋りだした。「それってどういうことなのかしら？ 『ゲート』が向こうと繋がつてるなら、その頃から遭遇してもおかしくないはずだもの。考えられるのは、本当にたまたま確率的にも奇跡的に出会わなかったのか……もしくは、そのころにはまだそのモンスターたちはコツチに来てなかったか……」

「あとは、『ゲート』とは別の方法でこつちに来た……くらいかな？」「有り得る？ っていうか、もしかして見当がついてたりするの？」

残念ながら見当はついていない。けど、あの事や「新種のモンスター」の一度の発見頭数などを考えると、可能性は十分にあり得ると思う。

「見当はついてないけど、可能性としては十分にあるんじゃないかな？ だって……ほらっ」

調理の中の一工程を終えて一区切りついた僕は、クーデリアのほうを見て自分を指差してみせる。

僕の仕草の意図を理解できず「はあ？」という顔をしたクーデリアだったけど、ほんの数秒間をあけてから「ん？」と首をかしげてから何か思い当たったのか納得したように頷いてきた。

「ああ、考えてみればあんたがコツチに来たのも訳わかんないまま

だったわね。当然だけど、あのころに『ゲート』なんてもの無かったから……確かにそれ以外の可能性って言うのも十分にあり得る、か……」

「とはいっても、じゃあ何なのかって言われると、答えは出てこないんだけどねー」

苦笑を漏らしながらそう言い、その一方で僕は次の調理工程に移るために用意していた数個の卵を割っていく。

「ねえ」

「ん？」

短い呼びかけに、ボウルに入れた卵をかき混ぜながら何気なしに顔をそつちへ向けると、イスに座ったままジトーっとコツチを見てくるクーデリアの姿が。

……あれ？ 気付かないうちに何か気に障ることでもしちやっただけ？

全然心当たりが無いんだけど……でも、ムスツとした感じで機嫌が良くなさそうなのは間違い無い。だから、やっぱり僕が何かしちやったんじゃ……コオルとかからも「無自覚で色々やらかす」とか言われたりするし。

でも、今してるのって料理だしなあ？ ……って、あっ?! もしかして……

「えっと、記憶に無いけど、クーデリアって卵が苦手だったりしたっけ？」

「何よ、いきなり。別にそんなことないけど？ ……って、そうじゃなくって、ロロナのことよ」

「ロロナの？」

晩ゴハンのメニューを急遽変更する必要がないことにとりあえず安心して、どうしてここでロロナの名前が出てくるのか不思議に思い、つい首をかしげながら聞き返してしまった。

「さっきの話の流れで、ってわけじゃなくて最初からするつもりで今日は『冒険者ギルド』とか『サンライズ食堂』じゃなくて『マイスの家』

にしたんだけど……あんだ、まだコロナに例の事話してないんでしょ？」

「例、の事……？」

「あんだ自身のこととか、あんだがいた場所ところの話よ。昔、あんだが「言うタイミングが無くて」って言ったしコロナが知らないっていうのはわかってただけ……ちよつと前からコロナも他の奴に触発されて何かありそうって気にしてたわよ？」

「何か聞かれたりしなかったの？」と聞かれたけど……一通り思い返してみても心当たりは無かったから、僕は首を横に振った。

「まっ、そんな気はしてたけど。黙ってるならまだしも、聞かれたことをウソで返すなんてことができるとは思えないくらい、マイスって馬鹿正直だし」

「それは褒めてるの？ 貶けなしてるの？」

「時と場合によるわ。今回は……呆れてる？」

言クっテる本人リアがなんで疑問符を浮かべているんだろう？

というか、「呆れてる」って……どうして!？」

ソッチをチラチラと見る程度にはクーデリアの言ってることに少し気を取られつつも、かき混ぜた卵をフライパンでほどよい固さになるように慎重に熱していく。……ここの火の入れ加減が最終的な料理の出来栄えに繋がるから、本当は集中すべきなんだけどね……。

そんな僕の様子はあんまり気にしていないのか——最初から、調理中に話しかけてきてたんだから、当然と言えば当然かな？——クーデリアは短くため息を吐いてから、洗食べて僕のほうへと口を開いた。「あたしとかが勝手に教えるのは流石にどうかと思うけど……とにかく、そんな親しくない相手ならまだしも、いつまでも黙ってるのも可哀想じゃない。それに、もう遅いかもしんないけど、黙ってる期間が長くなればなるほど言い辛くなるだけよ」

「それは……そう、かもしれないけど……でも……」

「なに？ コロナに言うのは嫌？ 受け入れてくれないんじや、って心配なの？」

「ううん、コロナならきつと……つて、思ってるよ」

諭さとすように言ってくれてるクーデリアに、僕はそう返した。すると当然クーデリアからは「じゃあ、なんで？」という疑問が、口ではなくて視線で返ってきた。

僕は……少し悩みつつ——良い感じに火が通った卵をフライパンから、先に用意していた味付きゴハンの上に乗せてから——いい言葉表現が思いつかず、とりあえず思ったままの言葉で伝えてみることにした。

「でも、もしも万が一コロナに嫌われたら……そんなの絶対嫌だし、考えるだけでも怖くつて……気づいたらいつの間にか、そう思ったら他の事を考えちゃつてて。………クーデリアにも、リオネラさんやフリーさん、ホムちゃんやメルヴィアにだって受け入れて貰ったつていうのに、さ」

ましてや、自信の秘密を心の内を話してくれたリオネラさんに対しては「誰も「怖い」だなんて思わないよ」つて、みんなが受け入れてくれるつて、言つてたのに……言当つてる本人である僕自身は自分の存在秘密が受け入れてもらえるかどうかビクビクしてるだなんて。知られたら怒られる……いや、「無責任なことを行つたんだ」みたいなことを言つて軽蔑されるかな？

そんな事を思いながらも、やっぱり「怖い」という気持ちは、どうしても変わりそうには無かつた。

「……まあ、親友としてあたしは一応は色々と理解してるつもりよ。けど、あたしはあんたじゃないから、あんたの抱えてる不安を本当の意味で知ることなんて出来ないし、あたしはコロナじゃないから「絶対」なんて言えないわ」

僕の言葉を聞いてからいくらか間を開けた後、ゆっくりと話した。口調こそいつも通りだけど……ジツとコツチを見つめてきている目は真剣そのものの鋭さ。ギルドで冒険者に忠告をする時くらい……いや、それ以上でこの真剣さはもしかしたら、初めて見るかもしれない。

「けどね、これだけは言わせてもら——」

イスから立ち上がったクーデリアが、僕の事をビシツと指差し何かを言おうとし——そこで、わずかにだけ確かに、玄関のほうからノック音が聞こえてきたのだ。

もし、まだフライパンで調理を続けていたら、その時に出る音で聞こえてなかったかもしれない。もし、クーデリアが真剣な眼差しと声のトーンで喋っておらず、声をはりあげていたら聞こえてなかったかもしれない。

……それくらいの音だったけど、僕の耳にもクーデリアの耳にも確かに聞こえ僕らは顔を見合わせる。……喋ってる途中だったクーデリアの顔は、何とも言えない表情になっていた。

まあ、話を中断させてしまってクーデリアには悪いけど、流石に無視するわけにもいかないし、来客を無視する気は元からさらさら無いから僕は「はい！」とノックに少し遅めの返事を返して玄関のほうへと向かって行く。

「おまたせしましたー……って、あれ？」

玄関戸を開け……家から漏れた光で照らされた玄関先にいたのは

「ロロナ？」

「あははっ……き、来ちゃった？」

何故か、はにかみながら小首をかしげてそんなことを言ってきたのは、ロロナ。

日が暮れてしまつてからに家に来るなんて珍しい……ことでもないかもしれない。ひと昔前には探索帰りに寄ってきたりもしたし、ごく最近にも夜にロロナが訪ねて来たこともある。

だから僕は気にせず、ロロナが何の用事で来たかは知らないけど「玄関で立ち話もなんだし」ってことで家に入ってもらうことに決め

た。もし、晩ゴハンを食べてないなら、一人分を急いで追加で用意して一緒に食べてもいいかもしれない。

というわけで……

「とりあえず、いらっしやい！ 今、晩ゴハン作ってたところだから、よかつたら食べていってよ！」

「えっ、本当!? でもいきなりだったし、準備大変なんじゃ……」

口では遠慮してるけど、嬉しそうに笑ってくれるロロナ。時間的には微妙なところだったけど、この様子だと言ってるのは「建前」ってやつで、実は晩ゴハンを食べたくって僕の家ウチに来たんだったりするのかな？ それはそれで嬉しいので全然OKなんだけど。

「大丈夫だよ。二人でも三人でもあんまり変わらないし、食材はいっぱいあるから！」

「あつ、でも私も『パイ』をちよつと持ってきてるからっ！ ……えっ？ ふたり？」

「えへへ〜」って感じに笑いながら持ってたカゴを胸の前に持ってきて見せてくれたロロナだったけど、いきなりピタツと止まって「はて？」と知った様子で思案顔をした後、玄関から家こゝろの中に顔をのぞかせてキョロキョロと中を見渡し……

「あつ」

「どうしたのかしら？」とキッチンのほうからコツチの様子をうかがっていたクーデリアと目が合ったかと思えば、二人揃って気の抜けたような声を漏らした。

「……くーちゃん？」

「えー……つと、ね間が良いのか悪いのか……」

それにしても、どうしたんだろう？

ロロナと目を合わせたクーデリアは何故か「あっちゃー……」って顔をして、額に手を当てて頭を抱えちゃってるんけど……？

わけもわからずロロナとクーデリアの二人を交互に見てただけど……しだいにその答えがわかってきた気がした。

というのも……

「ぶう……っー！」

ポケットとしてたロロナの頬ほおが段々と膨らんでいき……最終的に、海で獲れる『バクダンウオ』のようにプクーツと膨れて、眉も吊り上がって……不機嫌というか、ロロナにしては珍しく怒ってるっぽかった。

だから合点がいった。

クーデリアが頭を抱えたのは、怒ったロロナをなだめないといけな
いのが事前にわかったからなんだろう。

そして、その予想通りだったんだろうけど、それから僕とクーデリアは怒っちゃって帰ろうとするロロナを引き止め、お機嫌取りをすることになる。

でも………なんでロロナは怒ったんだろう？

ロロナ【*8—2*】

【*8—2*】

マイスの家

前もって約束をしていたクーデリアと、雑談をしながら晩ゴハンを作ったりしてた、そんな時。突然家に来たロロナ。

……なんだけど、玄関で会った時はいつも通りニコニコだったはずのロロナは、家に入るなり何故かすっごく不機嫌に。「ぶくーっ」と頬を膨らませてしまった。

本当にいきなりなこと、何でロロナがそんな風になっちゃったのかはわからなかった。だけど、「じゃあ、バイバイ」とか言って追いかえしたりは絶対にしないし、むしろどうしてそんなことになったのか分かるまでは帰す気はないから、ちゃんとお話をするためにも、まずはロロナに機嫌をなおしてもらおうことに。

「……つと。うん！　こんなものかな」

でも、今、《僕の目の前にはロロナはいなかったりする》。

僕の視線の先にはフライパンの上にある黄色い塊、『オムレツ』——『オムライス』のライスに乗せる前の卵の塊だから正確に言えば違う気がするけど——が一つ。新しく追加した一人前の晩ゴハンだ。

なんで、そんなことになってるのかというところ……クーデリアから「ちよつと邪魔だから、ロロナの分も作ってあげるなりなんなりしてなさい」といった感じの事を言われて、キッチンの方へ追いやられたからだったりする。

ロロナの分を追加で作らないといけなのは決まっていたことだからいいとして……家に入れてソファアに座ってもらえるまでには落ち着かせはしたけど、今日のロロナをクーデリア一人に任せてよかつ

たのか、つていう一抹の不安は残ってたりする。

でもまあ、コロナが頬を膨らませた時に、クーデリアは何かわかったような様子を見せてたし、コロナのほうも僕がキッチンへ行かされるのを止めたりしないくらいには僕よりもクーデリアのほうに用があつたみたいだし……お互いに心当たりがあるみたいなら二人で話し合ってしまったほうが、事情を知らない僕が色々口出ししてしまうよりもスムーズに解決できるのかもしれない。

「でも、結局何の話だったんだろう？」

盛り付けておいたライスの上に卵を綺麗に乗せながら、何気なしに二人がいるリビングダイニングへの通路の方へと目をやる。流石にここからじゃ話し声は聞こえないけど、時々コロナの「ええっ!？」なんていった大きな声だけは聞こえてくる。……その感じからして、何とも言えない沈黙が続いたり、ケンカになったりってことにはなつてはいなさそう、かな？

「でもなあ……」と、やつぱりあのコロナの珍しい怒りようを思い出して不安を拭いきれないまま、完成した『オムライス』を運んでいく。……もし、まだ不機嫌だったら、僕がどうにかするべきなんだろうけど……どうしたらいいかなあ？

追加分の『オムライス』を持ってリビングダイニングへとついた僕が見た光景は……

「あ〜う〜！」

「はいはい。とりあえず、今は好きだけ悶えときなさい」

ソファーに座り、両手で顔を覆い「いやっいやっ」とでもいうかのよう首を横に振っているコロナ。大半が隠れてしまっている顔は、手で覆えていない部分や指の間から見えている個所の肌は、ゆで上がったかのように真っ赤だった。

そんなロロナのすぐ隣に座って、何やら慰めの言葉らしきものをかけながら「よしよし」といった様子で背中を撫でてあげているのはクーデリア。その顔は、呆れや同情が入り混じったような複雑な表情で……でも、どこか嬉しそうってどうか「ほっこり」といった言葉が似合いそうな穏やかさも感じられる。

「ふう……恥ずかしかつてるロロナも……つて、あら？ そつちも終わでったたのね」

「うん、ばつちり上手くできたよ。「も」ってことは？」

「クーデリアちも？」と小首をかしげてみる。すると「まあね」と軽く返してくるクーデリア。

やっぱり、最初っからロロナが不機嫌になつた原因をわかつていたみたいだし、元々ロロナとは長い付き合いであるクーデリアからしてみれば朝飯前だったのかもしれない。……まあ、その割にはロロナはいつも通りってわけじゃなさそうだけど。まだ僕のことには気付いてないみたいだし。

追加分の『オムライス』をテーブルに置き、先に出していた分とあわせて配膳をちやちやつとすませた後、僕はロロナたちが座っているソファアとはテーブルを挟んで反対側にあるイスに座る。

それとほぼ同時に、クーデリアがロロナの肩を叩きながら声をかける。

……顔を上げたロロナがようやく僕に気がついたみたいで、驚いた様子で「うひゃあ!？」と声をあげたのには苦笑いするしかなかった。

「まあ、とりあえず晩ごはんを食べようか？」

「そうね。せつかく作つて貰ったんだし、そうしましょ」

「う、うんっ……それじゃあ、いただきまーす」

僕の言葉にクーデリアが賛同し、ちよつとモゴモゴしながらロロナも頷く。

そして、ロロナが言ったのに合わせて僕とクーデリアも「いただきます」と続く。

……うん。思った通り、今日の『オムライス』は過去最高とまでは

いかないかもしれないけど、十分にいい出来だろう。

そういうやつて自画自賛してたんだけど……

「はむっ……んん〜！ おいしー！ 『パイ』もそうだけど、やっぱり
ライス君の作った料理は……はっ!？」

『オムライス』をスプーンでひと掬いし口へ運んだロロナが、どこか
いつもと違う難しい表情をしていた顔をほころばせていた。

お墨付きをもらえたから一安心……というか、素直に言ってたただ単
純に嬉しかった。

……けど、なんでロロナはまた顔を赤くしてるんだろう？ しか
も、「うー」なんて言いながらたぶんだけ僕の事をジーツと睨んでき
てる。……うん、鋭くないけど、あの目つきはきつと睨んでるんだと
思う。でも、なんでだろう？ クーデリアはああ言ってたけど、まだ
何か……？

「それとも、ライスのほうに混ぜ込んでみた『ピーマン』が嫌だった
のかな？」なんてことも考えたんだけど……どうやらそれは無かった
みたい。僕のほうから中々視線を外そうとせずにもう一度スプーン
で『オムライス』を掬い、食べた。また顔をほころばせ、再びハツと
して………わざとやってるんじゃないかって思うくらい、何度かそ
んなことが続いた。

コロコロと変わるロロナの表情を、ちよつと微笑ましく眺め……ふ
と、その視界のはじめに、同じようにロロナに顔を向けているクーデリ
アが見えた。そっちに目をむけてみると、偶然かそれとも視線に気づ
いたのか、クーデリアもコツチを見てきて……視線が交わった。

そして……どっちが先と言うわけでもなく「クスツ」と笑った後、僕
たちも自分の分の『オムライス』へとスプーンを向かわせた……。

「……それで？ いきなりだったけど、ロロナは何か急用とかあった
りしたんじゃない？……？」

「えつと、特に用があつたわけじゃないんだ。本当にただ単に「マイス君に会えたらなー」なんて思っただけの思い付きで……あははっ……ううっ、色々用意してきてるなんて言えないよう」

晩ゴハンを食べ終えて、『香茶』を一杯飲みつつのんびりと雑談をする僕たち。このころになると、ようやくと言うべきかロロナもほとんどいつも通りに戻っていた。

うんうん。顔を真っ赤にしているロロナは、毛を全部刈られて涙目になってる『モコモコ』と同じくらい庇護欲をくすぐるものがあるけど……でも、やっぱりいつものニコニコしてて元気いっぱいなロロナが一番だと思う。

「んなこと言つて、さつきはあんなこと言つて焦つてた感じだったのにねー？」

「ううっ!? それはーそのっ、クーちゃんがあの時あんなこと言つたからで……!!」

「えっ?」

「ああーいやっ、なんでもないよ!? マイス君は気にしないで!」

そうは言われても、気になるものは気になるんだけど……?

それに、今の話は、さつきロロナが不機嫌だったことの原因に繋がっているんだと思う。それなら……

「でも、話は大体わかつてると思うんだけどなあ?」

「えっ」

僕の言葉に、二人が揃つて声を漏らした。

ただし、ロロナは驚いた様子で、クーデリアは疑うような声色で……だったけど。特にクーデリアのほうは「何言ってるんだ、こいつは」とでも言い出しそうな、これまでにないくらいジツトリとした目を向けてきてる。

「何言ってるの、あんたは」

実際に言ってきた。

「いや、だってさっきの話って、ロロナがなんだか怒ってたっぽかったのとの関係があるんでしょ？ それなら……ね」

「ホントにつ!？」

アワアワしだすロロナ。やっぱり恥ずかしいんだろう。

不機嫌になったロロナ。それを見てすぐに何かを察したクーデリア。僕がいない間に二人で話して、それからロロナが顔を真っ赤にして恥ずかしがり、クーデリアがそれを慰める。

その状況とこれまでの経験から分かっている二人の性格や根本的な人間性。ここ最近の二人の様子等々。

それらから推測し、導き出される話の^{結論}は……!-

「不機嫌になっちゃったのはロロナの勘違いで、そのことを指摘されて恥ずかしくなって顔を真っ赤にしてたんだよね?」

きつとロロナとクーデリアで飲みに行く約束でもしてて、ロロナがその日付を勘違い。待ち合わせ場所で待ってても来なくて「急なお仕事でも入ったのか、家の用事かなー」って仕方なくロロナは移動開始。そこで思い付きで僕の家に行ってみたらクーデリアがいて、問い詰めてみたら、約束してたのは明日とか明後日だった……みたいな事だったんだと思う。

それなら、ロロナがいきなり僕^{ウチ}の家に来たことも含め、いろいろと納得できる。

……って、あれ? あれれ?

「クーデリア? どうして、頭かかえちやつてるの……?」

「あんたが馬鹿だから」

ひどい!-

「だって、ねえ? 言ってることは大体あってるんだけど……あんたのその様子からすると、どー考えても中身は全然間違ってるよ」

ね」

「えっ？ それってどういう……」

「コロナみたいに、顔の一つでも赤くしてみせなさいっての！ ったく……察しが良いのか悪いのか、なんで一歩手前まで察せてそうなのに肝心のところで……」

そこで大きなため息をつくクーデリア。

結局どういふことなのか、よくわからないまま。

疑問を残しつつ、もう一人の当事者であるはずのコロナのほうを見
てみると……

「そうだよねー、マイルス君だもん。ふんっ」

どうしてかはかわかんないけど、また頬を膨らませてた………なんで
？

「クーちゃんには止められたけど、やっぱり「お泊まり作戦^ツ2」を実行
するしか……！」

「あーうん、本気ならそんなくらいしないと、このアホは動じなさそうではあるわね……でも、それを本人の前で言っちゃって良かったの？」
「あっ」

また僕の知らない話をしてた二人だったけど、そのうちのコロナ
が「まずいつ!？」とワタワタ慌てはじめ……そんな姿をクーデリアが
またため息混じりに見つめている。

ええっと……なんだか少し嫌な予感がするんだけど……大丈夫、だ
よね？

ロロナ【*8—3*】

【*8—3*】

マイスの家

お月様が照らす夜道を歩いて、ドキドキワクワクしながら来たマイスのお家。そこで会ったのは、マイス君……と、なんでかいるくーちゃん。

ドキドキワクワクしてたのがモヤモヤイライラに変わって、なんていうか頭がグワァーって感じに熱くなっちゃってた。

「ハア……。だーかーらー」

それで、キッチンに行っちゃったマイス君はひとまず置いて、くーちゃんにどうしてこんな時間夜中にマイス君のお家にいるのか、詳しく何度も念入りに問い詰めてみたんだけど……。それでもくーちゃんから返ってくるのは、疲れたようなため息混じりの言葉だった。

「多少の野暮用もあったけど、あたしがマイスの家に来たのは例の「新種のモンスター」のことで話があったからよ。それ以外はなんにもないってば」

「本当？ ホントのホントに本当？」

「そうだって言ってるでしょ。というか、ずいぶん疑うわね？ ……思ってたより独占欲が強かったりするのかしら？」

くーちゃんがボソボソ呟いてるけど……。とりあえずは、本当に「新種のモンスター」のことでお話があっただけみたい。

まあ、納得できるかなあー？

お仕事終わるまで中々『冒険者ギルド』から離れるのは難しいだろうし、来るのが夜になっちゃうのは仕方ないこと。ゴハンと一緒に食べようとしていたのは、マイス君のことを考えれば十分あり得るから、くーちゃん的には深い意味は無いと思う。

それなら、「新種のモンスター」のこと以外に用は無かったって言うてるんだから、私の気にし過ぎで……。って、あれ？

「なんにもないって言うてて……それじゃあ結局野暮用^{やぼよー}って何だったの?」

「チツ」

「舌打ち!」

私が驚くと、クーちゃんは「冗談よ」って言うてから腕組みして肩をすくめてみせた。

「隠したいというか、あやふやにできればって思ってたことなんだけどね。……でも、まあロロナになら教えてもいいとは思うんだけど」「いーから教えてよーっ!」

少しニヤニヤしながら「でもなー」ってもったいぶるクーちゃん。

……なんだか、いつもと違ってイジワルな気がする。

そんなクーちゃんに詰め寄りながら問い詰めてみたら……

「じゃあ、代わりにってわけじゃないけど、ロロナが来た理由を教えてくださいえない? そしたらあたしも教えてあげるわ」

まさかの交換条件。

えっ、うー……そ、それは……クーちゃんになら言えなくも無いけど、もしもクーちゃんがライバルだとしたらあんまり言いたくはない。でも、何にも言わないのは悪い気がするし……

「く、クーちゃんが悪いんだよっ!」

「はあ?」

「だって、ミス君と『冒険者ギルド』に行った時、クーちゃんが言ったよね? 「あ^私んたのほうから積極的にいかないよ」とか「他の娘に盗られちゃうんじゃない?」とかっ!」

「あー、うん。確かに言ったわよ? って、もしかして……?」

「それでそれでっ! ちょっとだけ心配になってきちゃって、どうにかしてミス君に振り向いてもらえないかなーって考えて……昔、師匠が言った「ギャップ」っていうのを活かしつつ、お喋りだけじゃなくって布団の中で手繋いでみたり、思い切って同じ布団に潜りもんじゃないプランもある「お泊まり作戦^ツ2」準備して来たのにく!」

ここまで言つて、クーちゃんも私が言いたかつたことをちゃんと分かつてくれたみたいで、少し申し訳なさそうな顔になった。

「なの……まさか、クーちゃんもマイルス君を狙つてたなんて……騙されたあ！」

「いや、そこは騙してないから。というか、なんであたしがマイルスを狙わなきゃならないのよ」

「ええっ!? だって、カワイイよ? カッコイイよ? あと強くて、優しく、色々作れて、おいしくて、物知りで、でもちよつとドジっことなところもあつて、お祭りとか学校とか面白いこと沢山考えるから一緒にいるのが楽しくて……ねっ! マイス君、良い子だよ! きつと最高だよ!」

「言つてることは、最後あたり以外は否定するところはほとんど無いけど……あんた、実は恋のライバルが欲しかったりするの? ……あと、途中でマイルス食べられてなかった?」

えっ? なんて、クーちゃんはそんなこと言うんだろう? そんな話……だつたっけ?

わかんなくて、ついつい首をかしげちゃっていると、クーちゃんは苦笑いしだしてため息まで吐いてきた。

「まあ、あんたの愛しの「マイルス君」のアピールはひとまず置いて――」

「い、愛しのだなんて、そそそんなあ〜」

「あそこまで言つてて、そこに照れるの……?」

それはもう仕方ないんじゃないと思うなっ!

良いところを言つたり自分の心の中で「好き」って思つたりするのと、周りの人に「好き」って気持ちを指摘されちゃうのって全然違うし……。

「とにかく、改めて言つておくけど、マイルスと特別な関係がとか狙つてるっていう勘違いよ」

「だから、照れてなんて……勘違い?」

「そつ、勘違い。どこぞの職務怠慢大臣じゃあるまいし、あたしはそんな裏でこそこそしたりはしないわ。……思うところが全く無いわけじゃないけど、ちよつとしたアドバイスをしたりとか、普通に口口ナの恋路を応援してるんだからね」

あれ？ た、たしかに……。

さつき自分で言ったけどくーちゃんが色々言ったから私、今こうして「積極的にいってみよう！」って思って色々作戦を考えて行動できはじめてるわけだし、何にも悪い事は無かった気が……？

改めて思い返して考えてみればみるほど——一回冷静になつてみればすぐにわかったのかもしれないけど——なんか、ただ私がはやりちりしちやただけって感じがしてきた。

そう思えばはじめたら、いきなり詰め寄つたり怒り気味に色々言つちやつたのが凄く悪い事したように思えて……

そうだ！ 勘違いだったんだし、くーちゃんに謝らないと………んん？

なんだか、隣に座つてコツチを見てるくーちゃんの顔がものすーつごくニヤニヤしてる……？ そ、それに、なんだか目は変にあつたかいつていうか優しい感じが……。

「いやあく。でも、今回は口口ナが勘違いしてくれてて良いものが見れたわー」

「えっ？」

「だって、あたしをあんなに質問攻めしたり、聞いてもないのにマイスあいつの魅力を語り出そうとしたりしちゃつて。最初は「好き」だなんて、気の迷いか何かじゃないかって心配もあつたけど……そこまで本気なら、あたしも本当に手放しで応援できるわー」

「っ!？」

言われてみれば、暴露しちやつた感がある気が……!-

で、でも、くーちゃんつてば前から私がマイス君のこと好きつてことは知つてたみたいだし、いまさらそんな………ううん、やつぱり

恥ずかしいっ！ 顔から火が出そう、つていうか頭が『メガフラム』っ
!!

あ〜う〜!? ど、どーしよー!?

「それにしても……ホント、それっぽいこと言っつて話を少しズラすだけで簡単にひっかかるから、誤魔化しやすいわね。今は有り難いけど、他の奴に騙されたりしないか心配だわ」

「ふえっ? な、何か……?」

「別にー? ただ、今ごろキツチン^{あっ}でマイルスが、コロナのためにつて愛情たーつぷり込めて『オムライス』を作ってるんだろーって思っただけ」

「うえう!?!」

「ああ、そうそう。マイルスも不機嫌だったあんたのこと気になってるだろうし……晩ゴハン食べる時、あたしとマイルスが一緒にいたから勘違いしてたつてこと話してもいい?」

「やーめーてー!」

くーちゃんがすつごくニヤニヤ笑いながら顔を近づけてきて、耳元で……!?

な、なんだか今日のくーちゃんは師匠とはまた別の意味で手が付けられないよ〜っ!?

……そんな、くーちゃんとのやりとりがあつたのも、随分前のことに思えてきそうなくらい、私は今日の前での出来事のほうにばかり意識がむいちゃつた。

というのも、くーちゃんとの内緒話のつもりがマイルス君にも普通に聞こえるくらいの声で話しちゃつて、それで……

「ええつと、「お泊まり作戦2」？ ツーってことは二回目ってことなんだろうけど……どういうこと？ というか、作戦ってなんの……？」

聞こえちやった言葉のせいで、なんだかマイルス君が首をかしげて困惑中です……ど、どうしよう？

そんなに考え込まれても、別に深い意味が隠されてたりするわけじゃないんだけど……。

うーん。でも、聞かれちゃった以上は「なんにも言っていないよ!」とか言って誤魔化すわけにもいかない。いつそのことそのまま強行突入というか、そのままのながれで作戦を開始したほうが良い気がする！

「あの、この前『離れ』のほうにお泊まりさせてもらったよね？」

「この前……ああつ、僕がお見合い相手だった娘と結婚するって勘違いして来た——」

「ストーツプ!? そ、そこは関係無いから思い出さないでっ！」

ただでさえ、ついさつきも勘違いのせいで恥ずかしい思いしたのに、あの時のことまで掘り返されちゃったら本当に恥ずかしすぎて頭がどうにかなっちゃいそうだよ!!

あと、隣のくーちゃんはクスクス笑うの止めてっ！ その笑い声で、余計に恥ずかしくなっちゃうからっ！

「と、とにかく！ あの時はゴタゴタしちゃって、喋ったり遊んだりってことがあんまり出来なかったよね」

「まあ、あの時は口ロロナがかなりお酒で酔っちゃってたからね。喋るのはいつぺんにバーツで出るか、いきなりウンともスンとも言わなくなるかの両極端って感じだったし、それに結構ボケーツてしちやってることも多かったから、遊ぶっていうのもねえ」

「ウン、ソーダナー」

マイルス君の言葉に、ちよつと目をそらしてしまいながら何とか返事

をする。

「言えない……！」 「好き」って気持ちの事とか、マイルス君の言動一つ一つにはんのうしちやったりとかして、『離れ』に案内されてからはベッドに入ってアレコレ考えてたらいつの間にか朝になっちゃったとか！

「そ、それで！ 実は今日、リベンジってことで色々お泊まりの準備してきちゃってるの！ だから——」

「そっか！ それじゃあ、ちよつと『離れ』のほうの準備してくるね。ついでこの間掃除したばかりだから、問題無いと思うけど……」

「——いきなりで悪いんだけど……あつ、ちよ……」

私が言ってる途中で、嬉しそうに立ち上がって離れへと繋がる裏口の方に早足で言ってしまうマイルス君。呼び止める前に、その後ろ姿は開閉した裏口戸で見えなくなった。

……いや、まあ断られないっていうのは嬉しいんだけど……

「そんな自信無さそうに頼まなくなつたって、これまでのマイルスあいつの事を考えると、断るはず無いつていうのもわかりきってるでしょ？」

「確かに、クーちゃんの言う通り……でも、できれば『離れ』じゃなくなつてコツチでマイルス君と一緒に寝てみたかったんだけど……」

「夜這いって……積極的には言ったけど、飛ばし過ぎじゃない？」

「そういうのじゃなくなつて！」

「でも、大体あってるでしょ？」

「そうかもだけどっ！」

正直に言つて、『離れ』を用意してもらつて、コツチでマイルス君とお喋りして、眠くなつて寝る時になったら「また明日」って『離れ』に移動して……って流れじゃあどう考えても今以上の関係になれない気がビンビンするだよね……。

そ、それこそ、クーちゃんが言うように「夜這い」まがいのことをするくらいじゃないと……！ で、でも恥ずかしいっ！

また、頭に血が昇つちやう感覚がして熱くなつてただけど……

そんな中で、クーちゃんがいつの間にかソファーから立ち上がった。「どうしたんだろう？」って首をかしげる……それより前に、クーちゃんの口が開いた。

「まあ、とにかくあたしはこのあたりで退散するわ。明日も朝一で仕事ってこともあるし……十中八九何かやらかしそうで不安しかないけど、いたらいたで邪魔しちやいそうで悪いから」

「うっ……ご、ゴメンね、クーちゃん」

「別にあたしは今マあイスとお喋りしたいわけじゃないし、謝ることないわよ。……告白しちゃうとか、逆にあいつからさせちゃうとかする勢いで……ついでに全部聞き出すなり何なりしちゃうついなさい。いい報告が聞けるのを、待ってるわ」

そう言って歩き出したクーちゃんは軽く手を振って裏口の方から出て行った。……って、あれ？　なんで裏口？

一瞬わかんなかったけど、きつと『離れ』のほうにいるマイス君に一言言ってから帰るつもりなんだ、って思い当たって納得した。

……クーちゃんが背中を押してくれたんだし、私、頑張らないと！『離れ』のこともある。クーちゃんとの話もたった一言二言で終るとは思えない。なら、時間はまだまだ余裕がある……はず！

「なら、今のうちに……！」

一回、大きく息を吸って……吐いて……。それから一度握りこぶしを作って「よしっ！」と気合を入れて……

私は自分の服に、指をかけた……！

コロナ【*8—4*】

【*8—4*】

離れ

「よしっ、こんなところかな？」

普段から定期的に行っていた掃除でそこまで汚れてはいなかった『離れ』。そこに備え付けられているベッドとそのすぐそばに布団を用意し、ちゃんと二人が寝るスペースを確保できた。そうしても手狭に感じない程度の広さを『離れ』は持っていた。

まあ、一番多いときだとアランヤ村組+αの計7人が寝泊まりしたことも一応はあるから、2人くらいはどうということも無いとは思う。

なにはともあれ、準備は万端だ。家のほうに戻ってコロナとクーデリアに……

「予想はしてたけど、あたしの分も用意してるのね」

「あれっ、クーデリア？ どうしたの？」

家に戻ろうと振り向くと、いつの間にか開けられていた『離れ』の出入り口の扉、そこにクーデリアが立っていた。

いきなりのことにはちよつとだけ驚いていると、クーデリアは何とも言えない顔をして髪を軽くワシヤワシヤとかきながら口を開いた。

「言っとくけど、あたしは泊まらないわよ」

「ええっ!？」

「そんなに驚くこと？ あたしは一度も「泊まる」だなんて言っていないわよ」

あれ？ そうだったっけ？

クーデリアに言われて、お泊まりの話をした時の事を思い出してみる。

……………。

うん。確かに言っただけでなかった。もちろん、『冒険者ギルド』で「新種のモンスター」について話があるから、勝手に約束をした時もお泊まりは全くしてなかった。つまり、完全に僕のはやとちり。

でも、せつぷくなんだし……。

僕のそんな思いが顔に出てしまっていたのかな？ クーデリアが呆れた顔をしてため息を吐いてきた。

「あのねえ……こっちにも都合とかあったりするのよ。明日は朝一から仕事だし」

「ええ、そのくらい街に送ってあげるし……それに一緒のほうが口ロナも楽しいと思うし、クーデリアがいなくてなったら寂しがるんじゃないかな」

「……ちよつと悔しいけど、今回に限ってはそれは無いと思うわ」

ううーん……そんなこと無いと思うんだけどなあ？

……って、あれ？ なんだろう？

よくわからないけど、なんだかクーデリア言い回しが変わっているか、ちよつとおかしいような……？

感じ取った違和感を指摘して聞く……よりも先に、クーデリアが腕を組んで「まつ」と一言声を漏らしてから、そのまま続けて喋りだした。

「口ロナが寂しがるって思うんだったら、その分あんたがそばに居てあげなさい。それだけであの子も結構喜ぶと思うわ」

それは言われなくてもそうするつもりだ。

最初こそ「用も無くなんとなく来た」みたいなことを言っていたけど、よく聞いていけばどうやらわざわざお泊まりをするつもりで準備してきたって話だという。それは僕としては大歓迎だし、せつぷくなんだから最近学校関連の話ばかりになりがちなのと口ロナとお喋りもしたい。

だから、何かゆつくり飲めるものなんかを用意して、眠くなっちゃうまでお話し——

「そうねえ……せつかくこうして布団をしいてるんだから、今日は一緒に『離れ』で一緒に寝てみれば?」

——してみるのも悪くないかも……って、ん?

「ええつと……クーデリアは何を言ってるの?」

「何って、どうすればロロナが喜びそうかって話よ」

「それ以外に何かがあるの?」と言ってくるクーデリア。……なんだけど、なんていうか妙にニヤニヤしてるっていうか、その……たぶん、言ったら怒ると思うけど、悪巧みとかをしている時のアストリッドさんに似た雰囲気かおが漂う表情かおをしている。

いや、でもクーデリアだもんね。悪巧みそんなことはしないはずだし……きつと、ロロナが楽しそうにしている姿でも想像して笑顔が漏れてるだけだろう。

……にしても、『離れ』でロロナと一緒に寝る………か。

「うんつ、そういうのもありかもしれないね!」

「まあ、そうよねえ……えっ」

これまでのように『香茶』を飲みながらお喋りするのも悪くはない。でも、布団に入ってからダラダラとお喋りするのも、それはそれで面白そうな気がする。

よくよく思い返せば、トトリちゃんたちアランヤ村組が泊まった時、一番楽しそうに話してたのも、みんなが寝る準備をして『離れ』に行った後だった気がする。家こつちからも分かるくらい『離れ』が賑やかだったのを憶えている。

それにトトリちゃんのたちが泊後まった後、ロロナが「私もお泊まり会に参加したかった!」みたいなことを言っていたのを憶えている。

残念なことに、あの時のような大人数じゃないけど……それでも、ロロナを一人で寂しく寝かせるよりは僕も一緒にいて寝ながらお喋りするほうが、ロロナもよっぽど楽しめるはずだ。

「自分から提案しといてなんだけど、そんな普通に受け入れられるのは……やっぱり、ロロナのことを異性として全く見てないってことか

しら？」

となると、家の扉や窓の施錠は家で寝ている普段よりもしっかりとして……あれ？ どうしてかは知らないけど、いつの間にかクーデリアが額に手を当てて、首を振ってた。何か………もしかして……？ 「えっと、……ゴメン、もしかして何か言ってたか？」 「ううん、別に。そんなことより、片付けができたなら早くロロナのところに行つてあげなさい。きつと待ってるわよ」

「ほらっ」と言つて僕の手を取り、引つ張るクーデリア。手を引かれる僕は、そのまま『離れ』の外へと連れていかれるのだつた……。

青の農村

『離れ』から出た僕とクーデリア。

元々僕に泊まらずに帰ることを伝えるだけのつもりで『離れ』に顔を出しに来ていたというクーデリア。家に入ることはせず『離れ』との間にある簡易的な渡り廊下の脇から出ていって、僕が送るつて言ったのも断つてそのまま村を街の外へと向かつて歩いていってしまった。

引き止めようかとも考えたけど……まあ、新人冒険者ならまだしもクーデリアだ。

『青の農村』の周りではまずあり得ないだろうけど、もしものことがあつてもクーデリアなら十分すぎるほどの実力がある。それに、お酒なんかが入つて酔払つてしまつているなら心配だけど、今日はそんなことは無いから大丈夫だ。

「もしも」の話をするなら、帰っているクーデリアの目の前に「新種のモンスター」が現れてしまわなかが心配かな……主に「新種のモンスター」のほうだ。

……そんなことを考えながら、僕はコロナを待たせてしまっている家へとはいるのだった……

マイスの家

「あつ、おかえり〜」

「ただいまっ。『離れ』のほうは用意でき、た……よ？」

扉を開ける音で気付いたんだろう。家に入っすぐ、コロナの声が聞こえてきた。

そのコロナの声に応えながら僕は家に入っった……んだけど、あるものが僕の目にとまりちよつと固まっってしまう。

「……マイス君？ どーかした？」

ソファアに座っつて、部屋のはじの本棚からとっってきたんだろう本を讀んでいたらしいコロナだけど、一瞬固まっつてしまった僕を見てか、首をコテンツとかしげた。

それに合っわせて、帽子の先端なのだろう部分に付けられている白いホワホワした毛玉が揺れた。

……一瞬目を疑っつちやっただけど、どうやらコロナはいつも被っつている帽子とは別の帽子を被っつていたのだ。いや、正確には帽子だけじゃなくて、服もさつきままでとは全然違っつものになっつてる。

先端のポンポンを掴んで掴みあげれば円錐状になるだろう柔らか^{フワフワ}素材^{素材}の薄桃色の帽子。

これまた薄桃色が基調で、襟^{えり}・袖口^{そでぐち}・裾^{すそ}がフリルがあしらわれ、肩の上側がほとんど露出するくらい襟ぐりが広く胸元に小さなリボンのワンポイントが栄える上着。

上着とよく似た色使いのも^{ふわふわ}こ^{ふわ}こした印象を受けるショートパンツ。

そして、足先からショートパンツの裾から下数センチくらいまでを包み込んでいる白と薄桃色、薄藤色うすむらさきの三色の縞々モフモフソックス。

「えつと……なにそれ？」

口を動かしてみたはいいものの、何て言えばいいかわからなくてそんなフワフワとした言葉しか出てこなかった僕。

「ロロナはと言えば、僕が何の事を言ってるのか分からない様子で頭に疑問符を浮かべてた。」

けど、僕の視線を追うようにして自分の服へと目を落して……「はうわ!？」と変な声をあげ顔をちよつとだけ赤くしてあたふた慌てだし……

「こ、これは、その……ぱつパジャマだよ!？ パジャマっていうのはね、寝る時に……!」

「あつ、いや、それは流石に知ってるよ?」

「あれ? そうなの? マイス君がそういうの着てるの見たこと無かったから、知らないのかと……」

「それを言ったら、ロロナがそのパジャマを着てるのを見るのも初めてなんだけどなあ?」

でも、大昔……それこそこの家に住むことに決めた頃。ベッド・布団など足りてなかった家具をそろえた際にティファナさんに「こういうのも持ってたほうが良いわよ」って寝間着一式渡された……んだけど、これまでほとんど着てなかったりする。色々作業してても不思議とそこまで汚れないし、とある理由わけもあってそもそも着ようと思うことも少なかったのだ。

だから、ロロナから「見たことが無い」って言われるのも仕方ないと言えば仕方ない気がする。

いや、そもそも僕は寝る前に『鍛冶』でも何でも限界までして体力ギリギリになったうえで寝るから、その状態で着替えるのは困難面倒だか

らだったりする……まあ当然汗とか煤すすとかの汚れはパッと落とす
ンだけど。

「それでそのー……どう、かな？」

「でも、今は昔とは違って体力・気力のほうは全然余裕があるから、
そろそろいい加減に……」なんて一人考えていると、ロロナがおずお
ずと問いかけてきている声が耳に入り、意識を引き戻される。

「どう」っていうのは、この状況からしてやっぱり今ロロナが着てい
るパジャマに対する感想なんだろう。……なんだろうけど、どういえ
ばいいのやら……実のところ、あんまり直視が出来なかつたりするん
だけど……

「うーん……色とか雰囲気とかがロロナにぴったりでいいんじゃない
かな？」

「そ、そうかな？ えへへ〜」

「ただ……」

僕がそう呟くと、ニヘラと笑つてたロロナの顔が「へっ？」と一変
し、その真っ直ぐな眼が僕を捉えた。

……正直、言い辛い気もするけど、言わないわけにもいかないよね
……？

「ワンサイズとは言わないけど、少し小さかったりしない？ ほんの
ちよつとだけ窮屈そうに見えるんだけど……」

上も下も、ふわふわした服の素材やゆるりとしたそのデザイン。だ
から、その、体のラインっていうのが基本わかり難い……はずなんだ
けど、袖口あたりとか……胸元とか……あと、太もものあたりとか
が、こうほんの少しだけ……ね？ 肉というか柔らかさが見て取れそ
うな肌の……

って、あれ？ ロロナの様子が……？

「ぐはっ……!？」

「ロロナ!？」

まるで射抜かれたかのように胸を両手で押さえ、そのままソファーに横向きに倒れてしまった。

「ち、違う……これは、太ったんじゃない。太ったんじゃないの………そう。これ結構前に着てたのだから、太ったんじゃないくて成長してサイズが合わなくなっただけなの……！」

やっぱり、『パイ』は別腹！なんて言って沢山食べちゃうロロナでも、女の子はそういうことを気にするんだろう。

胸にやっていた手をいつの間にか顔へとやって覆い隠してしまっているロロナ。横に倒れて、顔を隠してぶるぶると震えている姿は……うん、何もいうまい。そもそも僕が指摘したからこんな状態になっちゃったんだもんね。

なんとかフオローをしたんだけど、ちよつと見てると顔が熱くなりそうな「ムチツと感(弱)」はくつがえりそうもないから……ここは、ロロナが言っていることから何か突破口を……！」

「あつ……！」前に着てたの「らしいけど、どれくらい前から来たたの？」

「……師匠を探す旅に出る前くらいから」

「6年以上前じゃない……着れてるのがすごいくらいだよ、それは」顔をとおっている手の指を広げ、その指の間から目を除かせて「本当？」と不安そうに聞いてくるロロナに、僕は頷いてみせた。

「でも、なんでそれから買い替えてないのかが気にはなるんだけど、何か理由が……？」

「ええつと、旅は持つて行って着替えたりする余裕はないから……。街に帰ってきてからはアトリエにトトリちゃんがいることが多いからね、トトリちゃんが忙しそうに調べてそのままの格好で寝たりしてするのに、私だけ着替えるのもなあ……って思っただけ生活してたら……」

「パジャマを着ない生活がしみついちゃった……ってこと？ 確かに、錬金術はものによっては調合に凄い時間がかかるし、仕事が増えるとなおのことヒマが無くなっちゃうもんね」

それはわかった……けど

「じゃあ、なんで今日はわざわざ引っぱり出して来たの?」

「元々ゆったりとした服だったし、ちよつとくらい大きくなつても着れるかなーって。……いけると思つたのにー! うわーん!」

「やっぱり、単純に成長しただけっほいし、気にしなくていいと思うんだけどなあ?」

それに、「着れると思つた」ってだけっていうのは理由としてはなんだかちよつとズレてる気も……お気に入りだったパジャマを引っぱり出してくるくらいお泊まりに気合を入れて臨んでたつてことなのかな?

とにかく、コロナが落ちつくまで時間もあるだろう。その間にやることをやっておこうかな?

「それじゃあ『離れ』に行く準備で、家の戸締まりこつちをしてまわつてくるから、コロナはちよつと待っててね」

「うん………うん?」

……?

ソファーに横たわっていたコロナが、腕をつつかえ棒にするような形で上半身を少し上げ顔をこつちに向けて不思議そうな……かつどこか悲しそうな顔をしていた。

「横にはなつちやってたけど、私、まだ全然眠くないから大丈夫だよ……?」

「ああつ、そういえばまだ言つてなかったっけ? 色々あつて、今日は僕も一緒に『離れ』で寝ることにしたんだ」

「えっ?」

「今日は本当に寝ちやうまで、ずーつとお話しできるよー!」

「えええー!」

離れ

どれくらいマイルス君とお喋りしたんだろう？

お布団に入る前も、入ってから。最近あったお祭りのことや普段の食事のこと、本当に他愛のないお話もした。状況が状況なだけになりドキドキしながらだったから、半分くらい右耳から左耳へとそのまま通り抜けちゃった気がするけど……仕方ないと思う。

とりあえず……もう、『青の農村』のどこもかしこも寝静まっちゃうくらいの時間にはなっているはず……日付がかわっててもおかしくない気がする。

私が寝てるベッド。

そのすぐ隣の床に敷かれた布団にはマイルス君が。

「くう……くう……くう……」

そして……そのマイルス君はついさつき、私よりも一足先に眠ってしまったところ。

私はゆっくりと自分の布団から抜け出して……ベッドに腰かけるような姿勢になってから、そのままの流れでベッドの隣のマイルス君の布団へと足をおろしていく。

「そろり……そろり……」

音を立てないように、マイルス君を起こしてしまわないように、私はおりていき……ししてそのままの流れでマイルス君の寝ている布団の中に潜り込んだ。

「ね、寝てる……よね？」

布団に潜りこんでから、改めて寝てしまっているマイルス君の顔を見た。

……うん。無事、起こさずに潜り込むことができたみたい。

くーちゃんとおんな話をしたからじゃないけど……こんなことしちゃって、ちよつと大胆過ぎたかな？

でも大丈夫、大丈夫なはず。そう、これはわざと潜り込んだわけじゃないんだもん……。

「寝相が悪くてたまたまベッドから落ちちゃったんだから、それならしかたないよね……？」

唯一そばにいるミス君が寝ている以上、私自身以外られにも聞かれることも無い言い訳を、あえて自分に言い聞かせるように呟く。

布団の中で伸ばした左手が何かを探し当てた。ゆっくり、優しく触ってみる。

……これは右手、かな？

その手を握り……ふとある事を思い出した。

「……なんでだろうね？」

初めて一緒に採取あに行った時、何気なく繋いだり、一緒にバンザイをして喜びを表すためにちよつと無理矢理掴んだこの手を……今はこうして「大好き」だと思ってる。

ついこの前あ、何度伸ばしても中々触れられず、結局自分から握ることの出来なかったこの手を……今もこうしてドキドキしながら握ってる。

「変だし、わかんないけど……ふふ」

でも悪い気はしなかった。

ただミス君のことを考えるだけで胸が苦しくて……

手に触れるだけで顔から火が出るくらい熱くなって……

そうしていくだけでなんだか私のどこかが満たされていくような

気がしてた。

気づけば空いていた右手を布団から出し、寝ているマイルス君の頭をそつと撫でていた。

そして、そのままゆつくり頬へとおろしてき……

「おやすみ、マイルス君——ゆつ」

朝……なんだと思う。

鳥の声が聞こえるし、視界のはじに見える窓の外はカーテン越しでもギリギリわかるくらいには明るかった。

けど……

「しゅぴ〜しゅぴ〜………まいしゅきゅー……ん」

僕の視界の下半分はほぼ薄桃色。少しだけ濃いピンクのリボンも見える。

上半分の大半は……何の色なのか、というか何なのかは考えたいけない気がする。……考えてしまったら、僕が主に精神的にマズくなる。

「しよこふあ〜、めー……うみゆう……えへへえ」

それにしても……冒険の時の野営じゃあそんな印象は受けなかったけど、ロロナって寝相が悪かったりするのかな？ じゃなきや、こんな抱き枕にするみたいに抱きついてきたりはしないと思うんだけ

ど。

ああ、いや、でも寝相が悪かったらアトリエのあのソファで寝るなんて無理だろうし……？

「ん、んんっ……ふひゅう……く〜」

……これ以上は……うん、流石に……。

どうしたら……あつ、だけど、コロナが起きてないなら別に少しくらい良いんじゃない？

少しくらいなら、バレないよね……？

「モコー……」

こうして、僕は『変身』することで何とか抜け出せた。

でも、なあ……。

冒険者ギルド

「くーちゃん、どうしよう……」

「朝っぱらから、そんな辛気臭い顔して……どうしたのよ」

「ミス君が顔を合わせてくれなくなったのっ！ 私どうしたら……!？」

今にも声を上げて泣き出しそうなコロナを前にして、頭を抱えるクーデリア。

「やっぱあたしも一緒にいた方が良かったのかしら？」

時すでに遅し。もう後の祭り……ではないかもしれない。

『カレ』と『彼』

『カレ』は、ただあてもなく歩いていった。

もとより、そこら一帯には何か目印になるようなものも無いため、そんな状況で自身が何処へと行っているのかが分かるのであれば大したものであろう。

白く、白く……どこまでも続いているのではないかというくらい「白に囲まれた空間」。前も後ろも、右も左も、ついでに上も下も白く染まっている。

そんな空間なのだ。『カレ』自身、自分がどちらのほうから来たかなど憶えているはずがない。

……いや、『カレ』は憶えようとするだけ無駄だということを知っていたのだ。

そもそも、『カレ』はこれまでに似たような場所で似たような経験をしたことがあったのだ。

日常の最中さなか、この『白の空間』に迷い込み……そしてまた別の場所へと行く。

望もうとも望まずとも「白の空間」に迷い込んでしまった以上、何処かへと続く『穴』を見つけ、そこへと身を投じなければならぬ。

『カレ』は『白の空間』をそういうものだとして認識していた。

そう、初めてじゃないはずだった。

どれだけ歩き続けただろうか。

ほんの数分間だったかもしれない。だがしかし、『カレ』にとっては一日中歩き続けた気さえた。

『カレ』は未だ『穴』を見つけないことができずにいた。

正確には見るけることはできていた。それも複数個密集したもの

を。

その『穴』たちは、まるで大きな何かを通つた後、徐々に閉じて行き複数個に分裂してしまつたかのようで……事実、よくよく見てみれば本当にゆーっくりとした速度で縮まっていつているのがわかる。

見つけたにもかかわらず、『カレ』はその『穴』からは出ようとはしなかつた。

『カレ』の感覚器官が「大きな水」を感じ取り、本能が「その『穴』には入ってはいけない」と警鐘を鳴らしたからだ。

故に、『カレ』は他の『穴』を探すべく歩き続けたのだ。

しかし、歩けど歩けど『穴』は中々見つからない。以前迷い込んだ時には逆に「どれにしよう？」と悩んでしまうくらい沢山あつたと『カレ』は記憶していたにもかかわらず見当たらないのだ。

もしかすると、このあたりはそもそも『穴』の数が少ないのかもしれない。

何かが違う。

『カレ』はそう感じていた。

『白の空間』が距離感や時間感覚・方向感覚があてにならない空間だということにはわかつていた。だが、それにしても勝手が違い過ぎる。

『白の空間』が本当に以前までと同じ『白の空間』なのだろうか？

実は違うどこかなのではないだろうか？

ふと『カレ』は思い出した。

「違う」といえば『白の空間』に迷い込む少し前から違和感を薄々ではあるものの感じていた、ということ。そう、何かが違ったのだ。いつからか鼻や口から入ってくる空気も、毛を揺らす風も、すれちがうモノタチも……何かが違った。

しかし、『カレ』には「何かが違う」ということはわかつて「何が違うのか」というところまではわからずじまい。結局『カレ』はその違いを理解する前に『白の空間』へと迷い込んでしまい、考えようが

無くなったのだ……。

何故？ どうして？ 何が？ どういうこと？

疑問が尽きることはなかった……だが、『カレ』はそう思い詰めたりすることは無かった。

立ち止まり呆然としていても何も進展しないこともわかりきっていることだ。故に『カレ』は歩き続けていくだけ……。

そうして歩き続けた『カレ』は新たな『穴』を見つける。

先程見つけた『穴』のような危険性は特に感じられず『カレ』はその『穴』に入ることにした。

その先で何が待っているのか、それは当然『カレ』にもわからないが……だからといって一步踏み出さないわけにはいかなかった。

ただただ一生懸命生きてその命の限りを尽くすことが自分たちに許されたことなのだ、と『カレ』は理解していたから……。

『カレ』は知っているつもりだった。

世界は温もりと優しさだけでなく、悪意と危険が渦巻いているという^{ぬく}ことを。そして……それとは別に「理不尽」というものもあるという^{ぬく}ことを。

獣は力を弄び、欲には抗えず、己の領域に固執するものなのだという^{ぬく}ことを。

人は未知を嫌い、真を見ようとせず、異分子を廃するものなのだという^{ぬく}ことを。

だから恐れ、恐れられるのだと。

『カレ』がそれをどこまで理解していたのかはわからない。だが、痛みと寒さの中で自分を傷つけたモノタチに「未知からくる恐れ」では

なく「体験を持つての恐れ」を抱いたことは間違い無かった。

あたたかい……。

覚醒しきれない薄ボンヤリとした意識の中で、『カレ』は様々なモノを感じ取っていた。

触れられ、握られ、抱き抱えられた感触を。ガタガタゴトゴトと揺れる音と振動を。薫る空気かおと流れる風を。そして……段々と「いつも通り」に近づいていく何かの感覚を。

そして、『カレ』のそばにいる『誰か』の匂いが二、三度変わったころだろうか？

『カレ』はまるで元に戻ったかのような感覚になったのだ。

だからこそ、『カレ』はまた深い眠りに入ることが出来たのであった……。

『カレ』が目覚めたのは、果たして『カレ』がココに連れてこられてからどれほどの時間が経ってからだだっただろうか？

目覚めた『カレ』の目に真っ先に入ってきたのは、自分が知っているのとは少し違うモノたち。自身のことを襲ってきたモノたちとも何かが違う。

しかし、見た目での問題だが、記憶的にはごく最近に襲ってきたモノたちとよく似た存在。どうしても『カレ』はモノたちかれらを恐れ、少し怯えてしまう。

そして……目覚めてから少ししたころ、一人の人が『カレ』の前に現れた。

相手は人である。『カレ』は周囲のモノたちかれらに対して以上に人を恐れていた。故に、『カレ』は先程までとは比べ物にならないほど怯えきってしまう。

そう……ある感覚があるにもかかわらず、そのことが頭の中から抜け落ちてしまうほどのパニック状態に内面ではなっているのだ。

その人は困ったような……それでいてどこか苦しそうな顔をして、その場から去っていった。

その数分後、『カレ』の前に『カレ』と同族のモノが現れた。

だが『カレ』はそれを喜んだりはしなかった。喜べなかった……というよりは、喜ぶ前に混乱してしまった、と行ったほうが正しいのかもしれない。

『カレ』は感じ取っていた。その同族の匂いが、先程来た人と同じ匂いだということ。その匂いは別に嫌いではなかったのだが、人と同族の匂いが同じことに頭がついて行けず、『カレ』には呆然とするしかなかったのだろう。

それからというものの、同じ匂いのする人と同族は、『カレ』の療養している場所によく顔を出すようになっていき……『カレ』の怯えも段々と弱まっていった。

恐怖心が拭えきったわけではない。だがしかし、ココには自分を襲ったモノタチや人と同じ種族はいるが、襲ってくる奴らはいないということ。『彼』はりかいしだしていたのだ。

そして、それとほぼ同時期に『カレ』はあることに気がつくこととなった。

その人が『カレ』の前に現れたあの時、『カレ』が感じていたある感覚……それがなんなのか、を。

懐かしい。

ああそうだ。これは、この匂いは……

彼だ。

昔、あの子と一緒にいて……あの子が泣く原因になった彼だ。

ロロナ【*9—1*】

【*9—1*】

マイスの家・作業場

あたしがマイスあいつに用があつて家を訪れていた昨晚。突然訪れたロロナ勘違いとか色々がなんだかんだあつて「お泊まり作戦2ツ」とやらを実行するとか言い出した。

それで、あたしは「朝一で仕事があるから」という建前てんぜんで、ロロナ天然とマイス天然の二人の事が心配になつてはいたけど一応空気を読んでマイスその場の家から退散した。

……で、よ。

今朝。『冒険者ギルド』で受付の仕事をしていたあたしのもとにロロナが一人で来た。「マイス君が顔をあせてくれなくなつたのっ！」とか「嫌われちゃつたんだー!!」とか涙目で言い、縋すがりついてきた。だから、今日は特別仕事が忙しかったりしなかつたあたしが、マイスの様子を偵察みにいくことになつた……つてわけ。

……まあ、そんな役割を引き受けたのは「ロロナの頼みだったから」とか「元々、二人のことに首を突っ込んでたから」とかそういうのもあつた。

あとは、一応はロロナたちの事を考えてであつたとはいえ、自分は帰るつていう選択をしたが故にその後何かあつてしまつたとなつたら、ちよつとは負い目を感じたりもしたつてこと。客観的に見ればあたしの何が悪かつたつてわけでもないでしょうけど……でも、あたし自身が「二人の為に何とかしてあげられるならしてあげたい」つて思つてるのは事実なわけで……。

……と、とにかくっ！ 色々思うところもあつてこうして『青の農村』までマイスあいつの様子を見に来た。

んで、畑の様子を見ても、ちゃんと一通りの世話は終わらせている

様子で、コロナとは違って、マイスのほうは別に仕事が手につかなくなつてるとかそういうことは無い「いつも通り」っぽい。やっぱり、何かあったとかコロナが何かしでかした……っていうより、またコロナの勘違いとかそこからくる認識の差で何かあった程度のことなのかしら？

そう思つて、またマイスの搜索を再開し……マイスを見つけたのは『作業場』の『炉』のそばだった。

鎚を何度も振るつて、何やら武器を作つてるみたい。

『炉』から漏れ出る煌々とした光に照らされながら、加工している金属へと目を向けているマイスの姿は、予想してたいつも通り……

カンッ！ カンッ！ カンッ！

いつも、通り……の……

カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！

ドンドン作られていく様々な種類の武器。『鍛冶』の腕を磨いているにしては種類がバラつき過ぎ、どこからか依頼されたにしてもいくらなんでも多すぎる武器たち。

カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！

カンッ！ カンッ！ カンッ！

「……これは絶対何かあったわね」

あたしがそう確信を持つには十分過ぎる状況だった。

金属を鍛えるにしても、叩き過ぎな気がするくらい……なんていうか、こう……一心不乱？ 一見乱雑にも見える作業光景だけど、それでも作りだしてる武器はあたしの目で見た分には一級品なのは、流石と言うべきかしらね。

まあ、なにはともあれ、マイスには一旦作業をやめてもらわなきゃいけないんだけど……

カンッ！ カンッ！ カンッ！

「これ……どのタイミングで止めればいいのかしら？」

「あはは……ごめん、ちよつと集中しすぎちやつたみたい」

「ちよつと」って表現は適切じゃない気がするけど……まあいいわ」

名前声をかけてもを呼んでも気付かれなかったから、大声を張り上げる——つていうのも少し気が引けたため、材料に伸ばした手を叩はたいて物理的に気付けさせることになった。……別に、ワザとでは無かったとはいえ無視されたのにイラついた、とかそういうのじゃないから。

「そうね……」

「？」

謝つてた最中もそうだけど、今のマイルスもどうということのないつも通りな感じではある。けど、『鍛冶』してた時の様子には違和感があつたのは事実だし……。

とりあえず、探りを……つてしてもいいけど、マイルス相手に回りくどいこととしてたら時間がいくらあつても足りなくなりそう。なら面倒だしいつそのこと「コロナと何かあつたの？」くらい率直に聞いてみた方がいいかもしれない。

「話つていうのは、昨日のことなんだけど……」

「昨日？　もしかして例の「新種のモンスター」のことで何か新しい情報でも入ったの？」

「そうじゃなくて、ロロ——「うえっ!？」——ナの……」

……待つて。何、今の。

今、あたしとマイルスは対面してるわけなんだけど……「コロナ」の名前の名前を出した時点——というか「ろ」の音が連続であたしの口から出たあたり——で、変な声をあげた。その顔は、真っ赤とまではいかないけど朱色に染まってて、表情自体は照れ笑いに近い何か……かと思えば、急に涙目になったりとコロコロ変わっていた。

コロナもデレデレし過ぎてる時もあったりするけど、「マイルスが」つてだけでなんていうか、こう、一気に有り得ないものを見た気がして

くる。やっぱり普段の様子之差かしら。

というか、「何かあった」とは思ったけどマイスのこの反応、まさかとは思うけど……いやいやっ、あのマイスよ？ そんなことあるわけ……

「コロナからちよつと話を聞いて来てみたんだけど……何かあったの？」

「何かあったりはしてない……わけでもないような、そうでもないような……？」

「はあ……誤魔化そうとしても誤魔化しきれないあたり、あんなマイスらしいっちゃらしいけど」

とりあえず何かあったことは間違い無いみたい。

それも——マイスの様子からして、あのマイスがそういう意識をしてしまうくらいの何かだ。

「とにかく何かあったのか話してみなさいよ」

『冒険者ギルド』に来た時にコロナから「何をしたのか」はすでに聞いている。その話から、どうしてマイスがこうなったのかは予想出来なくも無いけど正直決め手に欠けてた。もしかすると、コロナが憶えてない何かがあったのかもしれないし、マイスのほうから何か聞ければ確信も持てる。

まあ、マイスが「コロナを異性として意識してること」を素直に話せばなんだけども。これだけ顔真っ赤にして恥ずかしそうにしてるなら、話してくれそうもない気がプンプン……

「えっと、その……実は——」

……話せるの？

マイスから聞けた話は、コロナの言ってたことと一部を除いてほぼ同じだった。

マイルスが『離れ』から戻って来たら、ロロナがサイズの少し小さめのパジャマに着替えていたこと。

「ただ、マイルスは「見てはいけないものを見てしまった気がする」と呟いていた。受け取り方によって印象がかなり変わる言葉だけど、顔を一層赤くして言っていたから……まあ、そういうことだったんだと思う。あたしもちよつと見てみ——」

あと、あたしが冗談半分に言た、『離れ』で一緒に寝るということ。このあたりは二人の言っていたことにほぼ違いは無かった。ロロナはマイルスの申し出に驚いたらしいけど、マイルスのほうはといえば、あたしが言った時がそうだったように楽しそうだから程度 of 感覚だったらしい。

そして……二人の間で話が大きく違っていたのは寝た時・起きた時の話だった。

その要因は「どっちが早く寝付き、どっちが早く起きたか」ということっぽかった。今回の場合、寝るのも起きるのもマイルスのほうが早かったみたい。

夜、マイルスが先に寝てしまってからロロナがマイルスの布団に潜り込んでから手を繋いで……朝、マイルスが起きるとまだ寝ているロロナに手足でガッチリ抱きしめられてたそう。なにそれうらやま……けしからん。

……と、まあまとめるとそんな感じの話だった。

納得できなくはない……けど、聞いている内に疑問を感じてしまったのもまた事実だったりする。

第一、マイルスがロロナの事を意識するきっかけも薄い——常識的に見ればアレだけど——気がする。

そもそも、ロロナとマイルスって、昔から何処かの誰かさんが心配したりするくらいには距離感が近い。出会った「王国時代^{初期}」から冒険中に手を繋いだりとか抱きついたりとか、そういうスキンシップは普通にあった。ここ数年はロロナのほうが大人として自覚が出てきたの

か……はたまた、対象がミスよりもトトリとかソツチへとむいていたからか、少し付かず離れずといった感じの時期もあるにはあったけど。でも、ミスのほうは、今も昔も変わらず自分からスキンシップをしたりするほど積極的ではないものの、そこまで拒んだり照れたりすることもなかった印象がある。

それに、服装変化のロロナのパジャマ姿程度で反応を示すか、っていうのも……ああ、いやでも「見てはいけないものを見てしまった気がする」って言ってたわけだし、少なからず影響があったのは確かではある。

でも、そんなのだったら『アランヤ村』であった『水着コンテスト』の水着姿の時にもっとそういった反応があってもおかしくなかったんじゃないか？って気もする。

そして、最後に……

「はあ……………」

話していくにつれて段々と落ち込みだしたミス。

……………って、何ですよ!?

「どうしたのよ?」

「いや、ね。僕って最低だなんて思って……………」

「……………は?」

顔を伏せ気味にして神妙な顔をしたかと思えば……こいつミスはいきなり何言いだしてるのかしら?」

「まあ、色々は無茶苦茶で周りを振りまわしたりすることがあるのは否定しないわよ? でも、それであんたが最低な奴だって言いだしたら、世の中、どれだけの人が「最低」になると思ってるの?」

「そんなこと無いと思うけど……………? 僕はロロナのことを……………ううん、ちよつとドジなところもあるけど、昔から良い娘だったって思ってるよ! でも、その……………そ、そういう目で見ちゃってるんだよ?」

「……………確かにそういうのは、あたしとしてはコメントし辛い部分ではあるわね。でも、そのくらいミスあんたくらいの年頃の男なら、好きな子相手にはそのくらい普通じゃない?」

面と向かつては言えないけど、今の今までそういうことが全く無かったことのほうがおかしいんじゃないかって気さえする。というか、あたしとしてはコロナを意識しだしていることに確かに驚きはしたけれど、逆に安心感もおぼえたくらいだし……。

けど、当のマイスはあたしの言葉を聞いてもなんだか納得できていない様子。一体、どうしてそこまで自分が持った好意を卑下するのかしら？

「でも……やっぱりコロナに悪いよ」

「悪いって、何がよ？」

「だってさ——」

——コロナにとって僕は「友達」兼「弟分」であって、それ以上ではないじゃない」

ニツコリと、でもどこか悲しそうな様子で笑うマイス。

そんなマイスの表情を見て、言葉を聞いて、あたしは——

「そんな相手に好意を向けられてもコロナも困るだけだよ。それに……僕は、お祭りとか学校とかみんなで色々して賑やかに騒いでいる今で、十分幸せなんだ。それをモヤモヤしたよくわからない気持ちで壊しちゃうなんてこと、絶対したくないよ」

——「アホがいる」、そう思った。

いや、だって……ねえ？

本人は大真面目なんだろうけど、色々間違えてるっていうか絶妙にすれ違ってしまったてる。それを差し引いたとしても、根本的に考え方がひど過ぎる気がしてならない。

けど、そう思いながらも、実際はあたしの頭の中では「カチリッ」と何かがつっかりと噛み合ったような音が鳴っていた。

冒険にも出かけたり、なりゆきとはいえ農業で一から村を起こしたり、毎月のように様々なお祭りを企画したり……世間一般のミスへのイメージって、「活発」だったり「挑戦的」や「好奇心旺盛」などといったものを思い浮かべがちだと思う。

けど、あたしは「実は違うんじゃないか？」って前から思ってた。た。

そして今のミスの話で違うって……それだけじゃないんだ、って確信した。

ミスは結構「臆病」^{怖がり}なんだと思う。特に、拒絶されることに関しては人一倍に。

例えば、『ハーフ』であることをコロナをはじめ、周りの親しい部類の友達にも中々明かさそうとしないのも、そういうところからきているんじゃないだろうか。

「今のままでいい」、「関係を壊したくない」……いつも柔らかな笑みを浮かべていて頭の中がお花畑な印象さえあつたりするくらいお気に見えさえするミスだけど、案外、そんなネガティブなことを考えていたなんてこともありえなくはない。

ああ……でも、どうだろう？

いつもではなかったのかも？ 本人の自覚がどこまであつたかは定かじやないけど、今日がそうだったように他の事に没頭することでネガティブな考えを頭の片隅に追いやっていたのかもしれない。

それに、コロナへの気持ちにだって、聞いているだけでも感じた事はある。

「友達だから」、「弟分だから」って言ってるけど、それはあくまで「ミスの想像したコロナの都合」であって……ミスの本心は、いつこうに言えない『ハーフ』の件で負い目があったり、不安があるから……なんじゃないかってあたしは予想できた。

まあ、そもそもコロナへの好意を「モヤモヤしたよくわからない気持ち」なんて言ってるあたり、自分自身でもコロナに対して自分が抱

いている意識を理解しきれてない可能性も十分あり得るけどね。

……つまりマイルスは、ただの「活発・天然・鈍感・純粋青年」なだけではなく、「ネガティブ」だとか「実は演技派」といったものを足したくらいだったりするのかもしれない。

そう考えると、恋愛事（そいうの）に全く興味無しに見えて、実は頭の片隅に抑え込んでるだけで普段から色々妄想とかしてたり……けど、それでも異性（あたし）に対して異性（こういうこと）への想いをこうもペラペラと話せはしないだろうし、それはないか。

「……結局、わかったようでもわかんない所も結構増えた感じね」

「えっ？」

「気にしないで、コッチの話だから」

確かなのは、マイルスが色々こじらせちゃってて、面倒くさいってこと。

今はそれをどうにかするかして、コロナとの関係を修復させること、それが最優先事項よ。

とは言っても、正直なところマイルスが変に意識し過ぎちゃってるだけっぽいし……いつそのこと、このまま二人をぶつけさせるくらいの勢いで再会させたら手っ取り早いんじゃないかしら？

きつと、この調子だと、本人同士が知ってないだけで互いに好意自体は抱いてるわけだから、マイルスのほうに少し気をつけとけば結構スムーズに行くと思うんだけど……。

しかし、なんとなく一筋縄ではいかない気がして、あたしは気付かないうちにため息を吐いてしまっていた……。

職人通り

「あれ？ どうしたんだろ？」

ちよつと用があつて出かけてたんだけど……先生のアトリエへと帰つてると、そのアトリエの前でちむちゃんたちが何やら集まって会議をしていた。

うーん……この距離で聞こえないってことは、結構小声で話してるみたい。

私もちむちゃんのをばまで寄つて、しゃがんでから小声でちむちゃんたちに声をかけた。

「ただいま。どうしたの、こんなところで。なんで中に入つてないの？」

「ちむ？」

「ちむーむー」

「ちちむく」

「ちむつち」

ふんふん、なるほどなるほど……。

「アトリエの中の空気がなんかいつもと違ったからいられなかった？」

なんだろ？ またコロナ先生がボケーってしちゃって、調合に失敗したり変なモノでも作っちゃったのかな？」

よくわからないけど、とりあえず入ってみないとわからないよね……。

でも、毒とかガスとか危ないものが充満してる可能性もあるし、いちおう安全確認をしながら慎重ゆっくりとに入つていかないとかな？

「よしっ」

私は入り口の扉をゆっくり慎重に少しずつ開けていき、まずは隙間から少し覗く程度で見てみる。

……………。

正面方向にある釜は……使われてないみたいだし、爆発とかの痕跡も入り口からじゃあ確認できない。なんともなさそうなんだけどなあ？

じゃあ、いったい何があったんだろ？

とりあえず毒やガスといった危ない物の気配はなさそうで一安心し、本格的に調べようと思って、アトリエに一步踏み込むためにいつも通り扉をしつかりと開けようとし――

――何かが倒れ込むような音を聞いて、その手を止めた。

聞こえてきた方向は入り口から見て左手のほう。いきなりのこと
に驚いちゃいながらも、私はゆっくりと隙間からソツチのほうを覗き
……………見えた。

ソファア。

そこにおそらくは仰向けに寝転ぶような体勢でいるんだろうロロ
ナ先生。

そして――

まるで押し倒しているかのよう、ロロナ先生
の上に覆いかぶさるような体勢でいる独特な服装の誰か……いや、あ
れってどう見てもトリスタンさん……………

ヒュッ

私の心臓か何かが、どこかわかんない所へ引落ちていくつ込む感覚と幻聴が
あつて……私は静かにかつ素早く扉を閉じた。

息をするのも忘れてしまいそうで……でも、視線を感じて、視線を斜め後ろやや下へと向ける。すると、私の事を見上げてきてるちむちちゃんたちと目があつた。

……タイミング的に、ちむちちゃんたちが何を見たのかはわからない。でも、わたしは無言のまま、視線と身振りジュエ手振りチャーでなんとかちむちちゃんたちに今の気持ちを伝えようとする。

「……………」

(むり、あだるてい、わたし、わからない)

「「……………」」

ちむちちゃんたちの返答は、無言のブンブン首振り。

どうしろっていうの……!?

ロロナ【*9—2*】

【*9—2*】

ロロナのアトリエ

「うー……うー！」

朝、クーちゃんのところに駆け込んでからどれだけの時間が過ぎたか……よく憶えてないけど、すーっごく経った……わけじゃないっばい。

まだお昼にもなつて無いはずなのに、一日くらいアトリエの中をウロウロしちゃってるような気がする。

「クーちゃん、遅いなー。やっぱり、マイルスが怒ってたりしたのかなあ？」

私の話を聞いてくれた後、すぐにくーちゃんはマイルス君の様子を見て『青の農村』へと行ってくれたんだけど……未だに街こまちに帰ってきてないみたい。

いや、まさか、帰ってきてても私のところに報告に来てくれないとか、そんなこと無いよね……？　ちゃんと、マイルスがどうしてたかとか、教えてくれるよね!？」

「うーん。色々心配だし、やっぱり一緒に行つてたほうがよかつたんじゃない……でも、マイルスが私を避けちゃつたら会えないかもだし、こそこそ隠れてついでに行つてそんな所をマイルス君に気付かれちゃつたら、いつそう嫌われて顔を見てくれないどころか何にも喋つてくれないくなるかも!？　そんなことになったら、私……!」

絶対、立ち直れなくなっちゃうよ……!!

逃げられたりしないように不意打ちで目の前に立って、それで真っ先に謝つて……でも、謝るついでに……なんでもマイルス君が顔あも合んわせなて風くれなくなつたのかはわかんないままなんだよね……。

理由もわかってないまま「とりあえずで謝る」なんてことしたら感じ悪い気がするし、それこそマイルス君を怒らせちゃうかも。

きつと、私が何かマイルス君を怒らせちゃうようなことをしちやっただんだと思うけど……

「もしかして、私、イビキがうるさかったりしたのかな？」

「前に野営した時に聞いた限りじゃあ、ロロナの寝息は静か……というか、かわいらしかった気がするけど？」

かわいいかどうかはわかんないけど、これまでにそういうことを指摘されたりしたことは無いのは無いからなあ。

「それじゃあ、寝相が悪くて寝てる間に蹴っちゃったとか……言われたこと無いけどなあ？」

「そうだね。良かったとも言えないけど、それでもそんなに激しくは動いたりしてなかったかな」

まあ、そんなに動いちやうなんだたらアトリエアトリエのソファで寝てた時に、床に転げ落ちちやうよね。そんなことがあつた記憶は無いから、やつぱり「寝相が悪くてー」ってわけじゃないかあ。

とすると、あとは……

「ああっ!! マイルス君と一緒に『パイ』作って食べる夢てたから、寝ぼけてマイルス君のこと齧かじっちゃった!？」

「本当に齧かじってたかどうかは知りようがないけど……とりあえず、夢でも君に見てもらえてる彼にちよつと嫉妬しちやうかなあ？」

ううくん？ 私の歯形っぽいのは、マイルス君のどこにもついてなかったと思うんだけど……まさか、よく見れなかった顔に？ 例えれば、顔の中で噛みつきやすそうな鼻、とか？

……………。

……………？

……………っ!?

「ええっ!?! だっ、誰え!?!」

「誰って、顔も忘れられたとなると流石に傷つくんだけどな」

そんなことを言っただけで肩をすくめてるのは——さっきまで独り言だった私の呟きに答えてた人——いつの間にかアトリエに入ってきたタントさん。……って、ホントいつの間に入ってきたんだろ……？

「で、どうしたんだい？　なんだか難しい顔しちゃってさ」

タントさんがそんないつも通りのかるい感じの口調で聞いてきて、私はちよつとだけ悩んだ。

とは言っても、今回はミス君に対して私が何か失敗しちゃったっただけの話だし、別にそんな隠すことでもない気もする。だから、だいたいは話しちゃうことにした。

「実は——」

「——ってわけで、今はくーちゃんが様子を見に言ってくれてるんです」

「ふうん……」

私の話を聞いてたタントさんはあごに指を当ててなにやら考えるようなそぶりをした。

……バレて、ないよね……？

なんで私が悩んでたのか、っていう話はした。ただ、「ミス君と一緒の布団で寝た」ってことは流石に話さないでおいた。だって、私としてはまんざら……別に悪くはないんだけど、噂なんか立つちゃったらミス君に迷惑かなーって。

……嫌がられたら、それはそれで私がキツイし……。

とにかく、言っていないから大丈夫なはず。

……でも、何か忘れちゃってるような、見落としたりしちゃってるような……？

「ねえ。クーデリアあに行ってもらったのって、朝の結構早い時間だったんだよね？」

「えっ、あ、はい。そうですね……？」

「何かあったっけ？」って考えているところにタントさんから声をかけられて、ちよつと慌てちやいなながらも返事をする。

「移動時間を考えると、まだ帰ってこないっていうのもあり得なくは無いけど……案外、『青の農村』でマイス彼とのんびりお茶でもしちやつてたりするんじゃない？」

「のんびり、お茶……？」

「ほらっ、あの二人って何だか言って相性ピッタリに見えない？」

二人でいることも多いし、なんていうか「気の置けない仲」って感じ」

た、確かにっ！ 昨日もそうだったけど、マイス君のところに行ったらクーちゃんもいた、ってことは昔から時々あった気もする……。

「はっ!? ま、まさか……!?」

クーちゃん、私がこうして悩すんでる際にマイス君を独り占めして……!?

マイスの家(妄想) by ロロナ

「うわーん、クーデリア〜！ ロロナが、ロロナがいじめてきた〜」

「はいはい、大丈夫よー。あの子が勝手に来ないようにアトリエで待っておくように言ってるから」

「クーデリア〜！ クーデリア〜！」

「さあ、嫌なことはお酒で忘れちゃいましょう。今日は多少飲み過ぎるくらいでいいわよ。心配しないで、もし酔いつぶれちゃってもあなたが責任持ってウチに連れて帰って介抱してあげるからねー？」

「クーデ……ううん！ クーちゃん！ 大好きだよっ!!」

「うふふふふ」

「ミス君が、盗られちゃう!?」

「お、おおお、落ち着いて私っ!! これはあくまで想像の世界の話で……!」

「そ、そうっ! だって、昨日くーちゃんが言ってたじゃない!」
「あたしはミスを狙ったりしてない」って!

「だから大丈夫。心配しなくて、そんなことには……」

「……って、あれ?」

「くーちゃん↓ミス君」はありえなくっても、「ミス君↓くーちゃん」は全然ありえるってこと? やだー!!」

「そうだよ!? ミス君がくーちゃんのことを好きになるってことは普通にあるんだっ! っていうか、可能性的には大きい気がする……。」

「だって、くーちゃんってカワイイんだよ? なんだかんだ言っって優しいんだよ? お仕事だっってイッパイできるし、戦っても強いし、色々知っって頭もいいし!」

「……あれ? なんか本当に有り得そうな気が……?」

「でもでもっ! ミス君って鈍感だし! 恋愛関係全然わかってなさそうだから! 大丈夫! ダイジョウブ……な、はず……」

「……ロロナ?」

「はっ!」

「い、今、どこまで口で漏れちゃった!? わかんない!」

「と、とにかく! 恥ずかしいし、勢いでも何でもいいから誤魔化して……!!」

「あの、これはーそのっ! 何でもないっっていうか、フリーちゃんの真似っっていうか——ひゃあっ!」

「いきなりなこと……なんて言ったらいいんだろう?」

ちよつと浮いたような……ううん、本当に浮いてたのかもしれない。

続くようにして、背中から何かにぶつかったような感触。そんな痛かったりしたわけじゃないけど、衝撃がポフンツって感じてあつて、身体の中の空気が一瞬押し出されちゃったような少しだけの苦しきも感じた。

「——やっぱり、って言うべきかな？」

ちよつとむせながらも、衝撃で反射的に閉じちやつてた瞼を開けて周りをみようとし……そこで手首辺りが押さえつけられたような感覚が……ううん、顔の横あたりで大きな手を置くような形で押さえつけられてる。

そして、目の前には——いつものにこやかな表情とは違う、鋭い目をしたタントさんが。

「目の前で話しても、隣にいても、なかなか僕だけを見ていてくれないのは分かりきったことだったさ。……でも、ロロナが一生懸命に打ち込んでる姿は僕も嫌いじゃなかったし、国を動かす側になって君の手助けをしたとも思つた」

えつ、どういう状況……？

あれ？ これはソフアー？ 私、今ソフアーに……？

「えつ、ちよ——」

「けど」

押さえつけてる手がギュッと閉じて握りしめられる。

「今のキミの『一生懸命』は彼に向けられてるんだね……。『錬金術』ならまだしも、ソレは僕には耐えられないよ」

「っ」

数秒くらい……かな？

そのくらいの間をあけて、右手を押さええてたタントさんの左手が離

れた……けど、その右手を私は動かせなかった。
動かしたかった。けど、動かした手をどうしたいのかが私自身、わからなかった。だから動かせなかった。
だつて……

「タントき——」

「……なんて、ね？」

スツつと、タントさんの顔が離れる。

その口元は笑つてたけど、目は髪型が少し崩れてしまつてるせいで目元まで長髪がかかつてしまつて、ちゃんとは見えなかった。

私が何か言うよりも先に、押さえつけてきてたタントさんの右手がクルリと向きを変え、優しく手を握り直してそのまま私の左手を引いて私の上体を引き起こしてくれた。

左手で自分の前髪をかき上げながら、タントさんは喋りはじめる。
「なんだか、こうやってコロナをからかうのも、随分と久しぶりに感じるね」

「もう、からかうつて……ホントにもう、タントさんはしかたのない人ですね。でも、それにしてもは乱暴すぎませんか？」

「ああ、ゴメン。久々過ぎて気持ち……いや、加減がわかんなくなつてたみたいだ。本当に申し訳ない」

私が口をとがらせて言うと、タントさんはいつもの調子で行つた後……大きく頭を下げ謝つてきた。

「……本当にからかつてたんですか？」

「……………そうだよ」

「涙、流してませんでした？」

「気のせいじゃないかな」

顔をあげないまま、私の問いかけに答えるタントさん。その顔は私からは全然見えない。

「そう、ですか？ うーん……私の勘違いだったならいいんですけど……」

「でも」と続けるよりも先に、タントさんが動いた。顔を上げて……でも、一緒になって反転したから、最後にちやんと私に見えたのはタントさんの後ろ姿だけ。そのままタントさんはアトリエの玄関口へと歩いて行った。

「ロロナ」

「……？ はい、なんですか？」

「ありがとう。それと……頑張れ。彼はキミのことを待ってると思うよ」

ノブに手をかけたところで振り返って……ちよつと変な笑顔浮かべてた。

「タントさん……やっぱり……ううん、違うよね？」

職人通り

『もしかして、私、イビキがうるさかったりしたのかな？』

悩むロロナの姿はとても愛おしく……そして、僕ではなく彼を案じてであるという事実が僕の奥底で炎をくすぶらせ……

『実は――』

悩み混じりに彼との思い出を語るロロナの笑顔がとても愛らしく……僕との思い出を語る時も同じ笑顔を見せてくれるのだろうか？
と考え、不安に胸を締め付けられ……

『ミス君が、盗られちゃう?!』

彼を想い、妄想で焦り慌てふためく姿は、好きな口ロナであるはずなのに、とてつもなく嫌いな「何か」であるように見えた。

「……ハア」

『っ』

僕の言葉に、驚き目を見開いた表情^{かお}。しかし、その奥に見えたものは――

僕はその顔をやはりというか、好きなものではなかった。

「あの表情も好きになれたら、また違ってたのかなあ……」

関係が好転するとは思えないのがまた笑えるところではある。僕自身はちつとも笑えそうにないけど。

『……本当にからかってたんですか?』

『涙、流してませんでした?』

あの時、彼女はどんな顔をしていたんだろうか?

「嫌われたくない」という気持ちもあるが、「嫌ってくれば、諦めようもある」と思っている僕がいる。

いや、それくらいの差は今更なんということもないだろう。そもそも、僕の中で大きく変わる時期があったとすればもつと前………ん?

「………」

「「ちむく……」」

「ロナの弟子の……あと、ホムンクルスの子たちか。どうかしたかい………って、聞くまでもない、か」

ちよつと赤くなっている顔色。警戒している目。手に持っている何かの薬品が入ったビンとあと爆弾。

最後のはひとまず置いておいたとしても……残りの要素からして……。
「もしかして、さっきのアトリエでのこと、見たり聞いてたりした？」
僕の問いに、一同はほぼ同じタイミングで頷いた。

「最初のほう何を話してたのかとか、途中の詳しい事情まではよくわからなかったんですけど……でも、ああいうのは、その……よくないと思います」

「ちむっむ、ちむー！」

「ちーむ！」

「ちむちー、ちちむっ」

「ちむちむー！」

「……まあ、その辺りは自覚もしてるから、さ。本当に許されるとは思ってないし、このまま許されようとは思ってないから、今はとりあえず目を瞑っててくれないかな？」

「む、むう……先生も一応許したっぽかったですし、先生が許してるのに私が勝手に何かするっていうのも、確かにおかしいですけど……でもっ」

「ちむ！　ちちむちむちっち！」

「ちむちーむっ！　ちむちーむっ！」

「そうだそうだ！　コロナが許そうとも、この私が許すはずが無かるうー！」
「ちむ!？」

「ちむみっ……む?」

何か、今、変な声が……

「えっと……ちむちゃんたちって、普通に話せたっけ?」

「ちむむ?」

「ちむ?」

「ちーむちむ?」

「ちちむっ」

いや、でもちっきの声はどっかで……………

「……………まやか!？」

ロロナ【*9—3*】

【9—3】

職人通り

「キイイ……」と扉の蝶番が軋む音がしたのは『ロロナのアトリエ』。そこから出てきたのは、つい先程までアトリエ内でタントリスと話していたロロナ。

そんなロロナは出てすぐに、通りを雑貨屋のある方面へと歩いて行くとしたが……その前に、とあるものが視界に入り彼女は足を止めた。

「あれ？ トトリちゃんにちむちゃんたちも……アトリエの前なんかでどうしたの？」

「ああ、先生！ ええつと……それは、その、色々あったというか……」

少し顔を赤くして慌てふためきながら答えるトトリ。

そんな弟子の姿を見て、ロロナは首をかしげた。すぐに答えを導き出せた某大臣ほどは察しが良いわけではないらしい。

「……つまり？」

「実は、ついさっきトリスタンさんに会ったんですけど……そのトリスタンさんがいきなり現れた女性に連れてかれちゃったんです」

「ちむっ、ちむ！」

ロロナとトリスタンのやりとりを覗いていたことなどは伏せ、言葉を選んだ末にそう発言したトトリ。そのトトリに同調するようにちみゆみゆみゆちゃんも頷いた。

「タントさんが？ 連れてかれたってことは、たぶんその女の人は国勤めの人なんだろうけど……またお仕事抜け出して来てたのかなあ？」

「「また」って……あの人、一応この国の大臣さんなんですよね？ 大

「丈夫なんですか？」

「あはははっ。大丈夫かどうかはおいといて、タントさんにはよくあることだから。トトリちゃんも気にならなくていいよー？」

「は、はあ……………あれ？」

「ええ〜？」といった様子で、呆れ顔で脱力したように肩を落としていたトトリだったが、不意にピタリとその動きを止めた。その視線はコロナの顔に定まっており、目を少し見開いてハツとした後、そのまま心配そうに顔を歪めた。

トトリがそうなった理由がわからず、コロナはキョトンとした。

「やっぱり……………？ あなのっ、コロナ先生」

「ん？ どうかした？」

「元氣、ありませんよね？ 無理してませんか？」

「えっ？」

トトリとしては半分、確信に近いモノはあった。

「異性から押し倒される」なんてことがあった後だ。最終的に一応は和解らしき状態になったとはいえ、流石の自分の先生も内心いつも通りにはいかないだろう……………そう思ったのだ。

それを裏付けるかのように、コロナの表情には普段の「明るさ」というものが欠けているようにトトリには見えた。だが――

「うーん……………？ そんなこと無いと思うんだけどなあ？」

当のコロナ自身は、自分がそんな状態だとは思っていないなかったため、トトリの言葉にわずかにだが首をかしげてしまった。

しかし、同時に「そう見られてしまった原因であろう事実」には彼女にしては珍しく心当たりがあったため、「けど」と言葉を続けたのだ。

「えーつとね、元氣が無いとか無理してないよ？ 確かに色々あってちよつとグチャグチャになってる気もしなくはないんだけど……………レシピ考える時よりも、いっぱい考えて、いっぱい悩んで……………こ

こらへんがキューってなって頭が痛くなっちゃいそうなくらい」
眉間のあたりを指差して、何故か「えへへっ」と嬉しそうに笑う口
ロナ。

「けどね……やりたいことは分かっているんだ。私は——マイ
ス君に会いたい」

ハッキリとした口調でそう言った後、口ロナは気合を入れるかのよ
うに両手でパシッツと自分の両頬を叩く。そして、そのままその手で
胸の前で握る拳を作った。

その眼は、先程までの柔らかな眼とは打って変わって、奥底にゆら
めく火が見えるかのような力のこもった眼になっていた。

「だから、行ってくるね！ トトリちゃん、悪いけどアトリエのことよ
ろしくっ！」

そう言うと、口ロナはそのまま駆け出して行ってしまった。

そんな口ロナの姿をトトリとちむちゃんたちは少々唾然としつつ
も見送っていた。

トトリとしては、内心冷静でもいられなくなっていつも以上に残念
な感じに口ロナがなっていると踏んだのに、思っていたよりも元気そ
うな姿に驚いてしまっていた。

だが、先程の口ロナの笑顔が、「天真爛漫」という言葉が似合う普段
の笑顔とは違っていたのも確か。全く何ともないわけでもなさそう
なのだが……それでも、しっかりと前を向いて立っている、歩いてい
るというのは……。

「大人の余裕……とはちよつと違うか。でも、先生も先生で色々考え
てて、それで一生懸命頑張ってるんだよね」

「ちむ」

トトリの呟きに、ちむまるだゆうくんが頷いた。

その返事を聞いてか聞かずか、トトリは短くため息を吐く。

「先生とミスさんがどうなるか、すつごく気にはなるけど……先生

に悪いよね」

「ちいーむ！　ちむ、ちちむ！」

「そうだよね。あんなカツコイイ目で「行ってくるー」なんて言われたのにコソコソ追いかけてくなんて、私には出来ないよ。だから……アトリエで待つとこっか？」

「「ちーむー！」」

そうやってトトリたちは留守番を任された『コロナのアトリエ』へと入って行く……。

「そういえばあの女の人、私に「弟子2号」なんて言ってきたけど……人違い、だよな？　初対面だし」

「ちむー？」

トトリの疑問に答えられる人はそこにはいなかった。ただ、ちむドラゴンくんが「さあ？」と首をかしげて……バランスを崩し倒れそうになるだけだった……。

マイスの家

所変わって『マイスの家』。その名の通り、マイスが住んでいる家である。

玄関を入ってすぐにあるリビングダイニング。そこには、家の主であるマイスと、今朝コロナに泣き付かれてマイスの様子を見に来たクーデリアが。

そんな二人が、いったい何をしているのかというと……。

「目え瞑った？　じゃあ深呼吸……吸ってー……吐いてー……」

「すう……………はあ……………」

「今、あんたの目の前には……………一緒にお喋りしたり、ゴハン食べたり、冒険したりする友達の内の一入のコロナがいるわ」

「……………っ！」

「……………」

目を瞑ったまま、落ち着いた様子だったはずのマイスの顔が「ポフンツ」という効果音が聞こえてきそうなほど、一気に赤く染まり……………二人の間に何とも言えない沈黙が流れた。

その沈黙に耐えかねたように、肩をフルフルと震わせていたクーデリアが、口を閉じ抑えこんでいた言葉を爆発させる。

「あ・の・ね・え？　ようやく意識するようになったかと思えば、なあーんであんたは名前出ただけで反応するくらい過敏になっちゃってるのかしら!？」

「ええ……………その、ごめん」

「これで何度目？　頭がそのまま下半身に繋がってるような下衆野郎じゃなくって、純粹^{ピュア}過ぎてのことだってのは今までの付き合いから「分かってる」というより「信じたい」けど……………でも、いくらなんでも度が過ぎると気色悪いわよ？」

「かはんっ!?　それに、気色悪いって……………」

「あたしに言われたくらいで一々凹むなっ！　ああ、もう……………なんでこいつらは揃いも揃って面倒くさいのかしらねえ……………」

関係改善云々の前に、コロナと面と向かって会話もできない状態ではどうしようもないだろう……………ということ、クーデリアは言葉巧みにマイスを誘導し、まずは「イメージトレーニング」でマイスの状態の改善を行おうとしたのだが……………今のところの結果は、見ての通りだった。

クーデリアが声を荒げるのも仕方ないことだろう。それほどま

でに、マイスのロロナへの意識が良くも悪くもヒドイのである。

そもそも、ロロナやマイス双方の気持ちを知っているクーデリアからしてみれば、「嫌われたんじゃ……!?!」と不安がり慌てふためくロロナも、「僕が異性そんなふうとして好かれるなんてあるわけがない」と勝手に決めつけ自己完結してしまっているマイスも、見てて呆れてため息が出てくるほどのものだろう。特に、今先程本人の意思を知ったばかりのマイスはともかく、ロロナにはこれまでも色々付き合わされてきた。

それでも変に投げ出したりせず、こうして最後まで付き合おうとしているのは、クーデリアの元来からの性格か……それとも、二人と浅くなく有る「縁」えんゆえにか……。

そんなクーデリアでも匙を投げてしまおうかと思ってしまうほどでしょうもないマイスの様子に、彼女は頭を抱えてしまった。

(いっそのこと、密室か何かに閉じ込めたりして、無理矢理にでも二人つきりにしてしまっただろうが手っ取り早い上にロロナとマイス二人のためになるんじゃないかしら……?)

クーデリアが、『錬金術』や『魔法』を持つ者に対して効果があるか微妙なことを考えはじめていた……ちようどその時、玄関戸のほうからノックが聞こえてきた。

家の主であるマイスが返事をする——よりも先に……というか、ノックの後、ほぼ間髪入れずに扉は開かれた。

そこにいたのは——

「おじやましませーす」

——ホンワカとした調子でそう言うロロナだった。

突然現れたロロナに、クーデリアは朝のあの情けない様子と違うロロナに驚きつつ、デジャブを感じ………マイスは「ロロナが来た」というだけでカッチカチに固まってしまった。

来訪者ロロナを見て、クーデリアがデジャヴを感じていたが……先日とは色々と状況が異なっていた。

朝か、夜かなどといった時間帯の違い……などではなく、重要なのはロロナとマイルス。先日は来訪したロロナが地に足がつかない様子だったのに対し、今日は家主であるマイルスのほうが地に足がついていない。

だからと言って、今日のロロナが正常かどうかは話がまだ別であるが……。

「ちよつと、ロロナ——」

いきなりのことに数秒固まっていたクーデリアが、復活してすぐにロロナに声をかけようとした……が、意図してか否か、それに被るようにロロナのほうからもクーデリアへと喋りかけたのだ。

「ああつ、くーちゃんゴメンね。お仕事でも色々無茶言ったのに……やっぱり私、自分でお話ししたいかなーって」

「——まっ、ロロナがそうしたいって言うなら、あたしは別にいいんだけど……」

さつきまで声を荒げてまでマイルスをどうにかしようとしていたクーデリアだったが、ここではあつさり引き下がった。

相手がロロナだったからだろうか？

それとも、少し申し訳無さそうに言いながら浮かべられた微笑み……その眼の奥にある光が、幼馴染でも見たことの無い柔らかくも力強さを感じられる……「決意」を感じられるモノだったからだろうか？

なににせよ、ロロナの意思をくみとったクーデリアは、ロロナと入れかわるようにして玄関から家の外へと出て行こうとする。その前に、一言だけ言い残して。

「それじゃあ、あたしはお役御免ってことで、」

肩をほぐすかのように軽く肩を回しながら出て行くクーデリアに「え、ちよつ！」と驚きつつも視線で必死に助けを求めるマイルス。……

だが、クーデリアはマイルスに対してあえてヒラヒラと手を振ってみせるだけで、そのまま出て行くのだった。

マイルスの家

二人きりになった。

それも、ロロナと。

これまでに、同じように二人きりになることは普通にあつたのに、どうしてこんなにも顔が熱くなるんだろう。目の前にいるはずのロロナの顔を見ることが出来ないんだろう。

恥ずかしさも当然あるんだと思う。けど、後ろめたさがある気がするのも、また事実だ。

この場から逃げ出したい。そうすれば、この苦しさを感じるほど胸を締め付けられるような感覚を少しは緩められる気がするから。

でも、逃げたくない。クーデリアが言っていたように、こんな僕じゃあダメなんだ。自分のしなきゃいけないこともできずに、ロロナの事ばかり想っているだなんて。ちゃんといつものように――

「ゴメンね、マイルス君」

「えっ」

ロロナの口からいきなり出てきた謝罪に、僕は呆けた声を漏らすことしかできなかった。

って、あれ？　なんでロロナは僕に謝って……？　むしろ、悪い事してるのは僕のほうで……

「あっ！　今のは、アレじゃないんだよっ？　マイルス君を怒らせちゃうようなことしちゃったからじゃなくてね。……ソツチも本当は謝らなきゃいけないんだけど、私バカだからどうしてかわかんなくっ

「なんで怒らせちゃったのかわかんない。わかんないままだけど、そんなことよりも私はミス君に会いたかった。会って話したかった……だから「ゴメン」なんだっ」

謝ろうと開きかけた口が止まってしまふ。「ロロナは何を言ってるんだろう」って、思ったから。

ロロナが相手の気持ちを全く考えないような人じゃないってことは知っている。そうじゃなきゃ、僕だって好きになったりはしない。

じゃあ、なんでロロナは「怒らせてしまった理由」を「そんなこと」だと言つて一蹴したんだ……？ 「会いたかった」？ 僕に？ なん……？

「私、告白……されたと思うの」

疑問がポンポン浮かんでくる最中に聞こえてきたロロナの声は、頭をガツン！とハンマーで叩いたかのような衝撃を僕に与えた。

「っ!? それって、どういう……!!」

「まあ、それは「冗談」らしかつただけどねー」

ガクツと力が抜けて、そんな話、「冗談だったから」っていつてもして欲しくないなーっと思いつつ顔をあげたら、ロロナの顔が見えた。

「ううん。でも、わかつてる。あんな辛そうにして言ってきたのに……アレが「冗談」だなんて嘘に決まってるもん」

遠いどこかを見るように……その時の事を思い出すように言うロロナ。

……一体、その人は何と言ってロロナに告白したんだろう？

好奇心や野次馬根性で知りたいわけじゃない。ロロナをこんな表情にした原因を知りたかったんだ。

告白のことを囁わさうわけでもなく、悲しんでいるわけでもなく……少

し辛そうに、なおかつ優しく笑いかけるかのように微笑んでいる。

「あの人に言わなきゃいけないことも、言いたいこともあったはずなのに、全部グチャグチャヤーってなっちゃって……わけわからなくなつて、怖くなつて……それでいつの間にか私が好きな人の事を必死に思い浮かべて「助けて……っ！」って思っちゃってた」

告白で、ロロナが怖がったこと。そして「私が好きな人」という凄く気になるワードのことが引っかけりながらも、僕はロロナにそのことを聞くことが出来なかった。

思い出しながら語るロロナの表情が……その雰囲気、僕の声を押し留めていた。

「なんてね」って言う直前に、もっと辛そうな表情になったのは、きっと私の顔にそんな気持ち……。やっぱり、本当に私のこと、好きでいてくれたんだろうなあ……わかるもん。私が感じてたモヤモヤと、自分でも気づけてなかった不安も……きつと、あの人が持ってたのと同じなんだろうな」

そう言うとロロナは、その語りに聞き入る僕に近寄り……僕の、宙ぶらりんだった右手を両手で握ってきた。

「もっと一緒にいたい。だから、伝えたい。けど、伝えられない。嫌われたくない……でも、今のままじゃあ私は苦しいって」

「ロロナ……」

「マイルス君」

——私、マイルス君のこと、好きだよ」

「好き」。

その意味は……わざわざ考えなきゃならないほどじゃない。そういうことなんだろう。

ああ、そうか……

僕だけが特別じゃないんだ。

僕らだけが、特別なわけじゃないんだ。

誰だって悩む。

周りの人の目を気にしてしまう。

怖いからこそ、独りは嫌で誰かを求めてしまう。

逆に怖いからこそ、誰かを突き放して独りになってしまいかもしれない。

好きな人が相手なら、なおさらだ。

それは、今、僕の手を強く握ってくれているロロナの顔を見てもわかる。

だからこそ僕は………

「あっ………」

僕はその手を握り返さずに、振り解かないといけない。

僕は一歩さがる。

……半開きになっていた口をギュツと閉じ、目尻に涙をためるロロナの顔が見える……けど、僕は言わなきゃいけないことがある。

「ごめん、ロロナ」

「……っ!!」

その溢れ出る涙を拭ってあげたい。

でも、好きだからこそ、言わなきや僕は、君の手を取ることはできないんだ。

キュピーン！

わずかな音と淡い光と共に、僕は姿を変身変えた。

沢山の涙で視界がにじんでしまっていたのか、突然の光に驚いて目をつぶってしまったのか、ロロナは僕を見失い「あれ？ あれ？」とキョロキョロとした。

「……………だよ。もつと下」

……………これで気付くはずだ。

身長が半分以下になって、消えるようにロロナの視界からいなくなった僕を。金色の毛の『モコモコ』の姿になった僕を。

「あつ……………!?!」

「……………」

目尻に新たに涙をためていたロロナの目が見開かれる。その目は金モコの目とあった。

「ずっと黙ってて……………騙しててゴメン。信じられないかもしれないけど、これも僕の本当の姿なんだ」

「えっ……………それって、どういう」

『魔法』、『ゲート』。それに「新種のモンスター」……………それらは僕が前にいた場所のもので、僕は……………この世界じゃない世界にいた、モンスターと人の『ハーフ』なんだ」

信じてもらえるかもわからない話。むしろ、冗談だと思われた方が嫌われないかもしれないくらいだ。

だけど、近年現れた『ゲート』と「新種のモンスター」で、僕が公表し広めていつている『魔法』で信憑性を高めてたたみかける。

嫌われるかもしれない、拒絶されるかもしれない……………でも、隠さずにいたい。こつちを向いてくれるから、僕もちやんと向き合いたいん

だ。

「だから……だから、そんな僕は……僕のほうからコロナの手を取ることができないんだ」

そう言いながら、今度は僕が右手を伸ばす。ただし、その場から動かずに、コロナの手を握ることも無く……ただそのモコモコ^僕の手を伸ばすだけ。

「……………るい……………」

「えっ?」

「……………ずるい……………」

「ずるい」か。確かにその通りだと思う。

コロナにあれだけの事を言わせておいて、後からこうして要求するだなんて……「受け入れてくれるんじゃないか」っていう打算的な考えにしか思えなくて当然だよな。

だから、やつぱり……

……僕は目を伏せて、伸ばしていた右手をおろ——

——
身体が宙に浮い……いや、抱きしめられたんだ。いつの間にか、僕のそばまで来て表膝をついていたコロナに。

「ろろ……な……?」

「ずるいよ……」

「……………ゴメン」

「……………ずるいよ! かわいくて、かつこよくて、かわいいだなんてっ

!!」

「ごめ……へっ?」

「それにそれにつ! トトリちゃんやピアノニヤちゃんにチャホヤされ

ててずるい！ 私はどっちかといえばトトリちゃんやピアニヤちゃんチャホヤしたい側だけどっ!!」

「ええっ!?!」

何の話!?!

いやっ、というか、「ずるい」ってそういう!?!

予想外のことに混乱する僕……けど、ロロナはそんなこと御構い無しに僕の事を抱きしめて、モコモコの頭頂部あたりのモコモコ毛に頬擦りしてきた……。

「……やっぱり、マイルス君はちよつと抜けてるところがあるね。こんなに好きなんだから、もつと好きになっても、もう嫌いになんてなれるわけないんだよ?」

「?」

「んーん、なーんでもない。ただ………大好きだよっ!」

抱きしめたまま、嬉しそうな声で言うロロナ。きつと笑っているに違いない。だから、僕は……自分の気持ちを言葉にして返すべきだろう。

再び変身して、この手でロロナの事を抱きしめ返す。そして――

「ロロナ。僕は――」

――僕は、言う。ロロナにしか聞かれたくない、その『愛』を。

彼の知らぬ間に……

????????

「例の現象、あの時の発生地地点の絞り込みができたとは聞いたが……
本当にあのあたりなのか？」

さざ波が引いては押し寄せる音が聞こえてくる浜辺で、一人の女性
と、一人の少年が並んで立っている。

その者たちの服装は、大海原にポツンと浮かぶ孤島というこの場コに
はいささか適あてってていない「マント付きロングコート」と「フリルのつ
いた執事服らしきもの」という奇抜とも言えるコンビ。

女性の言葉に、少年は静かに……だが、しつかりと頷いたうえで「は
い」と肯定し、女性の問いかけに答えるべく言葉を続けた。

「範囲としては、上下左右200 mメートルほどの誤差が生じている可能性は
有ります。ですが、恐らくはグランドマスターの思っている通りか
と」

「街の連中が噂していた「新種のモンスター」が、このあたりにもそれ
らしきモノがいるという話があったが……それだけでも考えものだ
と言うのに……いや、だからこそ、か？」

面倒くさそうに言った女性は眉間にシワを寄せ、孤島を覆う木々森を
見る。

偶然か何か、二人のいる浜辺から見える、熱帯で自生している草木
で構成された森……そこから「ズシン、ズシン」と重量感のある何か
が歩いたかのような音と振動地鳴りが。

さらには、遠くに「ミシミシ」「バキバキ」と草木を薙ぎ倒す音が聞
こえ……それらをかき消すような「ギユアオオオーーンツ」とい
う獣の遠吠えとはまた違う何かの鳴き声が轟く。

一般人なら恐れおののき、大抵の『冒険者』でも冷や汗の一つや二
つかきそうな状況にあつて……女性は、相も変わらず面倒くさそうに
してため息を吐くばかりで、隣に立つ少年に至っては無表情で森のほ
うを一瞥するだけであつた。

この日何度目かになる——なおかつ、その中で一番大きく長い——
ため息をして首をゆっくりと一度二度振った女性が口を開いた。

「ただでさえ、あっちのホムに任せていた研究の一件もあるとうののに、
よりにもよって今、こちらも活発化するとは……研究材料が増えるの
は良いが、こうも忙しいというのも考えものだな」

「忙しいのは、グランドマスターが口……マスターのことをいきなり
覗きに行ってしまう、スケジュール予定を狂わせているからなのでは？」

女性と少年間に何とも言えない空気が漂い、数秒間ではあるが、静
寂が訪れた。

「……なんだ？ 未だにコロナの事をマスターと呼ぶのは慣れないの
か？」

「申し訳ありません、グランドマスター。まだ直接お会いしたことも
無いので、うまく連想して記憶できていないようです。それと、話を
そらすのはいかななものかと……」

「言われずとも、理解しろ。コロナのことが優先事項だからに決まっ
ているだろう！」

悪びれもせず、むしろ胸を張って傍若無人な物言いをする女性。だ
が、少年はそれを咎めたりしようとは全くせず、受け入れて……そし
て、わずかに首をかしげた。

「なら、何故グランドマスターは街から……マスターのそばから離れ
て活動を？」

「ん？ ……ああ、そういえばお前には話していなかったか」

一瞬、「何故そんなことを？」と言った様子であっけにとられていた
女性であったが、すぐに少年の持った疑問が何故湧いてきたのか理解
したように軽く頷いてから語り始めた。

「今の研究内容は、できればどちらにもコロナには知られたくないから
な。場合によっては嫌われかねん。……会えないのは、遠くから眺め

たりすれば紛^{まぎ}らわせることはできるが、コロナに嫌^{きら}われてしまうなど
考^{かん}えたくも無い」

「まあ、真意を隠す建前など、吐いて捨てるほど思い浮かびはするが
な」と付け足して言う女性。

「だがしかし、こんな生活もいい加減飽きてきた。とつとと終わらせ
てしまってコロナを愛でるとしようじゃないか。ほらっ、ホーム、調査
を始めるぞ」

「はい、グランドマスター」

「クイツ」と眼鏡を上げて整え言う女性と、文句を言うことも無く頷
いてつきそう少年。

そして――

「さて、まずは……」

ギョアオオオooooooooooooッ!!

「準備運動に、軽く怪獣退治とシャレこもうか」

――木々を粉々に破壊し、吹き飛ばしながら……女性の腕より
大きい尖った無数の何か^ふが女性と少年へと襲^たいかかった。

?????????
·
?????

「は――た。――前――元――所へ――出――る」

「？　—う—と—い？」

「お前—と引—ん—原因—たの—、他で—ワ—
だ。あの—が最も—およ—との出—水—媒体—
り、異—への『』—開—とが—来た—」

「—とは、アン—自—にア—　ツチを行—来—る—
？」

「出来—はな—、が「由—」—言—い。むし—々のよう—
—にな—アチラ—と行く—で—ないの—。し—し、今、再び—
—時—に……いや、あ—以上—双方は近—、—つ、境—
—定に—つている」

「—え、ま—会—わ？　そ—最—い—ング
—ん—やない—」

「『』は—不—定になつ—ほう—と、傾き、位置—もズレ—
じる。そ—て、—安定—るの—違—い無—彼が—場所—。彼—
—『—』、『—』で—『—』でも—る存在、彼のい—
へ—ズ—るとなれ—、お前—るのにも—都—がい—う？」

「ワ—の力を—て、お前—アチラへと送—う。—し、その—
—彼—お前—つた『穴』へ—案内し—。そ—れば、—
は—れる。あるべき姿—……本来—へと戻る—が出来る—
だ」

「……—、—たしをむこうに—　に、マイスを—
い、つ—？？」

「そ—だ」

「—ね！ —い—、 —たしは— —よ!!」

「—そうか。では—送ろう……—?。」

マイスの家・モンスター小屋

「……………ん？ あれ？」

ボヤーツとする視界と意識を何とか覚醒させようと、数回目をまたたかせたうえで目を擦る。

……首を回し、辺りを見てみてわかったけど……どうやらモンスター小屋の脇に積み重ねていた刈り取った『牧草』の上に寝転んで、そのままいつの間にか寝てしまつてたらしい。

ついでに言えば、僕の周りには『ウォルフ』や『緑ぷに』、『たるリス』それに、例の『モコモコ』も一緒になつて寝ていたみたいで、寝転んだその子たちに僕は囲まれた形になっている。

「僕が寝ちやつたのは昨日色々あつたからだとしてだよ。この子たちは……たまたま僕を見かけて、なんとなく一緒に寝転んでみただけ、かな？」

きつと、深く考えたつてそんなに深い意味は無い気がするんだよなあ……。

でも、『モコモコ』がそばで寝てくれているのは、少なからず心を許してくれるようになっていからだろうし、嬉しくもあるよねっ！

「それにしても……さつき、何か夢を見てたような……？ いや、あれは……夢、だったのかな？」

夢にしては、なんだか感覚がおかしかったような気がする。なんとなくか、俯瞰的に見れていたっていうか……とにかく、違和感があった。

それに――

「あの声、聞き覚えがある気がするんだけど……誰、だっけ？」

ロロナ【*10—1*】

【*10—1*】

冒険者ギルド

ロロナに泣き付かれて、仕事を急遽休みにして『あいつんちマイスの家』に行つたのが昨日のこと。

そして、弱腰になつてたマイスを叩き直している最中に、急に来たロロナにバトンタッチして……あの後、どうなったのかは、あたしは知らなかった。

だけど……

「——というわけで、そのね？　あの後、ええつと……仲直り、できたよつて報告を」

もじもじとしながら薄く赤に染めあげた顔をこつちに寄せて、少しだけ声を潜めてそう言ったロロナ。

……その姿・仕草を見れば、あの後、どうなったのか想像するのは容易かった。

「はいはい。言葉選ぶなんて似合わない事しなくつても、大体わかつてるわ。そうねえ……おめでとう、とでも言つておこうかしら？」

「やだなあくーちゃんつたら！　お付き合いつてだけで、そんな……けつ、結婚だなんて！　それはまあ、早くしたいなーとは思つたりはするけど」

「ロロナ？　浮かれてるのは分かったけど、あたしはそんなこと一言も言つてなわよー？」

せつかく声のボリュームを押しえていたつていうのに、ロロナの声は一気に普段通りかそれより少し大きいくらいになってしまつた。

これでは、今『冒険者ギルド』にいる連中の中でも察しの良い奴らは、何のどういう話なのか察しちやつたんじゃないかしら？　まあ、嘘ならまだしも本当のことなら、遅かれ早かれ広まるだろうし、そう

気にすることは無いかもしれないけど。

唯一、ホツと息を付けた事もあるにはあった。

あたしのいる受付の隣の受付には普段、ファイリーあの子がいるんだけど……昨日は朝早くで……そして今日は、ちょうど今日は前々から休暇になっていたのでファイリーあの子はいない。

もしも、いたとすれば……色々面倒なことになってたでしょうね。

ファイリーあの子も、コロナがミスへ好意を持っていることは知ってはいるだろう。けど、ファイリーあの子自身もミスへ好意を持っていて……それを諦めきけることはできていない様子だった。けど、時間が多少かかってもいいから気持ちに折り合いを付けてほしい。

だからこそ、今、「二人は付き合いましたー」なんて話を不意打ちに近い形でいきなり聞かせるのは気が引けた。ましてや、噂話とかでならまだしも当事者の片割コロナから直接聞くなっていうのも……無いとは思うけど、コロナにいきなり襲いかかったりするんじゃないかって不安感もあるし。

「でも、意外ね」

「ふえ？ 何が？」

「そういうことになったっていうなら、てつきりあいつミスと四六時中ベツタリするものと思ってただけ……あいつミスのデカイ仕事でもあつてヒマになったりでもしたの？」

ミスはともかくとして、コロナは基本的に親しい相手ほど距離がかなり近くなりスキンシップ也多めだ。そして、性格・性的に考えでもホムやトトリなどといった相手に対してそうだったように、恋人相手にも「一緒そばにいたい」、「頼たのんで欲しい」などといった感情もが前に出てくるとばかり思ってたんだけど……もしかして、違うのかしら？

そんなあたしの考えの正誤を示したのは、コロナが首を横に振りながら答えた言葉だった。

「ううん、そんなことないよ？ さつきまで一緒にいて……今、アトリエでお茶会の準備してくれてるの」

「お茶会？ 今から？」

「でも、時間的にそのままお昼代わりにーってなりそうかも？ それで、くーちゃんにも声をかけて……ついでの報告もって思ってる」

そこで「何の話？」と一瞬だけ思ったけど……まあ、つまりは報告ついでのお茶会へのお誘いに来た、ってことなんでしょうね。

けど、それに対するあたしの返答は決まっていた。というのも……「残念だけど、昨日の急遽取った休み時間のことであって、今日は流石に抜けられないわ」

「そっかー……。ちよつと残念だけど、仕方ないね」

まあ、一応はロロナとマイスの時間を邪魔したくないっていう気持ちもあるにはあるんだけどね。

と、そんなことを考えてたら、ロロナが何やらゴソゴソとし何かを取り出した。

「こんな事もあるうかと、実はお茶会用に作った『ベリーパイ』おすそ分けに持ってきてました！ というわけで、よかつたらお昼休みにでも食べてね」

「あら。それじゃあ有り難くいただいとこうかしら」

そう言いながら、ロロナからさし出してきた『ベリーパイ』を受け取る。

『ベリーパイ』は、ただ単純に甘いパイってわけじゃない。確かに少なからず甘さはあるけれど、ベリー類特有の酸味のほうが印象深いだろう。

……ただ、もしもお茶会の誘いに乗っていた場合、目の前でロロナとマイスのやりとりを見なきゃならなくって、『ベリーパイ』さえも甘ったるく感じてしまったかもしれないわね。

あと、『ベリーパイ』ってことは、十中八九マイスが家で収穫しておいたものを持ってきたベリー類を、ロロナが有効利用パイにしたんだろう。相変わらずおいしいそうなこと……。

そんなわけで、あたしはコロナの誘いを断ったわけだけど……そこ
までで用は大体すませたんだろう。

コロナはあたしに軽く手を振りながら、踵をかえした。

「それじゃあ、ミス君たちが準備して待つてくれると思うから、私
帰るねー?」

やつぱり、なんだかんだ言つて恋人が恋しいんだろう。

「こころなしか早口に言つたコロナを見送……………ん?」

「ちよつと待つて」

「? どうしたの、くーちゃん?」

「ミス君たち」 って……………ミスあいつ以外に誰がいるの?」

いやまあ、あたしに声をかけたつてことはすでに他に誰かを呼んで
るつていう可能性は十分にある。

コロナ本人が呼んでるわけだし、コロナもミスに何も聞かずに呼
んだりはしないだろう。だから、あたしが「あーだこーだ」言うのも
変かもしれないけど……………なーんか嫌な予感がする。

「うん? ええつとね……………トトリちゃんと、ちみゆみゆちゃんと、
ちみゆめう……………ちにゅっ! ……その、ちむちゃんたち」

「喃んで、言うの諦めたわよ、この子コロナつたら……………」

「つて、ああなんだ。どうやらあたしの杞憂だったみたいね。」

よくよく考えてみれば、ここ最近、またトトリがコツチに来て活動
しているみたいだったし……………そうなれば拠点にしている『コロナのア
トリエ』にも基本的にはいて当然よね。

「あと、りおちゃんと、ホロくんと、ラニヤちゃんと、フリーーちゃん
が来てくれてるんだー」

「もう一回
ワンモア」

「ええっ!? あのね、また喃んじやいそうだから……………遠慮してもいい
?」

そんなこと言わないで、もう一回……いいえっ！　せめてウソか本当かを……

……まあ、どう考えても、夢の中の出来事でもなければ、あたしの幻聴ってわけでもないみたいだけど。

「運良く居なかった」どころか、渦中のご真ん中に居ちゃってるじゃない……」

「なにが？」

「はて？」と首をかしげてるロロナはさておき……。

フリーが休みで『冒険者ギルド』でのあたしとロロナの会話を聞いてなかったからって、まさかお茶会にいたなんて……。もの凄くうんがわるいんじゃないかしら、あの子。

しかも、フリーだけじゃなくて、リオネラのほうも一緒にいるっていうのが……。

……まさかとは思うけど、「マイス君は私がもらったー！」ってアピールのためにロロナがわざとセツティングを？

いや、ロロナがそんなこと……。まあ、その気が無くっても一歩間違えば流血モノになりそうなんだけども。

けど、そのことを知ったからって、あたしがやれることなんて限られてる。

今、出来ることといったら……

「ああ。引き止めちゃってゴメン。……最後に、ちよつといいかしら？」

「うん、それは別にいいんだけど……。どうしたの？」

「トトリにね、ちよつと用があるから『冒険者ギルド』に顔出しに来て、つて伝えておいてちょうだい。急用ってわけじゃないけど、今日中に……。そうね、時間も少しかかるかもしれないから、適当にお茶とパイ食べた後に来るくらいでもいいから。別に早く来てくれても構わないけどね」

「わかった！　トトリちゃんにそう言っとくね」

ミスやコロナ、フリーにリオネラといった当事者とも言える面々はまだしも、完全にただ単に巻き込まれちゃっただけのトトリには、ちよつとした逃げ道くらい作ってあげててもいいでしょう？

「……にしても、本当にあのコロナとミスがねえ……」

正直「よくくっ付いたよなあ」って思ってしまうカップルな気もする。

けど、お人好しなところとか、自分の好きなことには変に思えるほど夢中になったりとか……なんだかんだ言って似た者同士だし、相性自体はいいんじゃないかしら？

しかし………ねえ？

「気になることといったら………やっぱりあのことかしら？ まあ、あいつのことは気にするだけ無駄な気もするし」

あたしは昨日、コロナとバトンタッチした後の事を………そこで会った、ある人物の事を思い出し………かけて首を振り思考を中断させる。「変なことさえ企たくらんでなければいいんだけど………」

コロナのアトリエ

アトリエから出て行つてから無事帰ってきたコロナ先生。

そして………どうやらミスさんとは上手く言っただみたくて、帰ってきた時、先生はすつごく嬉しそうにしてた。

それが、昨日のこと。

そして今日、先生の思い付きなのか、昨日のうちにミスさんと何か話していたのか、お昼前にアトリエでお茶会をするって話になった。

最初、私は先生とマイスさんの邪魔になっちゃうかもしれないから遠慮しようかと思っただけど……どうやら、私よりも先にフィリーさんやリオネラさんにも声をかけてみたいで、それで「先生は本当にただ単に集まって飲んだり食べたりしたかっただけなんだろうな」って思っ、私は変に遠慮せずに参加することに。

(やめとけばよかった……)

それが、今の私の心からの気持ち。

「何で？」って、それは……

「ね、ねえ！　マイス君、実はこの前——」

「へえ！　そんなことが——」

「今度しようと思ってる新作の劇なんだけど……その、ちょっと迷ってて——」

「うーん？　それなら、この前使ってたあの演出と似たタイプで——」

お茶会の準備を終えて、一段落して休憩しているマイスさん。そして、そのマイスさんと楽しそうに話しているフィリーさんとリオネラさん。

……気のせいか、マイスさんと話している時の二人から♥^{ハート}がポンポン飛び出しているように見えています……。

ううんっ、きつとこれは……そう！　あれだっ！

ここ最近、どぼつとコロナ先生の恋愛関係の色々を見てきちゃったから、頭が勝手になんでもかんでも恋愛^{ソツチ}関係^{方面}に変換しちゃってるだけで、今私の目の前でやってるのは、ただの単なる友達同士のコミュニケーション……だったらしいな。

……マイスさんは、大丈夫ですよ？　いつも通りな感じですし、フィリーさんとリオネラさんが「お付き合いのこと」を知らなくっても、マイスさんは自分のことだから知ってるはずで……！　昨日の今

日で浮気だなんて……そんなこと無いですよね？　ねっ？

「ただいまー」

私がそんなことをグルグルと考えてる間に、クーデリアさんの所へ行つてたロロナ先生が帰つてきた。

救世主……じゃなくって、不安要素が増えただけな気もするけど、私はいつものように先生に「おかえりなさい」って声を……かけようとしたんだけど、それより先にミスさんが先生のそばまで駆け寄つた。

「おかえり、ロロナ」

そばに寄つた結果、すぐ近くにあつたロロナ先生の両手をとつて、自分の両手で優しく包み込んだ。

そして、ニツコリ笑つたミスさんが包み込んだ先生の手を軽くさすりながら口を開いた。

「外、寒くなかった？　手が冷たくなつちやつたりしてない？」

「大袈裟だよ。もう結構寒くなってるけど、そんなしもやけになつちやう程じゃないんだから大丈夫！　それに……」

先生が右手を抜き出し、そのままさつきまで包んでいたミスさんの左手の甲を覆うようにその右手を置いて……ミスさんの手で包み込まれたままの左手と出した右手で、ミスさんの左手を挟み込んだ。

そして、指先がゆつくりと曲げられて……ミスさんの左手は先生の両手でギュッと強く握られた。

「……実は、外歩いてる時にこんなふうにならないかなーって期待してたんだっ」

ほわんっ

そんな感じに、先生とミスさんの周りが淡いピンク色の光で彩られたように見えた。

……そう思えるほどの何かを、私はその場で目で耳で感じ取つていた。

「ロロナ……」

「えへへっく。ミス君の手、すぐくあつたかいなあ」
向かい合ってニコニコ笑う二人……。

……って、それはいいんだけど……

ちよつとだけ視線をズラせば、そこに見えてくるのは……

「蛙の子は蛙、かあ……ふふふっ」

「……………っ」ビクンツ ビクンツ

「」

涙があふれ出るどころか、目が何だか暗くなってるフリーーさん。
真顔で白目向いてビクビク痙攣してるリオネラさんと、ソファーに
力無く倒れてしまってるホロホロとアラニーヤ。

え、ええつと、こういうのって確か…………… 「死屍累々」？

「って、ええつ!! リオネラさん!? ホロホロ!? アラーニヤ!?
フリーーさんまでっ!! ど、どうしたんですか!?!」

「うわあ!?! ももももしかして、今日準備したやつに『暗黒パイ』が
混ざってたりした!?! なんか痙攣してるし、やっぱり毒で……………!」

「二人のせいですよ!」っていうツツコミは、私には出来そうもない
……………。

その前に、胃薬のレシピでも考えよっかなあ……………?

ロロナ【*10—2*】

【*10—2*】

ロロナのアトリエ

色々とおつて、フィリーさんとリオネラさんが大変なことになったお茶会だったけど、なんとか——本当になんとか——始めることが出来た。

美味しい『ベリーパイ』。良い香りがする『香茶』。……このちよつと変な空気のせいかな正直、今の私にはどつちもよくわかってなかった。食べ終えたには食べ終えたんだけど、味が全然思い出せそうもない。あえて言うなら、甘かった……のかなあ？

「ちむー！」

「ちむみゅ……」

「ちむしや、ちむしや」

「……zzzz」

私の足元に来て甘える子。ゆっくりだったり、一心不乱にだったりして『パイ』を食べる子たち。床で大の字で寝ちゃってる子……。

もう、ちむちゃんたちだけが『ロロナのアトリエ』の「癒し」だと思おう。

ロロナ先生？ 先生自体は癒し系かもしれないけど、無自覚で色々しでかしちゃうから……。

特に今回は、ミスさんと一緒になって天然でやらかしてる。本人たちとしては、至っていつも通りで、誰にでも優しいお人好しお節介焼きないつも通りの二人なんだけど……それがかえって互いへの態度の変化が浮き彫りにしているし、他に変化が無いってことは「他所への配慮」もほぼゼロのまま。一般常識的なモラルが最低限あるかな

いかくらいで、周りなんて特別気にせずイチャイチャしだす始末。
……これで本人^{先生}たちに悪気でもあれば嫌えるんだろうけど……ね？

そんな風に何とも言えない——でも、ロロナ先生とミスさんは凄く楽しそうな——お茶会が刻一刻と過ぎていった。

そんな中、ミスさんとソファーに並んで座ってたロロナ先生がいきなり「はっ!？」とした顔をしたかと思ったら、その両手で口元を押さえて立ち上がった。

「ああっつ！ そ、そういうえば……!」

「ロロナ？ いきなりどうしたの？」

隣にいたミスさんが、ロロナ先生のいきなりの行動に驚きながらもそのまま先生に問いかけた。

先生はといえば、ちよつとバツの悪そうな顔をして……

……つて、んん？ 先生つてば、ミスさんの方じゃなくてなんでか私のほうを見てる気が……？

「えっと、そのね？ 『冒険者ギルド』に行った時にクーちゃんに言われてただけど……」「ちよつと用事があるから、今日中に、できれば早めにギルドに来て」つて感じの事をトトリちゃんに伝えといてつて言われてたの、すっかり忘れてちゃった」

クーデリアさんが、私に？ 一体何だろう？

うーん？ 急ぎの用のように見えて、実はそうでもなさそうだったり……色々とアバウトすぎる気がする。まるで、本当は用なんか何にも無いような……？ でも、私なんかを意味も無く呼び出すなんてこと、有り得るかなあ？

……あれ？

もしかしたらフリーーさん達の好意^{こゝと}は知ってて、先生から誘われたお茶会がとんでもないことになりかねないって気付いて、先を見越して私に助け舟を用意してくれてた……とか？

その予想があっているかどうかということはひとまず置いて

……とりあえず間違い無いのは「この異様な空間から抜け出せる」という事実。

本音を言うと、スツゴイ助かります、クーデリアさん……!!

「それっ、早く言ってくださいよ!」

「ふえっ!? そ、そんなに怒らなくっても……」

「怒ってません!!」

「うう。トトリちゃん、絶対怒ってる……グスンツ」

力無くうなだれる先生。

それは、怒りたくもなりませんよっ!

だって、ファイリーさん達に気を配ったりとか、必死に空気を読んでたのに……実は最初から逃げ道が用意されてたなんて知ったら、色々と言いたくもありませんから!!

そのファイリーさんとリオネラさん達はどうと……

「ふとした瞬間、手と手が触れて目と目が合って、そのまま二人の顔と顔が近づいて……ぶはあっ!」

ロロナ先生とミスさんがいるソファの方を見たまま何かを吐きだし……そうかと思えば、いきなり鼻血を出すファイリーさん。

「二人の子供……ちっちゃくって、ホワホワしてて、すっごくカワイイんだらうなあ……ふふふっ」

窓から見える空をみたまま、静かに笑うリオネラさん。

「……ねえ。あれから回復してこれ、なのよね? 大丈夫なの? なんだか悪化してる気がするんだけど……」

「知ったこっちゃねえよ。けどまあ、オレらがこうしていられるってことは、いちおうリオネラの中に余裕が出来てるってことだろうよ」
そんなリオネラさんのそばに浮いて、二人の事を心配しながら話している黒猫と虎猫の人形——ホロホロとアラニーヤ。

……? リオネラさんに余裕が出来るのと、ホロホロとアラニーヤ

に何か関係があるのかな？　よくわかんないや。

「けどねえ？　本人達をよそこに、勝手に先走り過ぎじゃない？」

「普通引くぜ。コイツみてえにさ」

そう言ったホロホロがその腕をチヨイチヨイと動かして私のほうを指し示した。……って、ええ！？

「うえっ!?　べ、別に引いてなんか、ない……わけでもないですけど……。あのー……結構こじらせちゃってます？」

最初こそ必死に誤魔化そうとしたんだけど、なんだか全然誤魔化せる気がしなくって、そのまま少しだけ遠慮気味に質問してみたり。

そうしたら、フワフワ浮いているふたりがそのまま頷いたり身振り手振りをしながら、私の質問に答えてくれはじめた。

「否定できねえな。仕方ない気もしくはねえんだがよ、そんだけ後悔するなら時間はいくらでもあったんだし、幾らか行動を起こしたらよかったんじゃないか……まあ、オレらが言えたことじゃないけどさ」

「そうよねえ……それに、リオネラはミスもそうだけどロロナのことも大好きだから、なんだかんだ言って二人の事は祝福してるとは思いうわ。すぐに立ち直れるかどうかは、話が別だけどね？」

「は、はあ……う？」

とりあえずは「大丈夫」ってことなのかな？　でもやっぱり、すごく心配な状況としかいいようが無いのも事実。

うーん？

「まあ、リオネラたちの独り言を偶然か何なのか、スルーできちまつてるアイツらもアイツらだけだよ」

「え？」

ホロホロの言葉に釣られて視線を移動させると……そこにいたのは先生とミスさんだった。

うーん……確かにすごく勝手な妄想をされているっていうのに、その声に反応らしき反応をしてないみたい。大声じゃなくって、ブツブツ呟いてるってくらいの声量だけど、普通は聞こえると思うんだけど

……？

「どうしてそうなってるのか？」っていう理由は、なんとなくだけでもすぐに察することはできた。だって、二人揃って相手のことしか見てないんだもん。

先生とマイスさんは、ソファアに「真っ直ぐ正面を向いて」座ってなかった。

互いに相手のほうを向くように座り、角度を微妙にズラして斜めに座り……お互いの顔を見ながら話せる体制に、いつの間になかった。

コロナ先生は泣き顔になっているし、マイスさんはちよつとだけ怒ってるような感じがするんだけど……いったい何をしてるんだろう？

そんなことを気にしながら、私はジツと息をひそめ、静かにしておいて……先生とマイスさんの声に集中することにした。

「もう、コロナったら。そういうた連絡はちやんとしておかないとダメじゃない！ トトリちゃんが怒るのも当然だよ」

「だってー、こうやってお茶会するのって久しぶりで嬉しかったから、ついうっかり……。そ、それに、マイス君とアトリエでのんびりお話するのも……ああっ!? お仕事のことを嫌いとかそう言うわけじゃないし、このないだのお泊まりの時のお喋りが退屈だったとか、そういうことじゃないよ!? ホントだよ!？」

「うーん、そう言って貰えるのは嬉しいんだけど、ソレはソレ、コレはコレだと思うよ？ それに、これからの事を考えると連絡とかもつと細かいこととかも、しっかりやっていけるようにしないと絶対苦労することになっちゃうと思うんだ」

「これからの事」……？ はうわあ!? つそそそ、それはその、大事だよ？ でもでもっ！ 今はそういう話は関係無いんじゃないか

なーって！ ああっ、けど、そういう話が別に嬉しくないってわけじゃなくって、むしろ、その……う、嬉しいけど……」

「関係無い」って、そんなこと無いと思うよ？ やっぱり、そういった細かいところから気を付けていかないよ。ほらっ、『学校』の授業も連絡や報告をしないと他の教科との連携も上手くいかないだろうし、『学校』全体の運営にも影響が出ちゃって大変なことになりかねないからさ」

「そ、それは……あれ？」

「……ん？ どうかした？」

「あ、ああー！ 「これからの事」って、『学校』のことかっ！」

「うん、そうだけど……コロナは一体、何だと思ってたの？」

「あはははっ……私、てつきり、『結婚』の事だとばかり思っちゃってたー……」

「えっ」

「あっ」

「……………」

見つめ合う先生とミスさん。

身体ごと完全に向き合う……なんてことそなかったけど、それでも鼻先同士が10cmほどしか開いていない状態で目と目を合わせているらしい、とのこと。見ているコツチが恥ずかしくなってきたきさうだ。

……というか、フリーーさんやリオネラさんの妄想を聞いて「先走り過ぎ」なんて思ってたけど、今の会話を聞いていると案外遠い未来じゃない気がしてきた。

「とりあえず、その『フラム』は仕舞いなさい？」

「ああっ！……ごめんなさい、つい」

アラニーヤに言われて、自分がいつの間にか爆弾である『フラム』を取り出してる事に気付いて、驚いてワタワタしてしまいなながらもソレをポーチの中にした。しまった。

そんな様子にホロホロが呆れた様子で「ヤレヤレ」と首を振った。

「二つい」で爆弾爆発させられたら、たまったもんじゃねえけどな……」

そう言われても……。

本当に、自分でも気付かない内に手に『フラム』を持ってしまったて……。

でも、なんでかな？　なんだか、間違った事をした気はしてないんだよねえ……？

それにしても……

二人の空間を作っちゃっているロロナ先生とミスさん。

それぞれ勝手に妄想に浸り始めてしまったファイリーさんとリオネラさん。

何にも理解してないのか、それとも見てみぬふりなのか、いつも通り自由気ままなちむちゃんたち。

……「お茶会」というのも名ばかりの、よくわからない状況になっちゃってるアトリエ。

「……もうギルドに行っちゃっていいかな？」

「いいと思うぜ？　こんな状態だし、黙って出てっても誰も文句は言わねえよ」

私の呟きに反応してくれたのはホロホロだけで、他の人たちは……うん、聞いてないね……。

私はついついため息を吐いてしまいつつ、静かにアトリエから出ていった。

冒険者ギルド

逃げるようにアトリエから出ていった私の行先は、当然『冒険者ギルド』。

私の予想だと、もしかしたらクーデリアさんからの用事っていうのは何にもないのかもしれないけど……。でも本当に何か用事があったらいけないし、他に何か用があるってわけでもなかったから、行ってみることにした。

そうしてたどりついた『冒険者ギルド』なんだけど、入ってすぐに見えるクーデリアさんがいるはずの受付カウンターに見たことがある人が居ることに気付く。

それは、ついこの前会ったばかりの人だった。

「あれって……トリスタンさん？」

トリスタンさんって確か、この国の大臣さんだったよね？ そんな印象全然無いけど。

『冒険者ギルド』って国営してるらしいから、もしかしたらそう言う運営関係で何かあったのかな？ ……もしかして、クーデリアさんが言ってたっていう用事っていうのも、それ関連で？ って、そんな重要そうな話、私じゃなくなってるってロロナ先生のほうに持って行くよね。

じゃあ、どうしたんだろう？

私がそんなことを考えながらも歩いていくと、トリスタンさんの背中中で隠れて見えなかった受付にいたクーデリアさんが、私に気がついたみたいでヒョッコリと横にズレて顔を出し、コツチに小さく手を振りながら安心したような顔をした。

「ああ、来たのね。ちょうどいいところに……って言いたいところだけど、あんたからしてみれば、一難去ってまた一難かもしれないわね」「一難」って、やっぱりお茶会のこと分かって……でも、「また一難」っていうのはどういう……？」

トリスタンさんの隣——とは言ってもこの間の事もあるから2m

くらい離れてすぐには手が届かないようにして——に私が立ち、疑問が口に出てしまいながら首をかしげると……視界のはじめでトリスタンさんがコツチに向きなおって行くのが見えた。

……こ、公衆の面前だし、私は先生とは違ってトリスタンさんとはそんなに交友があるわけじゃないからあんなことはないはずだけど……どうしても、ちよつと身構えてしまう。

視線の先、柔和な笑みを浮かべるトリスタンさんが、その口を開いた

「やあ、子猫ちゃん。キミのその長く美しい髪が、今日は一段と輝いて見えるよ」

「はあ……どうも?」

……?

「あの、クーデリアさん」

「あー、コイツの言葉は本気にしないほうが良いわよ。特に、今日はいつにも増しておかしいから」

「え? いつも通りじゃないんですか?」

「なるほど。ロロナのそばに居たあんなの中ではこういうイメージなのね、コイツは」

だって、先生にこういうことよく言ってるし……。

それに、以前に先生から聞いた話じゃあ、トリスタンさんは昔から先生が恥ずかしくなるような歯の浮くセリフをポンポン言ってるわってらしいから、今くらいのは普通なんだと思うけど?

……でも、あの時先生は「冗談で、からかってきてー!」なんて言ってたけど、今思えばそれってトリスタンさんは冗談じゃなくって本気だったんじゃない?……?

あれ? なら、なんで今私はトリスタンさんにあんなこと言われたんだろう

まさか、先生から私に鞍替えとか!?

「とにかく、おかしいのよ。ついさつきまでココと一緒にいた前大臣なんて頭抱えてたくらいで……」

「んー……なんとなくわかった気はしますけど、そんなにですか？
他にも何か……？」

「無断欠席・遅刻が無いどころか誰よりも早く仕事はじめてて、今日の分どころか溜まりに溜まってた仕事まですでに全部終わらせて来たらしいのよ」

「それが普通なんじゃ……というか、普段どれだけサボってるんですか？」

大臣さんがどういう仕事なのかっていうのは私もよくは知らないけど、それでも全体で見たらかなり偉くって重要な役職だとなんじや……？

「さてよ？ 村長なんていう村で一番偉い役職についているはずの
マイスさんが、お祭り以外の街の運営にはほとんど関わってなかったりするように、大臣さんっていうのも実はそんなに対して仕事が無かったりするのかな？」

「……いや、マイスさんを基準に考えるのも何かおかしい気がするけど。」

「それにしたってよ。言動だつて、一時期からそんな使わなくなった口説き文句みたいな軽口も、誰彼構わず言ってるってレベルなってるし……こんなこと言っても、特に気にしないで無反応だから、不気味というか気持ち悪いというか」

「う……それは確かにいつも以上に変なのかも」

「ああ、やっぱりアレってやっぱり、基本コロナ先生だけに言ってたんだ。それを冗談扱いされてた……さすがにちよつとトリスタンさんに同情しちやいそうかも……」

「それにしても、トリスタンさんがおかしくなったのって……昨日の今日だし、間違い無くあのせいだよ……？」

「もしかして……ロロナ先生に振られたから、おかしくなったんじゃないか？」

「振られた!? え? ロロナがマイスに告白しただけじゃなくて、トリスタンがロロナに告白してたの? だったらこんな風になって……いや、ロロナの気持ちについては前から知ってたはずだし、それならもつと前からなってもいいはず……って、あら?」

最初こそ驚いてたクーデリアさんだったが、思い当たること自体はあるみたいで納得したみたいで頷いたりしてた……んだけど、その途中にトリスタンさんの様子に変化があつて、私とクーデリアさんはソツチに目がいった。

「ううっ!? ろ……ロロナ? こく、はく、マイス……っ!? うっ……!!」

まるで頭が痛いかのように頭を抱えたトリスタンさん。そして数秒間痛みに悶えるように動いた後、ハッと顔を上げて目を見開いた。

「そうだっ! あの時、ロロナを……それで……あの人が……!!」
その時、トリスタンさんに電流走る!

「うばあうらあっ!?!」

比喩とかじゃなくって、本当にビリビリバリバリと。

青白い光と火花が散るような音がしながらトリスタンさんがビリビリしびれ……おさまったと同時にその場に倒れて……!?!

「クーデリアさんっ!? 今、首に何かか着いてて、そこから雷が……!」

「あたしは何も見えてないわ」
なんで、そんな遠い目をして明後日のほうを見ちゃってるんですか!?!

床に転がって時折ビクンツビクンツと跳ねてるトリスタンさんの首には、やっぱり何か……首輪? ううん、たぶんおしやれな

「チョーカー」ってヤツだよな？ さっきのは私の見間違いで、「電流が流れる首輪」なんていう創作物に出てきそうな拷問器具じゃないよね？

と、不安を無理矢理奥底に閉じ込めようとしている最中、ふと難しい顔をしたクーデリアさんが小さな声で呟くのが、偶然にも私の耳にすっと入った。

「こんな変なことできるのってアイツくらいじゃ……？」

「あいつ？」

「……。世の中、関わらずに済むなら、それに越したことのない奴もいるのよ。詳しいことはわかんないままだけど、今のコイツに関わるのは止めといた方がいいわよ、本当に」

やっぱりどこか遠い目をしているクーデリアさんが、下手をすれば私のお母さんの行先の事を話してくれた時と負けず劣らずな真剣さで言ってきた。

何かわかったみたいだけど……クーデリアさんの言う通り、私は知らないほうが良いのかなあ？ そこはかたなく危険な香りがするし……。

なんだか納得しきれていない様子の特トトリが『冒険者ギルド』を出て行った後。

クーデリアは、カウンター越しの床に倒れているトリスタンを見下ろしながら独り言を漏らしていた。

「そうすると、あの時アイツが言ってた「余計なことに時間を取られた」っていうのは、もしかしてコイツのこと……？ だとしても……」

「め、眼鏡を、かけた……素敵な、お……ねえさ………ん」

「アイツがコイツに……というか、男に好かれたいなんて思うわけ無

いと思うんだけど……何でこんなことになってるのかしら？」

職人通り

「はあ……どうしよう。抜け出す言い訳にはなったけど、結局はギルドの方からも追い出されちゃった」

気を抜いていたら、どうしてもため息が出てしまうくらい憂鬱とした気持ちになってた。

このままアトリエに戻る……なんて選択肢は無いわけじゃないけど、できるなら取りたくない。

じゃあどうするのか？ って話なんだけど……

「イクセさんのところは……パイ食べた後だし、飲み物だけで居座っちゃうのも悪いよね？ ハゲルさんのところは……暑いよね。時間つぶしに入れるような場所じゃないよ」

あとは、雑貨屋さんとか……あそこは、さっきのトリスタンさんは別の意味で変な男の人達が居るからなあ……。

ミミちゃんのお家は……行ったこと無いからどこにあるかわからないし、いきなりお邪魔しちやってもきつと迷惑だよね？

「なら、もういつそのこと『アランヤ村』に帰っちゃおうかな？ 別段、コッチでやらなきゃならないことがあるわけでもないし……」

そうと決まれば『トラベルゲート』でひとつ跳び……なんだけど、なんとなくで歩き続けていたせいでいつの間にか『先生のアトリエ』が見えてくる場所まで来てしまった。

……そうなってくると、どうしてもあの後どうなったのかアトリエの中の様子が気になってきちゃって……

「大丈夫かなあ？ あのまま放置してきちゃったけど……リオネラさんかフィリーさんがミスさんを刺しちやったりとか、そんなことになってないよね？」

……ここまで来ちゃったし『アランヤ村』帰る前に、様子見るだけ

見ていてもいいんじゃないかな？

別に、アトリエの中に入らなくても窓からソーツと覗くくらいで、わざわざこれ以上頭を突っ込まなくてもいい感じで……

「そうそうっ。ちょうど、あの人たちみたい……あれ？」

近づいていっていると、よくよく見てみればアトリエの窓の脇に男の人と女の人の二人組が張り付いているのに気がついた。

最初は「ドロボウ？」って思ったけど、中に先生たちがいるはずだし、下見にしては白昼堂々とし過ぎだし。

それに……

「あの人たち、どこかで見たことあるような……無いような？」

確か、『青の農村』のお祭りで何度か見たことが……

「ぐぬぬぬっ……！ 複数の女性を侍^{はべ}らせるとは、けしからん奴だ！ そんなふしだらな男にロロナを渡すなど……！ 私は認めないぞお!!」

「認めるも何も、最後^{けっきょく}は本人たち次第でしょう？ それに……」「何人もの女の子に好意を寄せられちゃう男性」と「結婚してるのに他所の奥さんにうつつをぬかす男性」、どっちが「ふしだら」かしら……ね？」

「……ハイ」
「けど、ロロナは苦勞してそうねえ……。邪魔しちや悪いって気もするけど、せつかくだからちよっとお邪魔しちやおうかしら？」

そう言っ窓から離れて玄関のほうへと行く女の人と、その後を遅れてついて行く男の人。

その横顔を見て、私の中のパズルのピースがカチツ！ とはまる音がしたような気がした。

「ああっ！ そうだ!! あの二人、確か先生のお父さんとお母さんだ!？」

思い出すのは、お祭りで奮闘する男の人とそれを応援する女の人。

……そして、前におねえちゃんやメルおねえちゃん、ピアノやちやんとミスさんが一緒に雑貨屋さんで買い物をした時に、先生とそれを追いかけた私が飛び込んでいつて「またティファナさんのところに来てたの、お母さんに言うからね！」と先生に怒られていた男先生のお父さんの人。

「……………え？　先生の御両親が『ロロナあのアトリエ中』に？　ど……………どうしよう……………!?!」

止めるべきか、ついて行くべきか、はたまた見てみぬふりをするか……………

私の頭の中がグルグル回り……………お腹がキリキリと鳴ったような気がした……………。

ロロナ【*10-3*】

【10-3】

ロロナのアトリエ

トトリちゃんやちむちゃんたち、マイルス君にも手伝ってもらって、アトリエにりおちゃんたちやフリーちゃんを招いた「お茶会」。

途中、伝え忘れていたクーちゃんからの伝言をトトリちゃんに言っ
て、その後気付いたらいつの間にかトトリちゃんがアトリエからい
なくなったりもしたんだけど……もしかして、クーちゃんの言っ
た「用」に心当たりがあつて、早めに行きたかつたのかな？ わたしが伝
え忘れちゃつたことを怒つてたし、もしかしたらそうなのかも。

ま、まあそんなこともあつたけど「お茶会」自体はそう問題も無く、
おしゃべりしながらみんな楽しめてたと思う。

途中でいなくなつちやつたトトリちゃんも、用意してた『香茶』や
マイルス君が用意してくれた厳選素材の『ベリーパイ』はキレイサッパ
リ美味しく食べきつてくれてたんだから、そっちのほうは何にも問題
無かつた……はず。

りおちゃんやフリーちゃんだつて一生懸命口をもごもご動かし
て食べてたんだし、やつぱり味の方は心配する必要なんて無いよね。
なんて言つたつて、マイルス君が選りすぐつた素材で作つた『ベリーパ
イ』なんかもん！ それに、わたしだつていつものパイ作り以上に「美
味しくなーれ！ 美味しくなーれ！」つてぐるぐるかき混ぜたん
だから!!

そんなこんなで、パイたべながら、お喋りしながら、だら〜つと続

いてた「お茶会」だったけど……そんな中、アトリエに「コンコンコンツ」ってノックの音が軽く響いた。

りおちゃんやフィリーちゃんは聞こえてなかったのか無反応だったけど、わたしと話してたマイス君も気づいたみたいで……でも『ロロナのアトリエ』の店主はわたしだし、マイス君に向かって小さく頷いてからわたしは玄関のほうに向かって返事をした。

「はーい。……誰だろ？」

一瞬、いつの間にかいなくなってたトトリちゃんの顔が思い浮かんだんだけど、すぐに「でもトトリちゃんならノックはしないかー」って自分の中で答えが出た。

他となると、お仕事のお話かな？ 昔みたいに「お仕事しないと！」って必死になってやらないといけないほど追い詰められたりもしてないけど……だからといって、「お茶会中だから」って理由で蔑ろにするわけにもいかない。やっぱり、なんだかんだ言って自分が調合したが役に立って喜んでもらえたら嬉しいし、自分で言うのも変かもしれないけど、頼られちゃうと断れないんだよねー……。

んん？ そういえば……時々、『ロロナのアトリエ』にミミちゃんやマークさんなんか来て、トトリちゃんから錬金術で作ったものを貰っていたりしてることもあったけ？ もしかしたら、そういうのかも？

そんなことを考えながら、アトリエの玄関口のほうへととっとこ歩み寄って行ったんだけど……わたしが開けるよりも一足先に玄関戸が開いた。

そこから、アトリエに入ってきたのは……

「お邪魔しちゃうわ」

「お母さん!? それに、お父さんまで……!」

アトリエに入ってきたのは、お母さんとその数歩後ろをついてきたお父さんだった。

昔みたいに定期的に家に帰ってたころと比べ、アトリエの店主になつてからは合う機会がめつきり減っていて……それでも時々なん

となーく会いにいったり、偶然会ってお話したりもしてた。

けど、こうやっていきなりアトリエに来るのは初めて……あれ？

そういえば、昔、ほむちゃんにお留守番頼んでお買い物行って帰ってきたらお父さんとお母さんが居て……ってことがあったような……？

と、いきなりの訪問に驚いて、頭の中がちよっとグチャグチャになってなっちゃって目をパチクリさせながら一瞬固まっちゃったんだけど……それを見てかどうかはわかんないけど、お父さんがズズイツと前に出てきて、その勢いのままわたしの目をジッと見て言ってきた。

「ロロナっ！ 色々考えたがロロナにはまだ早い——」

「ア・ナ・タ？」

「ハイ……」

「??？」

何かを言いかけて……でも、すぐにお母さんにビシツと言われてシヨンボリ落ち込むように止まっちゃうお父さん。

……それで、一体何が「早い」んだろう？ 「ロロナには」って言うてたし、間違い無くわたしと無関係じゃないと思うんだけど……ううん、中途半端にしか聞いてないせいかな余計に気になっちゃうよ……。

色々気になるはするけど、とりあえずはこうしてアトリエに来た用件を聞かないと。

「それで？ いきなり来ちゃったりして、今日はどうしたの？」

うーん……昔からだけど、二人で旅行に行ったりするのが好きだし、旅行で必要な物で錬金術で作ってほしいものがあつたとか？ それとも、ただ単にお喋り氏に來ただけ？

そんな予想をしながら、二人に聞いてみたんだけど……

言葉を返してきたのはシヨンボリしてるお父さんじゃなくって、なんでかやけにニヤニヤしてるお母さんだった。

「どうしたも何も……その前に、ロロナこそ私たちに何か言うことがあるんじゃない？」

言うこと……？ 何かあったっけ？

心当たりが無くて首をかしげちゃっていると、お母さんが今度は頬を膨らませて言ってきた。

「時々、耳にはしてただけ……ようやく、噂の渦中のマイルスくんとかつついちゃったのよね？ もうっ、秘密になんてしなくなっちゃったいいじゃない？ むしろ、色々相談しに来てくれてもよかったのよ？」

「え、えええっ!？」

ようやく、お母さんが何を言っているのかがわたしにもわかったっちゃった!!

いや、それはその、機会を見てちゃんと報告しなきゃって思わなくもなかったけど……。

でも！ 二十ウン歳こになつてお母さんたちに相談っていうのもなんだか変な気がするし、それが恋愛関係ってことになる余計気恥ずかしさもあつて相談しようとも思えないよ。

っていうか、アトリエこにマイルス君いるのにそんなこと話さないで!？ものすつごく恥ずかしい!! ……けど、それを口に出して目の前で止めようとするのも、それはそれで恥ずかしい気が……!

「ふふふっ、やっぱりあの時私が睨んだ通り、コロナはマイルスくんとお似合いだと思っわ〜」

「いいや、私はまだ認めたわけじゃ……アイタタツ!？」

また何か言いかけたお父さんが、今度は靴こごしに足の甲をお母さんに踏みつけられて、結局はやっぱり途中までしか言えてなかった。

気になる点はむしろ増えた気さえするけど、それでも一応は状況は飲み込めた。

「えっと、つまり今日アトリエに来たのは、その……私とマイルス君のこととで？ ……って、はうわあ!？」

そこまで自分で言つて、途中であることに気付いて、つい変な声をあげちゃった。

マイルス君とわたしは、はれてお付き合いすることになったんだけど

……実のところは、途中勘違いもしちゃったりしたけど、色々とアドバイスをくれたり背中を押してくれたたくーちゃんにはお付き合い^そ合^こい^とする^とことを報告した。

でも、実はやっぱりちよつと気恥ずかしさもあって、他にはまだ誰にも話して無かったりする。

つまり……今マイルス君以外でココにいるりおちゃんやファイリーちゃんにもまだ秘密で、でもそれが今バレちゃったわけで……何て言葉で表現すればいいかわわからないけど、「隠してた」ってこともあつてか顔から火が出そうなほど顔が熱くなっちゃつて……!!

「いや、これはあのね、別に私とマイルス君が、つてことじゃない……わけでもないんだけど！ だから、そのつ………ん？」

ハツとりおちゃん^ふとファイリー^たちゃんがいる方に向きなおつて、誤魔化そうとして……でも、やっぱりウソなんて言えなくつて。

結局よくわかんないことを、自分でもよくわからないまま口走つてしまつてただけど……ふと、視線の先にいるふたりの様子がなんだかおかしいなことに気がついた。

「例のやつだね……！」「お義父さん、お義母さん！ 娘さんを僕にくださいー！」つていう……ふふふつ……!!」

「親、公認……かあ………素敵な、響き……だ、ね……」

「いやあ、まだ決まったわけじゃ……ああ、そういうことね」

「……そこは、羨んじまつても仕方ねえな。……にしても、二人揃つて本当にダメダメになつてんじゃねえか」

「……あれ？ なんだか、思つてたのと反応が違う気が……」

隠してたことをとやかく言われたり、お付き合いすることを軽く茶化されたり、告白の事を根掘り葉掘り聞かれたりするものとばかり思つてただけど……。

ファイリーちゃんは何処見てるかわからない目で、何かハイテンションになつてた。

そしてりおちゃんはポツポツと何か呟いてて……それに対して、らにやちやんとほろくんが……うーん？ どういう意味なんだろう？

「これはヒドイ……」

「あれ？ この声は……？」

ポツリと聞こえてきた聞き覚えのある——というか、少し前に聞いたばかりの——声に、わたしは周りをキョロキョロ見渡し……お父さんとお母さんのさらに後ろ、玄關の脇から覗くようにひよこつと顔の一部を出しているその姿を見つけた。

「トトリちゃん？ そんな所で何してるの？」

「気付かれた!? ああつ、その、これは覗いてたわけじゃなくって……そうっ！ タイミングを見計らってたんですー！」

「なんの？」

りおちゃんとファイリーちゃんを除く他の全員の視線を集めた状態で何かを必死に伝えようとしているのか、わちやわちやとよくわからない身振り手振りを繰り返すトトリちゃん。

そんな姿がまたカワイイ……っていうのはひとまず置いて、いったいどうしたんだろ？

「うーんと、えーつと……アレですよ！ アレ！ ほらっ、クーデリアさんの所に行つて、その時に頼まれたことでちよーどちむちゃんたちに用があつてー」

「「ちむ？」」「ちくむく……ちむっ!?!」

パイをモグモグ食べたり、ゴロゴロしたり……。

部屋のあちこちで自由気ままに過ごしてたちむちやんたちが、トトリちゃんに呼ばれて一斉にトトリちゃんそっのほうちを向いた。……一人、遅れてたけど。

「ああっ。でも、ギルドのことが色々わかる人もほしいし、人でもほしいからファイリーさんとリオネラさんにも手伝ってほしくつてー。それで、いつお茶会の間に入ろうか様子を見てたんですー」

「だから、ここにいたんですー」って言って玄関脇に立ってたトトリちゃん。

大体事情はわかった……んだけど、わたしの中にはちよつとした疑問というかあることが気になってちよつと不安になった。

偶然にもマイルス君も似たような気持ちを持ったみたいで、わたしよりも一足先にそのことを口にして、わたしも続くように言った。

「そんなに人手が必要なら、僕が手伝うよ? いったい、どんな用事だったの?」

「トトリちゃんが頼ってくれない……やっぱり私みたいな先生じゃ頼りない!? 困ったことがあったなら、わたしにすぐ言ってくれたらいいんだからね? ねっ!? 何だっしてしちゃうよ!」

「マイルスさんが来ちゃダメなんですよ! このお人好し!! あと、先生もそんなところで張り合わないで下さい!」

珍しく強めの口調でトトリちゃんにビシツと言われちゃって固まっちゃうマイルス君とわたし。

……だっただけど、ふと「あれ?」って思っただけとマイルス君のほうを見ると、偶然か何かマイルス君もトトリちゃんの方じゃなくってわたしのほうを見てきて……そして同じことを思ってたのか、二人揃ってコテンツツと首をかしげてしまった。

(叱られたような気もするけど……何か変?)

トトリちゃんに言われた内容がなんだかしっくりこないっていうか、間違っない気もしないわけじゃないけど、なんだか納得できないというか、結局のところどういふことで怒られたのかわかんない漠然とし過ぎた感じというか……?

マイルス君とわたしが、そんな風に「はて?」と首をかしげているうちに、足早にアトリエに入ってきたトトリちゃん。未だに何か言ってるりおちゃんとフィリーちゃんの手を取り引っ張って立ち上がらせるとそのまま玄関のほうへと連れて行くこうとする。

「ちむちやんたちっ！　ファイリーさんとリオネラさんを引っ張り出すの手伝ってー！」

「「ちむー！」「」」

元気の良い返事をして、ふたりの計四本の足あしにそれぞれ一人ずつ付き、腕を引っ張るトトリちゃんに合わせて足を押しちむちやんたち。

そうして、トトリちゃんちむちやんたちの手によって運び出されてくりおちゃんとファイリーちゃん。

お父さんとお母さんが先に避けといて出来たルートを通って玄関から外へと出て行ったかと思えば、トトリちゃんだけがすぐに戻ってきて勢い良く頭を下げたかと思ったら、その後すぐに玄関戸を閉めちやっつて……あとは、ほんの少しだけ表の『職人通り』の石畳を叩く靴の音と何か引きずられる音が少しずつ小さ遠くないっていくのが聞こえるだけだった。

「結局、何だったんだろ？」

「うーん……わかんない」

何が何だったのかわからないままのマイス君とわたしが、また揃って首をかき上げてしまい……

「あらあら。気を遣わせちゃったかしら？」

お母さんのポツリと漏らした言葉を聞いて……もやっぱり何のことでかわからなくて、わたしはつい眉間にシワを寄せちゃった。

……とりあえず、まだ残ってるはずだし、お父さんとお母さんに『ベリーパイ』と『香茶』を用意してこよっかな？

ロロナ【*10-4*】

【*10-4*】

ロロナのアトリエ

いきなりアトリエにやってきたお父さんとお母さん。

ギルドから戻ってきたトトリちゃんが、りおちゃんとフィリーちゃんをちむちゃんたちと一緒に運んでいってしまったから……それから、わたしはお父さんたちに『ベリーパイ』と『香茶』を用意して出したんだけど……

「ウマイ！ やっぱりロロナの作った『パイ』は世界一ウマイ『パイ』だ！」

「そうねえ。私もさすがに『パイ』作りじゃあもうロロナには敵いそうにないわー」

「母さんの料理も、ロロナのパイも食べられる私は、とんだ幸せ者だな！」

『ベリーパイ』を美味しくそうに食べながらそんなお話をする二人。

「そ、それほどでも……？」

普段なら、お父さんとお母さんの言葉にもうちよつと素直に喜べたんだろうけど……今のわたしにはそれができそうになかった。

「それにしても、『ベリーパイ』に使われてる『コバルトベリー』、とても甘くて、けどほどよく酸味もあって……ウチで普段食べてるのと美味しさが全然違うわ」

「いや、これはロロナの調理が上手かっただけじゃないかい？ うん、そうに違いない」

「素材が良くないとここまで美味しくはならないわよ。ウチも『青の

農村』産の物を買ってるんだけどねえ……ふふっ、愛情のなせる業わざかしら？」

マイス君が用意してきてくれた『コバルトベリー』のおいしさについてそれぞれ感想を言う二人。

お父さんはなんだか少し辛口気味な気がするけど、逆にお母さんの方はちよつと変な言い回しだけどマイス君のことを褒めてるっぽかった。

「あはははっ……」

けど、当のマイス君は誤魔化すかのような何とも言えない愛想笑いだけで、普段言いそうなお札の言葉や『コバルトベリー』物についての説明を全くしそうな雰囲気じゃない。

あと、質が根本的に違うのは、『青の農村』産』つて一言で言っても必ずしもマイス君が作ったものとは限らないからだと思うよ、お母さん。

そんな、ちよつと「らしくない」様子のマイス君だけ……その気持ちはよくわかるよ。

だって、お父さんとお母さんがアトリエに来たのが、マイス君とわたしがお付き合いしてるってことについてのお話があったから。

わたしだって緊張してるんだから……正確に言えばちよつと違う気もするけど、マイスくんからしてみれば「彼女のご両親へのご挨拶」なわけで……当然、わたしより緊張するに決まっていた。

その証拠に……

「すー……はー……すー……はー……」

耳を傾けてみれば、静かにだけど確かに大きくゆっくりとした呼吸が聞こえてくる。

ちよつと視線を移してみればわかるけど、腕や全身での身振り手振りは無い普通の体勢のまま、マイス君が深呼吸をしているのがわかる。

「村長』っていう役職だけに、マイス君は人との面会とかは経験もあつて慣れてしている物だと思つてたけど……わたしのお父さんとお母さん親に会うつていう今日のは、流石にわけが違ったみ

たい。

とにかく、こうやってマイルス君がいつもとは違ってすっごく緊張しちゃってるんだから、こういう時こそわたしがしっかりしないと……！

「おかわり！……と言いたくらいおいしかったが、これ以上は流石に夕飯に影響が出そうだからお終いにしとこうか」

「とても美味しかったわよ、ロロナ。それにマイルスくんも♪」

……つと、そんなことを考えたりしてるうちに、お父さんとお母さんは『ベリーパイ』を食べ終わってしまったみたいで、簡単に感想を言いながら残りの『香茶』をゆつくりと飲んでた。

「ど、どうも……」

偶然にも何とも言えない返事を一緒にしちゃってたマイルス君とわたし。

これで一区切りついたわけだし、そろそろ例の話本題に移っちゃいそうかな……？

「美味しい『パイ』もいただいたことだし、そろそろ……」

予想した通り、お母さんが本題を切り出そうとした——

「あっ、ちよつと待って！」

——だから、わたしはそれを一足先に止めてしまうことにした。

「そのことなんだけど……わざわざ来てもらったけど、今日は一旦帰って！」

「なっ!? ロロナっ、まさかとは思うが、もう口も聞きたく無いとかそういうことじゃあ……！ 父さんは久しぶりにロロナとゆつくりおしゃべりが——」

「アナタ。ロロナは「一旦」って言うてるでしょ？ きつと今日は何か都合が悪いのよ……そうなんでしょ？」

驚くお父さんをなだめたお母さんが、いつものように薄っすら微笑

んだ顔で私を見ながら確認を……そして「なぜなのか」という理由を話すよう催促するように聞いてきた。

そんなお母さんにわたしは小さく頷いてから口を開いた。

「二人ともきつと知ってると思うんだけど……わたしとマイス君はずっと仲良く生きてきてただけど、その……正式にお付き合いって感じになったのって、本当につい昨日最近なの」

むしろ、お父さんとお母さんの耳が早すぎるくらいなような……。

いや、でもマイス君にはけっこう最近まで結婚の噂話があったし……『青の農村』でわたしがマイス君の家に行ったことや、今日の午前中『冒険者ギルド』にくーちゃんに報告しに行った時のことあたりで話が漏れちゃったりして、一気に広がっちゃったのかも。

ううん、気になるところだけど……とにかく、今は目の前の事をなんとかすることを第一にかんがえないとっ！

「わたしは「ずーっと一緒にいたい」って思うくらいマイス君の事が大好き。マイス君も同じように思ってくれてるって知ってる。……だけど、まだ「これからの事」を相談しあったこと無いんだ。だから、マイス君とわたしで一回ちゃんと話し合いたい。それから、改めてお父さんとお母さんとお話がしたいの。それに……」

視界のはじっこにチラリと見えるマイス君。

やっぱり緊張でガツガチに固まってて、それどころか手なんかは小さく震えてた気さえする。そして……わたしがお父さんたちに「一旦帰って」っていった時は、目をまん丸にして驚いてた。

どうしてそこまでの反応をするのかはわからない。マイス君が何を考えてるかは全部が全部わかったりするわけでもない。でも、だからこそ、こんな様子のマイス君を見ていたら「わたしがなんとかしてあげないと！」って思わずにはいられない。

わたしはほんのひと息だけ間をあけて、言葉が続けた。

「……今度、わたしたちのほうから家に行くよ。だから、今日は一旦

帰ってくれないかな？」

わたしがそこまで言うとお父さんとお母さんは顔を見合わせて……それからコツチを向いて言ってきた。

「そういう事情なら、ちよつと時間を空けた方が確かに良いわよね」「しかしだな……まあ、母さんがいいなら、私もかまわないが……」

お母さんはちよつと申し訳なさそうに、お父さんは納得しきつては無い様子で。それでも二人揃って頷いてくれた。

これで、とりあえずは大丈夫そうかな？

ミス君とは、これからのことを話しながら、しつかりと原因を探ったりもして何とか緊張をほぐしてあげないと。私には何をしてあげられるかはわからないけど、何かできることはあるはず。

「あのっ！」

ここまででお開きで、わたしがお願いしたようにお父さんとお母さんが帰ろうかっ……というその時、声をあげて引き止めたのはミス君。

「僕には、コロナとの、娘さんとのお付き合いやこれからのことよりも先に、お二人に伝えておかなきゃいけないことがあるんです」

一体、何を……？

最初はそう思ったけど、どういうことなのかすぐにわかつちやつた。

「僕は、元々ここから凄く凄く遠い国の者です。それに記憶喪失で、ところどころ思い出してはいますけど、ここ十年以上は全然思い出せなくなつて……虫食い状態もいいところなくらいだと思います」

「ああ、そうらしいね」

「前にコロナから聞いたことがあるわ」

ミス君の言ったことに頷いて返すお父さんとお母さん。

そして、ミス君は……あの事を言うつもりなんだと思う。

ちよつと考えればわかつちやうこと。不器用なくらい真面目で、一

度決めたらまつすぐ誠実でいようとするマイルス君らしい。

「それとは別に……僕は周りの皆に隠してたことがあるんです」

でも、わたしのときみたいに不安でいっぱいだっていうこともわかった。

このことを話さないといけないって気負っちゃってたから、余計に緊張しちやって……あんなことになってたんだ。

そんな今のマイルスにしてあげられることは、わたしがしたいことは

……

「っ……ロロナ」

「うん、大丈夫だよ」

横からスツと手を伸ばし、マイルス君の手を握ってあげる。

キュツと握る。優しく、でもしつかりと。わたしの気持ちが伝わるように。

——何があってもわたしはマイルス君の味方だから。

……本当に通じたのかはわかんないけどマイルス君の表情が少し緩んで、そしてわたしに一瞬微笑んでからまた真剣な目をしてお父さんたちの方を向いた。

「僕は人間とモコモコっていうモンスターを両親に持つ『ハーフ』なんです。だから、僕は人間でもありモンスターでもあり、こうして両方の姿を持っています。今、こんなことを言うのはおかしいかもしれませんが、今度ご挨拶に行く時に何か……いえ、言いたいことがあるなら、今のうちに——「関係無い」——えっ」

後半、少し言葉に詰まりながらも続いていたマイルス君の話を、途中で止めたのは……お父さん……？

「君が何処の国の生まれだろうと、君のご両親がどのような方だろうと関係無い。……もちろん、ロロナはそのことを知っていて、それで

も彼と「一緒にいたい」と思っているんだろう?」

「う、うん」

ちよつと普段見ないような顔で聞いてきたお父さんに驚いちやいなながらも、私は何とか頷いて見せる。そうしたら、お父さんはその答えに満足したのか大きく頷いた。

「なら、私から言うべきことは無い。なぜなら——他でもない、私たちの愛娘のコロナが君の事を認めただからな。なら、それ以上そこを追及する必要は何処にもないさ」

「お父さん……」
ライアン

「だが………コロナとの結婚は、私は認めんぞー!!」

「ええええく!?」

これまでにないくらい真剣なお父さんはどこにいったの!?

そう声に出してしまいそうなくらいの、空気が一変するお腹の底から嘔き出してくるお父さんの叫び………って

「ちよつと待って、お父さん! さっきの話の流れは!? なんだかい話にまとまりそうだったよね? ねえっ!? どうしてそうなるの!?!」

「そうは言ってもだな、コロナ。それとこれとは話が別だ。第一、お父さんはまだまだ親離れさせる気はないぞっ!」

「子供だったわたしを置いて、お母さんと二人で旅行に行ったりしてたお父さんが言うことなの、それ!?!」

それに、わたしももう2X歳で、親離れがどうこうとか言わなきゃいけない歳じゃないんだけど!?!

「やっぱり、嫌、ですよ。僕みたいなのが自分の大事な娘と結ばれるなんて……」

わあ〜!? マイス君が凹んじやった〜!?

「そんな自分のことを悪いみたいに言わないで、マイス君!」

「そうだぞ! さつきも言ったように、そういうことは一切無いからそこは安心してほしい」

「じゃあなんでダメなの!? もしかして、特に理由も無しに……?」

「そつそんなこたーあないぞ? 理由はだな、その……えつとだなあ……」

そう言いながら視線が泳いじやってるお父さん。

……やっぱり、理由が無い?

「うわあ。お父さんの器が大きいのか、小さいのか、全然わかんないや……」

頭を抱える……とか、そんな風になってしまふよりも「呆れ」が勝ちやっつたため息が出ちやっつたわたし。

と、そんなわたしの耳に笑い交じりの優しい声が入ってきた。

「うふふつ。ロロナもマイスくんも、そんなに難しく考えなくつていいのよ?」

「お母さん?」

「そもそも、結婚は認めないぞー」つて言ってるのは照れ隠しみたいなもので……この人もこの人で、距離感を測りかねているって感じだから、そう深刻に捉えなくていいわよ?」

「んなっ! 何を言ってるんだっ、私は別にそういつた意図があったとか、そういうわけじゃ!」

さつきまでマイス君とわたしを向いたほうを向いていたお父さんだったけど、今度はお母さんのほうを見て何でか必死さを感じられる様子でお母さんの言った事を否定しだした。

でも、お母さんはそんなことおかまいなしに話しを続けてる。

「聞いてよロロナ。お父さんったら、マイスくんの結婚の噂話があったところから妙にソワソワしてて、私に……」

「ワー!? ストップ! ストップ!!」

より必死さを増してお母さんのお喋りを止めにかかるお父さん。

その様子を見てクスクスと笑いながら「わかったわよー」とようやくやめたお母さん。

……一体、何の話だったんだろう？

「あの……ロウラさんは、その、何とも思わないんですか？」

「確かに。お父さんの反応も予想外だったけど、お母さんはお母さんでなんだかあんまり驚いたりしてなかったみたいだし……マイス君が良い子だつてわかってたから？」

マイス君の疑問にわたしも続けて気になったことを言ってお母さんに聞いてみたら、お母さんは小さく首をかしげた。

「うーん？ ロロナが言うようなのもあったけど……なんて言うか、今更感いまざらかん？」

「えっ？ それってどういう……？」

「あつ、でもなんとなく言いたい事はわかるかも」

もしかしたら、わたしたちでも十分に慣れちゃってるくらいで『魔法』もそうだけど、そもそものマイス君が良くも悪くもとんがってるからなあ。そういう意味では常識外れのことには耐性ができちゃってるとか？

それ以外には……なにかありそうかな？ マイス君以外にもモンスターに変身できる人を知ってるか……流石にそれは無いよね。

「とにかく……マイスくんが一番不安だったんだろうことは、なんにも心配いらなかったってこと。だから……安心して、いつでも家うちに来ていいのよ？」

「……はいっ！」

お母さんがニツコリと笑いかけながら言った言葉に、マイス君は力強く頷いてた。

ええっと……これでとりあえずは一安心……なのかな？

「そ・れ・で？ 結局のところ、二人はドコまでいったのかしらー？」

「えっ」

より一層ニツコリ笑ってるお母さんに、わたしと……きつとマイルス君もドキリとして反射的に身を引いてしまったと思う……。

「口ロナもだけど、マイルスくんのほうも結構奥手みたいだから……ギリギリ『キス』までくらいかしら？」

「そ、それはそのー……」

「なっ、ななななんでそんなことをお父さんとお母さんの前で、赤裸々に発表しなきゃいけないのっ!？」

「なにい!?! その反応からして……キスをしたのか! お父さんはゆるさんぞおー!」

わたしの言ったことのどこがひっかかったのか分かんないけど、またお父さんが騒がしくなったー!?

職人通り

「何話してるのかはわかんないけど……アトリエ、すつごく賑やかだなあ」

フィリーさんとリオネラさんをアトリエから引っ張り出した後。

それから、偽装のためってわけじゃないけどどちむちゃんたちにはおつかいを頼んで行ってもらったんだけど……アトリエ横の路地に隠れた私たち。そこそこ音は漏れてるけど窓際に張り付いたりしないしと聞こえそうにないアトリエ内の会話を聞いたりはしてなかった。

気にならないわけじゃないけど……でも、やっぱり盗み聞きや覗きには罪悪感があるにはあるし、それが先生の親との大切っぽい話ならなおさら気が引けた。

それに……

「この二人から目を離すわけにもなあ……」

裏路地にいるのは、わたし以外には二人。

顔を両手で覆って、頭から足先まで真っ直ぐなままでうつ伏せに倒れた体勢でシクシク泣くフィリーさん。

膝と胸とアラーニヤとホロホロを抱いて座るリオネラさん。

「うん……やっぱりこれはヒドイありさまだよ……」

「何がかしら？」

裏路地の惨状を見ての独り言に言葉が帰ってきて驚いた私は、すぐにその声のした方……職人通りの表通のほうを見た。

「って、あれはウチの……あっちのあの子は……。ん？ アナタって、確か……」

そう言いながらフィリーさん、リオネラさん、私の順に見たその女の人は、何処かで見たことがあるような……。……。というか、今、裏路地で倒れて泣いてるフィリーさんに凄く似てる？

もしかして……？

「あー……もしかして、そこで倒れてるウチの妹が何かやらかしちゃった？」

「いえ、むしろフィリーさんは被害者というか……そんな、ケンカとか事件性のある大事とかじゃないんですけど」

そう言ったらビミョーに納得できて無さそうな不満げな顔をした女の人は、前にフィリーさんやロロナ先生から話に聞いてた「フィリーさんのお姉さん」なんだろう。確か、エステイって名前で、婿探しの旅に出たとか何とかでフィリーさんに仕事を引き継がせたらしいけど……？

でも、旅に出てるならなんで『アーランドの街』に？ お婿さんが見つかって帰ってきたとか？

「まあいつか。今日用があるのはアトリエだし……。ロロナちゃんはいるの？ いないならあなたに頼むことになるかもしれないんだけど

「？」

「そう錬金術おしごとの話っぽいことを私に聞いてくるエステイさんは、その様子からして初対面だけど私の事も知ってるみたい。」

「先生はいることはいるんですけど……」

「けど？」

「今お客さんが来てて、対応できないかもしれないかもしれない」

「そう言う」と「へえ」とエステイさんは感心した様子で声を漏らした。

「結構長い間見てなかったけど、ちゃんと一人前にやっていけてるみたいね……って、あのころのコロナちゃんじゃなくて稀代の錬金術士様なんだから当然と言えば当然かしら」

「そう言うってエステイさんはまた表通りのほうへと戻って、そしてそのままアトリエのほうに……って、えっ？」

「ちよつと、コロナちゃんの仕事っぷりでも覗いてあげようかしら♪」

「あつ………行っちゃった」

大丈夫かなあ？

エステイさんって、フィリーさんのお姉さんでけっこう大人なはずだし、空気を読んで大事なところの邪魔をしたりはしないと思うけど……なんか、やけに心配になっちゃってるんだよね……。

「やっぱり気になるからって、とりあえず表通りの様子を覗こうと思っ
て私も表通りそっちへと駆けていった……んだけど……」

「わっ！ もう戻ってきて……って、どうしたんですか!? 血イ!

口から血が出てますよ!? 吐いたんですか!? 一体何が……!!」

「……大丈夫よ。下唇を噛み千切りそうになっただけだから」

「大丈夫じゃない!? と、とりあえずお薬持ってるんで、使ってください
い!」

何がどうしてそうなったんだろう……?」

私がポーチから取り出した緊急用のお薬を手渡すと、「……ありがとう」とちよつとダルそうな声でお礼を言ってきた。

「なるほどねえ……。アッチがああなったから、ここでこの二人がコウなってるのね」

「あーっと……その、ご存知で？」

「うん、まあなんとなく、この二人はそんな雰囲気があるなあとは思ってた」

そう言うエステイさんの目はどこか遠くを見てて……。そして、その目を瞑ったかと思っただらスツゴイ大きなため息を吐いた。

「はあく。身内だからっていうのもあるけど、状況的にも……。流石にこの二人は放っておけないわね。……。だからって、この三人でっていうのも虚しい気がするけど、仕方ないわね」

そう言ったエステイさんは、力無くダランとしてる二人を引っ張り起こして……。あの細腕でよくできるなあ。メルおねえちゃんと同じ、あれで怪力なタイプなのかな？

「アナタも来る？」

「えっ？　くる、って？」

「お酒。こういう時の飲み方を教えようかと思っただけ……。私に教えられることってそれくらいだし」

「それは遠慮しときます。私、まだ未成年なんで」

そこまで聞いたら短く「そっ」とだけ返して、肩を貸すような形で引っ張り起こした二人の背中を叩きながら「ほらさっさと歩いた、歩いた」と自分で歩くようにうながしてた。

そうして、ゆつくりとだけど裏路地から出て行ったエステイさんたちを見送って……。私は『トラベルゲート』を取り出した。

『トトリのアトリエ』に帰って、二日酔いに効きそうな薬でも作ってあげようかな……。飲み方教えるって言ってたけど、あの様子じゃあきつとフリーさんたち酔いつぶれちゃうくらい飲んでやうだらうし……」

ロロナ【*10-4. 5*】

【*10-4. 5*】

サンライズ食堂

俺はイクセル・ヤーン。アーランドの街にある『サンライズ食堂』を任されているコックだ。

まだ陽も傾き始めたばかりの『アーランドの街』。昼間のランチ時を過ぎたこの頃は『サンライズ食堂』は一旦客足が途絶える。

それでも時偶に暇を持って余した人が軽いティータイムをしに来ることがある……けど、それも大抵は軽食やデザートが充実した小洒落た店に行くのがほとんどで、そこそこヒマになったりする。

ヒマになったりする………はず、なんだけどなあ………。

「多くは語らないわ……とにかく、こんな時は飲むに限るの！」

「……………」

コイツらみたいのに、昼間つから酒飲みに来る連中がいなけりや、ヒマがあつたはずなんだけどなあ……。

まあ、一番の問題はヒマ云々じゃかくて、こん後

「今日は私が、そんな時のお酒の飲み方を教えてあげるから、あんなこと忘れちゃうくらい、トコトン飲んじやいませよー！」

「……………お、お……………」

やけにテンションが高いエステイさんに対して、ファイリーとリオネラはテンションが低い………つか、どこか「心ここにあらず」って感じで、まともに気力が感じられない。

けど、双方に共通してる点は「空気がよどんでる」ことだな。長年『サンライズ食堂』でやってきた経験からわかるが、ありやもう確実に悪酔いするわ。

こういうのには関わらないっていうのが鉄則……なんだが、残念ながらここは『サンライズ食堂』、関わらねえってわけにはいかねえんだよな、これが。

じゃあ、酒飲むのを止めてみるか……って思ったりしなくも無かつたわけじゃないが、十中八九無理だろうな。なんでって知っているから。

何を知ってるのかと言えば、変にテンションが高いエステイさんのことだ。

ここ最近は何を離れてたから店に来なくて会うことも無かったが、前は時々こんなエステイさんを見る機会があったんだ。そういう時は、決まって「良さそうな人がいたのにダメだった」とか「知り合いが結婚した」だとか……まあつまりはそういう話があった後だ。今回も、きつとそういうことなんだろうな。

それに加えて、ファイリーとリオネラか……。

無理矢理付き合わされているからあのテンションの低さなんだとも思えなくはないけど、もしや……いや、まさかな？

「恋人がなんだー！ 結婚がなんだー！ アトリエまで聞こえるくらい騒いでやろーじゃないの!!」

「うう……おねえちゃんの言葉に同意する日が来るなんて……もうヤケクソだよー！」

「そつそれはさすがに悪いんじゃない？ でも……今日はお酒に頼つても……」

「アトリエに迷惑かける前に、ウチが大迷惑被るんだけどな？」

カウンター奥の厨房からの俺の呟きは、テーブル席のエステイさんたちには酒を飲みだした事もあってか聞こえていないようで……口くなことになりそうにないな、と諦め気味にため息を吐くことしかできなかつた。

酒も料理も出さずに追い出すって手も無くはないが、あの調子じゃ

あエステイさんに文字通り力づくでどうにかされてしまいかねないから、やはり諦めるしかないだろう。

そして……エステイさん以外のメンツに加え、ついさつき聞こえてきた『アトリエ』って単語から、大体の事情を察し……俺はおとなしく店員としてやり過ぎすことに決めた。

あれから数時間経ち陽が暮れた街……

7組だ。

「何が？」って、今日これまでに店の扉を開けたけど帰って行っちゃった客の数だ。原因？ ……言わなくてもわかるだろう？

「結婚……素敵、ですよ。でも、結婚したからって、その先幸せになるかなんて誰にもわからなくて……何がきっかけで、一変するかは……」

「そうよねえ。みんながみんな「結婚するのは大事」だとか「あたり前」みたいな感じになってるけど、結婚しない幸せだってあるのよっ！」

「うえ、おねーちゃんが言うつうと負け惜しみにしか聞こえないよお？ あははははっ！」

一応は連中の中でまだ一番酔って無さそうな状態のはずだが、どこか物悲し気なドンヨリとした雰囲気を漂わせて、チョコビチョコビ飲みながら一人でなにやら呟き続けているリオネラ。

そのリオネラの言葉に、少しズレていながらも相槌を打って自分の意見を主張するエステイさん。

さらに、そのエステイさんの言ったことに対して、素面じゃあ

エステイさんを恐れて言いそうにない事をズバズバ言いながら笑う
フリー。

エステイさんは「なんですってー！」と怒りをあらわにしながら、威嚇するようにジョツキを持った手を高々と上げ……中身が空っぽになっ
ていることに気付き、俺の方にむかって「おかわり〜」と表情を
コロツと変えて上機嫌に追加注文をした。

あーあ。

こんな店内の空気じゃあ普通に飲み食いしていく猛者もいるこ
たあいるが、ごく少数。全体的に見て客足が遠のいちゃって、損
害も損害、大損害だ。

まあ、収穫もあるにはあった。

予想した通り、この一件の原因は「マイルスとコロナが正式に付き合
いでした」ってことみたいだ。

一応俺も、今朝がたも含め、ここ最近それっぽい噂は聞くには聞いて
いた。つつても、これまではまた噂話が独り歩きしたのかと思つて
たんだが……三人の様子やその会話の端々から聞き取れる情報から
して、どうやらマジらしい。

それも、ほとんど「結婚を前提としたお付き合い」状態らしく……つ
て、コロナとマイルスの年齢やこれまでの付き合いのことを考えりや当
然と言えば当然な気もする。……俺も結婚してねえから、どうこう強
く言う気にも慣れねえけどな。

とにかく、そういうことらしい。

めでたいことだし、俺としては幼馴染として、友人として素直に祝
福するところだが……リオネラやフリーからしてみれば、割り
切れない部分も結構あるんだろうな。

二人の一癖二癖ある性格気質からして、まともに接せる異性ついで
うのは限られているだろうし……それに、マイルスがそんな二人を引つ
張れるようなお節焼きな面が強いこともあって、あいつらからすれ

ばマイルスは恋愛対象筆頭だったんだろう。

結ばれちまったのは今更どうこう言うべきじゃないだろうから、ちよつと……いや、かなり迷惑だが、今日のこの酒で踏ん切りをつけてほしい所だな。もしこれ以上拗れに拗れて所謂「修羅場」にならなくても困るからな。

……と、そんなことを考えてたら扉についてあるベルの音が聞こえてきた。出る客はいなかったことを考えると、必然的に外から客が来たことになる。

また、店内を見てすぐに出て行かれる可能性もあったが、ここは当然素直に「いらつしやいませー」と声を出して迎え入れることにした。

「うわあ……何アレ」

「……って、なんだ、お前か」

入店してきたのは、俺にとってはコロナと同じく幼馴染の一人であるクーデリア。今現在は『冒険者ギルド』で受付嬢をしているはずだが……陽も暮れたし、ちょうど仕事終わりだったのか？

クーデリアはテーブル席の一つにいるエステイさんたちを一瞥しながらもスルーし、なるべく入り口に近い方を選ぶようにしてカウンター席についた。

「仕事終わったからアトリエの様子を見に行こうと思ったのに、通り過ぎようとしたらやけに騒がしくて気になって入っちゃったけど……何よ、あいつらは」

「その前に何か注文してくれよ。あいつらのせいで、商売あがったりなんだ」

俺がそういうと、眉をひそめながらも「……何かジュースを一杯」とだけ言ったクーデリア。その注文の品を用意しながら、エステイさんたちの騒ぎ声をBGMに俺は先程の問いに答え始める。

「失恋と先越されの自棄飲みだよ。昼過ぎからずーつとあの調子だ」

「あー、そんな気はしてたけど、やっぱり？　ったく、トトリが抜け出

してからアトリエで何があったのかしらね……」

「なんでも、ロロナんところの親がアトリエに来たらしいぜ？ 親公認だったとかならないとか」

「なるほどねえ。あの人たち、『青の農村』のお祭りにしよっちゆう顔を出したりしてマイルスと交流もかなりあったっぽいし、なんだかんだ言いながらもアツサリ認めちやったんじゃないかしら？」

確かに、クーデリアの言う通りだし、そう心配するようなことにはならないと思う。ロロナもそうだが、マイルスもそう嫌われない性格してるし、よっぽどの事があつたりしない限りは門前払いになつたりはしないだろうな。

と、用意し終えた『リンゴジュース』を「ほいっ」とクーデリアの前に置く。それを受け取ったクーデリアはソレに口をつけるんだが……なんか、その表情はスツキリしてない感じがした。

「どうしたんだよ？ 何か引つかかることでもあつたのか？」

「いやね、なんにもないならいいんだけど……」

何事も結構ズバズバ言うタイプのクーデリアにしては珍しくハツキリとしない物言いに内心首を傾げてしまった。

けど、クーデリアは「それが」と言ってからゆっくりと驚くべきことを話し始めた。

「アイツが変なこと言ってたのよ」

「あいつ？」

誰のことだ？

「アストリッドよ、ロロナの師匠の」

「……は？」

いや待て、アストリッドっていやあ、それはまあロロナの師匠の名前だし知ってるけど……確か、ふらつとどこかに行つたままロロナが

探しても行方不明のままで、ここ何年も目撃情報が無かったはずだよな？　なのになんで今クーデリアの口からその名前が出てくるんだ？

「なんだよ、あの人が帰ってきてたのか!？」

「帰ってきたかどうかはわかんないけど、会ったのよ。つい昨日、ちやうどコロナと入れ代わって『マイスの家』から出た後にね」

「……なんでマイスン所にいたのかとか聞きたい事もあるが……とりあえず、何してたんだよあの人は？」

「アイツが現れたのはいきなりだったけど、タイミングからしてあたしは最初、コロナとマイスの事を邪魔しようとして来たんだって思ったのよ。でもなんか「今、割って入ってコロナに嫌われない手段が思い浮かばなくてな」とか何とか言って、結局なんにもしなかったのよ」

……つか、コロナとマイスがどうこうなつたのって、つい昨日からの話なのか？　それにしたって、アストリッドは耳が早いというか早すぎると言うか……。

けど、今の話からすると急だったから何にも邪魔できなかったって事か？　それは何というか、運が良かったんだろうな。

「……あの時、アイツが言ってた「余計なことに時間を取られてた」っていうのは、告白して振られたっていう大臣の調教のためだったってわかったけど、結局のところアツチのほうは……」

「告白？　大臣って……いやいや、調教!?!　何の話だよ?!　それにアツチって……」

「前半は気にするだけ無駄よ、ただどつかの誰かが気持ち悪いくらい矯正されたってだけのことだから。そもそもって最後のが、アイツの言ってた変なことなの。「すぐにコロナをどうこうするような度胸は無いだろう。それに……」」

——おそらくは、そう遠くないうちに勝手に自然消滅するだろうからな。

「……って。まるで、だから自分から手出しする必要が無いって言い
たげにね。これまでのロロナたちの積み重ねも含めて、そんな様子も
無くってむしろ順調そのものにしかならないんだけどね」

「つつても、確かに無視しきれねえよな。なんたって、あのロロナの師
匠が言ったことだし」

俺が頷いて言うところクリアは「そうなのよね……」と悩まし気
にため息をついた。

……まあ、俺にとって悩ましいことは他にもあるんだが……

「そう、だよね……わたしたしなんかより、あの人達の温かさを知ってる口
ロナちゃんのほうが、マイルス君を幸せに……」

「大体、何よ！ 失恋の一回や二回で一丁前に落ち込むだなんて……
人生経験のうちの一端じゃない。もうちよつと頑張りなさいよ！」

「おねーちゃんは、いつつも相手の肩書とか能力とか見た目ばかり
見せて、誰かを本当に好きになったことが無いからそんなこと言える
んだよー！」

「なあっ?! そういうあんたは自分の好みとマイルス君とが全然違う
じゃない！ 他の人とは話せないからって妥協しちやったんじやな
いの!?!」

「違いますー！ 妥協なんかじゃないですー！ 「大好きな食べ物」と
「毎日食べてたい物」とが違うっていうのと同じで、考える時の着眼点
がビミョーに違うってだけの話ですー！」

「なによっ!?!」

「おねーちゃんこそ!!」

「……百歩譲って騒ぐのはいいけど、店の中で暴れないでくれよー?」

今にも掴み合いになりそうな姉妹に一応そう声をかけるが……ああうん、聞こえちやいなえな。

「大変ねえ、あんたも」

「そう思うなら何とかしてくれ」

「しーらない」

そう言つてまた『リングジュース』に口をつけるクーデリア。

……つと、数分ぶりにまた入り口の扉のベルが鳴り響いた。

「いらっ——っ!？」

「あらっ、賑やかだと思つたらファイリーちゃんにリオネラちゃん、それに……エステイじゃない」

そう、そこにいたのは……つて

「おいっ！ なにそそくさと出て行こうとしてんだよ!？」

「ジュース代はツケで……何なら倍額でもいいわよ?」

逃げるように……いや、マジで逃げようとしていたクーデリアを小声で引き止め、カウンターを挟みつつも互いに顔を寄せ合つてコソコソと喋る。

「だからって、逃げるな」

「イヤよ。実際に見たこと無いけど、コロナから聞く限りじゃあ相当やばいんでしょ?」

「分かつてるなら、なんとかするの手伝つてくれよ!」

「そう思うなら、まずあんたが酒を出すのをやめなさい」

クーデリアがズバツと言つてきたことは確かに正論だ。

いや、だがしかしだな……

「んなこと言つたつて、ティファアナさんに頼み込まれちゃあ嫌だとは言えねえだろ、本人自覚無いしさ」

「だからって……ねえ?」

「断ろうにも普段最終的には涙目いっもでお願いされて、周囲のおっさんたちの視線が厳しくなつて……」

そのまま過去にあった事を離そうとし……話題のティファアナさんが、とつくに入り口からいなくなっていることに気付き――

「あっ」

――いつの間にか、エステイさんたちのいるテーブル席に着いているのが見えて、俺とクーデリアの声が重なった。

あの人はすでに何時間も屯^{たむろ}って飲みまくり、注文しまくっている。

そう、グラスが空いたら頼むってこと意外にも、別の種類の酒を頼むってこともあって……テーブルの上には人数分以上の酒の入ったグラスやジョッキがある。つまりは……

「それじゃあせつかくだしお邪魔しちゃうわよ、エステイ？」

「いいわよー！ 今日ば思いつきり飲んじやいましよーティふあ……な……？」

……時すでに遅し、ってことだ。

その後の事？

酔っ払いが転がったり、目のやり場に困ったり……まあ、いろんな意味で酷かったとだけ言っておく。

ロロナ【*10—5*】

【*10—5*】

サンライズ食堂

いつもはお客さんでにぎわっている『サンライズ食堂』の店内。
だけど今はお昼からは少しズレた時間で、ちょうどお客さんは僕たち以外は見当たらなかった。

そんな中、僕はロロナと並んでカウンター席に座ってたんだけど……

「ミス君……わたし、気付いちやったの」

「気付いたって……何に？」

食事が一段落して食後の『香茶』を飲んでいたら、不意に隣にいるロロナが深刻そうな様子で話しだした。

一体、何がどうしたっていうんだろう？

「あれからそろそろ一ヶ月くらい経つけど……わたしたち、恋人っぽいことして無い気がするっ！」

「いやいや、そんなこと……」

だって、ロロナのご両親とお話してから正式にお付き合いして……して……？

「た、確かにそうかも……!?!」

「何言ってるんだよ、お前ら」

僕が驚きながらそう呟くと、カウンター向こうにいるイクセルさんは呆れた様子でそう言ってきた……。

改めて、僕とロロナに加え、店員であるイクセルさんが新たに参加することとなった会話は、少し申し訳なさそうなロロナの言葉から再開された。

「えつとね、実は今日こうしてイクセくんの所に来たのは、そのことをマイルス君と一緒に相談するためだったんだー」

「ウチで料理食つてくのはついでかよ!? それに、なんでお前まで驚いてるんだよ、マイルス!」

ロロナに勢い良くツツコミを入れて……その勢いのまま僕のほうへと振ってきたイクセルさん。

「あははっ……てつきりロロナがイクセルさんの作った料理が食べたくなつたのかなーって思つて。それに、『学校』のことで忙しくなつてからは来れる機会も減つちやてたから僕も来たかつたし……」

「お、おう。あーつと、まあそう言われると嬉しくないわけじゃねえけど、こないだの騒動の元凶だつて思うと何とも言えない気持ちだ」
「えっ」

「あ、いや、こつちの話だ。マイルスやロロナに悪気が無いのは分かってるから。……自覚も無いのは厄介だけだよ」

最後にボソツと言つたイクセルさんの言葉は僕にはギリギリ聞こえてきた……けど、自覚つて一体何のだろう？

僕がその疑問を投げかけるよりも先に、イクセルさんが再び口を開いた。

「とにかく、だ。何で俺に？ 自慢じゃねえけど恋愛事とかわかんねえぞ？ もつと他に相手はいなかつたのかよ?」

「わたしも色々考えたんだよ? でも、身近な人でお付き合いとか結婚とかしてる人ってあんまりいなくて……」

ロロナの言う通り、『青の農村』の人たちを除けば僕らの身近な人はあんまり結婚していない。むしろ、近い人ほど結婚して無いような……?」

あと、僕はまだしも、ロロナは『青の農村』の人たちに相談するのはハードルが高かつた……いや、僕でも相談しないかも。この間

の噂の騒動で気付かされたけど、あの人たち恋愛関係の話への執着心が強くって……もし仮に今回の事を相談しようものなら、あの時のようにまた尾ひれがついて変な噂になって広まりかねない。

それは流石に嫌だからね。

ただ、ロロナの周囲の状況を知ってか知らずかは分からないけど、納得してない様子のイクセルさんが指摘しようとしてきて……

「いないって、親が……って、そういうことは親に相談しにくいか」「うん、さすがにね。というか、もうこりごり。根掘り葉掘り聞いてくるし、お母さんは凄くパワフルで、お父さんは一々話の腰を折ってきて……」

「うん、アレは僕もちよつと遠慮したいかな」

「……もう何かあつたんだな」

何かある度に「ダメだ」「認めない」って言ってきたライアンさんには驚かされたなあ。でも、それ以上にロウラさんのコツチを追い詰めてくるような質問攻めのほうがもつと手ごわかったけど。

「でも、他に誰かいないか考えたんだよ！」って言ったロロナは、指をあごに当てて少し首を傾げる、何かを考えるような仕草をしながら言葉が続けた。

「他にはティファアナさんなら、って思ったりもしたんだけど、色々思いださせちやったら悪いかなーって」

「その気遣いを一割でもいいからコツチに向けてほしいところだな」「？」

「……？ 何の話だろう？」

イクセルさんの言葉に、同じように疑問を持ったのかロロナも不思議そうにし……僕のほうを向いてから……偶然にも僕と同じタイミングで首をコテンと傾げた。

僕はと言うことなのかをイクセルさんに聞こうかとも思ったけど、ロロナは僕ほどは気にしてないみたいで、そのまま相談相手を考えた時の話を続けた。

「それで、結婚したことのある人以外って考えたら、恋愛そのの話に詳しく
うな人って考えて、結婚に積極的だって印象があつたエステ——」
「おい、やめろ」

「え？ あ、うん。帰ってきてるのは知ってたけど、どこにいるかは全
然わかんなかったからやめたよ？ あとは……美人さんなトトリ
ちゃんのおねえさんや、かわいいメルちゃんもそういうことに詳しい
かなーって思わなくも無かつただけど……」

喋ってる途中でいきなり割って入られたコロナだつたけど、いきな
りのことに驚きながらも普通にお喋りを続けることが出来ていた。

……「メルちゃん」っていうのがメルヴィアのことだつてというのが
すぐにわからなかつたのは秘密だ。

「それで、経験豊富そうな人以外だったら、こういうぶらいベーとなこ
とを相談しやすい相手っていうのが優先かなーって思つて、まずフィ
リーちゃんに——」

「ばか、やめろ」

「今度はバカっ!? わたしバカじゃないよ!? と、とにかく、フィリー
ちゃんなら相談しやすいし、いい答えが出てこなくつてももしかした
らエステイさんのこと知ってるかもつて……でも、フィリーちゃんも
「ダメだ、ダメだ！」っていうお父さんとは別方向に脱線してしまいそ
うな気がしてやめたんだ」

「理由は間違つてるが、その判断は正しいぞ」

「またもや話の途中で割って入ってきたイクセルさんだけど、最後
はウンウンと頷いていた。」

「他に誰かつて考えて、りおちゃんなら——」

「やめろ。わざとか？ わざとなのか？」

「ええっ？ な、なにが……？ 何言ってるかわかんないけど、りお
ちゃんならきつと親身に聞いてくれる……つて思つただけど、逆に
気負い過ぎちゃつて真剣に悩み過ぎて他のこと考えられなくなつ

「ちやいそうな気もしたからやめたの」

「また絶妙な回避を……っーか、ロロナのあいつへのイメージってそんなのなんだな」

「……? さつきからイクセルさんは、何をわかるようでわからないようなことを言ってるんだらう?」

まあ、それは置いとくとして、ロロナが言ってることはよくわかる。人をよく気遣ってくれるリオネラさんだけど、その真面目さと真っ直ぐさは視野を狭めてしまうものでもあるからなあ……。真剣に考え過ぎて頭から湯気を出し「きゅ〜」と目を回してしまう様子がすぐに目に浮かぶ。

「……実際にそんな光景を見たことがあるわけじゃないのに、どうしてだらう?」

「それで、結局くーちゃんに相談してみようって思ってる……」

「まあ、妥当だろうな。あいつなら経験云々はともかくとしてロロナからの相談を蔑ろにはしないだろうし」

イクセルさんの言葉に、僕はついつい頷いてしまっていた。

むしろ、ロロナはもっと早くにクーデリアに相談することを思いついていいんじゃないかな?」

「朝起きてからすぐに相談しに行ったら怒られた」

「そりやお前が悪いわ」

「うん、朝早くにいきなり行くのは迷惑になっちゃうかもしれないんだから、ね?」

「うう……冷静に考えればそうなんだけど、わたしも必死に考えたりしてて、ちよっと……」

まあ、そんな事をしてしまうくらいには「恋人っぽさ」のことをそれほどまでに考え悩んでたってことなんだろう。

「でもね、でもね! その後くーちゃん」で? なんなのよ?」って、いちおうお話し聞いてくれたんだよ!」

「自分で「いちおう」とか言うのは悲しくないかな?」って思いながらも、黙ったままロロナの言葉を聞き続ける。

「だから、最近マイルス君とあったこととか話して、恋人っぽくないって話をして、どうしたらいいのかなって聞いたら……!」

「聞いたら?」

「惚のろけ気てんじゃないわよ」て言われて、追い出されちゃった」

「えっ、なんでそんなこと!?!」

「いや、マイルス。ここ最近のお前ら見たやつ全員がクーデリアが言った事と同じこと思ってるからな?」

「ええっ!?!」

予想外の情報に、僕とロロナは一緒になって驚き声をあげてしまった。

そ、そんな風に思われてたの!?! いや、でも第一、見ただけで「惚気てる」って……!?!

「えーっと……そんなわけで、そのままマイルス君がアトリエに来る約束の時間になって、あと相談できそうなのってイクセくんくらいだし、そのままマイルス君と一緒に行くのかなーって思ってる」

「んで、こうなった、と。話は把握できたが……つまりは消去法で俺だったんだな?」

「まあ、そうなっちゃうかなあ」

驚きから回復したロロナの言葉に、イクセルさんはため息混じりに言い……ロロナがまた申し訳なさそうにしながら言葉を返した。

それにしたって、どうしてだろう?

「あれ? マイルス君、どうかした?」

「あっ、ちよつと気になることがあって……」

ちよつと考え込んでしまっていたのに気がついたらしいロロナが、僕の顔を覗きこむようにしてきて……僕は素直に答えた。

「こういう話ならトリスタンさんが真つ先に思い浮かぶんだけど……お仕事忙しかったりして相談できそうにないかな?」

僕がそう言うと、イクセルさんがピシッと固まった。

そして、ゆっくりと首を振りながらちよつと震え気味の声で言うてる。

「いや、ミス、それは流石に……って、もしかしてこいつ、あの事を知らねえってことは——」

「その手があった……!」

「おいいっ!! ロロナっ!! お前がそこでGOサイン出すのかよ!!」

「えっ、何かダメなことあった……?」

「ダメも何も……俺も又聞きでよくは知らねえけど、アイツと色々あつたんじゃないのか!」

よくわからないけど、ロロナが何かまずいことを言ったのかな?

いや、でもそれにしたってイクセルさんの様子が必死……というほどでもないけど、何故かやけに勢いがあった。それほどまでのことがあつたのかなあ?

ちよつとの間、イクセルさんが言っていることがわからない様子のロロナだったけど、不意にロロナはポンツと手を叩いた。どうやらロロナは何か心当たりがあつたみたいだ。

そんなロロナは……

「冗談」って言ってたし……これまで通りじゃダメなのかな?」

「ダメだろ……」

ここまで「一体何の話なんだろう?」って思ってた僕だけど、ロロナの言った「冗談」っていう言葉にどこか聞き覚えがあつて……そして思い出した。

そうか。なら、あの時の話の……

「コロナに告白したのって、トリスタンさんだったんだ。言われれば納得できちゃうなー」

「お前はお前で、何冷静に受け入れてるんだよ……。もっとこう、思うことでもあったりしないのか？」

「コロナは人気者なんだな……。くらい？」

僕がそういうと、イクセルさんは肩をガクツと落とし、大きな大きなため息を吐くのだった……。

「ひとつ分かった。お前ら放っておいたら、こん前のアレほど酷くはねえけどロクなことになりそうもないってことが。キレイに結論出せる気は全くしねえが、簡単な意見くらいはできるだろうし……。それでいいな？」

「うんっ、ありがとうイクセくん！」

「あはははっ、よろしくお願いします」

二人揃って軽く頭を下げたコロナと僕。

そして、イクセルは一つ咳ばらいをしてから離しだそうとし……。寸前ではたと手を止めた。

「つーか、そもそも最初は自分と相手……。つまりはカップル同士で話し合ったりしてみるもんなんじゃねえのか？ マイスはコロナが悩んでた内容ことをついさっきまで知らなかったみてえだし、まずはそこからやってみたらどうなんだよ？」

「それはそうかもだけど……。自分で言うのも変かもしれないけど、わたしこういう話に全然縁が無くって、なんにもわからないの」

「まあ、そうじゃなきゃ悩んだりはしないだろうしな。だからこそ、相手とちゃんとコミュニケーションを取って……」

そんなことを言うイクセルが腕組みをしてコロナに説教じみた事を言っていたんだけど、それを不意に止めた。そして、コロナの隣のカウンター席に座っている

僕のほうをじつーと見てきて……

「……わりい。相手がマイスじゃあ無理だよな」

「ええっ!? それってどういう意味!？」

「いや、お前くらいだと思っただろ？俺ら世代でコロナよりも恋愛事を経験・理解してなさそうなヤツは」

そ、そうなのかなあ？

いやまあ、僕自身、そんな経験は無いから色々ズレてしまってるのは否定できない。でも、仕方ない気もするし……。それに、理解が出来てないって扱いは流石に心外だ。

そんなことを考えていたのがイクセルさんに通じてしまったのか、イクセルさん

は僕に向かって少しニヤリと笑った。

「なら、コロナの悩みを解消してやれよ。恋人っぽいこと、何か思いつくだろう？」

恋人っぽいこと？

恋人っぽいこと……

恋人……

「ぶ……文通？」

「マイス君、それ、たぶん遠距離……」

「やっぱダメそうじゃねえか」

うっ！ なんとなくダメな気もしたけど、イクセルさんだけでなくコロナにまでダメだしされるなんて……！

「よく聞いとけ。俺の意見を言わせてもらおうとだな、まあ真っ先に思い浮かぶのは『デート』だろ。つっても、それはもうしてるようなものだし……」

「してる？」

「してるの？」

「今だって俺が会話に入っちゃってはいるが、カップルで店で食事は十分に『デート』の範疇だと思うぜ？」

「ほー」

なんとなくそんな気がすることを言われて、ロロナと僕はついつい感心の声を漏らしてしまっていた。

「他にも、一緒に買い物とかただ単に散歩とかでも……極端に言えば、男女が仕事以外で二人きりで出かけたら大抵は周りからしたら『デート』に見えるだろうしだろうし、ロロナの言う「恋人っぽいこと」になるんじゃないのか？」

「それじゃあ、二人で街や村の外に行ったりするのも『デート』になるんですか？」

「なら、わたしたち結構『デート』してたのかな？」

僕とロロナの疑問に、イクセルさんは「いいや」と首を横に振ってから首をすくめてきた。

「お前らが街の外に出るって、採取だろ？ アレは仕事の一環じゃねえか。それに大抵他にも誰かついてきてただろうし……いや、でも案外そういう方向性は悪くはないかもしれないねえな」

何かを思いついた様子でいきなりハツとしたイクセルさん。

「あーっと、どう言ったらいいんだろうな……」と少しの間悩んだ末に、イクセルさんは改めて僕らの方へと向き直って語り始めた。

「ほら、ロロナさんところの両親って旅行が趣味だろ？ いろんな所に行っているんな物を二人で見えて……『デート』って言葉は的確じゃねえかも知れないけどあれはあれで悪くは無いは思うんだ」

「うーん……そう言われれば、そうなのかも？」

「んで、そのお前ら版ってわけじゃないけど「採取に行く」じゃなくてもっと別の目的を持って二人で街の外に行ってみたら『デート』として十分なもんになるんじゃないやねえか？」

「なるほど」

納得して頷いた僕がなんとなく「ロロナはどう思ってるんだろう？」って思っ、隣に座るロロナのほうを見てみれば……なんだか少し目を輝かせ始めてた。

「ほらっ、昔俺も行ってたことから思っはいたけど、普段はスルーし

がちだが採取地の中にはいろいろ綺麗な景色とか物とか……もつと抽象的に言えば「雰囲気が良い」場所って結構あるだろ？ そういうのを目的に行ってみたら、普段の採取目的の冒険とのギャップもあって特別感も出てくるんじゃないか？」

「わあ……い！ なんだか楽しそうかも！」

なお目の輝きを増しているコロナ。イクセルさんもイクセルさんで王国時代にコロナの手伝いで冒険してたころ見たそういう光景を思い出したのか、なんだか楽しそうにしている。

……問題は、他でもない僕。少し引つかかることがあった。

「ねえねえ、ミス君！ 今から予定たてようよ！ 『お祭り』とか『学校』の事もあるけど、調整すれば……って、ミス君？ また何か……」

「なんていうか、どう言ったらいいのか……」

勘違いかもしれないし、気のせいかもしれない。

でも、聞かずにはいれなかった。……いろんな意味で。

「男女で街の外の綺麗な景色を見に行ったら、それって『デート』になるの？」

「まあ、意識の差はあるかもしれないねえけど、一対一でだったならデートそに近いモノにはなると思うが……まさか、お前っ!？」

「ミス君、誰かと『デート』したことあるの!？」

「基本依頼で行ってたんだから『デート』じゃない……とは思っただけ……いや、でも『デート』だったのかなあ？」

そもそも『デート』の定義がわからないから判断しようが無いんだよね。

あとは……うん。今さっきイクセルさんが「意識の差」なんて言葉を使ったけど、僕がそう思っなくなってもしかしたら相手のほは『デート』って思っただけだったりしたらどうだろう？

いや、まあ今更どうしようもないのはわかっただけだね？

そんなことを考えているうちに、思った以上にロロナが声を荒げてしまっていた。

「もしかして、くーちゃん!? それとも、りおちゃん!? フィリーちゃん!? ……ハッ! まさか、なんだか意外と仲がいいミミちゃんだったり!」

「違うよ!? 十何年も前の話で『シアレンス』にいたころのことで……」

『シアレンス』ってマイルスが昔にいたっていう……まさかマイルス、お前そこに彼女がいたのか!」

「いやいや、誰ともお付き合いはしてなかったし彼女はいないよ」

暴走しそうなロロナの言葉を否定しておき、イクセルさんの言葉についても否定と訂正をつけておく。

『デート』云々はともかくとして……彼女・彼氏といった間柄じゃなかったのは確かだ。……あっちじゃあ、まだ誰にも『ハーフ』だったことは明かせてなかったし。

「でも、誰かと行ったんだよね!? どんな娘なの!」

「どんな娘って……まず、倒れてた僕を助けてくれた花屋の子に、宿屋の——」

「複数人!」

驚きの声に少し耳がキンキンしつつもなんとか持ちこたえ、困ったように笑って見せる。

なんとなく、これから質問攻めされそうなことはわかったけど……僕は少しくうきうきしていた。

ロロナはどういう表情をするんだろう?

あの綺麗な景色の数々のことを、見た目はもちろんその他のことも事細かに……熱から、音から、匂いから……僕が伝えられる全ての手段を持ってあの景色の事を伝えられたら、ロロナはどんな反応をするんだろう?

そのことを楽しみにしつつ……」「さて、どうしよう?」と心の中で呟いた。

『シアレンス』の綺麗な景色はいいんだけど……今まさにロロナが気にしている「デート(?)の相手」のことはどこまで言っているだろうか?

「ふーん……ふーん?」

理由はよくわかんないけど、ロロナちよつと怒ってるっていうかすねてる感じがするし……そのせいかはわからないけど、モコモコとしての野生の勘がビンビン反応している……気がする。

……何故だかわかんないけど、不思議なことに僕の頭の中には、笑顔で親指を立てたライアンさんの顔が重い浮かんでいた。

………本当になんでだろう?

「マイスのやつ、中身がアレなだけで、実は経験豊富なのか……?」

衝撃の事実を知ってしまったイクセルは、カウンター席で向かい合って話しているマイスとロロナの事を他所に、ひとり呟いていた。

元々元気なタイプの二人だとはいえ、付き合い始めてからは二人揃うと本当に騒がしくなるようになったものだ……とイクセルは思いつつ、つい大きなため息を吐いてしまっていた。

「つーか、話に聞く限りじゃあお泊まりデートしてる時点でもう十分「恋人っぽい」と思うんだけどなあ?」

以前に又聞きしていたことを思い出しながらそう言い、イクセルは当のマイスたちのほうを見て、少しだけ目を見開いた。

ついさつきまで不機嫌だったはずのロロナがいつの間にか心底楽

しそうに笑っていて、マイルスは相変わらずの笑顔でロロナに何やら「凍った花」の話をしていた。

その光景を見てイクセルは何を思ったのか……静かにカウンターそばから離れて厨房の方へと向かった。

「……コーヒー、淹れてくるか」

……ただ単に、苦い物が飲みたかっただけだった。

『光』

青の農村

年の瀬が近づき、日に日に寒さを増していくように思える『青の農村』。

朝日が顔を見せだしたばかりの時間。一日の中でも空気がより冷たい早朝。僕は遠出しているとき以外は毎日の習慣になっている畑仕事をしていた。

痛いほど冷たい……なんて、人によってはそんな表現をしてしまいそうなこの時期の水を汲み、畑の水やりのために『ジヨウロ』へと移す。

「ふう……やっぱり流石に冷たいなあ」

冬と言えば雪。

そんなイメージが定着してるんだけど……『アーランドの街』やその周辺では、四季もあるし寒暖の差も結構ある割には冬に地面が白くおおわれてしまう時期というのはあんまりない。

気候のせい、なのかな？ けっこう内陸に位置するからっていうことも考えられなくはないけど……とにかく、『青の農村』を含めた『アーランドの街』周辺の地域は気候が比較的安定しているみたいなんだ。

雪が作物を覆い尽くしてしまわない、という意味では一応良い点ではあるんだけど……やっぱり冬には雪が積もっていて欲しい気がする。

まあ、気候が比較的安定してるおかげで『シアレンス』にいた頃は夏場によく発生して困らされていた『台風』、それをそう気にしなくてよくなったのは有り難いけど。

「それにしても……」

自分ではもうすっかり馴染みきっている気ではいるけど、つい先程考えていた「僕の中での冬のイメージ」とも全く関係無いわけじゃない時折ある周りの人との感覚のズレ。

ここでの生活も12、3年ほどになるけど、それでもむむこうでの感覚が抜けきっていないのも不思議な感じがしなくも無い。

「まあ、嫌じゃないんだけどね」

「さてっ」と意識を切り換えた僕は、家の脇にある井戸から離れ『ジヨウロ』片手に畑へと向かって行く……。

「ふっ……てりゃー!」

力を溜めて、その勢いを乗せて一面に水を撒く。『ジヨウロ』から撒かれる水は大量で広範囲に豪快に……ただし、その水の勢いで葉が傷ついたりしないように優しくむらなく繊細に……そんな風に水を撒く。

「次はあっちでもう一回——」

「モコ……」

「——ん？」

ある意味では昔から聞きなれている言葉（？）が僕の耳に入った。間違い無く『モコモコ』の声だけ……はて？ 見ての通り、今の僕は人間の姿で金のモコモコにはなっていない。だから、僕の口から無意識に漏れたってことは有り得ないと思うけど……？

あと残っている可能性はあるにはある、というよりソツチが本命。ほぼ間違い無くソツチだろう。

「ん？ 今日はいつもより早く起きたのかな？」

普段はもうちよつと後に起きるくらいで、その時間に合わせて僕が『モンスター小屋』に顔を出す、それが最近の生活リズムだった。

って、あれ？ 叫んだ感じの大声だったならまだしも、普通に鳴いたくらいの声だったら『モンスター小屋』から家の前の畑まで聞こえるはずもない。むしろさっきのはボソツてほどじゃないにしても小

声に近い感じがした。

となると、モコモコがひとりで『モンスター小屋』から出て結構近くまで来てたってことになりそうだけど……。

活発的になったなら嬉しいことだけど、好奇心のまま一匹で村の外まで行ってしまったら何かあるかわからない。見つけて、僕自身がついておくなり、人でもモンスターでも村の誰かに一緒にいてもらったりしない。

「あつ」

いた……とはいっても、ちゃんと見れたわけじゃない。

井戸があるほうとは逆の方……つまりは家の『作業場』があるほうとは反対側、『キッチン』のあるほうの家の端から家の裏手に入って行く……そんなモコモコの姿がチラツと見えたのだ。見えたと思つたらすぐに家の陰に入っちゃったんだけど……でも、見間違いだつたとは思えない。

僕の家の手裏手といつたら、『離れ』に『モンスター小屋』、あとは普段は一応は鍵をかけてある『倉庫』がある。

『モンスター小屋』に帰ったならよし。それ以外なら……そのときは、一旦金モコになってお話をしてみたら決めよう」

もしかしたら、何か思うことがあつて小屋から出てうろついている可能性もある。なら、不満点やら何やら聞いて出来ることなら解決してあげればいい。もっと別に何かあつたり、逆に何も無くつても直接会つて話せるのならそつちのほうが良いだろう。

そうと決まれば、いますぐモコモコを追いかけよう。急がないと、モコモコがあのまま他所へ行くこうとしてたら見失つてしまいかねない。

「よーこよー……とー」

軽く駆け出し、畑を一応取り囲んである簡易的な木の柵をピョンと跳び越え、そのままモコモコの姿が消えなくなった家の裏手へと向かつていく……。

——懐かしい感覚

「……………あ」

——見覚えのある『ひかり』

「モコ」

——そして『モコモコ』

「もしかして、キミは……………あの時の？」
「モコ」

思い出した……………いや、記憶喪失して^れいたわけじゃない。あの時のこ
とは今でもよく憶えている。

ただ、繋がらなかったんだ。

数多^{あまた}存在する『モコモコ』たちのうち、『ア^こーランド』に偶然にも迷
い込んだであろう一^{ひとり}匹。その数百……………もつと多いかもしれない数の
うちの「1」がまさかあの時の子だったなんて……………。

今、目の前にいるのは、僕がまだ『シアレンス』で生活してたところ
にあの娘^こと共にいた時……………秋のダンジョン『オッドワード谷』や冬の
ダンジョン『インヴァエル川』で遭遇した『モコモコ』だ。間違い無
い、はずだ。

そう、あの娘^こと……………

——*—*—*—*

『……ひやかしなら帰って』

初めて会ったところから、まるで僕が怒らせるようなことをしてしまったんじゃないかってくらい、刺々しくて冷たい態度だった。

『もうあたしに近づかないで……お願いだから』

でも、接していくうちに僕は知った。

あの娘は本当は感情的な熱さも持っていて、そして人にもモンスタ―にもとても優しい娘だったことを。そして彼女がそうして壁を作るような態度を取るのかを……。

『あの光が……みんな、みんな、持ってっちやうんだよ』

彼女が「呪い」と呼ぶ現象のせいで、ずっと悩み苦しんでいたことを……。

『だからもう、誰とも仲良くなならないって……そう決めたのに……
……決めたのにな』

『やっぱり、独りは寂しいよ……』

でも、壁を作って、他人と距離を取ろうとしても……自身がどこかで求めていることもあって、どうしようもなく自分の気持ち心の中で板挟みになってし合っていることを……。

『……もうイヤなの』

『やっと見つけたと思ったのに……やっと、掴めたと思ったのに！』

『でもね……手を開いたら何も無いの。いつも、空っぽなの』

目尻に涙を浮かべ、まるで自白するかのように目の前にいる僕に言葉を投げかけるあの娘は、いつものツンツンとした雰囲気とは異なり……とても弱々しく感じられた。

『もう、耐えられない。大事なひとを失うのは、もう……耐えられないよ』

止まらない言葉。溢れ出す気持ち。

僕はそんな彼女の言葉を唯々受け止めて……

でも、その際中に……僕は一瞬の光と共に前にも感じたことのある懐かしい感覚を感じた。

その閃光を認識した彼女は、瞬きをして、ジッと僕を見て――

『――思った』

『……消えちやったかと、思った』

あの娘は僕の事を――僕が消えたんじゃないかと気にして――ずっと見ていたからかは気付かなかったけど……光の渦の中から懐かしい感じと共にモコモコの子が出てくるところを僕は見ていた。

モコモコの子は以前にあの娘と一緒に冒険に行った『オッドワード谷』の帰り道、懐かしい感じに引っ張られて勝手に体が変身しそうになりその場から離れたから最後までこの目で見ることはできなかったけど……『オッドワード谷』の入り口でその後のあの娘の反応からして不思議な光の中に消えたであろうモコモコの子だった……。

『モコモコの子』のことも気になったけど、その時の僕はそれよりも先になすべきことがあった。

僕は言わないといけない。彼女の言っていた消えてしまった「ともだち」たちが変わって「僕はここにいるよ」ということを。

そうしているうちに、モコモコの子は何処かへ行ってしまっていたのだった……。

――*――*――*――*――

『あたしの近くにいたら、あんたも消えちやうよ』

あの光の中に消え二度と会えなかったという「ともだち」たちのことを思い出しながら言った、あの娘こが言っていた言葉。

……『アーランド』に来てすぐのころ、僕は「もしかして」と思った。

「もしかして、あの光に呑まれたんじゃないや……」って。

でも、それは違うってことはすぐにわかることだった。

あの時『シアレンス』で見た光の渦、そこからは懐かしい感じがしていたから。

その匂いが何なのか、結局僕は答えを断定せなかつた。考えられたのは「モンスターが本来いるべき場所」である『はじまりの森』。もしくは、僕の思い出させているわずかな記憶の中にある僕の出身地「人とモンスターが共に暮らす場所」。「懐かしい」と感じたことからこのどちらかだと思っっている。もちろんその予想が外れている可能性も十分にある……。

けど、僕がいつの間にかいた『アーランド』は、むしろ懐かしさからは程遠い場所だった。

だから、僕が『アーランド』に来たのはあの光とは無関係だと判断したんだ。

だけど……

感じる。あの時と同じ匂いを。

なら、あの光の先にあるのは、もしかして……？

『魔法』でも無理だった。どうしようもない、諦めるしかない、今ここで自分の出来ることを探していくしかない……そう自分に言い聞かせて、気持ちを書き換えて改めて初めた『アーランド』での暮らし。

あの時諦めていた望みが叶うかもしれない状況に、今、僕の目の前にあるのかもしれない。

……いや、わからない。絶対なんて言えない。だけど、僕の感覚を信じるなら、間違い無くあの先には僕のルーツとなる何か待ち受けているはずだ。

でも、なんで今ココに……？

僕が自然と目をやるのは、保護していた『モコモコ』。

『シアレンス』にいた頃にも会ったこの子は、あの時のようにすぐに

光に入る様子……は見せず、光の渦から1メートルほど手前に立って僕のほうをジーツと見てきている。

「君はいつたい……う？」

ピシツ ミシミシツ……

何か知っているんじゃないかと思いつい口から出た僕の言葉に、視線の先の『モコモコ』が反応を返そうとする……その寸前。

まるで何かにヒビが入るような音が、僕の耳に確かに聞こえた。

視線の先のモコモコも驚いたように背と耳をピンツとしてキョロキョロと辺りを見渡して――

「……えっ」

僕は気づいた。

モコモコの子の後ろにある光の渦の動きが止まり……光の塊となったソレの周辺にヒビ割れのような光の線が走っていることに。

パキツ パリンツ！ カシャンツ!!

「モコツ!？」

「な、なんだ!？」

いや、本当に空間にヒビが入り割れはじめてる!？」

渦巻いていた光によく似た青く淡い光があふれたして……より一層、ヒビが入るのと割れるスピードが一気に増してその光が爆発的に広がってきた!!?!

――危ないっ！

何がどうなってるのかは分からなかった。

でも、今日の前で起きている現象何かがとんでもないことだっていうのは、感覚ですぐにわかった。それに……光から感じられていた「懐かしい感覚」が別の何かに変わってしまったている。

この溢れ出した光がどこまで広がるかはわからない。でも、とにかく離れないといけない気持ちでいっぱいになってた。
でも……

「助けないと……！」

モコモコの子はいきなりヒビ割れ広がった光に驚いていた。

最初の『光』はまだ大丈夫だろうけど、その後の連鎖的に広がって
いつてる別のモノに変わってしまった『光』についてはモコモコも想
定外の事だったんだらう。

つまり、今モコモコが『光』に飲み込まれて無事でいられる保証な
んでどこにも無いってことだ。

それをわかっていて、見捨てられるはずがない！

気づけば僕は駆けだしていた。

お決まりのポーズも決めずに、一瞬で身体能力が根本的に底上げさ
れている金のモコモコの姿になって、最高速のスピードでモコモコの
元へと直進。手を伸ばして――

コンコンコンッ

「おい、ミス？ 今度の祭りのことでちよつと話があるんだが
……」

ガチャ

ノックもそこそこに、剣感を開けてミスの家の中へと入る、実質
『青の農村』ナンバー2である赤毛の青年・コオル。

「あいかわらず、鍵は開いたまんま……って、いねえな？ この時間な

ら、朝飯食ってるころのはずなんだが……?」

はて?と首をかしげたコオルは、踵を返し、一旦家から出た。

「畑仕事が遅れて……って、さっき前通った限りじゃあ畑にマイルスはいなかった気がしたんだが………んん?」

首を傾げ、眉間にシワを寄せるコオル。その視線の先には……

「アイツ、今日どっか外に出かけてるんだっけ? 畑仕事が終わってねえじゃねえかよ……にしたって中途半端か?」

……作業半ばで放り出された状態のマイルスの畑だった……。

——マイスがいなくなった

誰かに出かけることを告げることも無く、『青の農村』の村長・マイスが姿を消してから丸一日が経った。

幸か不幸か、お祭りの開催日が近かったこともあり人が集まり出していた『青の農村』。その結果、その報せは『青の農村』に……そして『アーランドの街』にまですぐさま広まった。

マイスがいなくなったことに対する反応はひとそれぞれ。

悲しむひと、怒りを覚えるひと、信じないひと、何が何だか理解できないひと、心配になって喉に何も通らないひと、「そのうちフラツと帰ってくるだろ」と心配しないひと。

そして、マイスカレと繋がりが深かった人物の何人かは、特に示し合わせたわけでもなくある場所に集まることとなった。

話の真相を、確かな情報を少しでも得るために……。

青の農村

「——つーわけで、畑の状況や家の裏手に『ジョウロ』が転がってたっていう状況からして、昨日の早朝、村長あいっが畑仕事をしてる最中みてーだ。オレが家に行っていないのに気がついたのは、そんなとってわけだ」

マイスの家の前、畑がすぐそばにあり見渡せる場所にあるちよつとしたスペースに集まっている人々にそう語っていたのは、実質『青の農村』No.2である商人のコオル。マイスがいなくなっていることに

人間で一番最初に気づき、遠出することも報告されていなかったため村の人たちにも確認を取って周っていなくなったことを確信した人物でもある。

コオルの前にいるのは、マイルがいなくなったことについて詳しく知りたがっていた、マイルと少なからず親しい人々……ロロナ、クアデリア、リオネラ、ステルク、フリー、トトリ、ジーノ、ミミ……計8人。

いや、かれらの他にもティファナやハゲルといった『アーランドの街』の人々が数人、村に住んでいる人だけでなく『青ぶに』や『たるリス』などといった『青の農村』の者達がちらほら。

そんな中から、耐えきれないといった様子で声をあげたのは、コオルとは昔から商売的な繋がりもあったロロナだった。

「ねえ！　マイル君、ホントの本当にいなくなっちゃったの？　どこかにお散歩に行ったとか、そういうのじゃなくなって……？」

「村長のことを最後に目撃したのは……村長んとこの『モンスター小屋』で寝泊まりしてた古参のウォルフ。小屋の外に感じがしたらしくって外を覗いたら、『光の穴』に吸い込まれてくマイルを見たらしい。それが俺が家に行くちよつと前で……それからはサッパリだ」

ロロナの問いかけに首を振りながら答えたコオル。それに対して次に疑問を口にしたのは大道芸人のリオネラ。泣きそうな顔をしなながらもコオルの話に耳を傾け続けて……その中で気になった言葉を無意識に繰り返していたようだった。

「光の穴……？」

「ウォルフがそう言ったんだよ。つっても、ウォルフもどう言ったらいいかわからんって感じだったからそれっぽいものくらいの認識しかできねえんだよ」

「しかし、そもそも本当にそのモンスターの証言は信用できる物なのか？」

少し喰い気味になりながら言ったのは、難しい顔をした騎士・ステルク。

彼もそう短くない付き合いをしてきているため、『青の農村』の大半の人間がモンスターの言いたいことがわかる」などという噂の真偽は知ってはいる。が、念には念を入れてか、訝しげにコオルに聞いていた。

「証言としては信用できないかもしれないのは百も承知だ。もしかしたら、夢でも見てた可能性だって無くは無いんだからな。……けど、状況的に考えて目撃情報は間違い無いと思うぜ？」

「状況……？ 何か他に手がかりでもあったりしたのっ？」

リオネラと同じく涙目でプルプルと震えていたファイリーが、不安そうに……しかし、希望がないのか継りつくように問いかけた。

「例のウォルフ以外の他のヤツにも協力してもらったが、あいつマイスの匂いは目撃情報通り家の裏手でぶつつりと切れてるんだ。何がどうしてそうなったかはわかんねえけど、ほっぽり出された畑仕事の事も併せて考えると、その『光の穴』ってのに吞まれて消えちまったって言うのが筋が通つちまつてるんだ」

「けど、その先はサツパリなんだ」と困ったように肩をすくめてみせながら首をふるコオル。

周りの人々も首をかしげたりしながらガヤガヤと「何か知っていないか」、「何か手がかりになるようなものは」と各々近くにいる者と喋りだす。

『『光の穴』……言い表し方の問題で……もしかして……？』

あごに指を当てて考えていたクーデリアの小さな呟きは、ざわめきの中に沈んでしまい……

「ふむ。予想はしていたがココか。それも……様子からして、ヤツが帰ったか」

いやによく通る声。

そう表現してしまいたくなるほど、その声はざわめきの中でも人々の耳にもすんなりと入っていった。

そして、自然と皆の視線が声のした方へと向いた時……その内の何人かは驚いたような反応をし……そのまた数人は声まであげた。

「師匠!?!」

「アストリッド!?!」

眼鏡を片手でクイツと上げながら、ヘラリと……呆れた様子で笑うのは、「悪名高い錬金術士」などとも呼ばれるロロナの師匠・アストリッドだった。

「そう大声で呼ばなくとも聞こえる。それとロロナ、私の事は「お姉さま」と呼べと——」

「呼びません! って、どうしてここに!?! 今までどこに………うん、そんなことより……」

いきなりの事に頭が追い付いていないのか髪をワシヤワシヤしてしまいながらも何とか思った事を言葉にしていこうとしているロロナ。ナ。

しかし、それを待つよりも先に、ロロナかのじよの弟子であるトトリが他の何人かも気になったことを口にするのだった。

「あのっ! 「ヤツが帰った」って、どういうことなんですか? もしかして……: マイスさんと何か関係が……!?!」

「むっ、お前は確か……それはまあ後でいいとして、特別に質問に答えよう」

変に上機嫌になったアストリッドが、彼女にしては珍しく何の面識も無いはずのトトリの願いに対してすんなりと承諾し……一呼吸おいてから再び口を開いた。

「お前が思った通り、ヤツとはマイスのことだ。マイスが帰ったんだ、ヤツが元いたことは違う世界……『異世界』にな」

「いせかい、って何の話だよ？」

「どういふことだアストリッド」

話が飲み込めず首をかしげるジーノ。その隣にいるステルクがアストリッドにさらなぬ説明を求め、その眼つきをさらに険しくした。

「ホム」

「はい、グランドマスター」

アストリッドの呼びかけに、彼女の背後からスツと現れた「ホム」と呼ばれたお琴の子。その子は幅が10cmほど細長い紙の両端を持ちその腕でめいっばい横に広げてみせた。

その紙には何やら目盛と、上半分とした半分それぞれギザギザと上下に振れている赤と青の二色の線が描かれていた。

「これは私の研究の一端で、ホムに管理を任せていた装置から観測・集計されたデータなのだが……簡単に言うが、赤い線がプラスの増減で、青い線が^{マイナス}の増減。これと同様のデータを観測・集計する装置を複数個所に設置することで、位置による観測データの差をまとめ、発生位置・規模を推測し記録することができるので」

「発生？」

「お前たちが『ゲート』と呼ぶアレのことだ。この赤い線のほうがその『ゲート』と同じ方向性を持ったエネルギーを観測した際に反応し計測された、というわけだ。単純に言う『ゲート』が増えればこのプラスの数値が増加する」

そう言つてアストリッドが指差し示すのは、グラフの上半分の中でも上のほうをウロウロしている赤い線。

……対して、した半分に示されている青い線は、上下を分けている中央の主軸の太い線、そのすぐ下のそばを走っていた。ソレはごく一部を除いてほぼ上下することなく多少の波打ちだけの変動だった。

しかし、そもそも^{マイナス}の数値はなんなのか……？

その疑問を誰かが口に出すよりも早く、アストリッドのほうからそ

のことについて説明が始まった。

『『ゲート^{アレ}』をプラスと考えた時……排出^{ハク}することの反対方向の流れ……それがここでの^{マイナス}の数値。つまりは、こちらから『ゲート』の向こう側への何かしらの物質・物体の移動、正確にはその流れのためのエネルギーが青の線で表されているわけだ。そのこの部分がつい昨日、街にある私のアトリエに配置していた装置が観測した過去最高値だ』

そう言つてアストリッドが指差した部分は、青い線がグラフの最低のラインまで届いている個所……青い線に唯一大きな変化が見られた地点。

そこまでの説明で、^任放り出^{され}ていたステルクやそのアトリエのことを知っていたロロナが、「アソコにそんな装置が!？」と驚いていた。

……が、頭が何とかついていけていたレベルの大勢、その中の大抵の人がある疑問を……いや、答えを見つけてしまった。

それをわかってか、アストリッドが満足した様子で頷いた。

「ここまでの説明でわかった奴もいたようだが……『ゲート』の先、それがさつき言った『異世界』であり……マイスが元いた世界だ。新種のモンスターというのも、恐らくはあの『ゲート』から出てきた『異世界』のモンスターだろう」

「マイス^彼が元いた世界？ 彼がいたというのは——」

『『シアレンス』という町、だろうか？ だが、おかしいとは思わなかったか？ 探せど探せど見つからない町。知らない技術に、異なる文化……そんなものを持ち合わせたヤツがいきなり現れることを……これまで疑問を全く感じてこなかったか？』

「それは……」

喰い気味に自分の抱いていた疑問を返答されたステルクは押し黙ってしまふ。

「とにかく、だ。ヤツは帰ったんだ。偶然か意図してかは分からんが、

本来いるべき場所へとな」

「そ、そんな……なんで、いきなり……」

「何も言わないで、なんて……」

「まあ、故郷を前にしてはその程度だったということじゃないのか？」
ただでさえ目尻に涙をたたえていたフリーヤリオネラは、今すぐ声をあげてなきだしそうなほどになっている。いや、彼女たちだけではない。街や村のひとたちも動揺したり落胆している人も多くいた。

しかし……

「……です」

やはりと言うべきか、どこでも、どこまでも諦められないひともいるものだった。

「師匠、わたしイヤです！　せつかく仲良くなれたのに、これまで一緒に頑張ってきたのに、このままミス君とお別れだなんて……絶対イヤです!!　だから、どうにかしてミス君を探して、それで……!」
「探す……『ゲート』先へ行く方法それが第一関門だろう……だが、それで？　お前はヤツに何を言うつもりだ？」
「えっ?」

突然の質問にあっけにとられるロロナが質問への返答をするよりも先に、アストリッドがたたみかけるように言葉を続けた。

「その昔、ヤツが一ヶ月ほど酷く落ち込んでいた時期があるのは知っているな？　お前は「わたしが頼りないから相談してくれないんだー」とかわめきながら調査に失敗し続けてたりしたな……あの時のロロナは、アレはアレでカワイかったが。……あの時、ヤツは『魔法』を含めたありとあらゆる手段を用いて「元いた世界へ帰る実験」を続け……それを全て失敗して絶望していたんだ。もう、『シアレンス』には絶対に帰れないんだ、とな」

『……っ!!』

アストリッドに直接言葉を向けられたロロナだけではない、幾人も息を飲む音が確かに聞こえた。

その中でも、トトリは特に表情が歪んでしまっていた。

「人」と「場所」。求め続けたモノは違えど、歩み続けたその先には求めていたものは無くて……ミスがそんな自分と似たような経験をしたように思え、「もし、手を伸ばす先に求めていたソレがあったとしたら……」そう考えると……トトリはもうよくわからなくなってしまうのだ。

『青の農村』の祭りもそのほとんどがヤツの元いた町のもので、そうやって『シアレンス』という故郷を想い続けたヤツに……仮にも一度会えたとしてロロナ、お前はなんて言う？ 何と言って引き止める？」

「そ……それは……」

言葉に詰まってしまうロロナだけではない。誰もが諦めはじめ「仕方ないことなんだ」、「これでいいんだ」という思いがよぎり始めた。

いいわけなどいくらでもある。元より『光の穴』らしきものに吸い込まれて消えたミスを追う手段もわからないのだ。そのうえ、ミス自身のためを考えたら、寂しさが無いわけでもないだろうが……納得はできなくとも、諦めもつく。

そう、思う他無い……

ザリツ

シンツと静まりかえってしまっていた空間に、土がすれる音はよく響いた。

音の発生源は街の貴族であり冒険者でもあるミミ、その足元からだった。先程までは話を聞いていたのでアストリツドのほうを見ていたのだが……そこから踵を返したため、靴の裏が地面の土と擦れてさきほどの音が出たのだろう。

自然と皆の視線もそちらへ向く。

そばにいたトトリが、その悲しそうな顔をしたままミミを見る。

「ミミちゃん……」

「……なんて顔してるの。さつきとマイスを探しに行くわよ。あんな詐欺師の言うことなんて信じる必要はないんだから」

「探すって、でも、でも……っ！ ……ん、さぎし？ 詐欺師！？」

悲しそうに泣きはじめそうだったトトリだったが、ミミの口から出てきた予想外の言葉に目をまん丸にして驚き、涙を流すことも忘れてしまった。

他の周りの面々も同様な反応だった。特に、アストリッドのことを知っている人ほど大きく驚き、言葉にはしていないものの「やばい、マジ」という言葉が顔にかかっているかのように動揺している。

そして、今の会話は当然のようにアストリッドの本人にも聞こえているわけで……

「ほう……？ どうやら、口の利き方がわかっていない奴がいるようだが……」

「ひえっ!? 師匠、滅茶苦茶怒ってる!! ミミちゃんミミちゃん、と、とりあえずあやまっておこう!？」

小声で必死に訴えかけるロロナだが、ミミはその声をスルーし、むしろ不敵に笑って見せている。

「あら？ 口車に乗せて騙す気が無かったんなら、アナタはただの知ったかぶりって事になりそうなんだけど……ご高名な錬金術士様がそんなことしてる、なんてことはありませんよね？」

「なに？」

より一層高まるアストリッドからのプレッシャーに、冷や汗を流しながらもミミは恐れず猫かぶり……ともまた少し違うやや感情のこもった丁寧口調で語り始める……

「目撃情報があることからして、アナタが言ったこと……「マイスが突如発生した『ゲート』とは反対の性質のモノに飲み込まれた」という仮説までは信用できます。……で・す・が！ その後は全然なつて

いません」

「ご存知かしら？」と問いかけた後、一旦大きく息を吸ったミミはアストリッドから目を離さず、言葉を続ける。

『タミタヤ』。それは武器にかかっている『魔法』。その魔法がかかった武器でモンスターを倒すことは殺すことではなく、モンスターを「本来いるべき場所」へと還すこととなる。『ゲート』を通過して迷い込んだモンスターを本来いるべき世界「モンスターの楽園」とされる『はじまりの森』へと還す『魔法』……昔、ミスさんが私とお母様に語ってくださった物語の中にあつた「不思議な魔法」の説明……」

最後だけ、何処か懐かしむように言ったミミだったが、すぐに表情を引き締めた。

「あのころはミスさんが作った創作物語か何かだと思っただけけれど、今ならわかります。あれらは他でも無い、ミスさんが元いた世界でのお話。そこに伝わる神話や事実、知識の物語なのだ。そして……もうおわかりかしら？」

「……………」

『タミタヤ』？ 『魔法』？ 『ゲート』……モンスターが還る『はじまりの森』？」

眉間にシワを寄せるアストリッドと、首をかしげるロロナ。

その様子を見たミミは……ソレを告げる。

『ゲート』の先にある『異世界』……『はじまりの森』はミスさんがいた場所から見ても異世界のように遠い場所……ミスさんのいた『シアレンス』とは全く別の場所よ！ 元いた世界に帰った？ 何て言つて引き止める？ バカじゃないの! 『はじまりの森』はね情報も無くて「モンスターの楽園」なんて抽象的な表現しかされないよ。うな、何人もの人が挑んで帰つてこなかった世界。いくらあのミスさんだからって、絶対安心だだなんて言えない……連れ戻しちやいけない理由も、助けに行つちやいけない理由も無いわよ！」

「そうなのか？」と先程まで諦めムードが漂っていた周囲の人がどよめき出す。

中には、ミミほどでは無いもののそのことについて知っていた人もいたようで……

『はじまりの森』……そういえば、そんな言葉^{あいつ}マイスが出してきた報告書の中のどこかに書いてあった時が……確か、それこそ『ゲート』の調査報告書だったかしら？」

「わ、私も昔、遊びに行つてたころにそんな話をしてもらったような……？」

腕を組み考えこむクーデリアに、ちゃんとは思いつけずに首を傾げてしまうフィリー。

そして、先程までの暗い顔がどこかへ消えてしまった笑顔の眩しいトトリがピョンピョン跳び跳ねた。

「すごい！　すごいよミミちゃん！　マイスさんから聞いたお話、ちゃんと覚えてたんだ!!」

「こ、これくらい当然よっ！　……それに」

「……？　ミミちゃん？」

飛びついてきたトトリを受け止めつつ、恥ずかしそうにそっぽを向くミミ。だが、その表情が照れや恥ずかしさだけではなく……どこか歯痒く悔しそうな表情で、そのことにトトリもすぐ気づく。

そして、トトリだけでなくアストリッドも当然のようにそれを見落さず、さらにはトトリとは違いその内心までも見通してしまっていた。

「ふんっ、そこは分かっているようだな。詐欺師や知ったかぶり呼ばわりはお断りだが、百歩……いや、百万歩譲つてわたしの仮説は『異世界』Ⅱ『シアレンス』」前提の穴だらけだったことは認めてやらんこともない。だが、それは最初に戻っただけ、ヤツを探しに行くと言っていたが……どこに行くつもりだったんだ？」

「マイスさんが行つたつていう『光の穴』だって、きっと他にもどこかに……あとは足で稼げば……！」

「わかっているだろう？　仮にヤツが通つたものと同じものと遭遇できたとしても、結局は遭難者が増えるだけだ」

「それは……だからといって、ここで何にもしないでいるだなんて！」

「精神論だな。親切ついでに教えてやるが、ある時期から増え始めて以後ほぼ一定を保ち続けているプラスとしたエネルギー、『ゲート』とは違い、^{マイナス}のほうは普段は極微弱で、時折突発的に数値が増えることもあれど持続性は無く発生してもすぐに消滅する。場所も規則性が無く予測も不可能」

次々にアストリッドの口から語られる情報。しかし、それらはどうも「朗報」とは言えないもので、むしろミミをはじめとした面々の表情に影を落とすものばかりだった。

そして、それはまだ続く。

「しかも頻度は低く、『ゲート』の目撃情報がある前より始めていたこのエネルギー計測の十数年分のデータからしても一年に四度起こるかどうかくらいで、遭遇することが出来ること自体きわめて稀な現象だ。しかもその内のほとんどは人つ子一人と同じくらいの質量をギリギリ移動させられそうかどうかといったくらいで、それよりも大型の反応は今回の件を除けば八年ほど前に一度あったつきりだ」

「えっと、それって、やっぱり無理なことなんですか……？」

押し黙ってしまったミミのすぐそばにいるトトリが、おずおずとどこか^{すが}縫るように問いかける。

だが、アストリッドはその問いにもためらいも全く無くただ淡々と首を横に振ってみせるばかりだった。

「まあ、裏ワザとして、『ゲート』の消滅時に発生する^{マイナス}のエネルギーを利用する手も考えられなくはないが……アレは微細すぎて一人移動させるのにはその何十倍も必要だからな。都合よく巨大な『ゲート』でもあれば可能性はあるだろうが、そのようなモノはこれまで一度たりとも発見されてはいない。今から探し回ったところで見つけれられる可能性は限りなくゼロに近い」

——やはり、もう希望は無いのか

落ちて、希望を持って立て直し、また落ちて……それを繰り返してきたが、ついにはあるふたりを除いて誰もがそう思った。

そのふたり……そのうち一人は、仏頂面のまま目をつむっており何

を考えているのかはわからず、もう一人は――

「なあなあ、トトリ」

「えっ、ジーンくん？」

「結局、何がどうなって、どうするんだ？」

――何も理解出来てなかった。

ジーンの間を抜けた声での予想外の発言に、トトリをはじめとした何人かがガクツと肩を揺らした。

その内の一人、ミミが呆れかえった様子でコメカミをピクつかせながら言う。

「あんだ、話聞いてなかったの……？」

「聞いてたって！ 森だか楽園だかに行ったらしいけど、「どこかに行ってしまった」ってのは最初からわかってただろ？ んで、そこが危ない場所ってのも。けど、ミスはツエーしそんな心配いらねえと思うけど……でも、どうしても心配ってなら助けにいいだけの話じゃないのか？」

「なのに、なんでか皆、わけわっかんねえ話しだすし……」とブルー文句を言うジーン。

そんな様子にジーンとは幼馴染で長い付き合いのあるトトリは「まあ、ジーンくんだし……」と諦めつつも、放置してそのまま文句を言い続けられても困るため、仕方なく簡単に要点だけ説明してあげることにした。

「だから、ミスさんが何で言っちゃったのかとかは分かんないまま……そもそも、ミスさんがいるはずの『はじまりの森』に行く手段がないのっ。だからみんなこんなに悩んでるのに……ジーンくんは……」

「いつもみたいに、トトリの錬金術でいけばいいんじゃない？ ミスを目指してピユウってさ」

『『トラベルゲート』のこと？ でもアレは、お家とかアトリエとか

……そういう場所以外でも座標さえわかっただけなら跳べないけど……。けど、言った事の無い場所の、それも『異世界』だなんて跳んでけるわけ——」

「ああつ！ それだ!!」

「——ない……えっ？ 先生？」

「それだよ！ 『錬金術』で作っちゃえばいいんだ！」

突然大声を上げたロロナが、そう高らかに言った。……が、相対するトトリは頭に疑問符を浮かべたまま首をかしげてしまっている。

「ええ……？ 『トラベルゲート』じゃあ無理ですよ？ ……もしかして、他に何か便利なアイテムが……」

「それは……ない。けどっ！ 何回か試してみないとかもだけど、きつと出来るはず！ だって……」

そこまで言ったロロナは……アストリッドの方へと向き直って頬を膨らませた。

「もうっ！ 師匠ったら、こんな時までイジワルしなくたっていいじゃないですか！」

「ハア？ ちよつと、どう言うことよ？」

プンスカ怒るロロナを見、その発言を聞いたクーデリアが困惑した様子でロロナとアストリッドを交互に見比べながら言う。

「どうって……今思えば、すつごくイジワルで回りくどいけど師匠は最初っから教えてくれてたんだよ」

「教えてって……一体何をですか？」

トトリの問いかけに、ロロナは自信満々に頷いてから口を開いた。

「ミス君の所に行きたいなら『ゲート』を逆さまにしちやえ、って！」

「『『ゲート』を、逆さまに?』」

「うんっ! そんな道具を作って使ったら、流れも逆になつて向こうっかわ……マイルス君が行った『はじまりの森』に行けると思う」

「ロロナさんの言ってることは、筋が通るような通らないような……けど、わからなくはないわね。……本当にできるかは置いといて」

「どんな道具になるかはわかんないけど、確かにそれなら……あつ、でも仮に他の所の『ゲート』でそれが出来たとして、本当にマイルスさんが行ったところにたどり着くのかな?」

ミミに続き、トトリが頷きかけ……しかし、不安を抱いてしまいその動きを止めてしまった。しかし、その不安を拭い去る考えを、ロロナはすぐさま発案する。

「『ゲート』ってなんでかはわかんないけどソコから動かせないし……いつそのこと『ゲート』そのものを発生させる装置も調合しちやえばいいのかも?」

「マイルスと合流した後の事の帰りの事も考えれば、それが最善かもしれないわね。……けど、『ゲート』なんてロロナ作れるの?」

クーデリアが口に出した誰もが抱くだろう当然の疑問に、ロロナは自信なさそうに「うくん……」とうなった。

「可能です」

「その声は……ほむちゃん!」

どこからか現れた女の子のホムに驚くロロナ。そのホムの手には何やら「鍵」が握られていた。

「『ゲート』を構成している要素は、すでにグランドマスターが解明済みです。なのでそれをを用いた設計で調査を行えば不可能ではないとグランドマスターも以前に言っていました」

「なっコラ、ホム!」

静観していたアストリッドが、ホムに制止をかけようとする……が、ホムは止まること無く話し続けた。

『ルーン』です」

『ルーン』？ それって一体……？』

「簡単に言っちゃえば、大地を中心とした「自然のエネルギー」だな」
「そして、人やモンスターの中にも根源にある……って、確か言ってたわ」

トトリの疑問に答えたのは……リオネラの両脇でフワフワ浮かんでいる黒猫と虎猫の人形・ホロホロとアラニーヤ。そのふたりに続いて今度はリオネラ自身が喋りだす。

「マイスくんや私だけじゃなくて、ファイリーちゃんも『魔法』を使ったから、知らないだけで誰でも持つてるものなんだと思う……」

「けっけどね、結構練習してやっと思えるってくらいだし、そのうえすぐに疲れちゃうから……きつと、私達の中にある『ルーン』だけで『ゲート』をつくるっていうのは無理なんじゃないかな」

自信なさげではありながらも、自身の経験も挟みつつ体内の『ルーン』の扱いについて話すファイリー。

しかし、それは問題を浮き彫りにしてしまうものでもあった。

「じゃあ、どうやってその『ルーン』を確保したらいいんだろ……？」

「大丈夫です、マスター。どうぞこちらを」

「えっ、なにほむちゃん……って、「鍵」？」

「先程回収して来た、『作業場』に放置されていたおにちゃん家の『倉庫』の鍵です。『倉庫』の中に十分な量とは言えないでしょうが実験用分くらいの『属性結晶』はあると思います」

『属性結晶』？』

いきなりの倉庫の鍵の登場に「防犯は……？」と驚きを通り越して引き気味だったトトリだったが、ロロナとホムの会話内で聞きなれない言葉が聞こえてきたため、つい復唱してしまっていた。

その声を耳にしていたホムが静かに頷く。

「はい。主に『ゲート』を破壊した際などに入手できる結晶のことで。それは至極簡単に言えば「属性」という方向性を持った「凝縮さ

れ結晶化した『ルーン』。つまり……」

「『ゲート』の材料になるっ！」

ロロナとトトリ、二人の錬金術士の声が重なった……。

希望が見えはじめ、盛り上がりを見せるロロナとトトリの周辺。村や街の人々もそちらへと集まっていた。

「さて……どこまでがお前の筋書通りだ？」

……が、そこから少し離れたスペース。取り残されるように離れた場所から様子を眺めはじめていたアストリッドに、そんな声がかげられた。

「はて？ なんのことやら？ 言っておくが、遠回しに教えていたなどというのはあくまでロロナの勝手な想像だぞ？」

ヤレヤレと肩をすくめてみせるアストリッドに、声の主——ステルクが淡々と言葉を発した。

「彼女の言っていたこと云々ではない。お前のことを少なからず知っている身として、あの程度の推論を結論にってしまうなどという半端なことは、お前なら絶対しないだろう……そう思ったただけだ」

「だから、ワザとらしい演技で周囲を誘導していると思っただけ……と。まあ、お前がそう思ったならそう思っとけばいい」

興味なさげに、短くため息をつくアストリッド。

「……まあ、「諦めたなら、それはそれでよかった」とだけ言っておこうか」

「ハア……その様子だと、相変わらぬようだな」

今度はステルクが大きなため息をつき、額に手を当てて首を振っ

た。

「ステルクさんっ！」

不意にステルクを呼ぶ声が聞こえた。

その声の発信源を見れば、ステルクへ向かって手を振る錬金術士の二人の姿があった。

「手を貸すのか？」

「彼女たちに頼られて、断れる気も、断る理由もありはしないからな。それに……」

そう言いながらステルクは歩き出し、アストリッドを振り返ること無くそのまま行ってしまった。

最後にこう言いながら……。

「相手が誰であろうと、窮地に立たされているだろう者のもとに駆けつけ救うのは騎士として当然のことだ」

そんなステルクの後ろ姿を見送るアストリッドは、ひとりポツリと呟く。

「そつちも相変わらずじゃないか……」

「たつく、あんたらが各々勝手にやりはじめたら、出来ることもできなくなるわよ。いい？ あたしが役割分担を教えるからよく聞いておきなさい」

そう言つて話を切り出したのはクーデリア。

「まず、リオネラ。あんたはマイスン家の本棚とか『学校』用の資料とか全部ひっくり返して『ルーン』関係の事を全部洗い出しなさい。性質、運用法、とにかく利用できそうなものは何でもよ。『魔法』に……」

『ルーン』に一番馴染みのあるあなたなら分かることもあるかもしれないから、頼んだわよ」

「うんっ、が……がんばる！」

そばにホロホロとアラニーヤを連れ添ったりオネラは、両手をギユツと握って握りこぶしを作り、気合十分な様子を見せる。

「ファイリー。あなたはあたしと一緒に『冒険者ギルド』に戻って、ギルドの資料室の中からマイルスが提出した報告書を引っ張り出してまとめ上げて。特に『ゲート』に関する報告書もあるから絶対に見つけなさい。ソレが終わり次第、あたしの方の仕事を手伝ってもらおうわよ」

「資料室でって、あの大量の中から……自信はそんなにない、けど……でもっ、頑張ります。頑張ってみせますっ！」

やはりと言うべきか、涙目でプルプル震えそうになりそうなファイリー。だが、寸前で留まれた様子で、一生懸命に意気込んでいた。

「そんなもって、冒険者組は単純明快。それぞれ散らばって『ゲート』の搜索、『属性結晶』の収集よ。効率化も考えて『ゲート』がある可能性が高い場所……『新種のモンスター』の目撃情報・被害情報がある場所をギルドでピックアップでき次第、伝書鳩で情報を送るから活用してちょうだい。集めた『属性結晶』が今後の調合の要になるから大いに頑張ってよね」

「おうっ！ とりあえず、メル姉えとか協力してくれそうな人にも声をかけてみるからなっ」

ジーノが軽快に笑いながらそう言い……

「ギルドでのハトの用意が終わり次第、私もそちらへ参加しよう」

ステルクは、相変わらずの仏頂面でそう告げ……

ミニミは……

「わ、わたしもっ！」

「トトリは調合のほうに集中してちょうだい。……私も一応はマイルスに『錬金術』を教えてもらってるけど初歩も初歩。難しい調合がちゃ

んと出来るのはあんたとロロナさんくらいなの、コッチは私たちに任せようだい」

「ミミちゃん……」

「そうよ、トトリ。あんたたちがやるのが何よりも一番重要よ。一応は「できそう」ってだけで、道具は実際のところ全部ゼロの状態から考えて調合していかなきゃいけないのよ。あんたたちにしかできない、重要な役割……頼んだわよ」

「わたしにそんなこと……本当にできるのかな？」

「大丈夫、独りじゃないんだから。みんなも頑張ってる、わたし達もそばに居て一緒にやってく……きっと出来るよ！」

「ホムもお手伝いしますので、ご安心ください」

プレッシャーで弱気になっていたトトリを励ますロロナとホム。

そして、トトリはふた地の顔を見て……頷き合い……

「はい、みんなで頑張つて……絶対マイスさんを助けましょう！」

「みんなで……か」

「村長の帰りを待つ以外に、オレたちができること……」

ロロナ【*11—1*】

【*11—1*】

「マイス救出」の目標を掲げて各々自分がやるべき役割をこなすべく邁進していく……。

そんな中、今回の計画の要といえる部分を任されたロロナとトトリは、『アールランドの街』の『ロロナのアトリエ』に場所を移し、それぞれ試行錯誤をしながら調査を行っていた……。

ロロナのアトリエ

——ぼかんっ！

「あっ」

音を立てて爆発——とは言っても、周囲の物を吹き飛ばしたりすることのない釜の中だけで済む小規模の爆発ではある——したのは、ロロナがかき混ぜていた錬金釜。どうやら調査に失敗したようだ。

「先生、また……」

「集中力を散らさないでください。一段落するまで自分の調査に専念を」

「は、はいっ—」

爆発してしまったロロナの錬金釜ほに意識が向いてしまっていたトトリは、二人の補助をしているホムちゃんに指摘され自身の目の前にある自分用の錬金釜の方へと集中を戻した。

それを確認したホムちゃんは、薄っすらとはあるが確かに黒い煙を上げているロロナの錬金釜へと近づいた。そして、中の様子を確認

してからロロナのほうを向く。

「……やはり、中身は全部ダメそうです。ホムも手伝いますので手早く片付けてしまいましょう」

「ううっ。ゴメンね、ほむちゃん」

「かまいません。これがホムの仕事ですし……それに次こそは失敗しなければいいだけです」

「が、ガンバリマス……」

凹んだ様子でイジイジとするロロナに「……早く片付けましょう」と言つて促すホムちゃん。

結局ふたりの片付けが終わったのは、トトリの調合が一段落した後だった……。

「あの、先生が今やつてる調合つて『ゲート』を反転させる道具」でしたよね？ それつてそんなに難しいんですか？」

「んーん、そんなことな——「難しいです」——うえっ、そうなの!？」

ロロナとホムちゃんが後片付けを終え、トトリが調合が一段落したところで、「焦ったところで良い結果は出ません」というホムちゃんの発案で小休憩のティータイムが始まり……少ししてからトトリの疑問。ソレに答えようとしたロロナの言葉——の途中に割り込んできたホムちゃん。それにはトトリよりもロロナが驚かされていた。

「いや、でもなんとなく何をどう入れたらいいかとかも分かってるか
らレシピ考えるのも簡単で、工夫もそんなにいらさないし、調合自体も
そんなに難しくないと思うんだけど……?」

ホムちゃんの言った「難しい」がいまいちピンときていない様子の
ロロナが、そう反論を述べる……が

「でも、その調合を失敗しちゃってますよね?」

「うぐっ!？」

「それも、何回も……」

「うぐぐつ!? そ、それはそうなんだけど……」

トトリの鋭い指摘に、ロロナは胸に手を当てて大袈裟に見えるリアクションを取る。

と、まあ、そんな調子の師弟の様子を見ていたホムちゃんが、「ですが……」と相変わらずの淡々とした口調で喋りはじめた。

「マスターが自信があるのに失敗しているという奇妙な点はさておき、難しいのは事実です。おそらく……トトリでは調合は困難かと。まあ、だからといってそちらの調合が簡単だと言うわけではありませんが」

「トトリちゃんが調合やっしてるのって、『ゲート』を発生させる道具だよね? ソッチのほうがよくつぽど難しそうに思えるんだけど……?」

「どうでしょう? 今は完成品最終目標のためのパーツを作ってる途中段階で、細かかったりはしますけど作れないって頭抱えちゃう程じゃないです。うーん……これから大変になってくるのかな? でも、考えたレシピ通りにやれるならそんなこともなさそうだけど」

トトリは自分のやっていること・やっていると頭の中で整理し……そのうえで少々悩みつつもそう判断する。そこにホムちゃんが注釈を入れる。

「調合そのものは難しくないのでしよう。ただ、全てを合わせた上での最終調整は運と根気との勝負だと、グランドマスターは言っていました。失敗しても調合ではなく細かい部分の微調整の繰り返しなので、爆発して部品がダメになったりすることはありませんしそう心配しなくてもいいかと」

「へえーそうなんだ」と話を聞いていたトトリだったが、不意に違和感を覚え「はて?」と首をひねった。

「えつと……グランドマスターって、あのアストリッドさんっていうロロナ先生の先生のこと……だよな? なんて、私と先生とで考えた道具の事を詳しく理解わかつしてるの?」

「以前、『とある研究』の際にグランドマスターが二人の考えたものと

よく似たものを作ったことがありました。その時に半ば独り言のようにホムたちに教えてくださったのです」

「えっ？ 師匠も作った事あったの？ じゃあ、それを使えばいいんじゃない……」

「今現在、その道具は現存していませんので不可能です」

そう言い切ったホムちゃんの言葉に、二人は顔を見合わせた後、再びホムちゃんのほうを向いた。その目は「なんで？」という疑問を言葉が無くともありありと伝える視線だった。

「理論上問題無いはずの動作を、毎回微調整を繰り返しながら百回ほど試行した末に八つ当たりのため空高くで爆散しました」

「師匠でも上手出来なかったんだね、その道具。ちよつと意外かも」

『『ゲート』の発生は、理論一割、素材一割、残りの八割運と偶然。でなければ、この方法でこの私が出来ないなんてことはありえないからな』……とのことで。まあ、グランドマスターは他の研究もしていましたが、元々その道具は「本命」ではなかったそうなので、八つ当たりそんなことをしたのでしよう」

「それって負け惜しみ……って、あれ？ 私、今からそんなものに挑戦しないといけないんじゃないじゃ……さつきホムちゃんが言ってた運と根気ってそういう？」

めんどくさがったりしながらも実は何でも出来る……というイメージが強かったアストリッド師匠の意外な一面を知れてなんとなく嬉しくなっているロロナ。

ただし、トトリは余計にこの先の事への心配を募らせてしまっただ……。

「けど……」

「師匠がわたしとトトリちゃんとで考えた事を知ってたのは、昔から間を見計らったみたいに突然出てきてたりしたし、そんな師匠の事だからってつきり色々考えてるわたしたちのことをずーと覗き見てたのかと……まあ、そんなこと無いよね、あはははっ」

トトリとも出会っていないころの——まだアトリエを護るために

王国からの依頼をこなすことに奔走していたころの——昔を思い出して、一人その思い出にふけり微笑みながら言ったロロナ。

彼女の脳裏にはきつと、アストリッドに驚かされ、からかわれ、いじられたりもした過去が廻り廻っているのだろう。

ただ……

「……ホムは黙秘します」

「えっ」

そのホムちゃんの意味深な一言で、ロロナとトトリは固まってしま
うのだが……。

「それじゃあ、休憩もここまでってことで調合を再開しようか！ こ
こまでで遅れちゃってる分も取り戻しちゃうくらい、がんばってこ
ー！」

そう元気良く宣言するロロナに、隣に立つトトリが良い笑顔で「は
いっ！」と返事をする。

「では、マスターは数時間散歩でもしてきてください」

「うん！——」

——うん？——

ホムちゃんに言われたことに素直に頷き——数秒の間を持ってか
ら首をかしげるロロナ。その表情は段々と眉と口とがへニヤリと曲
がり……

「失敗するたびに段々と爆発音が大きくなり、上手くいつていたトトリの釜を巻き込んだの連鎖爆発をしてしまわないかヒヤヒヤしますので、とりあえずトトリこちの調合が終わるまでマスターは行動ということで……」

「うわーん!!」

……泣いた。

泣いたロロナがアトリエを飛び出して行った後……

「あのー、ホムちゃん？ 私が『アランヤ村』の自分のアトリエで調合すればよかつたんじゃ……」

「いえ、それだともしもの時の補助や相談といった連携が上手いきませんので、二人揃って『ロロナのアトリエ』でするのがいいんです」
「でも……」

「これでは本末転倒なのでは？ と気にするトトリを他所に、ホムちゃんは淡々とトトリの調合の用意をしている。その準備の手を止めぬまま、ホムちゃんは口も動かす。

「それに、マスターはきつとすぐに作り終えてしまうでしょうから、今のうちにこちらの調合を終わらせていた方が良いのです」
「えっ？」

「本来、マスターほどの腕があれば『ゲート』を反転させる道具」の調合は、マスター自身がそう思ってたようにそう難しいものではなく、失敗するはずはありません」

「でも、先生は実際に何回も失敗しちゃってるよ?」
「それは今のマスターはダメダメだからです。あれではどんな調合も失敗しています。原因は単純明快ですので、さすがのマスターでも自覚しているとは思いますが……早く気持ちを入れ替えてもらわないと、ホムも他の人達も、マスターも……そしてきつとおにいちちゃんも困ってしまいます」

そう言つて、不意に作業の手を止めてロロナの出で行った扉を見つめるホムちゃん。それに釣られるようにして同じく扉を見るトトリ。

「ときこ」

「?」

「ホムはトトリの^{あなた}ことを何と呼べばいいのでしょうか? グランドマスターの孫弟子で、マスターの弟子ですから……」

「……………え?」

ロロナ【*11—2*】

【*11—2*】

職人通り

「アイタタタつ。……ぐすんっ」

ほむちゃんに「マスターはアトリエから出ててください（意訳）」って言われて、つい飛び出してきちゃって、それで……アトリエから出てすぐの通りの階段で一段踏み間違えて転げ落ちちゃった……。

「ううっ、ほむちゃんも、あんな言い方しなくっていいのに」

そんな踏^ふんだり蹴^けつたりな状況でわたしがつついっつい漏らしちゃった眩きは、特に誰に聞かれるわけでもなくて……ちよつと寂しい気がする。

いやまあ、追い出されたのはわたしが何回も調合に失敗しちやっただのが悪いんだから、当然といえば当然の結果なんだけど……。

普通に考えたら、調合している横で小さくとは言っても何度も爆発させてる人がいたら気が気じゃないよね。そんな状態だったんだろうトトリちゃんに代わってほむちゃんがわたしにああ言ってきたんだと思う。

……うん、やっぱりわたしが悪かったんだよね。

とは言っても、わたしだって失敗しようと思っただけで調合をしてたわけじゃないし……うーん、でもそれは言い訳だよな。

「はあく……なんであんなに失敗しちやっただら？ 出来そうな気はしてるのになあ……」

とは言っても、出来ていないのがまぎれも無い事実なわけで。

「何回も」ってことは、何かしらの原因があるんだと思う。

思い浮かぶのっていったら、調合の仕方か素材の吟味、もつといえ
ばレシピそのものに不備まちががあるのかもしれない。

トトリちゃんにも協力してもらったし、わたしにはアレ以外には思
い浮かばないーってくらいには考えに考え抜いたレシピで間違え
ちやつてたりはしないとと思うんだけど……。でも一から作ったレシ
ピだから絶対に絶対に成功するとも限らない気も……。

……ほ、他に失敗の原因になりそうなのって何かないかなあ？

そう、例えば——わたしが爆発失させちやつた時たにトトリちゃんがホ
ムちゃんに注意されてたみたい……。『集中力をきらさない』って感
じで。

「集中力……集中………」

……こころあたり、あるような気がするよな、しないよな？

何か心はどこかにひつかかかってしまっている、そんな感じ……。

『だが、それで？ お前はヤツに何を言うつもりだ？』

アストリツド師匠から言われた一言。わたしはその一言にあっけにと
られちやつて言葉を詰まらせてしまった。

でも、今のわたしの胸の内にひつかかっているのは、師匠の言ったそ
の言葉じゃない。その言葉の後、わたしの頭の中をぐるぐる回ってい
た考ことえ、それがずーっと離れずに残っちゃつてる気がする。

……思えば、度重なる失敗もそのせいな気もしなくはないかも？

「つまりこれは師匠のせいってことなんじゃ………」

「何が私のせいだど？」

「それはもちろん、わたしが何回も調査に失敗しちゃうのが……って」
トボトボ歩きながらの独り言……だったはずなのに、不意に左耳から聞き知った声が入ってきて……って、この声って？

「うええう!?! し、しし師匠っ!?! いつのまに……!?!」

「いやなに、いきなりお前がアトリエから飛び出してきたかと思っただら階段を転げ落ちて、そして一人寂しそうに歩いていたので……心配して隣を歩いてやってたんだぞ? ん? ん?」

「っ、つまり最初っから……」

やっぱり師匠って四六時中わたしたちのこと監視してたりしてたんじゃない?!?!

というか、「心配して」なんて言ってる師匠だけど、その表情はむしろニヤついてとてもじゃないけど心配しているようには見えないんですけど……。

一時期は旅をしてまわってまで探した師匠。その師匠がコツチの気なんて知らずにいつの間にかひよっこりと帰ってきて……それで、昔と同じ調子でわーわー好き勝手にやってる。それが少しだけ何とも言えない気持ちになっってくるんだけど……今はそれを置いといて。

今、重要なのは『青の農村』で話に乱入してきた後、ほむちゃんを置いてフラっとどこかへ行ってしまった師匠が目の前にいるって事。「いきなり出てきたこととか色々言いたいことはありますけど……師匠」

「なんだ? ついにお姉さまと呼ぶ気に——」

「違いますよっ。あの、ほむちゃんから聞きましたけど、師匠ってコツチにいない間に『ゲート』を発生させる道具」とかの研究もしてたんですよね?」

「ん、片手間の研究の一端で、な。ほら、あの時見せた計測結果のグラフがあったらどう? あの計測が元となって、そこから……まあ詳しいこと置いとくとして、それがどうかしたか?」

「その中で、わたしにそう気付かせてくれたみたいに『ゲート』を反

転させる道具」みたいなやつも作ってみたりしてないんですか？」

ほむちゃんから話を聞いた時から「もしかして……」とは思ってたけど……どうなんだろう？ 可能性としては十分にあると思うんだけどなあ。それであつたら譲ってもらったりなんかすれば、わたしが調合を失敗ばかりしちゃうのも、それで予定より色々遅れてるのもなんとかなるのに。

いや、でも「発生させる道具」のほうは爆散させたみたいな話だし、反転させるのはさすがに……。

「作つてあるが……それがどうかしたか？」

「そうですよねー。さすがに——」

……ん？ 作つてる？

聞き間違えではないみたいだし、驚き……とはいっても、なんとうか……

「——さすがは師匠つて感じですね」

「ふふっん、もつと熱烈に褒めたたえてもいいんだぞ？」

そう言いながらドヤ顔で眼鏡をクイツと上げる師匠。

「あの、それを貰つたりとかは……？」

「まあ、他でもないお前の頼みだ。それ相応の対価さえ支払えばくれてやるのも吝かではない……が、おすすめはしないぞ」

……？ どういうことなんだろう？

「おすすめはしない」つて、何かその道具にマズイことでもあるのかな？ 例えば、扱いがとーっても難しくって危ないとか、使うためにはものすーっごい素材が必要だとか？

「いや、違うぞ？」

色々考えてたのが顔に出ちゃつたのか、それとも相手が師匠だったからか、師匠がそんなこと言つてわたしを否定してした。

でも、「違う」なら、一体何で？

「すすめない理由は至極単純で……同時に複雑難解だ」

「単純で複雑？」

「お前はそれで納得できるか？」

なっ……とく……？

「正直に言おう。私はその気になればお前たちがやろうとしていることを実現できる道具もすぐに用意できるし、もっと極端なことを言えば、よりスマートな手段を用いてヤツをこちらへ連れ戻すことも不可能ではないだろう……だが、お前はそれで納得できるのか？」

「納得も何も、今はミス君を助けるのが優先に決まってるじゃないですかっ！」

「少なくとも、私は納得できん！」

「えっ!？」

「だってそうだろう？ あの現象そのものには興味を惹かれはするが、ヤツがいなくなろうと私には利益はあつても不利益は言うほど無い、故にわざわざ助けてやるつもりはない。それに、お前に頼まれるにしてももう少し媚びるように頼んでくれないとだなあ……」

そう言った師匠は、頬を赤らめながら「もつとこう……」「お願いしますうお姉さま」みたいな感じでなあ？」ってわたしの声マネ(?) もしながらクネクネして……

「……って、ただのワガママじゃないですか!？」

「ワガママで何が悪い!？」

何でそんなことを胸張って言えるんですか!？」

もうやだ、この師匠！ 昔以上に酷く自分勝手になってる気がするよっ！

「まあ、そんな私の意思を知ったところでお前たちは計画を止めたりはせんだろうし、私も妨害しようなどとは考えていない。だが、師として失敗の原因でもあるお前が抱えている悩みを解決してやるのが先決だな。そうだな……ヤツの家に行ってみるといい」

「やつ?？」

「言わんでもわかるだろう？ ヤツの、マイルスの家だ」

青の農村・マイルスの家前

「……っで、来ちゃったけど……」

わたしの目の前には、マイルス君持主がいなくなってしまった一軒の家。アトリエからは追い出されちゃってたし、他に用があったりしたわけじゃないから、言われるがまま『青の農村』まできちゃってたんだけど……よくよく考えてみたら、なんかおかしいよね？

「何回も調査失敗してるーっていうのは、師匠に話しちゃってたけど……でも、それだけでどうしてその原因が師匠にはすぐにわかってたんだろう？ それも、「お前わたしが抱えている悩み」でって」

わたしは一応は集中力云々のことを考えた時に「もしかしたら……」って思いはしたけど、そのことは師匠は知らないはず……。

「それに、何でマイルス君の家に行ってみたらいいって言ったんだろう？ ……そりゃあマイルス君がいたら根本的に全部解決するけど……いないからこんなことになってるってわけ……」

そもそも、わたしの中でひっかかってしまってることって、下手したらマイルス君がいても解決しないかもしれない気がするし……。いやまあ、マイルス君が『アーランド』にいたいっていつてくれたら、それでいいんだけど……。

「……うん。ここで考えても仕方ない気がするし、帰ろう」

そう思って来た道を帰ろうとしたんだけど……その時、玄関のほうから「ガチャ」と音が聞こえた。

えっ？ マイルス君はいないはずだし、いったい誰が……？

「あ……ろ、コロナちゃん？」

「りおちゃん……ああつ、そっか」

マイルス君の家から出てきたのはりおちゃん。その両隣にはいつものようにらにやちゃんとほろくんがフワフワ浮かんでる。

……そういえば、りおちゃんはマイルス君の家にある本とかを漁って『ルーン』のこととかを調べてるんだった。なら、ここにいて当然だよ
ね。

「なんだか声がするよな気がするって思ったら、^{アナタ}ロロナだったのね」
「どうしたんだ？ まさかとは思うが、もう『属性結晶』が無くなつたか？ もしかしたら『作用場』のほうのコンテナに残ってるかもしれないけど……」

そう言ってくれてるらにやちゃんとほろくんに、わたしは首を振りながら「いいの、いいの」って言う。

「別に、そういうのじゃなくなつて……うーん、なんて言ったらいいんだろう？」

「……？ どうかしたの？」

「どこから話したらいいのか……ええつと、まずはわたしがアトリエから追い出されちゃって——」

「オイオイ」

「……何したのよ、アナタ」

……とりあえず、りおちゃんたちにこれまでのことを話してみた。

「——で、師匠にはここに……マイルス君の家に行ったらいいって言われて来てみたんだ。でも、なんだかスツキリしたりはしなくなつて……」

「はあん、なるほどな」

「アナタの師匠がそんなことを」

事情はわかってもらえたみたいで、ほろくんとらにやちゃんが頷く

ような仕草をしてくれた。

「けど、なんで師匠はミス君の家に行けーって言って来たんだろ？」

またイジワルしてきてるとは思いたくないなあ……」

「あの人のことだから、何かしら意味はあるんでしょうけど……」

「とはいえ、あのネエチャンの考えを理解しろってのが無理な話だよな」

……うん。ほろくんの言う通り、師匠の考えていることをわかるようになるのは、いろんな意味で無理な気がするよ。趣味趣向はもちろんだけど、なんだかんだ言っただ元々頭もいいわけで……やっぱ無理な気がする。

「ろ、ロロナちゃんっ！」

「ふえっ？ どうしたの、りおちゃん」

急に大きな声を出してきたりおちゃんにちよつと驚いちやったりもしながらも、改めてりおちゃんの方へ向き直ると、りおちゃんが胸の前で両手をギュツと握ってわたしを力強い目で見えてきた。

「ああのねっ、調合のこととかはわかんないけど、ロロナちゃん悩みのことなら……わたしたち、聞いて上げられるよっ！ た……たぶん、だけど」

「りおちゃん……」

「まあ、聞いてやれるってだけで、解決できるかはわかんねえけどな」

「もうっ、そういうことはわざわざ言わなくていいのよっ！」

「あはははっ……でも、聞いてくれるだけでもうれしいよ」

とはいっても、わたしの悩み……心の中のひっかかりが本当に調合の失敗と結びついてるかどうかは……でも、それによる集中力不足以外に理由も思いつかないのも事実だしなあ？

ちよつと悩みながらも、りおちゃんなら相談できる気がして、わたしはまだ誰にも話せてなかった悩みを打ち明けてみることにした。

悩み……って言うのとはちよつと違うような気もするんだけど、あの時からずーつと頭の中に残っちゃってて、よくフウツと思ひ出しちゃうんだ

師匠にね「お前はヤツに何を言うつもりだ？」って言われたあの時。その後、師匠が言ってたマイルス君が故郷シアレンスを想い続けたって話も心当たりはすつごくあつてね……わたし、止まっちゃったの。

それまでは……

「マイルス君と離れたくない」

「これからもずつと一緒にいたい」

「連れ戻したい」

……って思ってたのに、そういうのが全部無くなっちゃって……その代わりにね——

——『シアレンス』に帰れたほうが、マイルス君は今よりずっと幸せなんじゃないかな——

——そう思っちゃったの。

もちろんね、マイルス君が行った先が『シアレンス』じゃないってわかってからは「連れ戻したい」とかまた思えたし、『はじまりの森』のことを知ったらマイルス君なら大丈夫かもって思ってもやっぱり「助け出さなきゃ」って思ったよ？

でもね、残ってるの。

あの時のわたしの頭の中に浮かんだ言葉が……だから、いつもいつの間にか考え出しちゃうんだ。

もしかしたら、マイルス君にとって『アーランド』は生き辛くて、本当は今でも『シアレンス』に帰りたいんじゃないか、って。

今やってる調査じさや実験じけんがどんどん進歩して、変わって行って、いつかは『はじまりの森』じゃなくなって本当に『シアレンス』に行けるよ

うなものが出来ちゃうんじゃないか、って。

そうしたら、マイルス君が帰れちゃうようになるんじゃないか、って。
何年も前、全然元気が無くなって沈んでいたマイルス君を思い出したら

いつも一生懸命に、お祭りをあんなに楽しんでもマイルス君を思い出したら――

『シアレンス』の近くにある綺麗な場所のことを楽しそうに話したマイルス君を思い出したら――

『シアレンス』の人たちのことを懐かしそうに……どこか寂しそうに言っていたマイルス君を思い出したら――

やっぱりマイルス君には『アーランド』に戻って来てほしくって……でも、もしもマイルス君が『シアレンス』に帰りたいて言ったら、わたしはどうしたいんだろう？ どうするんだろう？

「――って、感じのことをいつの間にか調合中に考えだしちゃって……たぶんそのせいで集中力がとんでっちゃったから、失敗ばかりしてたんだと思うんだ」

そこまで言ったところで……自分の耳に入ってくる自分の言葉を聞いて、改めてちよつと凹んじゃった。

なんていうか陰湿ってというか、勝手に色々考えちゃって聞けば聞くほどマイルス君に悪い気がしてくるような……。

「ってというか、もしももしもで考え過ぎだよね。ご、ごめん……」

「まあ、仕方ないんじゃないかしら？ いきなり色々あった上に、よりにもよってマイルス君がいなくなっちゃったんだから。そのくらいネガティブになりもするわよ」

「だな。……にしたって、相変わらずのお人好しっつーか、相手思い過ぎっつーか。もっと自分の思った通りにすればいいってのによ。コイツなんて、なあ？」

「なあ?」ってらにやちゃんとほろくんが顔を見合わせて頷き合つて……って、あれ? 間にいるりおちゃん、いつの間にか俯うつむいて……? さつきほろくんが言ってた「コイツ」っていうのはきつとりおちゃんのことだろうけど、それと何か関係が……?」

「えつと……何かあったの?」

「何かあったつっーかな? マイスがいなくなつてオマエが色々考えてるのと同じ時にコイツが何考えてたと思う?」

「今の話聞いとると、同じ人マイスを想つてる人同士でも、考えてることは全然違うんだってちよつと驚いたわ」

「なんで、りおちゃんが思ったことを二人が……って、そういえば、ほろくんとらにやちゃんつて、りおちゃんと一緒に、りおちゃんの方からはわからないけど二人の方からはりおちゃんのことを色々わかるんだっけ?」

「……けど、りおちゃんつてあの時に何を考えてたんだろう?」

「……つま、それは今はどうでもいいか」

「そんなあ!?! 凄い気になるんだけど」

「ごめんなさいね。それより今は、リオネラが言いたいことがあるみたいだから」

「りおちゃんが?」

「言われて改めて目を見てみるけど、やっぱり俯き気味でその表情かおは見えない。」

「なんだか、ちよつと震えてる……? だ、大丈夫かな?」

「………か」

「?」

「コロナちゃんの……ばかっ!」

「ええっ!?!」

なにっ!? 今、わたし、りおちゃん何て……………ばか……………馬鹿!?

いやまあ、師匠とかくーちゃん、イクセくんとかにけっこう言われたことはあるし、バカ以外にもアホだとか色々言われたことあるけど、あのりおちゃんに!?

「わたし、何かしちやってた!? りおちゃんを怒らせちやうようなこと……………! ご、ごめ——」

「謝らないでっ!」

「うえっ!」

そ、そんな…………っ!?

で、でも、怒らせちやっただならちゃんと謝らないとだし、でもでも

「私には……………謝らないで……………!」

「……………へ?」

りおちゃんには……………? それってどういう……………?

「マイス君はコロナちゃんのことを……………グスツ……………コロナちゃんのことを選んだんだよ? 好きだって……………大好きだって言ってくれたんじゃないの……………!」

「りおちゃん……………?」

「……………いきなりいなくなって、心配なのもっ、不安でいっぱいなのもわかるよ? もしかしたら、『はじまりの森』にも『ハーフ』のマイス君が自分の意思で行ったんじゃないかって……………そんなことまで思いだしちやうかもしれない……………でも、でもっ……………コロナちゃんだけは信じてあげなきゃ……………っ!! マイス君は……………マイス君はっ、気まぐれとか、妥協で、コロナちゃんと一緒にいることを選んだんじゃないんだって! 絶対、『アーランド』に……………コロナちゃんの所に帰ってきたって思ってるって!!」

「……………!!」

「私、私は二人とも大好きだから……………二人で一緒に、笑顔でいてよっ

……グスツ……スン………ロロナちゃんも、マイルス君も……二人がいる『アーランド』じゃなきや、ダメ、なんだもん……！」

……そう言ったりおちゃんは、沢山の涙を流してた。それは、りおちゃんが拭つても拭つても、ドンドンあふれてきて……

「……りおちゃん。ありがとう」

「ん、ぐしゅ………」

「わたし、恋人失格なんだろうなあ」

「そんなこと、ないよう……ロロナちゃんは、勝手な私より全然優しくって……きつと、マイルス君だってそんなロロナちゃんに救われてるって思う……」

「そうかな……でも、きつとそんなすごくないと思うから。でも、恋人をやめちゃう気は……ない、かな。たくさん怒って、たくさん謝って、たくさんお話して……それで、やっぱり最後はマイルス君のそばに居たい」

そこまで言って、わたしはもう一回りおちゃんに「ありがとう」って言いたくなつた……だから、言った。

そして……

「わたし、やらなきや！」

「スン……うんっ！ 頑張つてロロナちゃん！ こっちで何かわかったら、すぐに伝えに行くよ。それに、何か私に出来ることがあったら何でも言つて！」

「うんー」

りおちゃんの言葉にそう答えて、わたしは街へ、アトリエへと向かって走り出す。

アトリエを飛び出してきちゃったから『トラベルゲート』が手元に

無くって、もどかしいけど……でも、だからこそ、わたしは一生懸命走る。

真つ赤な夕日が目に染みるけど、それでもわたしは前を見る。きつと待たせちやう。待たせちやつてる。けど……

「待ってて、絶対に助けに行くから！」

もう、迷わないから。

走って行つたロロナを、玄関前で見送るリオネラ。

「リオネラ、よかつたの？」

「うん。……わかつてる、よね？ あれも全部、本当にわたしの気持ちだから……」

「けどなあ……だからつて「だもん」ねえだろ。いい歳どころか、もう三十路目前なんだからよ」

「ちよつ、ホロホロ!? そういうことは言わないでっ!!」

どこかスツキリしながらもしんみりしてしまっていたリオネラに、ホロホロの言葉がグサツとどころかグリユンとリオネラの心を抉つた。

「ふむ。しかしだな、そういう「ふとした瞬間に顔を出す幼げな感じがグツとくる」などという感性を持った輩もいるのだ。お前のそういう所はそれはそれでいいと思うが……」

「ふえ？」

声のしたほうを——斜め後ろを——振り返つたりオネラの目に飛び込んできたのは……玄関横の窓を開けて、ティーカップ片手にその窓枠の縁に肩ひじつけながらお茶を飲んでいるアストリツドの姿だった。

「ええええ、ええっ!?! い、いいつ……いつから……!?!」

「言わんでもわかるだろう?」

やけに偉そうに、優雅にお茶を飲みながらそう答えるアストリッド。その口をティーカップから離し……「ふう」と息をひとつついてから、再び口を開いた。

「安心しろ、と言つていいかは……いや、さっきの様子からすれば、お前には「安心しろ」でいいんだろうな」

「オイオイ、何の話だ?」

「まあ、大体予想はつくけど?」

「ロロナはそれはそれはもうアホの子で、どうしようもない抜けっぶりのあるドジっ子ではあるが、絶対に成し遂げるさ」

「ぜ絶対、ですか……?」

リオネラの問いかけに、アストリッドは静かに……しかし、確かに頷いた。

「お前も間近で見てきたと思うが、ロロナは私の予想を優に超える『錬金術士』となったんだ。いまさら、あんな調合でつまずきはせんよ」
「……はいっ」

ロロナのアトリエ

……ん? あれ? ……ここは………ソファア?

そうだ、ホムちゃんに手伝ってもらいながら色々調合していつて……それで、一段落したところには日が暮れ経つて。けど、ロロナ先生は飛び出して行ったまま帰ってきてなくて……。

探そうかとも思ったけど、とりあえずアトリエのお留守番をしとかなきやーつてことで先生の帰りを待つことにして……。

でも、ずーつと調合してたからか、ソファアに座ってたらウトウト

しちやつて……そこからは憶えてない、かな？

「とういか、もう朝……？ 先生は……」

まだ重いまぶたを擦りながら辺りを見渡してみると……まず目に入ったのが、私の隣で私と一緒の毛布に包まって寝てるホムちゃん。私に毛布を掛けてそのまま寝ちゃったのかな？

「……あつ」

錬金釜のそばの床に、釜をかき混ぜる杖を両腕で抱きしめるようにして寝転がってる先生の姿が。

そして、よくよく見るとその右手には……これまでに見たことも無いアイテムが握られてた。

「出来たんですね、先生……！」

「いぶしゅっ！」

「先生……風邪、ひいてないといいなあ……」

TARGET

コロナのアトリエ

「ココはこうで、コッチは……このくらいでいいのかな？」

「うんっ、いい感じな気がするよ！ あとはソレをこのくらいギューって締めて……」

慎重に、実に慎重な手つきで二つのアイテムの細部を調整していく二人の錬金術士、コロナとトトリ。

「で、できたー!!」

アトリエ内に響き渡ったその声に、肯定の意を示しながら口を開いたのは、二人のサポートを続けていたホムンクルスの少女・ホムちゃんだった。

「はい。どうやらそのようです。実際に使用してみなければわからない部分もありますが、ここまでの手順、出来た物の外観や情報量……ホムの知っている物とは相違点はあれど「どちらがいい」とは言いきれない誤差で済まされる範疇化と。なので、現時点で判明している範囲では問題は見当たりません」

「はあーよ、よかったー」

「つてことは、これで完成つてことだね！」

安堵した様子で喜ぶ二人に、ホムちゃんは「そうとは言い切れません」と言いながら、首を横に振る。

「グラントマスターは、この直前の段階で面倒……もとい、別件で立て込んだためこの研究は頓挫してしまいました。つまり、この先はホムにも、もつと言えれば誰にとつても未知の領域となります」

途中、ホムちゃんは言葉を濁したが、二人はすでにそのことを察してはいるのであまり意味は無い。が、ホムちゃんにしてみれば建前のようなものが一応は必要だったのかもしれない。

それはともかく、「大変なのはまだまだこれから道のりは長い」と

いうことを再認識せざるを得なかったためか、トトリが少しげっそりとした様子で肩を落とす。

しかし、それも仕方のないことではある。今の今までやってきたことでさえ初めてのことが沢山あり神経をすり減らしながら休まず頑張ってきたのだ。普通、少しくらい弱音も吐きたくなってくる頃だろう。

「そ、そんなあ。ううつ、なんだか緊張してきちゃった……」

「大丈夫だよ！　ここまでちゃんと出来たわけだし。それに、試してみてもダメだったら何回も挑戦するんだから！」

「先生……そうですよね！　マイスさんのためにも、私、最後まであきらめないで一生懸命やります！」

師匠であるロロナのひたむきなまでに前向きな姿勢に引つ張られ、トトリは弱りかけていた心の中の炎を燃え^{情熱}上がらせた。

「よーし！　そうと決まれば、本当に上手く発生するのとか、細かい調整なんかもかねて実際に二つを一緒に合わせて使ってみよー！」

「はいっ！」

二人一緒に、握りこぶしを天井へと突き上げ「おー！」と気合十分に声を出し、さあ早速とりかかろうと準備を始めた……が、

「待ってください」

それを止めたのはホムちゃん。

いつものジト目で……ではなく、どことなく残念なものを見るような目をして、ゆっくり淡々とその一言を紡ぎ出した。

「アトリエで……街中で『ゲート』や、それに準ずるものを発生させるのは危険です」

「あっ」

ホムちゃんの言葉に、ロロナとトトリが揃って間の抜けた声を漏らした。

……まあ、確かに、実験が上手く進めば問題無いだろうが——万が一を考えれば一転、大惨事になりかねないことは想像するにたやすいことだろう。

「実験はせめて街から出て、ある程度開けた土地^{場所}でやるべきかと」

「そ、そうだよね。うっかりしちやつてた」

「うっかりじゃあ済まされなさそうな気が……って、私もか」

トトリの言う通り、「うっかり」どころじゃない。というより、普通に考えればわかることである。

「近場のほうが良いに決まってるし、マイルス君を助けに行く時の事を考えたら……やっぱり、マイルス君が光の中に消えた場所の近くがいいのかな？」

「でも、『青の農村』の中でやるって言うのも、街と同じで危ないですよね？　だとすると、街と『青の農村』を繋ぐ街道からちよつとわき道にそれた辺りとか……？」

じゃあ、どこで試してみるか？

その相談は案外にも早々に考えがまとめられた。……落ち着いてさえいれば『アトリエ^{その場}』でなんて考えは浮かばず、浮かんでもすぐに消えるものなのだ。

「それじゃあ、改めて——やってみよう！」

改めて気合十分な掛け声を上げたロロナ。ソレに続いてトトリも外出と実験の準備を始めた。

マイルスを連れ戻すための計画は、一步一步着実に進んでいた……。

ネーベル湖畔

『アーランドの街』から東へ行つた先にある、遺跡の沈んだ湖『ネーベル湖』。

その湖のそばの陸地で、辺りを見渡しながらステルクは口を開いた。

「情報通りならば、このあたりで例の『新種のモンスター』の目撃情報があったそうだが……しかし……」

言葉を止め、こめかみをピクつかせながら大きく息を吐き……そののちにステルクは目の前の人物を睨みつけた。

「何故、彼方がここにいる!!」

その怒りが露わとなつている視線と言葉が向けられた相手——元国王、現首長であるジオが、肩をすくめながらステルクと対面している。が、当のジオはどこ吹く風だ。

「何故とは、言うまでも無いだろう？ 今回の一件はアーランドという国にとって十分に一大事と言える事態だからな。私が尽力しない理由などありはしない。それにだ、^彼マイスのためにも、そして彼のために頑張っている者たちのためにも、個人的に私も手を貸したいと思っただけのことだ」

「んんっ、それはわかりますが、しかし……。はあ……。その熱意を普段の業務にも向けて貰えるのであれば、どれほど良いことか……」

普段の苦労や、個人的な恨みつらみもあるのだろう。ステルクは途中からぼやくように不満を漏らす。

それに釣られるように、ジオのほうもため息混じりに愚痴を漏らし始める。

「私としても、この状況には不満があるのだがな。よりにもよって、合流するのがこのメンツだとは……。クーデリア嬢^女の采配なのだから、無意味なことではなく、何かしらの意図はあるのだろう……。いささか落ち着かんな」

「きつと、被害報告が多いとかそういう理由だと思えますよ。最近まで街を離れてましたから、ここ最近の情報までは流石に耳に入ってますので、私は詳しくは知りませんが……にしたって、過剰戦力な気がするんですけどねえ?」

ジオの言葉にそう言い補足しながらも結局は愚痴っぽくなってしまっているのは、立場上なにかとジオと関わりがある元受付嬢・エスティ。彼女も、このミス救出の計画に協力をしているらしい。

こうして、『王国時代』から何かと縁が深い三人がこの『ネーベル湖畔』で合流したのだが……問題はここからどうするか。

そんな中、真っ先に意見を述べはじめたのはステルクだった。

「まず『新種のモンスター』が今でもここにいるかは確証はありません。とにかく、まずは当初の目的である『属性結晶』を得るために『ゲート』を探すべきでしょう。そうすれば、いるのであれば『新種のモンスター』にも必然的に行くわすはず」

「あいわかった。採取地も決して狭いわけじゃない、ここは手分けをして探した方がいいだろう。二人はそれぞれアチラとアチラへ、私はあっちへと——」

「逃げる気じゃないでしょうね……?」

ジオが喋っている最中に、ステルクはその鋭い目つきをさらに鋭くして割り込んだ。

そんなステルクの言動に少なからず「ムッ」とするところがあつたのだろう。眉をひそめながら、改めて話始めた。

「……ステルク。いくらなんでも邪険にし過ぎじゃあないかね? 流石の私とて、このような状況下で場をかき乱すような行為はしないぞ」

「流星の私とて」などと……! つまりは、普段はかき乱していることを自覚なされているんですね!」

「ええいっ! 何故いちいちそんなところに噛みついてくるんだ!

そもそもキミはだな——!」

「いいや! こちらも言わせてもらうが、彼方という人は——!」

ついに始まってしまった元国王と元騎士による口喧嘩。

その様子を見て頭を抱えるのは、当然、残された元受付嬢である。「戦力の偏りの前に、この二人を一緒にしちゃダメでしょ。……せめて、その間に私を放り込まないで欲しいわ……」

「剣抜かなきやいいけど……」と口喧嘩だけでなく、本当の意味で喧嘩を شدすことを懸念しだすエステイ。

だが――

「――跳べ!!」

「ッ!？」

――不意のジオの指示に、ジオ自身だけでなくステルクと……ついでに、二人から少し離れていたエステイもその場から跳び退いた。

ほんの一瞬の後。

三人のいた場所を一直線に巻き込むようにして、赤みがかったピンク色の何かが伸びた。

木の幹ほどの太さは優に超えていそうなソレは、誰もいなくなった空間を通り過ぎてから一瞬で伸びてきた方向へと引っ込んでいく。ジオとステルクがその方向へと目を向けた時には、そこには何もなく、自分たちが歩いてきた道とその脇で静かにきらめく穏やかな湖面がみえるだけ。

「何、今の……おつきなトカゲ? いや、でも何かが……」

唯一、立ち位置の違いから一番相手を目視出来ていたエステイがそう呟く。

しかし、その正体を目にしても確信も持ち切れていないようで、ついには小さくだが首をかしげる。

「だが、いったい何処へ……? まさか姿を消すモンスターなのか?」「いや。姿が見えないだけでなく、気配もココに在るようで無い。なるほど、これは一癖も二癖もありそうな――ぬっ!」

ジオが再びその場から跳び退くと、先程までいた場所に空気を引き

さく「バチバチ」という音を立てる何かがちょうど炸裂した瞬間だった。

ことごとく攻撃を避けたジオたちに、ついにその『新種のモンスター』が姿を現した。

「ほう。これはこれは、随分と面白い見た目をしているな」

ジオがそう漏らすのも仕方がないだろう。目の前に現れたのは、先程エステイが言っていた「トカゲ」という表現が当たらずも遠からずと言える四足で地面を這うようなフォルムであった。

ただし、その大きさが家ほどもありそんなことや、四肢の指の間に水かきらしきものがあること、長い尾先まで続いている背びれ、そして嫌というほど目に付くそのモンスターの首周りから伸びる節とそこから生える肉色無数のエラ……それらが、『トカゲ』とは大きく異なる点だろう。

その外見を見て、顔をわずかにだが確かにしかめたのはエステイだった。文字で表すなら「うげえ」といった様子だ。

「面白いっていうより、むしろ鳥肌が立つちやいそうなくらい気持ち悪いんですけど」

彼女の言葉にも頷ける点はある。

ギョロリと見開かれたまん丸い目、パツクリと裂けるように頭の端から端まで開いている大人も簡単に丸呑みしてしまいそうな口、そこから覗く血管が薄っすら見えるピンク色の生々しい舌……爬虫類好きならむしろ好ましい特徴もあるかもしれないが、エステイのように少なからず嫌悪感を抱いても仕方のないだろう。

「こんな時に無駄話を……来るぞー」

ステルクが呆れ気味に呟いている最中に目の前の『新種のモンスター』が動きを見せ、三人は戦闘態勢に入る。

『新種のモンスター』の、獣とも違う独特な泣き声を合図に、湖畔での戦いの火蓋は切って落とされた……

シユタイン丘陵
きゅうりょう

『アーランドの街』から南にある『アランヤ村』。その『アランヤ村』から西へ西へと向かった先に在る、遺跡が残された丘陵地帯『シユタイン丘陵』。

そこでは男女三人が並んで道を歩いて……いたりはず、主に男二人がアツチコツチへウロチヨロしていて、その進行ペースはお世辞にも早いとは言えなかった。

トトリやその周りとも……ついでに、仲は良好とは言えないが行方不明になったマイルスとも何かと縁のある自称『天災科学者』マーク・マクブライン。通称トトリ目マークさん。

そんな彼は、辺りに点在する石造りの遺跡を見てまわり、そのモジャモジャの髪をかき上げながら一人呟いていた

「このあたりの遺跡は随分と風化が……機械関係というより生活や宗教に関わりがありそうな遺跡だし、仕方ないか。それに、ソツチ方面は僕としてはそこまで重要視はしてないんだけどもね……そもそもわかんないし」

「はいはい。わかったから、あちこち見てまわらないでちゃんとついてきなさいよー」

トトリの先輩冒険者である『アランヤ村』出身のメルヴィアが、ため息混じりにウロウロするマークにそう言いながら道を進んで行く。

そんなメルヴィアに、今度はトトリの幼馴染で共に冒険者となったジーノがアツチコツチへ行つて辺りを見渡しながら、声をかけた。

「なーなー、本当にこのあたりなのか？」

「らしいわよ。別々の冒険者から複数回の報告があったらしいし、被害者もいるっていうんだから間違い無いでしょ」

「んー、けどなあ〜？」

メルヴィアの返答を聞いても納得しきれなかったのだろうジーノは、ムスツツと口をとがらせてしまう。

「そんな眉間にシワ寄せて、何か気になることでもあるのかい?」

「どーかしたつつかさあ……なんかしっくりこなくなってきた。「これまでなかった遺跡がいきなりあらわれた」とか「朝霧の中、聞いたことも無い唸り声と巨大な砦の影が……」とかいう報告だったんだろ?」

本場に『新種のモンスター』だったのかよ?」

「建物に襲われた」なんて話もあるそうだ。まあ、確かに酔っ払いの妄言か何かだったほうが納得できるね」

「なんだかなー」と呟くジーンに、マークを頷く。

……まあ確かに、『冒険者ギルド』から伝書鳩で届いた指令書に書かれていた『新種のモンスター』を探すための情報」は場所だけでなく、特定するために使えるだろう被害報告の内容もあつたのだが……彼らが言うように、とてもじゃないが信用しがたいものではある。

しかし――

「――けど、それっぽいのは見えてきたわよ」

そう言ったのは、他の二人のようにあちこちに行ったりせずに、ずっと一定のペースで道を歩いてきたメルヴィア。いつの間にか、彼女だけちょうど丘を一つ越えるくらいには先行する形になっていたのだ。――そして、その丘の先に何かが見えたんだろう。

「ほんとうか!？」

「ほう……ん?」

追いかけるようにして駆け出したジーンとマークが目にしたのは、周囲の遺跡とは一つ一つの石の色や大きさ、そして一つの塊として見た時の大きさも大きく異なつた建造物。

まず、ゴツイ石造りの壁があり、その中央に天へと伸びる円柱状の塔らしきものが一つ……その上部は物見櫓のような人が立てるスペースがありそうな構想をしている。その左右にそれぞれ中央の塔より一段低く、少しばかり細い塔らしきものが。

つまりは一枚の厚い壁の両端と中央に塔らしきものがキレイに並んで居るのだ。

「砦……塔? 壁? ていうか、微妙に両端の柱は浮いてね?」

「ホント、見たことのない造りをしてるわね……それに、金属部品で強化されてるっぽいにしても、このあたりの遺跡にしてはなんだか欠けたり削れたりしてなさ過ぎな気も——」

この『シユタイン丘陵』では……もつと言えば、『アーランド』では見かけない造りの建造物を前にして驚きを隠せない様子だ。

だが、手を伸ばせば届くくらいの距離までメルヴィアが建造物に近づいたその時……何かが擦れるような重い音と共に、大地が、そして建造物が揺れ始めた——

——いや、違う。

建造物が動きはじめ、大地が揺れたのだ。

「なにこれ、動いて……!!」

「なんだなんだー!?!」

目を見開いて驚愕するメルヴィアと、いきなりの事に状況が上手く掴めないまま目を白黒させるジーノ。

そしてマークは……

「す、すっ……すばらしいーっ!!」

何故か、感激していた。

「ちよっ、いきなりどうしたのよ!?!」

「どうしたもこうしたも、わからないかい!?! 『ゴーレム』だよ『ゴーレム』!」

そう言われて、反射的に建造物のほうに目を向けるメルヴィア。すると、偶然か何か、中央の塔の上部だと思っていた部分が轟音を響かせながらグリンツと回転、そうして見えた、これまで見えていなかった部分には、ボワアと淡く発光する『ゴーレム』の目らしきモノが見えた。

確かに、マークの言ったように目の前の建造物……もとい、建造物

らしきものは『ゴーレム』のようだ。

だが、しかし……

「ゴーレムって、あの!? デカすぎじゃない!」

「確かに大きい。本当に建造物と見紛うほどだよ。これまでに見たことのある『ゴーレム』の中でも一位二位を争うくらいかもしれないねえ……! なによりっ!! そのシルエット、デザインだ! アーランドで見かけるのは大きく異なっていて、無骨ながらもシンプルなデザイン、左右対称的で整った——」

「長いわよ!」

ツツコミを入れつつ、武器である斧を構えるメルヴィア。ジーノはそれより一足先に剣を抜いていた。

「これは想定外だけど嬉しい利益だ! 是非とも鹵獲して持ち帰ろう

じゃないか!!」

「んなことできないわよ!」

「ぶっ倒すから無理!!」

マークの無茶な要請に、それぞれ別の返答を返して……その巨大な『ゴーレム』との戦闘は始まるのだった……。

街道のはずれ

「先生……」

数十秒前、不思議な光と奇妙な音が発せられた『青の農村』からほど近い平原。

そこには『ゲート』とそれを反転させる道具の実験を行う為にトトリたちが来ていたのだが……

「なんですか……アレ……!!?」
そう言うトトリの視線の先にいるのは——黒い霧がかか
ったナニカ。

蠢く霧から見え隠れするのは髪と髭を長々と伸ばし、所々に装飾が
施された服と、それに似たようなデザインの外装を纏ったナニカ。

『e………i………a』

ヒトに似た黒き存在。

そうとだけ言えば『塔の悪魔』に似ている——が、違う。何
かが違う。それをトトリは肌で感じていた。

『塔の悪魔』のような掴み所の無いが確かに突き刺さってくる殺意
——ではない。まるで、どこまでも纏わりついて来そうなほどネット
リとした視線と悪意。

『G………Giiiiiii!!』

その悪意が、トトリたちに襲いかかってきた——

『終わりのもの』①

街道のはずれ

「なんですか……アレ……?!？」

私の視線の先にいるのは——黒い霧がかかったナニカ。
霧の奥に見え隠れするのは、人に見えなくはないけど……でも、どこか違う存在。そのナニカは——

『e………l………a』

何か言ってるような気がするけど、ギリギリ聞こえない程度の声の大きさに呟いてて、一生懸命耳を澄ませて聞こうとしても聞き取れない。

モヤモヤの切れ間から見え隠れするその眼は、私たちを睨みつけている気もするけど、焦点の定まっなくて深く沈んだ闇の穴のようでもあった。

……そもそも、なんで私たちとナニカが街と村の間の街道脇にいるのか。それには理由があつて……。

『『ゲート』を発生させるアイテム』と『反転させるアイテム』。両方を調合し終えた私たちは、その二つのアイテムを今手元にある

『属性結晶^ル』を元にして実際に使ってみる実験をすることにした。

それは、先生とホムちゃんと一緒に考えた理論を、「可能だ」と太鼓判を押した先生のそのまた先生であるアストリッドさんでさえもたどり着けなかった——と言うよりは、飽きて途中で投げ出してしまっていたらしい——その先の話。元々、偶然が絡むほど調整が難しいとされる『ゲート』を発生させるアイテムにもう一つ付け加えるんだから、より一層、慎重で繊細な調整が求められてるってことは私にもすぐにわかった。

そして、仮にも「モンスターを発生させるモノ」として認識されている『ゲート』。そんなものをアトリエで……街の中で発生させる実験をするのは危険であるというホムちゃんからの至極真つ当な指摘で、私たちは実験を街の外で行うことにした。

というわけで、手ごろな場所に移動した私たちは手分けをして準備を始めてた……。

「「ちつむ、ちつむ」」

人手が多いことに越したことは無い。なので、せっかくだからと『ロロナのアトリエ』にいたちむちゃんたちにも手伝ってもらうことに。

ちむちゃんたちには、私が調査した「『ゲート』を発生させる装置^{アイテム}」——直径約30cmほどの円形の台座のようなもの——の、脇に取り付けられている投入口にゲート発生の動力となる『ルーン』が結晶化した『属性結晶』を次々と投入してもらってる。『マイスの家』とそのそばにある『倉庫』の中からかき集められ、大袋に一纏めにされた『属性結晶』をちむちゃんたちはバケツリレーの要領で掛け声でタイミングを合わせながらスムーズに、そして着実に装置の中に入れていっている。

……私とかがドバーツと流し込むように入ればいいような気もしなくはないけど、投入口が『属性結晶』より少し大きいくらいで、結果、効率はさほど変わらないので、私が他の事をして置かなきゃいけないから、このままやってもらっていたほうがいいんだと思う。

「ここがこうだから、こつちは……こう。あとは……実際に使ってみないとわかんないかな?」

そんな私と言えば、ちむちゃんたちのほど近くで、装置の調整と最終確認（おまじな）を行っている。

理論上は何とかなりそうではあるけれど、やはり初めての試みというところもあって手探りな部分も多い。だから最善を尽くしたつもりでも、わからないことなんて山ほどある。そこから感じてしまう不安を少しでも拭う為に、最後の最後まで確認を怠らずにやってたい。……うーん。でも、ココは本当にこんな感じでもいいのかなあ?

「トトリ（彼女）が『ゲート』を発生させたら」

「すぐに「反転」! でも、人を巻き込んだりしないように注意!」

「反転」する時、してる時は」

「むやみに近づかない! 吸い込まれそうになったら、『トラベルゲート』とかで即座に退却!」

「上手く反転できたら」

「モンスター以外がちゃんと通れるか、まずは物を入れてみる! 人は危ないかもだから入らない!」

「モンスターの出現など、不測の事態・失敗に直面した場合は」

「安全第一! 一旦距離を取って冷静に対処。最悪の場合は装置ごと爆破! 万事解決!」

少し離れた所から聞こえてくる淡々とした声と、勢い良くハキハキした声とが、一つ一つ今後のこと（実験）について確認を取っている。それはもちろん、ホムちゃんと先生だ。

「マスター……本当に、こんな調子（リ）で大丈夫ですか?」

「こんな!? そんなことないよ、大丈夫だよ………たぶん」

「忘れてはいないと思いますが、今回の実験にはおにいちゃんを助けられるかどうかかかっています。真面目にやってください」

「ご、ごめんなさい……緊張し過ぎて肩に力が入っちゃってる気がしたから、ちよつと気を抜かそうとただけなんです……」

……ちよつと、状況はよくわからないけど、先生がホムちゃんに叱られてるっぽい。

緊張で張りつめた中、難しい調合を続け、ようやくアイテムが完成して……それで先生、変に気が抜けちゃってたり？

本番はまだまだこれからなんだから、先生にはしつかりしてほしいんだけどなあ……？

「ちーむー？」

「ちちむ」

「？ どうかしたの？」

最終調整をしている最中に、呼び声（？）と共にチヨンチヨンと裾をひっぱられた。促されるままソツチに目を向けてみたら、空っぽになった大袋をかかげるちむちゃんたちが。つまりは用意していた『属性結晶』を全部入れきつたらしい。

私は、ちむちゃんたちに微笑みながら小さく頷く。

「終わったんだね、ありがと。私の方ももう少しで出来そうだから、先生たちを呼んできてくれる？」

「ちむむ！」

「ちむつ！」

「了解！」とでもいった様子で元気の良い返事をした後、揃そろって少し離れた所にいるロロナとホムちゃんのもとへと駆け出して行ったちむちゃんたち。

そんなちむちゃんたちの姿を少しだけ目で追ってから、私は再び最終調整とその確認の作業の続きをする。

あともうちよつと。実験をする前ギリギリまで私に出来ることしつかりやらないと……！

ほどなくして、先生とホムちゃんを連れてちむちゃんたちが戻ってきた。

「あつ先生、準備できまし……た……よ？」

「ごめんねー、そつちのこと全部任せちゃって。それで……どう？
ちゃんと動きそう？」

「……え、は、はい。初めてだから何とも言えない所もありますけど、
たぶん大丈夫かと……。それでーそのー……？」

先生の言葉にしどろもどろしそうになりながらもなんとか答えた
んだけど、私がついつい目をやってしまったのは先生——正確には
先生の顔……もっと言うならその両頬——だった。なんでかしらな
いけど赤くなっている。

その視線に気づいた……とはいっても、何故見られているのかまで
は察わかせてない先生が「はて？」と首をかしげながら私にに問いかけて
きた。

「あれ？ どーかした？」

「えっと、どうかしたっていうか……こつちがどうしたんですかって
いうか……？」

「気にしないでください。気合を入れなおすために自分で叩いて、そ
の際に力加減を誤っただけですから」

先生に真っ赤になってる頬ほっぺのことをどう聞けばいいのか困ってた
私に助け舟を出したのはホムちゃん。そのホムちゃんから経緯を聞
いた私は「ええっ」と少し呆れちゃったけど「まあ、先生だし……」と
どこか納得もしちゃってた。

「えーっと、先生の方も準備は出来てるんですよね？」

「うん、出来てるよ！ 爆弾と回復アイテムもバツチリ！」

「ほら！」と、手元のカゴの口を開けて中を見せてくる先生。その中
身はゴチャゴチャしてて……というか、いくらなんでも多過ぎな気が
……今回のことのために一体、冒険何日分の用意をしてきてるんだろ
う？

「それって……街の外に出たのは「もしもの時」のためですけど、いく
らなんでも嚴重過ぎじゃあ……」

「マスター。いざという時のための備えというのは大切ですが、失敗
を前提に行動するというのも考えものかと」

「わ、わかってるよ!? 『ゲート』を発生させられたらすぐに「反転」させちゃえば、モンスターは出てこない! だから、そこをしつかりしさえすれば大丈夫……うん、できる!」

そう言っでギユッと握りこぶしを作るロロナ先生。

……なんだろう。余計に不安になった気がする……。

「とっ、とにかく! 準備もできたんだし、さっそく実験を始めちゃおう!」

「そうですね……ちよつと心配ですけど」

「気にしてはいけません。何か言っで凶星でも着いてしまっでは、マスターが拗ねてちまっで余計な手間がかかりますから」

言っでることはわかるし、納得もできちやうんだけど……でも、それはそれでどうなんだろう……?

というか、時々、ホムちゃんがロロナ先生のことをどう思っでるのかがわからなくなっちゃう。ロロナ先生はほむちゃんのことを「お手伝いしてくれる妹みたいな子!」っで言っでたけど……。

そんなちよつとした疑問を抱きっつも、でも結局は先生とホムちゃんの問題だということで一体意識の端っこへと追いやり、自分が今やるべきことへと集中する。

『『ゲート』を発生させるアイテム』へ向かっで向き直っでから、一旦大きく息を吸っで……吐いて。気持ちを落ち着かせたところで、先生たちに確認を取る。

「それじゃあ、『ゲート』を発生させますよ?」

振り返りっつ声をかけると、「反転させるアイテム」を手に持っでたロロナ先生が――

先生の隣に佇むホムちゃんと足元で整列しているちむちちゃんたちが頷いた。

「うん!」

「いつでもどござい」

「「ちむっ！」」

……やれることは全部やったはず。あとは落ち着いて、実際に使用^{やっ}してみるだけ……！

「いきます！ ……開け、『ゲート』！」

シユゴゴーン！

凄^ひい音を立てて台座の上で発生した渦巻く光……『ゲート』。

うん、見た感じ問題は無さそう……かな？

でも、なんだか「シユオンシユオン」って音が『ゲート』から聞こえ続けているのが気になるけど……採取地とかで見かけるヤツではそんなに落して無かったと思うんだけどなあ……

ちよつとひつかかるけど、先生の方は見た感じいつも通りで首をかじげたりはしてないし……私が気にし過ぎてるのかな。

「すかさず「反転」！ ええーいつ！ ひつくりかえれー!!」

そんな掛け声と共に口ロナ先生が持つ道具^{アイテム}から一筋の光が発射された。その光は一直線に『ゲート』へと向かつていって——ぶつかる。

すると、『ゲート』は何度か色を変えながら瞬^{またた}き、その後に発生した時と似たような音を再び立て、先程までとは逆回転に渦巻きだした。

……こころなしか周りの空気が『ゲート』へと向かっているような気もするから、きつと『ゲート』の「反転」に成功した……んじやないかな？

「どうなんだろう？」ってちよつと思いなながらも、確認するために隣に立ってる先生の方を見てみた。そしたら、コツチに顔を向けた先生と目があつた。……どうやら、先生もちよつとコツチを見てきたみたい。

その先生はといえば、私が何か言うよりも早くニツコリと笑いながら頷いてきた。ということは、きつと先生からしてみても上手く「反転」できたように感じたんだろう。

「やったね、トトリちゃん！」

「はいっ、先生！」

「達成感に浸るのは結構ですが、まだ実験の最中です。早く次の工程に移ってください」

「「ちむく」」

不意に向けられた声に、私と先生は「あっ」って揃って声を漏らしてしまう。

声のした方を見てみれば、ジツトリとした目を向けてくるホムちゃんとかちむちゃんたちが……！

「ご、ごめんなさい」

揃って謝る先生と私。

私たちに、ホムちゃんはゆっくりと首を振って「いいんです」って言うって――

「今回は「成功した」とは言い難いようですから、つい先程の数秒の浪費ロスもあまり意味は無いでしょうし」

そんな事を言うホムちゃんに私と先生は「どういうことだろう？」って顔を見合わせる。『ゲート』は発生させられたし、「反転」もうまくいったし……？

と、コツチから何か言うよりも先に、ホムちゃんは私たちじやなくって『ゲート』のほうを向いて……釣られるように私たちもソツチを――って、あれ？

「あれっ?!? ち、小さくなってってる!?!」

そう、先生が言ったように、反転した『ゲート』が徐々に……けど、確実に収縮ちいさくなくなってしていった！

どうして……!?! 確かに、上手くいったはずなのに！

……!?! ううん、緊急事態こういいう時こそ冷静にならないと……!?!

そもそも、今回はあくまで上手くいくかどうかの実験だったわけで、何か不具合や想定外の事態が起きたとしても、それらを記録しちやんと調べて原因追究をするべきなんだ。それが本番への布石になるんだから！

考えられるのは、実は「反転」が上手くいってなかったとか、『ゲート』を構成している『ルーン』の補充量が足りていなかったとか……なんにせよ、今の状態を調べるなり記録するなり、何かしらしていかないとい！

「先生っ！」

「うん！」

私の呼びかけに先生は間髪入れずに応え——その手をカゴへと突っ込んだ。

んん？

……これまでの経験から、この時点でなーんともなく嫌な予感があった。

ううん、カゴの中から何か調査や記録に使えそうな道具アイテムを出すのかもしれないし、ただ単純に紙とペンとかを出そうとしてるのかもしれないから、そんなにおかしいことじゃ……

——モンスターの出現など、不測の事態・失敗に直面した場合は

——安全第一！ 一旦距離を取って冷静に対処。最悪の場合は装置ごと爆破！ 万事解決！

ふと、実験開始前にホムちゃんと先生とがしていた会話を思い出した。

——最悪の場合は装置ごと爆破！

……あつ！

「せつ先生っ！　ちよ——」

「てりゃーっ!!」

失敗だったかもしれないし、不測の事態ではあっただろうけど！
最悪の事態っていほうどじゃ……！　　というか、もつとやれること
とかあると思うんですけどー!!??

そんな私の想いは虚しくも届かず、止めるよりも早く、先生はカゴ
から取り出したモノを反転した『ゲート』へ向かって投げつける……
!

ああっ……。これじゃあ、もしかすると『ゲート』発生装置」ごと
爆破されちゃって一から作り直し——

シュオーンシュオーンツ!

「えっ?」

聞こえてきたのは、爆発音じゃなくって変な音。

不思議に思っただけを見回してみるけど、変わった様子は何処にも
なくって……。あえて言うなら、反転した『ゲート』が相変わらず収縮
していつてることくらい。いつの間にか、人の頭ほどの大きさまで小
さくなってしまっていた。

というか、一体何がどうなって……?!

「おー……上手くいったねー」

ドンドン小さくなってついには拳大くらいにまでになってしまっ
ている『ゲート』を見ながら、隣にいるロロナ先生はそんなことを言っ
てる。

けど、なにがどう「上手くいった」んだろう?!

「むこうからこつちに来るのはモンスターだけらしいけど、モンス
ター以外も通れるみたい。　けどまあ、ミス君が通ったのもコレと
似たやつみたいだしきつと私たちでも大丈夫だよね?」

そこまで聞いて、私の頭の中に少し前に先生が言っただけが浮か

んできた……

——モンスター以外がちゃんと通れるか、まずは物を入れてみる！
人は危ないかもだから入らない！

私は「ああ、そっち」と納得して、自分のはやとちりを恥ずかしく思いつつ、『ゲート』の様子がおかしいとわかったとたん物を投げ入れた先生の良いのか悪いのか判断し辛い即決力に驚きつつ……「そういえば」とあることが気になってしまった。

「ああー、もう消えちゃいそう」って少し寂しそうに言いながら、豆粒ほどになった『ゲート』を見ている先生に、その疑問を投げかけてみることにした。

「あの、ロロナ先生」

「ん、なあに？」

「よく見えなかったんですけど……『ゲート』に何を投げ入れたんですか？」

そう。反転させた『ゲート』が収縮しているのがわかった時、先生はカゴから何かを取り出して投げつけた。

てつきり『ゲート』を破壊するために投げたんだと思ってた私は、爆弾系の何かを投げたものだとばかり思ってたちゃんと確認してなかったんだけど……結局は何を投げ入れたんだろう？

って、あれ？

どうしたんだろう？ 先生と目があわない……というか、先生の目が泳いでいるような……？

「わ……」

「わ？」

「……わかんない」

「えっ」

わかんない……ワカンナイ……。「わからない」？

「ええつとねっ！ 小つちやくなつてくの見てね、早く何か入れてみないとーって思つて急いでカゴから何か出そうとして……それでー……その」

「つまり、マスターはソレが何なのかを確認しないまま投げちやつたんですね」

私も大体察せたあたりで、ホムちゃんがズバツと言つた。

「うぐっ!？」と言葉を詰まらせる先生に、私は苦笑いを浮かべることしかできなかつた。……ま、まあ、先生らしいつて言えばらしくつて、なんだか変な安心感はあるんだけど。

「堅かつたような……柔らかかつたような……？ あとは、あとはつええつと……？」

「と、とりあえず、カゴの中身を確認して何が無くなつてるか調べてみましょう?」

「……うん」

先生は少し申し訳なさそうにしながらカゴのふたを開けて「ええつと……」と漏らしながら、その中をガサゴソと漁りだした。

その様子からして、とっさのこととはいえ何か確認もしないで投げ込んでしまったことに負い目を感じちやつてるのかな？ 私からしてみたら、物を投げた事に驚きはしたけど、駆け足ではあつても実験が出来たんだから結果オーライだと思ふんだけどなあ？

ピシツ ミシミシツ……

音が聞こえた。

「しようがないなあ」なんて思いながら、先生を見ていた私の耳に入つてきたのは、何かが軋みヒビが入るかのような音。

反射的に音のした方へ目を向けたんだけど……そこに見えたのは、反転した『ゲート』が完全に消えてしまった台座——その上に浮かぶヒビ割れ。

ううん、「浮かんでいる」というよりは、まるで空中の空間そのもの

に直接ヒビが入っているような非現実的な光景に見え……。

パキツ パリンツ！ カシヤンツ！！ ドヂューン！

ひび割れが音と共に弾け、それに伴って出来た『穴』から「黒い風」とでも言うべき何か吹き出してきた。そう、さっきまでの反転した『ゲート』とは逆の流れ……アツチからコツチへと何か流れ出してきたのだ。

「きゃっ!？」

「トトリちゃ……わわあっ!？」

「……………っ!!」

「「ちむろ!?!」」

私も、先生も、ホムちゃんも、ちむちゃんたちも、その吹き荒れる「黒い風」に飲み込まれて押されてしまい、必死に踏ん張ったり、尻餅をついちちゃったり……体の小さいちむちゃんたちは何処かへ飛ばされてしまったり。

一分にもならない、きつとほんの十数秒くらいだったと思う。

吹き荒れてた「黒い風」の勢いが徐々に弱まり……ひび割れのあつたほうへと集まっていく。

いや、違った。

勢いが弱まりだしたくらいで見えてきてたんだけど、『ゲート』発生装置の台座があつたあたり——「黒い風」のせいで台座は私たちからちよつと離れたところまで飛ばされちゃってるから、「あつた場所（過去形）」なんだけど——そこにナニカがいた。

『……………』

いつの間にかそこにいたナニカ。

状況からして、『ゲート』あつた場所に発生したヒビ割れ……そこから現れたんだと思うけど……………。

「黒い風」が吹き止んだ『街道のはずれ』。体勢を立て直した私たちの前に、そのナニカは立ちはだかった。

「先生……なんですか……アレ……!!?」

そして今。

私の視線の先にいるのは——黒い靄がかかったナニカ。

蠢く靄から見え隠れするのは髪と髭を長々と伸ばし、所々に装飾が施された服と、それに似たようなデザインの外装を纏ったナニカ。

『e………l………a』

ヒトに似た黒き存在。

そうとだけ言えば『塔の悪魔』に似ている気もするけど……違う。何かが違う。そんな気がしてた。

『塔の悪魔』のような掴み所の無いが確かに突き刺さってくる殺意——ではない。まるで、どこまでも纏わりついて来そうなほどネットリとした視線と悪意。

よくわからないけど、もの凄く怒ってる……のかな？

例えば、採取地で遭遇するモンスターの中には「ナワバリに侵入された!!」って感じに怒り心頭な様子のモンスターもいたりする。だから、「怒っているモンスター」ってだけなら、そんなに驚くことでも恐れることでもないんだけど……何かが根本的に違うような気がしてならない。

それに……

「気のせいじゃなかったら、私のこと凄く睨んできているような……」

隣にいる口ロナ先生でなく、そのまた隣あたりにいるホムちゃんでもなく、私のほうをジツと見てきている気がする。

というか、さつきから目があつて背中あたりを中心にゾクゾクとした悪寒を感じてる。

でも、なんで私？ 身に覚えなんてないよ……？

「ちむっ、ちーむー！」

「ひゃっ!? って、なんだちむまるだゆうくんかあ……驚かさないでよお」

さつきの「黒い風」で吹き飛ばされてしまつてたちむまるだゆうくんが、いつの間にか私の足元まで来てて、チョンチョンとつついてきた。周りを見てみると他のちむちゃんたちもトテトテと駆け足で戻つて来てるのがわかつた。

視線の先のナニカに気を取られちゃつてた私はちよつとびっくりしちやつただけけど……ん？ ちむまるだゆうくんが何かを腕ゆびさしてで示してる。指し示してる先には例の黒い靄につつまれたナニカ。知らないうちに現れたアレに驚いてるのかな？……けど、なんでちむまるだゆうくんの口からちよつびつとヨダレが漏れ出してるんだらう？

「ちむむっー！」

「ん？」

よく見てみたら、指し示してるのはナニカの上のほう……人で言うところの「頭部」のあたり……あれ？

顔っぽい所とか、長い髪の毛とか、髪の毛と一体化してるようにも見える立派なお髭ヒゲとかが黒い靄の間から見え隠れしてるんだけど……一部、あからさまに色が違うような？

なんて言うか、こう、服とか装飾でもない限り人なんかにはない艶やかな赤紫色。そんな色が頭部の三割くらいを占めてるように見える。いやまあ、『ゲート』の向こう側……『はじまりの森』から出てきたつてことで、あのナニカがモンスターだろうつて考えたら「そういうモンスターなんだろう」つて納得できはする。

でも、何か違う気がするんだよなあ？ なんていうか、鱗とか毛とといった体色あんないろの一部が赤紫色してるつていうよりも、右斜め上のほうか

ら絵の具がデロ〜って垂れてる感じで顔がを中心に染まってる感じ……。

そして、なんだかおいしそうなニオイ。ああ、だから、ちむまるだゆうくんがヨダレを……って、んん？

ナニカの、霧もやで見え隠れしてた本当に頭の真上近くあたりから「ボトンツ」といった感じに何かが落ちるのが見えた。

それは、まるでコンガリとキツネ色に焼けた生地のように——

「あっ」

その正体に気付いてついつい漏らしてしまってた声に、偶然にもロロナ先生の声も被る。……きつと、先生も気づいたんだろう。

頭からこぼれ落ちたそれ——ナニカの頭を赤紫色に染め上げた中身と、コンガリと焼けた生地と、おいしそうなニオイを併せ持つものは間違い無く『ベリーパイ』に違いない。

問題は、なんで『ベリーパイ』がナニカの頭からこぼれ落ちたのか……って、それは深く考えなくてもすぐに理解わかした。

ロロナ先生が、反転した『ゲート』に投げ込んだのが『ベリーパイ』で、それがあのナニカの頭にぶつかったんだろう。

「つまり、アレが怒ってるのってどう考えても先生のせいじゃないですか!! なのになんてかわからないけど私が睨にらまれちゃってるし……ってことは、私、とぼっちり!」

「ううっ、わたしにもそんなつもりは……って……いつそのこと投げ込んだのが爆弾で、倒してしまっただけがよかったかなあ?」

「投げ込まれたのがパイでも爆弾でも、叩たたきつけられたのが住す処かの床

でも頭でも、どつちにしても怒つちやうに決まってるじやないですか！
！　そもそも、なんでそんな発想になるんですか!?　先生は辻斬りな
らぬ辻爆弾魔つじばくだんまかなにかですか!」

「辻爆弾魔!」

「がーん!」ってショックを受けて涙目になってるけど、そんなことは
はどうでも……というより、少しくらい反省してくれたほうが良い気が
してる。

とは言っても、先生もわざとやったってわけじやないし、とつさの
行動が結果的にこんなことになってしまっただけで、そこまで強く
責めることはできないから……。でも、反転させた『ゲート』になに
も投げ込まなかったら、あのナニカがこつちに来ることもなかったん
じゃ、って思ってしまうのも仕方ないことだよな？

「マスター、トトリ、おぶぎげはそこまでしてくださいます………き
ます………!」

まだ短い付き合いしかない私でも「珍しい」と思ってしまうホム
ちゃんのころなしか強めの口調での注意喚起に、私と先生は揃って
身構える……まだ先生は涙目のままでけど。

見れば、ナニカの周りに漂っていただけの靄もやが、まるで炎か、小耳
にはさんだことのある鬨オーラ気のように、揺らめき昇っていく様にしてナ
ニカの身体の周りを流れていった。

その様子と肌で感じられる空気から、あのナニカがもの凄くやるき
なのが嫌なほどわかってしまう。

『G………Giiiiiiiiii!!』

「とにかく、このまま放つてはおけないし倒しちやおうつ!」

「は、はいー!」

取り出した杖をギュツと握りしめて、視線の先にいるナニカを見据
える。

あの暗く深い穴のような目で睨みつけられるのは怖いし、ゾクゾクと感じる悪寒は未だに身体を駆け巡っている。

結果的にはいえ、私たちがした実験で呼び寄せてしまったモンスターのだから、責任を持って倒さないといけない。そして……きつと『ゲート』の先で頑張っているだろうマイスさんのためにも、ここぞで引くわけにはいかないんだ……！

ナニカが纏まとっていた黒い霧が弾け、膨れ上がり、あたりを薄うすつすらと覆おほい……そのナニカが、雄叫びのような、悲鳴のような鳴こき声えをあげてわたしたちへと突進してくる。……それが戦闘開始の合図になった。

『Giiii—Zzzeee—Lllllaaaaa!!』
「……………んん？」

『終わりのもの』②

街道のはずれ

「……………んん？」

ミスさんを助け出すための、『ゲート』を発生させ「反転」する実験。その実験の失敗(?)のせいか、はたまたロロナ先生が『ゲート』に『ベリーパイ』を投げ込んだせいか、突如現れた黒い霧を纏った人ヒトに似た『終わりのもの』。
そのナニカとの戦いがついに始まろうとした……

……んだけど、私としては今、こっちにむかってきたナニカが上げた奇声叫びがなんだかひっかかった。

今、あの『終わりのもの』が何か言ってたような……？

『!!』

……うん、気のせいだよ。言葉にもなっていないような叫びをあげて、こっちに突進してきてるだけで……

私たちが来て来ているナニカは、文字通り飛んでくるかのように……じゃなくって、まるで地面のスレスレを滑るかのように移動してて――

——意外と速い!?

『――!』

「避けっ……いや、ガードッ……というか、コワイ!？」

もの凄い表情かおして睨んでくるのに、直立不動で滑ってる……!

しかも、地味に速い!

とつさに杖を前に突き出すように構えてガードの体勢をとるけど、こんな予想以上に速い勢いのまま攻撃されたら不味い……とまでは

いかなくても、けつこう痛そう……!!
そんな痛みを想像してしまつて、反射的にギョツと身体が強張つて
しまつた。

ナニカは勢い良く私の横をすり抜けて——つて、あれ？ なん
にもしてこな——

「っ！ トトリちゃん、あぶない!!」

「えっ、きやあつ?!」

通り過ぎた『終わりのもの』を目で追つていた私に横からドンツと
衝撃が……うん、そのままギョツと先生に抱きしめられて一緒に地
面に倒れ込んでしまう。

いきなりの事に、先生にどうかしたのか聞こうと——あと、文
句を一言二言言おうとして……見上げた私の目に写つたのは、音を立て
るほどの凄いスピードで一直線に飛んでいく数個の『闇の球』。

ソレラがまるでタイミングを、そして高さを微妙にずらして一点を
狙うように飛び交つて……あれ？ あのあたりつてさつきま
で私がいた……?

あのまま通り過ぎたナニカを呆然と見つめていたらと考えると、ゾ
ゾツと足先からずーっと背中を通して頭のとっぺんまで駆け上
がつてきた鳥肌。

「せ先生っ、ありがとうございます」

「あはは……ほぼ真正面からだったから見えなかったかもしれないけ
ど、アレの後ろのほうからボールみたいなのがピョンピョン出てきて
たのが気になって……。それで、なんか動いたって思った時とつさに
——ふえっ?」

なるほど……きつと、あのナニカが通り過ぎた後にあの黒い球たち
が飛んでくる時間差攻撃だったんだ。危ない所だった……。

で、先生が何か変だけど、いったいどうしたんだろ……ん？ なん
だかちよつと陰かげつてる?

あのナニカが突進してくる前に黒い靄もやが薄く広がったからそのせ

いで……？ でもそれならもつと前から陰つてることに気付いても……

そうしてた仕上がりながら辺りを確認しようとして——偶然か何なのか、私が最初に目をやったのはナニカがいる方で——そして見た。大きな影を私たちに落す存在を。

「ド……ドラゴン……!?」

体格はアールランドで見かける『ドラゴン系』とは異なり二足歩行で前足が翼と一体化したような見た目をしているけど、他人を丸のみに出来そうな大きな口、その口から覗く牙、頭から伸びる角、体を覆う鱗、大きな翼……それ等の特徴は間違い無くドラゴンだ。

長い首も気にはなるけど、それ以上に特徴的なのはその翼が骨格部分以外はまるで羽毛のようでおおかつ色鮮やかっぽいこと。ただし、その鮮やかな色もナニカと同じようにほとんどが黒い靄でおおわれていてしつかりと見ることが出来ない。

——まずい……!!

そう思った時にはもう遅かった。

雄たけびを上げるように首を、頭を、口を動かしたその竜が大きく羽ばたいたかと思えば、その竜の前に——つまりは竜と私たちとの間に——それこそ竜と大差のない大きさの『竜巻』が発生し、あろうことかこつちに向かつて来た！

その上、『竜巻』からは時折、マイスさんが使っていた風の魔法『ソニックウインド』みたいな風の刃かたまりがまるで『竜巻』の中で荒れ狂う風がはぐれて出てきたかのように飛び出してきている。

なにより、ただ単純に風の大きな流れであることも確かで……あの『終わりのもの』ナニカが現れた時に発生した「黒い風」よりもよっぽど強い風だから、なんとか踏ん張ろうとしても、身体が浮きあがりそうになつて……!!

「ちむく!?!」

「ちー!」

「……………」(気絶)

「ちつむ!・ちつむ!・ちつ……………ちむく」

「わー!?! またちむちゃんたちが、飛んでつてるー!?!」

必死に地面の草にしがみついている子もいたけど結局はみんな竜巻に飲み込まれて、さつきよりも高く遠くに飛ばされていつて……………あつ。

ふわりと浮かぶ人影。そのまま『竜巻』に吸い寄せられそうになつたのは、踏ん張っていた残りの三人のうち一番体格が小さいホムちゃん。

「あつ」

「あぶない!」

「ほむちゃん!」

私が何とか手を伸ばしホムちゃんの右手を捕まえたのとほぼ同時に、ロロナ先生も手を伸ばしてホムちゃんの反対ひだりの手を捕まえたのが見えた。

よく見てみると、ホムちゃんの手を捕まえたのとは反対の手で持つ杖を地面に突き刺して風に耐えているのがわかった。「なるほど!」って感心した私も先生に倣なまらって最小限の動きで持つてる杖を地面に突き刺してみると、先程までとは比べ物にならないほど楽になり耐えることが出来そうだった。

…………ただ、飛ばされそうになつてるホムちゃんを握つてる方の手は、やっぱりキツイ。でも何とか耐えて…………!

ガギンツ!

そんな音が聞こえて、反射的にソツチに目がいった。

見るとそこには…………「あつ」って顔をしてフワツと地面から浮いてるロロナ先生と、何故か末端のほう折れてしまつてる先生が持つ杖と、浮かんだ先生の下を通過する風の刃……………。

察わかつたした。風の刃が杖をポキンツと折ってしまったんだろう。察わかつたしてしまったからこそ言いたかった。「なんでそんなピンポイントに？」って。

そして、こっちはちゃんと声に出して言わないといけなかった。

「せんせー！ か、片手で二人は……色々無理ですー!!」

「だよー……でも、なるべくなら離さないでー!」

地面地上のほうから「私↓ホムちゃん↓先生」と連なって『竜巻』に巻き上げられそうになっている私たち。先生のお願いに「ごめんさー」と返すよりも先に、ホムちゃんの手を捕まえている私の手の限界……とほぼ同時に浅くしか刺せてなかった杖が地面の土を少し抉りながらズポツと抜けて、私の身体も……!

「あ……あれ?」

「あいたつ!」

「……………」

ついに私も浮いて『竜巻』にのみ込まれてしまうのかと思ったら、浮遊感そんなことはなかった。というか、『竜巻』も無くなっていた。

代わりに「どすんつ」と「すたつ」という着地音が聞こえ、先生が尻餅についてホムちゃんが足先からキレイに着地をした。どうやら、私だけじゃなくなってホムちゃんと先生の間でも手が離れてしまっていたみたいで、幸か不幸か先生の着地失敗の道連れにはならなかったみたい。

でも、どうしていきなり……?」

そう思っただけの竜のいた方を見ると、竜はどこにもいなくて『終わりのものあのカ』だけが見えた。……さっきまでどこにいったんだろう?

何はともあれ、あの竜が消えたからか、ただ単に『竜巻』が自然消滅したかであえず私たちは助かつ——

小さく、でも確かに、足元のから音がしたような気がし――

ズガガガガガッ!!

「きやつ!!」

「うわあっ!!?」

「……………!」

私たちの周りの地面から、人ほどの大きさがありそうな尖った岩の塊が生えるようにいくつも飛び出してきた。

運良く誰にも直撃はしなかったけど、腕や足に少なからずかすつてしまい傷を作ってしまう。かすただけでもわかるけど、かなりいたい。直撃したら空に打ち上げられる……だけで、すめばまだマシかもしれない。

そして、コレに私は覚えがあった。

「これって、ミスさんが『塔の悪魔』に使ってた『アーススパイク』……?」

「発生する数が大きく異なりますが、同種の『魔法』かと」

「そつ、それじゃあもしかして、ミス君の魔法と同じで他にも『火』とか『水』とか……まだまだいっぱいあるの!?!」

先生が口にした言葉に、私は頷くことも首を振ることもできない。だって、わたしも薄々そんな気がしていたから。

でも、ただでさえ押され気味というか押されてばかりなのに、コレがまだ序の口だなんてわかってしまったら……気が滅入るなんてものじゃない、けど、それだけ強く恐ろしい相手ならばなおさら逃げわけにもいかない。

それに、あの突然現れた竜ドラゴンのこともいまいちわからないし……不安要素ばかりだ。

そして……こうしている間にも『終わりのもの』は、高速で移動を続け……きつと間違え無く次の攻撃を撃とうとして来ているに違い

なく、私たちも反撃をしないとラチがあかないことは一目瞭然だった。

「先生。私がとりあえず『フラム』をばらまいて相手の動きを抑えてみますから、大きくて強いの一つお願いしますっ」

「うんっ、わかったよ！」

先生の返事を聞くと同時に、私は何個もの爆弾を取り出して、放り投げる——動作に入ったところで、『終わりのもの』が何度目かの急接近をしてきた！

ぶつかってくるような勢いで……でも、脇を通り過ぎるコースで私たちのそばを高速移動したナニカ。その通り過ぎた後には、ナニカからしみ出すように発生した十数個の「闇の球」。それがふわふわと浮かんでいった。

それを見た瞬間、『フラム』を投げるのを完全に止めて、数歩下がる。最初みたいに私を狙ってくるんだったらもつと動いた方がとは思う。でも、もしも私以外の先生やホムちゃん狙いだとしたら、下手に動いた方が危ないかもしれないから。

それを判断するためにも、飛んでくる「闇の球」の動きを初動をしっかりと見て素早く避けないと……！

——えっ？

「闇の球」は音を立てて高速で飛ぶ——ことなく、《静かにその場で消滅した》。

「これって、どういう……!?」

困惑する最中、顔が、陽の光とは別のなにかに照らされた気がした。

ハツとして目を向けた先には、私たちのそばを通り過ぎた『終わりのもの』がいつの間にか手を開いて突き出している姿が。

その手のひらの先には——私たちの方へと向かってくる

「光」^{ヒカリ}。連なる「光の球」とは大きく異なる……点滅しながら発光し、フワフワとゆっくりそよ風に乗っているような他より断然ゆっくりとした速度で進む人の頭に満たないほどの大きさの「光」。

気づいてからほんの2、3秒後。その「光」と私たちとの距離が5メートルになろうかというあたり。

点滅していた「光」が爆発した。

「人の頭ほど」の大きさが一気に「家一軒分」ほどに。

草を吹き飛ばしながら、土を抉りながら、空気を焼きながらまだまだ膨張を続け……あつという間も無く私たちの眼前に迫るまでの巨大な光球となって私たちを飲み込もうとし――

「……………あ」

私たちの前に、小さな影が舞い降りた。

『終わりのもの』③

冒険者ギルド

「変な音と破裂音？ それに黒い霧ですって？」

『冒険者ギルド』に駆け込んできた街の門番が報告してきた内容にクレーリアは眉をしかめた。報告をしてきた門番の慌てっぷりからして事実なのは事実なんでしょうけど、何がどうなたらそんな現象になってるのかしら？

なんでこんな時に限って……いや、もしかしたら何か関係が……？ 「ありえない」とは言い切れない。ミスがいなくなつた時に目撃されたらしい光についても「おそらくはゲートとは反対の性質のモノだろう」ってだけで正体はもちろん発生原因なんてもっと判明していないんだから、今現在確認されている異常現象も無関係とは言い切れないわよね。

ミス関連の私的な理由はないわけじゃないけれど、それ以外にも立場的には街やその周辺への安全を確保・維持する必要があるわけ……はいそうですか、と報告を聞くだけ聞いて放置っていうわけにもいかない。

となると、あたしがとるべき行動はほぼ決まっちゃってる。とにかくまずは現場調査、そして出来るのであれば素早く解決。

そうなる腕の立つ冒険者にでも早急に依頼でも出して言うて貰うのが一番……なんだけど、ここでちょっとした問題があった。

そう。今現在、腕の立つ冒険者はあたしといくらか面識がある面々はもちろんのこと、そこそ腕の立つ冒険者も大概が出払っている。それには色々と理由があるんだけど……とにかく、今『冒険者ギルド』からすぐに出れる冒険者はいないというわけだ。

あと、残っているのって言うたら……

「口口ナたちなら……いや、でもあの子たちもあの子たちで重要なこ

とをやってるわけだし、それを邪魔するのは……」

「あの、そのことなんです」

カウンター越しにオズオズとかけられた声に、あたしは逸れていた意識を改めて門番そつちの方へと向ける。

「実は『冒険者ギルド』に来る前にアトリエの前を通ったんですが、張り紙が貼ってあって……」

「張り紙？ ロロナたち、アレの研究のために依頼は受けないってことでも書いておいたのかしら？」

「それもあつたのですが、『実証実験のために街の外に行ってます』とも……その、もしかすると……」

……言わんとすることはわかった。わかってしまった。むしろ、ロロナたちが何を調合くっしているか知っている分、「もしかして」なんかじゃなくて、もつと確信に近いものがあつた。

最悪の場合、ロロナやトトリが実験に巻き込まれて行方不明に……ってことになりかねないんじゃないかしら。そうじゃなくても、道具そのものが爆発して壊れたり、発生させた『ゲート』からモンスターが大量に湧き出してきたり……悪い意味で何でも有り得てしましそうですね。

そう考えると、色々と納得できる——けど、それはそれでやっぱり人の派遣は必要なことには変わりない。

『ゲート』からモンスターが出てきたってだけなら、よっぽどの準備不足でもない限りロロナたちだけでなんとかなるだろう。けれど、もしそうでないとすれば……例えば、ミスがいなくなってしまう一連の出来事のようにあたしの想像をはるかに超えることでもあつたとすれば……まあ本当にそんなことにもなっていたら、同じよそこの冒険者をよこした所でもなんなんじゃないでしょうけど。それこそ錬金術士、それも癩あだけどアストリッドつくらい常識から逸脱したレベルじゃないといけないでしょうね。

だからって今何もしないわけにもいかないことだって重々承知してる。それに……

「なんとなくだけど、嫌な予感がするのよね……」

かといって『冒険者ギルド』の前身とも言える『王宮受付』、それがあつた王国時代の王宮のように、皆ある程度は訓練を受けた騎士たちが職員にもいたところと比べ、今の『冒険者ギルド』はもっぱら事務職専門の職員ばかりだ。まともに戦闘ができるのなんて、それこそ昔口口ナと冒険に出ていたあたしくらい。

となると、やっぱりあたしが行くべきなんだろう。個人的にも口口ナたちのことが心配なのもあるけど、戦闘も調査も、どっちも有り得るって考えたら自分で言うのもなんだけどあたしが適任なのは間違いない。

……ただ、変に嫌な予感がしてしまつてるからか「本当にあたしだけで大丈夫かしら？」つていう一抹の不安はぬぐいきれそうにない。だからといって、連れて行けばある程度でも使えそうな人も他にいないからどうしようもないんだけど……

「誰でもいいから、ちようどよく冒険者が帰ってきたりしてないかしら？」と思い、辺りを見渡し……ふと、あたしから見て右手の方にいるあの子に目がとまった。

「……………ん、ふきやつ!? く、クーデリア先輩…………? 私、何かしちゃつてましたか?」

カウンターにいつもの依頼書ではない紙束を積んでそれらに目を通していたフリーが、あたしの視線に気づいて驚き慌てながら姿勢を正した。

この子は、ちよつと前から『ゲート』の調査書の端書にあつた『ゼークス帝国』の『シフト』とかいう装置について、詳しい記述がないかを探してると言つてたかしら?

けど、これはいいかもしれないわね。

「ねえ、あんたつて確か——」

街道のはずれ

「……………あ」

『終^ナわり^ニのもの』の攻撃によってひき起こされた大爆発。

その爆発に私や先生、ホムちゃんは吞まれそうになり——寸前に、私たちの前に小さな影が現れた。

背丈は1mにも満たない本当に小さなその姿は……見覚えのある黒猫の人形だった。

「オイオイ。騒がしいと思つて来てみたら……どーなつてんだ、こりやあ?」

「えつ、ほろくん……!?!」

先生の口から出てきた……黒猫の人形・ホロホロ。そのホロホロが私たちと爆発との間に立ち障壁^{浮き}か何か展開して私たちを護つてくれて……!

「ロロナちゃん! トトリちゃん! 大丈夫!」

「つて、まあ見たとおりにかしら?」

そんな声が聞こえて振り返つたら見えたのは、コツチに駆け寄つてくるリオネラさんとそのそばに浮いてついてきているアラニーヤ。そして、リオネラさんの手元には両腕で抱き抱えられている ちみゆみみゆちゃんが。

「りおちゃん!? らにやちゃんも!」

「あのつ、どうしてここに……?」

私の問いかけに、リオネラさんが小さく頷きながら応えてくれた。「えつと、その、マイスクンの家で調べ物をしてたら変な音が聞こえてきて……外に出てみたんだけど村の人たちも聞いたらしくってあたりを見渡したら黒い霧みたいなのが漂つてる場所が見えたの。マイスクンのこともあったし村の人には残ってもらつて……」

「それで、ロロナたちと採取地に行つたり旅したりしてきて有事の経

験が一番あるから、つてことでワタシたちが立候補して様子を見に行くことにしたの。——その途中、空からこの子が降ってきて、事情を聞けて急いで来たつてわけ」

「ちむっ！」

アラニーヤの言葉に反応して、ちみゆみゆちゃんが「わたしのことです！」といった様子で片手を上げ、それを見たホムちゃんが「納得しました」と呟き頷く。

リオネラさんとアラニーヤの説明でおおよそ理解した。

今回の実験は、もしもの事態を考えて街中や街や村のそばから離れた場所……『アランダの街』と『青の農村』を結ぶ街道脇の平原ですることにした。けど、「本番のことも考えてマイスさんが消えたであろう場所から極力離れたくない」という考えもあつて、村のほうからはそこまで遠く離れてはいない——言ってしまうと、ギリギリ目視できなくもない距離の——場所での実験だった。

音も大きければ聞こえてもおかしくは無いし、『青の農村』から見えたつていう「黒い霧」というのも……きつと『終わりのもの』が襲ってくる寸前に周囲に広げた「黒い靄」のことだろう。そんなものがこの平原の一部だけに広がっているのであれば、多少離れた距離からでも目視することはそう難しくなく一直線に来れると思う。

ちみゆみゆちゃんは……竜巻で大空高くまで巻き上げられ、その後は風に運ばれてリオネラさんたちが移動していたところまで飛んでいっっちゃつてたんだろうなあ。

「いや、情報交換はいんだけどよ？　せめて、避けるか退くかしてくれねえか？　防いでるコツチの身にもなつてほしいぜ」

「「あっ」」

私の口からこぼれた声と、先生とホムちゃんの声とが重なる。

……うん、ホロホロの言う通りだとは思ふ。未だに続いていた大爆発とその余波は本当なら私たちが飲み込んでいる距離ではある。けど、中心からは離れた場所で数歩で何とか範囲外に出ることはできる位置なんだから、前の攻撃のすぐ後だった最初はどうしようもなくて

も、ホロホロが防いでくれた後はいくらでも逃げられたのは事実。爆発を防いでるホロホロからしてみれば、一刻も早く抜け出しといてほしかったんだろう。きつとそれが正しかっただろうし。

というか、なんで防げてるのかな？ 飛んでまわってることといい、ホロホロって実は錬金術の技術が詰め込まれた超高性能な……!?

「……おい、気のせいかもしれねえけど、そのトトリが嬢ちゃん目キラキラさせてねえか？」

「はて？ ホムにはそのようには見えないのですが？」

「とにかく、ごめんねほろくんっ、気付いてあげられなくて……!」

「あーもう、いいから早く。そういうこと言ってる間に動けっつての。リオネラも、ボーっとしてねえで、ソイツラ早く連れてけ！

……ん？」

「ひい……ふう……正直、防ぐのでイッパイ、いっぱい……!」

「……ホントね。ワタシのほうにチカラがあんまりこなくって、今にも落ちてしまいそうなくらいよ」

「オイッ!? リオネラ、お前さつき普通に駆け寄ってきてただろ!」

「そそれは……ロロナちゃんが、心配で、が頑張っ……けど、もう、限界……!」

「諦めんなよっ!? 今、チカラが抜けでもしたらオレサマ黒猫が黒焦げ……いや、ヘタすら木っ端微塵だぞ!!」

「ひう!? そ……それはやだ〜!」って言って、涙目になりなるリオネラさんの腕の中では、まるで応援するかのようになりちみゆみゆちゃん「ちーむ! ちーむ!」と掛け声を出してる。見れば、先生やホムちゃんもいつの間にもやら顔色を変えて応援を……って、そこは言われてたように早く逃げたほうがいいんじゃない? 私も他人のひとことは言えないけど……。

うーん……何がどうなってるのか——特にリオネラさんやアラニーヤの言っていることが——今一つ分からない状況。

でも、そんな色々と不安だった状況も、そう長くは続かなかった。

「おおっ……ようやくかあ〜」

さっきまで断続的に発生し続けていた爆発が、これまでのがウソのようにスツと引いたのだ。

時間にして数十秒くらいかな？　これまで爆発とその余波を防いでいたホロホロは安心したようにどこか気の抜けた声を漏らしてる。同じくして、リオネラさんもゆっくりと肩の力を抜き大きく息を吐いて胸をなでおろしている。

「つて、ダメダメっ！」

私も、さっきまで大きな爆発で気圧させていた感覚が薄まって、ホツと息をつきそうになる————けど、そうはしない。私もさすがに学習するんだ。

調合が出来た達成感か、無事に『ゲート』の発生&反転が一応は出来たからか、それらをひつくるめた「もう少しでミスさんを助け出せる」つていう高揚感か……とにかく、私は……私たちは少し浮かれてしまってたんだらう。まだまだこれからだつて言うのに。

「気を引き締めろ、私っ！」そう、心の中で自分に言い聞かせる。

この『終わりのもの』相手に息をついているヒマは無い。ここまで戦っただけでも十分わかった。

あのナニカからずつと感じている悪寒が走り怖くなるほどの敵意に始まり………見た目からは想像できないほどの速さ。人の意識の隙を突くようないやらしい攻撃。どこまでも相手を追い詰める技の規模の大きさ。何がくるのかわからなくその上「まだ何かあるんじゃないだろうか？」と警戒せざるを得ないほどの多彩な技の数々。そして……突如現れ消えた竜など、まだまだ底が見えてこない謎。

だからって、恐れているわけにもいかない。そもそも『ゲート』が直前まであった場所から無理矢理出てくるような存在なんだ。それ

い」も、肌に刺さるように感じるのとは別にその『終わりのもの』の表情も相まって嫌なほど伝わってくる。

けど、それよりも……

「なんでしよう、この無性にモヤモヤ……イガイガする感覚は？ ホムにはよくわかりません」

「まあそうよね。ムカつきもするわよ、あんな無防備に大笑いされたら」

「とは言っても、オレなんかも防ぐので手一杯だったし、何とも言えねえんだけどな」

眉間にシワを寄せながらも首をかしげるホムちゃん。それに同意を示すアラニーヤとホロホロ。

うん、私もきつとホムちゃんと同じ気持ちなんだと思う。それはまあ、コロナ先生やホムちゃん、ホロホロに守ってもらえてなかったら、私なんて今頃そこらへんに倒れてしまっただろうけど……だからって、あんなに大笑いされて何とも思わないわけじゃない。具体的にはあの長い髭と髪がクルクルに縮れるような派手な爆発でドカーンと吹き飛ばしてしまいたい。

「先生！」

「うんっ、わたしもいけるよー！」

私の意図が伝わっていたのか……先生も『終わりのもの』に対して思うところがあったのか。はたまた、ただの偶然か。私の声に答えた先生は私と同じくその手に爆弾を持っていた。

取り出した爆弾は、これまた偶然にも同じ種類——『N/A』。あのお母さんを探して出た航海で遭遇した『フラウシュトラウト』を退ける決定打になったあの爆弾だ。当然、素材の厳選や私自身の錬金術の腕の向上で、当時よりもより強力な性能になってる。私なんかよりも凄いい先生の『N/A』だって、もっと凄いに決まってる。

さっきの一声で呼吸を合わせることが出来た私たちは、揃って振りかぶり——

「それっ!!」

——投げた。

飛んでく『N/A』の先には当然『終^あわり^{のナニカ}のもの』。

先生のか、私のか……どちらか片方からか、同時にか「カチリッ」という音が聞こえたような気がしてすぐに、轟音が響き爆風の余波があたりを吹き荒れた。さらに、さらにと続くように連鎖に連鎖を繰り返して炸裂する『N/A』の局所的で高火力な連続爆破。

立ち上る火柱と巻き上げられた土埃に、『終^あわり^{のナニカ}のもの』の姿はかきけされた……………

『終わりのもの』④

街道のはずれ

私と先生がそれぞれ投げた『N/A』が連鎖して炸裂し、『終わりのもの』がいた一帯を地面ごと吹き飛ばし焦がしてく。

その威力はやっぱり目をみはるものがある……んだけど、私はこれだけで決着がつくとは思ってはいない。きつとコイツは、あの時戦った『エビルフェイス』と同等かそれ以上の強さだと予想している。流石に『N/A』二つで倒せるほど軟じゃないはず。

そんなことを考えながら私が見つめるのは爆発で土埃の舞い上がった地点。土煙から飛び出してくるだろう『終わりのもの』かヤツからの攻撃にすぐに対応するべく、その動向を見逃さないようジツと目を凝らす――

「――あっ!?!」

――そんな私の背中に衝撃が走り、その衝撃の勢いのまま前のめりに倒れてしまった。

冷たい、熱い……ううん、ジンジン痛い……。

手持ちの回復薬が、付与していた特性『やる気マンマン』によって自動的に効力を発揮してくれたことで痛みはみるみる引いていく……でも、まだ痛みが残ってる。

だけど、倒れたままじゃあどうしようもないのも事実。私は痛みに耐えつつ体勢を立て直すべく出来る限り素早く立ち上がろうとする。

私のそば以外からも小さな呻き声や土の擦れる音が聞こえてきたような気もする。きつと、私以外にもきつときの攻撃を受けてしまった人がいるんだろう。……早く治してあげないと……!!

「みんな、しっかりしてっ!」

先生の声が聞こえるのと同時に痛みが一気に引き、急いで立ち上がりながら確認した周囲には、私よりも一足先に立ち上がったのかはたまたま攻撃を避けられたのか、ロロナ先生がその両手にそれぞれ空の容器が。痛みが引いたのは先生が追加で使ってくれたお薬のおかげだったんだ。

少し離れた所に倒れていたホムちゃんとりオネラさんたちも立ち上がってきているところで、とりあえずは大丈夫そう……かな。

「……んっ、あれ？」

足元に違和感を覚え目を向けると、あるモノが見えた。

足の爪先から踵までの長さより少し長い程度の幅がライン状に挟られている地面。それはまるで円を描くように伸びていて、その周囲はビシヨビシヨに濡れている。その結果、立ち上がった私の足元もちよつとぬかるみかけてたんだろう。……よくよく見てみると、服もあちらこちらが濡れてたり泥がついてたりしてる。

……この跡の感じ……前にミスさんが使ってた『水の魔法』でも似たような跡がついたりしていたような……？ 前の「地面から岩がせり出す魔法」もそうだったけど、やっぱりミスさんと同じで『終わりのもの』も沢山の魔法がつかえるんだろう。

それはそれでキツイ……けど、それ以上に――

「もしかして、無傷……っ？」

いつの間にか私たちの背後にいて『ウォーターレーザ』で攻撃をしてくてた『終わりのもの』。また笑っているその姿は、『N/A』が直撃してたはずなのに、それらしき傷どころか煤すら付いている様子がなかった。……まあ、煤は黒い靄で見えにくいだけなのかもしれないけど……とにかく、パツと見た感じ、そんなダメージが入っているようには到底思えない。

なんで……？ どうして……？

『N/A』よりも強力な爆弾が無いわけじゃあない。けど、はたしてソレが『終わりのもの』に通じるんだらうか？ それに、『N/A』をほとんど無傷のような状態で耐えている相手なんだから、通じたとし

ても「倒しきる」までダメージを与えるってなるとどれだけの回数量が必要なんだろう？ その間コッチが一方的に攻撃出来るわけじゃない、当然アツチからも襲いかかってくる……これまでと同じで、あの並じやない攻撃を何度も受けていたらどうなってしまうかは想像できてしまう。

攻撃面にしても、防御・回復面にしても、手持ちの道具アイテムだけじゃあ心許無い。せめて冒険の時には持ち歩いていた『秘密バッグ』があればアトリエのコンテナからほしい道具アイテムを取り出せるんだけど……うん、『N/A』以上の威力って考えるとそこまでの量は……回復アイテムだつて、何時そこを尽きてしまうかわかったものじゃない。

「でも、どうしたら……」

「トトリちゃん！ だいじょうぶ、大丈夫だよっ！」

脚から力が抜けてへたり込んでしまっそうになる直前、先生の力強い声が耳に入り何とか踏みとどまれた。

自然と、継るように、名前を呼ぼうとしながら先生のいる左のほうを向いて——気付いた。

……先生も、震えてる……？

私なんかよりも強くて凄く凄く錬金術士のロロナ先生が……うん、それはまあジーノくんみたいに「つえーヤツと戦いたい！」って感じじゃないし、先生だつて怖かったり不安だつたりすることもあるに決まってるよね……。

でも、それでも悠然と立って、ギュつと杖を握って、しっかりと前をみてる。

先生は、私の先生だ。

私だつて知ってる。逃げるわけにも、諦めるわけにも

「そう、だよ。諦めるには、まだ早いんだから……！ 先生！ 私、やってやります！ 『終わりのもの』との根性比べ!!」

「！ うんっ、その勝負わたしもつき合うよ！」

顔を合わせ、頷き、そして改めて『終わりのもの』倒すべき相手を睨みつける!!

さあ！　ここからが本番なんだからっ！！

「なに馬鹿な事を言ってるんですか？」

そんなことを言う声が聞こえてきたのは、私たちの後ろ——そこにいたのはホムちゃんと、そのまた斜め後ろにはリオネラさん。そして、その足元にはちみゆみゆちゃん……あれ？　いつの間にかちむドラゴンくんも戻ってきてる？

さっきのはホムちゃんが？　でも、なんであんなことを……？

「諦めないのは当たり前です。そして、負けれないからこそ根性論などではなく、一度冷静になって考えて行動すべきです」

ホムちゃんが長い袖で隠れた両手でどこからかそれぞれ取り出したのは……『フラム』に『レヘルン』、『ドナーストーン』、それに『地球儀』まで。

これって、どういう……？

『N/A』で有効打を与えられなかったのは事実だが、だからといって何も効かないとは限りません。アレが何かしらの耐性を持つているかもしれないし、逆に属性なり何なり弱点があってもおかしくありません」

「あっ」

私と先生の声が重なる。

そうだ。私たち錬金術士が『錬金術』で服や防具に『特性』を付与して「炎」や「雷」といった攻撃を軽減しているように……モンスターにも、特定の属性が効かなかったり逆に効いたりする——錬金術士とは違って生まれつきとか育った環境でそんなふうになるって話を聞いたことがあった気がする。

でも、そう考えたら『N/A』があんまり効いてなさそうなのにも

納得が……あれ？ 『N/A』って「炎」の爆弾だったっけ……？ うん、確か炎……ん？ でも、素材を厳選して作ったら、全然性質が変わったような気も……。

「と、とにかくっ、何か弱点があるかもしれないっていうのはありえそうですね。ねっ、先生？」

「うんっ！ よーし、片っ端から試していつちやおう！」

ホムちゃんから各属性の攻撃用アイテムを受け取る私たち。そこに、リオネラさんが『終わり^ナのもの^ニ』と私たちの間を遮るように立った。

「上手く引き付けられるかはわからないけど……でも、当てられるような隙を作ってみせるからっ……！ ロロナちゃん、トトリちゃん、よ、よろしくね」

「……うん！ でも、絶対に無理はしないでね、りおちゃん」

「オレサマもついてんだから、心配すんなって。背中^{後ろ}に逃げねえヤツでもいねえ限り、あんなへナチョコ魔法、受けたりしねえって」

「まっ、ワタシたちが適任って言うのは間違い無いわ。盾役ってこと以上に、不意打ちから注意をひきつけたりするのはなにかと、ね？」

リオネラさんのそばでフワフワ浮かんてるホロホロとアラニーヤが、手を振りながらいつもの調子で言う。

ホロホロは冗談なのかさっきのことを根に持っているかのような事を言い、それに比べてアラニーヤのほうは至って真面目そうなことを言っ「だから心配しないで」と伝えてきた。

「回復やその他補助はホムに任せて、マスターたちはあのゴ●ブリのように動き回る『終わり^{アレ}のもの』に爆弾を当てることに集中してください。弱点がわかり次第、^{この子たち}ちむにその属性の道具を持ってきてもらいます……もしくは、私たちが時間稼ぎをする間に、お二人でアトリエに一度帰ってもらいます」

「ちむっ！」

途中何ともコメントし辛い例^表えを交えながらのホムちゃんの言葉に、その足元にいるちみゆみゆちやんとちむドラゴンくんが「まか

せて！」と言わんばかりの元気なお返事をする。

不安が無くなったわけじゃない。過去最高つてくらいに大変な戦いになりそうだっていう予感相変わらずだし、むしろ確信に近いくらいだ。

けど、さっきまで感じていた絶望感は全然感じなくなった。

「先生たちと一緒に絶対大丈夫！」、その気持ち私を一步踏み出させるチカラになっていた。

キツと『終わりのもの』を睨みつけて、私は高らかに宣言してみせる。

「アナタは、私たちが絶対にやつつけてみせるんだからっ!!」

私の声を聞いてかどうかはわかんないけど笑うのをやめた『終わりのもの』。

その『終わりのもの』が手を突き出して飛ばしてきた火球を避けるところから、私たちの戦いは改めて始まった――

――んだけど……

「ひい……ふう……へえっ……!」

「トトリちゃん、大丈夫っ!」

先生の声に、「もうダメえく」って言葉が口から出てきそうになるのを寸前で飲み込んで……なんとか「へ、平気ですっ」と返すことが出来た。

でも、本音を言うとかかなりキツイ……。

リオネラさんやアラニーヤ、ホロホロが頑張ってくれているおかげで攻撃の半分くらいは私や先生を狙ってきてなかったし、コッチへの攻撃もいくらか防いでくれた。だから、私たちを狙ってきて私たちが対処しないといけない攻撃は10回に2, 3回くらいしかなかった。

けど、結果的には私はかなり走り回るようになった。

どうしてかっていうと……『終わりのもの』が結構動き回るからっていうのもあったけど、それ以上に例の大爆発攻撃やドラゴンをいきなり呼び出してからの攻撃がどうしても無差別的な広範囲攻撃だったから、その攻撃や予兆が見られたたびに走って距離を取らないといけなかったから。

最初のほうで見た竜巻をおこすドラゴンがもう一度現れた他にも、燃え盛る炎のような体が印象的だったドラゴンも現れ、その大きな身体ごと尻尾を振りまわして辺り一帯を焼け焦がすような熱波を放つたりもしていた。

他にも、ついであつていうにはちよつと大きなことが――

そんなことを考えていた私のもとに、お薬を持ったホムちゃんが駆け寄ってきた。

「大丈夫です、トトリはまだやまず」

「えつと……なんで断言？」

「トトリよりも走り回っているリオネラ彼女がまだあやまって走り回っているんです。それに加え、戦闘にブランクのある彼女より現役冒険者であるあなたが先に体力切れになるとは思えません」

「いや、まあその通りだけど……」

でも、私としてはその走り回るリオネラさんが問題で……

「……メルおねえちゃんて慣れてたつもりだったんだけど、悔しいっていうかなんだかグサツって胸を抉られたような感覚……えつと、別に、そんな気にしてるわけじゃないんだけどね？」

「はあ……？　ホムには何を言っているのかよくわかりませんが……」

とにかく、まだ何も終わってはいないんです。早く復帰しましょう」
うん、ホムちゃんの言う通りだよ。目の前で先生以上に大きく揺
れてるからって、今そんなことを考えてる場合じゃないよね。……現
実逃避するにはまだまだ早すぎる。

実際、ここまで走り回って、隙を見てアイテムを投げつけて
………そうやって一生懸命にやってきた結果、わかってきたことも
たくさんある。

まず、今のところ当てることのできた道具『フラム』、『レヘルン』、
『ドナーストーン』……それぞれ「炎」、「氷」、「雷」の属性攻撃アイテ
ムだけど、どれも同じ程度のダメージ——とは言ってもそもそもその威
力の低さもあってか本当に小さな負傷——を『終わりのもの』に与え
ることが出来ていることがわかった。

「じゃあなんで『N/A』は効いてないようすだったのか？」ってい
う疑問も湧いてきたけど、とにかく『終わりのもの』が決して倒せない
相手じゃないってことはわかった。

だけど、問題はこれまでの属性攻撃はどれも「弱点」ではなさろうつ
てこと。残っている『地球儀』の地属性も、『終わりのもの』自身が土
の魔法っぽいものを使っているから「弱点」だとはちよつと考えにく
いし……。

もちろん、「弱点がある」ってわかってたわけじゃなくて「弱点が
あったら突破口になる」って話だったわけで、「弱点が無い」って可能
性もじゅうぶんあった……だけど、そこに期待をしていたのも確か
だ。

やっぱり持久戦は避けられそうにないかな……

でも、最初に考えてたのとは違ってホムちゃんとちむちやんがいる
おかげで、いざという時の補給の目途も全く無いわけじゃないし、と
にかく今は色々試してみないと！

ホムちゃんから受け取ったお薬をゴキユツと飲んで体力も疲労感
も一気に回復。拳を握りしめて気合も入れなおした。

「よし、復活！ すみません、先生つおまたせし——」

「トトリちゃん！ でっかいの来たから離れてく!!」

「——まし……えっ?」

なんのことが聞くよりも早く、理解した。

こっちに走ってくるロロナ先生やリオネラさん……その向こうに見える巨大な影。

その大きさと放たれているプレツシャーからこれまでに見たドラゴンと同じようなヤツだっことは察することが出来た。……だけど、これまでの二体ともまた違う……一見ドラゴンとは思えない見た目。

尖つてたり角ばった場所の少ない一流線形の身体。四足どころか二足歩行もできそうにない脚らしきものが見当たらない骨格。その脚や翼の代わりに身体から生えていたりする大きなヒレ………あえて言うなら、大海原で出会ったあの『フラウシュトラウト』をより魚っぽくしたような存在だった。

羽毛のような翼を持つドラゴンが吹き荒れる竜巻をおこし、燃え盛る炎のような体表のドラゴンが辺りを焦がす熱波を放った……。となると、大きなヒレを持ち魚と竜の中間っぽいドラゴンが何をしてくるかは、だいたい予想できちゃう。

そう、たとえば『フラウシュトラウト』がやったような津波大きな波での攻撃とか——つて、それは無いよね。『フラウシュトラウト』との戦いの時とは違って、ここは海でもなんでもない陸地それも結構な内陸だし……でも、『終わりのもの』がやってきた『ウォーターレーザ魔法』みたいに、口からブシャーって水を発射したりとかはできそう……?

いや、もしかして、陸地で大波をおこせたり!? マイスさんや『終わりのもの』が魔法で水を出してるんだから、出来ないって言いきれない所が……!」

そんなことを考えながら、先生たちと一緒にドラゴンから離れるよ

うに駆けて行く私。

「つめたっ!？」

と、その脚——かかと踵から膝下ひざ十数センチくらいまでが、突然ヒヤツと冷たい何かに包まれた。

ううん、何かなんかじゃない。この感触というか流れる感じは間違い無く「水」……って、なんで!? なんでいきなり足元に……あたり一帯が水没するような水が!? そばにいたホムちゃんなんて、服の構造の関係でフリルの付いたかわいいスカートまで水に浸かつちやつてるよ!

あれ? でも、あたりを覆う黒い靄でちよつと見え辛くはあるけど、私のいるところからほんの十メートルほど先……ちみゆみゆちゃんやちむドラゴンくんが待機してた辺りは全然水没なんてしてない原っぱが健在で……本当にどうなってるの!？」

「って、ひゃあ!! な、な流される!？」

膝下の大半が浸かるほどの水位になっている水は私たちの斜め後ろ——つまりはおおよそあのドラゴンへと向かうように流れていて、その勢いは激しくって、必死に抗おうとしても歩くスピードと同じくらい速度で押し流され、正直倒れないようになんとか体勢を保つだけで精一杯っ!

何とか首を回し横目で後の方へ眼をやる。

その途中、私よりもあっち側にいたロロナ先生も必死に流れに抗ってて……そのロロナ先生の方へ焦った様子のリオネラさんとアラニーヤ&ホロホロが飛んで行って……飛んでっ!？」

なんかもの凄く気になるモノを見てしまった気が気がするけど……と、とにかく、その大きな体ゆえに嫌でも目がいつてしまう例の大きなヒレのドラゴンとは言えば、まるで遠吠えをする『ウォルフ』のようにその首を大きくもたげてゆらして……その真下あたりになるドラゴンの胸元前の地面に流れる水が渦巻き飛沫を激しく上げながら集まっていくのが見えた。

もしも、こけてしまったりして渦の中心まで流されてしまったら……! そんな考えが頭によぎってしまつて、背中に悪寒が走りブル

リツと震え上がってしまう。

——
あ!!

——
い!!

「……? 今、何か聞こえたような……?」

渦へと勢い良く流れる水音と、その名かをバシヤバシヤと抗う私たちがあげる飛沫の音のほんのわずかな合間に、なんとなくだけ、誰かの声が聞こえたような気がしたんだけど……?

「気のせい……あつ。つとつとつとー!」

不意に脚から消えた水の感覚が消えて、流れに上がってた勢いのまま前のめりに倒れそうになったのを何とか踏みとどまる。

すぐさま辺りを確認すると、比較的小柄で流されないか一番心配だったホムちゃんも、私よりもドラゴンに近かったリオネラさんや口ロナ先生も……ビショビショになってはいたりもするけどとりあえずは無事そうだった。

広範囲攻撃をやり過ぎたことにひとまず息をつきそうになっていた私に——その視界の端に二つの影が映る。

その影たちは、あの大きなヒレのドラゴンが消えた場所に再び現れた『終わりのもの』へと跳びかかって……!!

「アンタっ——」

「ロナに」

「トトリに」

「——何してくれてんのよ!!」

「くーちゃん!?!」

「ミミちやんっ!?」
『終わりのもの』に、銃弾の雨が降り注ぎ——
鎧の鋭い一撃が叩
き込まれる!!

『終わりのもの』⑤

街道のはずれ

大きなヒレのドラゴンによる大渦猛攻をしのぎきった私たちの前に現れたのは、クーデリアさんとミミちゃん。

偶然なのか間を測ってなのか——あの怒ってる感じからしたら、我慢した上で飛び出してきたようには思えないけど——ドラゴンが消えてから『終わりのもの』へと向かって文字通り跳びかかった二人。クーデリアさんは『終わりのもの』を高く跳び越えながらその両手に持つ銃で弾丸の雨を浴びせ、続くミミちゃんは身の丈以上もある鎧やりを跳びかかる勢いそのまま袈裟斬りの要領で切り付け……槍を地面に叩き付けてしまう手前で持ち手で鎧先までの長さやその方向を調節しながら身体ごと回り、その回転の勢いを皿に加えた状態で今度は『終わりのもの』を斬り上げた。

ミミちゃんの流れるような一連の動きも目をみはるものがあるけど、それ以上にクーデリアさんが予想以上に身軽で凄い動きをして……前に一緒に冒険に出る機会はあるって銃を使うってことも聞いてたけど、あの時はミスさんとステルクさんだけで蹴散らせてから戦う姿を見るのは初めてだったりする。

『』。

「ロロナたちが手こずってるから並の奴じゃないとは思ってたけど、ずいぶんと丈夫……というより、コイツ本当にモンスターどころか生き物なの？」

「当たってるはずなのに、硬い柔いじゃないこの変な感覚……塔の『エビルフェイス』を思い出すわね」

はたから見て強烈に見えた二人の攻撃を受けて、そう大きくのけぞったりはしなかったものの動きを止めた『終わりのもの』。そこから距離を取って私たちの方へと駆けてきたクーデリアさんとミミ

ちゃんが思慮顔でそれぞれ言葉を漏らしてた。

けど、それよりも……

「くーちゃんに、ミミちゃんまで！ どーしてココに!？」

私よりも先に先生が二人に問いかけた。

二人とも『見たことも無い気味の悪い何か終わりのも』が目の前にいるからか戦闘態勢のまま、

先生の方へ向き直ったりはせずに視線だけを向けて口を開いた。

「どーしてもこーしても、これだけドンパチやってたら嫌でも

『冒険者ギルド』に報告が来るにきまつてるじゃない。んで、腕利きの冒険者が揃いも揃って『属性結晶』集めに各地に散ってる今じゃあ、あたしくらいしか派遣できる人材がいなかったのよ」

「私は指令で、みんなが集めてた『属性結晶』を一旦まとめて、ロロナさんとトトリの所に持って行く途中で……そしたら、『青の農村』の近くで黒い霧があつて、その中から爆弾や雷の音と変な気配がしたから『絶対何かあつたんだ』って思つて……」

クーデリアさんに続いて言ったミミちゃんの腰には、何やらゴツゴツしたものが入つてそうな袋が。きつとあの中に『属性結晶』が入つてるんだろう。

「戦うにはちよつと邪魔ね」と言いながら取り外し、私へとさし出してきた。……うーん。ここまででアイテムは結構使つたからポーチに入るかな？

「ロロナ。とりあえずの状況はおおよそ理解できてるし長々話してる暇はないから、手短に「今からどうするか」くらい説明してくれるかしらっ。」

「あつ、うん。『相終わり手のもの』の攻撃が凄い上に本体は素早くて丈夫で強過ぎて……それで、何か決定打になるような弱点が無いかって色々試してたんだけど、今のところどれも微妙で残りは『土』属性の『地球儀』だけなんだけど……」

「……とりあえず、何か手はあるのね。まっ、アッチも動くみたいだし、とりあえずあたし達でスキを作るからトトリと二人でやつちやいなさい」

先生が属性の事とか詳しいことを軽く省いたせいか、解つたのかどうかいまいちな反応を見せるクーデリアさん。でも、『終わりのもの』が向きなおつてきたし、手短に済ませなきゃいけなかったから仕方ないかな？

「ついでに……あんたもゴチャゴチャ言つてないでちゃんと働きなさいよー？」

そうクーデリアさんは付け足すように言つて——つて、誰にいつてるんだろう？

チラツとこつちのほうを向いたクーデリアさんの視線は、気のせい
か私や先生の肩越しの……その先へと向かつているような気が……。その視線に釣られるように後ろへと目を向け——る途中で、その声は私の耳に入つて来た。

「しよ、そそ、そんなあ!? せんぱい、わたし、ムリですよ〜!？」

「うえっ!?! ふい、ファイリーさん!？」

後方支援をしてきているホムちゃん……そのクーデリアさんよ
りちよつと大きいくらいなの、比較的小さな体の背後にに必死に隠れよ
うとするかのように中腰気味で震えている女の人。その姿は、見間違
えるはずもない、私がそこそこ見知っている人……クーデリアさんと
一緒に『冒険者ギルド』で受付のお仕事をしているファイリーさんだつ
た。

でも、クーデリアさんと違って、「冒険に行つてた」とか「下手な冒
険者よりも強い」とか言う話はこれまで聞いたことは無かつただけ
ど……? 本人も「無理」つて言つてるし、大丈夫なのかな？

涙目でプルプル震えているファイリーさんが必死に訴えかけるけど、
クーデリアさんはもはや振り向くこともしないで言葉だけであしら
いはじめちゃう。

「別にあんただけで倒せなんてことは言わないし、そんな期待も全く
してないんだから。あんた、『魔法』が使えるつてだけで下手な冒険者

よりも役に立つんだから、今はとにかく自分と周りを回復させることだけ考えて逃げ回るときなさい」

「そんなこと言っただけで！ 戦うなんて聞いてないですしっ、それに、なんだかもの凄く怖そうな相手で……わ私っ、初戦闘がこんな相手って死んじやいま——」

「可能性は十分にあつたけど、言ったらあんた絶対来ないじゃない。まあ、とにかくあたし達も——あのリオネラだって頑張ってるんだから、ちよつとは手伝いなさい。言つとくけど、ここをなんとかしないとマリスを助けるなんてことしてる場合じゃなくなるわよ？」

クーデリアさんの言葉に、フィリーさんだけでなく私も……ううん、私以外の人たちも少なからずビクリッと反応してしまう。

でも、確かにその通りなんだ。

『ゲート』が消えてから現れたとはいえ、『終わりのもの』（こ）退治（れ）の戦はマリスさん救出のための実験の後始末。私たちが何とかしないと計画（前）を実行（進）できない。それに……単純な話だけど、マリスさんの失踪（消えた）先だと思われる『はじまりの森』には『終わりのもの』（目の前のナニカ）がいて——
—他にも同等かそれ以上のモンスターがいてもおかしくは無いってこと。そう考えると、『終わりのもの』を倒せないんじゃあお話にならないってことでもある。

「ほらっ、来るわよ!!」

クーデリアさんが注意喚起を飛ばすのとほぼ同時に、『終わりのもの』が「黒い球」を撒き散らしながら高速で迫ってくる!!

これまでのリオネラさんによる囹役とホムちゃんのサポートに、新たにミミちゃんとクーデリアさんの揺動・遊撃、フィリーさんの回復

役が加わった新たな戦線。特にフィリーさんの回復『魔法』の存在は大きくって、その分手の空いたホムちゃんは私たち皆への強化や異常状態・弱体化の解除、さらに『終わりのもの』への弱体化付与を試みたりと戦術の幅が一気に広がることとなった。

結果、私と先生にもかなりの余裕ができて、逆に『終わりのもの』が大きな行動へ出るチャンスは減っていった……。

「トトリちゃん！」

「はい！ 先生！」

「『地球儀』っ！」

『』

みんなが作ったスキを突いて確実に当てにいった『地球儀』は狙いに狂いも無く『終わりのもの』へとぶつかり、地響きを立てるほどの一撃をお見舞いすることとなった。

けど………

「ツハ、トコトン丈夫だなー」

「ホントウにね。一応全く効いてないわけじゃなさそうだけど……」

ホロホロとアラニーヤがそう言うように、やっぱり言うべきか『地球儀』が『終わりのもの』へと与えたダメージはたいしたものじゃ無かった。

これで『終わりのもの』へほどの属性も特別効果があるわけじゃないことがわかった。

「属性攻撃用アイテム、4種類ともダメですか……いえ、ホムが用意した道具の、そもそもの品質・効力の問題という可能性も十分あります……」

「ううん、そんなことないよっほむちゃん！ 属性ごとにダメージに差はほとんどなかったから、結局はどの属性も弱点じゃなかったわけ……だから、ええっ……」

ほんの少しの変化でわかり辛いけど、表情がこころなしかションボリとしてるホムちゃん。

そんなホムちゃんに先生がフォローを入れている————けど、いまいちとりとめの無い感じになってしまっている————最中、私の中で、一旦頭の隅へと追いやっていたとある疑問が再び浮き上がってきた。

……どうして、あの時の『N/A』はまるで効果が無かったんだろう？

属性で言えば、『N/A』はさつき試した『フラム』と同じ「炎」属性。『フラム』は多少ではあってもダメージを与えることは一応できてたわけで……それなら、単純な火力で言えば数段上な『N/A』の爆発だって『終わりのもの』にダメージを与えられて当然のはず。でも、まるでダメージは無かった。

もしかして、何かしらの条件で今よりもっと堅くなって——それで、『N/A』は効いてなかったとか？ ……つて、もしそうだったら、かなり不味いよね……。

「私の鎧とか直接的な攻撃もイマイチ……残念だけどトトリやロロナさんの考えていたような「突破口」は無さそうね」

「まっ、今の戦闘でわかったけど、数の優位を上手く活かせば持久戦もなんとかやっていけそうじゃない。属性の弱点関係無しの根性比べでも、何とかなるんじゃないかしら？」

「ふえっ？」

ミミちゃんに続いて、不敵な笑みを浮かべつつ見解を述べたクーデリアさん。

……なんだけど、何故かフリーさんがその言葉に少し気の抜けてしまいそうなマヌケな声を漏らして、クーデリアさんを含めたほぼ皆の視線を集めた。もちろん、私もそっちへと目を向けてしまった……。

「……いやまあ、半分くらい騙して連れて来といたのは確かだけど、あなた、今このタイミングで帰れるって思ってたりの？」

「うえええう!? 別にっ、そんなことじゃ……あつ、でも、確かに帰りたい……つて、ちぢ違いますう! クーデリア先輩っ、今のはその、言葉のアヤでく!!」

「だ・か・ら! それでなんだっていうのよっ?」

ワタワタ慌てたりして結果何を言いたいのかハッキリしないフリーさんに、イラツとしたご様子のクーデリアさんが強く問い詰めて……そこで、私は強いプレッシャーを感じた!

この戦いで何度も体感してきたこの類のプレッシャー。だけど、今回はこれまでとはまた違う感じで……そうして予想した通り、目お向けた先には――

「っ! また別のドラゴンが……!」

――そう。現れたのは、羽毛を持ったドラゴンや炎のような体をしたドラゴンと同じ、二足歩行で腕が翼になっているシルエットタイプのドラゴン……ただし、二体と比べてその身体はやや細く華奢な印象を受け、何よりも額辺りから生える鋭い一本角

が特徴的だった。

雄たけびを上げるように、その一本角で空を刺すように大きく首をもたげたドラゴン。

すると、薄くではあるけど黒い靄に包まれていて少し暗くなっていた私たちの周辺がより一層暗くなった。

というより、段々暗くなつていつてる……ん? でも、まだ明るめな地面ほしよもチラホラ……つて、コレつて「暗くなつてる」っていうより「陰かげつてる」つて言ったほうが………陰………影………なんで?

ほんの一瞬でたどり着いた「なんで」という思考。それと同時に――ううん、反射的にだったし、もしかしたらそれよりも早かつたかもしれない。

そう、バツと空を見上げた。

岩。

人の大きさなんか悠々越えているまんまるな巨岩が、空高くから降り注いできてた。それも、1個2個じゃなくて——10個以上。

『メテオール』使われたモンスターって、こんな気持ちだったのかな？」

「んなこと言ってる場合かあつ！ 早く離れるわよ!!」

空から『☆を模したもの』や『うに』、果てには『ぷに』を降らせる道具『メテオール』。ふとそのことを思い出してたら、グイッと腕を強引に引っ張られ、そのまま半ば引きずられるように走り出すことになる。

ああつ、でも、ミミちゃんの判断が正しいみたいで、巨岩が降り注ぎそうな範囲は一本角のドラゴンの周囲十数メートルだけで、走って離れれば避けるのはそう難しくはなかったみたい。

と、その場から逃げる最中の私たちの耳に、クーデリアさんと、それとファイリーさんのちよつと荒い息遣いと共にその声がするりとうって来た。

「で、なんだったのよ、さっきの話は」

「ひい、ふう……！ だ、だからあ、まだ試していない属性が2つあるんじゃないかって思ってたえ……だから、ですね——ケホツケホツ……ううつ、明日、絶対筋肉痛だよお」

普段、受付のお仕事であんまり運動をしてい無さそうだけど、やっぱりここまで走りまわってきただけですいぶんと大変そうなファイリーさん。……って、他に2つ属性？

「ちよつ、ファイリーさんっ！ 属性って、4つですよ!! あと2つなんて……」

「えう、トトリちゃん？ で、でも、属性攻撃って6つなんじゃないの？」

ファイリーさんの言葉に「えっ？」って声が複数被って聞こえた。もちろん、私の口からも出てたけど……。

「あ、あれ？ あーつと、え、「火」、「水」、「地」、「風」……あと「光」と「闇」の6つじゃ？」

「ち、違った？」と周りの皆の様子を代わる代わる必死に見るように視線ををせわしなく動かすフィリーさんは……って、あれ？ 「火」？

「炎」じゃなくて？ 「土」だって……それに、「氷」や「雷」は？

あと、なんだか知らないのも……。

「あつー！」

「思い出した」と言わんばかりに声を零したのはリオネラさん。巨岩があと少しでドラゴンの周りの地面と激突するというところ、範囲から回避し終えてた私たちの視線は自然とリオネラさんの方へと向いた。

「ミス君が昔言ってたんだけど……『アーランド』と『シアレンス』前にいた場所じゃあ属性の概念？ が違うって。それで、ミス君が使う——私やフィリーちゃんが教えてもらった『魔法』攻撃も全部『シアレンス』そっのほうの属性だって話が……」

「それってつまり、『終わりのもの』敵もそっちの属性が基準で、弱点もそっちの属性であるかもってことですか？」

私がそう問いかけ終えたのとほぼ同時に、降り注ぐ巨岩が大地を揺らし轟音を立てて砕け散る。

リオネラさんの答えはその轟音でかき消されちゃったけど……少し迷うような表情をしつつも確かに頷いた様子からして、私の考えはとりあえず間違っって無さそう。でも、まだ推測の域を抜けないけど……。

でも、言われてみれば、ミスさんの使ってた『魔法』って私が錬金術で作ったことのない「風」や「光」、「闇」といった属性の『魔法』だったように思える。それに……今戦っている相手やドラゴンがやってくることも、『シアレンス』あっの属性にピッタリと当てはまっている。

そんなことも考えていると、岩が落ち終えてからリオネラさんのそ

ばに居るホロホロとアラニーヤが喋ったことは、また私を悩ませることには……。

「しっかしだな。これまでリオネラがけん制や誘導で撃ってきた『魔法』なんだけど、普通に「闇」とか「光」、「風」なんかの属性も撃つてて、それに『終わりのもの』も何回か当たったりしてんだよ」

「けど、思い返してみても、全く効かなかったことは無かったけど、特別ダメージ負ったりしてる様子も無かった気がするのよ。もちろん、『錬金術』で作った道具であればもっと効果があるかもって可能性は無きにしても非ずなんだけど……」

……そうアラニーヤは言うけど、つまりはそれってどっちにしろ難しいというかありえないくらいなんじゃあ……？

』

「っ！ といった所で相手が大人しく待ってくれるわけじゃないし……来るわよ！」

ミミちゃんがそう言った通り、いつの間にかその姿を消した一本角のドラゴンに代わり、『終わりのもの』がまたこっちに迫って来てた。

特に合図も無しに私たちは自然と解散して、それぞれが『終わりのもの』と良い距離を保つべく動き出した。

滑るように勢い良く突っ込んで来た『終わりのもの』。私たちが避けて開けたルートをそのままの勢いで進み、完全に通り過ぎた。しかし、止まっていきなり一瞬発光したと思ったそのすぐ後——ソコに『終わりのもの』はいなくなってた。

「えっ!？」と驚きの声を上げるよりも先に、視界の端に黒い霧が見えた。

私のそばではなく、少し離れた場所——もっと正確に言えば、その黒い霧のすぐそばには赤みがかかったピンクの帽子が見えていて……そう。ロロナ先生のすぐそばにいた。

いつの間に……!? いや、さっきの光ったので『瞬間移動』!? も

しかして、『N/A』が効果が無かったのも、属性の耐性とかじゃなくてそもそも当たって無かった……!?

それにもしあんな至近距離で攻撃を受けたら、下手したら一撃でなんてことも……!?

そんな考えが私の頭の中をグルグルと行き交いながらも、視線の先のスローモーションで見える光景は、何か『魔法』を撃ち出そうとするかのように先生へと向かって手のひらを突き出す体勢に入る『終わりのもの』。そして、カゴの中に手を突っ込んで道具を取り出すうとするロロナ先生。

「あっ」

ど、どうしたんだろう？　なんだか少し嫌な予感が……

「もう道具がパイしか残って無い……?」

先生っ!?

あれだけあったはずなのに、私とホムちゃんとの時、あの序盤でどれだけ浪費したんですか!?

そんなツッコミをしそうになっちゃうけど、そんな余裕はない。クーデリアさんや他の人も間に入ろうと動き出してはいたけど、なにせ完全に不意打ちとなった『瞬間移動』の直後。とても間に合いそうには……!!

「ロロナ先生っ!!」

その声が先生に届くどうか、そんな一瞬……淡いピンクの光が先生と『終わりのもの』弾け――

『オ!!』

「「「「えっ?」」」」

『終わりのもの』が弾かれるようにのけぞった。

って、先生は!?

尻餅をついてポケットとしている先生に急いで駆け寄って肩をゆすってみることに。

「ロロナ先生っ、大丈夫ですかっ!?!」

「え、あ、うん。大丈夫だよ? それで、今、何があったの?」

「なにがって、私にもさっぱりで……先生が何かしたんじゃない?」

そう聞いてみると、先生はコテンと首をかしげてしまう。

「爆弾が無くて、もうヤケクソだ〜! って『エンゼルフルハート』をドツカーツンと……」

確か、杖にちからを集めてから撃ち出し拡散させて広範囲を攻撃する技で……あのピンクの光は『終わりのもの』の攻撃じゃなくて、先生の『エンゼルフルハート』だったんだ……。普段の冒険じゃあ、先生もアイテムばかり使ってるからあんまり馴染が無かったけど、あんな感じの攻撃だったよね。うっかり忘れて……。

「無事でよかったけど、どうしてロロナの『エンゼルフルハート』がそこまでダメージになってるの?」

「たしかに、マスターの『エンゼルフルハート』は物理的なダメージのみだったはず。……仮に、見た目的にあちらの世界の『属性』の「光」として敵側に認識されていたとしても、そもそも「光」は『終わりのもの』の特別聞いたわけではなかったのでは……?」

私に続いて駆け寄ってきたクーデリアさんとホムちゃんが、私もうつすらと感じていた疑問を口にした。

その通りなんだよね、一体何でなんだろう……?」

「あつ」

揃って声を上げたフィリーさんとリオネラさん。「まさか、また何か忘れてたことが……？」と二人の声がした方へ眼を向けるのとほぼ同時に、その信じがたい言葉は聞こえた……………

「愛属性」

あい……「愛」？

ロロナ【*12*】

【*12*】

街道のはずれ

「愛属性」

りおちゃんとフリーちゃんと言った言葉に、私は固まって……うん、私以外にも固まってしまった……

「……こんな時に、何の冗談よ？」

くーちゃんだけが、そうツツコミを入れてた。まあ、くーちゃんの言う通りなんだけど……

「先輩っ!! 私たち、ふざけてたりしてないですからあ〜!」

「ええっ……」

疑うような目で見るくーちゃんにフリーちゃんはタジタジで、ここにおちやんたちが助け舟を出してあげた。

「そ、その、さつきフリーちゃんが言った6属性以外にも、実は「愛」と何の属性でもない「無」があつて……。属性を付与してない武器の攻撃は「無」だと思うけど、それが特別『終わりのもの』に効いてるわけじゃなかったから……」

「だから、さつきのロロナの攻撃は消去法で「愛」属性だろうってわけだ」

「一応、リオネラたちがマイスくんの子に教えてもらった『魔法』の中には「無」属性は無くて「愛」属性はあるけど、その、ちよつと……ねえ?」

……???

りおちゃんの言葉を補足するように付け加えたほろくんとらにやちやんだけど、なんだからにやちゃんの歯切れが悪い気が……? ど
うかしたんだろう?

放心しかけてたトトリちゃんたちも復帰もどってきたしたみたいで、その内のミちちゃんが一回かわいらしく咳払いをしてから「それで」って話し出す。

「その「愛」属性とやらが『終わりのもの』の弱点で、その属性『魔法』もあるなら、ロロナさんと『魔法』を使えるを他が援護サポートに回るって体制でいいのかしら？」

「じ、実はあく……愛属性魔法はもう使っててツカエナイというか……ひいっ!? ミミ様っ、そそそんな睨まないでください!!」
「ミミちゃん、落ち着いてっ。……でも、ファイリーさん。使ってたのに使えないって、どうい……う……ああっ!! も、もしかして……！」

トトリちゃんが途中でそのことに気付いたのか、目を見開いて声を張り上げた。

……そんな姿を見たファイリーちゃんが申し訳なさそうに——りおちゃんが苦笑いをして頷いたのを見て私も確信してしまい、必要無いかもしれないけど万が一外れてる可能性を考えて、一応聞いてみる。

「もしかしなくても、ファイリーちゃんが使ってくれた回復魔法が愛属性？」

「はい。」

「実は攻撃用の魔法は無くって……」

二人の言葉を聞いて、私はひとり心の中で「やっぱりかあ」と呟く。
隣にいたほむちゃんは「愛情は傷を癒すと聞いたことがあります
が、事実でしたか」って納得したように頷いてるけど、それ、違うと思うよ？

「むしろ、何でロロナオロナの「愛」属性なんだ？」

「そうねえ、『エンゼルフルハート』って名前だけはそれっぽいけど、何か心当たりは？」

「ううっ……それを聞かれても、よくわかんないとか……」

『エンゼルフルハート』にそんな力があつたなんて初めて知ったし、

「愛」属性なんてのも全然知らなかったわけで、そんな聞かれても何にもわかんないから教えようが無いんだよね……。

そもそも、ミス君から属性のことなんて聞いたことはまるでなかった。『魔法』についても『学校』の話をしてた時にポロッと聞いて、それから大々的にミス君がお祭りで公開したあの時によくやくちゃんを見たわけで……うーん、むしろりおちゃんのチカラのほうが私の中じゃあ魔法って感じだもんなあ。

でも、何か忘れてるような……？　ぞくせーまほー……ううん、なんか違う。もつとこう、『錬金術』関係……でもなくて……愛……それはもつと違う。

……なんとういか、こう、もつと最近も耳にしてて……属性……

——言えば「属性」という方向性を持った——

あれ？　ミス君が『農業』のこと以外でそんな真面目な感じで喋ってる時なんてあったっけ？

って、だから、まずミス君から『魔法』とか『属性』のことを聞いた憶え自体無いんだって！　……ん？　それじゃあ、誰誰かが言聞いたんだろ？

「つまり、必死こいて探った『終わりのもの』の弱点は口口ナしかつけそうにないってこと」

くーちゃん……じゃないなあ。さっきの感じからして『属性』のことも知らないっぽかったから違うはず。

「それは……あつ！　ええつと一か八かで回復魔法、『終わりのもの』にかけてみますう……？」

フィリーちゃん……も違う気がする。『魔法』や『属性』のことはきつとわたしよりももつと知ってるだろうけど、そんな話、今の今までしたことなかったし……。

「それで『終わりのもの』が回復でもしちやったら本末転倒じゃない」
もつともなことを言ってるミミちゃん……は、『シアレンス』のことは
マイス君から色々聞いたことがあるらしいけど、『属性』とかのことは
……どうなんだろう？ ミミちゃんがそう言う話をしてるところは
記憶に無いなあ。

「でも、他の属性も効果が無いわけじゃないですし、みんなでやればな
んとかかりますよ！」

胸の前で手をぎゅつとしてるトトリちゃん……も、私とあんまりか
わんないくらい知らないっぽかったから、違うよね。『錬金術』のこと
ならそれなりに真面目に話したりはしてるんだけど……

「マア、最初のころとは違って大体対応はできるようになってきてっ
からな」

「そうねえ。瞬間移動に気を付けさえすれば人数と手数 of 優位で何と
か押し込めるんじゃないかしら？」

「う、うん、絶対大丈夫っ！ がんばろう！」

気合を入れてるりおちゃんたち……が一番『魔法』について知って
るはずだけど、もし何かわかることがあるなら既に言ってるだけど
……愛属性みたいに何かうっかり忘れてたり？ ないかな？

「マスター、先程からうんうん唸ってますが、どうかしたんですか？

どこか怪我でも……？」

そう言い心配そうな表情をして、少し見上げるように私の顔を覗き
こんでくるほむちゃ……

「……………あつ」

——簡単に言えば「属性」という方向性を持った「凝縮され結
晶化した『ルーン』——

「？ ホムの顔に何か付いて——」

「ああー！ それだー！ーっ！！」

『……………』

私があのことかを思い出して、ついホムちゃんを指差しながら声をあげちゃったのとはほぼ同時に、何故か『終わりのもの』がいつものよくわからない鳴き声をあげて動き出しちゃった。

「ちよつ、なによ口口ナつ！ アレと一緒に叫んだりして……まさかとはおもうけど、意思疎通でもしてみようとしたの？」

「くーちゃん!? ち、違うよ！ これは偶々でほむちゃんが……って、うわあっ!!」

私たちの間を『終わりのもの』が通り過ぎて……!!

んんっ? 通り過ぎた軌跡にゆっくり点滅してる光の球が三つほどフワフワとゆっくり飛んで……こんなちよつと前にも見たことがあるような……?

ああ、そうそう、あれはホント最初のころ、結局はりおちゃんたちが防いでくれたあの大爆発、それをおこしたやつだ……ちよつと小さくなってる気がするけど。

はれ? 爆発?

「ひやああつ〜!」

跳ぶようにその場から離れたそのすぐ後に、爆発が三つ立て続けに起こった。その規模はあの時の大爆発ほどじゃなくて、一つ一つは一人分くらいの大きさだった。

けど、すごく痛そうなのは相変わらずで、危うくあれに巻き込まれそうだったって考えるとちよつと冷や汗が……って、それより今はっ!

「ああ、いたっ!! トトリちゃん! ミミちゃんの!」

「えっ」

『終わりのもの』の攻撃をよけながら見つけたトトリちゃんに声をかけたなら、驚いてるようなわけわかんないような表情をしてコツチに振り向いた。

って、今のは急いでた私の口から出た言葉が悪かったよね。一旦、落ち着いて……

「ええつと違うくて、トトリちゃんアレツ！ ミミちゃんから預かったあの袋貸して！」

「え、あ、はいっ。それはいいですけど……？」

「どうしたんだろう？」って顔をしながらもポーチからガサゴソ取り出して、例の袋を渡してくれたトトリちゃん。ミミちゃんのほうも「ああ、そういう話ね」って納得(?)したみたいで『終わりのもの』の相手にすぐに戻ってった。

「先生、いきなりどうしたんですか!? 袋の中身は『ゲート』発生のために必要な『ルーン』のもとで、ミミちゃんたちが集めてきてくれて……なんで今？」

「うん、そうなんだけどね。もしかしたら……『終わりのもの』をやっつけられるかもしれないの！」

「ええっ!? それはまあ、ある意味ではエネルギーの塊ですし、それを上手く攻撃に転用できればダメージを与えられるかもしれませんが……! でも、それでも今からってというのは難しくないですか？」

『ゲート』発生装置を調合した時にわかつたんですけど、そもそもその『属性結晶』はエネルギーに変換するのには手間が……あれ？」

『属性結晶』……ぞくせい?」

言ってることはその通りなんだけど……でも、トトリちゃんも気づいたみたいだ。

そして、じれったくなって、袋を逆さまにしてバサツと中身をぶちまけた私は今、それらを見つけた。5, 6個目に付く、お目当ての形をしたそれを。

「あった！ ハート型の結晶!!」

「ロロナ先生っ！ も、もしかして、コレが『愛属性』の『結晶』なんですか!?! そうなんですね！」

そう。トトリちゃんが言うように、『ハート型の結晶』が『愛属性』のはず！ というのも……

「思い出してみれば、『属性結晶』ってほむちゃんが『ルーン』の集め方を教えてくれた時に言ってた呼び名で、『ルーン』の結晶に『属性』っ

ともそれこそ『魔法』みたいにブワーツと飛んでく感じで？ 一体何がいいんだろう？

「話は聞かせてもらいました。ホムのことを指差してから騒ぎ出したかと思えば、そういうことだったのですね、マスター。では、急いでアトリエに戻って調査を……そういえば『トラベルゲート』は……？」
「えっと、冒険じゃなかったし遠くまで行く予定じゃなかったから持って来てなくて……」

「では徒歩になってしまいますが……それだと、むしろ『青の農村』のほうが近いですね。おにいちゃんの家にも錬金釜がありますし、素材も『愛属性の結晶』はここにありますしおにいちゃんの家なら大抵揃うでしょうし、そちらへ行つたほうが早いでしょう」

「そうですねっ。『終わりのもの』の相手にも慣れてきましたし、人数的にも余裕はできてるから私たちが何とか対応して、その間にロロナ先生にいそいで調査してきてもらえば……！」

トトリちゃんが言うように、今、こうして三人が少し離れて援護が減っている状態。危ない状況は全く無いとは言いきれないけど、それでも『終わりのもの』何とかできてるように見える。なら、私一人がいなくらいならまだまだ余裕はあるはず。

確かに、その通りなんだけど……

「ううん、調合ならここでできるから、チャチャツとやっちゃおうよ！」
「……………」

「あー、それは知ってますけど……大丈夫ですか、先生？」

眉間にムギユツとシワを寄せて首をコテンツツとかわいくかしげるホムちゃんと、「え〜」って感じに嫌そうな表情をするトトリちゃん。そんな心配しなくていいのに……

「大丈夫だいじょーぶ！ だから、二人はみんなを手伝ってあげて」
「マスターがそう言うのなら……。代わりにと言ってはなんですが、この子たちちむを手伝い兼護衛につけておきます」

ほむちゃんがそう言うのと、どこからかトテトテと駆け寄ってきたちむちゃんたち。竜巻で遠くまで飛ばされてた子も戻ってきてたのか、

いつの間にか4人になって「「ちむっ!」「」って仲良く掛け声をあげてた。

「わかりました。それじゃあお願いしますね先生! ……………なんだか、そこはかとなくイヤな予感がしますけど」

最後にポツリと呟いてから駆け出すトトリちゃん。ほむちゃんもその後をについて行った……。

トトリちゃん、なんでそんなに心配しちゃうんだろう?

「なにはともあれ、手早くつくつちやつてあんな奴倒しちやおー!」

「「ちむっ!」「」」

カゴなんかよりも何倍も大きい錬金釜(冒険の時用)をヒョイツと取り出す。

初めてやつてみせた時トトリちゃんはすつごく驚いてたけど、今のトトリちゃんならこのくらい簡単にできる……はず。じゃないと冒険に持って行けない道具アイテムつてけっこうあるし……

「それじゃ、いっくよー! 『愛属性の結晶』投・入!!」

『愛属性の結晶』を6個バラバラつと錬金釜へと頼り込む。

ここからこうしてぐるぐるとかき混ぜて……そうしたら凝縮してひとまとめに……そうしたら純粋な『愛属性』の塊になる。そこに道具アイテムとして使う為がいい感じに色々と付け足して……

「…………ちむ?」クンクン

「ちむむっ!」

「ちくむく…………クウく

「……………」ヨダレダラー

「ふえっ? どうかした……………ああ、なんだかい匂い♥。まるで『パイ』が焼けてくような甘くて香ばしい……………ん? 『パイ』?」

この匂いがしてるのは、間違い無く今私がかき混ぜてる錬金釜から…………。

あれ? 『パイ』の材料なんて入れてないよね? 色々『パイ』にし

ちやつたことはあるけど、今は別にお腹減ってないし、誰かと一緒に
かき混ぜてないし……そもそも今回は『パイ』にしよう!」だなんて
全く思ってたよ!?」

気のせいだって自分に言い聞かせて思いつきぐるぐる混ぜ
続けられ、ほらっ——甘くて香ばしい香りが強くなっていつて
……

「で、でつきたー! ハート型のパイ、名付けて『愛のパイ』……
どうしてこうなったの?」

よくよく考えてみれば、基本的に冒険中に調査したことあるのって
『パイ』だけで、他の道具は手持ちのやつだけで大抵何とかなってたし
……正直に言うと、冒険の最中に、採取したのを見て「あつ、これ『パ
イ』にしたらしい感じかも!」って思ったらぽーいつて入れてぐるぐ
るして……あ、うん、今さっきのと大体同じ流れだね。

きつとトトリちゃんもわたしが冒険先で『パイ』しか調査してない
ことを思い出して、心配してたんだね……今になってようやくわかっ
た気がする。

ていうか、手元にあった『愛属性の結晶』全部がひとまとめになっ
て『パイ』になっちゃった……ど、どうしよう?」

「ちむー!!」

「ちつむちつむ!」

「……! ……!」

「ちいゝむうっ!」

でも、ちむちゃんたちには大人気。「ちようだい!ちようだい!」つ
て跳んでアピールしたり、わたしの脚をよじ登って来たり、もの凄い
真つ直ぐな眼をして無言で訴えてきたり、何故か踊り回ったり
……その視線はわたしじゃなくて、わたしの手にある『愛のパイ』
にしか向いてないんだけどね。

「かわいい……って、そうじゃなくって、『愛のパイ』はあげられない
んだよ!? これは『終わりのもの』を倒すための最終兵器で……!」

「「ちむむ?」」

——『パイ』が?

そう言われた気がしたけど……気のせい、だよな?

「でも、確かに『パイ』だもんね。回復魔法じゃないけど、逆に敵が回復しちゃうような……うわあ!! スカートひっぱって……いや登らないで——つて他の子もく!」

最初に登ってきてた子に続けとばかりに他の3人も……! こ、こそばゆいし、独りならまだしも計4人となるとさすがに重さが……それも、段々と上のほうへくるとなのおことでえ!

なんとか踏ん張るけど、もう一番最初の子が腰を通過、そして次々に上半身をマントとかを掴んで登って……

「だからーダメだってばー!」

もう時間の問題な気もするけど、なんとか『愛のパイ』をちむちやんたちに盗られないように、腕を伸ばして頭の上にあげて少しでも届かないように——

——ピカツ!!

「へっ?」

何か光った——そう、まだ薄つすらと黒い靄が辺りに散ってる目の前の景色が一瞬だけ全部薄い桃色に塗りつぶされるくらいの光がパツと。それと同時に、わたしの手から『愛のパイ』の感触が消えた。いきなりのことに、反射的に頭上へと目をやって……やっぱ何も持っていない自分の手が見える——だけじゃなかった。

「黒い、ハート?」

あれ? ……ああそっか、黒い靄で……その隙間から見える色は茶色っぽくて……でも、ちょっと真上からはズレてるけど、アレはわたしの頭上のはるか上空にあるから、今見えてる部分は陰ってるはず。となると、あれはもつと黒さは無いはずで、きつとこげ茶色とい

うかそんな色なんじゃ……………まるで、こんがりと焼き上がった――

——ん？ 形といい色といい、なんだかとっても見覚えがある
ような……………？

……………そんな風現実逃避してに考えてる間に黒いハート——もとい何故か大きくなつて空から降つてきてる『愛のパイ』は、どんだん地表へと近づいて……………その影を、みんなと『終わりのもの』が戦つてる場所へと落した。そして――

——ベチヨン

原型は全然残つてるんだけど、なんだか妙みよに生々しい「パイの落ちた音」がして、『終わりのもの』という敵も含め、わたしとちむちゃんたち以外のこの場にいた全員が巨大な『愛のパイ』の下敷きになつた……………。

「あ、あははは……………も、もしかして、これ、わたしが悪いのかな……………？」
わざとじゃないけど……………でも……………

そう思つて、わたしにまとわりついてるちむちゃんたちに聞いてみた。

けど、ちむちゃんたちは落ちてきた巨大な『愛のパイ』に放心して
るみたい……………ああつ、違う。みんなヨダレたらしてる。おつきなパイ
に目を奪われてるだけだ、これ！ そんなに食べたいのかな？ 確か
にいい匂いはするし、ちよつと気になるし、やっぱり大きいってだけ
でなんだか特別感があつて……………。

「ロ〜ロ〜ナ〜？」

聞き覚えのあり過ぎる、ちよつと怒つた感じのクーちゃんの声に、

わたしは巨大なパイへと向いていた意識が引き戻された。

くーちゃんは、その巨大なパイから這い出してきて……ちよつとべとべとしたのが顔や身体中についたままこつちに……ああっ！ 入れ替わるように、わたしから離れたちむちやんたちが巨大なパイへと一直線に!! って、くーちゃん以外の皆もゆつくりとだけど出てきて……

「昔、あんたに『パイ』をぶつけられたことがあったんだけど……まさか今になってここまでのことをしてくるなんてねえ?」

確かに昔、まだ王国からの課題をこなしてたころ、『メテオール』をつかつたパイ・『パイメテオール』をつくつた時に、その効果でたまたまアトリエの近くを歩いていたくーちゃんに『パイ』が降ってきたことが……! ううつ、みんなのことも気になるけど、目の前まで来たパイまみれのくーちゃんの声から感じる怒気がすごい……!

口元は笑ってるけど、目は瞑ってるし、こめかみはピクピク動いてるしで……絶対もの凄く怒ってるよ!!

「あ、あの『パイメテオール』の時の……あれもわざとじゃなかったんだけど、今回もちよつとその、わたしにもわけわかんないことになって……! ご、ごめんね!? 顔だけでもすぐに拭くからっ!」

ハンカチを取り出して、一番影響があると思う目元から拭き取ってそのままほつぺたのほうも――

「んっ……」

「ううつ、洗い流せたらそれが一番良いんだけど……そうだ!

『終わりのもの』がまた魚みたいなのドラゴンを呼んだら、あの水で洗い流せるんじゃない? って、ああ!! 今、まだ戦闘中つ敵はどこに……!」

くーちゃんも普通に無事なことを考えたら、やっぱり『愛のパイ』に攻撃力なんてものはないって『終わりのもの』も無傷で――

「ちよつと!!」

トトリちゃんやりおちゃんたちが這い出てきた巨大な『愛のパイ』の方が危ないかもしれない! そう思って、そつちへ行こうとしたら、ハンカチを持ってた手をくーちゃんに捕まれて引き戻され……!?

「ま、まだ顔にクリームが付いてるんだけどっ？」

「あうごめっ………くーちゃん？ もう付いてないみたいだけど……っ。」

「えっ………そ、そう………なら、あと髪だけでも……」

「う………してあげたいけど、『終わりあのものい』がどこにいるかもわからないし。ごめんね、後でいいかなくーちゃん」

そう言ったらくーちゃんはシユンとしちゃって………くーちゃんが？

「………もうちよつとかまってくれたっていいじゃない。だって、マイスが戻ってきたらコンナコトできないもの」

「へっ?」

「あたしだってマイスには戻ってきてほしいわよ？ でも、少し前からあんたとマイスって周りが二の次になるくらい意識し合ったりベツタリしてたでしょ？ そしたら、あたしとは自然と一緒にいる時間は少なくなつて………寂しかったのよ?」

「どうしたの、くーちゃん!?!」

くく、くーちゃんが何か変になつてる……!?

まさか、パイで頭を打つて変に………「パイで頭を打つ」ってなんか凄く変な気がするけど………とにかくなんだかおかしいよ!?

「マスター」

「ほむちゃん、いいところ………あと、『パイ』はごめんね! それで、その、なんだかくーちゃんが変になつちゃつて………!」

「それはおそらくあの空から降つてきた『パイ』が原因でしょう。ホムも『パイ』が口に入ってからというもの心拍数が上昇し、マスターを見ているとなんというかこうホワホワする感じがします。過去にマスターが作った変わり種の『パイ』たちと同じく、食すことによつて特有の効果が発揮されるようです」

ううっ!?! 薄々そんな気はしてたけど、やっぱり『愛あのパイ』のせいで………?

というか、ほむちゃんが気付いてるかは微妙だけど、ほむちゃんた

ちの口に入る前に光って飛んで大きくなってっという過程が実はあつて……あれ？　そういえば、ほむちゃんってばさつき「ホムも」って言ってたけど、ほむちゃん自身はそこまで変化が無いような……つて、そうじゃなくて！　よくよく考えてみたらクーちゃんやほむちゃん以外の人も——

「——もしかして、『終わりのもの』も?!　アレも今のクーちゃんみたいに……そ、それってどうしたら?!」

「ちよつとロロナあ、なに騒いでんの？　ていうか、あたしの話、ちゃんと聞いている?」

「クーちゃん、今それどころじゃあ……!」

もし『終わりのもの』が『愛のパイ』を口にしてなかったら、いつどこから襲ってきてもおかしくないしこんなノンビリ話してる場合じゃあ……!　で、でも『愛のパイ』を食べちゃってたら食べちゃつてたで、襲つてこなくなるかもしれないのはいいけどどうやって接すれば……!?

「心配には及びません。『終わりのもの』についてですが……『パイ』に潰されてる最中に爆発し弾け飛ぶのを目撃しました。そして、ついさきほど辺り一帯を確認しましたが姿は見えませんでした。一帯に蔓延してた黒い霧ももうありませんので、倒せたと判断して問題無いでしょう」

「ああ、そうなんだ……よかったー」

言われてみれば、いつの間にもやら周囲に散つた黒い霧は消えてしまつて、空から降り注ぐ太陽の光がちゃんと地表までとどいてる。

まさか『パイ』で倒せるなんて……でも、あの『愛のパイ』は『愛属性の結晶』でつくつたんだから、本当に愛属性が弱点だったなら『終わりのもの』にとつては凶器だったのかな?　というか、爆発して弾け飛ぶつて一体何が……?」

「ロロナ先生……!」

む、この声はトトリちゃん!

見れば、ベトベトに汚れちゃつてるトトリちゃんとミミちゃんが肩

を落としてヨタヨタと歩いてきた。

「トトリちゃん！ ミミちゃん！ 大丈夫？ 変になってない？」

『愛のパイ』食べちゃってない!？」

「いえ、食べてませんよ。先生が「今から調査する」とか言ってた時点で、なんとなくイヤな予感はしてましたから……やっぱり何かあったんですか？」

「ええつと……コロナさん、アレ、食べちゃったら何かまずかったんですか？ 私、出てくる最中に口に入ったの飲み込んだんですけど……」

不安そうに効いてくるミミちゃん。

……だけど、あれ？ あんまり変わってないというか、ほむちゃん以上にどうもなまってない……もしかして、効果が発揮されてない？ なんで？ いやっその、そもそも発動してほしいような効果じゃないっぽいんだけどね？

「今現在判明している効力は、ホムが確認できてる範囲では、外傷・疲労の回復、治癒能力の一時的な向上……さらには、原理は不明ですが心拍数の増加、思考能力の極端化、マスターへの意識集中などが挙げられます。どうやら個人差があるようですが——」

わたしに変わって説明してくれてるホムちゃんが「例えば……」と言って視線を動かし、それにつられるようにして、わたしやトトリちゃん、ミミちゃんもソツチを見た。

「別に、コロナとミスがくっついたのが嫌だとか、そういうわけじゃないわよっ!? どの誰ともわかんない奴よりも、昔から知ってるあいつのほうが全然信用できるし、いい奴だっことはわかってる。けど………ハアツ!? あたし、今なにか言っ……って、ファイリー何してんのよ?」

「先輩! 助けてくださいっ! リオネラちゃんが今頃またぶりかえしたのか、変になっちゃってますぅ~!」

「将来、コロナちゃんが私のお義母さんになっちゃうんじゃないか、今から私がコロナちゃんの義娘になれば……それならコロナちゃんか

らミスくんをとらなくていいし、ミスくんから口口ナちゃんをとらなくてもよくなって……はははあ」

「——と、このように、マスターへの元々の好感度が高い人物ほど効果の影響を強く受けるようです」

「そ、そうなの……？ あれ？」

そもそも食べてないトトリちゃんやトトリちゃん繋がりでの関係が主なミミちゃんはともかくとしても、ほむちゃんに効果がそんなにさそうなのはどうして？

え、あれ？ ま、まさか……！ 実はほむちゃんってわたしのことそんなに好きじゃないの!?

はうわあ!?! な、なんだかトトリちゃんたちからの視線が……！
「とりあえず、先生の愛の形が『パイ』で、先生の愛が人を狂わせるってことはわかりました、ハイ」

「幻覚作用があるって言ったほうがマシな気が……ミスさんも大外規格外人だけど、この人にミスさんを任せて大丈夫なのかしら？
でも、私が口出しするようなことじゃ……」

うぐつ!?! トトリちゃん、そんな目で見ないでく！ というか、ミミちゃんはそんなとこまで心配してるの!?!

そんな時、袖をクイクイツと引つ張る手が……

「マスター」

「ふえつ……ほむちゃん、なぐさめて——」

「そんなことより、あちらを。甘い匂いに釣られて寄ってきたモンスターたちが、『愛の^例パイ』を食べはじめてます」
「えっ」

そう言われて巨大なパイのほうに目をやると、ほむちゃんが言うように、ちむちゃんたち以外に『ウォルフ』や『ぷに』、『たるリス』などといったモンスターたちがたくさん群がってた。その内の数匹は青い布を身に着けた『青の農村』の子たちだった……逆に言えば、その数匹以外は完全に野良のモンスターたち。

……これ、もしも効力が発揮されたらどうなるんだろう？

トトリ「積み上げてきたもの」

青の農村

実験とか色々あった日から数日経ったある日の朝。

私はロロナ先生やクーデリアさんたちと、『青の農村』にあるマイスさんの家の裏手……マイスさんが消えた地点だとされる場所から少しだけズレた場所で『ゲート発生装置』をいじってた。

そんな私の背中に、聞き慣れた声がかげられた。

「おーい、トトリ。例の宝石、集めてきたぜ」

「宝石じゃなくて結晶だつての。よっ……と！ 結構集まったわね。まっ、大陸中掛け周ったんだから、むしろこんくらいあつて当然かしら？」

振り向いてみれば、『ぷに』くらいの大きさの袋を持って走ってくるジーノくんと、その後ろで倍くらいの大きさの袋を肩にかけて背負ってるメルおねえちゃんが。

そのまた後ろには、袋を背負ったステルクさんがいて、並ぶようにフリーーさんのお姉さんのエステイさんと、アーランドの元国王さまのジオさんも来てた。

まず先に、私のそばまで来て袋を差し出してきたジーノくんとメルおねえちゃんに、受け取りながらお礼を言う。

「ジーノくんもメルおねえちゃんも、ありがとうっ！ 大事に使うね」
続いて来たステルクさんたちからは、ホムちゃんと「実験中にまたあんなことがあったらあれだから」って護衛としてそばに居てくれたミミちゃんが、代わりに受け取ってお礼を言つて……そのそばで、私たちの様子を見渡したジオさんが自分のあご髭を指で触れながら喋りだした。

「フムツ。『青の農村』に来ているとは、どうやら調査は一段落したのかね？」

「あつ、じおさん。そうですね、『ゲート』の発生装置や反転させるための道具アイテム、それに探索に必要なものも一通り調査し終えて……今

は、細かい調整や改良の余地が無いか模索してるところです」

ジオさんがいることに今の今まで気がついてなかった様子の先生が頷いてから応えると、腰を曲げて前のめりになったエステイさんが装置を覗き込みながら「それじゃあ」と言葉を続ける。

「そろそろ、その『はじまりの森』ってところに行けそうなのかしら？」
きつと、エステイさん的には何気ない、当初の計画的に考えても順序通りの普通の問いかけ……だったんだろうけど、私や先生を含め、フィリーさんやリオネラさんたち、前からここに来てた人たちの間で、何とも言えない空気が漂っちゃった。

一旦作業の手を止めた先生が、ちよつと視線を泳がせながら、申し訳なさそうに話し出した。

「えつと、行けなくはないんですけど、実は少し問題があつて」

「問題？ 何か足りないものでもあつたのか？」

「足りないと言えば足りません……けど、根本的にはそれ以前の話題って言うか……」

ステルクさんからの問いかけに、言いよどむ先生。

「まあ、ようするに思った以上に『属性結晶』が……『ルーン』が必要だったってこと」

「どういうこと？」と首をかしげるステルクさんたちに対してまず口火を切ったのはクーデリアさん。続いて、リオネラさんたちが説明を付け加える。

「ちよつと詳しく言やあ、発生させた『ゲート』が自然野良のよりゼンゼン安定してねえってこつたな」

「そのせいで一定割合はグルグル巡るはずの『ルーン』の大半が空気中に霧散しちゃって、すぐ装置の中の『ルーン』が空っぽになるのよ」
「自然に発生してる『ゲート』はそんなことならないから、きつと何か状況が違つてて条件が合えばそんなに『ルーン』を消費することも無くなる……はず、なんです……」

「発生装置のほうの調整もしてみてはいるんですけど、全然うまくいなくて……もしかすると、もつと根本的に変えなきゃいけないとこ

ろがあるのかも……」

最後に、『ゲート発生装置』を調査し調整も主にやってる私が、現状について本当にちよつとだけだけど、簡単に付け加えた。

もちろん、「行くための道具」^{アイテム}以外の「行ってからのための道具」^{アイテム}もとりあえず全部調査し終えてる今は、ロロナ先生も調整のほうを手伝ってくれてるんだけど……それでも変化はちよつとだけで、こう進展と言った進展はないまま。もういつそのこと、装置そのものを新しいものを調査しようかとも考えもしたけど、実行はしてない。素材コストとかそういうの以前に、今のヤツ以上の構造を考えつかないっていうのが理由だったりする。

一通り話を聞いて一つ領いたジオさんが、「それで」と話の続きをうながす。

「あとどれくらい『属性結晶』が必要そうなのかね？」

「えっと、継続させる時間……『はじまりの森』に行ってから帰ってくるまでのこととか考えたら、今の10倍くらいはないと不安かな」と

ロロナ先生の言葉に、そのことをすでに知ってた皆も含めた多くの人が息を飲んだ。先生が「余裕を持って考えればですよっ!？」と付け加えたけど、それでも対して変わらない気が……。

でも、先生が言ってる「今の10倍は欲しい」って話も一応事実ではあるんだよね。

少し話はズレちゃうけど、そもそも、こつちから『はじまりの森』へと『ゲート』^道を開くと何処へ繋がるかは分からなくて、現時点では「マイスさんが消えた地点」^{ばしょ}で開けば、ほぼ同じところに繋がるはず。っていう仮説をもとにしてる状態。方法が他に思い浮かばないから仕方ないけど、マイスさんを探すにあたって不安が無いわけじゃない。けど、それ以上に問題なのは、ロロナ先生がちよつと言ってたけど帰りのこと。

ソレに対しては不安要素しかない。一番手っ取り早いのは発生装

置と反転道具をもう1セット調合すること……だけど、『アーランド』で調合した『ゲート発生装置』が『はじまりの森』で使えるかわからないっていう問題点。「じゃあ、行くために反転させた『ゲート』を元に戻して維持すれば？」って話になって……そこで、さっきの『属性結晶』が今の10倍欲しいって話に戻ってくるわけ。

……でも、この「10倍」もいろんな意味で信用できないというか、不確かなものだからなあ。

というのも、フリーさんが『冒険者ギルド』内を探し周って見つけた、ミスさんが書いた『ゲート』及びそれに関係する内容の報告書』によつて、色々わからないってことがわかったから。ミスさんがいた世界でも『ゲート』は謎が多いらしく、特に発生メカニズムなんかについては全くと言つていいほど解明されてないみたいで記述はほとんど無かったそう。

一応、他の国では『ゲート』を『アーランド』で言う『機械』によく似た『キカイ』つていうモノによつて発生させることが出来る……らしいが、報告書を書いたミスさんも又聞きでしか知らないように、詳しくは書かれてなかったらしい。

もちろん、ミスさんの事を諦めるわけにはいかないけど、今よりも何倍もの量を集めるといふ時間や労力と言つた現実的な問題が少なからず湧いてくる状況に「どうしたものか……」といった空気が流れ出す……けど——

「おーしー、それじゃあ、もつと集めてくるな！」

——ジーンくんはいつも通りだった。

そんな単純で一直線な思考回路に、呆れつつもどこか安心しちやつて……ちよつとだけ羨ましい気も……けど、ねえ？ さすがに、そういうわけにもいかない。

当然のように他の人達も各々驚いてたり、呆れてたり——一部、それもそうだと言わんばかりに頷いてるけど——私と似たような反応をしていた。

その内のメルおねえちゃんが、ちよつと驚きながら——それ以上に

呆れながら——ジーノくんに詰め寄ってく。

「ちよつと!?! 話聞いてたの? 第一、今集めてきたのだから結構時間かかったのよ?」

「? だから、もつと強い奴ら倒しまくって、ついでに『ゲート』を壊しまくって集めてきたらいいんだろ?」

目的とオマケが逆になっちゃってるような……? まあ、ジーノくんなら仕方ないよね。

「しかし、破壊した『ゲート』が何時再発生するかもわからず、闇雲に探すのも限度がある。目印となっていた例の『新種のモンスター』の目撃情報ももうほとんど周りきつたとなると、なおのことか」

「だからって、みんなが集まってここでウダウダ言っても仕方ないのも確か。……ジーノの意見に乗る形になるのが、なんかちよつと癪^{しゃく}だけ」

ステルクさんとミミちゃん、二人が言ってることはどっちも間違っていない。間違っていないけど……。

やっぱり、ここは根本的な解決策が必要なんだと思う。だから私たちが『ルーン』が霧散しちゃう問題を解決して『ゲート発生装置』を改良しないと……!

でも、何をどうしたら? そもそも、ルーンをその場に留めるって言うっても、閉じ込めるわけにも……発生のために流動させてる時点で壁とかで困っても効果は薄くなるから、そこから変えていけば? ううん、でも結局は使うための空間が必要で、そこから流れ出しちゃう……どうすれば……下手に留めようとしたら何故か結晶化させちゃう、とかささせちゃうし。そうだったら『ルーン』の流れそのものが止まってどうしようもなくなる……。

せめて、『ルーン』のことがもつと解れば……。

リオネラさんが調べてくれた分では、ミスさんお得意の農業関連や『魔法』の使用に関わる感覚的な部分で、『ルーン』そのものやその性質・運用などといった研究や理論部分はほとんど無かったらしくて……それらの実戦・実技的には十分役に立つんだろうけど、今私たち

がやろうとしているような他の事への応用は考えられて無くて、イマイチな内容だった。

一から自分たちで『ルーン』の研究をしようにも、どう考えても時間が沢山必要で……。結局はみんなに『属性結晶』を集めてもらうのとほとんど変わらない——どころか、研究が上手く進む保証も無い事を考えたら、『属性結晶』集めを優先したほうが確実な気さえしてくる。

ミミちゃんも「もう実験中の敵発生も起きそうにないし、私も結晶集めに戻ったほうが良いわね」って言ってる通り、もうこうなったら『属性結晶』集めにもっと人を割いた方がいいんじゃないか？

「ううっ……正直、これ以上チョコチョコ調整しても『ルーン』の効率もよくなりそうにないですし、私も結晶集めのお手伝いを……」

「大丈夫よ」

「えっ？」

私に待ったをかけたのはエステイさん。その顔はやさしそうな笑顔でありながらも、ふとした瞬間にクスクスと笑いだしそうな、まるでイタズラを仕掛けた子供のようなものでもあって……なんというか、変に不安感が。

そんなエステイさんの隣にいるジオさんも、あご髭を指でつまむように触れながら……口髭の陰からチラリと覗く口がちよつとだけだけど確かにニヤリと歪んだ。

「クーデリア嬢から今回の件の事の次第を聞いた後、転ばぬ先の杖にと軽く相談しておいただけだったのだが……良くか悪くか、役に立ちそうじゃないか」

……？ いったい、何を言ってるんだろう？

そんな疑問は私だけじゃなく周りのみんなも持つてるみたいで……って、あれ？ クーデリアさんとフリーさんは、なんだかちよつと様子が違うようなの？

「そんなしたり顔で言うなら、最初から自分たちで持つて行ってくれ

ませんかねあ？　ほんとにもう……」

そんな声が聞こえてきた方向……そこにいたのは、『アーランド共和国』の大臣さんで、先生のお知り合いでもあるトリスタンさん。

ちよつと疲れたような顔をしてため息をついて——あつ、でも先生を見たたん「やあ、ロロナ」って爽やかな笑顔をむけた。……本当に嫌々ってわけでもないのかも？

ついでに言えば、その後ろには何かが入ってる様子の麻袋がいくつか積まれた荷車と、それを引いてきたんだろう体つきがガツシリとした冒険者らしき人が二人ほど。……あと、見知った『アーランドの街』の人も数人。

「僕個人としては、彼マイスにはそこまでどうこう思ってたりはしないけど、立場上、私情だけで決められないんでね。冒険者たちに国からの依頼として『属性結晶』集めの依頼が大々的に発注されてね。そして、集まったモノを大臣である僕がこの一件の代表として届けるついでに顔を出しに来たってわけ」

「国からの依頼?!　一体いつの間に……あつ、そういえば」

『ゲート発生装置』の実験で『謎終わりのもの』が現れたあの時。

黒い靄が広がり異常な状況となった街道のことが『冒険者ギルド』へとほうこくされて、その現状調査・原因究明のためにクーデリアさんとファイリーさんが緊急派遣された。そうして、途中たまたま合流したミミちゃんと一緒に私たちの所までたどり着いて、あの『ナニ終わりのもの』との戦闘に加わってくれた。

クーデリアさんは『魔法』が使えるだけで『冒険者』でもないファイリーさんまでもわざわざ引つ張ってきたわけだけど、あの時「腕利きの冒険者が各地に散ってる今——」みたいなことを言ってたはず。アレはメルおねえちゃんやステルクさんのことを言ってたんだと思ってたけど……もしかして、その国からの『属性結晶』集めの依頼で本当に冒険者のほとんどが各地に出て行ったのかな？

だとすると、さつきクーデリアさんとファイリーさんの反応が他の人達と違ったのにも納得できる。

というか、今の話からするとあの荷車に乗せられてる麻袋って、もしかしくなくてもその依頼で集められた『属性結晶』なんだよね？ そうすると、先生が言ってた「今の10倍」には流石に届かないだろうけど、それでも結構な量がある。

人海戦術っていつののかな？ 沢山の人が集めてまわってくれたからこそ、あんなに集まったんだろう。長としてきつかけを作ってくれたジオさんや、色々頑張ってくれたんだろうトリスタンさんには感謝しきれない。

……まあ、当の自称代表のトリスタンさんは、また疲れ顔になっちゃってるんだけどね。

「まったく。上も上だけど、特別割が良い報酬でもないのに喜々として依頼を受けてまわる人の多いことといったら……。そもそもそこまで協力したいっていうなら、国の運営を通さずに自分たちで持って行けって話なのにさ」

そんな愚痴を吐くトリスタンさんの肩を叩きながら「まー、まー」と口を挟んでいったのは、街の『サンライズ食堂』のコックさん——先生の幼馴染で、私もよくお世話になってるイクセルさんだった。

「んなこと言って、あんたも冒険用物資のサポートの手回しとか、結構積極的に動いてただろ？ なんだよ、照れ隠しか？」

「……親父の口煩さが4割増しくらいになりそうなのが嫌なだけだよ」

そっぽを向いてそういうトリスタンさんに、イクセルさんは「あー……うん、そうだよな、あの人は」って、何とも言えない顔で頷いてる。トリスタンさんのお父さんについて何か知ってるのかな？

と、そのイクセルさんが一歩前に出てから、荷車に乗っている麻袋の一つを親指で指差しながらいつものカラツとした軽快な笑顔を見せてきた。

『サンライズ食堂』に来る連中にも持っているヤツがないか声かけて、色々集めてまわったんだ。上手く使ってくれよ、口口ナ、トトリ」

入れ替わるように前に出たのは、これはまた私もお世話になつてゐる街の雑貨屋さんの店主・ティファアナさんだった。

「わたしのところでも、似たようなことをしたの。あと、街の常連さん以外にも外からやつて来るお客さんもいて、その人たちの中に持つてる人もいたから買い取つたり、ね。装飾用に多少加工されてるのもあるけれど、使えそうかしら？」

「えっ、あつはい。よっぽど手を加えられてない限り本質に変化はないから大丈夫だと思いますけど……その、大丈夫なんですか？」

買い取つたりして集めたつて、聞いた限りじゃあ大変なことをしているように聞こえるから、ちよつと心配になつてくる。

もちろん、あの荷車の上の麻袋のどれか一つ丸ごとをティファアナさんだけで集めたとか、そういうわけじゃないだろうけど……それでも、けっこうな金額を使わないといけないんじゃないかな……？

そんな私の考えの全部を口に出しはしなかつただけど、言いたいことは伝わつたみたいで……それでもティファアナさんは優しい微笑んだまま小さく首を振つた。

「ふふっ、気にしないで。ミス君のおかげで得れた利益もあるもの、それなりの余裕だつてあるわ。それに……お金じゃ買えないモノだつて、彼には貰つてきたもの。このくらい、大したこと無いわ」

「皆さん……！ でも、なんでこんなに」

協力してくれることがもちろん嬉しいんだけど、いきなりの——しかも大人数で大量の——支援に、どちらかといえは驚きとか戸惑いとかさういったモノが前面に出て来てしまつた。

そんな私がついこぼしてしまつた言葉に答へたのは——

「お前らだけに任せてないで、自分たちも何かしたい……みんなが思うつたつてだけの話さ」

「コオル君!？」

私よりも先に、声の主に気付いたらしい口ロナ先生が読んだその名前。いなくなつたマイルスさんの代わりに『青の農村』をまとめているコオルさんだった。

「ちようど良いタイミングみたいだな。『青の農村^{ウチ}』の連中が集めてきたのをまとめ終えたところだったんだ。ほらっ」

コオルさんが差し出した袋は、総量こそ荷車に乗った街のみんなが持ってきた『属性結晶』の半分にも満たない量だったけど、頭数^{総人数}の差を考えればもの凄い量だ。

それに対して私たちが何か言うよりも先に、「言つただろ?」つて呟いてそのまま付け加えるように言葉を続けてくる。

「マイルスがいなくなつてすぐの時、ねえちゃんたちがそれぞれ役割決めて頑張ろうつて話になつただろ? あん時に思つたんだ、オレも他の奴らも「何か力になりたい」つてな。都合のいいことに、『青の農村』には農民や商人みたいな人間以外にも多種多様なモンスター^{モンスター}がいるから、他の奴らの手が届かないような場所まで探しに行けたんで、中々効率良く集まつたもんだと思うぜ?」

確かに、街道や採取地などある程度は人が立ち入る場所でも、その奥深くや足場の悪い場所、その先などにはどうしても手が伸びない範囲がある。それら地域をカバーするのは、他でもない『青の農村』のモンスターたち以外に適任な存在はいないだろう。

「まっ、チカラになりたいつてのは俺が知らないところでもあつてたみたいだけどな」

「それつて……?」

「とどろく」

「トトリちゃんっ!」

その二人の声は、よく聞き覚えのある声で……つていうか、この声は——

「おねえちゃん!? それにピアノちゃんまで! どうしてここに

!？」

——そう、『アランヤ村』にいるはずのおねえちゃんとピアニヤちゃん、ふたり揃って——正確には、元気良く走るピアニヤちゃんにおねえちゃんが付き添う形で——こっちに向かっけてきた。何かが入ってるんだろうカゴを持った手を、《高々と上げて》。

って、もしかして？

「キラキラしたけっしょー持つてきたの！ マイスを助けるのに、これ、必要なだよね？」

予想は的中してた。

すぐそばまで来たピアニヤちゃんが見せてくれたカゴの中身は『属性結晶』。

「メルヴィたちに声をかけに来た時に話は聞いてたから、私たちも村周辺で集めてみたの。お父さんも乗り気で、近場の島だけだけど海のほうでも探してきたわっ」

そう、普段とは違う珍しい元気良さで言うおねえちゃん。

何回かメルおねえちゃん私とで冒険に連れてつたりもしてた時期があるからこそわかるけど……きつと、なんだかんだ言っておねえちゃんも冒険が好きなんだろう。——だからって、外海に出るのは止めて欲しいなあ。それはまあ、他の人が手を出さないし出せないだろうから『ゲート』がある可能性が高いかもしれないけど、現れるモンスターが村の周りのヘタな採取地よりも強いし、知ってたら絶対止めてたよ……。

言われて気付いたけど、おねえちゃんたちが知る機会はあったね。

『ゲート発生装置』の調査を始める前、『属性結晶』を集めるための協力者を得るために、私は『トラベルゲート』を使ってジーノ君と一緒に一度『アランヤ村』に戻ってた。それがあつてメルおねえちゃんが『属性結晶』集めに参加してくれたんだけど——なるほど。確かにあの時に知ったんだったら、おねえちゃんたちが『属性結晶』を集めてもおかしくはない。——でも、危ないことはして欲しくは無い——けど、反対を押し切って『冒険者』になったり船で外海に出たりした私がどうこう言えた話じゃないよね。

「トトリちゃんはいつ帰ってくるかわからなくて……それでペーター君の馬車で街のほうまで行こうかとも思ったんだけど、馬車はあるのにペーター君はどこにもいなくて」

「ペーターさん……」

まるでおねえちゃんを避けるかのようなペーターさんの雲隠れ。もしかしくなくてもへた^{いっもの}して……シンン？

「あれ？ それじゃあどうやって『青の農村』^ちまで来れたの？」

当然と言えば当然の疑問。

昔、改造されたことでいくらか早くなつた馬車でさえ『アランヤ村』から『アーランドの街』や『青の農村』までは数日かかってしまう。なのに、その馬車がペーターさんのせいで使えなかつたとしたら……。……まさかとは思うけど、歩いてきたり？

「メガネのおねえさまが連れてつてくれたの。ビュツンって、ととりのみたいに景色がパツて変わったよー」

「ちよつとだけ変な人だったけど、トトリちゃんかロロナ先生の知り合いなんですよ？」「いろんな意味で未熟とはいえ弟子のそのまた弟子が困つてるのであれば、手を貸してやるのもやぶさかではない」つて言つて親切に『青の農村』のすぐそこまで送つてくれたの」

体いっぱいの身振り^{ジエス}手振り^{チャー}で伝えようとするピアニヤちゃんに、おねえちゃんが頷きながら付け加えた。

「メガネのおねえさま」とか「弟子のそのまた弟子」つて話からして……ううん、でも私、あの人とは会つたのは一回だけな上に会話らしい会話もしてないから、ほとんど人伝に聞いた内容^{こと}ばかりで、確信は持てないし——

「師匠、見かけないと思つたらそんなところに。というか、間を測つたようにこのタイミングでぴあちゃんたちが来たことといい……それに「変な人」とか「おねえさま」つて呼ばせるところとか相変わらず……ううん、今は考えないでおこう」

——あつ、先生がそう確信^{思っ}したんだつたら、間違い無くアストリッド^あさん^人なんだろう。

そんなことを考えてたら、私の服の裾をクイクイツとつまむ手が。それはもちろんそばにいるピアニヤちゃんの手で、その目は少し潤んでいるけど私の事をしっかりと見てる。

「ミスと約束してるの。一緒に『がっこう』に行つて色々いっぱいおべんきよーするつて……ピアニヤ、ミスがいなきやヤだよ」

ミスさんつてば、いつの間にそんなことを……

というか、『錬金術』を覚えてもらうなら『学校』じゃなくても、前みたいにロロナ先生に……もしよかつたら私も教えるんだけど——ああ、でも、私たちも『学校』での『錬金術』の授業はお手伝いはするんだから、いいのかな？

私はピアニヤちゃんの手をとり、両手で優しく包んであげる。

「大丈夫だよ。私たちがミスさんのことちゃんと連れて帰つてくるから！」

「っ……うんっ！」

——とは言ったものの……。

いけなくはないだろうけど……まだ足りない、よね？

袋の中身をちゃんと全部確認したわけじゃないけど……今は大体最初の約8倍くらいまで『属性結晶』は集まったかな？

あともうひと押しつてところまで来てはいるし、予想よりも素早くミスさんを連れ戻すことが出来るとすれば十分な量……なんだけど、それでも不安要素が残っちゃう状況なのが事実。やっぱり安全を考えると万全の準備をして置くべきで、そうすると『属性結晶』はまだ足りないだろう。

とつても言い辛いけど、また『属性結晶』を集めるお手伝いをしてもらうように言わなきゃ——

「フッフッフ……！ お嬢さんたち、忘れてはいないかい？ 天才科
学者であるこの僕を！」

「オレもいるぜ！ 嬢ちゃんたちが一生懸命頑張ってるのは知ってた
が、声も全くかけてくれねえだなんて、水くせえじゃねえかよ」

「マークさん！ ハゲルさん！」

そこには、珍しく背筋が伸び腕を組んで仁王立ちしてるマークさん
と、そばにある人一人が乗れるくらいの台車を押してきたんだろうハ
ゲルさんが。台車には何かが乗ってるけど、大きな布がかけられてて
その全容を知ることができそうになかった。

「実はね、『属性結晶』例のモノの収集の際に、これまでに同型の見たことの無
い、おそらくは『シアレンス』彼が元々いた世界出身だろう巨大なゴレムと出会って
ね。鹵獲はかなわなかったけどサンプルとして一部を持ち帰ること
が出来たのだよ。そして……ハゲルさん！」

「おうよっ!!」

送った合図に、威勢のいい掛け声を返したハゲルさんが台車に乗せ
てあるモノにかかった布を勢い良く取り払い、マークさんが大仰な身
振りでソレを指し示しながら高らかに声を上げる。

「これがマイス彼から『ルーン』未知のチカラについて聴いてからというもの、持てる
チカラを注いできた僕の研究の集・大・成！ その名も……色々省
略して『ルーン式原動機関』!!」

ソレは、なんとというか、こう……ゴツゴツとしてあれな感じの
……よくわからないけど、とりあえず「なにかの機械」なんだろ
うってことはわかった。逆にそれ以外はよくわかんない。げんどう
き？

私を含め、あんまり反応がよくなって——そのせいかな、呆れたよう
な顔で「ヤレヤレ」と首を振るマークさん。

「わかりやすく言うなら、『ルーン』とかいうものを動力に換える機械
だよ。ただし、最初にきつかけとなるエネルギー——いわゆる「呼び
水」が多少必要だけどね。しかし、そこもすでに解決済みさ。実は彼
らが持ち帰ったものをちよつと拝借させてもらってね、それが思いの

他原動機の基礎動力源に適した性質で、発生されるパワーが初期の想定を随分と超えるくらい良いものだったよ」

「何？ アレがそこまで？ バチバチ音を立てて発光し、その上、下手に触ればシビれてしまう代物だったが……役に立ったのであれば、わざわざ苦勞してまでして持って帰った甲斐があるというものだ」

マークさんの言葉に反応したのは、ステルクさんだった。

結局どういった物なを言こつてるのかはさっぱりのままだったけど、どうやらマークさんがいたチームとは別のステルクさん達のチームが入手した物だったらしい。話からしてマークさんもステルクさんも初めて見るものみたいだから、もしかしたらマイスさんがいた世界由来のもののかな？

「と、まあ、そんなわけで彼らが持ち帰った『帯電した結晶体電気の結晶』を、ハゲルおやじさんの技術も借りて作り上げた機械に組み込んだのが『ルーン式原動機レ』というわけさ」

そう言われて、改めてその機械を見てみる。

おそらくは、珍しいものを使い、マークさん達の技術が詰め込まれた凄いものなんだろうけど……うん、やっぱりよくわかんないや。

「でも、これがいったい……まさかとは思いますが、見せびらかすためだけに……？」

「そんなことは無い——と言いたるところだけど、そのまさかさっ！」

「ええっ!!? そんな!?!」

「ええっ!!? そうだったのかあ!?!」

本当に何しに來てるんですか!?!

そんなにも予想外だったのか、先生なんかは声をあげてまで驚いて——って。

「いや、先生はわかりますけど、なんでハゲルさんも驚いてるんですか……？」

「だってよお、マー坊が嬢ちゃんたちのためになることだって言っ

だから、色々先を見越して何か作ってるのかと思つて……」

そう言つてバツが悪そうにその頭を軽くかくハゲルさん。対して、マークさんは軽快かつどこか演技がかったような「はっはっはっ！」という笑い声をあげてる。

「軽いジョーク……というか「最初は」だよ。そんな些細なことは気にしない、気にしない。ただ単に自慢と言うか、行き詰つてるところの気分転換に思つてただけだし。——けど、タイミングを見計らつてた時にキミらが言つてたその『ゲート発生装置』の問題点についての話が聞こえてきてね……そこでふと思ひ当たつたのさ、『ルーン式原動機関』が役に立つんじゃないか」つて」

「役に立つ……？」

「コレが？」と首をかしげてしまう私。もつとも、ハゲルさんを含めてマークさん以外の誰もが首をかしげてるんだけどね。

『ルーン式原動機関』が動力を生む原理を至極簡潔に説明すると、「機関内やその延長上での『ルーン』奔流による循環運動」。そしてそれを利用したモノであり、理論的には半永久的に、実際にはエネルギーの分散や『ルーン』の性質故の流出もあつて『ルーン』の追加補充が必要だけど……それでも、今キミたちが使っている『ゲート発生装置』より『ルーン』の継続保有率もエネルギー伝達効率も数倍良いという確信はあるよ」

「勘違いしないでほしいけど、実際はそもそもの理論構築はもちろん、『ルーン』の活生動作やエネルギー移行はもつと複雑だからね？……そう念押しをするマークさんの顔は真剣そのもの。そこには科学者じゃない私たちにはわからないこだわりとか信念とかがあるのかもしれない。

「それで提案なんだけど……その『ゲート発生装置』に、この『ルーン式原動機関』を組み込んでみないかい？」

「へっ？ ソレを装置に組み込む……ですか？」

「うん。原動機関が生み出す力学的エネルギーを利用するためにはなく、原動機関そのものの循環構造を利用し『ゲート』を安定させる

ために組み込むのさ。そうだね、図解すると……」

そう言つて、背負つたりリュックから何か書かれた紙——おそらくは、原動機関を図に書き起こしたものを——を広げ、詳しい説明をツラツラと喋りながらそこに筆を走らせ出した。

「……と、まあ、こんな感じかな? 『ゲート発生装置』がいくらか機械寄りのモノとはいえ僕は『錬金術』には疎いからどこか間違いがあるかもしれないけど、『ルーン』の運用についてはそう間違っていないだろうから修正はいらないと思うよ」

そう言つて渡してきた図面に改めて目を通してみる。

すると、マークさんが一から説明をしてくれたからか細かい所はいまいちだけど、おおよそ把握することはできた。おそらくはマークさんがわかりやすく一部を簡略化してくれてるからつて部分もあるんだろう。

うん……うん……うんっ!

やってみなきゃわかんない部分も、思い通りになるかどうか微妙な部分もあるにはあるけど……理論的には『ゲート発生装置』のエネルギー効率が最低でも三割は向上するはず!

「先生! ……これならこの量の『属性結晶』でも余裕を持つてて安心ですよっ!」

「えっ? ……そう、なのかな……う、うんっソウダネ!」

……?

ロロナ先生つてば、そんな穴が開きそうなくらい図を睨みつけなくてもいいのに……。普段はそうそう利用しない機械が大部分を占めちゃうからいつも以上に慎重になつてるのかな?

それはともかく——

「……いいんですか? 私は重要性とか凄さとかまだ半分も理解しきつてませんが、すごく希少な機械なんですよね? それを貰うような形になつちゃうんですけど……」

「本当にいいんですか?」と改めてマークさんに聞く。

別に調合に失敗してダメにする気は全く無いし、そんなことにはな

らないだろうけど……ことが終わった後に原動機関を取り出せるかどうかとなると話は別だ。仮に取り出せたとしても、完全に元のままとは限らないし……。

「いや、構わないよ？ 確かに、二度と手に入るかわからない材料も使ったりはしたけど、あくまでそれは「試作品」^{プロトタイプ}。それ以上のものを作る予定だし、その案ももうできてるから遠慮なく使ってくれていい」

いつものように「それに……」と

「そもそも『ルーン式原動機関』はマイス^彼がいたからこそ発想を得たものであり、彼をギャフンと言わせるために研究を進めたものの一つ。——彼がいないとほんの少しだけど、モチベーションが落ちるんだよ。あくまでほんの少しだよ？ 彼がいなくなっただけでも有効利用できる場はあるし、あのボヤツとした説明にイラつく必要も無くなるんだから」

最後のほうは……あっ、もしかして、前にマイスさんの家で『ルーン』と『プラントゴレム』について話して口論みたいになってる時があった、あの時の事かな？ そう考えると、この『ルーン式原動機関』もあの話と結びついたり……？

なにはともあれ、『属性結晶』の確保も、『ゲート発生装置』の改良も目途がついた。改良結果にある程度は左右されはするけど、これでマイスさんを救出するために必要だったものはそろそろわけだ。

あとは、『ルーン式原動機関』を『ゲート発生装置』に組み込むだけ。

「待っててくださいい！ マイスさん!!」

ゲートを越えて

コロナのアトリエ

『属性結晶』が集まり、『ゲート発生装置』の改善策が示された翌日
……

「で、できたー！」

そう元気良く声をあげたのは、このアトリエの主人であるコロナとその弟子トトリ。

マイスを『はじまりの森』から救出するという目的のためこうして共に調整しているが、一緒に「ぐるぐる」とはかき混ぜてはいない。……いつかのように調整したものがなんでも『パイ』になってしまいかもしれないからだ。今回そんなことになったら大問題になってしまうため、役割分担をして交代で調整に手を加えるようにしてた。

結果——無事『ルーン式原動機関』を『ゲート発生装置』に組み込むことに成功した。

『はじまりの森』へ行くための『ゲート^道』を生み出す装置『ゲートーゲ』！」

原動機関を組み込んだことによって多少大きくなってしまった装置を二人で何とか取り出したんだけど、そしたらコロナがそんなことを言い出したのだ。

つまりは、『ゲート』を発生させ、反転させて『はじまりの森』に行くわけだから、『ゲート』とそれを反転させた「トーゲ」……そして、それらを合わせて『ゲートーゲ』というネーミングにしたのだろう。

愚直というか半端で締まらない感じもするけれど、過去の『ほむちゃんホイホイ』と比べれば……比べても、どっちもどっちである。つまりは、ある意味ではコロナらしい命名だろう。

そんなネーミングセンスをこれでもかと思せつけられたトトリは——まあ彼女も彼女でコロナ以上の独特なネーミングセンスを持っているのだが——感心したのか、はたまた唾然とさせられたのか、ポカンとしていた。……が、ふいに「あれ？」と首をかしげた。

「先生？　これそのものには反転させる機能はついてませんから、反転してる部分を名前に付けるのは、ちよつと違うんじゃない？……？」

「……『新生・ゲーとくん』！」

「新生ってことはそもそもが『ゲート発生装置』だったんですか!？」

ある意味衝撃の事実を知ったトトリが驚きを口にする……が、内心「道具の名前なんだから、あんまり凝らなくてもいいかな？」と考えていて、実はそこまで気にしてなかったりする。

「ま、まあ、それはともかく、これで『はじまりの森』に——マイスさんを助けに行けますね！」

「そうだね！　どれだけ効率が良くなったかは実際に使ってみないとわからないけど、確実に良くなるはず。それに加えて、『属性結晶』をみんながたくさん集めてきてくれたからバツチリ問題無しだよっ！」

『ゲート発生装置』^前まではまだしも、急ぎよ新たに組み上げなおした装置であるため完成図は当然無く、何度も実験を行いまとめ上げた精密なデータもはや使い物にならない……つまるどころ、確証なんてほとんど無い状態だ。

だがしかし、二人には確信があった。「これなら大丈夫」という確信が。

そうと決まれば——

「それじゃあトトリちゃん、みんなを集めて出発だよ！」

「はいっ！　ちむちゃんたち、連絡お願いね！　集合場所はマイスさんの家の前だからね」

「「ちむー！」「」」

元気の良い返事と共にアトリエの外へと飛び出して行くちむちや

んずを見送ったトトリは「さてと」と一言呟いてから口口ナへと向き直った。

「先生、私たちも早く準備を。確か、現地のほうはホムちゃんがやってくれているですよね？」

「うん。ほむちゃんがくまさんやコオル君たちと一緒に、私たちの冒険中ゲートの維持管理をするための「かせつほんぶ」？っていうのを作るって言ってたよ。だから、あとは……こないだ作っておいた冒険用のやつと、臨時の『秘密バッグ』のほうを確認すればいいかな？」

「わかりました！ パパッと終わらせちゃいましょう！」

「おー！」

マイスの家・裏手

マイスの家の裏口、『倉庫』と『モンスター小屋』、そしてそれらを結ぶ渡り廊下がある幅約十数メートルほどの家の裏手。

その一角に、おおよそ半球状に大小数か所地面が抉^{えぐ}られている場所がある。そう。マイスが消えた地点とされる場所だ。

芝生がほどよくしげり、春や夏には一帯が緑の絨毯のようになるはずなのだが、抉れたそこは青々しさなどカケラも感じさせない土色になっている。いや——

——なっていたと言ったほうが正しいだろう。

というのも、一番大きく抉られている地面からマイスが消えた『野良反転ゲート』の発生の中心点を割り出し、ソコに新たに作られている『ゲート発生装置』を置くための土台が組まれた結果——丸裸になっていた地面は土台の基礎部分に大半が覆い隠されていた。故に、土色はほとんど見えなくなっている。

そのすぐそばには、数本の支柱とそれに支えられた屋根——場所が

場所なら所謂テントと呼ばれるものに近い——があり、その下には何なに書類と小型の機材を乗せた机。

そしてそこには、一人黙々と機材をイジるマークと、手伝いをしてくれている『青の農村』の住民に淡々と指示をとばしているホムちゃんがいいた。

「……こんなところでしょうか。そちらはどうですか？」

「こっちも問題無いよ。キミが教えてくれた計測器の動作もバッチリだ」

そう言うマークの視線先には、以前——マイスがいなくなった時にアストリツドがホムくんにとってこさせていた、『ゲート』のエネルギーの方向性をプラス——で置き換え線グラフで記録されていく装置、その同型の装置が。完成する『ゲート発生装置』の運用時に、『ゲート』の安定維持およびデータの記録のために、ホムちゃんから装置の仕組みを聞いたマークが再現したものである。

「そうですか。しかし、驚きました。まさかこの短時間で本当に作ってしまうとは……」

「まっ、規模自体小さかったし、それに『ルーン式原動機関』を開発した僕にはそう難しくはないのさ。というか、この手のものは原理を——その根本的な部分を理解さえすれば、他でもそう変わらないから応用が聞きやすいんだよ」

「しかし、まいったね。ボクとしてもむこうには興味はあつただけど……いかんせん、コレや『ゲート発生装置』といったものを理解できる人間が少な過ぎる。おかげで、ボクはここでこうしてお留守番が確定済みさ」

「そうですね。協力者と呼べる面々の中では、作るのに関わったマスターとトトリ、あとはホムくらいでしょう。それでも、あなたにはおよびませんので……しかし、いざという時の事を考えると、できれば錬金術士であるマスター達のどちらかはこちらに残ってほしいの

ですが——」

そこまで言ったホムちゃんとマークが顔を見合わせて、一度、短くため息をついた。

「あんなやる気満々の彼女らに「残って」ってというのは……ねえ？」

「はい。憚はばかられます」

ふたり揃って小さく首を振る。

「そういうキミこそ、本当は行きたいじゃないかい？」

「……否定はしません。ですが、客観的に見てホムはこちらでサポートにまわった方がおにいちちゃんのためになるという結論に至りました」

「なので、こちらで最善を尽くします」と言うホムちゃんにマークは「そうかい」と簡素な相槌を打った——が、その後、何故かいつものヘラツとした笑みを浮かべた。

「何故だろう？」と首をかしげるホムちゃんの頭に、髪越しの感触が伝わった。

「まっ、そのあたりはアタシたちに任せときなさい」

「あなたは……」

その人物をホムちゃんは当然知っていた。コロナが「メルちゃん」と呼び、トトリが「メルおねえちゃん」と呼ぶ「メルヴィア」という冒険者だということ。

……とはいっても、本人同士はそこまで深い仲でもない。せいぜい、『アランヤ村』の『豊漁祭』や、『青の農村』で時折顔を会せた程度。メルヴィアからしても「元・コロナさんのお手伝い、現・マイスのお手伝い」という微妙に間違えた認識だったりする。

「ツエツイとピアニヤちゃんにも散々お願いされちゃってるし、もう一人分の想いくらいならアタシが背負ってあげるわよ。それに、あなたみたいなカワイイ子のお願いならなおのことね。ほーら、うりうり〜！」

「髪が乱れるので、やめてください」

髪をワシヤワシヤとやや乱暴に撫でまわすメルヴィアに、わずかにだが確かに眉を顰めながら拒絶するホムちゃん。だが、ならばと今度は頬をフニフニと撫でまわされてしまうだけだった。

その様子を笑いながら見ているだけのマークさんが、どこか頼もしそうに——いや、むしろ一周回って呆れさえ顔を覗かせそうなくらいの雰囲気で見線（けん）を移した。

「しかし、『はじまりの森』の情報が少ない危険度が未知数とはいえない——あの救出メンバーなら心配しようがないんじゃないかな？
よっぽどの想定外でもない限りさ」

その視線の先には、集まるように声がかけられたであろうメンバーが、各々話をしたり、軽く体を動かしていたりしていた。

王国時代には騎士として……その後も実力者として知られているステルクにエスティ。もう十分ベテランの域に足を踏み入れているミミとジーノ。そして、まだここにはいない、稀代の錬金術士のロロナとその弟子であり冒険者としても一流であるトトリ。

マークからしてみれば、その実力を知らないのはクーデリアとリオネラくらいであり——そのふたりに関しても、周りから聞こえる評判は悪くはなかった——今そばに居るメルヴィアを含め、その他に関しては、皆が皆現時点での『アーランド共和国』内で指折りの実力者ばかりであるという評価であった。

足りないとすれば、それこそ行方不明のマイスや、「仮にも国の長なんだから」と『はじまりの森』行きを周りに止められた元国王（オ）くらいだろと思っていた。

「ホント、アタシはいらないんじゃないかなーって思うくらい……でも、結果的に国中をあげて動いていた『属性結晶』集めに比べれば大したこと無いでしょ」

「それを言われたら、その通りなんだけどもねえ」

満足したのかホムちゃんを解放したメルヴィアがケラケラと笑い、マークは同意しながらも肩をすくめる。

「すみませーん！ お待たせしましたー」

「おっ！来た来たっ」

そこに聞こえてきたトトリの声に、仮設本部から出たメルヴィアだけでなく、集まっていた救出メンバー、ホムちゃんたちの準備の手伝いをしていた『青の農村』の面々、そして話を聞きつけて激励すべく集まってきた人々……皆が反応した。

「遅いぞートトリー。早く行こーぜ！」

「たつく、あんたはこういう時も相変わらずね。……で、ちゃんと出来たんでしようね？」

「うんっ！ 心配しなくてもいいよ？」

「ふうん、ならいいんだけど」と言いつつ……その言葉の割には随分と嬉しそうなミミ。

トトリの後には、これまた冒険の準備万端のロロナと、マークが『ルーン式原動機関』を持ってきた時と同じように『改良版ゲート発生装置』を運んできているハゲルさんが。

「おーうい！ マー坊、コレはどこに置きやあいんだ？」

「発生装置はコッチだよおやじさん。——ああっ、もうちよつと手前……そう、ソコ！ あと——」

「ホムちゃん。お願いしてた準備、いっぱい頼んじやつてたけどもう出来てるっ！」

「ハイ、マスター。『ゲート』の発生・持続のための準備はもちろん、緊急時の対処・連携の確認、万が一の際の救出メンバー救出の段取りも完璧です。あと、『はじまりの森』において『秘密バッグ』とコンテナが正常に繋がるかどうかの確認方法についてなのですが——」

……こうして、本当に最後の最後、最終段階の準備とその確認作業に各々が入っていく。

そう。

その時は確かに近づいてきていた……。

ハゲルおやしさんの手によってマイスが消えた地点に築かれた基礎の上に設置された『改良版ゲート発生装置』。

その最終確認を行っていたロロナとトトリが、作業を終え立ち上がり振り返ると、その視線の先——基礎部分から一、二歩さがった周りには、マイス救出メンバーが。そのまた数メートル離れた場所には、様々な面で協力してくれた人々……ファイリーやイクセル他『アールランドの街』の人たちや、コオルを中心とした『青の農村』の人とモンスターたち、そして『属性結晶』を持って来てそのまま待っていた『アランヤ村』のツエツイとピアニヤが……ロロナとトトリを見つけた。

その光景、そしてみんなの視線から感じられる期待・不安諸々全てをひつくるめたプレッシャーを、ふたりが感じている中いると——
—そこに、気の抜ける間の伸びた声がかけられる。

「おーい、お嬢さんがた。こっちは準備万全だよ」

「計器類およびサポート体制、共に整っています」

仮設本部の屋根の下からいつもの猫背で手を振るマークと、その隣でこれまたいつも通りのキッチリとした背筋の伸びた直立姿勢で小さく頷くホムちゃん。

それらに答えるように大きく「ありがとっ！」と言ったロロナが、隣に立つトトリの顔を見た。偶然か否か、トトリも同じようにロロナのほうを向いており——ふたりは同時に頷いた。

「それじゃあ……やっちゃおうっ！」

「はい！ 先生!!」

ふたりは『改良版ゲート発生装置』に向きなおり、一度大きく深呼吸をし、そして――

「『ルーン』供給ライン確認っ！ セーフティ解除！ 開け、『ゲート』!!」

シュフオフオン！

トトリが装置のレバーを下ろしボタンを押し込めた後、高らかに宣言するかのような発言に反応して装置が起動し……ほんの数拍置いた後に、『改良版ゲート発生装置』の中央部分に薄桃色の逆巻く『光』が――『ゲート』が発生した。

「計測値、ベクトルプラス上昇………安定したね。『ルーン式原動機関』も正常に作動してるし、うん、申し分ないんじゃないかな？」

仮設本部から聞こえてきた声からも、その見た目からもわかるように、発生させた『ゲート』は採取地で見かける自然発生の『ゲート』と遜色の無いものだった。

『ゲート』が維持できていることを確認し――今度はロロナが自分で調合した道具を持ち、『ゲート』へとかざす。

「反転」してっ！ ていやーっ!!」

道具から放たれた一条の光が、『ゲート』にぶつかり――数度瞬いてから、その光の渦が逆回転をはじめた。

が、光はあくまで光なので、よくよく見ても「あれ？ 変わったかな？」程度にしか見えないため、見た目はさることながらその性質が

反転変わったしたかどうかはそう判るモノでもない。

しかし――

「計測値プラス値が激減、対照的に――マイナス値が急増。それぞれの減少・増
加した数値の差は、誤差一桁。反転は成功、装置も順応し『ルーン』も
反転した『ゲート』維持のために過剰な消費もなく正常に働いていま
す。マスターたちの予測通り維持時間になるかと」

ホームちゃんからの報告によると、コロナたちの思惑通り『ゲート』の
「反転」に成功したようである。それも、以前の実験のようにほんの数
分で徐々に小さくなり消滅してしまう様なこともない状態らしい。

その報告を聞いたコロナとトトリはハッと顔を見合わせ――笑う。

「先生っ、ついにー！」

「うんっ！ ついに行けるよ、マイルス君を助けに!!」

ふたりのその言葉を聞いた周囲の人々は皆顔をほころばせる。

街や村の人たちは歓声や激励の言葉をあげた。救出メンバーたち
は、己の武器の柄を確かめるように握りしめたり、胸の前で自分の手
に拳を打ち付け小気味の良い音をたてたり、声援に答えたり……仕
草、表情様々だが、皆一様にチカラ漲る良い目をしてしていた。

――が、

「あゝ、気合十分なところ悪いんだが……ちよつといいかな？」

「？ じおさん、どうかしましたか？ ……あっ！ 行きたいって
言ってもダメですからね!? 王様じゃなくなってもじおさんは――」

しかしコロナの発言を遮るように、「いや、そうではなくてだな
……」と目を細めながらジオは言葉を続けた。

「何やら、『ゲート』の中央付近がパチパチと弾けているように見える
のだが……これは私の寄る年波が原因の目の錯覚なのだろうか？」

「えっ」

つられるように口ロナとトトリが——それだけでなく、周囲の誰もが視線を『ゲート』へと向け、目を凝らした。

……確かに、小さくだが薄桃色の光と別色の、黒に近い紫色の光が小さく爆せているように見え……いや、暗い光はその爆ぜる規模を段々と……そこそこの速さで大きくしている。

平たく言えば、誰から見ても「何かあつてる」とわかる状況だ。

「ほむちゃんっ？　もしかして、また段々とちいさくなっていったりしそうな？」

「プラス値、マイナス値、共に誤差の範囲の微弱な変化しかありません。何の問題も無い……はずなのですが？」

「ま、マークさん!?　どういうことですかあ〜!?」

「どうと言われてねえ、お嬢さんトトリ?　異世界だとか世界同士の間にあるであろう空間についてとかそういうことは、流星に専門外だから想像とか推測でしか言えないんだけど……ふむう?　以前実験中に

きなり現れた『終わりのもの』とその出現状況の報告を考えると、『ゲート』を開いた最中およびその前後は世界間を隔てる壁が希薄になり、それによって歪がうまれ——いや、それよりも『ゲート』の方向性を無視して何かが移動しているとすれば、流れに逆らうモノがあれば機械の回路がショートするのと同様にスパークが発生し……」

「沢山真剣に考えてくれているところ悪いんだけど、どうこう考えてる状況じゃなくなるくらいドンドン大きくなってるわよ!?　ほらっ、ツエツイはピアニヤちゃん連れて退さがって！」

「断言はできないでしょうけど、いちおう『終わりのもの』があるから、万が一も考えて救出メンバー以外は離れときなさい!　あつ、冒険者連中はあたしが指示飛ばすからのこつときなさい。ほら、あんたが誘

導しなさいよ」

「はいっ！ 実力者も沢山いて、もしも本当に敵が出てきても大丈夫だから、慌てずに落ち着いて退避してください！ ついてきてくださいー！」

「んにしても、できりやあココで暴れてほしくはないんだけどなあ？」
「そうね。マイスの家のすぐそばだし……『終わりのもの』レベルのやつだったら一帯が更地になりかねないもの」

「で、でも、わたしたちが守らなくちゃっ！ マイス君の帰る場所を！」

「おっしやー！ どんとこーい！！ 今度こそ俺も戦ってやる！！」

「フムツ。『はじまりの森』へと行ってはいけないと言われはしたが」

「どうして皆さん、そんなにマークさんの推測通りだと思って……！！
いや、でも確かに最悪はそれだろうから何とかできるようにしないとなくちゃ……って、『ゲート』を逆流して来れるって、いったいどんなモンスターなんですか!？」

頭を抱えるトトリ。しかし、そう都合よく異変が止まってくれるわけも無い。

そして、その場にいる全員が感じられたわけではないが……暗い光を放ちだした『ゲート』の奥から、確かに強いプレッシャーが発せられた。その時点で、何かが逆流してきていることに確信を持った人物もいた。

「来るぞっ!!」

そうステルクが声を上げたのとほぼ同時に、『ゲート』が一層強い光を放ちだし……破裂音と軽い衝撃波、それによる風があたりを駆け巡る。

物質的な損壊は無いが、瞬間的な風に『改良版ゲート発生装置』の

設置された基礎部分の周囲が砂埃に包まれてしまった――

「――あたたたくっ！　なんか途中から変だったねえ」

時間と共に舞い上がっていた砂埃がおさまっていき……影が――

「んでもってここは……あらあ？　この建物、どつかで見たような……？」

――人影が、段々と露わになって――

「つて、ここはマイスの家だ！　ハハッ！　いやあ、潮の香はしないからアタシん家の近くじゃあないとは思ってたけど、なんだかんだ言つて運がいいじゃないか!!」

「――えっ」

「ん？　人が多いけどまさか何か祭でも――つて、あら？」

その人物とトトリの視線が合い――

「おかあさん!？」

帰還

青の農村

しっかりと憶えているわけじゃなかった。
ううん。というかむしろ、『おかあさんがいなくなった原因フラウシュトアウト』が記憶からすっぽりと抜け落ちていたのと同じように、おかあさん自身に関する記憶も虫食い状態に近かった。

——けど

第一、最後に会ったのはもう十年近く前で、私もその人もあのころとは変わって当然。うっすらと憶えている部分でさえ頼りにはならないだろう。

——だけど、自然に口に出ていた。

「おかあさん!？」

もちろん、私の勘違いの可能性だって十分にあった。
けど……

「ん？　どうかしたかい、トトリ?」

私の呼び声に反応してコッチを向いたその人は、一瞬だけ目を丸くしたけど、すぐにニカリと笑って——
気づけば、私はおかあさんに跳びついてた。

握りしめる手は確かに掴み

抱きつく腕は空振らず

肌に触れる無骨さのある衣服からは記憶の奥底に眠っていたおか

あさんの匂いがして

いつの間にか涙があふれてきてた私のその頭を撫でる手はいつかのあの手で

その声は、確かにずっと聞きたかったおかあさんの声で――

「おかあさん、おかあさん……!!」

「……ははっ。「立派になった」って聞いたから一体どんな淑女レディーに成長しちゃったのかと思ったら……なんだい、アタシが知ってるのと同じでまだまだ子供じゃないか」

この十八歳歳にもなって、「まだまだ子供だ」と笑うかのような物言いをされたけど、そんなことは気にならなかった。

「子供のままでいい」そんな気持ちじゃなかったわけじゃない。でも、だからというわけでもない。

「子供だ」というおかあさんの声が、人を小馬鹿にするような言い方じゃなかったから――というよりも、その声はどこか嬉しそうにしている気さえしたから、何故か私まで嬉しくなってたんだ。

「そつれにしても、ホント育ってないわねえ」

――嬉しくなって……………

「はっ!? まさか、トトリと見せかけて、ツエツイの子供だったりするのかい!？」

「おかあさんっ!？」

顔をバツとあげて、これまでとは色々と違う意味で大声をあげてしまふ。

「ハア、ハアッ！ ウソツ……!? ほ、本当に……おかあさん？」

その声に振り返ると……ポカンとしてたり、頭抱えたり、目をパチクリさせてるみんなの合間を通り抜けてきた、少し肩で息をしているおねえちゃんが目をまん丸にしてコツチを見てた。

その後ろの方から、ピアニヤちゃんがテトテトと走ってきてるのが見えるから——万が一のために急遽避難離してたけど、遠目からその姿が見えたからか私の声で気付いたからか、おねえちゃんは信じられない気持ちで大急ぎでここまでできたのかもしれない。それこそ、ピアニヤちゃんの手を引くことを忘れちゃうくらいに。

「おおっ！ ツエツイは聞いてた通りえらい別嬪さんになってるじゃないの!! これは、本当に良い旦那を捕まえて子供の一人や二人——」

「おかあさん!!」

詰め寄ってきたおねえちゃんと、抱きついたままの私とが睨みつけながら声を荒げると、一応は止めたけど特に悪びれた様子も無く……むしろ「待ってました!」とでもいうのかケラケラと笑いだした。

「冗談だってジョーダン」

「冗談って……それでも言っていることと悪い事が……」

「それに、なんでわざわざこんな時にいうのかしら……?」

余りにも自由なおかあさんに、肩を落としたため息をいついてしまっていた。

すぐそばからはおねえちゃんが吐くため息も聞こえてきた。きつとおねえちゃんも私と同じような表情でため息をいついてたんだろうなあ……。

そんなことを考えてると、また頭の上におかあさんの手を感じた。今度は撫でるようにじゃなくて、ポンポンと優しく叩くような動きで。

「言うべきことも、言いたいこともあるんだけど……それは家に帰ってからって決めちゃってさ。ちよつとだけ、待つてくんない?」

「それは私たちを待たせ過ぎな……ううん、いまさらね」

「そうだね、おねえちゃん。おとうさんだけいない時になんて、かわいそうだし」

おかあさんの帰りなんて、もう何年も待たされ続けてきた。そこに今更ほんの少しの時間なんて、有って無いようなものだよ。……遠い地で亡くなって、もう二度と会えないとさえ思ってたんだから、なおのことだ。

……けど、確かに私にも、何があつたのか問い詰めるよりも先におかあさんに言いたいことはある。それも、おかあさんと同じくヘルモルト家私たちのお家で言いたい一言が。……きつと、おねえちゃんも同じだと思う。

「おかえりなさい」って。

「ととりく、ちえちく」

間延びした声が聞こえたのとほぼ同時にクイクイツと服の袖を引かれ、自然とソツチに顔が向く。そこにいたのは、さつきおねえちゃんを追ってこつちに走ってきてたピアニヤちゃん。

ピアニヤちゃんを挟んだ向こう側にいるおねえちゃんは「あっ」って顔をしてた。いきなりのおかあさんの登場に慌てて駆けつけたために、うっかり忘れてしまったんだろう。

——ん？ 忘れて？

「ねえねえ。もんすたーじゃあ……なかったんだよね？」

おかあさんのことをチラチラと見ながら聞いてくるピアニヤちゃん。

おかあさんもおかあさんで、そんなピアニヤちゃんの様子に「ん？

「なんだい？」と首をかしげてた——けど、それ以上は特にどうという・こともなさそうだった。

「うん。この人は私たちのおかあさんで……ほらつ、『ピアノちゃんのいた村最果ての村』にあつたお墓の——」

「墓つ？　なーんでそんなモノが……つて、あのおばあちゃんしかないよねえ。作らないでつて言ったのにさ」

説明しているところを聞いてたおかあさんが驚き、困つたように笑つてた。

いや、それはまあ、生きてるのに知らないうちにお墓を建てられたら……でも、おかあさんの場合、『アランヤ村』的には行方不明期間が凄く長かつたわけだし、事情を知つてた『最果ての村』側でもほとんど死にかけ状況が状況だっただけに、お墓が建てられても仕方がない気がする。そのお墓を建てることを決めたピリカさんも、おかあさんが生きてたことを知つたら驚くだろうなあ……。

つと、説明を聞いたピアノちゃんはわかつたのかわかつてないのか、小首をかしげながら「ふくん？」という生返事をして——

「それで、マイルスは……？」

「えっと、それは——んん？」

それで……マイルスは……???

『あつ』

それは、私の口から漏れ出したのか、おねえちゃんの口からだつたか……それとも、周りにいた先生やミミちゃんからか——正直よ

くわからなかった。

だって、頭の中が一瞬真っ白になってしまったから。

そもそも、今日こうして集まってるのって——おかあさんが出てきた『ゲート』を発生させて反転させたのって——行方不明になったマイスさんを助け出すためで——

「あ——っ!!」

そそそっ! そうだったー!?

反転させた『ゲート』から、死んだと思ってたおかあさんが逆流^出してきて、そのことで頭がいっぱいになってた!

……って、こうして改めて思い返してみると、おかあさんが『ゲート』から出てくるってわけわかんないなあ。

「なにはともあれ、話は家に帰ってから」みたいな流れになっちゃってたけど、ちゃんと話を聞かないとどうしてこんなことになってるのかが意味がわからないよ……。おかあさん、あの『はじまりの森』にいたってことだもんね?」

ふと、周りに意識を向けてみると、先生やステルクさん、その他大人数が私と似たような状態でワタワタと慌てて——比較的冷静なのは、仮設本部にいるマークさんとホムちゃんくらいじゃないかな?何か機材とにらめっこしてる。きつと『改良版^新ゲート^生発生装置』や計測器など周辺装置の上部を確認してるんだと思う。

「そうそう、『ゲート』だよ『ゲート』! って、ああっ! 消えちゃってる!? さっきの爆風で……。? とにかく、『属性結晶』はまだまだあるし、発生装置が無事ならまた出来るよねっ? どこも壊れてないといいんだけど……。!!」

「ねえ、ちょっとどうしたってのさ? 話の流れが……。マイスがどーたらこーたら言ってるけど、何? マイスがいなくて心配してたとか、『お祭り』の準備が上手くいってなくてあわててるのか?」

「そういえば、見たこと無いモノがいつぱいあるけど何か関係あるの？」と改めて周りをキョロキョロ見渡してたおかあさんが、そんなことを言って……。

でも、そんな構ってるヒマが無い——というか、ヒマがあるのかいかわかんないというか、『はじまりの森』のこと自体よくわかってないから判断しようがなくて、急ぐに越したことはないだろうってことで……。

「って、そうだ！ おかあさん、事情はよくわかんないけど『ゲート』のむこうに——『はじまりの森』にいたんだよねっ!? 実はマイスさんも事故でソツチに行っちゃってるみたいで……おかあさん、何か知らない？ 噂話を聞いたとか、痕跡とか……!」

「ああ——

——
知ってるっていうか、会ったよ？」

「「「「えっ!?!」」」」

おかあさんの言葉に、私だけじゃなくて他にも沢山の人が反応をした。

というか、伝染するようにみんながみんなピタリと固まって、おかあさんのことを見る。

やっぱりアストリッド^{先生}の^{師匠}さんが言ってた通り、目撃されたっていうあの謎の光は『アーランド^{こっち}』から『はじまりの森』へと流れる、『ゲート』とは逆の流れのモノで……! って、それは確信してたことだからいいとして……「会った」!?

「そぞ、それってどこでっていうか、どこらへん……! ううん、なん

て聞けばー……!?!」

知ってる場所ならどの辺って言ってもらえばいいけど、再三言ってる通り『はじまりの森』のことなんて全然知らないわけで、仮に「どこ」って言われてもどうしようもないよね……。

でも、何か知ってるなら聞かない手は無いし——ああつ!! そういえばさつき、私のこと見て「立派になった」って聞いたからさつきみたいなこと言ってた! もしかして、それってマيسさんから聞いて……!?!

だとしたら、マيسさんは? も、もしかして何かあつて『はじまりの森』じゃなくて『シアレンス』^{あっち}に帰っちゃってたり——

「つていうか、もうココにいるじゃない?」

——へ?

おかしなこと言つたおかあさんが「ほらっ」とさつきまで私を撫でていた右手とは反対の腕をヒョイとあげて——その手には、どこかで見た……というか、かなり見覚えのある金色と茶色のなにかが……。

これまた、私だけに限らず、周りの人たち全員が固まった。もちろん、その視線はおかあさんとそのあげられた手^{モンスター}に縫い付けられてる。

「も……モキユ……」

「あら? 目え回してら。どおりで静かなわけだ」

そう。おかあさんが示したのは、主に『青の農村』で見かけることができたモンスター。

一時期「幸せを呼ぶ金色のモンスター」として噂もたつたりした……最近では、体毛の色が違う同種らしき怪我をしたモンスターが保護されたりもした、一般に「モコちゃん」って呼ばれている金色の毛のモンスター。

おかあさんに首元を掴まれている目を回している「モコちゃん」。

「まつ、それも仕方ないか！ 最初こそいい感じにスルスル行けてたのに、途中から強い向かい風の中を突き進むみたいになって、無茶苦茶頑張って何とか抜け出せたわけだし」

それってもしかして、私たちが『ゲート』を反転させたからじゃあ……？

思いはしたけど、口には出せなかった。とてもじゃないけど、そんな空気がやないし……それ以上に頭の中がグチャグチャで、色々と言わなきゃいけないこととか、疑問とか、驚きとかが全然おさまらなくって……！

というか、何時から？ 最初から!? いや、でも……ううん、ずっとおかあさんにばかり気を取られてたし、気付けなかった……!?

「ん？ なんだい？ みんなして黙りこくっちゃって……マイスのことが心配だったというなら、そこはもつとこうワーツ！ って喜んであげたっていいんじゃない？」

いや、そうだけどうじゃないっていうか……

「えーつと、ギゼラさん？」

「……？ あらあ！ 誰かと思ったらメルヴィアじゃない！ こんなに立派に育っちゃって〜!!」

「どうも……って、そうじゃなくて。マイスのことなんだけどー……？」

「マイスだろ？ ほれっ」

そう言っつて、左手に持つ目を回した金色の毛のモンスターをズズイツと突き出してみせるおかあさん。

「うーうーん！ そうだけど、そうじゃないっていうか。その、一応

「あーはっはっはっー!!」

本当に本当に久々の再会の、ほんのちよつとの時間だったんだけど……以前話を聞いてまわった時に「ギゼラおかあさんいさんに振り回された」って言ってた人たちの気持ち、マイスさんとお金関係の話を聞いた時以来かなまた少しだけ理解出来たような気がした。

とにかく、私はただ、私がまだ知れていない「いなくなつてからのおかあさんの足取り」の中で、おかあさんが周りに極力迷惑をかけていないことを家族の一員として祈ることにした。

……絶対、かけてるんだろぅなあ……。

いや、でも、もしかしたら、ずーっと『はじまりの森』をさまよつててサバイバル生活みたいな感じで過ごしてたなら、まだ……!!

「……おかあさん？ いちおう聞いておきたいんだけど、『ゲート』のむこうって『はじまりの森』だよ？ そこでマイスさんと会ったんだよ？」

「そうだよ？ フォローも何もしないで、他人の都合全然考えないでエラそんなことばつか言ってきた『あく何チャラ』とか言うのをぶつ飛ばしてから、ちよつとコツチに帰れそうな可能性がありそうってことで書置き残して『はじまりの森』に突入したんだよ」

「『あく何チャラ』って……あの、ギゼラさん？ もしかしてですけど、それって『アクナビート』じゃあ……？」

「ああつ、それぞれ!! よく知ってるねえ!」

「……『アクナビート』って確か、マイスのいたところの水の神様の名前よね？ それも世界を創ったっていう……」

ミミちゃんの口から出た言葉と、ケラケラと笑うおかあさんの姿を見て、久々にお腹がキリリと痛んだような気がした……。